千原台ニュータウンXXVI

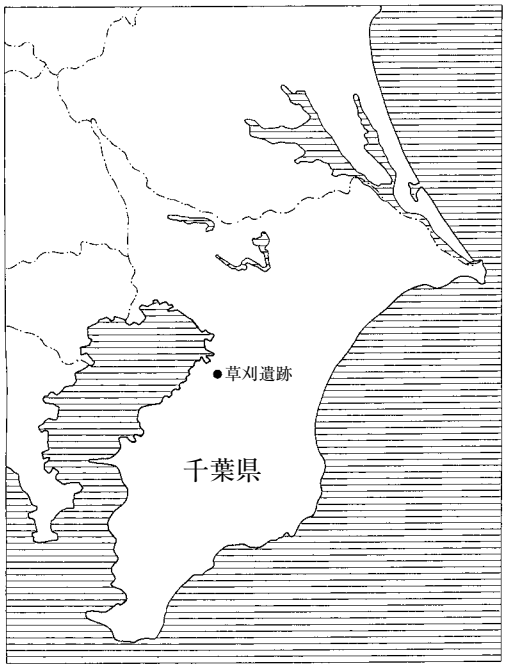
― 市原市草刈遺跡（Ⅰ区）―

平成23年２月

独立行政法人　都市再生機構
財団法人　千葉県教育振興財団

千原台ニュータウンXXVI

― 市原市草刈遺跡（Ⅰ区）―



草刈遺跡Ⅰ区空中写真（東から　遠方は東京湾）

草刈遺跡Ⅰ区空中写真（北から）

Ｉ385（弥生時代後期土坑墓）人骨検出状況

Ｉ385（弥生時代後期土坑墓）人骨・遺物出土状況　ガラス玉・管玉・鉄釧

Ⅰ385　出土鉄釧

Ⅰ146　鳥形土製品

Ⅰ186A　出土土器（高坏）

Ⅰ186A　出土土器（坩・壺・甕ほか）

序　　文

財団法人千葉県教育振興財団(文化財センター)は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第647集として、独立行政法人都市再生機構の千原台地区土地区画整理事業に伴って実施した市原市草刈遺跡（Ⅰ区）の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、弥生時代中期の環濠集落と同後期の集落跡及び土坑墓群、古墳時代前期から平安時代にわたる大規模な集落跡など多数の遺構・遺物が検出され、この地域における原始・古代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また郷土研究の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理までご苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成23年２月

財団法人千葉県教育振興財団

理 事 長　　赤　羽　良　明

凡　例

1　本書は、独立行政法人都市再生機構千葉地域支社による千原台地区におけるニュータウン建設計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県市原市草刈（現ちはら台西１丁目）ほかに所在する草刈遺跡のうちのⅠ区（遺跡コード219-047）である。なお、旧石器時代については既に報告書刊行済みである（『千原台ニュータウンXⅢ』）。

3　発掘調査から報告書刊行に至る業務は、独立行政法人都市再生機構千葉地域支社の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査および整理作業の経緯と組織・担当者は第１章第１節に記した。

5　本書の執筆は上席研究員　小高春雄が行ったが、第３章の赤色顔料分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社、人骨の形態的分析ほかについては国立科学博物館梶ヶ山真里氏に一括してそれぞれ委託した。また、貝および獣骨等については上 奈穂美氏、魚類遺体については鶴岡英一氏に依頼した。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構千葉地域支社、市原市教育委員会の御指導・御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は次のとおりである。

第３図　国土地理院１：25,000地形図「蘇我」平成12年発行（NI-54-19-15-2）

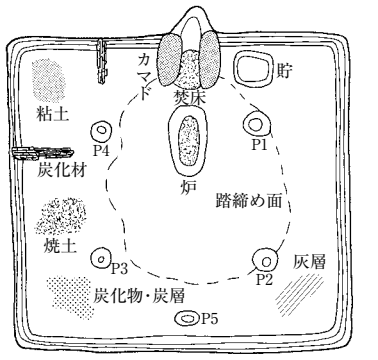
8　検出遺構のうち、第２章に於いて非掲載のもの（約５割）については附章の１/300遺構分布図ならびに遺構一覧表に概略を記載した。出土遺物については非掲載遺構出土遺物も含め附章に一括して図示したが、他に遺物一覧表（添付CD）に概略を記載した。

9　本文中の挿図に於ける遺構・遺物の縮尺は原則として次のとおりであるが、例外についてはその都度縮尺を明記している。

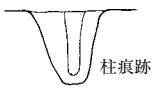
竪穴住居・方形周溝墓・掘立柱建物 1/100　土坑 1/60・1/100

縄文土器拓影 1/3　縄文石器 1/3・2/3　縄文土製品 1/2　弥生土器 1/4　弥生・古墳石器 1/3・1/4　弥生・古墳土製品 1/2・1/4　弥生・古墳石製品 1/2　玉類 1/1・1/2　瓦 1/4　金属製品 1/2

10　挿図に使用したスクリーントーンおよび記号・番号等の用例は次のとおりである。

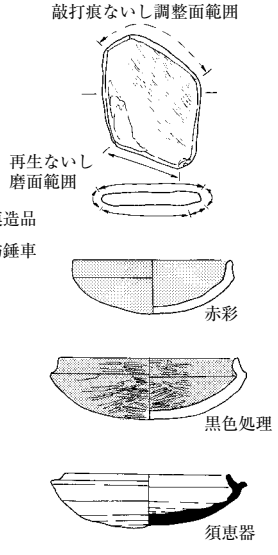


P1～P4　主柱穴
P5　梯子穴
貯　貯蔵穴



● 土　器
▲ 土製品
■ 金属製品
□ 石　器
△ 貝　層
・ ガラス玉・臼玉

種別	略称	種類
土製品	支	支　脚
	円	土製円盤
	土	土錘・土玉
	模	土製模造品・石製模造品
	紡	土製紡錘車・石製紡錘車
	祭	祭祀関連
	他	その他
	瓦	瓦
石　器	石	石　斧
	砥	砥　石
	玉	ガラス玉・臼玉
金属製品	金	鉄・銅製品等



11　本文および挿図中で使用した遺構番号およびグリッド表示は次のように表記した。

（例）　Ⅰ001→Ⅰ区の001号遺構

7F-21→7F大グリッドの21小グリッド

12　Ⅰ区の調査時の大グリッド表記は草刈遺跡全体の大グリッド表記に統一・変更した。新旧グリッド表記の対応については第２図を参照されたい。

13　石器のうち、軽石及び砂岩製砥石についてはそれぞれＡ・Ｂに分類したが、その岩石的特徴は軽石Ａが一般的な軽石、軽石Ｂが銀白色で繊維状構造を有するもの、砂岩Ａが銚子砂岩、砂岩Ｂがそれ以外のものとした。

14　挿図・表で示した出土遺物遺構名のうち、括弧付きで示したものは前代の混入など、異なる時期の遺構内から出土した例である。なお、両者を併記したものは、整理作業時の検討から本来の所属遺構が推定出来る場合である。

例：　192　←報告書段階所属遺構名

（187）←調査時段階所属遺構名

本 文 目 次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査の概要……1
　　１　発掘調査の経緯……1
　　２　調査の方法……1
　　３　整理方針と報告の概要……2
　第２節　遺跡の位置と環境……5
　　１　遺跡の位置と周辺の地形……5
　　２　草刈遺跡と周辺の遺跡……5
第２章　遺構と遺物……11
　第１節　概要……11
　第２節　縄文時代……13
　　１　概要……13
　　２　陥穴……13
　　３　住居跡……15
　　４　弥生時代以降の住居跡およびグリッド出土縄文土器……19
　　５　縄文時代の石・土製品……33
　　６　縄文時代の石器……35
　第３節　弥生時代……45
　　１　概要……45
　　２　住居跡……45
　　３　土坑墓……91
　　４　土坑……96
　　５　方形周溝墓……97
　　６　環濠……100
　第４節　古墳時代前期……105
　　１　概要……105
　　２　住居跡……105
　　３　土坑……114
　　４　土坑墓……115
　　５　Ⅰ186A覆土内遺物群……115
　　６　方形周溝墓内の遺物群……121
　第５節　古墳時代中期……123
　　１　概要……123
　　２　住居跡……123

3　土坑…… 147
第６節　古墳時代後期…… 151
1　概要…… 151
2　住居跡…… 151
3　土坑…… 167
第７節　奈良・平安時代…… 169
1　概要…… 169
2　住居跡…… 169
3　土坑・土師器窯…… 183
4　掘立柱建物…… 188
5　溝…… 188
第８節　時期不明の遺構…… 191
1　概要…… 191
2　土坑…… 191
第９節　中・近世の遺構…… 193
1　概要…… 193
2　溝群…… 193
3　掘立柱建物…… 193
4　墓域…… 193
第10節　非掲載遺構出土の遺物および遺構に伴わない遺物…… 195
1　概要…… 195
2　非掲載遺構出土の遺物…… 195
3　拓影図…… 198
4　遺構に伴わない遺物…… 199
第11節　遺構分布図・遺物実測図および遺構一覧表…… 201
第３章　分析成果…… 345
第１節　はじめに…… 345
第２節　Ｉ146号住居跡出土鳥形土製品内赤色顔料Ｘ線回析 …… 346
第３節　草刈Ｉ区出土の動植物遺体及び人骨…… 349
第４節　草刈遺跡（Ｆ・Ｉ・M区）出土の魚類遺体…… 359
第５節　草刈遺跡Ｉ区土坑墓出土人骨…… 363
第６節　草刈遺跡出土人骨のDNA分析（予報）…… 366
第７節　草刈遺跡から出土した縄文時代・古墳時代人骨の同位体分析…… 369
第４章　まとめ…… 373
第１節　縄文時代…… 373
1　縄文前期の土器について…… 373
2　獣面把手について…… 374

第２節　弥生時代…… 374
１　Ⅰ区の弥生集落…… 374
２　墓域の様相…… 377
３　遺物の様相…… 378
第３節　古墳時代…… 380
第４節　奈良・平安時代…… 381
報告書抄録……巻末

挿 図 目 次

第１図　草刈遺跡調査区（1/6,000）……３
第２図　草刈遺跡Ⅰ区グリッド･確認トレンチ配置図（1/1,000・1/2,000）……４
第３図　草刈遺跡と周辺の遺跡……７
第４図　草刈遺跡Ⅰ区全体図（1/700）……10
第５図　縄文時代遺構分布図（1/700）……12
第６図　Ⅰ157・Ⅰ461陥穴、Ⅰ416・Ⅰ325住居…14
第７図　Ⅰ416住居出土遺物 ……16
第８図　Ⅰ188A･B住居出土遺物 ……17
第９図　Ⅰ188A･B・Ⅰ325住居出土遺物……18
第10図　縄文土器分布図（1/700）……20
第11図　早期・前期縄文土器……21
第12図　前期縄文土器（１）……22
第13図　前期縄文土器（２）……23
第14図　前期縄文土器（３）……24
第15図　前期縄文土器（４）……25
第16図　前期縄文土器（５）……26
第17図　前期縄文土器（６）……28
第18図　前期縄文土器（７）……29
第19図　前期縄文土器（８）……30
第20図　前期縄文土器（９）……31
第21図　前期獣面把手……32
第22図　中期縄文土器……33
第23図　耳飾・玦状耳飾・土器片錘……34
第24図　石鏃・石錐……36
第25図　石鏃未製品・石篦・楔形石器……37
第26図　楔形石器・二次加工剥片・石核・打製石斧等……38
第27図　打製石斧・磨製石斧・礫石斧・磨石・敲石等……39
第28図　磨石・敲石……40
第29図　敲石・石皿・凹石等……41
第30図　弥生時代遺構分布図（１/700）……44
第31図　Ⅰ040・Ⅰ041住居……46
第32図　Ⅰ052A・Ⅰ055・Ⅰ056住居 ……48
第33図　Ⅰ059・Ⅰ072住居……50
第34図　Ⅰ078・Ⅰ079住居……52
第35図　Ⅰ082・Ⅰ084住居……53
第36図　Ⅰ092・Ⅰ106住居……54
第37図　Ⅰ136住居 ……56
第38図　Ⅰ163B・Ⅰ185住居 ……58
第39図　Ⅰ186A住居 ……60
第40図　Ⅰ188A･Ⅰ198A･Ⅰ198B･Ⅰ200住居……61
第41図　Ⅰ221・Ⅰ237住居……62
第42図　Ⅰ241・Ⅰ249住居……64
第43図　Ⅰ251住居 ……66
第44図　Ⅰ260A・Ⅰ260B住居 ……67
第45図　Ⅰ275・Ⅰ276住居……68
第46図　Ⅰ285A・Ⅰ286住居……70
第47図　Ⅰ289住居 ……72
第48図　Ⅰ287・Ⅰ293住居……73
第49図　Ⅰ298・Ⅰ299・Ⅰ304住居 ……74

第50図　Ⅰ309・Ⅰ311C住居 ……76
第51図　Ⅰ326住居 ……78
第52図　Ⅰ328・Ⅰ332住居……80
第53図　Ⅰ342A・Ⅰ357住居 ……81
第54図　Ⅰ365・Ⅰ367住居……82
第55図　Ⅰ379・Ⅰ383住居……84
第56図　Ⅰ386・Ⅰ398B住居 ……86
第57図　Ⅰ402・Ⅰ403BC住居 ……88
第58図　Ⅰ404・Ⅰ407・Ⅰ414住居 ……89
第59図　Ⅰ425・Ⅰ434住居……90
第60図　Ⅰ303・Ⅰ321・Ⅰ327・Ⅰ330・Ⅰ385・Ⅰ437
土坑墓……92
第61図　Ⅰ424・Ⅰ333・Ⅰ343・Ⅰ344・Ⅰ417・Ⅰ455・
Ⅰ312土坑墓、Ⅰ061・Ⅰ137土坑 ……94
第62図　Ⅰ322・Ⅰ323方形周溝墓……98
第63図　Ⅰ011環濠 ……99
第64図　Ⅰ371環濠 …… 100
第65図　Ⅰ122環濠 …… 102
第66図　古墳時代前期遺構分布図（1/700）…… 104
第67図　Ⅰ035B・Ⅰ044・Ⅰ067AB住居 …… 106
第68図　Ⅰ075・Ⅰ135住居…… 108
第69図　Ⅰ170・Ⅰ173住居…… 109
第70図　Ⅰ219・Ⅰ290住居…… 110
第71図　Ⅰ358・Ⅰ397住居…… 111
第72図　Ⅰ391住居 …… 112
第73図　Ⅰ432住居 …… 113
第74図　Ⅰ164・Ⅰ256・Ⅰ392土坑 …… 114
第75図　Ⅰ186A遺物出土状況（１）…… 116
第76図　Ⅰ186A遺物出土状況（２）…… 117
第77図　Ⅰ186A遺物出土状況（３）…… 118
第78図　Ⅰ186A遺物出土状況（４）…… 119
第79図　Ⅰ322方形周溝墓遺物出土状況 …… 120
第80図　古墳時代中期遺構分布図（1/700）…… 122
第81図　Ⅰ001住居 …… 124
第82図　Ⅰ003住居 …… 125
第83図　Ⅰ004住居 …… 126
第84図　Ⅰ021・Ⅰ022住居…… 127
第85図　Ⅰ051・Ⅰ052B住居 …… 128
第86図　Ⅰ053・Ⅰ054B住居 …… 129
第87図　Ⅰ090・Ⅰ091住居 …… 130
第88図　Ⅰ112・Ⅰ118住居 …… 132
第89図　Ⅰ130・Ⅰ230住居 …… 134
第90図　Ⅰ133住居 …… 136
第91図　Ⅰ240・Ⅰ253住居 …… 137
第92図　Ⅰ265・Ⅰ266住居 …… 138
第93図　Ⅰ268・Ⅰ269住居 …… 140
第94図　Ⅰ274・Ⅰ279住居 …… 141
第95図　Ⅰ302・Ⅰ338住居 …… 142
第96図　Ⅰ346・Ⅰ354住居 …… 144
第97図　Ⅰ364・Ⅰ389・Ⅰ398A住居 …… 146
第98図　Ⅰ403A住居，Ⅰ063・Ⅰ074・Ⅰ020B・Ⅰ036・
Ⅰ104・Ⅰ214P1・Ⅰ108・Ⅰ400土坑 … 148
第99図　古墳時代後期遺構分布図（1/700）… 150
第100図　Ⅰ010・Ⅰ057住居 …… 152
第101図　Ⅰ068・Ⅰ102住居 …… 153
第102図　Ⅰ107・Ⅰ109住居 …… 154
第103図　Ⅰ119住居…… 156
第104図　Ⅰ121住居…… 157
第105図　Ⅰ134・Ⅰ142住居 …… 158
第106図　Ⅰ205・Ⅰ206住居 …… 160
第107図　Ⅰ207・Ⅰ213住居 …… 161
第108図　Ⅰ228・Ⅰ267住居 …… 162
第109図　Ⅰ284・Ⅰ311A・Ⅰ311B住居 …… 164
第110図　Ⅰ339・Ⅰ345住居 …… 166
第111図　Ⅰ363土坑…… 167
第112図　奈良・平安時代遺構分布図（1/700）… 168
第113図　Ⅰ025・Ⅰ083・Ⅰ086住居…… 170
第114図　Ⅰ054A住居 …… 171
第115図　Ⅰ087・Ⅰ094・Ⅰ101住居…… 172
第116図　Ⅰ111・Ⅰ120・Ⅰ126・Ⅰ247住居 … 174
第117図　Ⅰ264・Ⅰ271・Ⅰ273住居…… 176
第118図　Ⅰ277・Ⅰ283・Ⅰ296住居…… 178
第119図　Ⅰ319・Ⅰ353・Ⅰ355・Ⅰ360A・Ⅰ378住居
…… 180

第120図　Ⅰ366・Ⅰ395・Ⅰ435住居 …… 182
第121図　Ⅰ064・Ⅰ229・Ⅰ300・Ⅰ352（土師器窯）・Ⅰ433土坑 …… 184
第122図　Ⅰ039・Ⅰ288掘立柱建物 …… 185
第123図　Ⅰ033溝…… 186
第124図　Ⅰ349溝・Ⅰ334土坑 …… 187
第125図　時期不明遺構・貼床遺存箇所分布図（1/700） …… 190
第126図　Ⅰ045・Ⅰ447・Ⅰ456時期不明土坑 … 191
第127図　中・近世遺構分布図（1/700）…… 192
第128図　遺構分布分割図（1/1,500） …… 202
第129図　遺構分布図（1）…… 203
第130図　遺構分布図（2）…… 204
第131図　遺構分布図（3）…… 205
第132図　遺構分布図（4）…… 206
第133図　遺構分布図（5）…… 207
第134図　遺構分布図（6）…… 208
第135図　遺構分布図（7）…… 209
第136図　遺構分布図（8）…… 210
第137図　遺構分布図（9）…… 211
第138図　遺構分布図（10）…… 212
第139図　遺構分布図（11）…… 213
第140図　遺構出土弥生土器（1）…… 214
第141図　遺構出土弥生土器（2）…… 215
第142図　遺構出土弥生土器（3）…… 216
第143図　遺構出土弥生土器（4）…… 217
第144図　遺構出土弥生土器（5）…… 218
第145図　遺構出土弥生土器（6）…… 219
第146図　遺構出土弥生土器（7）…… 220
第147図　遺構出土弥生土器（8）…… 221
第148図　遺構出土弥生土器（9）…… 222
第149図　遺構出土弥生土器（10）…… 223
第150図　遺構出土弥生土器（11）…… 224
第151図　遺構出土弥生土器（12）…… 225
第152図　遺構出土弥生土器（13）…… 226
第153図　遺構出土弥生土器（14）…… 227
第154図　遺構出土弥生土器（15）…… 228
第155図　遺構出土弥生土器（16）…… 229
第156図　遺構およびグリッド出土弥生土器（17） …… 230
第157図　遺構出土弥生土器拓影図（1）…… 231
第158図　遺構出土弥生土器拓影図（2）…… 232
第159図　遺構出土弥生土器拓影図（3）…… 233
第160図　遺構出土弥生土器拓影図（4）…… 234
第161図　遺構出土弥生土器拓影図（5）…… 235
第162図　遺構出土弥生土器拓影図（6）…… 236
第163図　遺構出土弥生土器拓影図（7）…… 237
第164図　遺構出土弥生土器拓影図（8）…… 238
第165図　遺構出土弥生土器拓影図（9）…… 239
第166図　遺構出土弥生土器拓影図（10）…… 240
第167図　遺構出土弥生土器拓影図（11）…… 241
第168図　遺構およびグリッド出土弥生土器拓影図（12） …… 242
第169図　遺構出土土師器（古墳前期1）…… 243
第170図　遺構出土土師器（古墳前期2）…… 244
第171図　遺構出土土師器（古墳前期3）…… 245
第172図　遺構出土土師器（古墳前期4）…… 246
第173図　遺構出土土師器（古墳前期5）…… 247
第174図　遺構出土土師器（古墳前期6）…… 248
第175図　遺構出土土師器（古墳前期7）…… 249
第176図　遺構およびグリッド出土土師器（古墳前期8） …… 250
第177図　グリッド出土土師器（古墳前期9）… 251
第178図　遺構出土土師器（古墳前期～中期1） …… 252
第179図　遺構出土土師器（古墳前期～中期2）253
第180図　遺構出土土師器（古墳前期～中期3）254
第181図　遺構出土土師器・須恵器（古墳前期～中期4） …… 255
第182図　遺構出土土師器・須恵器（古墳中期1） …… 256
第183図　遺構出土土師器・須恵器（古墳中期2） …… 257
第184図　遺構出土土師器・須恵器（古墳中期3）

…… 258
第185図　遺構出土土師器（古墳中期４）…… 259
第186図　遺構出土土師器（古墳中期５）…… 260
第187図　遺構出土土師器・須恵器（古墳中期６）
…… 261
第188図　遺構出土土師器・須恵器（古墳中期７）
…… 262
第189図　遺構出土土師器（古墳中期８）…… 263
第190図　遺構出土土師器（古墳中期９）…… 264
第191図　遺構出土土師器・須恵器（古墳中期10）
…… 265
第192図　遺構出土土師器（古墳中期11）…… 266
第193図　遺構出土土師器（古墳中期12）…… 267
第194図　遺構出土土師器（古墳中期13）…… 268
第195図　遺構出土土師器（古墳中期14）…… 269
第196図　遺構出土土師器（古墳中期15）…… 270
第197図　遺構出土土師器・須恵器（古墳中期16）
…… 271
第198図　遺構出土土師器・須恵器（古墳中期17）
…… 272
第199図　遺構出土土師器・須恵器（古墳中期18）
…… 273
第200図　遺構およびグリッド出土土師器・須恵器
（古墳中期19）…… 274
第201図　遺構出土土師器・須恵器（古墳後期１）
…… 275
第202図　遺構出土土師器（古墳後期２）…… 276
第203図　遺構出土土師器・須恵器（古墳後期３）
…… 277
第204図　遺構出土土師器・須恵器（古墳後期４）
…… 278
第205図　遺構出土土師器・須恵器（古墳後期５）
…… 279
第206図　遺構出土土師器・須恵器（古墳後期６）
…… 280
第207図　遺構出土土師器・須恵器（古墳後期７）
…… 281
第208図　遺構およびグリッド出土土師器・須恵器
（古墳後期８）…… 282
第209図　遺構出土土師器・須恵器
（奈良・平安１）…… 283
第210図　遺構出土土師器・須恵器
（奈良・平安２）…… 284
第211図　遺構出土土師器・須恵器
（奈良・平安３）…… 285
第212図　遺構出土土師器・須恵器
（奈良・平安４）…… 286
第213図　遺構出土土師器・須恵器
（奈良・平安５）…… 287
第214図　遺構出土土師器・須恵器
（奈良・平安６）…… 288
第215図　遺構出土土師器・須恵器
（奈良・平安７）…… 289
第216図　遺構出土土師器・須恵器
（奈良・平安８）…… 290
第217図　遺構出土土師器・須恵器
（奈良・平安９）…… 291
第218図　遺構出土土師器・須恵器
（奈良・平安10）…… 292
第219図　遺構およびグリッド出土土師器・須恵器
（奈良・平安11）…… 293
第220図　遺構出土土師器・須恵器拓影図 …… 294
第221図　弥生時代磨製石剣・石斧（１）…… 295
第222図　弥生時代磨製石斧（２）・弥生時代敲石・
磨石（１） …… 296
第223図　弥生時代敲石・磨石（２）・石皿・弥生時
代軽石Ａ（１）…… 297
第224図　弥生時代軽石Ａ（２）…… 298
第225図　古墳時代前期以降軽石Ａ …… 299
第226図　弥生時代軽石Ｂ …… 300
第227図　弥生時代砂岩Ａ砥石 …… 301
第228図　弥生時代砂岩Ｂ砥石・古墳時代以降凝灰
岩砥石 …… 302
第229図　古墳時代以降その他砥石・火打石 … 303

第230図　弥生時代以降玉類（１）…… 304
第231図　弥生時代以降玉類（２）…… 305
第232図　弥生時代以降玉類（３）…… 306
第233図　弥生時代土製円盤 …… 307
第234図　古墳時代以降土錘 …… 308
第235図　弥生時代以降土玉 …… 309
第236図　弥生時代以降紡錘車･その他土製品（１）
…… 310
第237図　弥生時代以降その他土製品（２）、瓦 311
第238図　弥生時代土製炉囲い、弥生時代以降土製
支脚 …… 312
第239図　古墳時代以降土製支脚（１）…… 313
第240図　古墳時代以降土製支脚（２）…… 314
第241図　古墳時代石製模造品 …… 315
第242図　古墳時代石製模造品（未製品）・土製模
造品、弥生時代以降祭祀関連遺物 … 316
第243図　Ⅰ385出土鉄釧…… 317
第244図　弥生時代以降金属製品 …… 318
第245図　古墳時代以降金属製品（１）…… 319
第246図　古墳時代以降金属製品（２）…… 320
第247図　古墳時代以降金属製品（３）…… 321
第248図　古墳時代以降金属製品（４）…… 322
第249図　古墳時代以降鍛冶関連遺物（１）…… 323
第250図　古墳時代以降鍛冶関連遺物（２）…… 324
第251図　銭貨拓影図（１）…… 325
第252図　銭貨拓影図（２）…… 326
第253図　銭貨拓影図（３）…… 327
第254図　銭貨拓影図（４）…… 328
第255図　銭貨拓影図（５）・実測図…… 329
第256図　Ⅰ区146号住居跡出土鳥形土製品内赤色顔
料のＸ線回析図 …… 347
第257図　動植物遺体出土遺構分布 …… 348
第258図　貝層出土状況 …… 351
第259図　貝種組成（１）…… 352
第260図　貝種組成（２）…… 352
第261図　貝類計測値分布 …… 353
第262図　出土遺構の時期内訳 …… 356
第263図　草刈遺跡出土人骨の炭素・窒素同位体比と
代表的な食料群から構成されるコラーゲン
の期待値 …… 372
第264図　草刈遺跡弥生時代遺構分布図 …… 375

表 目 次

第１表　竪穴住居跡一覧…… 330
第２表　形状不明・ピット群遺構一覧…… 341
第３表　方形周溝墓一覧…… 342
第４表　掘立柱建物計測表…… 342
第５表　土坑・土坑墓等計測表…… 343
第６表　溝計測表…… 344
第７表　動植物遺体出土遺構一覧…… 349
第８表　種名一覧…… 351
第９表　貝類計測値分布…… 353
第10表　種名一覧…… 356
第11表　哺乳類遺体集計結果…… 357
第12表　崩出・咬耗状況（イノシシ）…… 358
第13表　崩出・咬耗状況（シカ）…… 358
第14表　人骨（焼骨）出土量一覧…… 358
第15表　出土甲殻類・魚類種名表…… 361
第16表　出土魚類同定結果…… 361
第17表　魚類骨時期別出土量集計…… 362
第18表　歯冠計測値（１）…… 363
第19表　歯冠計測値（２）…… 364
第20表　歯冠計測値（３）…… 364
第21表　歯冠計測値（４）…… 365
第22表　歯冠計測値（５）…… 365
第23表　サンプル一覧…… 368
第24表　分析試料…… 371
第25表　分析結果…… 371

付表　（ＣＤ）添付

付表１　土器観察表
付表２　縄文時代石器計測表
付表３　縄文時代石・土製品計測表
付表４　弥生時代石器計測表
付表５　弥生時代以降砥石計測表
付表６　玉類計測表
付表７　弥生時代土製品計測表
付表８　弥生時代石製品計測表
付表９　石製模造品計測表
付表10　金属製品計測表
付表11　貝巣穴状泥岩計測表
付表12　中・近世石器計測表
付表13　貝層サンプル同定結果
付表14　貝種組成（１）
付表15　貝種組成（２）
付表16　哺乳類遺体同定結果

図　版　目　次

巻頭図版１　草刈遺跡Ⅰ区空中写真（東から　遠方は東京湾）、草刈遺跡Ⅰ区空中写真（北から）
巻頭図版２　Ⅰ385（弥生時代後期土坑墓）人骨検出状況、Ⅰ385（弥生時代後期土坑墓）人骨・遺物出土状況　ガラス玉・管玉・鉄釧
巻頭図版３　Ⅰ385出土鉄釧、Ⅰ146鳥形土製品
巻頭図版４　Ⅰ186A出土土器（高坏）、Ⅰ186A出土土器（坩・壺・甕ほか）
図版１　草刈遺跡Ⅰ区調査区全景空中写真（約1/600）
図版２　Ⅰ040・Ⅰ041・Ⅰ078住居
図版３　Ⅰ082・Ⅰ146・Ⅰ185・Ⅰ203・Ⅰ221・Ⅰ241住居
図版４　Ⅰ242・Ⅰ249・Ⅰ251・Ⅰ275住居
図版５　Ⅰ260A・Ⅰ276・Ⅰ285A・Ⅰ286・Ⅰ287住居
図版６　Ⅰ289・Ⅰ298・Ⅰ299・Ⅰ328住居
図版７　Ⅰ304・Ⅰ326・Ⅰ342・Ⅰ357・Ⅰ365・Ⅰ367住居
図版８　Ⅰ383・Ⅰ386・Ⅰ398・Ⅰ402・Ⅰ404・Ⅰ407住居、Ⅰ437土坑墓
図版９　Ⅰ303土坑墓、Ⅰ403・Ⅰ425住居
図版10　Ⅰ321・Ⅰ327土坑墓
図版11　Ⅰ385土坑墓
図版12　Ⅰ385土坑墓
図版13　Ⅰ330・Ⅰ437土坑墓、Ⅰ404住居、Ⅰ011環濠
図版14　Ⅰ011環濠
図版15　Ⅰ044・Ⅰ135・Ⅰ137・Ⅰ358住居
図版16　Ⅰ186B土坑墓
図版17　Ⅰ390・Ⅰ391・Ⅰ397・Ⅰ432・Ⅰ433住居
図版18　Ⅰ001・Ⅰ004・Ⅰ021・Ⅰ028・Ⅰ049・Ⅰ112住居
図版19　Ⅰ133・Ⅰ147・Ⅰ214・Ⅰ230住居
図版20　Ⅰ253・Ⅰ265住居
図版21　Ⅰ266・Ⅰ268・Ⅰ269・Ⅰ274住居
図版22　Ⅰ279・Ⅰ338・Ⅰ354・Ⅰ360B住居
図版23　Ⅰ010・Ⅰ022・Ⅰ057・Ⅰ102・Ⅰ119住居
図版24　Ⅰ121・Ⅰ134・Ⅰ142・Ⅰ205住居
図版25　Ⅰ102・Ⅰ228・Ⅰ267・Ⅰ284・Ⅰ311A・B住居
図版26　Ⅰ311B・Ⅰ339・Ⅰ345住居
図版27　Ⅰ111・Ⅰ247・Ⅰ264・Ⅰ271・Ⅰ277住居
図版28　Ⅰ283・Ⅰ296・Ⅰ319・Ⅰ337・Ⅰ353住居
図版29　Ⅰ355・Ⅰ366・Ⅰ372・Ⅰ378住居
図版30　Ⅰ395・Ⅰ435住居、Ⅰ288掘立柱建物、Ⅰ352土師器窯

図版31　Ⅰ416住居出土縄文土器
図版32　Ⅰ188A･B住居出土縄文土器（１）
図版33　Ⅰ188A･B（２）・Ⅰ325住居出土縄文土器
図版34　早期・前期縄文土器
図版35　前期縄文土器（１）
図版36　前期縄文土器（２）
図版37　前期縄文土器（３）
図版38　前期縄文土器（４）
図版39　前期縄文土器（５）
図版40　前期縄文土器（６）
図版41　前期縄文土器（７）
図版42　前期縄文土器（８）
図版43　前期縄文土器（９）
図版44　中期縄文土器
図版45　縄文時代石鏃・石錐
図版46　縄文時代石鏃未製品・石篦・楔形石器・二次加工剥片・石核等・打製石斧
図版47　縄文時代磨製石斧・礫石斧・磨石
図版48　縄文時代磨石・敲石・凹石
図版49　縄文時代獣面把手・耳飾・玦状耳飾・土器片錘
図版50　弥生土器（１）
図版51　弥生土器（２）
図版52　弥生土器（３）
図版53　弥生土器（４）
図版54　弥生土器（５）
図版55　土師器（１）
図版56　土師器（２）
図版57　土師器（３）
図版58　土師器（４）
図版59　土師器（５）
図版60　土師器（６）
図版61　土師器（７）
図版62　土師器（８）
図版63　土師器（９）
図版64　土師器（10）
図版65　土師器（11）
図版66　土師器・須恵器（12）
図版67　土師器（13）
図版68　土師器・須恵器（14）
図版69　土師器（15）
図版70　土師器（16）
図版71　土師器（17）
図版72　土師器（18）
図版73　土師器（19）
図版74　土師器・須恵器（20）
図版75　土師器・須恵器（21）
図版76　土師器（22）
図版77　土師器・須恵器（23）
図版78　土師器（24）
図版79　土師器・須恵器（25）
図版80　土師器・須恵器（26）
図版81　土師器・須恵器（27）
図版82　土師器・須恵器（28）
図版83　土師器・須恵器（29）
図版84　土師器・須恵器（30）
図版85　土師器・須恵器（31）
図版86　弥生時代磨製石剣・石斧、敲石・磨石
図版87　弥生時代以降軽石A
図版88　弥生時代軽石B
図版89　弥生時代砂岩Ａ砥石
図版90　弥生時代砂岩B砥石・古墳時代以降凝灰岩砥石・その他砥石
図版91　弥生時代以降玉類（１）
図版92　弥生時代以降玉類（２）
図版93　弥生時代土製円盤・土製炉囲い
図版94　弥生時代以降土錘・土玉
図版95　弥生時代以降紡錘車・その他土製品・刻書土器
図版96　奈良・平安時代瓦
図版97　土製支脚
図版98　古墳時代石製模造品･未製品･土製模造品･弥生時代以降祭祀関連遺物等
図版99　鳥形土製品・槽形土製品

図版100　弥生時代以降金属製品
図版101　古墳時代以降金属製品（１）
図版102　古墳時代以降金属製品（２）
図版103　古墳時代以降金属製品（３）・鍛冶関連遺物（１）
図版104　古墳時代以降鍛冶関連遺物（２）・貝巣穴状泥岩
図版105　近世墓域出土銭貨
図版106　近世墓域およびグリッド出土銭貨
図版107　グリッド・トレンチ出土銭貨
図版108　グリッド出土銭貨・癒着銭貨・火打石
図版109　草刈遺跡Ⅰ区の赤色顔料・貝類（１）
図版110　貝類（２）
図版111　哺乳類遺体
図版112　甲殻類・魚類
図版113　人骨

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　発掘調査の経緯

市原市と千葉市にまたがる丘陵上に、独立行政法人都市再生機構による千原台地区土地区画整理事業が計画された。このため、事業地内の埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関と協議した結果、可能な限り公園、緑地として現状保存に努める一方で、現状保存の困難な部分については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県教育振興財団が委託を受け発掘調査を実施することとなった。

今回報告する草刈遺跡Ｉ区は、約30haに及ぶ遺跡の西寄りに位置し、調査は昭和53年度に確認調査、平成２年度に本調査を行った。草刈遺跡についてはこれまでの調査成果として、確認調査、Ａ区、Ｂ区、東部地区縄文時代、東部地区旧石器時代、西部地区旧石器時代、Ｃ区・保存区、Ｄ・Ｅ区、Ｇ区・古墳群（Ｐ区)、Ｋ区、Ｊ区、Ｈ区、Ｌ区の各報告書が刊行されており、当報告書は15冊目に相当する。なお、発掘調査の実施内容・担当者は、次のとおりである。また、職名については当時のものである。

昭和53年度
　組　織　調査部長　西野 元　　班長　栗本佳弘
　担当者　調査研究員　及川淳一・小久貫隆史
　内　容　確認調査　100,000㎡
平成２年度
　組　織　調査部長　堀部昭夫　　班長　大原正義
　担当者　主任技師　土屋潤一郎
　　技師　島立　桂・豊田秀治・福田依子
　内　容　上層本調査　10,200㎡

確認調査は昭和53年度に実施した。事前に国家座標を基準とした40ｍ×40ｍの大グリッド（第１図）を設け、この大グリッドを基準として、草刈遺跡全体を対象に幅２ｍのトレンチを10ｍ間隔で南北方向に設定した。そのトレンチ設定状況は、第２図に示した。トレンチ内から出土した遺物の取上げについては、大グリッド内を４等分して行った（第２図参照)。

確認調査の進捗に伴い、調査範囲全体にわたって遺構が濃密に分布していることが明らかとなった。そのため、Ｃ区から東側においては、確認調査を省略した。なお、確認調査時においては、草刈遺跡全域に対して219-003という遺跡コード番号を用いている。

上層本調査は平成２年度に実施した。バックホウ等の重機を用いて表土を除去した後、検出された遺構を精査し、図面作成、写真撮影等の手順で記録作成作業を行った。遺構番号については、001からはじまる３桁の通し番号で表記することとし、必要に応じて枝番号を付けることとした。遺構図面の作成や遺構に帰属しない遺物の取上げは、既述した大グリッドを４ｍ×４ｍのグリッドに分割した小グリッド（第２図）を最小単位とした。大グリッドの番号については、当初地区ごとにそれぞれ個別のグリッド番号が付けられて調査がされたが、西部地区の調査を実施するにあたり、遺跡内を統一的に表示するグリッド名称に変更が行われている。本書では、この新しいグリッド名称に基づいて表示をしており、その対応関係は凡例に示している。なお、本調査各地区はそれぞれコード番号が異なり、当Ｉ区では219-047となる。

調査の結果、弥生時代の環濠、竪穴住居、方形周溝墓・土坑墓群、古墳時代から平安時代に及ぶ約340棟

の竪穴住居等が検出され、草刈遺跡のなかでもM区と並ぶ稠密な遺構密集地であることが明らかになった。

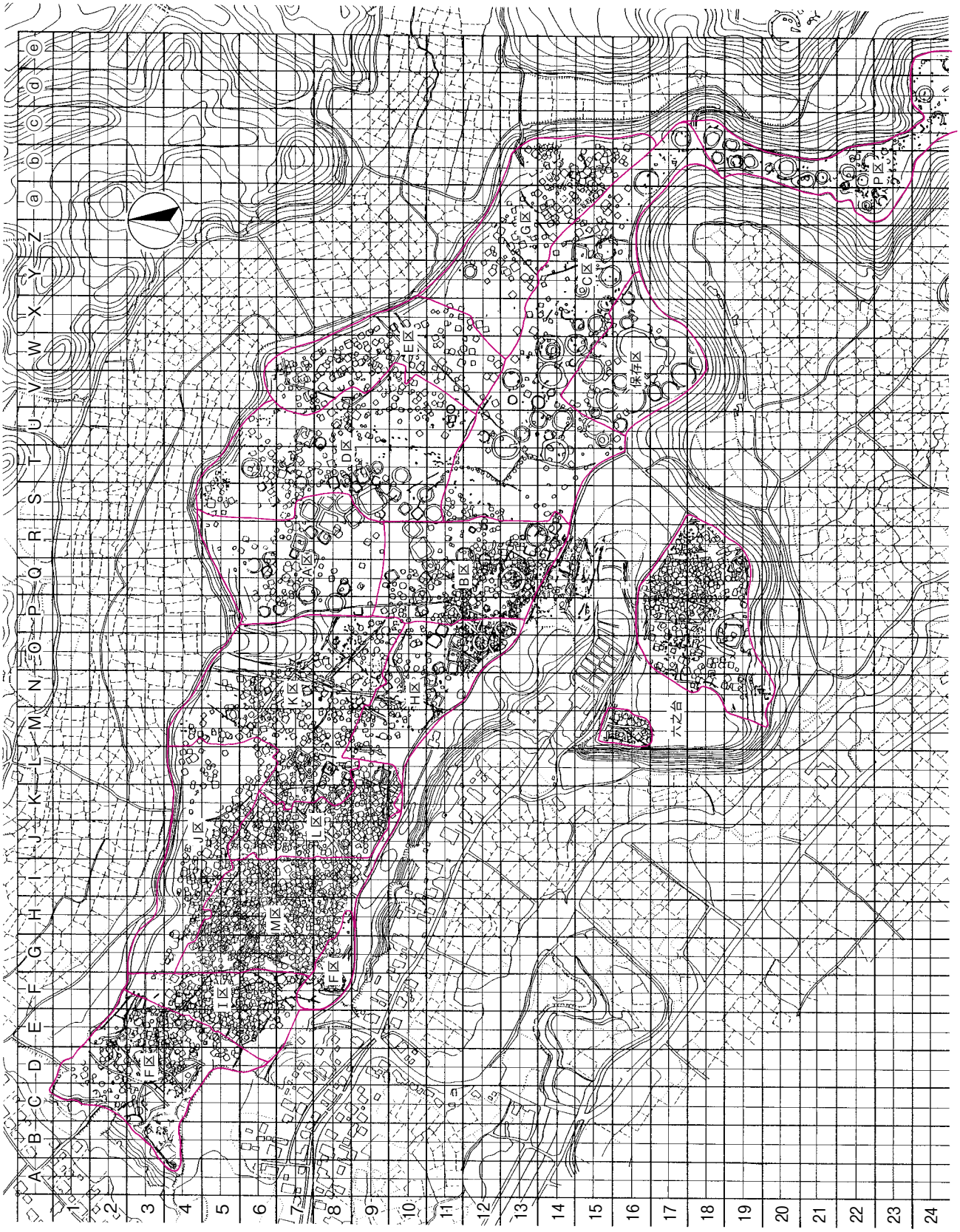
3　整理方針と報告の概要

草刈遺跡は、面積が約30haに及び、検出された遺構数も約7,000基と他に例をみない膨大なものであった。このため報告書作成にあたっても、調査地区を基本単位として作成することにしている。しかし、旧石器時代ならびにA・B区から東側の縄文時代については、全体的に遺構が散在し、かつ陥穴など小規模な範囲ではその全体像を把握することが困難なことから、C区・D区・E区・G区・保存区（N区）・古墳群（P区）の6調査地区を一括し、『東部地区旧石器時代』、『東部地区縄文時代』として報告書を刊行した。さらにK区を含む西部地区の旧石器時代の調査成果についても、『西部地区旧石器時代』として報告書を刊行した。このことからI区については、旧石器時代を除く遺構・遺物を対象として整理作業を実施している。

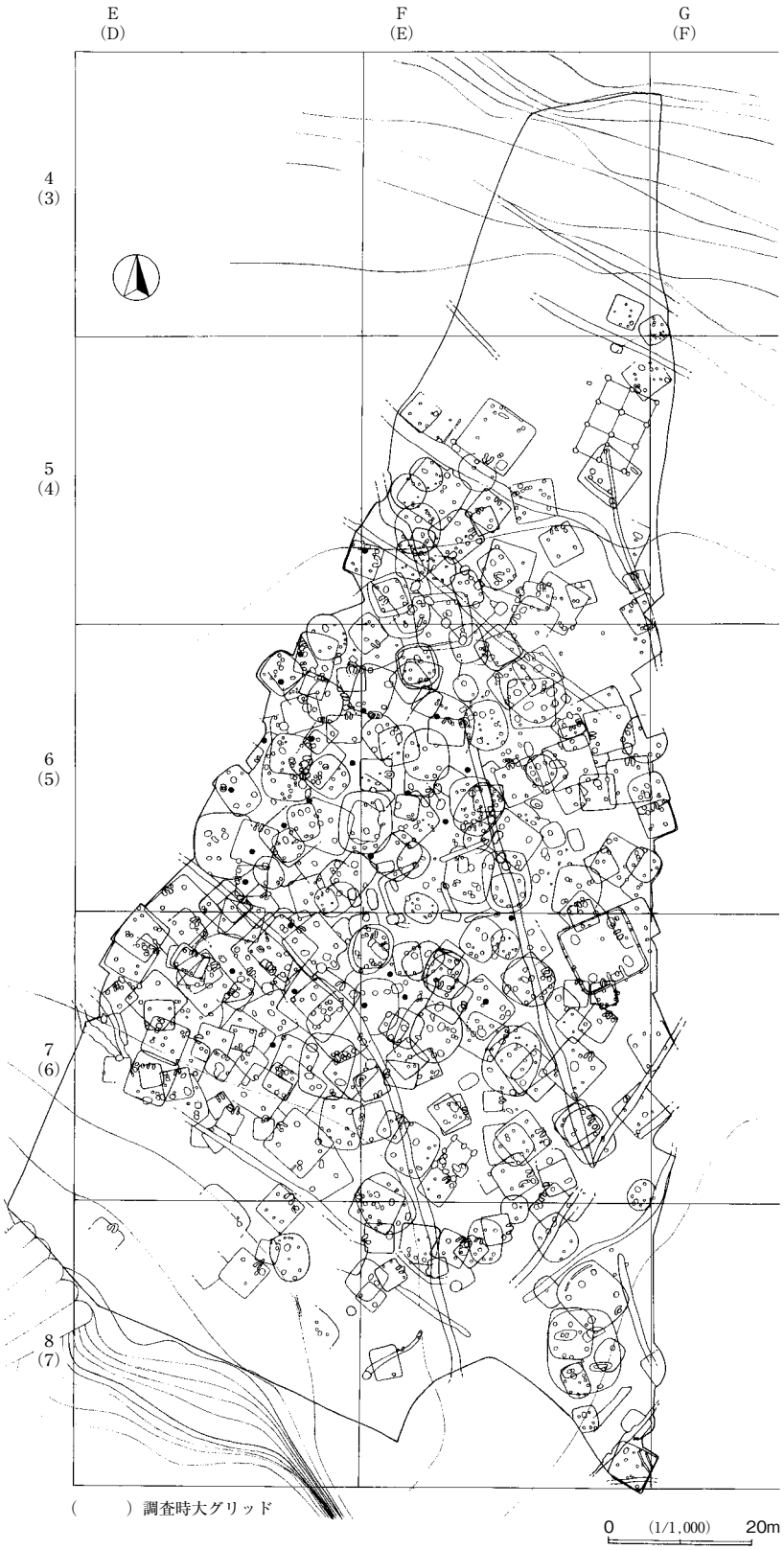
整理作業は、平成5年度から平成6年度にかけて水洗・注記から復元・分類に至る基礎整理を、平成20年度から同22年度に実測から原稿執筆までを行った。実測・拓本作業においては遺物量が厖大であることから、その遺存度や特殊性等を加味して選択した。また、挿図・図版作成では、遺構の保存状態、遺物の出土状況を考慮して、平面図及び写真を掲載する遺構を取捨選択した。その選択率は各時代の概要の部分で明示した。

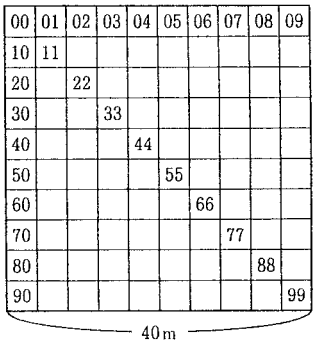
作業実施年度ならびに担当者は以下のとおりである。

平成5年度
　組　織　調査部長　高木博彦　所長　深澤克友
　内　容　水洗・注記
平成6年度
　組　織　調査部長　西山太郎　所長　田坂　浩
　内　容　水洗・注記、分類・接合の一部
平成7年度
　組　織　調査部長　西山太郎　所長　矢戸三男
　担当者　技師　田井知二
　内　容　分類・接合の一部
平成18年度
　組　織　調査部長　矢戸三男　所長　西川博孝
　担当者　上席研究員　小林清隆
　内　容　分類・接合
平成20年度
　組　織　調査研究部長　大原正義　所長　折原 繁
　担当者　上席研究員　小高春雄
　　整理技術員　平井真紀子
　内　容　実測・拓本、写真撮影・トレースの一部
平成21年度
　組　織　調査研究部長　及川淳一　所長　折原 繁
　担当者　主席研究員　雨宮龍太郎・石倉亮治　上席研究員　小高春雄・田島 新
　内　容　写真撮影・トレースの一部、挿図・図版作成、原稿執筆の一部
平成22年度
　組　織　調査研究部長　及川淳一　所長　白井久美子
　担当者　上席研究員　小高春雄
　内　容　原稿執筆の一部～編集・報告書印刷・刊行

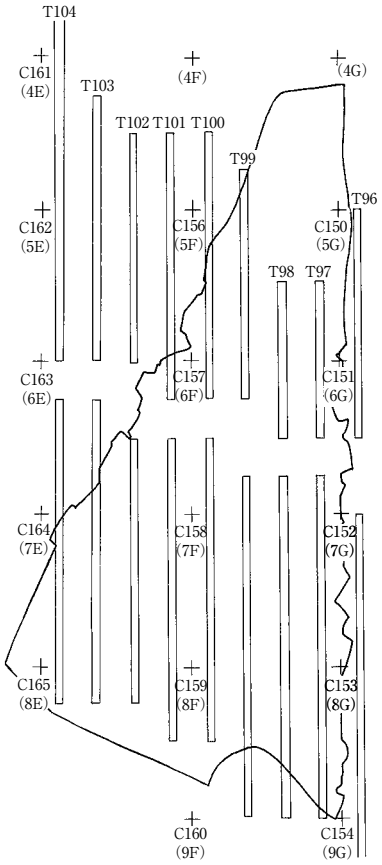


第１図　草刈遺跡調査区（1/6,000）

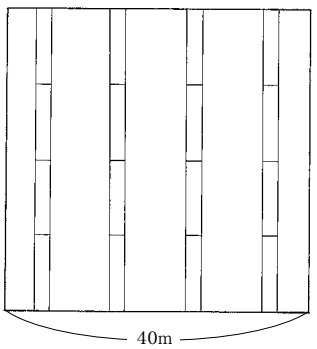




小グリッド分割図



確認トレンチ配置図
(1/2,000)



確認トレンチ分割図

第２図　草刈遺跡Ⅰ区　グリッド・確認トレンチ配置図（1/1,000・1/2,000）

第２節　遺跡の位置と環境

１　遺跡の位置と周辺の地形

草刈遺跡は、ちはら台ニュータウン造成地域の西端、市原市草刈字上切付1,263-1（現ちはら台西１丁目）ほかに所在し、現在の京成電鉄ちはら台駅を中心とした台地上（以下説明上草刈台地と呼称）に位置する。この草刈台地は東西に細長い形状であり（幅150m～400m、長さ1,500m）、南側を村田川谷底平野、北側を「茂呂谷津」と称される深い開析谷に挟まれている。標高は30m～40mほどであり、東から西に向かって緩やかに傾斜し、沖積低地との比高差は西側でおよそ15mである。報告するＩ区は草刈遺跡の西端に近く、西側はＦ区、東側はM区に隣接する。

村田川下流域では概して右岸が急崖をなすのに対し、左岸は水田面より一段高い程度の低位段丘が形成されており、対照的な景観となっている。草刈台地でもその状況は確認されるが、崖下の集落化の過程で人為的な崖面化もなされている。一方、台地北側でも、村田川谷底平野に開口する茂呂谷が深い谷を刻み、樹枝状の開析が進んでいる。この谷は、かつて上総国と下総国との国境をなしており、現在でも千葉市と市原市との行政境として継承されている。また、谷内では数か所にわたってボーリング調査が実施され、厚く堆積した泥炭層とその直上からはイネプラントオパールが検出されている。比較的早い段階で水田化が進んだことが報告・指摘されている。

台地の南側には川沿いにまとまった平野が分布し、西側約２km先の旧汀線との間には広い海岸平野が展開する。前者は弥生時代中期以降、また後者は古墳時代以降に開発されたと推測され、このことが弥生時代以降とりわけ古墳時代集落の発展に繋がったと思われる。

ここで報告するＩ区は、遺跡中央のＫ区から続く弥生時代～古墳時代集落の西端部に相当する一方、Ｆ区と共に台地先端に営まれた弥生時代の環濠集落を共有する。また，縄文時代早・前期、とりわけ前期の遺物が多く出土しているのも当地区の特徴である。

２　草刈遺跡と周辺の遺跡

草刈遺跡では総数7,000基を数える遺構が検出されている。このうち竪穴住居は約4,000棟、古墳は約170基を数え、千葉県内でも有数の遺跡である。時代的には、旧石器時代から中・近世におよぶ大複合遺跡であり、とりわけ縄文時代中期の環状集落とそれに伴う貝塚、弥生時代中期の環濠集落、古墳時代前期方墳群、古墳時代前期から中期に及ぶ大規模な集落の全容が明らかになった点は特筆される。先ずその概要を述べ、次に村田川中流域における縄文時代以降（旧石器時代は千原台ニュータウンⅩⅢ等参照のこと）の様相について概観することとしたい。なお、村田川中～下流域右岸の千原台ニュータウンまた本千葉ゴルフ場北側～ JR外房線までの千葉東南部ニュータウン建設に伴う広範囲の遺跡群を略称する場合はそれぞれ現在の名称である千原台、おゆみ野と呼称する。

縄文時代早期の遺跡は比較的台地の奥まった地に多く、陥穴や炉穴群を伴う。おゆみ野の有吉城跡、太田法師遺跡、御塚台遺跡、千原台の押沼遺跡群、川焼台遺跡等が代表例であるが、村田川左岸の下鈴野遺跡などでも検出例がある。同前期ではおゆみ野のバクチ穴遺跡、当草刈遺跡Ｉ区のように小規模ながらも集落をなす例があるが、多くは単独ないし遺物のみの出土例である。また、神門遺跡のように当時の海浜に形成された貝塚のような例もある。同中期になると有吉北貝塚や当草刈貝塚によって代表される大規模な貝塚を伴う集落が出現する。当草刈貝塚の場合、東西130m・南北70mの環状集落・土坑群であり、貝

塚は主に遺構内に形成されたものであった。南側の縁辺部を残すとはいえ、ほぼその全体が調査され、しかも報告された事例（千原台ニュータウンXXXを以て完結）は稀である。貝層のみならず多様な動物遺存体に同定・分析の手が及んだことも特記される。同後期は中期と占地こそ違え、同様に貝塚を伴う。おゆみ野の六通貝塚、木戸作貝塚、上赤塚貝塚、大膳野南貝塚、小金沢貝塚など、浜野川水系と都川水系の分水嶺に近い谷奥に立地する。もちろん貝塚の他に、小規模な集落の検出例があることにもふれておきたい。晩期は後期から続く貝塚に住居跡の検出例があるものの（例えば六通貝塚）、包含層を形成するのみの出土例が散発的に見られる程度となる。立地や集落のあり方が異なる結果であろうか。

弥生時代中期は村田川流域に多くの遺跡が出現する。左岸の菊間遺跡、大厩遺跡群、潤井戸西山遺跡、そして右岸の草刈遺跡等、共に環濠集落を形成する。とりわけ、当草刈遺跡では環濠の作り替えが行われ、東側台地続きには入口部が認められる。同後期の集落は環濠外にも進出し、棟数も増加する。なかでも草刈遺跡は突出した規模（約1,200軒）であり、豊富な鉄剣等鉄製品と釧や玉類の装飾品を伴う土坑墓群の存在も注目される。

古墳時代は多分に前代の集落を受け継ぐかたちで出発するが、集落の発展と拡散が窺える時期でもある。また、それに呼応するように古墳も築かれるようになる。前期の集落跡では草刈遺跡を筆頭に川焼台遺跡、鶴牧遺跡、菊間遺跡、下鈴野遺跡など、村田川沿岸の遺跡群が中心となるが、おゆみ野の浜野川水系の支谷にも集落（南二重堀遺跡等）が成立する。浜野～八幡宿ラインまでの海岸平野微高地に集落が立地するのもこの期以降である。草刈台地では中央頂部を囲むように分布する方墳群（一部前方後方墳）と、隣接する南側方墳群の２グループの古墳群がまず並行して築かれ、対岸の大厩遺跡では明瞭な墳丘を有する同時期の方墳（９号墳）が築かれている。そしてまもなく、当地でも菊間新皇塚古墳や大厩浅間様古墳など、高い墳丘と鏡・腕輪形石製品・武器・農耕具などを副葬する古墳が出現する。

古墳時代中期は大型の前方後円墳が築かれた時期であるが、それに対応する集落の検出例はそれほど多くはない。このなかで当草刈遺跡の中期集落は突出した規模を有しており、それに対応する古墳も草刈台地南側に点在する（１号墳、３号墳）。何れも円墳であるが、２基とも墳丘径35ｍを超える大型古墳である。

古墳時代後期に入ると生実、椎名崎、小金沢の台地群（現おゆみ野）に集落が多く営まれるようになり、古墳群もその周辺に築かれる。その一方、草刈遺跡では集落はその東端から東側の台地群（中永谷遺跡、川焼台遺跡、ナキノ台遺跡）に移動する。また、村田川左岸の諸遺跡でも小規模な調査範囲にもかかわらず検出例（潤井戸遺跡群等）がある。台地前面の海岸平野と背後の谷部の開発が進展した結果であろうか。

奈良・平安時代に入ると高沢遺跡をはじめおゆみ野では遺跡数や集落の拡大がみられる。草刈遺跡内でも奈良時代のうちに集落は復活する。周辺の遺跡では川焼台遺跡や鶴牧遺跡のように継続して営まれる場合もあるが、概して規模は縮小する。しかし、川焼台遺跡下では瓦の生産が行われ、押沼遺跡群では大規模な鍛冶工房が営まれるなど、村田川流域の開発は一層進展した可能性が高い。むしろ、広範囲に集落が分散した結果と捉えるのが適当ではなかろうか。この時代に限らないが、村田川左岸は右岸に比べて調査された遺跡も少ない。草刈遺跡の相対的な位置付けはこれら不明な部分を勘案したうえでなされるべきであろう。

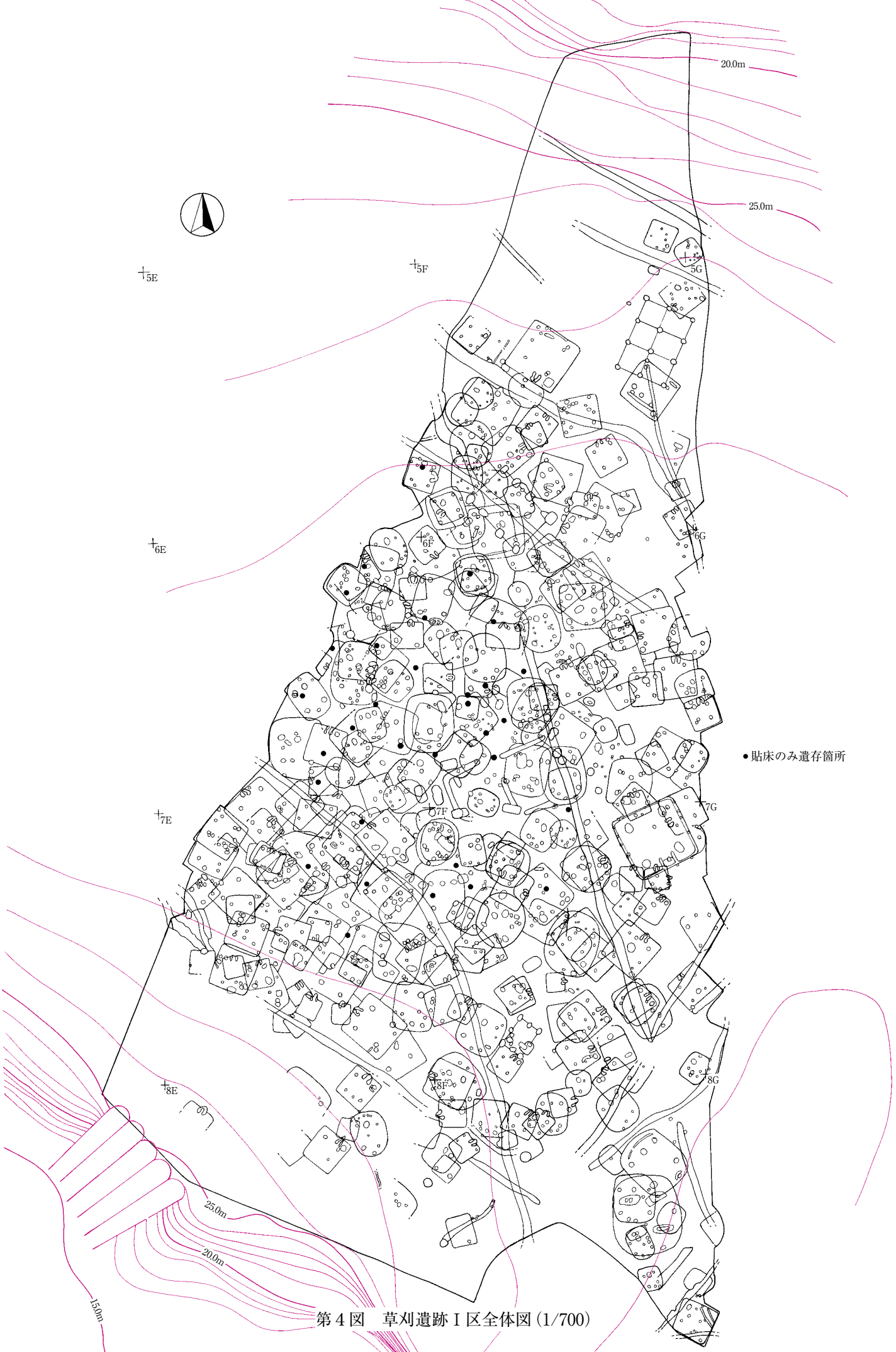
第３図　草刈遺跡と周辺の遺跡

１草刈遺跡群	２草刈古墳群	３大宮神社古墳群	４草刈城跡	５草刈六之台遺跡	６中永谷遺跡	７川焼台遺跡	８川焼瓦窯跡
９鶴牧遺跡	10鶴牧古墳群	11ナキノ台遺跡	12人形塚	13ばあ山遺跡	14野馬堀遺跡	15押沼第１遺跡	16押沼大六天遺跡
17草刈狐塚遺跡	18菊間遺跡群	19菊間古墳群	20大厩新田前遺跡	21辰巳台遺跡群	22北野崎遺跡	23下郷古墳群	24下郷遺跡
25大厩館跡	26大厩遺跡群	27大厩古墳群	28大厩三山塚	29大厩久保遺跡	30兵ノ下遺跡	31七反目遺跡	32潤井戸西山遺跡
33久々津古墳群	34木津古墳群	35潤井戸潤ヶ台遺跡群	36神崎三山塚	37稲干遺跡	38居鞍古墳群	39南大林遺跡	40潤井戸小谷古墳群
41潤井戸杉山古墳群	42潤井戸陣屋跡	43潤井戸中新宿遺跡	44潤井戸館跡	45潤井戸遺跡群	46潤井戸高野前古墳	47潤井戸小谷遺跡	48下野遺跡群
49下野寺谷古墳群	50潤井戸中横峰古墳群	51永吉西野遺跡	52永吉権現山古墳群	53永吉氏神遺跡	54永吉向田遺跡	55永吉花ノ台遺跡	56鹿ノ原遺跡
57西鹿ノ原古墳群	58押沼城跡	59大覚寺山古墳	60内荒子遺跡	61八人塚古墳群	62亀甲北遺跡	63森台貝塚	64古城・小弓城跡
65神門遺跡	66東堀遺跡	67松原遺跡	68松原東遺跡	69亀甲遺跡	70有吉遺跡	71上赤塚遺跡	72城ノ台遺跡
73椎名崎遺跡	74伯父名台遺跡	75刈田子台遺跡	76立台遺跡	77杉ノ台遺跡	78富岡古墳群	79春日作遺跡	80椎名崎古墳群C支群
81神明社裏遺跡	82今台遺跡	83椎名崎古墳群B支群	84狐塚古墳群	85椎名崎貝塚	86有吉城跡	87有吉南遺跡	88有吉北貝塚
89有吉南貝塚	90馬ノ口遺跡	91木戸作遺跡	92篠堀遺跡	93椎名崎古墳群A支群	94小金沢貝塚	95小金沢古墳群	96鍛冶屋坊遺跡
97御塚台遺跡	98ムコアラク遺跡	99左作瓦窯跡	100太田法師遺跡	101六通貝塚	102六通遺跡	103白鳥遺跡	104六通神社南遺跡
105六通金山遺跡	106大膳野北遺跡	107バクチ穴遺跡	108油戸瓦窯跡	109長堀南遺跡	110長堀東遺跡	111長堀北遺跡	112長堀遺跡
113大膳野南貝塚	114大膳野南遺跡	115居原ノ山遺跡	116白鳥台第１遺跡	117白鳥台第２遺跡	118南宅地尻遺跡	119椎名道遺跡	120野田貝塚
121野田遺跡	122辺田山谷遺跡	123上深見沢遺跡	124山谷遺跡	125誉田コロニー内遺跡	126鈴子遺跡	127鷹見塚遺跡	

＜千原台既刊報告書＞

小久貫隆史　1980『千原台ニュータウン１（野馬堀遺跡・ばあ山遺跡・他)』(財）千葉県文化財センター
小久貫隆史・梶 淳ほか　1983『千原台ニュータウンⅡ　草刈遺跡A区（第１次調査)』(財）千葉県文化財センター
高橋康男　1985『草刈遺跡』(財）市原市文化財センター
高田　博ほか　1986『千原台ニュータウンⅢ　草刈遺跡（Ｂ区)』(財）千葉県文化財センター
小林清隆ほか　1990『市原市草刈貝塚』(財）千葉県文化財センター
白井久美子ほか　1991『千原台ニュータウンⅣ　中永谷遺跡』(財）千葉県文化財センター
小林信一　1993『千原台ニュータウンⅤ－押沼第１遺跡Ｋ地点－』(財）千葉県文化財センター
白井久美子ほか　1994『千原台ニュータウンⅥ－草刈六之台遺跡－』(財）千葉県文化財センター
田井知二　1997『千原台ニュータウン７－草刈１号墳－』(財）千葉県文化財センター
高橋康男・森本和男　2000『草刈遺跡Ⅱ』(財）市原市文化財センター
伊藤智樹・大谷弘幸ほか　2003『千原台ニュータウンⅧ－市原市草刈遺跡（東部地区縄文時代）－』(財）千葉県文化財センター
黒沢　崇　2003『千原台ニュータウンⅨ－市原市押沼第１・第２遺跡（上層）－』(財）千葉県文化財センター
島立　桂　2003『千原台ニュータウンⅩ－市原市草刈遺跡（東部地区旧石器時代）－』(財）千葉県文化財センター
大谷弘幸　2004『千原台ニュータウンⅪ－市原市草刈遺跡（Ｃ区・保存区）－』(財）千葉県文化財センター
黒沢　崇ほか　2004『千原台ニュータウンⅫ－市原市押沼大六天遺跡（上層）－』(財）千葉県文化財センター
田島　新　2005『千原台ニュータウンⅩⅢ－市原市草刈遺跡（西部地区旧石器時代）－』(財）千葉県文化財センター
小林清隆・大谷弘幸　2006『千原台ニュータウンⅩⅣ－市原市草刈遺跡（Ｄ区・Ｅ区）－』(財）千葉県教育振興財団
田島　新　2006『千原台ニュータウンⅩⅤ－市原市押沼大六天遺跡（下層）－』(財）千葉県教育振興財団
白井久美子ほか　2007『千原台ニュータウンⅩⅥ－市原市草刈遺跡Ｇ区・古墳群（Ｐ区）－』(財）千葉県教育振興財団
小林清隆・麻生正信　2007『千原台ニュータウンⅩⅦ－市原市草刈遺跡（Ｋ区）－』(財）千葉県教育振興財団
小林清隆　2007『千原台ニュータウンⅩⅨ－市原市草刈遺跡（Ｊ区）－』(財）千葉県教育振興財団
田島　新　2007『千原台ニュータウンⅩⅧ－市原市ナキノ台遺跡（下層）－』(財）千葉県教育振興財団
田島　新　2008『千原台ニュータウンⅩⅩ－市原市押沼第１遺跡（下層）－』(財）千葉県教育振興財団
蜂屋孝之ほか　2009『千原台ニュータウンⅩⅪ－市原市川焼台遺跡（上層）－』(財）千葉県教育振興財団
田島　新　2010『千原台ニュータウンⅩⅫ－市原市押沼第２遺跡（下層）・川焼台遺跡（下層）－』(財）千葉県教育振興財団
蜂屋孝之ほか　2010『千原台ニュータウンⅩⅩⅢ－市原市草刈遺跡（Ｈ区）－』(財）千葉県教育振興財団
田島　新ほか　2010『千原台ニュータウンⅩⅩⅣ－市原市鶴牧遺跡（下層）－』(財）千葉県教育振興財団

▲Ｉ228付近調査状況、一帯は住居が激しく切り合い、草刈遺跡を象徴する重複状況であった。



第４図　草刈遺跡Ⅰ区全体図(1/700)

第２章　遺構と遺物

第１節　概要

草刈遺跡Ⅰ区では旧石器時代から中・近世にわたる遺構が検出され、それに伴って大量かつ多種・多様な遺物が出土している。とりわけ、縄文時代前期、弥生時代中期・後期、古墳時代前期～後期、平安時代はまとまった遺物ないしは遺構を遺しており、以下これらについてその概略を紹介する。なお、旧石器時代については、既に報告済み（『千原台ニュータウンⅩⅢ－市原市草刈遺跡（西部地区旧石器時代）－』）であり、ここでは上層のみを扱うものとする。

縄文時代の遺構は確実なもので、竪穴住居２棟、陥穴２基にすぎない。しかし、弥生時代以降の激しい重複状況からして、該当する節でも述べているとおり、実際はさらに多くの遺構があったものと思われる。とりわけ、前期の場合は諸磯・浮島期の集落が環状に形成されていた可能性がある。

弥生時代中期は環濠集落が草刈台地の西側に出現した時代で、Ⅰ区はその一部に相当する。中期の住居はほとんどがその中に収まっているが、一部は濠外にある。対応する墓域は通常隣接する地域に営まれるが、東側既調査内では未検出である。同後期にはⅠ区環濠内を越えて東側台地上へ住居が広く展開するようになるが、その一方で西端F区からⅠ区の台地南端を区画するような濠が設けられる。このような環濠ないし区画濠の推移は県内でも希なあり方であり、F区の様相とも併せ検討されるべき課題といえる。

同後期後半には２基の方形周溝墓とそれに付属するように土坑墓がその周囲につくられた。集落の規模からして限られた構成員の墓域と思われ、土坑墓からは短剣や鉄釧、玉類が出土した。方形周溝墓にも当然墓坑はあったであろうが、重複状況に加え後の攪乱により失われたものと思われる。Ⅰ区東側では方形周溝墓と土坑墓が併存ないしはそれのみで小規模な墓域を形成しており、Ⅰ区の場合もその一つと考えられる。なお、北側の茂呂谷側はなだらかな傾斜面となっており、標高27m～28m付近を境としてそれより谷側には住居が占地することはなく、それは弥生時代以降にも共通する。

古墳時代前期の集落はその前後の時期からすれば少なく、とりわけ南東部には空白地がみられる。特記すべきは土坑墓（Ⅰ186B）である。人骨２体に伴って大量の土器がその近くから出土したが、とりわけ、約34点の高坏は意図的に坏部と脚部を打ち離しており、葬送に伴う儀式の跡かと推測される。なお、墓域は区内では設けられず、これは古墳時代を通じたあり方である。

古墳時代中期は約74棟の住居が検出されたが、これは東側M区から連続する該期の集落の一部であって、前期以降、集落が着実に発展した結果を示していると思われる。既に中期の集落は台地東側でも報告されているがその規模からして西側にその中心があったとみてよい。炉からカマド、また、カマドや住居内部構造の変遷上、画期をなした時期であり、当区でも良好な事例がある。

古墳時代後期は草刈台地の集落が縮小へと向かう時期で、７世紀代には一時的に生活の跡が途絶えたようである。Ⅰ区でも例外ではなく、棟数も前期より少ない。

奈良時代に入って集落は復活し、以後平安時代の９世紀代まで継続する。住居は概して小形化し、カマドも小さく、柱穴もないものが多い。掘立柱建物は２棟のみで、土坑も少ない。鍛冶関係の遺物や土師器焼成土坑など、この期の集落に伴う遺構・遺物はみられるものの、弥生時代～古墳時代中期までのような卓越性（比較の問題ではあるが）は感じられない。この期をもって草刈遺跡の特殊性は失われたと言うべきであろう。

第５図　縄文時代遺構分布図（1/700）

第２節　縄文時代

１　概要

Ｉ区で検出された縄文時代の遺構は住居２棟（Ｉ418、Ｉ325）と陥穴２基（Ｉ157、Ｉ461）である。しかしこれはある程度確実なものであって、遺物分布図（遺構出土の縄文土器を点数毎に円の大きさで示したもの）をみればわかるように、Ｉ区北西部から一部F区にかけて直径50ｍほどの円を描くように遺物の稠密な分布範囲が確認される。それは包含層と捉えるよりも、弥生時代以降の激しい重複状況からして遺構破壊後の再堆積の結果と捉えるのが適当であろう。即ち、その一角のどこかに縄文時代の遺構それも住居が存在した可能性が高いのである。時期的には前期の土器片が圧倒的（10,530/12,680）であることから、前期それも諸磯ｂ期・浮島期とほぼ特定できる。具体的には前記住居周辺は除くとして、北側半円部内の５F-51・52、５F-85～５F-96、６E-75～86、５F-92～６F-03、６F-08・09にわたる地点に集中域がみられる。そうすると、さらに４棟程度の増加が見込まれ、都合６棟程度という大まかな住居推測数をあげうる。

陥穴については２基検出したが一つは方形で深さのあるもの、一つは細長く深さもあり、底面に小ピットが付属するものである。前者が縄文時代早期後半、後者が同前半に盛行すると思われることから、僅かに出土した該期の土器片と対応するものであろう。ただ、この種遺構は群で検出されることが通例であることから、恐らく本来のあり方とは異なる可能性がある。これも当遺跡のような各時期の遺構が激しく重複するケースの結果ともいえる。なお、草刈遺跡では台地東側で早期炉穴が一段低いD区台地端部、同陥穴がD区・E区の谷地からまとまって検出されている。その性格を考えるうえで参考になろう。

出土遺物は多量の土器片や石器（石鏃、楔形石器、打製石斧、磨石、敲石等）、土製品（玦状耳飾、土器片利用土錘）等であった。土器は形状が窺えるものはほとんどなく、時期的には前期諸磯ｂ・浮島式土器がほとんどといってよく、玦状耳飾の存在もこれを裏付けるものである。これに次いで早期茅山式、前期黒浜式、中期阿玉台式と続き、早期初めの撚糸ないし縄文施文の土器また沈線文系土器（田戸下層式）が僅かにみられるという状況である。諸磯ｂ・浮島以外はこれといった分布傾向は指摘しえず遺構に伴うかどうかは判別し難い。むしろ早期の場合は西隣りのF区で検出されている炉穴や陥穴の分布状況からしてそちらに由来するかと思われる。この点、中期の場合も同様である（B区～Ｈ区にわたる中期環状貝塚）。黒浜式から諸磯式への移行状況は不明であるが、草刈台地東側D・E区で出土例があるものの遺構は伴わず、遺物量も少ない。これを単純に有無というように捉えるのは問題があるが、ひとつの傾向ではあろう。

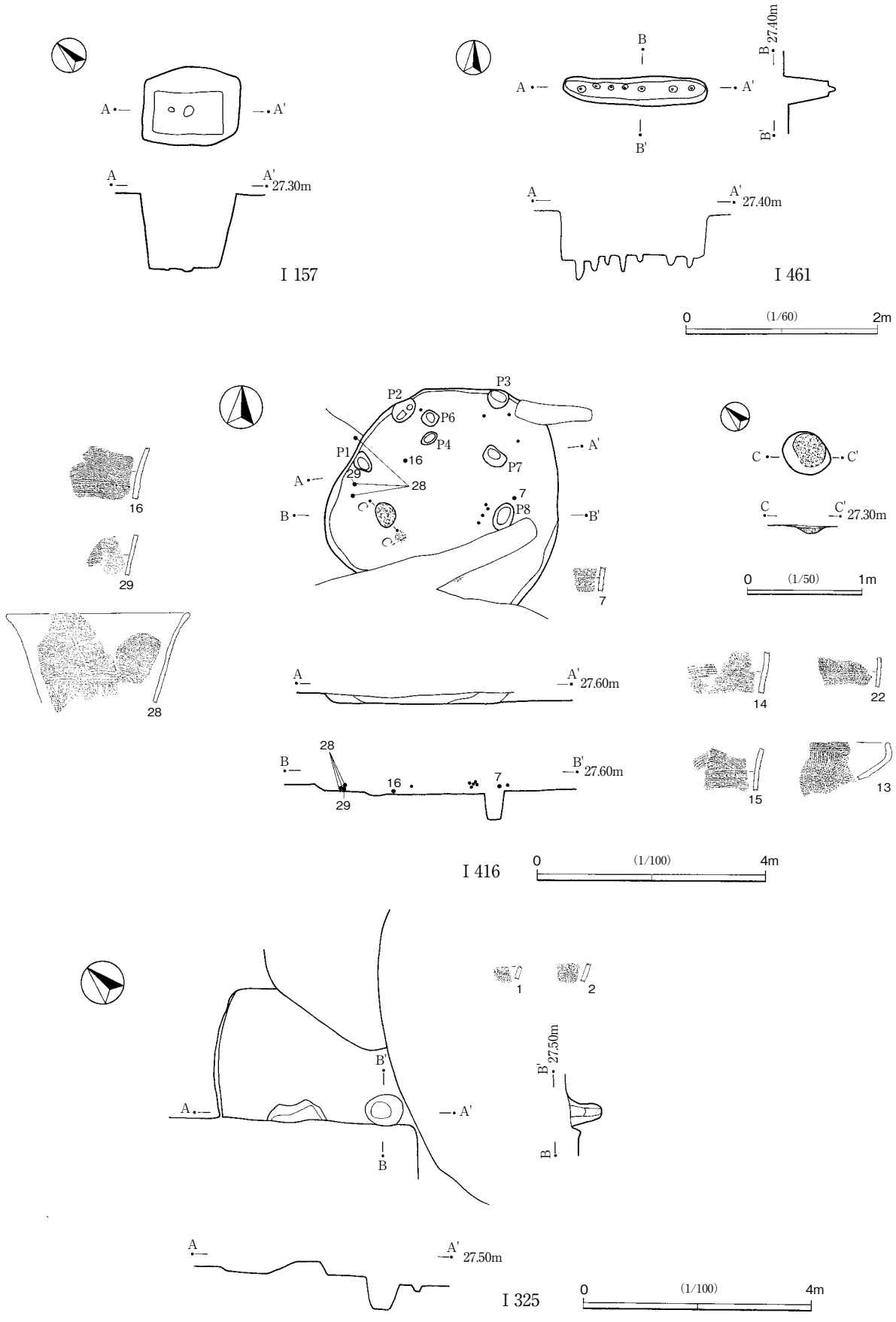
なお、遺構としては数が限られていることもありその総てを報告した。遺物、とりわけ土器片については遺構出土遺物および大量に出土した箇所（Ｉ188一帯）は別として、弥生時代以降の住居、グリッド・トレンチに由来するものは文様要素毎に抽出し掲載するに留めた。その比率は次の通りである。

早期1,320点（約11％）、前期黒浜期100点（約１％）、前期諸磯ｂ・浮島・興津期10,430点（約87％）、中期阿玉台・加曽利Ｅ期160点（約１％）、無文・不明990点

（総点数は約13,000点、％は分母を総点数から無文・不明分を引いた数とした。なお、黒浜式については関山式に該当する土器片が希少なことから、縄文施文かつ繊維混入例を一律に含めている。）

２　陥穴

Ｉ157（第５・６図）



第6図　I 157・I 461 陥穴、I 416・I 325 住居

縄文時代早期の陥穴である。６F-19に位置する。形態は多少胴張の長方形であり、規模は長径1.0m、短径0.82m、深さ0.82mである。壁面はほぼ垂直に落ち、底面には小ピットらしき落ち込みも確認される。覆土の状態は不明である。

Ｉ461（第５・６図）

縄文時代早期の陥穴である。７F-24に位置する。形態は細長い両端隅丸の長方形であり、規模は長径1.55m、短径0.32m、深さ0.52mである。壁面はほぼ垂直に落ち、底面には７か所の小ピットが確認された。その深さはまちまちながら10㎝～20㎝程である。覆土の状態は不明である。

３　住居跡

Ｉ416（第５～７図、図版31）

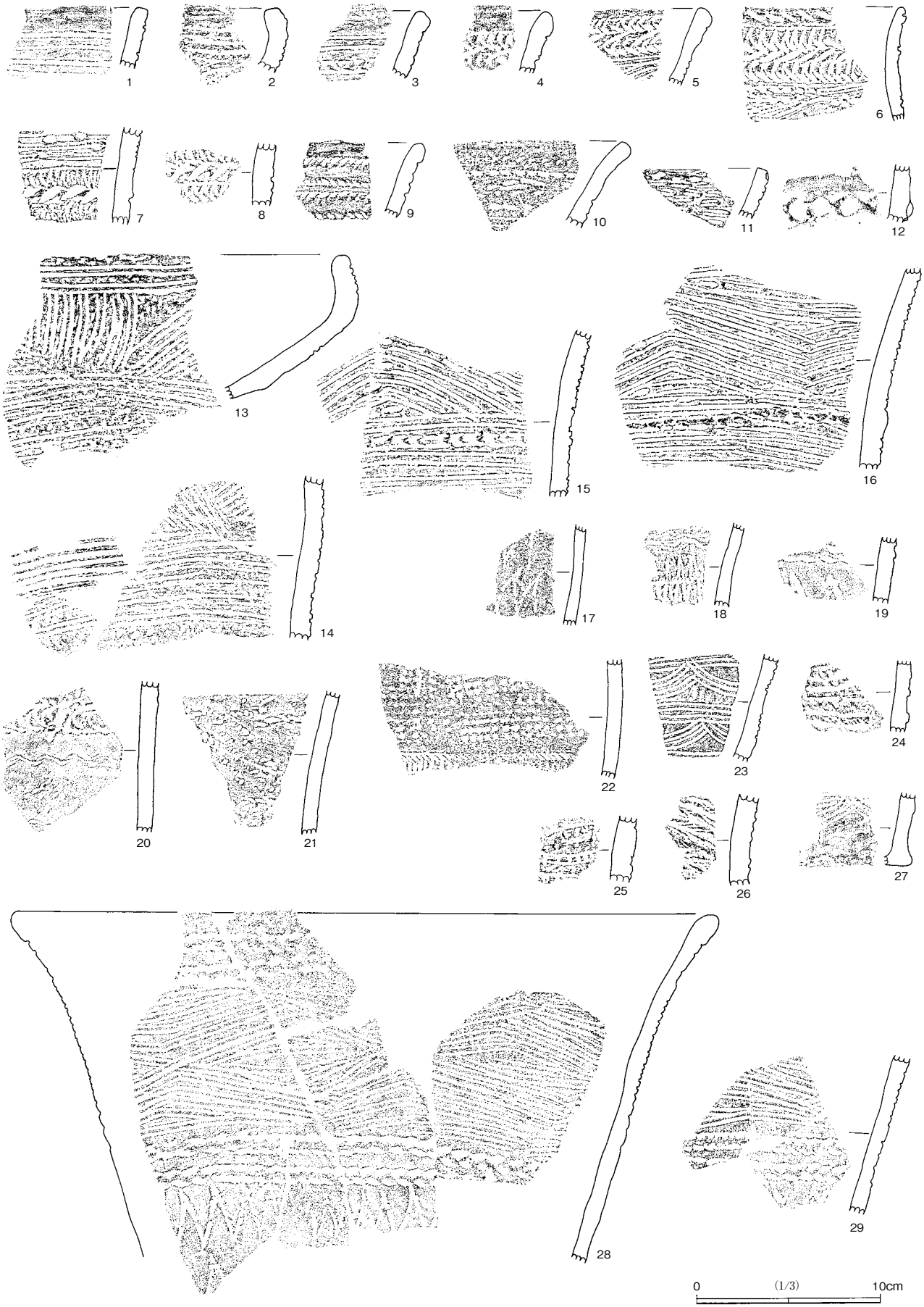
縄文時代前期浮島期の住居である。弥生時代の住居また方形周溝墓と重複し、遺存状態は不良である。形態は楕円形で、規模は長径4.1m、短径3.9mとなる。炉は西寄りにあり、焼土層の形成は不良である。柱穴らしき穴は８本あるが径・深さ共に一定せず（３～７が深く、この内３・４・８が深さ50㎝前後)、重複状況からしても明確に伴うかどうか断定し得ない。壁面は多少斜めで、床面は明瞭な踏締めに欠ける。覆土の堆積状況は凹レンズ状を示し、暗褐色土であった。

遺物は床面および覆土中から出土した。28の深鉢は器形と文様が窺える例である。また、28も含め16・29は床面付近の出土でもあり、住居の時期を示すものといえる。遺物はすべて破片であり、器形までは不明ながら鉢ないし深鉢と思われる。１～３は平行沈線文口縁部片、４～６は変形爪形文口縁部片、７・８は変形爪形文間に斜めの刻み目施文胴部上位片、９・10は竹管の交互押引文口縁部片、11も竹管文の一種による口縁部施文例であろう。12は斜め刺突文胴部片である。13～16は竹管による平行線文・山形文施文深鉢口縁部また胴部片である。17～19は貝殻文胴部片、20は変形爪形文と結節文がみられる例、21は縄文原体圧痕であろうか。22はアナダラ属貝殻文胴部片である。23は小形の鉢と思われ、平行沈線と弧線文を上下交互に施文するもので、胎土に混入物はみられない。24・26は浮線文胴部片、25は爪形文胴部片、27は23に対応する底部片であろう。28は大破片であり、文様構成を知る良い例である。口唇部下から竹管文、菱形文、竹管文、貝殻文（ハマグリ）の順に施文されている。29も恐らく同一個体であろう。

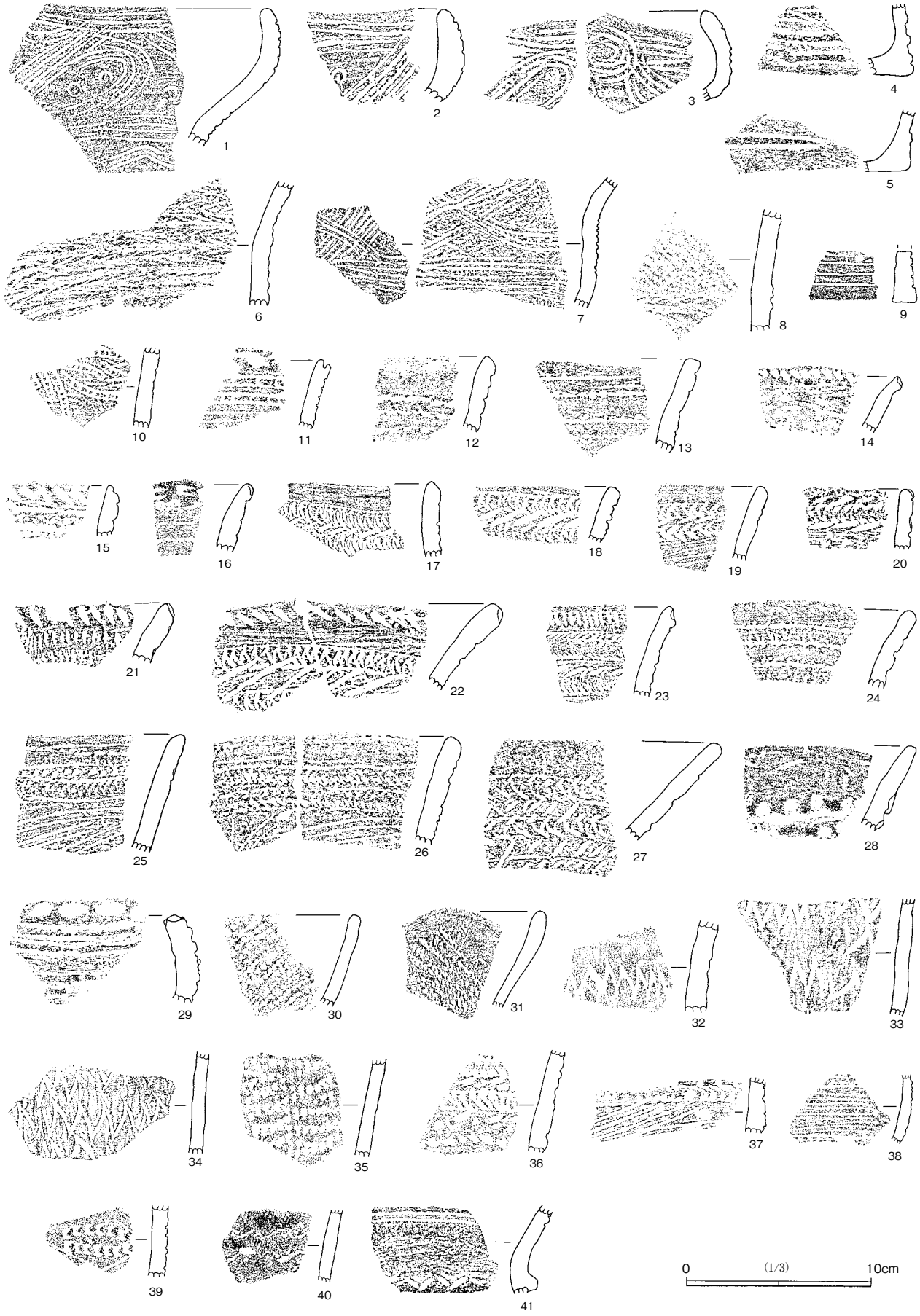
Ｉ325（第５・６・９図、図版33）

縄文時代前期浮島期の住居と思われる。重複の激しい住居間にあり、遺存状態は不良である。形態は楕円形になろうか。規模は不明ながら長径4.0m以上となる。炉は遺存範囲には見当たらず、柱穴らしき穴が１本確認された。確認面が床面に及んでいるため、壁面、床面の状態等不明な点が多い。以上、縄文時代とする根拠は多分に曖昧ながら、周囲から多量の縄文土器が出土している点や、床面レベルに縄文土器片が遺存している点、さらに弥生時代の住居より古い点などから判断した。

遺物は床面レベルで出土したが、既述したように確認時点が床面付近であったという事情から確実に伴う遺物で且つ図示できるものは僅かであった。共に深鉢片である。１は口唇部に刻み目を巡らし、口縁部に変形爪形文を施す口縁部片、２は貝殻文の胴部片である。



第7図　I 416 住居出土遺物



第８図　Ｉ188A·B 住居出土遺物

第９図　Ｉ188A·B・Ｉ325 住居出土遺物

Ｉ188A・B（第８・９・30図、図版32・33）

Ｉ188A・Bは弥生時代の住居ながら、縄文土器が多量に出土した（約300片以上）。周辺には縄文住居は報告されておらず、また一帯の遺構を検討した結果でも縄文時代と特定できる遺構は見当たらなかった。それゆえ、該期の遺構ではないが、一括の可能性が高いものとしてここで別途まとめて報告することとした。

１～10は諸磯ｂ式に相当する。１～３・７・42は入組み弧線文・菱形文ないし鋸歯文とでも称すべき（内部円形竹管文）深鉢口縁部片である。４～６・44はいわゆる浮線文土器群であり、４・５は深鉢底部、６・８は同胴部、44は底部である。９は台付土器の底部に相当する。混入物の少ない胎土である。10は竹管による木葉文を施す深鉢胴部片である。11以降は浮島式に相当する。11～13は口縁と平行して沈線が巡る深鉢口縁部片である。14・15は口唇部に刻み目を有する深鉢口縁部片、16は竹管による斜め刺突列の深鉢口

縁部片である。17～27は変形爪形文主体の深鉢口縁部片であり、21・22は口唇部に刻み目、24は一見平行線状ながら竹管交互押引きによるもの、25～27は間に沈線が入るものである。28は口縁部多段の刺突文を巡らすもの、29は内傾する口縁となるもので、口唇部に列点状の押捺、口縁部に平行して条痕状の粗い調整痕を有する。30・31は縄文施文の薄手の鉢口縁部である。32～36・43は貝殻文深鉢胴部片である。43は上部には輪積み痕を利用した文様帯、下部は荒い縦方向の調整痕がみられる。36は２種類の変形爪形文深鉢胴部片、37は変形爪形文と斜線文の深鉢胴部片、38は細かい平行線文の小形鉢体部片、39は竹管による斜め刺突文深鉢胴部片である。40は無節らしき縄文が僅かに確認される薄手の鉢胴部片、41は一旦括れる器形の土器胴部片で、平行線文と矢羽根状の文様が確認される。

4　弥生時代以降の住居跡およびグリッド出土縄文土器

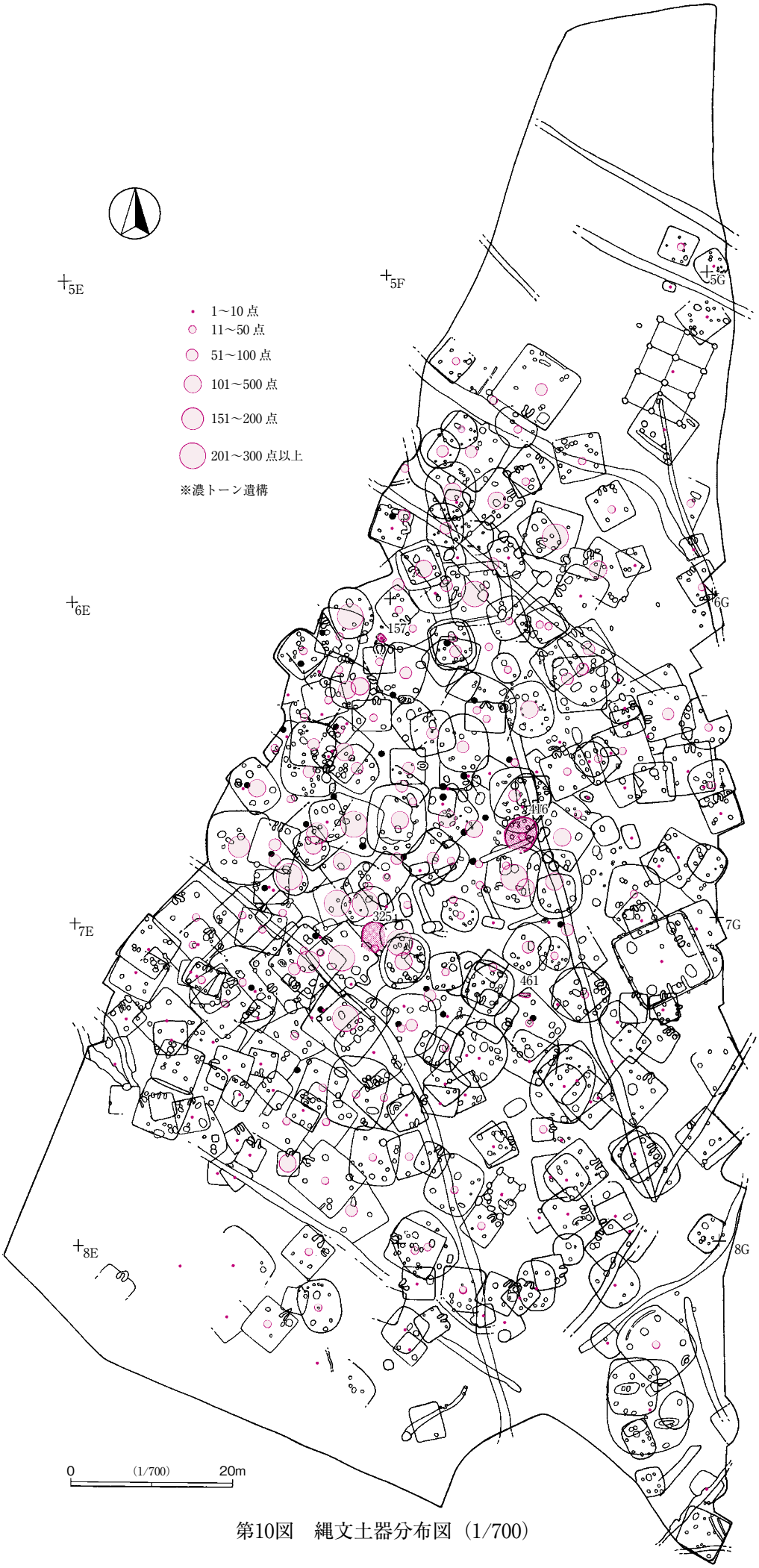
（１）早期縄文土器（第11図、図版34）

１・２は撚糸文系土器群である。１は口唇部が外傾する深鉢形尖底土器口縁部片であり、口唇部と外面に縄文が施される。２は撚糸文施文の深鉢形尖底土器胴部片である。３は尖底土器の底部である。４～８は沈線文系土器群に相当し、条線や太い沈線の施される深鉢形尖底土器胴部片である。９～27は条痕文系土器群である。何れも、胎土に繊維を含み、器面に粗い貝殻条痕を施すという特徴のある深鉢形土器片である。口縁部には隆帯や刺突文、また沈線による文様帯を有するものも多い。

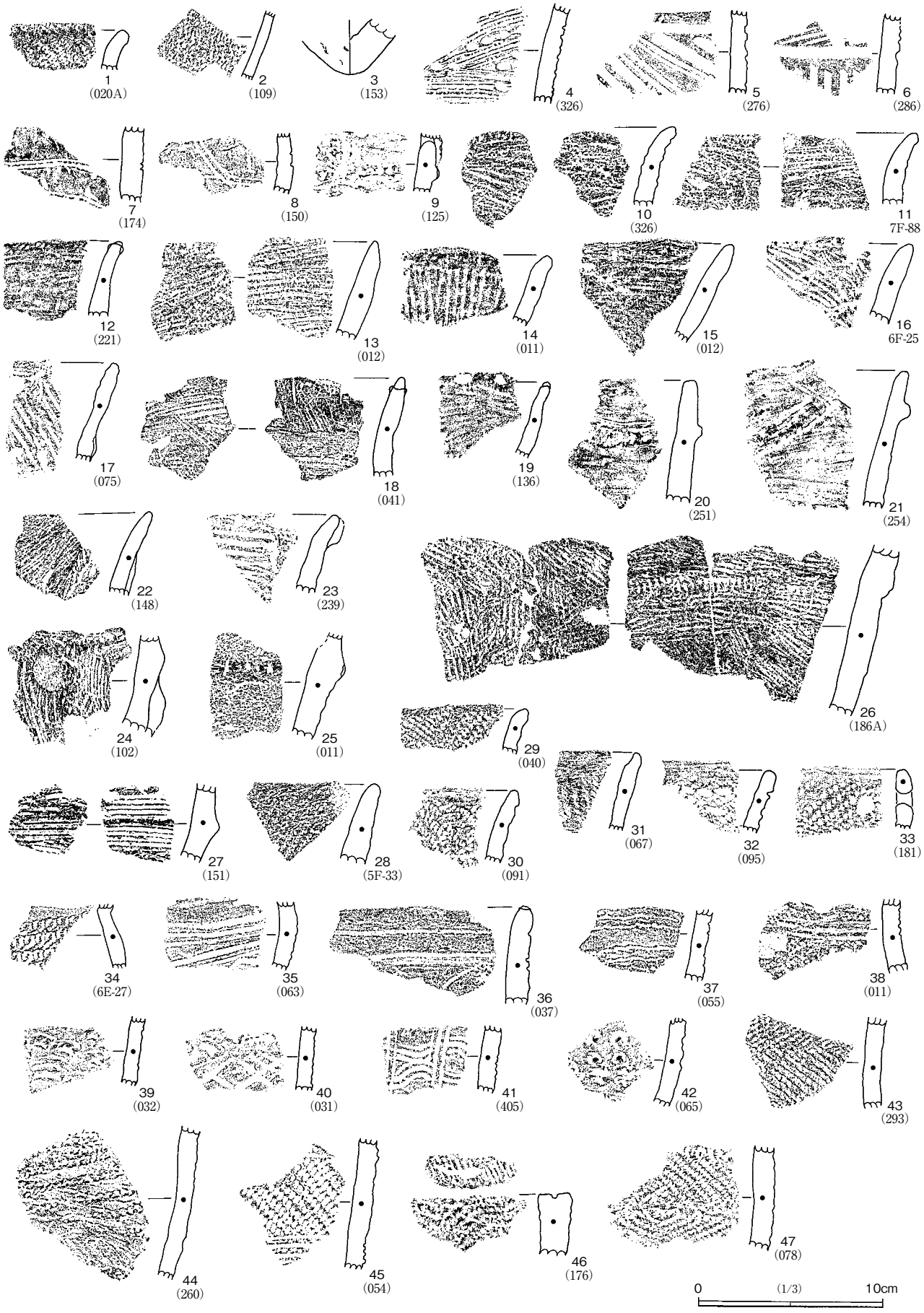
（２）前期縄文土器（第11～20図、図版34～43）

28～47は前期中葉、黒浜式土器に相当する土器である。胎土に繊維を含む深鉢形土器片で、28～33、36・46が口縁部、それ以外が胴部片に相当する。口縁部片は36を除き縄文を施文する。竹管による平行線やスタンプ文、肋骨文、格子目文、撚糸文らしき文様を有するものは口縁部から胴部にかけての部位と思われる。なお、関山式期に顕著なループ文（34）や、羽状縄文を施す胴部破片（43・47）もみられる。

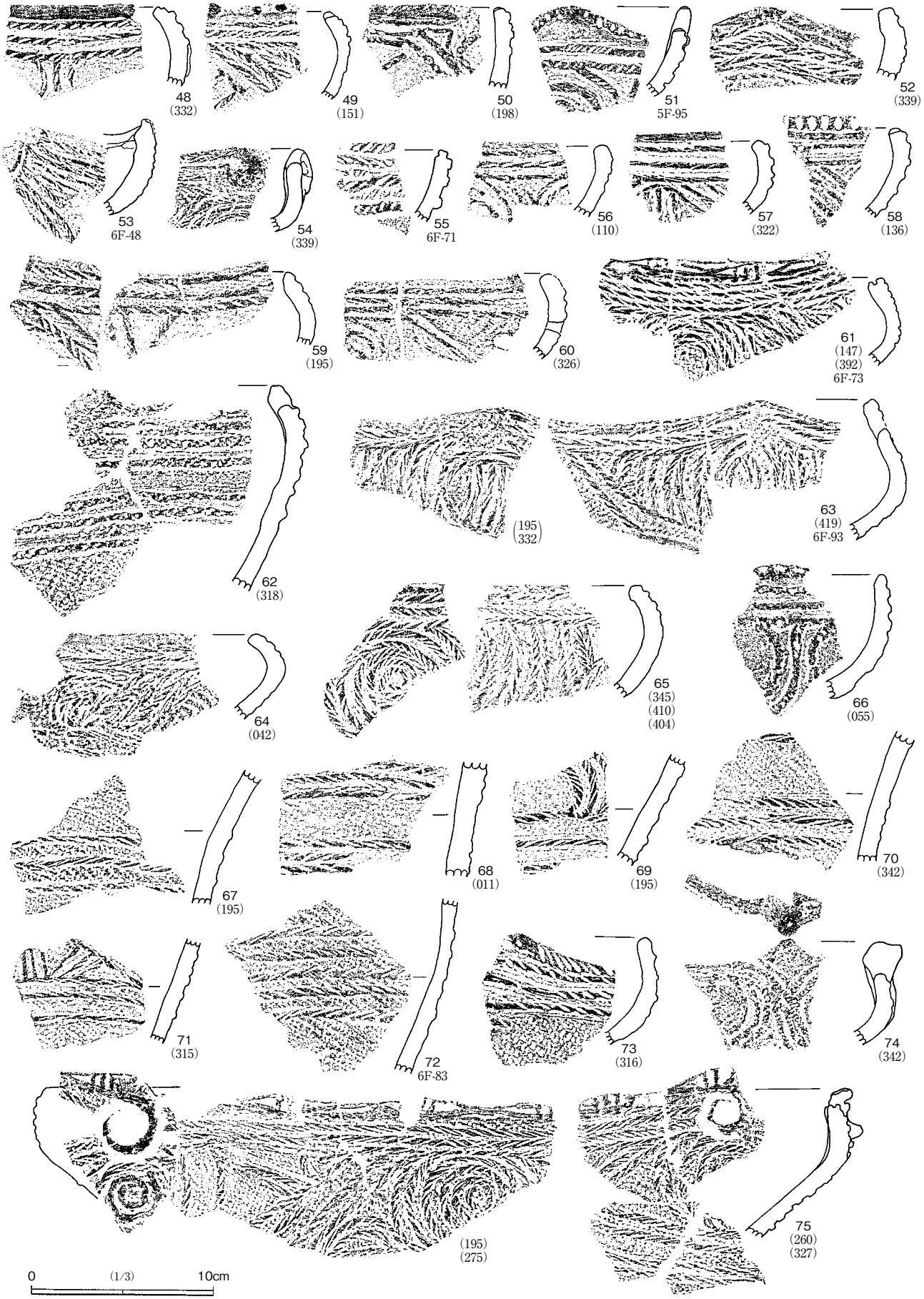
48～75・155～158は諸磯ｂ式土器のいわゆる浮線文土器群である。この内、48～66・73～75は口縁部片、67～72は胴部片である。量的には後にふれる沈線文土器群と共にこの期の主流をなすものである。形をなすものがほとんどなく、僅かに75の深鉢形土器をあげるにすぎない。この期の土器には器形も大小の深鉢、鉢、円筒形、淺鉢形があるが、小片が多く具体的な器形の比定は困難である。口縁部は波状と平縁の２者があり、更に内傾するものと外反するものがあり、前者が多くを占める。浮線文の構成は渦巻ないし蕨手文の上下を数条の浮線で区画するもので、口唇部には工具刺突や押捺、菱形の区画を構成するものがある。155～158は底部である。134・135・140・141・145～147・149は爪形文のみられる土器（一部は円形竹管施文）、150は細い平行また波状の沈線に縦位の刺突列による区画が施され、下位は縄文のみられる土器である。76～116は諸磯ｂ式の沈線文土器であるが、一部には浮島式との分離が不明瞭なものも含んでおり、主に口縁部片を図示した。浮線文と同様の器形が考えられるが、92・110のように明らかに小形のもの以外は具体的な比定は困難である。口縁部は同様に波状と平縁があり、内傾と外傾があるのも同じだが、縄文地に沈線施文のものや、平行沈線のみのタイプは外反する例が多いようである。沈線文の構成は平行沈線を施すもの、さらに間に鋸歯状平行線が入るもの、渦巻ないし同心円文、木葉文、波状文等がみられ多様である。波状口縁の突起部は肥厚させて刺突列や隆帯を貼り付けるものなど多様である。平縁口縁も刺突また押捺が巡る例がある。



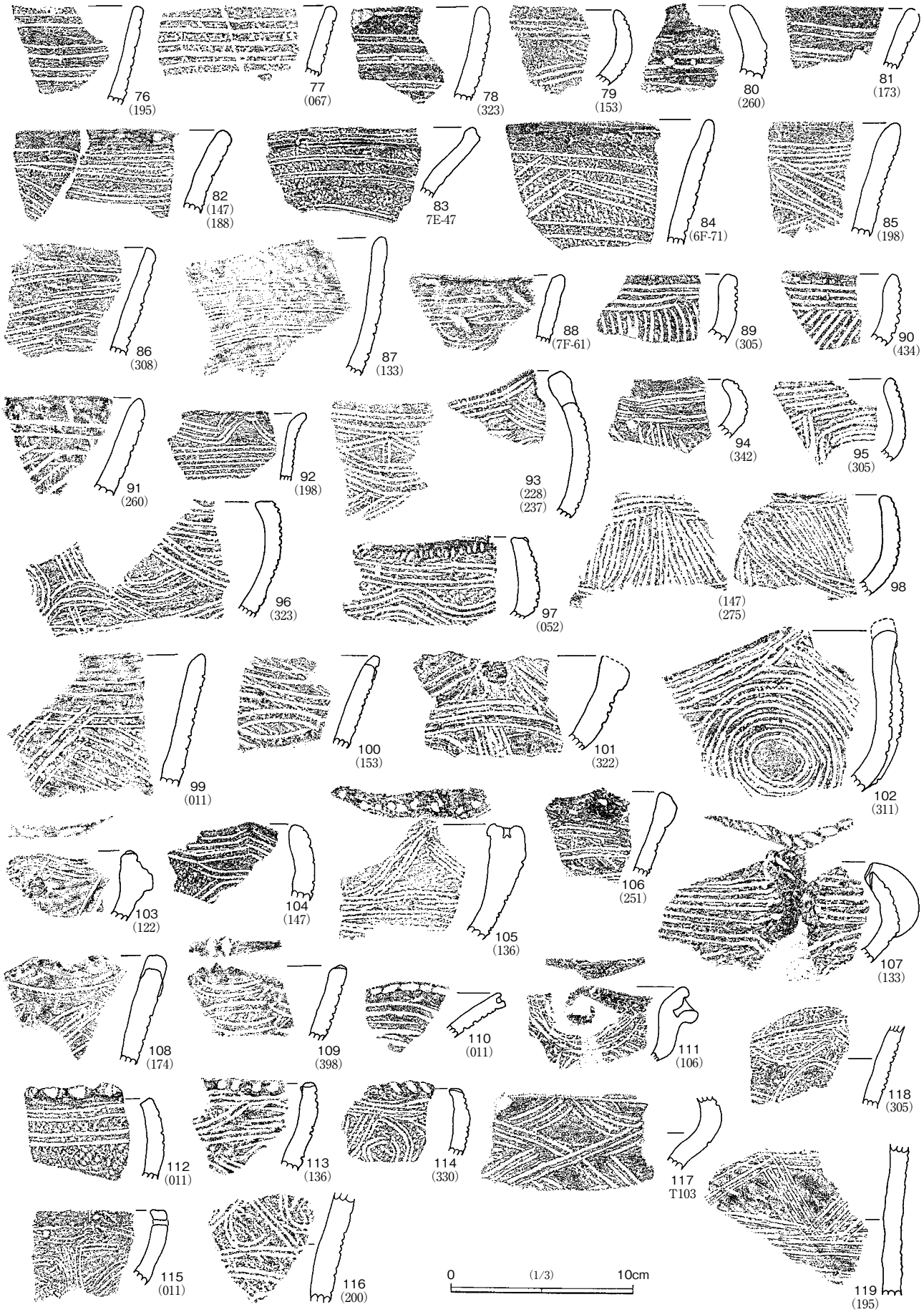
第10図　縄文土器分布図（1/700）



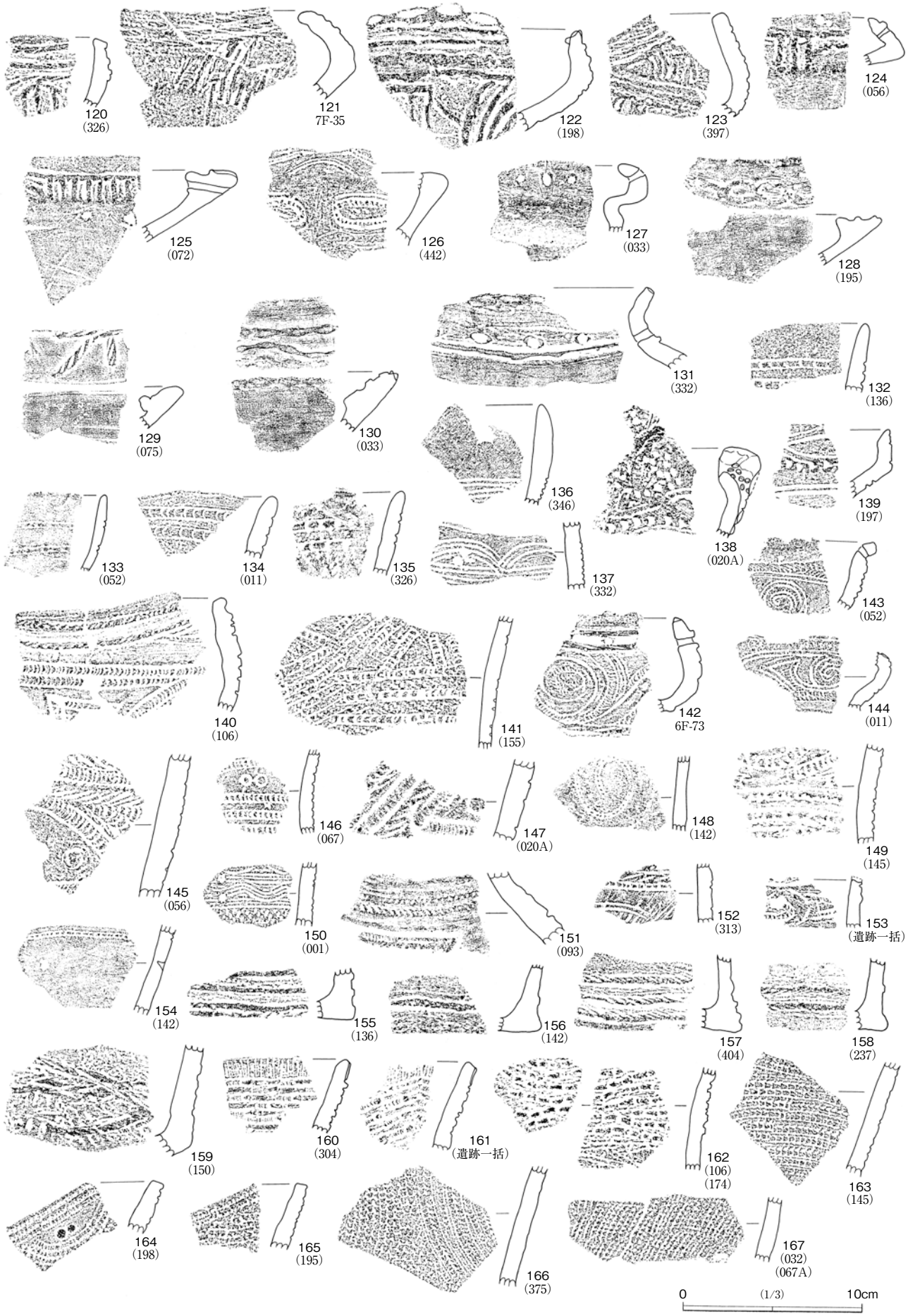
第11図　早期・前期縄文土器



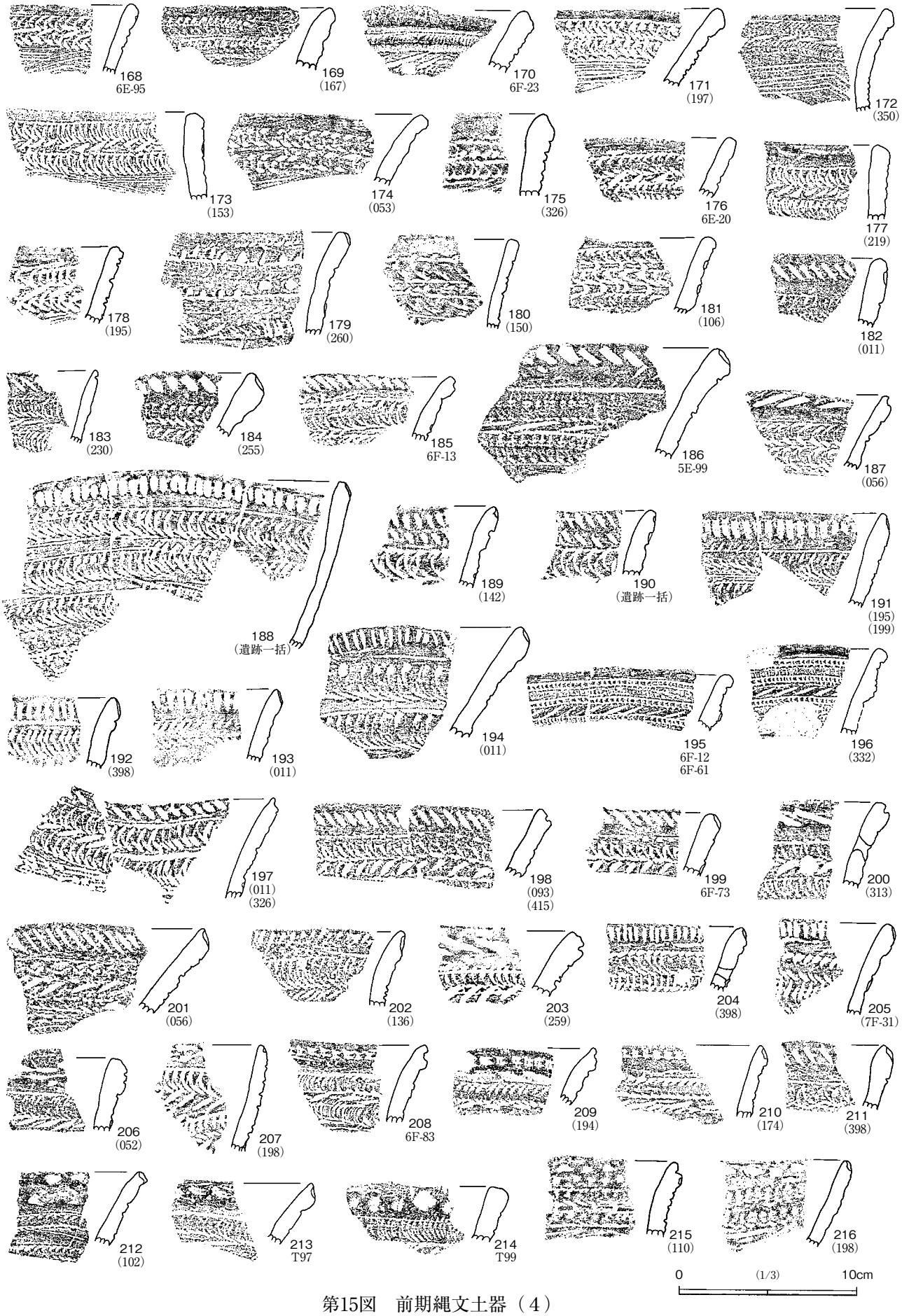
第12図　前期縄文土器（1）



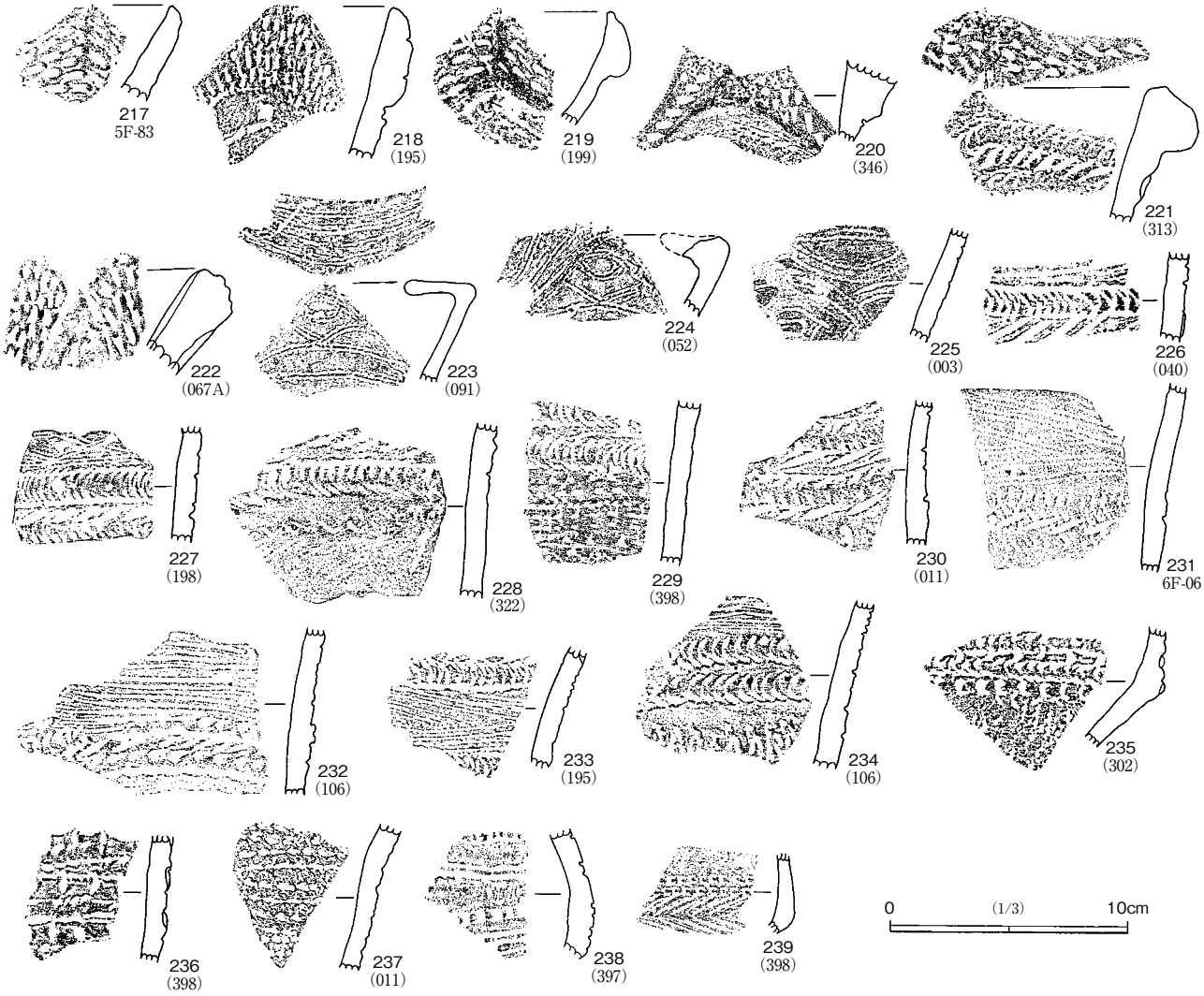
第13図　前期縄文土器（２）



第14図　前期縄文土器（3）



第15図　前期縄文土器（4）



第16図　前期縄文土器（５）

120～159は諸磯ｂ式ないしそれに伴う客体的な土器群を一括した。120～131・159は口縁が内傾ないし屈曲する大小の浅鉢形土器であり、各種浮線文、貫通孔列、点列などで口縁部を装飾する。151・159も恐らくこのグループであろうが、前者は太い沈線による区画がみられ、後者は底部に相当する。132、136・137は壺に近い小形の器形と思われ、器面は研磨され、胎土は精良である。平行ないし弧線、また、爪形の施文も丁寧である。138・139は爪形を点列ないし集合的に施したもの、133・148・154は平行また渦巻状の爪形文のみられる薄手の土器（152もこの仲間か)、142～144・153は波状の口唇部と渦巻ないし三叉状入組み文（間は細かい磨消し手法の爪形文）で、小形の鉢形になろうか。223～225は袋状容器ともいうべき土器の口縁部また胴部片である。竹管による平行線ないし押引きによる丁寧な曲線文を施し、精良な胎土を用い、薄手に仕上げた土器である。

160～167は諸磯ｃ（～十三菩提式）に相当する一群である。概して薄手で、褐色を呈している。細い竹管押引きを密に施すもの、間隔を開けるもの、弧を描くものと様々ながら、器面全体に施文するという特徴がある。なお、縦位に浅い条線が巡る口縁部破片（160・161）は興津式であろうか。

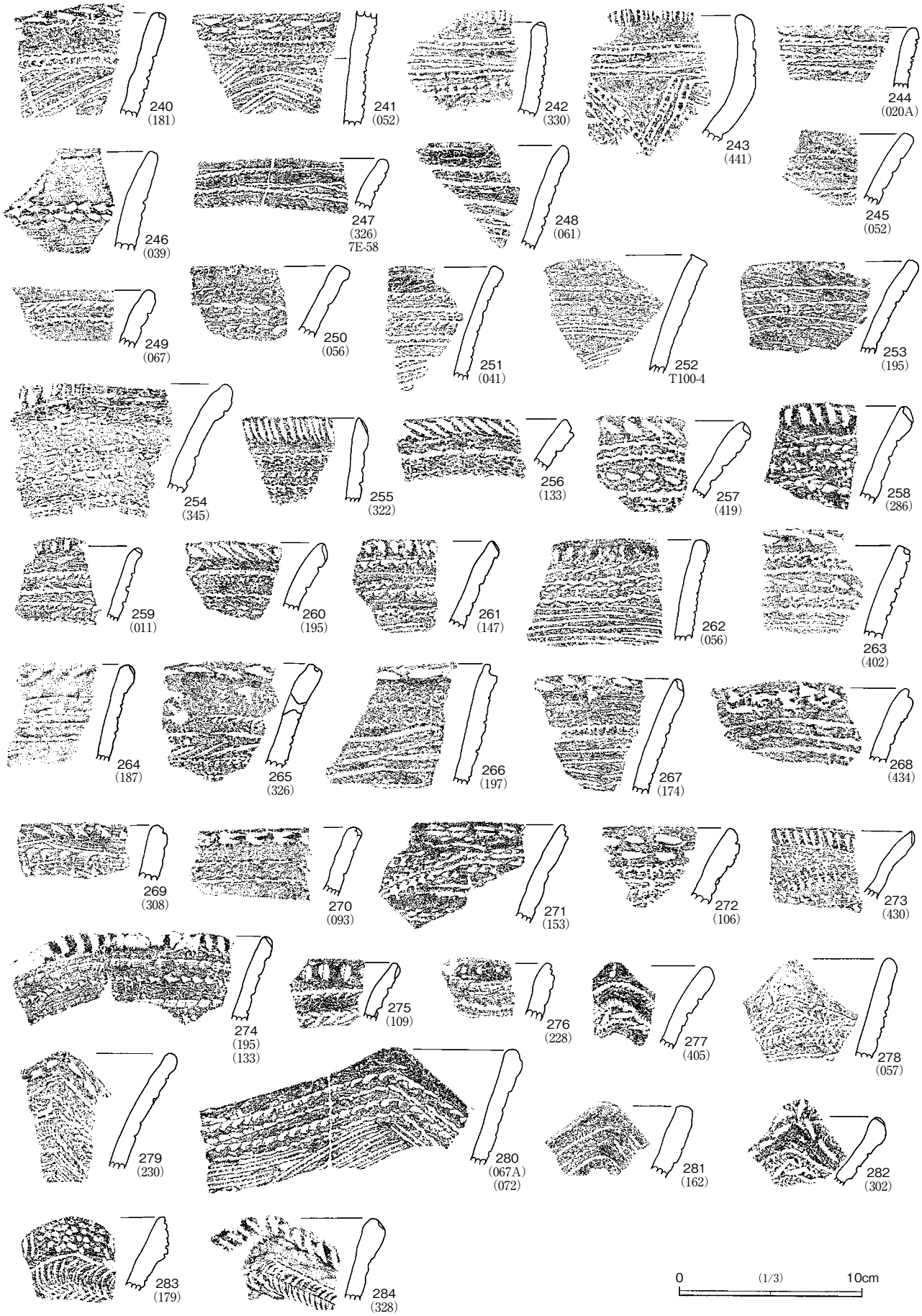
168～222, 226～284は浮島式土器に相当する一群である。浮島式土器は波状ないし平縁の大小の深鉢形

土器が主であり、その文様構成は大きく変形爪形文、波状貝殻文、三角文に大別される。まず変形爪形文から概説する。168～224は口縁部である。168～181は口縁外面に数条の変形爪形文を施すもので、そのあり方は平行沈線に重ねて施文し、通常その間に斜めの列点文を伴う。爪形文は半截竹管を斜め上から交互に支点を代え密に施すものと寝かせてロッキング状に施文するもの（174～176・179）の２者があり、後者は先端の形状とも併せ幾種類かのタイプがある。182～194・197～205・211は口唇部に押捺状の刻み目が巡るもので、斜めに施す例が多いが縦位とするものもある（194・204・205）。爪形文自体のタイプは既述したとおりである。195・196は口唇部に平行する狭い爪形文の間に斜めの刻み目が巡るものである。諸磯ａ式か、浮島Ⅰａ式とも思われる。206～210・212～216は口唇部に工具による刺突ないし押捺が巡るもので、爪形文自体のあり方は頭書に既述したとおりである。217～222・283・284は厚手の大波状口縁深鉢形土器口縁部片である。口唇部に刺突を密に施すもので、変形爪形文が伴う例（313・283・284）もある。226～239は変形爪形文の胴部片であるが、複合要素として、撚糸文を施す例（228）、ロッキング手法による有節平行線文の例（229・237）、条線のみられる例（231～234）、貝殻波状文の例（234・235）、平行沈線上に竹管押捺を施す例（235・236）などがみられる。この他、この期に属すると思われる土器２点（竹管文に平行線文や羽状文を施す例）を掲載した。240～280は崩れた爪形文と有節平行線文ないしロッキング手法による列点文を施す口縁部土器片を一括した。240～244は崩れた爪形文を施文する一群であるが、240・241は口唇部に列点状の押捺を施しその下位には斜線の入るもの、242・243は口唇部に縦位の刻み目の巡るもの、244は平縁のものである。また、246は列点状の爪形文下部に条線の入るものである。247～253は無文・平縁の口縁部に有節平行線文ないし条線との組み合わせがみられる一群である。254～262・273・274は口唇部に縦位ないし斜めの刻み目また押捺が巡り、口縁部外面に有節平行線文を施した一群ながら、258・261・273・274のように列点ないし三角文に近いものもある。また、262では下位に条線がみられる。265～272は口唇部に横位の刺突ないし押捺が巡り、口縁部外面に有節平行線文ないし変形爪形文を施す一群である。刺突文は半截竹管の内側を用いた三角文タイプ（268）、嘴状タイプ（270）、２列平行タイプ等と様々である。275・276は口唇部に列点が巡る例である。277～284は大波状口縁をなす一群である。口唇部無文のものと列点が巡るものがある。

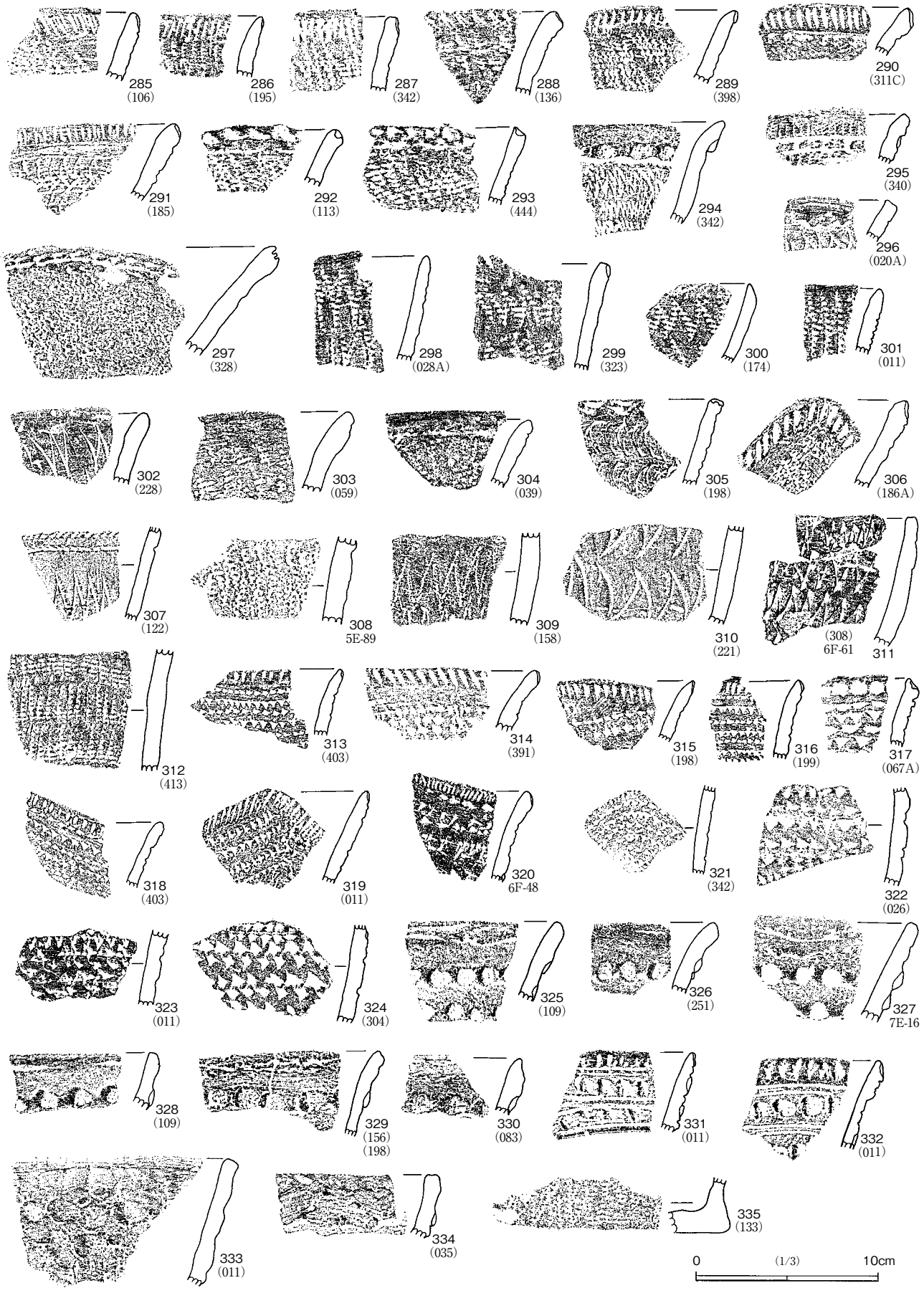
285～312は波状貝殻文施文の土器群である。この内、285～305･307が口縁部、それ以下が胴部片である。285～291は口唇部に縦位の刺突ないし押捺が巡る一群で、貝殻はこの期に特有のアナダラ属とハマグリがみられる。292・293は口唇部、294は複合口縁下端にそれぞれ刺突が巡る。295は貝殻文の上に爪形文を施したもの、296・298～304は貝殻文のみのもの、297は口唇部に半截竹管の内側による刺突が巡るもの、307は波状口縁口唇部に縦位の押捺が巡るものである。306・308～312は胴部の貝殻文土器片であり、306は変形爪形文と共存する例である。335は波状貝殻文土器の底部片である。

313～324は三角文施文の土器群である。この内、313～320が口縁部、321以下が胴部片である。口縁部片は口唇部に縦位の押捺ないし刻み目（317は大きな点列状）が巡り、三角文は変形爪形文と分離し難いもの（314）もある。

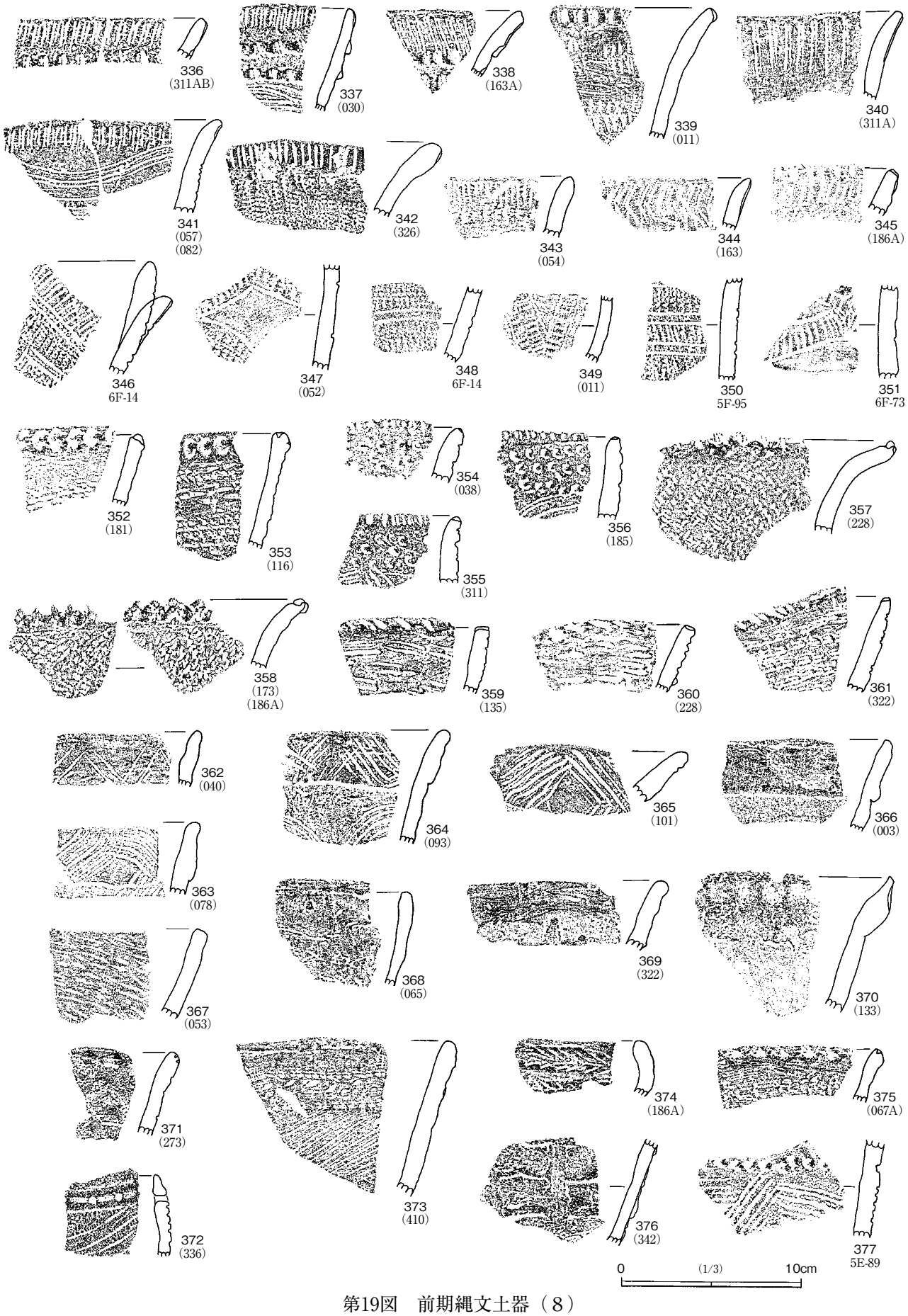
325～333は口縁部に多段の押捺を点列するもので、口唇部に撚糸らしき痕跡のみられるもの（329・332）、口唇部に縦位の押捺を加え、点列の間に平行沈線のみられるもの（330・331）、段や列の不明瞭なもの（333）などがある。なお、334は平縁の口縁部片であり、恐らく類似するものとしてこれら一群の末尾に加えた。



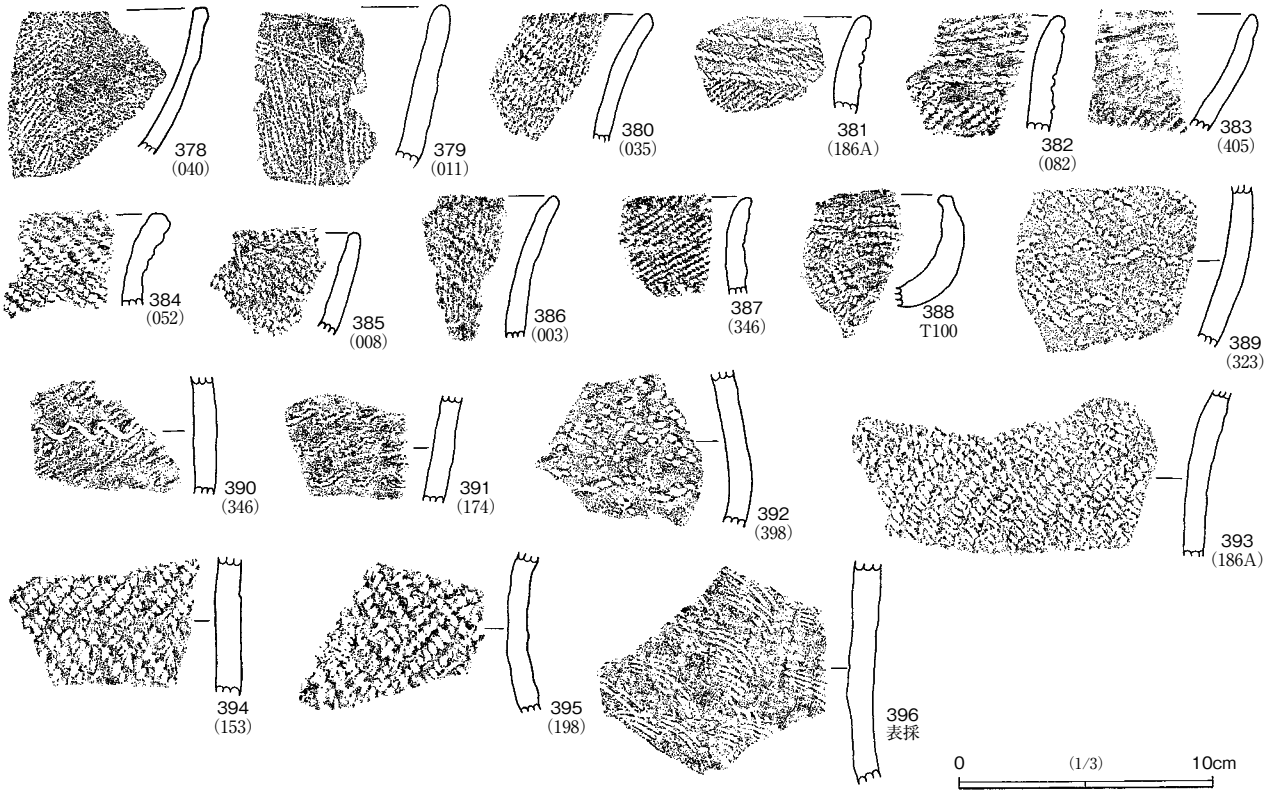
第17図　前期縄文土器（6）



第18図　前期縄文土器（７）



第19図　前期縄文土器（8）

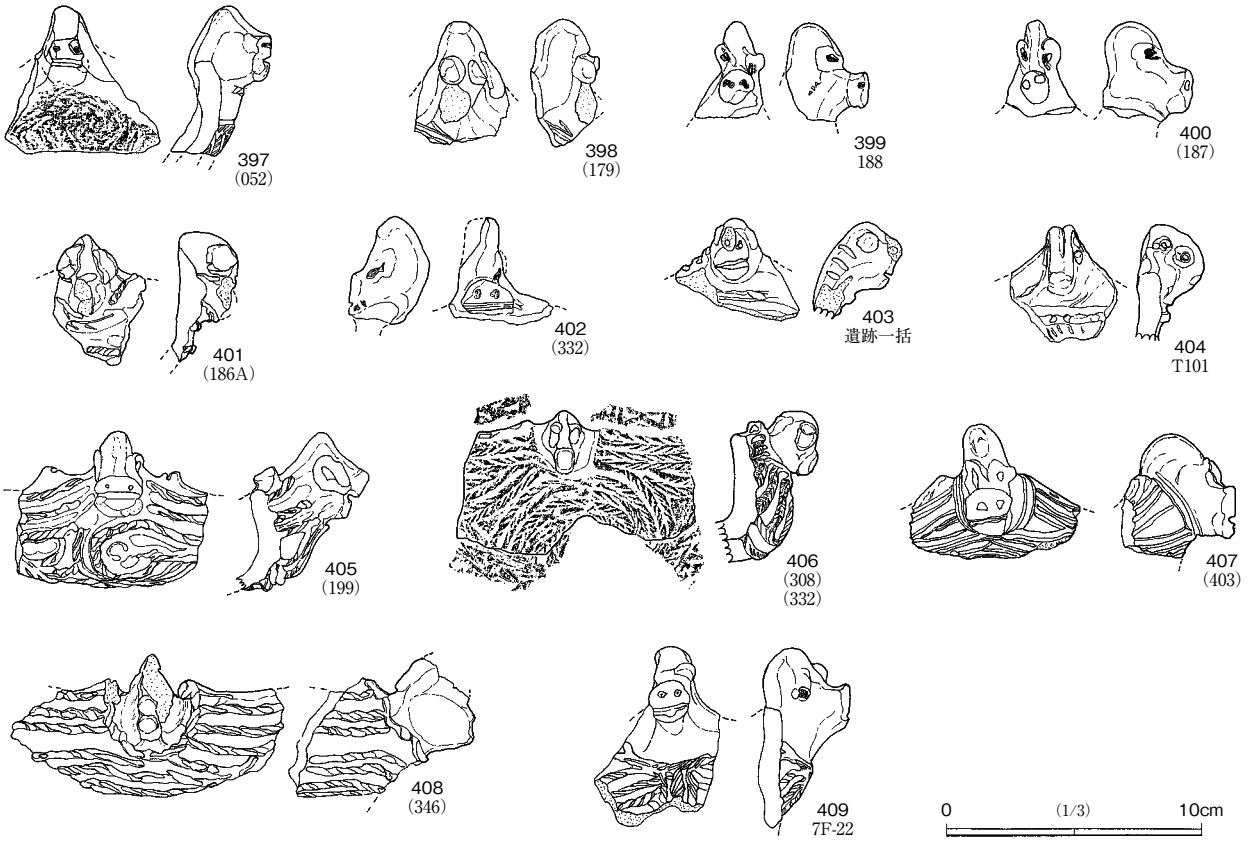


第20図　前期縄文土器（９）

336～377は浮島式終末ないし興津式に相当する一群である。この内、336～346・352～375は口縁部、それ以外は胴部片である。336～338、340～343は口縁部に縦位の密な条線を施すもので、その下の多段部に点列押捺のみられるもの（336～338）、波状文のみられるもの（341）、貝殻文のみられるもの（342・343）などがある。なお、339は条線というより押捺であり、292や293の仲間ともいえるが、こちらに収めておく。344・345も縦位の条線ではあるが、羽状をなすものかもしれない。また、345には口唇部に刻み状の押捺がみられる。

346～351は平行線文と貝殻文、あるいは貝殻文内の菱形内側を磨り消したもので、346は波状の口縁部片、347以降は胴部片である。352～356・377はC字型竹管文ともいうべき文様のみられる一群である。口唇部のみ施文し口縁部には崩れた有節平行線文のもの（352・353）、逆に口縁部に施文し、口唇部には刻み目が巡るもの（354～355）などがある。377は胴部のあり方（横・斜位条線）を知る資料である。357・358は口唇部背面から半截竹管を押捺したもので、外面は羽状縄文を施す。359～361は口唇部に斜め刻み目状の押捺を加え、口縁部には竹管押引きかと思われる嘴状の文様が並列する。なお、361は波状口縁かと思われる。362～371は無文ないし多条の菱形文のみられる平縁ないし有段口縁のもので、367は竹管押引きによる平行沈線文である。372は波状口縁の沈線内に２点並列の穿孔とその下に斜め平行線文のみられるもので、枠内には貝殻文らしき文様が確認される。また、373は口縁無文部の下に有節平行線文と斜線文がみられるもの、374は内傾する口縁部に羽状の条線を施すもの、375は口唇部に軽い刺突と、ハケ目状の調整のみられる器面に貝殻文を施すもの、376は文様的に残した輪積み痕を縦に区画したものである。

378～396は縄文ないし撚糸文施文のみの土器片を一括した。この内、378～388は口縁部、389以下が胴部片である。378・379は撚糸文、380・384～388は縄文を施文するもので、概して薄手かつ多少の傾きを有するものが多いが、388は一旦括れて内傾する。381～383は数条の撚糸側面圧痕とその下位に縄文帯を



第21図　前期獣面把手

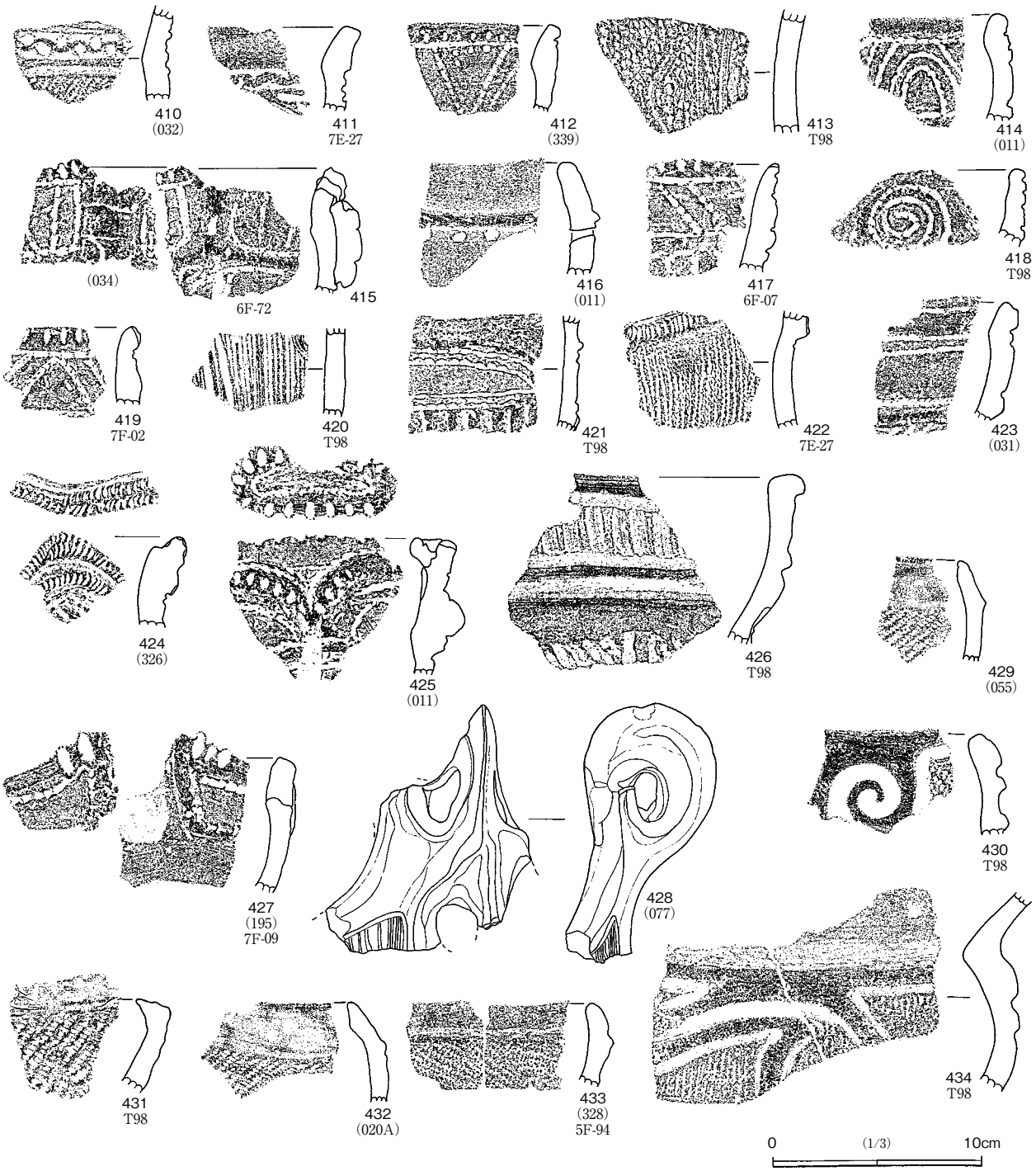
施したもの、389～392は撚糸文上に横位の結節文を１条ないし数条施したもの、393～395は羽状縄文のみのもの、396は貝殻文の一種であろう。

（３）前期獣面把手（第21図、図版49）

諸磯ｂ式土器に伴う獣面把手を一括した。18点の内、遺存度の高い13点を図示したが、獣面の可能性の低いもの１点（408）も載せている。口縁部まで窺える資料からすると８点中７点が浮線文の土器であり、残り１点が沈線文となる。割合からすれば浮線文の土器に共伴する確率が高いと言うことが出来る。その形状からあえて二方向で分類すると、鼻先端部が平滑のもの（397・399・400・402・403・405・407・409）とそれ以外（404・406）、眼を粘土紐ないしは刺突で表現したもの（399・400・402・404・405・407・409）と半円状の高まりとしたもの（398・401・403・406）に大別できる。

（４）中期縄文土器（第22図・図版44）

410以下は縄文中期の土器片である。既述したとおり、該期の主体は草刈貝塚にあり、そこでは阿玉台期から加曽利EⅢ期までの環状集落が形成されている。当区の出土土器もそれに対応するものといえるが、量的には阿玉台式土器が主体を占めるようである。ここでは何れにせよ遺構に伴うものではなく、また、草刈貝塚に該当する報告書に於いて大量の土器が報告されていることから、大まかな型式比定のみに留めたい。410～415,417～423,425～428は阿玉台式土器、429～434は加曽利EⅡ式～同Ⅲ式に比定されよう。

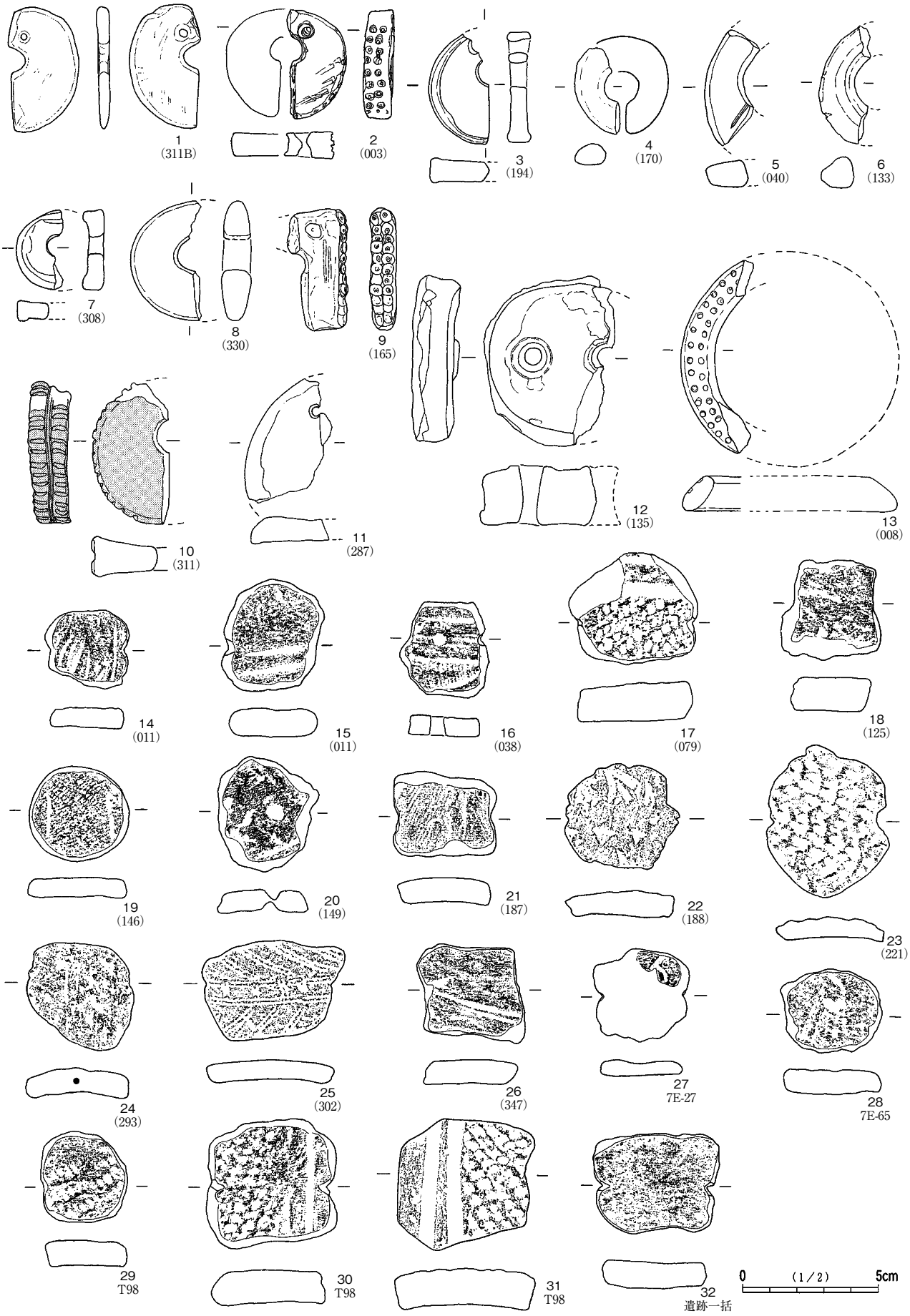


第22図　中期縄文土器

5　縄文時代の石・土製品

（1）耳飾他（第23図、図版49）

1～4・7～10は玦状耳飾である。この内1は翡翠製の玦状耳飾である。その他は土製品で、2・3・10は円孔が多少端寄り、また、4・7・8は中央に位置するものである。9は方形の玦状耳飾半個体で、側面に径2㎜～3㎜前後の粘土粒（中央刺突）を縦に2列貼り付けている。11・12は円孔を有する土製品であり、孔は11が端に近いもの、一方12は中央に2個並列するものである。5・6は円環状土製品、13は土製の腕輪である。文様は側面に工具によるスタンプ文（2・13）と、縦横分割の刻み目文（10）がみられる。



第23図　耳飾・玦状耳飾・土器片錘

（３）土器片錘（第23図、図版49）

14～32は土器片錘である。この内14～28までが前期、29以降が中期に該当する。16の孔は土器そのものに付属するが、20の場合は後世の所産で、貫通していない。

６　縄文時代の石器

土器と同様、その総てが弥生時代以降の住居跡などから出土したものであった。その総てをCD内表にて概要を記しているが、図示したものはその一部である。なお、磨石や敲石は弥生時代以降に所属する可能性もないではないが、その形態や出土状況（覆土内）から判断した。

（１）石鏃（第24・25図、図版45・46）

１～41は石鏃、44～47は石鏃未製品ないし素材である。非掲載を含めた全体の内訳は完形ないし一部破損品が41点、未製品ないし素材が４点、破損品が19点である。この内、破損品を除く45点を図示した。石鏃は平基と凹基があり、その割合は１：３である。凹基形は概して抉り浅くスペード形を呈していることなど、当区の時代に沿った内容であろう。石質は黒曜石が33％、チャートが25％、頁岩が25％を占め、次いで安山岩、ホルンフェルス等である。

（２）石錐（第24図、図版45）

42は黒曜石製、43はホルンフェルス製の石錐である。何れも縦長剥片を素材としたものながら、43については単に二次加工剥片とすべきかもしれない。

（３）石篦状石器（第25図、図版46）

48はチャート製の石篦状石器である。基部と右側縁に調整痕がみられる。形態的にはいわゆる段間形石器に類似する。

（４）楔形石器（第25・26図、図版46）

49～59は楔形石器である。全体の内訳は、完形が49点、破損品が６点、計55点であるが、この内の11点を図示した。なお、52は自然面を残し、掻器の可能性もある。石質はチャートが約52％を占め、次に安山岩（18％）、頁岩（13％）、ホルンフェルス（９％）、黒曜石（５％）ほかである。

（５）二次加工剥片（第26図、図版46）

60～64は二次加工剥片である。全体の内訳は完形が30点、破損品が６点、計36点であるが、この内の５点を図示した。なお、62・64には使用痕（矢印範囲）が認められた。石質は黒曜石が39％、チャートが31％を占め、次いで、頁岩（14％）、メノウ・玉髄ほかである。

（６）石核ないし掻器（第26図、図版46）

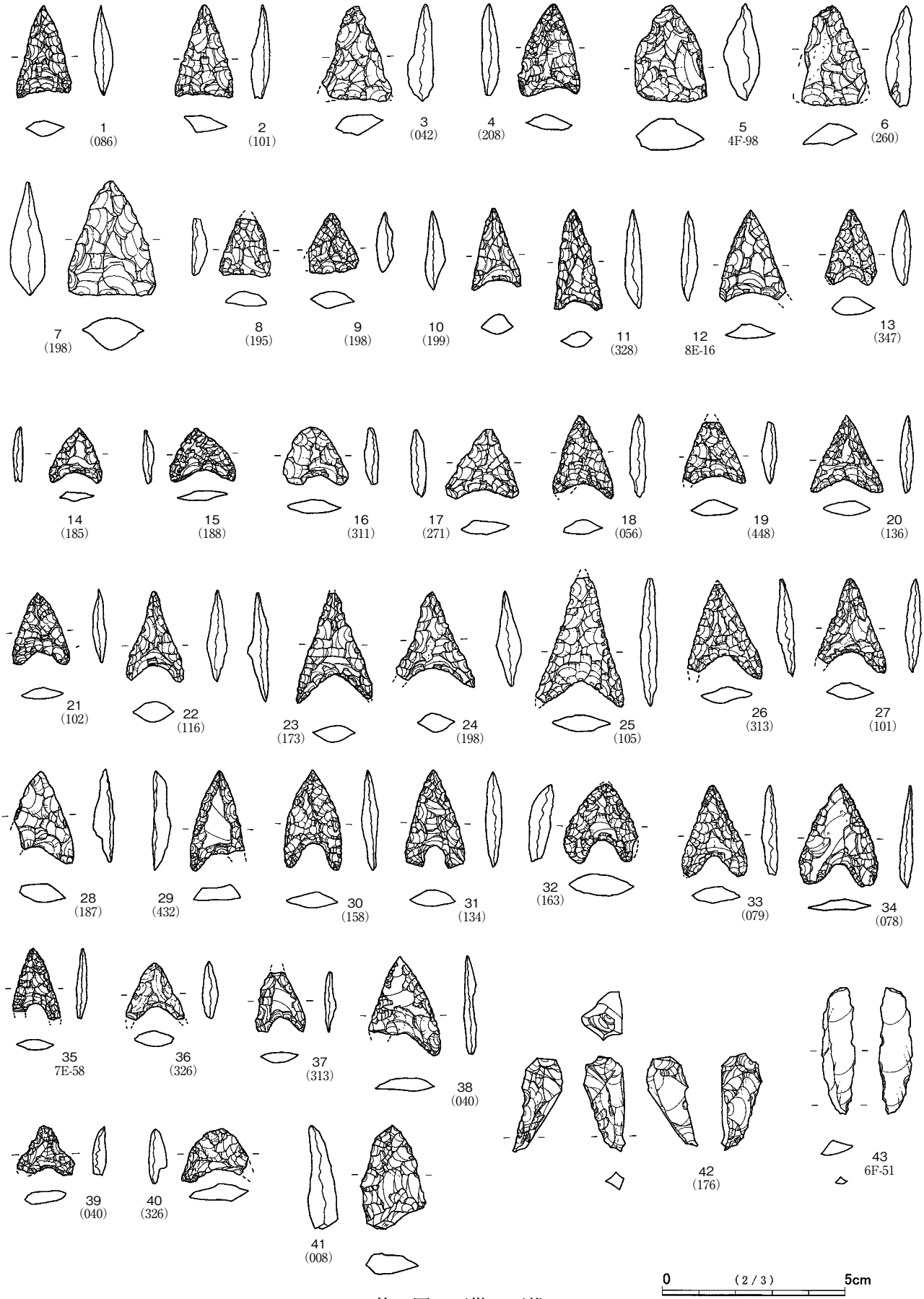
65はホルンフェルスの自然石の一端を打ち欠き、調整剥離を加えている。石核ないし掻器と判断したが、礫石斧の可能性もあろう。

（７）打製石斧（第26・27図、図版46・47）

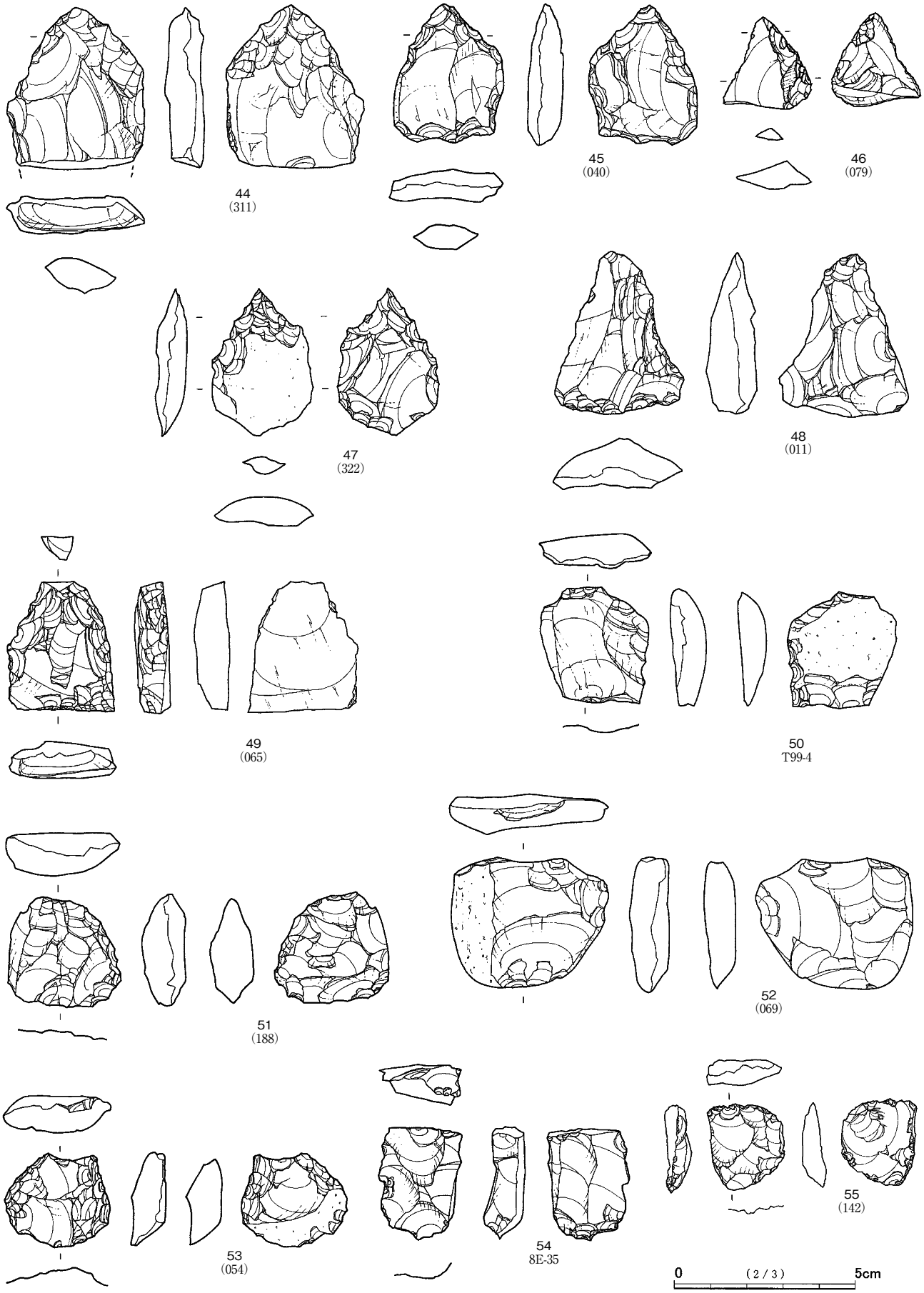
66～72は打製石斧である。破片１点を除きその総てを図示した。８点の内、完形が６点、先端部のみが２点である。この内､67については掻器の可能性もある。石質はホルンフェルスが５点、粘板岩、閃緑岩、安山岩各１点である。

（８）磨製石斧（第27図、図版47）

73・74はいわゆる定角式の磨製石斧である。73は刃部のみの破損品、74は完形である。石質は前者が蛇

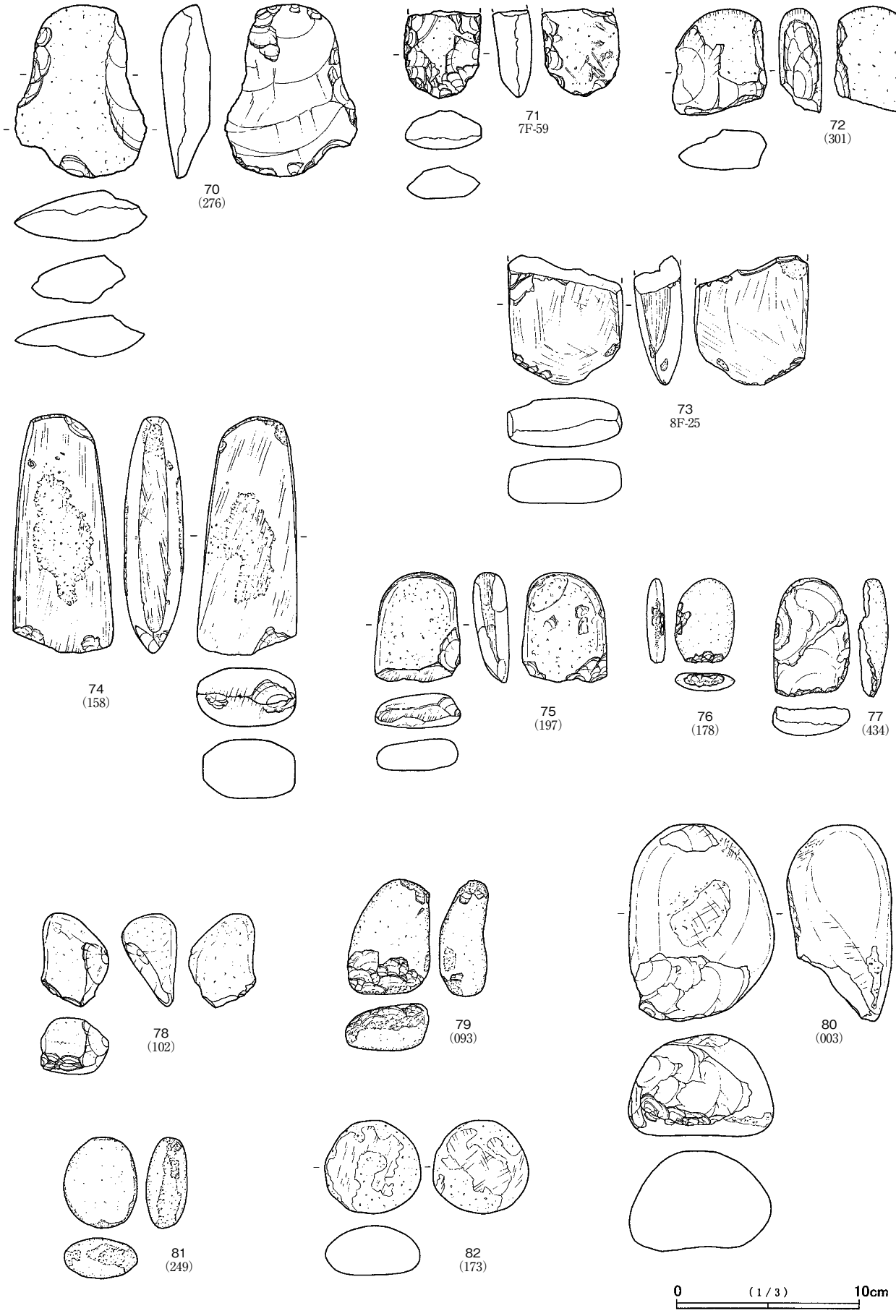

1
(086)
2
(101)
3
(042)
4
(208)
5
4F-98
6
(260)
7
(198)
8
(195)
9
(198)
10
(199)
11
(328)
12
8E-16
13
(347)
14
(185)
15
(188)
16
(311)
17
(271)
18
(056)
19
(448)
20
(136)
21
(102)
22
(116)
23
(173)
24
(198)
25
(105)
26
(313)
27
(101)
28
(187)
29
(432)
30
(158)
31
(134)
32
(163)
33
(079)
34
(078)
35
7E-58
36
(326)
37
(313)
38
(040)
39
(040)
40
(326)
41
(008)
42
(176)
43
6F-51
0
(2/3)
5cm

第24図　石鏃・石錐

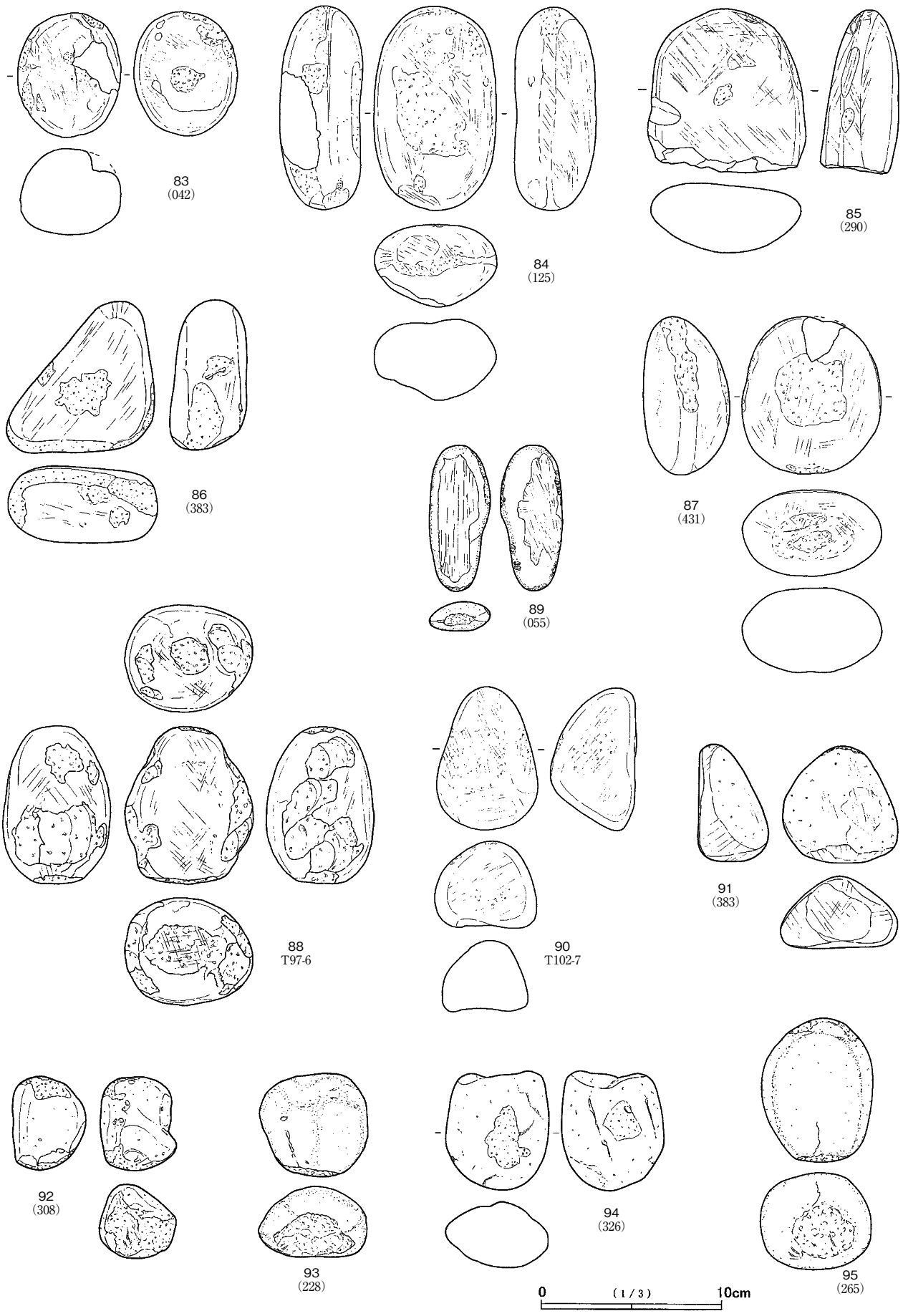


第25図　石鏃未製品・石篦・楔形石器

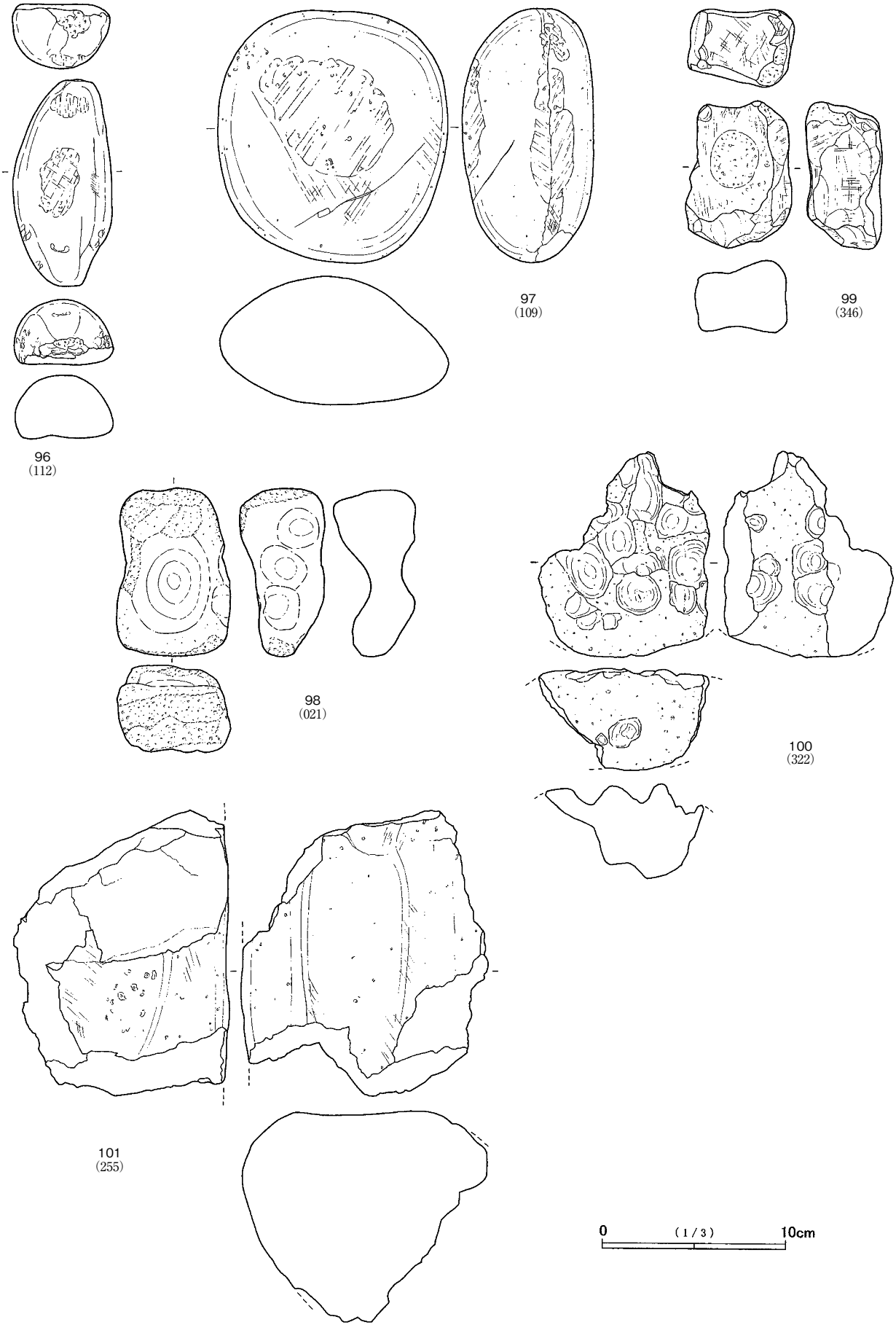
第26図　楔形石器・二次加工剥片・石核・打製石斧等



第27図　打製石斧・磨製石斧・礫石斧・磨石・敲石等


83
(042)
84
(125)
85
(290)
86
(383)
87
(431)
89
(055)
88
T97-6
90
T102-7
91
(383)
92
(308)
93
(228)
94
(326)
95
(265)
0
(1/3)
10cm

第28図　磨石・敲石



第29図　敲石・石皿・凹石等

紋岩、後者が砂岩である。

（９）礫石斧（第27図、図版47）

75～80は礫石斧であり、その総てを図示した。何れも自然石の一端を打ち欠き、刃部を作り出し多少の調整を加えるもので､その大きさ･形態共に区々である。石質はホルンフェルス２点、粘板岩、砂岩､チャート、凝灰岩各１点である。

（10）磨石（第27・28図、図版47）

81～91は磨石である。全体の内訳は完形が14点、破損品が26点、計40点であるが、この内の完形品から11点を図示した。何れも自然の円礫、または凹凸の少ない石を選んで表裏或いは側縁を使用面としたものである。なお、敲石としても通常使われている場合が多く、84・86・87・88などはその例である。石質は砂岩が全体の約半数を占めており、その性格とも合致するが、次いで流紋岩・安山岩各20％で残りは様々である。

（11）敲石（第28・29図、図版47・48）

92～97は敲石である。全体の内訳は完形が６点、破損品が４点、計10点であるが、この内の完形品から６点を図示した。磨石と同様、自然の円礫を使用したものが主体ながら、96のように細長い半截石の両端を使用した例もみられる。また、97は磨石との兼用である。石質は粘板岩が多く、砂岩、流紋岩等がみられる。

（12）凹石（第29図、図版48）

98～100は凹石である。98は表裏また側面を使用しているが、99・100は表裏のみである。石質は98・99が砂岩、100が安山岩（溶岩）である。

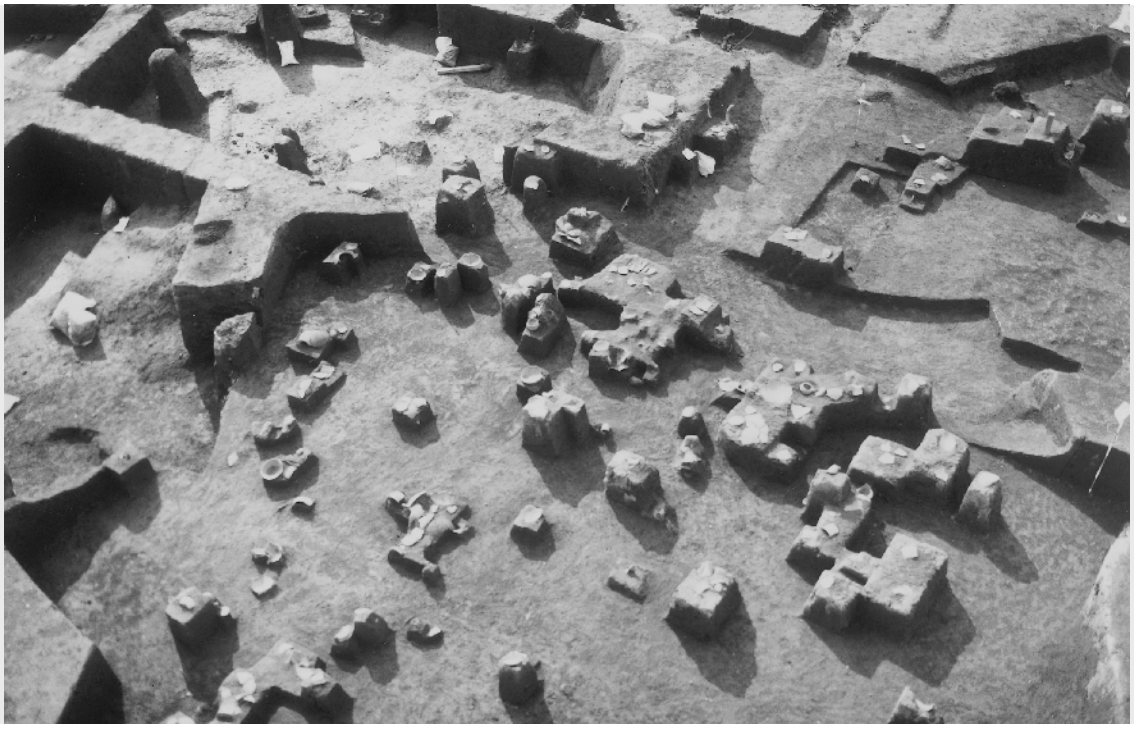
（13）石皿（第29図、図版48）

101は凹面があることから石皿としたが、破損部が多く推測にすぎない。古墳中期の住居（Ｉ255・非掲載）出土であり、台石の可能性もあろう。熱を受けており、石質は安山岩である。

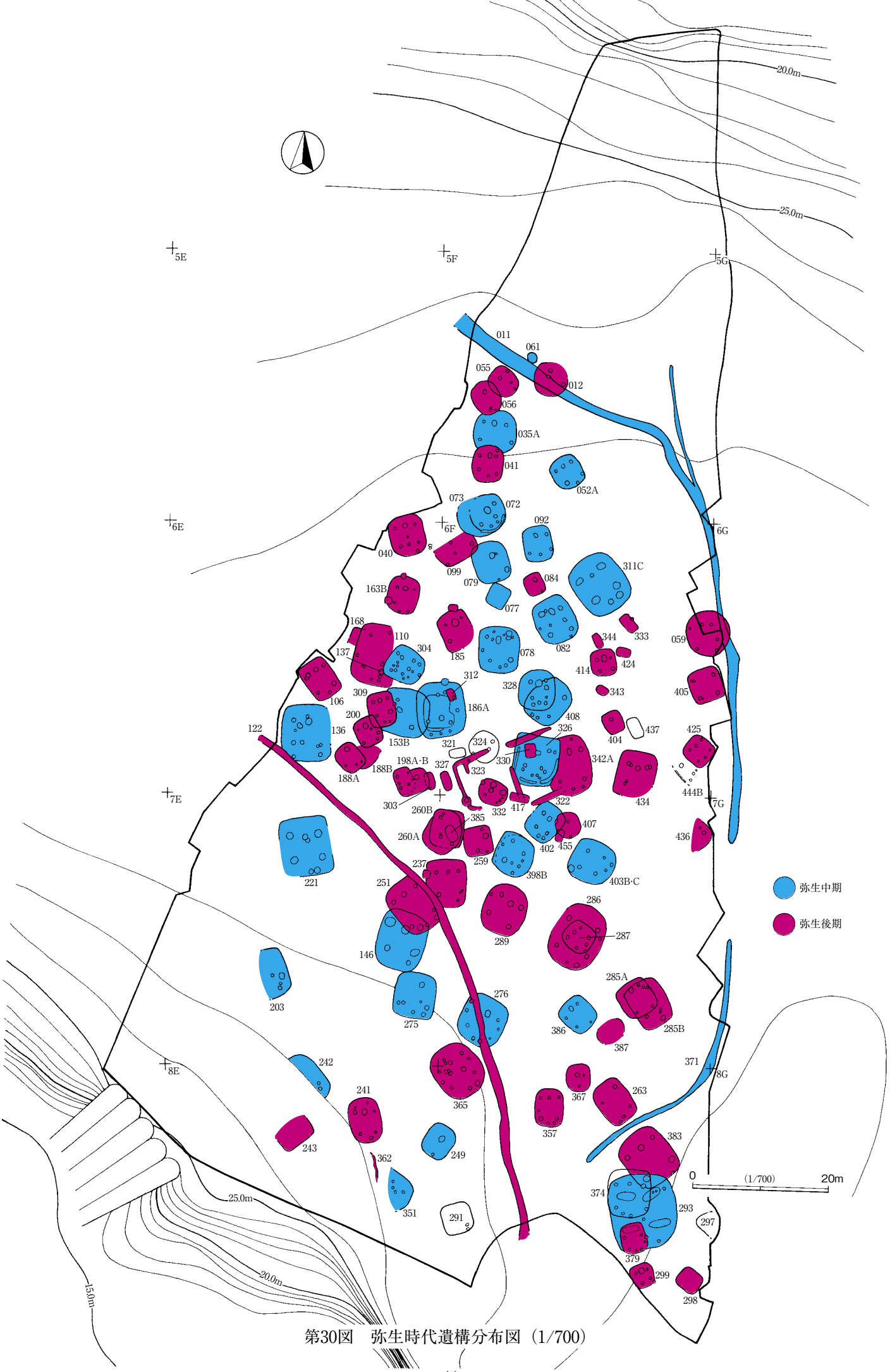
（14）石棒

片岩製の石棒片が１点出土している。現存部長さ７㎝、径４㎝の破損品であり、非掲載とした。

▲縄文土器が多量に出土した５F-53～５F-96付近空撮。複雑に重複する
弥生時代以降の住居等によって縄文時代の遺構が壊された可能性が高い。



▲Ⅰ174・Ⅰ198における遺物出土状況。共に弥生時代以降の住居ながら、大量の縄文土器が出土した。



第30図　弥生時代遺構分布図（1/700）

第３節　弥生時代

１　概要

Ｉ区で検出された弥生時代の遺構は約85棟の住居とそれを囲む環濠２条、それに方形周溝墓２基、土坑墓14基、土坑２基である。しかし、草刈西部地域の一般的な例に漏れず、激しい重複のためそのプランはもちろん、時期についても不明なものが少なくない。

環濠は北側の１条が中期、南側の１条が後期に属し、区内では完結せず草刈台地西端のＦ区と共有する。つまり、Ｉ区とＦ区にわたって環濠は存在し、その東側をＩ区（一部はM区）が占めることになる。その意味ではＩ区に加えＦ区の報告をもって始めて完結するが、南側は弥生時代以降、とりわけ中・近世の屋敷地の造成や近代の土取りによって大きく崖端が後退しており、この部分の復元は困難である。ここではＩ区の環濠が東側開口部を広く含む点から、出入口付近の様相を理解する好例という点を強調しておきたい。

集落はこの環濠内外に分布するが、北側谷に向かう緩い斜面部では検出されていない。時期的には中期後半以降に属する。中期の住居（約40棟）はほぼこの環濠内に収まるが、一部は環濠外にも分布する。それに対して後期の住居は東側に隣接するM区にわたって広く展開する。しかし、中期終末期の住居は少なくともＩ区内では見当たらず、逆に後期初頭の住居がまとまって検出されている。つまり、中期から間断なく後期へ至ったのではなく、中期末に一旦断絶した後にまた集落が営まれたと考えられる。環濠と重複する住居が総て後期に属する点からして、最早環濠に規制されない集落として新たに出現したのであろう。それと共に集落の中心も西側環濠内からＩ区・M区へ移り、程なく台地東側へ広く拡散したものと思われる。

方形周溝墓と土坑墓はＩ区中央に集中し、周溝墓の周囲に土坑墓が取り付くかたちとなる。土坑墓のなかには一部少し離れて分布するものもあるが、一連のものと考える。

出土した遺物は土器が大半を占め、次いで石製工具、砥石、敲石等の石器､そして様々な土製品がある。鉄釧・銅環・ガラス玉・管玉等の装身具、鉄剣などもあるがこちらは主に土坑墓に伴って出土した。特殊なものとしては、鳥形土製品内のベンガラがある。また、食料残滓として僅かではあるが貝・魚・獣骨等も認められる。注目されるのは人骨が遺存する土坑墓が６基検出されたことである。そのうち、頭蓋や歯の残る５基について分析を行っているので、参照されたい（第３章)。

なお、当報告で個別に扱った遺構（住居）は全体の約68％であり、残りのものについては第２章第11節に１/300の遺構分布分割図を掲載しているのでそれに拠られたい。但し、遺物については個別非掲載遺構も含め出来るだけ多く掲載することとした。これらの遺物は添付したＣＤ内に基本的なデータは収めている。遺構の抽出率については次に示すとおりである。

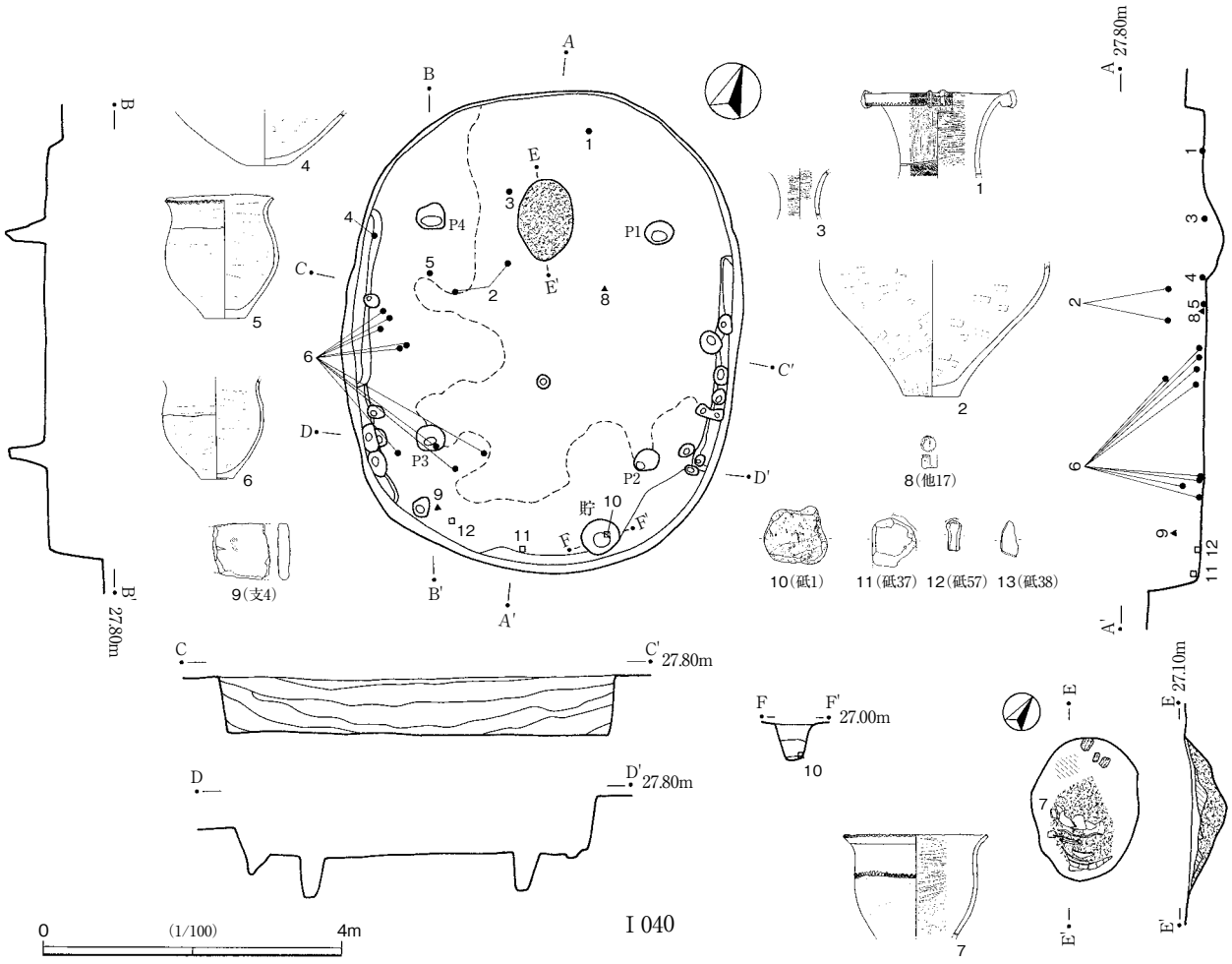
住居跡58/85　　土坑墓14/14　　土坑２/２　　方形周溝墓２/２　　環濠２/２

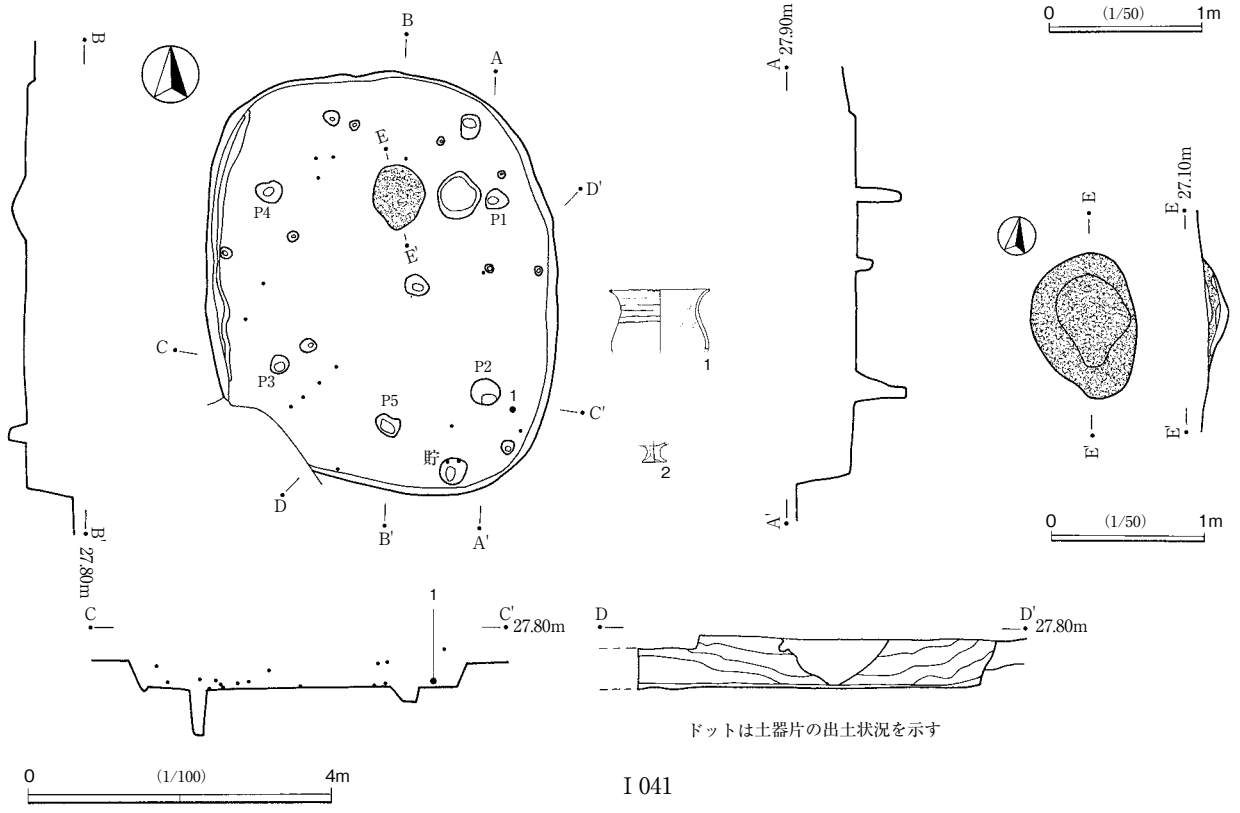
（分母は種別遺構数、分子は掲載数）

２　住居跡

Ｉ040（第30・31・143・157・158・223・226・227・237・238図、図版２・50・87・88・89・93・95）

弥生時代後期の住居である。Ｉ区北西、Ｆ区との境界付近に位置し、遺存状況は良い。その東側で同じく弥生時代後期の住居と思われるＩ099と一部重複の可能性があるが、新旧関係は不明である。また、古墳時代の住居とも重複するが床面が浅いために破壊を免れている。形態は胴張隅丸長方形で、規模は長径6.3m、短径4.7mとなる。炉は中央北寄りにあり、焼土層の形成は良い。主柱穴は４本で、いわゆる貯蔵





第31図　I 040・I 041 住居

穴（その性格を貯蔵と特定するのは問題だがそのことを断ったうえで以後は単に貯蔵穴とする）は入口右手脇にある。この他に小ピットが両側の周溝内を中心に不規則に存在する。踏締め面は中央から炉右手壁際にかけて認められた。なお、梯子穴は検出出来なかった。覆土の堆積状況は凹レンズ状を示し、全体に暗褐色から黒褐色で粒子が均質であるなど自然堆積と推測される。

遺物は炉及び床面付近から多く出土した。炉内から出土した甕は底部を欠いており、炉囲いとして使用された可能性がある。床面付近から出土した遺物は１・３～６・８の土器、10～13の砥石があげられる。この内、３については中期の土器と思われ、混入品であろう。覆土中の遺物（２・９）については出土レベルからして当遺構に直接結びつくものではない。

１は複合口縁の大形壺口縁部片を復元実測した。口縁部の幅が狭いことや、頸部の縄文帯を沈線によって区画している点など後期始めの特徴を有する。５は波状口縁甕の完形品であり、当住居廃棄時に伴うものと考えられる。６は住居廃絶後間もない頃の投棄遺物であろう。７は炉内出土で、しかも底部のみを欠くという状況から、住居使用段階の年代を指し示すものとしてよい。波状口縁有段甕で胴部中位に縄文原体押捺列を有する。後期初めの土器であろう。８はいわゆるミニチュアの一つかと思われるが、一括品ということもあり、その形状からして該期のものと断定しがたい。11・13は軽石Ｂの砥石である。12は砂岩Ａ砥石で、敲石としての性格も併せもつ。13と共に覆土中ながらこの期の遺物として問題はない。10の軽石A砥石も同様である。９は土製炉囲片であり、弥生時代のみにみられる遺物である。このほか覆土内から土器片が多く出土している。

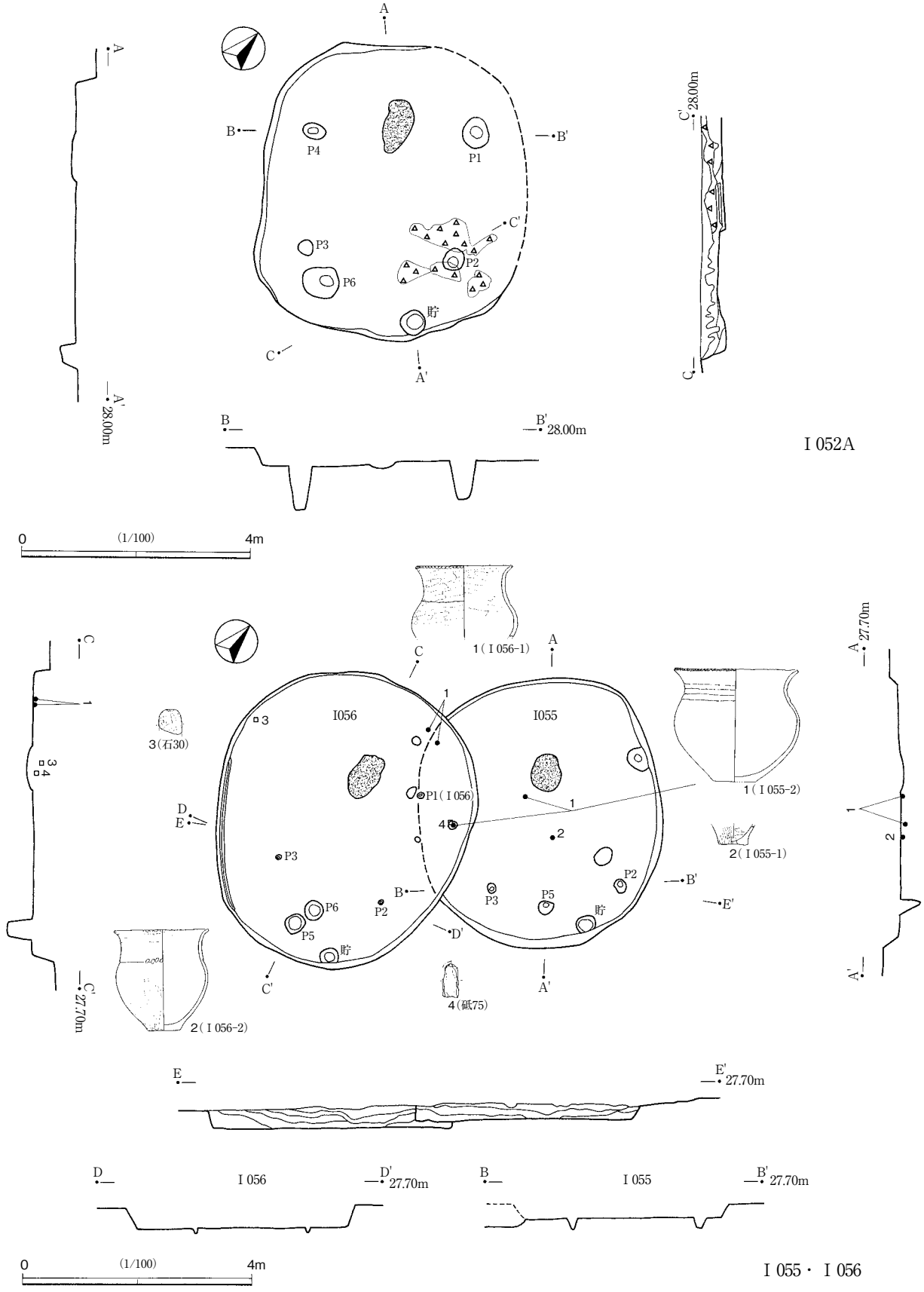
Ｉ041（第30・31・143・158図、図版２）

弥生時代後期の住居である。Ｉ区北西、Ｆ区との境界寄りに位置し、遺存状況は良い。その北側で弥生時代中期の住居（Ｉ035A）と重複する。また、古墳時代の住居群とも重複関係にあり、そのうちの１棟により南西隅を壊されている。形態は胴張隅丸長方形で、規模は長径5.3m、短径4.3mとなる。炉は中央北寄りにあり、焼土層の形成は良い。主柱穴は４本ではあるが、Ｐ２はその深さや位置からして該当しないかもしれない。梯子穴は中央壁寄り（壁から約70㎝）、貯蔵穴は入口右手脇にある。この他に小ピットが散在する状況で存在する。踏締め面は特に強弱が確認されなかった。覆土の堆積状況は凹レンズ状を示し、上下共に暗褐色を示し且つ粒子が均質であるなど自然堆積と推測される。

遺物の出土量は少なく、しかもそのほとんどは土器片であった。明確に住居に伴う遺物はないが、廃絶後程無い時期の所産（投棄か）として１の波状口縁輪積甕（約半個体）があげられる。他には２のミニチュアのみである。

Ｉ052Ａ（第30・32・158図）

弥生時代中期の住居である。Ｉ区北側、環濠寄りに位置し、古墳時代の住居によって東側部分の壁を欠く。形態は胴張隅丸方形で、規模は長径5.0m、短径4.7mほどとなる。炉は中央北西寄りにあり、主柱穴は４本ながら、Ｐ３の情報に欠く。貯蔵穴は入口右手脇の１か所のみである。この他に南東壁寄りに径50㎝程の大きなピットが存在する。踏締め面は特に強弱が確認されなかった。なお、梯子穴は検出出来なかった。覆土の堆積状況は水平に近く、ローム粒子を均質に含む暗褐色土であり、その東側の廃屋内に貝層（総数117点）が形成されたものと思われる。その平面的な範囲は約1.5m程で、厚みは約20㎝である。貝の種類はハマグリが約半数を占め、次いで、シオフキ（約30％）、ウミニナ（15％）、アサリほかである。



第32図　I 052A・I 055・I 056 住居

遺物は覆土中から出土した土器片と礫のみで、掲載に足る遺物を欠く。

Ⅰ055（第30・32・143・159図）

弥生時代後期の住居である。Ⅰ区北側、環濠縁に位置し、遺存状況は良い。西側一部でⅠ056（弥生時代後期の住居）と重複する。覆土の検討から本址が新しい。形態は楕円形で、規模は長径4.6m、短径4.5mとなる。後期には珍しい形態である。炉は中央北西寄りにあり、主柱穴は当初から無いものと考えられる。梯子穴は中央壁寄り（壁から約70㎝）、貯蔵穴は入口右手壁際にある。この他に小ピットが南側に存在するが径小さく深さも浅い。踏締め面は特に強弱が確認されなかった。覆土の堆積状況は僅かな内窪み状であり、中間にロームブロックを含む層がある。各層共に暗褐色を呈し、自然堆積に人為的な要素が加わった結果であろうか。

遺物は住居中央床面上から出土した２点の土器を図示した。この他には覆土内から少量の土器ほかが出土している。１は波状口縁輪積甕ながら、約６割ほどの遺存品である。２は甕の底部片である。焼成後底部穿孔の土器で、中期の所産である。これら２点は共に廃絶後の混入ないし投棄品であろう。

Ⅰ056（第30・32・143・159・222・228図、図版86・90）

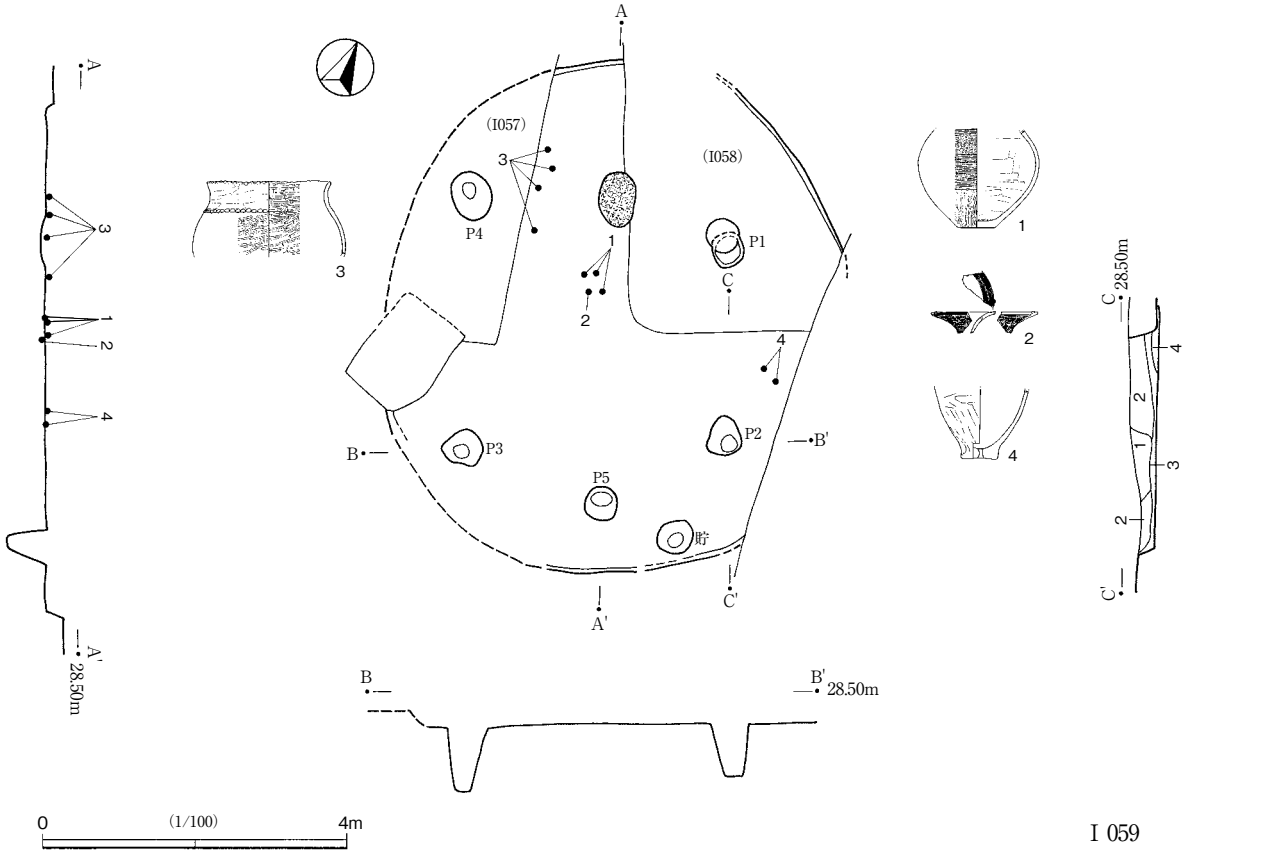
弥生時代後期の住居である。Ⅰ区北側、環濠縁に位置し、遺存状況は良い。東側一部でⅠ055（弥生時代後期の住居）と重複する。覆土の検討から本址が古い。また、古墳時代の住居とも重複するが深く及んでいない。形態は胴張隅丸長方形で、規模は長径5.0m、短径4.3mとなる。炉は中央北寄り、主柱穴は当初から無いものと考えられる。梯子穴は中央壁寄り（壁から約50㎝）、貯蔵穴は入口右手脇にある。踏締め面は特に強弱が確認されなかった。覆土の堆積状況は多少乱れた凹レンズ状を示し、全層暗褐色土よりなるが上から２層目にロームブロックを含み、自然堆積に人為的な要素が加わった結果であろうか。

遺物は床面付近から多く出土した。１は波状口縁胴部有段甕ほぼ完形を復元・図示した。２も同様ながらこちらは有段部に押捺を巡らす。約１/３個体を復元・図示した。３は流紋岩（溶結凝灰岩）製の偏平片刃石斧の基部である。４は砂岩Ｂの砥石（下半部欠損）であるが、先端部に敲打痕がみられる。１～４共に出土状況から本址廃絶に伴う遺物と考えられる。なお、Ⅰ055との重複関係から土器間の前後関係を知る好例といえるが、Ⅰ056の覆土形成後にⅠ055竪穴が掘削されていることから、両者の間にはある程度の時間的懸隔が想定される。

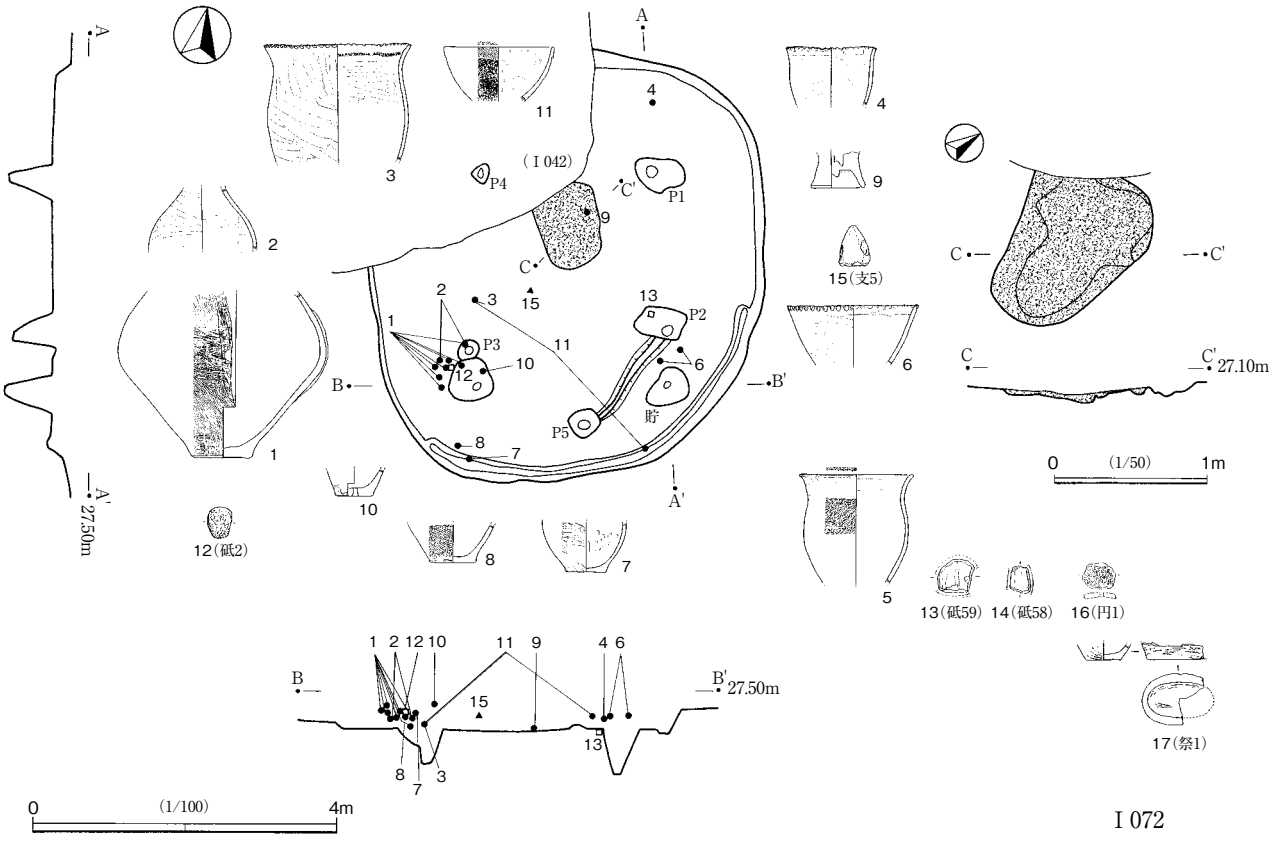
Ⅰ059（第30・33・143・144図）

弥生時代後期の住居である。Ⅰ区北東側、環濠と一部重複し（本址が新しい）、また、古墳時代の住居に壊されており遺存状況は不良である。形態は楕円形かと推測されるが、破損部分が多く断定し得ない。規模は長径6.6mながら、短径は6.0mほどとなろうか。炉は中央北寄りにあり、焼土層は薄い。住居の規模と比較すると小規模である。主柱穴は４本で、深さは60㎝から80㎝と一定しない。梯子穴は中央壁寄り（壁から約90㎝）、貯蔵穴は入口右手脇壁際にある。踏締め面は取り立てて強弱が確認されなかった。覆土の堆積状況は１・２共にロームブロックを多く含む暗褐色土であり、３・４層がローム粒主体の黄褐色土である。

遺物は北側の床面付近から多く出土した。１は網目状撚糸文帯上下を結節文で画す装飾壺胴部である。２は壺口縁部片である。３は波状口縁胴部押捺列甕大形片を復元・図示した。４は焼成後底部穿孔の甕底部片を復元・図示した。出土状況から１・３は本址廃絶後間もない頃の投棄ないし遺棄遺物と考えられる。



I 059



I 072

第33図　I 059・I 072 住居

なお、２・４は弥生時代中期の遺物であり混入品と考えられる。

Ｉ072（第30・33・144・159・223・227・233・238・242図、図版87・89・93・97・99）

弥生時代中期の住居である。Ｉ区北西側の環濠内に位置する。同じく中期の住居であるＩ073と重複するが、本址が新しい。また、古墳時代の住居に北西部を壊されており遺存状態は不良である。形態は胴張隅丸方形ではあるが、多少歪である。規模は長径5.1ｍ、短径5.0ｍである。炉は中央北寄りにあり、住居の規模に比較すると大きな炉といえる。なお、焼土層の形成は不良である。主柱穴は４本で、比較的内側寄りにある。梯子穴は中央壁寄り（壁から約50㎝）、貯蔵穴は入口右手脇壁際にある。踏締め面は取り立てて強弱が確認されなかった。覆土の観察は壁の遺存が悪く省略する。

遺物は床面から多少浮いた状態で南側から多く出土した。住居埋没過程での投棄によるものと思われる。１は大形の壺胴部以下の破損品であり、縦方向に粘土帯を貼り付けるものである。２は無文の壺胴部上位片を復元・図示した。３は波状口縁甕の大形破片を復元・図示した。口縁内面有段部に押捺列を巡らしている。４・６も波状口縁甕の口縁～胴部片を復元・図示した。７は小形の甕底部片、10は焼成後底部穿孔の甕底部片、９は台付甕台部片を共に復元・図示した。５は底部を欠く甕であり、口唇部と胴部に附加条縄文帯を巡らす。８は甕底部片であり、全体に附加条縄文を施す。共に、弥生時代後期の下総北部に分布する土器である。11は有段口縁椀口縁部片を復元・図示した。口唇・口縁部に縄文帯を施し、有段部に押捺列を巡らす。12は軽石Ａの砥石、13、14は砂岩Ａの砥石である。15は小形の土製支脚であり、側縁に左右一対の窪みがある。16は有孔土製円盤である。土器片そのものは弥生中期に属する。17は楕円形の舟形土製品で、上部及び底部の一部を欠失する。内面にはベンガラが遺存する。

出土した遺物は中期の遺物が主体となるが、同レベルで後期に特徴的な椀形土器も出土している。遺構の確認面が床面近くに及んでいることを考え併せ、中期に含めたものの、判断には微妙なところもある。但し、何れにせよ弥生時代の枠内であることから、土製支脚についても古墳時代前期との類似性はあるが当遺構に付属するものとして報告する。

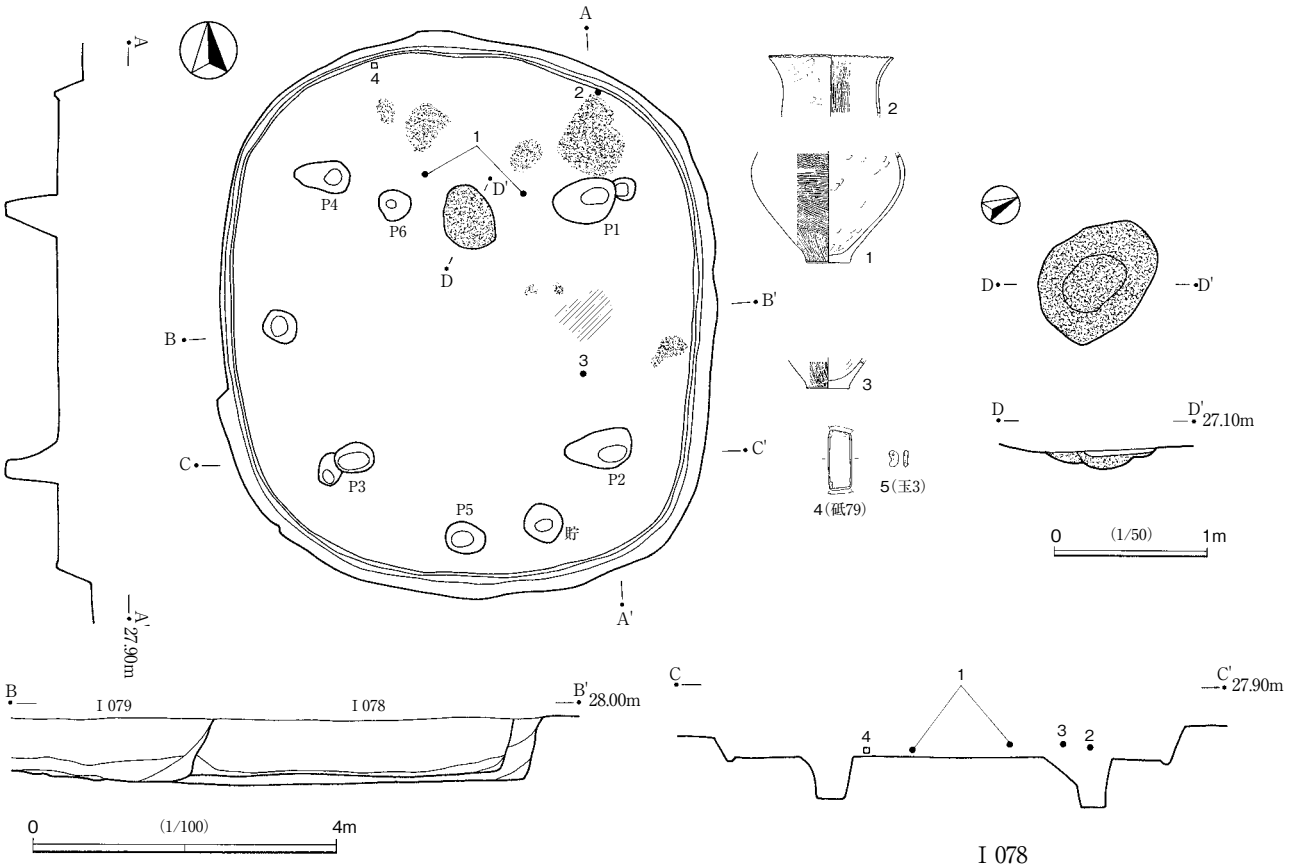
Ｉ078（第30・34・145・160・221・228・230図、図版２・86・90・91）

弥生時代中期の住居である。Ｉ区中央北寄り環濠内に位置する。古墳時代以降の住居４棟と重複関係にあるが、北西部を除いては遺存状況は良好である。形態は胴張隅丸方形である。規模は長径6.8m、短径6.1ｍである。炉は中央北寄りにあり、焼土層の形成は比較的良好である。主柱穴は４本で、ほぼ等間隔にある。梯子穴は中央壁寄り（壁から約70㎝）、貯蔵穴は入口右手脇壁際にある。踏締め面は取り立てて強弱が確認されなかった。覆土は壁下を除き暗褐色土で占められるが、とりわけ北側で焼土と灰ブロックを多く含んでいた。

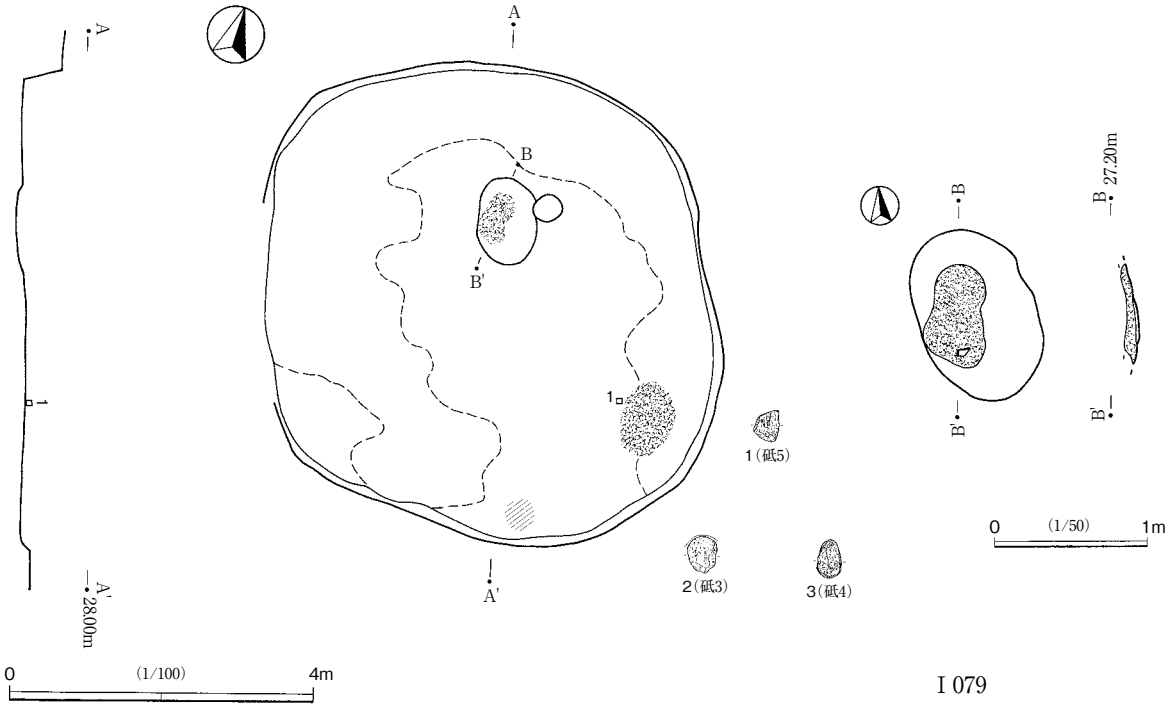
遺物は床面から多少浮いた状態で北側焼土散布範囲と符号するように出土した。１は大形の壺胴部以下の破損品であり、胴部上位に結節文帯を巡らすものである。２は波状口縁甕の大形片を復元・図示した。３は甕の底部片を復元・図示した。４は砂岩Ｂの板石状砥石であり、両端を含め６面を使用する。５は覆土上位から出土した滑石製勾玉である。形態から弥生時代の所産として問題ない。

Ｉ079（第30・34・160・223・224図、図版87）

弥生時代中期の住居である。Ｉ区中央北西寄りに位置する。古墳時代前期以降の住居群と重複関係にあり、

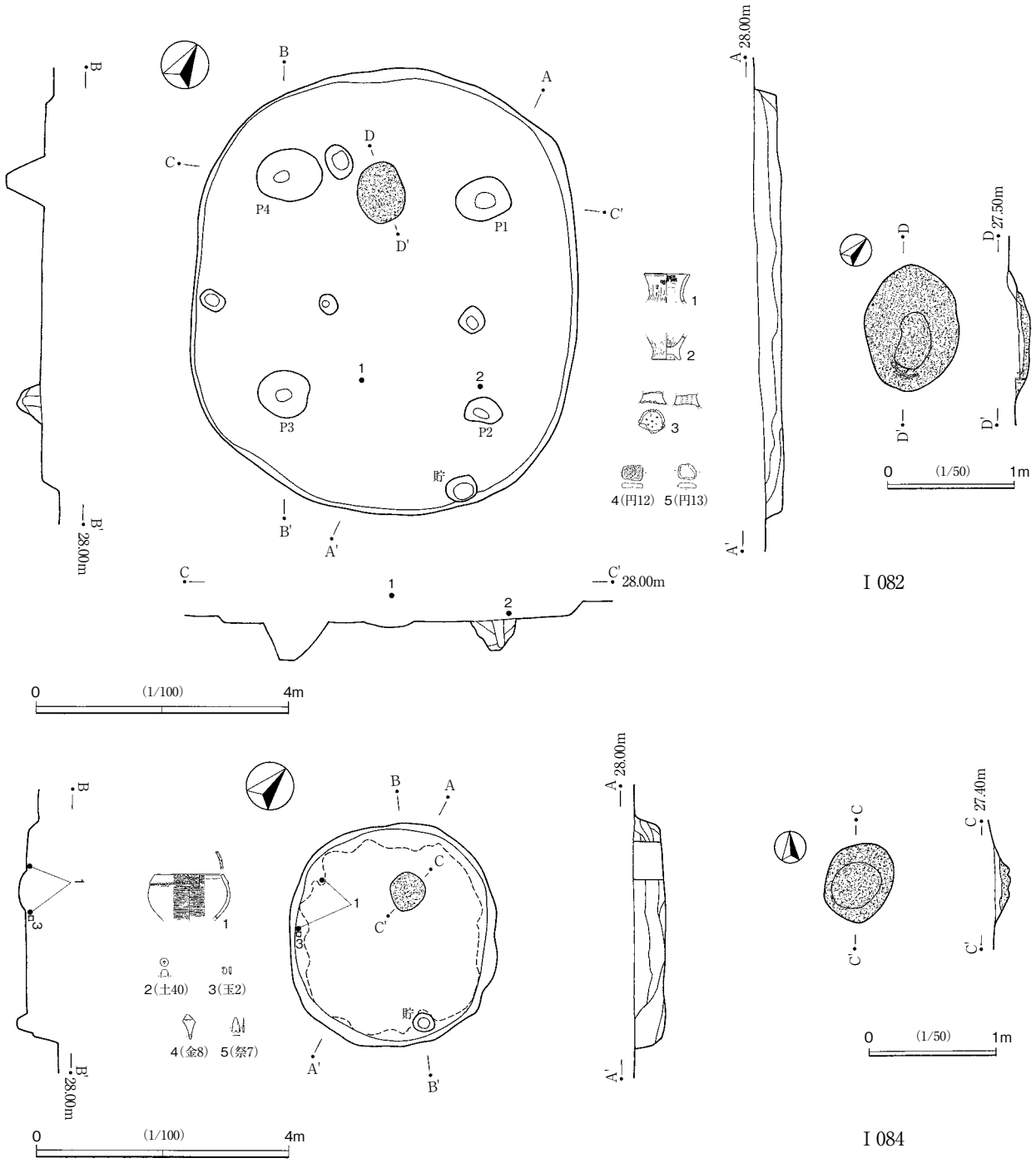


I 078



I 079

第34図　I 078・I 079 住居



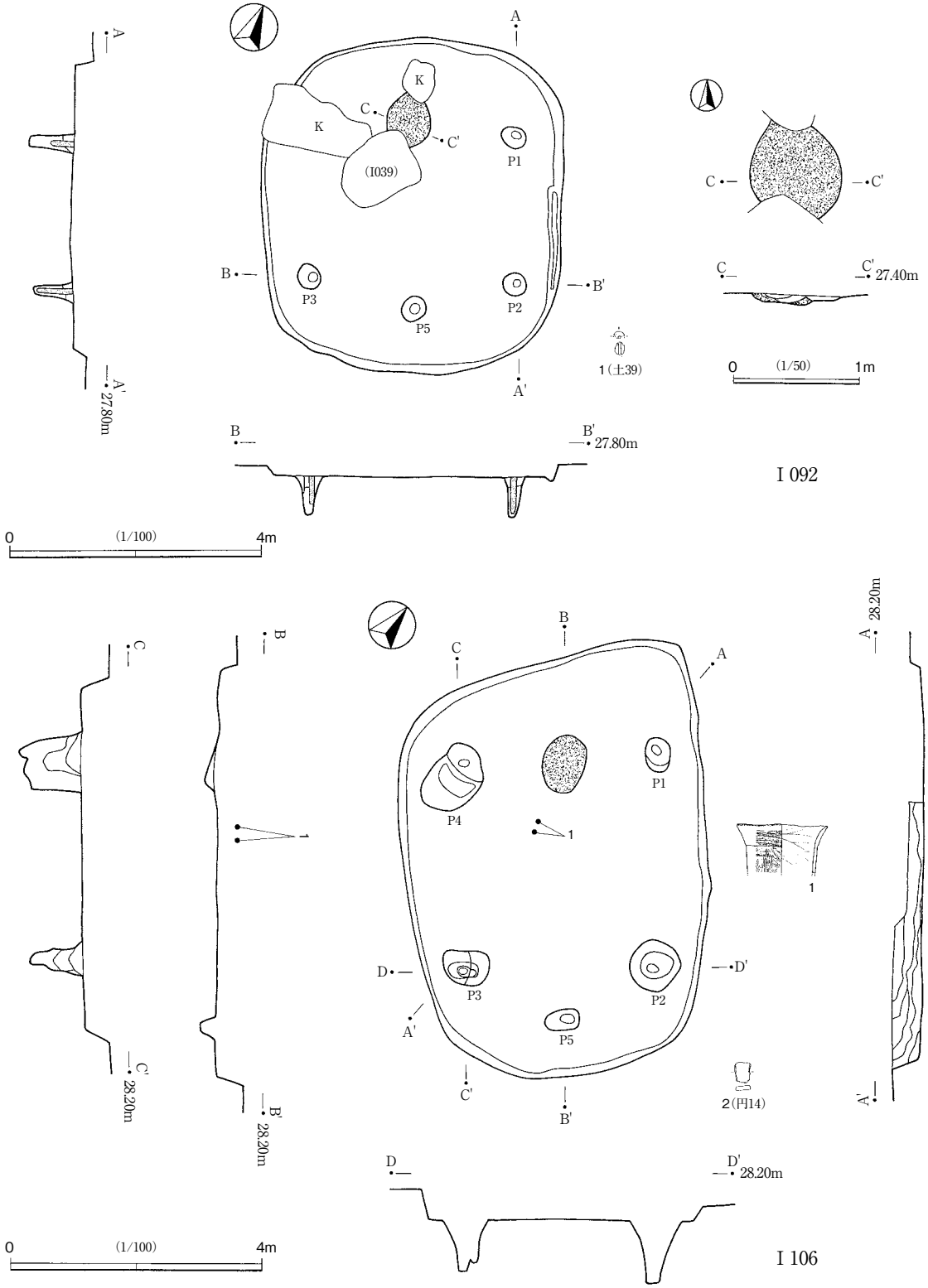
第35図　I 082・I 084 住居

覆土中にその貼床が確認された。楕円形である。規模は長径6.1m、短径5.9mである。炉は中央北寄りにあり、焼土層の形成は良好である。主柱穴・貯蔵穴共に確認出来なかったが、当初から設けられなかったものと思われる。梯子穴も同様であるが、南壁中央壁際床面に粘土の存在が確認されることや、踏締め面の遺存状況からして、未検出に終わっている可能性がある。住居南東床面上には焼土が遺存していたが、土層の観察結果からは単純に焼失住居の結果とも思われない。覆土は、僅かに底面近くに褐色土の堆積があると記すにすぎない。

遺物は床面および覆土内から出土した。１～３は軽石Aの砥石である。この内、１は床面、それ以外は覆土内の一括品である。

I 082（第30・35・145・160・233図、図版３・50・93）

弥生時代中期の住居である。Ｉ区中央北寄り環濠内に位置する。平安時代の住居群と重複関係にあるが



第36図　I 092・I 106 住居

遺存状況は良好である。形態は胴張隅丸長方形であり，規模は長径6.8m、短径6.0mである。炉は中央北寄りにあり、焼土層の形成は良い。南側に炉囲いに用いた土器片が遺存する。主柱穴は４本で、等間隔にあるが、平面に比し浅いという特徴がある。梯子穴は確認されなかった。貯蔵穴は入口右手脇壁際にある。踏締め面は取り立てて強弱が確認されなかった。覆土は全体に暗褐色を呈し、水平に近い堆積状況であり、しまりに富み、焼土粒を含むという特徴がある。

遺物は少なく、覆土中から出土したもので占められる。１は小形壺の口縁部片を復元・図示した。２は高坏の底部？を復元・図示した。３は蜂の巣状に穿孔した土器片で、器種は台付甕か。４・５は土器片利用土製円盤であり、何れも中期の壺形土器片を再利用したものである。

Ｉ084（第30・35・145・161・230・235・242・244図、図版91・94・98・100）

弥生時代後期の住居である。Ｉ区中央北寄りの住居であり，他遺構との重複はない。形態は楕円形で、規模は長径3.3m、短径3.1mの小形住居である。炉は中央北寄りにあり、焼土層の形成は良い。主柱穴・梯子穴共になく、僅かに貯蔵穴が入口右手脇壁際に確認されたのみである。踏締め面は壁際を除く全面で顕著であった。覆土は上下ともに暗褐色を呈し、凹レンズ状の堆積状況であり、全体に焼土粒を含むという特徴がある。

遺物は少なく、西側床面壁際付近から出土した椀、土製品、玉、それに一括品の不明鉄製品があげられる程度である。１は鉢の大形片を復元・図示した。２は土錘の半個体品である。３は滑石製の勾玉である。４は用途不明の鉄製品であり、鉄鏃ないし工具の可能性もあろうか。類例の少ない弥生時代の鉄製品ということを考えると、一括品という条件もあって混入品の可能性も指摘される。しかし、当住居は重複の激しいＩ区のなかでは珍しく破壊を免れた事例であり、その点を考慮しあえて弥生時代の鉄製品として報告する。５は形状から磨製石鏃としたが、片岩製ということもあり、何れにせよ実用品ではないであろう。

Ｉ092（第30・36・235図、図版94）

弥生時代中期の住居である。Ｉ区中央北寄り環濠内に位置する。近世以降の土坑や古墳時代及び平安時代の住居・掘立柱建物と重複関係にあるが、そのわりには遺存状況は比較的良好である。形態は隅丸方形であり，規模は長径5.1m、短径4.5mである。炉は中央北寄りにあり、焼土層の形成は不良である。主柱穴は攪乱の及んだ北西の１本を除き３本が等間隔にあり、柱穴痕も明瞭である。梯子穴は中央壁寄り（壁から約50㎝）にあり、貯蔵穴は見出し得なかった。踏締め面は取り立てて強弱が確認されなかった。覆土は浅いということもあり、観察結果は省略する。

遺物は覆土中から出土した土錘と若干の土器片のみであった。１は約半個体の土錘である。

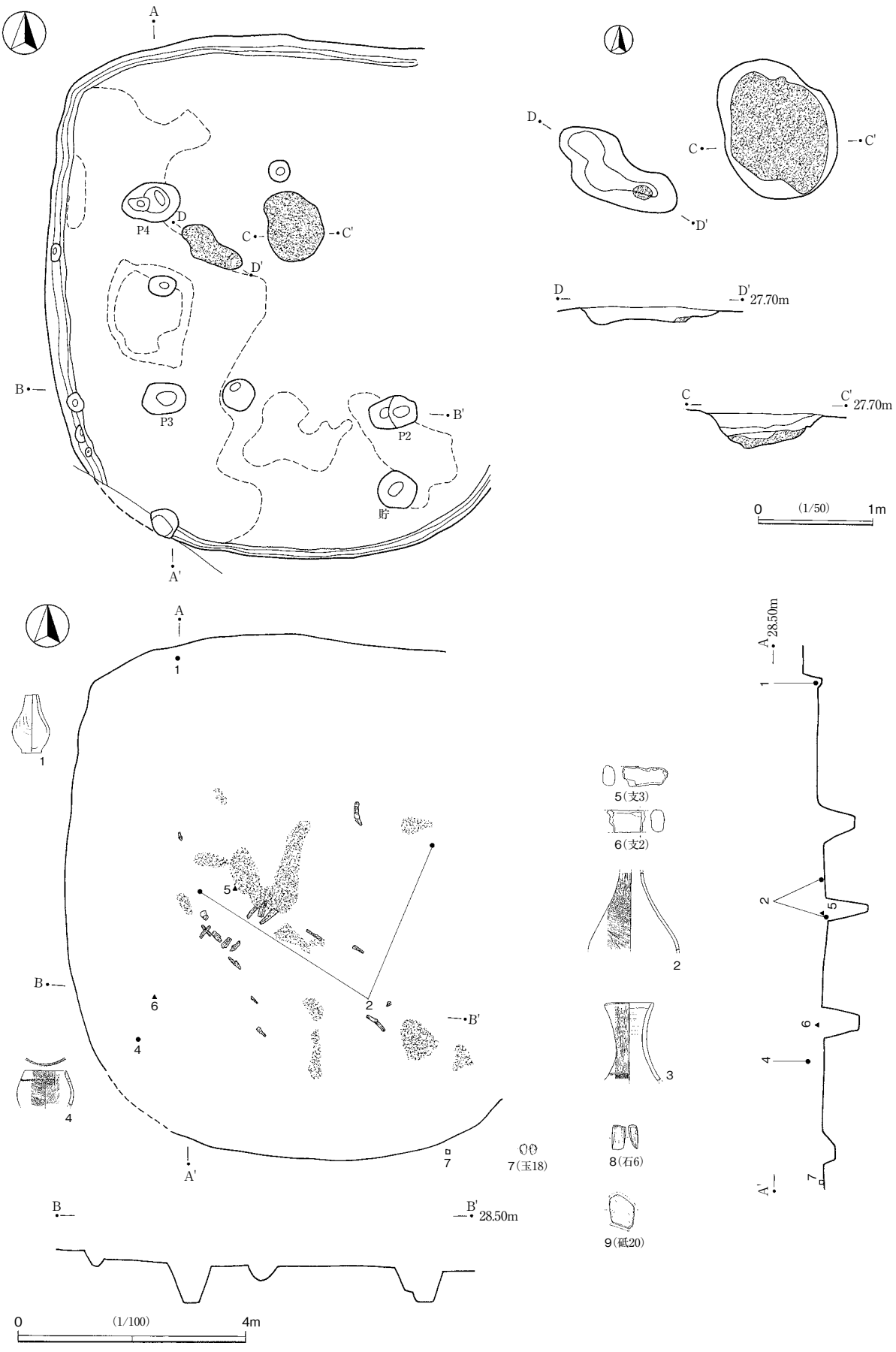
Ｉ106（第30・36・145・233図、図版93）

弥生時代後期の住居である。Ｉ区中央西寄りＦ区との境界付近に位置する住居であり、平安時代ほか２棟の状居と重複する。形態は多少歪な長方形ともいうべきもので、規模は長径6.4m、短径4.6mである。炉は中央北西寄りにあり、焼土層の形成は不良である。主柱穴は４本等間隔にあり、梯子穴は中央壁寄り(壁から約40㎝)に見出された。なお、貯蔵穴は確認出来なかった。踏締め面はとりたてて認められなかった。覆土は上部が暗褐色、下部が褐色を呈し、中央が水平となる凹レンズ状の堆積を示し、均質である。自然堆積であろう。

遺物は覆土中から出土した甕片と土製品が主なものである。１は甕の大形片を復元・図示した。後期初めの遺物であろう。２は土器片利用土製円盤ながら形状は長方形となる。土器片自体は弥生時代後期の甕片である。

Ｉ136（第30・37・145・221・227・230・238図、図版50・86・89・91・93）

弥生時代中期の大形住居である。Ｉ区中央西寄りＦ区との境界付近に位置する。南西隅部分が弥生時代の


A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
P1
P2
P3
P4
貯
27.70m
0 (1/50) 1m
28.50m
5(支3)
6(支2)
2
3
8(石6)
9(砥20)
7(玉18)
0 (1/100) 4m

第37図　I 136 住居

内側環濠と、また、東西が古墳時代や平安時代の住居と重複関係にあることから、とりわけ東側隅は床面を欠いている。形態は隅丸方形であり，規模は長径8.6m、短径は7.5mほどになろうか。炉は中央北寄りと同西側寄りに２か所確認されたが、西側の炉は焼土層も部分的であった。なお、北寄りの炉は焼土層の形成は良い。主柱穴は重複部分の北東の１本が未確認のほかは整った間隔で検出された。それ以外のピットについては不明なところがある。梯子穴は未検出ながら、貯蔵穴は入口右手壁寄りにある。踏締め面は西側と南側壁寄りで部分的に認められる状況であったが、これは重複状況とも関係するものかもしれない。覆土は浅いということもあり、観察結果は省略するが、中央床面近くに焼土の堆積が広範囲かつブロック状に確認された。

遺物は確認面そのものが低いということもあろうが、底面近くから土器、石器、土製炉囲いが出土した。１は北西壁際から出土した小形の壺であり、口縁部は意図的に打ち欠いている。２は細頸の壺大形片、３は壺の口縁～頸部片、４は椀の大形片を復元・図示した。５・６は土製炉囲いの破損品であるが、炉の南西に散らばった状態であり、使用時を物語るものではない。７は微妙な出土位置ではあるが、当遺構で扱う。板状に荒取りされたような緑色凝灰岩であるが、表面は磨かれたように艶がある。８・９は一括品である。８はハンレイ岩製の柱状片刃石斧、９は砂岩Ａの砥石である。

Ｉ163Ｂ（第30・38・146・161・244図、図版100）

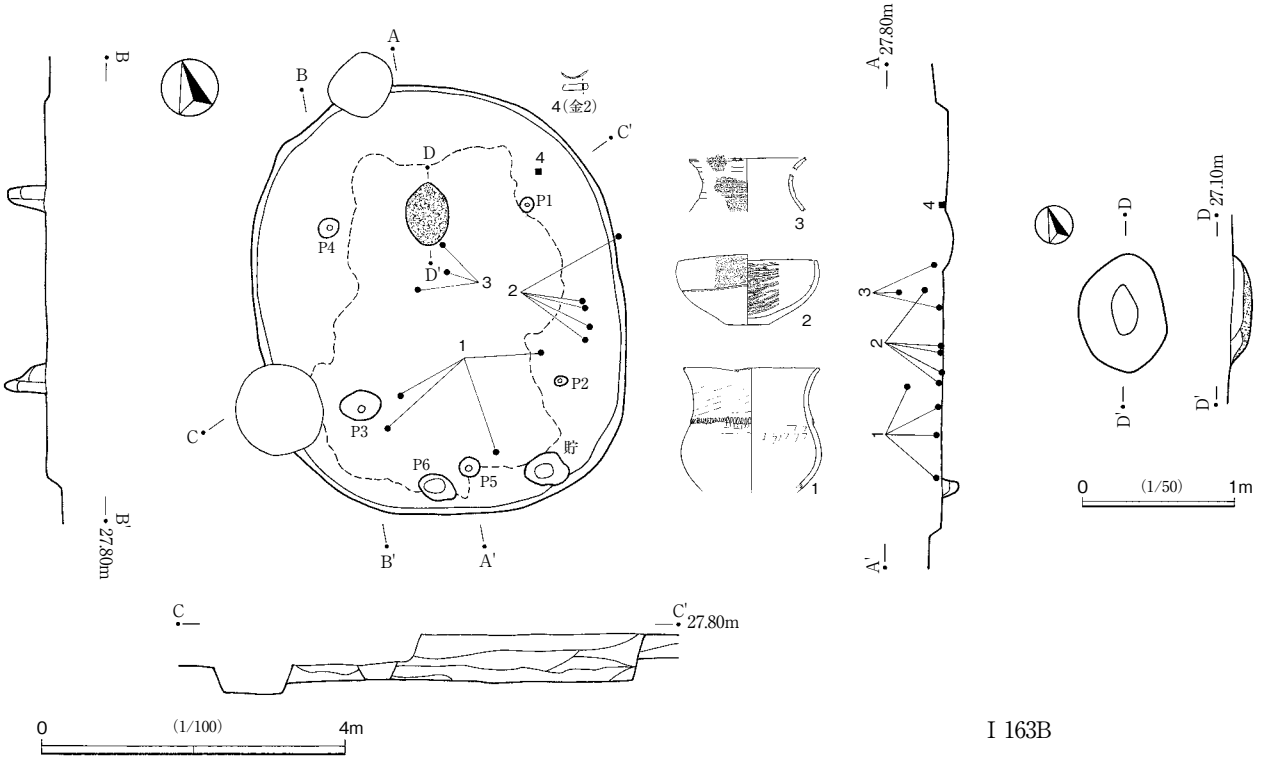
弥生時代後期の住居である。Ｉ区中央北西寄りに位置する。一帯は古墳時代以降の５棟の住居が複雑に重複するが、かろうじて壁及び床面が遺存した。形態は胴張隅丸長方形、規模は長径5.6m、短径4.7mである。炉は中央北寄りにあり、焼土層の形成は良い。主柱穴は規則的に４本あり、細いわりには深さがある。梯子穴は中央壁際、貯蔵穴は入口右手壁寄りにある。踏締め面はほぼ４本の主柱穴と梯子穴を結ぶ範囲内にあり、典型的なあり方といえる。覆土は部分的な遺存状況であり、観察結果は省略する。

遺物は床面また覆土中の遺物が接合するかたちで出土した。住居廃絶後の投棄によるものであろう。1・３は波状口縁甕約半個体（１は胴部有段押捺列）、２は椀約１/３個体を復元・図示した。４は床面から出土した約１/４個体の銅釧である。

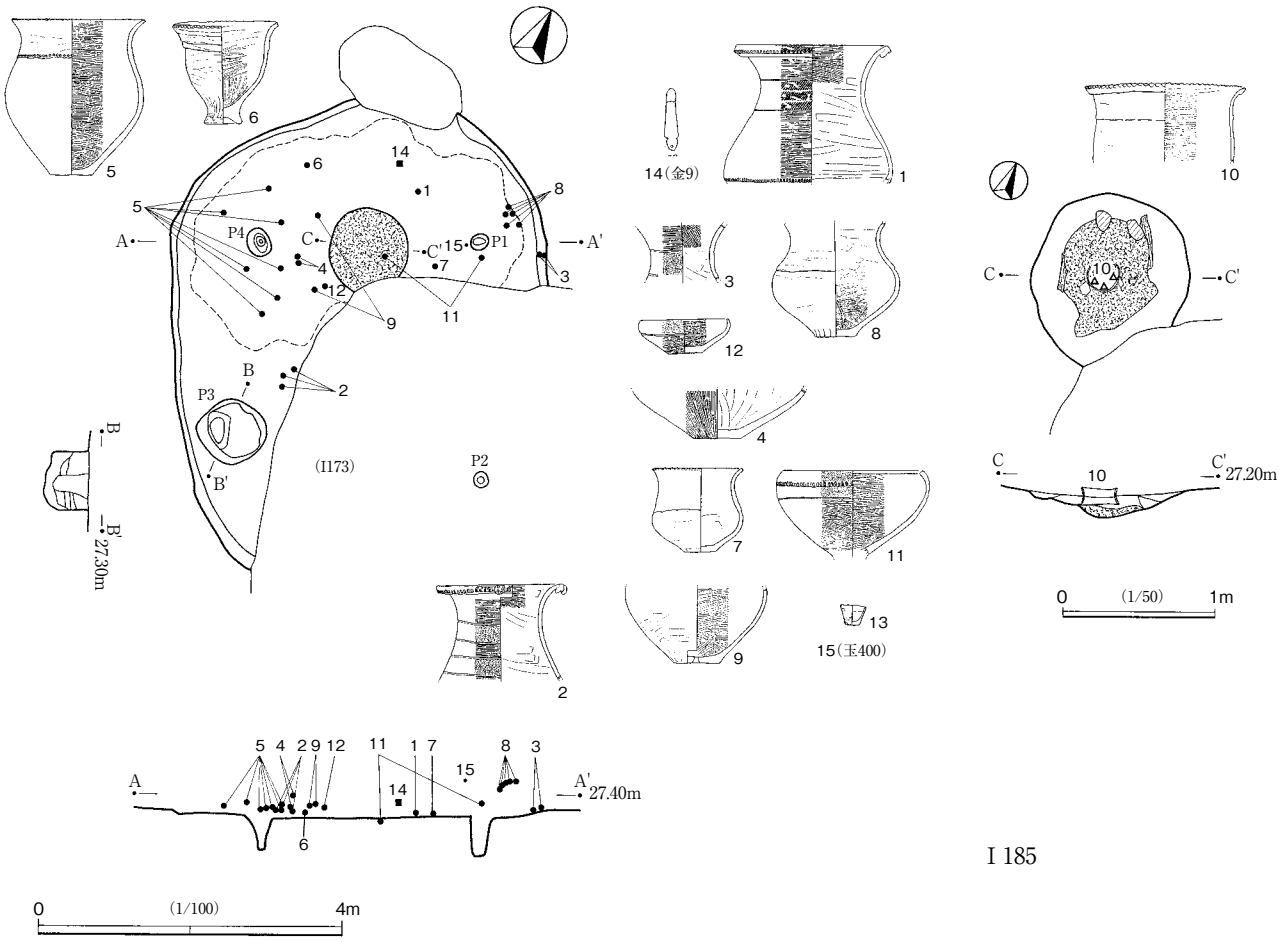
Ｉ185（第30・38・146・162・232・244図、図版３・50・92・100）

弥生時代後期の住居である。Ｉ区中央やや北寄りに位置する。住居南東部分を古墳時代前期の住居によって大きく壊されている。形態は胴張隅丸長方形であり，規模は推定で長径4.9m、短径は3.2mである。炉は中央北西寄りにあり、焼土層の形成は良い。中央部には胴部中位以下を欠く甕が焼土層上に置かれており、中には破砕貝が入っていた。なお、貝の種類までは不明である。主柱穴は破壊を免れた北側の２本と南東の１本が辛うじて検出し得た。なお、南西部のピットは柱穴痕が明瞭で、他の住居に付属する可能性があるが、Ｉ185の上には該当するような遺構がなく、一応図示しておく。梯子穴また貯蔵穴は何れも破壊部分に相当し、未検出に終わっている。踏締め面は北側の壁下部分を除いて確認された。覆土の遺存状況は悪く、観察結果は省略する。

遺物は遺存状況が悪いにもかかわらず多く出土した。そのほとんどが床面ないし多少浮いた状態で出土しており本址に所属するとみられるが、８・15についてはレベル的に高い位置にある。１は大形複合口縁広口壺２/３個体、２は同じく大形複合口縁広口壺１/４個体を復元・図示した。３は大形壺頸部片、４は壺底部片を復元・図示した。５は波状口縁胴部上位有段甕約１/３個体を復元・図示した。６は波状口縁輪積み台付甕のほぼ完形品であり、小形で後期初めの資料として貴重である。７は波状口縁胴部有段甕の



I 163B



I 185

第38図　I 163B・I 185 住居

ほぼ完形品である。８は口縁部を欠く胴部有段甕の１/３個体を復元・実測した。９は焼成後底部穿孔の壺胴部大形片を復元・図示した。10は炉器台的に使用された波状有段口縁甕口縁部～胴部である。11は台付椀ながら台部を欠く。有段口縁（下端押捺列）下にも沈線区画の羽状縄文帯を有する資料である。12は椀というより浅鉢に近い器形であり、口縁部に沈線区画の羽状縄文帯を施すものである。13はいわゆる手捏ね土器である。14は鉄製の短剣であり茎に目釘孔を有する。全長約10㎝、剣身長８㎝、剣身幅1.5㎝、茎部長さ約２㎝で、遺存状況は比較的良好である。15は滑石製の臼玉である。本址に伴う可能性は低いが同レベルで弥生土器が出土していることから一応図示しておく。

Ⅰ186A（第30・39・147・162・163・222・224・235・236図、図版51・86・87・94・95）

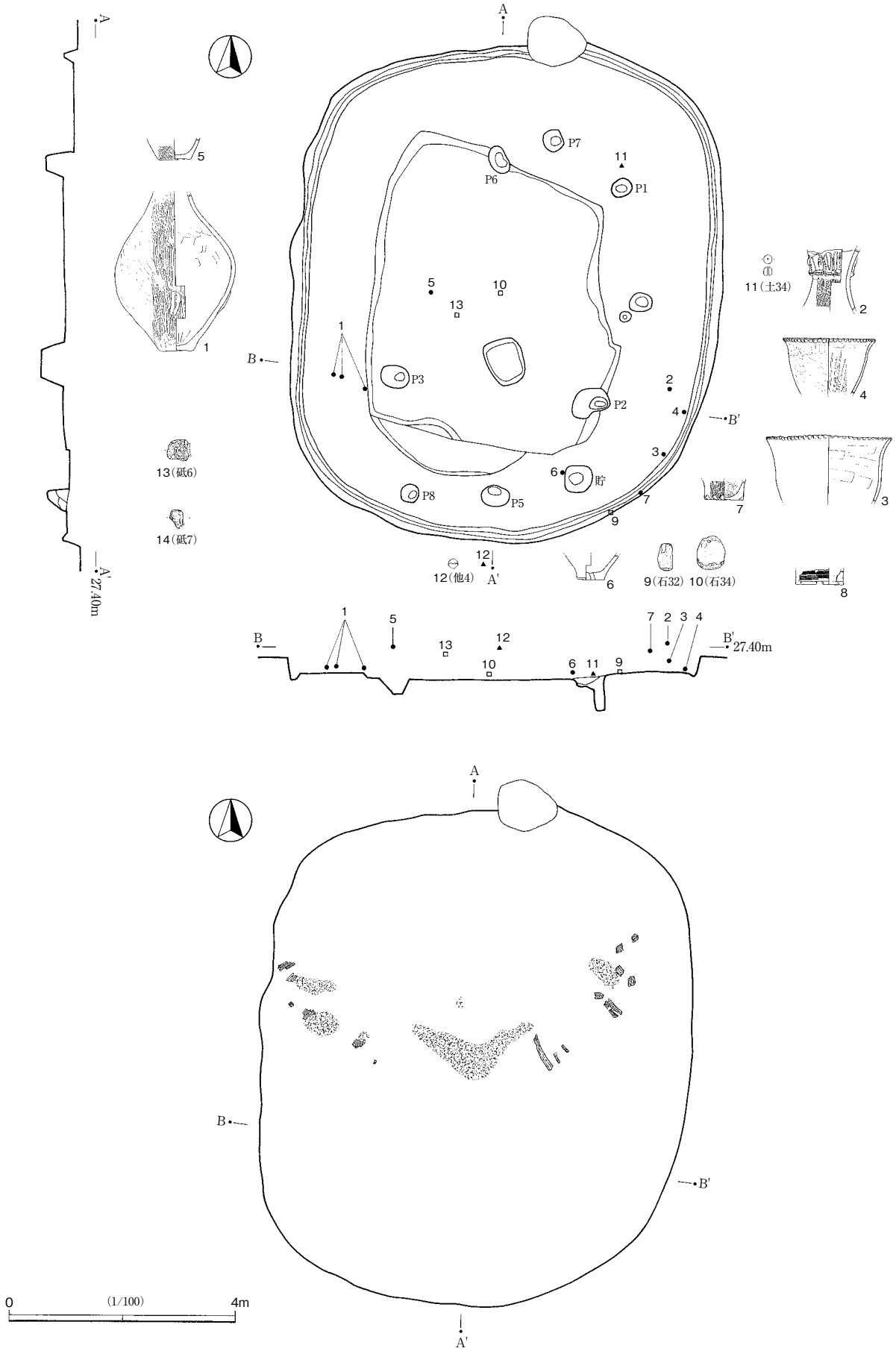
弥生時代中期の住居である。Ⅰ区中央北寄りに位置する。弥生時代の住居（Ⅰ153）及び古墳時代の住居また土坑（古墳時代前期か）と重複するが、前者との新旧は不明である。形態は隅丸長方形であり，規模は長径8.3m、短径は7.1mである。内部は別遺構として調査したが、検討の結果浅い段と判断されたので同一遺構として報告する。炉は検出されなかった。主柱穴は北西部の１本が不明瞭であった他はほぼ対応する位置に存在する。梯子は中央壁寄り（壁から約80㎝）、貯蔵穴は入口右手壁寄りにある。踏締め面はとりたてて認められなかった。覆土は壁際から中央に向かって凹レンズ状に焼土、炭化材が分布しており、いわゆる火災住居と考えられる。遺物が多いのもそれ故であろう。その観察状況は埋没過程で古墳時代前期末に埋葬地および葬祭地として利用されておりⅠ186Ｂにおける記述で代えたい。

遺物は床面ないしそれに近いレベルで出土したもの（１・４・６・９～11）と、それ以外のものに分けられるが、後者については古墳時代前期末の本来の位置から動いている可能性がある。１は大形の壺（胴部下半に縦位の粘土帯）約半個体を復元・図示した。器面に籠目が遺存する。２は壺頸部片を復元・図示した。縦位また横位に粘土帯を貼り付け、刻みを付けたもので、位置やレベルが異なるものの、１と同一個体の可能性がある。３・４は波状口縁甕、５は附加条縄文を施す甕底部片、６は焼成後穿孔を施す甕底部片、７は底部縁に深い刻みを巡らす甕底部片、８は切り込み高台の装飾壺底部片をそれぞれ復元・図示した。９は両端にすり潰し状の敲打痕を有する敲石、10は一面に敲打痕を有する敲石、11は下面が内窪み状の土玉、12は横位に刻み列を有する土玉、13、14は軽石Ａの砥石であり、13は研磨痕が明瞭である。

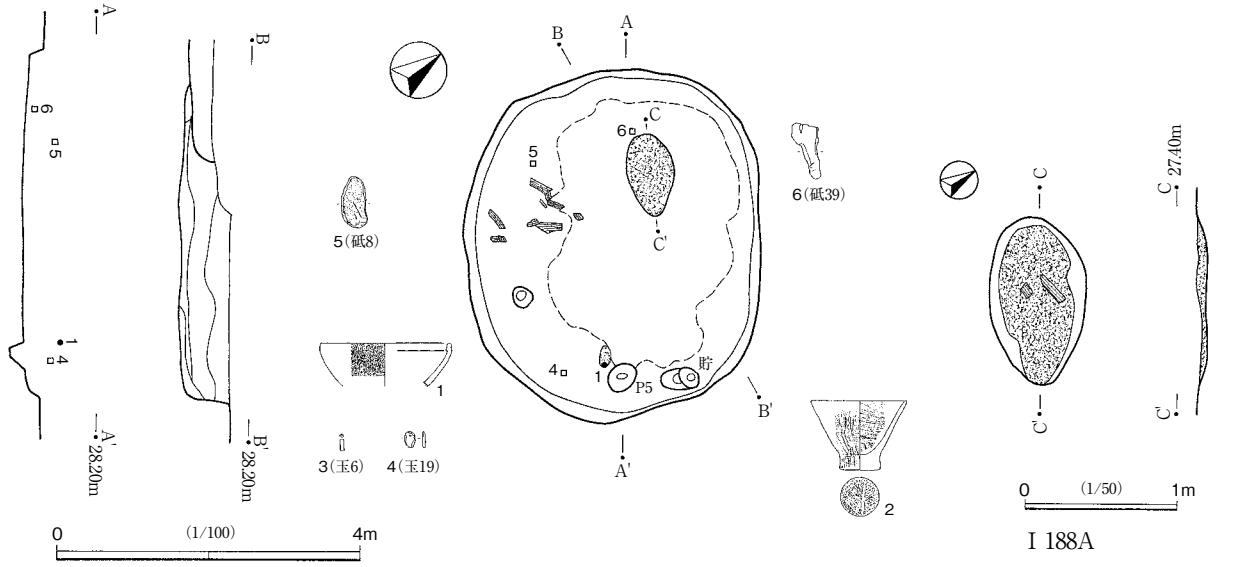
Ⅰ188A（第30・40・147・224・226・230図、図版51・87・88・91）

弥生時代後期の住居である。Ⅰ区中央西寄りに位置する。同じく弥生時代後期の住居（Ⅰ188Ｂ）と重複し、本址が新しい。また、古墳時代の住居が北側を壊しているが、床面には及んでいない。形態は楕円形で、規模は長径4.4m、短径3.7mである。炉は中央北西寄りにあり、焼土層の形成は良いものの長期間の使用は窺えない。主柱穴はみられず、梯子穴は中央壁際(壁から約50㎝)、貯蔵穴は入口右手壁際にある。踏締め面は梯子穴から炉のまわりに及ぶ中央で確認され、典型的なあり方といえる。覆土は全体に暗褐色土で、壁際から中央に向かって凹レンズ状に焼土が分布し、部分的に炭化材も遺存する。典型的な焼失住居と考えられるが、そのわりには遺物は多くない。

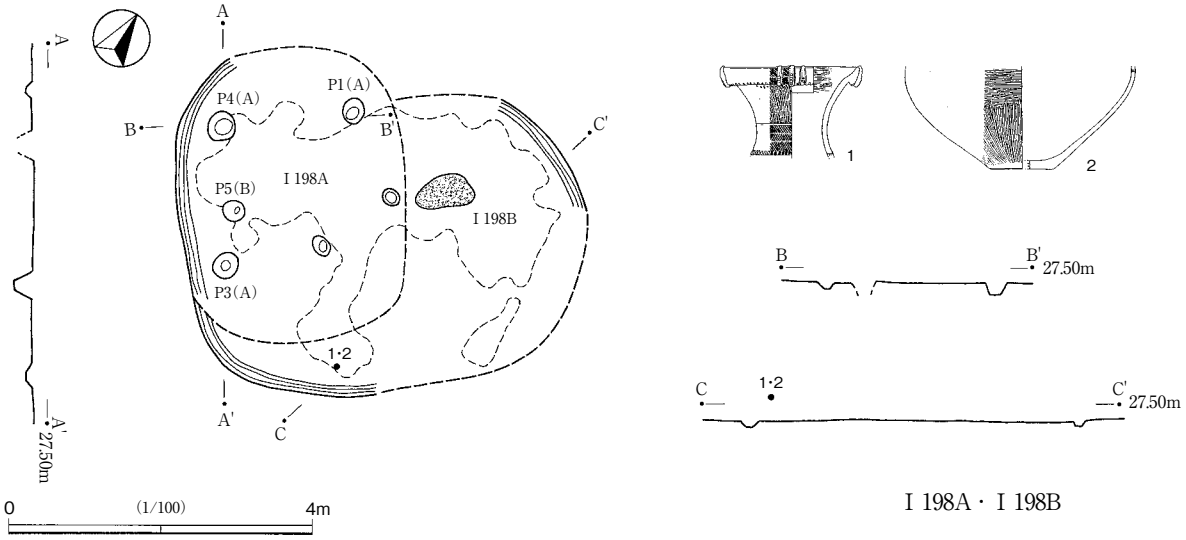
遺物は覆土中から出土した。１は口縁部に撚糸文帯を施す椀破片を復元・図示した。２は底面に木葉痕を有する外開きの鉢約半個体強を復元･図示した。３は緑色凝灰岩製の管玉、４は滑石製の垂飾品である。また、５は軽石Ａ、６は軽石Ｂの砥石である。



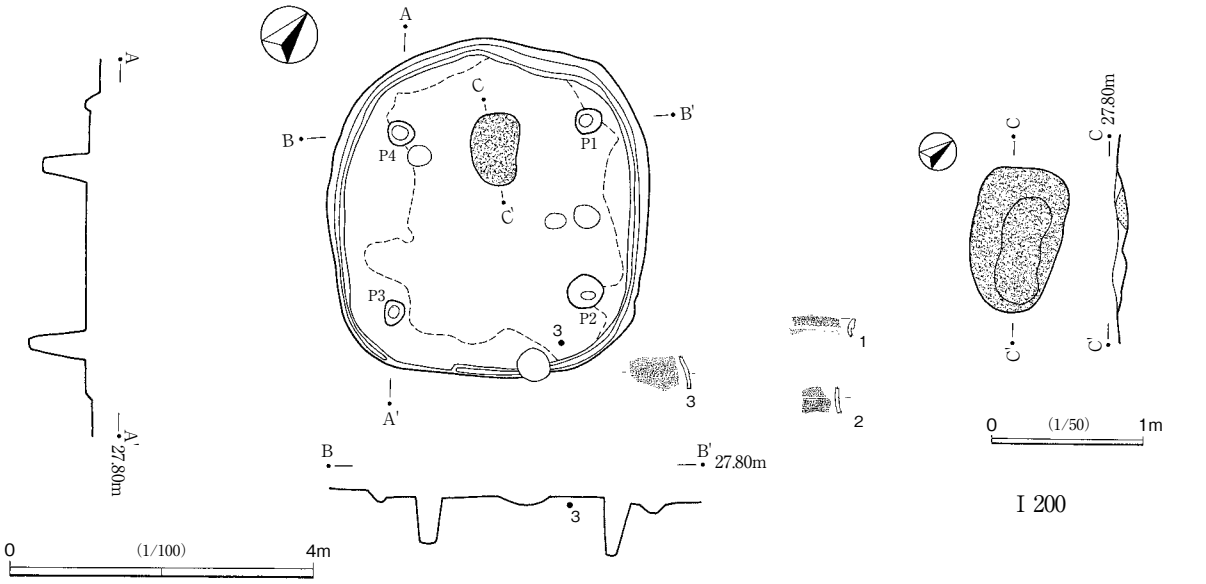
第39図　I 186A 住居



I 188A

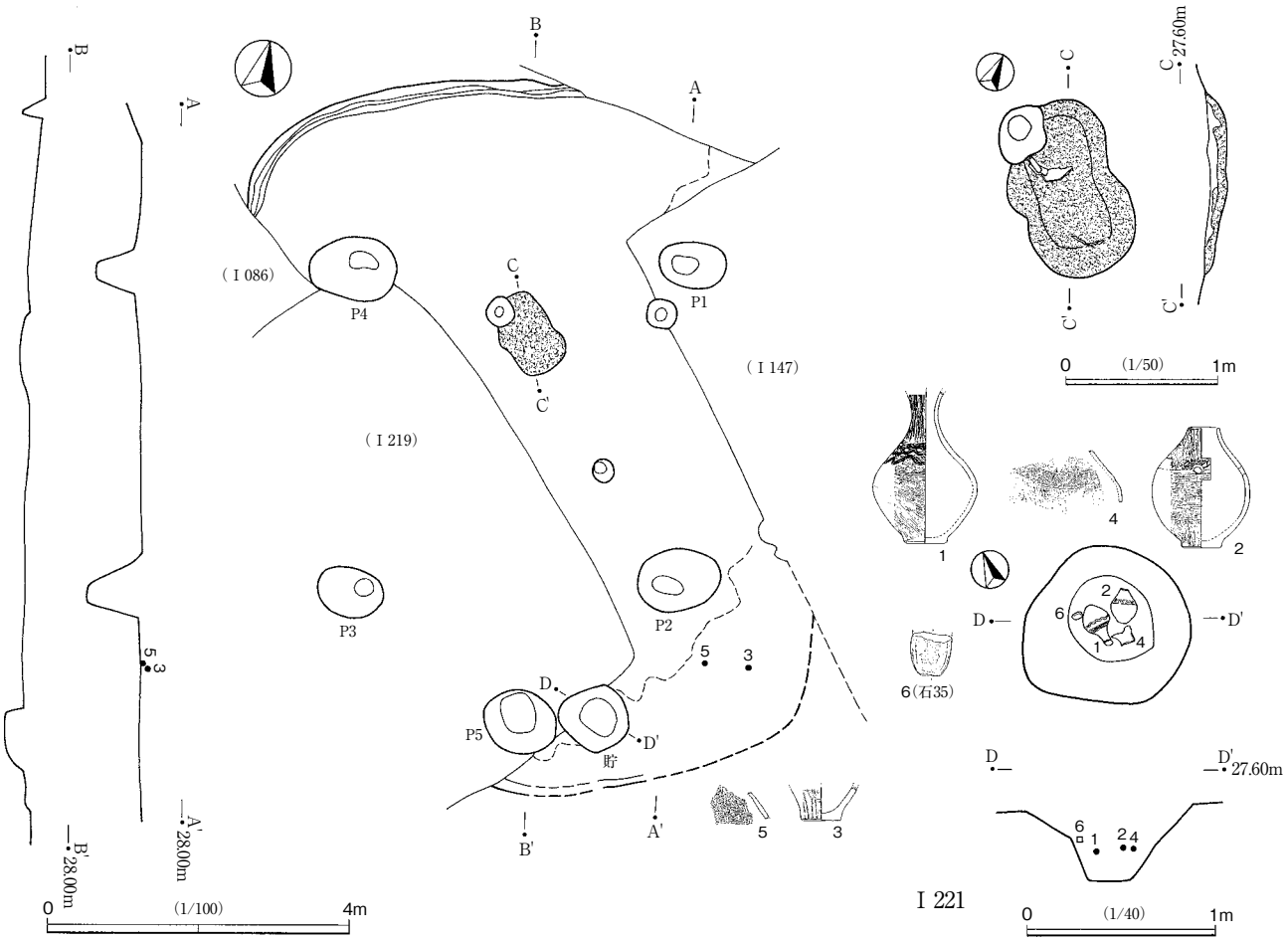


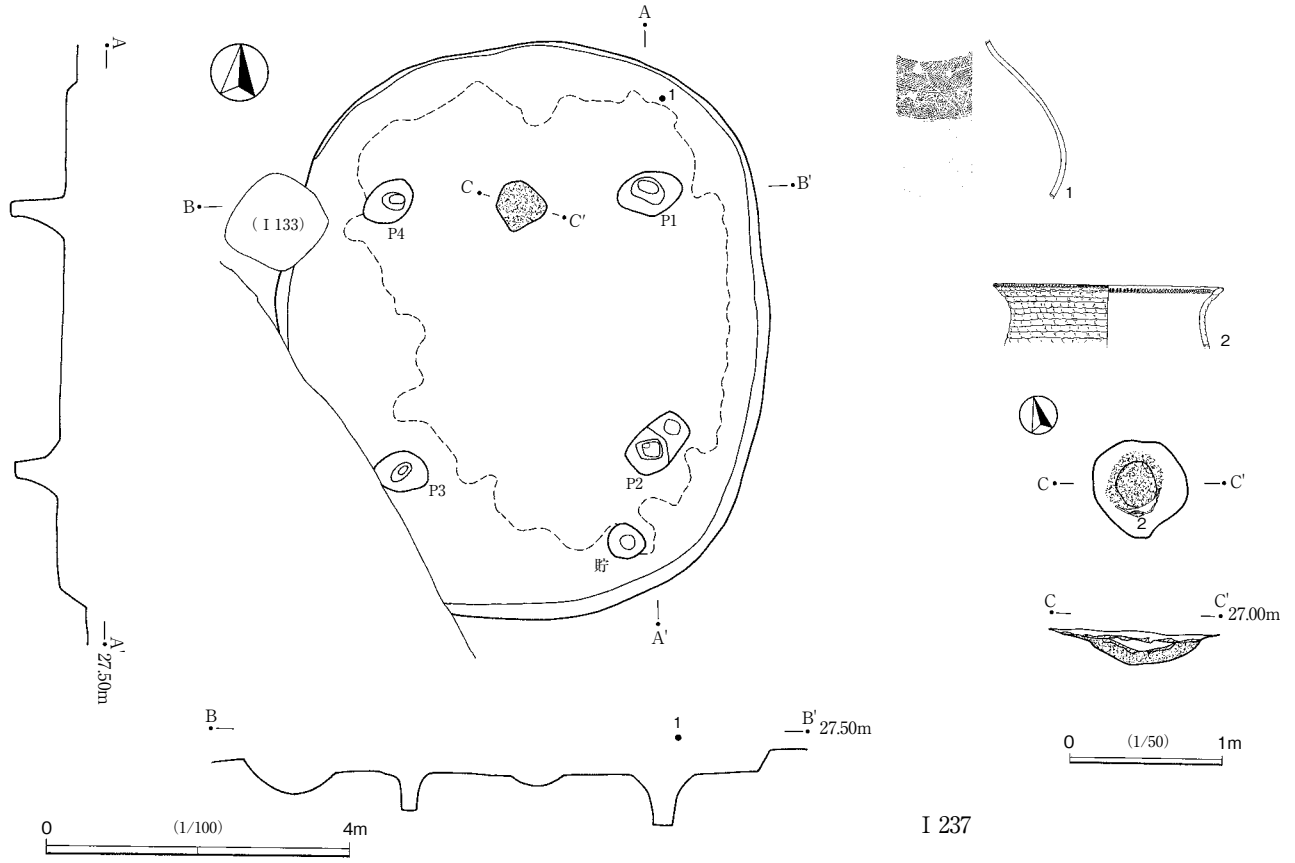
I 198A・I 198B



I 200

第40図　I 188A・I 198A・I 198B・I 200 住居





第41図　I 221・I 237 住居

Ⅰ198A・Ⅰ198B（第30・40・148図）

共に弥生時代後期の住居である。Ⅰ区中央に位置する。両住居ともに床面のレベルが等しく、且つ古墳時代以降の住居群と重複関係にあるため、新旧関係は不明である。形態はAが3本の主柱穴の並びからすると隅丸長方形、Bは調査図面に従えば南東に長軸をとる隅丸長方形になるが、あくまでも推測にすぎない。規模についてはあえて記さない。炉はBにおいてのみ確認されたが、詳細は不明である。主柱穴はAにおいて一応対応する3本を図示しておくが何れも浅く確証に欠ける。梯子穴はAの西側でBに対応するかと思われるものが検出された。貯蔵穴は共に不明である。踏締め面はBの範囲内において確認された。覆土の状況は不明である。

遺物はB南東壁際覆土中の壺2点をあげる程度である。1は複合口縁装飾大形壺2点の口縁～頸部片、2は同じく大形壺の胴部中位以下であり、共に約1/3個体を復元・図示した。両者は同一個体の可能性が高い。

Ⅰ200（第30・40・148図）

後期の土器片が主体であることから、弥生時代後期の住居とした。Ⅰ区中央西寄りに位置する。古墳時代また平安時代の住居と重複し壁の遺存は不良である。形態は隅丸方形で、規模は長径4.1m、短径3.8mである。炉は中央北西寄りにあり、焼土層の形成は不良である。主柱穴は多少歪んだかたちで4本あるが、梯子穴や貯蔵穴は未検出である。踏締め面は北側壁下から主柱穴を結ぶ範囲で確認された。覆土の状況は不明である。

遺物は土器片のみであり、遺存状況からして単純に本址に伴うものとも思われない。文様がある主な土器片を図示するに留める。1は鉢、2は壺、3は甕であり、この内、2は木口状工具による横位の梯子文とでも称すべき文様で、上下を縄文帯が巡る。

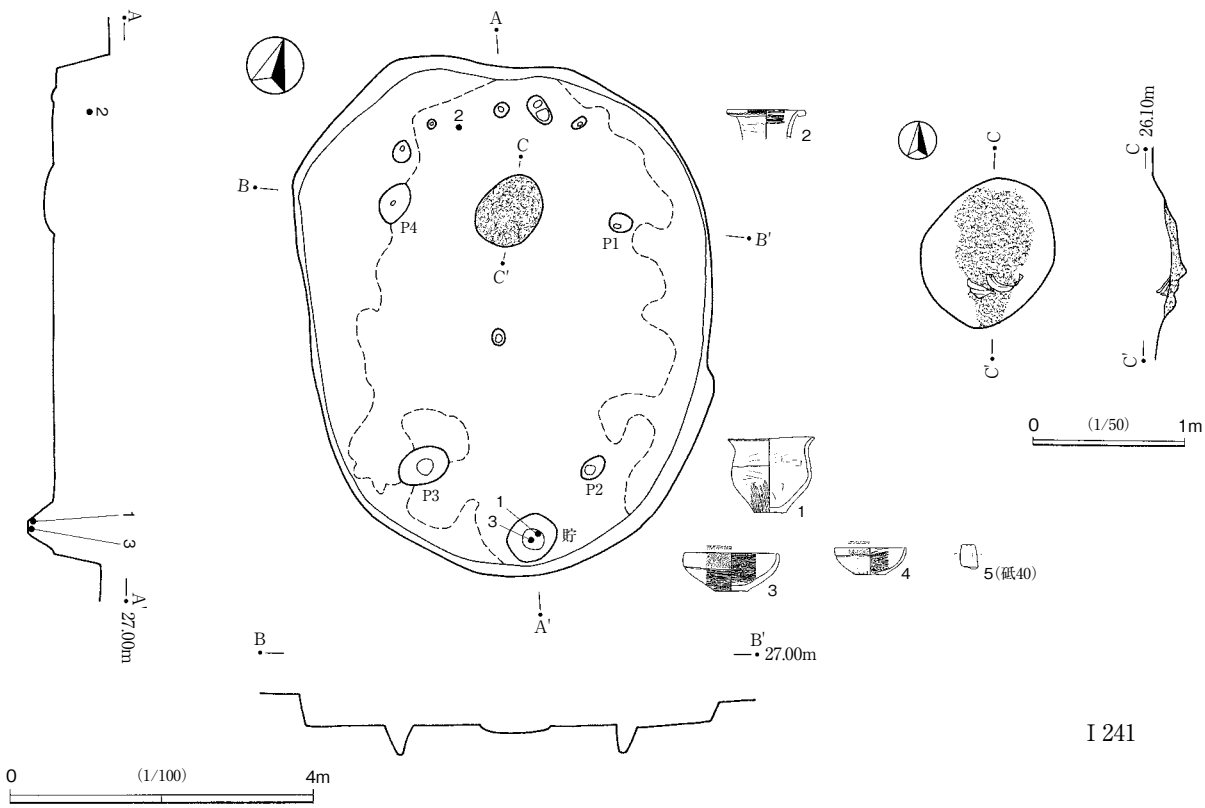
Ⅰ221（第30・41・148・222図、図版3・51・86）

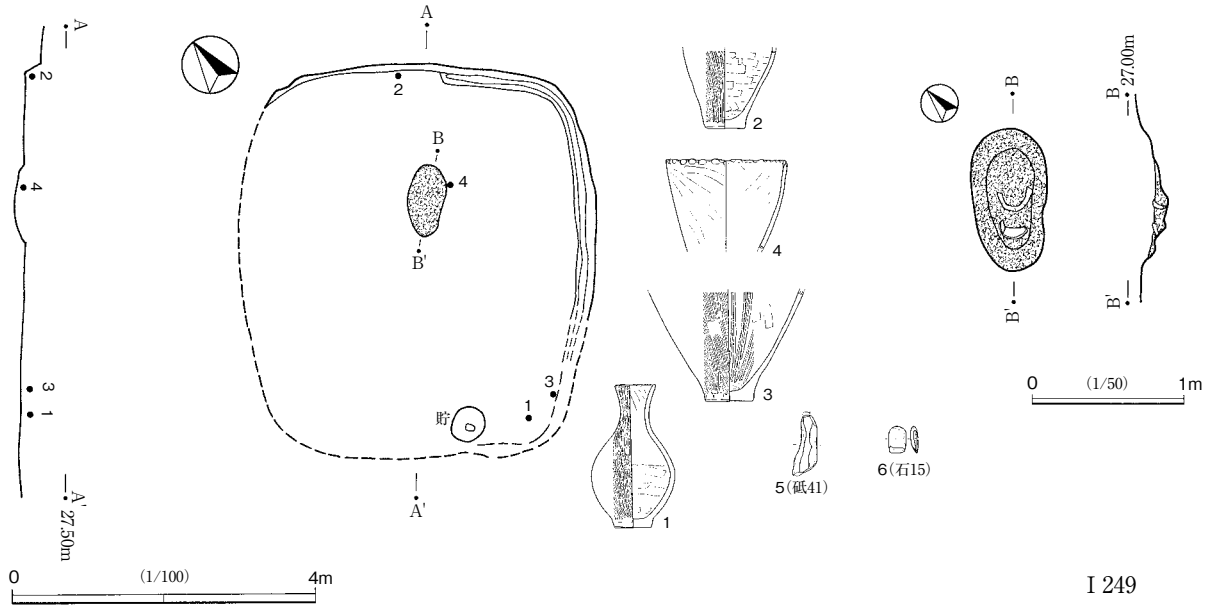
弥生時代中期の大形住居である。Ⅰ区南西に位置する。古墳時代また平安時代の住居による破壊が床の半分以上に及んでいる。形態は隅丸方形と推測され、規模は長径9.0m、短径は7.5mほどになろうか。炉は中央北寄りにあり、焼土層の形成は良い。主柱穴は対応する位置に4本あり、梯子穴は中央壁寄り（壁から約1m）、貯蔵穴は梯子穴と隣接して検出された。踏締め面は残存部が少ないながら、梯子穴北側から北壁下まで確認された。覆土の状況は不明である。

遺物は貯蔵穴覆土中位からまとまって出土したが、このほか南東床面上の遺物も図示する。1は胴部上位波状文の壺、2は胴部上位縄文帯の壺である。共に口縁を意図的に打ち欠いている（2はさらに断面を平滑とし円形の穿孔も施す）がそれ以外は完形である。3は甕の底部を復元・図示した。4は胴部上位に沈線区画の縄文帯を有する大形壺胴部大形片であり、1・2と同レベルからの出土である。5は変形擬流水文とでも称すべき文様帯の壺胴部上位片である。6は流紋岩製敲石の破損品である。

Ⅰ237（第30・41・148・164図）

弥生時代後期の住居である。Ⅰ区中央南寄りに位置する。弥生時代後期の環濠（Ⅰ122）によってその南西隅を壊されている。また、環濠を隔て同じく後期の住居（Ⅰ251）が存在するが、その位置からして、両者が重複しているのは確かである。しかし、床面のレベルが等しいことなどその新旧関係は不明であった。形態は小判形であり、規模は長径7.3m、短径は6.2mである。炉は中央北寄りにあり、住居規模から





第42図　I 241・I 249 住居

すると小形ではあるが焼土層の形成は良い。主柱穴は対応する位置に４本ある一方、梯子穴は検出し得なかった。貯蔵穴は入口右手壁際にある。踏締め面は北側壁寄りから主柱穴を結ぶ内側で確認された。覆土の状況は不明である。

遺物は覆土中の土器をあげる程度である。１は大形の装飾壺胴部大形片を復元・図示した。羽状縄文帯の下部に沈線による山形文を巡らし、その下に結節文帯を施すものである。２は波状口縁輪積甕（口縁内側有段：段部縄文原体押捺列）の大形片を復元・図示した。

Ｉ241（第30・42・148・226図、図版３・51・88）

弥生時代後期の住居である。Ｉ区中央南側台地縁近くに位置する。平安時代の住居と重複するが、遺存状態は良好である。形態は小判形であり、規模は長径6.4m、短径は5.2mである。炉は中央北寄りにあり、焼土層の形成は良い。主柱穴は形態に合わせ対応する位置に４本存在するが、径・深さ共に小規模である。梯子穴は検出し得なった。貯蔵穴は入口右手壁際にあり、底面付近でほぼ完形に近い土器２点が出土した。踏締め面は北側壁寄りから主柱穴・貯蔵穴を結ぶ内側で確認された。覆土の状況は不明である。

遺物は貯蔵穴内２点と覆土中の土器及び砥石各１点ほどである。１・３は貯蔵穴内より出土した。１は波状口縁胴部有段甕のほぼ完形品である。３は口縁部沈線区画の羽状縄文帯を巡らす椀のほぼ完形品である。２・４・５は覆土中より出土した。２は幅の狭い複合口縁壺口縁～頸部片を復元・図示した。４は口縁部沈線区画の擬縄文帯を巡らす椀の１/３個体を復元・図示した。５は軽石Ｂの砥石であり、表裏および側縁全体を使用する。

Ｉ249（第30・42・149・221・226図、図版４・52・86・88）

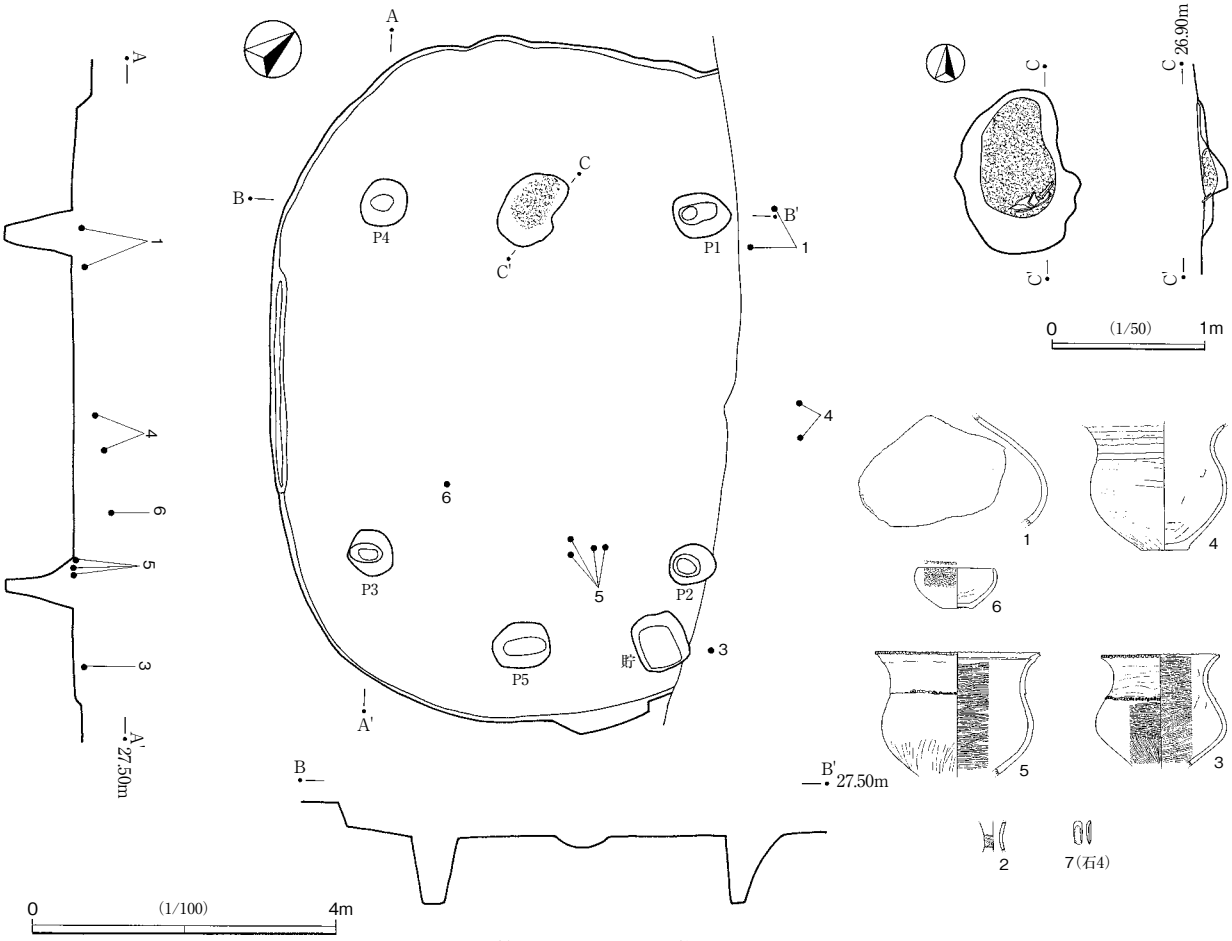
弥生時代中期の住居である。Ｉ区中央南側台地縁近くに位置する。古墳時代および平安時代の住居と重複し、西側から南側を壊されている。形態は隅丸方形と思われ、規模は長径5.1m、短径は4.5m程と推測される。炉は中央北東寄りにあり、焼土層の形成は良い。主柱穴・梯子穴は確認されず、僅かに貯蔵穴のみ入口右手壁際で検出された。踏締め面はとりたてて認められなかった。覆土の状況は不明である。

遺物は遺存状況のわりには多い。何れも床面より多少浮いた状態で出土した。１は小形で且つ無文の壺ほぼ完形品である。２は北壁直下から出土した甕底部大形片を復元・図示した。３は東壁直下より出土した甕底部大形片を復元・図示した。４は炉囲いとして使用されていた甕の口縁～胴部約半個体を復元・図示した。波状口縁甕である。５・６は覆土中より出土した。５は軽石Ｂの砥石であり、全面を使用する。６はハンレイ岩製の小形偏平片刃石斧である。

Ｉ251（第30・43・149・150・164・221図、図版４・86）

弥生時代後期の大形住居である。Ｉ区中央南寄りに位置する。弥生時代後期の環濠（Ｉ122）によってその東側を壊されている。また、環濠を隔て同じく後期の住居（Ｉ237）が存在するが、その位置からして、両者が重複しているのは確かながら、その新旧関係は不明である。形態は小判形ないし胴張隅丸長方形であり、規模は長径8.8m、短径は推測で6.5mほどになろうか。炉は中央北西寄りにあり、焼土層の形成は中央で顕著であった。主柱穴は対応する位置に４本存在し、径・深さともに規格的である。梯子穴は中央南東壁寄り（壁から約１m）、貯蔵穴は入口右手壁寄りにある。踏締め面はとりたてて認められなかった。覆土の状況は不明である。

遺物は床面上の１点（５）を除き何れも覆土下位からの出土である。１は床面近くのレベルから出土した壺胴部大形片である。上位に結節文区画の網目状撚糸文帯（円形朱文塗彩）を巡らすものである。３は同じく床面近くのレベルから出土した波状口縁胴部有段甕（有段部押捺）の底部を欠くほぼ完形品である。４は口縁部を欠く輪積甕である。５は波状口縁胴部上位有段甕（有段部押捺）約半個体を復元･図示した。６は口縁部に結節文帯を巡らす椀であるが、文様帯下部を区切る区画はない。２は小形の壺頸部片を復元･図示した。沈線区画の擬縄文帯を巡らすものである。７は覆土内から出土した小形柱状片刃石斧である。



第43図　Ｉ251 住居

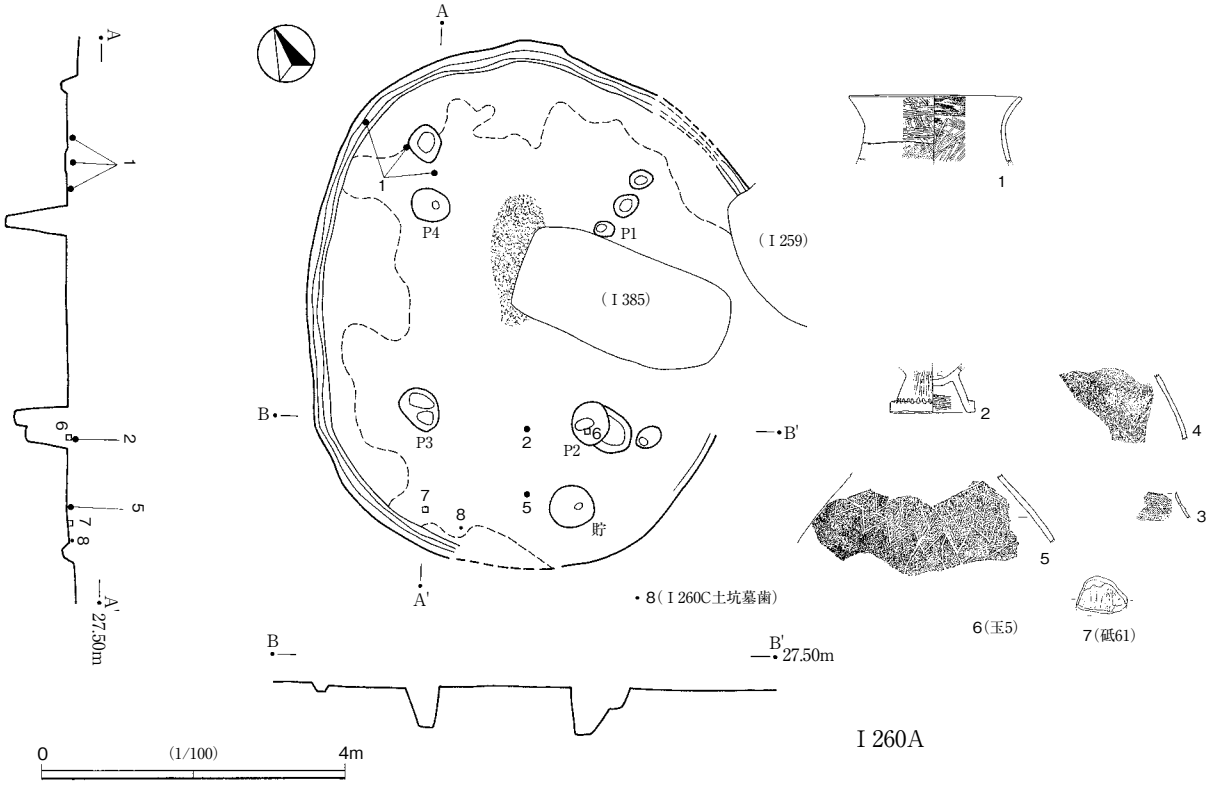
Ｉ260Ａ（第30・44・150・227・230図、図版５・89・91）

弥生時代後期の住居である。Ｉ区中央南寄りに位置する。弥生時代後期の住居（Ｉ260Ｂ）と一致するように重複して大きく壊しているが、逆に同後期の土坑墓（Ｉ385）に炉と床面を壊される関係にある。なお、古墳時代の住居１棟とも北側で重複する。形態は楕円形であり、規模は長径6.5m、短径は推測で5.4mである。炉は中央北東寄りにあり、細長い形状で、住居規模と比較すると大きなものである。主柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴は確認されず、貯蔵穴は入口右手壁寄りにある。踏締め面は壁際を除く全面に認められた。覆土の状況は不明である。

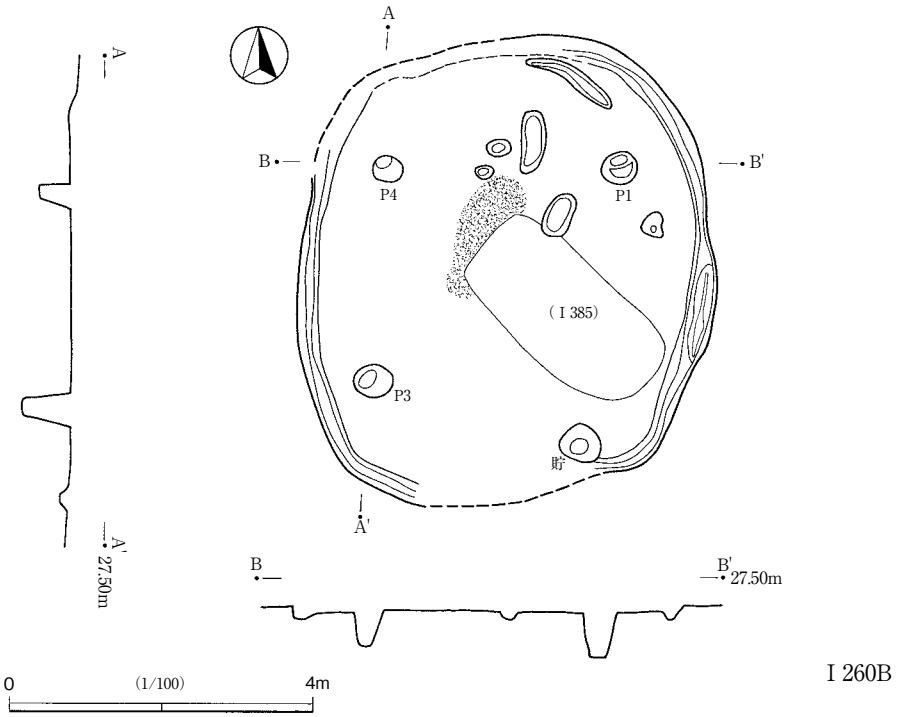
遺物は床面上から多く出土した。１は装飾甕口縁部～頸部大形片を復元・図示した。頸部～胴部上位に沈線区画の羽状縄文帯を施す珍しい例である。２は台付鉢の底部片を復元・図示した。底部複合部端に押捺列を施す。３・４は一括また破片ながら参考程度に図示した（詳細は遺物一覧表）。５は壺胴部上位の大形片である。山形文内を撚糸ないし結節文で装飾する。６は緑色凝灰岩製の管玉である。７は砂岩Ａの砥石である。

Ｉ260Ｂ（第30・44図）

弥生時代後期の住居である。Ｉ区中央南寄りに位置する。既述した弥生時代後期の住居（Ｉ260Ａ）また土坑墓と重複する。形態は胴張隅丸長方形であり、規模は長径5.7m前後、短径は4.9mである。炉は中央やや北寄りにあり、Ａ住居と同様細長い形状である。主柱穴はＰ２が土坑墓に壊され不明の他は対応す



I 260A



I 260B

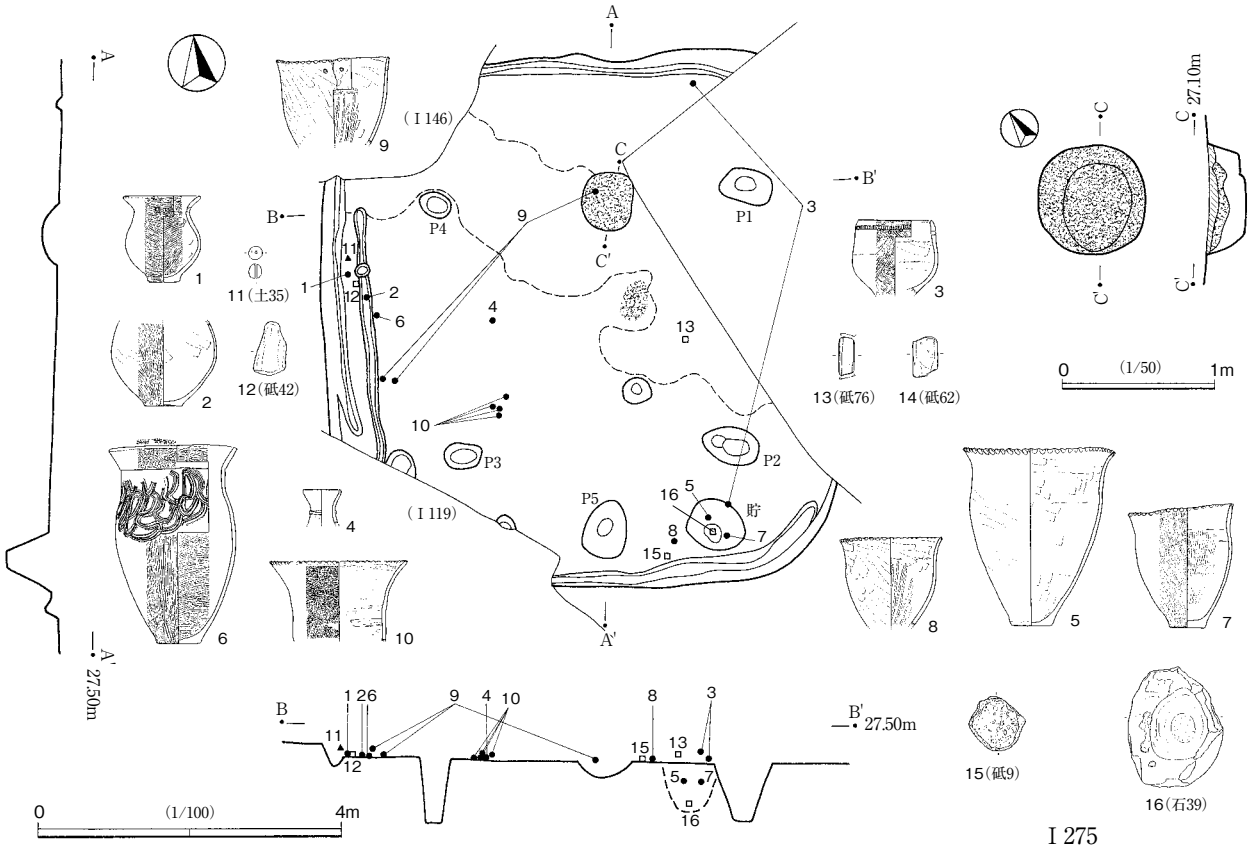
第44図　I 260A・I 260B 住居

る位置に３本存在する。梯子穴は確認されず、貯蔵穴は入口右手壁寄りにある。踏締め面は壁際を除く全面に認められた。覆土の状況は不明である。

遺物は床面近くまで破壊が及んだためか取り立てて報告するものはない。

I 275（第30・45・150・151・223・224・226～228・235図、図版４・52・87～90・94）

弥生時代中期の住居である。Ｉ区中央南寄りに位置する。古墳時代の住居群によってコーナー部を中心



第45図　I 275・I 276 住居

に破壊され、また、確認面そのものが床面近くに及んでいることもあって全体に遺存状態は不良である。形態は隅丸方形であり、規模は長径6.6m、短径は推測で6.5mである。炉は中央北寄りにあり、焼土層の形成は良い。主柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴は中央南壁際（壁から約70㎝）、貯蔵穴は入口右手壁寄りにある。踏締め面は炉の左右に確認されたが、床面の状況を考慮すると、その一部が遺存したとみておくべきであろう。覆土の状況は不明である。

遺物は床面上また貯蔵穴内から多く出土した。１はくびれ部に２孔１対の穿孔を有する鉢のほぼ完形品である。２は壺胴部～底部の約半個体を復元・図示した。３は有段口縁（有段部押捺列）かつ口縁下に２孔１対の穿孔を有する鉢約半個体を復元・図示した。４は小形の壺口縁～頸部片を復元・図示した。５は波状口縁大形甕のほぼ完形品である。６は装飾甕のほぼ完形品である。有段口縁上に擬縄文帯、くびれ部から胴部上位にかけて縦位の櫛描波状文（曲線文）を施す。７・８は共に波状口縁甕のほぼ完形品である。９は同じく波状口縁甕ながら、口縁部に２孔１対の穿孔を有する。約半個体を復元・図示した。10は波状口縁かつ胴部中位に横位櫛描羽状文を施す甕約半個体を復元・図示した。11は土玉である。12は軽石Ｂの砥石である。13は砂岩B､14は砂岩Aの砥石片と考えられる。15は軽石Aの砥石である。16は安山岩製石皿の欠損品である。

Ｉ276（第30・45・164・237図、図版５・95　）

弥生時代中期の住居である。Ｉ区中央南寄りに位置する。弥生時代後期の環濠（Ｉ122）に住居中央を南北に壊される。形態は胴張隅丸方形であり、規模は長径6.8m前後、短径は6.1mである。炉は中央やや北寄りにあり、焼土層の形成は良い。主柱穴は環濠に破壊されたＰ４を除き対応する位置に３本存在する。梯子穴は中央壁寄り（壁から70㎝）にあり、貯蔵穴は入口右手壁寄りにある。踏締め面はとりたてて認められなかった。覆土は緩やかな凹レンズ状の堆積を示し、２・３層には焼土が含まれる。

遺物は比較的遺存状況が良いにもかかわらず、覆土中から土器片が散在する状況で出土したのみであった。実測個体がないためその出土状況を図示しておくが、主な遺物は拓本にて報告する。共に中期の土器片である。１はミニチュア土器である。２～４は波状口縁甕ながら、４は有段口縁をなすもので、有段部に刻目を巡らしている。

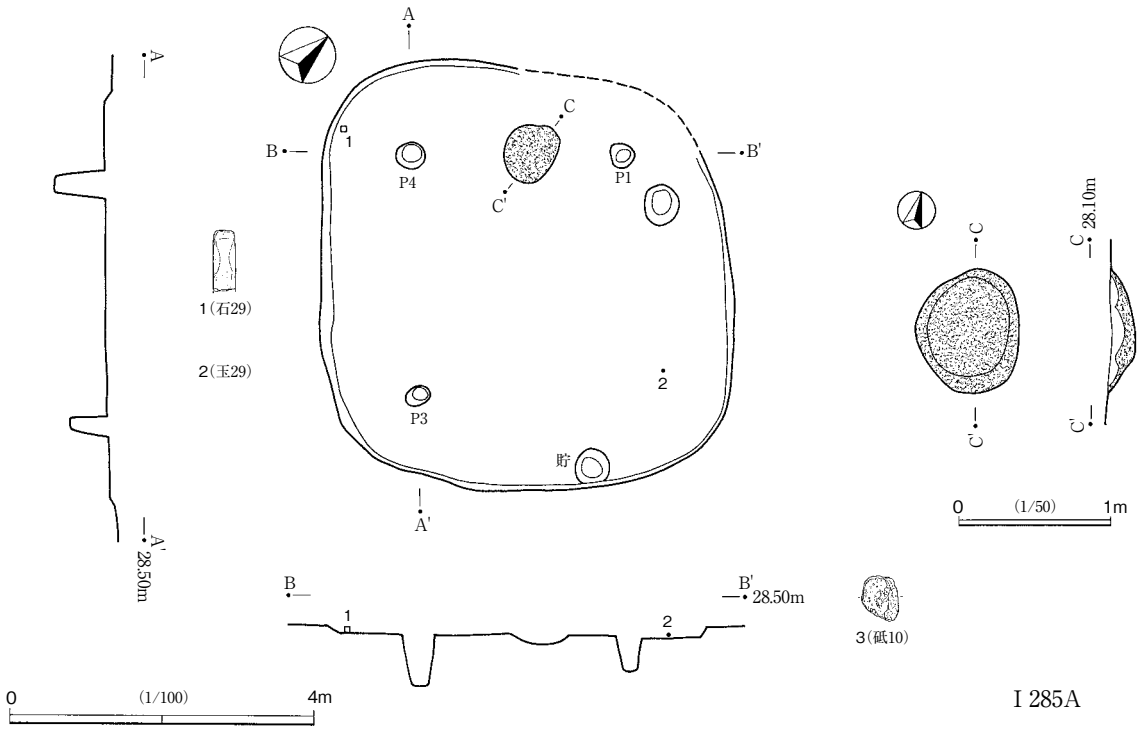
Ｉ285Ａ（第30・46・222・224・230図、図版５・86・87・91）

弥生時代後期の住居として報告するが、中期の可能性もある。同じく弥生時代に属する（Ｉ285B）住居より新しく、古墳時代の住居や平安期の溝とも重複する。形態は隅丸方形であり、規模は長径5.5m前後、短径は5.2mである。炉は中央やや北西寄りにあり、焼土層の形成は良い。主柱穴は西側のみ明瞭で、Ｐ１は該当する位置にあるものの、浅く径も小さい。また、Ｐ２は未検出に終わっている。梯子穴は確認出来なかったが、貯蔵穴は入口右手壁際にある。踏締め面はとりたてて認められなかった。覆土の状況は不明である。

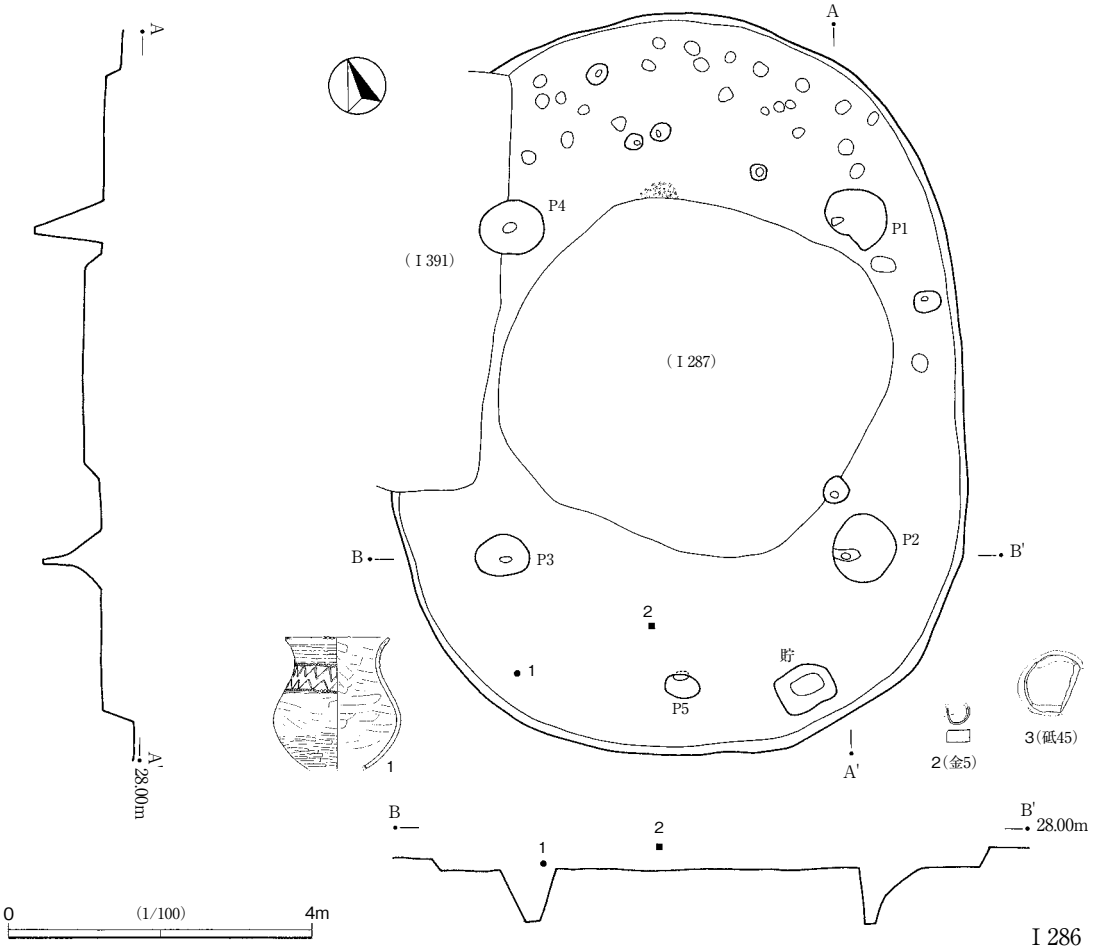
遺物は北西壁際から石斧の破損品が、南東床面上から小玉破損品が出土した。この他には覆土中から僅かな土器片と砥石が出土した程度である。１は閃緑岩製抉入石斧の刃部先を欠く破損品である。２は水色のガラス製小玉の破損品である。３は軽石Aの砥石である。

Ｉ286（第30・46・151・226・244図、図版５・88・100）

弥生時代後期の大形住居である。Ｉ区中央南東寄りに位置する。弥生時代後期の住居（Ｉ287）がすっ



I 285A



I 286

第46図　I 285A・I 286 住居

ぽりと入るかたちで中央部を大きく壊している。また、古墳時代前期以降の住居群が複雑に重複しており、結果として壁の遺存は悪い。形態は小判形であり、規模は長径9.6m前後、短径は7.4mである。炉は中央やや北寄りにあるが、重複住居によってその大部分を失っている。主柱穴は対応する位置に４本存在し、断面円錐状を呈する。梯子穴は中央壁寄り（壁から100㎝）貯蔵穴は入口右手壁寄りにある。踏締め面はとりたてて認められなかった。覆土の状況は不明である。

遺物は床面上の１点の土器を除き入口側覆土内から散在するかたちで出土した。小形銅鐸が南東部覆土上位から出土しているが、銅鐸そのものの年代観や出土レベルまた位置から、Ⅰ390に本来付属するものとして除外した。１は波状口縁輪積甕大形片を復元・図示した。胴部上位に円形スタンプ文上下区画の山形文を施す珍しいものである。２は銅環破損品である。幅20.8㎜、径は20.0㎜程と推測される。３は軽石Ｂ磨石状砥石破損品である。

Ⅰ289（第30・47・151・164・223・224・235図、図版６・53・86・87・94）

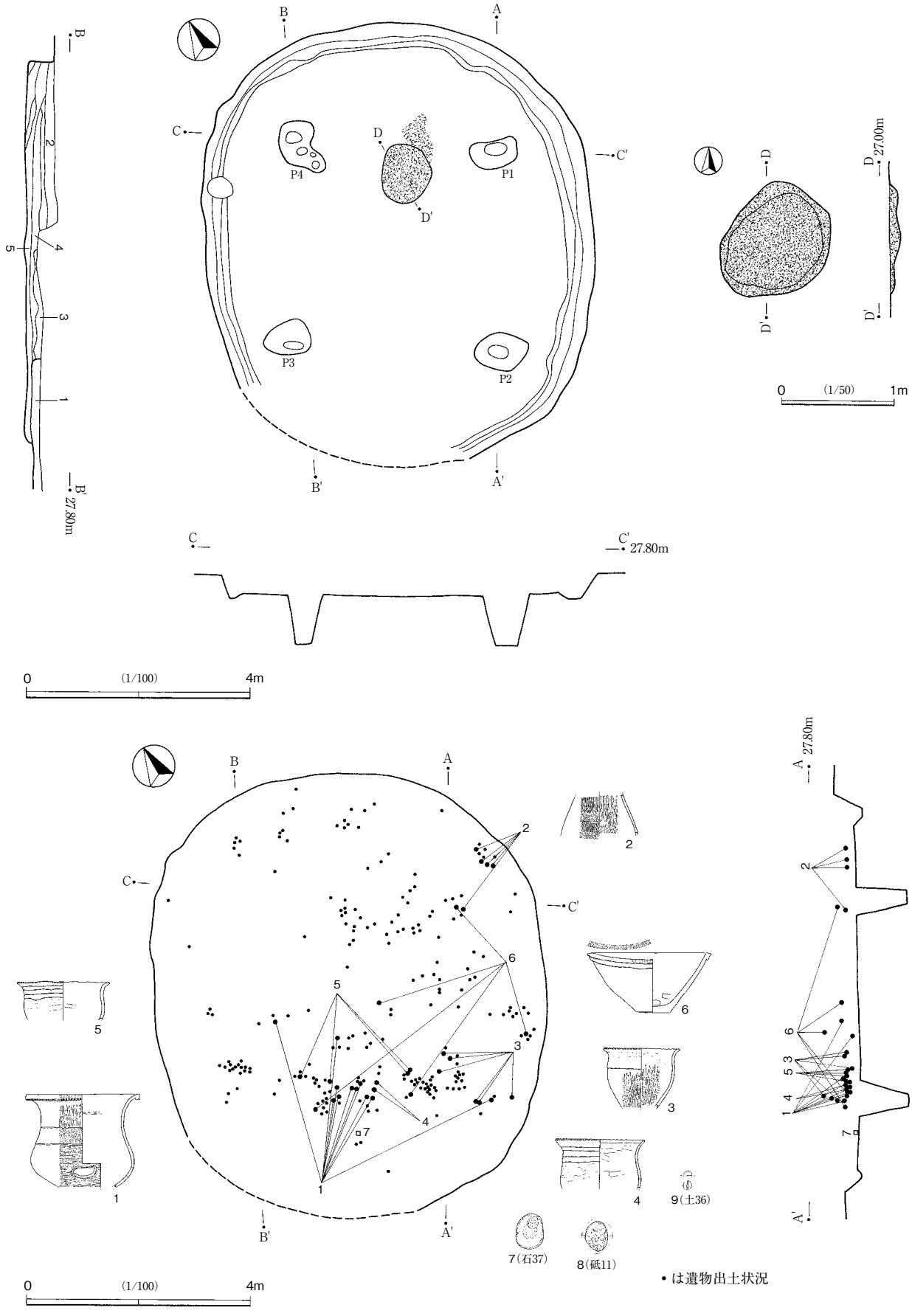
弥生時代後期の住居である。Ⅰ区中央やや南寄りに位置する。弥生時代後期以降の住居群と重複し、本址が最も古い。形態は隅丸方形というより楕円形に近い。規模は長径6.9m前後、短径は6.1mである。炉は中央やや北東寄りにあり、焼土層の形成は良い。炉奥には流れたような焼土の堆積が見られた。主柱穴は対応する位置に４本存在し、何れも深さ90㎝前後の深さを有する。梯子穴は該当する部分が壊されており、確認出来なかった。貯蔵穴も同様である。踏締め面はとりたてて認められなかった。覆土は底面近くが暗褐色土、底面から10㎝～30㎝（３層～５層）が炭化物を含む黄褐色土、上位が暗黄褐色であった。

遺物は南側床面の１点の磨石を除き、覆土中、とりわけ床面から約20㎝ほど上位のレベルで多く出土した。接合する遺物も多く、多少堆積した段階（３層～５層）での投棄によると思われる。比較のため遺物全点を図示した。１は複合口縁装飾広口壺約半個体を復元･図示した。口縁上に縄文帯、同下端に押捺列、胴部上位に羽状縄文帯を巡らすものである。胴部下位には意図的な打欠きが認められる。２は結節文帯を２段巡らす壺胴部上位片を復元・図示した。中期の土器であろう。３は波状口縁輪積甕の底部を欠くほぼ完形品である。４、５も同様ながら前者は約半個体、後者は約１/３個体を復元・図示した。６は口唇部に縄文帯を巡らす複合口縁大形鉢約半個体強を復元・図示した。７は石英安山岩製の磨石である。その形状から縄文時代の石器の可能性もあるが出土状況から本址に伴うものとして報告する。８は軽石Aの砥石である。９は土玉約半個体である。

Ⅰ287（第30・48図、図版５）

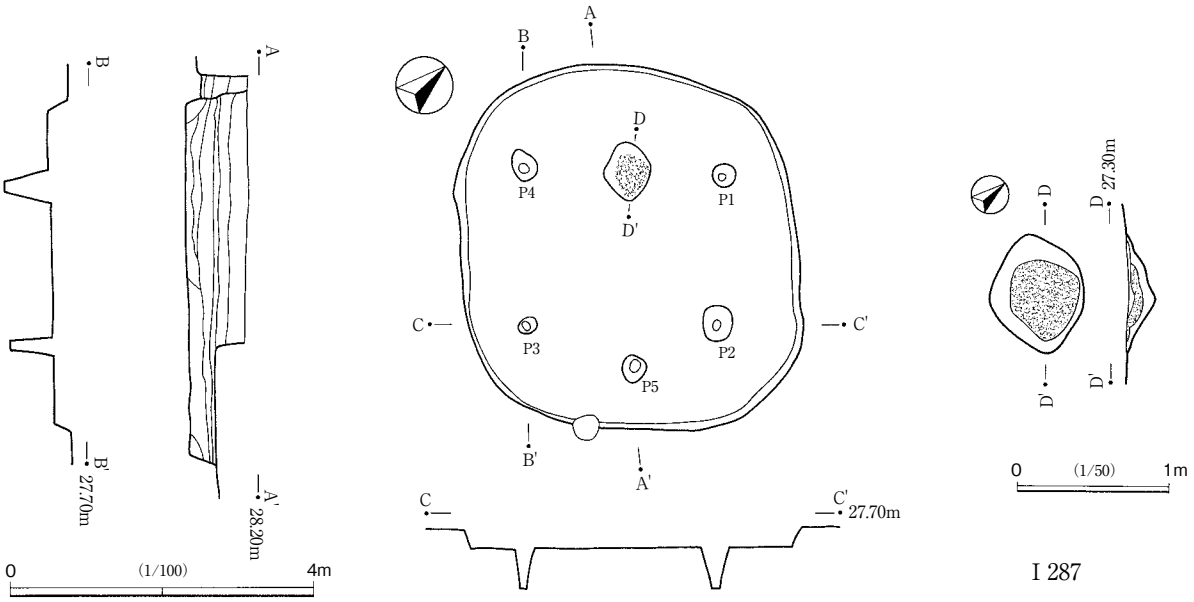
弥生時代後期の住居である。Ⅰ区中央やや南東寄りに位置する。弥生時代後期の住居（Ⅰ286）中央を壊すかたちで重複する。また、古墳時代以降の住居群とも複雑に重複するが、そのわりには遺存が良い。形態は隅丸方形であり、規模は長径4.6m前後、短径は4.3mである。炉は中央北西寄りにあり、焼土層の形成は良い。主柱穴は対応する位置に４本存在し、径・深さ共に規則的である。梯子穴は中央壁寄り（壁から約80㎝）にある。貯蔵穴、踏締め面は認められなかった。覆土は暗褐色～黒褐色土で占められ、ほぼ水平に近い堆積状況であった。これといった遺物の出土がみられないことなど、自然堆積と思われる。

遺物は若干の土器片のみであり、床面はもちろん覆土中においても同様であった。その意味では住居廃棄の一つの様相を示すものと捉えられる。

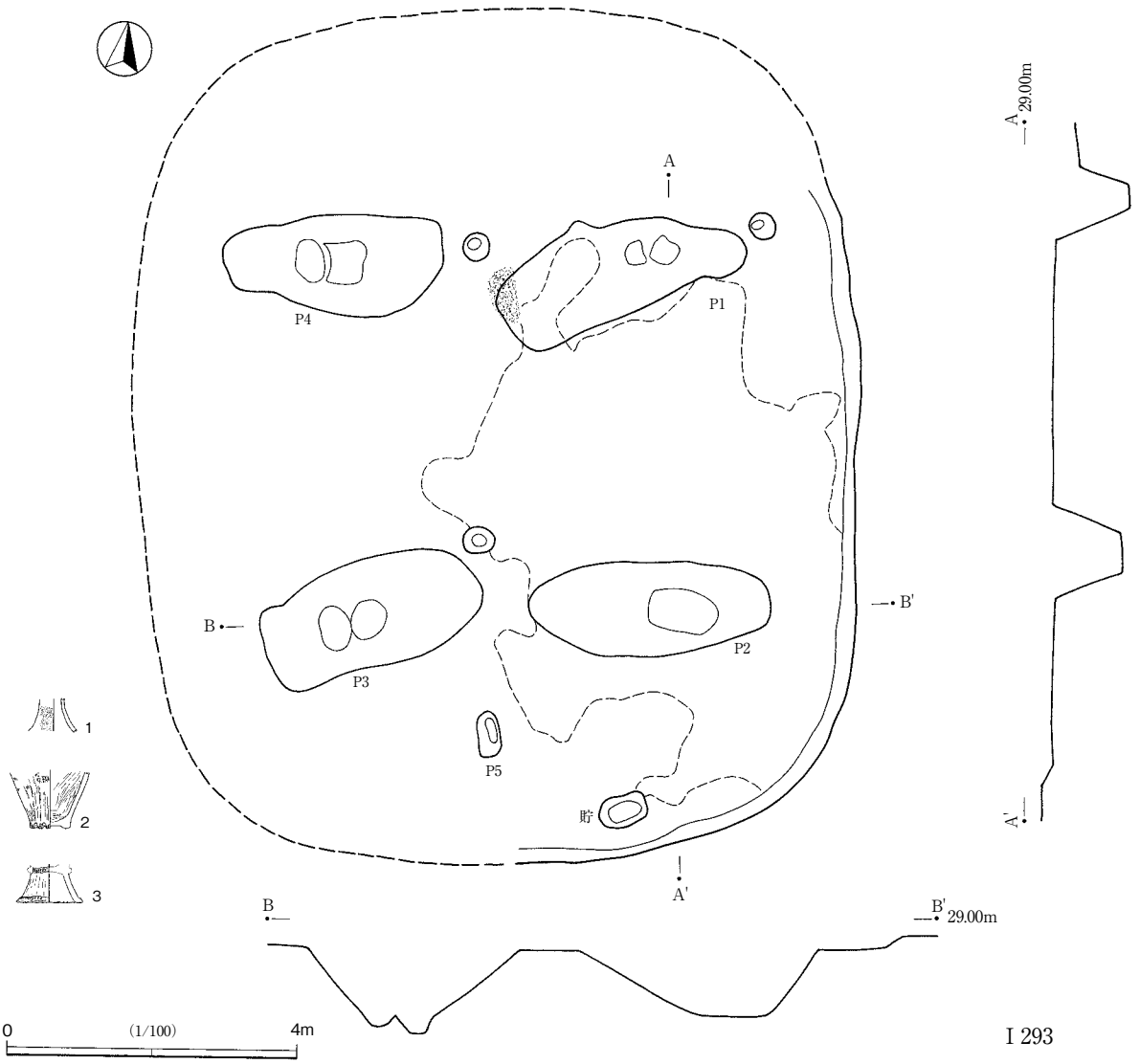


B
A
C
C'
D
D'
P1
P2
P3
P4
B'
A'
27.80m
27.00m
0
(1/50)
1m
(1/100)
4m
7(石37)
8(砥11)
9(土36)
• は遺物出土状況

第47図　I 289 住居

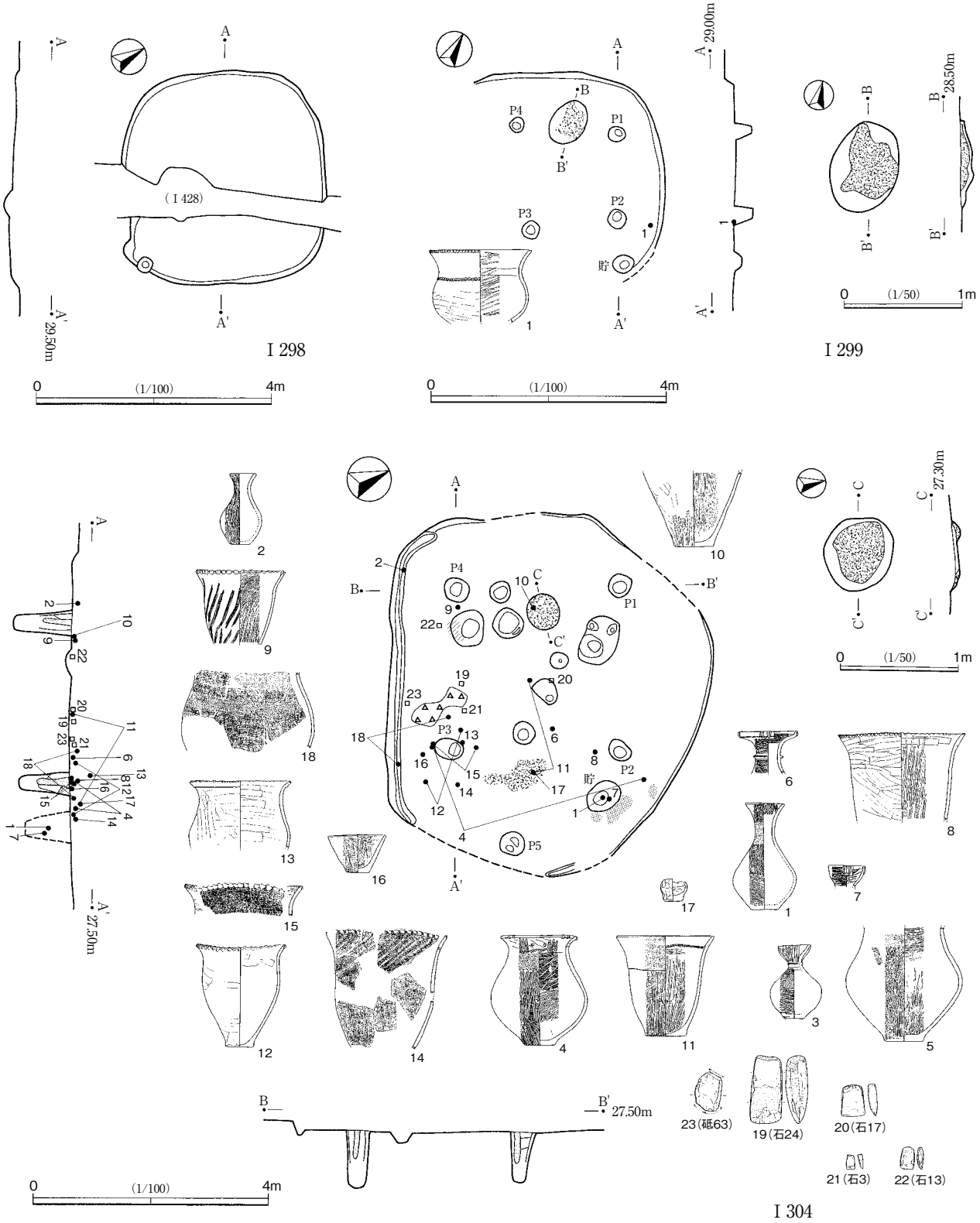


I 287



I 293

第48図　I 287・I 293 住居



第49図　I 298・I 299・I 304 住居

I 293（第30・48・151・164図）

弥生時代中期の大形住居である。I 区南東端に位置する。弥生時代中期の住居（I 374）と重複するがその新旧は不明である。同じく、同後期の住居群（I 379・I 383）とも重複し、遺存状況は良くない。形態は隅丸方形で、規模は推定で長径11.8m、短径は9.8mである。炉は中央やや北寄りにあり、床面の遺存

状況が悪いとはいえ、小さく焼土層も不明瞭であった。主柱穴は対応する位置に４本存在し、何れも大きな掘形を有するものであった。図示しているピット上場はこの掘形に相当するものである。梯子穴はＰ５が該当すると思われるが、壁からの距離もあり（壁から1.9m）、且つピットそのものが縦長であるなど疑問もある。貯蔵穴は入口右手壁寄りにある。踏締め面は残存部を図示した。覆土の状況は不明である。

遺物は床面付近から出土した一括品を図示した。１は頸部～胴部上位にかけて縄文帯を巡らす壺であり、約２/３個体を復元・図示した。２は底部端に切込みを有する壺底部半個体を復元・図示した。３は有段の底部端と括れ部粘土帯上に擬縄文押捺を巡らす高坏底部である。

Ｉ298（第30・49図、図版６）

弥生時代後期の小形住居である。Ｉ区南東端に位置する。後世の溝が中央を横切るように切っている。また、地形条件もあって遺存状況は不良である。形態は隅丸方形であり、規模は長径3.5m、短径は3.3mである。炉・主柱穴、また、梯子穴、貯蔵穴も存在しない。床面の踏締めは弱い。覆土の状況は不明である。

遺物は僅かな土器片のみであったが、それから本址の所属時期を特定した。

Ｉ299（第30・49・151・164図、図版６）

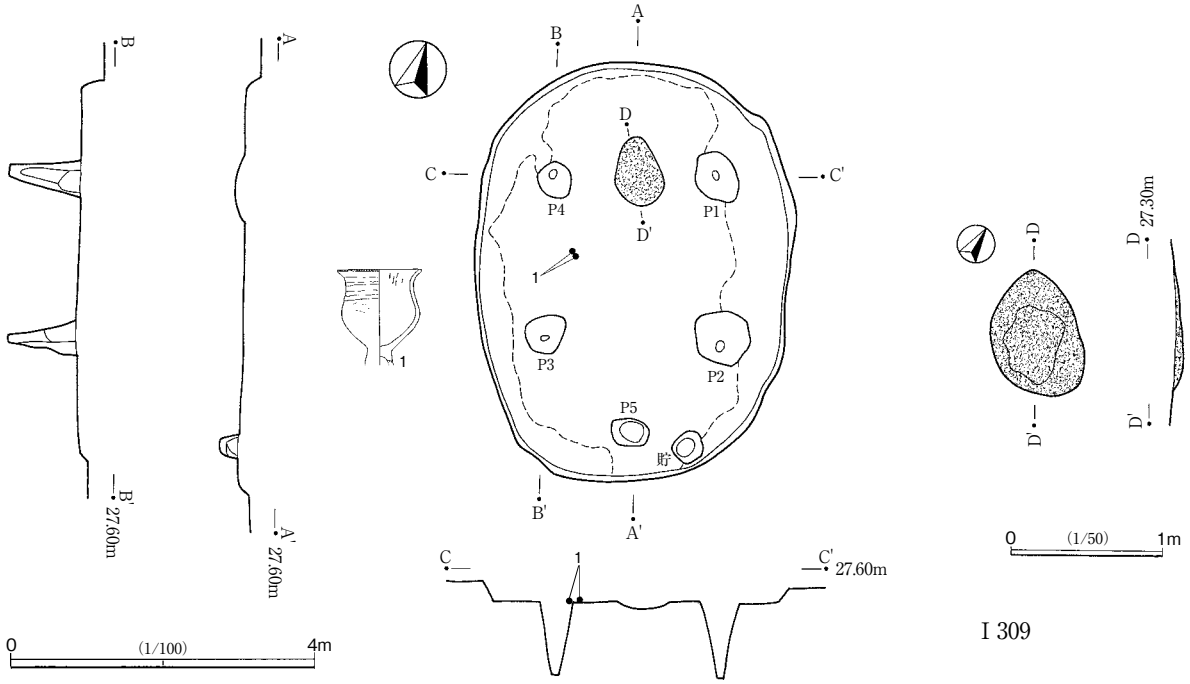
弥生時代後期の住居である。Ｉ区南東端に位置する。溝との重複や地形条件もあって遺存状況は不良である。形態は隅丸方形になろうかと思われる。規模は推定で長径3.6m、短径3.5mである。炉は中央北側壁寄りにある。主柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴は未検出であるが、貯蔵穴は入口右手壁際にある。踏締め面は認められなかった。覆土の状況は不明である。

遺物は東側壁下床面から出土した土器が本址に付属するものとしてあげられる。１は波状口縁胴部上位有段甕１/３個体を復元・図示した。有段部には円形のスタンプ文を巡らすものである。

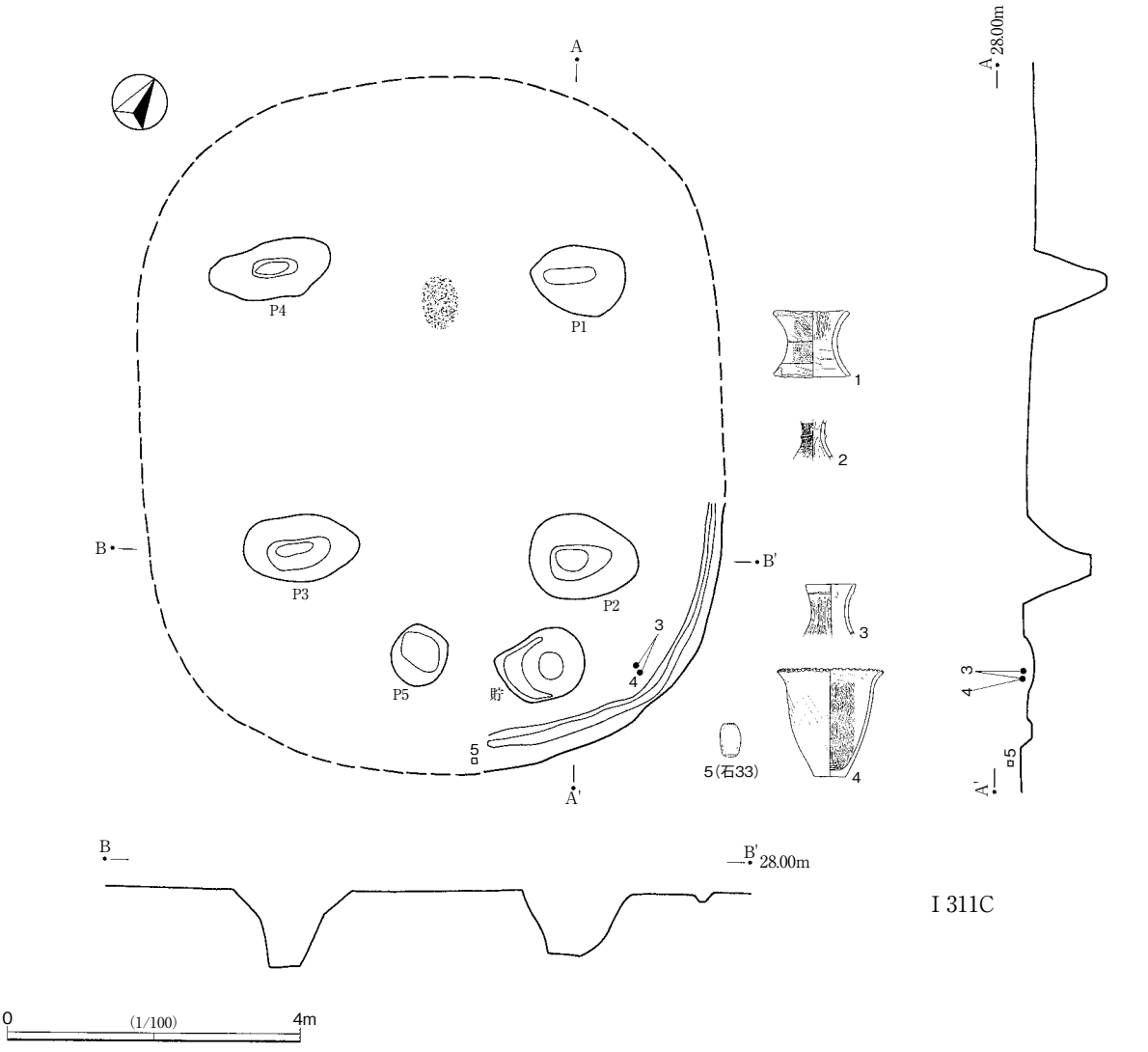
Ｉ304（第30・49・152・153・165・221・222・227図、図版７・53・86・89）

弥生時代中期の大形住居である。Ｉ区中央西側に位置する。古墳時代の住居２棟と重複し、遺存状況は不良である。南側以外は壁のラインが不明瞭であるが、いちおう確認状況を図示しておく。残存部の様子からして形態は恐らく隅丸方形の形態をなすものであろう。それゆえ、規模は長径6.1m、短径は5.1mほどと推測される。炉は中央やや北西寄りにあり、焼土層の形成は不良である。主柱穴は対応する位置に４本存在し、径に比して深いという特徴がある。また、柱穴痕跡が遺存した。梯子穴はＰ５が候補にあがるが、柱穴や貯蔵穴と離れており、別の遺構に付属する可能性もある。貯蔵穴は入口右手壁寄りにある。踏締め面は不明瞭で、覆土の状況は不明である。

遺物は床面上に散乱するかたちで多く出土したが、他に貯蔵穴内（１・７）からも出土している。１は小形の壺完形品である。頸部に羽状縄文帯を巡らす。２は無文の壺完形品である。３は口縁部に縦位に２本１組の粘土帯を３単位貼り付け、頸部には工具による刻みを巡らす小形の壺ほぼ完形品である。４は口唇部に２本１組の粘土帯を貼り付け（４単位か）、頸部に２孔１組の穿孔を対面に施す鉢であり、頸部には結節文帯を巡らす。約半個体強を復元・図示した。５は頸部に羽状縄文帯、その下位に沈線区画の縄文帯を山形状に配するもので、装飾甕としてよいであろうか。約１/３個体を復元・図示した。６は細頸ながら大形の壺口縁部片を復元・図示した。口縁部に２本１組の縦位粘土帯（単位不明）を貼り付け、頸部



I 309



I 311C

第50図　I 309・I 311C 住居

横位の粘土帯上には刻み目を巡らすものである。７は２本１組（単位不明）の縦位の粘土帯を貼り付ける受口状口縁壺片を復元・図示した。８は波状口縁大形甕の半個体を復元・図示した。９は同じく波状口縁甕（底部欠）ながら、胴部に斜めの櫛描文を２段施している。10は甕底部大形片を復元・図示した。11は口縁部から胴部にかけて擬縄文帯、また、口縁部内側有段部に刻み目を共に巡らす甕である。約１/３個体を復元･図示した。12は波状口縁甕半個体を復元･図示した。13は波状かつ有段口縁甕約１/３個体を復元･図示した。14は９と文様が類似する甕であるが､こちらは櫛描が波状である。15は波状口縁甕口縁部を復元･図示した。16は小形かつ無文で完形に近い鉢である。17はいわゆる手捏ね土器完形品である。18は広口壺大形片を復元・図示した。胴部上位に上下沈線区画の結節文帯を巡らす。19以降は石器・砥石である。19は砂岩製の太形蛤刃石斧であり、基部は再生した痕跡が窺える。20・22は偏平片刃石斧、21は小型柱状片刃石斧であり、それぞれ石質は細粒ハンレイ岩、蛇紋岩、粘板岩である。23は砂岩Ａの砥石である。

Ｉ309（第30・50・153図）

弥生時代後期の住居である。Ｉ区中央西側寄りに位置する。弥生時代中期（Ｉ153)、同後期の住居（Ｉ200)と重複し、後者が新しい。また、平安時代の住居群とも重なるが全体の形状を掴むことは可能であった。形態は小判形であり、規模は長径5.3m、短径は4.1ｍである。炉は中央北寄りにあり、焼土層の形成は良い。主柱穴は対応する位置に４本存在し、径に比して深いという特徴がある。また、一部に柱穴痕跡が遺存した。梯子穴は中央南壁寄り（壁から約60㎝)、貯蔵穴は入口右手壁際にある。踏締め面は左右の壁際を除く範囲で確認された。覆土の状況は不明である。

遺物は中央西側床面上の１点を挙げる程度であった。１は波状口縁輪積台付甕である。台部下位を欠く。

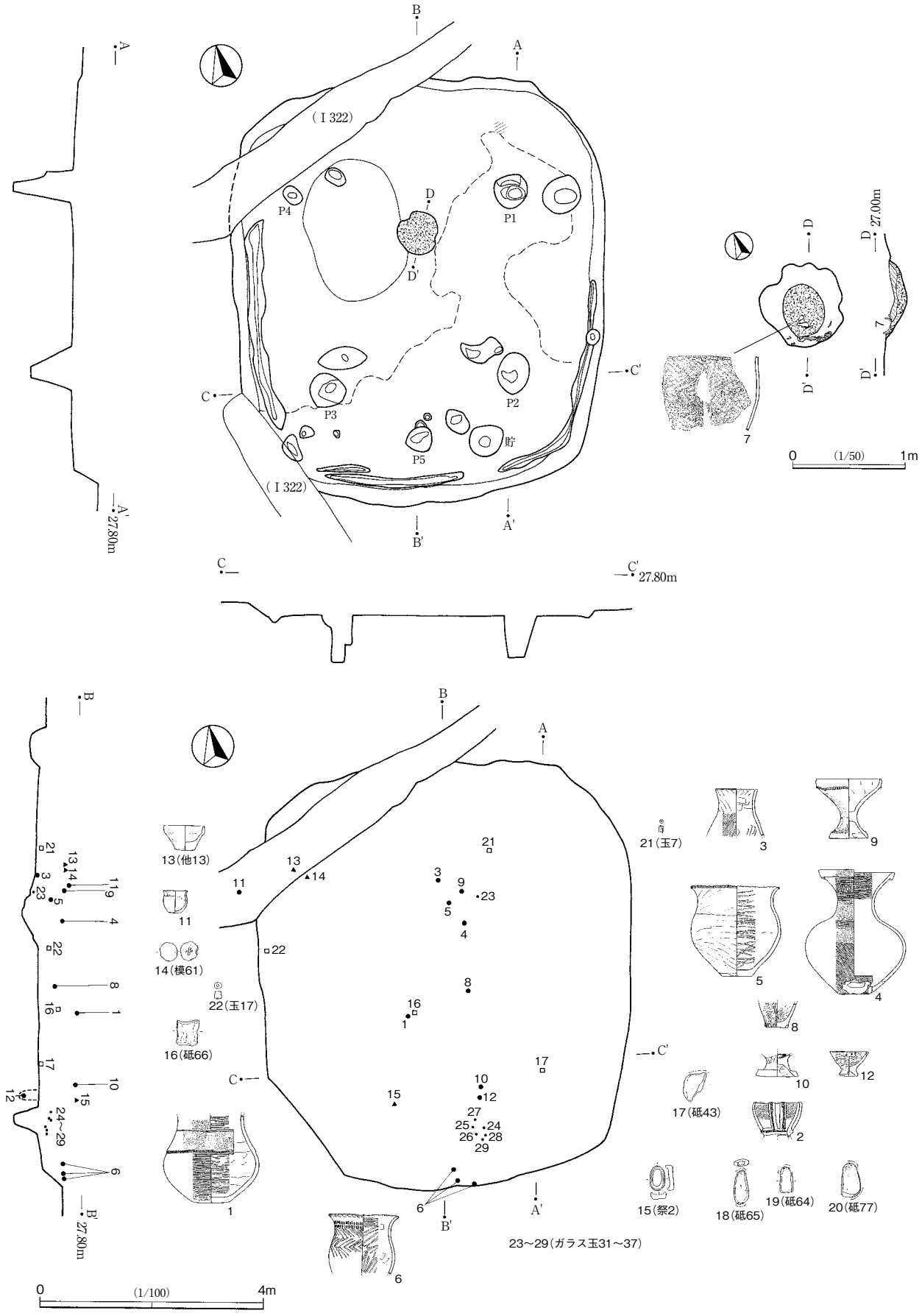
Ｉ311Ｃ（第30・50・153・165・222図、図版52・86）

弥生時代中期の大形住居である。Ｉ区中央北寄りに位置する。古墳時代の住居群と重複し、遺存状況は不良である。形態は隅丸方形、規模は長径9.4m、短径は8.0ｍ程と推測される。炉は中央北西寄りにあるが、内部の情報を欠いており、住居規模に比して小さい。主柱穴は対応する位置に４本存在し、大きな掘形を有する。梯子穴は中央南東壁寄り（壁から約160㎝)、貯蔵穴は入口右手壁寄りにある。踏締め面は床面の遺存が悪く確認できない。覆土の状況も同様である。

遺物は僅かな残存部にしてはまとまって出土した。３・４が出土状況から住居の年代を示すものとしてよい。１は壺頸部を加工して鼓形（炉器台か）としたもので、壺自体は頸部上下沈線区画の縄文帯（附加条縄文－斜縄文－附加条縄文）を巡らすものである。２は壺頸部片を復元・図示した。横位の粘土帯上に刺突文が巡る。３は有段口縁壺口縁部片を復元・図示した。４は波状口縁甕の完形に近い土器である。５は砂岩の敲石であり、弥生時代に固有の形態である。

Ｉ326（第30・51・153・165・226～228・230・237・242図、図版７・53・88～91・98）

弥生時代中期の住居であり、調査時は326Ａとした住居に該当する。Ｉ区中央に位置する。弥生時代後期の住居（Ｉ342Ａ）・方形周溝墓・土坑墓に一部を壊されている。形態は隅丸方形であり、規模は長径7.2ｍ、短径は6.1ｍである。炉は中央北寄りにあり、焼土層の形成は良い。主柱穴は対応する位置に４本存在する。伴うかどうかわからないが、検出したピットは一応図示する。梯子穴は中央南壁寄り（壁から約



(I 322)
P1
P2
P3
P4
P5
貯
27.00m
27.80m
0 (1/50) 1m
13(他13)
14(模61)
22(玉17)
16(砥66)
21(玉7)
17(砥43)
15(祭2)
18(砥65)
19(砥64)
20(砥77)
23～29(ガラス玉31～37)
0 (1/100) 4m

第51図　I 326 住居

110㎝)、貯蔵穴は入口右手壁寄りにある。踏締め面は確認範囲を図示するが、北西部は失われた可能性がある。覆土の状況は不明である。

遺物は炉囲いとして使用された甕を除いては覆土に由来すると思われる。この内、南壁近くでまとまって出土したガラス玉については、その位置から方形周溝墓に由来する可能性もないではないが、出土レベル等から本址に付属すると判断した。また、12についてはピット内とはいえ既述した理由から他の遺構（Ⅰ342Aか）に伴うものかもしれない。なお、覆土出土土器、とりわけ後期の土器は後期中葉以降に位するが、そうすると床面から20㎝～60㎝のレベルの覆土はこの時期に形成されたと考えられる。1は広口壺約半個体を復元･図示した。胴部上位に沈線と有段部（刻み目を巡らす）によって上下区画内部を網目状撚糸文施文のH形文（縦位と横位）で連続させるものである。2は刻み目を施す粘土帯を縦横に配し、間を結節文で充たした装飾に富む壺口縁部片を復元・図示した。3は無文の壺口縁～頸部大形片を復元・図示した。4は底部側縁を意図的に打ち欠いた壺完形品である。複合口縁部と頸部および胴部上位に羽状縄文帯（口縁以外は結節文区画）を施し、文様帯を除く外面と口縁部内面を赤彩する。5は波状口縁甕の完形品である。胴部上位には僅かに輪積み痕を意図的に一条残している。6は波状口縁甕の約半個体を復元・図示した。頸部に2段の刻み目、胴部上位に横位の箆描羽状文を施すものである。7は胴部上位に刻み目、同中位に箆描羽状縄文帯を巡らす甕大形片である。8は底部縁に深い刻み目を巡らす甕の破片を復元・図示した。9は口縁と底部の有段部に工具押捺痕を巡らす高坏約2/3個体である。10は高坏かと思われる底部片を復元・図示した。11は小形・無文の手捏ね土器約半個体である。12は口縁に2孔1対の穿孔を有する小形台付椀完形品である。13はミニチュアである。14は鏡の土製模造品である。15はほぼ完形の槽形土製品、16・18・19は砂岩A、17は軽石B、20は砂岩Bの敲石を兼ねた砥石である。21は緑色凝灰岩製の管玉、22は滑石製の管玉、23～29は青色ないし紺色を呈するガラス玉である。

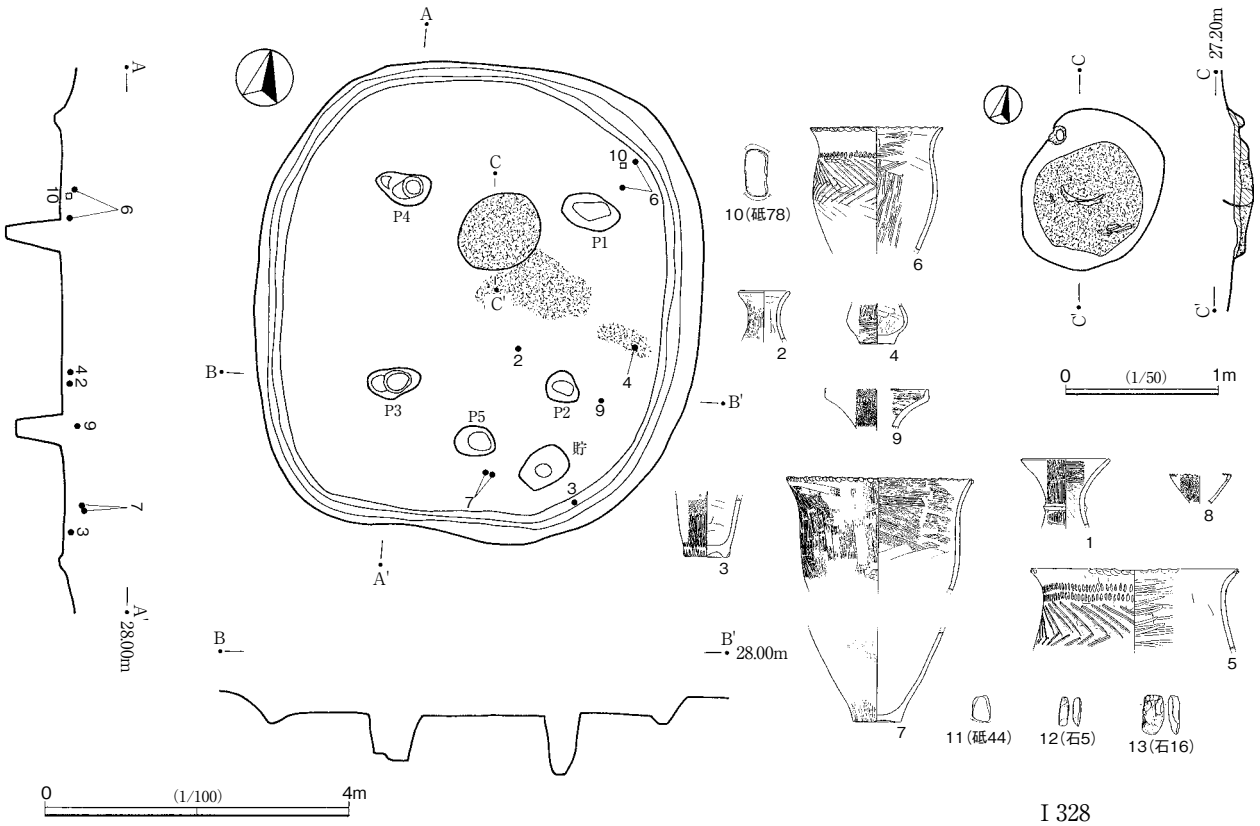
Ⅰ328（第30・52・153・154・221・226・228図、図版6・86・88・90）

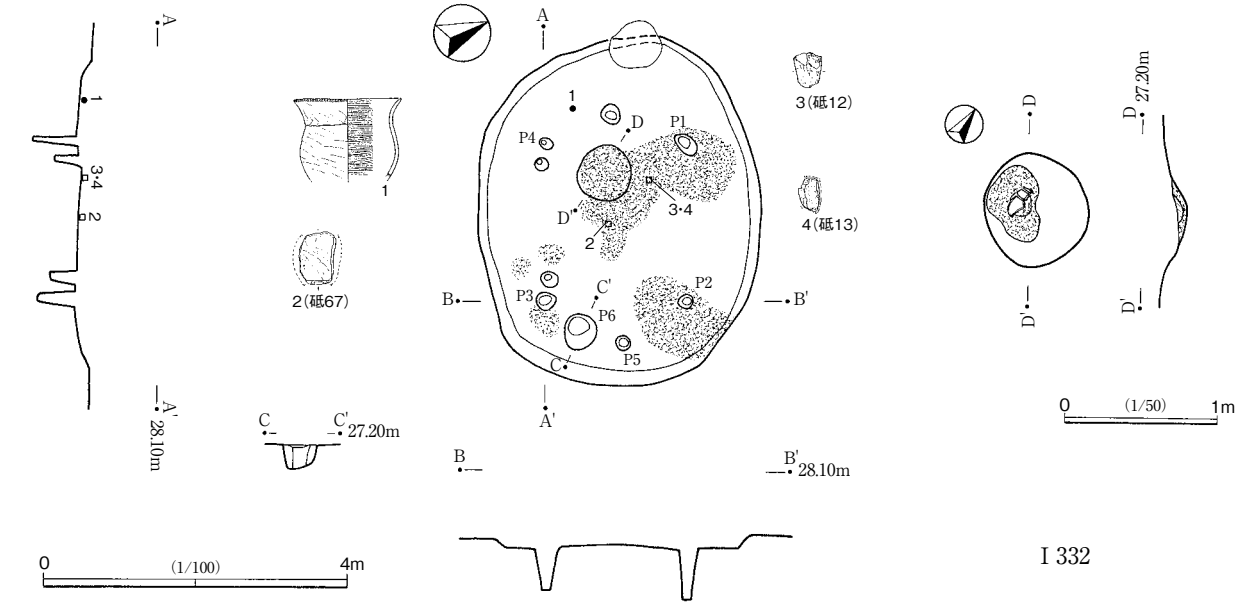
弥生時代中期の住居である。Ⅰ区中央に位置する。弥生時代後期の住居ほかと重複し、西側は床面付近まで壊されているが、全体のプランは確認可能であった。形態は隅丸方形、規模は長径5.7m、短径は5.0mである。炉は中央北寄りにあり、焼土層の形成は良い。主柱穴は対応する位置に4本存在する。梯子穴は中央南壁寄り（壁から130㎝)、貯蔵穴は入口右手壁寄りにある。踏締め面は不明瞭であった。覆土の状況は遺存悪く不明である。

遺物は床面から若干浮いた状態で多く出土した。1・2は壺口縁部片を復元・図示した。2は頸部に横位の粘土帯を巡らすものである。3は鉢胴部以下の大形片を復元・図示した。上げ底の底部外縁に櫛描による列点とヘラ状工具による刻み目、胴部に結節文帯を巡らすものである。4は小形の鉢底部1/3個体を復元･図示した。5は波状口縁甕大形片を復元・図示した。頸部に2段のヘラ描き列点文、胴部上位に櫛描（2条単位)横位羽状文を巡らすものである。6は波状口縁甕約2/3個体である。5と類似するが、列点は1段で、櫛描羽状文の単位は1条である。7は波状口縁甕の完形に近いものである。8は外開きの小形の甕大形片を復元･図示した。9は受口状口縁の壺口縁部片である。10は敲石兼用の砂岩B砥石、11は軽石B砥石である。12はホルンフェルス製の小形柱状片刃石斧、13は側縁と刃部調整のみの粘板岩製偏平片刃石斧である。

Ⅰ332（第30・52・154・224・227図、図版87・89）

弥生時代後期の小形住居である。Ⅰ区中央に位置する。弥生時代後期の方形周溝墓と重複し、本址が古

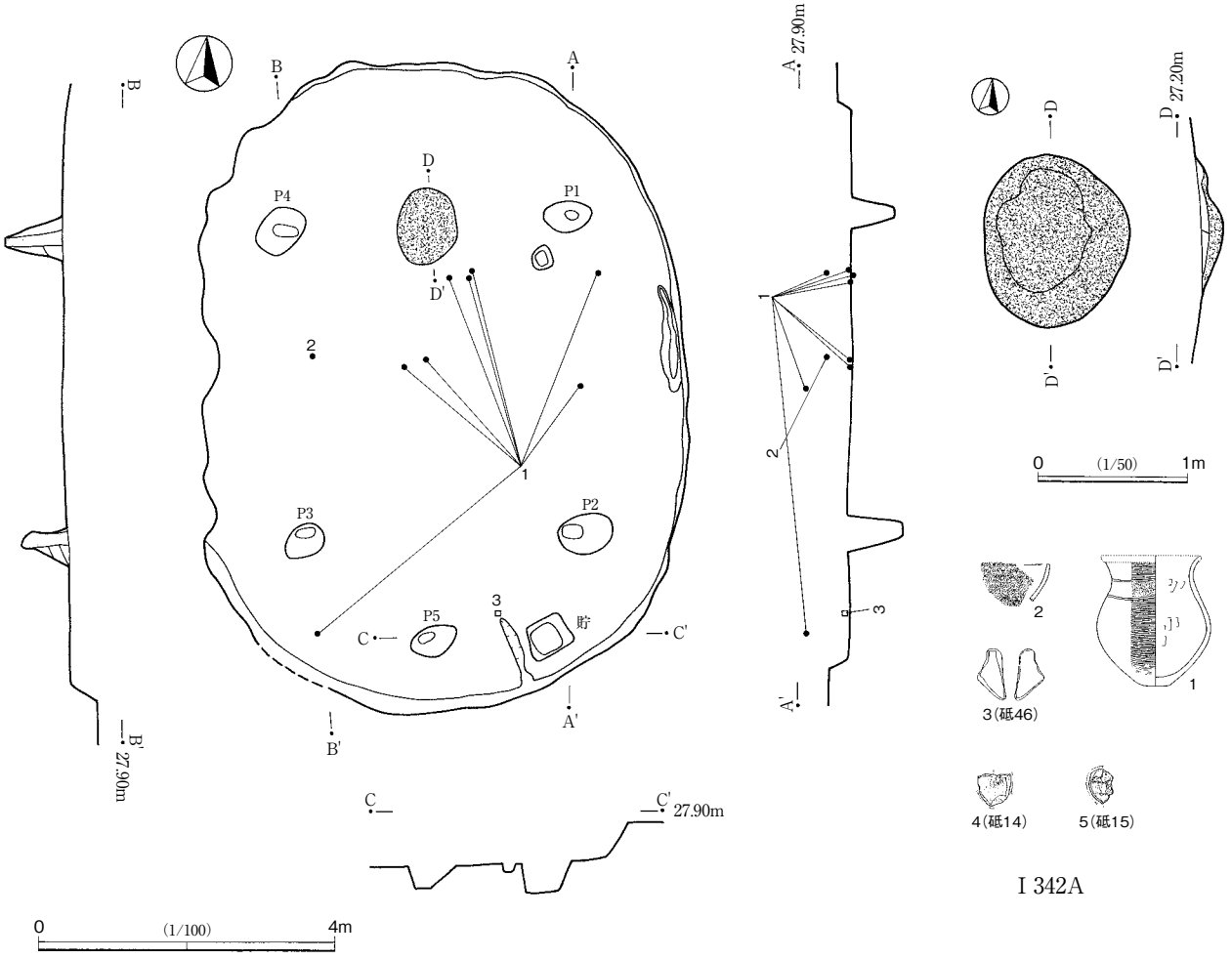




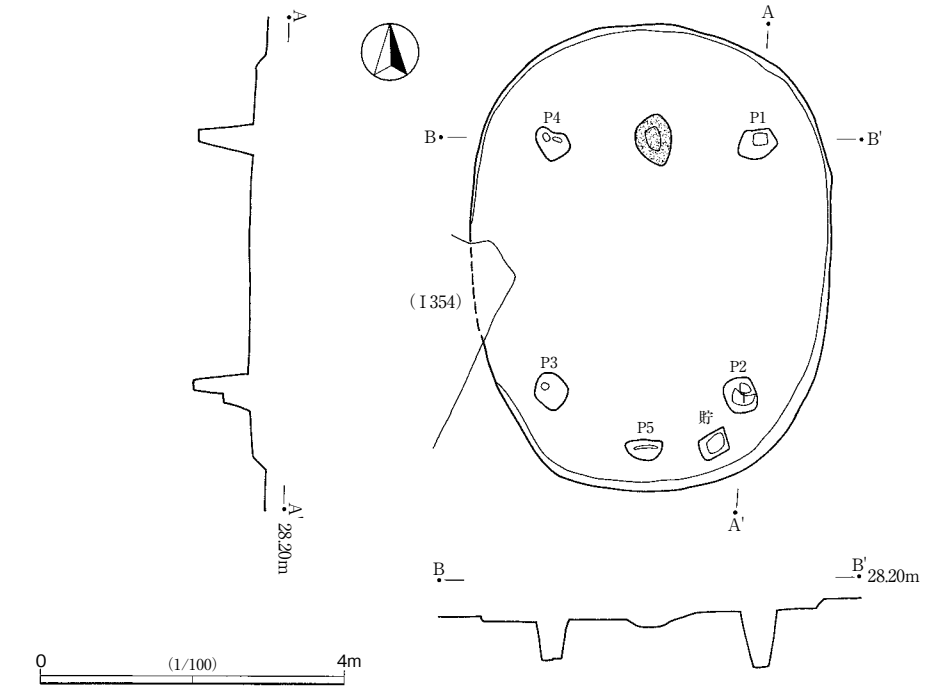
第52図　I 328・I 332 住居

い。ローム層への掘り込みも浅いが、プランの全体像は捉え得た。形態は卵形ともいうべきもので他に類をみない。規模は長径4.2m、短径は3.5mである。炉は中央北西寄りにあり、僅かながら焼土層の形成が認められる。主柱穴は対応する位置に４本存在し、細く且つ深い。梯子穴は中央南東壁寄り（壁から50㎝）にあり、貯蔵穴はない。踏締め面は確認出来ず、覆土の状況は不明である。

遺物は床面から出土した。１は波状口縁頸部有段甕約半個体を復元・図示した。２は砂岩Ａ、３・４は軽石Ａの砥石である。

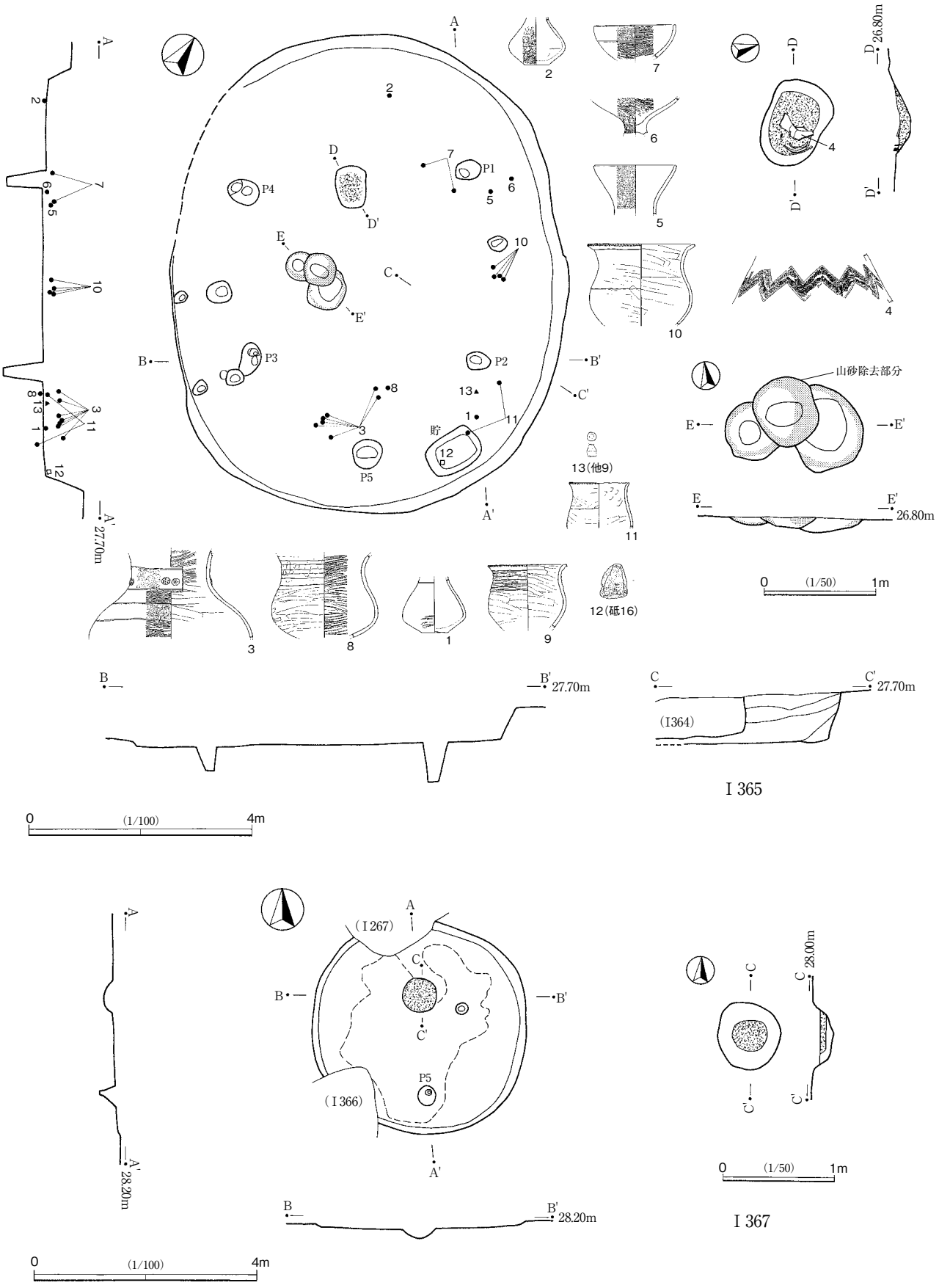


I 342A



I 357

第53図　I 342A・I 357 住居



第54図　I 365・I 367 住居

Ⅰ342A（第30・53・154・165・224・226図、図版７・87・88）

弥生時代後期の住居である。Ⅰ区中央に位置する。弥生時代中期の住居（Ⅰ326）及び方形周溝墓・土坑墓と重複し、前者が古く、後者が新しい。形態は小判形であり、規模は長径8.5m、短径は6.8mほどと推測される。炉は中央北寄りにあり、焼土層の形成は良い。主柱穴は対応する位置に４本存在し、一部は柱穴痕が確認出来る。梯子穴は中央南壁寄り（壁から100㎝）、貯蔵穴は入口右手壁寄りにあり、脇に小溝を有する。踏締め面は確認出来ず、覆土の状況は不明である。

遺物は床面および覆土中から出土したが、床面と覆土内高い位置で接合する土器（１）がある。１は口縁部を欠く広口壺約２/３個体である。頸部に上下沈線区画の附加条縄文帯を巡らす。底部と文様帯を除き赤彩される。２は椀口縁部片の拓本である。下端結節文区画の羽状縄文帯を巡らす。３は軽石Ｂ、４・５は軽石Aの砥石である。

Ⅰ357（第30・53図、図版７）

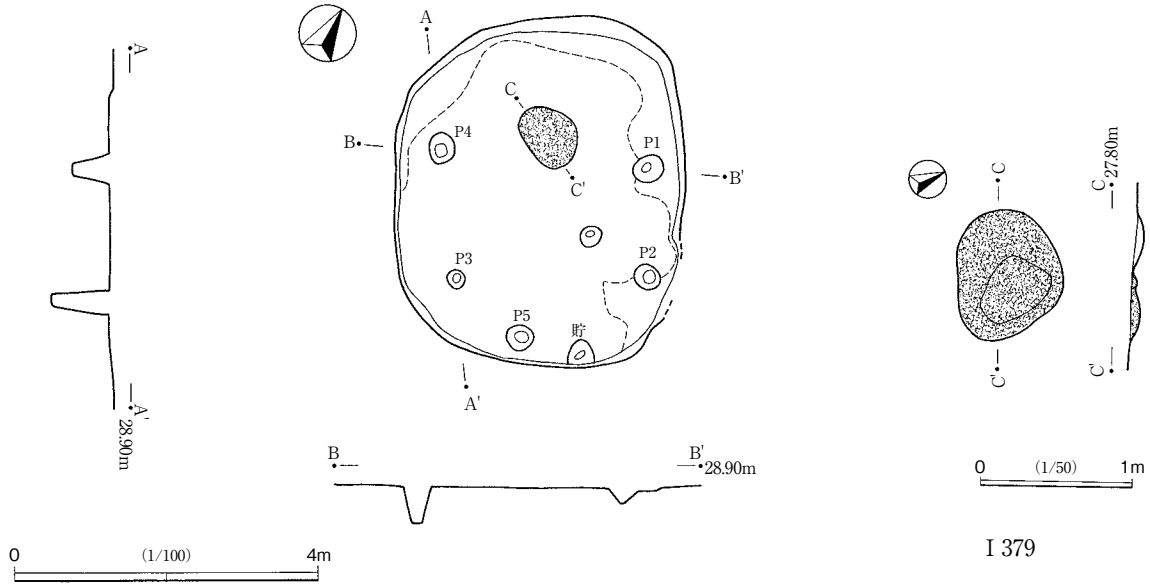
弥生時代後期の住居である。Ⅰ区南東に位置する。古墳時代以降の住居群と重複し、遺存状況はあまり良くない。形態は小判形であり、規模は長径5.9m、短径は4.7mである。炉は中央北寄りにあるが、詳細は不明である。主柱穴は対応する位置に４本存在し、径のわりには深いという特徴がある。梯子穴は中央南壁寄り（壁から50㎝）にあり、横長の形状である。貯蔵穴は入口右手壁寄りにあり、四角い形状を呈する。踏締め面は確認出来ず、覆土の状況は不明である。

遺物はとりたてて図示できるものがみられなかった。

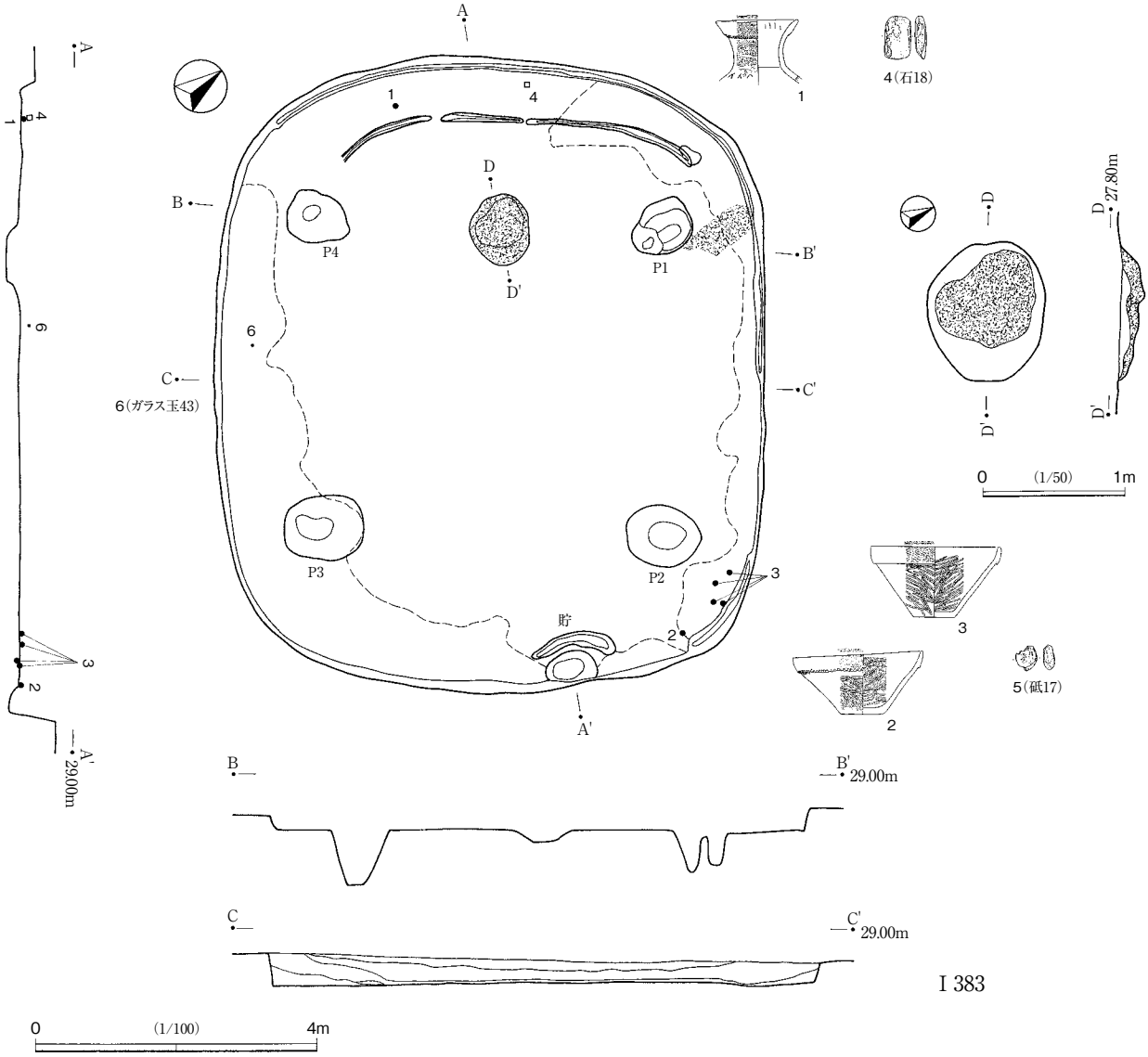
Ⅰ365（第30・54・154・155・224・237図、図版７・87・95）

弥生時代後期の住居である。Ⅰ区中央南寄りに位置する。重複なく、弥生時代中期の環濠と近接する。形態は小判形であり、規模は長径8.2m、短径は6.9mである。炉は中央北西寄りに小さいながらも１か所明瞭（焼土層の形成良好）であるが、中央やや西寄りにも切り合うかたちで３か所炉らしきものがみられる。焼土も部分的ながら確認された。主柱穴は対応する位置に４本存在するが、長軸方向に壁から離れた位置にある。梯子穴は中央南壁寄り（壁から１m）にあり、形態・深さともに明瞭である。貯蔵穴は入口右手壁際にあり、覆土上位で甕の大形片が、また、床面と同レベルで砥石が出土した。踏締め面は確認出来なかった。壁面際に黄褐色土の堆積が見られるほかは、暗褐色土で占められる。

遺物は覆土下位～床面にかけて多く出土した。このうち、５・７が床面より多少浮いた状態で、３が覆土下位から出土したほかは、４の炉囲いに使用した壺を除き図示した土器は、ほぼ床面レベルに遺存したものである。一方、土製品及び土錘は覆土一括品である。１は下膨らみの壺で口縁部～頸部を欠くほかはほぼ完形品である。頸部は恐らく上下沈線区画の縄文帯になるのであろうが、摩滅が激しくその構成までは不明である。外面はミガキのち赤彩される。２も同様の器形・調整（外面ミガキ・赤彩）ながらこちらはたぶん無文であろう。３は大形の壺頸部～胴部上位の遺存品である。頸部と胴部上位に上下沈線区画の網目状撚糸文帯を巡らし、頸部にはその上に円形スタンプ文（６～８）を施すボタン状円盤を貼り付ける（２個１対４単位）。頸部内面と外面は文様帯を除きミガキのち赤彩される。４は壺胴部上位を復元・図示した。頸部に沈線区画の縄文帯、胴部上位に上下沈線区画の羽状縄文帯（ＬＲ・ＲＬ）による山形文を施す。５は漏斗状に開く壺口縁部であり、口唇部及び外面に羽状縄文状帯を巡らす。６は高坏体部～脚部である。体部外面中位



I 379



I 383

第55図　I 379・I 383 住居

まで羽状縄文状帯を巡らし、文様帯以外は内外面ミガキのち赤彩される。７は椀大破片を復元・図示した。口唇部（ＲＬ）および外面上位に下端沈線区画の羽状縄文帯を巡らし、文様帯以外はミガキのち赤彩される。８は口縁部と底部を欠く輪積甕、９は底部を欠く波状口縁輪積甕、10も底部を欠く波状口縁有段甕（胴部中位に僅かな段）である。11は胴部中位以下を欠く波状口縁甕（胴部中位に僅かな段）である。12は軽石Aの砥石である。13はいわゆるミニチュアと思われるが、口縁部を欠くため断定し得ない。

Ｉ367（第30・54図、図版７）

弥生時代後期の住居である。Ｉ区南東に位置する。南北で２棟の住居と重複し、また、掘込みが浅かったためか壁の遺存は不良である。形態はほぼ円形であり、規模は長径3.6m、短径は3.5mである。炉は中央北寄りにあり、焼土層の形成は良い。主柱穴は小形住居のためか存在しない。梯子穴は中央南壁寄り（壁から70㎝）にあり、断面は三角形となる。貯蔵穴は確認し得なかった。踏締め面は入口部から炉の周囲を含む中央部が明瞭であった。覆土の状態は不明である。

遺物はとりたてて図示できるものがみられなかった。

Ｉ379（第30・55・165図）

弥生時代後期の住居である。Ｉ区南東端に位置する。弥生中期の住居２棟内に重なっているため、かろうじてそのプランを捉え得た。形態は多少歪な胴張隅丸長方形であり、規模は長径4.3m、短径は3.6mである。炉は中央北寄りにあり、焼土層も明瞭ながら薄い。主柱穴は４本あるが、東西は壁寄りに位置する。梯子穴は中央南壁寄り（壁から30㎝）、貯蔵穴は口右手壁際にある。踏締め面は北側～東側壁下を除いて認められた。覆土の状態は不明である。遺物はとりたてて図示できるものがみられなかった。

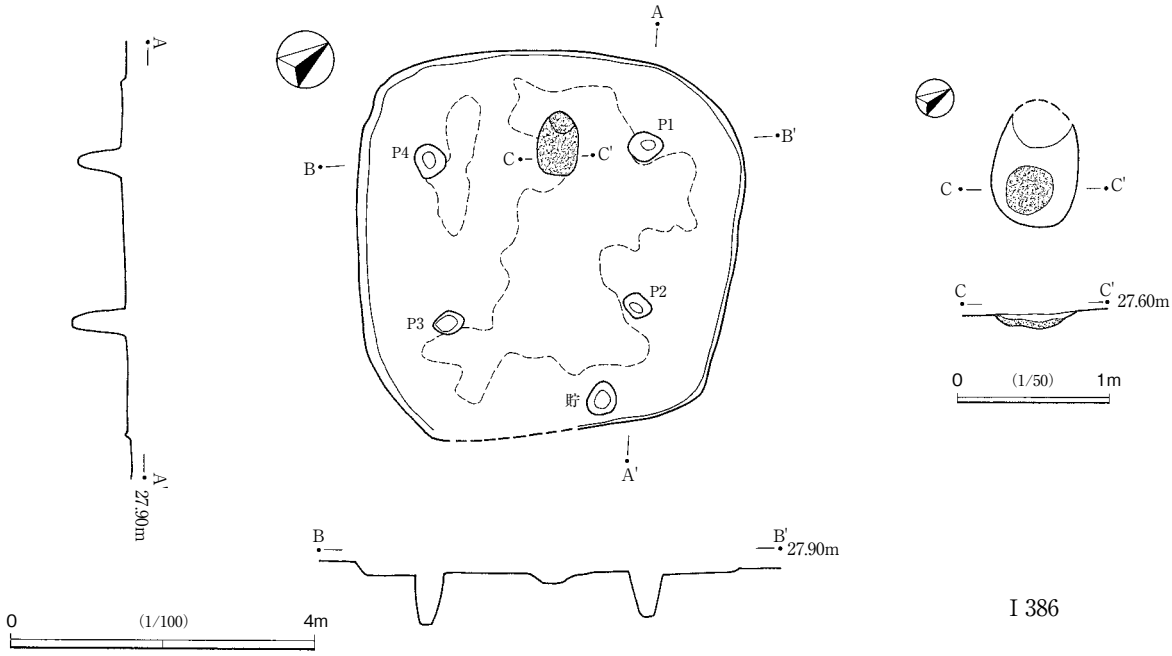
Ｉ383（第30・55・155・165・221・224・230図、図版８・54・86・87・91）

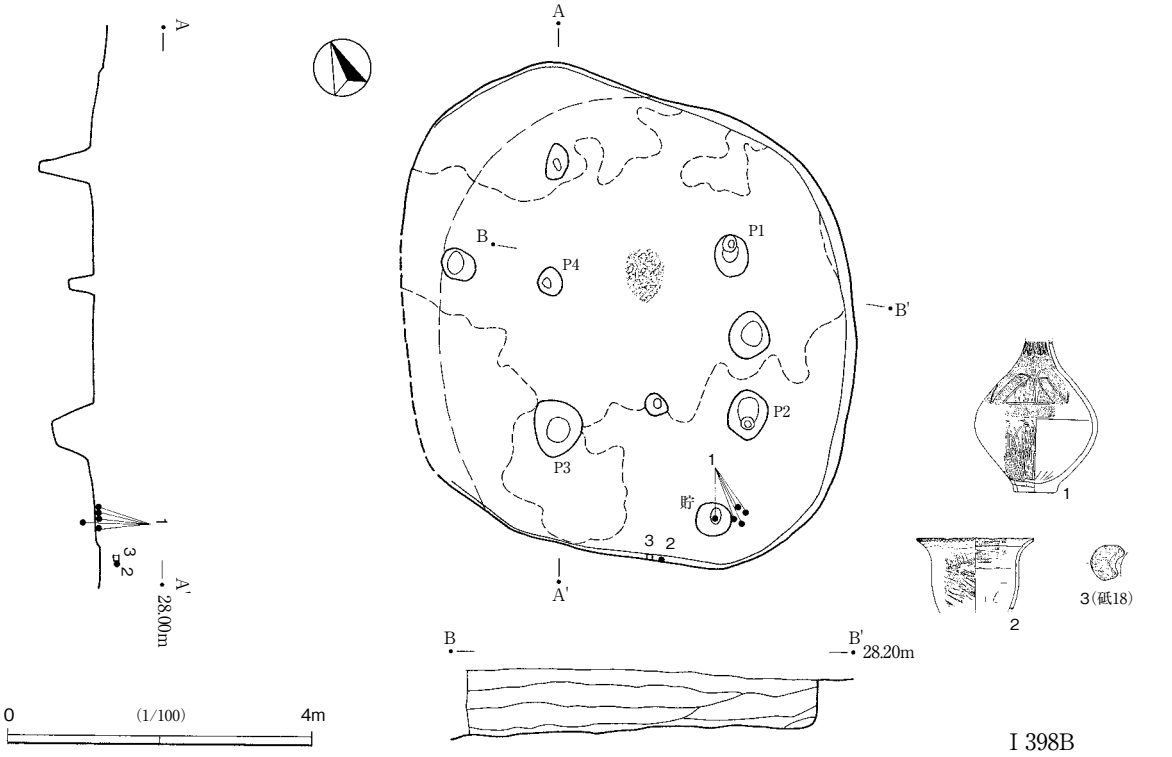
弥生時代後期の住居である。Ｉ区南東端に位置する。その南西部で弥生時代中期の住居（Ｉ293、Ｉ374）と重複するほかは遺構の疎らな地域に当たることもあって比較的遺存は良い。なお、北側で環濠（Ｉ371）と近接する。形態は隅丸長方形であり、規模は長径8.7m、短径は7.6mである。炉は中央北西寄りにあり、焼土層の形成は良い。主柱穴は対応する位置に４本存在するが、やや東西の壁寄りにある。梯子穴は確認出来なかった。貯蔵穴は入口右手壁際にあり、内側に僅かながら周堤帯を伴う。覆土の状況は不明である。

遺物は床面ないし若干浮いた状態で出土した。１は有段口縁壺口縁部～頸部で、有段部に押捺、頸部～胴部にかけて上下沈線区画の山形文を巡らす。２は有段口縁鉢であり、有段部にはヘラ先状工具による刻み目を巡らす。なお、口唇部および口縁部は附加条による縄文帯である。頸部に横位の粘土帯を巡らすものである。この土器は完形であることに加え、その出土状況（貯蔵穴近くの床面壁際）から住居廃棄時に伴うものであろう。３もほぼ同じ形態・文様ながら、こちらは有段部に刻み目はない。２に隣接して出土しており、しかも床面上ではあるが幾つかの破片に分かれ、しかも半個体程度という違いもある。４は凝灰岩製の偏平片刃石斧である。５は軽石Ａの砥石である。この他に出土状況のみながら、６のガラス製小玉がある。

Ｉ386（第30・56図、図版８）

弥生時代中期の住居である。Ｉ区南東に位置する。古墳時代以降の住居３棟と重複し、遺存状態は不良であ





第56図　I 386・I 398B 住居

る。形態は隅丸方形であり、規模は長径4.9m、短径は4.8mである。炉は中央北西寄りにあり、小規模ながらも焼土層の形成は良い。主柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴は確認出来なかったが、貯蔵穴は入口右手壁際にある。踏締め面はほぼ主柱穴を結ぶ範囲にあるが部分的に不明瞭である。覆土の状況は不明である。

遺物はとりたてて図示できるものがみられなかった。

I 398 B（第30・56・155・165・224図、図版８・54・87）

弥生時代中期の住居である。Ｉ区中央やや南寄りに位置する。住居密集地に当たり遺存状態は不良であり、

調査時のプランは図示するものの、西壁本来のラインは破線に近い位置を巡ると思われる。形態はほぼ隅丸方形であり、規模は長径6.0mはよいとして、短径は5.5m前後になろうか。炉は中央北寄りにあり、主柱穴はＰ１～Ｐ３までは確実ながらＰ４は該当するかどうかわからない。なお、貯蔵穴を除いたほかのピットも同様である。梯子穴は確認出来なかったが、貯蔵穴は入口右手壁際寄り（壁から約60㎝）にある。踏締め面は壁寄りが不明瞭という傾向はあるが、規則性に欠ける。覆土は北東部のみ遺存しており、壁際が埋まったのち、水平堆積に移ったことがわかる。壁際の褐色土を除けば、ほぼ暗褐色土で占められ、自然堆積と思われる。

遺物は床面から壺が、本来の壁際覆土中から甕が出土した。１は口縁部～頸部を欠く壺約半個体を復元・図示した。頸部までは意図的に打ち欠いたものと思われる。胴部上位～中位に沈線区画の結紐文帯（内部ＲＬ）を巡らすが、文様下半部は省いている。２は波状口縁甕約１/４個体を復元・図示した。３は軽石Aの砥石であり、抉り状の使用面がみられる。

Ｉ402（第30・57・155・165・233図、図版８・93）

弥生時代中期の住居である。Ｉ区中央に位置する。弥生後期の住居１棟、土坑１基と重複し、方形周溝墓の溝と接触する。それ以外にはこれといった重複はないが、遺存状態は不良である。形態は胴張隅丸長方形であり、規模は長径5.4m、短径は4.7mである。炉は中央北東寄りにあり、主柱穴も対応する位置に４本ある。梯子穴は中央南西壁寄り（壁から60㎝）、貯蔵穴は入口右手壁際にある。踏締め面はほぼ梯子穴から主柱穴を結ぶ範囲で認められた。覆土の状態は不明である。

遺物は床面ないし若干浮いた状態で出土した。１は細頸の大形壺口縁部～頸部片を復元・図示した。口唇部に縄文、口縁部に粘土塊を貼り付け２個１対４単位の突起としたもので、頸部には刻み目付の突帯が巡る。２は波状口縁甕約１/３個体を復元・図示した。胴部下端断面を研磨しており、再利用を意図したものと考えられる。３も波状口縁甕ながら、胴部下半を欠く。４は有孔土製円盤である。

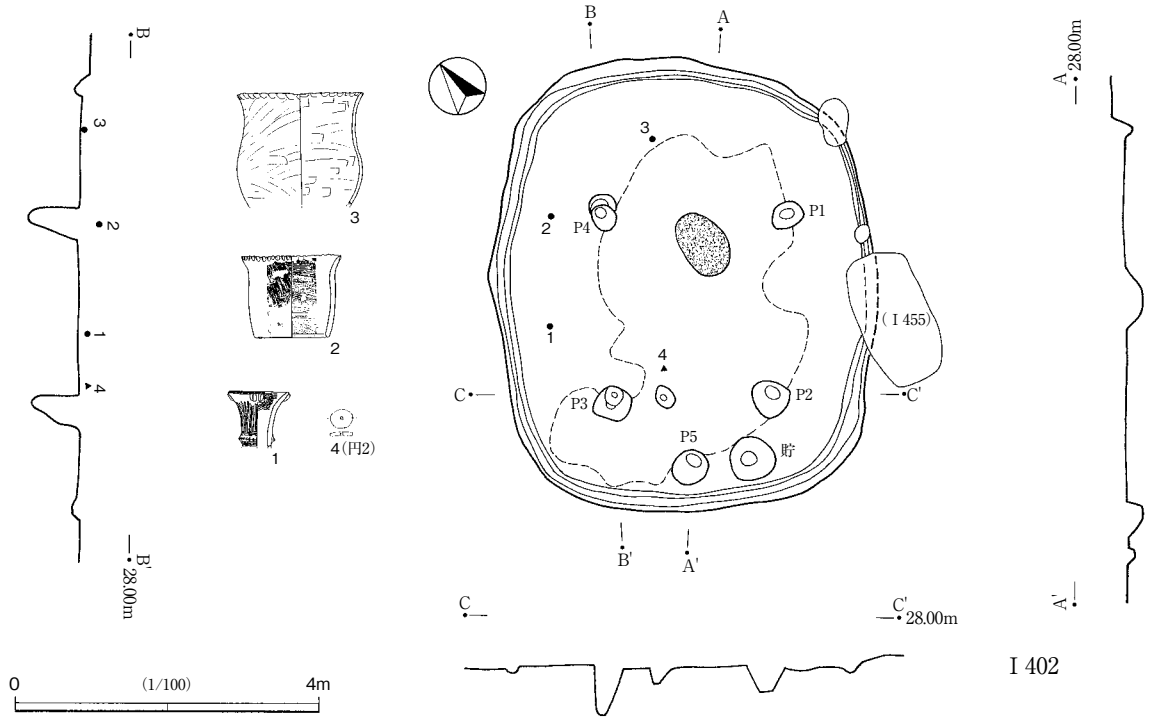
Ｉ403ＢＣ（第30・57・156・165・224・233・237図、図版９・87・93・95）

弥生時代中期の住居である。Ｉ区中央やや東寄りに位置する。古墳時代以降の住居３棟と重複し、覆土の多くが失われている。形態は胴張隅丸長方形であり、規模は長径6.8m、短径は6.3mである。炉は中央北寄りと西寄りの２か所にあり、共に焼土層の形成は良い。主柱穴は対応する位置に４本あり、深さも揃っている。梯子穴は中央南東壁寄り（壁から110㎝）、貯蔵穴は入口右手壁際にある。踏締め面はとりたてて認められなかった。覆土の状態は不明である。

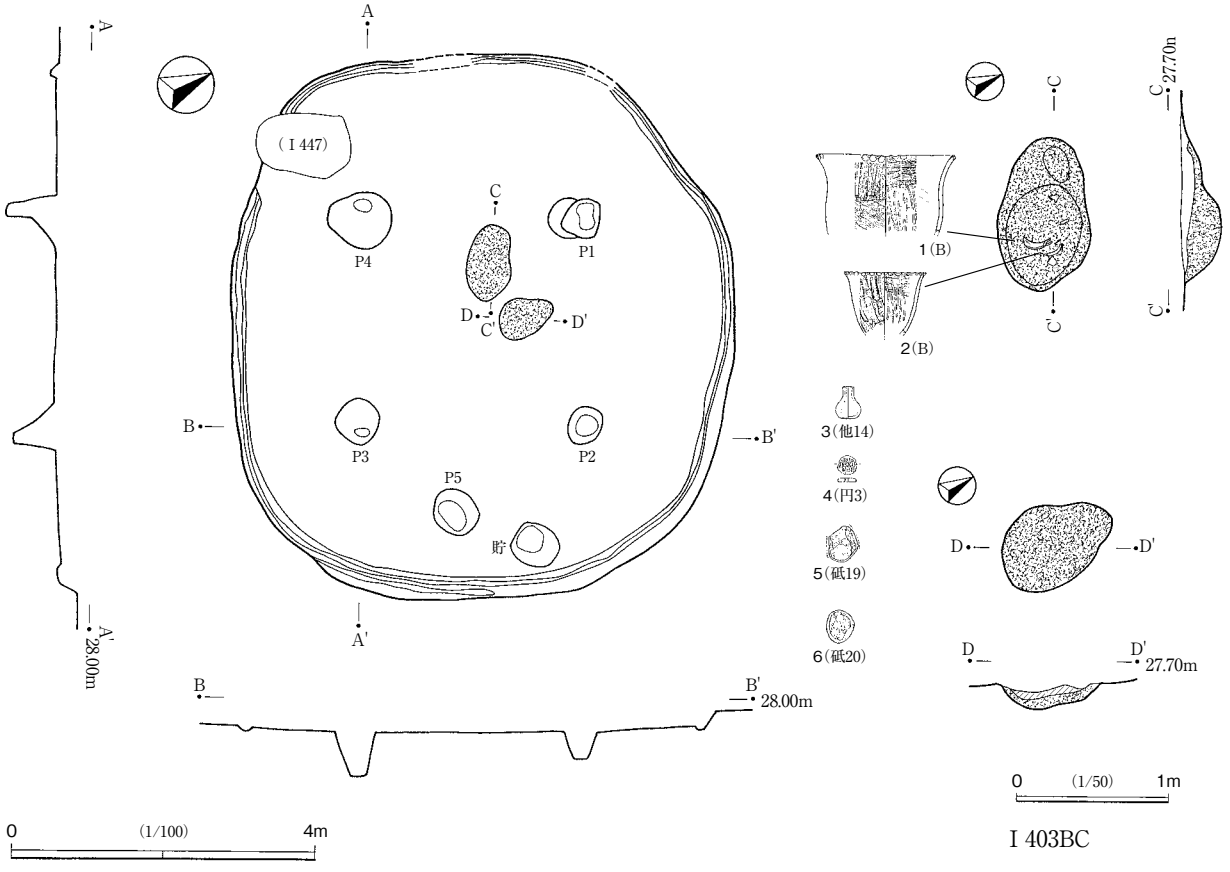
遺物は既述した遺存状態のためか、炉囲いとして使われた土器が主なものである。１は胴部以下を欠く波状口縁甕、２は底部を欠く波状口縁甕大形片を復元・図示した。３はいわゆるミニチュア土器であり、器形から中期の所産であろう。４は有孔土製円盤である。５・６は軽石A砥石である。

Ｉ404（第30・58図、図版８・13）

弥生時代後期の住居である。Ｉ区中央やや東寄りに位置する。古墳時代以降の住居と重複し、掘り込みも浅いためか遺存状態は不良である。形態は崩れた楕円形ないし胴張隅丸方形である。規模は長径3.3m、短径は3.0mである。炉は中央北西寄りにあり、焼土層の形成は良い。柱穴、梯子穴･貯蔵穴はみられない。踏締め面はとりたてて認められなかった。また、覆土の状態は不明である。

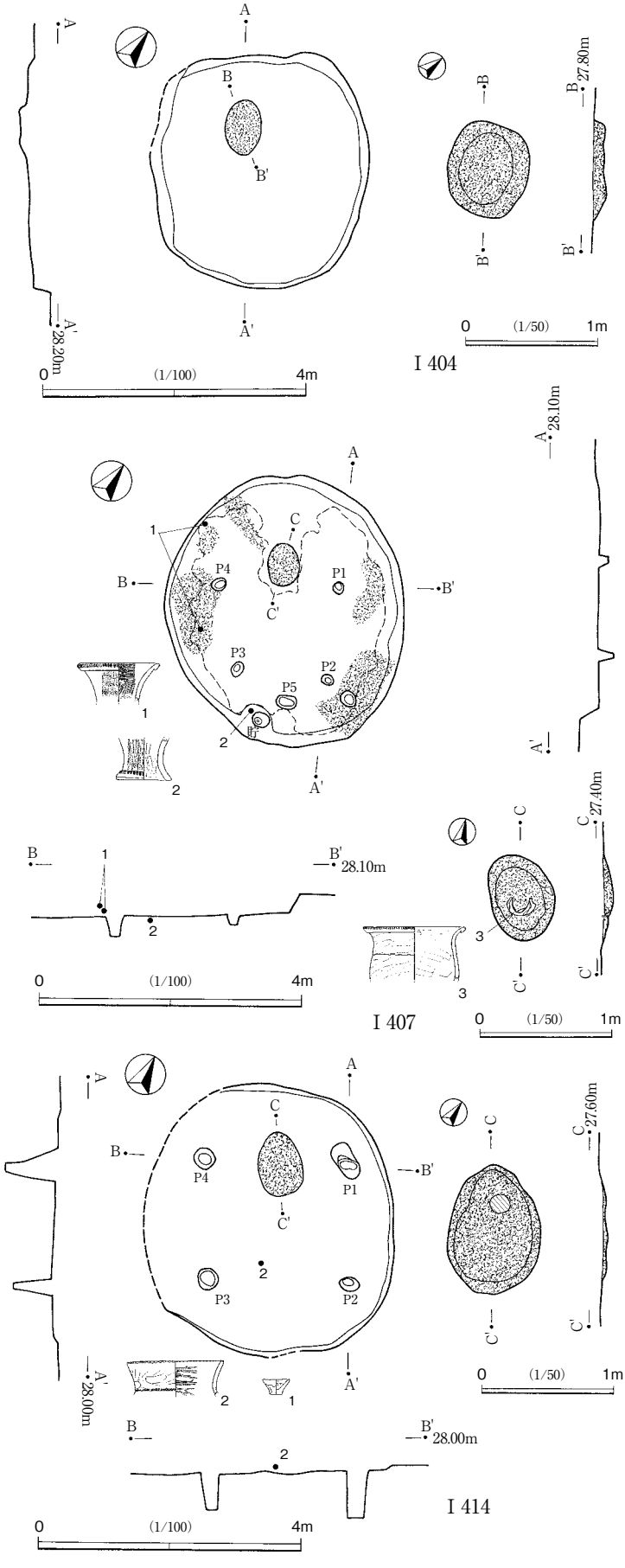


I 402



I 403BC

第57図　I 402・I 403BC 住居



第58図　I 404・I 407・I 414 住居

遺物はとりたてて図示できるものがみられなかった。

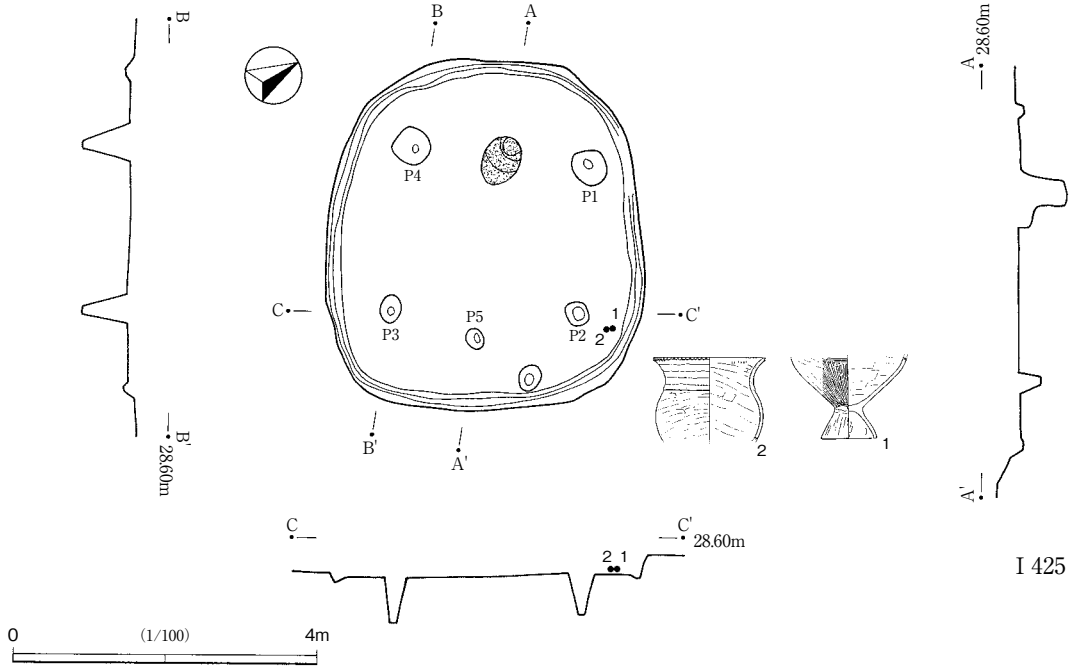
I 407（第30・58・156・165図、図版８）

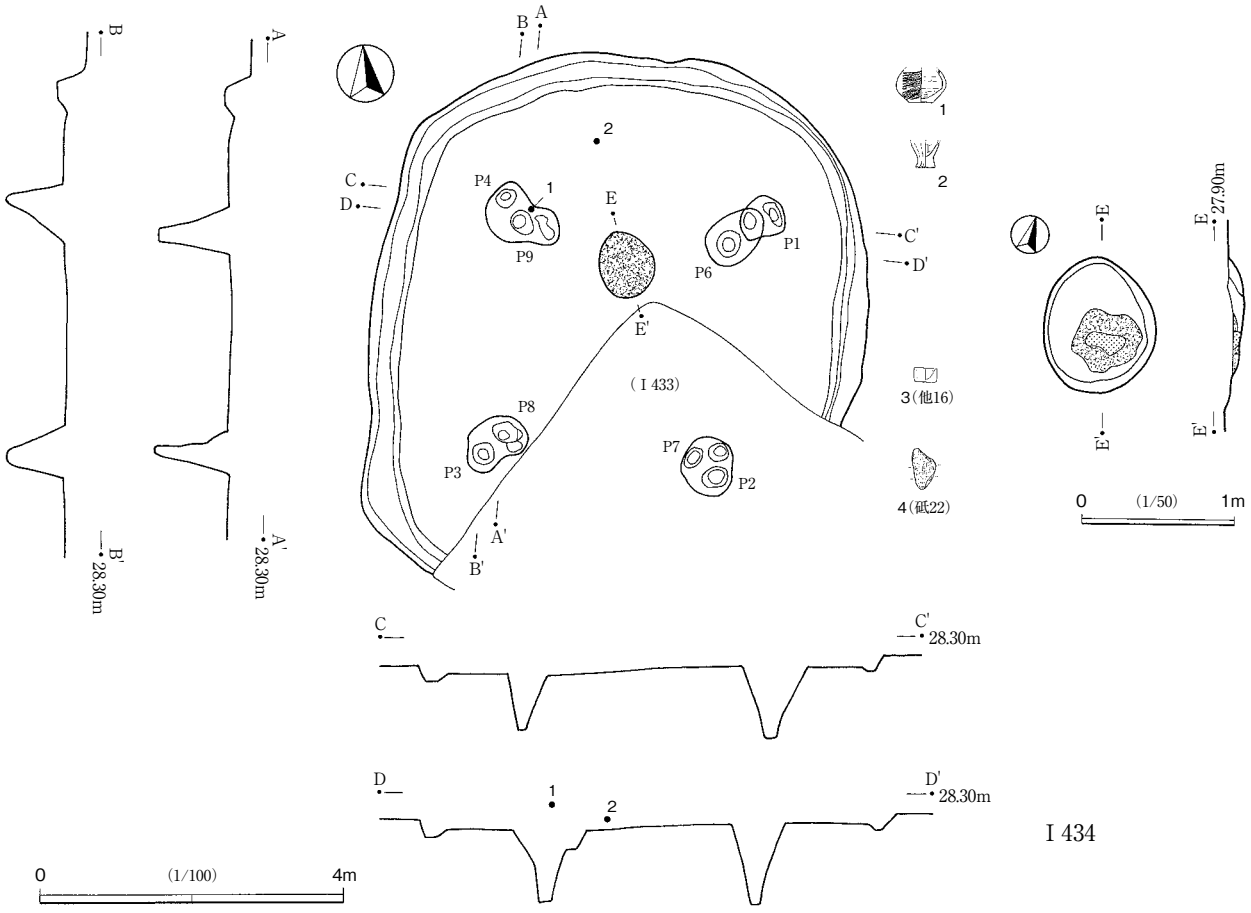
弥生時代後期の住居である。Ⅰ区中央やや南東寄りに位置する。弥生中期の住居１棟、土坑墓１基と重複するが、遺存状態は比較的良好である。いわゆる火災住居であり、全体に焼土を多く含む。形態は楕円形であり、規模は長径3.8m、短径は3.5mである。炉は中央北西寄りにあり、焼土層の形成は薄いものの、均一である。柱穴は形状に合わせたためか、入口側のＰ２とＰ３の間隔が狭くなっている。また、南壁から梯子穴へ至る間は多少緩やかな傾斜となっており、中間に焼土を含まない層がある点を考慮すると、この面の上に梯子が乗っていた可能性があろう。梯子穴は中央南東壁寄り（壁から60㎝）、貯蔵穴は通常と異なり入口左手壁際にある。踏締め面は壁下と炉の北側を除いて全面に認められた。覆土の状態は不明である。

遺物は炉内、及び、床面また床面より若干浮いた状態で出土した。１は口唇部端に押捺を巡らす複合口縁壺口縁部～頸部である。頸部を巡る縄文帯は擬縄文と羽状縄文を用いている。２は鼓形土器の底部に相当すると思われ、有段部には押捺列を巡らす。３は炉囲いとして使われた甕大形片を復元･図示した。複合口縁口唇部に押捺列を巡らし、胴部上位に段を有するものである。

I 414（第30・58・156図）

弥生時代後期の住居である。Ⅰ区中央北東寄りに位置する。古墳時代以降の住居跡３棟と重複し、遺存状態は不良である。形態は楕円形であり、規模は長径4.0m、短





第59図　I 425・I 434 住居

径は3.7mである。炉は中央北寄りにあるが、焼土層の形成は薄く点状である。柱穴は対応する位置に４本存在するが、梯子穴や貯蔵穴は確認出来なかった。踏締め面はとりたてて認められず、また、覆土の状態は不明である。

遺物は遺存状態の悪さも手伝ってか、床面から出土した甕ほかをあげる程度である。１はいわゆるミニチュアであるが、一括品ということもあり重複する古墳時代の所産の可能性もある。２は波状口縁甕大形片を復元・図示した。胴部上位ではなく頸部から胴部に至る境界付近にスタンプ文を巡らすという特徴がある。

Ｉ425（第30・59・156図、図版９）

弥生時代後期の住居である。Ｉ区中央北東寄りに位置する。古墳時代中期の住居と重複するが遺存は良い。形態は多少胴張りの隅丸方形であり、規模は長径4.3m、短径は3.8mである。炉は中央北西寄りにあるが、焼土層の形成は不良である。柱穴は対応する位置に４本存在し、梯子穴は中央南東壁寄り（壁から約90㎝）にある。貯蔵穴はない。踏締め面はとりたてて認められず、覆土の状態は不明である。

遺物は床面から出土した数点をあげるのみである。１は約１／４個体の台付甕、２は約半個体の甕である。

Ｉ434（第30・59・156・224・237図、図版87・95）

弥生時代後期の住居である。Ｉ区中央北東寄りに位置する。古墳時代前期の住居と重複し、南東部を欠いている。形態は胴張りの隅丸方形であり、規模は長径6.7m、短径は5.7mである。炉は中央北寄りにあるが、焼土層の形成は不良である。柱穴は対応する位置に４本存在し、建替えらしき複数の柱穴痕が認められる。梯子穴は確認出来ず、貯蔵穴も同様である。踏締め面はとりたてて認められず、覆土の状態は不明である。

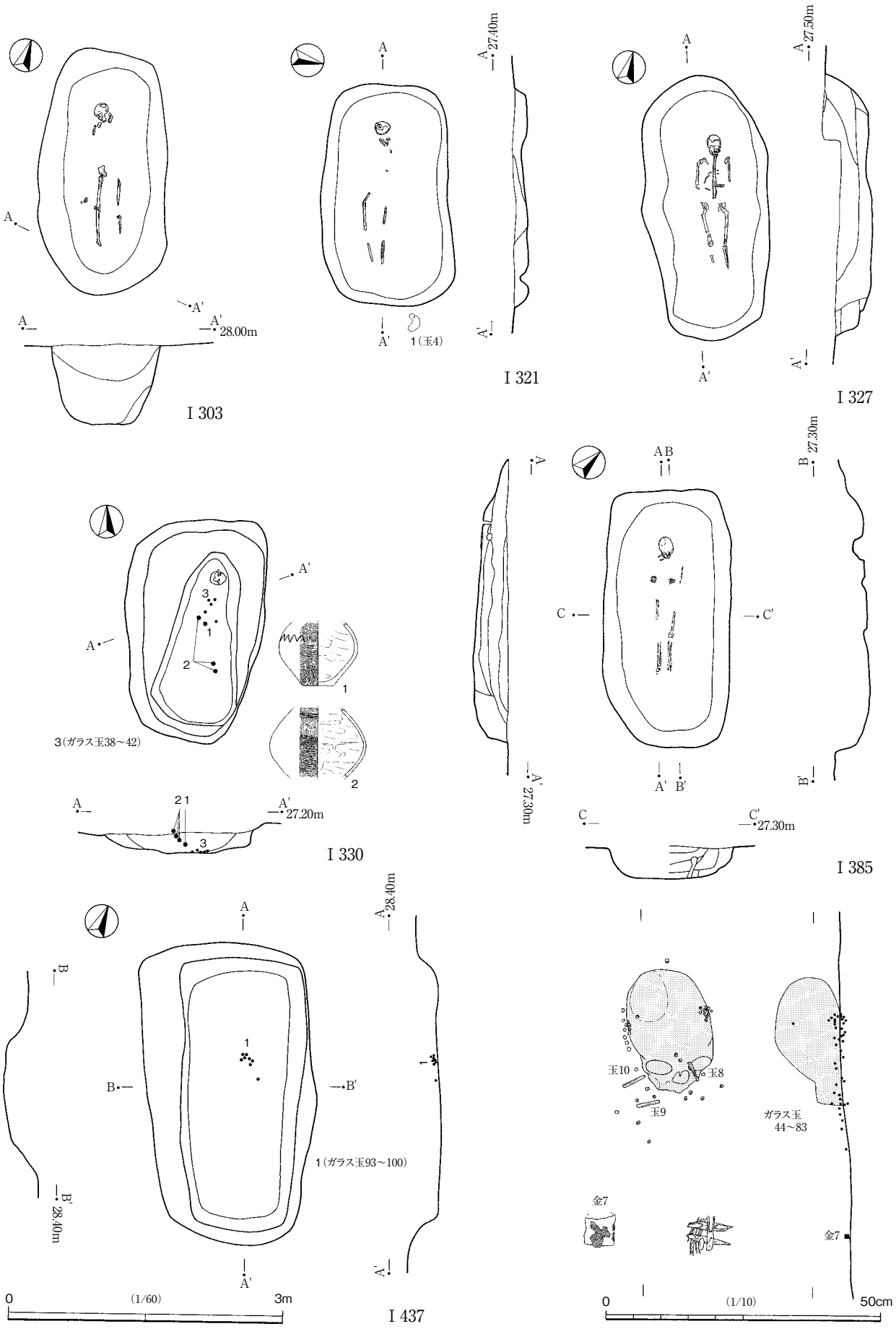
遺物は覆土中から出土した。１は頸部までを欠く壺半個体、２は上部を欠くミニチュア、３は手捏ね土器である。４は軽石Aの砥石である。

３　土坑墓

土坑墓はＩ区中央の２基の方形周溝墓の周囲を取り巻くかたちで分布する一群（８基）と、それから約10m北東に分布する一群（４基）がある。この内、前者の内の５基（Ｉ303、Ｉ321、Ｉ327、Ｉ330、Ｉ385）については人骨が伴い、方位についても共通性があるが（真北および北北西）、１基のみ異なっている（西南西）。伴わない３基についてもその可能性が高い。後者は人骨は見当らず、１基（Ｉ424）のみ玉類を伴っている。時期的には遺物からみて弥生時代後期後葉と思われ、その時期の住居が重複また周辺に見られないという点も符号する。人骨ないし玉類の出土したＩ424までを優先的に述べる。なお、260Cはプランは検出されず、人骨（歯のみ）の出土であるが、位置はＩ385に隣接しており、土坑墓の中に加えた。

Ｉ260C（第44図）

弥生時代の住居Ｉ260内南西部覆土下位で人骨（歯７点）が出土した。土坑墓I 385西側に隣接することから、プランは確認できなかったが、土坑墓である可能性が高いと判断した。人骨については第３章第５節で成人初期と報告されている。



第60図　I 303・ I 321・ I 327・ I 330・ I 385・ I 437 土坑墓

Ⅰ303（第30・60図、図版９）

方形周溝墓Ⅰ323西側に隣接する２基の内、外側の土坑墓である。形態は南側が丸く張り出す長方形である。規模は長軸2.7m、短軸1.4m、深さは約0.4mであり、断面は逆台形を呈する。掘り込みは深く遺存状態は良好ながら、覆土および底面には木棺痕跡は認められず、何らかの覆いをもって直葬されたものと思われる。覆土は凹レンズ状に堆積する暗褐色土である。

人骨は底面に近いレベルに頭をやや左に傾けて仰臥伸展葬の状態で出土した。全体に遺存状況が悪く、かろうじてその出土状況を記録するのみである。伴う遺物は確認出来なかった。人骨のうち、遺存状態が良い歯については第３章第５節で３体分（成人中期・成人前期・小児６才）と報告されている。

Ⅰ321（第30・60・230図、図版10・91）

方形周溝墓Ⅰ323北側に隣接する土坑墓である。周溝に平行して設けられた結果、その主軸は土坑墓群の内では唯一東西方向となる。形態はほぼ長方形であり、規模は長軸2.4m、短軸1.4m、深さは0.2mである。覆土および底面には木棺痕跡は認められず、何らかの覆いをもって直葬されたものと思われる。覆土は締まりに欠ける暗褐色土であった。

人骨は底面上に仰臥伸展葬かつ頭部が西向きの方位で出土したが、全体に向かって左手に多少片寄っている。遺存状態は悪く、かろうじてその出土状況を記録するのみである。伴う土器は確認出来なかった。１は一括品の翡翠製勾玉である。

Ⅰ327（第30・60図、図版10）

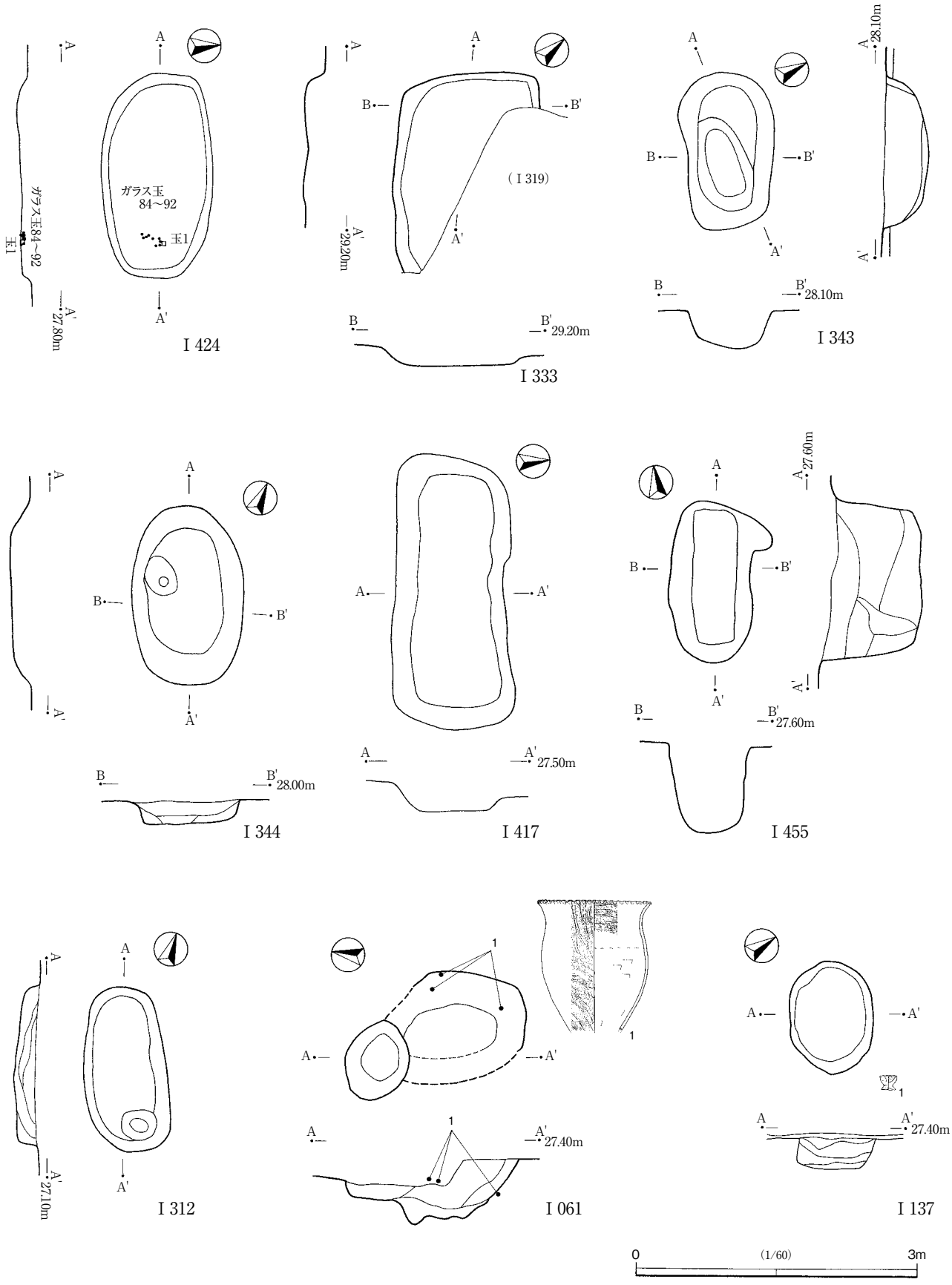
方形周溝墓Ⅰ323西側に隣接する２基の内、内側の土坑墓である。形態は北側に丸く張り出す隅丸長方形である。規模は長軸2.9m、短軸1.4m、深さは0.5mであり、断面は逆台形を呈する。覆土および底面に木棺痕跡（長軸2.1m、短軸0.5m）が認められ、木棺を土坑内に安置したのち、四隅から埋めたものと思われる。なお、木棺痕跡と人骨長（長さ約1.5m）を比較した場合、ゆとりがみられるが、これは低身長ということもあろうか。覆土は周囲の埋戻しを含め暗褐色～黒褐色土であるが、全体にロームブロックが多く含まれていた。

人骨は底面よりやや上に仰臥伸展葬の状態で出土した。土坑墓群の人骨のなかでは比較的遺存状態が良好であり、歯については第３章第５節で成人後半と報告されている。伴う遺物は確認出来なかった。

Ⅰ330（第30・60・140・166・230図、図版13・91）

方形周溝墓Ⅰ322内北西に位置する土坑墓である。Ⅰ322の埋葬施設の可能性もあるが、北西隅に片寄っていることから単独の土坑墓と判断した。形態は北側が幅広の崩れた長方形であり、内部にはさらに浅い掘込みが認められた。規模は長軸2.4m、短軸1.5m、深さは0.3mである。覆土および底面には木棺痕跡は認められず、何らかの覆いをもって直葬されたものと思われる。覆土は凹レンズの堆積を示す暗褐色土で締まりに欠ける。

人骨は浅い掘込み内の底面上に仰臥伸展葬のかたちで出土した。全体に遺存状態が悪く、かろうじて頭部を確認するにとどまった。伴う遺物は腹部から腰部辺りの位置で土器２点が出土した。レベルからして遺体の上に置かれたものであろう。１は壺約１/３個体を復元・図示した。下位山形文区画の連続結節文を施すものである。２は壺胴部大形片を復元・図示した。胴部上位に結節文区画の羽状縄文帯を施すもの



第61図　I 424・ I 333・ I 343・ I 344・ I 417・ I 455・ I 312 土坑墓、 I 061・ I 137土坑

である。出土状況からして完形品かどうかはともかく、本来はある程度のかたちをなすものと思われる。この他に、ガラス玉５点が遺体の胸の辺りの底面上から出土した。人骨については、遺存状態の良い歯から第３章第５節で成人前期と報告されている。

Ｉ385（第30・60・230・243・244図、巻頭図版２・３、図版11・12・91・100）

方形周溝墓Ｉ323南西側に少し離れて位置する土坑墓である。形態は南側が隅丸となる長方形である。規模は長軸2.8m、短軸1.4m、深さは約0.4mであり、断面は逆台形を呈する。底面には木棺痕跡らしき様相も看取されるが、断定はし得ない。覆土の状態は不明である。

人骨は土坑底面上に仰臥伸展葬の状態で出土した。全体に遺存状態は不良であった。頭骨の周囲にはガラス玉40点、管玉３点が出土した。首飾りとして用いられたものであろうが、その出土状況からして幾つかに分断して首廻りに置かれたかと思われる。また、胸の上辺りで六連の鉄釧が出土しているが、それには布が付着していた。布袋に入れた釧を胸の上に置いたということであろうか。

Ｉ437（第30・60・230図、図版８・13・91）

方形周溝墓Ｉ323から約９ｍ東側で平行するように並ぶ土坑墓である。平面図を一見すると木棺痕跡を有する土坑墓であるが、これは周囲を巡る浅い掘形をそのまま図示した結果であり、覆土の記載を欠く点とも併せ確証の限りでない。そのため、形態は長方形であるが、周囲の掘形は上広がりの形態となる。規模は長軸約3.0m、短軸約1.3m、深さは約0.35mであり、断面は緩い逆台形を呈する。

人骨は遺存しなかったが、土坑底北側中央約２/３辺りでガラス玉８個が出土した。その位置からすると首というより胸の上に相当し、恐らくブロック状の塊として遺体の上に置かれたのであろう。

Ｉ424（第30・61・230図、図版91）

弥生時代後期の土坑墓である。Ｉ区中央北東寄りに位置し、４基まとまって存在する土坑群の一つである。形態は楕円に近い隅丸長方形であり、規模は推測で長軸約2.2m、短軸1.2m、深さは確認面から約0.2mである。覆土は古墳時代中期以降の住居によって掘り下げられたこともあってほとんど失われた状況であった。遺物は床面より僅かに上のレベルで翡翠製勾玉１点、ガラス玉９点が出土した。首飾りの一部であろう。なお、人骨の遺存は確認されなかった。

Ｉ333（第30・61図）

弥生時代後期から終末期の土坑と推測される。Ｉ区中央北東寄りに位置し、４基まとまって存在する土坑群の一つである。形態は長方形であり、平安時代の住居（Ｉ319）によってその南東部約１/２程が失われている。規模は推測で長軸約１ｍ以上、短軸0.8m、深さは確認面から0.2mである。覆土の状態は不明であり、遺物はとりたてて図示すべきものはない。

Ｉ343（第30・61図）

弥生時代後期から終末期の土坑墓と推測される。Ｉ区中央北東寄りに位置し、４基まとまって存在する土坑群の一つである。形態は歪な隅丸長方形であり、規模は長軸約1.6m、短軸約0.9m、深さは確認面か

ら約0.4mである。覆土はロームブロックを多く含み人為堆積と思われる。遺物はとりたてて図示すべきものはない。

Ⅰ344（第30・61図）

弥生時代後期から終末期の土坑墓と推測される。Ⅰ区中央北東寄りに位置し、４基まとまって存在する土坑群の一つである。形態は多少隅丸の楕円形であり、規模は長軸約1.9m、短軸約1.2m、深さは確認面から約0.3mである。覆土は下層にロームブロックによる埋め戻しがみられる。遺物は若干の土器片のみである。

Ⅰ417（第30・61図）

Ⅰ区中央の方形周溝墓（Ⅰ322）西溝と重複しており（新旧不明）、その上の周溝覆土上位に遺された遺物群は攪乱されていないことから、弥生時代後期から終末期に属する可能性が高い。形態は隅丸長方形であり、規模は長軸2.9m、短軸1.2m、深さは確認面から0.3mである。覆土についての情報に欠く。遺物はとりたてて図示すべきものはない。形態等から土坑墓と推測される。

Ⅰ455（第30・61図）

弥生時代後期から終末期の土坑墓と思われる。Ⅰ区中央やや東寄りに位置し、方形周溝墓Ⅰ322南側周溝から約５m離れた位置にある。形態は隅丸長方形であり、規模は推測で長軸約1.8m、短軸0.9m、深さは確認面から約1.2mである。覆土は中層を除きロームブロックを含む。土層からは木棺の存在は窺えない。遺物は出土しなかった。

Ⅰ312（第30・61図）

弥生時代後期から終末期の土坑墓と推測される。Ⅰ区中央やや西寄りに位置し、古墳時代前期の埋葬跡（土坑墓）２基が確認されたⅠ186A覆土内に所在する。埋葬跡との関連は不明ながら土器の集中範囲から外れた地にあり、且つ人骨と方位がほぼ同じという点から、古墳時代前期の可能性もある。形態は楕円に近い隅丸長方形であり、規模は長軸約1.8m、短軸約0.9m、深さは確認面から約0.3mである。覆土はロームブロックを多く含み埋め戻しであろうか。覆土内から骨片（イノシシ前歯・臼歯）が出土したほかはとりたてて図示すべきものはない。

４　土坑

検出された土坑の数は決して少なくはないが、当区の重複状況もあって弥生時代と捉えられる遺構は限られたものであった。それゆえ、図示したのは僅か２基にすぎないが、これは本来の数とは異なるということを強調しておきたい。

Ⅰ061（第30・61・140・166図）

弥生時代中期の土坑である。Ⅰ区北西に位置する。環濠（Ⅰ011）と一部重複するがその新旧関係は不明である。形態は楕円形、断面は浅い椀形を呈し、規模は推測で長軸約1.5m、短軸は1.2m、深さは確認面から0.7mである。遺物は完形に近い甕が覆土中位から散在するかたちで出土した。覆土はしまりのあ

る暗褐色土であった。１はハケ目の明瞭な波状口縁甕である。

Ｉ137（第30・61・140図、図版15）

弥生時代の土坑と思われる。Ｉ区中央西側の後期住居跡（Ｉ110）内に位置し、その貼床面下から検出されたことから弥生時代と判断した。形態は楕円形、断面は箱形である。規模は長軸1.2m、短軸約0.9m、深さは確認面から約0.4mである。遺物はいわゆるミニチュアが覆土内から出土した。覆土はしまりのある暗褐色また黒褐色土であった。１は高坏形のミニチュアであり、文様等はみられない。

５　方形周溝墓

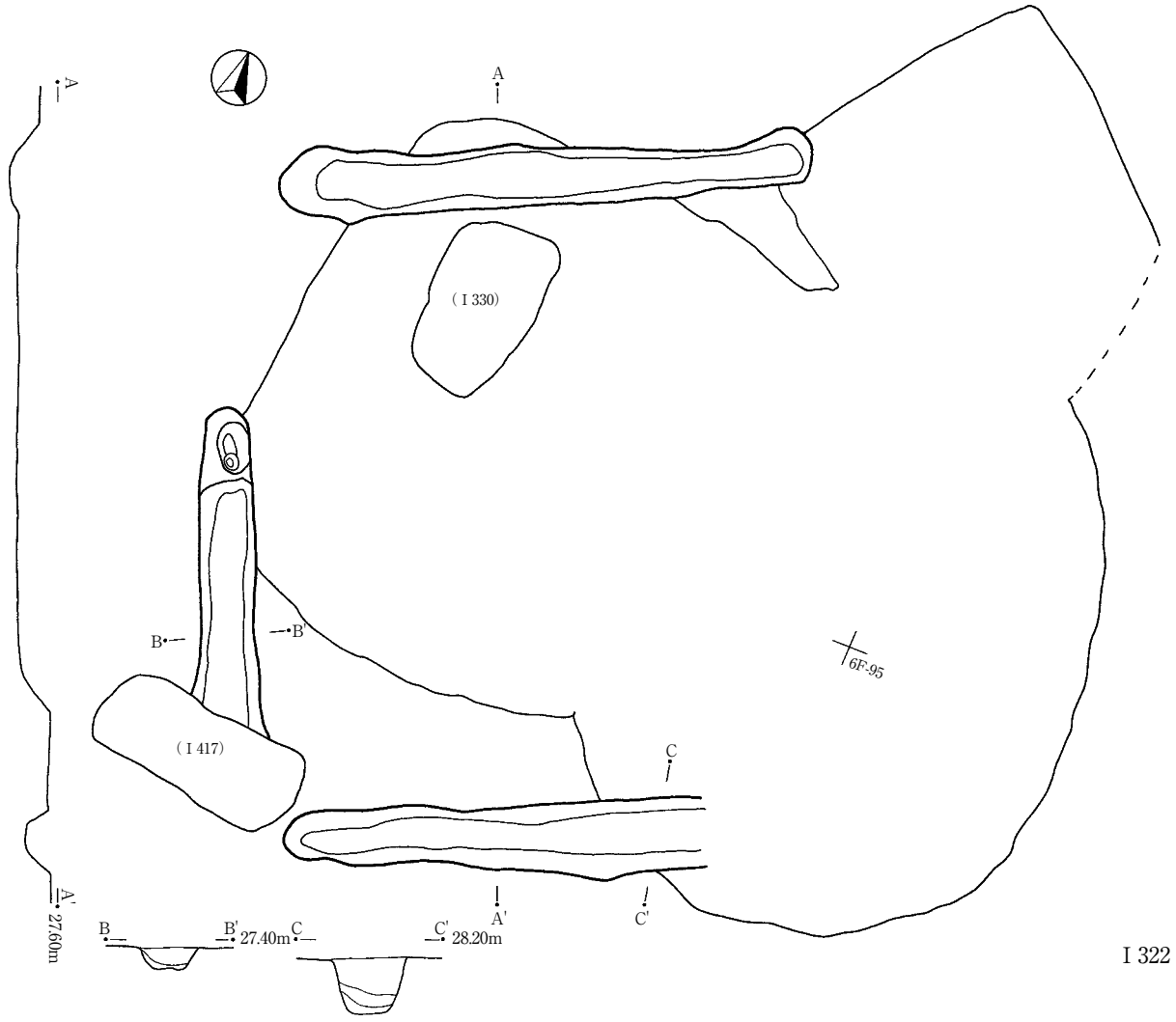
方形周溝墓はＩ区中央に２基隣接して存在するのみであった。一帯は弥生時代中･後期の重複が激しく、同時に調査が進行したこともあり、マウンドの有無も確認出来ない状況であった。加えて、Ｉ323周溝覆土からは古墳時代出現期を中心とした土器群が大量に出土したことから、当所は古墳時代の所産と想定された。しかし、この土器群は総て周溝内でも上位、それもある一定のレベルから出土しており、周溝がかなり埋没した段階に伴う遺物であることが明確となったので、弥生時代の内で報告することとした。ただこの場合でも終末期ないしは遡っても後期後半と想定されよう。伴う明瞭な遺物こそ出土しなかったが、Ｉ322も隣接し、方位も同じくすることからそれほどの年代差はないものと思われる。２基の関係については如上の経緯もあり新旧関係は捉えられなかったが、Ｉ322周囲の土坑墓の様相からまずＩ322が築かれ、次にＩ323が続いたと推測される。そして古墳時代に入る頃まで墓の管理はなされ、その反映が周溝内から出土した土器群であったと推測する。

Ｉ322（第30・62図）

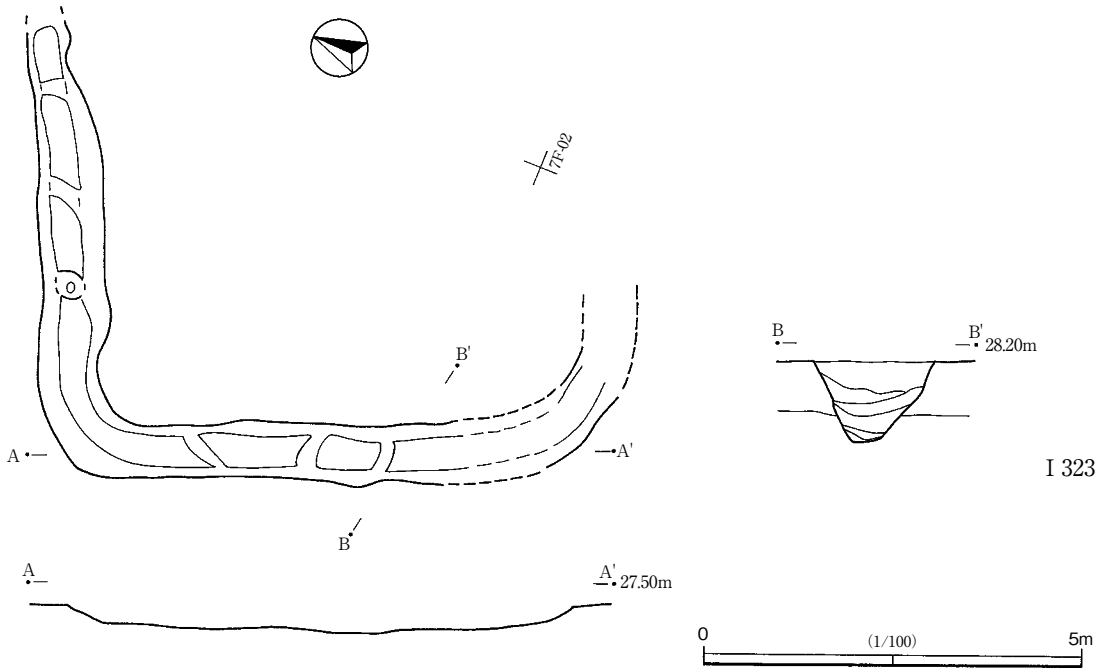
Ｉ区中央に位置する。縄文時代以降の住居群と密に重複するが、とりわけ弥生時代中・後期の住居（Ｉ326・Ｉ342）を覆うかたちで築かれている。東側を残して３方向の周溝を検出した。東側は溝（Ｉ349）のために壊された可能性が高いが､そうすると方台部はほぼ方形のプランと考えられる。規模は南北9.9m、東西は約10m程になろうか。形態的には四隅の切れる中期タイプながら、中央部を一段低く掘り下げた結果ともみられ、断定はし得ない。方台部の規模からすると狭い周溝幅と言える。覆土は最下部に黄褐色土がみられるほかは、レンズ状の堆積を示す暗褐色土によって占められ、その上部から古墳時代の土器が大量に出土した。なお、遺物は覆土内からは弥生土器片を主とした遺物が多く出土したものの、ほぼ二次的な混入と思われ明確に伴う遺物はあげ得ない。

Ｉ323（第30・62図）

Ｉ区中央に位置する。弥生時代後期の住居（Ｉ332）と重複する。北側と西側周溝のみ検出した。形態はＩ322との間隔からして方形と思われ、規模は南北約８m、東西７m以上である。周溝は全周するタイプとみてよく、Ｉ322と同様方台部の規模からすると狭い周溝幅と言える。底面には中央部から両端に向かって僅かながら階段状の段差がみられる。覆土はレンズ状の堆積を示し、最下部に黄褐色土、その上に黒褐色土、次に褐色土と連続しており、自然堆積とみてよいであろう。遺物は覆土内の多少の土器片のみで、明確に伴う遺物はあげ得ない。

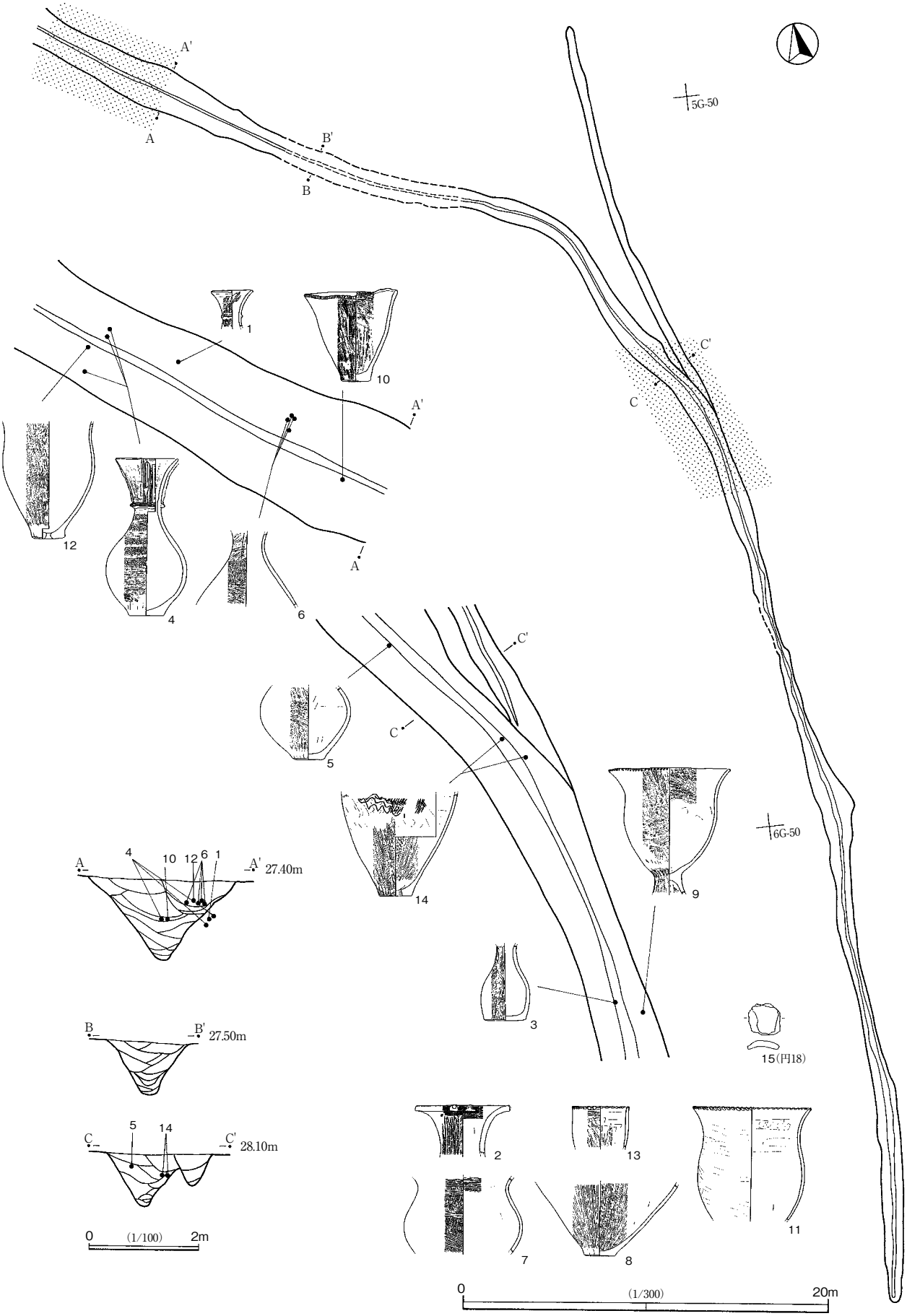


I 322

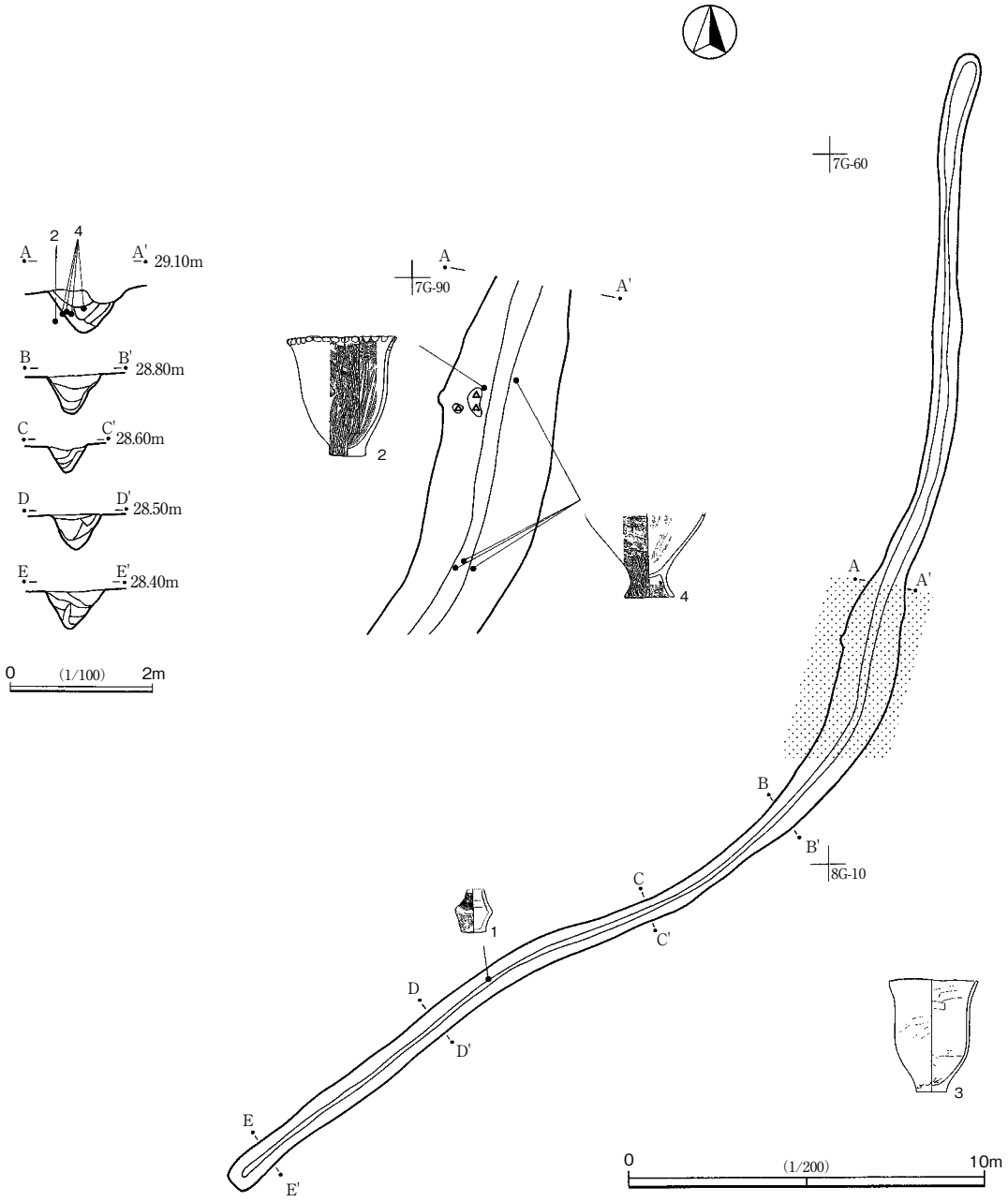


I 323

第62図　I 322・I 323 方形周溝墓


A'
A
B'
B
5G-50
C'
C
1
10
A'
12
4
6
A
C'
C
5
14
6G-50
9
A
4
10
12
6
1
A'
27.40m
3
15(円18)
B
B'
27.50m
5
14
C
C'
28.10m
2
13
11
7
8
0
(1/100)
2m
0
(1/300)
20m

第63図　I 011 環濠



第64図　Ⅰ371 環濠

6　環濠

草刈遺跡の弥生時代環濠は台地南西端を囲む東西径約100mのもの（環濠１）と、それより東側の東西径約150mのもの（環濠２）の二つが明瞭であるが、この他に囲繞までは至らないが、環濠１と同２にまたがって台地南側を大きく区画するような溝、また、環濠２の南東約40m先に平行するように走る溝も存在する。前者は単独で機能したと思われ、環濠に準ずるものとして扱うが（環濠３）、後者は環濠２の南端を補うように掘られていることからそれにともなうものと考えられる（環濠２南東溝）。時期的には環濠１と環濠２が中期、環濠３が後期に相当する。

Ⅰ区では環濠２と環濠３の東側屈曲部がかかっており、とりわけ環濠２の南端のあり方がうかがえる点が注目される。集落との関係については、中期の住居群がほぼ環濠２の内部に収まることから問題ないが、

環濠３については後期集落との関連は不明瞭である。これは草刈台地南西部が後世に大きく土取りがなされ、その内容が不明なままに終わっているという事情が大きい。

Ｉ011・Ｉ371（環濠２：第30・63・64・141・142・166・233・264図、図版13・14・54・93）

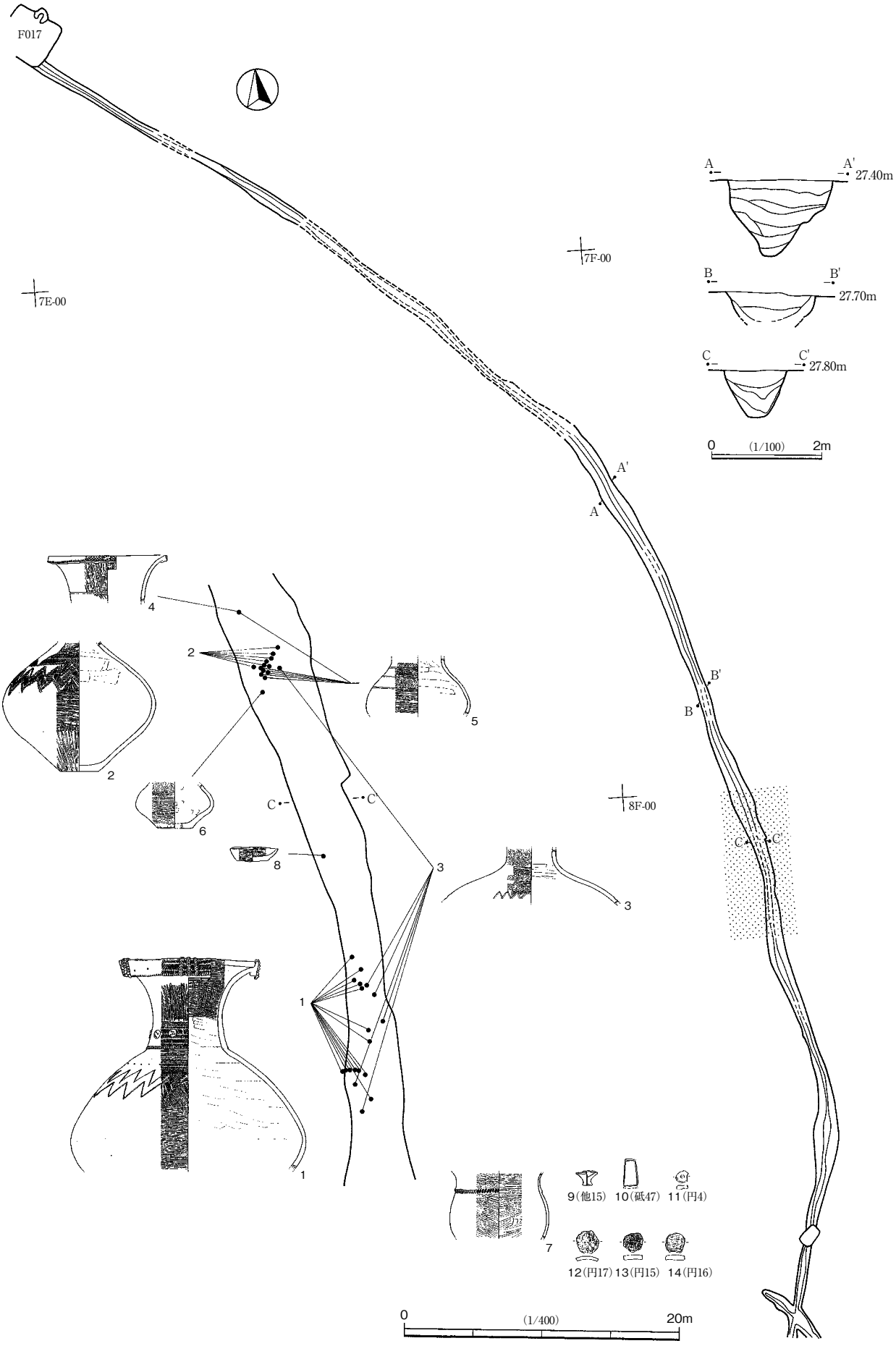
Ｉ区北西からM区西端を経てＩ区南東端を走る中期の環濠であり、入口部らしき空白部を挟んで北側（Ｉ011）と南側に分かれる（Ｉ371）。弥生時代の住居３棟（Ｉ012・Ｉ055・Ｉ059）と重複あるいは近接するが、何れも後期の所産である。中期の住居とは最も近接するもので約７ｍの位置にある。東側には入口部のように約15mにわたって途切れた箇所があるが、浅く立ち上がって切れたというのではなく明らかに掘り残したものである。しかしここには門のような施設はなく、そこから環濠内中央に導かれるような空白域がある訳でもない。もちろん、その南側に続く環濠部分もＩ区南東端で止まっており、現状台地端との40m間は溝のない状況となる。この南東環濠部はそもそも深さが１ｍ前後で、当時はもっと深かったとしても果たして濠としての役目を果たしたか疑問である。恐らくそれは草刈環濠集落のあり方とかかわるものであろう。なお、屈曲部から北側へ細い溝が延びるが、これはセクション（Ｃ－Ｃ′）からわかる通り環濠を切っている。しかし、環濠南東部の延長上にある点から、あるいは掘り直しの可能性も捨てきれない。一応図示する。

環濠の規模は東西幅155m、南北幅は凡そ120mと推測され、不正楕円形とでも称すべき形態である。Ｉ区内での上幅は北側（Ｉ011）の広いところで２ｍ、狭いところで１ｍ、深さはそれに比例して深いところで２ｍ、浅いところで１ｍ前後となる。一方、南側（Ｉ371）では上幅の広いところで１ｍ、狭いところで0.5m～0.7m、深さは0.6m～0.4mに過ぎない。断面はＶ字形を呈するが、北側底面は丸みがある反面、南側では角張っている。覆土の状況は場所によって区々である。北側では底面近くに黒褐色の薄い土層が見られる点と互層状の堆積は共通するが、Ａ－Ａ′、Ｂ－Ｂ′におけるロームブロックと焼土を多量に含む層はＣ－Ｃ′では見られない。一方、南側では場所によって相違もあるが、底面近くに黒褐色の薄い土層が見られる点とその上位にロームブロックを含む層が見られる点は共通する。恐らく、共にゴミ捨て場として、あるいは住居を構築する際の廃土を捨てた結果に因るのではなかろうか。なお、北側Ａ－Ａ′ライン右上の落込みは恐らく土坑の重複と思われる。６・12の遺物は投影した結果その位置に反映したもので、土坑に伴うものではない。

遺物は覆土中位から上位にかけて多く出土した。層位的には環濠がある程度埋没した後に投棄が行われたと思われる。第63・64図には遺物の出土が多く見られた区域を抽出するかたちで図示した。便宜上北側Ｉ011と南側Ｉ371に分けて説明する。北側１～６・８は壺であるが、４がほぼ完形、３が口縁部～頸部を欠く、その他は復元・図示した。とりわけ、４は刻み目付突帯を有する土器の全体が窺える例（胴部上位に５段の結節文帯）として貴重である。７は装飾壺大破片を復元･図示した。９～14は甕である。この内、９はほぼ完形で、その他は復元・図示した。９は台付甕であり、中期に属するものとしては数少ない例である。14は胴部にヘラ描きの斜線と波状文を施す装飾甕である。15は土器片利用土製円盤である。一方、南側１は小形の壺で上下沈線区画の縄文帯が巡る。２はほぼ完形の波状口縁ハケ甕、３は完形に近い波状口縁ヘラ調整甕、４は台付甕底部である。

Ｉ122（環濠３：第30・65・140・141・226・233・237・264図、図版54・88・93・95）

Ｆ区からＩ区､また、Ｆ区飛び地へと台地南西端を弧状に区画する後期の環濠である。弥生時代中期（Ｉ136・Ｉ276）及び後期（Ｉ237・Ｉ251）の住居群と重複するが近接するもの（Ｉ365）もある。Ｆ区内で

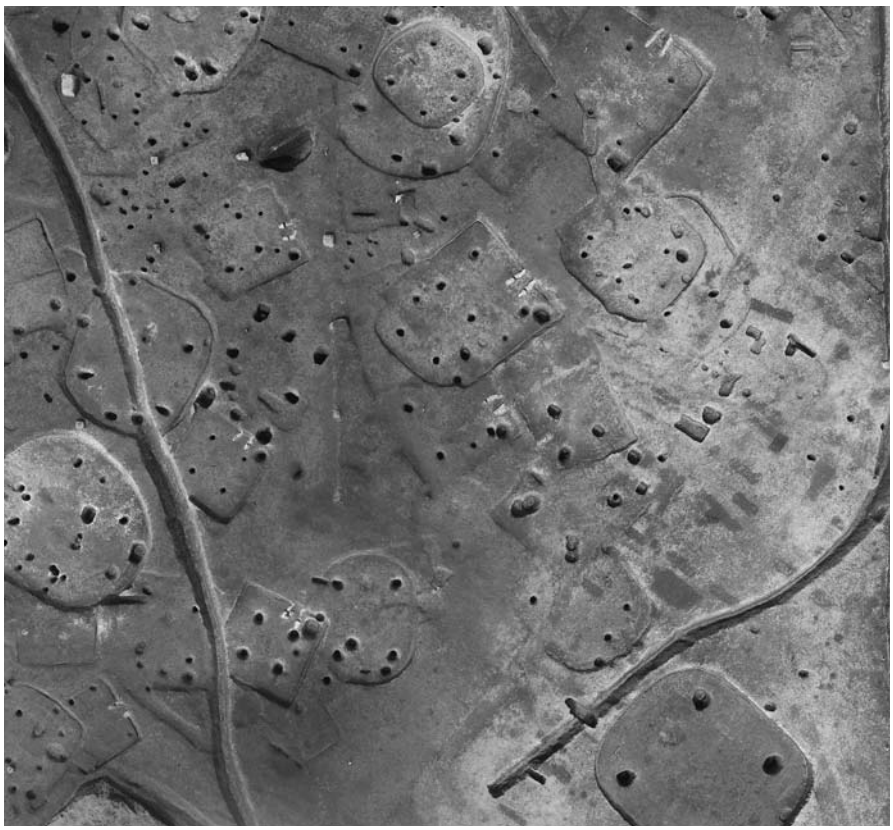

F017
7E-00
7F-00
8F-00
A
A'
27.40m
B
B'
27.70m
C
C'
27.80m
0 (1/100) 2m
0 (1/400) 20m
9(他15)
10(砥47)
11(円4)
12(円17)
13(円15)
14(円16)

第65図　I 122 環濠

は北側に向けて緩く凹形に湾曲するが、Ⅰ区内では逆に緩く凸形に湾曲する。北東のK区･J区にまたがって存在する溝（K600・J500）と対応する可能性が高い。

環濠の総延長は約210mに及び、Ⅰ区内での上幅は広いところで1.5m、狭いところで１m、深さもそれに比例して深いところで２m、浅いところで１m前後となる。断面は漏斗形ないしU字形を呈し、底面は丸みがある。覆土の状況は最下層の黄褐色土の上にロームブロックを含む層が見られるが、その後は自然堆積に因る埋没と推測される。この点、環濠２の状況とは異なる。

遺物は覆土中位～上位にかけて多く出土した。層位的には環濠がある程度埋没した後に投棄が行われたと思われる。第65図には遺物の出土が多く見られた区域を抽出するかたちで図示した。１～６は壺であるが、何れも半個体以下を復元・図示したものである。１は装飾に富む壺であり、棒状粘土を貼り付けた幅広の口縁部と頸部にボタン状円盤、胴部上位に山形文（内部沈線区画の羽状縄文帯）が施された土器で、出土状況や復元後の遺存度、また遺物群の中では最も新しい様相を示すことから、この遺構の年代を指し示している可能性が高い。２も類似するが中膨らみの器形と山形文上位の沈線区画の縄文帯などより古い様相を呈する。３は結節文帯を多用する壺で、これも１と同じ頃の所産であろう。逆に４は幅の狭い口縁部など２と同じ段階と思われる。５は胴部上位に網目状撚糸文帯を巡らす土器であり、壺ないし無頸壺になろうか。６は小形の壺であり、胴下半部が括れるタイプである。７は胴部中位に押捺列を巡らす甕であり、８は小形の皿である。６・７は恐らく１・３と同段階であろう。８は珍しい器形といえる。９は高坏ミニチュア、10は軽石Ｂ砥石、11は有孔土製円盤、12～14は土器片利用土製円盤である。９以降は中期の所産と思われる。



▲後期環濠（左側：Ⅰ122）と中期環濠（右側：Ⅰ371）空撮。草刈遺跡西端は中期と後期の環濠が交錯し、Ⅰ区はその東側部分に相当する。

第66図　古墳時代前期遺構分布図（1/700）

第４節　古墳時代前期

１　概要

Ｉ区で検出された古墳時代前期の遺構は約50棟の住居と土坑３基であるが、弥生時代で報告した方形周溝墓の継続を考慮すれば、それに方形周溝墓１基が加わることとなる。

集落はＩ区の中央に集中する傾向があるが、南西部は近世墓域に相当するため、消滅したものもあったと思われる。北東や南東端にも離れて分布する住居がある。時期的には古墳時代前期初めから終末までみられるが、激しい重複状況からプランが不明瞭なものが多く、遺物もその帰属に苦しむ例が多々認められる。とりわけ一括遺物の場合は注意を要するところである。また、弥生時代の住居（Ｉ186A）覆土中ではあるが、遺物の年代が古墳前期～中期に及んでいる例もある。

方形周溝墓（Ｉ322）については出土状況のみを図示した。土坑墓については正確にいうと、弥生時代とした一群についても遺物が伴わない例も多く、弥生時代との判別は困難であった。むしろ、方形周溝墓と土坑墓はどちらの時代かではなく、弥生時代～古墳時代にかけて営まれたと考えたほうが適当でさえある。

出土した遺物は土器が大半を占め、次いで弥生時代から継続して使用された砥石類が多いが、１点出土した鉄鎌は注目される。特筆されるのは（Ｉ186）から出土した大量の土器である。単に一括資料という価値の他に、人骨との関連、高坏の脚部を折っていることなどの、葬送習俗が窺える点は貴重な例といってよい。

なお、個別に扱った遺構（住居）は全体の約26％であり、残りのものについては弥生時代と同様、分割図及びＣＤ内に収めたデータを参照されたい。また遺構の抽出率については次に示すとおりである。

住居跡13/50　　土坑３／３　　土坑墓２／２　　（分母は種別遺構数、分子は掲載数）

２　住居跡

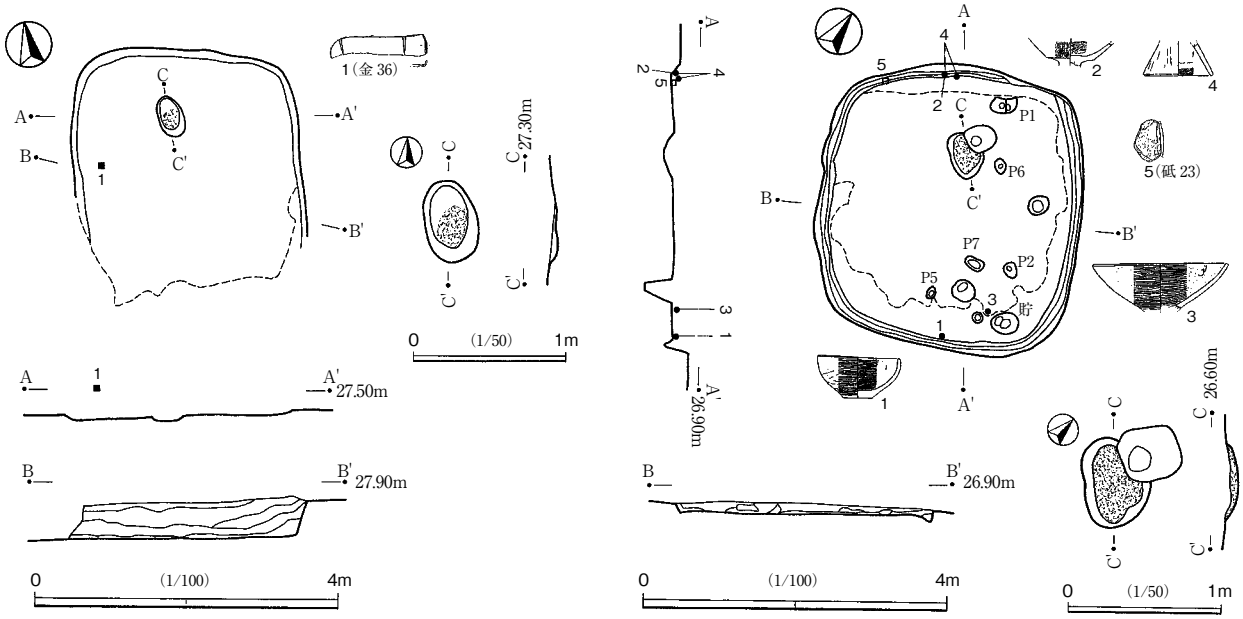
Ｉ035Ｂ（第66・67・245図、図版101）

Ｉ区北西寄りに位置する小型住居である。少なくとも５棟の住居と重複しており、プランについては明瞭に捉え得なかった。形態は縦長の隅丸長方形と思われ、規模は長径3.4m以上、短径2.8mとなる。炉は中央北壁寄りにあり、焼土層の形成は不良である。柱穴は認められず、貯蔵穴等も確認出来なかった。踏締め面も同様である。覆土の堆積状況は緩やかな凹レンズ状であり、遺物が少なくほぼ暗褐色土で占められるなど自然堆積と推測される。なお、伴う遺物は鎌を除けば僅かな土器片のみであり、時期決定上の問題もあるが、形態やカマドの有無も考慮して前期の内に含めた。

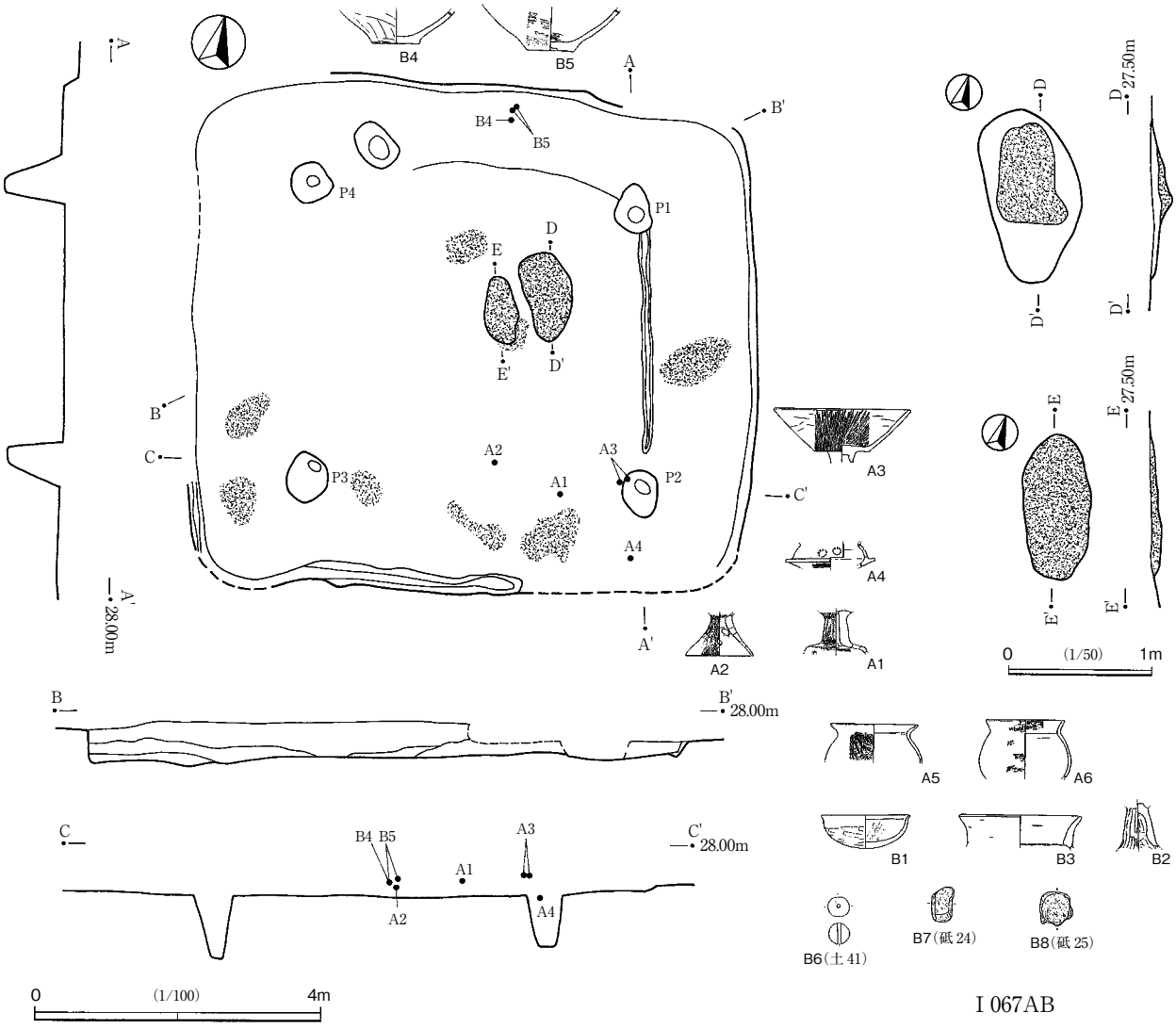
遺物は住居北西覆土内から出土した鉄鎌があげられるにすぎない。直刃であり、比較的遺存状態は良い。

Ｉ044（第66・67・169・225図、図版15・87）

Ｉ区北東寄りに位置し、Ｉ001の南東に隣接する小型住居である。４棟の住居と重複するが辛うじてそのプランは捉え得た。形態はほぼ方形であり、規模は長径3.5m、短径3.2mとなる。炉は中央西寄りにあり、焼土層の形成は比較的良好である。柱穴らしきはものは確認されなかったが、梯子穴は中央南壁寄り（壁から約80㎝）にあり、貯蔵穴も入口右手の壁際に存在する。内部右半分には小ピットが検出された。果たして伴うものかどうか確証はないが一応図示する。覆土は掘り込みが浅いということもあるが、遺存状況は不良である。



I 035B　　I 044



I 067AB

第67図　I 035B・I 044・I 067AB 住居

遺物は床面付近からまとまって出土した。１は椀のほぼ完形、２・３は高坏、４は台付甕各部片を復元・図示した。５は軽石Aの砥石である。

Ｉ067ＡＢ（第66・67・169・225・235図、図版87・94）

Ｉ区北西寄りに位置する住居である。少なくとも３棟の住居と重複しており、南側についてはプランを捉えられなかった。形態は隅丸長方形と思われ、規模は長径7.5m、短径6.8mとなる。Ｐ１とＰ２を結ぶように浅い溝が走り、Ｐ１とＰ４の間にも僅かな段差がみられる。炉が２基ある点も考慮すると、所謂拡張住居とみるべきであろう。炉は中央北寄りに２基あり、焼土層の形成は共に良好である。主柱穴は対応する位置に４本存在するが、梯子穴や貯蔵穴等は確認出来なかった。踏締め面も同様である。覆土は焼土が混入しており（遺物は多くこの焼土内)、一部はブロック状となって遺存した。そのあり方は覆土上位から中位に多くみられ、最下層では不明瞭であった。

遺物については、その経緯から内側をＡ、外側をＢとして採りあげた。段差の意味もあるので調査時の通り、Ａ、Ｂとして図示している。Ａ１・４は特殊器台形土器脚部片を復元・図示した。あるいはＡ１と同一個体の可能性もある。Ａ２は器台脚部である。Ａ３は高坏坏部片を復元・図示した。Ａ５・Ａ６は共に甕口縁部～胴部片を復元・図示した。Ｂ１は坏約半個体である。Ｂ２は高坏脚部片、Ｂ３は甕口縁部、Ｂ４・Ｂ５は甕底部片をそれぞれ復元・図示した。Ｂ６～Ｂ８を一括として扱う。Ｂ６は土玉、Ｂ７・Ｂ８の軽石Aの砥石２点である。

Ｉ075（第66・68・169・225・234図、図版87・94）

Ｉ区北西寄りに位置し、同じく前期の住居Ｉ095と重複するが本址が新しい。形態は多少隅丸の横長長方形であり、規模は長径4.8m、短径3.3mとなる。炉は存在せず、柱穴･梯子穴･貯蔵穴等すべて確認されなかった。踏締め面等も同様である。覆土は焼土を多く含む暗褐色土であるが、ブロック状の集中は認められなかった。

遺物は床面及び覆土上位から出土した。１は器台脚部片を復元・図示した。２は器台脚部～器受部にかけての半個体である。３は高坏坏部片、４は甕口縁部～胴部大破片を復元・図示した。５は土錘であり、床面上の遺物である。６は軽石Aの砥石である。

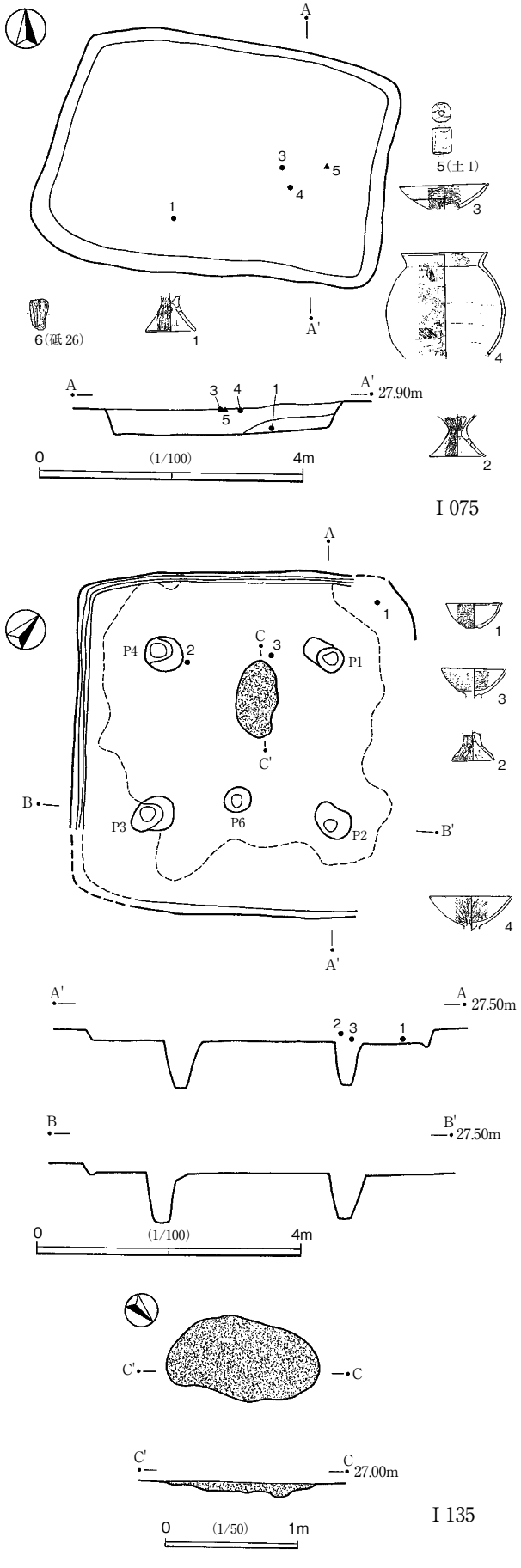
Ｉ135（第66・68・171図、図版15）

Ｉ区南西寄りに位置し、弥生時代の住居及び環濠上に位置するが、古墳時代中期の住居（Ｉ133）によって全体を大きく削られており、遺存状態は不良である。形態はほぼ方形であり、規模は長径4.9mほど、短径4.8mとなる。炉は中央北西寄りにあり、焼土層の形成は良好である。柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴はＰ６が該当する可能性もあるが、壁との距離があり、指摘のみに留める。貯蔵穴は確認出来なかった。覆土の状況は不明である。

遺物は床面付近からまとまって出土した。１は小型の椀半個体である。２は高坏脚部約半個体、３は高坏坏部約半個体である。４は高坏坏部大破片を復元・図示した。

Ｉ170（第66・69・171図、図版15・55）

Ｉ区北西際に位置し、弥生時代以降の住居４棟と重複し、遺存状況は不良である。形態は長方形であり、規



第68図　I 075・I 135 住居

模は長径5.9m、短径5.1mとなる。炉は不明ながら、重複住居の影響もあり、定かでない。柱穴は対応する位置に４本存在し、南側２本と壁との間には更に２本並列するが、これが補助柱穴になるかどうかはわからない。梯子穴は中央南壁寄りにあり、貯蔵穴は確認出来なかった。覆土の状況は不明である。

遺物は床面及び覆土内から出土した。１は器台完形、２は脚部裾を欠く器台である。３～５は甕ないし壺の底部片を復元・図示した。６は境界線ないし範囲外であるが、時期的に問題ないので所属するものとして扱った。ほぼ完形の甕である。７は頸部から上を欠く壺大形片、８は台付甕底部片を復元図示した。

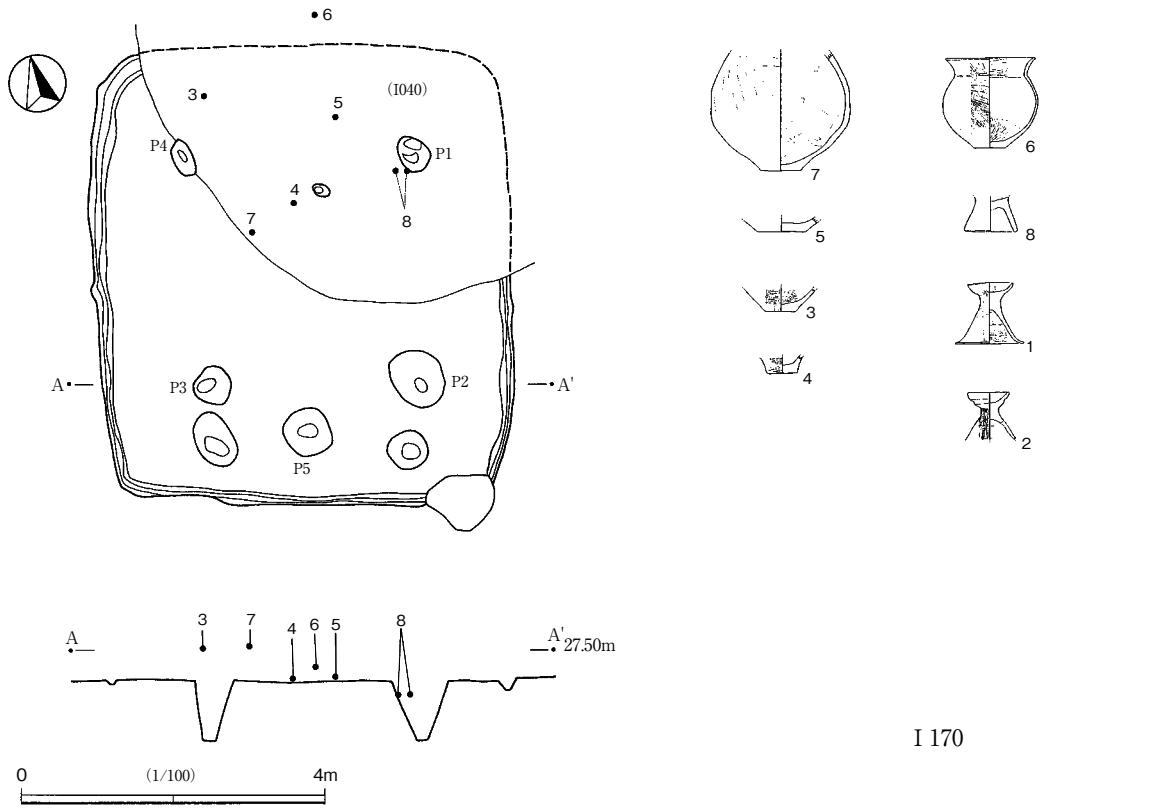
I 173（第66・69・171図、図版55）

Ｉ区中央北西寄りに位置し、弥生時代以降の住居４棟と重複する。形態は多少胴張りの隅丸方形であり、規模は長径4.9m、短径4.7mとなる。炉は中央やや北寄りにあり、焼土層の形成は良好である。柱穴は見当たらず、炉北側に図示した２本も本址に伴うかどうかわからないが一応図示する。梯子穴は中央南壁寄りに１本あるが、壁から離れているなど（約1.5m）、疑問もある。貯蔵穴は確認出来なかった。覆土は壁際にまず土砂が入り込んだのち、焼土を含む土がほぼ水平に堆積するという構図である。

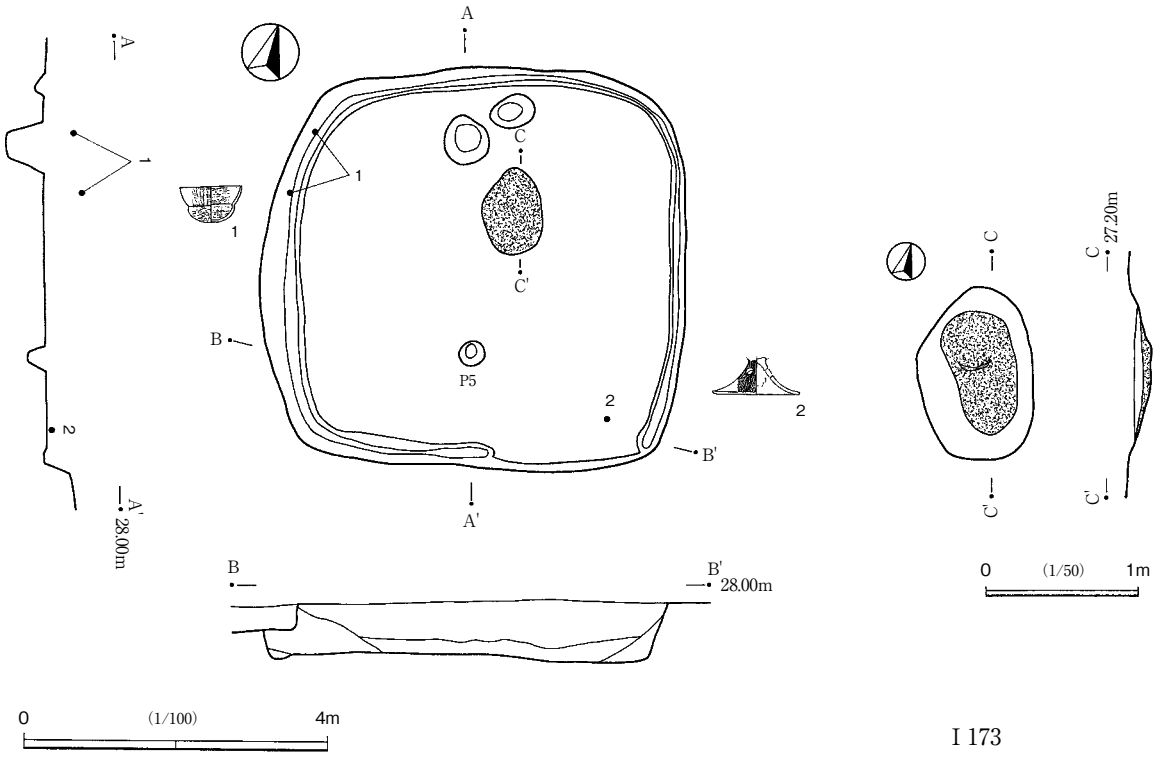
遺物は床面上から出土した器台ほかをあげる程度である。１は坩ほぼ完形、２は器台約半個体である。

I 219（第66・70・172・242図、図版98）

Ｉ 区南西寄りに位置し、弥生時代以降の住居６棟と重複する。この内、同時期の住居が１棟（Ｉ 211）あるが、本址の方が古い。形態は多少隅丸の方形であり、規模は長径･短径共に6.3mである。炉は中央やや北西寄りにあるが、遺存が悪く範囲を記すのみである。柱穴は対応する位置に４本あり、その大きさや径は不揃いであった（深さ未確

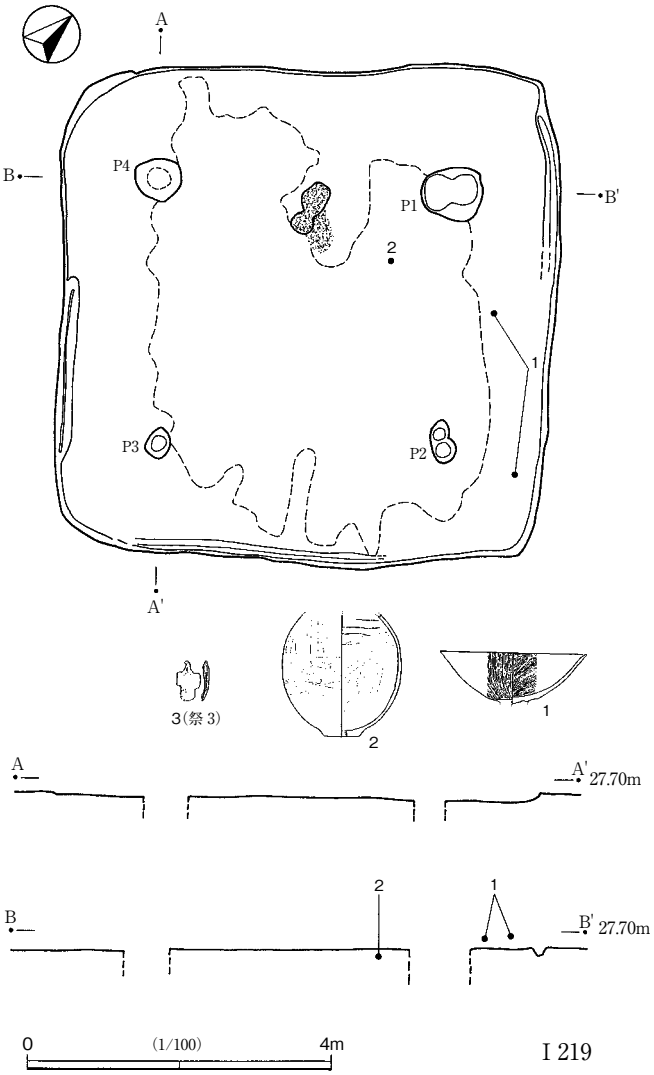


I 170

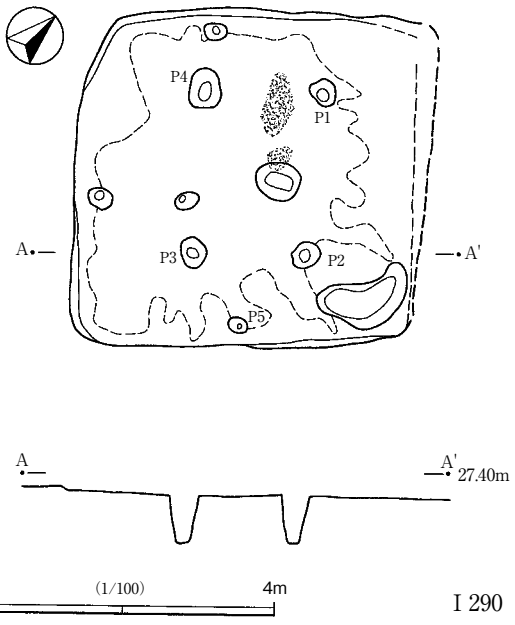


I 173

第69図　I 170・I 173 住居



I 219



I 290

第70図　I 219・I 290 住居

認)。梯子穴は見当たらず、貯蔵穴も同様である。覆土の状況は不明である。

遺物は床面ないし若干浮いた状況で出土した。1は高坏坏部片、2は甕胴部片を復元・図示した。3は覆土内から出土した鳥形土製品である。その形状から鷹を模したものであろうか。

I 290（第66・70図）

Ⅰ区中央南寄りに位置し、弥生時代以降の住居4棟と重複する。この内、同時期の住居が1棟あるが（I 375)、新旧関係は不明である。形態は多少菱形の隅丸方形であり、規模は長径4.7m、短径4.3mとなる。炉は中央やや北西寄りにあるが焼土域といってよい内容である。柱穴は対応する位置に4本あり、東西幅が狭く内側に寄っている。この他に住居西側から北側にかけてピットが散在するが、伴うかどうかわからない。梯子穴は中央南東壁寄り（壁から約30㎝）にあり、南東コーナーに貯蔵穴らしき不正形の浅い窪みがある。覆土の状態は不明である。

遺物はとりたてて図示すべきものがない。

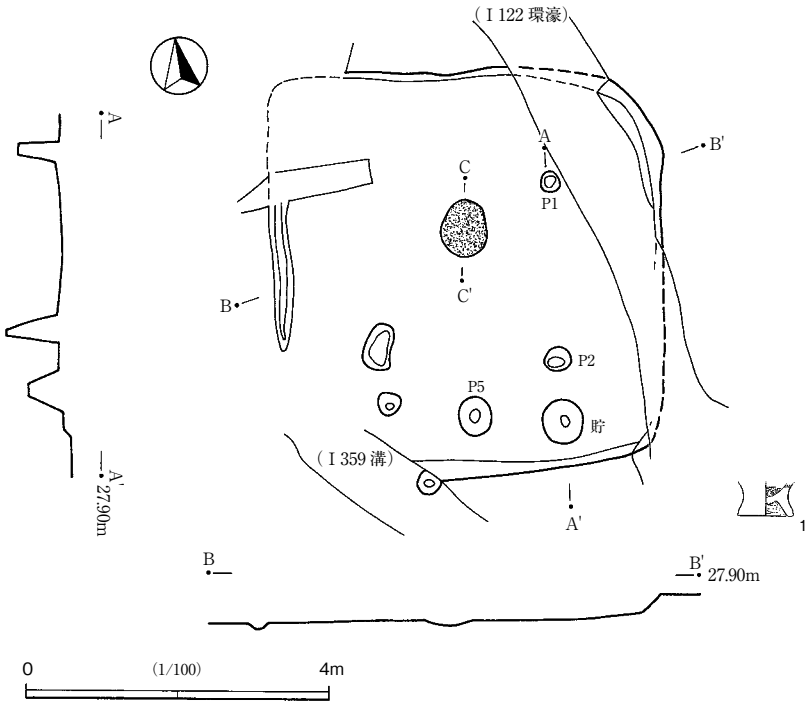
I 358（第66・71・174図、図版15）

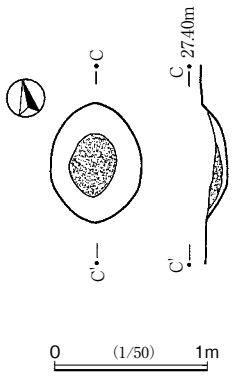
Ⅰ区中央南寄りに位置し、弥生時代の環濠、及び、それ以降の住居3棟と重複する。形態は隅丸方形と思われ、規模は長径5.0m、短径4.9mとなる。炉は中央やや北寄りにあり、焼土層の形成は比較的良好である。柱穴は東側以外は不明瞭であった。梯子穴は中央南壁寄り（壁から80㎝)、貯蔵穴は入口右手壁寄り（60㎝）にある。覆土の状態は不明である。

遺物は覆土内一括の台付甕底部をあげるのみであった。1は台付甕底部片を復元・図示した。

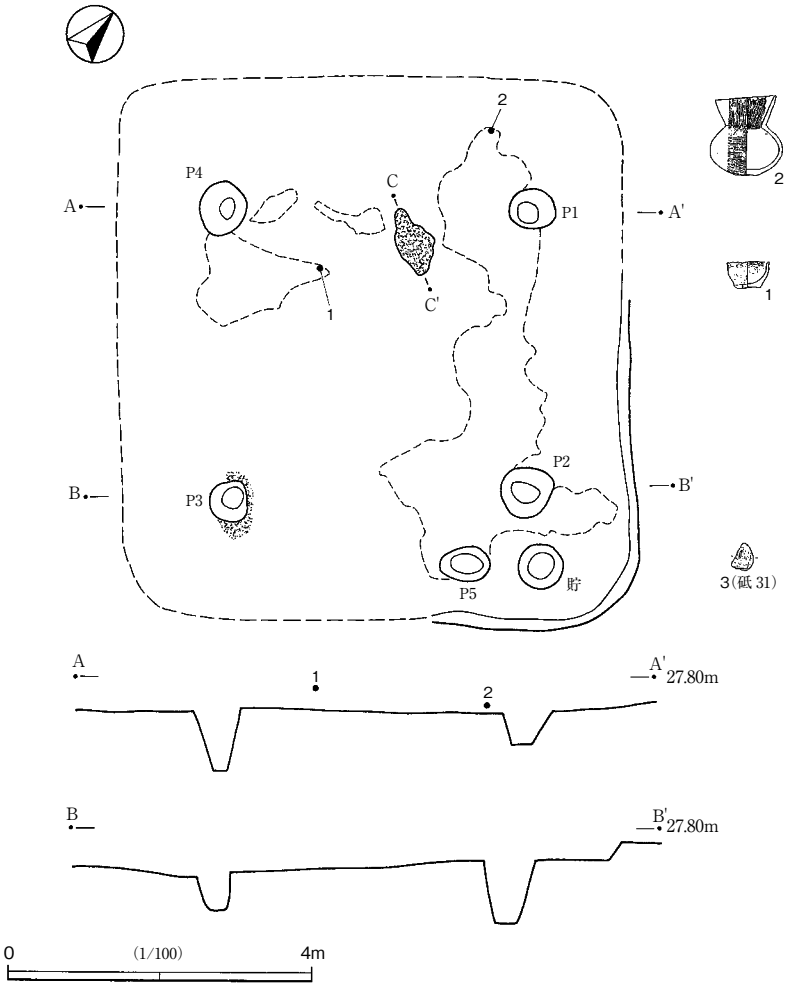
I 397（第66・71・175・225図、図版17・57・87）

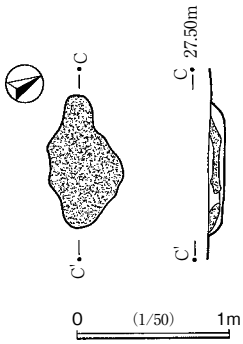
Ⅰ区中央南東寄りに位置する。弥生時代の住居群内にあり、遺存状態は不良である。形態は隅丸方形と思われ、規模は長径7.2m、短径6.8mとなる。炉は中央北寄りにあり、焼土層の形成は比較的良好で





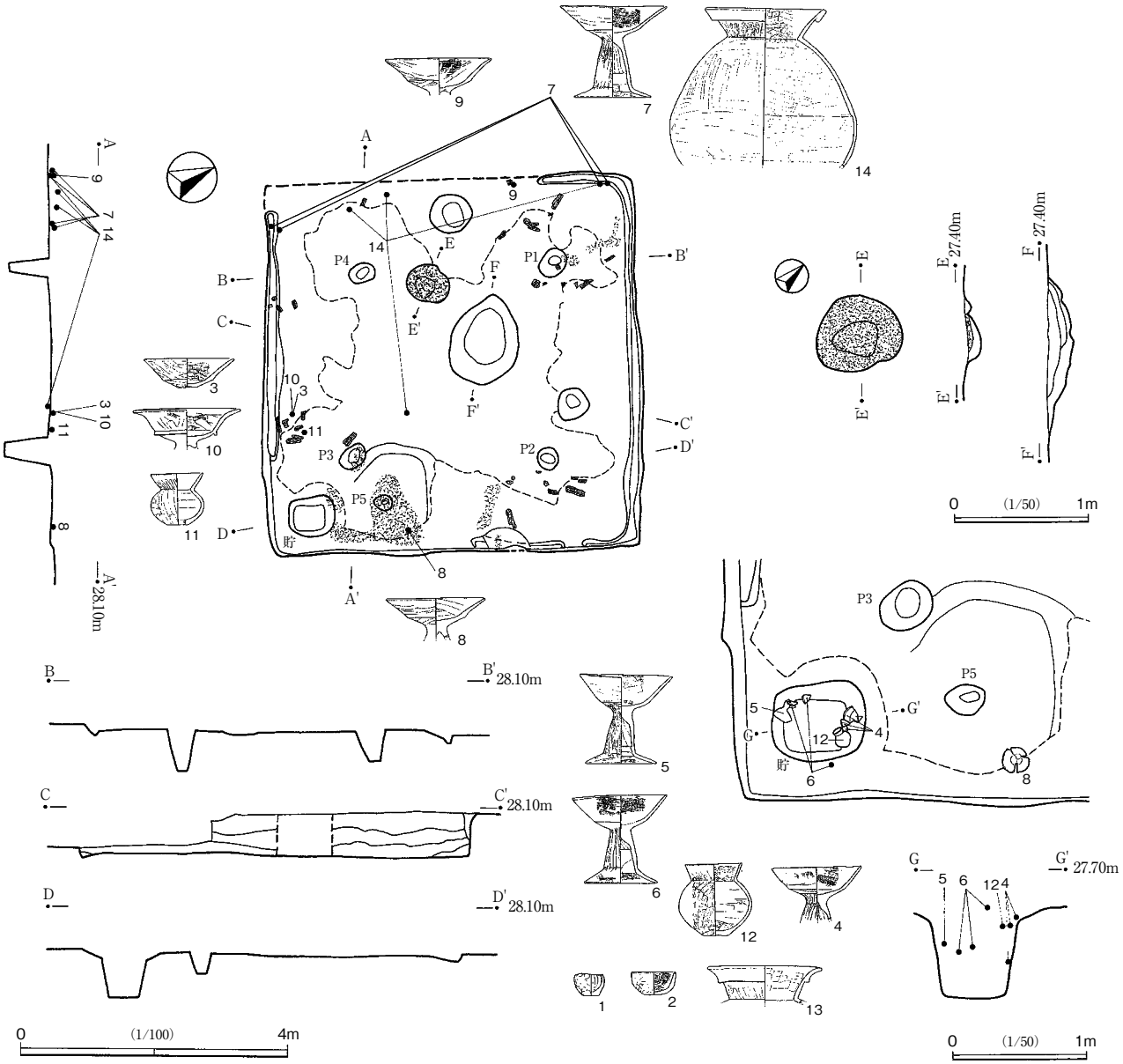
I 358





I 397

第71図　I 358・I 397 住居



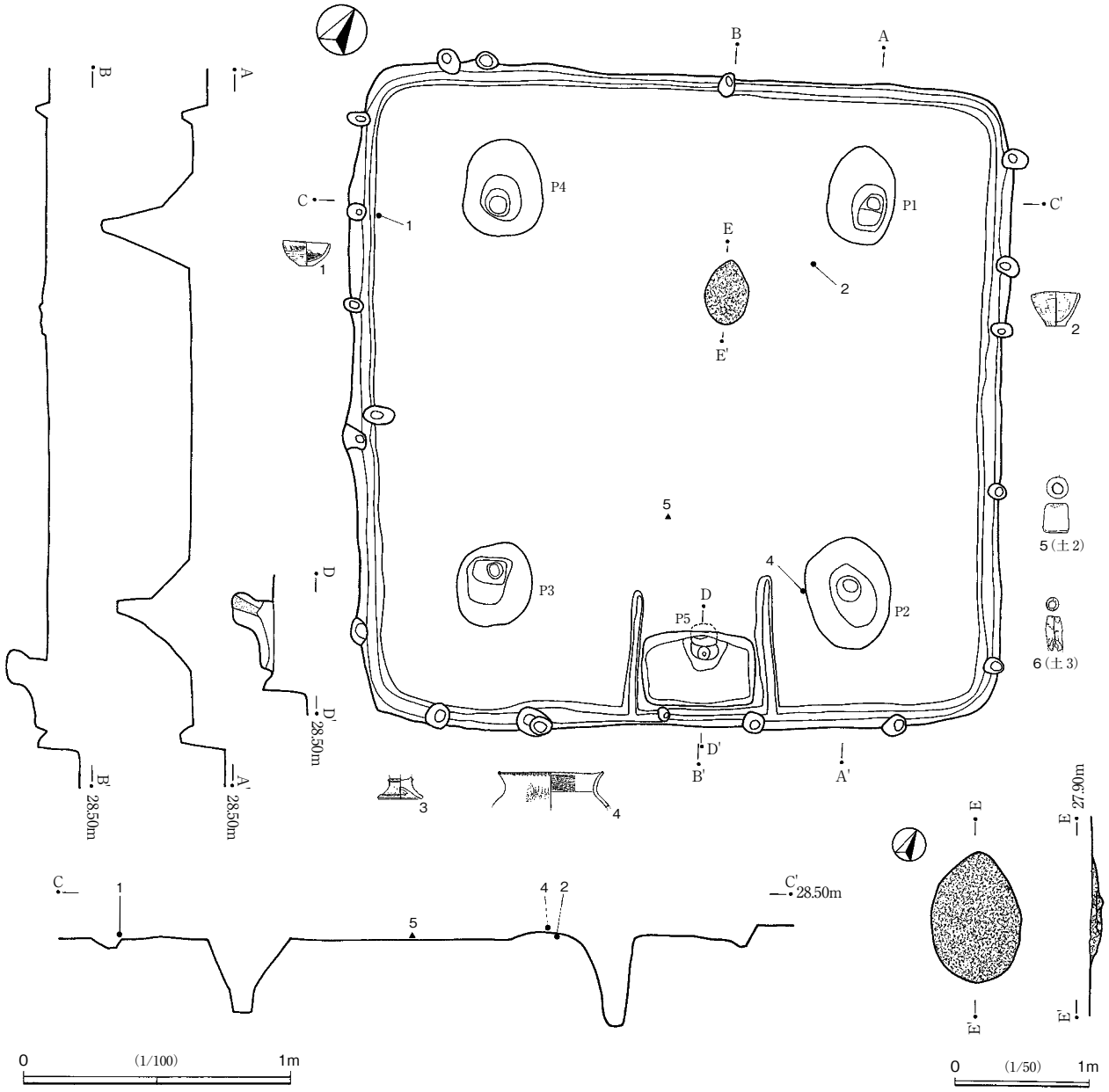
第72図　Ⅰ391 住居

ある。柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴は中央南東コーナー寄りのピットが該当すると思われ、貯蔵穴はその右コーナー部にある。覆土の状態は不明である。

遺物は確認面が床面付近に当たっていることもあり、極めて少ない。１はほぼ完形の手捏ね土器である。口縁部には多分に文様的な軽い捻り痕跡が巡っている。２はほぼ完形の壺ということに加え、床面出土という状況からこの遺構の直接の年代を示すものと思われる。３は覆土一括品の軽石Aの砥石である。

Ⅰ391（第66・72・174・175図、図版17・57）

Ⅰ区南東寄りに位置し、弥生時代以降の住居４棟と重複する。この内、同時期の住居が１棟（Ⅰ397）あるが、本址が新しい。形態は方形であり、規模は長径5.4m、短径5.3mとなる。炉は中央やや西寄りに



第73図　Ⅰ432 住居

あり、住居の大きさからすると小規模である。なお、焼土層の形成は不良である。柱穴は対応する位置に４本ある。梯子穴（壁から70㎝、深さ約30㎝）は入口左手の低い段差内、貯蔵穴（深さ約60㎝）は隣接したコーナー内にある。炭化材と焼土が壁際から中央に向かうように床面付近で検出されており、いわゆる焼失住居と考えられる。覆土は壁際を除き下部に炭と焼土を多く含む層があり、中位から上位は焼土をほとんど含まない暗褐色土である。なお、炉の東側に隣接して長径1.3mほどの浅い落ち込み（深さ約35㎝）があり、その上部には焼土を含む層（焼失住居に伴うものか）があるものの炉とは思われず、むしろこの浅いピットがあるために炉の片寄りが生じたものと思われる。

遺物は床面付近と貯蔵穴内（４～６・12）から多く出土した。１の手捏ね土器、２の椀共に完形品である。３・８～10は高坏坏部、４は高坏半個体、５～７は共に高坏完形ないしほぼ完形品、11・12は小型壺ほぼ完形、13は壺口縁部～頸部片、14は壺口縁部～胴部大型片を復元・図示した。

I 432（第66・73・175・234 図、図版17・94）

Ⅰ区中央東端に位置し、弥生時代以降の住居７棟と重複する。この内、同時期の住居が１棟（Ⅰ433）あるが、本址が古い。形態は方形であり、規模は長径9.3m、短径9.1mとなる。炉は中央やや北寄りにあり、焼土層の形成は良好である。柱穴は対応する位置に４本あり、掘形は規格的で深さも揃っている（１m～1.2m）。梯子穴は中央南東壁寄り（壁から1.3m）にあり、小溝に左右両側を区画された空間（東西1.8m×南北1.4m）の北縁中央にある。梯子穴は伴う施設を有し、懸ける角度までが推定できる例である。貯蔵穴・踏締め面共に確認出来なかった。覆土の状態は不明である。

遺物は床面から出土した４点の他に、覆土内の土製品等を図示した。１は土師器椀、２は鉢ほぼ完形である。３は弥生の系譜を引く高坏脚部片、４は甕口縁部～頸部片を復元・図示した。５・６は土錘であるが、５は他と形態の異なるものである。なお６は縦の半截破損品２点が接合したものである。

３　土坑

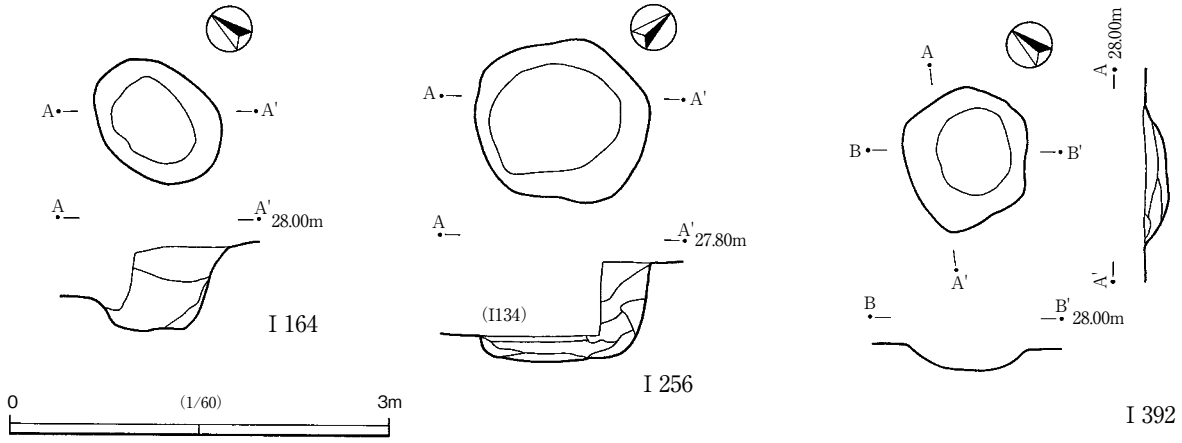
土坑のうち、古墳時代前期の可能性のあるものをここで報告する。いずれも確証はないが、重複状況や僅かな遺物の様相から判断したものである。

I 164（第66・74図）

Ⅰ区中央やや西寄りに位置する。形態は楕円形であり、規模は長軸約1.2m、短軸約0.9m、深さは確認面から約0.6mである。覆土は下層にロームブロックを多く含み、上層に焼土・炭化物を含む。遺物は若干の土器片のみである。

I 256（第66・74図）

Ⅰ区中央南寄りに位置し、形態は多少歪な円形である。規模は長軸約1.5m、短軸約1.3m、深さは確認面から約0.9mである。覆土は焼土、木炭粒、ロームブロックを交互に含むもので、しまりのないことなど、人為堆積と思われる。遺物は若干の土器片のみである。



第74図　Ⅰ164・Ⅰ256・Ⅰ392 土坑

Ⅰ392（第66・74図）

重複関係から弥生時代ないし古墳時代前期に所属するものであろう。Ⅰ区南東寄りに位置し、古墳時代前期の住居（Ⅰ390）と重複し、本址が古い。形態は歪んだ楕円形であり、規模は長軸約1.2m、短軸約1.0m、深さは確認面から約0.2mである。覆土は木炭粒、焼土を多く含む。遺物は若干の土器片のみである。

4　土坑墓

Ⅰ186B－1・Ⅰ186B－2（第66・75・76図、図版16・113）

弥生時代中期（から後期）の住居跡内覆土から２体の人骨が出土した。その検出状況は２体共に住居南東の窪地に頭部を南東に向けた仰臥伸展葬のかたちであった。両者の間隔は約1.7mであり、床面からのレベルは１体（２号人骨）が約15㎝、１体（１号人骨）が約30㎝であった。共に遺存状態は不良で、僅かに出土状況を記録するのみであったが、２号については身長が凡そ155㎝程と推測され、僅かに遺された歯の分析（第３章第５節）から「成人前期」という所見が得られている。浅い覆土内で、且つ明瞭な掘り込みが見られない点からすれば廃屋を活用した埋葬とも受け取れるが、確証がないので取りあえず土坑墓として報告する。

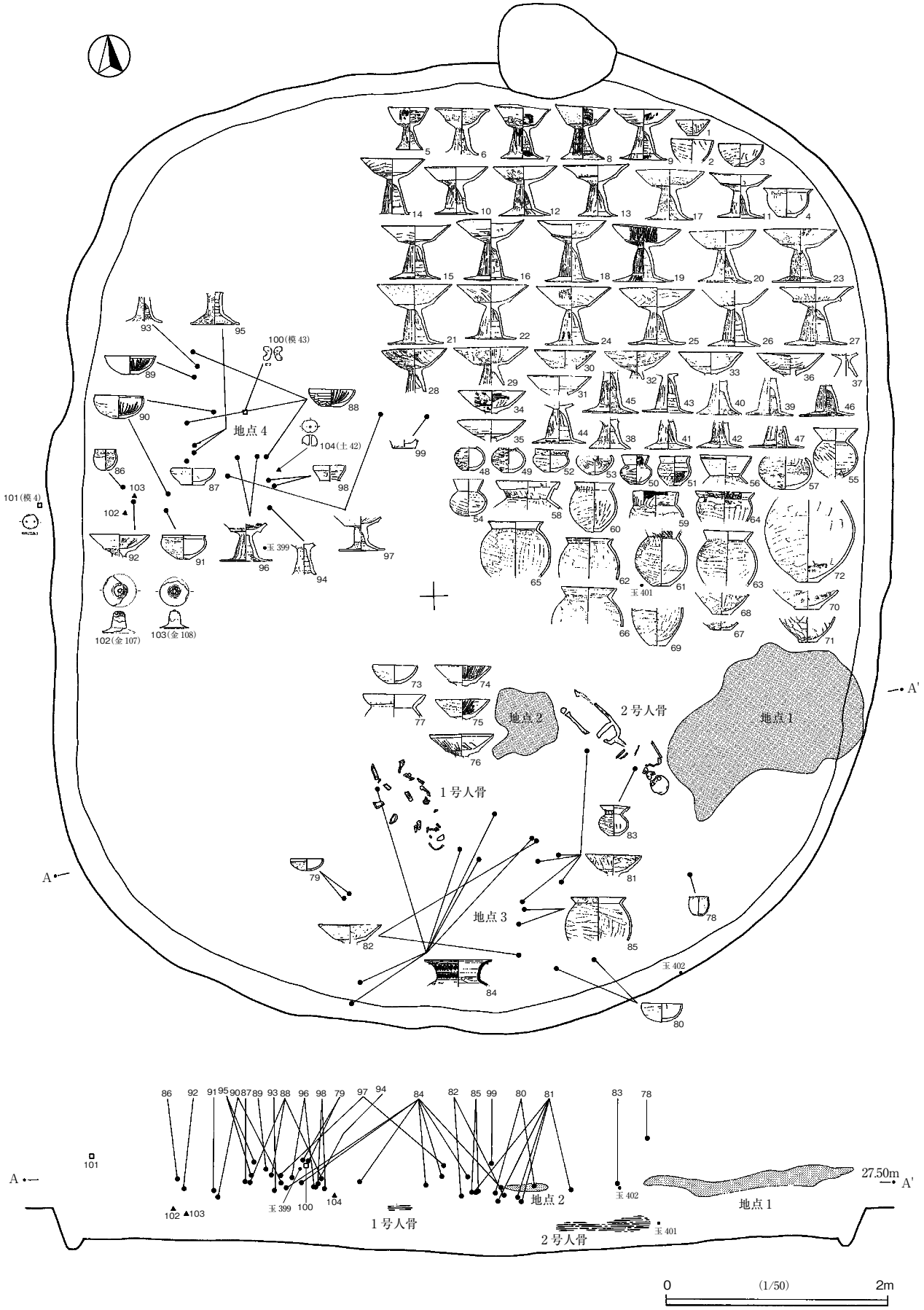
なお、この２体は弥生時代後期の土坑墓群の一角に存在し、その方位にも差異がないことから、群の一つという見方も可能ではある。しかし、遺体安置面と後述する大量の遺物出土レベルとの差は20㎝に満たないことから何れにせよ浅い掘り込みで、頭位を南東に向けていることなど、その相違も大きいことから古墳時代前期～同中期の間に収めておく。

5　**Ⅰ186A覆土内遺物群**（第75～78・178～181・232・241・249図・巻頭図版４、図版16・58～65・92・98・103）

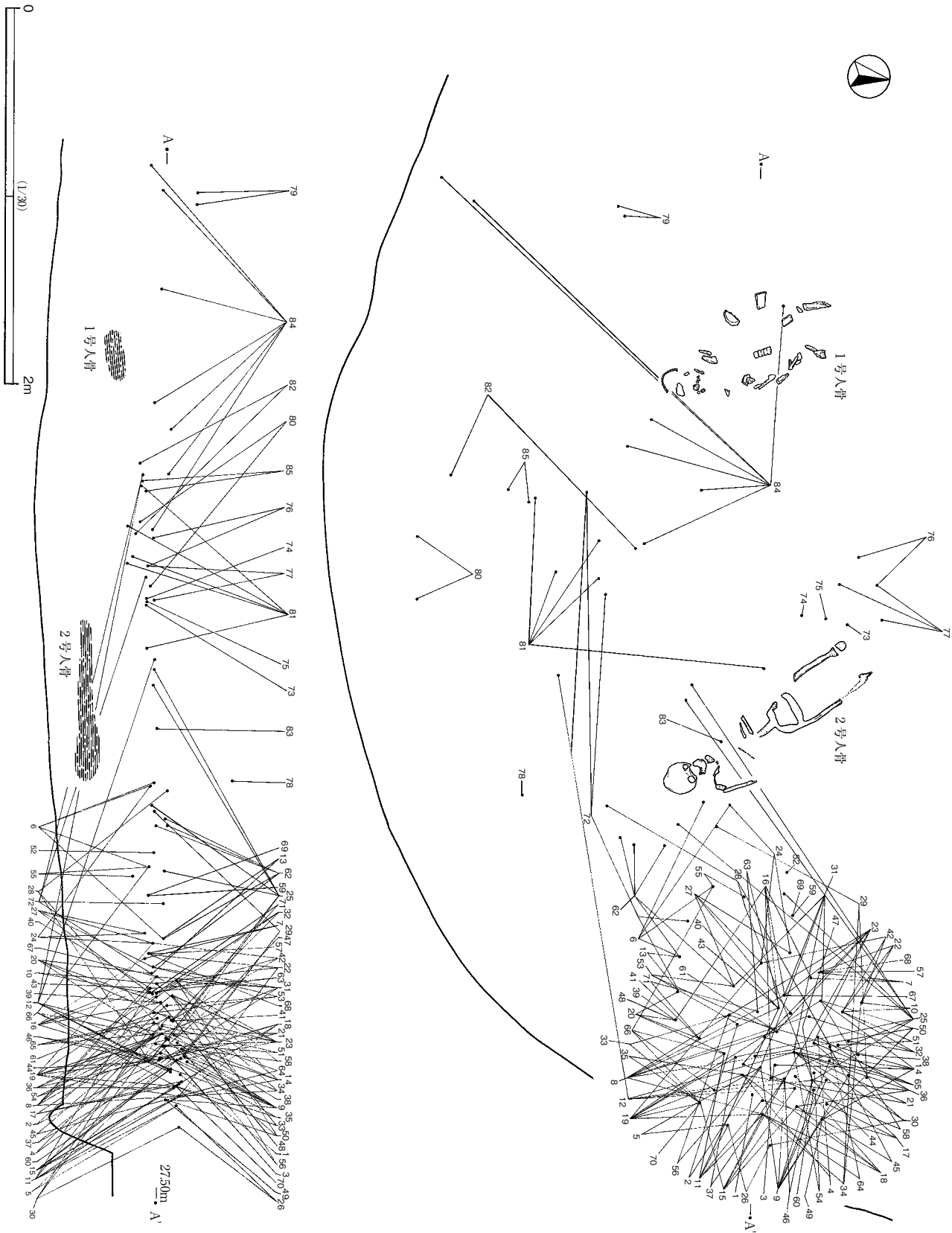
この２体の東側において大量の遺物が出土した。その範囲は２号人骨頭部の東側約１m×２m程ながら、１号人骨体部の東側約0.6m×0.7mの範囲でもまとまりがみられた。この他にまとまりとはいえないが、更にもう２か所（１号人骨頭部凡そ１mの範囲と１号人骨足部から北西約３m付近）にも集中箇所がみられる。これらをそれぞれ地点１～地点４と呼称する。何れも、床面から0.5mほど浮いたレベルであり、人骨からは0.2m～0.3m程上のレベルにある。なお、これら遺物群は古墳前期よりも中期を主体とするが、遺構との関連を重視して前期の内で扱った。

地点１では椀ないし鉢４、器台１、高坏34（坏部のみと脚部のみはほぼ数が合うことから坏部の数とした）、小型壺６、壺３、須恵器瓶１、甕９、大形甕１、甕底部４が破砕された状態で出土した。人骨の真上に当たる83の小型壺も同じレベルからこの一群に伴うものであろう。とはいえ、各土器共にある程度のまとまりとして捉えられたので、余所で砕いたものを運んだというより、この場において破砕行為が行われたと考えられる。とりわけ、高坏ではその総てが坏部と脚部の境目から折られており、意図的な折損と考えられる。時期的には中期前半の枠内に収まるものである。地点２では椀１、高坏坏部３、壺口縁部～頸部１が同様に破砕された状態で出土した。こちらの高坏坏部は接合するものがなかったので、住居窪み外に棄てられたのであろうか。時期的には前期末頃と推測される。

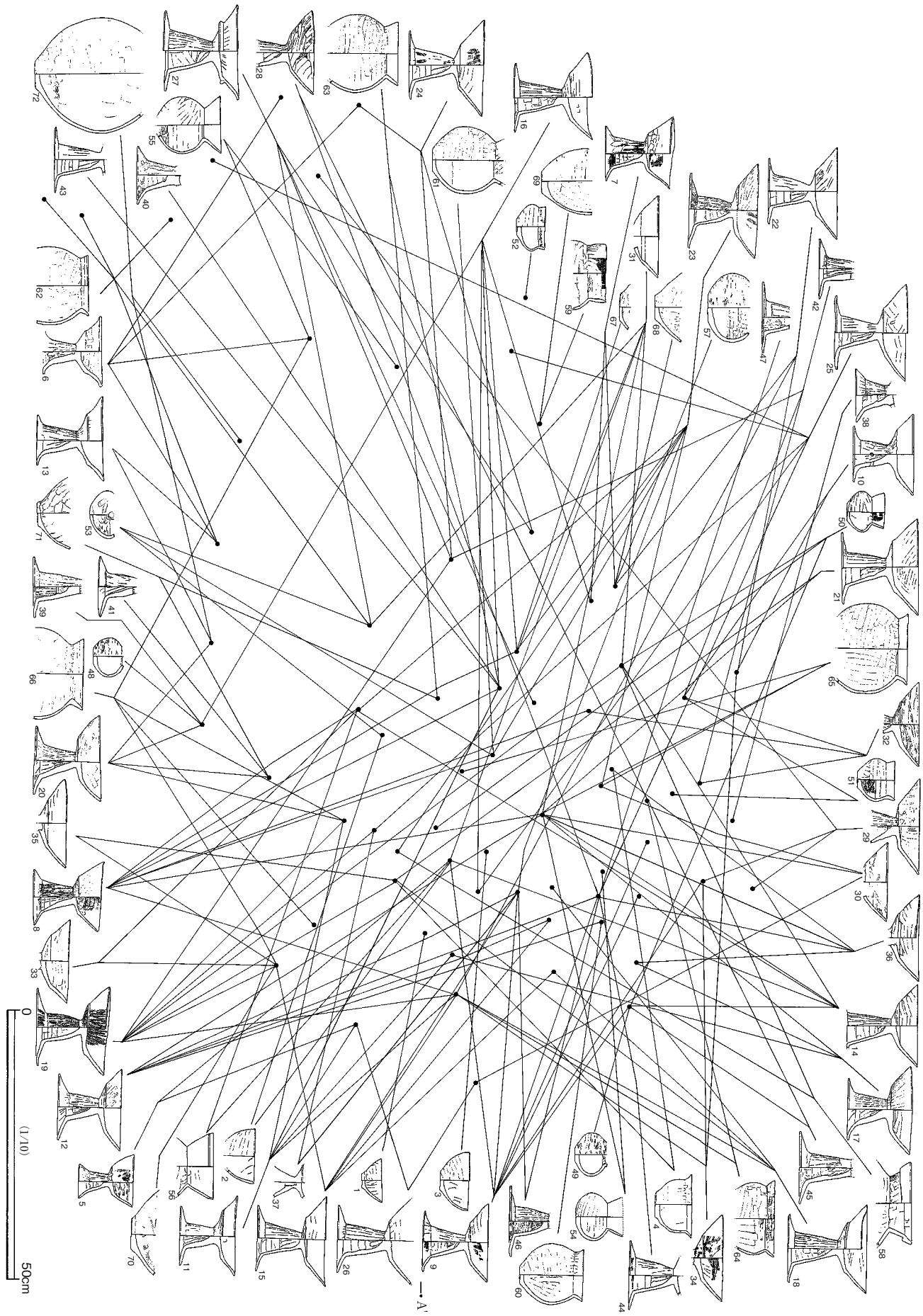
地点３では凡そ２m四方の範囲で疎らな散布を示す破片が接合する状況であり、そのレベル差は20㎝～30㎝であった。坏１、高坏坏部２、椀１、須恵器甕口縁部～頸部１、底部を欠く甕１、臼玉１であり、78の手捏ね土器はレベル的にも高く、また少し離れた位置にある。時期的には前期から中期に及ぶ。地点４は住



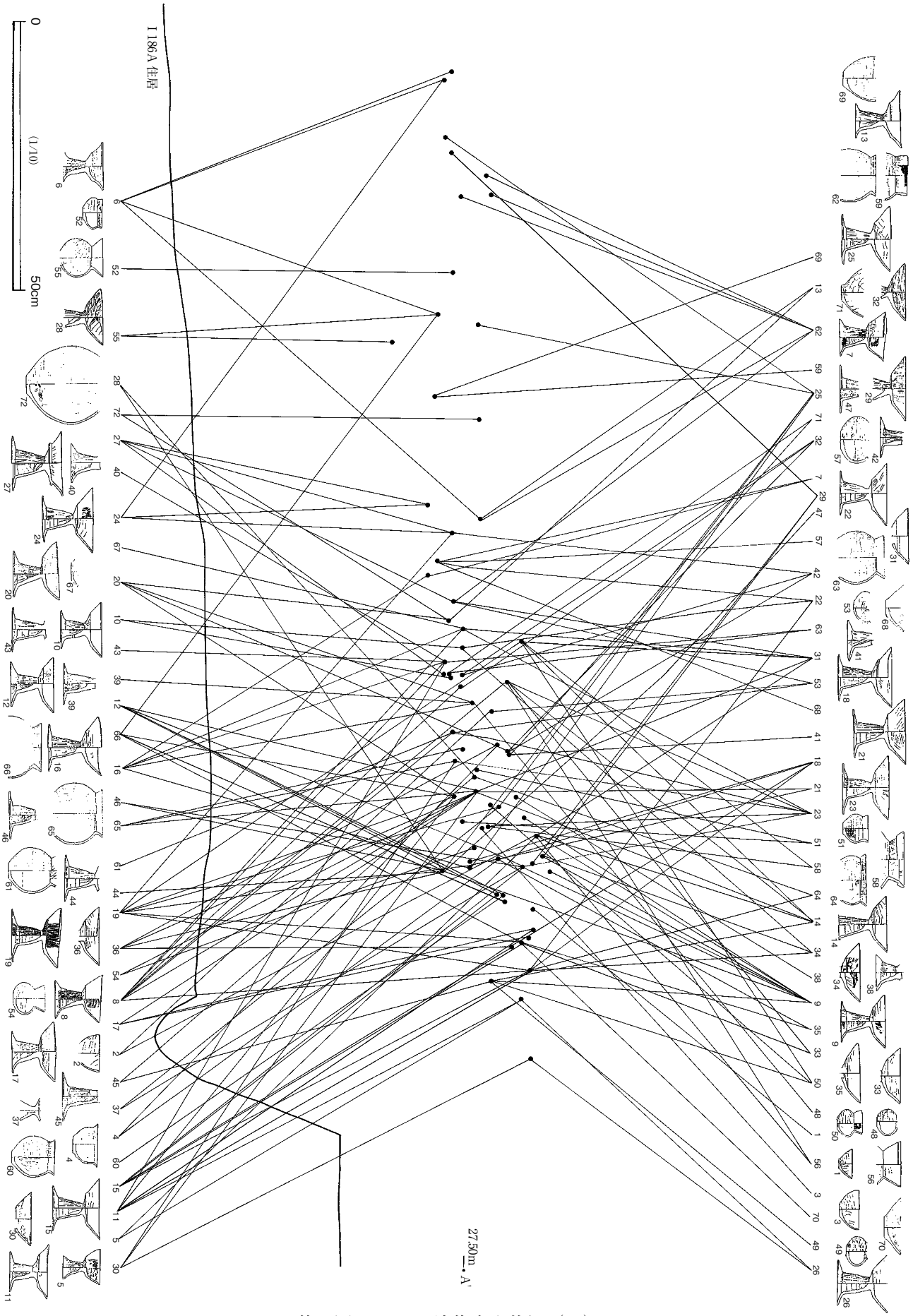
第75図　Ⅰ186A遺物出土状況（1）



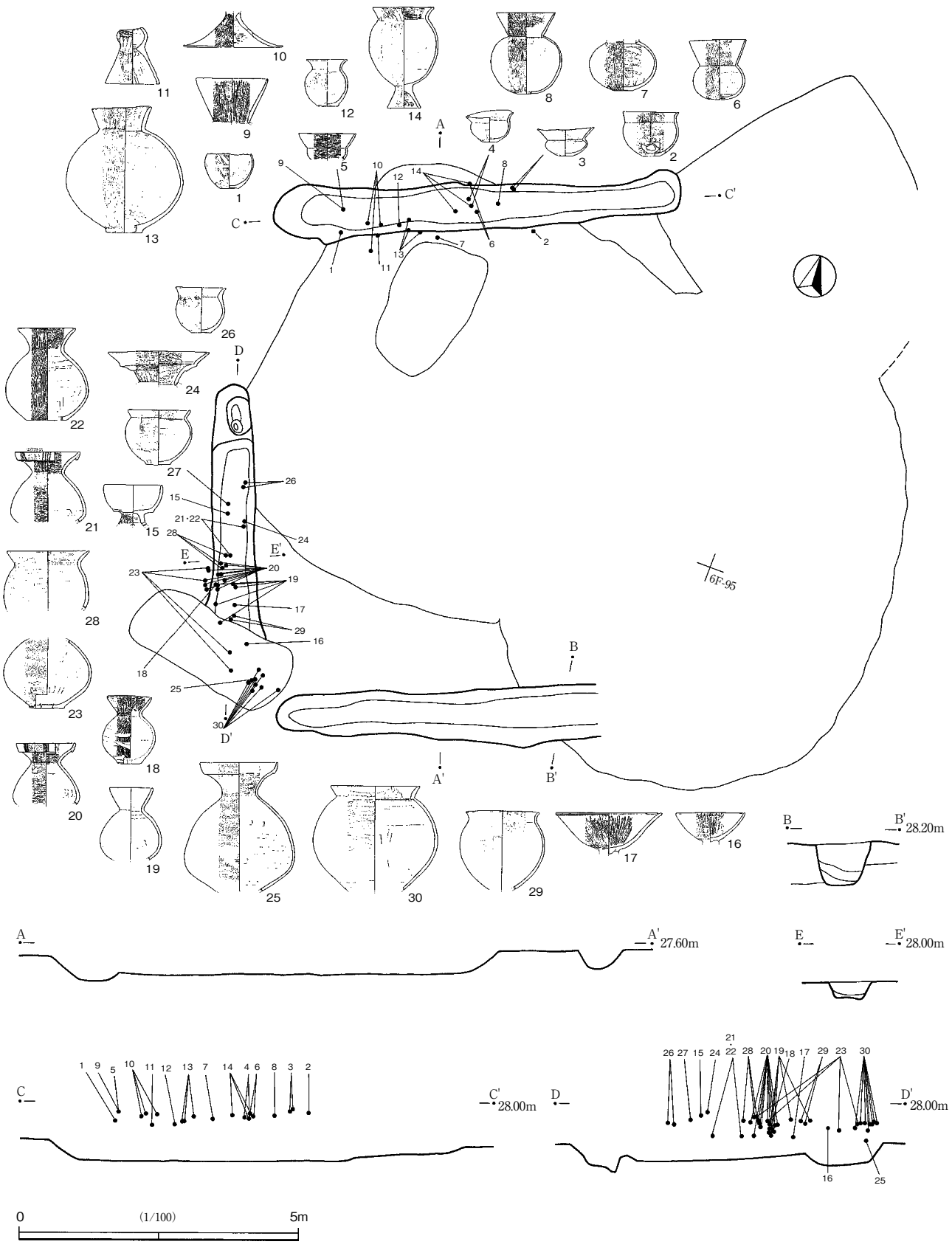
第76図　Ⅰ186A遺物出土状況（２）



第77図　Ⅰ186A遺物出土状況（３）



第78図　I 186A遺物出土状況（4）



第79図　Ⅰ322 方形周溝墓遺物出土状況

居北西部覆土内にある程度のまとまりをもって分布する一群であり、その内容は椀３、鉢２、高坏脚部５、壺口縁部１、甕底部１、手捏ね土器１、滑石製鏡形模造品１、石英片岩製勾玉１、高坏脚部利用の羽口２（レベル的には約20㎝下位）、臼玉１であった。ここでは高坏は総て脚部のみであり、地点２と対称的な内容ながら両者は接合しない。同様窪み外に持ち出された結果であろうか。時期的には前期から中期にわたる。

なお、この他に住居北東部から臼玉１点が出土している。

６　方形周溝墓内の遺物群

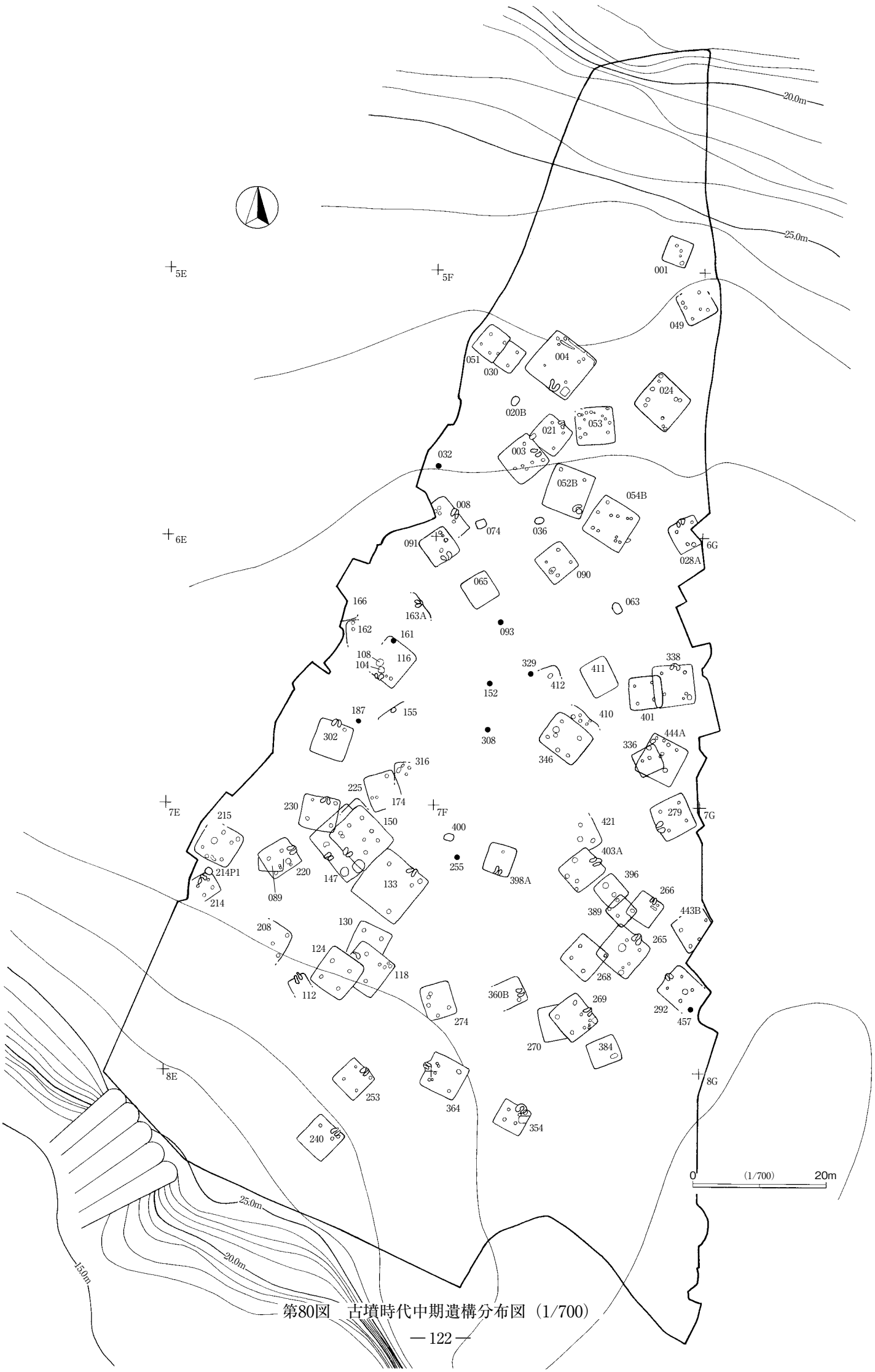
Ⅰ322（第79・172・173図、図版56）

Ⅰ区中央の方形周溝墓（Ⅰ322）の北側および西側周溝覆土上位から大量の遺物が出土した。レベル的には北側周溝が底面から70㎝、南側周溝が底面から40㎝～60㎝の間に集中しており、周溝埋没過程での意図的な所産と考えられる。その所属については古墳時代前期の遺物群且つ溝が相当埋まった段階での遺物という点から、ここで扱うこととする。

北側周溝内西側からは器台２、坩２、椀１、鉢２、壺６（大形１）、台付甕１が出土した。この内、２～４・６・11～13は完形ないしほぼ完形、１・７・８・10・14は約半個体、その他は１/３個体程を復元・図示した。一方、西側周溝（Ⅰ348でとりあげ）は高坏３、壺９（装飾壺４含む）、甕５が出土した。この内、18・20・22・25が完形ないしほぼ完形、15～17・19・21・26が約半個体、その他は１/３個体から１/５個体を復元・図示した。

土器には、焼成前に底部に孔を遺したもの（23）、焼成後底部中央に細い孔を開けたもの（18）、体部下半を叩き穿孔したもの（２）、底部を打ち欠いたもの（20・21・25）など、儀器として使用されたもの乃至その結果と思われる土器が１/５程含まれており、これらの遺物がこの墓に伴う儀式に用いられたものであることを物語っている。

▲Ⅰ186A遺物出土状況。Ⅰ186Aは弥生時代中～後期の住居ながら、その覆土内に古墳時代前期末～中期に至って土坑墓が営まれ、それに伴う形で大量の遺物が出土した。



第80図　古墳時代中期遺構分布図（1/700）

第５節　古墳時代中期

１　概要

Ｉ区で検出された古墳時代中期の遺構は74棟の住居と土坑８基であるが、この他に該期の遺物がまとまって出土した場所も８か所ほど認められる。もちろんこれらのうち１割弱は多分に推測による場合もあって、何れにせよ正確な棟数は提示し得ない。それも激しい重複の故である。

集落は北端と近世墓域に当たる南西を除き広範に展開する。草刈台地内ではM区とＩ区に中期の住居が密に検出されており、ここが中期集落の中心に相当することは間違いない。前期と中期を分離するに当たっては小形のいわゆる供献土器群や内傾する坏の存在等、一方、中期と後期を分離するに当たっては須恵器模倣の坏や胴の張った中期的な甕の伴出に加え須恵器の変遷も考慮したが、明確な分離は困難である。とりわけ、後者については後期初めを含め、ある程度クロスする内容を含むものであると述べておきたい。一つの指標ともされるカマドの有無についてはある程度参考としたが、出土遺物を優先して決定した。また、１棟の住居（Ｉ022）については関連上中期の項に遺構挿図を入れているが、後期末（ないし奈良時代）に所属する可能性が高いことから、説明は後期で行っていることを了とされたい。

出土した遺物は土器が大半を占め、弥生時代から継続して使用された砥石類はほぼ消滅し、新たに定形的な砥石が出現する。しかし、それに比して鎌、刀子などの農工具が増えたという訳ではない。石製模造品はこの時期を特徴付ける遺物であり、当区でも出土した。この点、古式の須恵器も同様である。

なお、個別に扱った遺構（住居）は全体の約42％であり、残りのものについては前代と同様、分割図及びＣＤ内に収めたデータを参照されたい。また遺構の抽出率については次に示すとおりである。

住居跡31/74　　土坑８／８　　（分母は種別遺構数、分子は掲載数）

２　住居跡

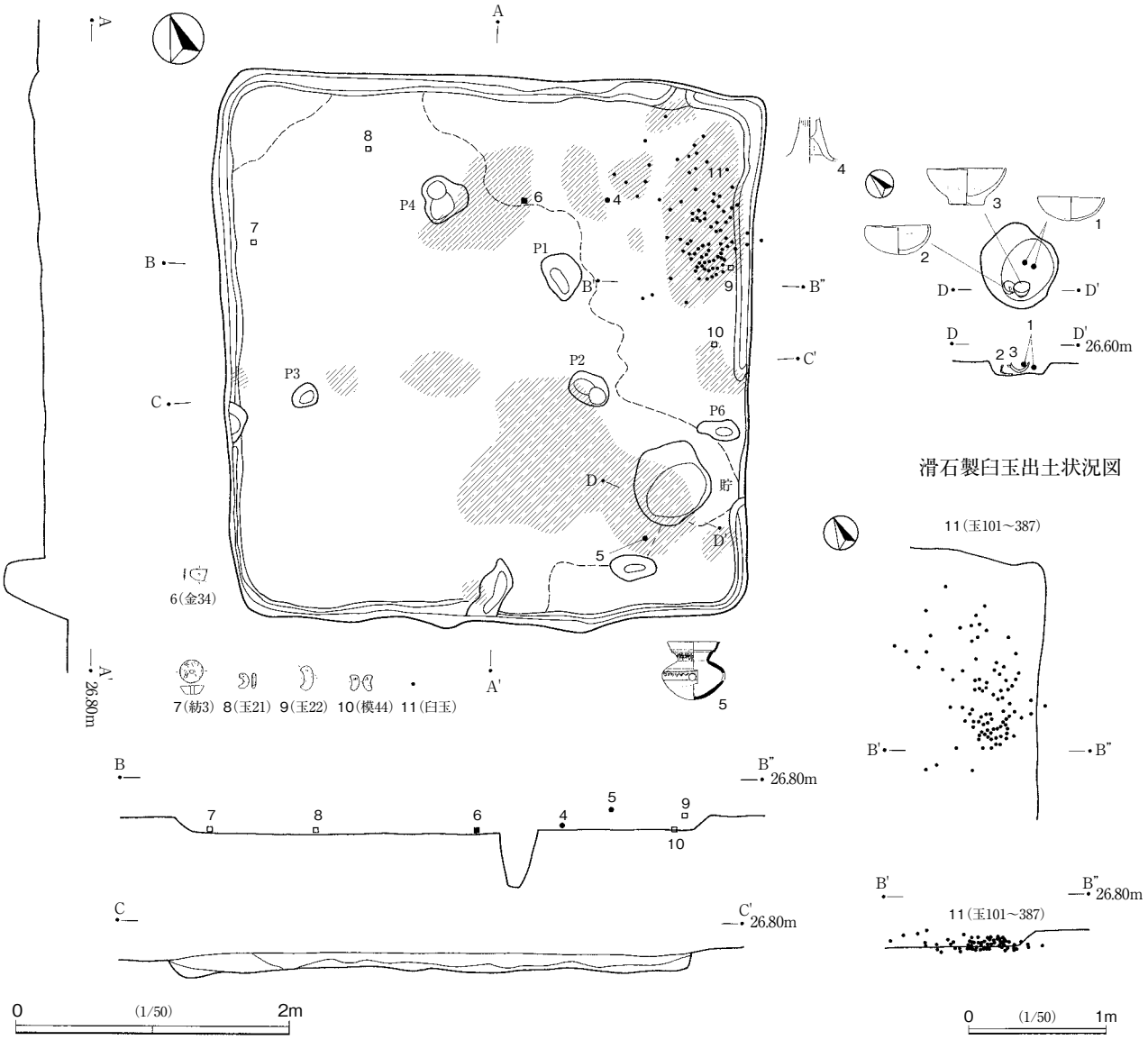
Ｉ001（第80・81・182・230～232・236・241・245図、図版18・66・91・92・95・98・101）

Ｉ区北東端に位置する住居である。近世の掘立柱建物以外の重複はなく、遺存の良い住居である。形態は方形であり、規模は長径・短径共に3.7ｍである。炉は確認されず、ピットは６本検出されたが、対応する位置にはなく、柱穴かどうかはわからない（Ｐ３・Ｐ４・Ｐ６は同じ深さ）。梯子穴は中央南壁際にそれらしきものがあるが、壁下でもあり、断定はし得ない。貯蔵穴は南東コーナー寄りにある径約１ｍの浅い土坑が該当するかと思われるが確証はない。踏締め面は北東部と南東コーナーを除き確認された。覆土は焼土、炭化材粒とりわけ後者を多く含み焼失住居と考えられる。なお、北東コーナー一帯（約１ｍ四方）では集中的に滑石製臼玉が多量に床面付近から出土した。

遺物は住居床面から滑石製臼玉287点と、高坏（４：１／４個体）、鉄製穂摘具片（６）、滑石製紡錘車（７）、滑石製勾玉（８）、滑石製勾玉形石製模造品（10）が、覆土中から粘板岩製勾玉（９）、須恵器鼈（５）が出土した。また、貯蔵穴から土師器坏２点（１は半個体、２は完形）、同鉢（３：ほぼ完形）１点が底面上から出土した。

Ｉ003（第80・82・182・225・236・245・247図、図版66・87・95・101・102）

Ｉ区北側に位置する。古墳時代前期以降の住居５棟と重複し、遺存状態は不良である。形態は多少歪んだ隅丸長方形であり、規模は長径6.2m、短径は5.3mである。カマドは北東壁中央向かって右手にあり、Ｉ022住



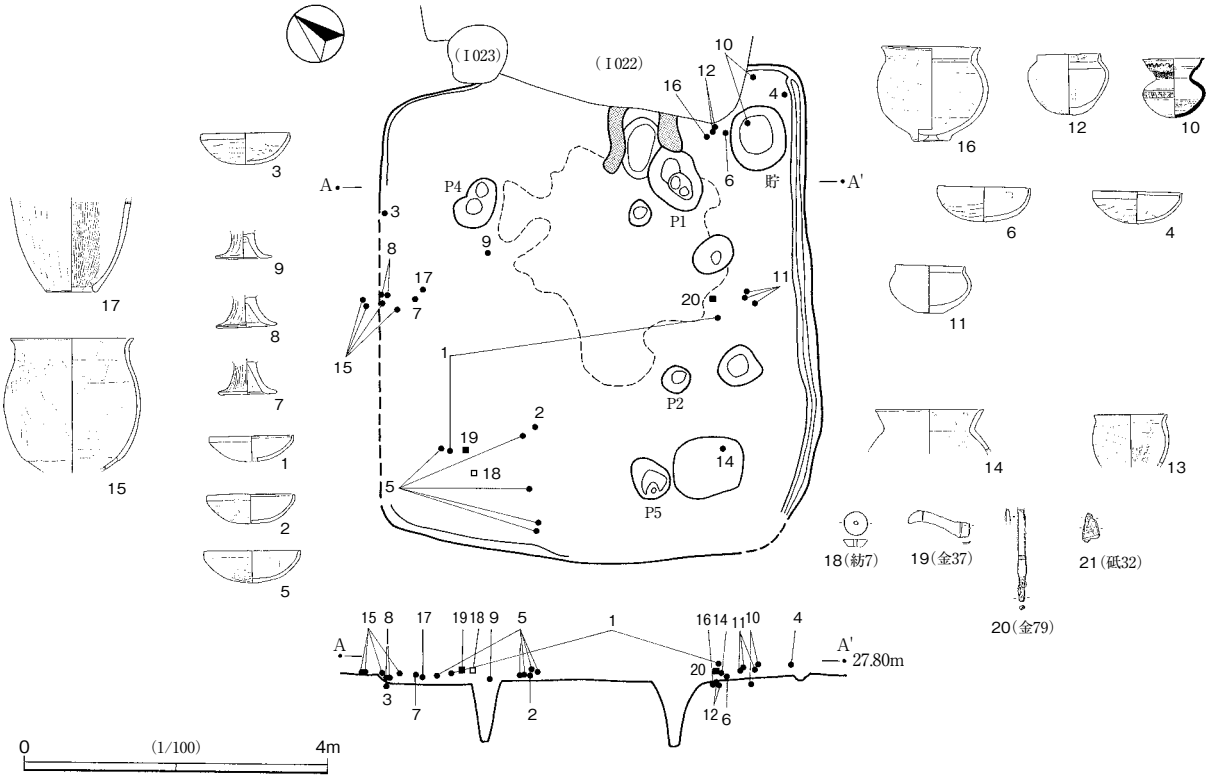
第81図　I 001 住居

居（古墳後期）に北側を壊されている。壁と遺存部の状況からするとあるいは壁面から離れたタイプの可能性もある。柱穴は南西の１本が確認出来なかった。梯子穴は入口やや右手壁寄り（壁から約１m）、貯蔵穴はカマド右脇にある。踏締め面はカマド手前径約２mの範囲にわたって認められた。覆土の状態は不明である。

遺物は床面および覆土下位から多く出土した。１～６は坏であり、１～４が完形品、５・６は半個体である。７～９は高坏脚部片を復元・図示した。10は須恵器瞳約半個体強を復元・図示した。11・12は鉢ほぼ完形、13は同半個体である。14～16は甕、17は甑であり、16の完形品（底部焼成後穿孔）を除いては半個体以下を復元・図示した。18は滑石製紡錘車、19は曲刃鉄鎌、20は工具らしき鉄製品、21は軽石A砥石である。

I 004（第80・83・182・183図、図版18・66）

Ｉ区北側に位置する。弥生時代の住居１棟と重複する。南西向きにカマドを有する珍しい例である。形



第82図　I 003 住居

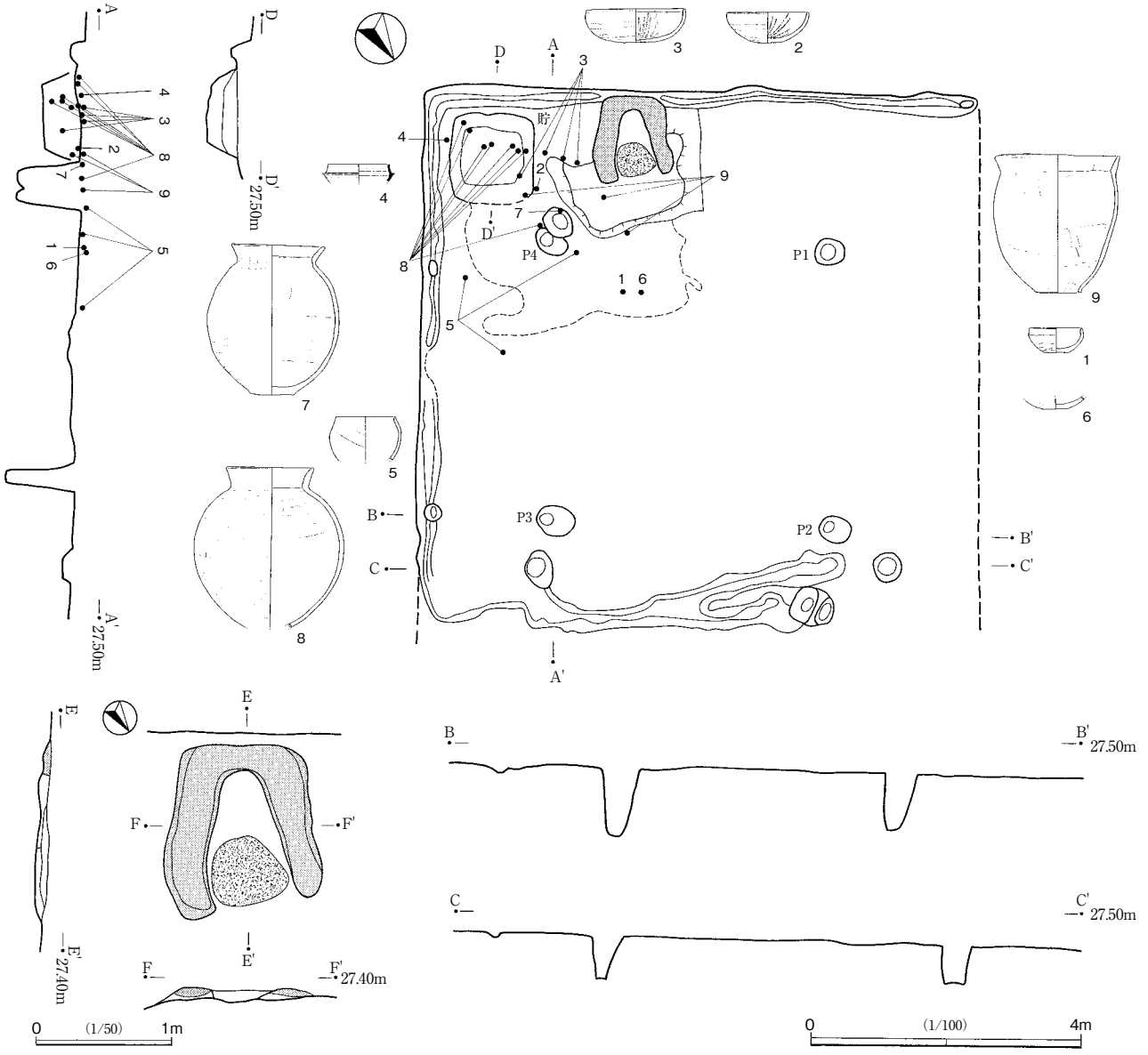
態は方形と思われるが、２辺については床面近くまで削平されており、更に延びる可能性もある。それ故、規模は推定で長径8.0m、短径は7.4mである。カマドは向かって左手にあり、焚口前には僅かな高まりがみられる。柱穴は対応する位置に４本あるが、Ｐ２～Ｐ４には重複ないし近接した位置にピットがあり、あるいは建て替えを示唆するのかもしれない。梯子穴は確認出来なかった。貯蔵穴はカマド左脇にあり、四角いタイプである。踏締め面はカマドと貯蔵穴の手前に認められたが、床面の遺存度を考えると本来は更に広がっていた可能性があろう。覆土の状態は不明である。

遺物は床面および貯蔵穴内から出土した。１～３は坏であり、１が完形品、２がほぼ完形、３が約１/３個体を復元・図示した。４は須恵器坏片、５は鉢、６は壺底部、７・８は甕、９は甑である。７・９がほぼ完形、５・８が半個体強を復元・図示した。

I 021（第80・84・183・184図、図版18・67）

Ｉ区北側に位置する。古墳時代後期の住居（Ｉ022）と重複し、南西部を壊されている。形態は長方形であり、規模は長径4.3m、短径は4.1mである。カマドは向かってほぼ中央、柱穴は対応する位置に４本ある。梯子穴は確認出来なかった。貯蔵穴は南コーナーにあり、方形で且つ深い（床面から65㎝）。踏締め面は認められなかった。覆土は緩やかな堆積を示す暗褐色土であった。

遺物はカマド内とカマド南側から出土したが、この内、５と７は廃棄時に伴う遺物である。１は坏、２は須恵器高坏、３～７は甕である。５・７が完形、２・４が約半個体、その他は１/４個体以下を復元・図示した。

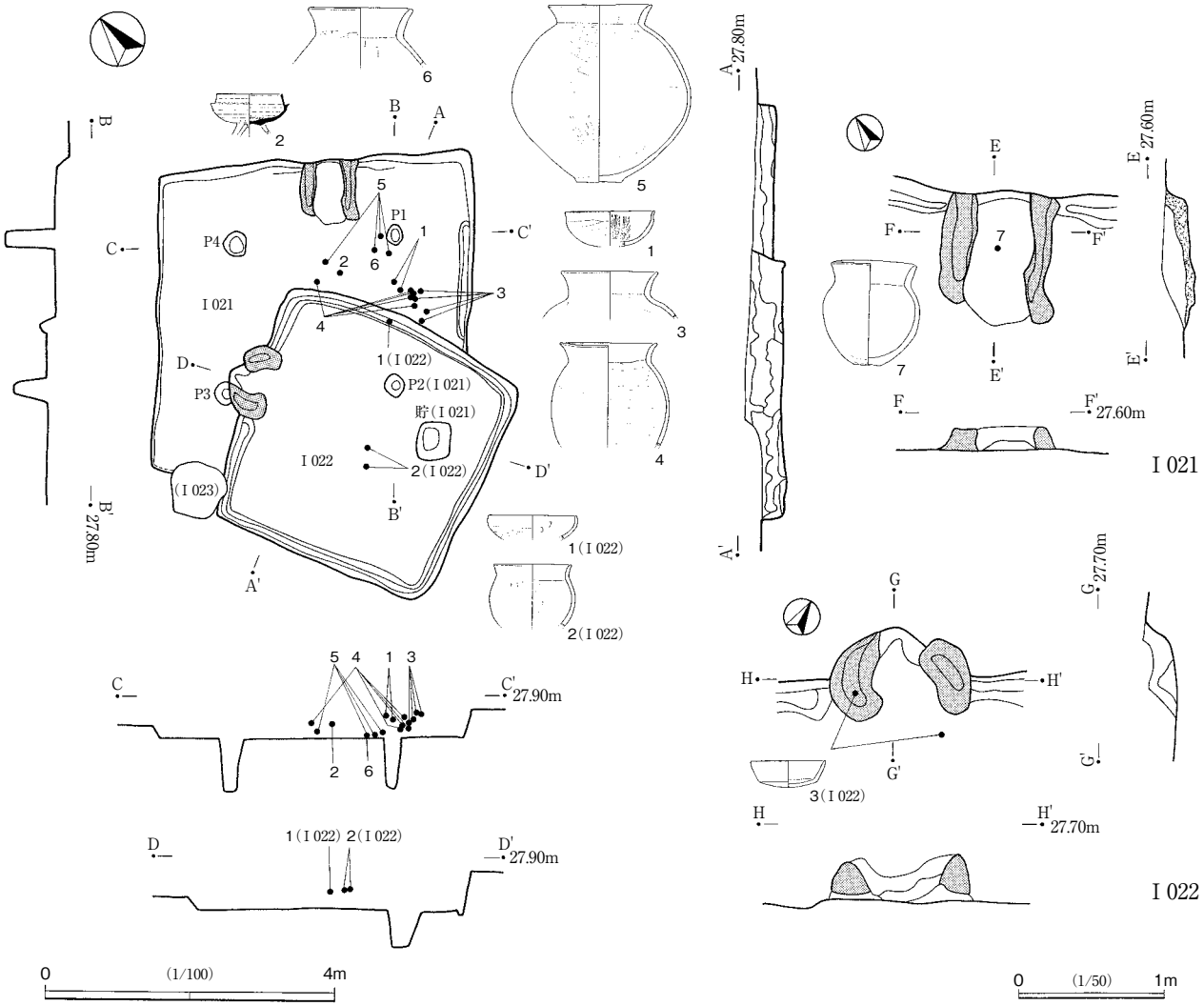


第83図　Ｉ004 住居

Ｉ051（第80・85・185・247図、図版67・102）

Ｉ区北西端に位置する。弥生時代の環濠（Ｉ011）や古墳時代中期の住居（Ｉ030）と重複するが本址が最も新しい。図では環濠に切られたかたちとなっているが、これは環濠内の遺構部分を確認出来なかったことに因る。形態は長方形と思われ、規模は推定で長径4.2m、短径は3.6mである。炉・カマド共に確認出来なかったが、攪乱された北東壁部分にカマドがあった可能性もある。柱穴は対応する位置に４本存在する。径に比較して深いものである。梯子穴は検出されなかったが、貯蔵穴は北東コーナーに存在する。踏締め面は認められなかった。覆土の状態は不明である。

遺物は北東貯蔵穴内また周辺から出土した。１は坏、２は鉢、３は甕、４は甑である。１・４はほぼ完形、３は約半個体、２は約１/４個体を復元・図示した。５は鉄鎌基部かと思われる。

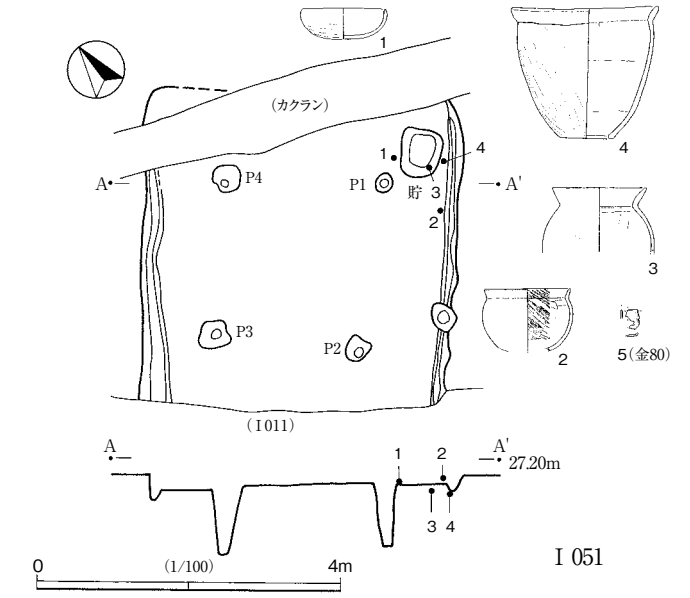


第84図　I 021・I 022 住居

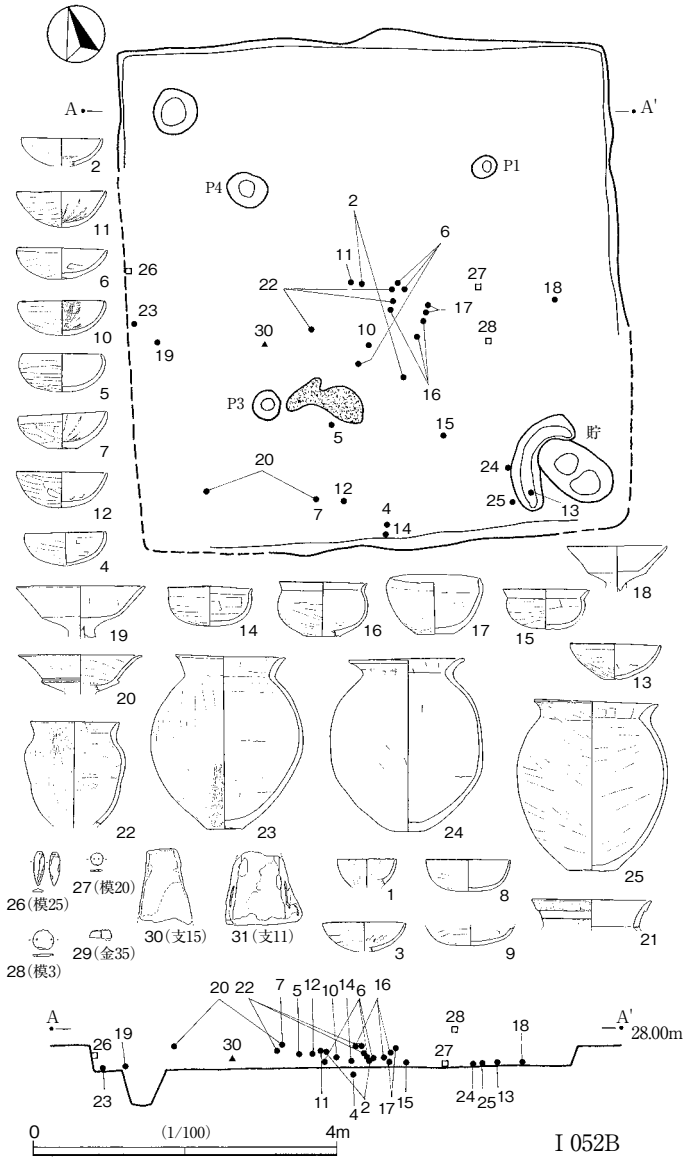
I 052B（第80・85・185・186・238・239・241・245図、図版67・68・98・101）

Ⅰ区北側に位置する。弥生時代の住居（Ⅰ052Ａ）の上に位置し、平安時代の住居が南東部で重複する。形態は方形であり、規模は長径6.5m、短径は6.3mである。炉は南西部にそれらしき焼土域があるが形状も含め明瞭とはいえない。柱穴はＰ２に相当する部分を欠く。梯子穴は確認出来なかった。貯蔵穴は南東コーナーに存在し、外側に周堤帯を有する。踏締め面は認められなかった。覆土の状態は不明である。

遺物は床面および覆土中から多量に出土した。１は椀、２～13は坏、14・15は椀ないし坩、16・17は鉢、18～20は高坏、21～25は甕である。この内、５・７・10～15・17・22～25は完形ないしほぼ完形、１・６・８・19は半個体、それ以外は１/３個体ないしそれ以下の破片を復元・図示した。石製模造品26～28は鏡２点、剣１点であり、この内、27が床面から出土した。30・31は土製支脚であるが何れも破損品である。出土した遺物量は多いものの、４の坏、23～25の甕を除けばその後の投棄に因る可能性が高い。なお、１・３・８・９・21・31は覆土一括品である。



I 051



I 052B

第85図　I 051・I 052B 住居

I 053（第80・86・186図、図版67）

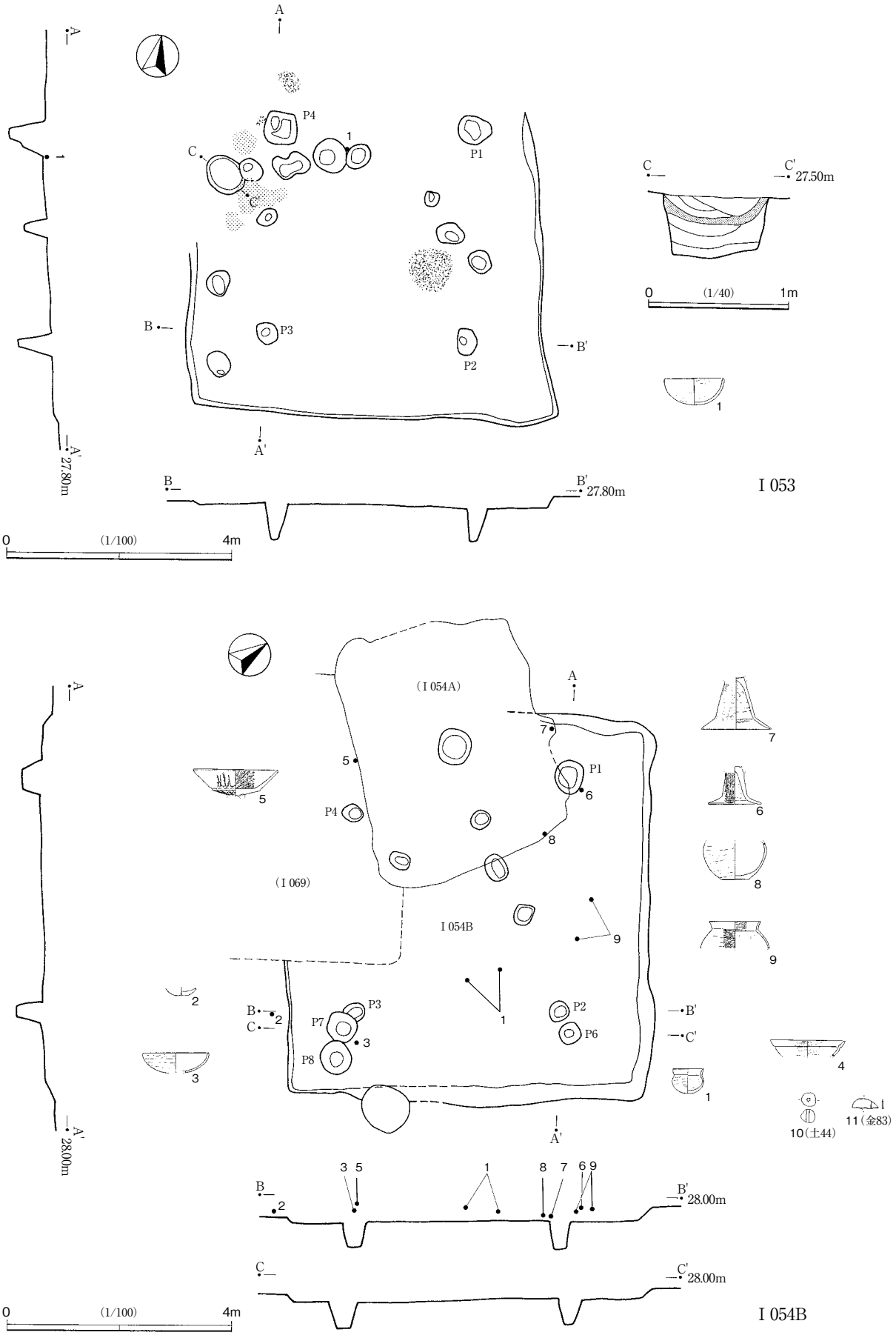
Ⅰ区北側に位置する。弥生時代の環濠（I 011）上に位置する住居であり、他に重複する明瞭な住居はないものの、遺存状態は不良である。形態は方形ないし長方形と思われ、規模は推定で長径6.2m、短径は6.0mである。炉・カマド共に確認されなかった。柱穴は対応する位置に４本存在する。この他に小ピットが散在し住居との関係も明瞭ではないが、図示する。梯子穴は検出されなかった。貯蔵穴は定位置ではないが、北西の土坑(径70㎝、深さ40㎝）が該当するかもしれない。踏締め面は認められなかった。覆土の状態は不明である。

遺物は中央北寄り床面上で完形の坏１点が出土した他はこれといったものがない。

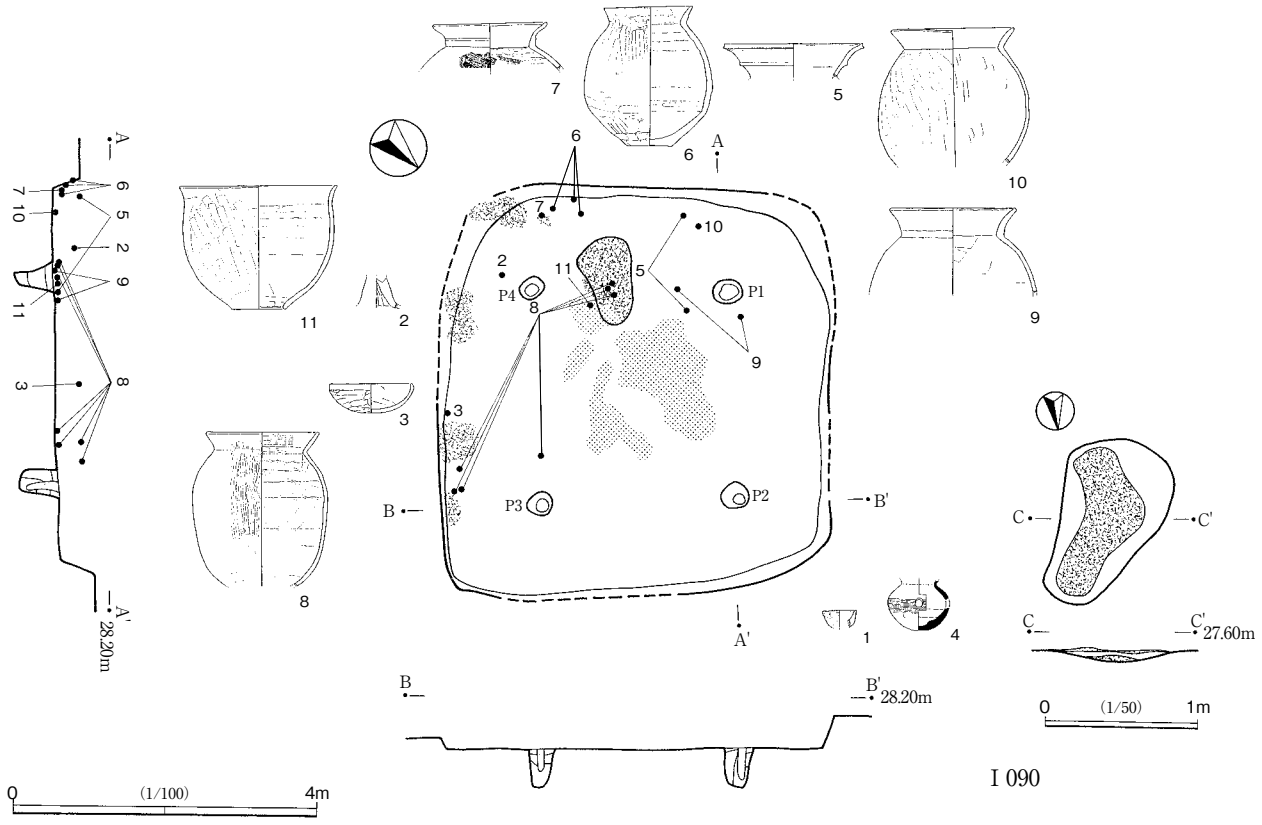
I 054B（第80・86・186・235・247図、図版94・102）

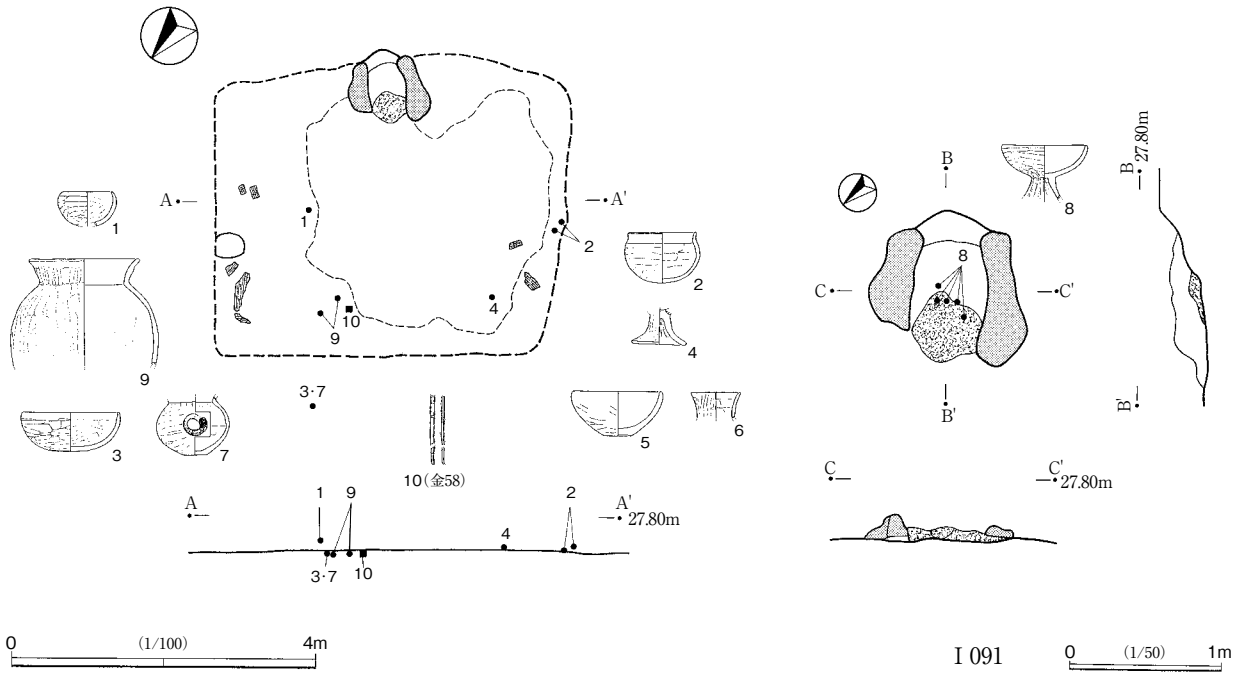
Ⅰ区北側に位置する。古墳時代後期および平安時代の住居群と重複し、遺存状態は不良である。形態は長方形であり、規模は長径6.3m、短径は6.1mである。炉・カマド共に確認できなかったが、撹乱された部分に存在した可能性もある。柱穴はＰ１が不確かな他は対応する位置に３本検出された。この他に小ピットが散在し住居との関係も明瞭ではないが、図示する。梯子穴・貯蔵穴共に確定に至らなかった。踏締め面は不明瞭であり、覆土の状態は不明である。

遺物は覆土下位から出土した。１は椀、２は壺ないし椀底部、３は坏、４は坩、５は高坏坏部、６・７は高坏脚部、８は甕胴部以下、９は甕口縁部～胴部である。１・５・７が半個体の他は１/３個体以下を復元・図示した。10は土玉、11は半円状の鉄製品である。



第86図　I 053・I 054B 住居





第87図　I 090・I 091 住居

Ｉ090（第80・87・187図、図版68）

Ｉ区北側に位置する。弥生時代以降の住居５棟以上と重複し、遺存状態は不良である。方位を南西に向ける珍しい例である。形態は歪んだ隅丸方形であり、規模は長径5.1m、短径は4.8mである。炉は住居南西にあり、形状は不定形で焼土は上下２層にわたっている。柱穴は対応する位置に４本存在し、柱痕が明瞭であった。梯子穴・貯蔵穴共に認められず、踏締め面も同様である。床面上には焼土・炭層がブロック状に堆積しており、焼失住居と思われる。

遺物は床面上から覆土にわたって多く出土した。１は底部を欠くミニチュア、２は高坏脚部、３は坏、４は口縁部を欠く鉢、５は壺口縁部、６～10は甕、11は甑である。この内、３は完形、１・４・６・８・10・11は２/３個体、それ以外は１/４個体以下を復元・図示した。なお、床面上の９・10・11を除いてはその後の投棄に伴うものと思われ、１・４は覆土一括品である。

Ｉ091（第80・87・187・247図、図版102）

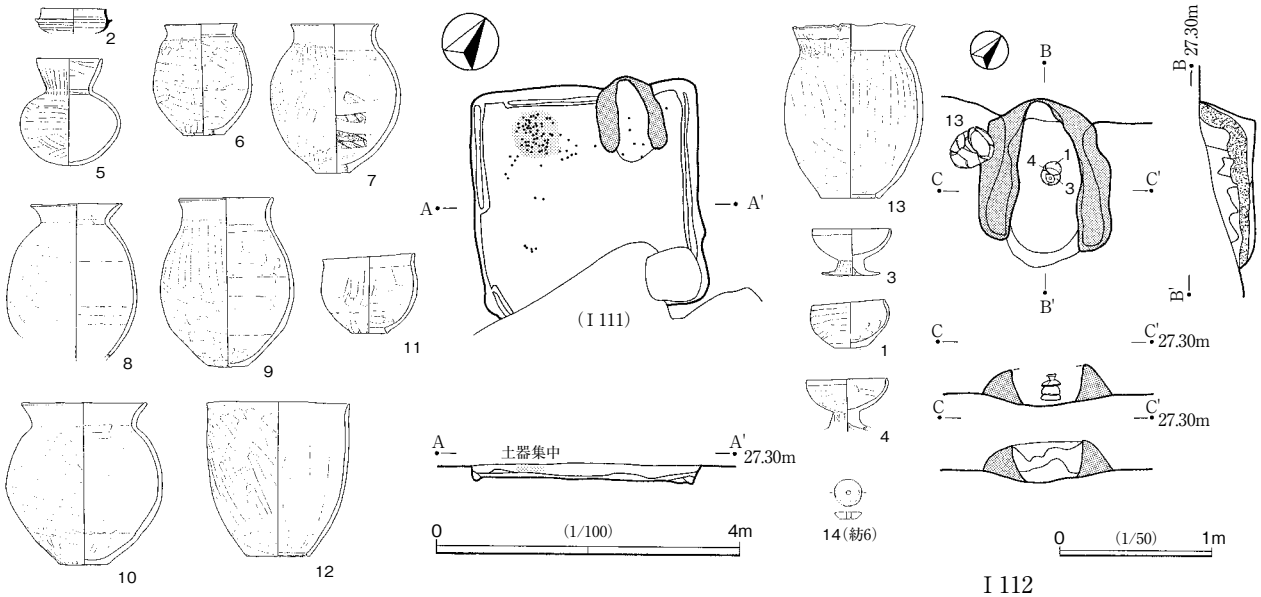
Ｉ区北側に位置する。弥生時代の住居（Ｉ099）内に収まっていることもあり、プランは明瞭に捉えられなかった。方位を南東に向ける珍しい例である。形態は歪んだ隅丸長方形かと推測される。規模は確認出来た範囲で長径4.7m、短径は3.8mである。カマドは住居南東壁中央にある。柱穴・梯子穴・貯蔵穴共に認められず、踏締め面は僅かに中央部で確認された。覆土の状態は不明である。

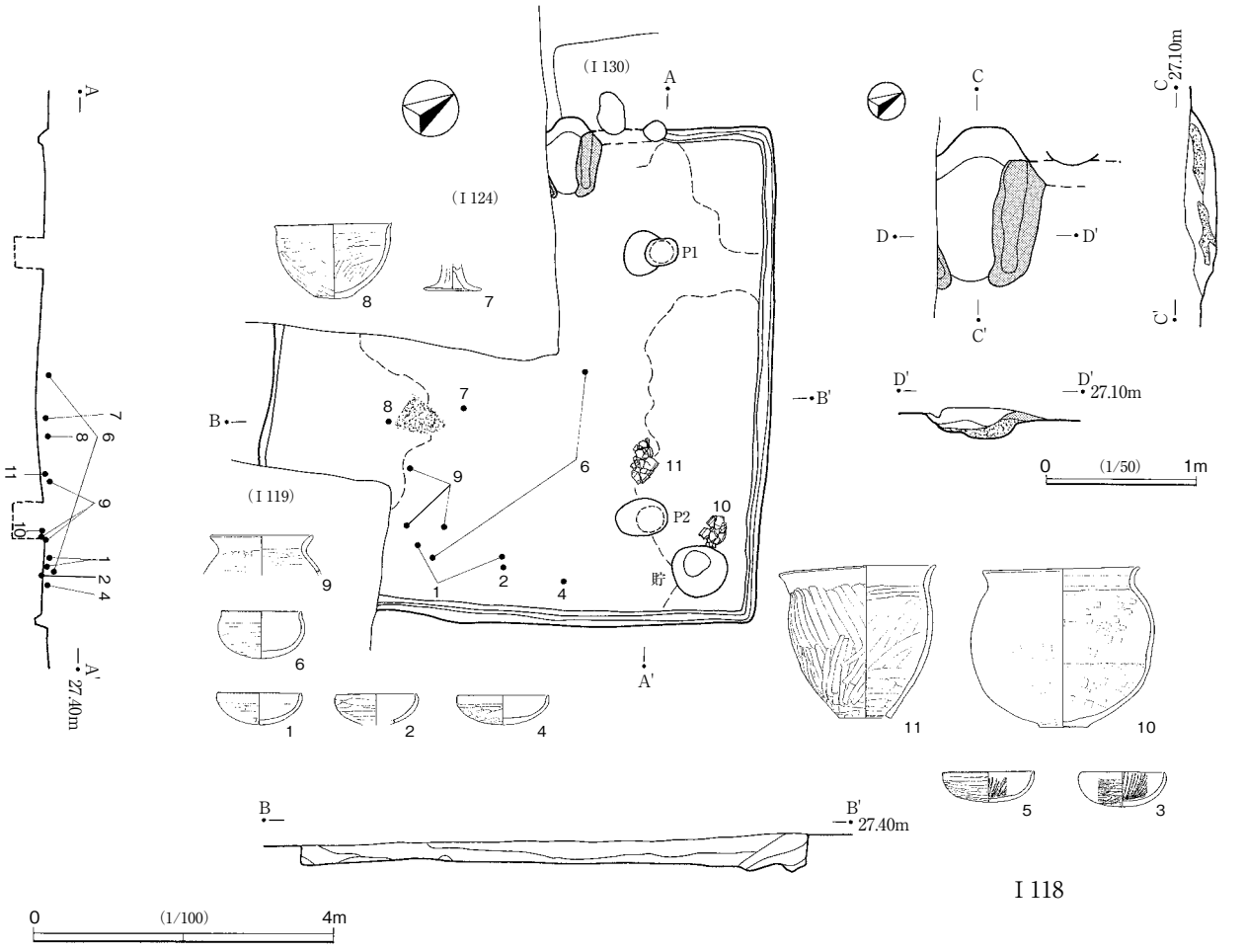
遺物は遺存状況に比較して床面上およびカマド内から多く出土した。１・２は椀、３は坏、４は高坏脚部、５は鉢ないし椀、６は壺口縁部、７は壺、８は高坏、９は甕である。何れも完形のものはなく、２・３・７が２/３個体、４・５・８が半個体、１/４個体以下を復元・図示した。10は鉄鏃である。なお、５・６は一括品である。

Ｉ112（第80・88・188・236図、図版18・69・95）

Ｉ区南西に位置する。平安時代の住居によって南東部が壊される。形態は正方形であり、規模は長径2.8m、短径は2.6mである。カマドは北西壁向かって右手にあり、柱穴は存在せず、梯子穴・貯蔵穴も共に認められなかった。踏締め面については明瞭ではないが、底面上に暗褐色土層が多少の凹凸をもって堆積しており、あるいは二次的な貼床層に相当するのかもしれない。遺物はこの層の直上から出土している。覆土はほぼ水平堆積の暗褐色土である。

遺物はカマド左手とカマド内およびカマド脇から大量に出土しており、両者に分けて説明する。１・３・４・13はカマドに伴う遺物である。とりわけ燃焼部には４→１→３の順に積み重ねており、支脚の代わりに使用された可能性が高い。また、13はこのカマドでの使用を物語るものであろうか。１は鉢、３・４は高坏、13は甑である。それ以外はカマド左手出土品であり、集中範囲をトーンで示した。もちろんこれ以外にも多少の散らばりはあり、ある程度の破片までドット表示した。２は須恵器坏、５は壺、６～10は甕である。11・12は甑である。この内、１・３～５・７・８・10・11・13は完形ないしほぼ完形、６・12は約半個体、２・９は１/４個体以下を復元・図示した。総じて完形品の割合が高いが、それも意図的な遺棄の結果であろう。14は滑石製紡錘車である。





第88図　I 112・I 118 住居

Ｉ118（第80・88・189図、図版69・70）

Ｉ区南西寄りに位置し、同じく中期の住居（Ｉ124）によって北西部を、後期の住居（Ｉ119）によって南西部を大きく壊されている。形態はほぼ方形であり、規模は長径6.4m、短径6.2mである。カマドは北側壁際向かってやや右手にあるが、重複住居によってその左側半分を欠く。柱穴は東側２本のみかろうじて遺存する。梯子穴は認められなかったが、貯蔵穴は南東コーナーに存在する。踏締め面は南北方向の中央部で確認された。覆土は壁際を除き、暗褐色土がほぼ水平に堆積する。自然堆積と思われる。

遺物は主に住居南西部床面から覆土下層にかけて出土した。１～５は坏、６は椀、７は高坏脚部、８は鉢、９・10は甕、11は甑である。１・２・４・６・８が半個体強、３・５・10・11がほぼ完形、それ以外は１/４個体以下を復元・図示した。

Ｉ130（第80・89・190・241図、図版70・98）

Ｉ区南西の重複住居群中に位置し、（Ｉ118）によって南東部を大きく壊されている。形態はほぼ方形であり、規模は長径、短径共に5.0m程である。炉・カマド共にないが、あるいは破壊された部分に存在した可能性もある。柱穴は重複部分のＰ１を欠く他はほぼ対応する位置にある。梯子穴は認められず、貯蔵穴は南コーナーの小土坑が該当しようか。踏み締め面はほぼ柱穴を結ぶ線内で確認された。覆土は中心部に向かって緩やかな堆積を示し、ほぼ暗褐色土で占められるが、壁下は通常と異なり、黒褐色土がみられる。

遺物はほぼ覆土下層から出土した。１～３は坏、６は鉢、４・５・７は椀、８は甕である。２・３が完形ないしほぼ完形、１・４・５・７・８が約２/３個体、６が半個体である。半個体以上の土器で占められる点から、住居廃棄後間もない頃の一括投棄であろう。この他に滑石製勾玉形模造品９が床面中央より出土している。

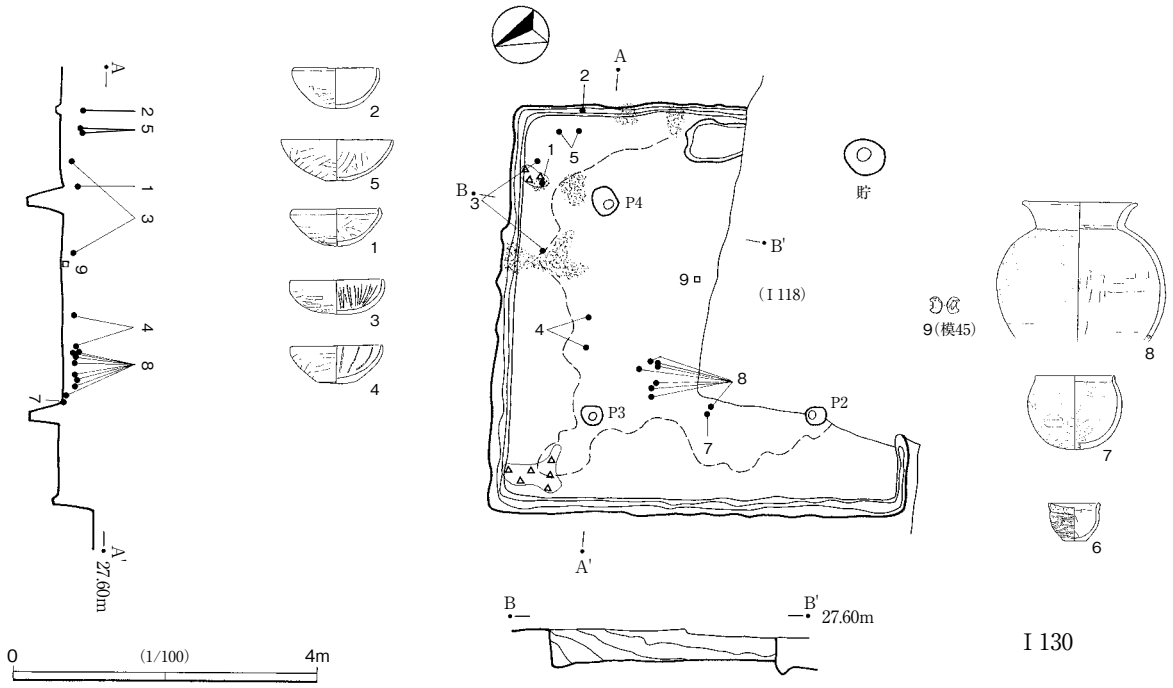
Ｉ230（第80・89・194・230・232・241図、図版19・72・91・92・98）

Ｉ区南西Ｆ区寄りに位置する。同時期と思われる２棟の住居と重複し、その新旧関係は多分に曖昧ではあるが、少なくともＩ147よりは新しいと思われる。形態は横長の長方形であり、規模は長径5.5m、短径4.6mである。カマドは北壁中央向かってやや右手にある。柱穴はＰ１を欠く他はほぼ対応する位置にある。何れも壁際に近く設けられているという特徴がある。梯子穴はみられず、貯蔵穴はカマド右脇の土坑（径約50㎝、深さ約80㎝）が該当すると思われる。踏締め面はカマドから住居中央にかけて認められた。覆土の状態は不明である。床面上に焼土・炭化材が散布しており、焼失住居と考えられる。

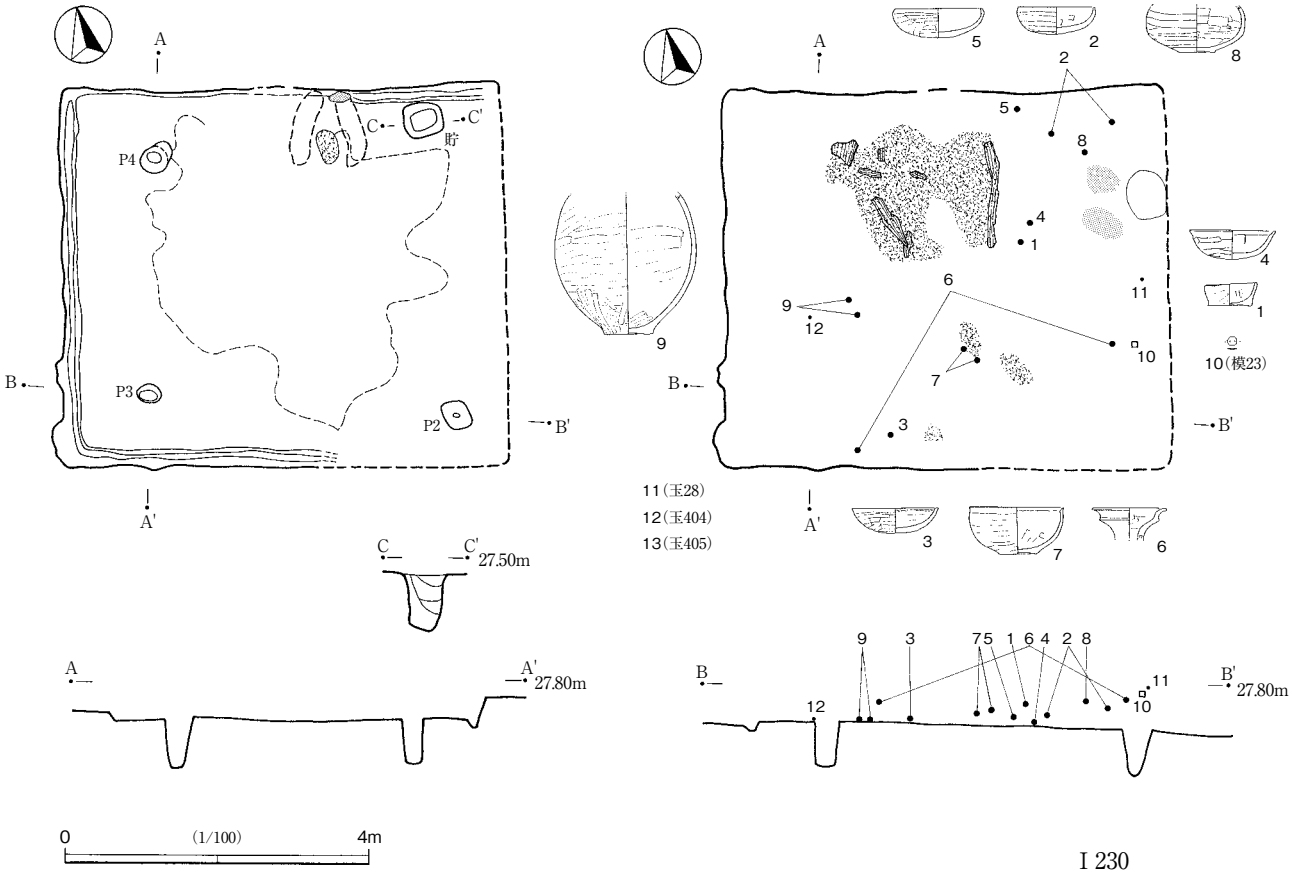
遺物は床面から覆土にかけて出土した。１は手捏ね土器、２～５は坏、６は壺、７は鉢、８は壺、９は甕である。この内、２は接合後完形、１・４・５・７が約半個体、１/３個体以下を復元・図示した。この他に、10は緑色片岩製鏡形模造品、11はガラス玉、12･13は滑石製臼玉が出土した。出土状況からして、３・４の坏、９の甕、12の玉が住居廃棄時ないしそれに近い段階の所産と思われる。

Ｉ133（第80・90・190・191・228・237・242・247図、図版19・70・71・90・95・98・102）

Ｉ区南西寄りに位置する。住居密集地に当たり、古墳時代後期の住居（Ｉ228）に北コーナーを壊されている他は本址が新しいと思われるが、南東壁のように明確に捉え得なかった箇所もある。形態は方形であり、規模は長径8.4m、短径8.4mである。カマドは北東壁向かって右寄りにあるが、壁との間には多少の間隙が存在する。柱穴は対応する位置に４本あり、住居規模と比較すると径小さく深さにも欠く。梯子



I 130



I 230

第89図　I 130・I 230 住居

穴はみられないが、貯蔵穴はカマド右脇に存在する。踏締め面は全体に確認されたが、規則性はない。住居周辺部が若干埋まった面（４層）で焼土と炭化材が広く検出された（２層内）。焼失住居と考えられる。

遺物は床面上から大量に出土したが、あたかも土器を含め意図的に焼いたかのようである。１・２はミニチュア、３～６は坏、７・８は椀、９・10・14は鉢、11は高坏、12・13は壺、15～20は甕、21は甑である。この内、２・３・７～10・14・17・21は完形ないしほぼ完形、４・５・11・13・15・20は約半個体、それ以外は約１／３個体以下を復元・図示した。この他に、22の鉄鏃、23のミニチュア、24の三角形土製品（中央貫通孔）、25の凝灰岩製砥石がある。なお、２・３・５・８・９・11・16・19・20についてはその全部ないし一部が重複する弥生時代また古墳時代後期の住居跡内ではあるが、この期に所属する遺物でもあることから本址の内で扱っている。

Ｉ240（第80・91・194・195・234・241・247図、図版72・94・98・102）

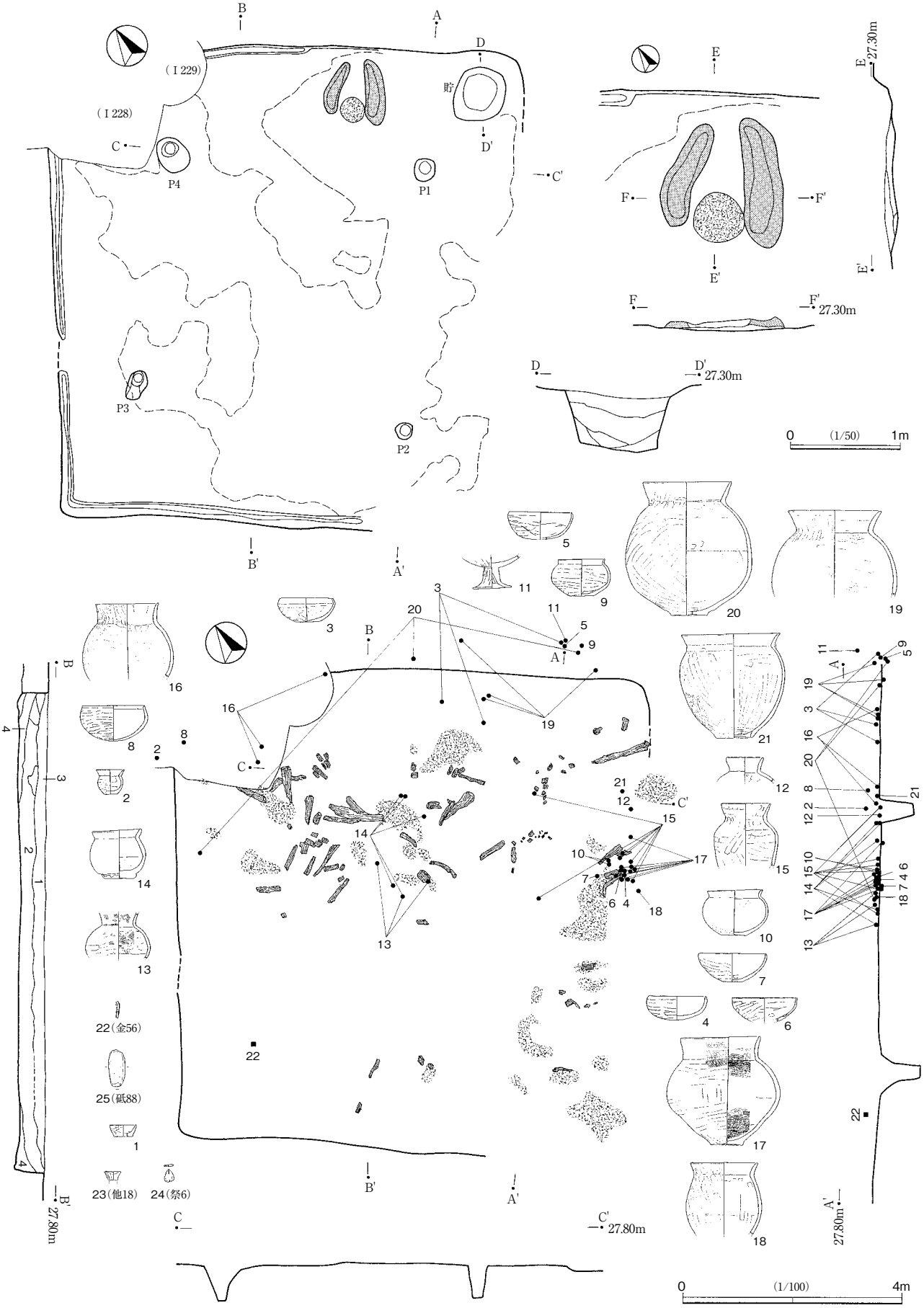
Ｉ区南西端に位置する。Ｉ区内では遺構の希薄な地域ではあるが、近世以降の墓域に当たっており、南側が攪乱されている。形態は縦長の方形であり、規模は長径5.2m、短径5.0mである。カマドは北東壁中央向かってやや右手にある。柱穴は南側が攪乱により失われている。梯子穴も恐らく同様であろう。貯蔵穴は北東コーナーにある。踏締め面は北側の柱穴からカマド内側にかけて認められたが、本来南側にも及んでいた可能性がある。覆土は壁下を除き床面から覆土下位にかけて焼土・炭化物を多く含む。炭化材が西側に遺存している状況から焼失住居とみるべきだろう。

遺物はこの焼土中から多量に出土したが、カマド内からも11が１点出土した。１～９は坏、10は椀、11～14は甕、15・16は甑である。この内、２・４・５・７・８・15・16はほぼ完形、１・３・６・９～12・14は約半個体、13は１／３個体を復元・図示した。17・18は鉄鏃（17は破損品）、19は滑石製剣形模造品、20は土錘である。住居の廃棄・火入れに伴い投棄されたものと思われるが、17・18については壁下の床面上でもあり、それ以前の所産であろう。なお、覆土中には大小４箇所の僅かな貝のブロック（総数31点）があり、その内訳はハマグリを主体（約80％）に、若干のシオフキ、アサリ、オオタニシ、ウミニナが混じるものであった。

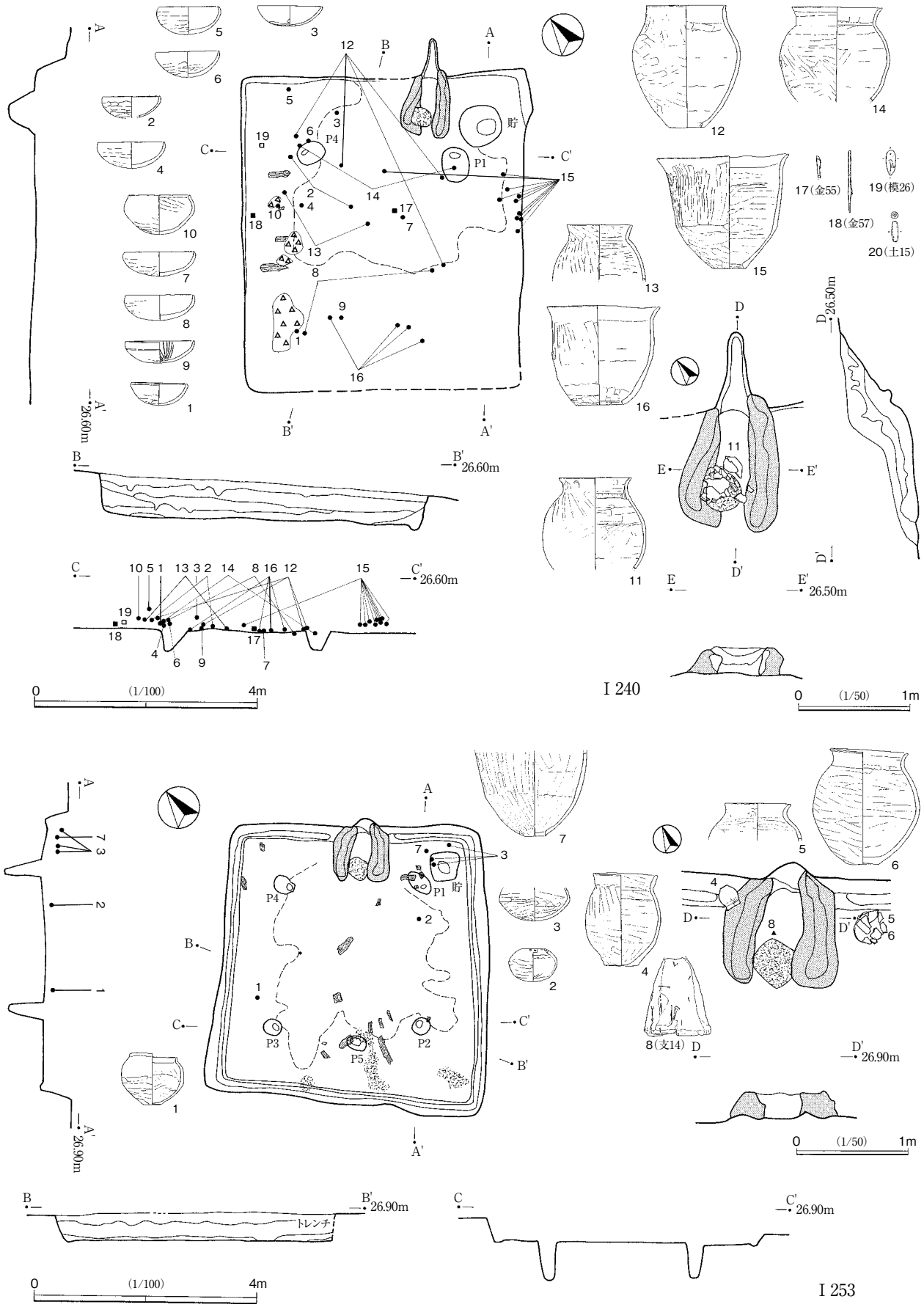
Ｉ253（第80・91・195・239図、図版20・73・97）

Ｉ区南西端近くに位置する。遺構の希薄な地域であり、ほぼ重複のない住居である。形態は若干縦長の方形であり、規模は長径4.6m、短径4.4mである。カマドは北東壁中央にあり、柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴は南西側中央壁寄り（壁から約1.1m）にあり、貯蔵穴は東コーナーにある。踏締め面は凡そカマドから主柱穴と梯子穴を結ぶラインの内側で認められた。覆土は最下層に焼土・炭化材粒がある。他は暗褐色土がほぼ水平に堆積し、自然堆積と思われる。床面から覆土下位にかけて焼土・炭化物を多く含む。炭化材が西側に遺存している状況から焼失住居とみるべきだろう。

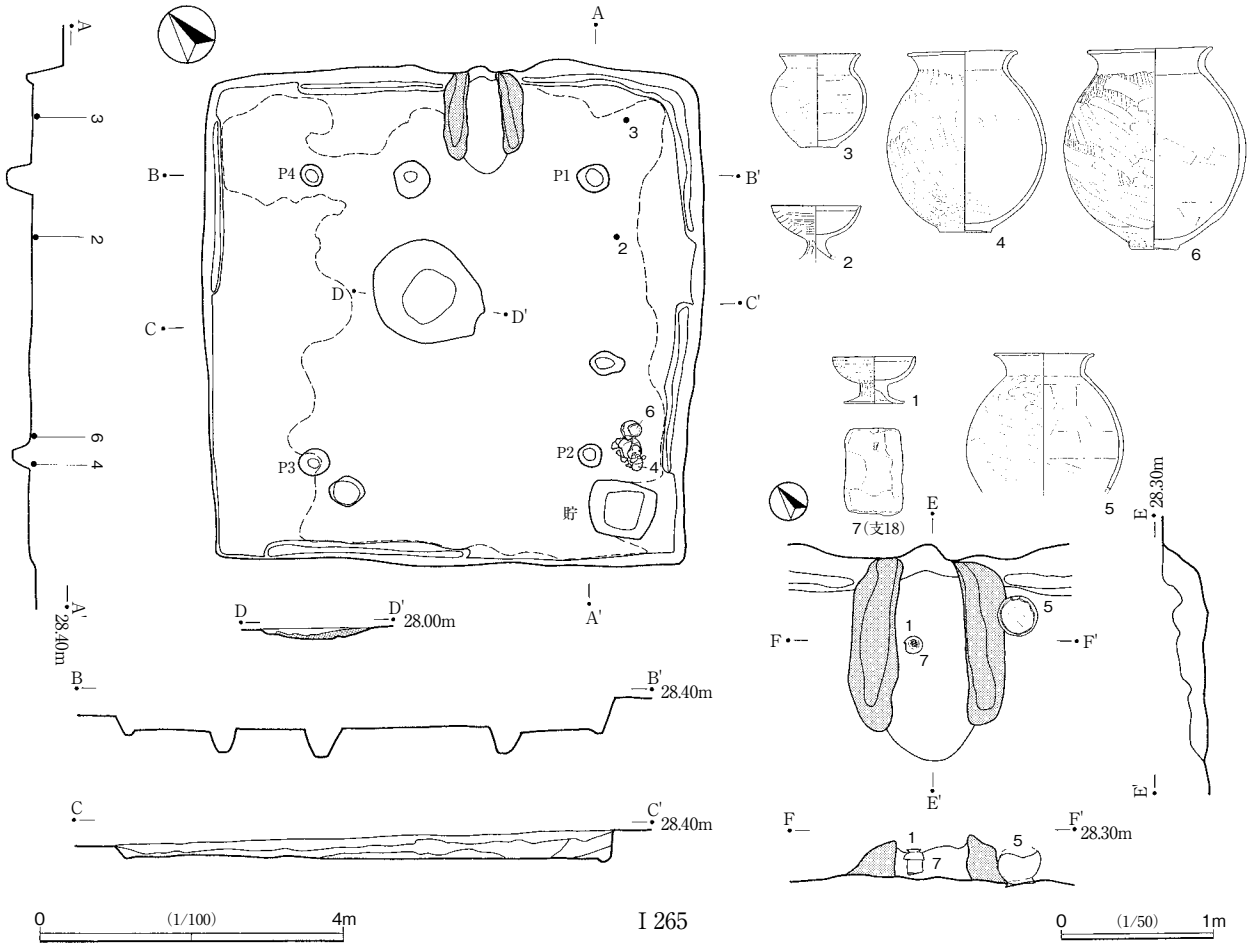
遺物はこの焼土上およびカマド一帯から出土した。１は鉢、２は椀、３は壺、４～６は甕、７は甑である。この内、１・２・４・６が完形ないしほぼ完形、７が約半個体、それ以外は１／４個体以下を復元・図示した。８は支脚であり、カマド焚床奥から出土した。

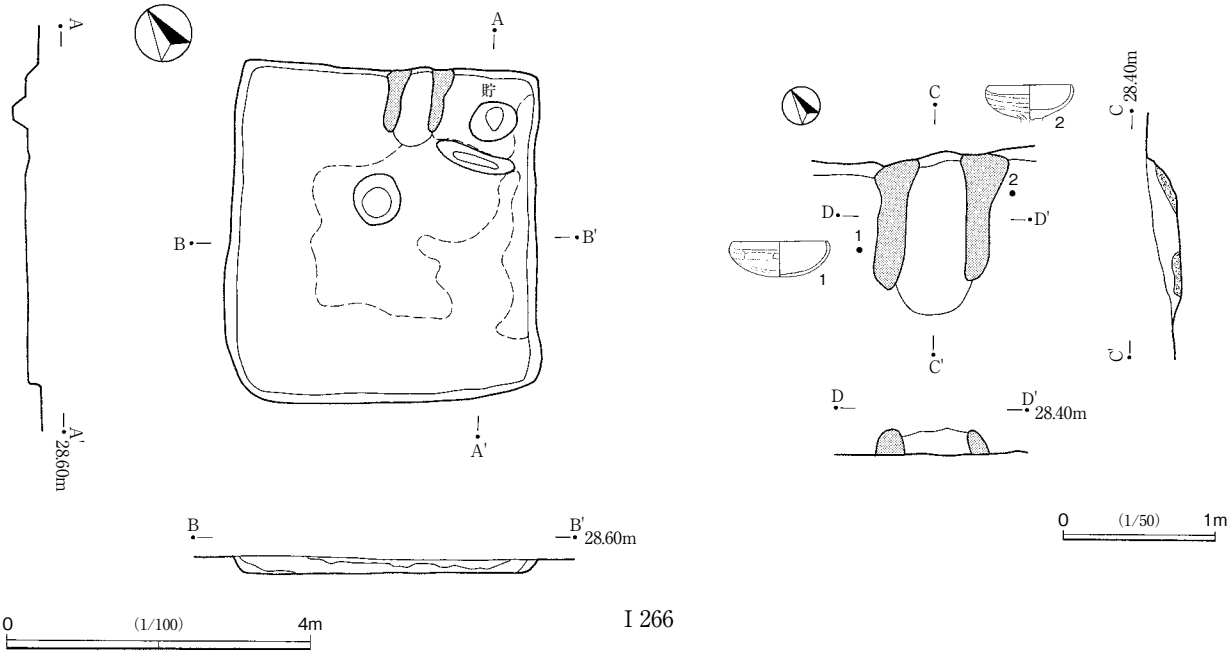

(I 229)
(I 228)
貯
P1
P2
P3
P4
E 27.30m
F 27.30m
D 27.30m
0 (1/50) 1m
B 27.80m
C 27.80m
A 27.80m
22(金56)
25(砥88)
23(他18)
24(祭6)
0 (1/100) 4m

第90図　I 133 住居



第91図　I 240・I 253 住居





第92図　I 265・I 266 住居

Ｉ265（第80・92・196・239図、図版20・73・97）

Ｉ区南東寄りに位置する。古墳時代中期の住居２棟（Ｉ268･Ｉ389）と一部重複し、共に本址が新しい。形態は正方形であり、規模は長径6.3m、短径6.2mである。カマドは北東壁中央向かってやや右手にある。柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴はみられず、貯蔵穴は南側コーナーにある。踏締め面は両脇とりわけ西側壁から柱穴付近を除いて確認された。覆土は壁下を除き水平堆積に近く、ほぼ自然堆積と思われる。なお、中央に径1.4m程の粘土貼りの浅い窪みが存在する。

遺物は住居東側床面上（２～４・６）でまとまって出土した。３・５が一部破損する他はほぼ完形に近いものである。また、カマド内の支脚上には完形の高坏（１）が逆位でのっていた。１・２は高坏、３～６は甕である。７は支脚である。住居の廃棄に伴う遺物群であろうが、５のようにカマド脇に底部を欠く甕が逆さに置かれているのも廃棄時の状況を物語るものであろう。

Ｉ266（第80・92・196図、図版21）

Ｉ区南東寄りに位置する。古墳時代中期の住居（Ｉ389）と一部重複するが、本址が新しい。また、平安時代の住居と一部重複するが、破壊が一部にとどまっている。形態はほぼ方形であり、規模は長径4.4m、短径4.2mである。カマドは北東壁中央向かってやや右手にある。柱穴は見当たらず、梯子穴も同様である。貯蔵穴はカマド右側にあり、手前に直線状の周堤がみられた。踏締め面はこの周堤から中央部に及ぶ範囲で確認された。なお、カマド手前には浅いピットがあり、重複部分から外れた箇所でもあり本址に伴うものと思われる。覆土は凹レンズ状の堆積を示していた。

遺物はカマド両脇の床面上からそれぞれ坏と高坏が出土した。１の坏はほぼ完形、２は脚部を欠く高坏であり、これも廃棄時の状況を物語るものであろう。

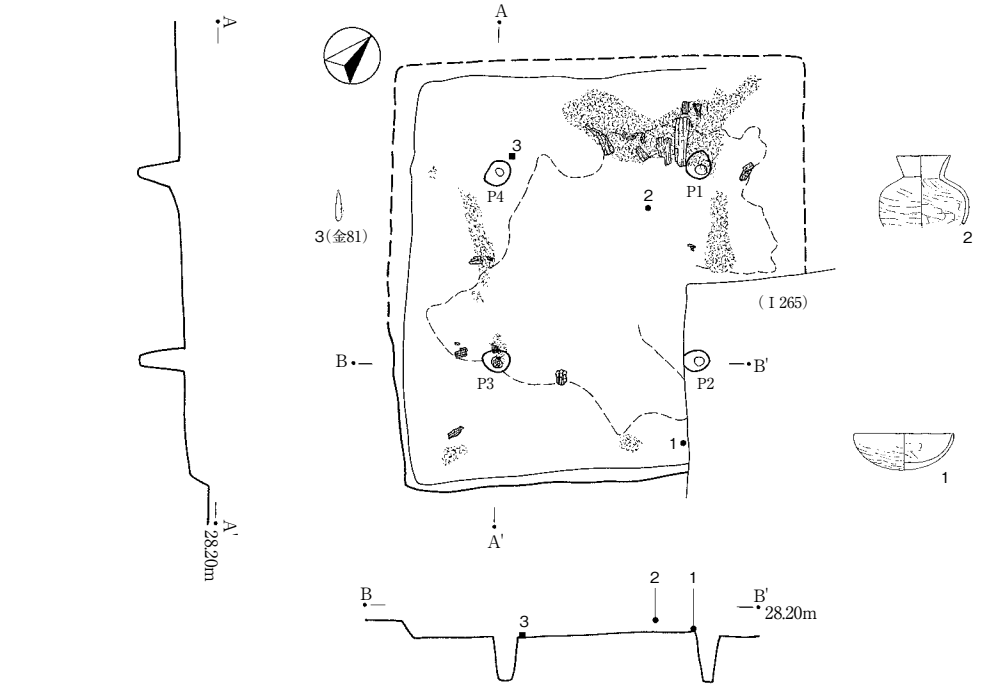
Ｉ268（第80・93・196・247図、図版21・73・102）

Ｉ区南東寄りに位置する。弥生時代以降の住居群と重複し、また古墳時代中期の住居（Ｉ265）によって東側コーナー部を欠く。形態はほぼ方形であり、規模は長径5.2m、短径5.0mである。炉ないしカマドは認められなかった。柱穴は対応する位置に４本存在するが、概してその径は狭い。梯子穴、貯蔵穴は確認されなかった。踏締め面は凡そ４本の柱穴を結ぶ範囲内ではあるが、床面の遺存状態からして多少の誤差もあろう。床面上には炭化材や炭化材粒を含む層が堆積しており、焼失住居と思われる。

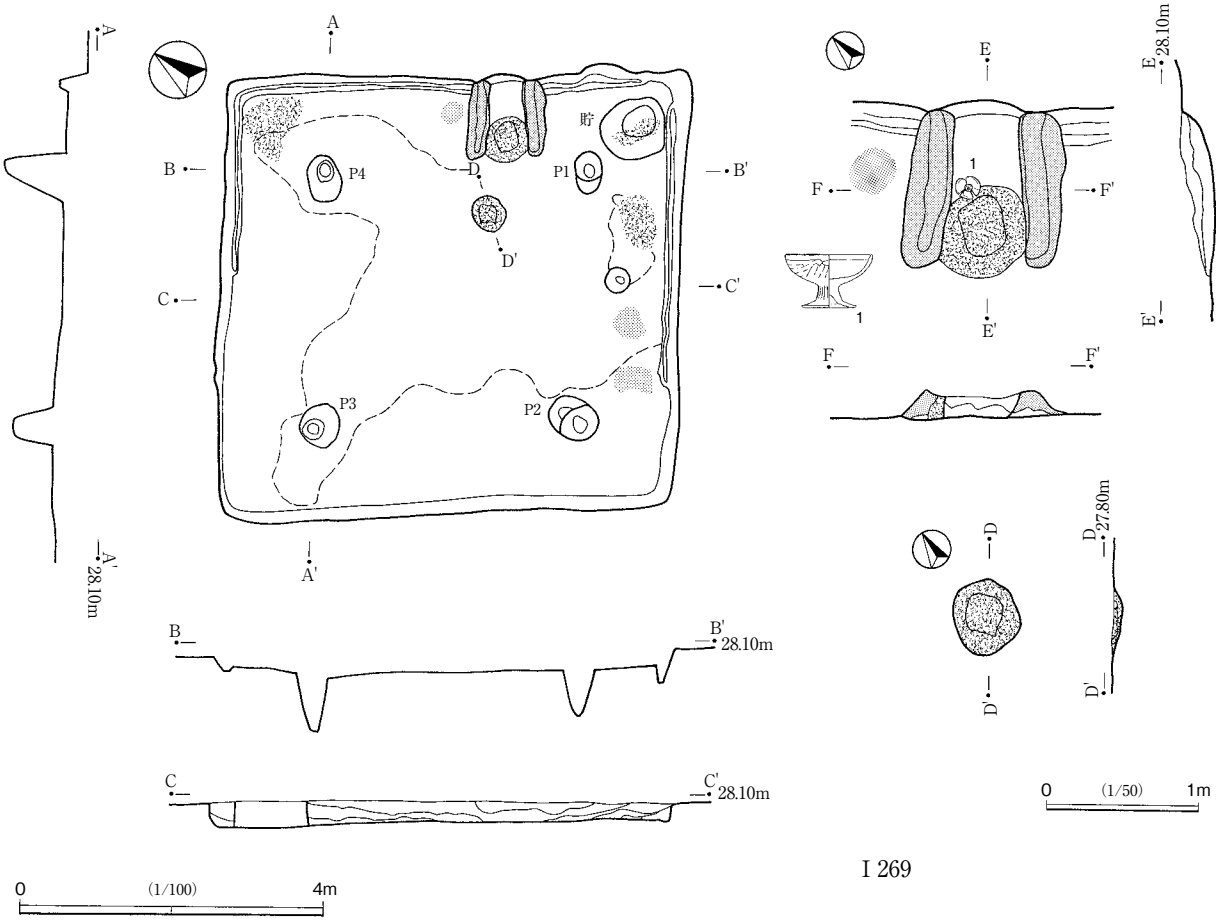
遺物は床面ないし床面付近から出土した。１は坏、２は壺、３は鏨状鉄製品で、１がほぼ完形、２が約半個体である。

Ｉ269（第80・93・196図、図版21）

Ｉ区南東寄りに位置する。弥生時代以降の住居４棟と重複するが、プランは捉え得た。形態は多少菱形に歪んだ正方形であり、規模は長径5.6m、短径5.5mである。カマドは北東壁中央向かってやや右手にある。柱穴は対応する位置に４本あり、住居プランに沿って多少歪んでいる。梯子穴は認められなかったが、貯蔵穴はカマド右側にある。踏締め面は貯蔵穴・カマド付近から凡そ４本の柱穴を結ぶラインの内側にかけて確認された。山砂・焼土がとりわけ東～南側床面付近で認められた。焼失住居というよりカマドの天井部が散った可能性が高い。覆土は壁近くの床面付近で焼土を含む層が見られるほかは、暗褐色土が凹レンズ状の堆積を示していた。

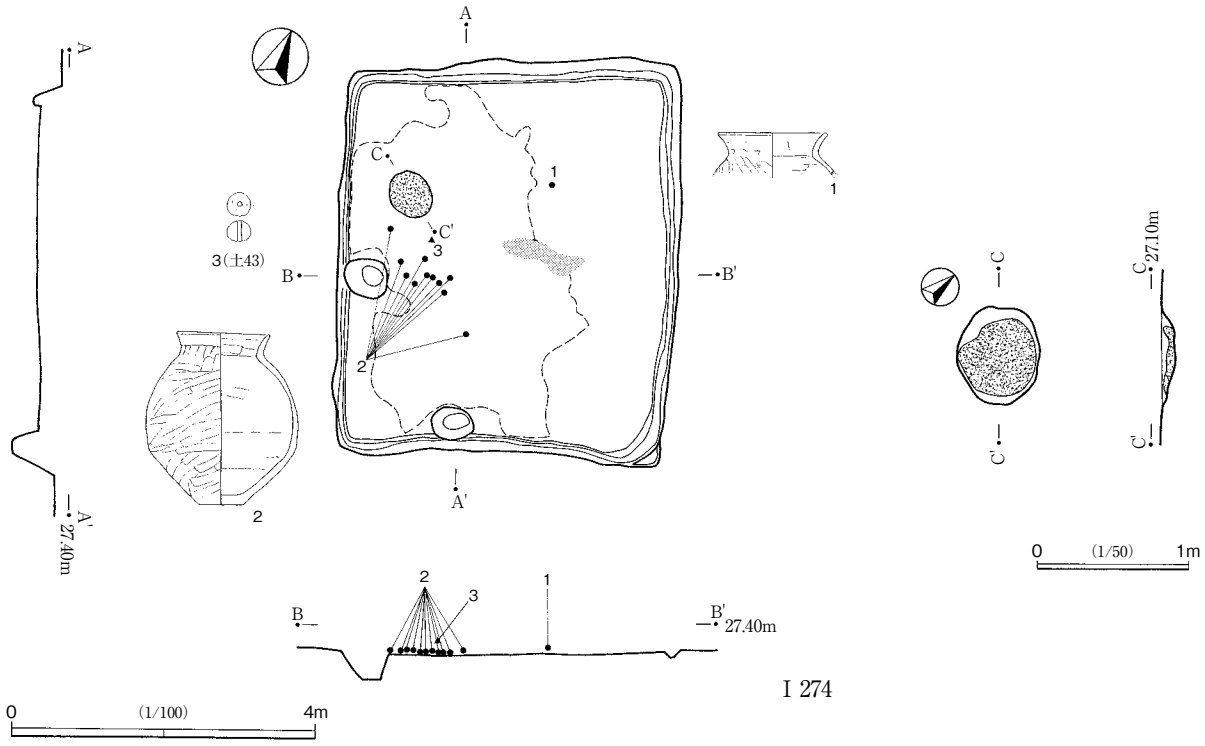


I 268

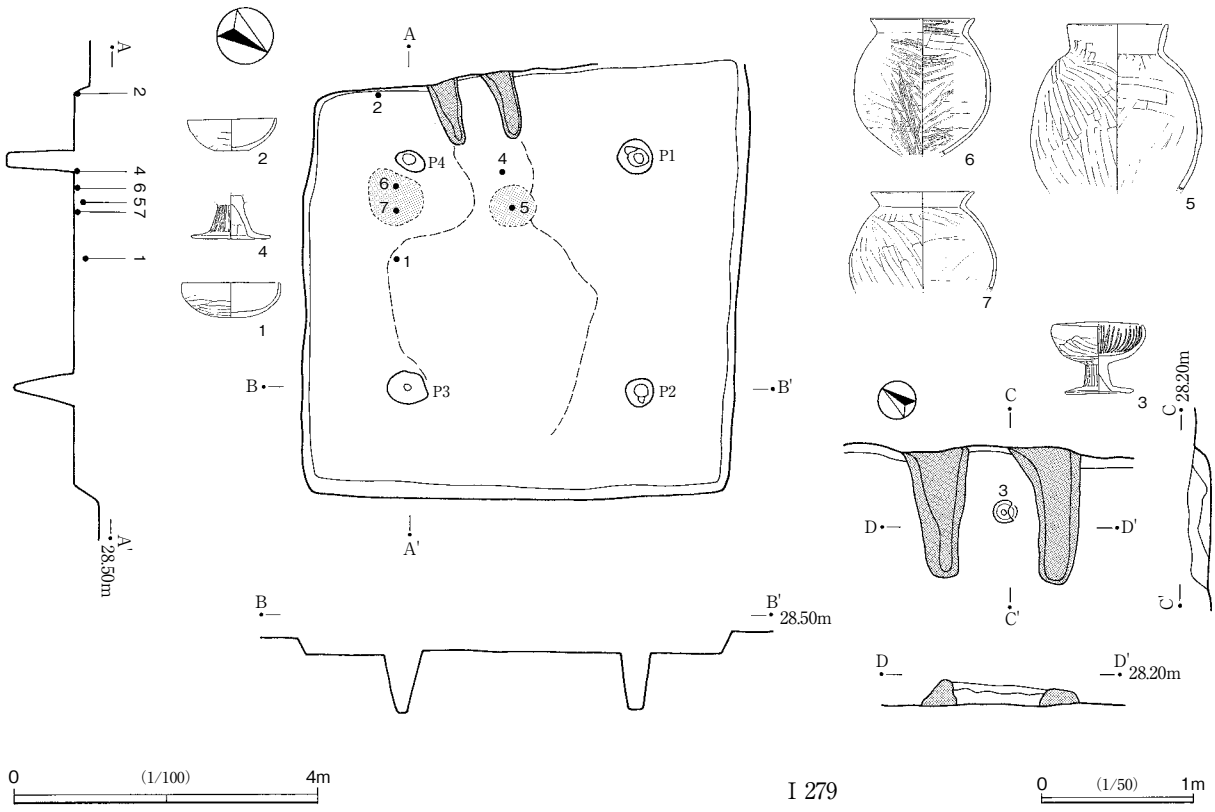


I 269

第93図　I 268・I 269 住居

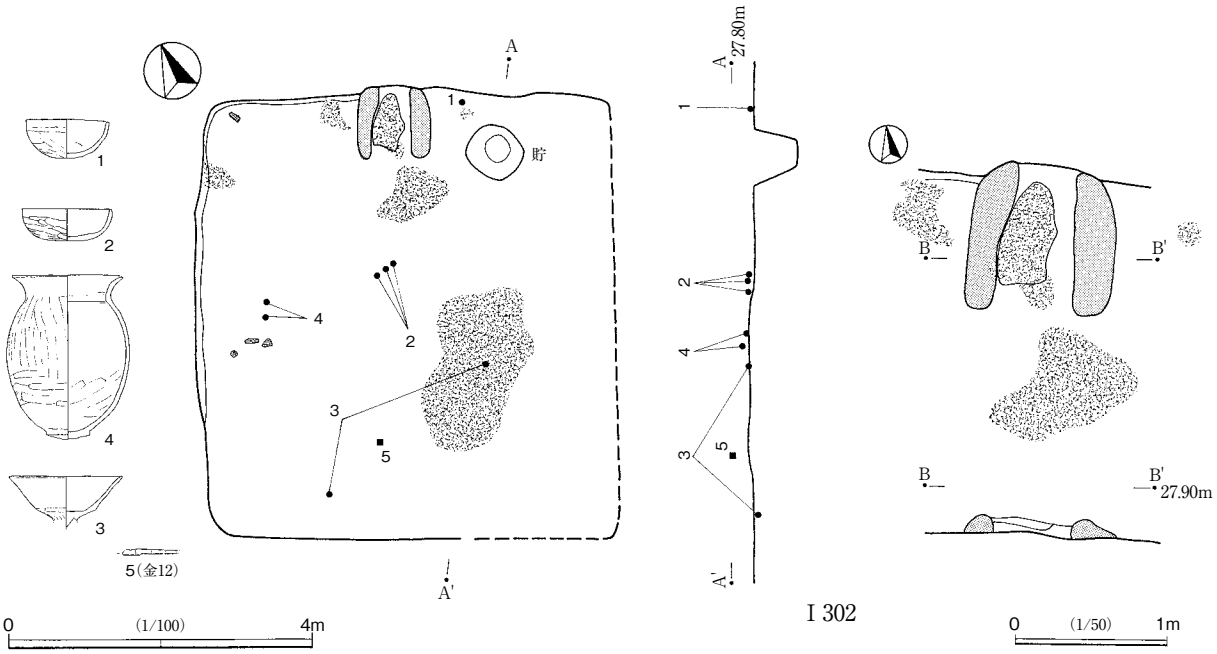


I 274

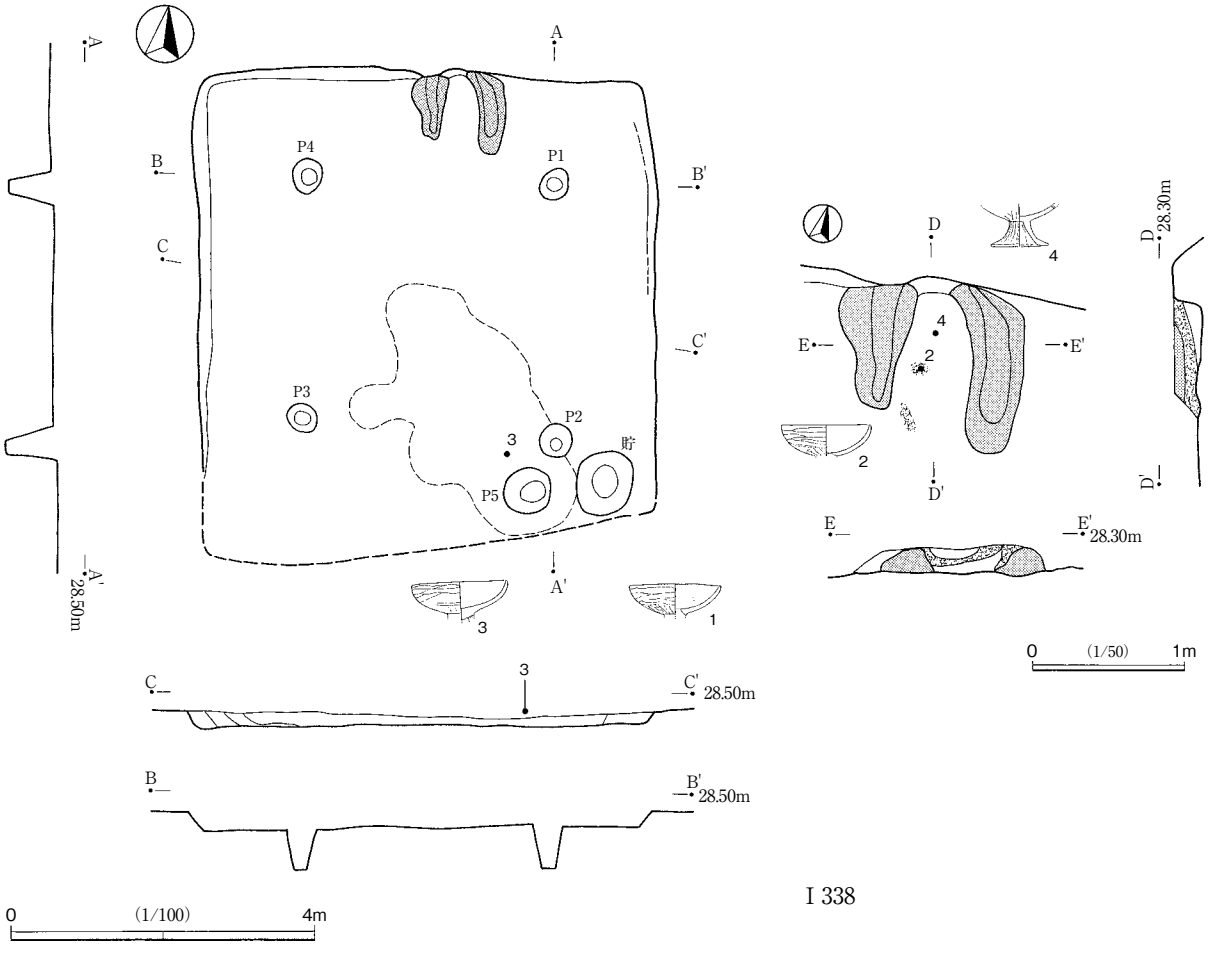


I 279

第94図　I 274・I 279 住居



I 302



I 338

第95図　I 302・I 338 住居

遺物はカマド内奥に逆位に据えられた高坏があげられる。支脚の代用としての使用を物語る例であり、ほぼ完形である。

Ⅰ274（第80・94・196・235図、図版21・94）

Ⅰ区南寄りに位置する。弥生時代の住居上に位置し、平安時代の住居と一部重複するがプランは捉え得た。その向きについては北というより西の可能性もある。形態は長方形であり、規模は長径4.8m、短径4.1mである。炉は北西寄りに位置し、小さいながらも焼土層の形成は良い。柱穴は見当たらず、ピットも所属するという確証はないが図示しておく。梯子穴・貯蔵穴は見出し得なかった。踏締め面は炉の位置する住居西側半分で認められた。覆土の状態は不明である。

遺物は床面上の２点の甕と覆土下位の土玉をあげる程度である。１は約１/４個体の甕口縁部から頸部、２は半個体強に接合した甕を復元・図示した。３は球形の土玉である。

Ⅰ279（第80・94・196・197図、図版22・73）

Ⅰ区東端M区寄りに位置する。弥生時代および古墳時代前期の住居と重複する。形態は多少歪んだ方形であり、規模は長径・短径共に5.5mである。カマドは南西壁向かって左側にあり、住居の向きに対して多少右側に傾いている。柱穴は対応する位置に４本ある。梯子穴、貯蔵穴は確認されず、踏締め面はカマドから中央部にかけての範囲でみられた。覆土の状態は不明である。

遺物はカマド内およびカマド手前の床面上に二つのブロックで土器集中範囲（５～７）があった。１・２は坏、３・４は高坏、５～７は甕である。３はほぼ完形、１・２・４～６が２/３～半個体品であるが、７は１/４個体を復元・図示した。なお、３はカマド中央に逆位に置かれた高坏であり、支脚の代用として使われた結果であろう。

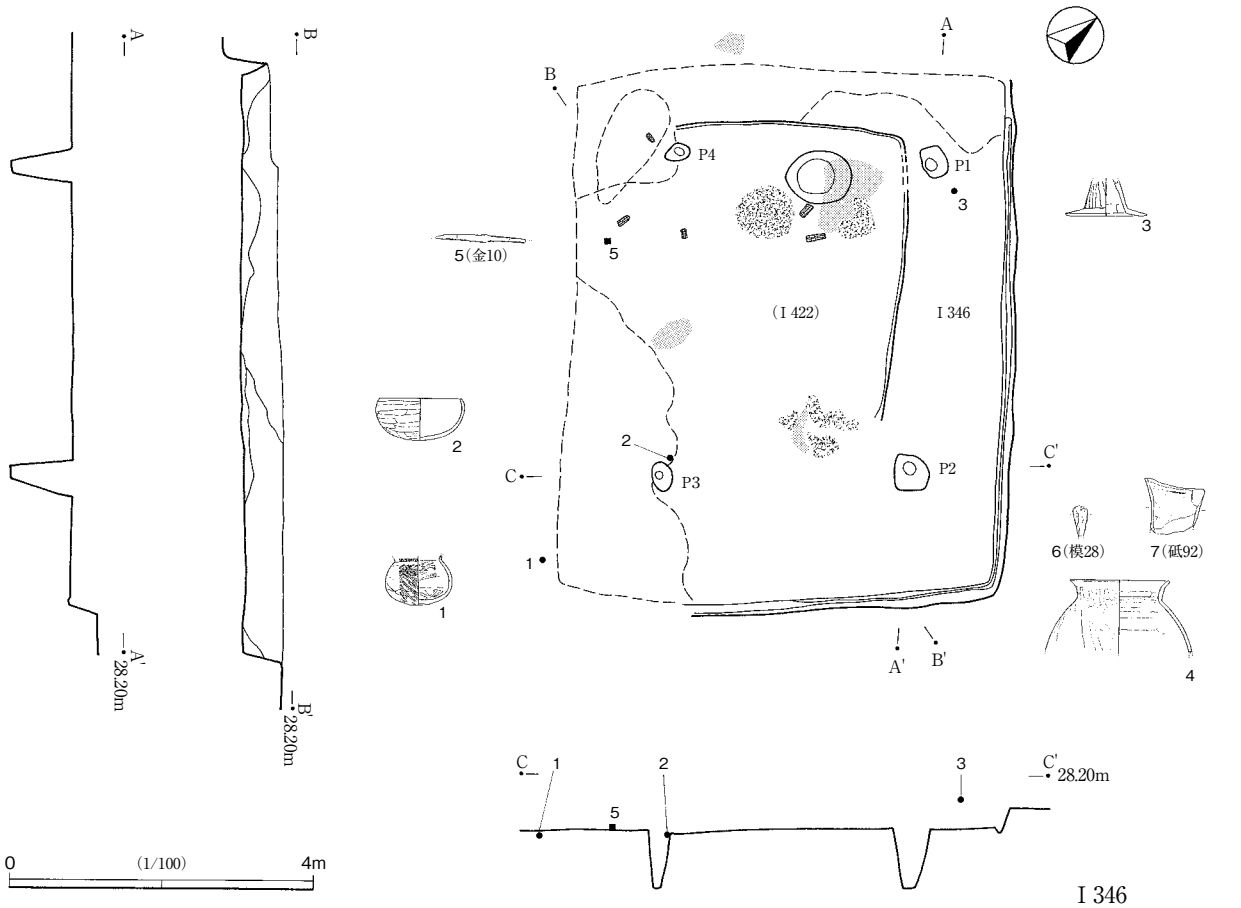
Ⅰ302（第80・95・197・244図、図版73・100）

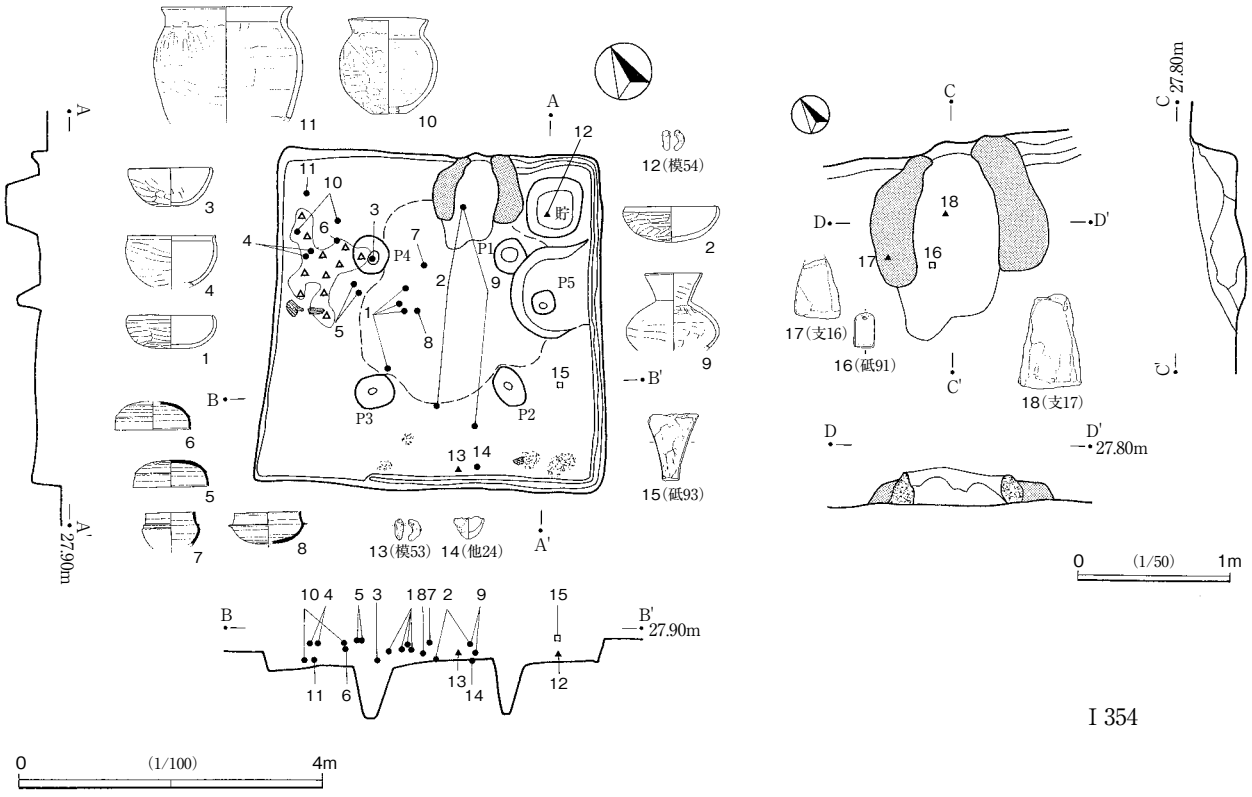
Ⅰ区南西Ｆ区寄りに位置する。弥生時代の住居群内に位置する。形態は多少縦長の方形であり、規模は長径5.7m、短径5.5mである。カマドは北壁中央にある。柱穴、梯子穴共に見当たらず、僅かに貯蔵穴のみカマド右側に存在する。踏締め面は明瞭でない。床面上には焼土の散布がみられ、焼失住居の可能性が高い。覆土は確認面が床面近くであったこともあり、不明である。

遺物は中央床面上から出土した。１・２は坏、３は高坏、４は甕である。１・２はほぼ完形、４は半個体強、３は１/３個体を復元・図示した。この内、３については古墳時代前期の混入品かとも思われるが一応図示する。５は覆土下位から出土した刀子破損品である。

Ⅰ338（第80・95・197図、図版22）

Ⅰ区東端M区との境界付近に位置する。弥生時代の住居（Ⅰ405）と重複し、南東部分のラインが不明瞭である。形態は多少縦長の方形であり、規模は長径6.0m、短径5.8mである。カマドは北壁向かってやや右側にあり、柱穴は対応する位置に４本ある。梯子穴は南壁東寄りのピットが該当するかと思われる。貯蔵穴は入口右手コーナーにある。踏締め面は住居南半部中央の範囲でみられた。覆土はロームブロック、焼土を多く含み、人為的堆積と思われる。





第96図　I 346・I 354 住居

遺物は覆土下位から３の高坏坏部、カマド内から２・４の高坏が出土した。１の高坏は覆土一括品である。何れも脚部ないし坏部を欠く半個体である。

Ｉ346（第80・96・198・228・241・244図、図版90・98・100）

Ｉ区中央やや東寄りに位置する。住居密集地にあり、遺存状態は不良である。形態は多少縦長の長方形ないしは正方形の可能性もある。現存値は長径7.1ｍ、短径5.8ｍである。炉は中央北側にそれらしき焼土域があるが、確証はない。柱穴は対応する位置に４本あり、梯子穴、貯蔵穴共に確認出来なかった。床面は遺存部分のみ破線で示した。

なお、内部には僅かな段差があるが、いわゆるベッド状遺構（調査時はＩ422）の可能性もある。覆土は全層にわたってロームブロック、焼土を多く含み、人為的堆積と思われる。

遺物は床面および一部覆土中の遺物を図示した。１は壺、２は椀ないし坏、３は高坏脚部、４は甕である。１・２はほぼ完形、３・４は半個体以下を復元・図示した。５は刀子、６は片岩製の剣形模造品、７は凝灰岩製の砥石である。この内、４・６・７が覆土一括品に当たる。

Ｉ354（第80・96・198・228・237・239・242図、図版22・74・90・95・97・98）

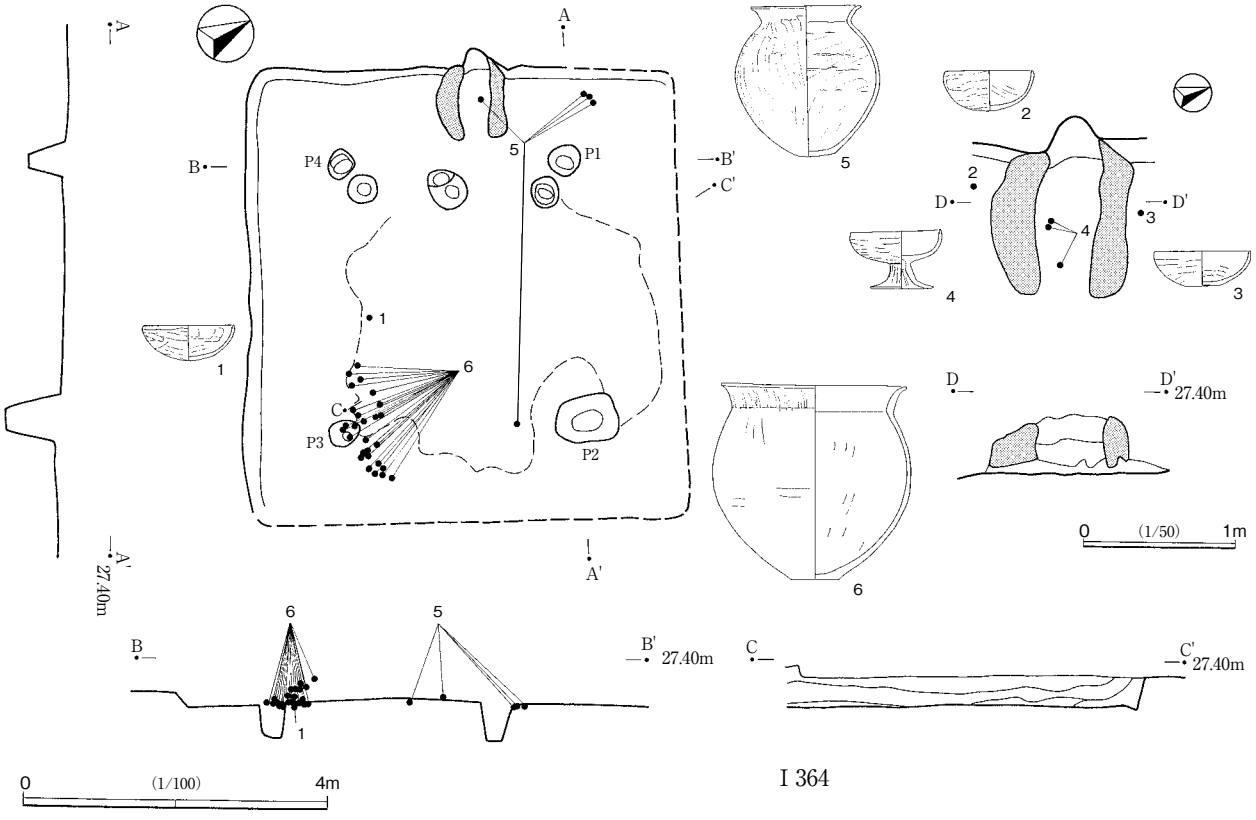
Ｉ区南東端近くに位置する。奈良時代の住居と重複するが比較的遺存状態は良好である。形態は多少縦長の長方形で、規模は長径4.4m、短径4.2ｍである。カマドは北東側向かって右手に位置し、貯蔵穴が右側に付属する。柱穴は対応する位置に４本あるが、通常より内側に寄っている。梯子穴は南東側壁寄り（壁から約70㎝）にあり、周囲は床面から約20㎝程高い段をなしている。住居北西部にはアメーバ状に貝の散布がみられた。貝層は厚いところで20㎝、薄いところでは５㎝に満たず、床面から10㎝程度の高さに形成されていた。壁に近いほうが厚いので西側から廃屋への投棄かと思われる。貝の種類はハマグリ（57％）、シオフキ（20％）、ウミニナ科（12％）、アサリ（５％）が主なもので、他にサルボウやダンベイキサゴ等がみられた。

遺物は床面から覆土、とりわけ床面から約20㎝ほど高いレベルから多く出土した。１・２は坏、３・４は椀、５・６は須恵器蓋坏、７は須恵器鉢、８は須恵器坏、９は壺、10・11は甕である。この内、１・２・５・10はほぼ完形、８・９・11が約半個体、それ以外は１／４個体以下を復元・図示した。12・13は土製勾玉形模造品、14はミニチュアの手捏ね土器、15・16は共に凝灰岩製の砥石であるが、後者は端に孔を有するハンデイタイプである。17・18は土製支脚であり、前者はカマド袖脇、後者は焚床上での出土である。

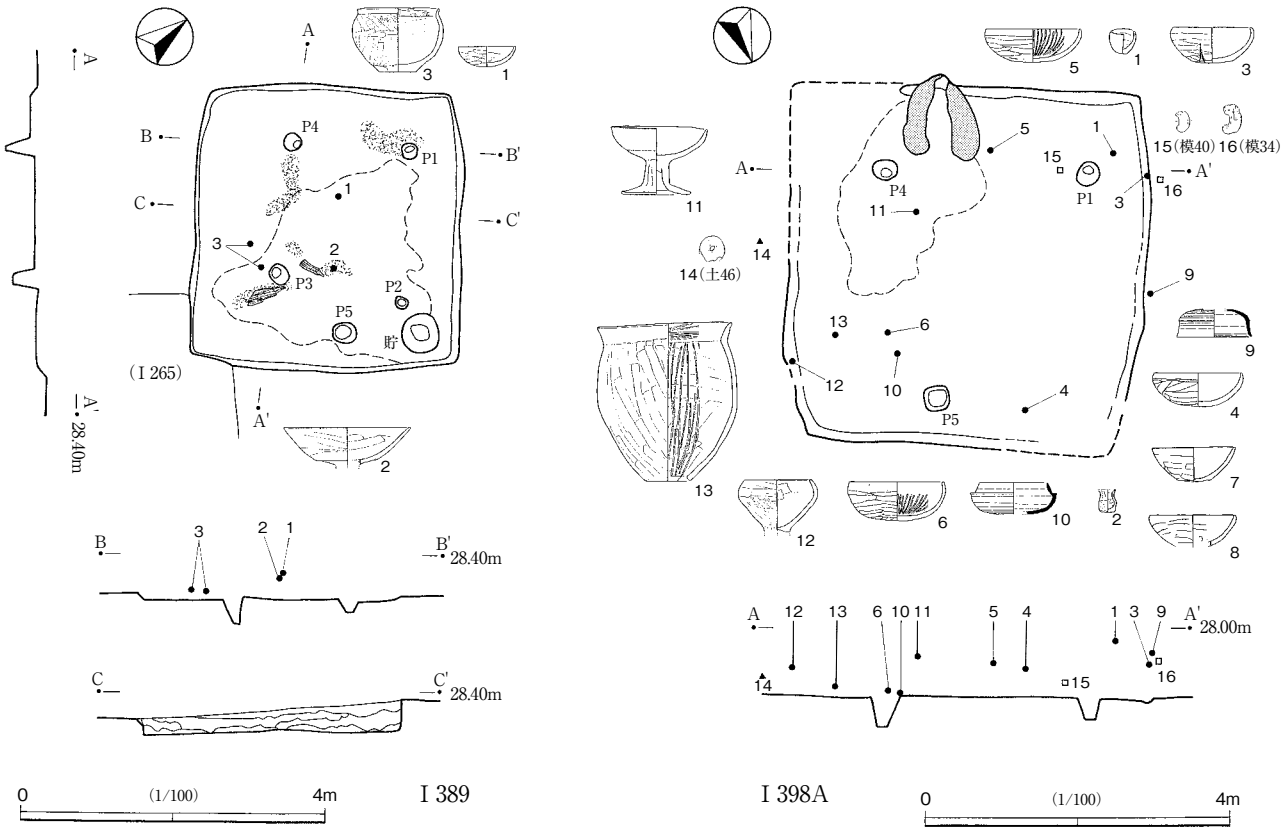
Ｉ364（第80・97・198・199図、図版74）

Ｉ区中央南寄りに位置する。弥生時代の住居（Ｉ365）内に入っていることや、平安時代の住居と一部重複しており、プラン等は多分に推測である。形態はほぼ正方形であり、規模は長径5.7ｍ、短径5.5ｍである。カマドは北西壁中央にあり、柱穴は対応する位置に４本ある。梯子穴は確認出来ず、貯蔵穴も同様である。カマド側の主柱穴周辺には規則的にピットが並んでおり、本址に伴うものと思われる。踏締め面はカマド手前から主柱穴内で認められた。覆土は壁下を除きほぼ水平に堆積する暗褐色土であった。

遺物はカマドおよび床面付近で出土したが、大形の甕は縦２ｍ程の範囲から出土した破片が接合したものである。１～３は坏、４は高坏、５・６は甕である。何れもほぼ完形ないし３／４個体と、遺存度の良い土器で占められていた。



I 364



I 389

I 398A

第97図　I 364・I 389・I 398A 住居

Ⅰ389（第80・97・199図）

Ⅰ区中央南東寄りに位置する小型住居である。同じく古墳時代中期の住居２棟（Ⅰ265・Ⅰ266）と重複し、共に本址が古い。形態は長方形であり、規模は長径3.7m、短径3.4mである。炉・カマド共になく、柱穴は不規則ながら４本存在する。梯子穴は南東側中央壁寄り（壁から50㎝）にあり、貯蔵穴は南東コーナーにある。踏締め面は中央から南側にかけて認められた。覆土はまず凹レンズ状に暗褐色土が堆積したのち、その上に約10㎝の焼土・炭層、そして僅かに焼土を含む暗褐色土と推移する。床面付近ではなく、ある程度の堆積をみたのちに焼土層が形成されるという珍しい例である。

遺物は覆土中から出土した。１は坏、２は高坏、３は鉢である。この内、３はほぼ完形、１は約半個体強、２は１/３個体を復元・図示した。

Ⅰ398A（第80・97・199・235・241図、図版74・94・98）

Ⅰ区ほぼ中央に位置する南向きの住居である。弥生時代の住居（Ⅰ398Ｂ）内に入っていることや、平安時代の住居と一部重複しており、遺存状態は不良である。形態はほぼ正方形であり、規模は長径4.5m、短径4.4mである。カマドは南壁向かって東寄りにあり、カマド側の２本を検出した。梯子穴は北東側中央壁寄り（壁から70㎝）にあり、貯蔵穴は見出せなかった。踏締め面はカマド手前向かって左側でみられるのみであった。覆土の状態は不明である。

遺物は覆土中上下から出土した。１・２は手捏ね土器、３～８は坏、９は須恵器蓋坏、10は須恵器杯、11は高坏、12は台付椀、13は甑である。この内、１～６・８・11・13はほぼ完形、12は半個体、それ以外は１/４個体以下を復元・図示した。14は土玉破損品、15・16は滑石製勾玉形模造品である。

Ⅰ403A（第80・98・199・235図、図版74・94）

Ⅰ区南東寄りに位置する。弥生時代以降の住居と重複しており、遺存状態は不良である。形態はほぼ正方形と推定され、規模は長径・短径共に推測で5.5mである。カマドは北東壁向かって右手にあり、住居の向きに対して右手に片寄っているという特徴がある。柱穴は３本のみ検出した。梯子穴は認められず、貯蔵穴はカマド右脇の東側コーナーにある。踏締め面は部分的に遺存するのみである。覆土の状態は不明である。

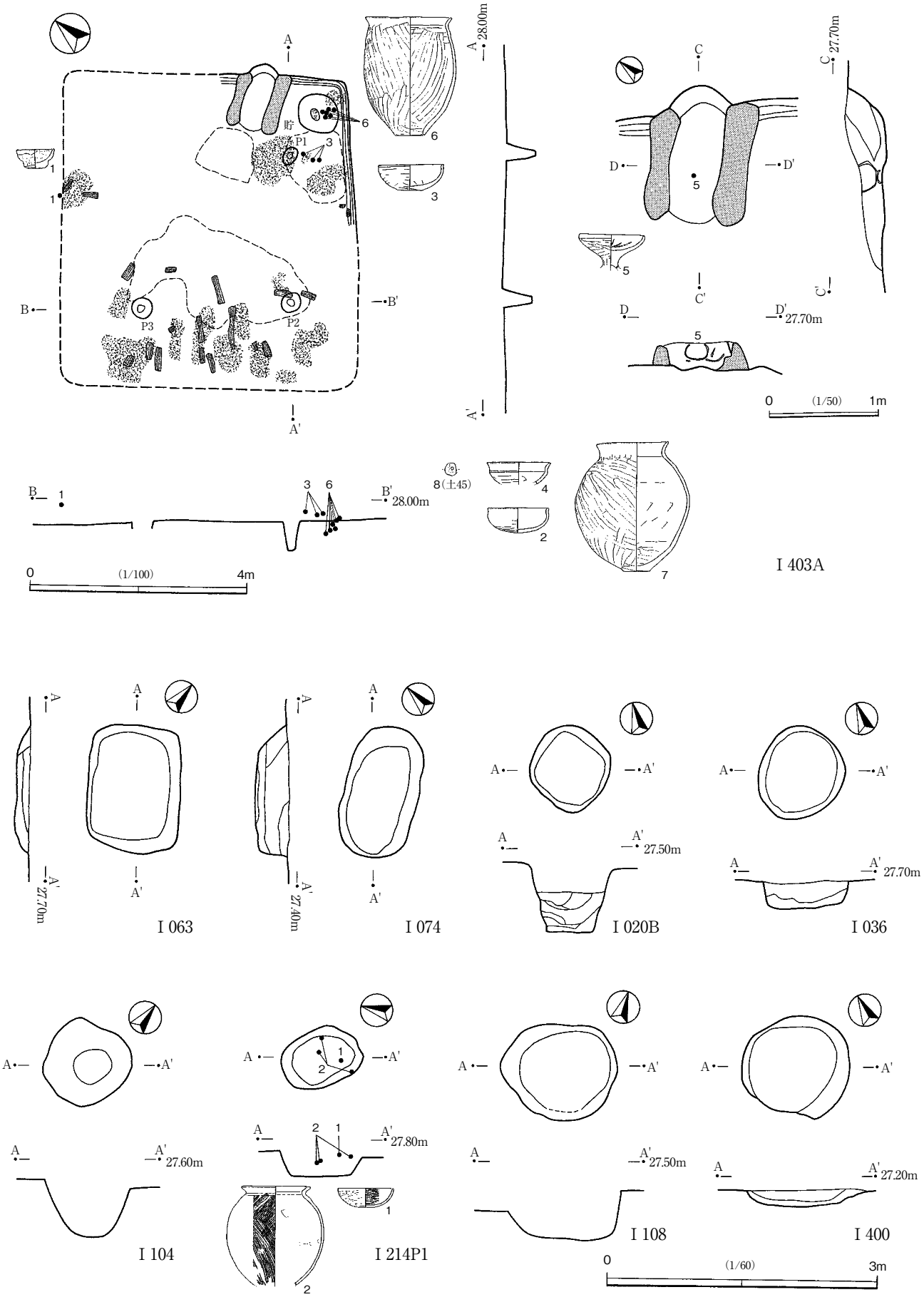
遺物はカマド内、覆土中および貯蔵穴内から出土した。１は手捏ね土器、２～４は坏、５は高坏、６は甑、７は甕である。この内、６・７はほぼ完形、１～３・５は約半個体、４は約１/４個体を復元・図示した。８は土玉である。なお、２・４・７・８は覆土一括品である。

３　土坑

土坑のうち、古墳時代中期に所属するもの、またその可能性のあるものをここで報告する。後者については確証はないが、重複状況や僅かな遺物の様相から判断したものである。

Ⅰ063（第80・98図）

Ⅰ区中央やや北東寄りに位置する。形態は長方形であり、規模は長軸約1.4m、短軸約1.0m、深さは確認面から約0.2mである。覆土は暗褐色土である。形態からすると土坑墓の可能性があるが、覆土には埋



第98図　I 403A 住居、I 063・I 074・I 020B・I 036・I 104・I 214P1・I 108・I 400 土坑

め戻したような様子は窺えない。遺物は僅かな土器片のみで取り立てて報告すべきものはない。

Ⅰ074（第80・98図）

Ⅰ区北西寄りに位置する。形態は隅丸長方形ないし楕円形であり、規模は長軸約1.5m、短軸約0.8m、深さは確認面から約0.4mである。覆土は焼土を含む暗褐色土である。底面を整地した痕跡があり、土坑墓の可能性が窺える。遺物は僅かな土器片のみで取り立てて報告すべきものはない。

Ⅰ020B（第80・98図）

Ⅰ区北寄りに位置する。形態は隅丸方形であり、規模は縦横共に約0.9m、深さは確認面から約0.7mである。覆土は山砂や焼土を含む暗褐色土であり、人為的堆積と思われる。遺物は僅かな土器片のみで取り立てて報告すべきものはない。

Ⅰ036（第80・98図）

Ⅰ区北寄りに位置する。形態は楕円形であり、規模は径約１m、深さは確認面から約0.3mである。覆土は自然堆積と思われる暗褐色土である。遺物は僅かな土器片のみで取り立てて報告すべきものはない。

Ⅰ104（第80・98図）

Ⅰ区中央西側の古墳時代中期住居（Ⅰ116）内に位置する。形態は円形であり、規模は縦横共に約0.9m、深さは確認面から約0.7mである。覆土の状況は不明である。遺物は出土しなかった。

Ⅰ214P1（第80・98・193図、図版19）

Ⅰ区南西Ｆ区寄りに位置するⅠ214住居北コーナー付近と重複する土坑であり、本来は独立した番号ではあろうが調査時の番号に従った。形態は楕円形であり、規模は長軸0.9m、短軸0.6m、深さは確認面から約0.3mである。覆土の状況は不明である。覆土内から坏と甕が出土した。１は３/５個体の坏、２は約１/５固体を復元・図示した。甕は胴部に荒い櫛描きを施すものである。

Ⅰ108（第80・98図）

Ⅰ区中央西側の古墳時代中期住居（Ⅰ116）内に位置する。隣接するⅠ104との関係は不明である。形態は崩れた円形であり、規模は長軸1.2m、短軸1.1m、深さは確認面から0.5mである。覆土の状況は不明である。遺物は出土しなかった。

Ⅰ400（第80・98図）

Ⅰ区中央やや南寄りに位置する。弥生時代の住居（Ⅰ260A・Ⅰ260B）内に位置する。弥生時代の土坑墓（Ⅰ385）と一部重複するがその新旧関係は不明である。覆土は暗褐色土が凹レンズ状に堆積する。遺物は僅かな土器片のみで取り立てて報告すべきものはない。

第99図　古墳時代後期遺構分布図（1/700）

第６節　古墳時代後期

１　概要

Ｉ区で検出された古墳時代後期の遺構は28棟の住居と土坑１基であり、中期に比較すればそれほどの時期別エラーはないと思われる。住居群は北東と南西に大きく集中するが、南東に空白域がある点が前代と大きく異なる。それも奈良時代へと接続する段階を欠くことと無関係ではないであろう。

出土した遺物は土器が大半を占め前代と比べて大きな相違はない。ただ、土師器は坏と甕が主体で、それに高坏や甑が加わる程度というように器種が限られるようになるのもこの時期の特徴といえる。

なお、個別に扱った遺構（住居）は全体の約79％であり、残りのものについては前代と同様、分割図及びＣＤ内に収めたデータを参照されたい。また遺構の抽出率については次に示すとおりである。

住居跡22/28　　土坑１/１　　（分母は種別遺構数、分子は掲載数）

２　住居跡

Ｉ010（第99・100・201・247図・図版23・102）

Ｉ区北側に位置する住居である。重複のない住居ではあるが壁の遺存は不良である。形態は方形であり、規模は長径・短径共に4.4ｍである。カマドは北西壁中央に位置するがハの字形に開き袖の粘土も僅かである。柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴は確認されなかったが、貯蔵穴はカマド右脇に所在する。踏締め面はカマドから住居中央にかけてみられるが、床の遺存状況もあってかその広がりは不規則である。覆土の状態は不明である。

遺物は住居床面上から出土した。１は坏ほぼ完形、２は種別不明の鉄製品、３はカマド内から出土した鉄鏃である。

Ｉ022（第84・99・201図、図版23）

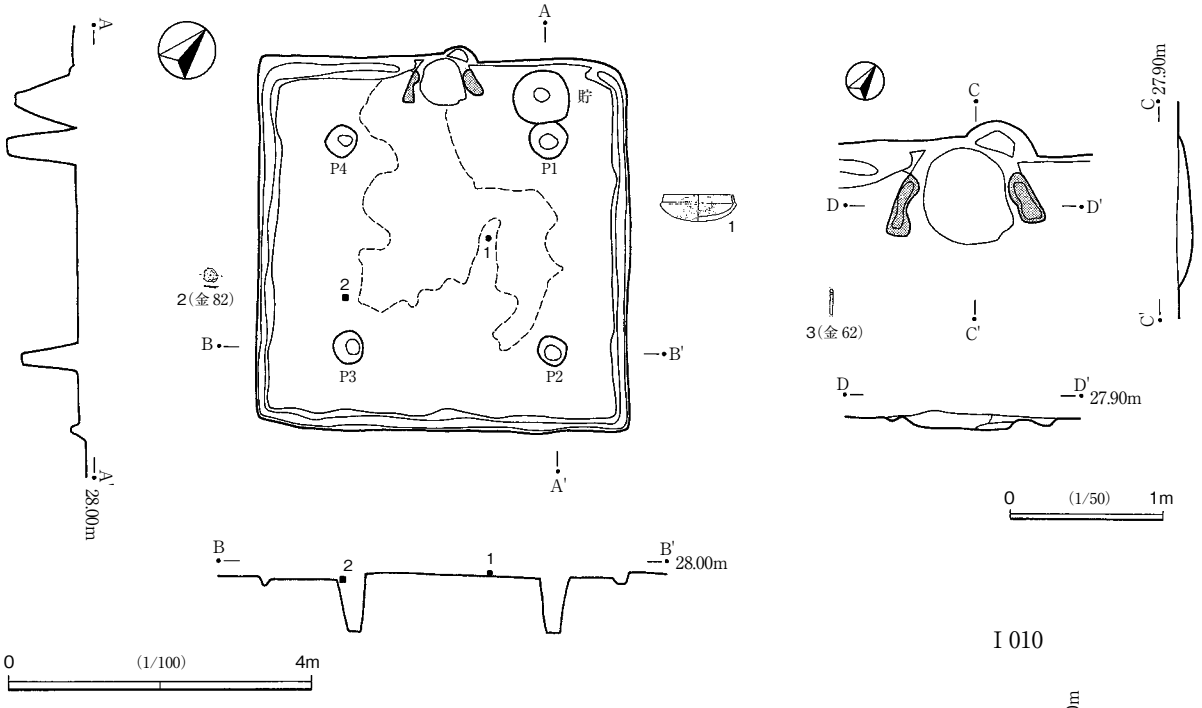
Ｉ区北側に位置する。住居のあり方や３の遺物からすると奈良時代の可能性もあろう。古墳時代中期の住居（Ｉ021）と重複し、その南西部を壊している。形態は方形であり、規模は長径3.2ｍ、短径は3.0ｍである。カマドは向かってほぼ中央にあり、柱穴、梯子穴、貯蔵穴、踏締め面共に認められなかった。覆土は底面近くに山砂を多く含む層があり、その上に焼土・炭層の堆積が見られた。焼失住居というより、人為的堆積であろう。

遺物はカマド周辺および覆土中位から出土した。１・３は坏、２は甕であるが、何れも破片を復元・図示した。遺物の様相からすれば３が最も新しく、その場合は１・２は混入品になろう。

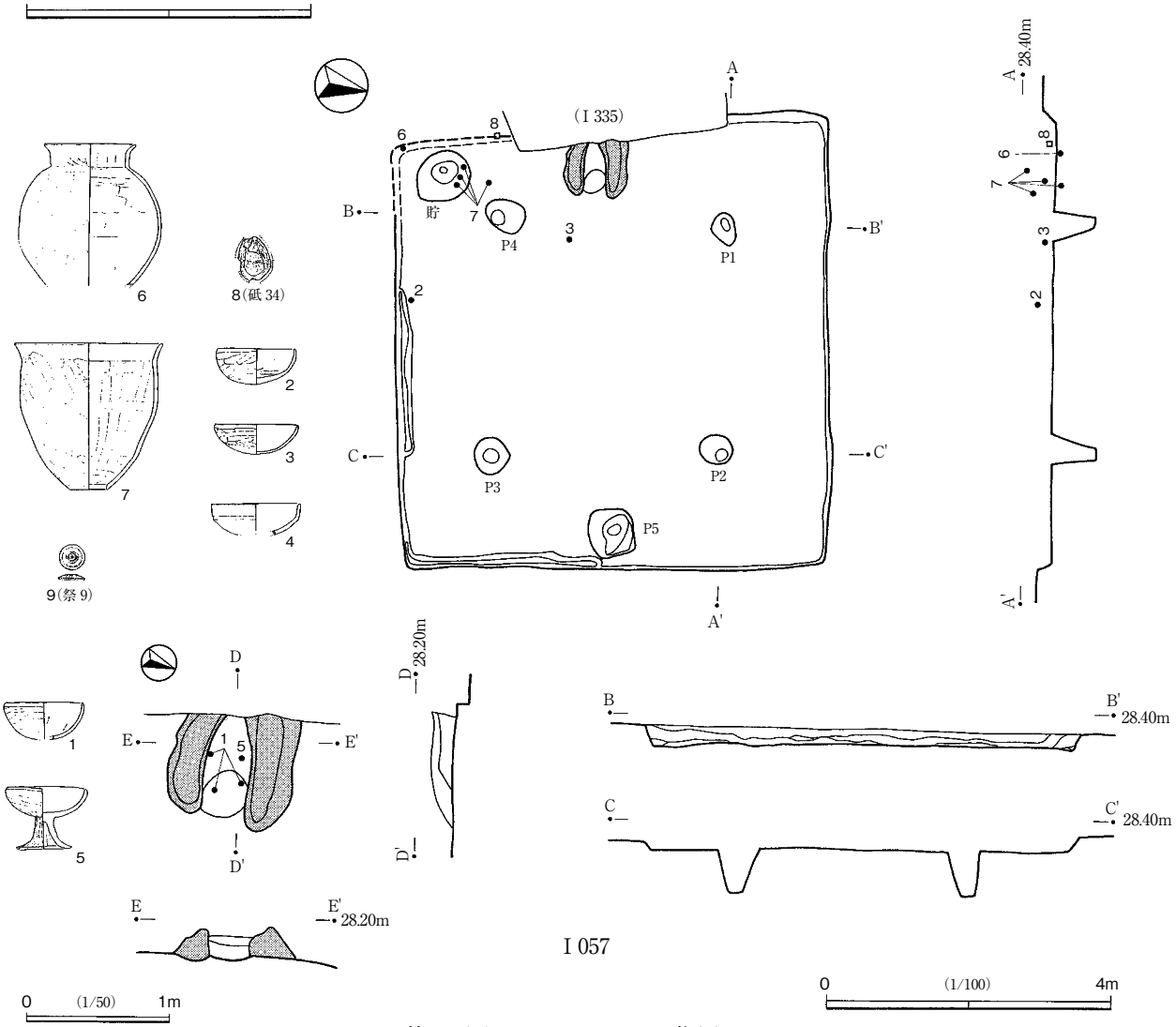
Ｉ057（第99・100・201・225・242図、図版23・76・87・98）

Ｉ区北東端に位置する住居である。住居群中にあり、しかも平安時代の住居に西側一部が破壊されている。形態は方形であり、規模は長径6.2ｍ、短径5.8ｍである。カマドは西壁中央に位置し、柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴は東壁際（壁から50㎝）にあり、貯蔵穴は向かってカマド左コーナーに所在する。踏み締め面は確認されず、覆土は壁下に褐色土、中央部ではほぼ水平に暗褐色土が堆積している。

遺物はカマド内（１・５）、床面（６）および覆土内から出土した。１～４は坏、５は高坏、６は甕、７は甑である。この内、２・３・５～７はほぼ完形、１は２/３個体、４は１/５個体を復元・図示した。

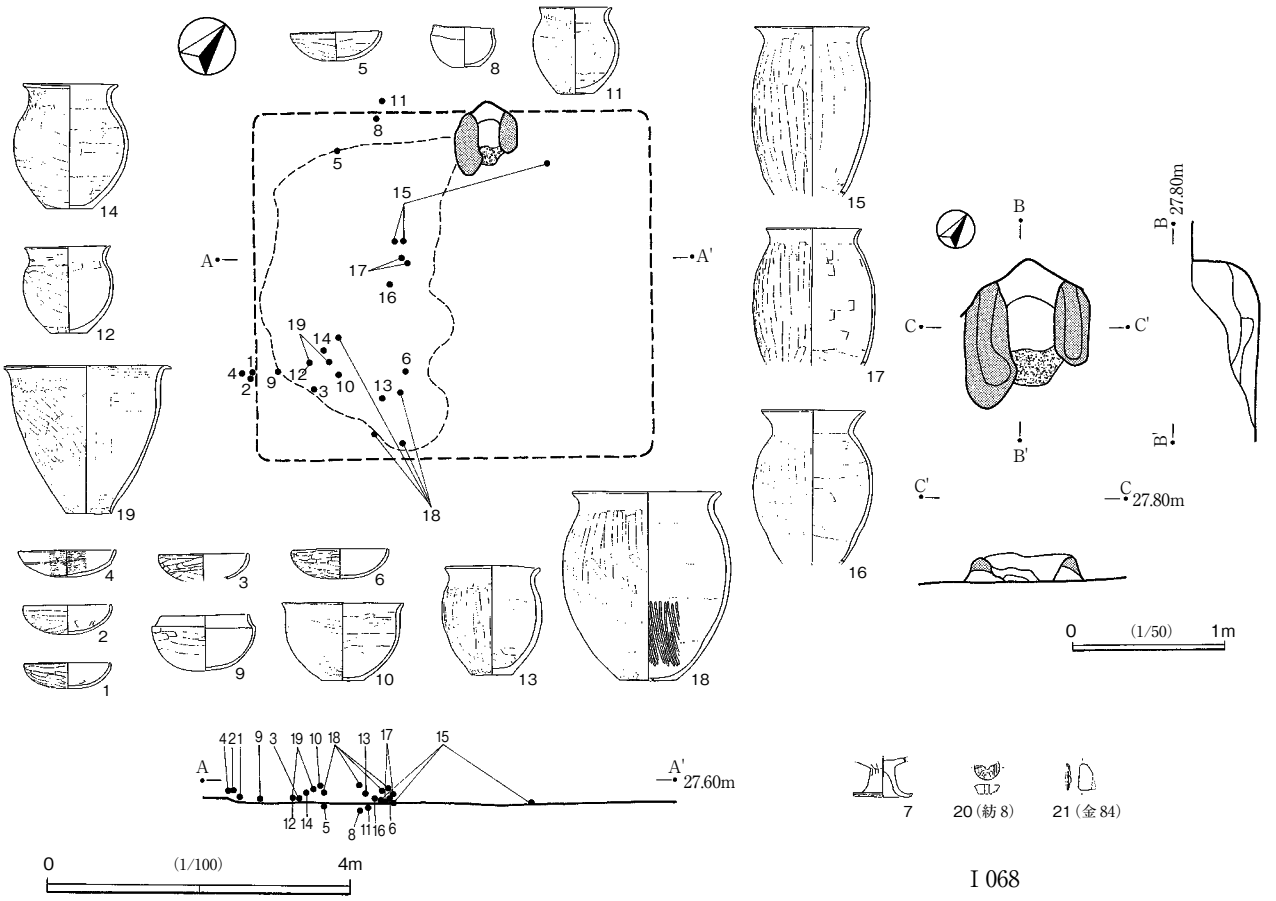


I 010

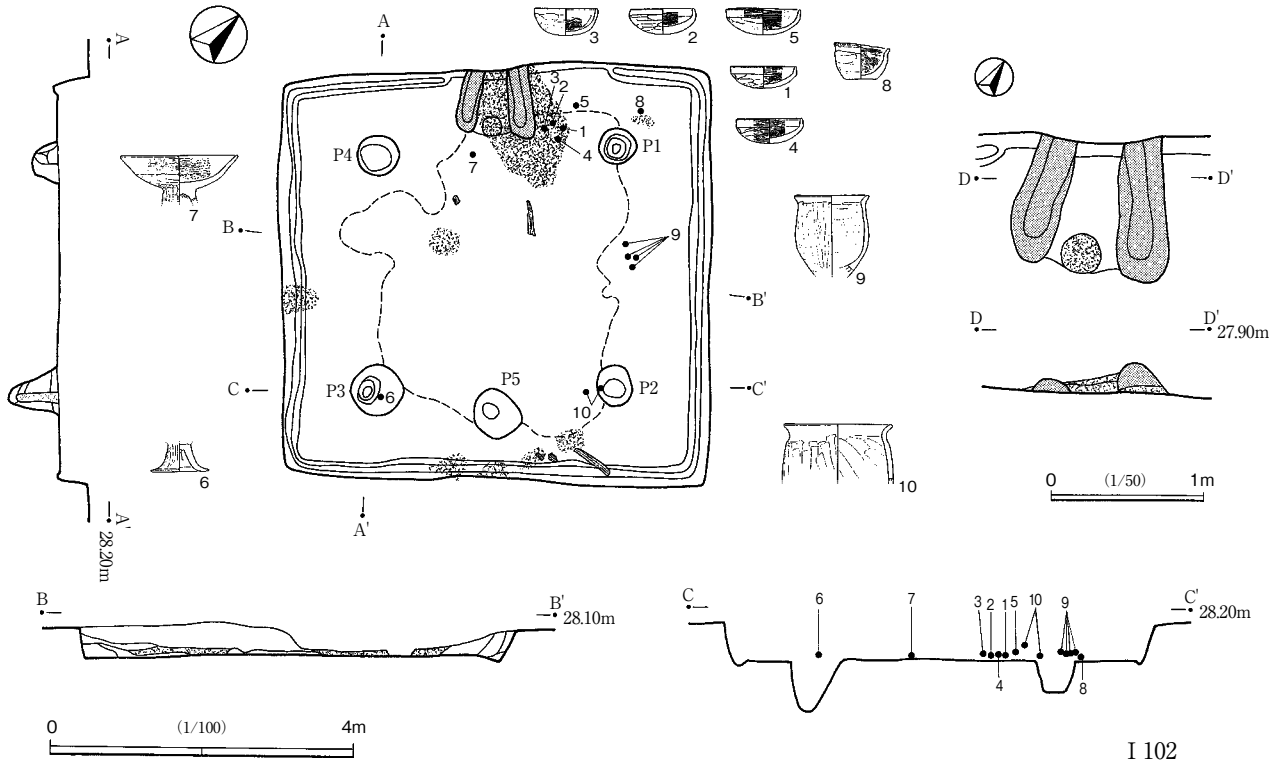


I 057

第100図　I 010・I 057 住居

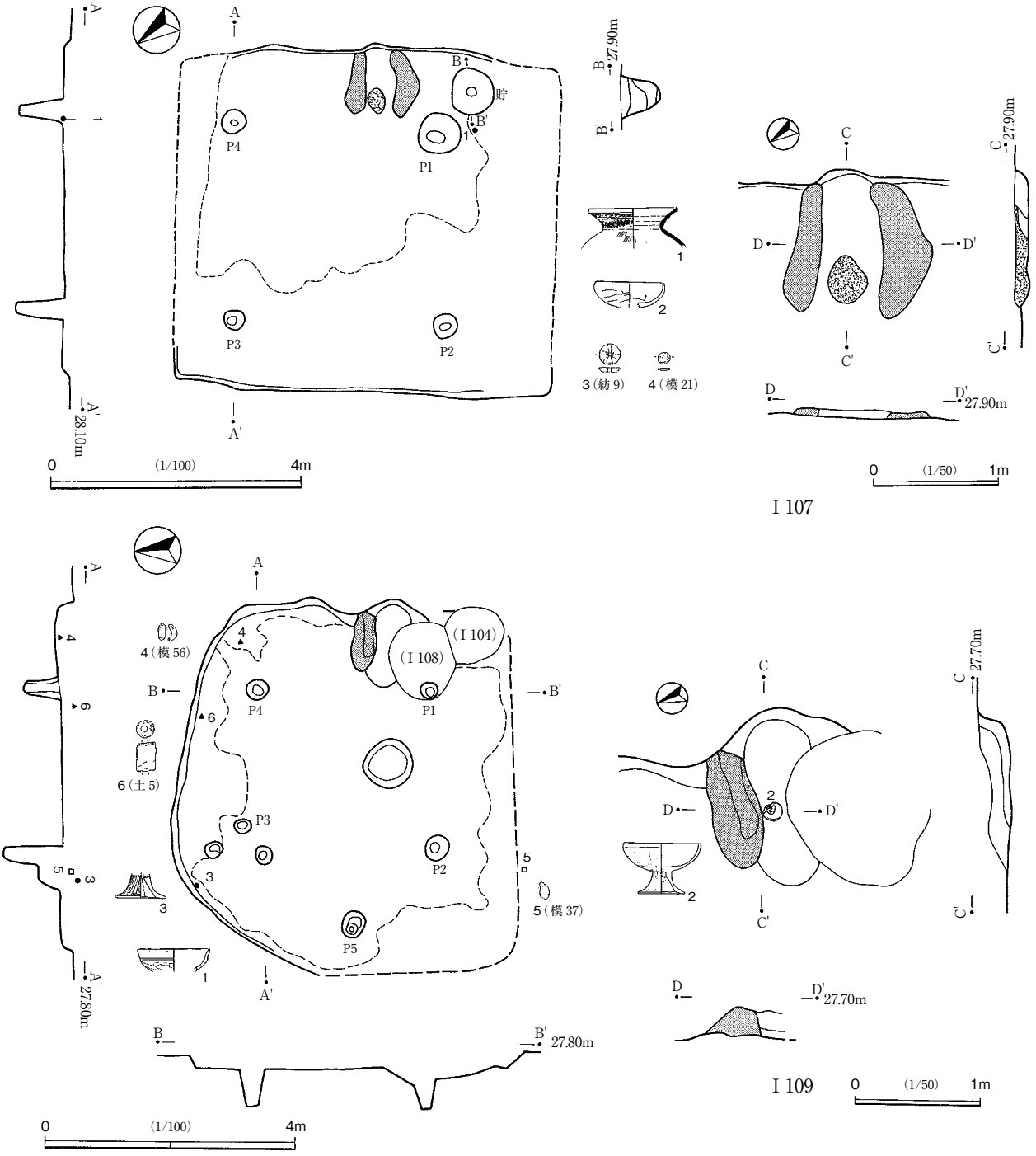


I 068



I 102

第101図　I 068・I 102 住居



第102図　I 107・I 109 住居

なお、1、4は覆土一括品である。8は軽石Aの砥石、9は粘板岩製紡錘車形石製品である。後者は重複する溝内（I 005）から出土した。

I 068（第99・101・202・203・236・247図、図版76・77・95・102）

I区中央F区寄りに位置する住居である。少なくとも4棟の住居と重複することもあって、僅かにカマドと貼床面を捉え得たにすぎないが、多量の遺物を伴う点から採りあげた。形態はとりあえず図示するが多分に推測であり、規模も同様である。カマドは北西壁に位置し、柱穴、梯子穴、貯蔵穴共に不明瞭であっ

た。踏締め面は西側半分ほどで確認された。覆土の状態は不明である。

遺物は住居床面および覆土中から出土した。１～６は坏、７は高坏、８・９は椀、10は鉢、11～18は甕である。19は甑である。この内、１・２・４・６・８・９・11・13・19は完形ないしほぼ完形、３・５・14～18は約２/３個体、10･12は半個体、７は１/３個体を復元･図示した。20は滑石製紡錘車、21は板状鉄片である。

Ｉ102（第99・101・203図、図版23・25・77）

Ｉ区北東端に位置する住居である。住居群中にあるが、近世の溝を除いては本址が新しく、遺存状態も良い。形態は方形であり、規模は長径5.1ｍ、短径5.0ｍである。カマドは北西壁中央、柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴は南東壁寄り中央にあるが（壁から80㎝）、貯蔵穴はない。踏締め面は凡そカマド焚き口から４本の柱穴・梯子穴を結ぶ内側で確認された。床面には壁下を除き焼土・炭化材粒が散布しており、焼失住居と考えられる。焼土より上はほぼ均質な暗褐色土層である。

遺物は住居床面ないし床面から覆土下層にかけて出土した。１～５は坏、６・７は高坏、８は鉢、９・10は甕である。この内、１～５・８はほぼ完形、７・９は約半個体、６・10は約１/３個体以下を復元・図示した。７の高坏を除き、床面上の遺物に完形品が多い。

Ｉ107（第99・102・204・236・241図、図版77・95・98）

Ｉ区南西F区との境界ラインに位置し、南東向きのカマドを有する珍しい例である。住居密集地にあり、遺存状態は不良である。形態は横長の長方形であり、規模は長径凡そ6.1ｍ、短径は5.3ｍである。カマドは壁際にあり、柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴は認められないが、貯蔵穴はカマド向かって右側にある。踏締め面はカマド周辺から中央に向かって確認されたが、遺存部のみの範囲というのが適当であろう。覆土の状態は不明である。

遺物は住居床面付近から僅かながら出土した。１は須恵器甕口縁部片を復元・図示した。２は約半個体強の土師器坏である。３は滑石製の紡錘車、４は滑石製鏡形模造品である。１以外は一括品である。

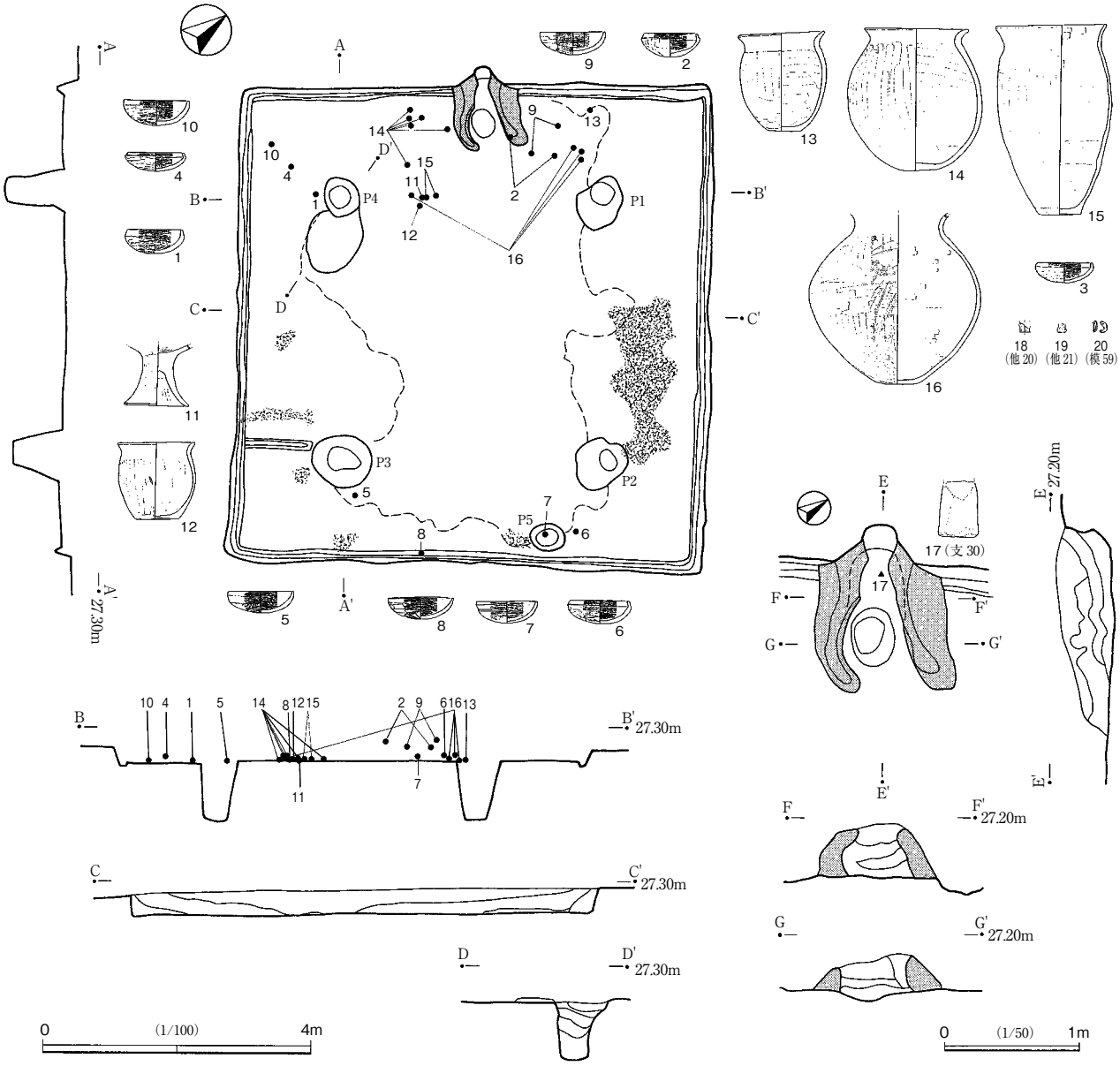
Ｉ109（第99・102・204・234・241・242図、図版94・98）

Ｉ区中央に位置する。住居密集地にあり、同じく中期の住居（Ｉ116）と重複するが本址が新しい。形態はカマドの位置･向きと西壁ラインが確実な他は不明ながら、調査時の推測ラインに従い図示しておく。規模は長径凡そ5.9ｍで、短径は不明である。カマドは東壁際にあり、柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴は中央西壁寄りにあるが、貯蔵穴は確認出来なかった。踏締め面は壁下を除きほぼ全面に及んでいたと思われる。覆土の状態は不明である。

遺物はカマド内および覆土下層中から出土した。１は坏、２は高坏、３は高坏脚部であり、この内、２はほぼ完形、３は脚部のみ、１は破片を復元・図示した。４は土製勾玉、５は緑色片岩製の勾玉形石製模造品、６は管状土錘である。なお、２はカマド焚床上に逆位で出土したもので、支脚の代用と思われる。また、１は覆土一括品である。

Ｉ119（第99・103・204・237・240・242図、図版23・77・78・95・98）

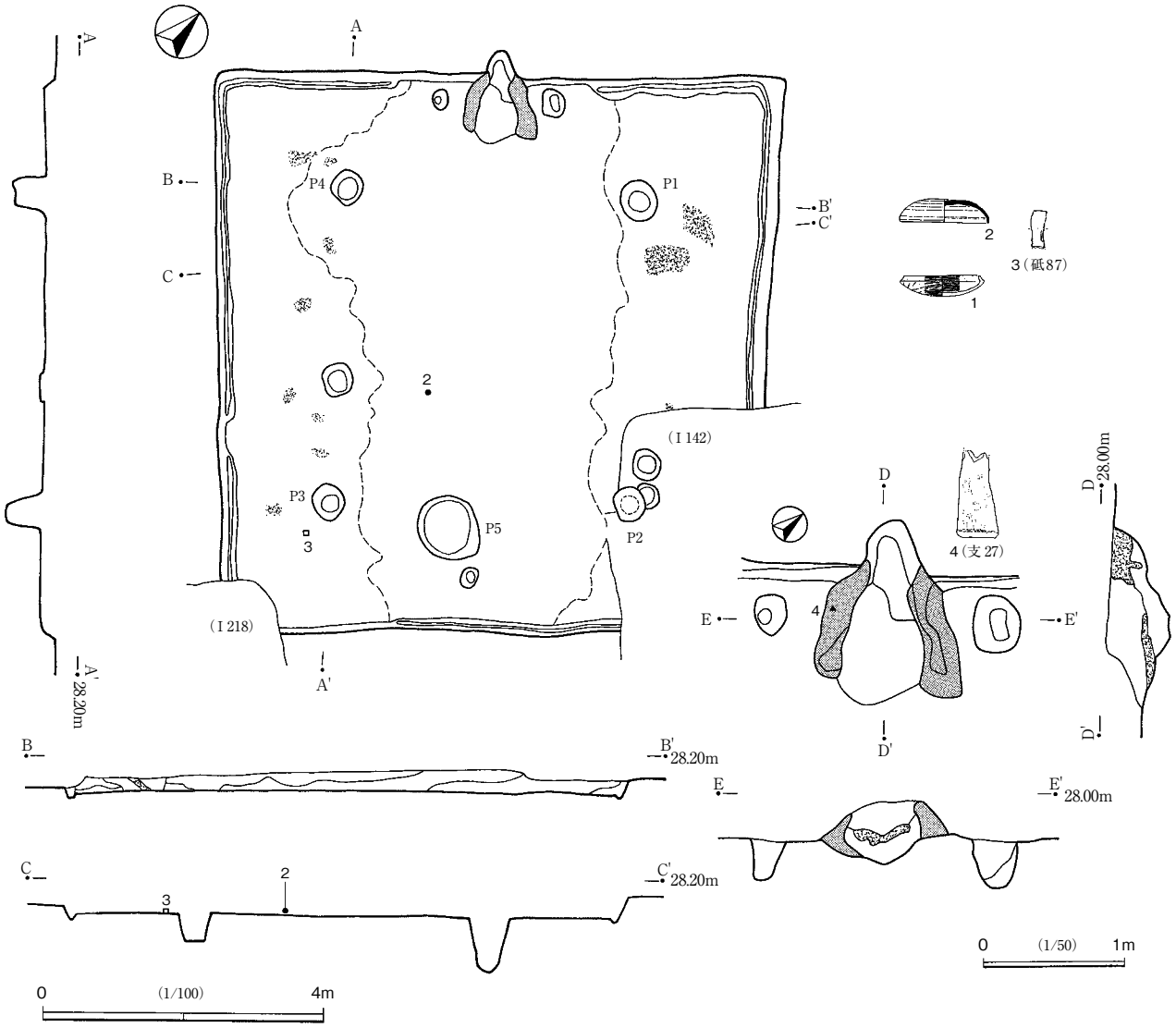
Ｉ区南西寄りに位置する。４棟の住居と重複するが遺存状態は良い。形態は方形であり、規模は長径・



第103図　I 119 住居

短径共に6.7mである。カマドは北西壁中央に位置し、柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴は南東壁際のピットが該当すると思われ、踏締め面もその先の柱穴内側からカマドへ至る範囲で認められた。その一方、貯蔵穴は確認出来なかった。覆土は凹レンズ状の堆積を示し、壁際寄りから流れ込んだ層にはロームブロック・焼土を含むという特徴がある。

遺物はカマド内および周辺・入口付近の床面から出土した。１～10は坏、11は高坏、12～16は甕である。この内、坏と12・13の小型の甕は完形ないしほぼ完形、11の高坏、14～16の甕が約半個体である。17はカマド煙道部から出土した土製支脚、18・19はミニチュア土器、20は勾玉形土製模造品である。出土位置が偏っていることと完形品が多いことなど意図的な廃棄の結果かと思われる。なお、３と18～20は一括品である。



第104図　I 121 住居

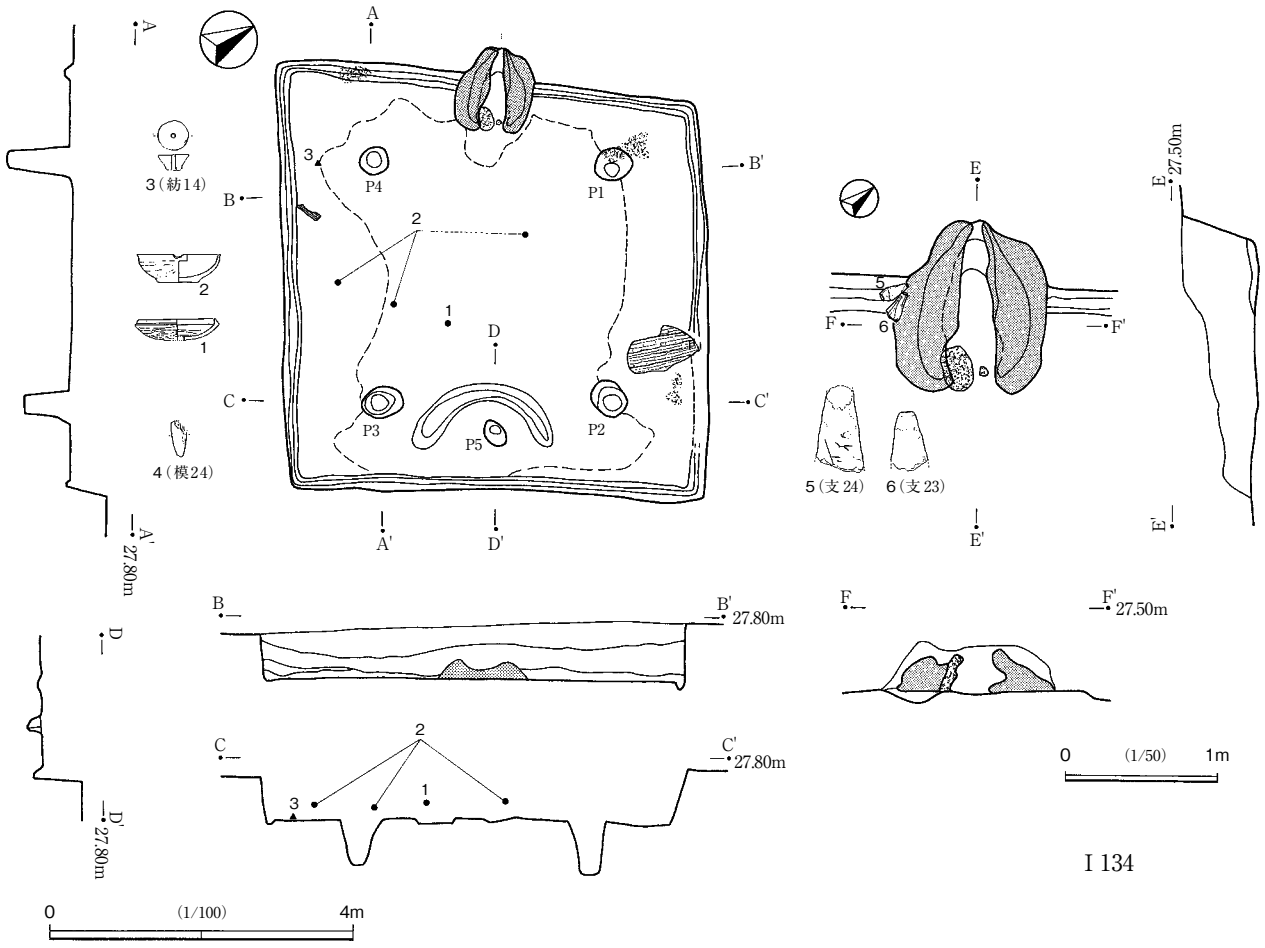
I 121（第99・104・204・228・240図、図版24・78・90）

Ⅰ区南西F区との境界に位置する。住居密集地にあり、南コーナーは奈良時代の住居（I 218）が重複し、東コーナー付近は本址が新しいにもかかわらずプランを捉えきれなかった。形態は方形であり、規模は長径・短径共に7.6mである。カマドは北西壁中央に位置し、柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴は南東壁中央壁寄り（壁から1.5m）にある。この他、カマド両脇やＰ４とＰ３の間など関連するピットも存在する。貯蔵穴はみられなかった。踏締め面は凡そ左右のピットを結ぶ南北ライン内側に認められた。覆土は凹レンズ状の堆積を示し、壁寄りを除き焼土・ロームブロックを含むという特徴がある。焼失住居であろうか。

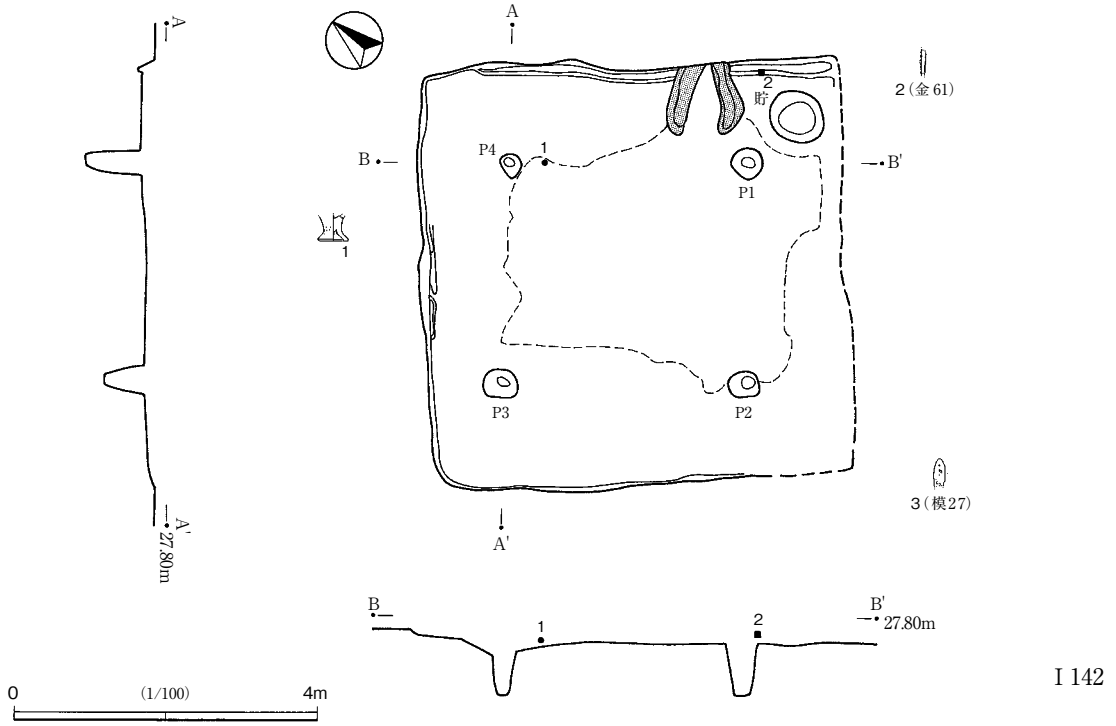
遺物はカマド、床面上・覆土内から出土した。１はほぼ完形の坏、２は約１/３個体の須恵器蓋坏を復元・図示した。３は南西床面出土の凝灰岩製砥石、４はカマド脇から出土した土製支脚である。

I 134（第99・105・205・236・239・241図、図版24・78・95・98）

Ⅰ区中央南寄りに位置する。住居群中にあるが、本址が新しくプランもほぼ捉え得た。形態は多少歪ん



I 134



I 142

第105図　I 134・I 142 住居

だ方形であり、規模は長径・短径共に5.2mである。柱穴は対応する位置に４本存在し、梯子穴は南東壁中央の壁際にあり（壁から80㎝）、それを取り囲むように半円形の周堤帯が巡っている。貯蔵穴は認められなかった。踏締め面は凡そ左右のピットを結ぶ南北ライン内側に認められたが、カマド左右には及んでいない。覆土は壁際を除く床面上に炭化材、炭化材粒を含む層があり、焼失住居の可能性がある。その上はほぼ水平に堆積する暗褐色また黒褐色土である。

遺物は向かってカマド左脇と床面および覆土内から出土した。１・２は坏、３は土製の紡錘車、４は滑石製剣形模造品、５・６は土製支脚である。この内、２は約半個体、１は約１／５個体を復元・図示した。なお、出土位置からして紡錘車は住居の廃棄時に伴うもの、４は覆土一括品である。

Ｉ142（第99・105・205・241・247図、図版24・98・102）

Ｉ区南西寄りに位置する。重複の激しい住居群中にあるが、かろうじてプランを捉え得た。形態は方形であり、規模は長径5.5m、短径5.2mである。カマドは北東壁向かって右手にあり、ハの字形に開く形態である。柱穴は対応する位置に４本存在し、梯子穴は確認出来なかった。貯蔵穴は向かってカマド右脇のコーナー部にある。踏締め面はカマド手前から４本のピットを結ぶ内側にみられた。覆土の状態は不明である。

遺物はカマド脇と柱穴脇床面等から出土した。１は土師器高台部（約半個体）、２は鉄鏃、３は滑石製剣形石製模造品である。１・２は住居廃棄時に伴う遺物、３は覆土一括品である。

Ｉ205（第99・106・205・240・247図、図版24・78・102）

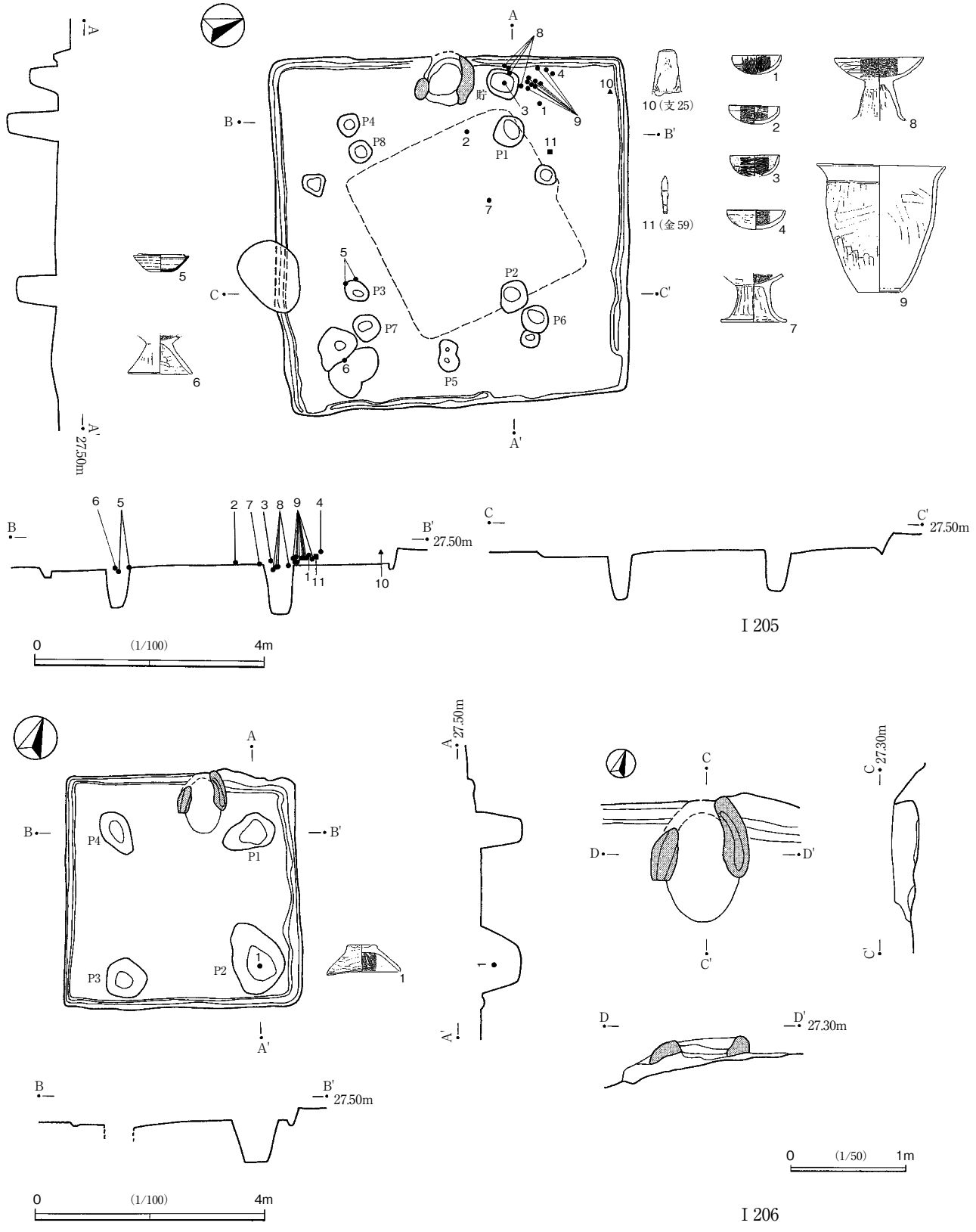
Ｉ区南西端に位置する。弥生時代以降の住居群中にあり、東側で同時期の住居（Ｉ206、本址が古い）及び、中央部で平安時代の住居と重複する。形態は方形であり、規模は長径5.9m、短径5.8mである。柱穴は対応する位置に４本存在し、そこから東方向へずれるかたちでもう１棟分の柱穴が存在する。該当するような住居が見当たらないことから建て直しとみるべきであろう。カマドは北西壁中央にあるが遺存不良で、１/50の図は省略した。梯子穴は南東側中央壁寄りに一部重なるようにあり、これも柱穴と符号するものであろう。貯蔵穴はカマド向かって右脇にある。覆土の状態は不明である。

遺物は貯蔵穴周辺および床面･覆土下位から多く出土した。１～４は坏、５は須恵器坏、６～８は高坏、９は甑である。この内、２・４・８・９はほぼ完形、１・５・６・７は約半個体、３は約１/５個体を復元・図示した。ほぼ完形の４点については、住居廃棄時に伴うものと思われる。10の土製支脚、11の鉄鏃は後世の混入ないし投棄に因るものであろう。

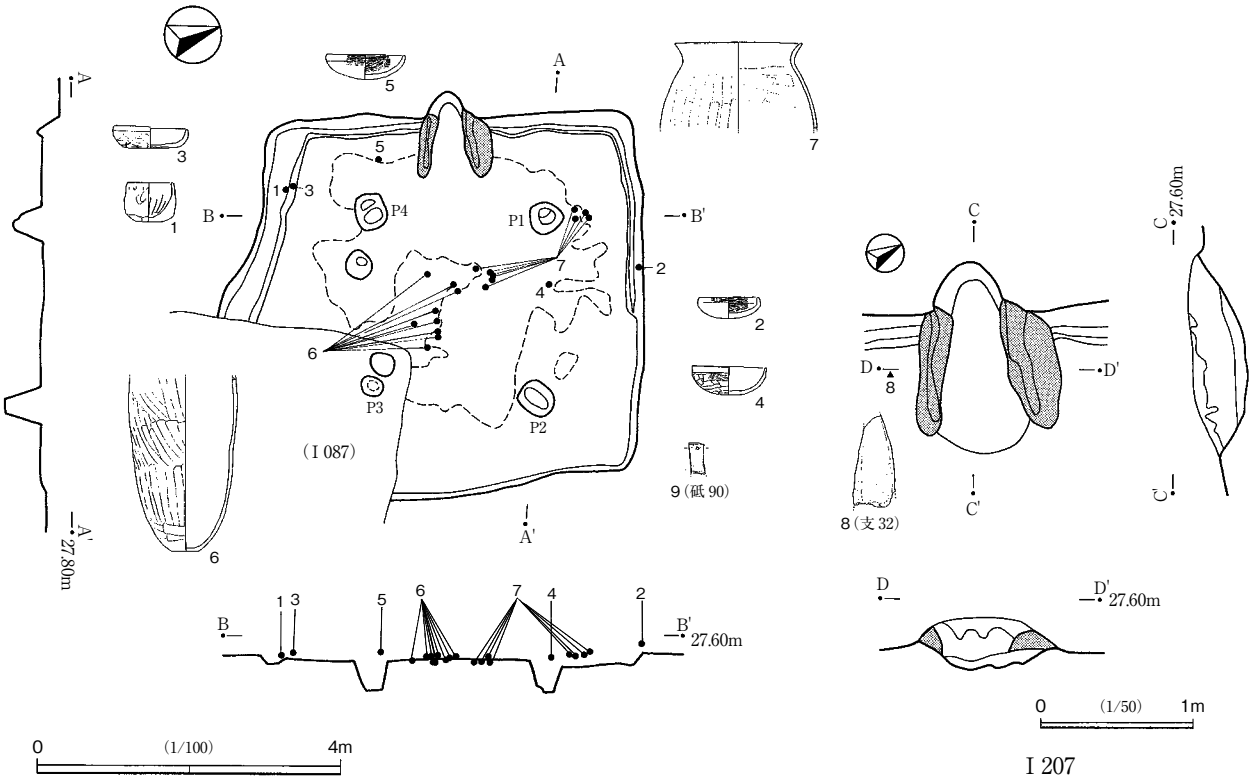
Ｉ206（第99・106・205図）

Ｉ区南西寄りに位置する。住居群中にあり、既述したＩ205と一部重複する。形態は方形であり、規模は長径・短径共に3.8mである。カマドは北壁中央向かってやや右手にある。柱穴は対応する位置に４本存在するが、住居規模と比較して径大きくしかも外側に位置するという特徴がある。梯子穴・貯蔵穴・踏締め面は確認出来なかった。覆土の状態は不明である。

遺物はＰ２内から蓋（約２/３個体）が出土した。



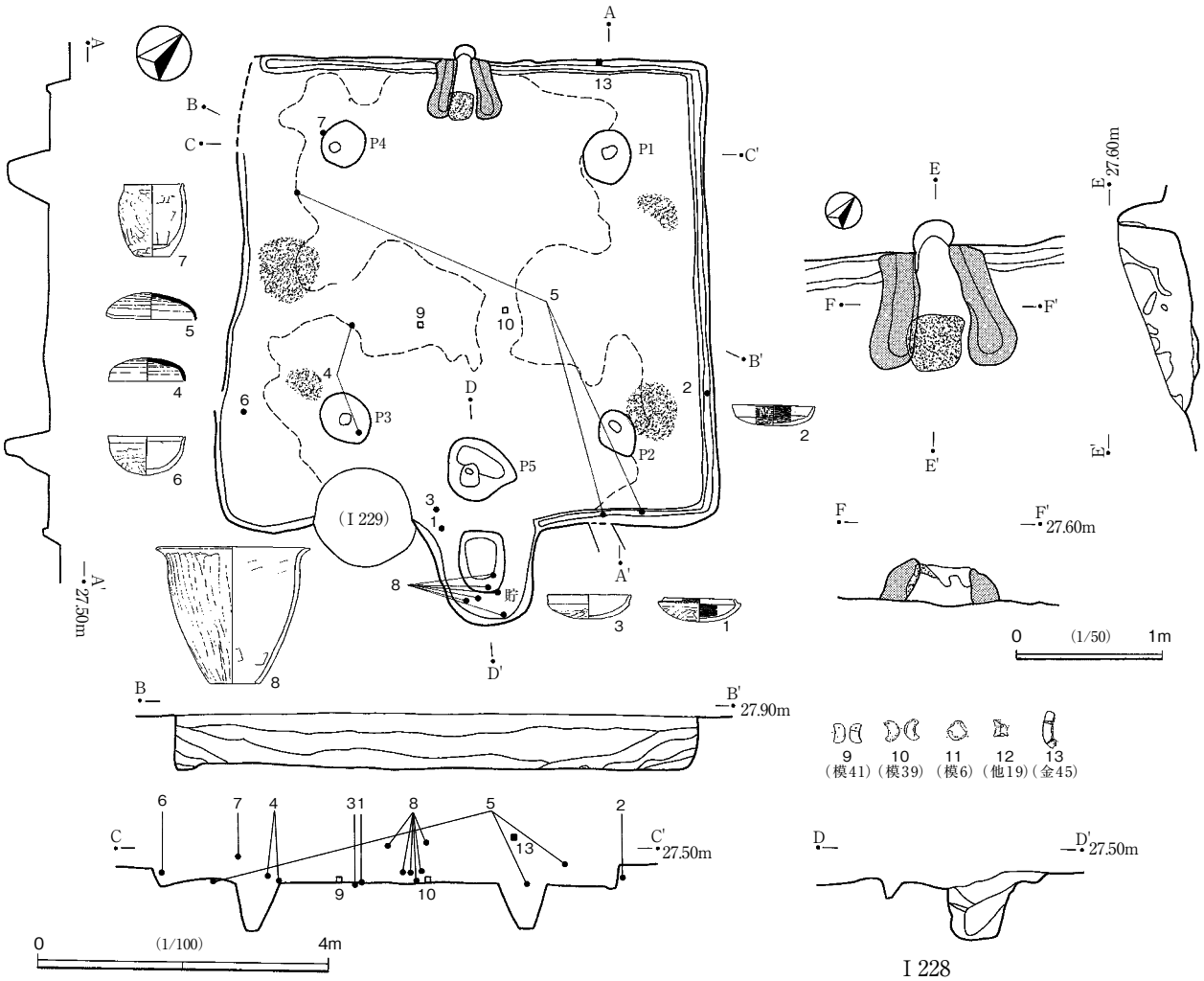
第106図　I 205・I 206 住居



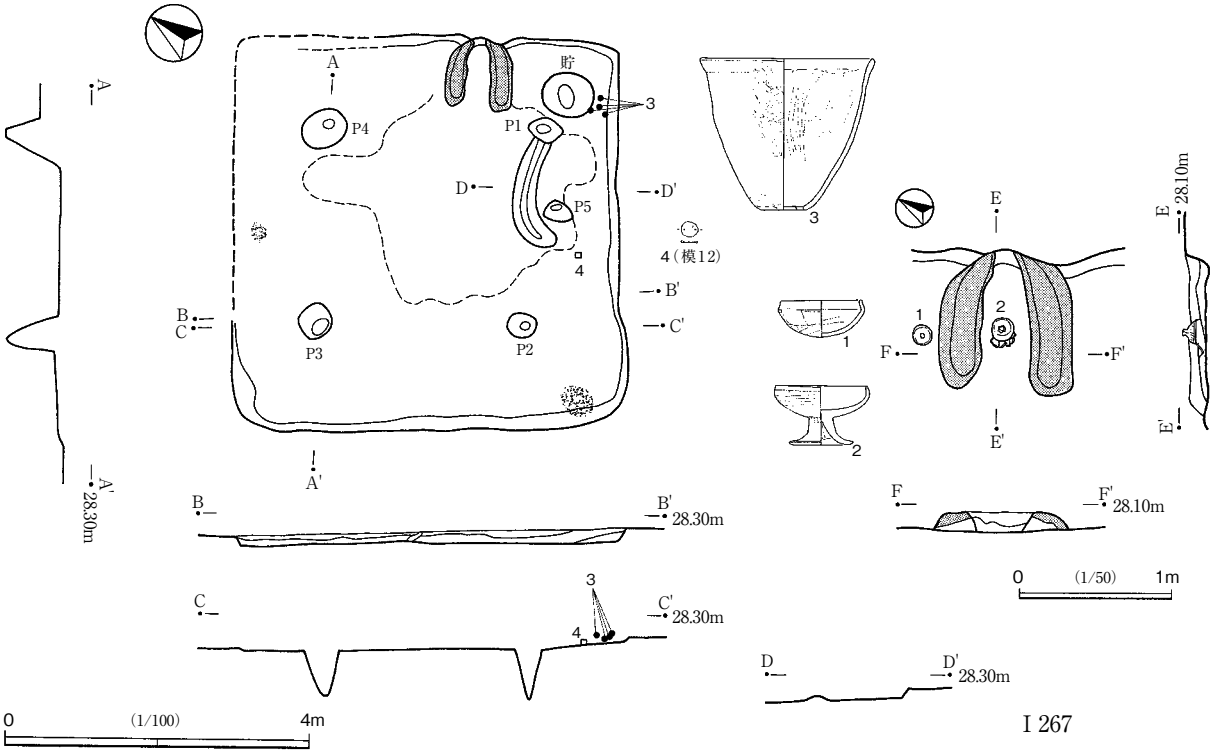
I 207

I 213

第107図　I 207・I 213 住居



I 228



I 267

第108図　I 228・I 267 住居

Ｉ207（第99・107・205・228・240図、図版78・90）

Ｉ区南西寄りに位置する。住居密集地にあるが奈良時代の（Ｉ087）住居によって南西部を欠くほかは本址が新しく比較的遺存は良い。形態は歪んだ方形であり、規模は長径4.5m、短径4.4mである。カマドは北西壁中央にあり、柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴・貯蔵穴は確認出来なかった。踏締め面はカマド手前から４本のピットを結ぶ内側にみられた。覆土の状態は不明である。

遺物は主にカマド脇と住居中央部床面から出土した。１は手捏ね土器、２～５は坏、６・７は甕、８は土製支脚である。この内、２・３・５はほぼ完形、１・６は半個体、４・７は約１/４個体以下を復元・図示した。カマド脇の支脚を除き、住居廃棄時における投棄かと思われる。９は覆土一括の凝灰岩製の砥石である。

Ｉ213（第99・107・205・245図、図版101）

Ｉ区南西F区寄りに位置する。住居群中に位置し、同じく古墳時代後期の住居ながらより新しいＩ212によって南側が損なわれている。また、西側コーナー部ではＩ214が新しいように重複するがこれはプランを捉え得なかった結果である。形態は多少歪んだ方形であり、規模は長径6.2m、短径6.0mである。カマドは壁の遺存状況の悪さもあるが北西壁中央にそれらしき焼土の痕跡が存在するに過ぎない。柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴は確認出来なかった。貯蔵穴は南コーナーにある。踏締め面は確認出来なかった。覆土の状態は不明である。

遺物は床面から出土した。１は須恵器坏、２は高坏、３は壺である。この内、２・３は２/３個体、１は約１/５個体を復元・図示した。４は直刃の鉄鎌であり、壁下の床面という状況から住居廃棄時に伴うものといえる。

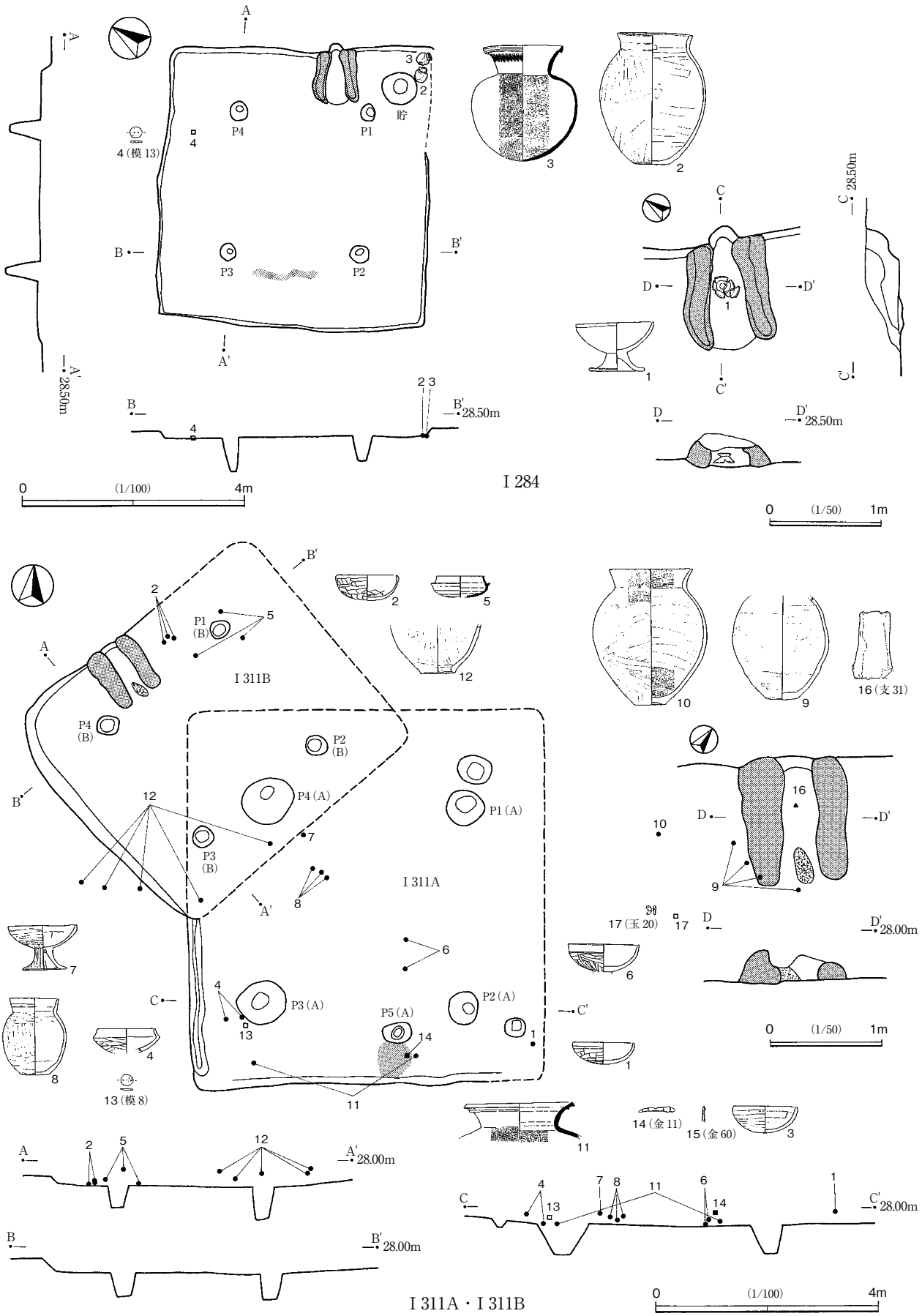
Ｉ228（第99・108・206・237・241・246図、図版25・78・95・98・101）

Ｉ区中央やや南西寄りに位置する。住居密集地に位置するわりには比較的遺存が良い。形態は貯蔵穴が外に張り出した方形であり、規模は長径6.2m、短径6.0mである。カマドは北西壁中央にあり、ハの字状の形態を呈する。柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴は中央壁寄りにあり、貯蔵穴とは約0.8m南東に隣接する。貯蔵穴は壁から1.3m張り出した半円形のなかにある。踏締め面はほぼ左右のピットを結ぶ南北ライン内側に認められた。覆土は壁下に褐色土、それから壁際に暗褐色土、次ぎに住居中央部を焼土・山砂を含む暗褐色土、最後に暗褐色土という順で水平に堆積するという状況である。

遺物は床面また覆土内から出土した。１～３は坏、４・５は須恵器蓋坏、６は椀、７は鉢、８は甑である。この内、３はほぼ完形、７は完形、５・８は約２/３個体、１・２・４・６は約半個体を復元・図示した。９・10は滑石製勾玉形模造品、11は緑色片岩製鏡形模造品、12は高坏を模したかと思われるミニチュアながら、形状的には小型の鼓形土製品と称したほうが適当かもしれない。13は鉄製鋤先破損品である。なお、11・12・13は覆土一括品である。

Ｉ267（第99・108・206・241図、図版25・79・98）

Ｉ区南東寄りに位置する。住居密集地にあるが本址が最も新しいためかプランは捉え得た。形態は方形であり、規模は長径5.0m、短径4.9mである。カマドは北東壁向かって右手、柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴は通常と異なりカマドの対面ではなく、カマド右手のＰ１とＰ２の間の壁寄りにあり、前面に周堤帯を付属する。貯蔵穴はカマド向かって右手にあり、カマドと貯蔵穴と入口が一隅に集中する



第109図　I 284・ I 311A・ I 311B 住居

こととなる。そのためか、踏締め面は梯子穴からカマド、そして住居中央部に渡る範囲で確認された。覆土は暗褐色土がほぼ水平に堆積する状況であった。

遺物はカマド一帯また床面・覆土内から出土した。１は坏、２は高坏、３は甑である。何れもほぼ完形ないしそれに準ずるものである。４は滑石製鏡形模造品である。なお、２は支脚の代用として使用されたもの、１はカマド脇床面、３は貯蔵穴脇床面辺り、４は梯子穴付近床面より出土したもので、共に出土状況からして住居廃棄時の所産であろう。

Ⅰ 284（第99・109・206・241図、図版25・79・98）

Ⅰ区南東に位置する。弥生時代の住居内にあり、結果として確認面が下がり、壁の遺存は不良である。形態は方形であり、規模は長径・短径共に4.9mである。カマドは北東壁向かって右側にあり、柱穴は対応する位置に４本存在するが、小さな掘形を有するものである。梯子穴はみられず、貯蔵穴カマド右手のコーナー部にある。踏締め面は明瞭でなく、覆土の状態は不明である。

遺物は主にカマド内および貯蔵穴脇床面上から出土した。１は高坏、２は甕、３は須恵器甕である。何れもほぼ完形でその出土状況からして廃棄時の状況を物語るものであろう。４は北壁下床面出土の滑石製鏡形石製模造品である。

Ⅰ311A（第99・109・206・207・241・244・247図、図版25・79・98・100・102）

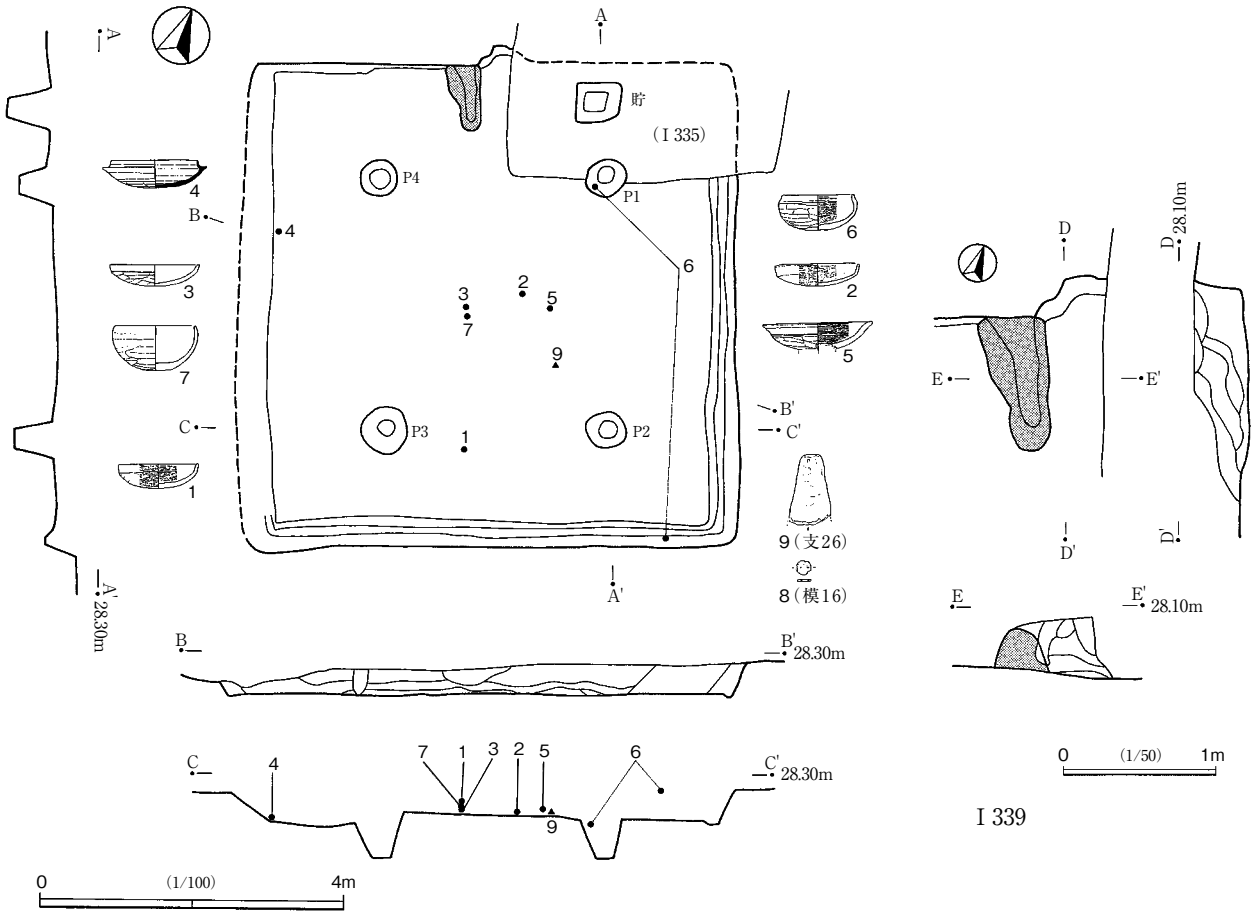
Ⅰ区北東に位置する。同時代の住居３棟が重複し、その関係は古い順からⅠ311A→Ⅰ311B→Ⅰ102となる。形態は方形と推測され、規模は推定で長径・短径共に6.5mである。カマドはⅠ102掘削時に壊されたと思われる。柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴は南壁中央壁寄り（壁から90㎝）にあるが、貯蔵穴は不明であった。踏締め面はみられず、覆土の状態は不明である。

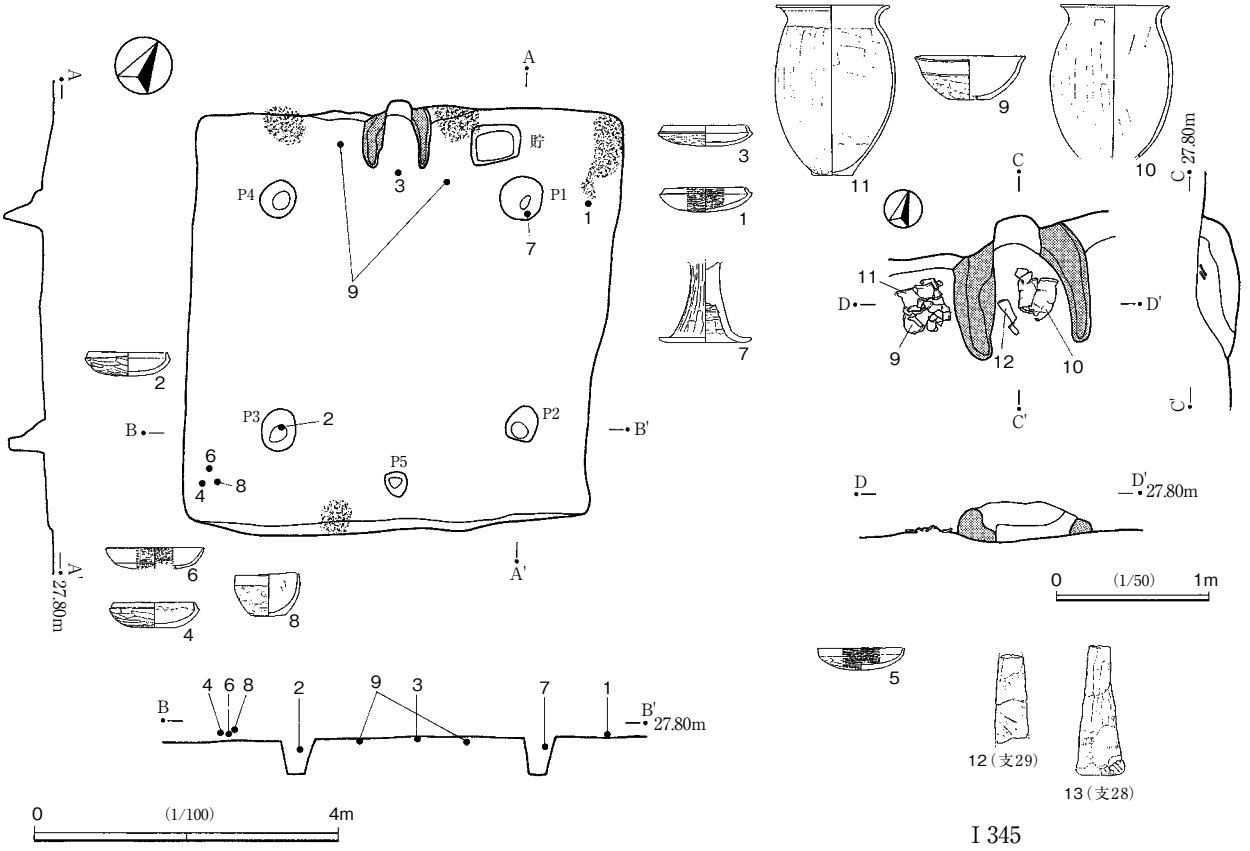
遺物は床面および覆土中から出土した。Ⅰ311Bとは床面もほぼ等しく約１/３ほど重なっているが、本址に所属するのは、１・４・６・８・11・13・14であり、７については境界ラインにある。１・３・４は坏、６・７は高坏、８は甕、11は須恵器甕、この内、３は完形、７・８はほぼ完形、１・４は約２/３個体、６は半個体、11・12は約１/５個体を復元・図示した。13は緑色片岩製鏡形模造品、14は刀子、15は鉄鏃である。なお、３・15は覆土一括品である。

Ⅰ311B（第99・109・206・207・230・240図、図版25・26・79・91・97）

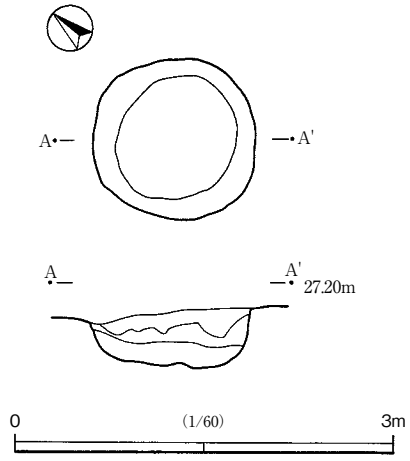
Ⅰ区北東に位置する。Ⅰ311Aで既述した住居３棟の内中間の時期に当たる。形態は方形ないし横長の長方形と推測され、規模は推定で長径5.3m、短径4.8mである。カマドは北西壁向かってやや左側にあり、柱穴は対応する位置に４本存在する。踏締め面は明瞭でなく、覆土の状態は不明である。

遺物はカマド一帯と床面および覆土中から出土した。Ⅰ311Aと同様、本址に所属するのは、２・５・９・10・12・16・17である。２は坏、５は須恵器坏、９・10は甕、12は甑である。この内、10はほぼ完形、２・９は半個体強、５は約１/３個体、12は底部である。16は土製支脚である。カマド左脇の土器とカマド内の支脚などは廃棄時に伴う遺物であろう。なお、12は一部住居外と接合する。17は滑石製勾玉である。





第110図　I 339・I 345 住居



第111図　Ⅰ363 土坑

Ⅰ339（第99・110・207・240・241図、図版26・80・98）

Ⅰ区北東に位置する。弥生時代以降の住居密集地にあり、遺存状態は不良である。形態は方形と推測され、規模は長径・短径共に5.9mである。カマドは北壁中央にあり（Ⅰ335により半分欠損）、柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴はみられず、貯蔵穴はカマド向かって右手にある。踏締め面は確認出来なかった。覆土は壁寄り、また、中央床面付近にロームブロックを含むという特徴があり、その上は暗褐色土の水平堆積となる。

遺物は主に住居中央の床面上から出土した。１～３は坏、４は須恵器坏、５は高坏、６・７は椀である。この内、２・３・４・６はほぼ完形、７は約２/３個体、１・５は約半個体である。覆土中央部にロームブロックを含む点からしてこれらの遺物は９も含め廃棄後間もない投棄の結果かと思われる。８は滑石製鏡形模造品で覆土一括品、９は土製支脚欠損品である。

Ⅰ345（第99・110・207・208・240図、図版26・80）

Ⅰ区北東に位置する。弥生時代以降の住居密集地にあり、とりわけ東側はプランを把み得なかった。形態は方形と推測され、規模は推定で長径5.5m、短径5.3mである。カマドは北西壁中央にあり、柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴は南東壁中央壁寄り（壁から約60㎝）にあり、貯蔵穴はカマド向かって右手にある。踏締め面は確認出来ず、覆土の状態は不明である。

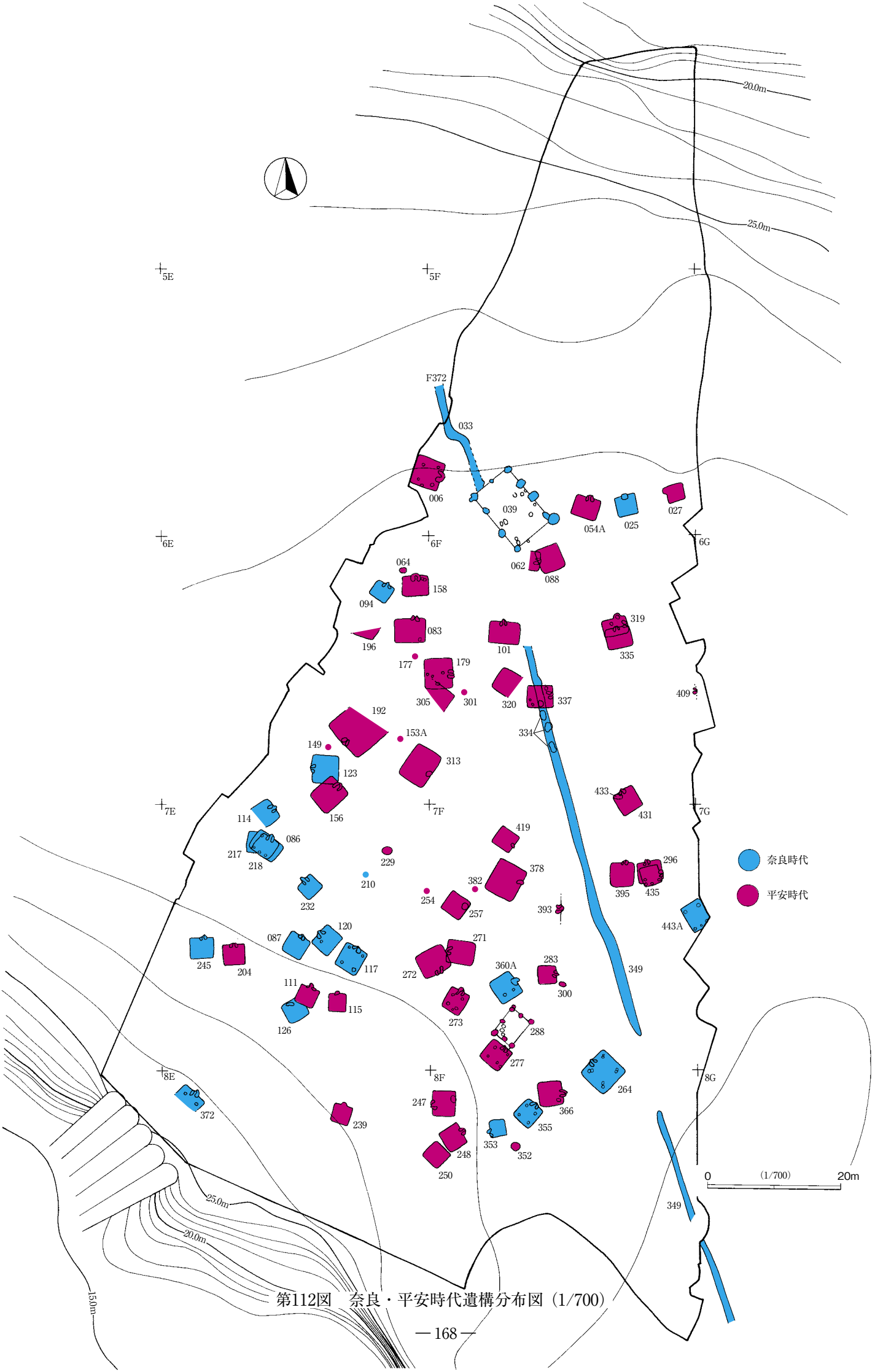
遺物は主にカマド一帯と住居南西コーナー付近床面辺りから出土した。１～６は坏、７は高坏、８は鉢、９は椀、10・11は甕である。この内、１～５、８・10・11はほぼ完形、９は約２/３個体、６・７は１/３個体以下を復元・図示した。12・13は土製支脚であり、12は破損品、13は完形である。総じて完形に近い遺物が多く、カマド一帯の遺物は住居遺棄に伴うもの、それ以外はその後の投棄も含む所産と思われる。なお、５・11は覆土一括品である。

３　土坑

土坑のうち、伴出遺物から古墳時代後期の可能性のあるものをここで報告する。

Ⅰ363（第111図）

Ⅰ区中央南端に位置する。形態はほぼ円形であり、規模は長径・短径共に1.3m、深さは確認面から約0.5mである。覆土は自然堆積と思われる褐色土また黒褐色土である。



第112図　奈良・平安時代遺構分布図（1/700）

第７節　奈良・平安時代

１　概要

Ｉ区で検出された奈良・平安時代の住居は、奈良時代が19棟、平安時代が46棟で、合計65棟となる。これに遺物のみが確認された場所もあることとて、その実数としては若干の増加があるかもしれない。これに掘立柱建物２棟および土坑６基が加わり、古墳時代中期に次ぐ遺構数といえる。住居は調査区域内北側と南端を除く範囲にみられるが、奈良時代ではとりわけその南側に、また、平安時代では大体粗密なく分布する。なお、奈良時代には南北方向に分割するように浅い溝が走っている。

出土した遺物は土器がやはり大半を占めるが、器種はより限定されて坏、皿、甕、甑にほぼ固定されるようになる。また、金属製品や砥石は前代と比べて多少の増加が認められる。土師質の須恵器が普及するのもこの段階以降である。

なお、個別に扱った遺構（住居）は全体の約38％であり、残りのものについては前代と同様、分割図及びＣＤ内に収めたデータを参照されたい。また遺構の抽出率については次に示すとおりである。

住居跡25/65　　土坑６／６　　掘立柱建物２／２　　溝２／２　（分母は種別遺構数、分子は掲載数）

２　住居跡

Ｉ025（第112・113・209・228・246・247図、図版90・101・102）

Ｉ区北側に位置する住居である。奈良時代に属する。古墳時代中期（Ｉ054B）の住居および近世以降の溝と重複する。形態は方形であり、規模は長径3.2m、短径3.1mである。カマドは北壁中央に位置するが、焼土域というような状況であった。柱穴らしきピットはみられないが、カマド右脇と南壁コーナー部に小ピットが存在する。梯子穴・貯蔵穴共になく、踏締め面は西側壁寄りと南側縁近くを除いて認められた。覆土の状態は不明である。

遺物は主に住居床面上から出土した。１は坏、２は甕、３は鉄斧、４は凝灰岩製砥石である。この内、１・２共に１／５程度の破片を復元・図示した。５は覆土一括の種別不明の鉄製品である。

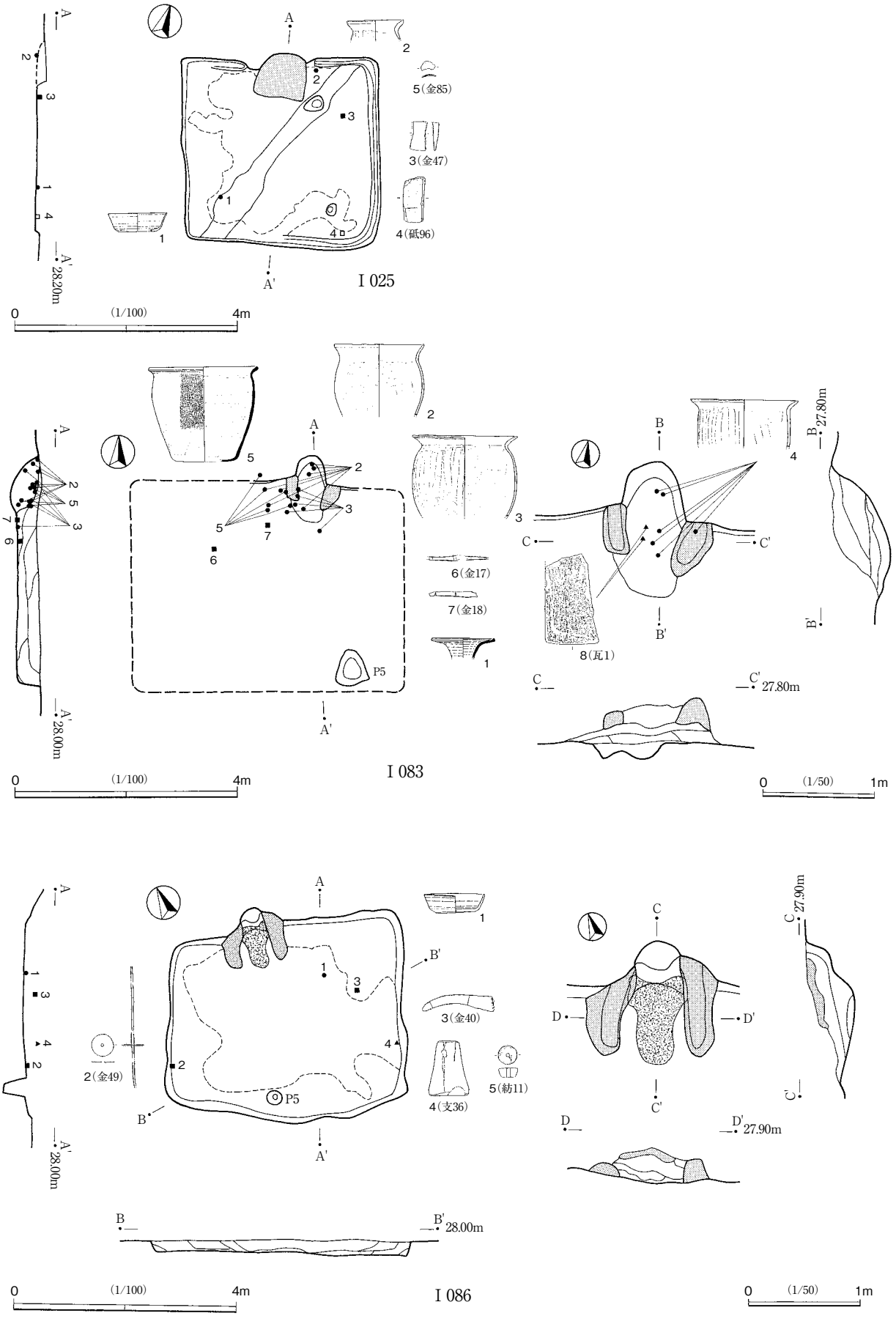
Ｉ083（第112・113・211・237・244図、図版96・100）

Ｉ区中央北西寄りに位置する住居である。平安時代に属する。住居が密集しているという場所ではないが、プランは明瞭に捉えられなかった。形態は横長の長方形かと推測されるが確証はない。そうだとした場合の規模は長径5.0m、短径3.8mである。カマドは北壁中央向かってやや右手に位置し、貧弱な袖部に張出し煙道が付属する。柱穴は確認されなかったが、南東コーナー付近のピットはあるいは梯子穴に相当する可能性がある。貯蔵穴は存在しない。踏締め面は不明瞭であった。覆土は凹レンズ状の堆積を示し、焼土を含むという特徴がある。

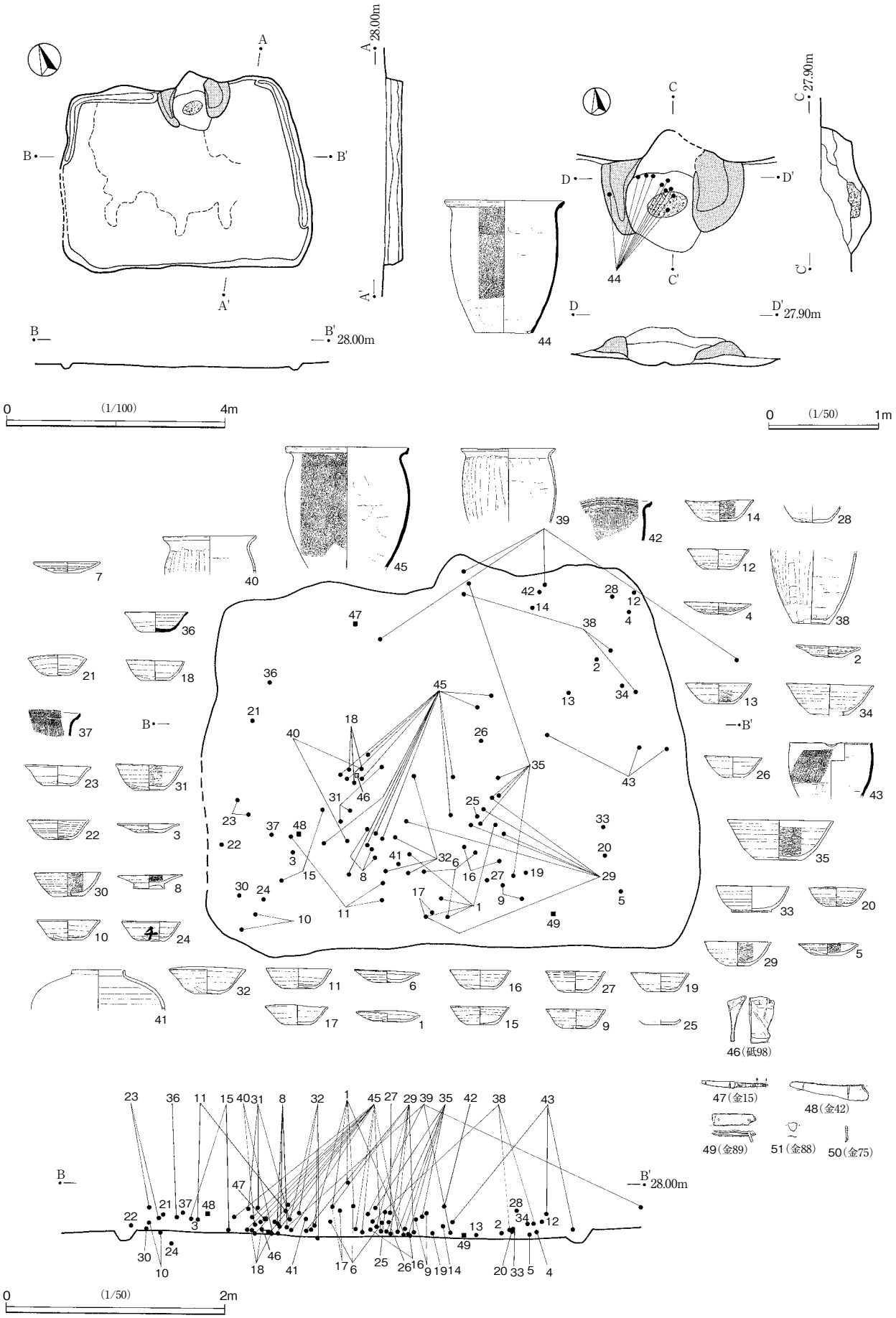
遺物はカマド一帯からまとまって出土した。１は須恵器壺、２・３・４は甕、５は土師質須恵器の甕であり、この内、５が約２／３個体の他は１／４個体～１／５個体程度の破片を復元・図示した。なお、カマド内の瓦は支脚の代用であろう。６・７は刀子、８は平瓦片である。なお、瓦は支脚の代用であろう。

Ｉ086（第112・113・211・236・240・245・246図、図版81・95・97・101）

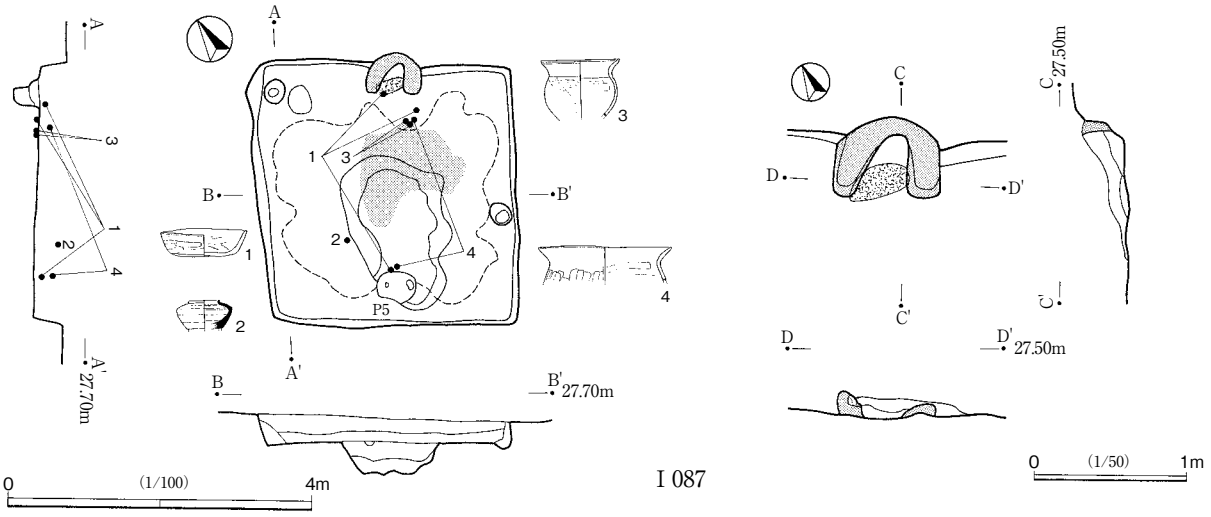
Ｉ区北東部に位置する。奈良時代に属する。同時期の住居と重複するが本址が新しい。形態は歪んだ横

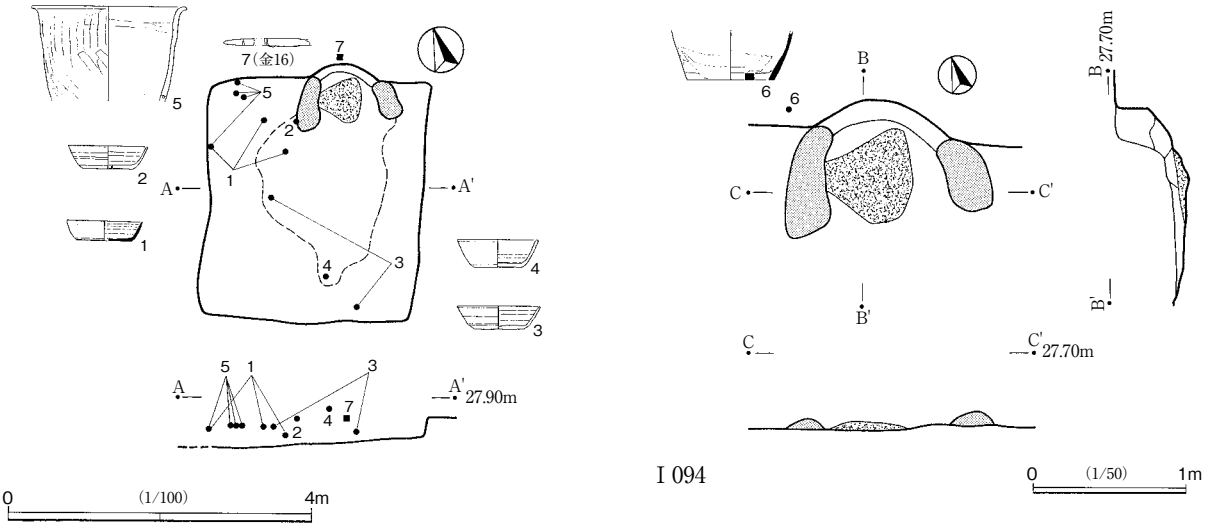


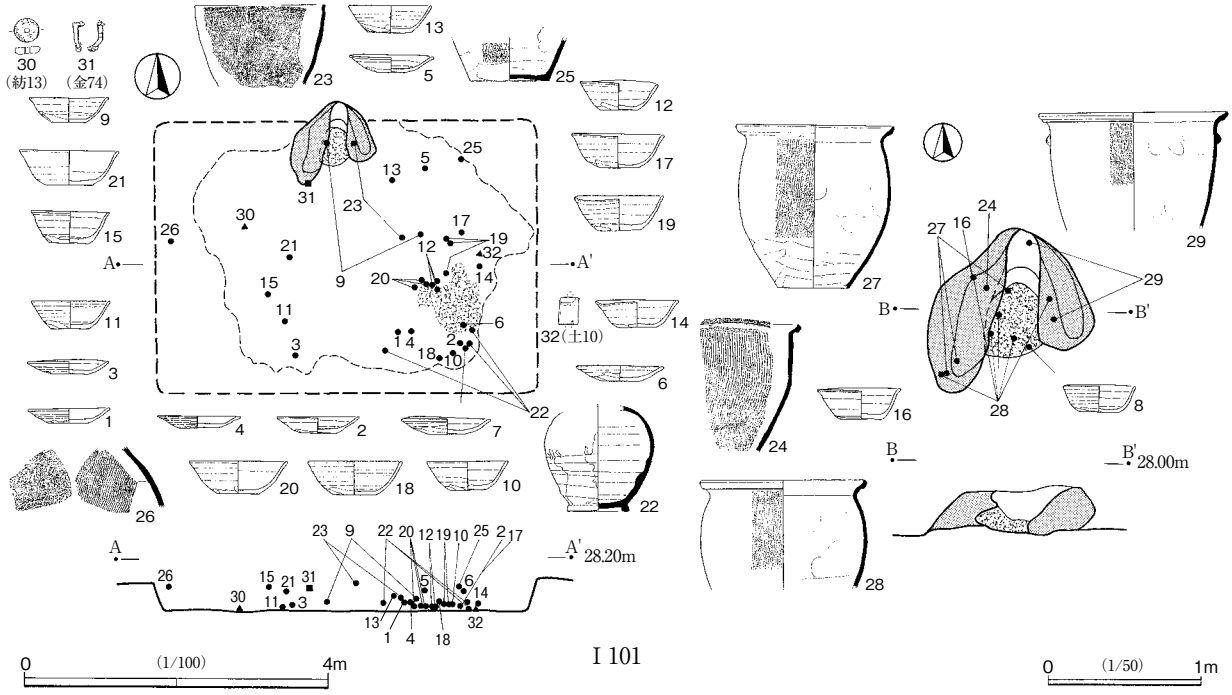
第113図　I 025・I 083・I 086 住居



第114図　I 054A 住居







第115図　I 087・I 094・I 101 住居

長の長方形であり、規模は長径4.1m、短径3.5mである。カマドは北東壁中央向かってやや左手に位置し、煙道は張出しとなる。柱穴・貯蔵穴共にみられず、梯子穴が南西壁中央壁際にある。踏締め面は西側を除き中央部で確認された。覆土は壁寄りにまず褐色土が流れ込み、次ぎに焼土・粘土を含む暗褐色土が凹レンズ状に堆積する。

遺物は床面また覆土中から出土した。１はほぼ完形の坏、２は鉄製紡錘車、３は鉄鎌、４は土製支脚、５は滑石製紡錘車である。

I 054A（第112・114・209・210・228・244・245・247図、図版81・90・100～102）

Ⅰ区北東部に位置する。平安時代に属する。古墳時代の住居群中にあるがプランは捉え得た。形態は横長の長方形であり、規模は長径4.0m、短径3.0mである。カマドは北壁中央むかってやや右手に位置し、煙道は多少張出しとなる。柱穴・梯子穴・貯蔵穴共にみられず、踏締め面は北西壁際から中央部にかけて確認された。覆土は水平堆積の暗褐色土である。

遺物はカマド内および床面・覆土内から大量に出土した。１～７は皿、８は高台付皿、９～30は坏、31・32は多少大形の坏、33・41は灰釉陶器高台付坏と無頸壺、34・35は大形の坏、36は須恵器坏、38～40は甕、37・42・45は土師質須恵器甕、43は須恵器鉢、44は須恵器甑と思われる。この内、完形ないしほぼ完形は１・３・５・９～13・15・18・20～24・26・29・30・32であり、７・25・27・28・34・38～41・44が１/４個体以下、他は半個体前後を復元・図示した。46は凝灰岩製の砥石、47は刀子、48は直刃鉄鎌、49は小札状鉄製厚板を２枚重ねたもので、片方の穿孔部は鋲止めされている。50は鉄釘、51は板状鉄製品である。なお、50・51は一括品である。

I 087（第112・115・211図、図版81）

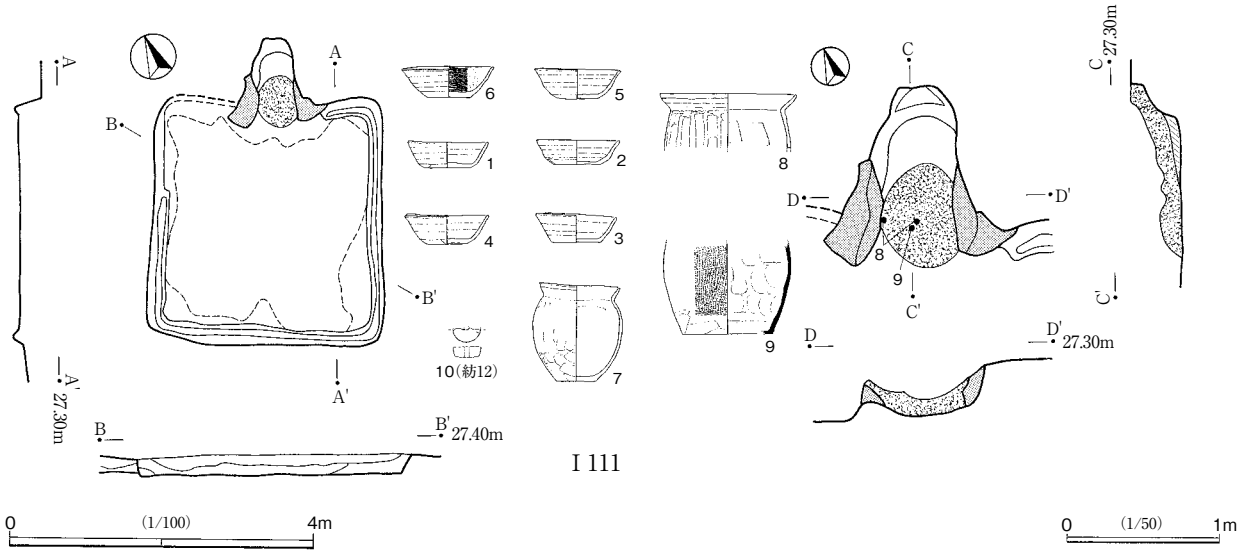
Ⅰ区南西部に位置する。奈良時代に属する。数棟の住居と重複するがプランは明確に捉え得た。形態は多少歪んだ長方形であり、規模は長径3.4m、短径3.2mである。カマドは北東壁中央に位置し、小形かつ短い袖部を有するものである。柱穴は規則的でなく、梯子穴を除く２本についても確証はない。梯子穴は南西壁中央壁際（壁から40㎝）にあるが、貯蔵穴は存在しない。踏締め面は梯子穴から中央部を広く含む範囲で認められた。覆土は水平に堆積する暗褐色土であるが、下層には焼土・炭化材粒が含まれる。なお、梯子穴先の中央部には土坑状の落込みがあったが、覆土は人為堆積と思われ、恐らく埋め戻した後に貼床としたのだろう（上に粘土面）。

遺物は床面また覆土中から出土した。１は坏、２は須恵器短頸壺、３・４は甕である。この内、１はほぼ完形、２・３は約１/３個体弱、４は破片を復元・図示した。

I 094（第112・115・212・244図、図版100）

Ⅰ区中央北西寄りに位置する。奈良時代に属する。住居密集地にあり、プランは多分に推定である。形態は縦長の長方形かと思われ、規模は推定で長径3.3m、短径2.9mである。カマドは北壁向かって右手中央に位置し、半円形を呈する。柱穴・梯子穴・貯蔵穴共に存在しない。踏締め面はカマドから中央部に至る範囲で確認された。覆土の状態は不明である。

遺物は覆土中から出土した。１は須恵器坏、２～４は坏、５・６は甑である。この内、３が約半個体の他は何れもそれ以下の破片を復元・図示した。７は刀子である。



第116図　I 111・I 120・I 126・I 247 住居

Ⅰ101（第112・115・212・213・234・236・247図、図版82・94・95・102）

Ⅰ区中央やや北側に位置する。平安時代に属する。住居密集地にあり、プランは推定線である。形態は横長の長方形かと思われ、規模は推定で長径5.0m、短径3.6mである。カマドは北壁中央にあり、張出し煙道を有し、袖部は左右不均衡で断面からすると損壊の結果とも思われる。柱穴・梯子穴・貯蔵穴は存在しないと思われる。踏締め面はカマドから中央部一帯に広く及んでいる。覆土の状態は不明である。

遺物はカマド内、床面また覆土中から出土した。１～７は皿、８～21は坏、22は須恵器壺、23は土師質須恵器鉢、24・25・28は土師質須恵器甕、26は須恵器甕胴部片、27・29は土師質須恵器甑である。この内、１～５・７～10・12・16・17は完形ないしほぼ完形、６・11・13・14・19は約２/３個体、15・18・20～23は約半個体、24～29は１/４個体以下を復元・図示した。30は滑石製紡錘車、31は鉄釘である。32は管状土錘である。住居南東床面に焼土域があり、これを焼失住居とすると住居廃棄に伴い一括遺棄された遺物群の可能性がある。

Ⅰ111（第112・116・213・236図、図版27・82・83・95）

Ⅰ区南西に位置する小型住居である。平安時代に属する。住居群中にあり、同時期の住居（Ⅰ126）と重複するが本址が新しい。形態は多少縦長の方形であり、規模は長径2.8m、短径2.6mである。カマドは北東壁中央にあり、張出し煙道というよりカマドそのものが半分程壁外にある。柱穴・梯子穴・貯蔵穴は存在しない。踏締め面は壁際を除き確認された。覆土はほぼ水平堆積の黒褐色土また褐色土である。

遺物はカマド内および覆土中から出土した。１～６は坏、７・８は甕、９は土師質須恵器甕（甑）である。この内、１～７は完形ないしほぼ完形、８・９は大破片を復元・図示した。10は滑石製紡錘車半個体である。なお、８・９はカマドに伴うセットの可能性が高い。

Ⅰ120（第112・116・214図、図版83）

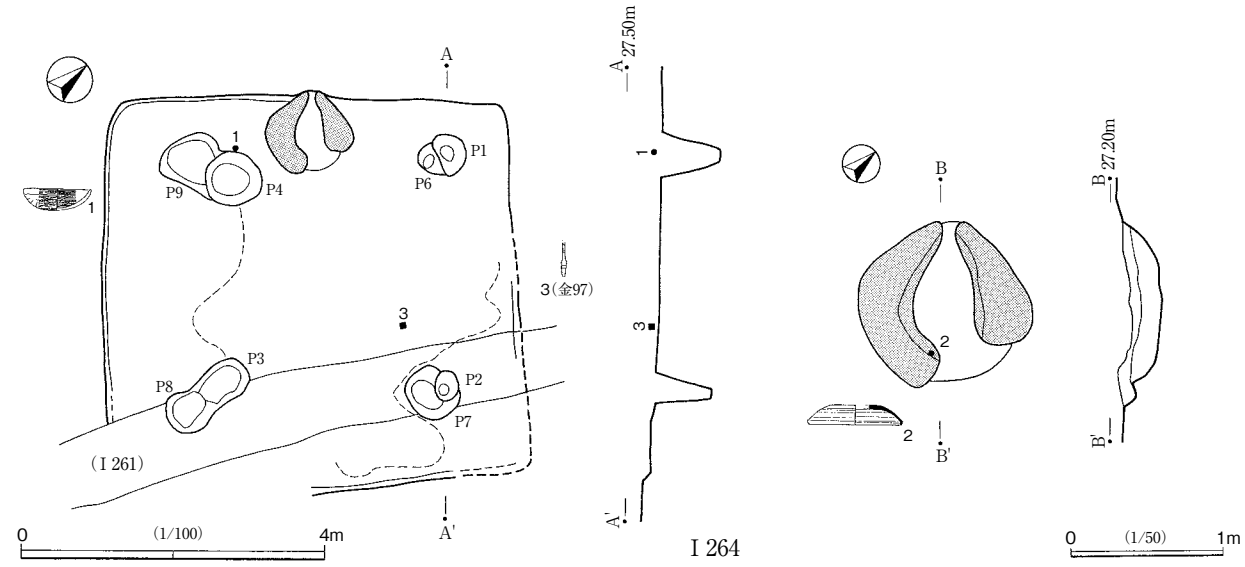
Ⅰ区南西に位置する。奈良時代に属する。住居群中にあり、南側プランは推測である。形態は方形であり、規模は長径3.8m、短径3.2mである。カマドは北西壁中央にあり遺存状況は不良である。明瞭な柱穴はみられず、ピットはカマド手前の１本のみである。梯子穴・貯蔵穴は存在しない。踏締め面は壁際を除き確認された。覆土の状態は不明である。

遺物は床面および覆土中から出土した。１・２は坏、３は須恵器坏、４は高台付椀である。この内、１～３は２/３ないし半個体、４は１/５個体以下を復元・図示した。３を除き覆土一括品である。

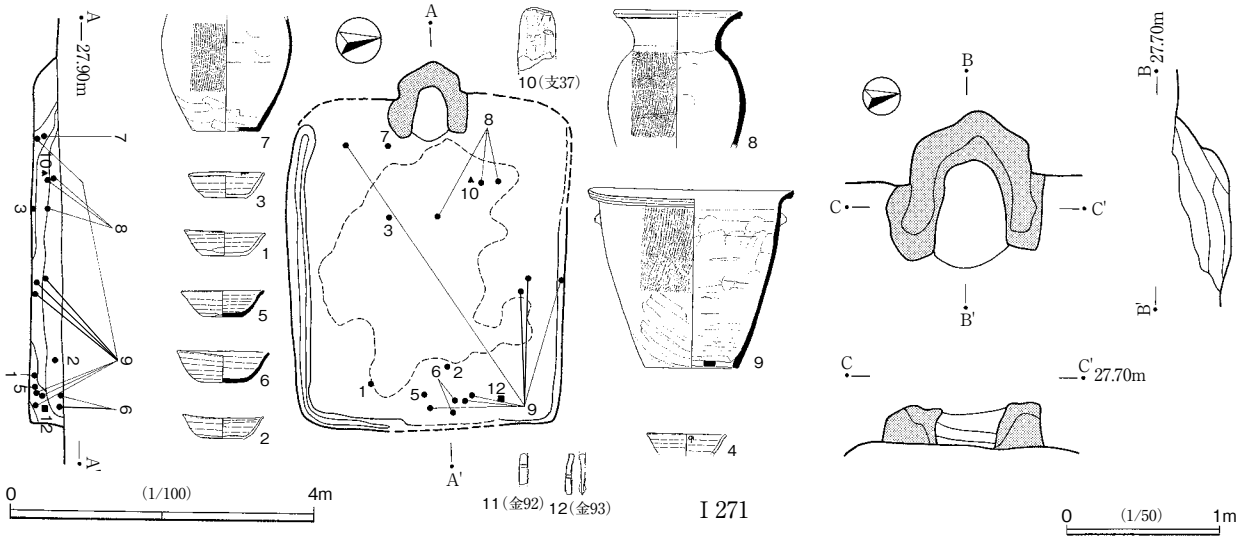
Ⅰ126（第112・116・214図）

Ⅰ区南西に位置する小型住居である。奈良時代に属する。同時期の住居（Ⅰ111）と重複するが、本址が古い。また、近世以降の溝によって中央部が寸断される。形態は方形であり、規模は長径3.3m、短径3.1mである。カマドは北西壁中央にあり遺存状況は不良である。柱穴・梯子穴・貯蔵穴は存在しない。踏締め面はカマドから中央部にかけて確認された。覆土の状態は不明である。

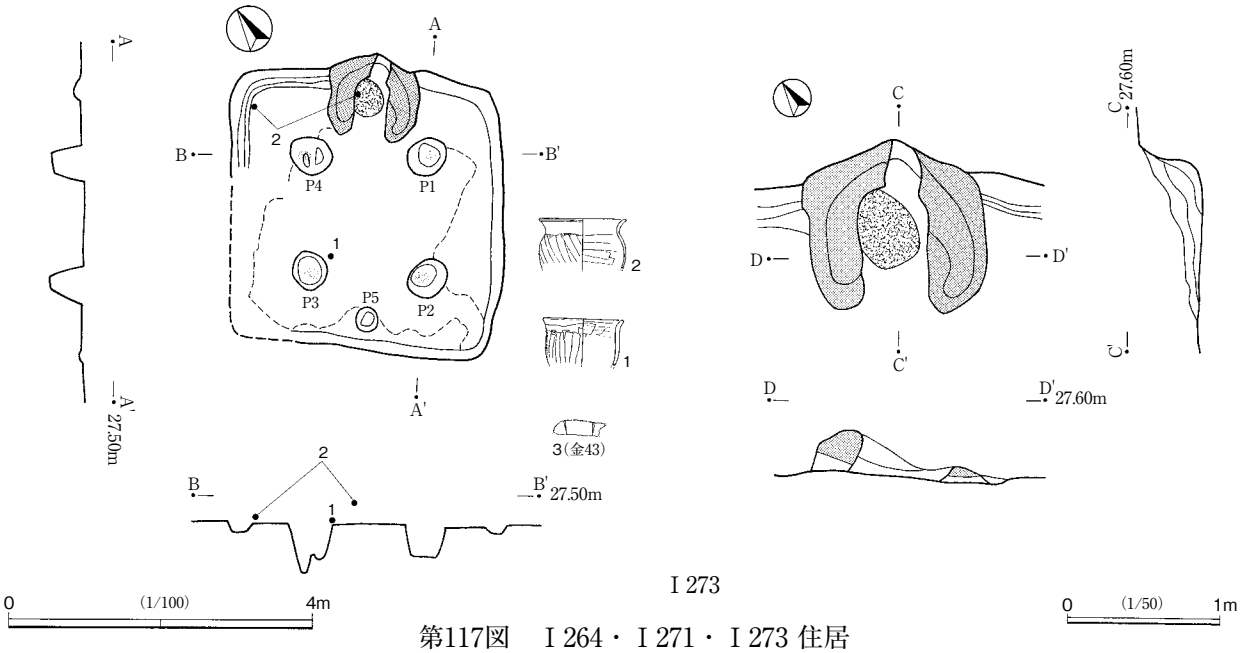
遺物は覆土中から出土した。１は約半個体の坏である。



I 264



I 271



I 273

第117図　I 264・I 271・I 273 住居

I 247（第112・116・215・247図、図版27・84・102）

Ⅰ区南側に位置する。平安時代に属する。住居群中にあり遺存状態は不良である。形態は方形と思われ、規模は推定で長径4.1m、短径3.8mである。カマドは西壁中央にあるが上部を削平されている。柱穴・梯子穴・貯蔵穴は存在しない。踏締め面はみられない。覆土は壁寄りに焼土・炭化材粒を含んでおり、焼失住居と思われる。

遺物はカマド内および床面･覆土中から出土した。１は坏、２は大形の坏、３～５は須恵器坏、６は甕、７は甑である。この内、５はほぼ完形、１・３・４は約２/３個体、２・６・７は１/３個体以下を復元・図示した。住居廃棄時の投棄に因るのであろうか。８は船底状をした種別不明の鉄製品である。なお、７の甑はカマドに伴う遺物と考えられる。

I 264（第112・117・215・248図、図版27・103）

Ⅰ区南東に位置する。奈良時代に属する。住居群内にあり近世以降の溝と重複しており遺存状態は不良である。形態は方形であり、規模は長径5.3m、短径5.1mである。カマドは北西壁中央にあり、柱穴は対応する位置に建て替えを含み８本存在する。梯子穴は見出せず、貯蔵穴は存在しない。踏締め面は中央部で確認されたが検出面が床面付近ということもあり、その境界は不明瞭であった。

遺物はカマド内および床面付近から出土した。１は坏約２/３個体、２は須恵器蓋坏約１/５個体を復元･図示した。３は刺突具である。

I 271（第112・117・215・216・240・248図、図版27・84・103）

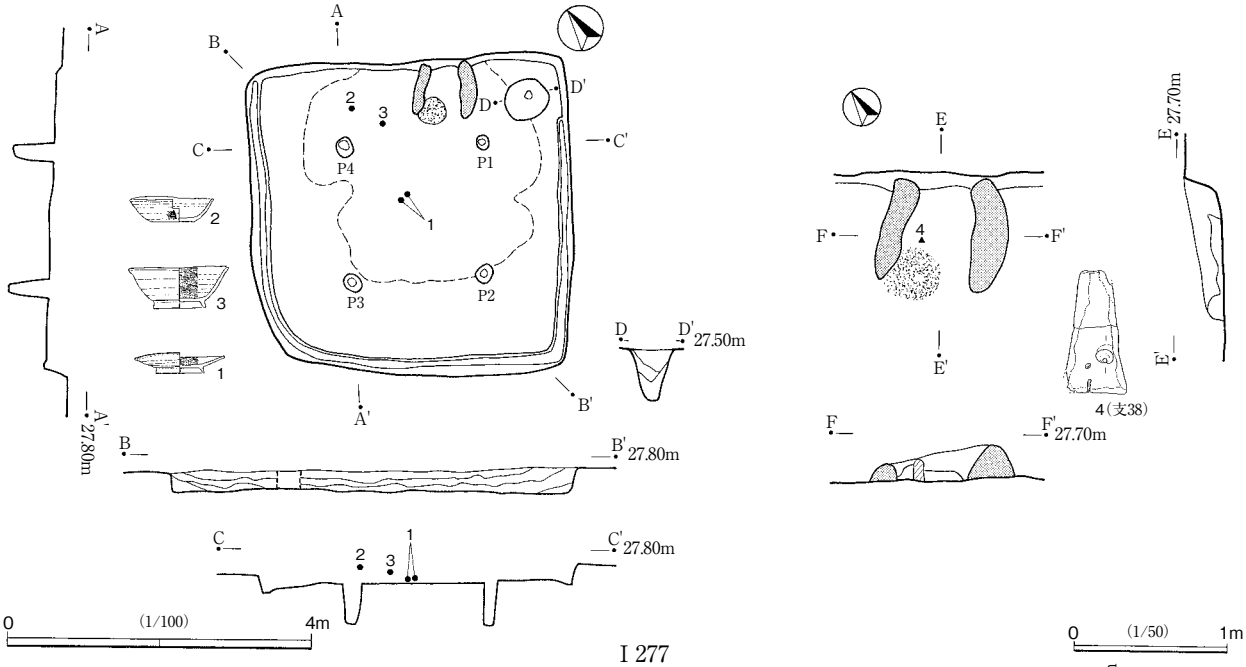
Ⅰ区中央南寄りに位置する。平安時代に属する。住居群内にあるが比較的遺存状態は良好である。形態は縦長の長方形であり、規模は長径4.2m、短径3.3mである。カマドは西壁中央にあり、約半分ほど壁外に張り出している。柱穴・梯子穴・貯蔵穴は存在しない。踏締め面は中央部で確認された。覆土は凹レンズ状の堆積を示し、上から２番目の層には僅かに焼土・炭粒を含む。

遺物は覆土内から出土した。１～４は坏、５・６は須恵器坏、７・８は土師質須恵器甕、９は須恵器の甑である。この内、１・３・６はほぼ完形、２は約２/３個体、５・９は約半個体、それ以外は約１/３個体以下を復元・図示した。10は土製支脚である。11は種別不明の板状鉄製品、12は工具先端かと思われる鉄製品である。廃屋内への投棄の結果であろうか。

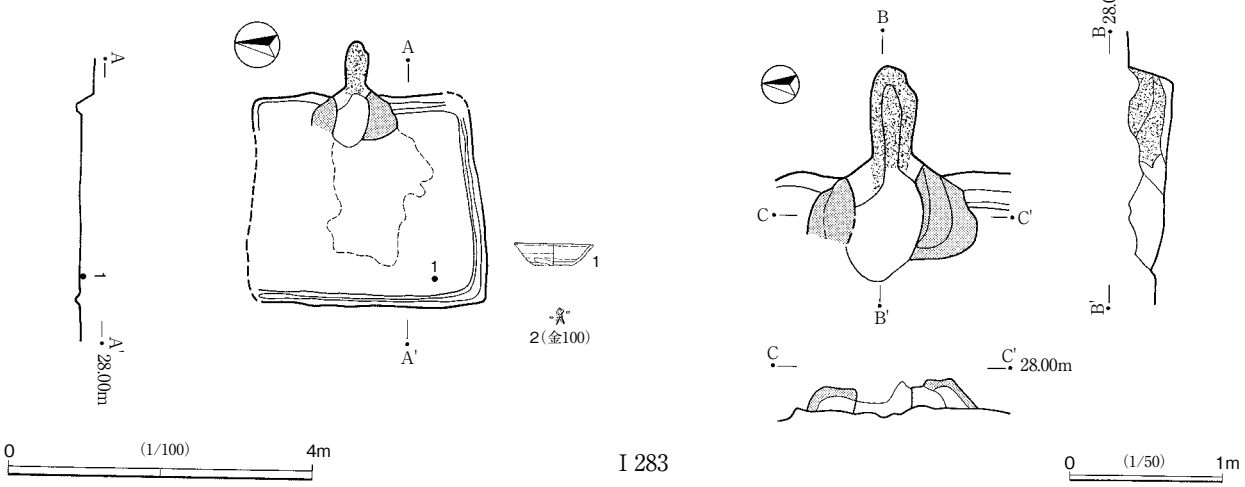
I 273（第112・117・216・245図、図版101）

Ⅰ区中央南寄りに位置する小型住居である。平安時代に属する。壁の遺存不良ながらプランは捉え得た。形態は方形であり、規模は長径3.3m、短径3.2mである。カマドは北東壁中央にあり、多少壁外に張り出している。柱穴は対応する位置に４本存在し、柱穴痕も明瞭であった。梯子穴は南西壁中央壁際（壁から約40㎝）にあり、貯蔵穴は存在しない。踏締め面は壁際を除く範囲に及んでいる。覆土の状態は不明である。以上、本址は小型ながらカマド・柱穴・梯子穴を併せ持つ例と言うことができる。

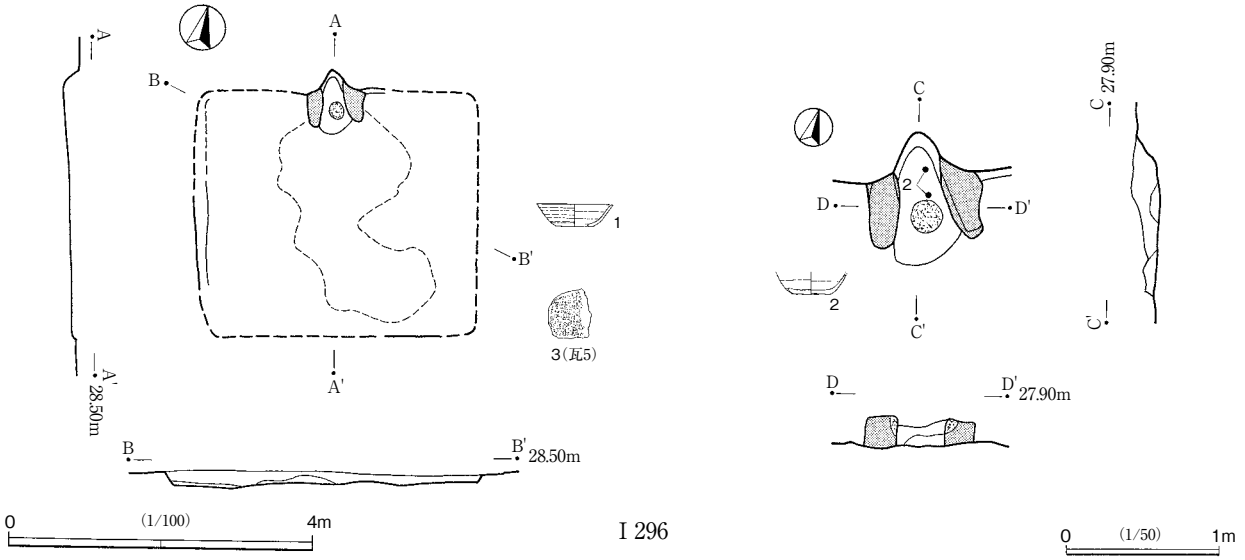
遺物は覆土内から出土した。１・２は甕約１/４個体を復元・図示した。３は直刃鉄鎌破損品（覆土一括品）である。



I 277



I 283



I 296

第118図　I 277・I 283・I 296 住居

Ⅰ277（第112・118・216・240図、図版27・84）

Ⅰ区南寄りに位置する。平安時代に属する。溝を除いて重複のない住居である。形態は方形であり、規模は長径3.8m、短径3.7mである。カマドは北東壁中央向かってやや右手にあるが、住居規模を差し引いても小規模である。柱穴は４本対応する位置にあるが、径細く、果たしてこれで上屋を支え得たか疑問もある。梯子穴・貯蔵穴は存在しない。踏締め面はカマド周辺一帯から凡そ柱穴間内部で確認された。覆土は緩い凹レンズ状を呈し、ほぼ自然堆積と思われる。

遺物はカマド内及び床面･覆土内から出土した。１は高台付皿、２は坏、３は高台付椀である。この内、２はほぼ完形、３は完形、１は２/３個体である。４はカマド内から出土した土製支脚である。

Ⅰ283（第112・118・216・248図、図版28・84・103）

Ⅰ区中央やや南東寄りに位置する小形住居である。平安時代に属する。西側（弥生時代住居）を除いて重複のない住居ながら壁の遺存は悪い。掘込みそのものが浅かったとみるべきであろう。形態は方形であり、規模は長径2.6m、短径2.4mである。カマドは東壁中央にあり、煙道は壁外に大きく延びる。袖部は表面のみ粘土で覆ったものであった。柱穴・梯子穴・貯蔵穴は存在しない。踏締め面はカマドから住居中央部にかけて確認された。覆土の状態は不明である。

遺物は床面・覆土内から出土した。１は坏でほぼ完形である。２は鉄製丸頭鋲である。この他に図示しなかったが羽口片かとおもわれる遺物が覆土内より出土している。

Ⅰ296（第112・118・216・237図、図版28・96）

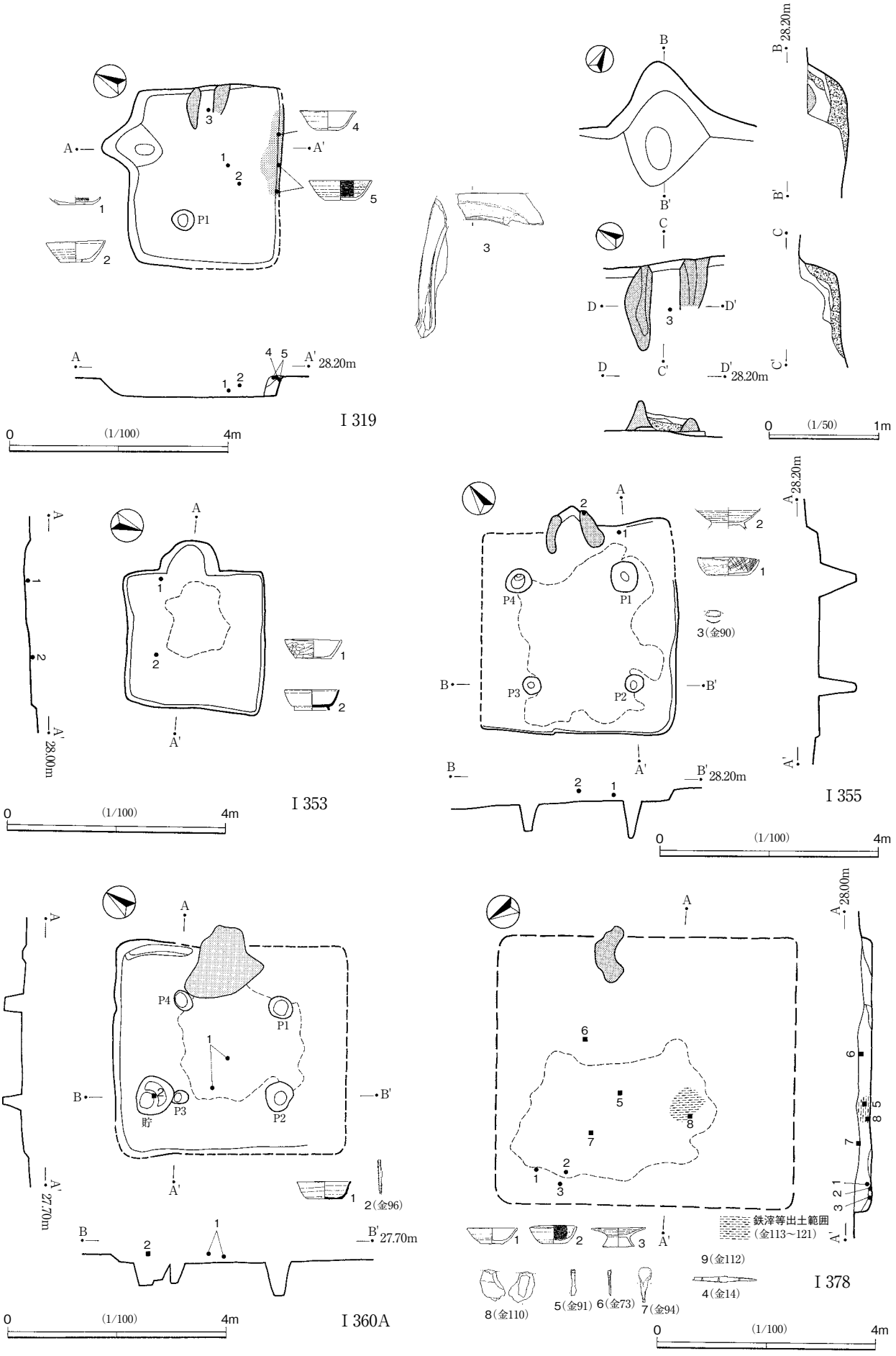
Ⅰ区中央東F区寄りに位置する。平安時代に属する。住居群中にあり、また、同時期の住居であるⅠ435がほぼ重なって重複していることもあり（本址が古い）遺存状態は不良である。形態は方形と思われ、規模は推測で長径3.5m、短径3.2mである。カマドは北壁中央にあり、煙道は若干張出しとなる。柱穴・梯子穴・貯蔵穴は存在しない。踏締め面はカマドから住居中央部にかけて確認された。覆土は水平堆積の焼土・炭混り黒褐色土層ながら、床面付近には山砂混り層が認められる。

遺物はカマ内ドおよび覆土中から出土した。１・２は坏であり、１は約１/５個体、２は約１/３個体を復元・図示した。３は平瓦片である。２はカマド内、１・３は覆土内である。

Ⅰ319（第112・119・216・217図、図版28・84）

Ⅰ区中央北東に位置する。平安時代に属する。住居群中にあり、加えて同時期の住居であるⅠ331がほぼ重なって重複していることもあり（本址が古い）、遺存状態は不良である。形態は長方形であり、規模は長径3.1m、短径2.5mである。カマドは北東壁中央にあるが、北壁にもその痕跡と思われる掘込みが確認される。付替えであろうか。柱穴・梯子穴・貯蔵穴は存在しない。踏締め面は確認出来なかった。覆土の状態は不明である。

遺物はカマド内および覆土中から出土した。１・２・４・５は坏であり、この内２・５は約半個体、１・４は約１/５個体を復元・図示した。３は置カマド片であり、カマド内より出土したものながら、その関連については不明である（単なる支脚としての利用か）。



第119図　I 319・I 353・I 355・I 360A・I 378 住居

Ｉ353（第112・119・217図、図版28・85）

Ｉ区中央南端に位置する。奈良時代に属する。住居群中にあるが遺存状態は良好である。形態は方形であり、規模は長径2.5m、短径2.4mである。カマドはそれらしき掘込みが西壁中央にあるが、果たしてカマドかどうかわからない。何れにしろ袖部らしき痕跡は遺存しない。柱穴・梯子穴・貯蔵穴は存在しない。踏締め面は僅かに中央部で確認された。覆土の状態は不明である。

遺物は主に床面から出土した。１は坏、２は須恵器高台付坏であり、この内１は完形、２はほぼ完形である。

Ｉ355（第112・119・217・247図、図版29・85・102）

Ｉ区中央南東端に位置する。奈良時代に属する。住居群中にあり遺存状態は不良である。形態は多少横長の方形と思われ、規模は推測で長径3.7m、短径3.4mである。カマドは北東壁中央にあり、袖部半ばから先が壁外にある。柱穴は小型住居ではあるが対応する位置に４本存在する。梯子穴、貯蔵穴はみられない。踏締め面は柱穴を結ぶ内部で確認された。覆土の状態は不明である。

遺物は主に覆土下位から出土した。１は坏、２は高台付坏であり、この内１はほぼ完形、２は約１/３個体を復元・図示した。３は覆土一括の薄板状の鉄製品である。

Ｉ360A（第112・119・217・248図、図版103）

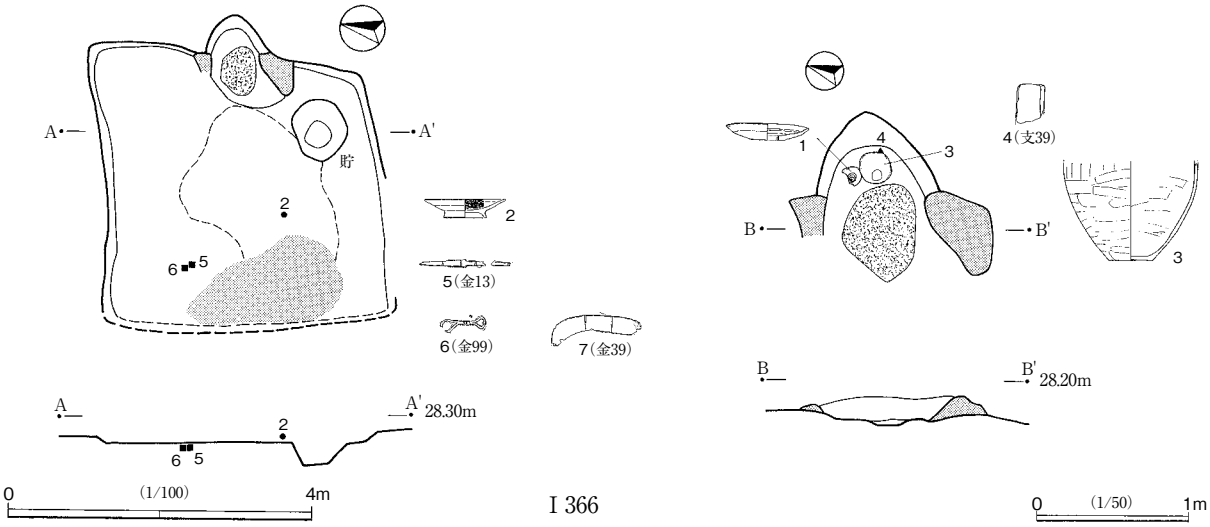
Ｉ区中央やや南東寄りに位置する。奈良時代に属する。古墳時代中期の住居（Ｉ360B）と合致するように重複し、壁は推測の部分が多い。形態は方形と思われ、規模は推測で長径4.2m、短径3.9mである。カマドは北東壁中央にあるが、焼土域と言ってよく個別の平面図は省略した。柱穴は対応する位置に４本存在する。梯子穴は見出せなかった。貯蔵穴はＰ３脇が候補にのぼるが確証はない。踏締め面は柱穴を結ぶ内部で確認された。覆土の状態は不明である。

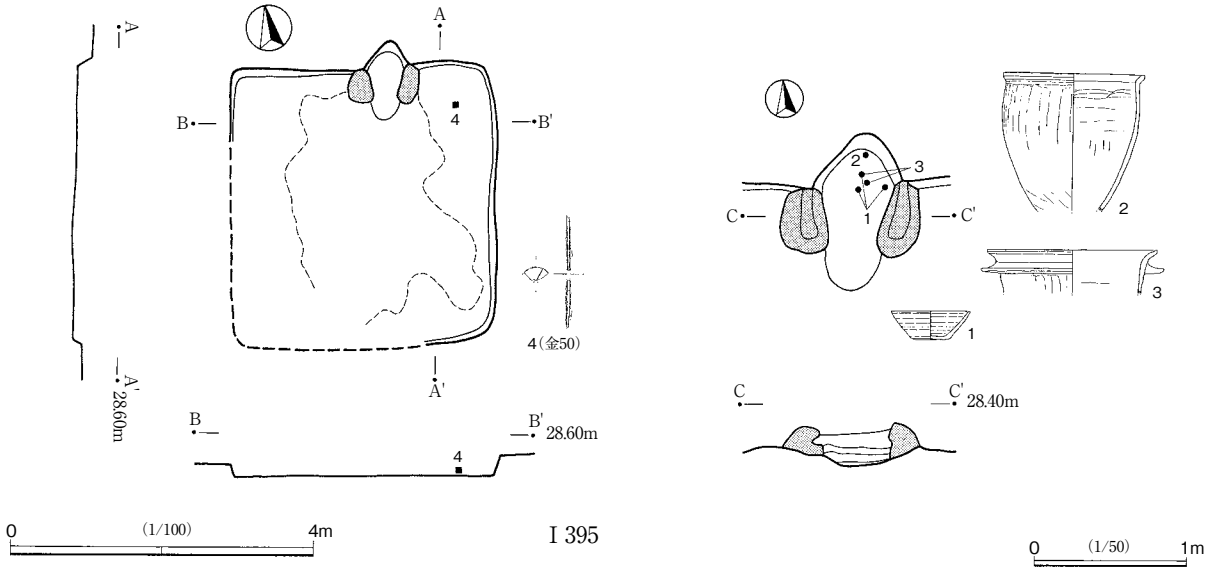
遺物は主に覆土内から出土した。１は須恵器坏で半個体である。２は不明鉄製品である。

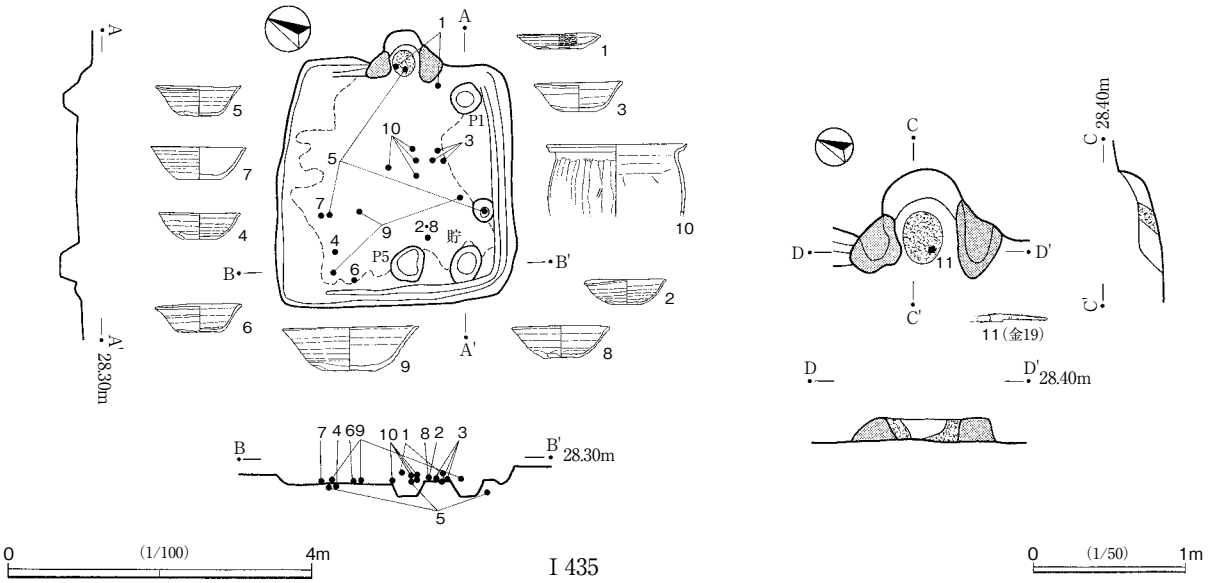
Ｉ378（第112・119・218・244・247～250図、図版29・85・100・102～104）

Ｉ区中央に位置する。平安時代に属する。住居密集地にあり遺存状態は不良である。形態・規模はまったくの推測であり、竪穴状の工房というべきかもしれない。カマドは南東壁中央に袖部の残欠らしきものが遺存する。柱穴・梯子穴・貯蔵穴はみられず、踏締め面は北西部を中心として確認された。覆土は凹レンズ状の堆積を示し、壁下を除き焼土・炭化材粒（径７㎝～10㎝）を多く含む。

遺物は主に床面付近から土師器と鍛冶関連遺物が出土した。１・２は坏、３は高台付皿で、共に完形ないしほぼ完形である。鍛冶関連遺物は南西床面上80㎝×70㎝の範囲に鉄滓の集中箇所(348/383)が存在した。その内訳は肉眼観察ではあるが、炉内滓約270点（ガラス化した軽量のもの210点)、炉壁65点、炉底滓23点、鉄塊系遺物13点、羽口片12点であった。この内、炉底滓９点（金113～121)、羽口片２点（金110・112）を図示した。住居内で選別後に廃棄したものであろうか。なお、覆土内より出土した６は鉄釘１点、７はソケット状の鉄柄１点で床面から30㎝近く高い位置にあり、直接の関連はないと思われる。この他、４の刀子、５の工具茎部？がある。







第120図　I 366・I 395・I 435 住居

Ⅰ366（第112・120・217・240・244・245・248図、図版29・100・101・103）

Ⅰ区南東端に位置する。平安時代に属する。住居密集地にあり遺存状態は不良である。形態は歪んだ方形であり、規模は長径3.8m、短径3.5mである。カマドは東壁中央にあり、煙道は張出しとなる。柱穴・梯子穴はみられなかったが、貯蔵穴は向かってカマド右手にある。踏締め面はカマド焚口前から住居中央部にかけて確認され、入口と推測される西側には広く粘土敷きがみられた。覆土の状態は不明である。

遺物は主にカマド内および床面から出土した。１は皿、２は高台付皿、３は甕であり、共に約半個体弱である。４は土製支脚破損品、５は刀子、６は両輪状の金具、７は先端が多少湾曲する鉄鎌である。１・３は支脚ないしその代用として用いられたのであろう。

Ⅰ395（第112・120・218・246図、図版30・101）

Ⅰ区中央東端に位置する。平安時代に属する。古墳時代中期の住居（Ⅰ396）との重複部分（南西部）のプランは推定である。形態は多少縦長の方形であり、規模は長径3.6m、短径3.4mである。カマドは北壁中央向かってやや右手にあり、煙道は張出しとなる。柱穴・梯子穴・貯蔵穴は存在しない。踏締め面はカマド袖部から住居中央部にかけて確認された。覆土の状態は不明である。

遺物は主にカマド内および床面から出土した。１は坏、２は甕、３は羽釜である。２は約半個体強、１は約１/３個体、３は破片を復元・図示した。４は床面より出土した鉄製紡錘車である。

Ⅰ435（第112・120・218・244図、図版30・85・100）

Ⅰ区中央東端に位置する。平安時代に属する。同時期の住居（Ⅰ296）と重複するが本址が新しい。形態は多少歪な方形であり、規模は長径・短径共に2.8mである。カマドは北東壁中央にあり、煙道は張出しとなる。柱穴はないが、梯子穴は中央南西壁際（壁から50㎝）にあり、貯蔵穴は向かってカマド右手ないし入口右手のピットが該当するかと思われる。踏締め面はカマド袖部から梯子穴までの壁寄りを除いて認められた。覆土の状態は不明である。

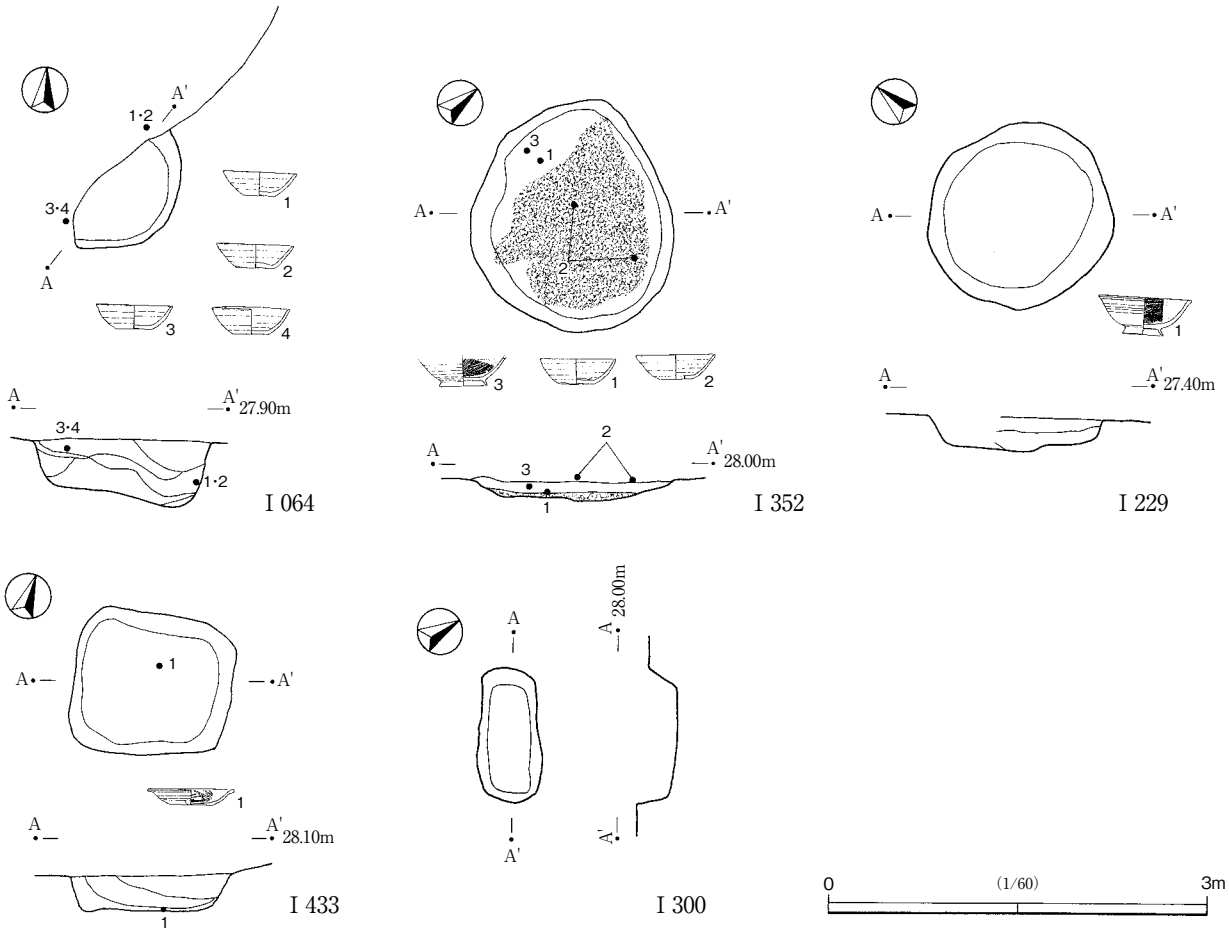
遺物は主にカマド内および床面付近から出土した。１は皿、２～８は坏、９は大形の坏、10は甕である。この内、３・６・７・９はほぼ完形、１・２・５は約２/３個体、４・８・10は半個体以下を復元・図示した。廃絶間もない頃の投棄であろう。なお、11はカマド内より出土した刀子である。

３　土坑・土師窯

土坑のうち、奈良・平安時代に所属するものをここで報告する。なお、Ⅰ300についてはその可能性があるに留める。

Ⅰ064（第112・121・218図、図版85）

Ⅰ区中央北西寄りに位置する。住居群中にあり、西側半分は重複する住居によりプランを捉え得なかったが、本来は本址が新しい。形態は楕円形であり、規模は径1.1m前後になろう。深さは確認面から約0.5mである。覆土は焼土、粘土を含む暗褐色土であり、人為堆積であろう。遺物は覆土内から４点の坏が出土した。この内、４は完形、２はほぼ完形、３は２/３個体、１は約１/３個体を復元・図示した。



第121図　I 064・I 229・I 300・I 352（土師器窯）・I 433 土坑

I 352（第112・121・218図、図版30・85）

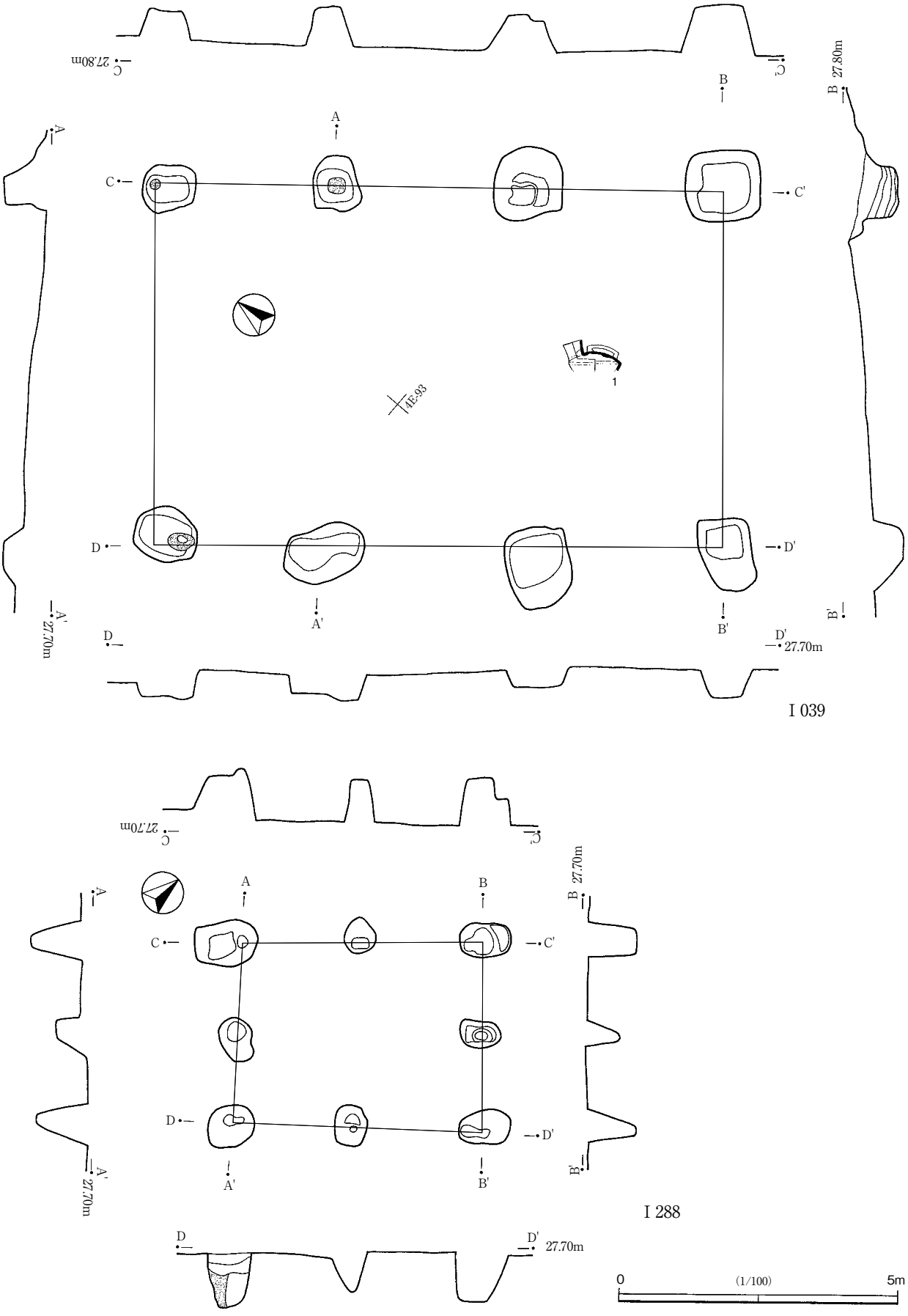
I 区南東端に位置する。土師器焼成遺構と考えられる。形態は楕円形であり、規模は長径1.8m、短径1.6m、深さは確認面から約0.18mである。覆土は下層に焼土が充満し、暗褐色土が覆っている。遺物は覆土上層から２点の坏、１点の高台付坏ないし椀が出土した。この内、１はほぼ完形、２は約１/３個体、３は１/５個体を復元・図示した。

I 229（第112・121・219図）

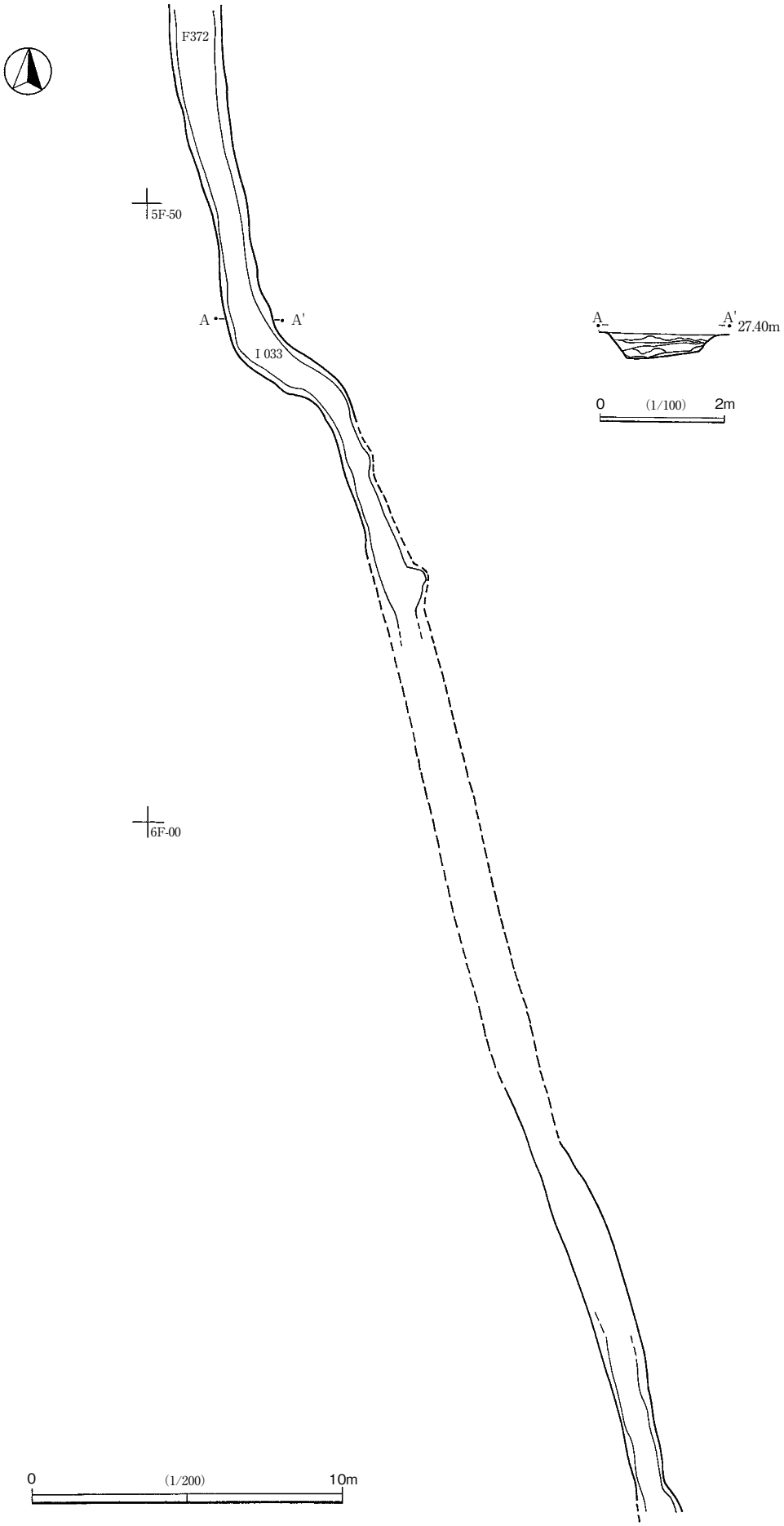
I 区中央南西寄りに位置する。形態は楕円形であり、規模は径約1.3m、深さは確認面から約0.25mである。覆土はロームブロック含む暗褐色土であり、人為堆積であろう。遺物は覆土内から１点の高台付坏（約半個体）が出土した。

I 433（第112・121・219図、図版85）

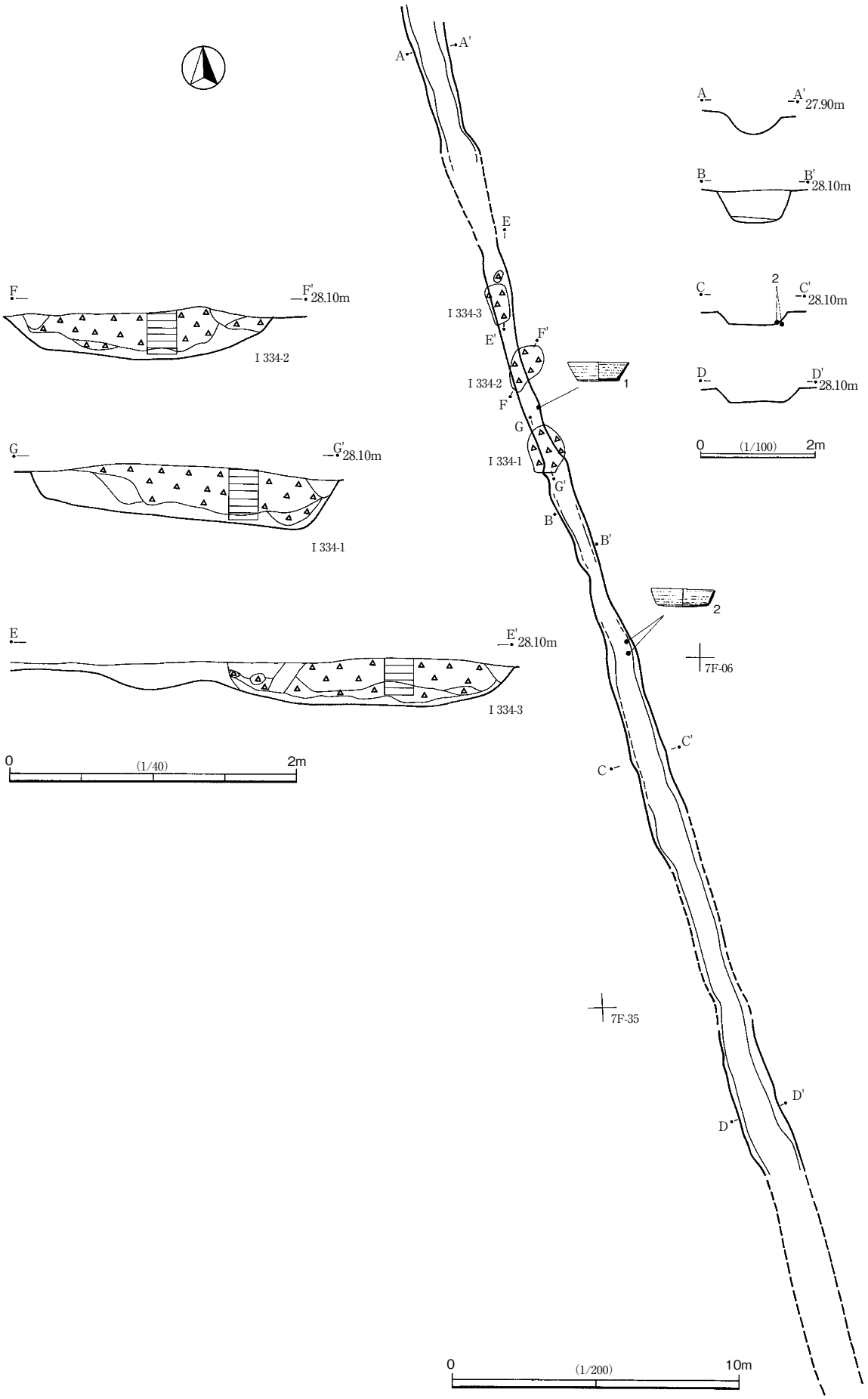
I 区中央東側に位置する。平安時代の住居（I 431）を壊しており、出土遺物も矛盾がない。形態は方形であり、規模は長径・短径共に約1.1m、深さは確認面から約0.25mである。焼土・炭化材粒を含む暗褐色土である。遺物は底面から１点のほぼ完形の皿が出土した。



第122図　I 039・I 288 掘立柱建物



第123図　I 033 溝



第124図　I 349 溝・I 334 土坑

Ｉ300（第112・121図）

Ｉ区中央東南寄りに位置する。重複なく遺存状態は良好である。形態は長方形であり、規模は長径１ｍ、短径約0.5ｍ、深さは確認面から0.25ｍである。覆土の状態は不明である。遺物は僅かに平安時代の土器片を含んでいた。

４　掘立柱建物

調査区内では３棟の掘立柱建物が検出されている。この内、２棟が奈良･平安時代に属するものである。その分布は１棟（Ｉ039）が北側、１棟（Ｉ288）が南側と分散しており、時期的には前者が奈良時代、後者が平安時代と推測される。

Ｉ039（第112・122・218図、図版85）

Ｉ区北側やや北西寄りに位置し、北西－南東に主軸をとる。住居密集地にあるが各柱穴共に検出出来た。南北３間、東西１間の側柱建物である。柱間は東西梁間方向がほぼ6.5ｍで一致しているが、南北桁行方向は３ｍ～3.5ｍと幅がある。深さは各柱穴が確認面から0.3ｍ～0.9ｍの間にあり、これまた不揃いである。一部には柱痕跡が遺存した。遺物はピット内（位置不明）から須恵器平瓶約半個体が出土した。

Ｉ288（第112・122図、図版30）

Ｉ区中央南側寄りに位置し、北東－南西に主軸をとる。重複住居もあるが遺存状態は良好である。南北２間、東西２間の側柱建物である。柱間は東西梁間方向がほぼ1.7ｍ、南北桁行方向が2.2ｍとほぼ一致している。深さは梁間間の棟持柱に相当する中間の柱穴が0.6ｍと浅く、他は凡そ0.8～１ｍの間にある。遺物は出土しなかった。

５　溝

調査区内では大小の溝が検出されているが、この期に属する遺構となるとＩ033・Ｉ349をあげるのみである。調査区の北西から南東へ走るもので時期的には奈良時代の遺物を含むものである。

Ｉ033・Ｉ349（第112・123・124・219図・図版85）

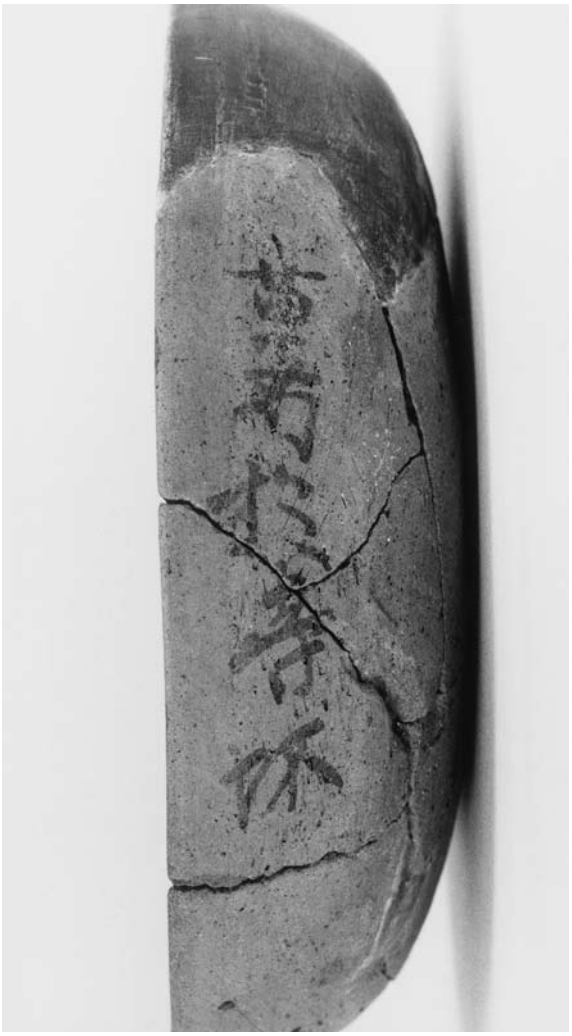
一連の溝であり、北側がＩ033、南側がＩ349に該当する。その走り方は第112図を参照されたいが、別に１/200の図（第123・124図）を示している。巡り方はF区北東部の緩斜面から始まり、Ｉ区５Ｆ付近で一旦屈曲し、以後北北西－南南東方向に向けて延び､M区を横切って台地端へ至る溝である。途中断続するが、これは本来浅いのと激しい重複から捉え得なかった結果である。溝幅は狭いところで0.5ｍ未満、広いところで1.6ｍ前後、深さは20㎝～60㎝ながら大体40㎝前後の深さである。溝の断面形態は船底状ないし逆台形であり、一定しない。６F-64～84にかけて貝ブロック層があり､その近辺で遺物が出土する。覆土は褐色土、暗褐色土を主体に一部黒褐色土であり、硬化面が２面（底面と中位）確認されているので道としても利用されたものと思われる。１・２共に須恵器坏であり、１は半個体、２はほぼ完形である。貝層はコラムサンプルを４か所で採取しており、その内容は以下のようなものであった（S.４は21点にすぎず省略)。

	Ⅰ334－1（S.1）	Ⅰ334－2（S.2）	Ⅰ334－3（S.3）
ハマグリ	350（27%）	206（20%）	129（13%）
イボキサゴ	285（22%）	603（60%）	388（40%）
アサリ	225（18%）	44（４%）	180（19%）
ウミニナ科	175（14%）	53（５%）	59（６%）
シオフキガイ	160（13%）	89（９%）	119（12%）
マテガイ	54（４%）	10（１%）	34（４%）
その他	28（２%）	11（１%）	61（６%）
総数	1277	1016	970

＊コラムサンプルは50㎝×50㎝×20㎝を１単位として採取。S.１は７カット、S.２は６カット、S.３は５カット。

各サンプルによって違いはあるが、イボキサゴ、ハマグリ、アサリで全体の凡そ70%～80%を占め、他にシオフキ、ウミニナが入る。奈良時代にはほぼ現在のように遠浅の浜が広がっていたと思われ、貝種としては矛盾しない。また、食用としてハマグリ、アサリが多い点も同様であるが、イボキサゴが少なくともこの頃まで食用として供されていたという点にも注目される。

▼Ｄ区方形墳墓から出土した坏外面の墨書「草苅於寺坏」



草刈遺跡では主に台地東端部のＣ・Ｇ区と西端部のＩ・Ｆ区で奈良から平安時代の集落が検出されている。この墨書土器は草刈の地名が奈良時代に遡ることを教えてくれる貴重な資料であり、当Ｉ区は西端部集落の中心に位置する。

第125図　時期不明遺構・貼床遺存箇所分布図（1/700）

第８節　時期不明の遺構

１　概要

激しい重複状況ということもあり、貼床ないしカマドや炉が部分的に検出された例が結構存在する。また、プランがある程度捉え得ても、決定に至らないケースも多少はある。併せると住居跡で30棟前後、土坑で凡そ10基といったところである。この内、住居については遺存不良であり、僅かに特徴的な土坑３基についてここで報告する。

２　土坑

Ｉ045（第125・126図）

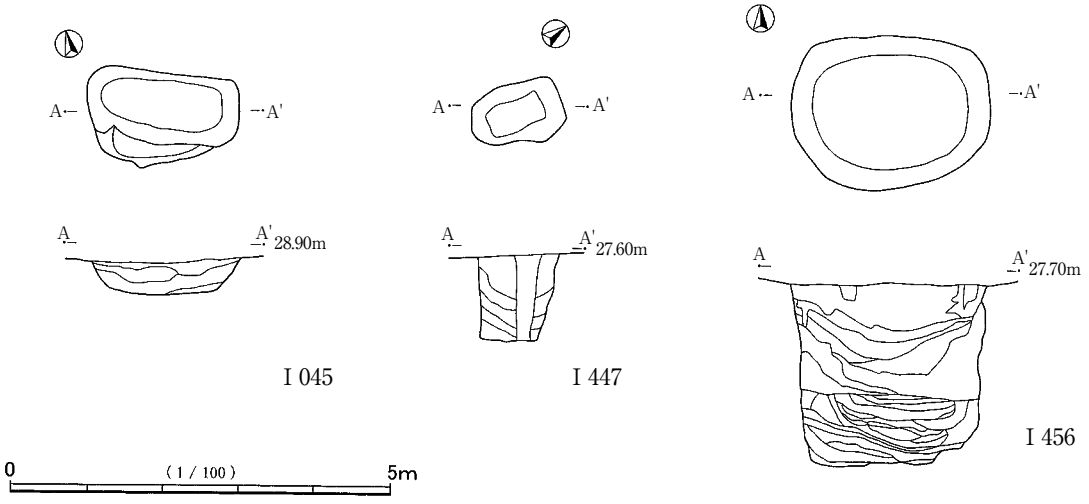
Ｉ区北側に位置する。形態は隅丸長方形であり、断面は逆台形となる。規模は長径２ｍ、短径１ｍ、深さは確認面から0.4ｍである。南側に浅い段部がみられるが、土坑との関連は不明である。覆土は脆い暗褐色土であり、人為堆積であろう。土坑墓の可能性が高い。

Ｉ447（第125・126図）

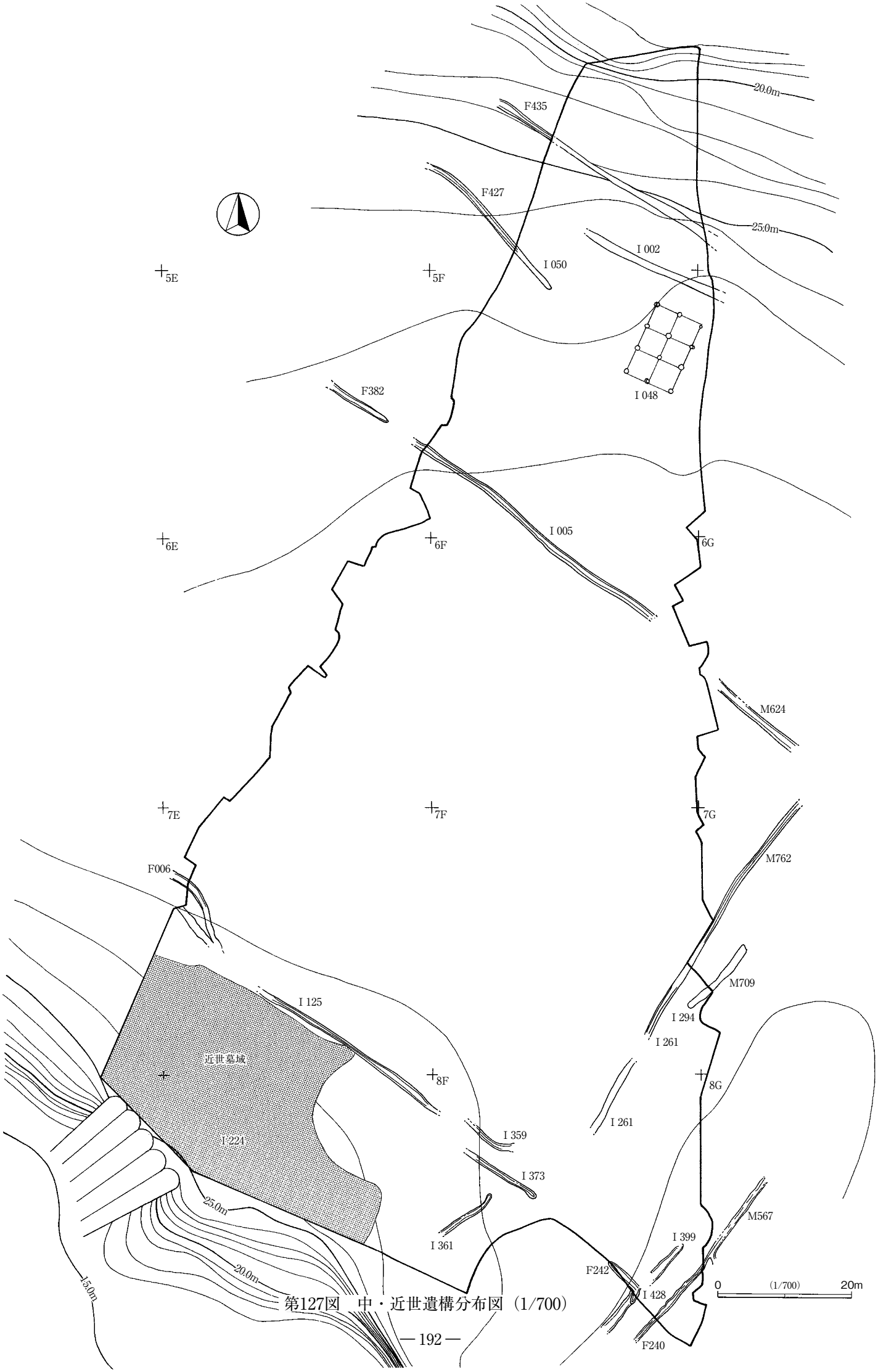
Ｉ区中央やや南東寄りに位置する。形態は隅丸長方形であり、断面は箱形となる。規模は長径1.23ｍ、短径0.8ｍ、深さは確認面から約1.2ｍである。セクションには柱穴状の痕跡が記録されていたが、対応するようなピットもなく、土層全体では凹レンズ状のしまりのある自然堆積とみられることから、むしろ早期の陥穴の可能性もあろうかと思われる。遺物の出土しない点も符合しようか。

Ｉ456（第125・126図）

Ｉ区中央やや南東寄りに位置する水溜かと思われる穴である。武蔵野ロームを掘り込んでいる。形態は楕円形であり、断面は箱形となる。規模は長径2.6ｍ、短径2.0ｍ、深さは確認面から約2.35ｍである。覆土は約1.5ｍまで一旦埋まった後に、掘り返した形跡がある。何れも自然堆積とみてよい。



第126図　Ｉ045・Ｉ447・Ｉ456 時期不明土坑



第127図　中・近世遺構分布図（1/700）

第９節　中・近世の遺構

１　概要

中・近世と思われる遺構は掘立柱建物１棟と台地を区画する溝12条、それに南西端に営まれた墓域である。全体の分布図のみ掲載するが、幅１ｍ、深さ0.3ｍ前後の溝が地形に並行するように北側緩斜面と南側縁を走っている。北側では３～４条、南側では１～２条であるが、この他にⅠ区東端でそれと直交するように走る溝が２～３条存在する。畑等の区画溝であろうか。南西端の墓域も溝によって区画されている。なお、掘立柱建物は北東緩斜面にある。

２　溝群

Ⅰ005・Ⅰ050・Ⅰ002・F435・Ⅰ125・Ⅰ359・Ⅰ361・Ⅰ373・Ⅰ261・Ⅰ294・Ⅰ399・Ⅰ428（第127図、図版１）

北側緩斜面の溝群である。北側台地傾斜変換線付近を走るⅠ005（F382・M624と同一）から始まり、Ⅰ050、Ⅰ002、そして最後にF435をもって斜面を限るが、空中写真からするとさらに並列する溝らしき痕跡も観察できる。恐らく斜面の耕作の都合で改変されたのであろう。

Ⅰ125・Ⅰ359・Ⅰ373・Ⅰ261（M762）**・Ⅰ399・Ⅰ428**（第127図）

南側溝群である。Ⅰ005から丁度80ｍ南に並行してⅠ125ないしⅠ359またⅠ373が走っている。この溝から南側崖まで20ｍが墓域に相当する。東側はⅠ005またⅠ125に直交するようにⅠ261（M762と同一）が走る。そこから東側は多少上り傾斜となるので地形に応じて設けられたものであろう。約25ｍ離れて並行するⅠ399・Ⅰ428も同じ事情によるのではなかろうか。F区を含めると南北80ｍ、東西97ｍ程の溝囲みの空間が少なくとも近世以降には存在したことになろう。

３　掘立柱建物

Ⅰ048（第127図）

調査区北東に位置する。伴出遺物はないが、覆土や柱穴の様子から奈良・平安時代ではなく中・近世の所産と判断した。南北３間（11ｍ）・東西２間（7.5ｍ）の総柱建物であり、柱間は梁間方向4.0ｍ、桁行方向3.5ｍほどとなる。その性格等は不明である。

４　墓域

Ⅰ224（第127・251～255図、図版105～108）

調査区南西台地端は無数の墓穴が重複し広い墓域を形成していた。F区の調査結果などからして墓域はさらにその西側20ｍ程は続いていたようであるが、その先は土取り等もあって全体の規模は不明である。北側および東側が溝に区画されていることからして、溝内を墓域として認識していたのであろうが、北側がほぼ一杯まで使われている反面、東側は結構空き地がみられる。調査前に改葬が済んでいたこともあり、個々の調査は行わず重機にて遺物の回収のみに留めた。従って報告した遺物は総てではなく、主に銭貨・鉄釘等を採集したにすぎない。以下、墓域出土銭貨について簡単に報告する。

墓域出土の銭貨は89点ながら、弥生時代の住居であるⅠ242内に設けられた墓穴からも15点出土している。また、グリッド出土としてあげられた銭貨の内、７E-50～８F-50に渡る範囲はこの墓域中に当たる

のでこれも加えてよいであろう。そうすると５Ｆまた６Ｅから各１点と確認調査時の14点を除いた223点（癒着して銭種不明の21点含む）がこの墓域に伴うものといえる。その内訳は、古寛永48点、文銭65点、新寛永78点、・寛永鉄銭３点、寛永真鍮銭１点・文久銭４点・題目銭各１、不明21となる。即ち、新寛永が最も多く約37％を占め、次いで文銭32％、古寛永23％の順となる。古寛永は17世紀の前半の寛永～万治に、文銭は同後半の寛文～天和に、新寛永は同元禄～天明期にかけて鋳造され、一方、鉄銭は18世紀中頃～19世紀の後半まで断続的に鋳造され、遅れて出現する真鍮銭も同様で、僅かに出土した文久、天保銭は19世紀以降となる。

この銭種構成から言えることは、まず中国渡来銭が１点もないことから少なくともそれが副葬されなくなった段階（17世紀代中頃以降）に墓地の開始期があると推測する。問題はその中心がどこにあるかだが、文銭はともかく、新寛永は年代決定が難しい。とはいえ鉄銭が僅か３点にすぎず、古寛永・文銭で半数以上を占める点は17世紀後半～18世紀前半に墓地のピークがあったのではないかと思われる。癒着銭の銭種構成が新寛永のみと古寛永・文銭・新寛永を含むものであったのは示唆するところがあろう。

次ぎに、副葬された銭の性格であるが、収集段階に難はあるが墓地という観点からすれば六道銭習俗の結果とみるのが至当である。とはいえ、癒着銭の状況では必ずしも６文とは言えず、５点、８点、12点と様々である。必ずしも点数にこだわる必要はないのかもしれないが、これも実態である。なお、絵銭（題目銭）はまさしくあの世の世界で通用する銭といえる。

第10節　非掲載遺構出土の遺物および遺構に伴わない遺物

1　概要

当然ながら、草刈遺跡では非掲載の遺構またグリッドからも出土している。それらについては出来る限り掲載し、種別ほどに表にて概要を記しているが、ものによっては理解するうえでの支障もあろう。ここでは、その点を考慮し、とりわけ重要なものに力点を置き、図･表の足りない点を補うこととする。なお、遺構の多くが重複する当遺跡の様相からして当然ながら住居の所属する時期以外の遺物を含んでいる。それについては、ここでは除外して第10節４の遺構に伴わない遺物の項で扱うこととする。

2　非掲載遺構出土の遺物

（1）弥生時代

（第30・143～145・148・149・151・154・156・221～224・226・233・235・238・241・242図、巻頭図版３、図版３・50・52～54・86～88・93・94・98・99）

非掲載遺構で遺物を載せているのは、Ｉ012、Ｉ035A、Ｉ073、Ｉ077、Ｉ110、Ｉ146、Ｉ153B、Ｉ203、Ｉ242、Ｉ243、Ｉ362、Ｉ381（Ｉ293）、Ｉ408、Ｉ436の各住居である。この内、Ｉ077とＩ146の２遺構はまとまった土器を出土しており、また、Ｉ203では石器３点の遺物を出土している。以下簡単にその出土状況等を紹介する。

Ｉ077は６F-32グリッドにあり、貼床面と焼土が確認されたのみであった。しかしここからは約４ｍ×３ｍの範囲で第144図３のような中期に属する半個体の甕をはじめ、約10点ほどの土器が出土しており、この内の３点を図示した。

Ｉ146は７E-58付近に位置する住居で、各時期の住居が激しく重複する場所である。そのため、遺存する範囲も限られているが、その南東部から第145・242図のような中期に属する鳥形土製品（祭４）、甕２点、壺１点、鉢１点（１はピット内出土）、鼓形土器ほかが出土した。鳥形土製品は長さ約14㎝・高さ約８㎝であり、底部には明瞭な台（直径５㎝）を造り付けている。内部にはベンガラ（分析結果３章２節）が詰まっていた。２は意図的に口縁部を欠いた甕である。５は珍しい器形であり、重複する古墳時代中期の住居（Ｉ130）から出土したものながら本址に由来する遺物として扱った。

Ｉ203は７E-64にあり、住居群内また墓地にかかっていることもあって、その南東部のみ遺存する。柱穴脇のピット内から粘板岩製抉入石斧１点（石20）、閃緑岩製蛤刃石斧１点（石23）、銚子砂岩製石皿１点（石38）が出土した。

Ｉ153Bは６E-79にある中期の住居であり、覆土内で中期の土器片に混じって有孔土製円盤１点（円５）、土器片利用円盤２点（円20・円21）が出土した。

Ｉ110は６E-57にある後期の住居であり、二つある炉の内、南側の炉内端に完形の炉囲い（第238図支１）が横位の状態で出土した。

この他、図に示した非掲載の遺構に伴う弥生時代の石器として、磨製石剣（石１）、磨製石器（石９・石12）、軽石A砥石（砥21）、また土製品では、土器片利用円盤（円19）、土錘（土37）があげられる。それ以外は古墳時代以降の遺構に含まれた遺物ということになる。

（2）古墳時代前期

（第66・169～176・225・234・235・237・238・241図、図版55～57・87・94・95・97・98）

非掲載遺構で遺物を載せているのは、Ⅰ034、Ⅰ037、Ⅰ038、Ⅰ042、Ⅰ097、Ⅰ113、Ⅰ131、Ⅰ132、Ⅰ143、Ⅰ145、Ⅰ148、Ⅰ151、Ⅰ176、Ⅰ181（ピット群）、Ⅰ195、Ⅰ197、Ⅰ222、Ⅰ226、Ⅰ246、Ⅰ342B、Ⅰ347、Ⅰ375、Ⅰ429、Ⅰ317（ピット群）である。遺物の出土量に比較して遺構の掲載率が低いが、それだけ遺存度が低かったということでもあり、と同時に遺物量が他の時期に較べて多かったということにもなろう。

Ⅰ132は７E-46にあり、重複の激しい地点ゆえ、僅かに住居北側のみ遺存する状況であったが、その北西部床面上から多くの遺物が出土した。とりわけ坩は多様な形態があり、当地区では最もまとまった資料といえる。焼土・炭化材粒が床面付近に散布する焼失住居であり、遺物も廃棄時の所産と考えられる。

Ⅰ195は７F-00にあり、北側半分のみ遺存する住居である。住居北東寄り床面付近でまとまった遺物が出土したが、その中に手捏ね土器が４点混じっていた。ここも焼土･炭化材粒が床面付近に散布しており、焼失住居と思われ、遺物も廃棄時の所産と考えられる。

Ⅰ375は７F-52にあり、かろうじて４本の柱穴とプランの一部を捉え得た。床面付近に坩、高坏、甕が散乱した状況であり、炭化材が遺存することからして焼失住居に伴う遺物であろう。この期には焼失住居の割合が高いが、それに遺物が多く伴う例のひとつである。

Ⅰ197は６E-88にあり、重複のためプランさえはっきりしないが、その炉内および周囲から土製支脚が５点（３点図示）出土した。烏帽子形の形態で、指持穴かと思われる小穴が２個伴い、該期の支脚の好資料といえる。

Ⅰ342Bは弥生時代のⅠ342A内住居として調査された。しかし、ピットは規則的とはいえず、プランもそれに対応して検出されたものではない。住居とした根拠のひとつが多くの遺物ではあったが、その出土位置を検討すると主に方形周溝墓（Ⅰ451）東溝に付属するような出土状況であった。とはいえ、その下から周溝の検出が報告されていない以上、確証もない。ここではこれらの遺物群がⅠ451に所属する可能性が高い点を記しておくに留めたい。なお、位置関係からして、３は南溝、それ以外は東溝となる。

（３）古墳時代中期

（第80・183・184・186・188・189・191～195・197・198・200・225・228・234～236・238・239・241・242・247図、図版66～69・71～75・87・90・94・95・97・98・102）

非掲載遺構で遺物を載せているのは、Ⅰ008、Ⅰ024、Ⅰ028A、Ⅰ030、Ⅰ032、Ⅰ065、Ⅰ089、Ⅰ093、Ⅰ116、Ⅰ124、Ⅰ147、Ⅰ150、Ⅰ152、Ⅰ155、Ⅰ161～Ⅰ163A、Ⅰ174、Ⅰ187、Ⅰ208、Ⅰ214、Ⅰ215、Ⅰ220、Ⅰ225、Ⅰ255、Ⅰ308、Ⅰ316、Ⅰ329、Ⅰ336、Ⅰ360B、Ⅰ411、Ⅰ421、Ⅰ444A、Ⅰ457（ピット群）である。前期と同様、遺物量が多いが、それが焼失住居と符合している現象も指摘できる。また、この期後半に至って、カマドが出現するが、その焚床や左右の床面から遺物が出土するというパターンがみられるようになる。なお、住居内貝層についても便宜上ここで概説する。

Ⅰ032は５F-80にあり、貼床と遺物のみの住居で、焼土や炭化材が多量に散布する焼失住居である。遺物は１ｍ×３ｍの範囲の床面上にまとまって出土した。

Ⅰ065は６F-21にあり、これも貼床と遺物のみの住居で、同様に焼土と炭化材粒がとりわけ北側に遺存した。遺物は南側床面それも主に貼床面上から出土した。

Ⅰ150もカマドとその手前の床面および柱穴が検出されたにすぎない。破損品を含め、坏３点，高坏６点、鉢１点、甕２点の構成で、この内、２・７がカマド内から出土した。

Ⅰ163Aは出土点数はあるが、遺構の実態は不明瞭である。参考程度に扱ってもらいたい。

Ⅰ421は７F-16にあり、住居南東部がかろうじて遺存するのみであった。焼失住居であり、この中から散在するかたちで遺物が出土した。

Ⅰ360Bでは北西コーナー付近覆土内床面付近で60㎝×40㎝の範囲に貝の散布（総数129点）が確認された。重複するⅠ360Aによって貝層が破壊されていることから本来の散布範囲は更に広かったと思われる。

（４）古墳時代後期

（第99・201・203・205・206・208・240図、図版23・76～78・80・97）

非掲載遺構で遺物を載せているのは、Ⅰ020A、Ⅰ069、Ⅰ199、Ⅰ262、Ⅰ406である。棟数に比較すると掲載率が高いが、それ以前の住居を壊して床面を形成しており、その結果が反映されたものと思われる。

Ⅰ020Aは５F-52にあり、土坑により破壊されたカマドと柱穴２本、それに床面北側から中央部の床面が検出されたにすぎない。遺物は覆土中からまばらに出土したが大形住居ということもあり、点数は多い。

Ⅰ069は６F-06にあり、カマドの遺存は良く、その焚床に直立するかたちで土製支脚（土34）が出土した。この他に焼けた方柱状の粘土塊がカマド内より出土した。一応支脚として報告するが（支35）、別の用途に用いられたものかもしれない。

Ⅰ406ではカマド上に住居内貝層が50㎝×35㎝の範囲で確認された。

厚み等の詳細は不明である。前者はハマグリ・ウミニナ・シオフキでほぼ占められる一方、後者は全体でも20点足らずの数量ながら、ハマグリの他にマテガイ、ツメタガイが卓越するという特徴がある。

（５）奈良・平安時代

（第112・209・211・213～219・228・234・235・237・240・244・245・247～249図、図版81～85・90・94・96・97・100～103）

非掲載遺構で遺物を載せているのは、Ⅰ006、Ⅰ062、Ⅰ088、Ⅰ114、Ⅰ117、Ⅰ123、Ⅰ149、Ⅰ153A、Ⅰ156、Ⅰ158、Ⅰ177、Ⅰ179、Ⅰ192、Ⅰ196、Ⅰ204、Ⅰ210、Ⅰ217、Ⅰ218、Ⅰ232、Ⅰ239、Ⅰ245、Ⅰ250、Ⅰ254、Ⅰ257、Ⅰ272、Ⅰ301、Ⅰ305、Ⅰ313、Ⅰ320、Ⅰ335、Ⅰ337、Ⅰ372、Ⅰ382、Ⅰ393、Ⅰ409、Ⅰ419、Ⅰ431、Ⅰ443Aである。掲載率が悪いのは、偏にローム面が見えないほどに重複した遺構間にあって、小型住居、貧弱なカマド、しかも柱穴や貯蔵穴もないものが多く、掘込みも浅いということにつきよう。

Ⅰ006は５F-80にあり、カマドとその手前の中央部床面のみが検出された。遺物はカマド内と覆土中から多く出土し、内１点は墨書土器（「因」）であった（第209図５）。

Ⅰ062は６F-14にあり、カマドが付く住居東側約１/３ほどが遺存する。このカマド内から第211図１・２の坏と３～５の甕が出土した。

Ⅰ088は６F-15にあり、かろうじて貼床面上に散在する遺物を確認したにすぎない。坏が中心であり、内２点は墨書土器（?）であった。

Ⅰ114は７E-14にあり、カマドとその手前の床面が検出されたのみで、３点の須恵器（第213図２・３・５）はカマド左手前の床面上から出土した。なお、１は重複住居（Ⅰ121）、４はカマド内出土の甕である。

Ⅰ123は６E-95にあり、同様カマドとその手前の床面が検出されたのみであった。第214図１・２・３は坏５の灰釉陶器長頸瓶は手前の床面付近から、４の台付甕はカマド内から出土した。

Ⅰ158は６F-20にあり、カマドと東側壁、それに中央部一帯の床面が検出されている。遺物はカマド内と住居覆土から床面にかけて出土したが、とりわけカマド手前の床面付近（第214図２・４・５・６・８・９）から多く出土した。なお、１はカマド左側床面付近からの出土である。

Ⅰ179は６F-50にあり、カマドと床面（５ｍ×4.7m）が検出されたのみである。第214図２・６・７はカマド内、１・３・４は床面付近の出土である。また、カマド内焚床には土製支脚（第240図支40）が斜めの状態で出土した。

Ⅰ210は７E-27にあり、鉄滓と羽口からなる遺物のまとまりを呼称したもので、正確には遺構ではない。恐らく、廃屋の凹みに捨てられた遺物群と思われる。羽口（第249図金106）は軸に沿って溝が等間隔に走るものである。

Ⅰ239は８E-27にあり、壊されたようなカマドと３ｍ×2.5mほどの床面が遺存するのみであった。図示した遺物は何れもカマド面から出土した半個体以上の坏７点であり、内１点は内面刻書の土器（「中」）である。

Ⅰ254は７F-30にあり、貼床面が遺存するのみの住居であり、その覆土内から雁又鏃（第247図金67）が出土した。

Ⅰ337は６F-54にあり、ほぼカマドのみの遺存である。カマドは部分的に粘土を用いたもので、その中央焚床上に坏等が７点逆位に重ねた状態で出土した。その順番は下から５→未図化→３→１→７→６→４の順である。

Ⅰ443Aは７G-40にあり、住居北側のみ遺存する。その北西コーナー付近で第218図１～３が入れ子状（下から３→２→１の順）で出土した。また、４はそれから約１ｍ離れた壁際で出土した。

３　拓影図

拓本にて図示した遺物の概要をここで報告する。弥生時代の遺物はそのほとんどが土器である。出来るだけ図化したが、それだけでは文様のあり方等、遺物群の理解に不十分と思われるので、遺存状態の良い遺構や遺物量が多く大破片の多い遺構出土土器を優先し、次に図化遺物に乏しい遺構出土土器、あるいは、類例の少ない土器、図化に至らない大破片、時期的・地域的に特徴的な土器等というように羅列した。当地区の場合、重複状況からして当然古墳時代以降の遺構にも該期の遺物は含まれるので、必要に応じ掲載した。結果として289以降は遺構掲載順は順不同となっており、古墳時代以降の遺構出土土器片も紹介している。これによって図化遺物の足らない点を補うことが出来るであろう。なお、古墳時代以降の遺物についても必要に応じ掲載した。また、観察表は付表CD添付も含め省略した。

（１）弥生時代（第30・157～168図）

Ⅰ040住居では甕に伴う椀・壺の拓本を図示した。Ⅰ042（Ⅰ151）は古墳時代前期に属するが重複状況からして周辺一帯の遺構に由来するかと思われる。Ⅰ072拓本も含め比較されたい。Ⅰ078・Ⅰ079拓本は、少ない図化遺物を補うものである。この点、Ⅰ082・Ⅰ163Bも同様である。Ⅰ185・Ⅰ186A・Ⅰ326は豊富な図化遺物をさらに充実させるものである。Ⅰ237・Ⅰ251・Ⅰ289・Ⅰ293・Ⅰ299・Ⅰ383拓本は図化遺物を補う資料である。Ⅰ035Aは中期の住居を後期の住居（Ⅰ041）が切っている例、Ⅰ146・Ⅰ153Bは中期・後期３棟分の資料である。また、第167図（333）以下は主に古墳時代以降の重複住居ないしグリッド出土の参考資料である。

（２）古墳時代前期（第220図）

Ⅰ075住居では内面に波状また平行線文と山形文を施した土器片を図示した。後者はいわゆるパレス壺の口縁部に相当しよう。Ⅰ173住居では壺口縁部下端に竹管刺突文を巡らした土器片を図示した。Ⅰ186Aでは甕胴部に文様的な条痕がみられる例を図示した。Ⅰ317ピット群では甕括れ部から胴部上位にかけて

籾痕（５か所）が付着する例を図示した。Ｉ429住居ではS字状口縁甕口縁部片を図示した。

（３）古墳時代中期（第220図）

Ｉ133住居、Ｉ052B住居、Ｉ003住居から出土した須恵器片を別途拓本にて図示した。また、Ｉ133住居から出土した刻書土器片２点を掲載した。坏底面に×印を刻するものである。

（４）古墳時代後期（第220図）

Ｉ207住居、Ｉ228住居から出土した須恵器片を別途拓本にて図示した。

（５）奈良・平安時代（第220図）

Ｉ101・Ｉ094・Ｉ054A住居から出土した須恵器片を別途拓本にて図示した。後２者は土師質須恵器である。また、刻書土器１点を掲載した。弥生後期の住居混入品であり、坏底部内面に記号状に刻するものである。

４　遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物といえば、普通はグリッド・トレンチ出土遺物となるが、草刈遺跡の場合、重複状況が示すように弥生時代以降の住居覆土内（一部は床面にも）には当然それ以前の遺物が含まれている。当報告には明確に時期が異なる遺物は載せていないが、結果として恣意的な操作という一面もある。ここでは主に各時期に特有ないし特徴的な遺物で時期の異なる遺構から出土した遺物に的を絞って解説したい。

（１）弥生時代の遺物（第221～224・226・228・233・235～237・243・244図、図版86・87～90・93～95・100）

弥生時代に特有の磨製石器類（石２・石10・石14・石19・石27・石28・石31）が古墳時代以降の住居内から出土している。前５者は柱状片刃石斧ないし偏平片刃石斧のほぼ完形品、石28が抉入片刃、石31が蛤刃石斧のそれぞれ破損品である。石36は錘形の敲石でありこの種の遺物としては大形である。

軽石A砥石は弥生時代のみならず古墳時代前期にも継続して出土する遺物であるがその後は使われなくなるようである。傾向としては第223図を比較しただけでも歴然としている。この点、ほぼ同種の性格を有すると思われる軽石Bの砥石も同様である。やや軟質で灰白色～淡黄色を呈する砂岩Aの砥石は一部敲石にも使用され形状は様々である。北総の弥生時代遺跡に広く供給されたものながら、それ以降ではほぼ使用されなくなる。砥68～砥74は古墳時代前期以降の遺構内ながらこの期に属するものとして一括掲載した（227・228図）。河原石に起源を有すると思われる砂岩も一定数認められる。砥80～砥86は同様に古墳時代前期以降の遺構内ながらこの期に属するものとして一括掲載した（第228図）。

玉類は形態等から判断したが、遺物そのものが小さいためか単一の場合にはその帰属は微妙なところもある。しかし、有孔土製円盤・土器片利用円盤はほぼ弥生時代の所産としてよく、円６～円８・円11・円23～円28（第233図）が古墳時代以降の遺構内出土である。球状土錘小型品は弥生時代の遺構出土例が多い（７例中６例）。よって土38（近世以降溝）もこの中（第235図）に加えたが確証はない。小型土製品（第236･237図）と一括した遺物は実は多様である。とりわけ小さいもの（他１～他９）は形状や胎土から弥生時代としたが、弥生時代の遺構に伴うものは他４・他９のみである。他５・他６は錘形、他８は類例のあることとて問題はない。しかし、他１・他３は古墳時代前期の可能性もある。

弥生時代の金属製品は鉄釧と短剣が代表例で、古墳時代の遺構内から鉄釧（金１･金２･金７）、指輪（金３～６）が出土している（第243・244図）。指輪のうち、金３は完形の資料である。金８は種別として特定できず、疑問もあるが、重複のない弥生時代の住居（Ｉ084）ということもありそのまま掲載した。

（２）古墳時代前期の遺物（第225・227・228・246・248図、図版88・103）

軽石Aの砥石は前期にも使われたようで、弥生時代との帰属は必ずしも明瞭でないが、前期遺構出土例は選別して図示した（第225図）。一方、砂岩Aないし砂岩Bの砥石で前期遺構内出土例もあるが（砥68・砥74・砥81）、これは混入品であろう（第227・228図）。鉄製紡錘車の破損品２点（金51・金53）が前期住居出土遺物として採り上げられているが、鉄製紡錘車は歴史時代以降に出土することからこれは混入品であろう（第246図）。玉類や土器片利用円盤は前期に準じる。小銅鐸片（第248図金104）が弥生時代後期の住居（Ｉ286）プラン内より出土しているが、レベルからして壁確認面より高く、むしろ古墳時代前期のＩ390に所属する可能性が高く、形態からしてもこの期の所産と思われる。

（３）古墳時代中期の遺物（第227・241・242図、図版89・98）

砥石類については前期と同様である。砥70のような置砥をどうみるかだが、覆土内出土でもあり弥生時代の可能性もある（第227図）。中期の遺物として特徴的なのは、定型的な凝灰岩製砥石、球状土錘、石製紡錘車の出現である。また、炉からカマドへ移り変わるにつれ、土製支脚が烏帽子形から方錘ないし円錘形に変化する。その初現形態が後期以降の遺構から出土していればそれは混入品とみるべきながら、大きな違和感はない。また、この期にしばしば伴う遺物として、石製模造品がある。近世以降の溝・掘立柱建物から出土した２点（模14・模36）は本来この期に属する遺物としてよい。千枚岩の大小礫を加工して恰も剣形のように形態を整えた一群がある（第242図最上段）。古墳時代前期～中期なかでも中期の住居覆土から最も多く出土していることから、やはり模造品に準ずる性格を想定しておく。Ｉ区全域に散らばっており、特別な集中域はない。帰属が今一つ明瞭ではないが、土製鏡形模造品（模60・模61）は恐らく中期（ないし前期）に属するかと思われる。

（４）古墳時代後期の遺物（第239・240図）

古墳時代後期は住居のほぼ総てがカマドそれも大きく且つ丁寧な作りのカマドを備えており、結果として土製支脚の出土も中期と同様に多い。細長い円錐形支脚の出現もこの期であり、中期住居（Ｉ116）から出土した１点（支33）は重複する後期住居（Ｉ109）に由来するものと思われる。なお、Ｉ116ではカマドに伴って土製支脚（支19）が出土しており比較されたい。

（５）奈良・平安時代の遺物（第247図）

奈良・平安時代は最後に営まれた竪穴住居ということもあり、それ以前の遺物を含んでよい道理ながら実はそれほど多くない。多様な鉄製品（その代表が鉄釘）が集落各戸に行き渡るのはこの期になってからであり、グリッド出土の鉄製品・鉄滓もこの期に所属する可能性が高いであろう。

（６）中・近世の遺物（第229・248図、図版108）

金105の銅鏡片は近世墓地内の出土であり、出土位置こそ定かでないが、副葬品の一部と考えられる。古墳時代中期住居（Ｉ274）内の遺物として採り上げられた火１はその石質・形態からして火打石である。

第11節　遺構分布図・遺物実測図および遺構一覧表

１　遺構分布図について

草刈遺跡では土地区画整理事業に伴い、その全域が調査対象となり、約5,000棟の竪穴住居と貝塚、それに各時期にわたる古墳群などが検出されており、一つの遺跡としては県下でも類をみない。当然、調査年数も17年に及び、調査区もＡ区～Ｐ区に細分されている。とりわけ、遺跡西部では遺構密度が著しく、その総てを報告することが困難となっている。また、長期にわたる調査ということもあって、遺跡全体の統一的な表記や隣接する地区との整合性が求められる。

以上の理由ないし事情から､報告出来なかった個々の遺構については１/300の遺構分布図を別途作成し、その不備を補うこととした。また、東に隣接するM区と同一の基準・区画（Ａ４版内に収まる範囲に分割した60ｍ×40ｍの区画で周囲には約10ｍの重複部）をもって11区画を設定しており、これによって西に隣接するＦ区（平成24年度刊行予定）との整合も可能となる。

遺構分布図では、各遺構の平面形ならびに柱穴・炉・カマド・貯蔵穴などの内部施設を図示したが、硬化面等それ以上の記載は１/300では煩雑となるために省略した。遺構間の重複関係の表記については、従来､新旧の表示を波線等で分けて行っている。しかし、Ｉ区の場合は浅いレベル差で多くの遺構が切り合っていたために、明瞭にプランが把握されたものは限られており、そのままでは理解に不都合が生じるため推測も含め実線表記とした。なお、M区遺構分布図には一部Ｉ区が含まれているが、その異同については本書に従うものとする。

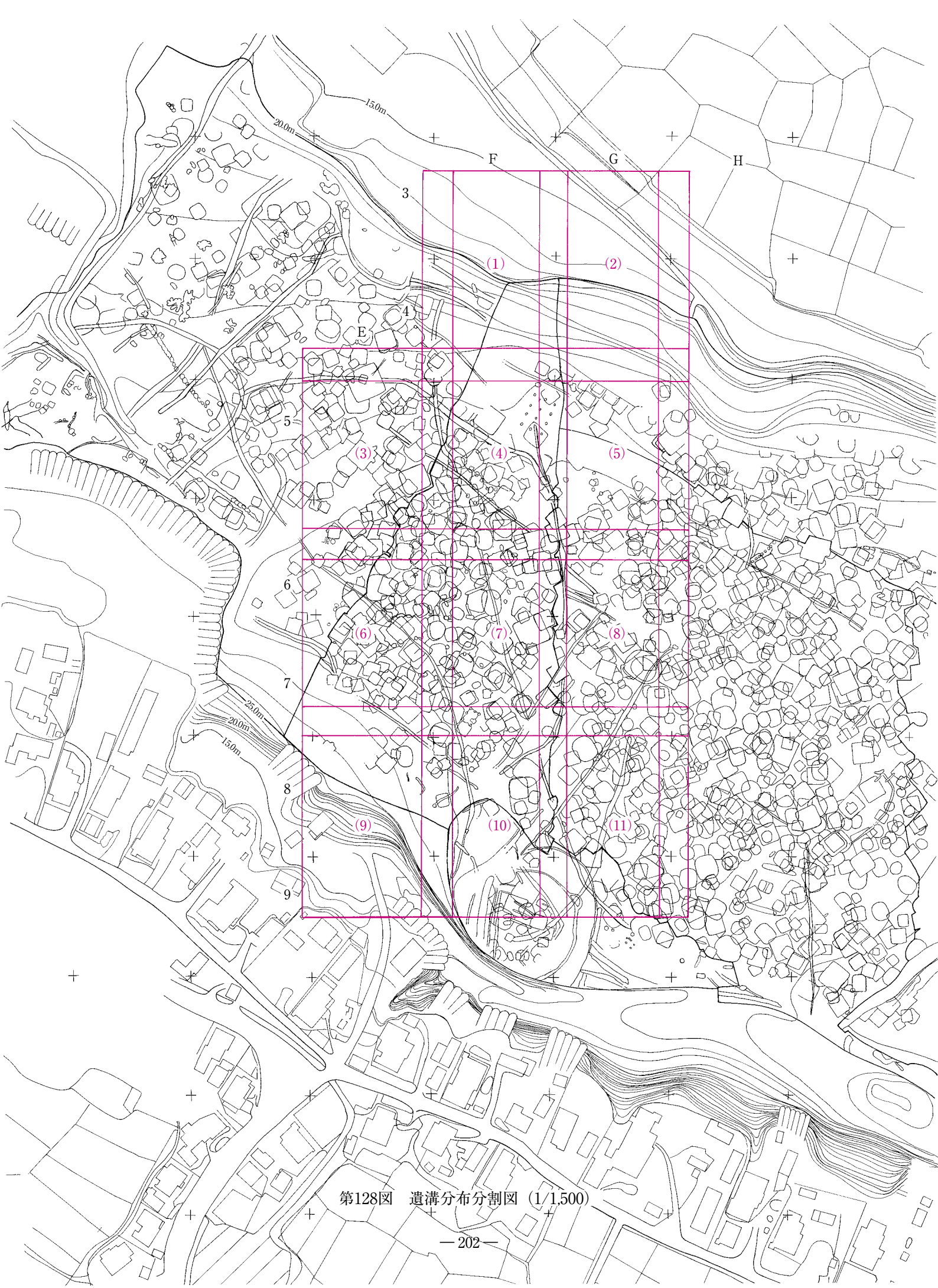
遺構の属性･概要については一覧表（第１表～第６表）に示した。この場合の遺構とは竪穴住居、土坑･土坑墓、方形周溝墓、掘立柱建物、溝である。

２　遺物実測図について

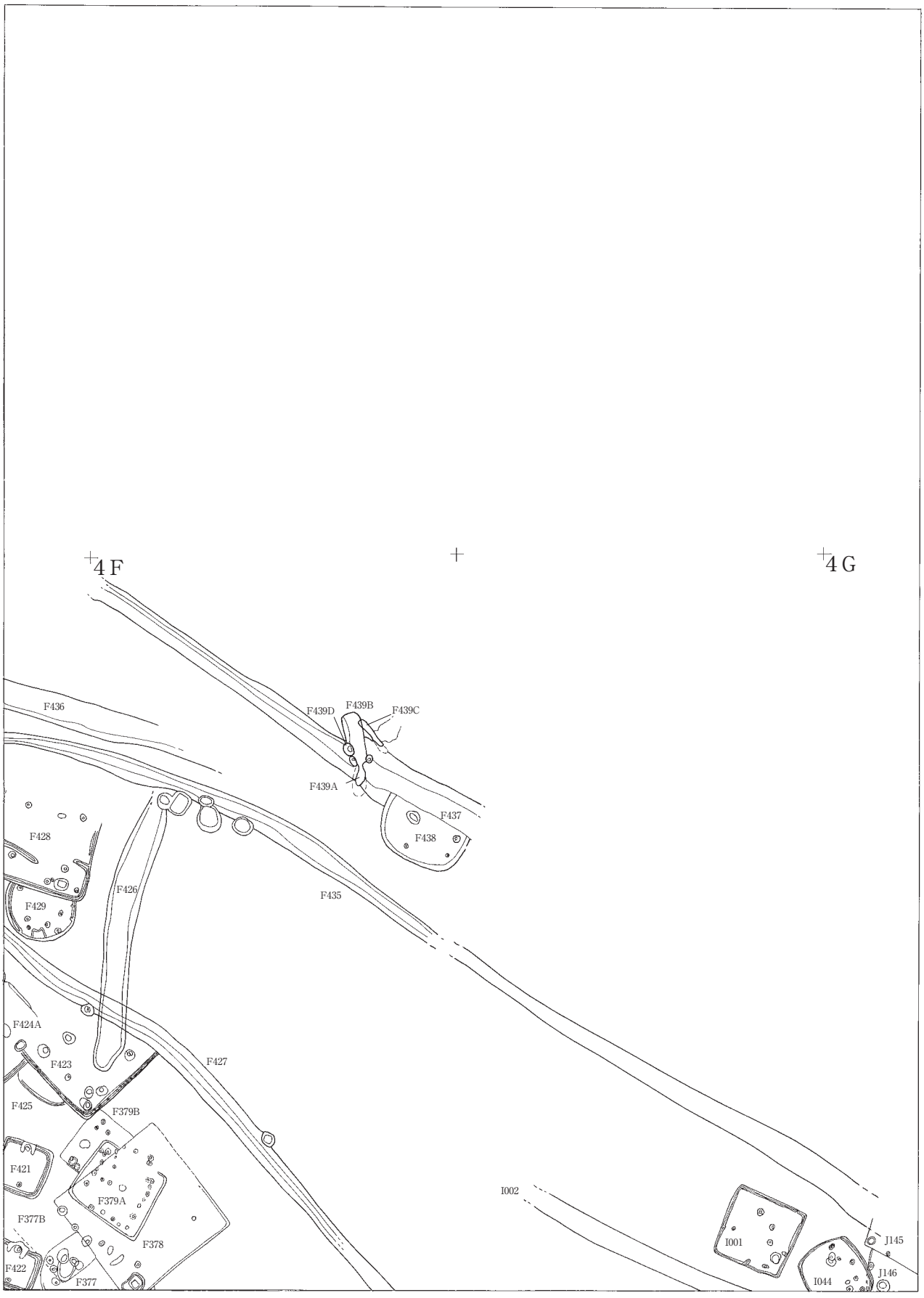
遺物実測図の内、弥生時代以降については、遺構実測図中に縮小・掲載した他に、一括して章末に掲載した。土器については、まず時代別（弥生時代、古墳時代前期、古墳時代中期、古墳時代後期、奈良・平安時代）に大別し、さらに遺構番号順とした。各遺構内での配列は原則として器種別・大きさ別としたが全体の調整上順不同の場合もある。土器以外の遺物は弥生時代の磨製石斧のように時代が特定できる遺物は時代別・遺構順にまとめたが、そうでない場合はその特性に応じて形態別・素材別等とした。なお、拓影図は時期別・部位別・文様別としたが、古墳時代以降については他の要素も加味した。

３　遺構一覧表について

全体の掲載遺構数を出来るだけ多くするために、各遺構の事実記載は最小限に留めたが、その不備を補う意味からも遺構一覧表を作成した。表は竪穴住居、土坑･土坑墓、方形周溝墓、掘立柱建物、溝がある。各項目の留意点については、各々凡例に示した。



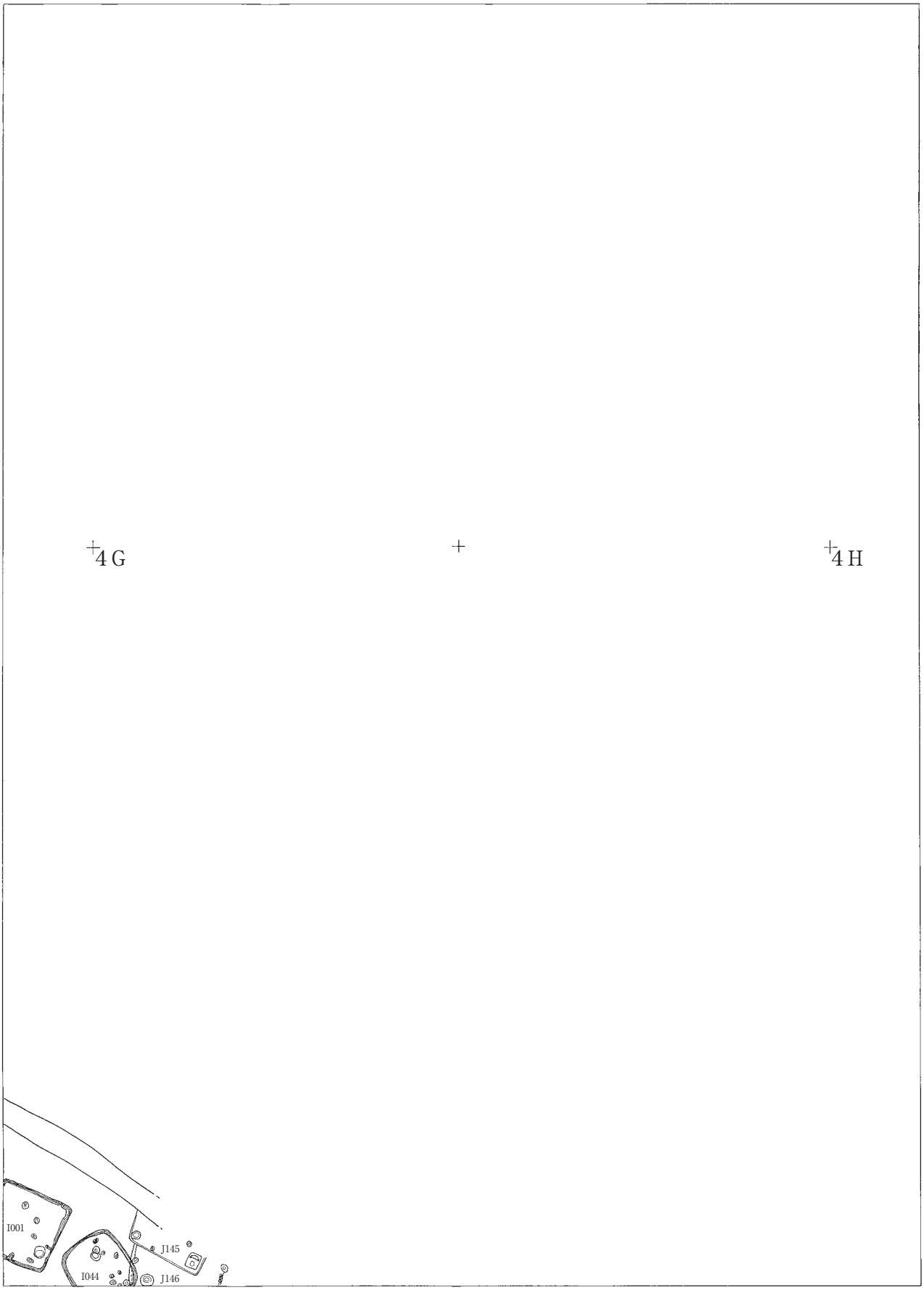
第128図　遺溝分布分割図（1/1,500）



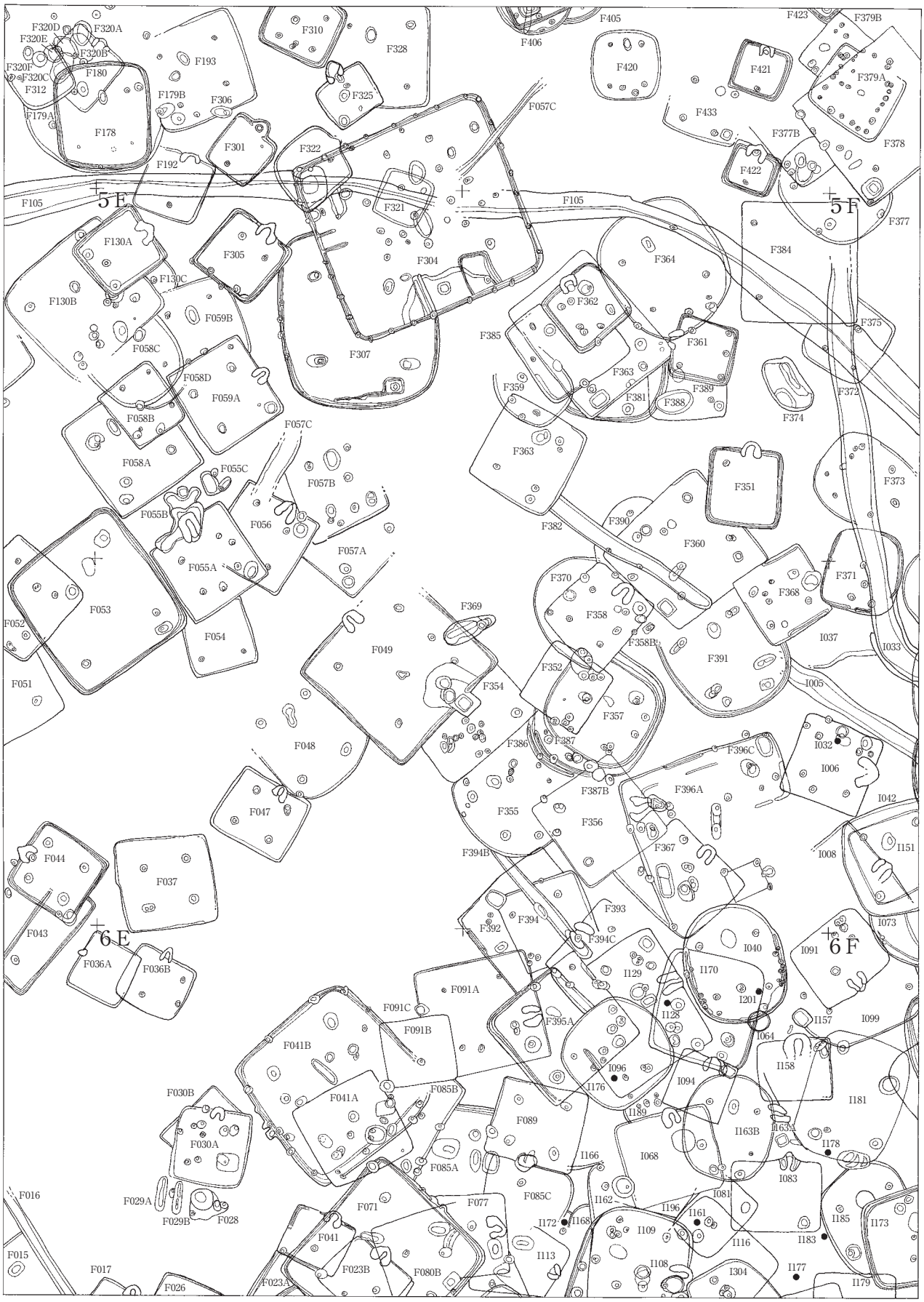
（2）

（4）

第129図　遺構分布図（１）



第130図　遺構分布図（２）



第131図　遺構分布図（3）

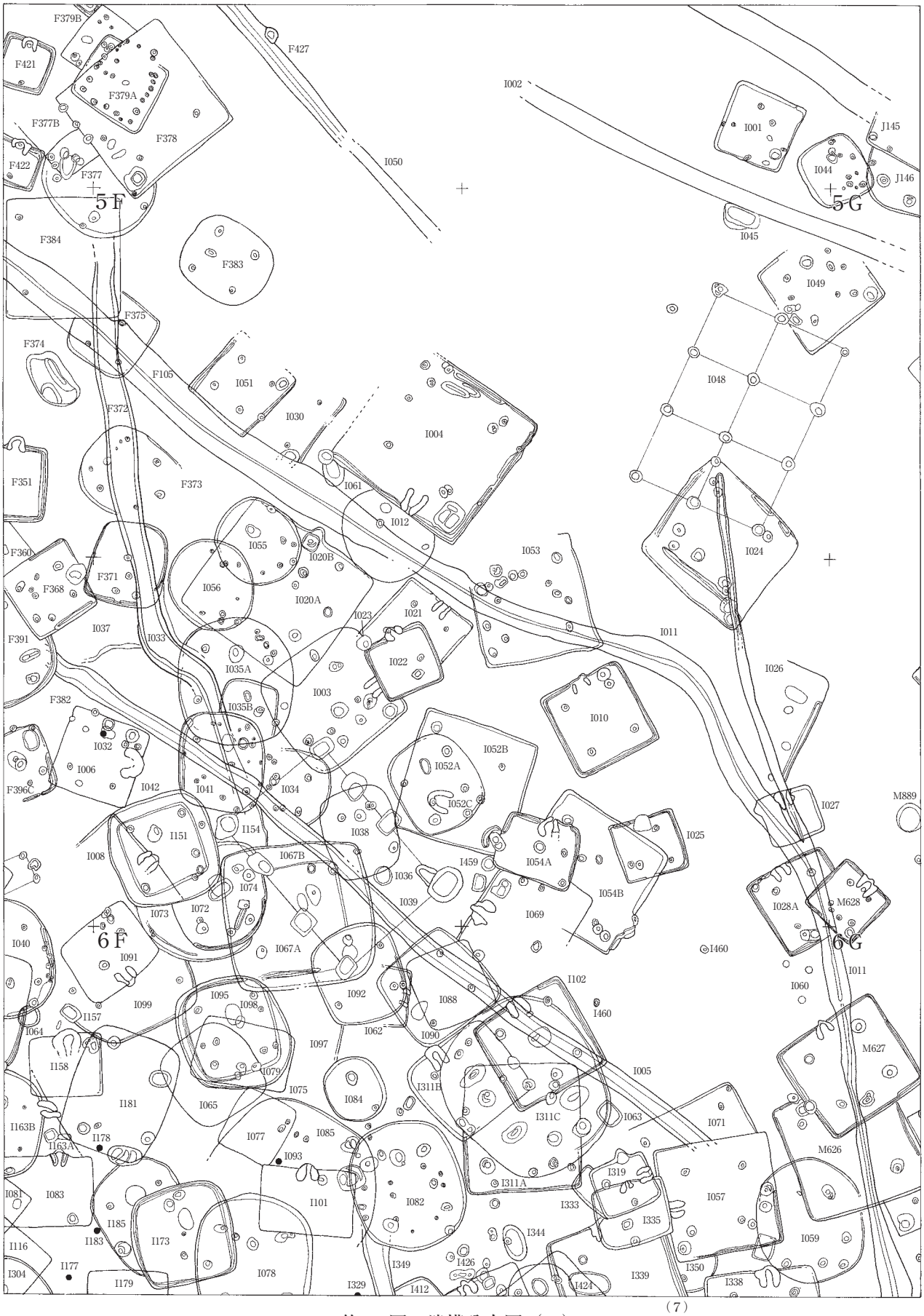
（4）

（6）

（1）

（3）

（5）

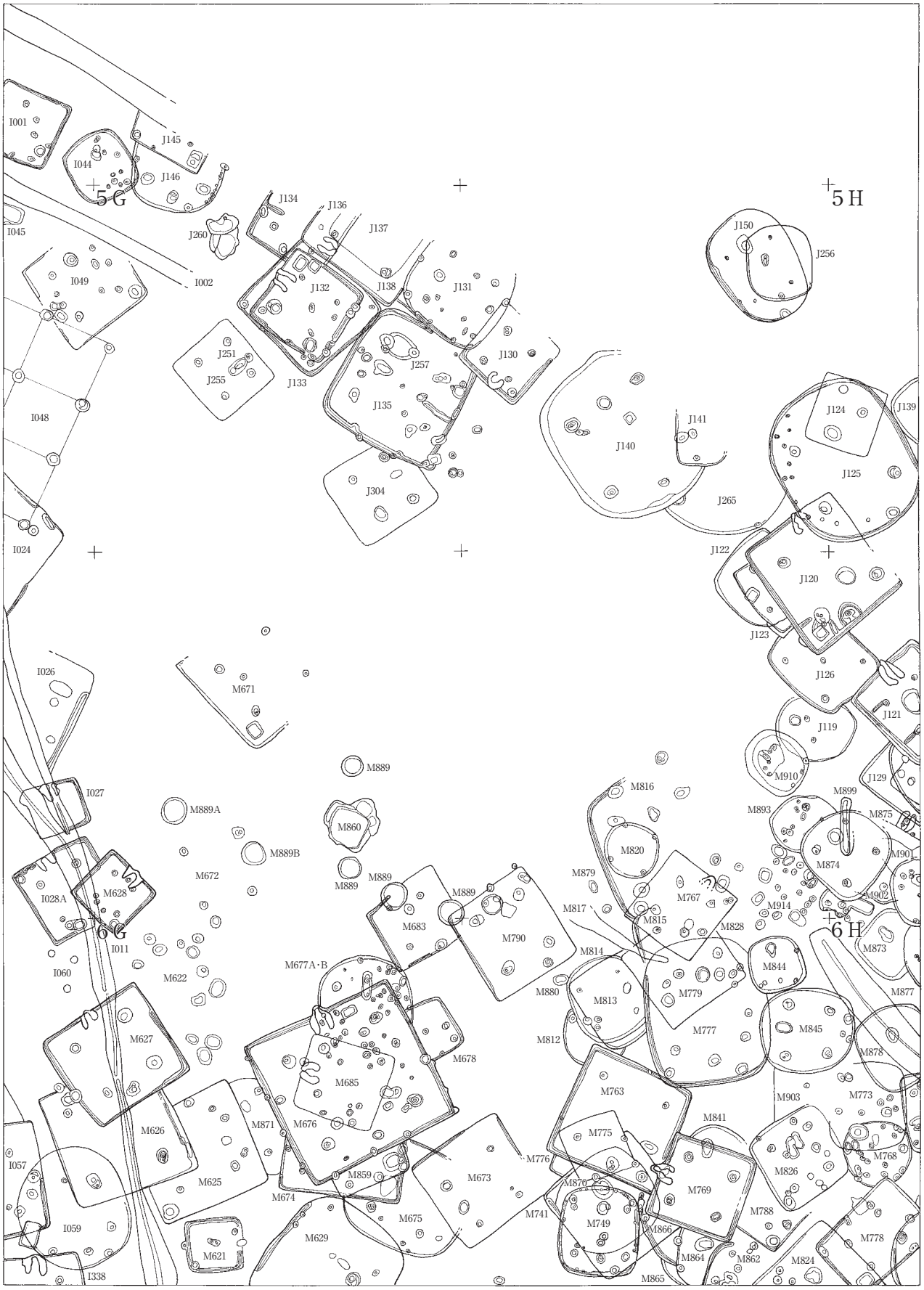


（7）

第132図　遺構分布図（４）

（2）

（4）

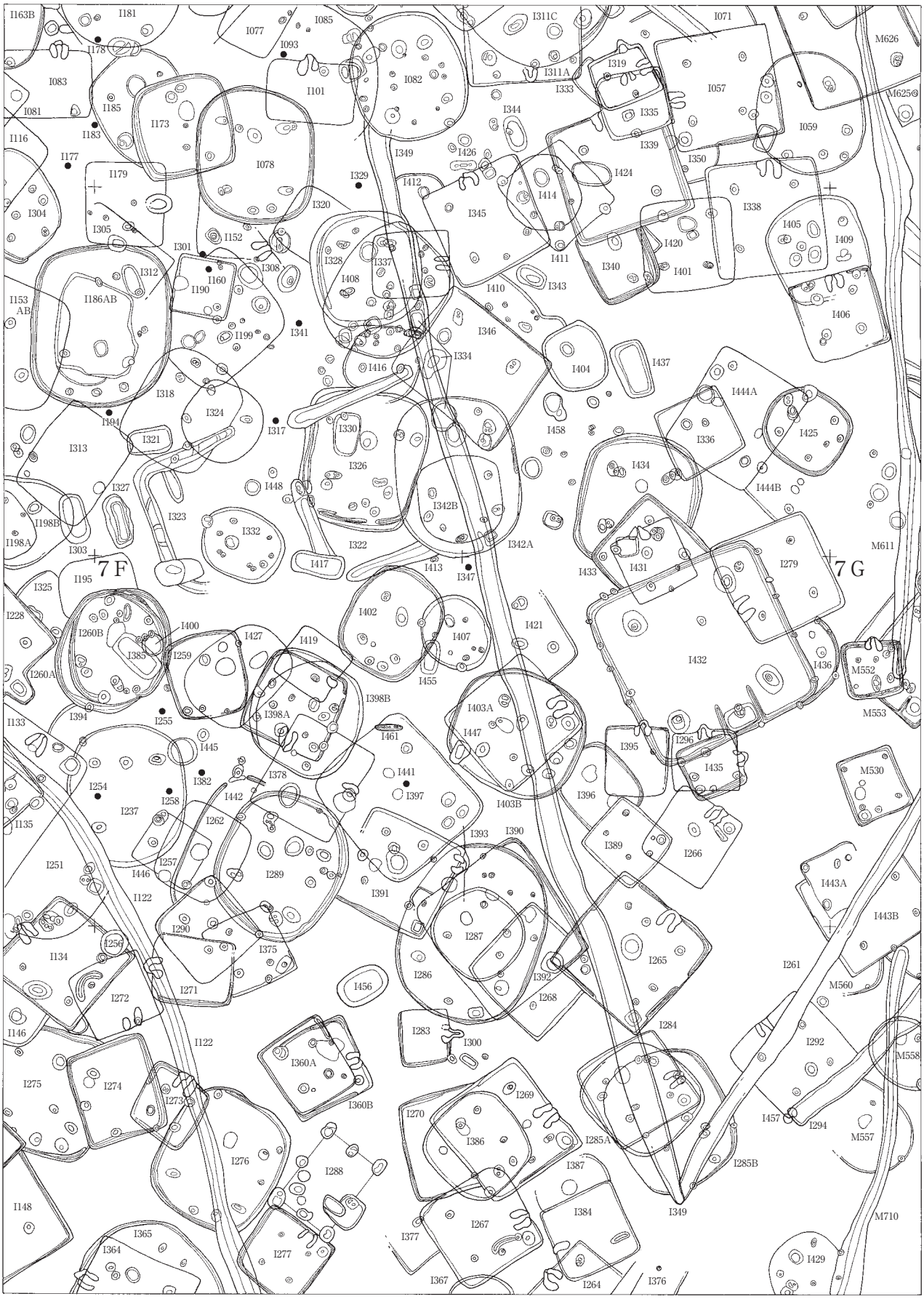


第133図　遺構分布図（５）

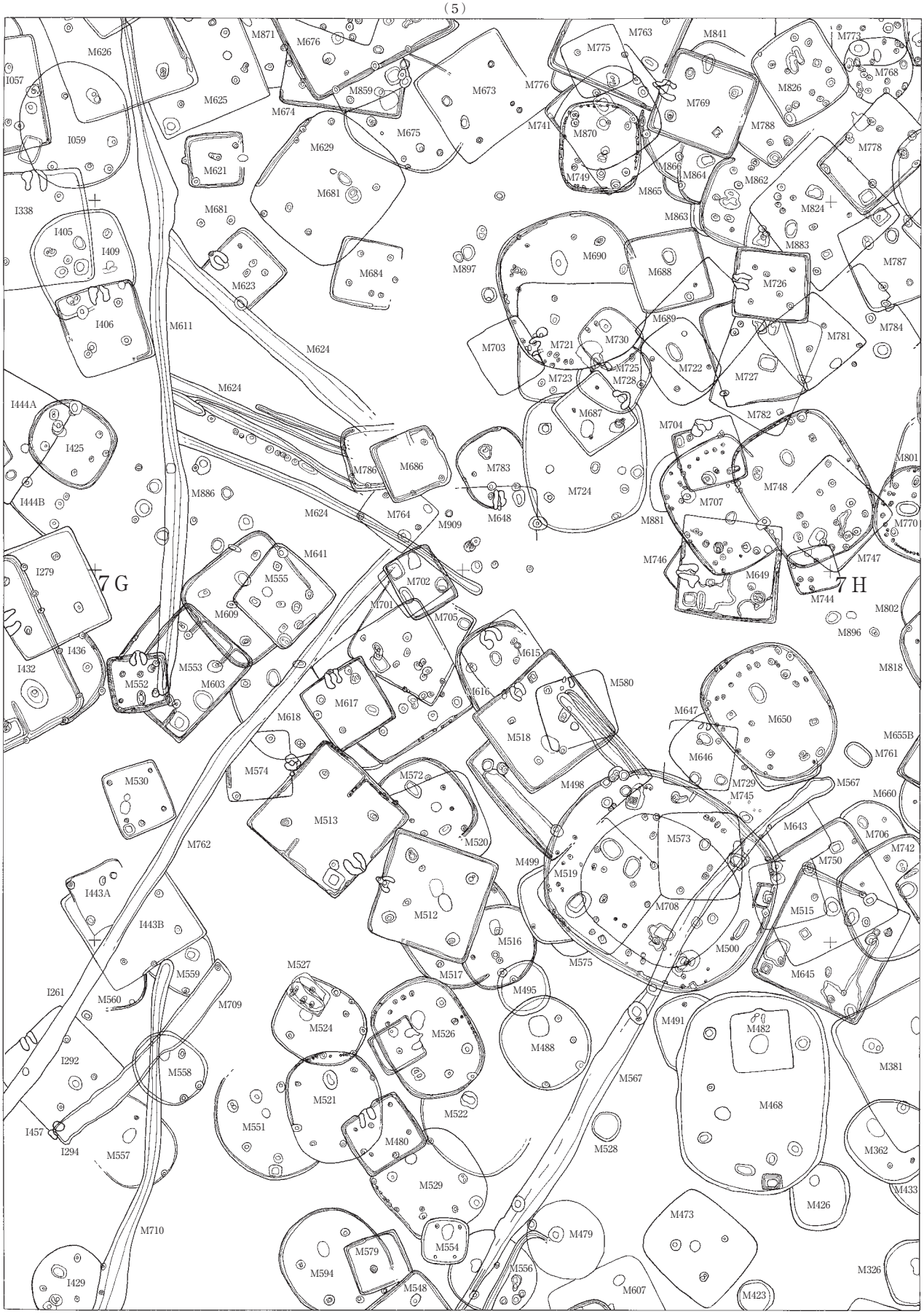
（7）

（9）

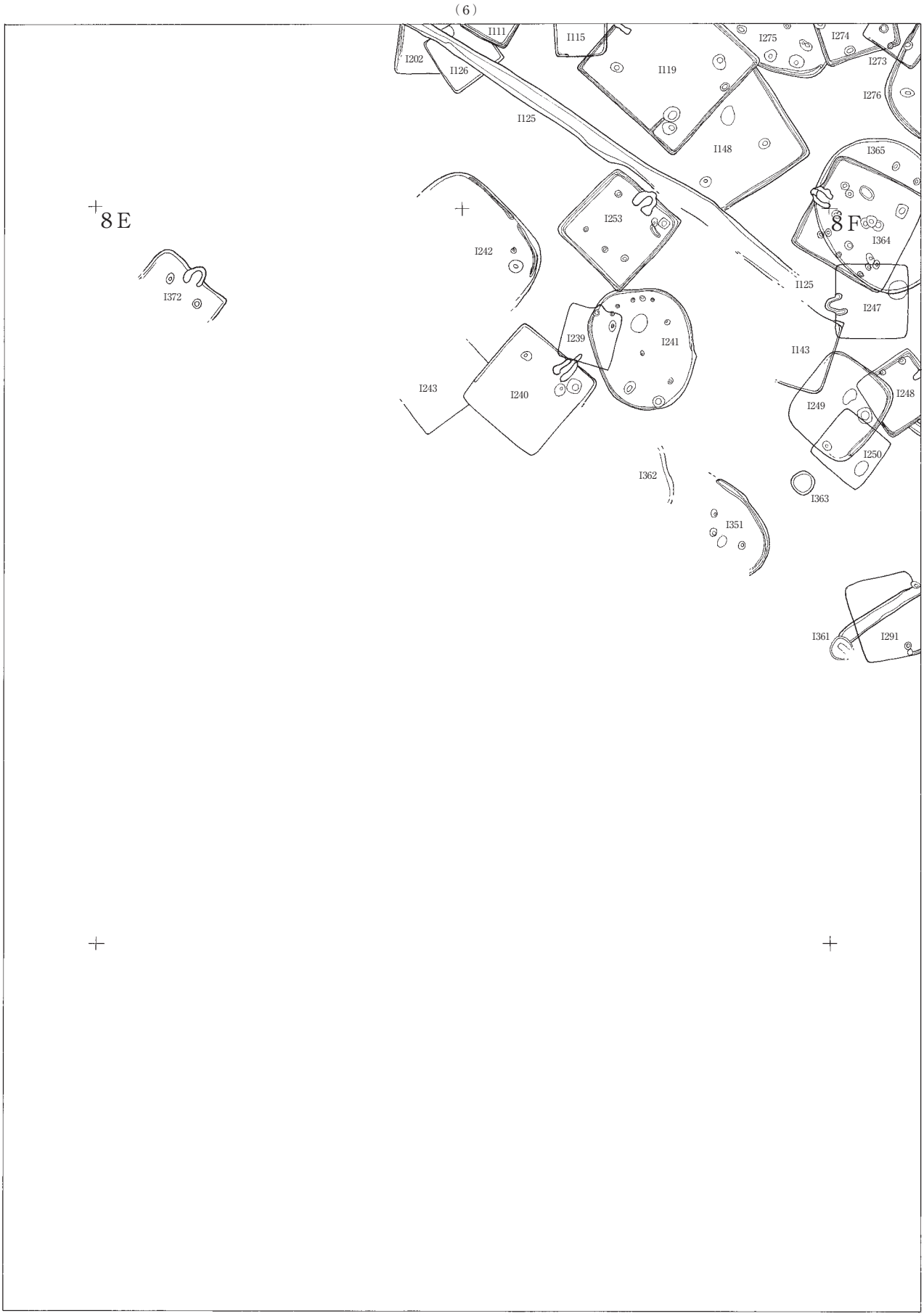
第134図　遺構分布図（6）



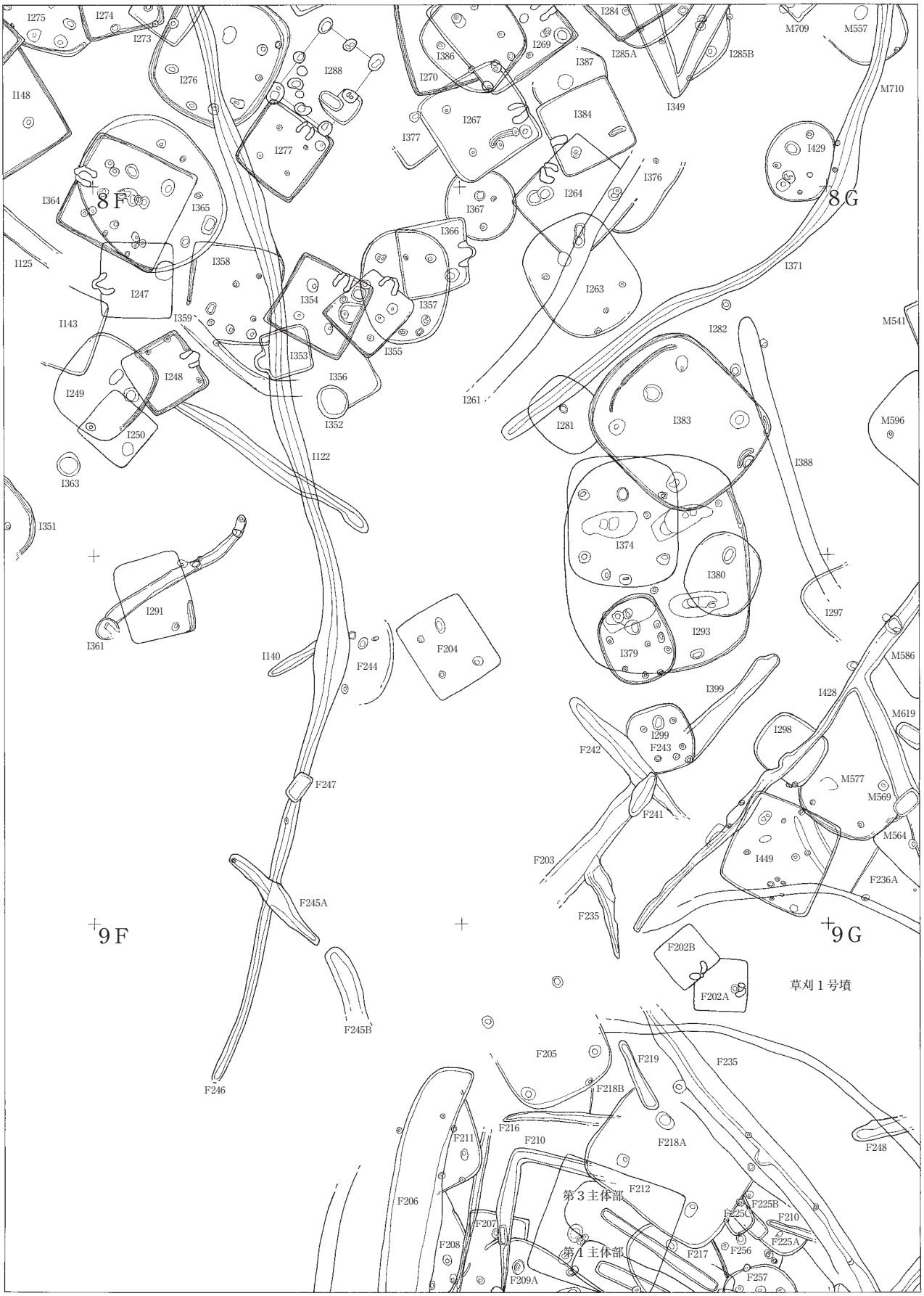
第135図　遺構分布図（7）



第136図　遺構分布図（８）



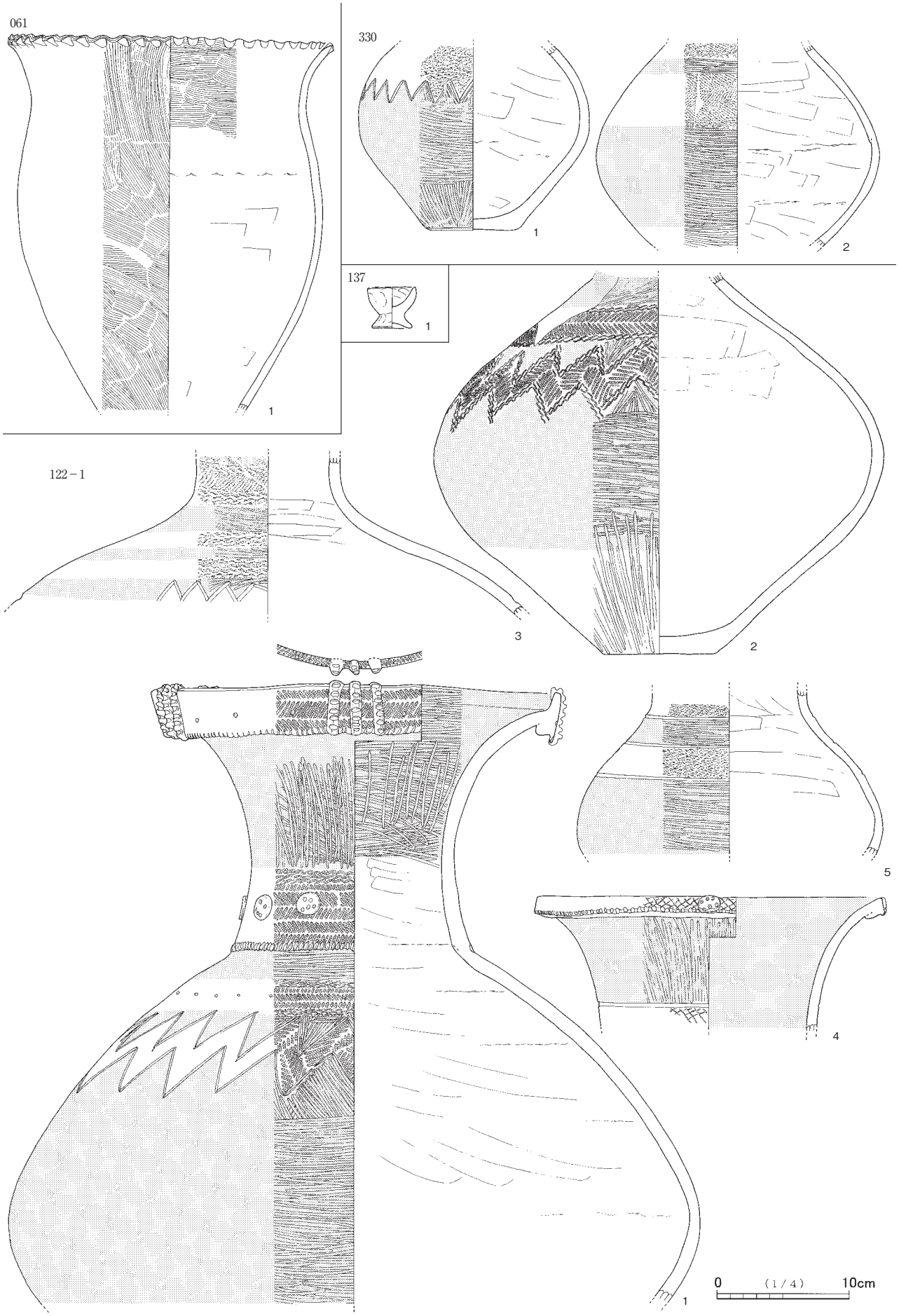
第137図　遺構分布図（9）



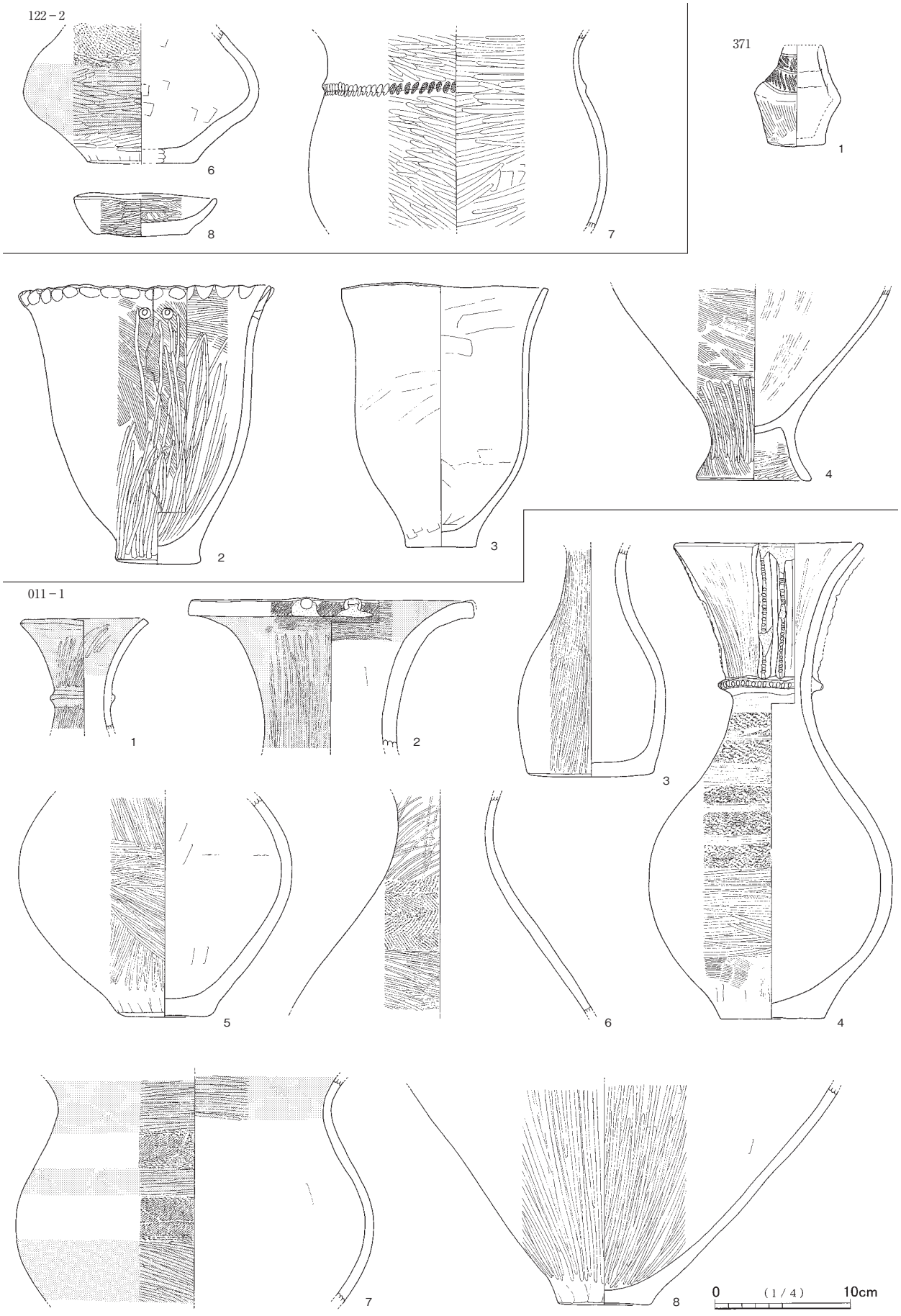
第138図　遺構分布図（10）

(10)

第139図　遺構分布図（11）

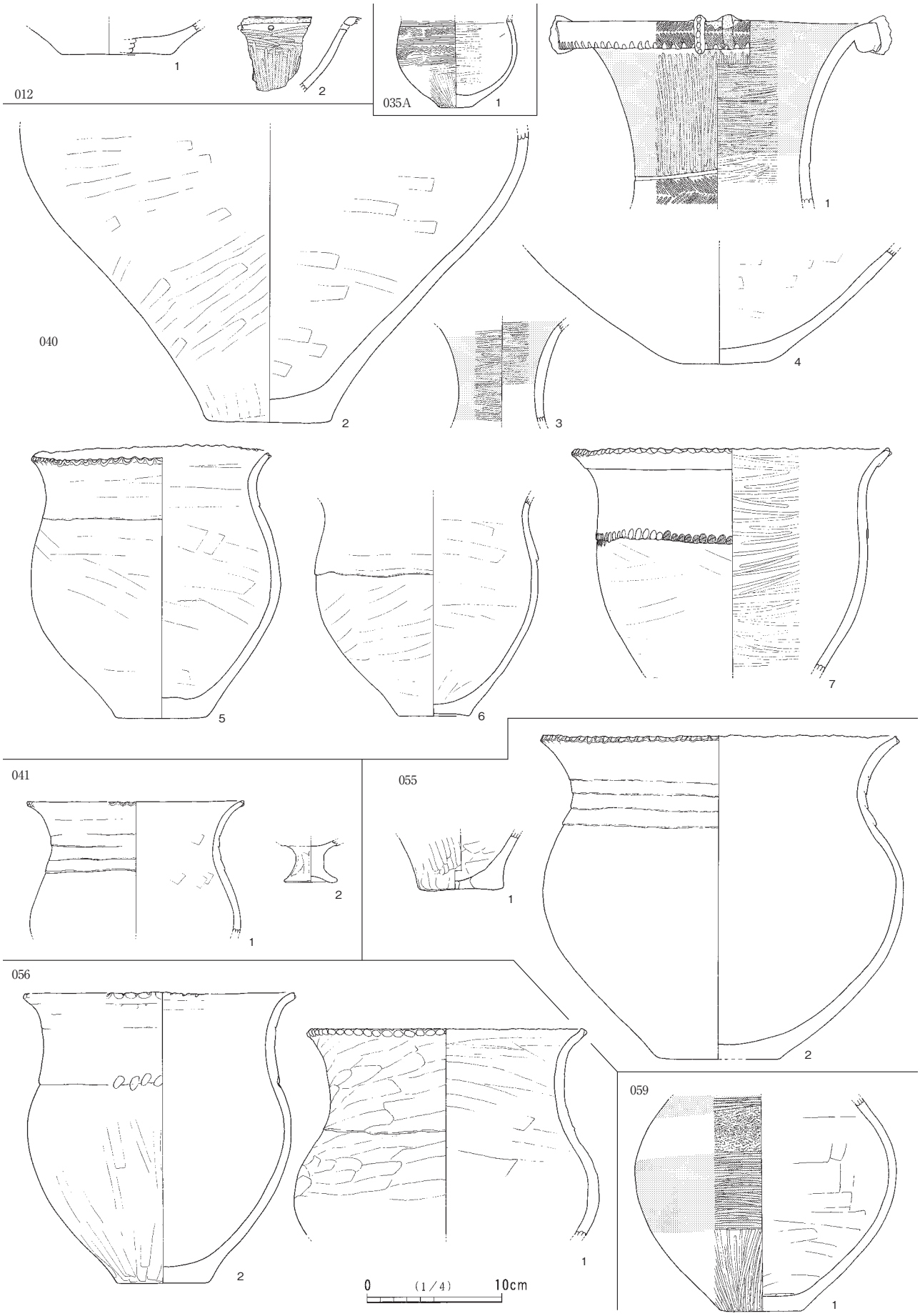


第140図　遺構出土弥生土器（1）

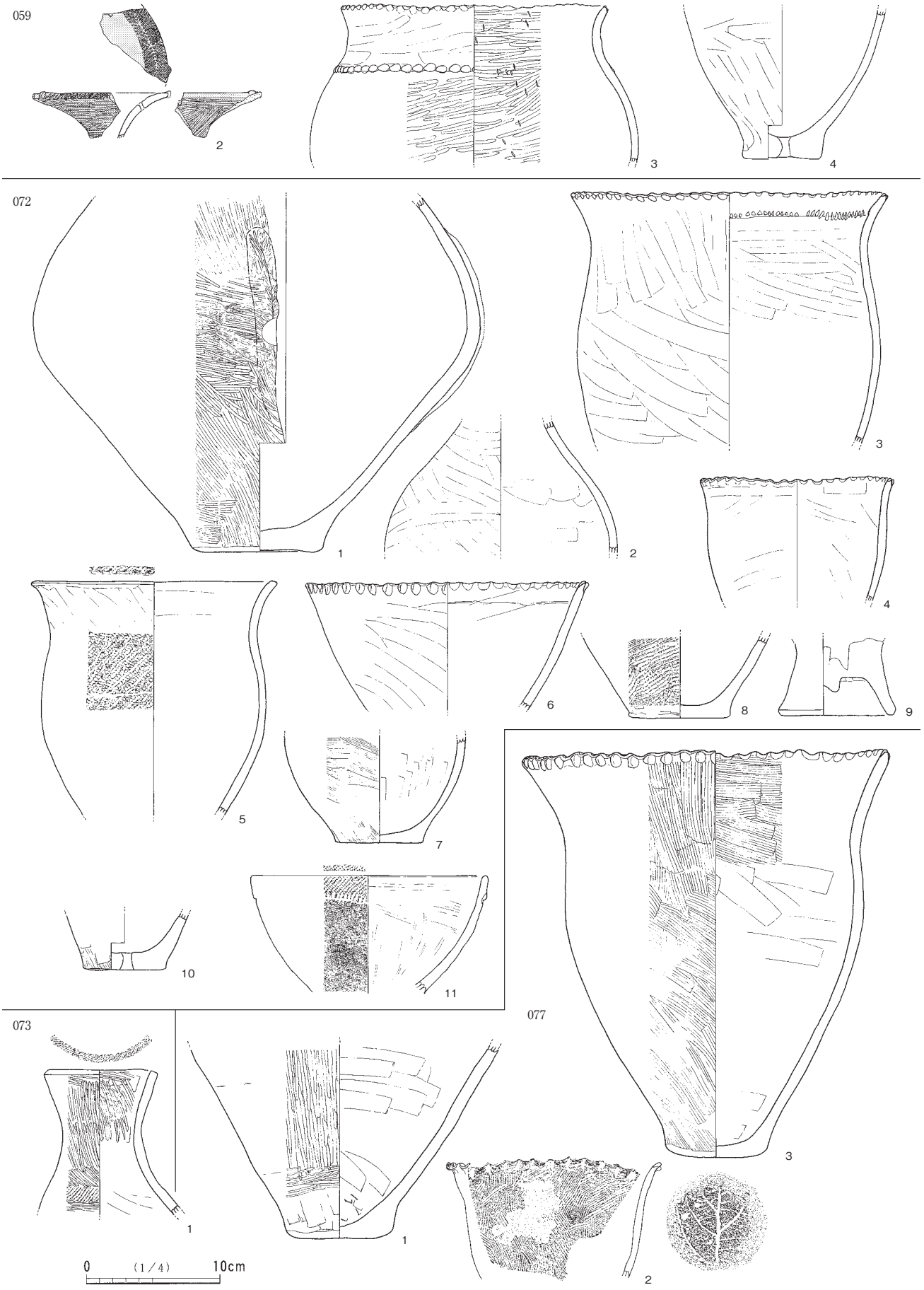


第141図　遺構出土弥生土器（2）

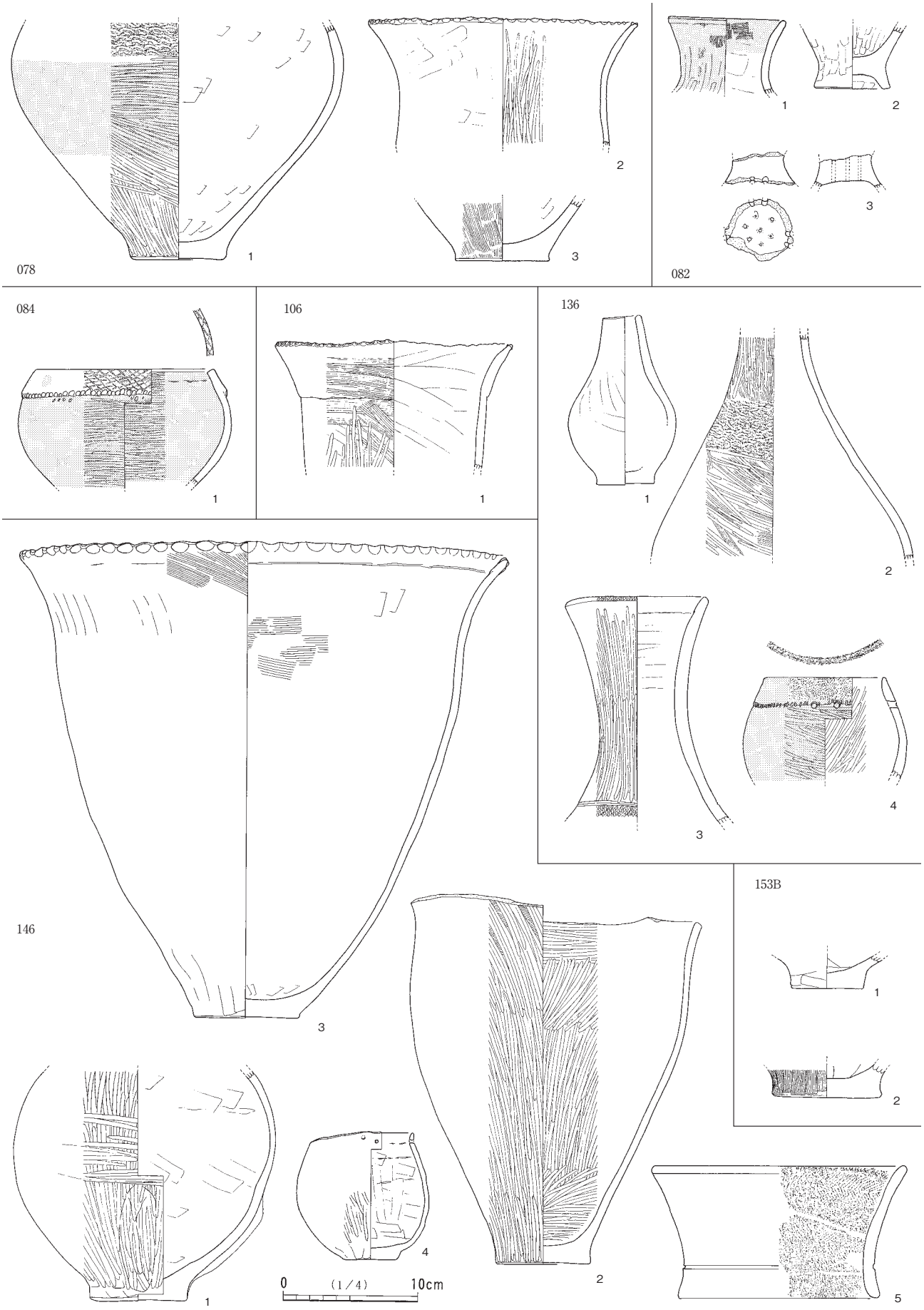
第142図　遺構出土弥生土器（３）



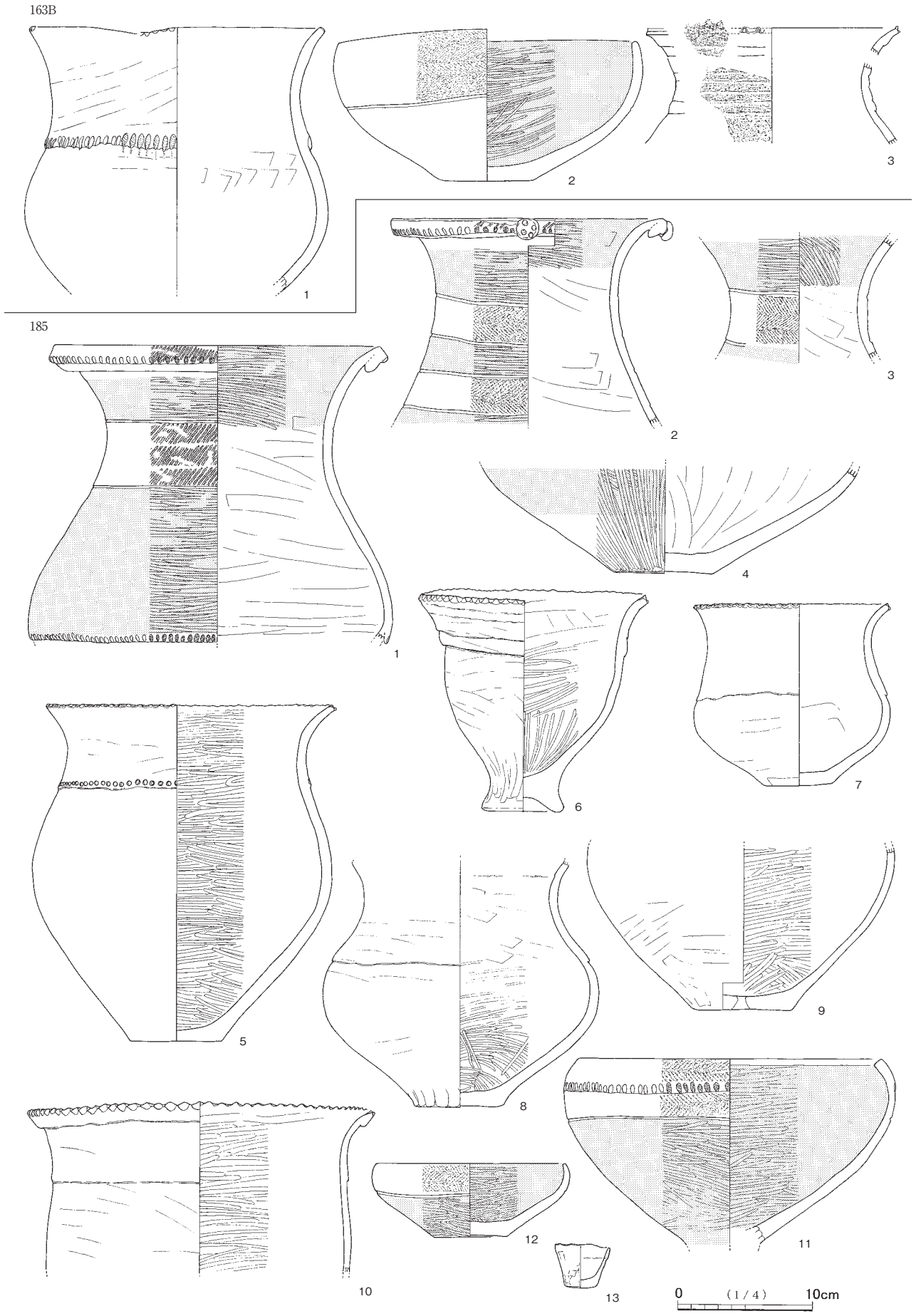
第143図　遺構出土弥生土器（4）



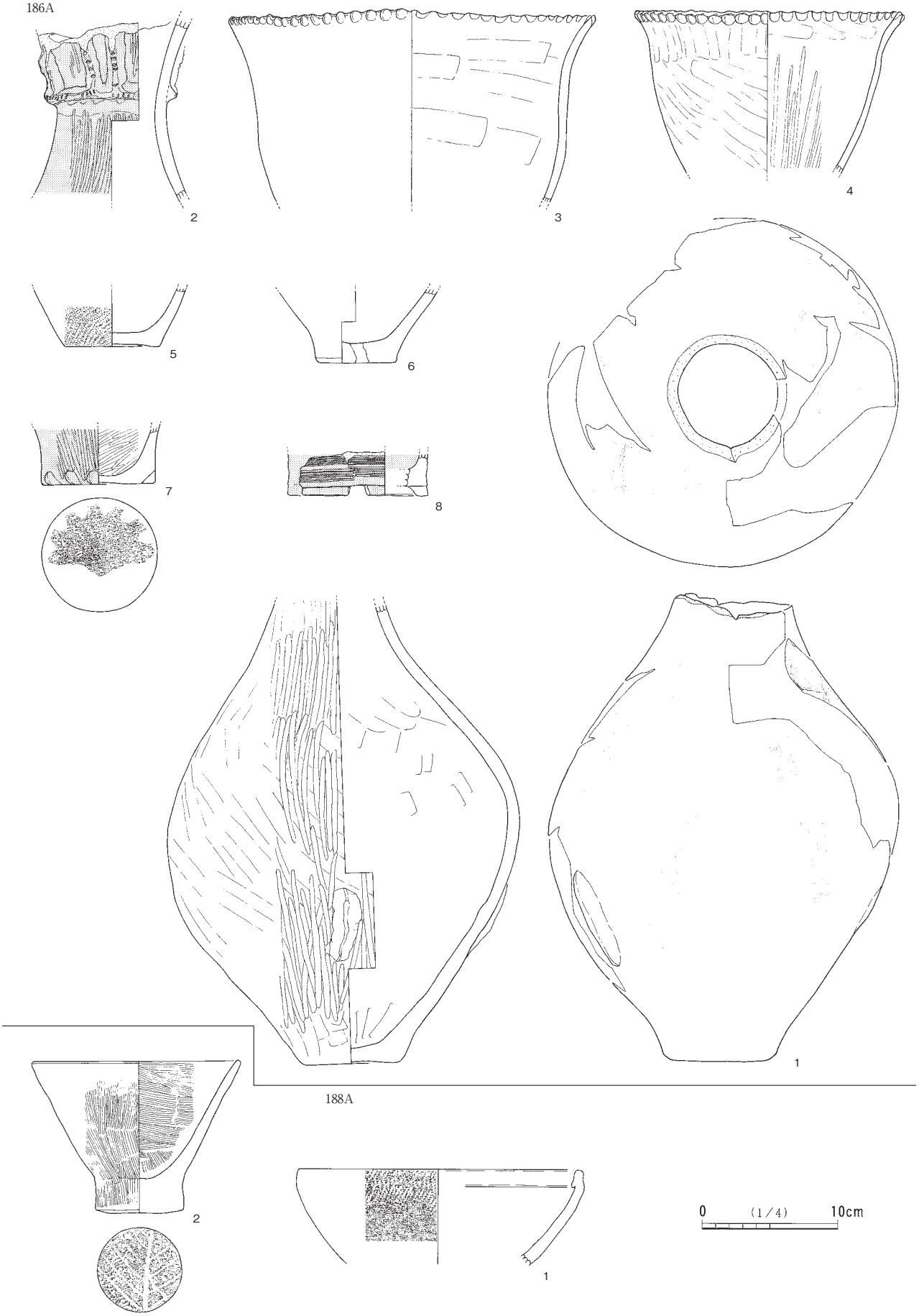
第144図　遺構出土弥生土器（5）



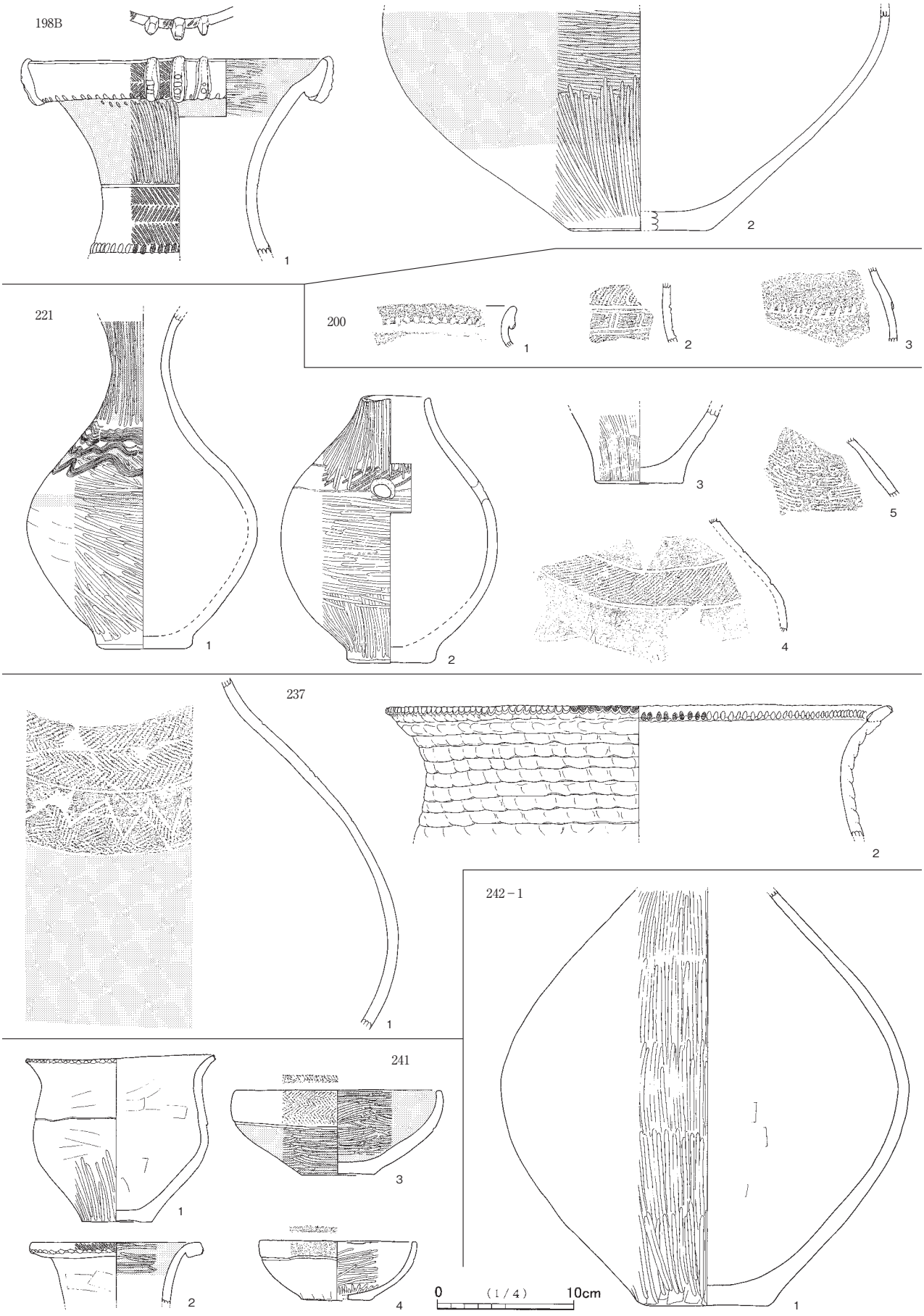
第145図　遺構出土弥生土器（6）



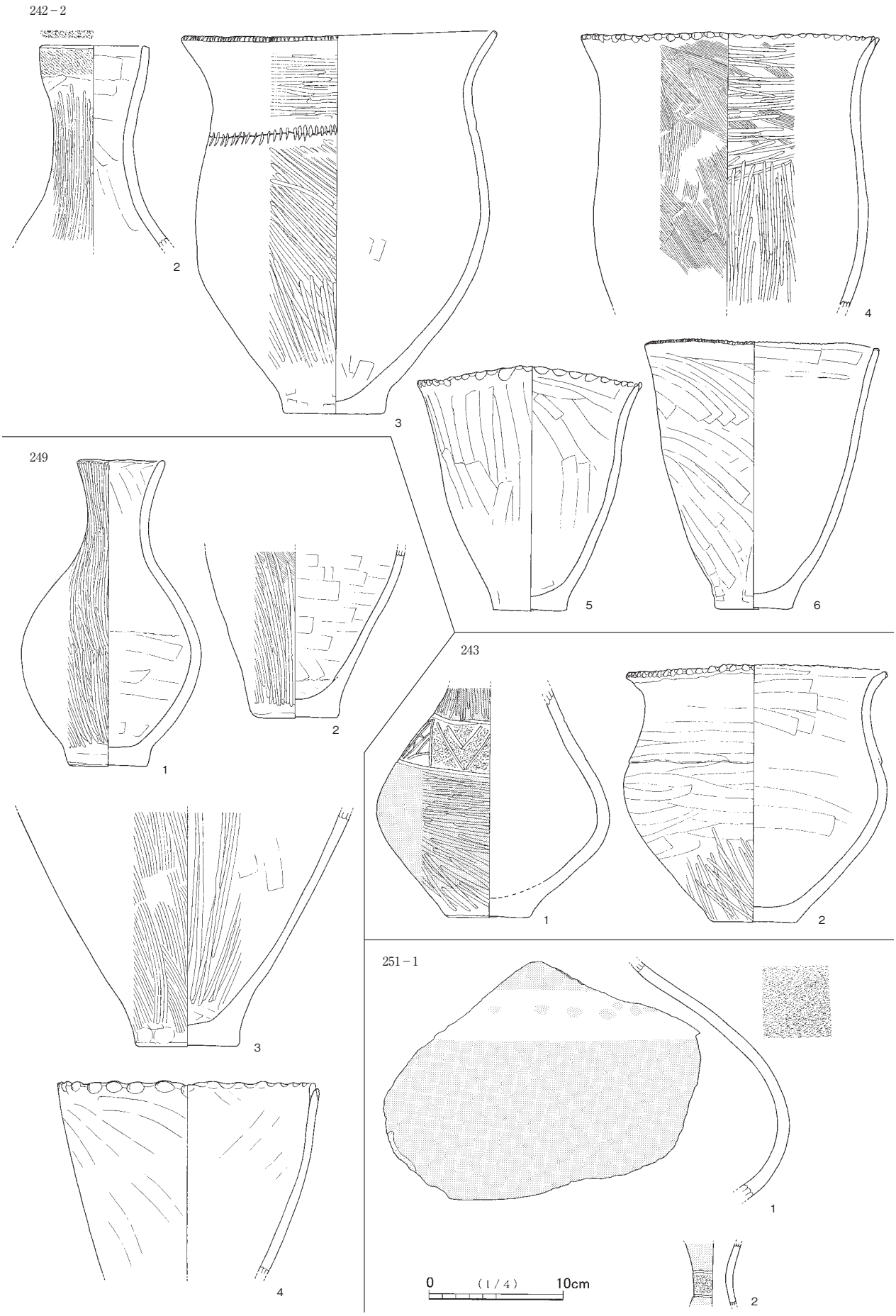
第146図　遺構出土弥生土器（7）



第147図　遺構出土弥生土器（8）

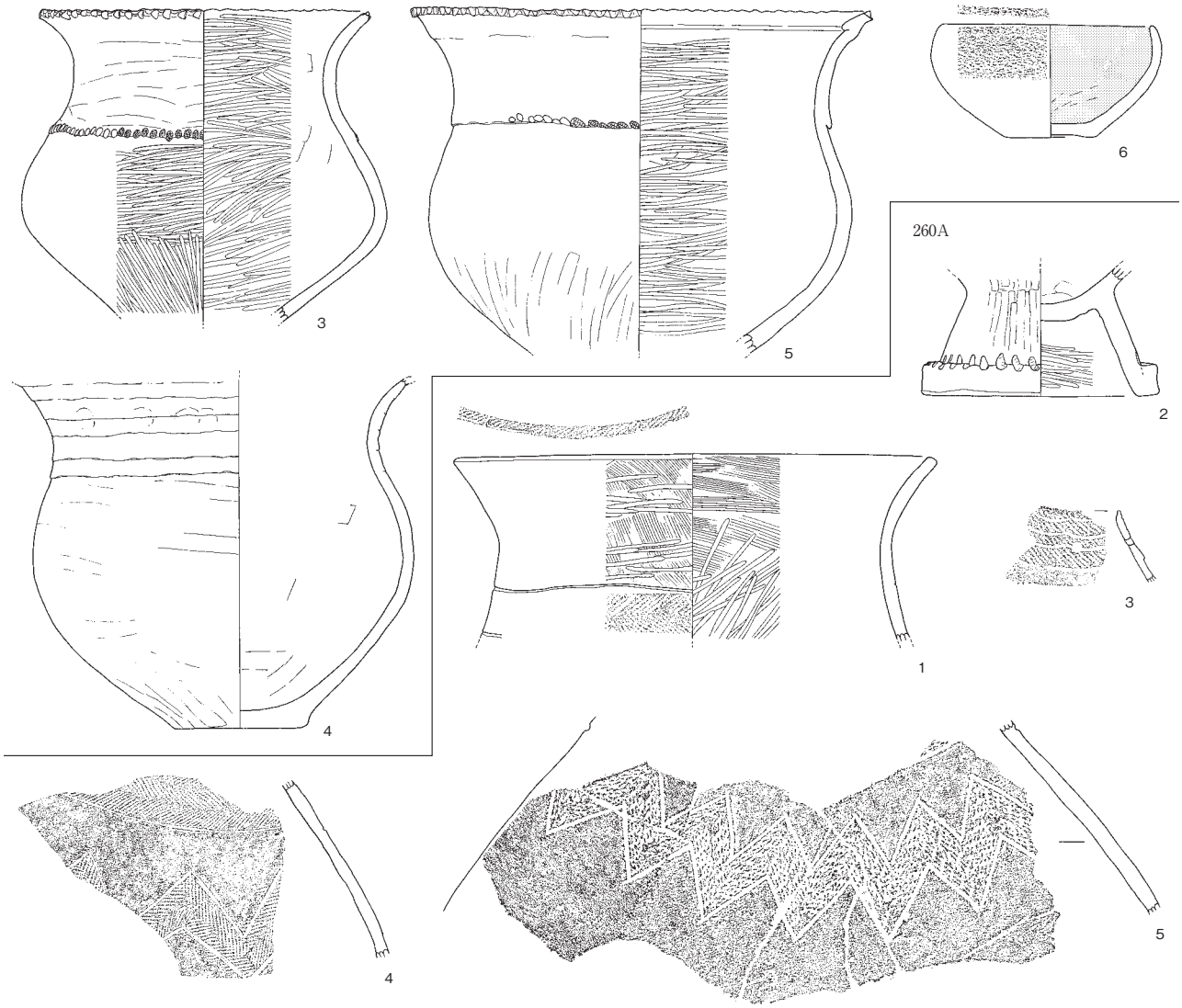


第148図　遺構出土弥生土器（9）

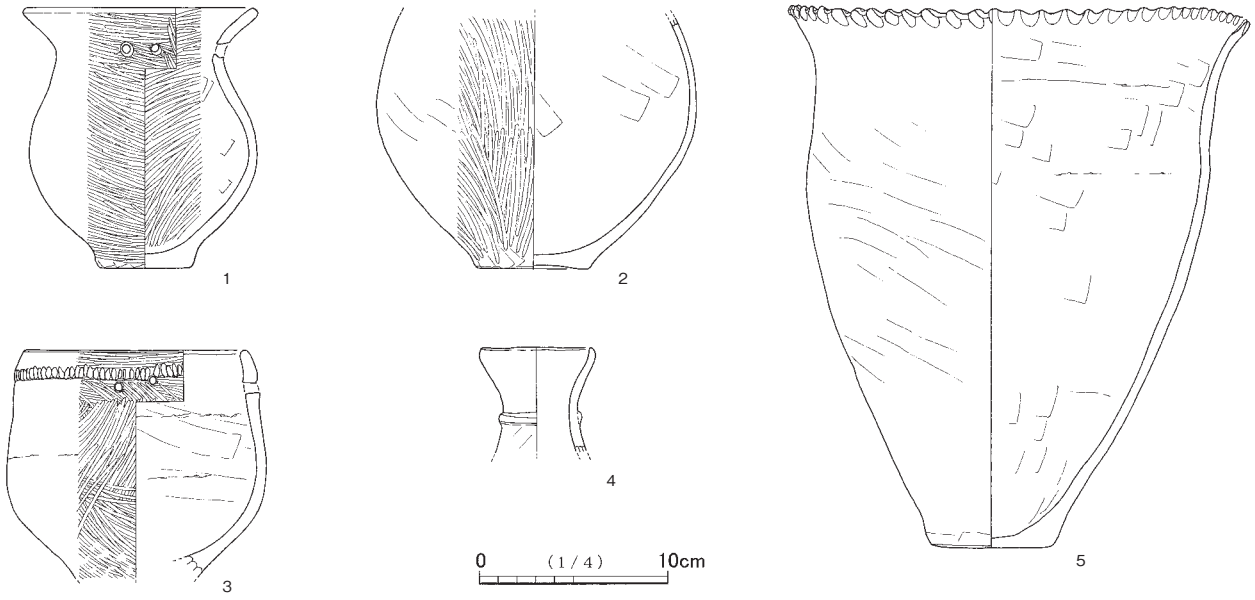


第149図　遺構出土弥生土器（10）

251－2

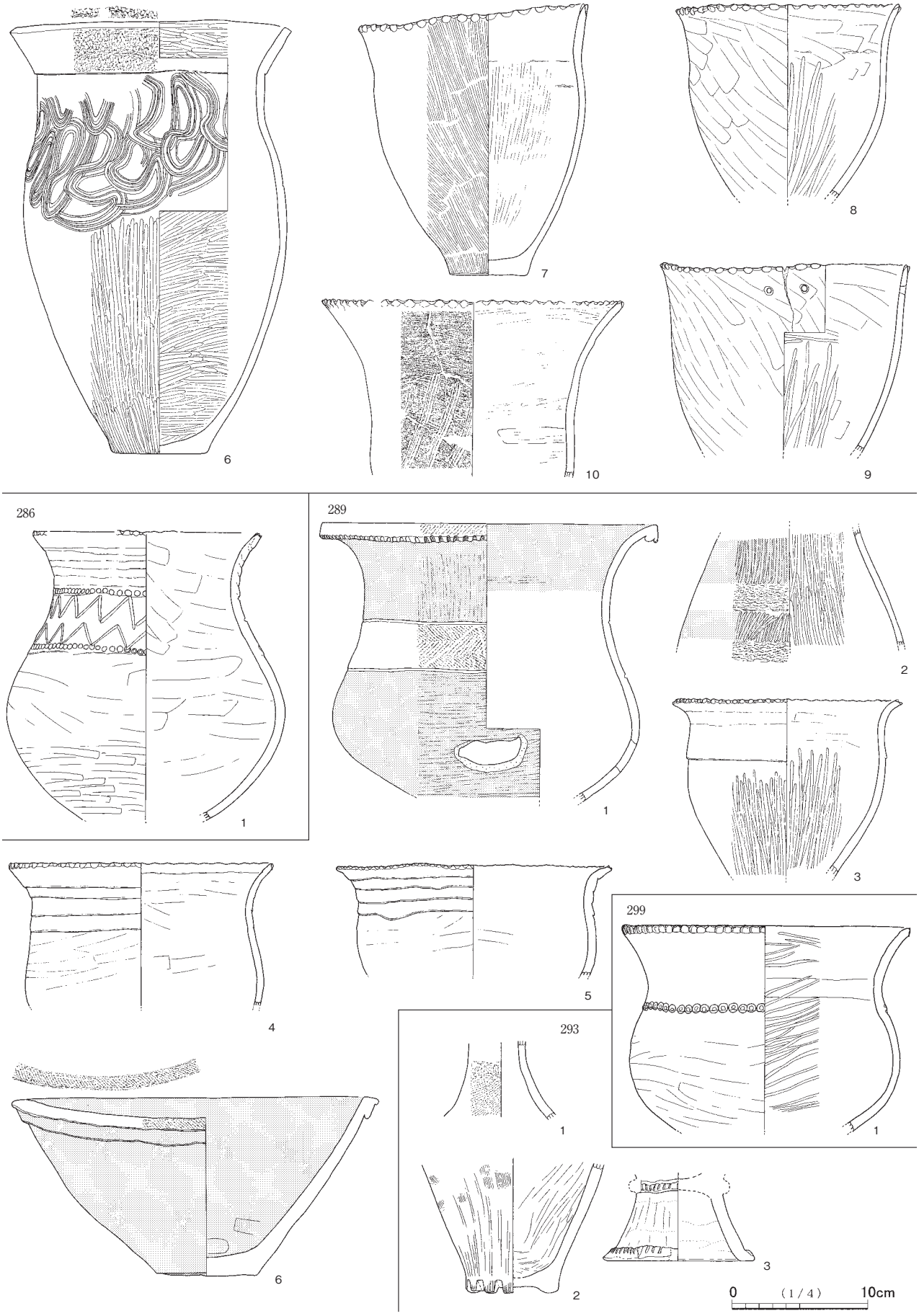


275－1



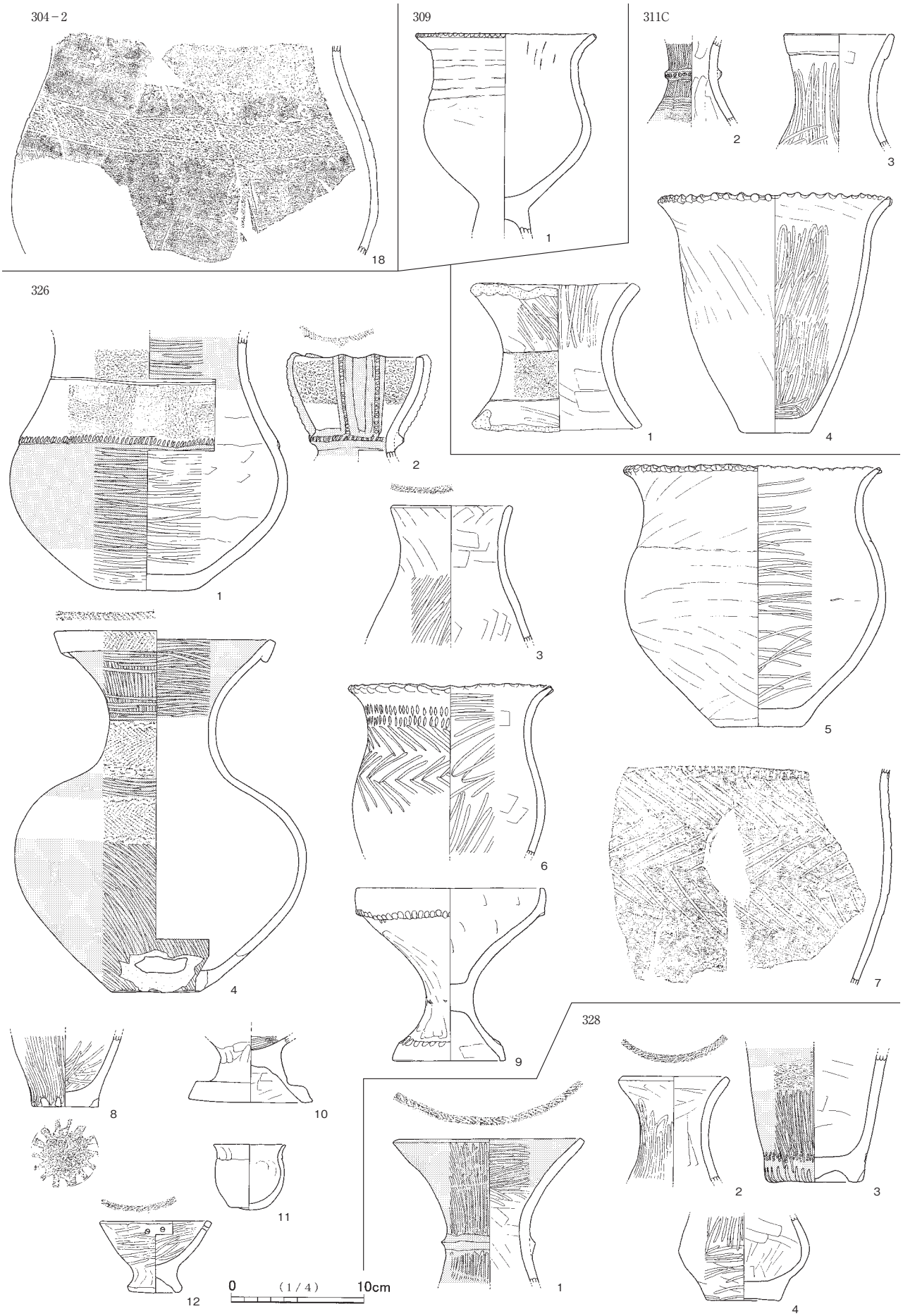
第150図　遺構出土弥生土器（11）

275－2

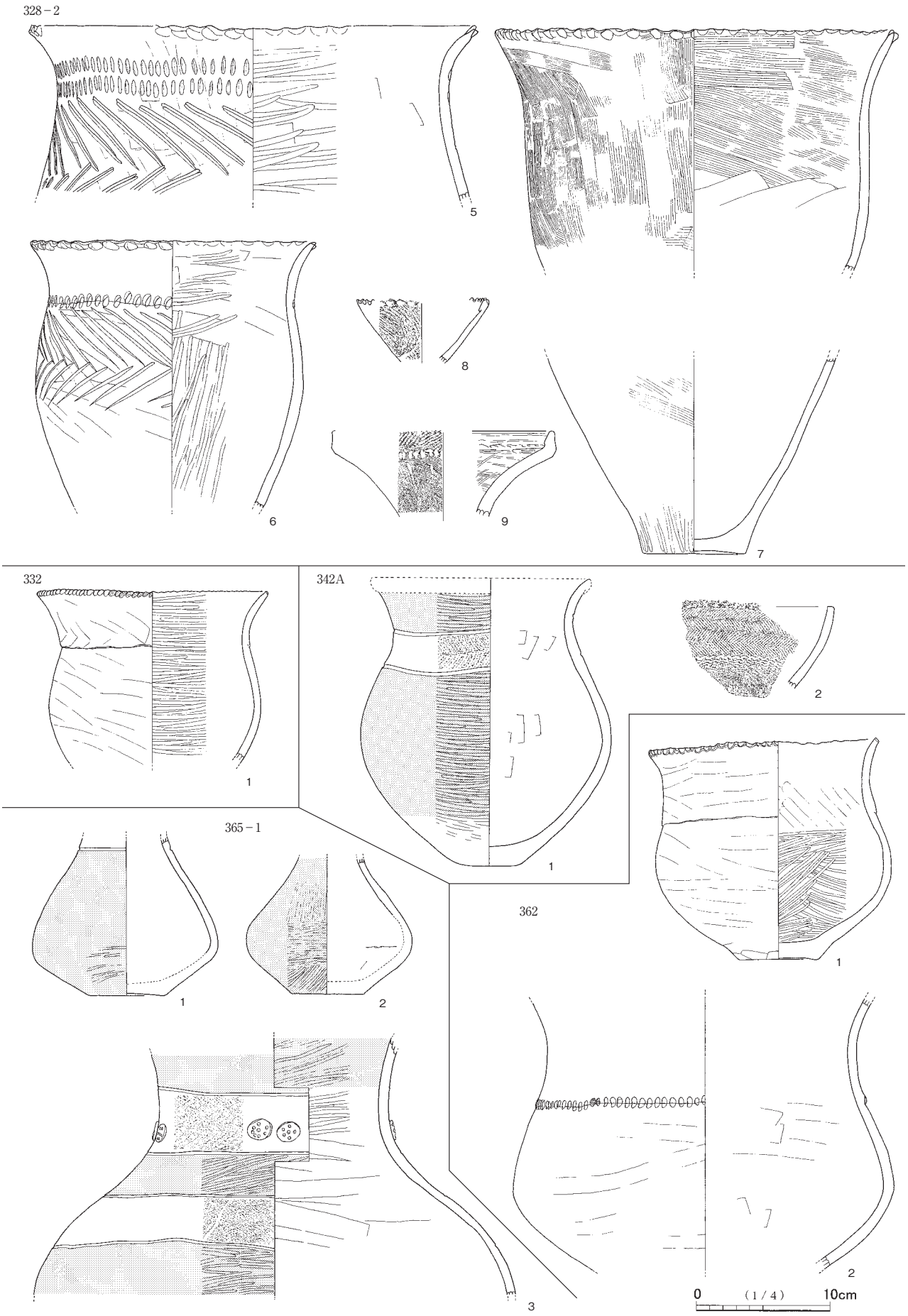


第151図　遺構出土弥生土器（12）

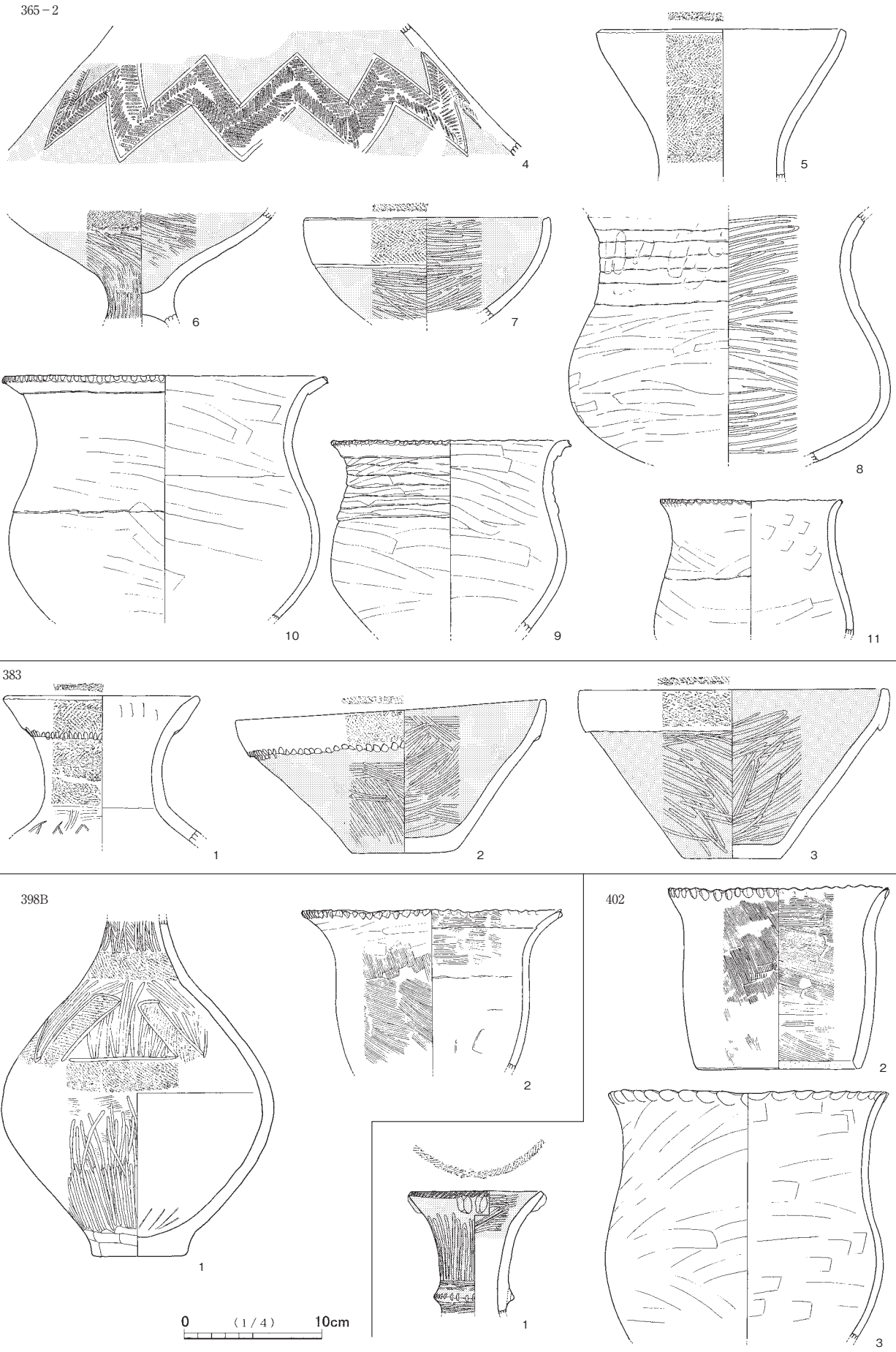
第152図　遺構出土弥生土器（13）



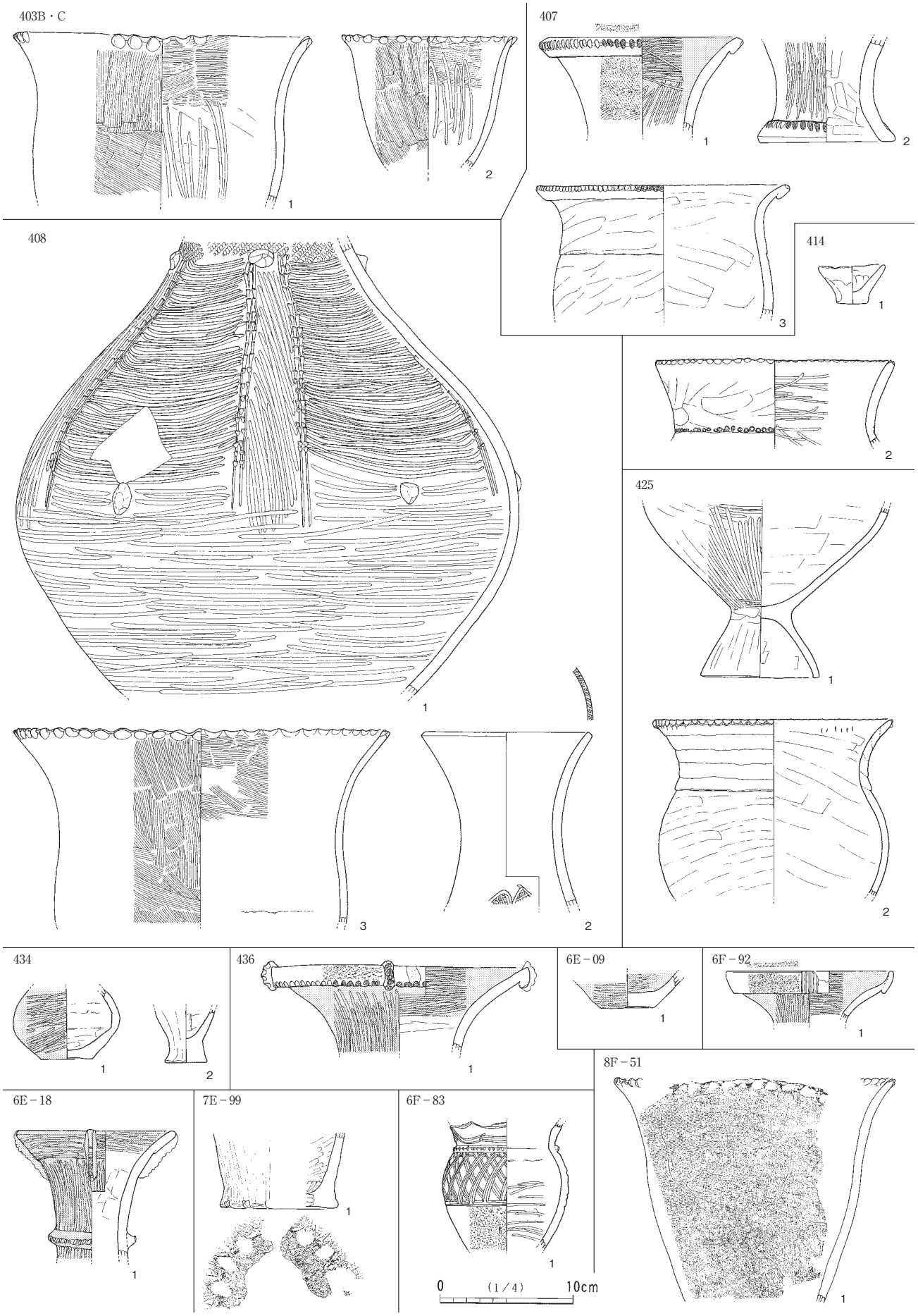
第153図　遺構出土弥生土器（14）



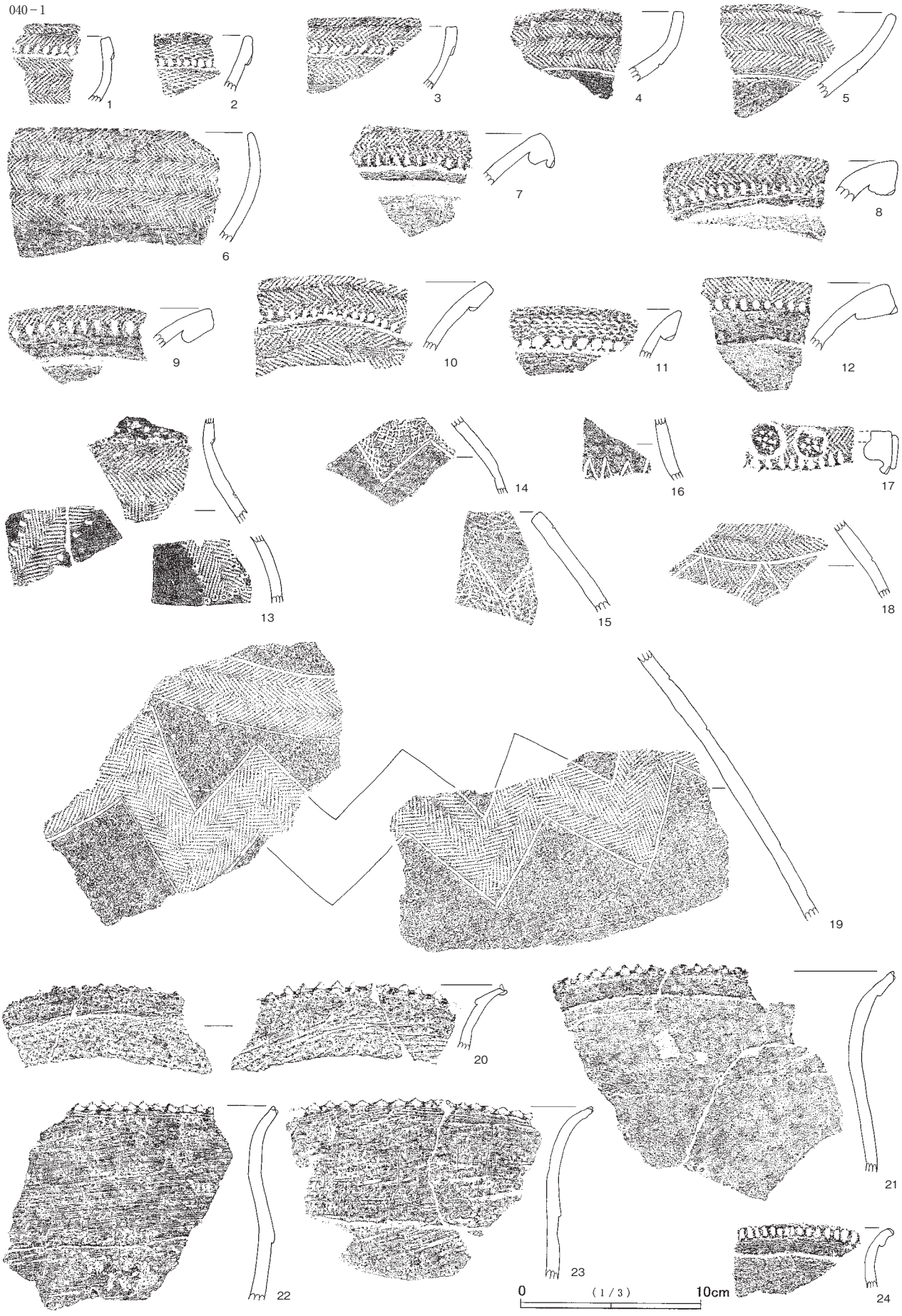
第154図　遺構出土弥生土器（15）



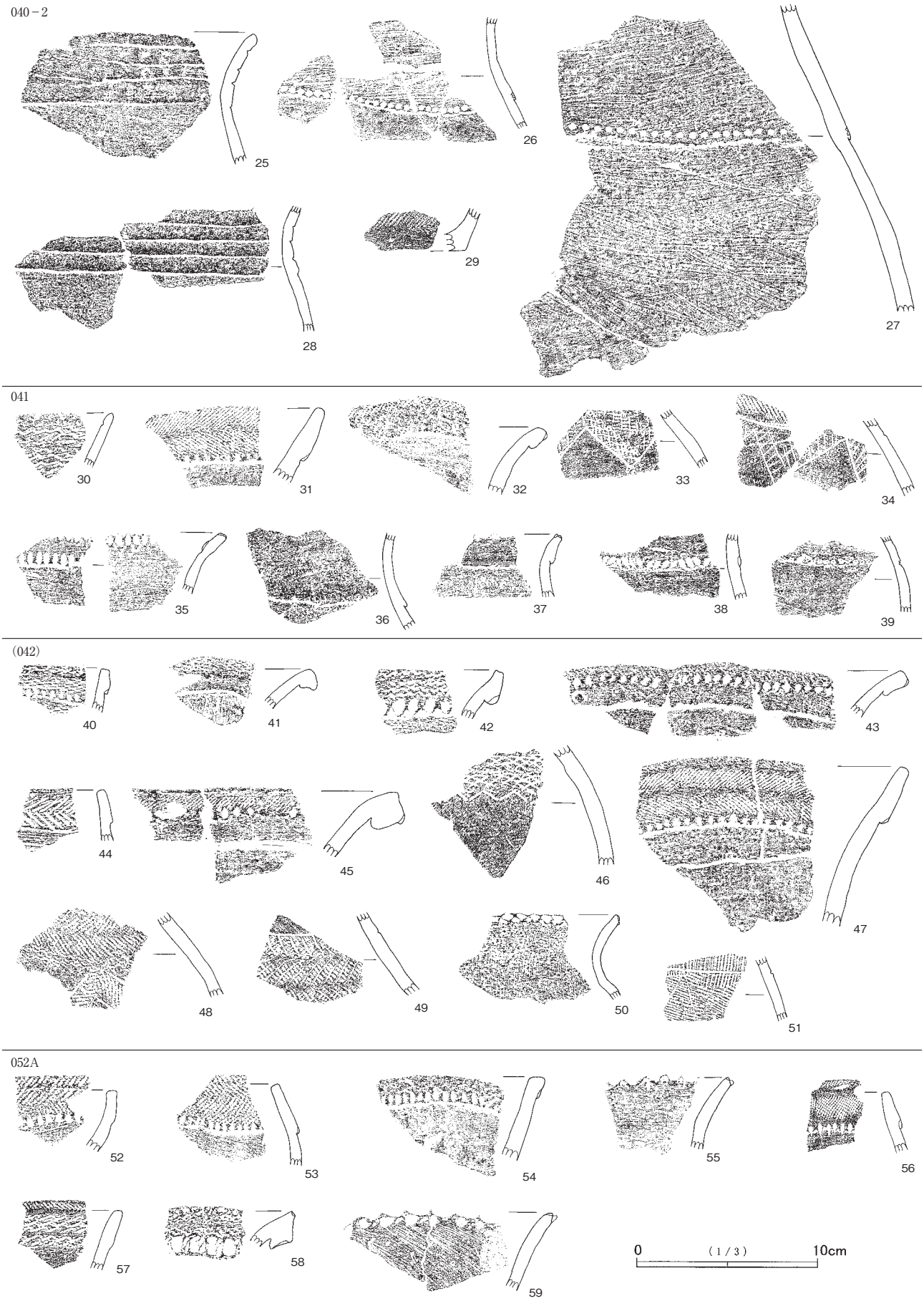
第155図　遺構出土弥生土器（16）



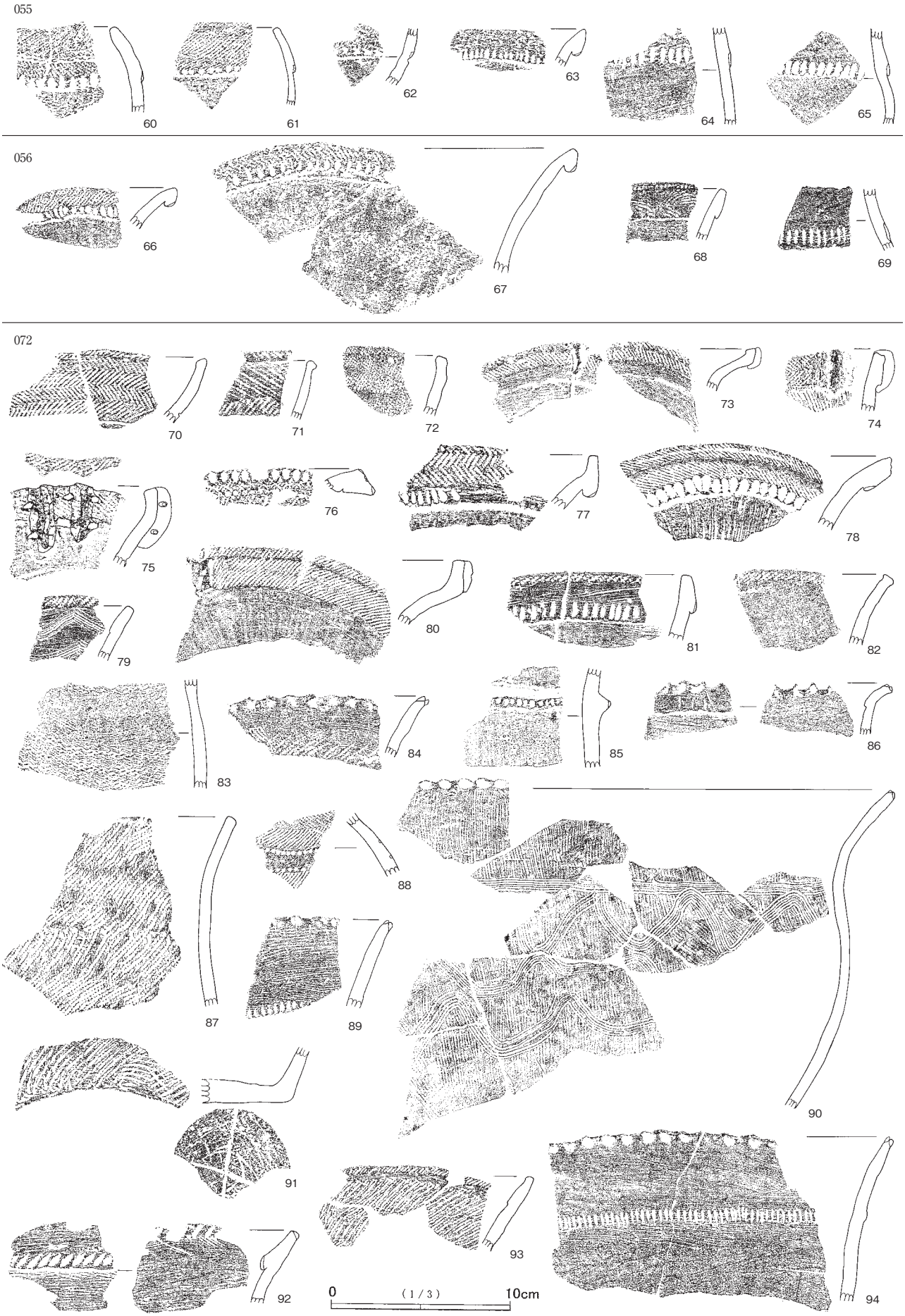
第156図　遺構およびグリッド出土弥生土器（17）



第157図　遺構出土弥生土器拓影図（1）

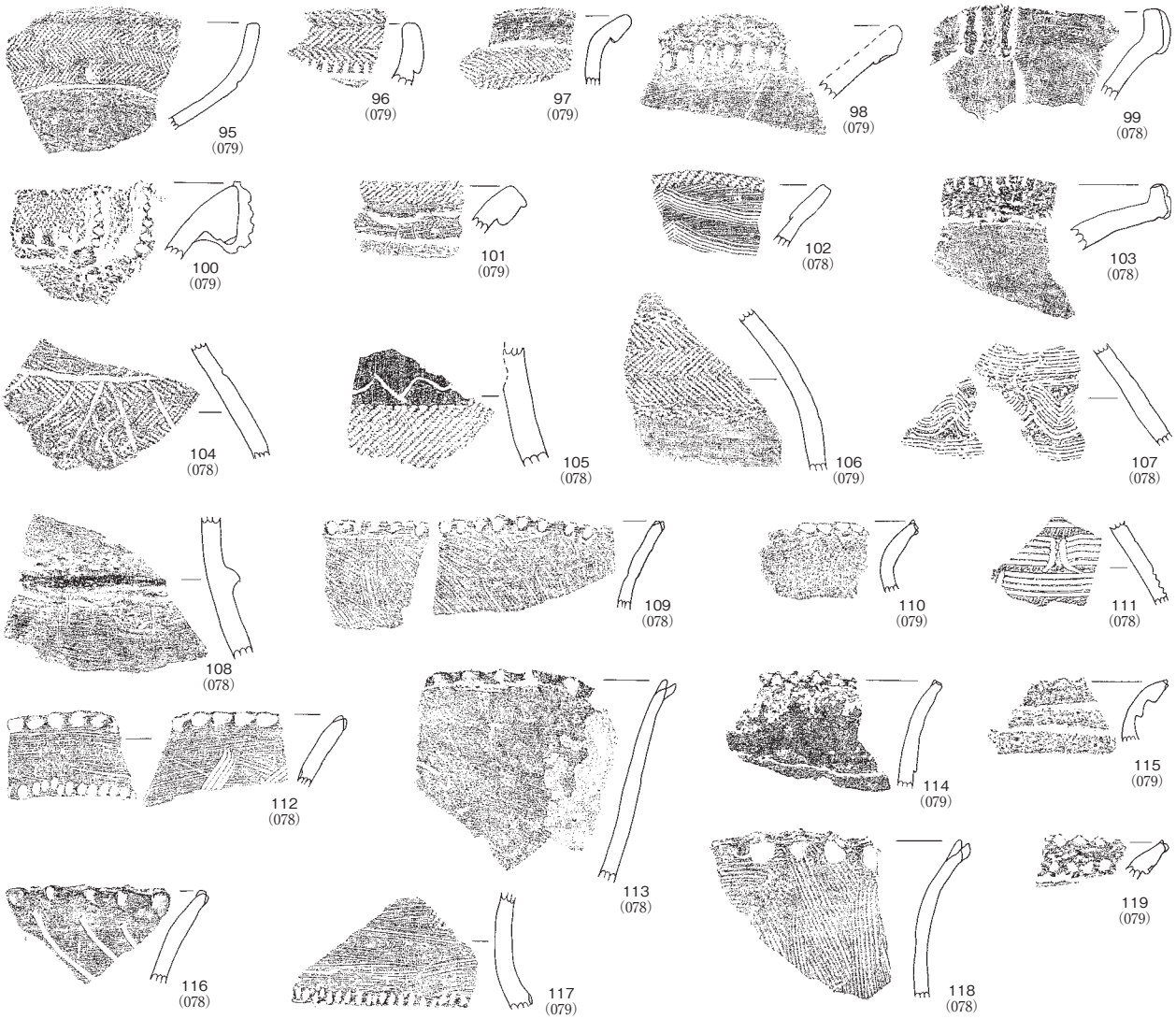


第158図　遺構出土弥生土器拓影図（２）

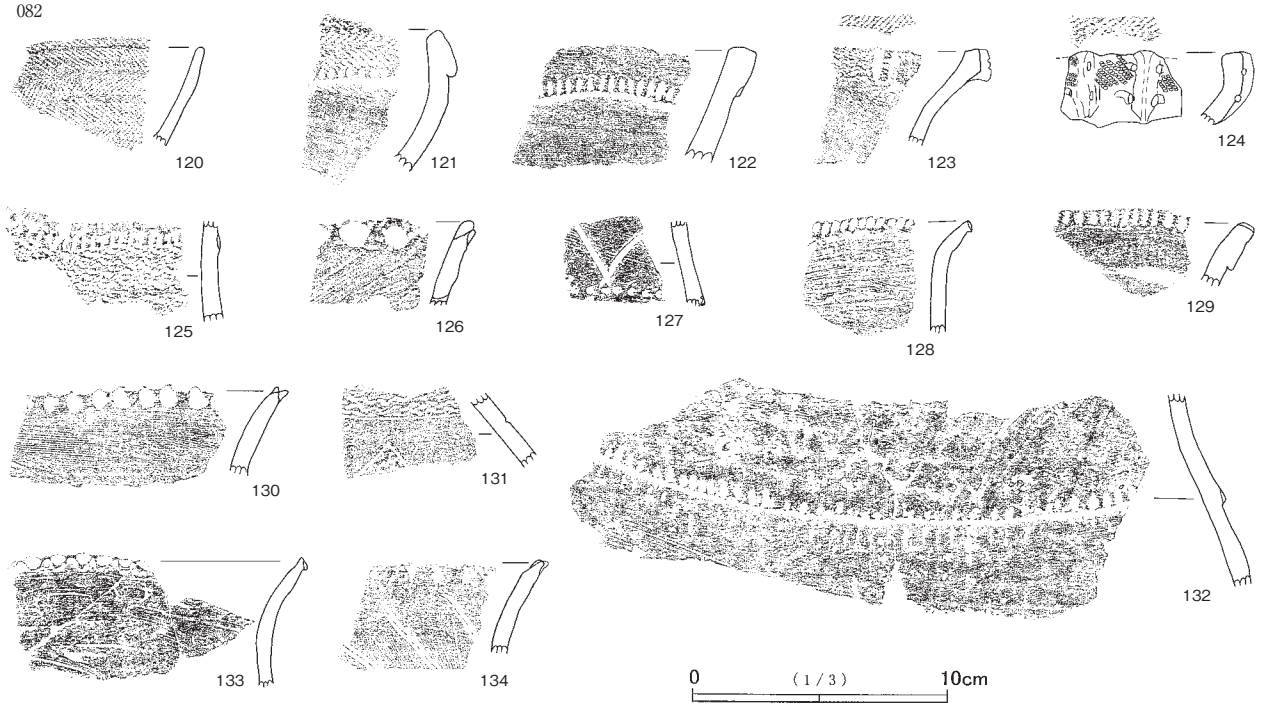


第159図　遺構出土弥生土器拓影図（３）

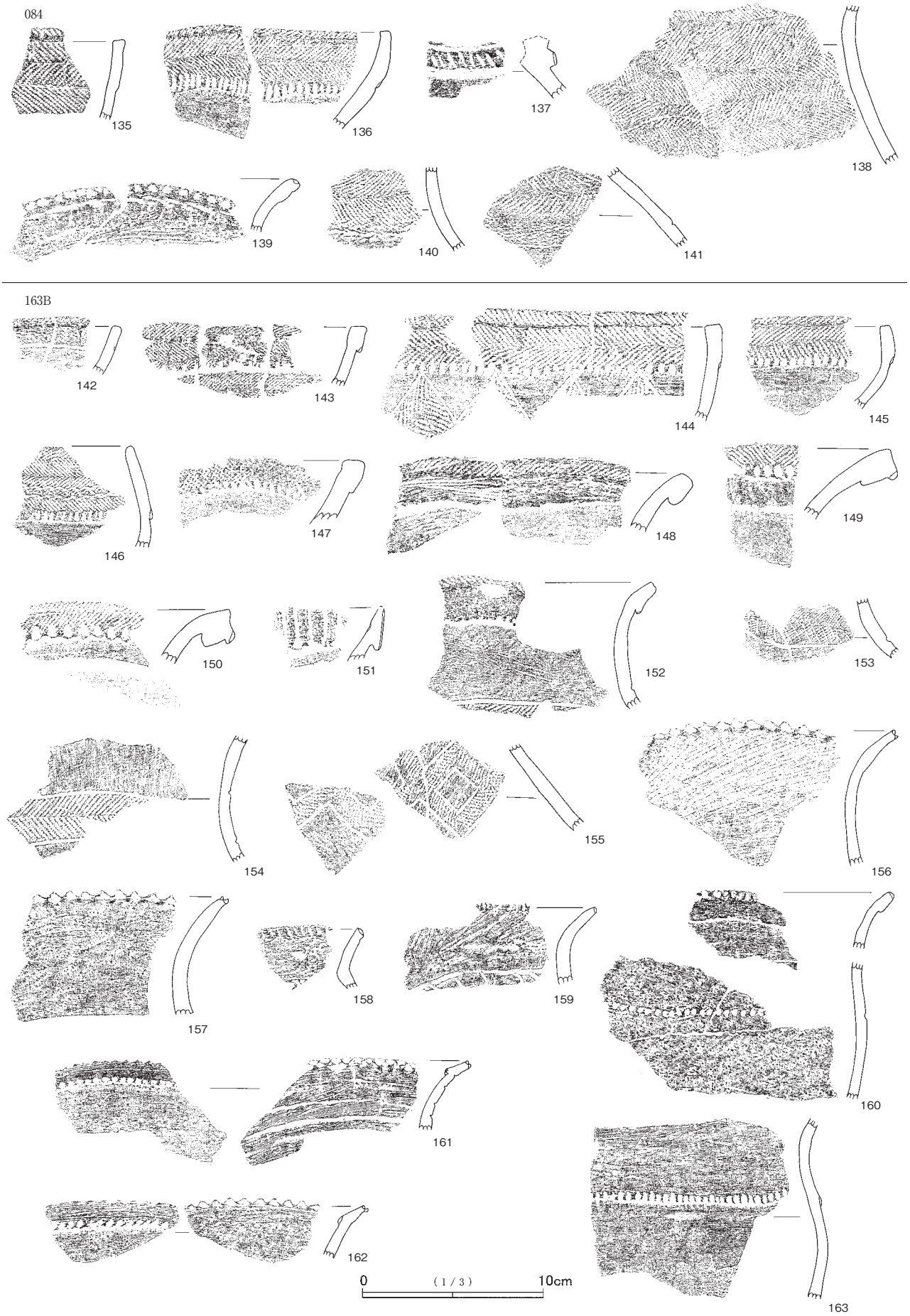
078・079



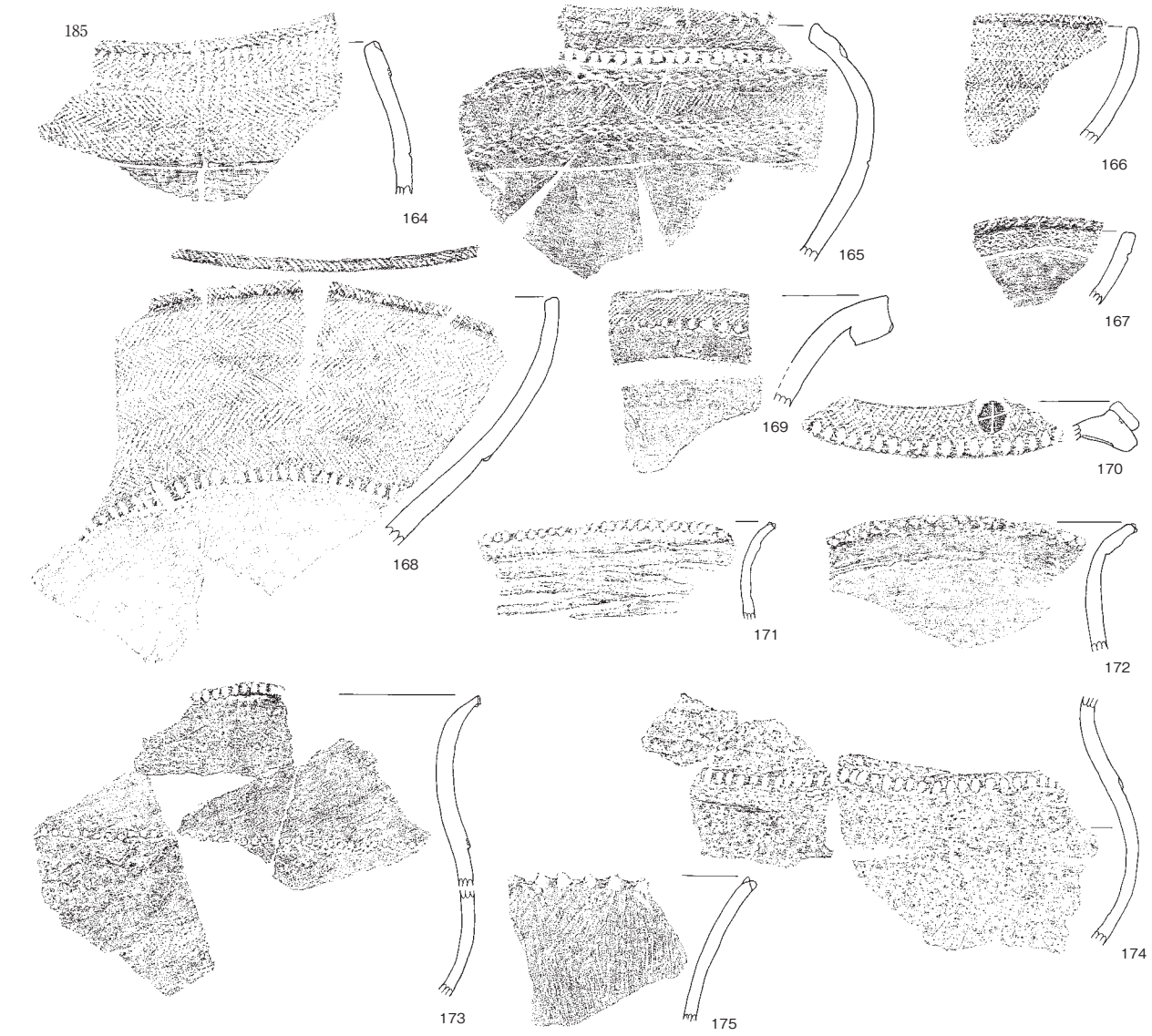
082

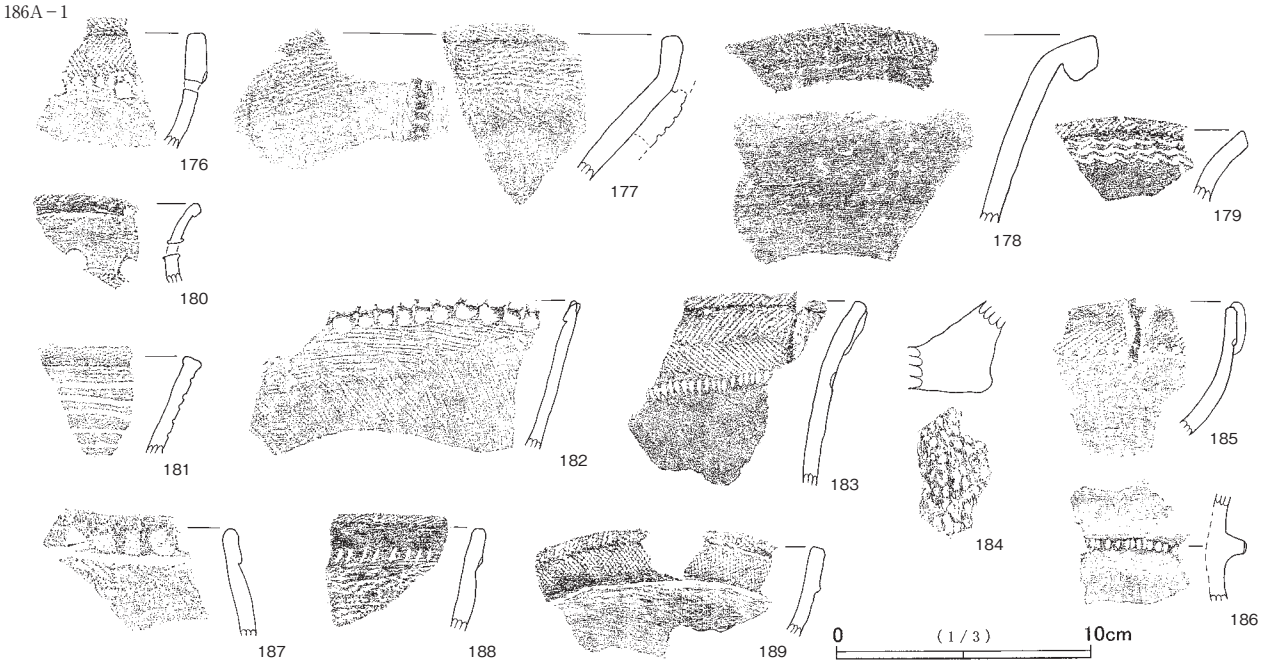


第160図　遺構出土弥生土器拓影図（４）

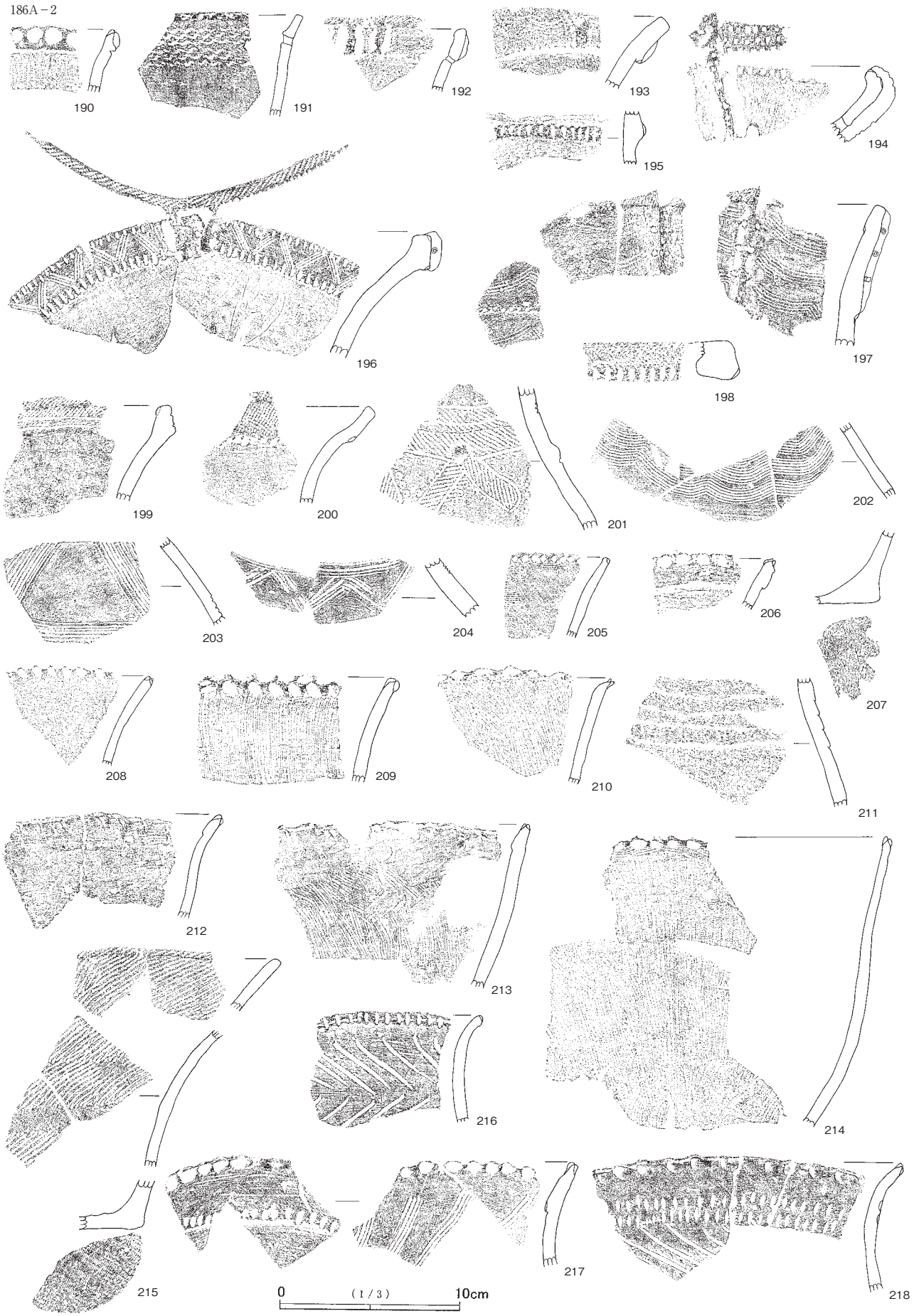


第161図　遺構出土弥生土器拓影図（5）

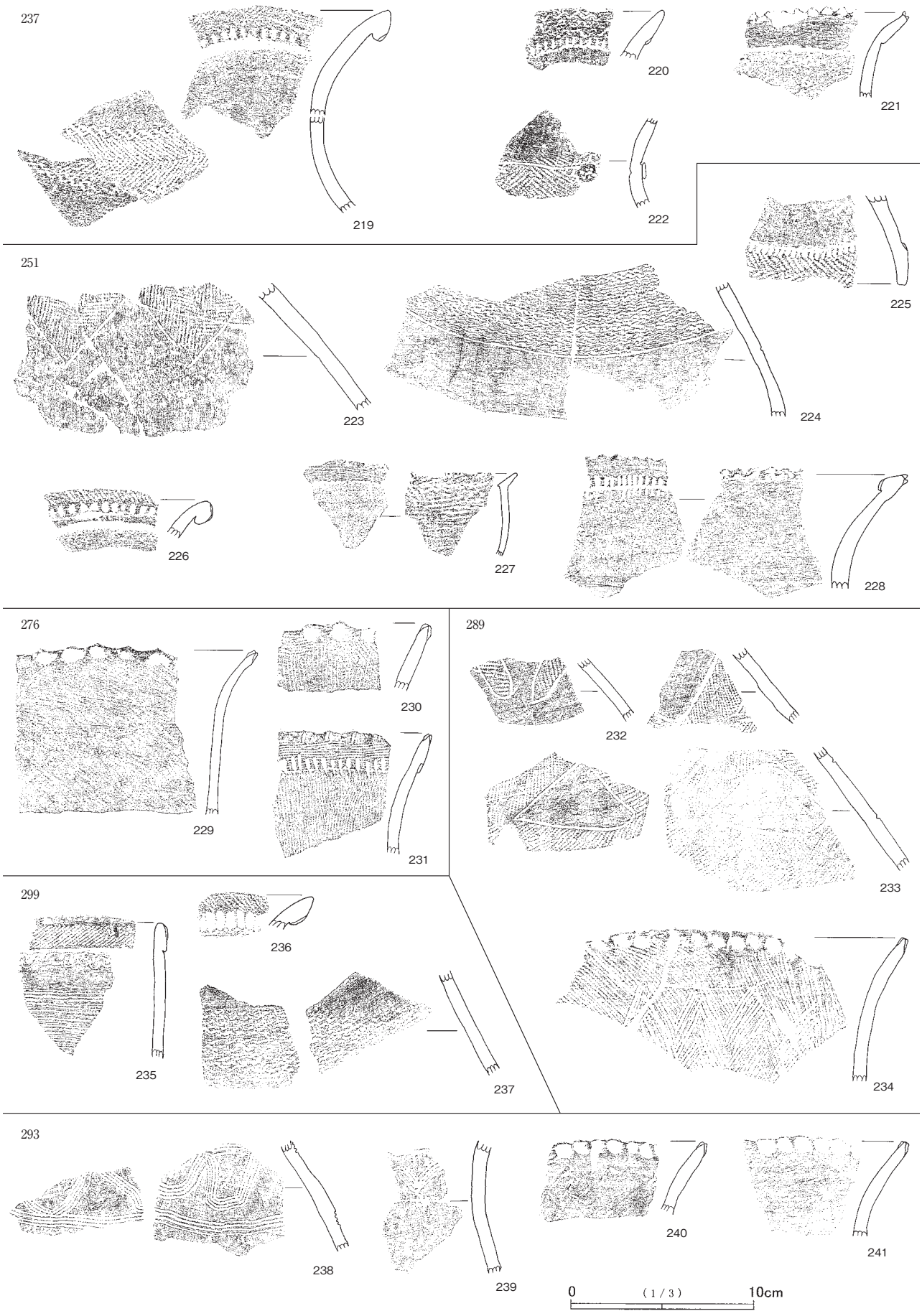




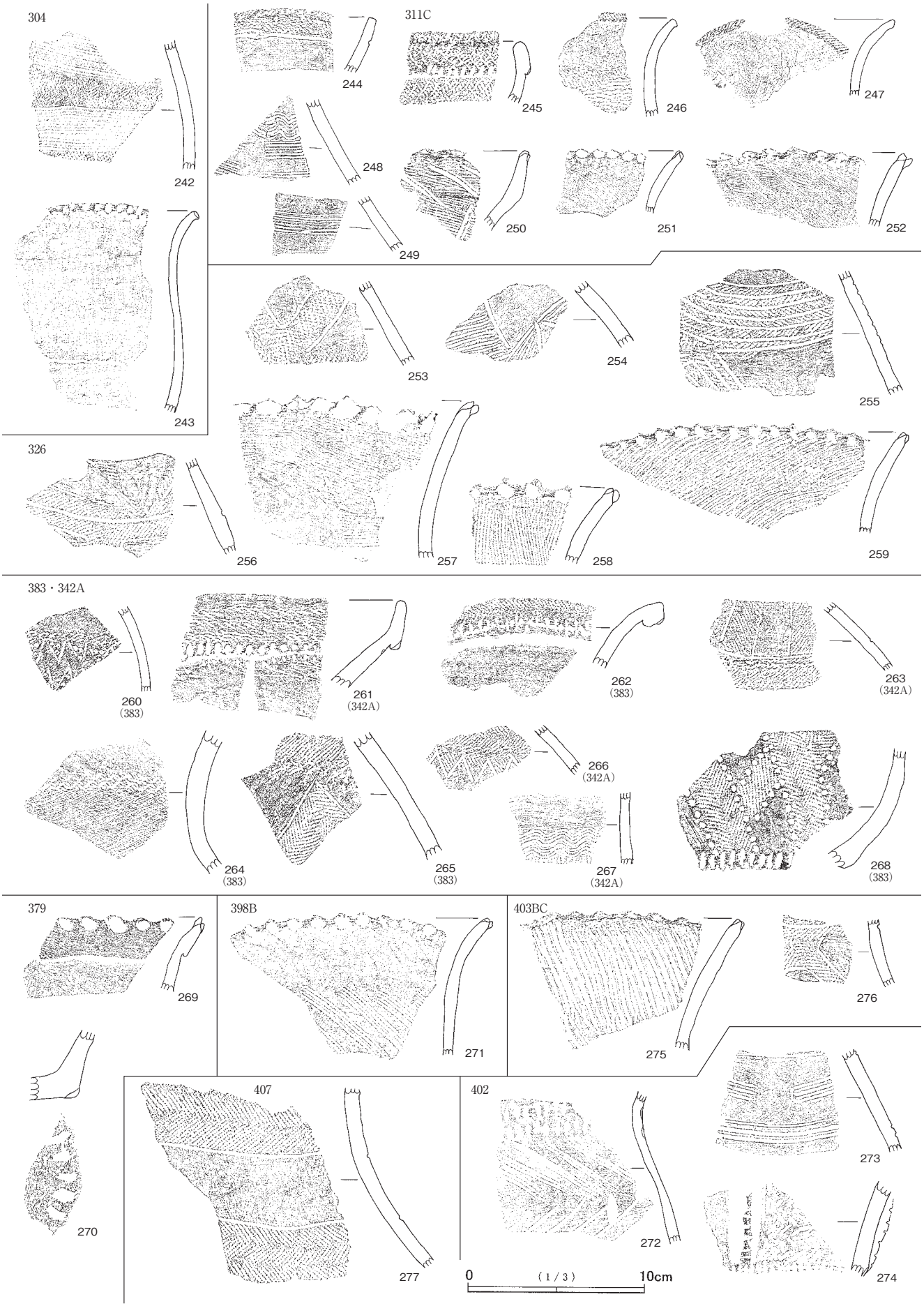
第162図　遺構出土弥生土器拓影図（6）



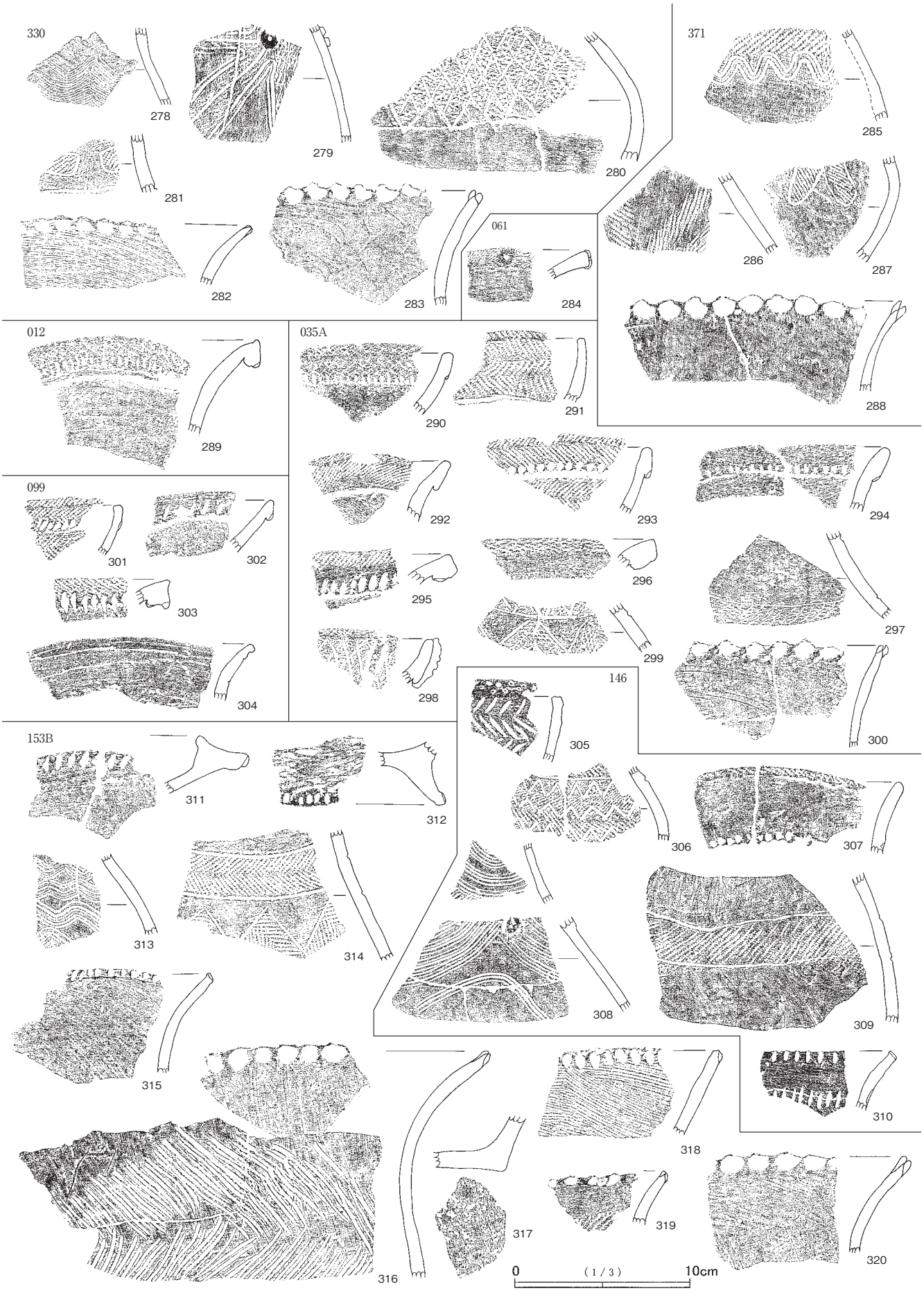
第163図　遺構出土弥生土器拓影図（7）



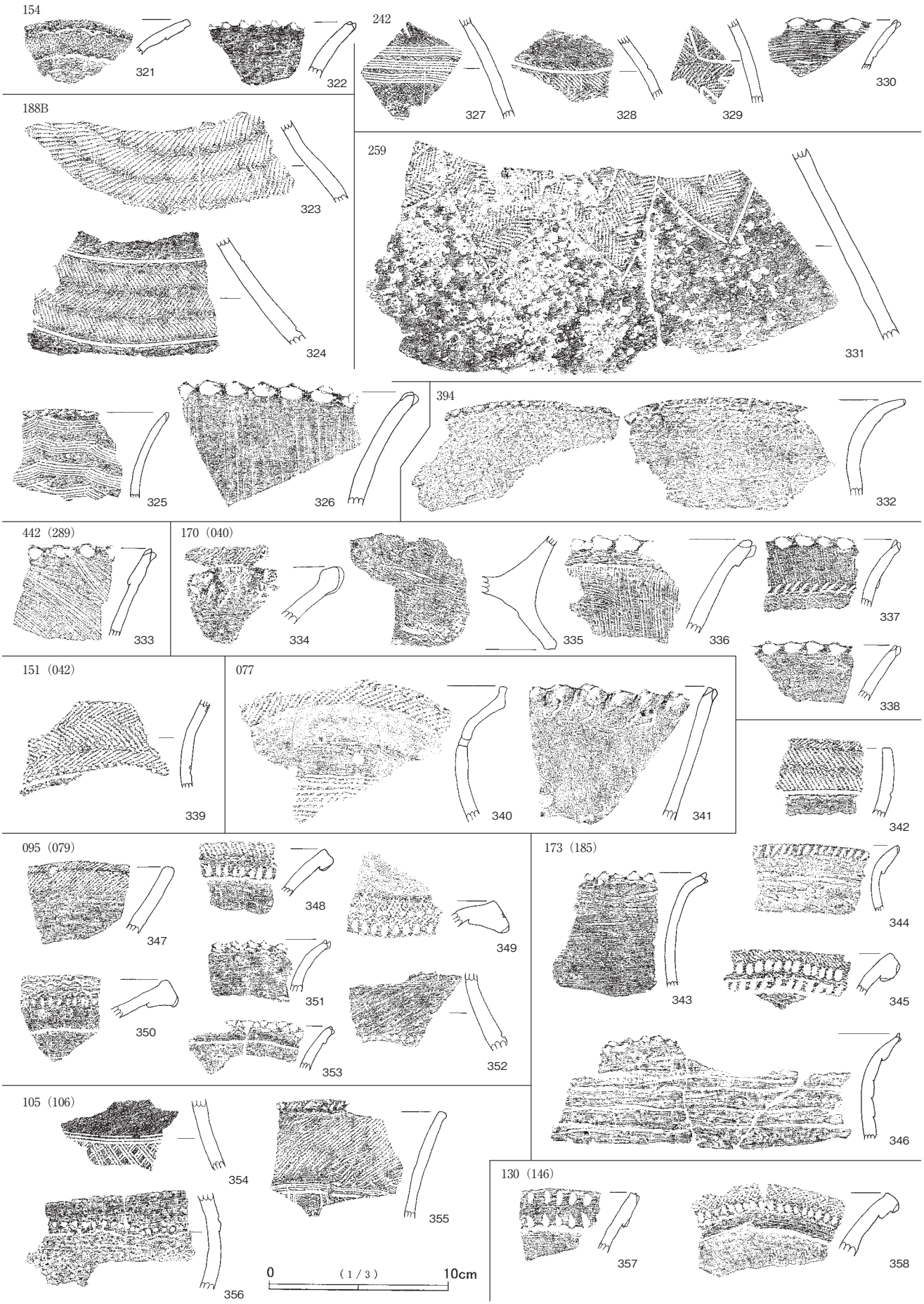
第164図　遺構出土弥生土器拓影図（8）



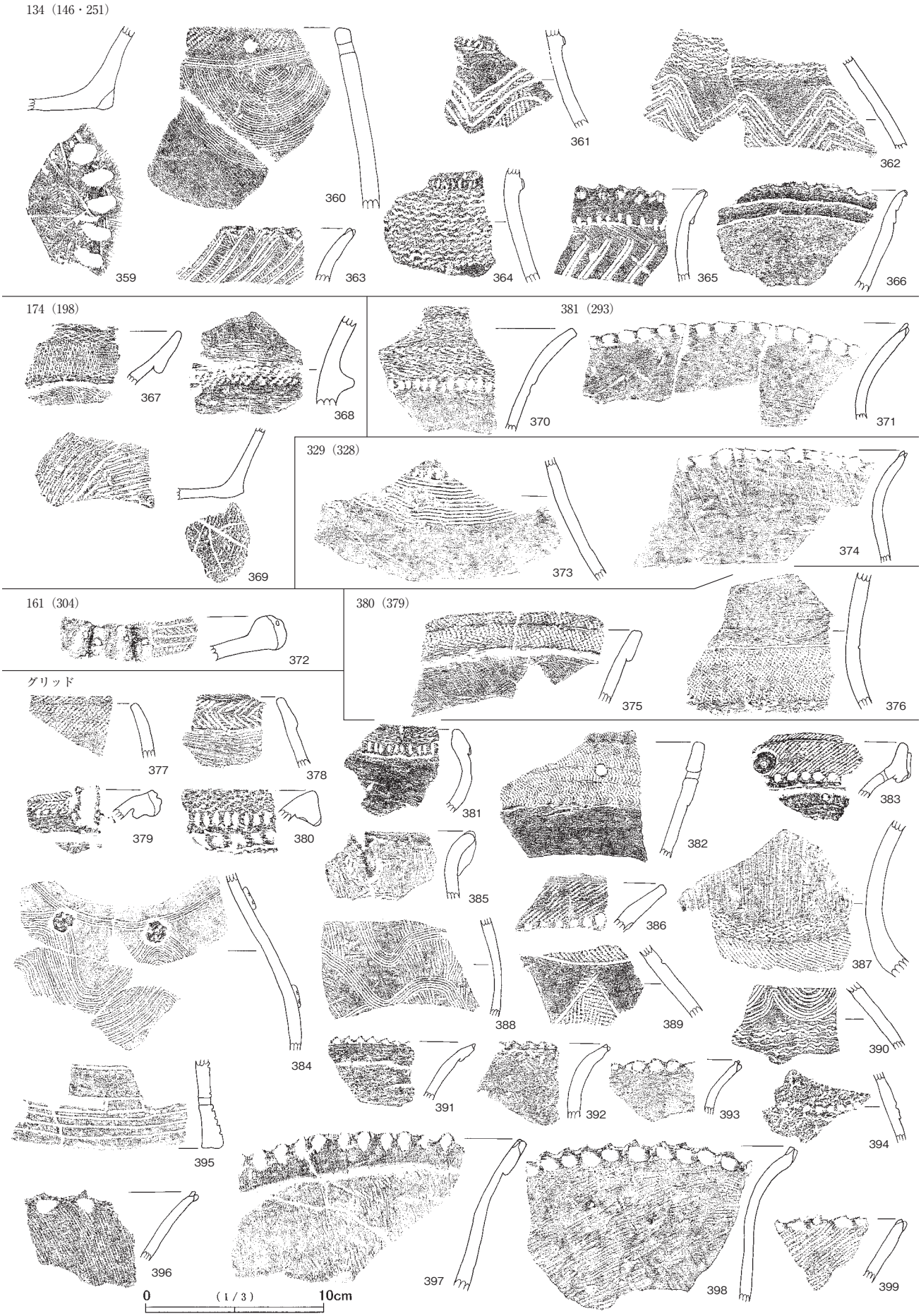
第165図　遺構出土弥生土器拓影図（9）



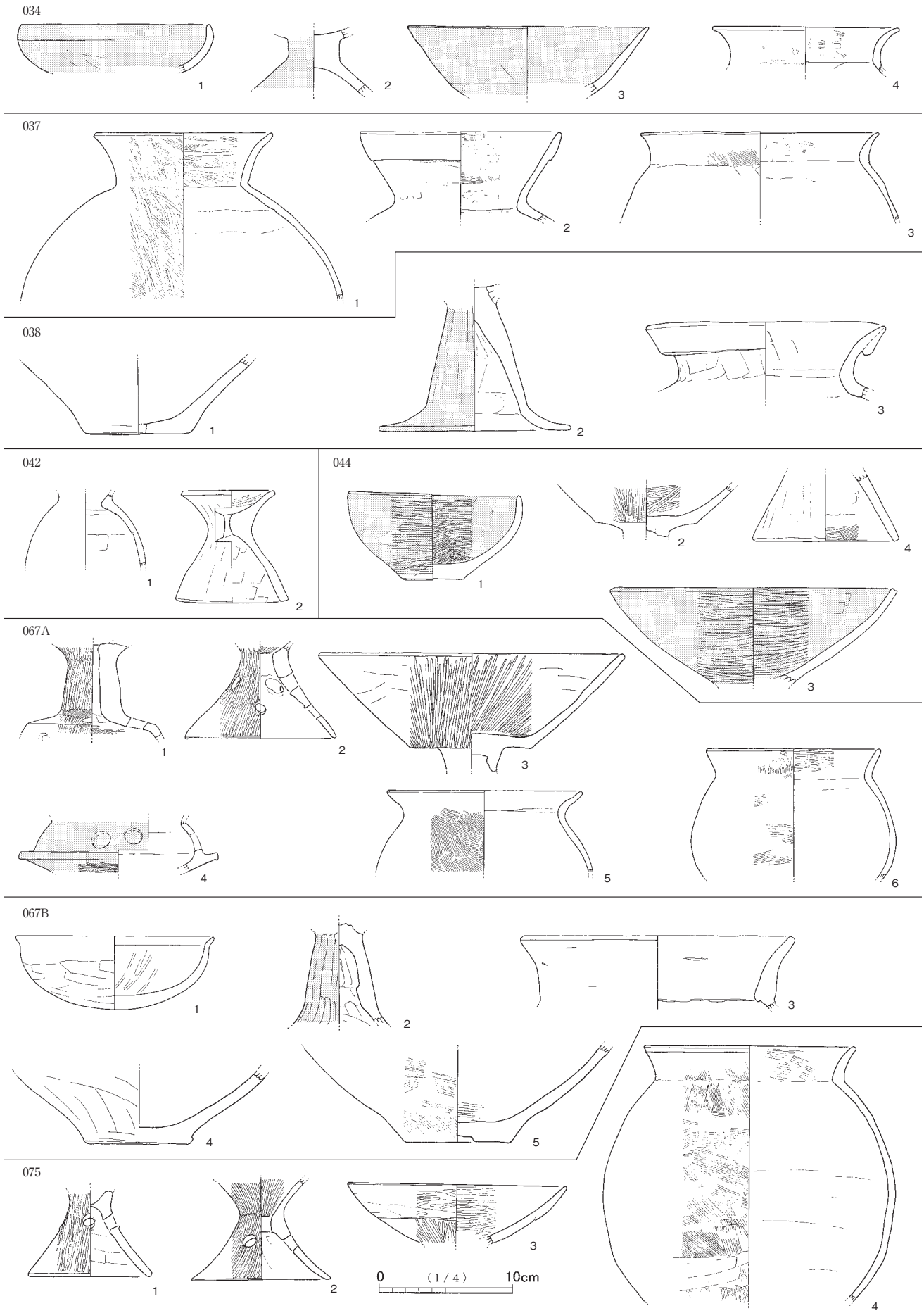
第166図　遺構出土弥生土器拓影図（10）



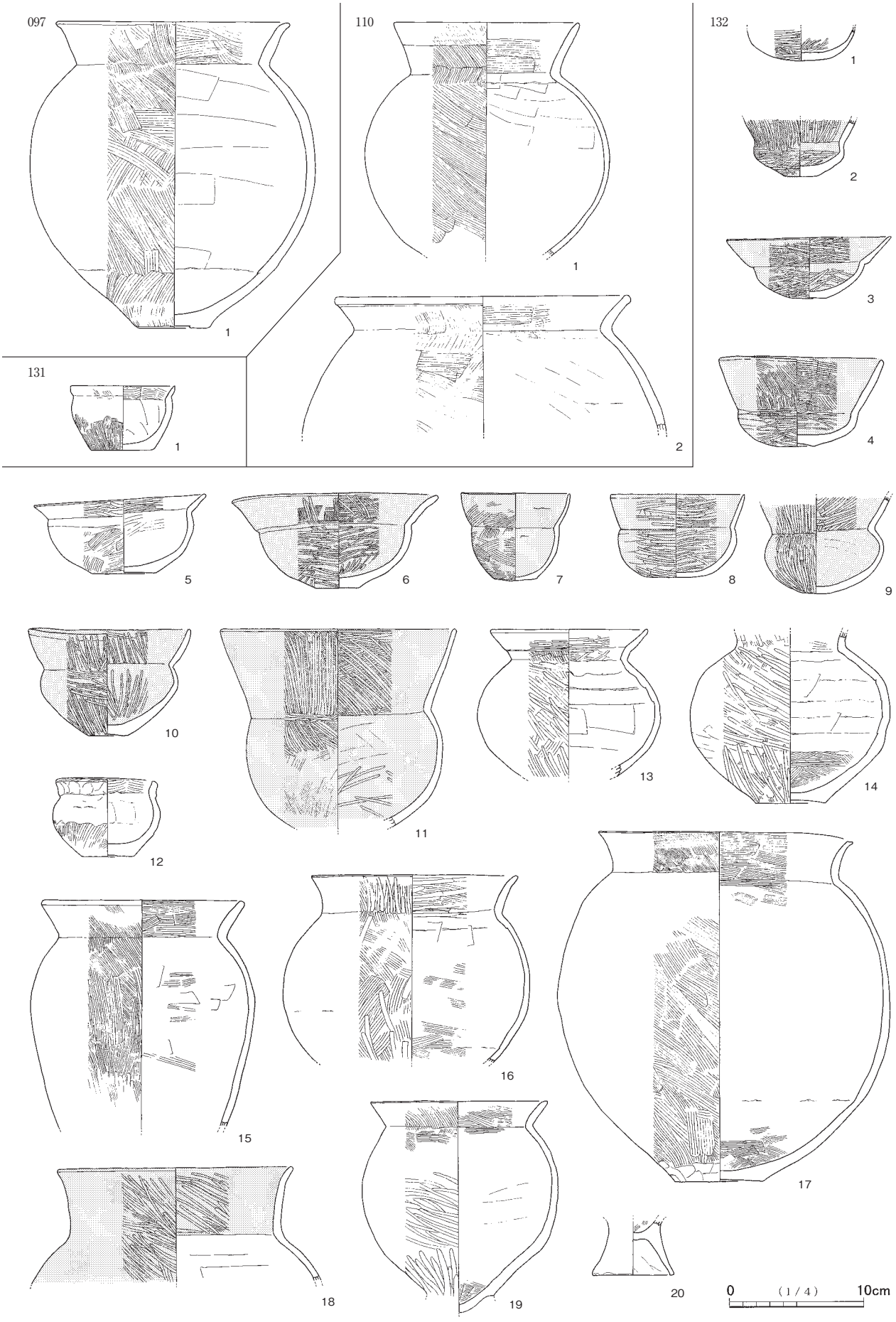
第167図　遺構出土弥生土器拓影図（11）



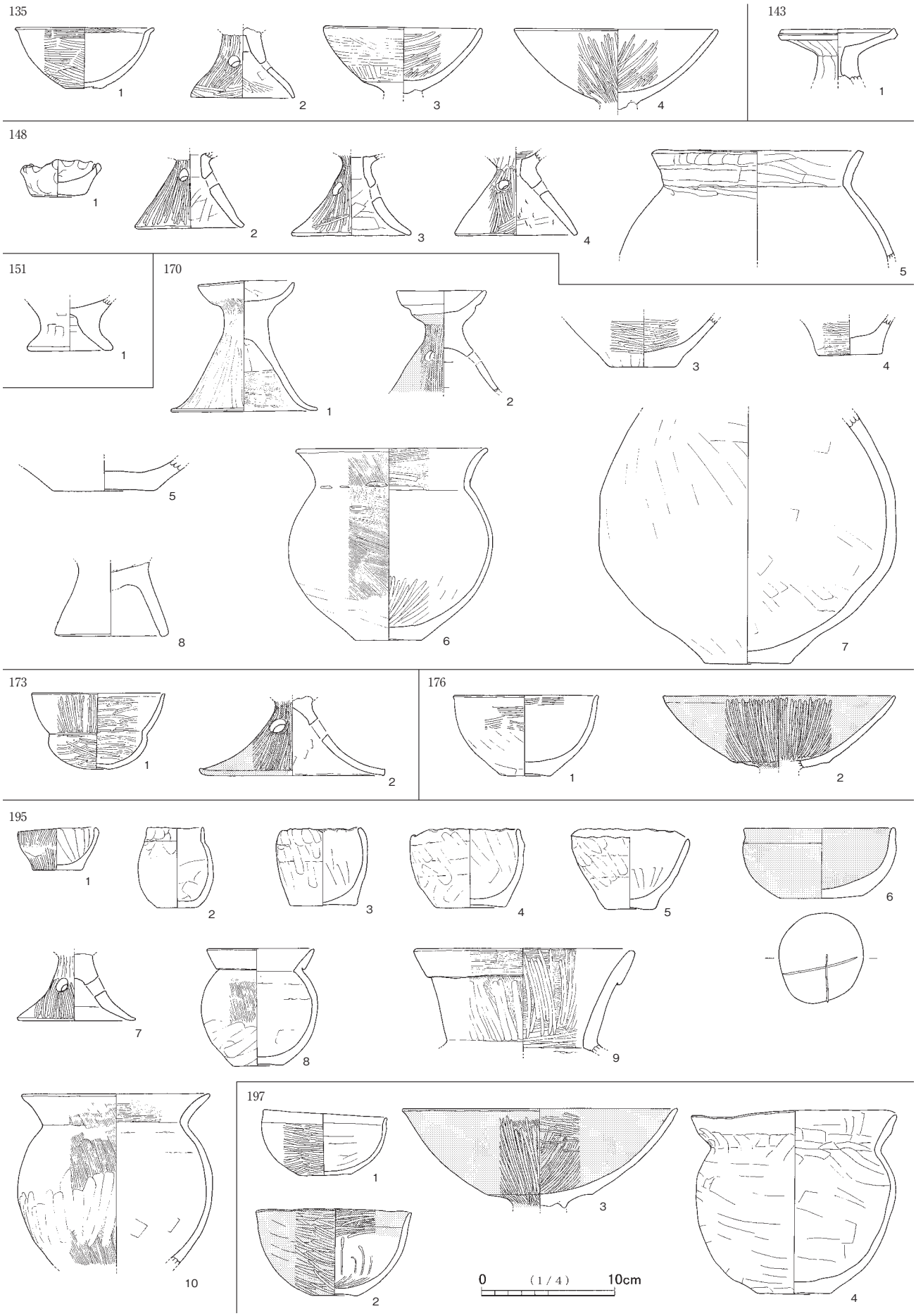
第168図　遺構およびグリッド出土弥生土器拓影図（12）



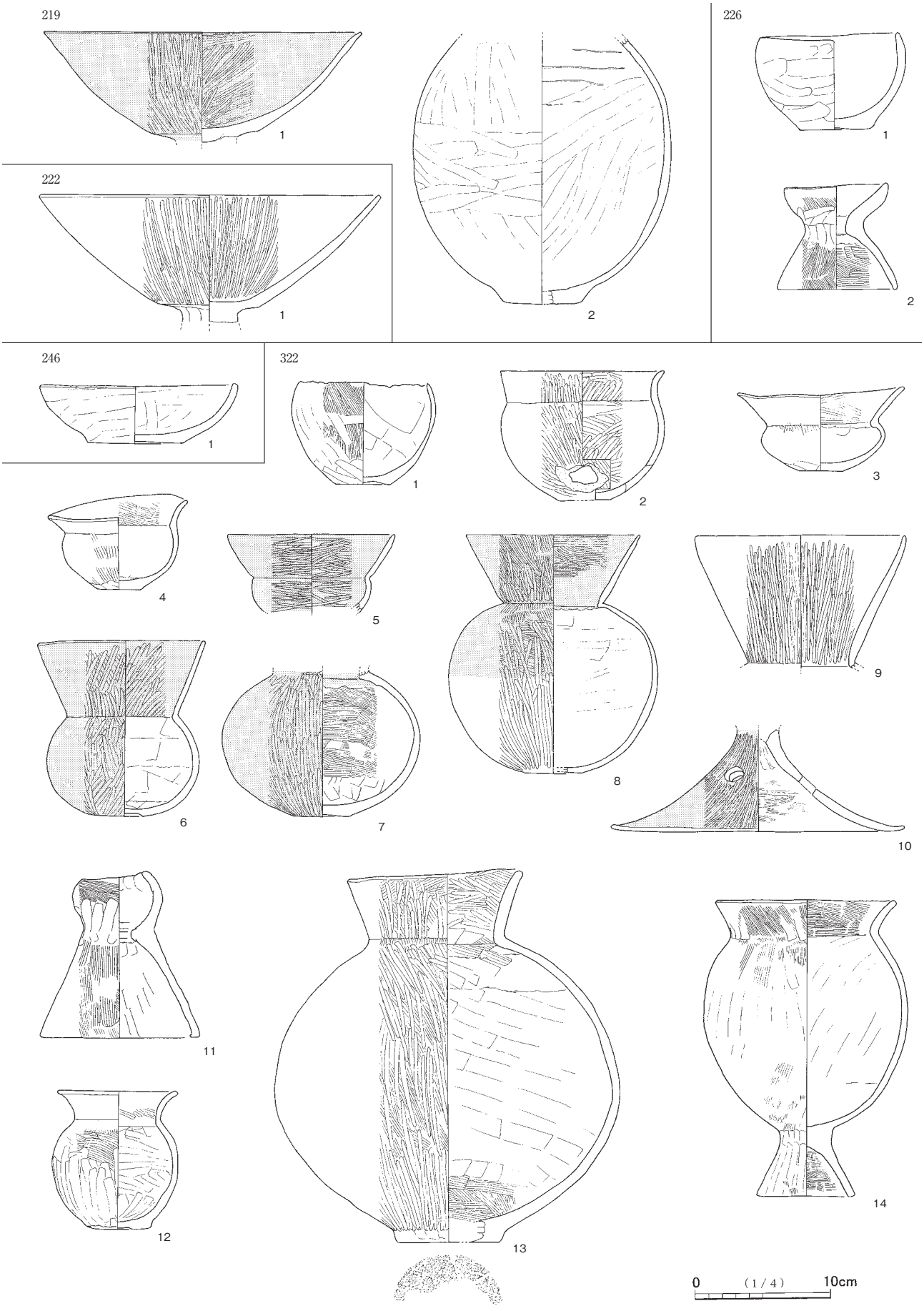
第169図　遺構出土土師器（古墳前期１）



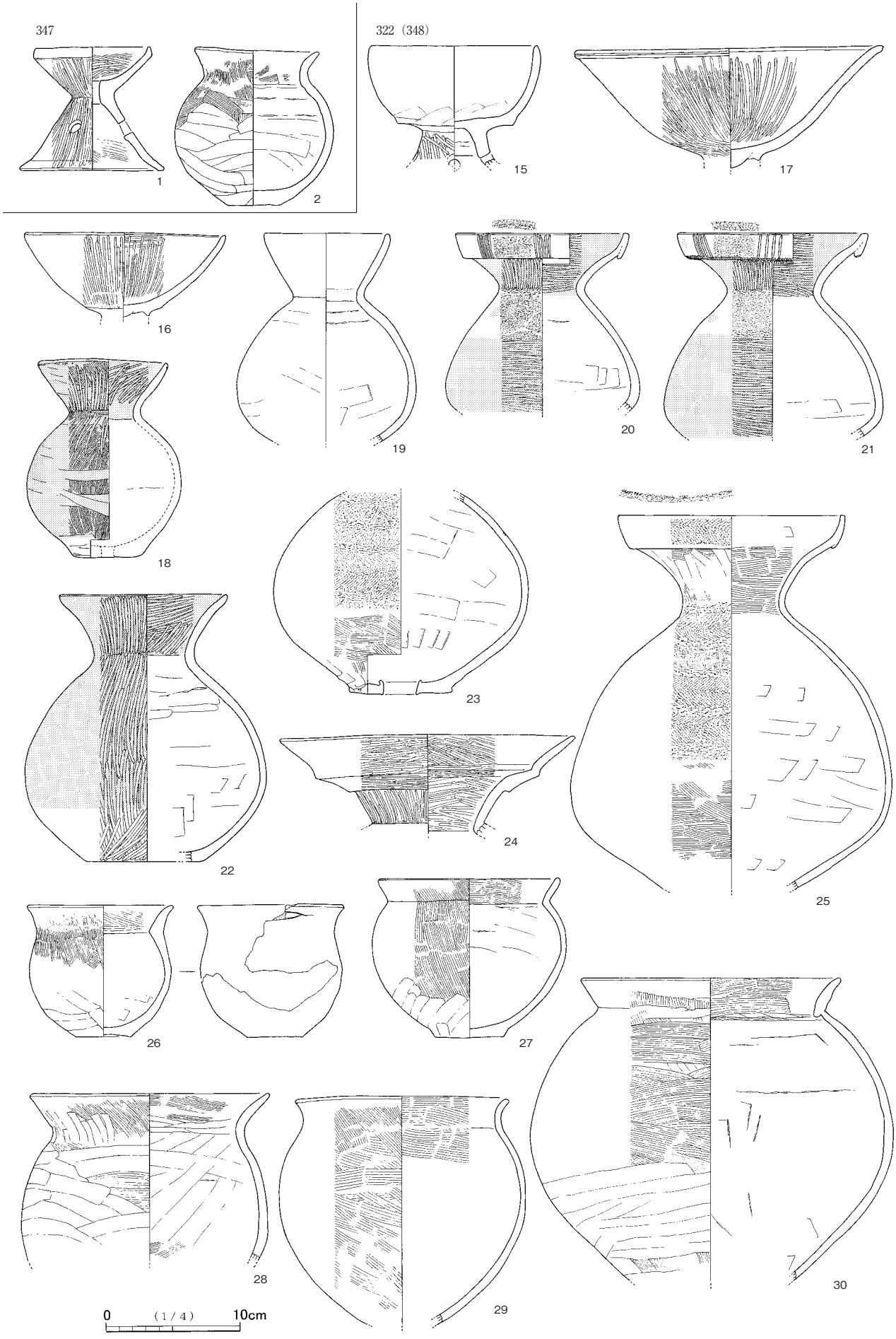
第170図　遺構出土土師器（古墳前期２）



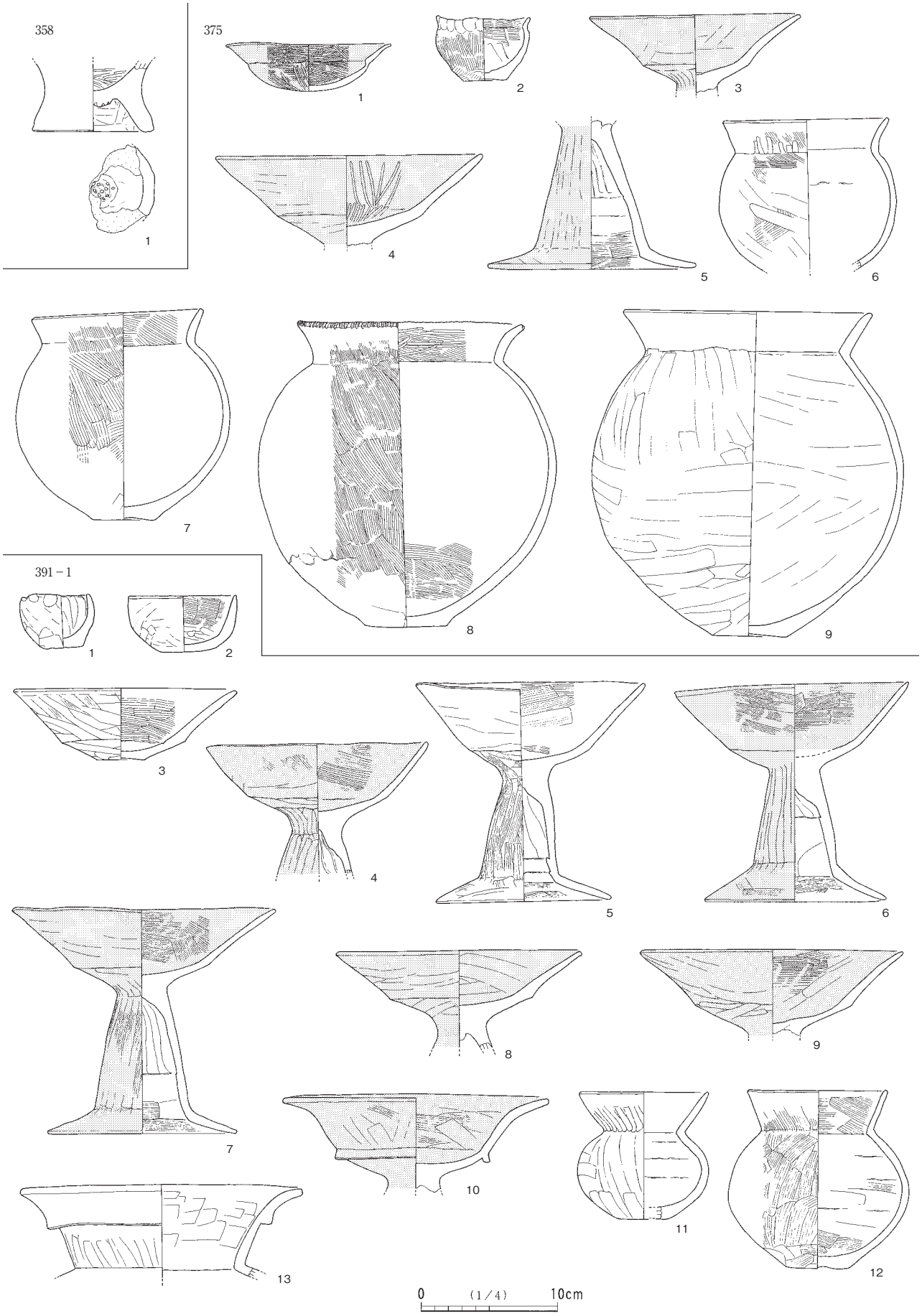
第171図　遺構出土土師器（古墳前期３）



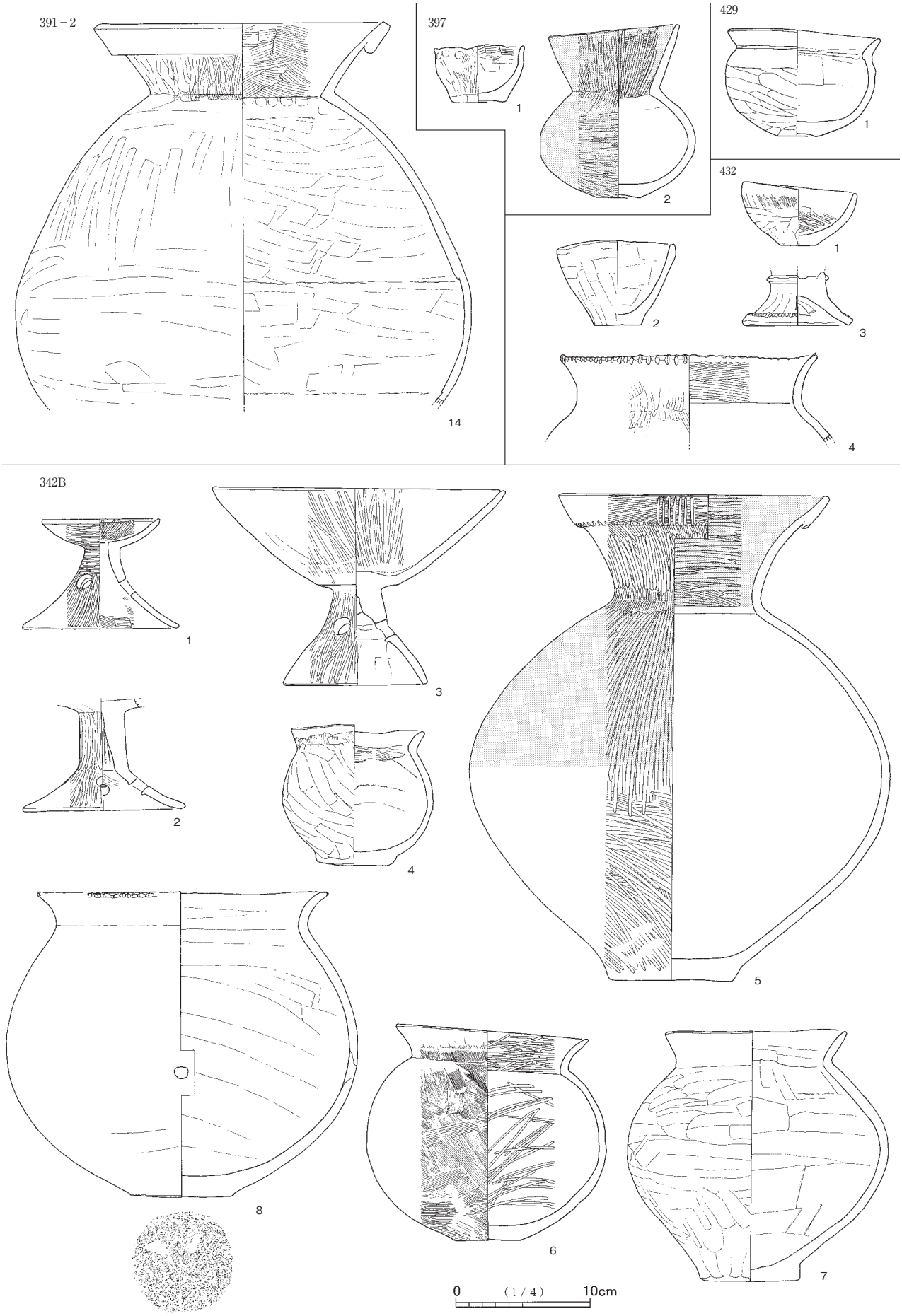
第172図　遺構出土土師器（古墳前期４）



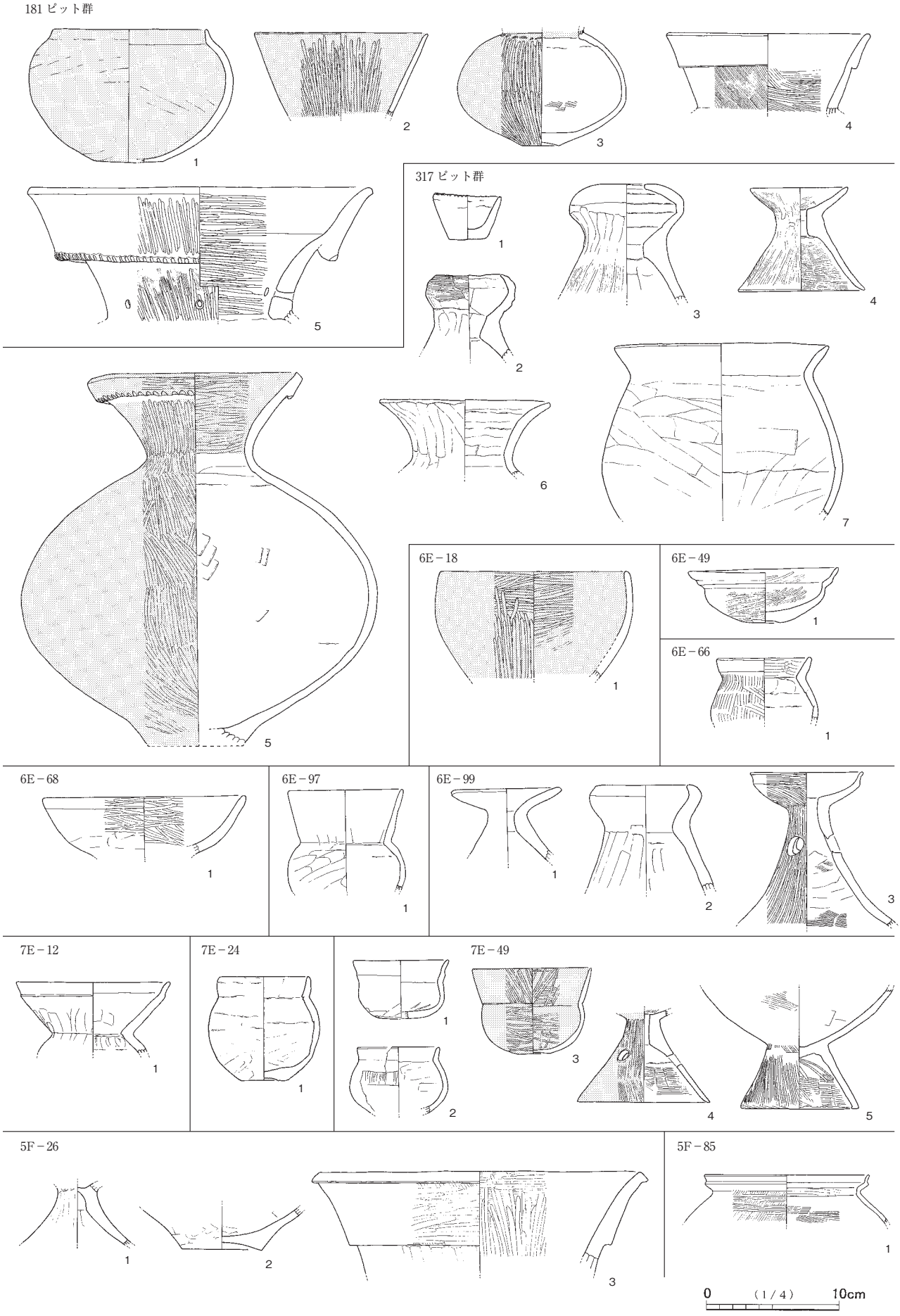
第173図　遺構出土土師器（古墳前期５）



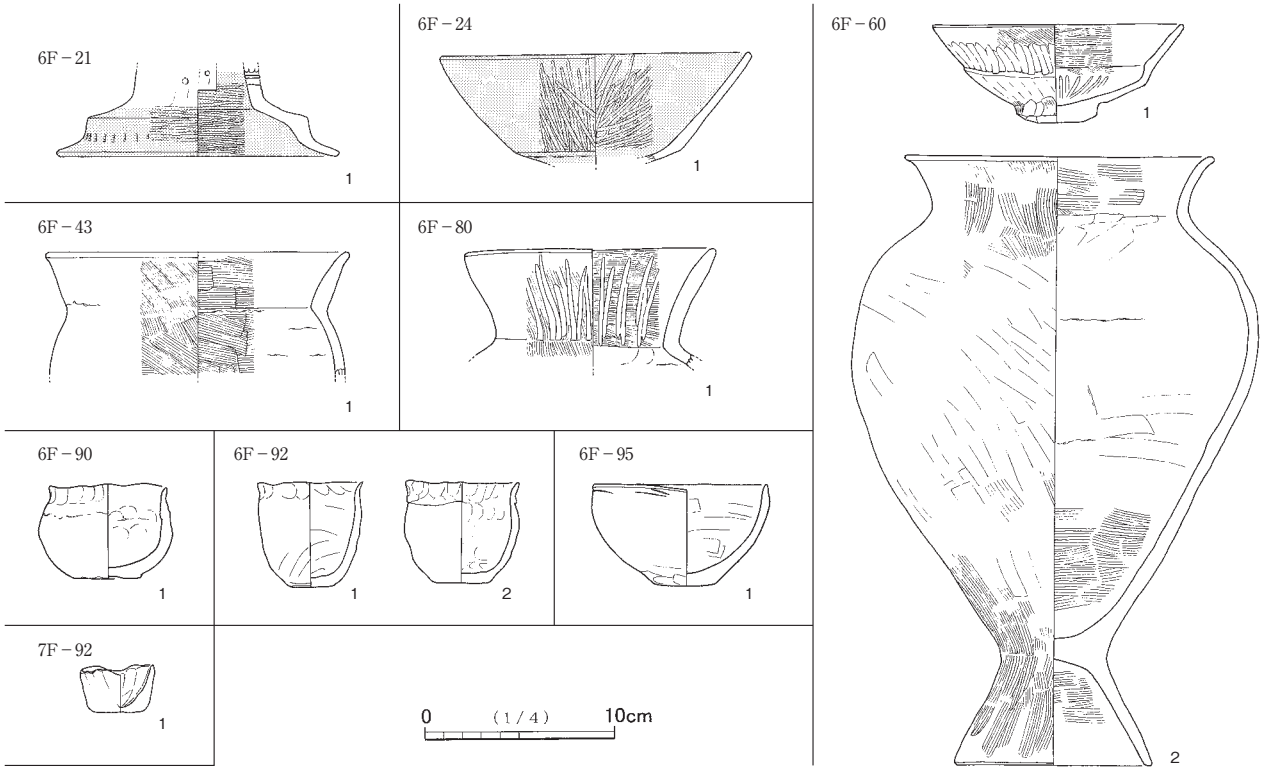
第174図　遺構出土土師器（古墳前期６）



第175図　遺構出土土師器（古墳前期７）

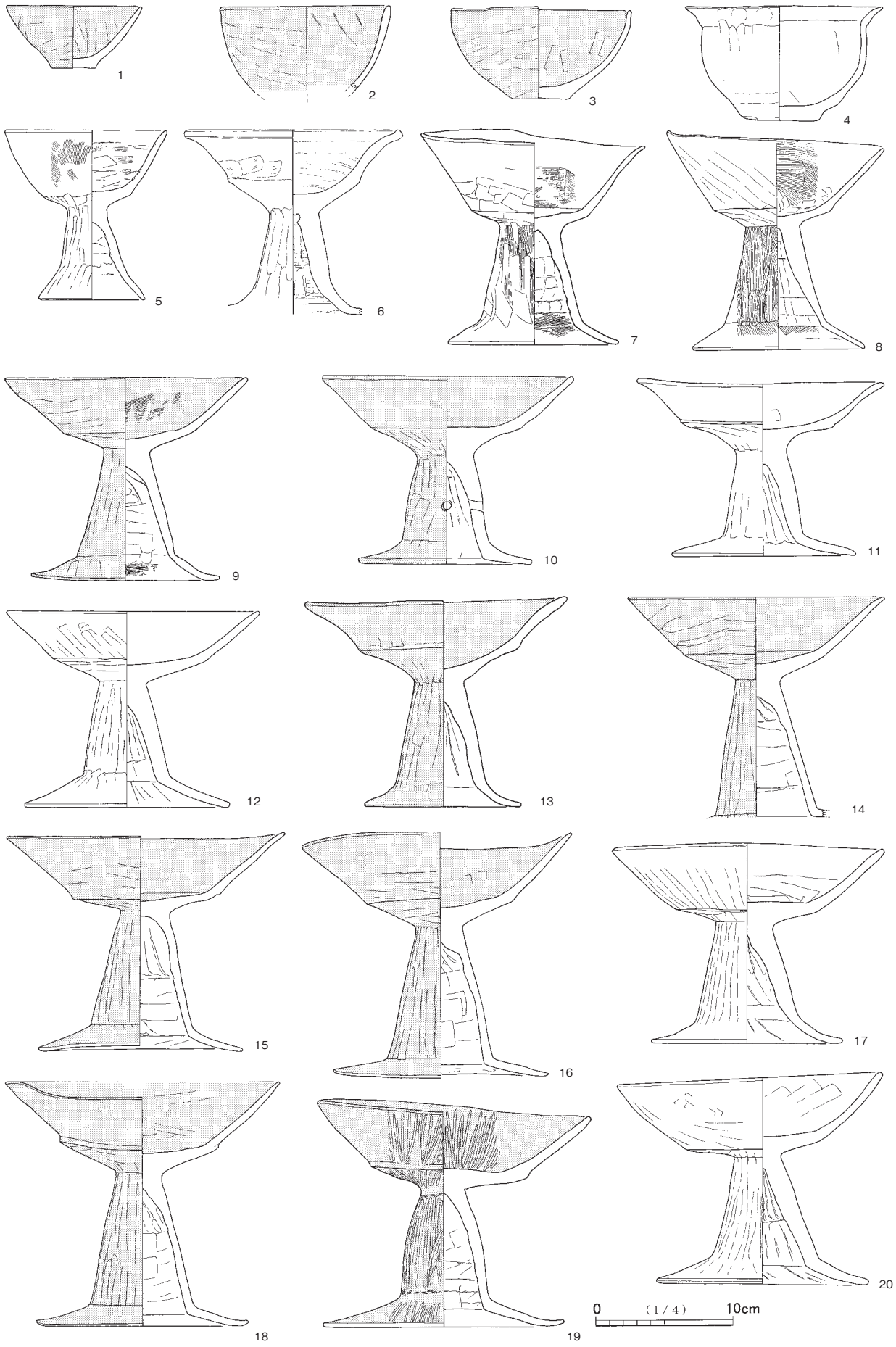


第176図　遺構およびグリッド出土土師器（古墳前期８）

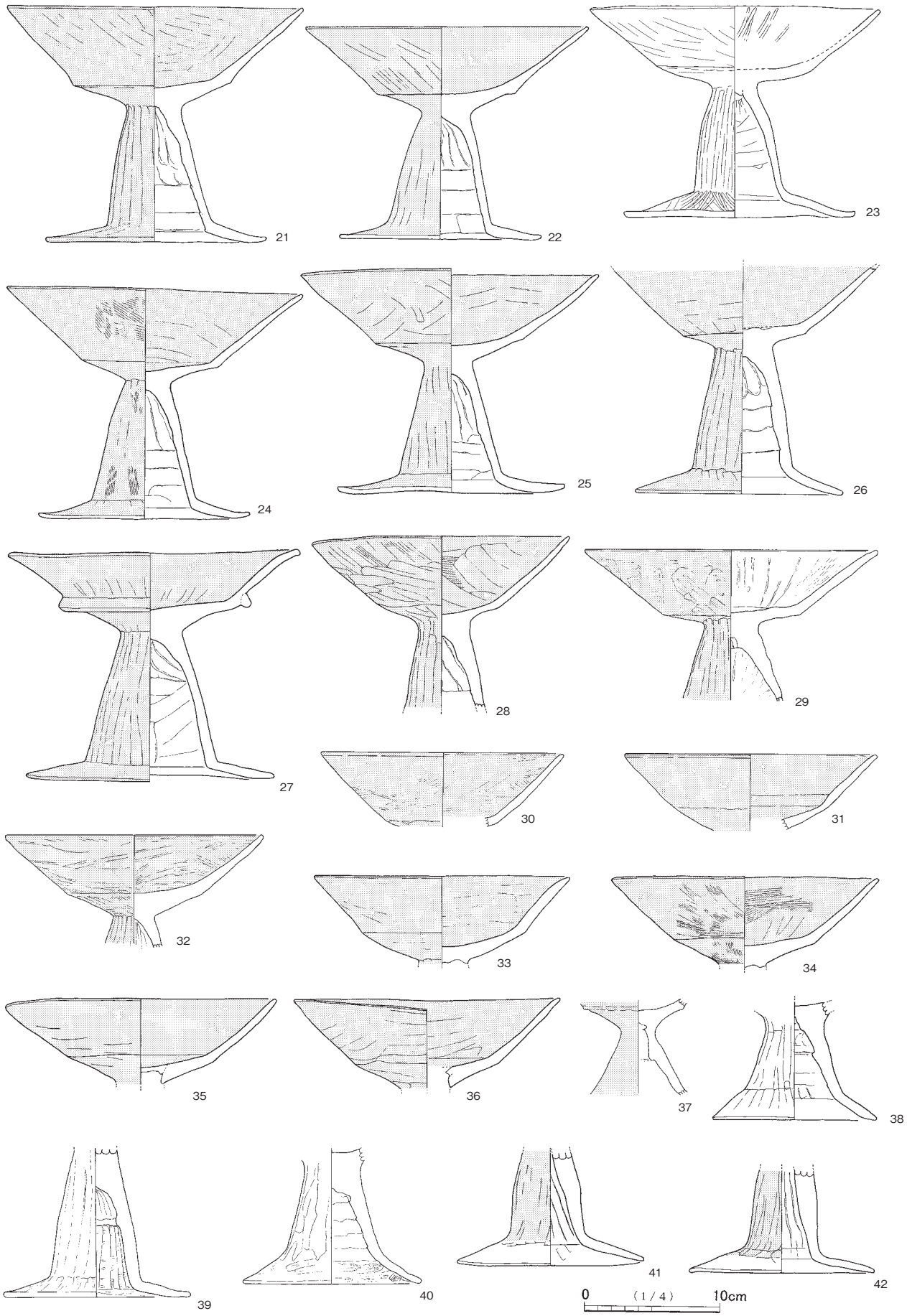


第177図　グリッド出土土師器（古墳前期９）

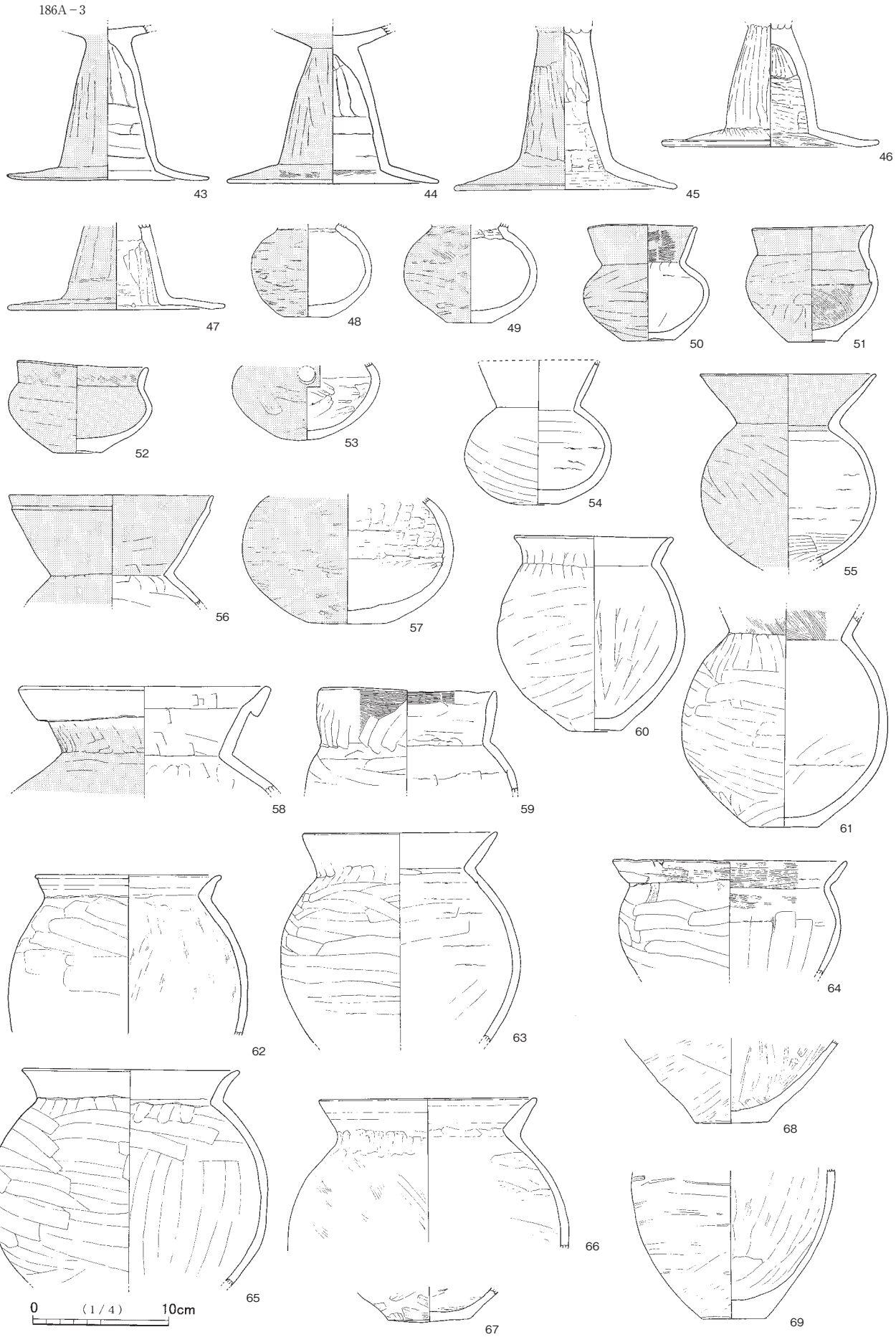
186A－1



第178図　遺構出土土師器（古墳前期～中期１）

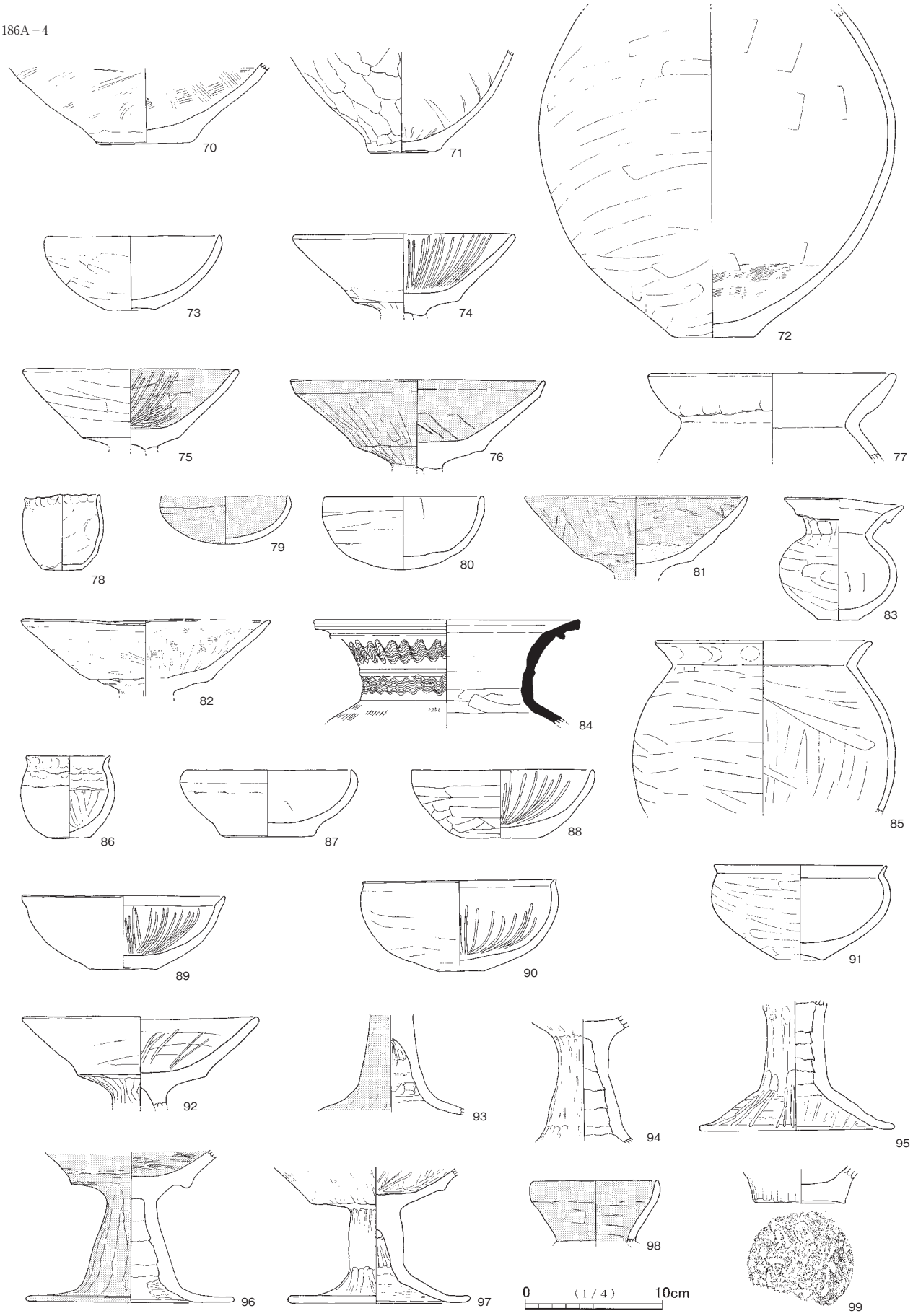


第179図　遺構出土土師器（古墳前期～中期２）

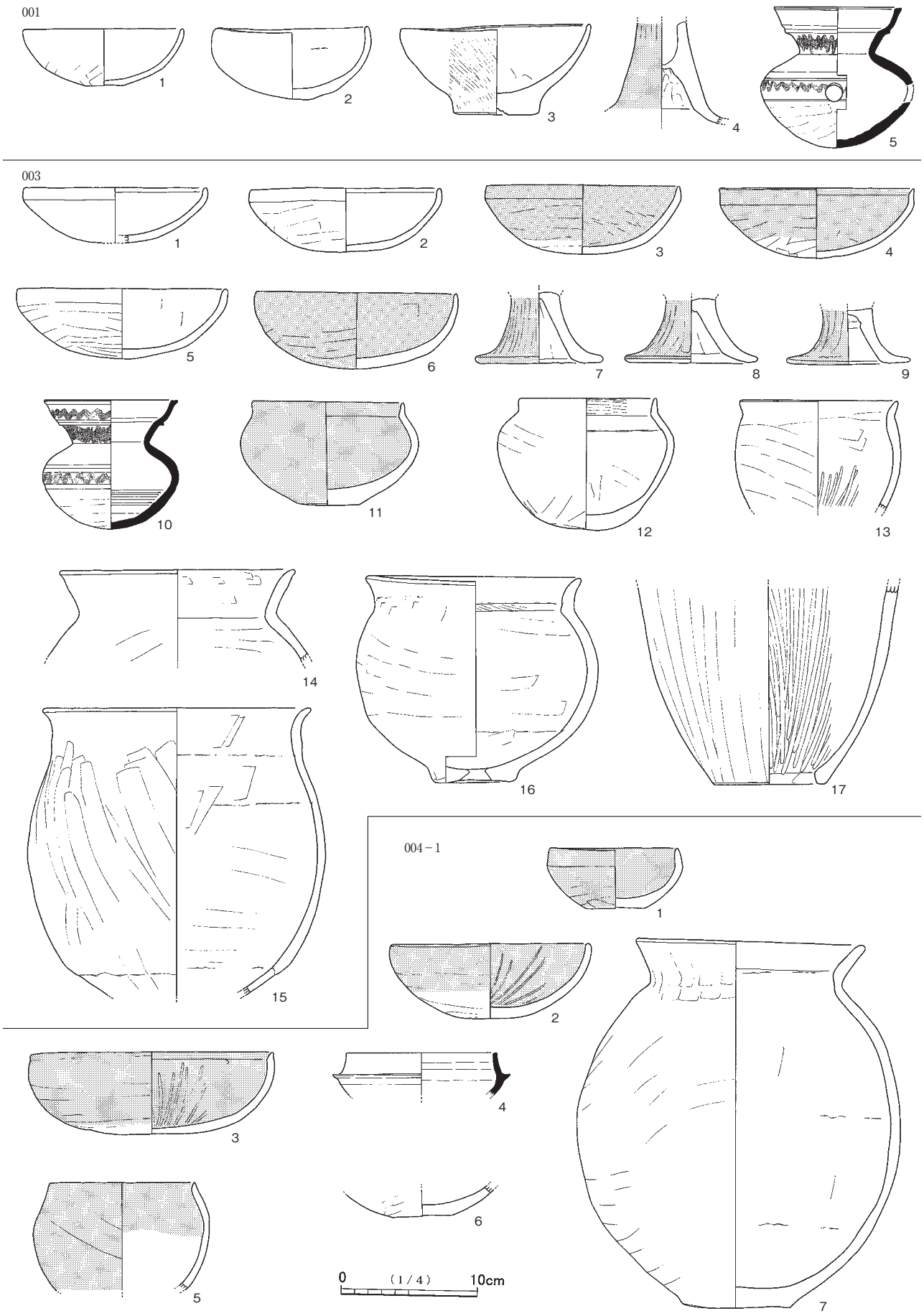


第180図　遺構出土土師器（古墳前期～中期３）

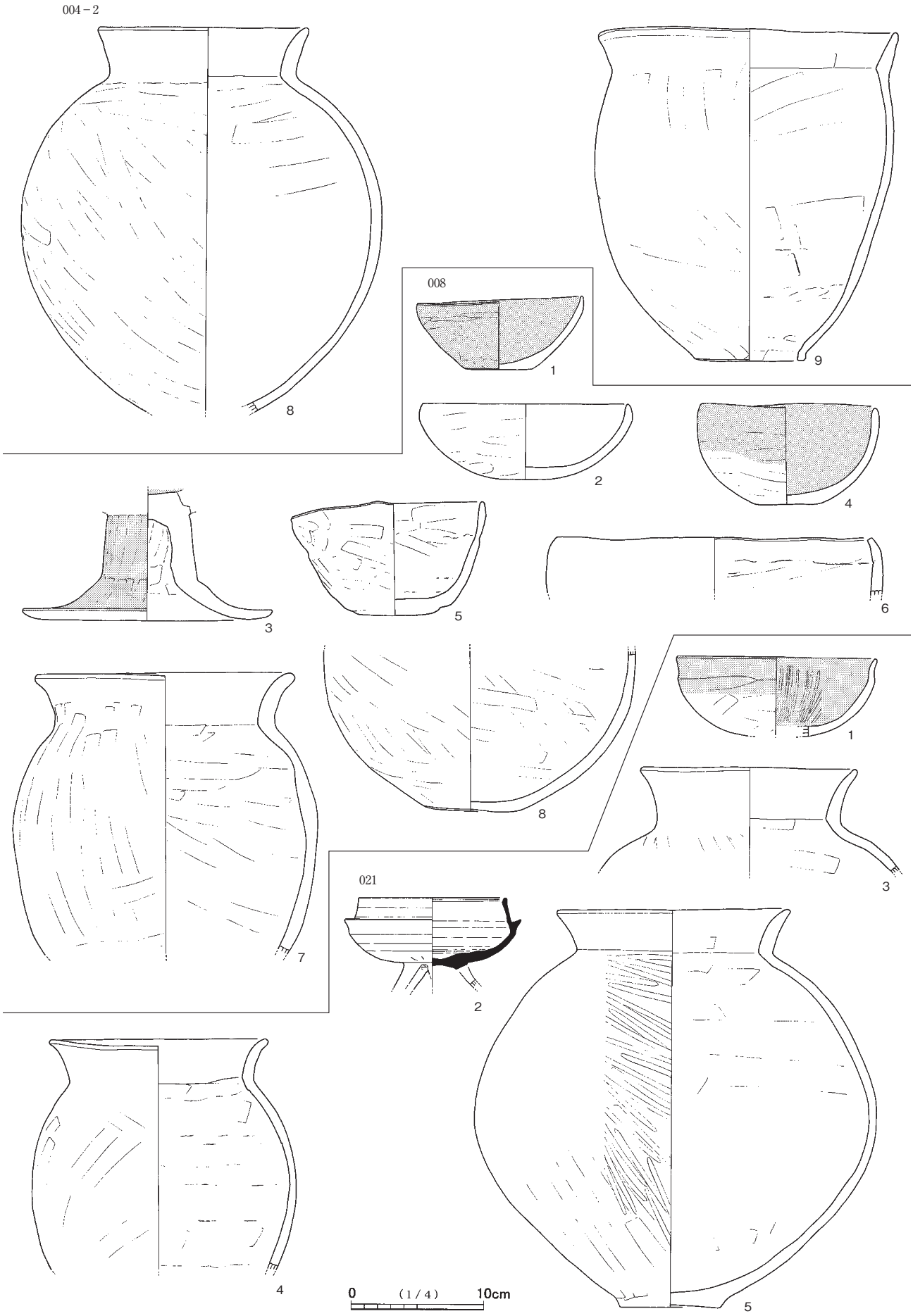
186A－4



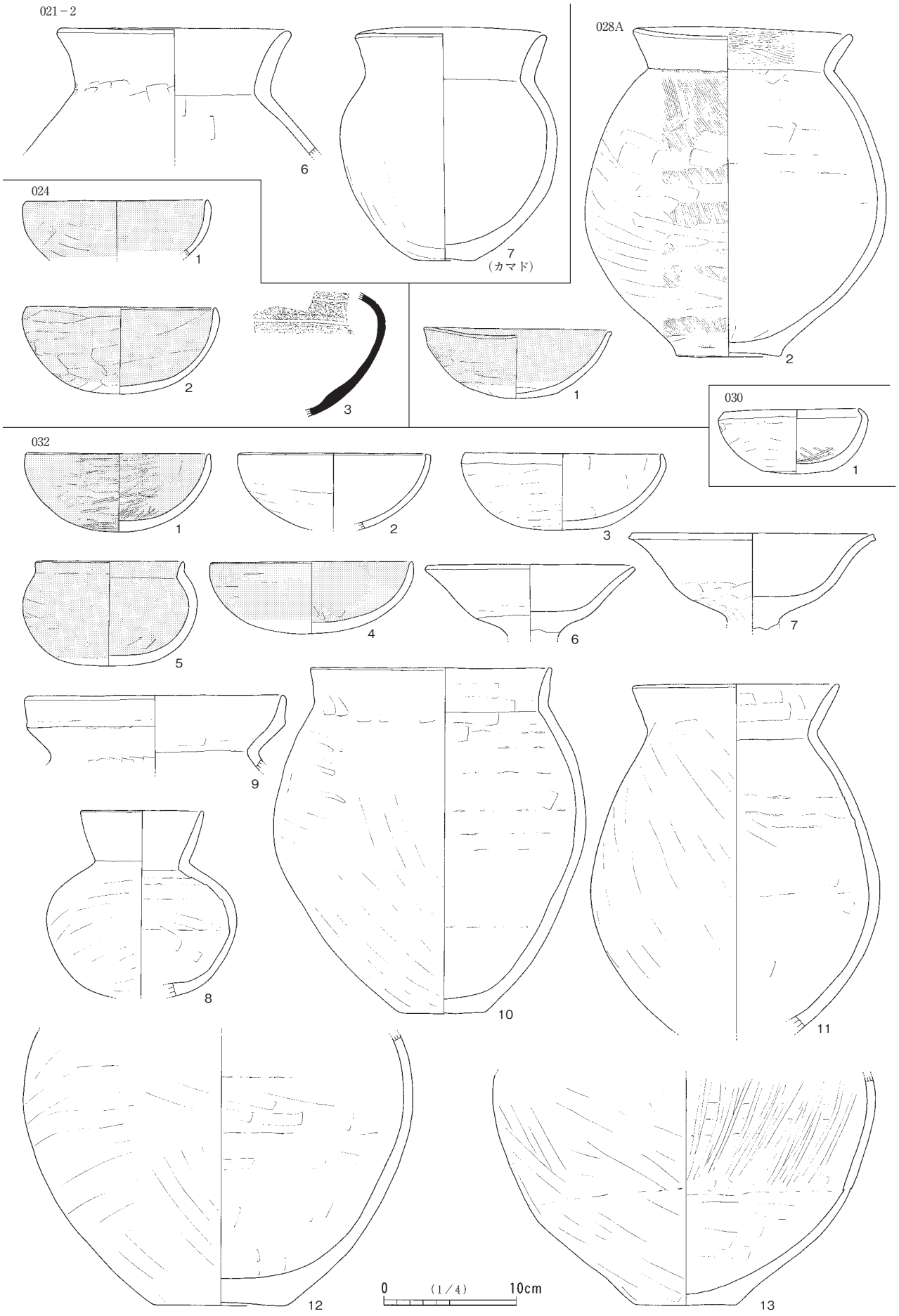
第181図　遺構出土土師器・須恵器（古墳前期～中期４）



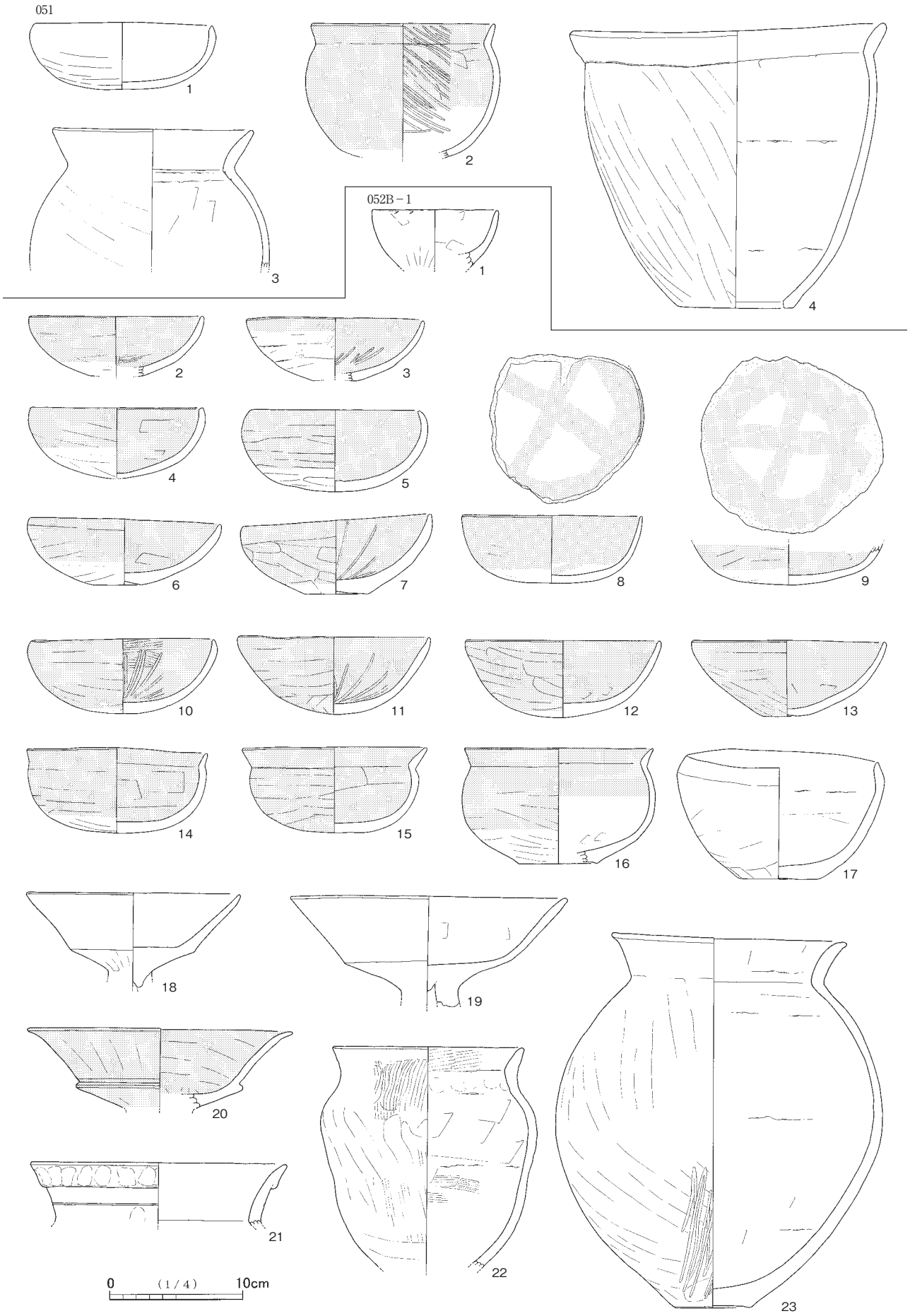
第182図　遺構出土土師器・須恵器（古墳中期１）



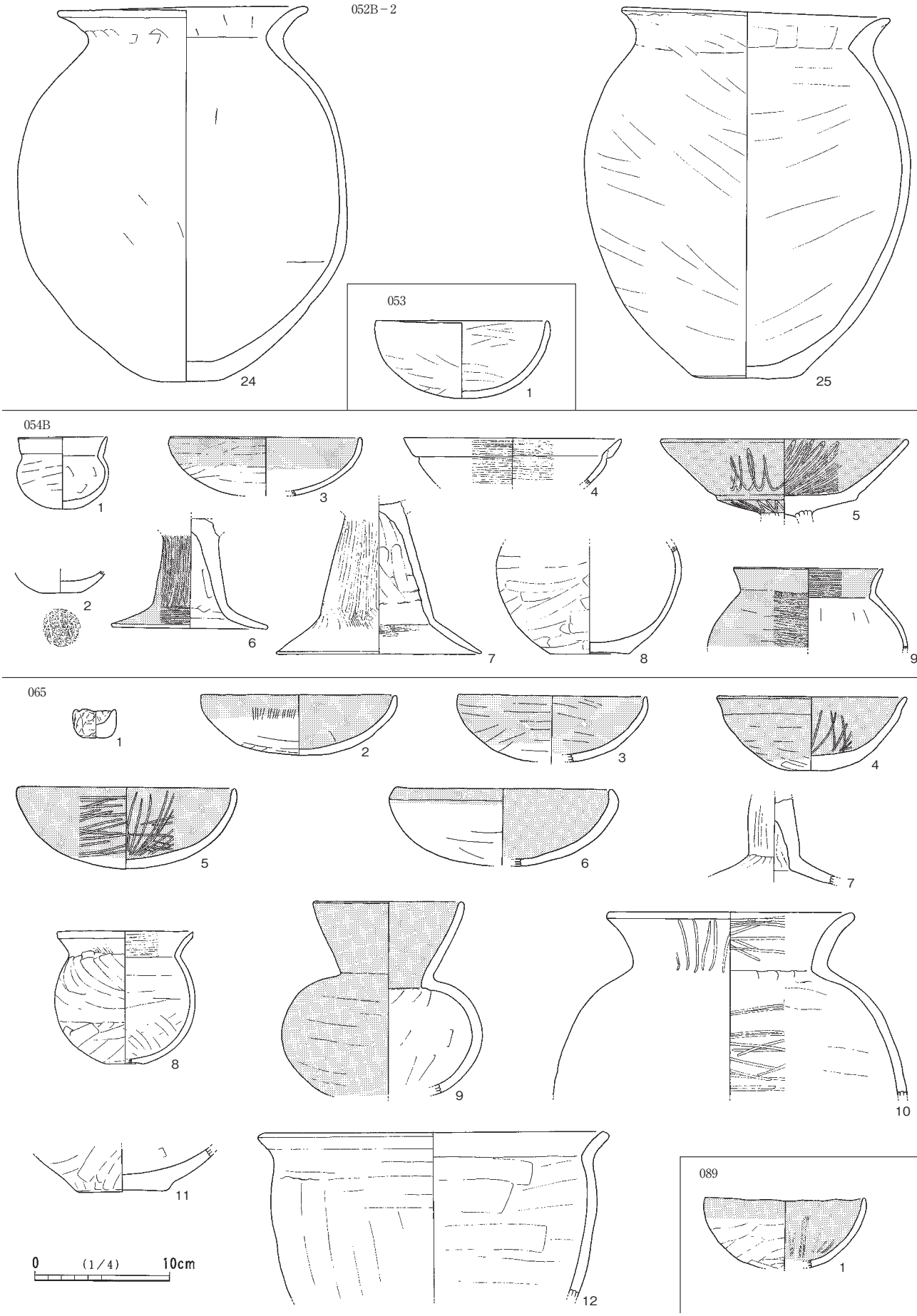
第183図　遺構出土土師器・須恵器（古墳中期２）



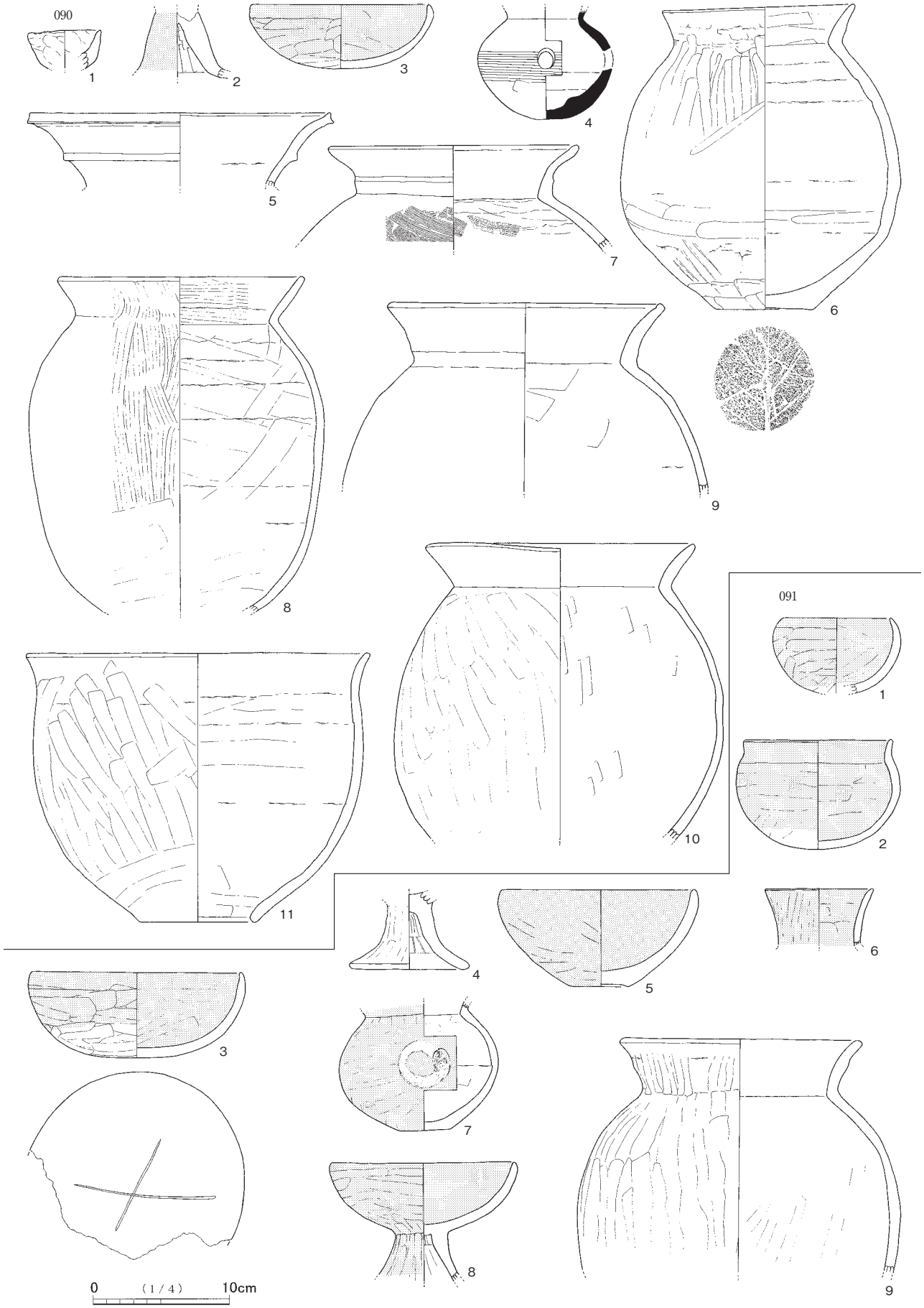
第184図　遺構出土土師器・須恵器（古墳中期３）



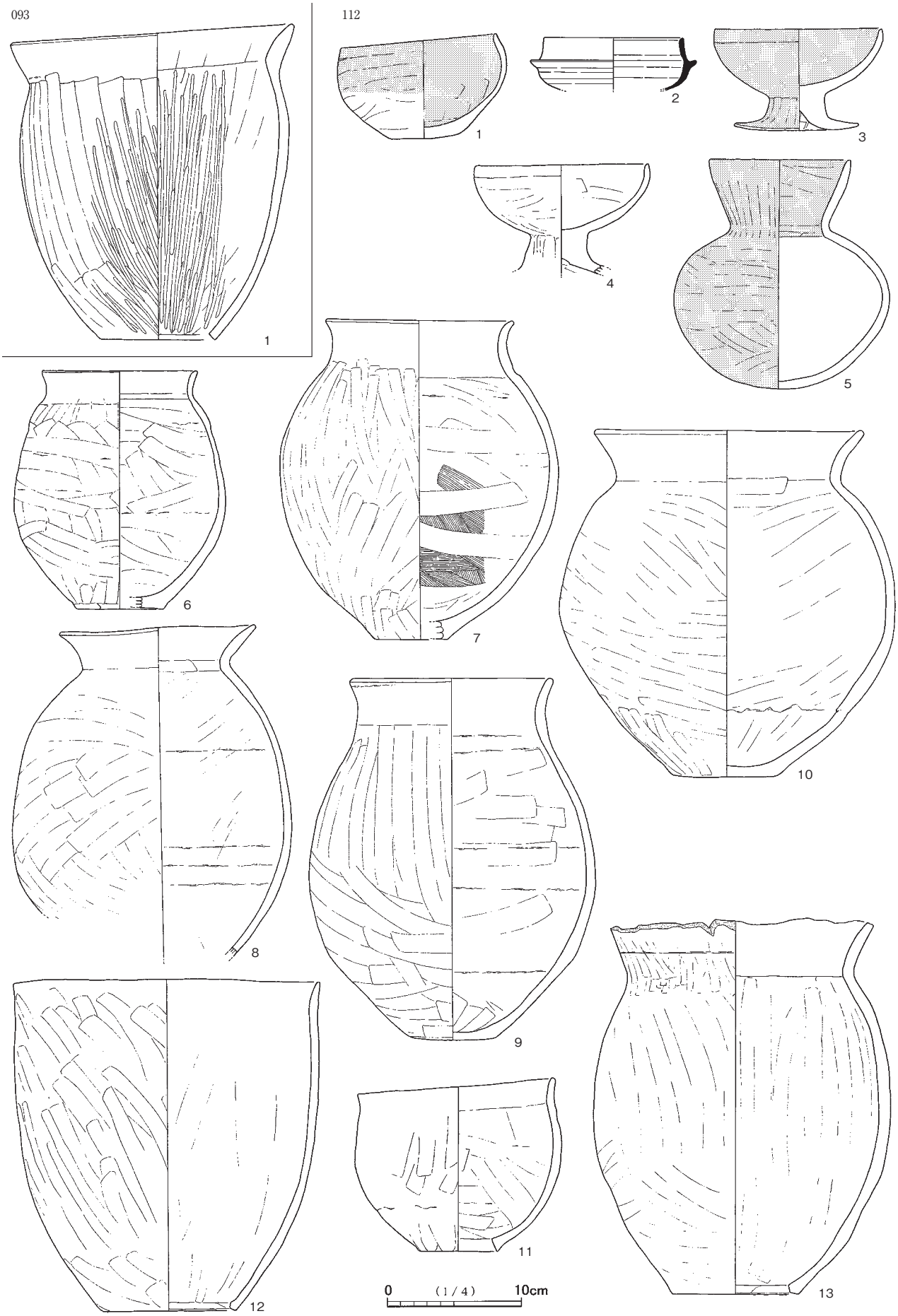
第185図　遺構出土土師器（古墳中期４）



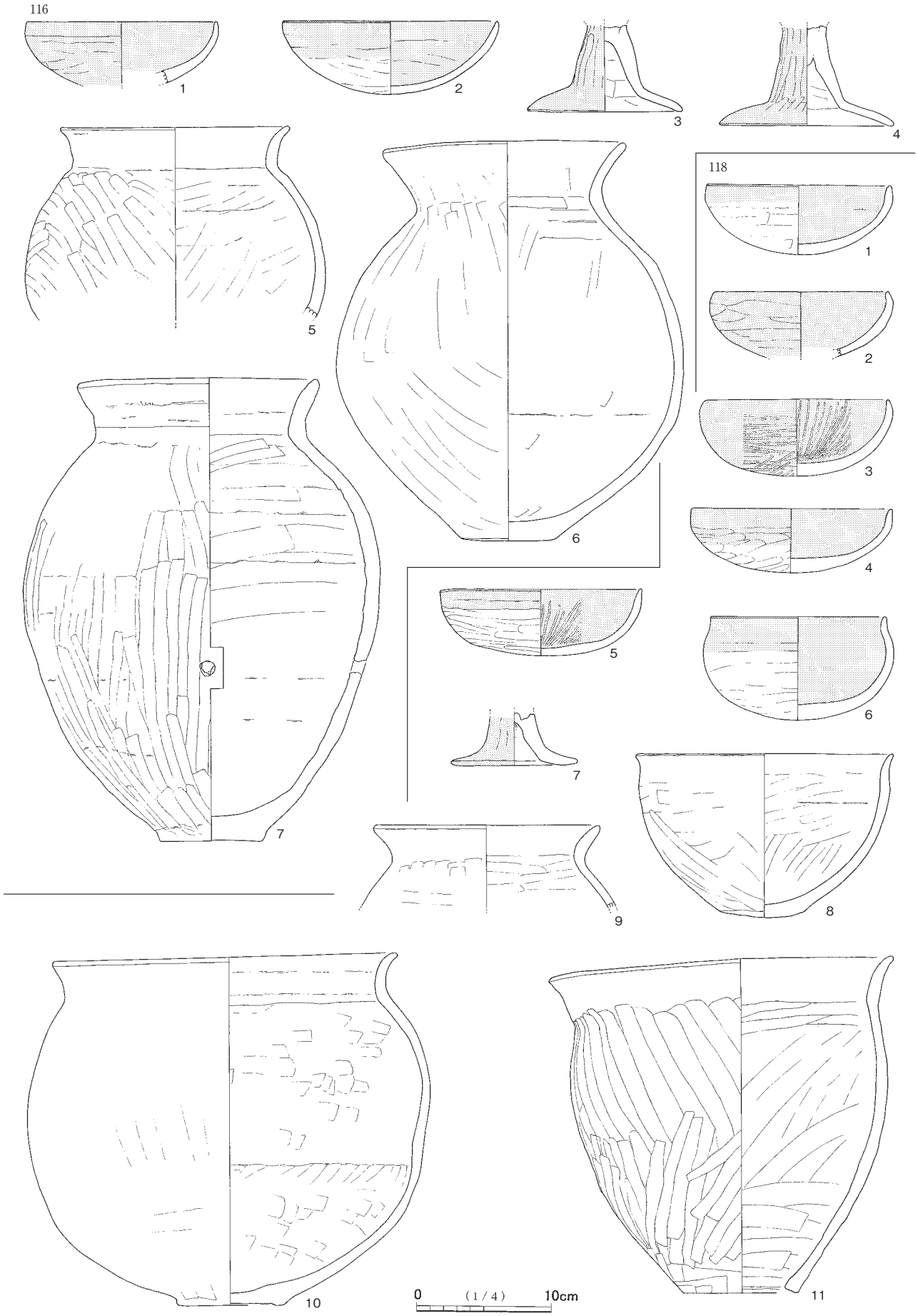
第186図　遺構出土土師器（古墳中期５）



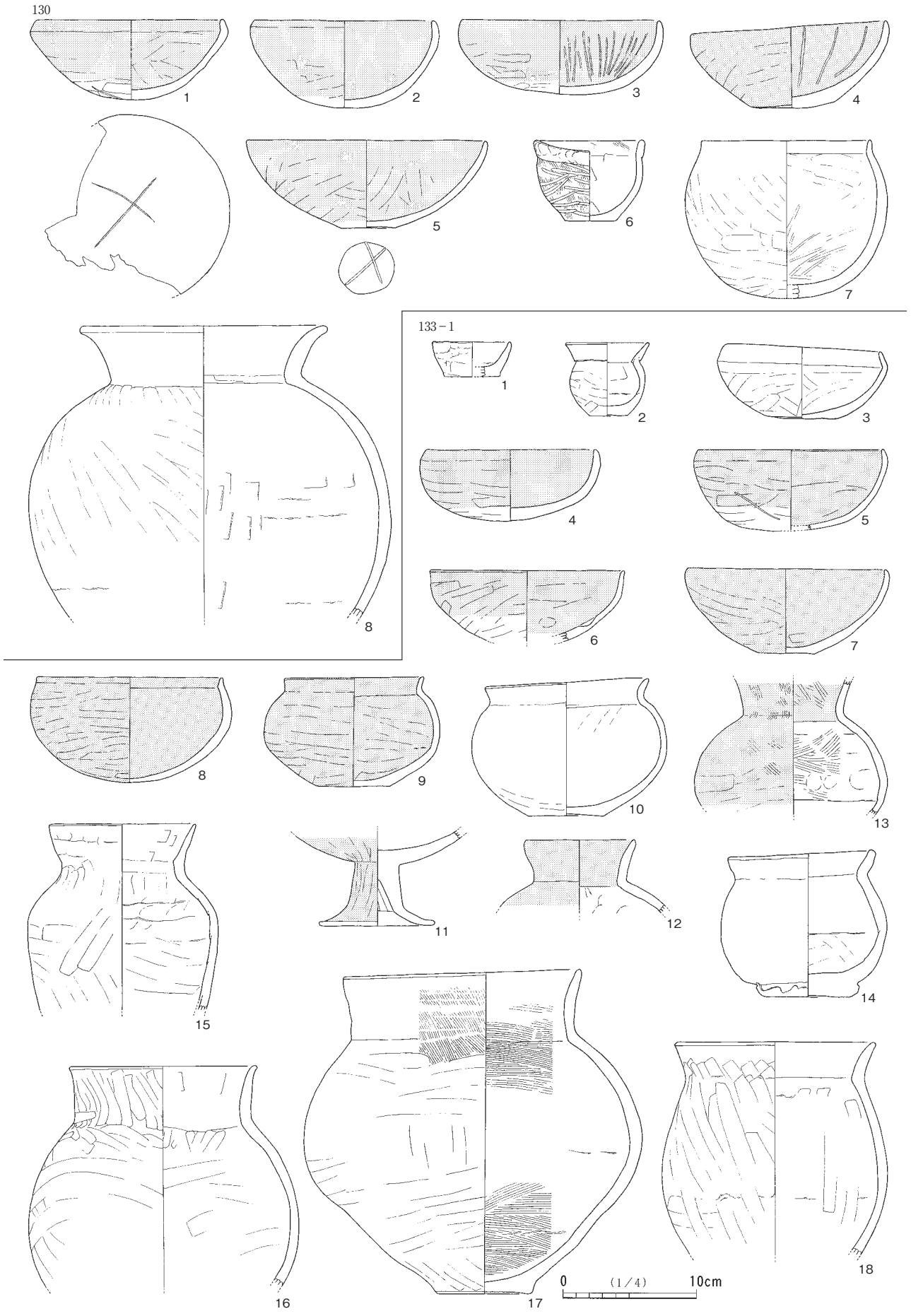
第187図　遺構出土土師器・須恵器（古墳中期６）



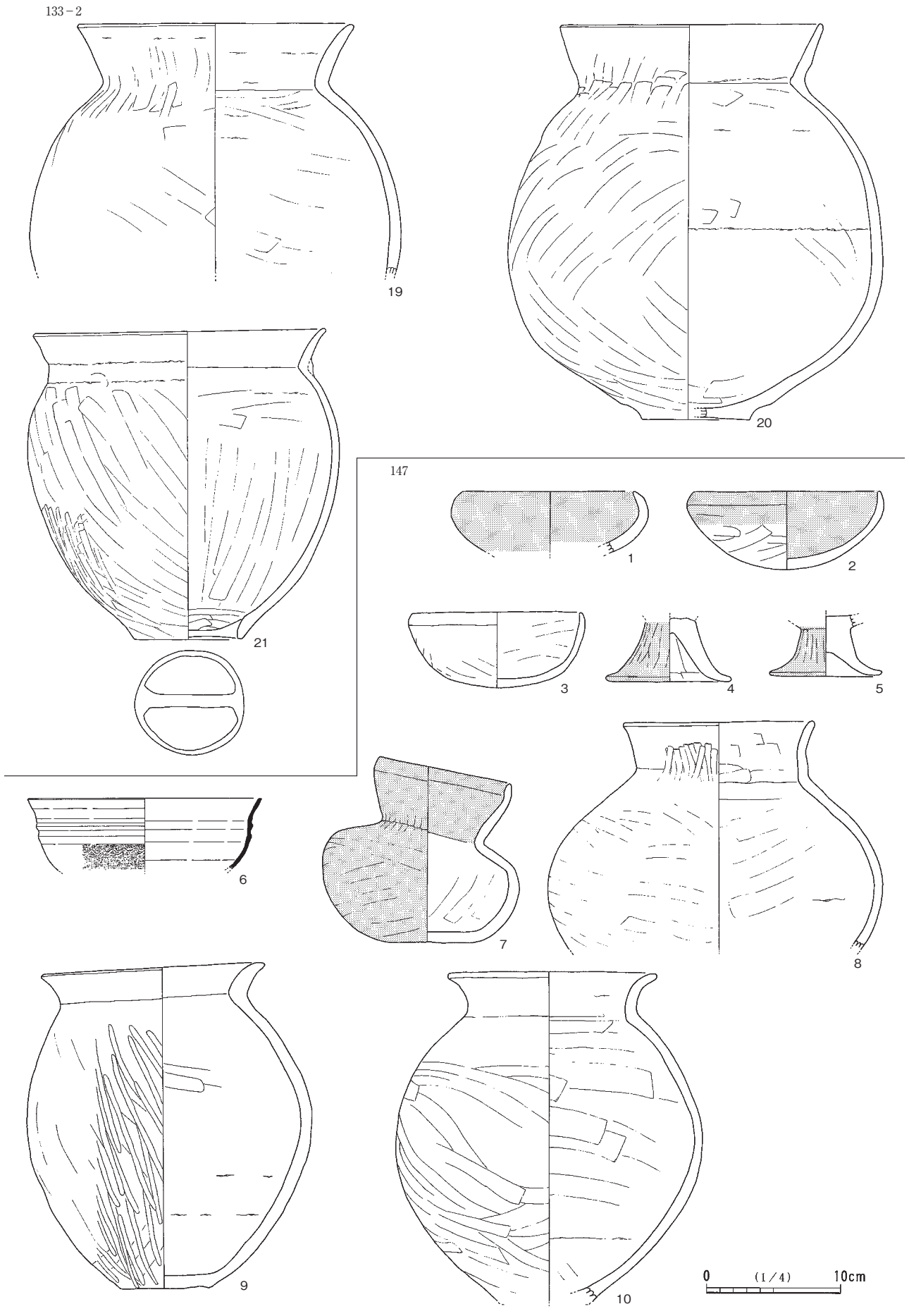
第188図　遺構出土土師器・須恵器（古墳中期７）



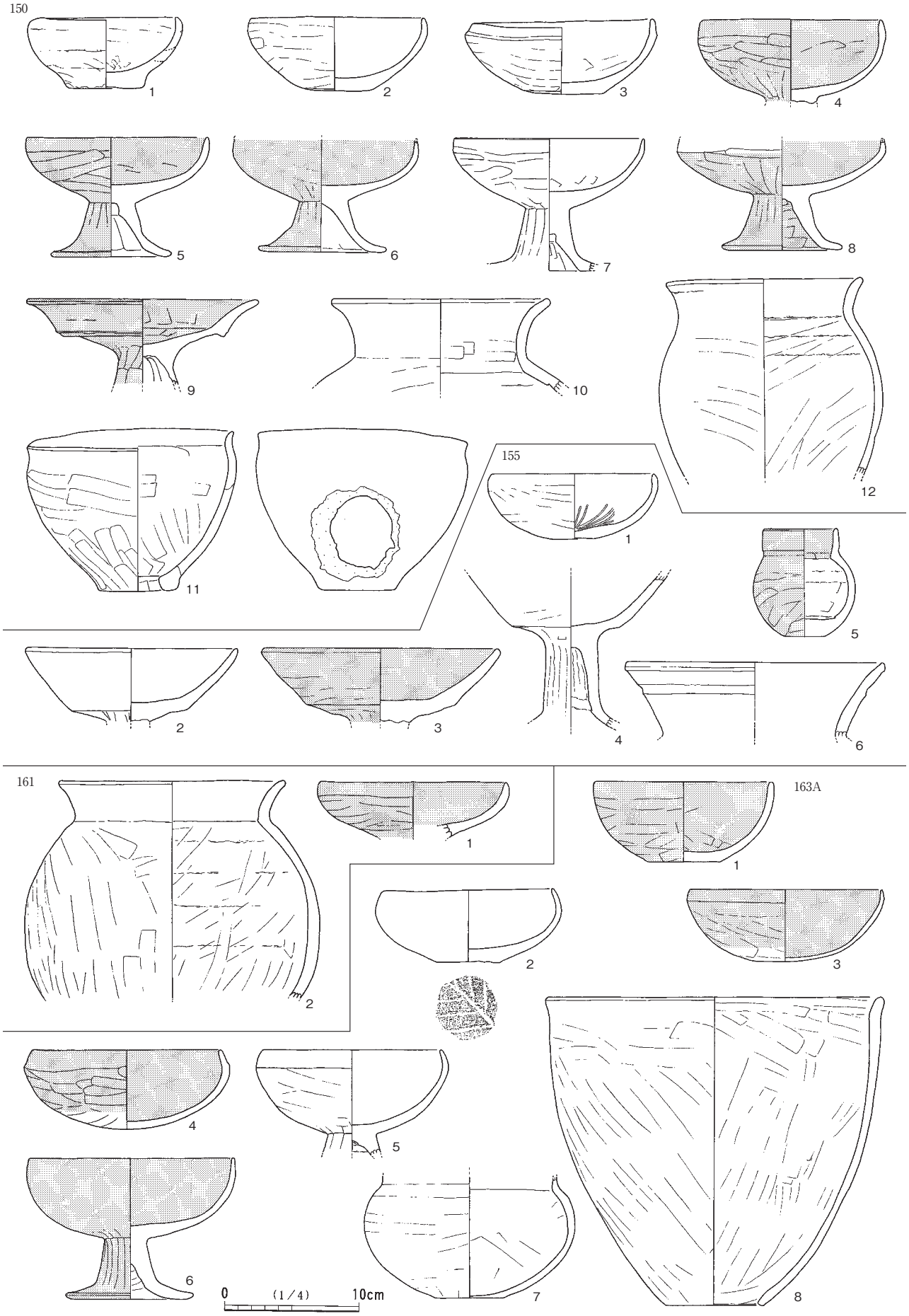
第189図　遺構出土土師器（古墳中期８）



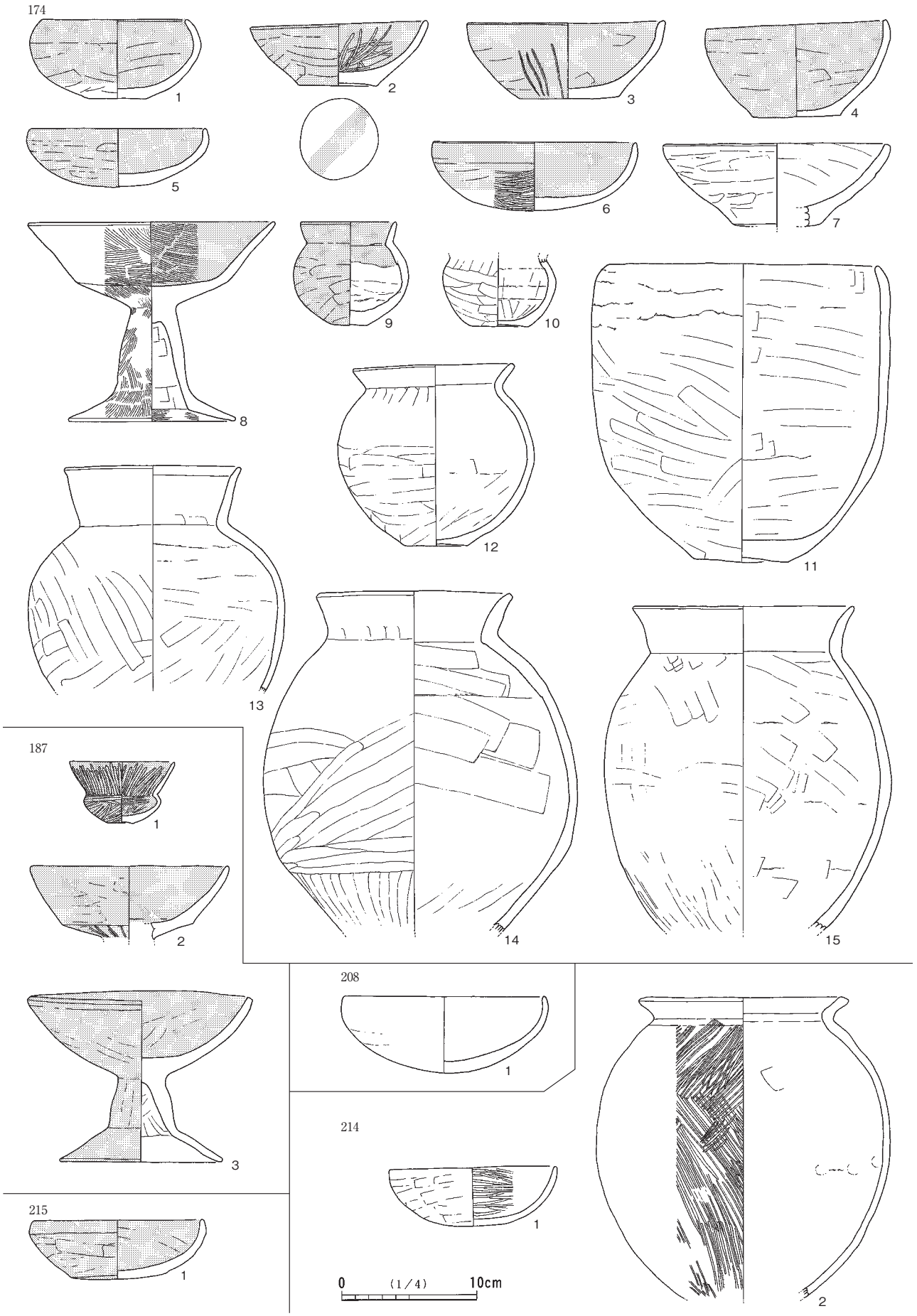
第190図　遺構出土土師器（古墳中期９）



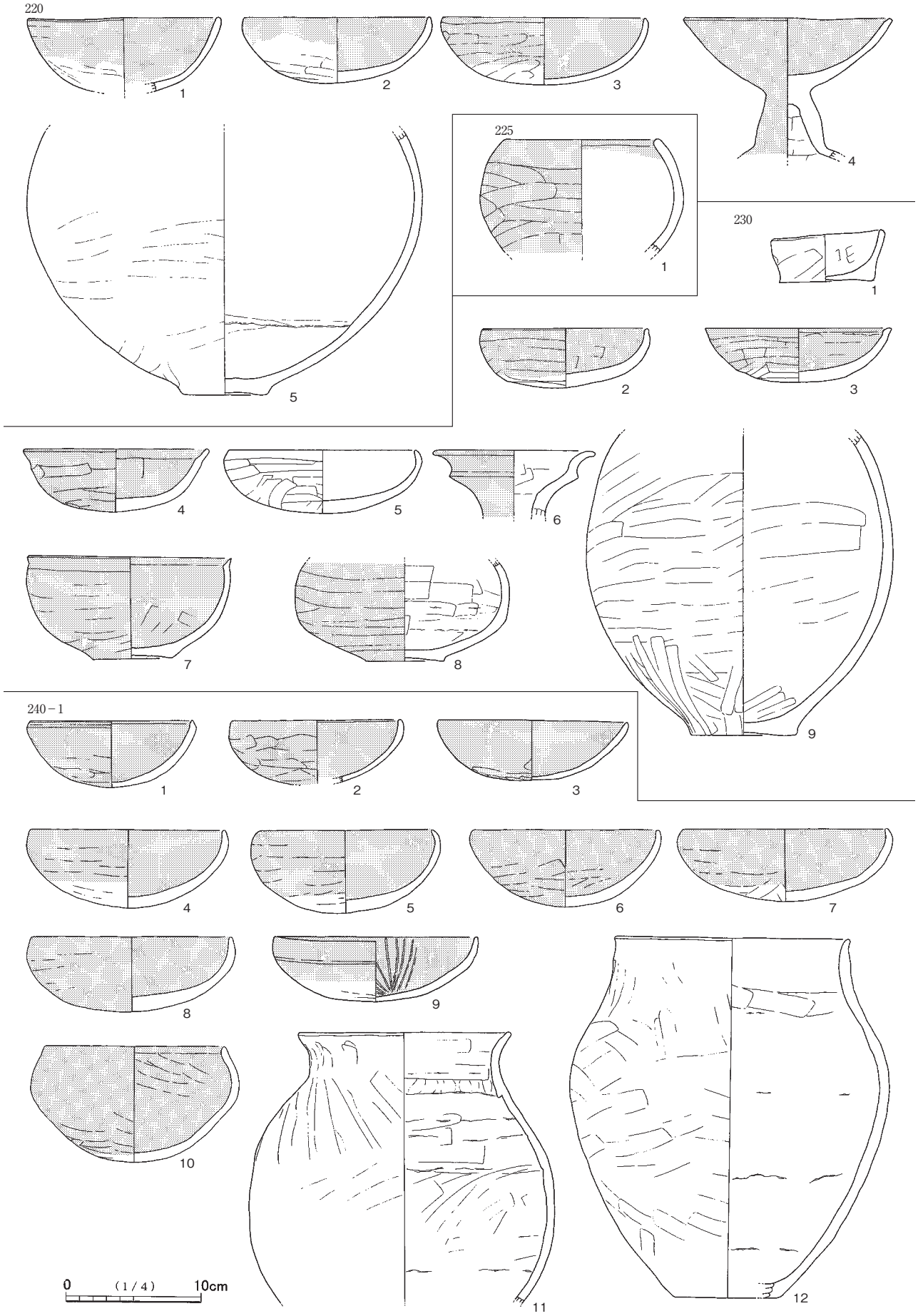
第191図　遺構出土土師器・須恵器（古墳中期10）



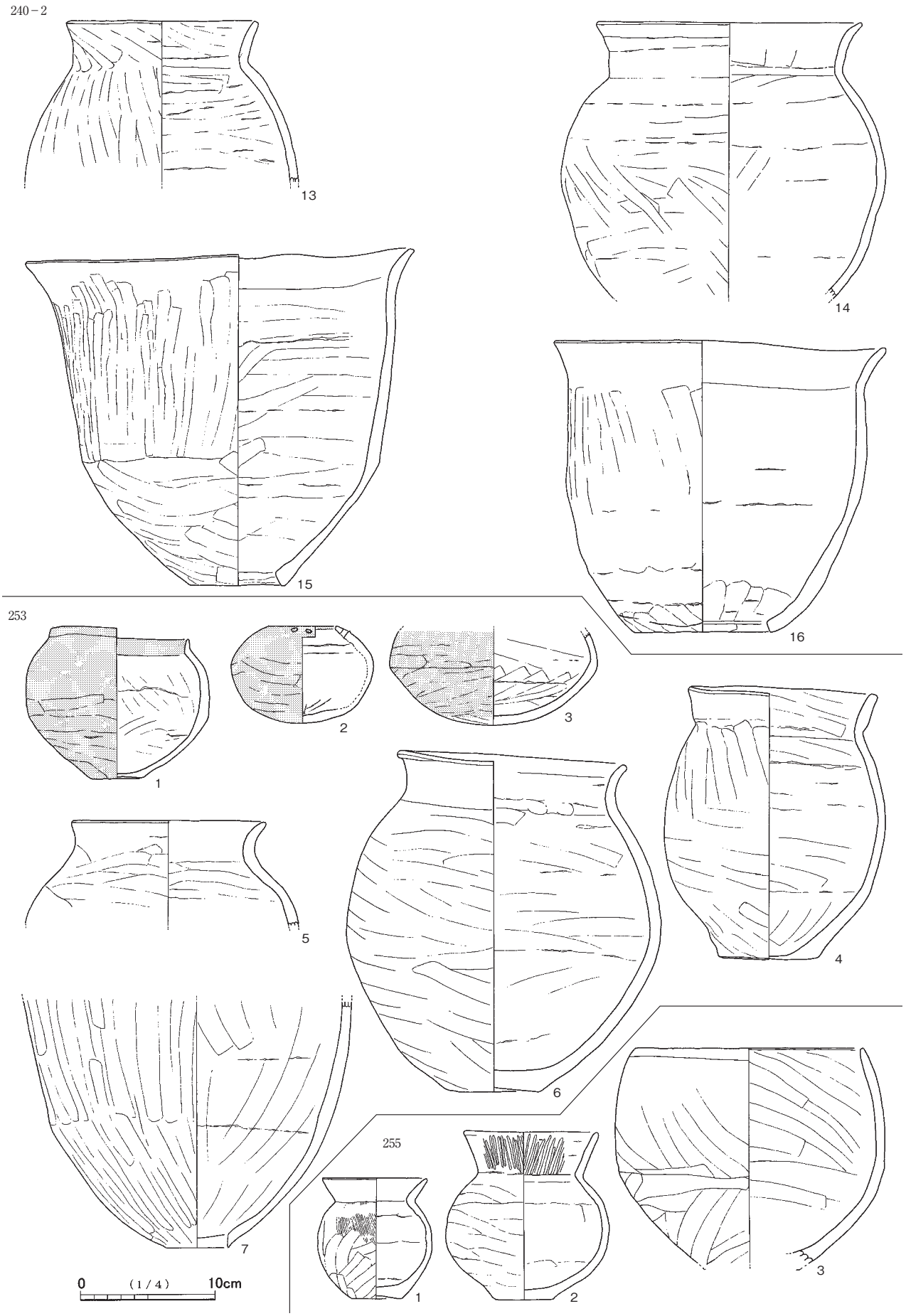
第192図　遺構出土土師器（古墳中期11）



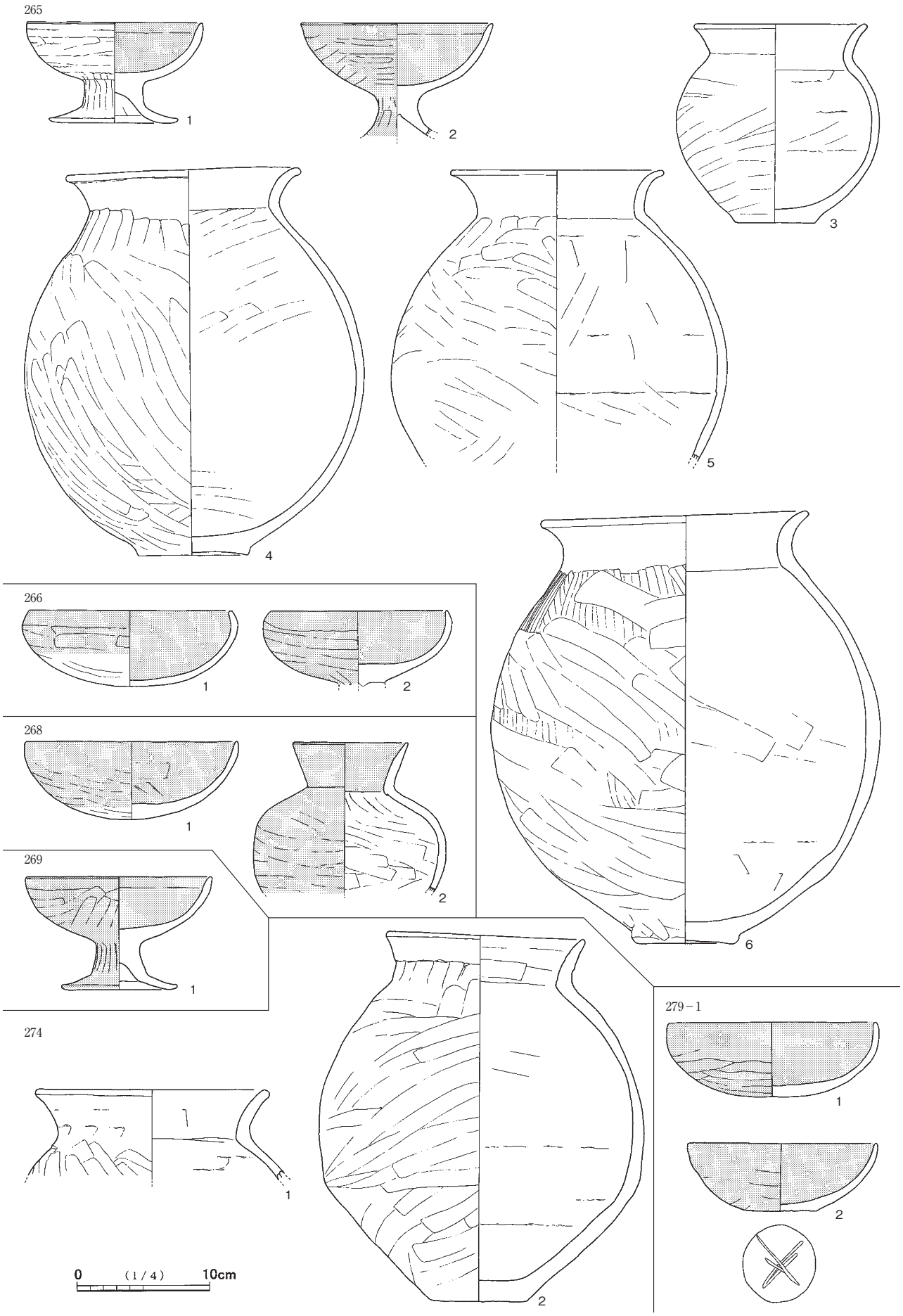
第193図　遺構出土土師器（古墳中期12）



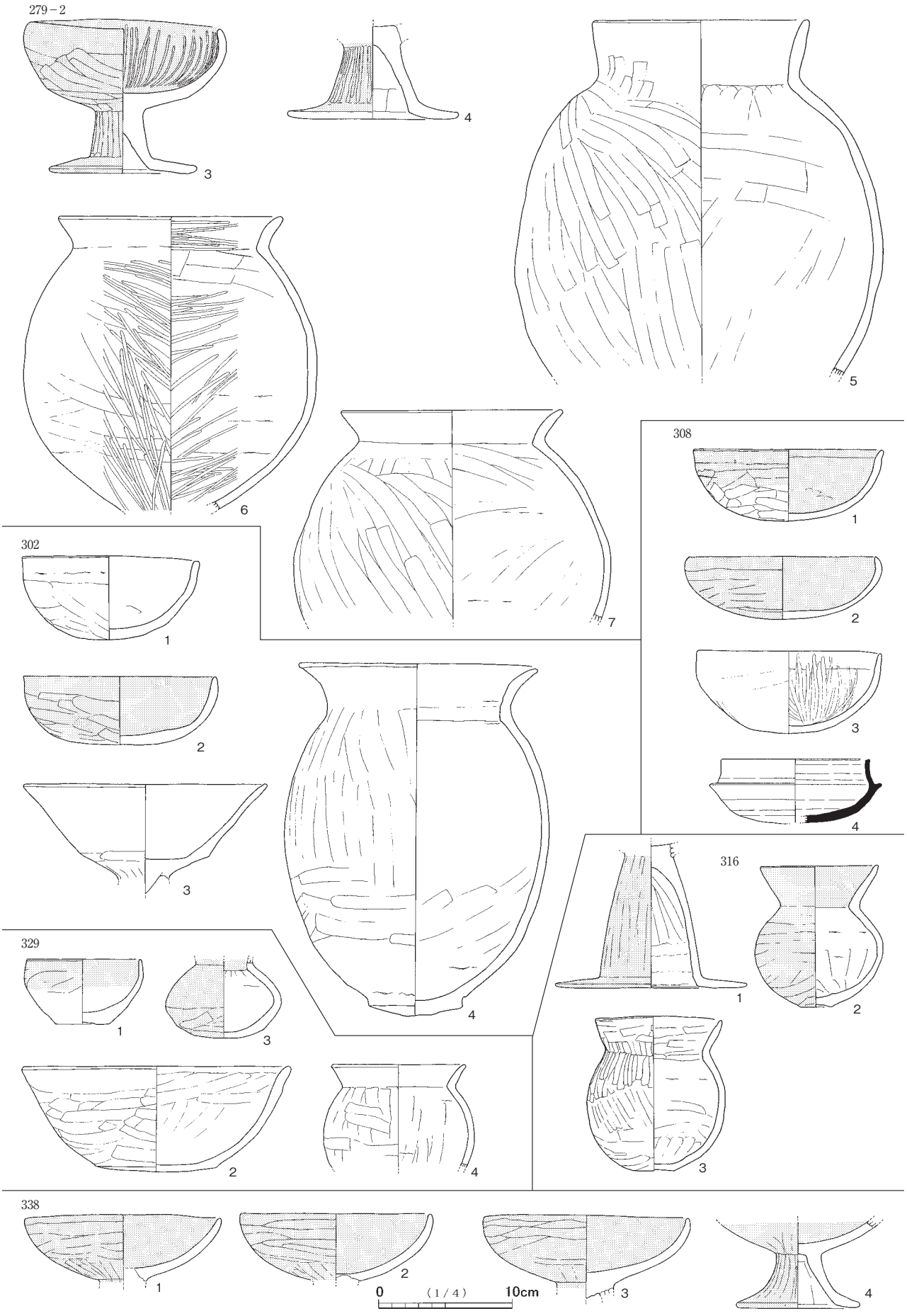
第194図　遺構出土土師器（古墳中期13）



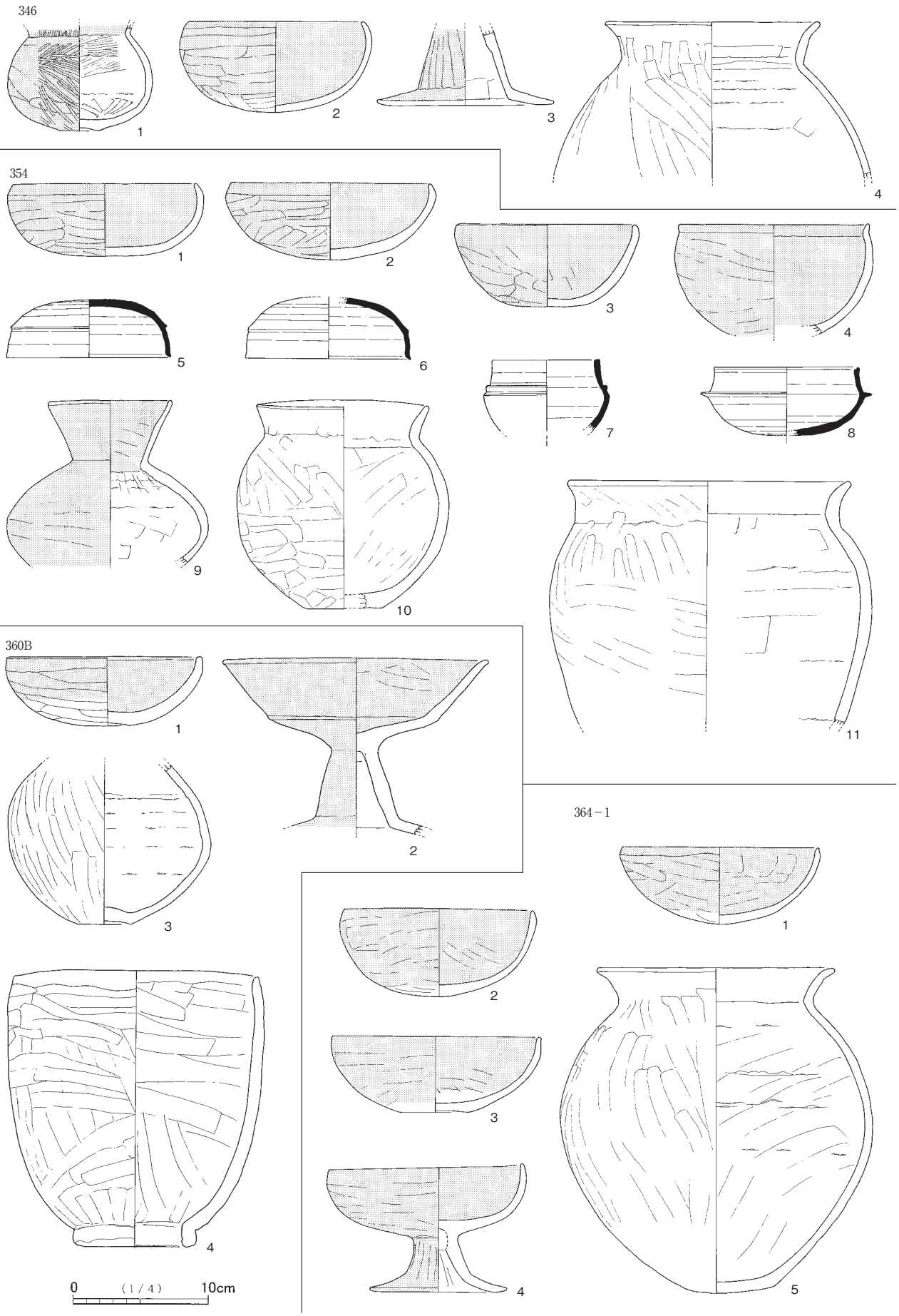
第195図　遺構出土土師器（古墳中期14）



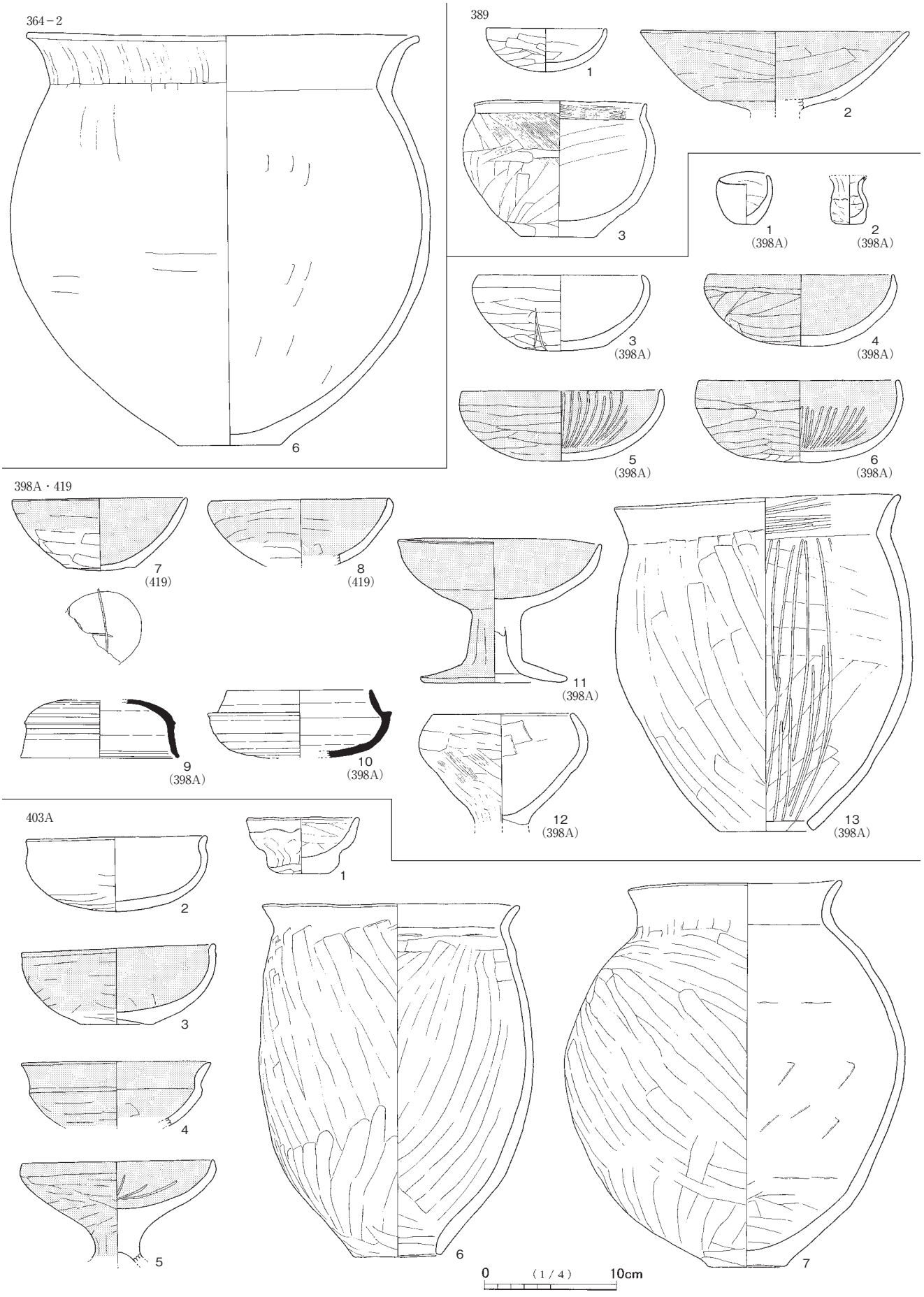
第196図　遺構出土土師器（古墳中期15）



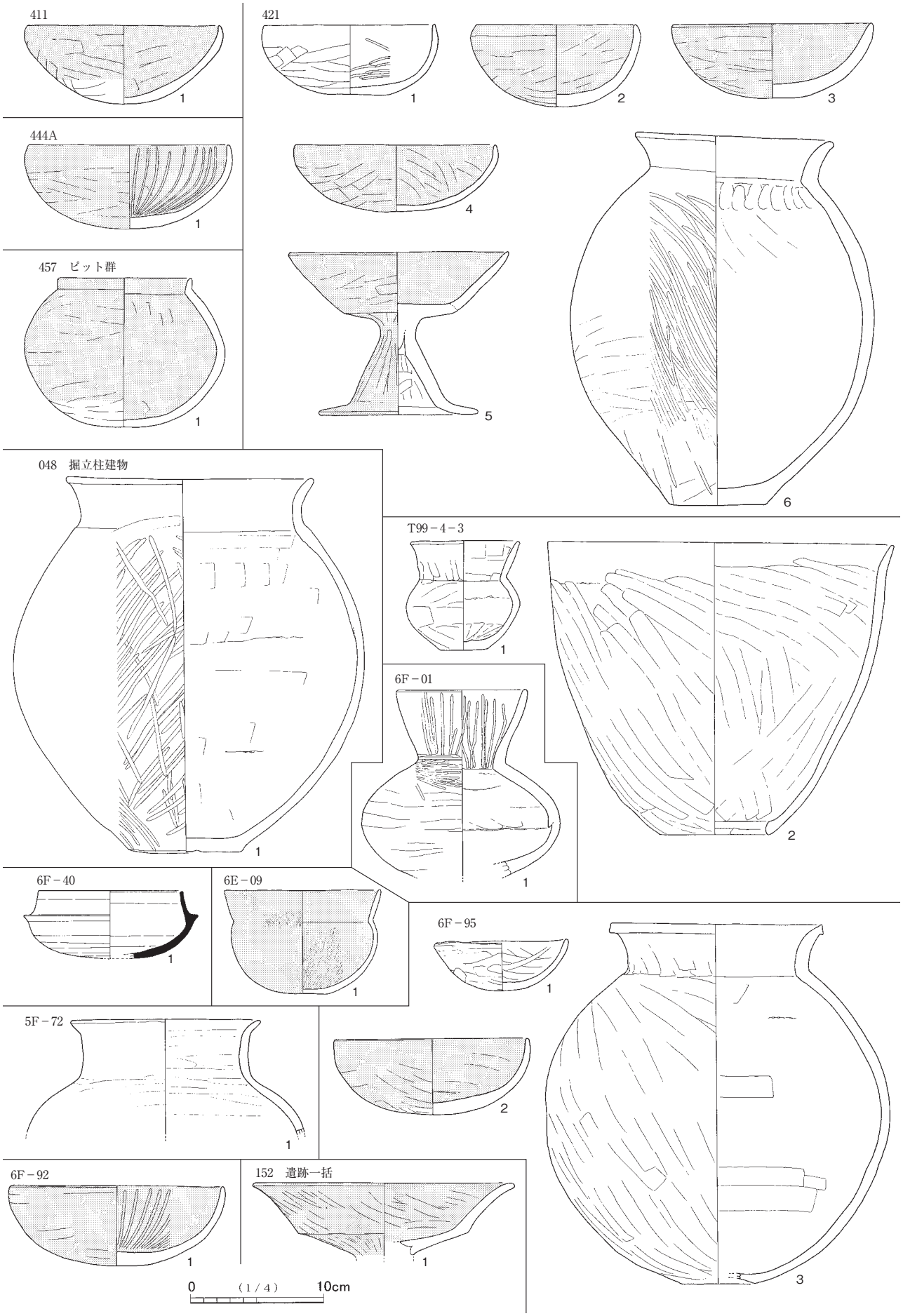
第197図　遺構出土土師器・須恵器（古墳中期16）



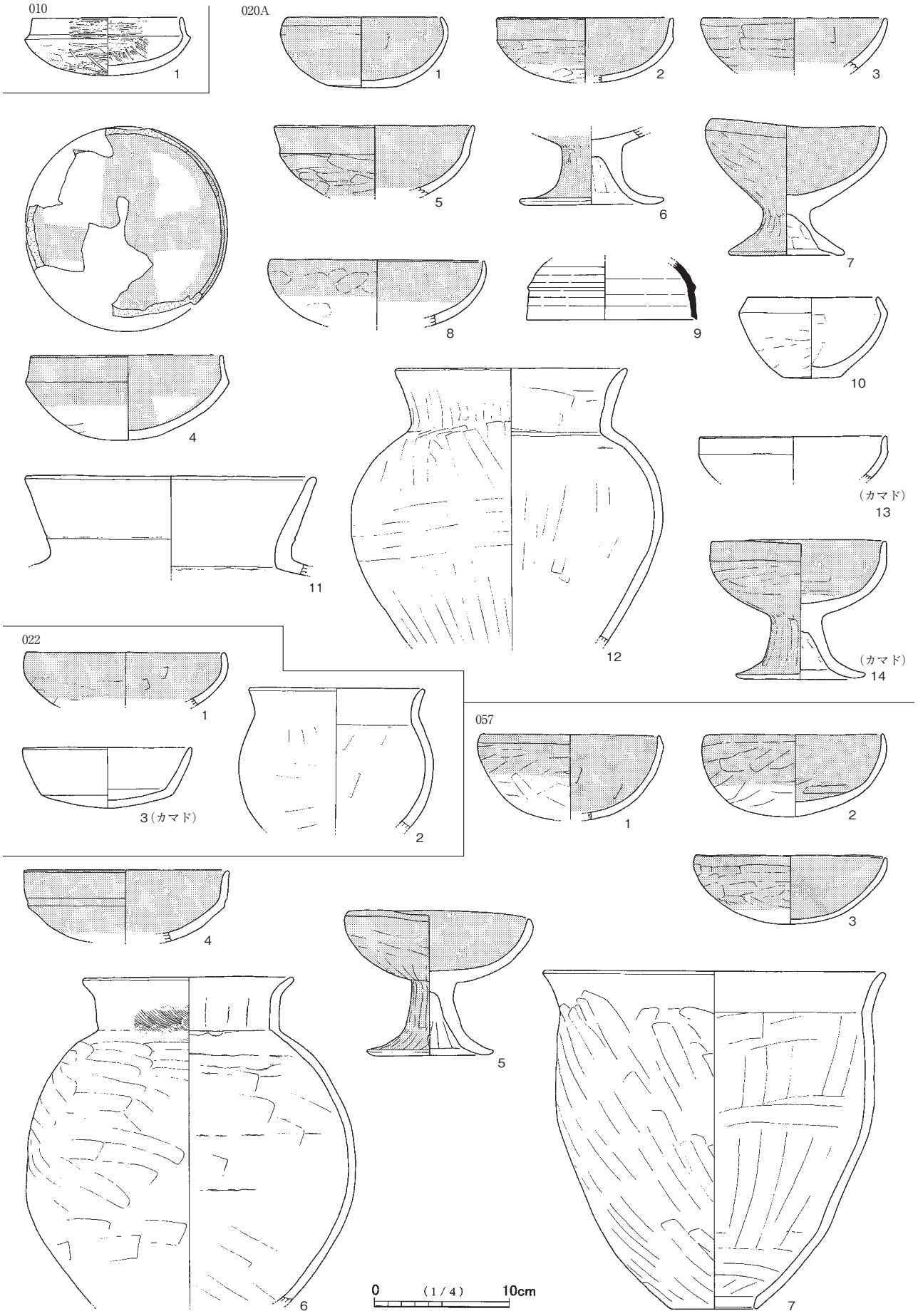
第198図　遺構出土土師器・須恵器（古墳中期17）



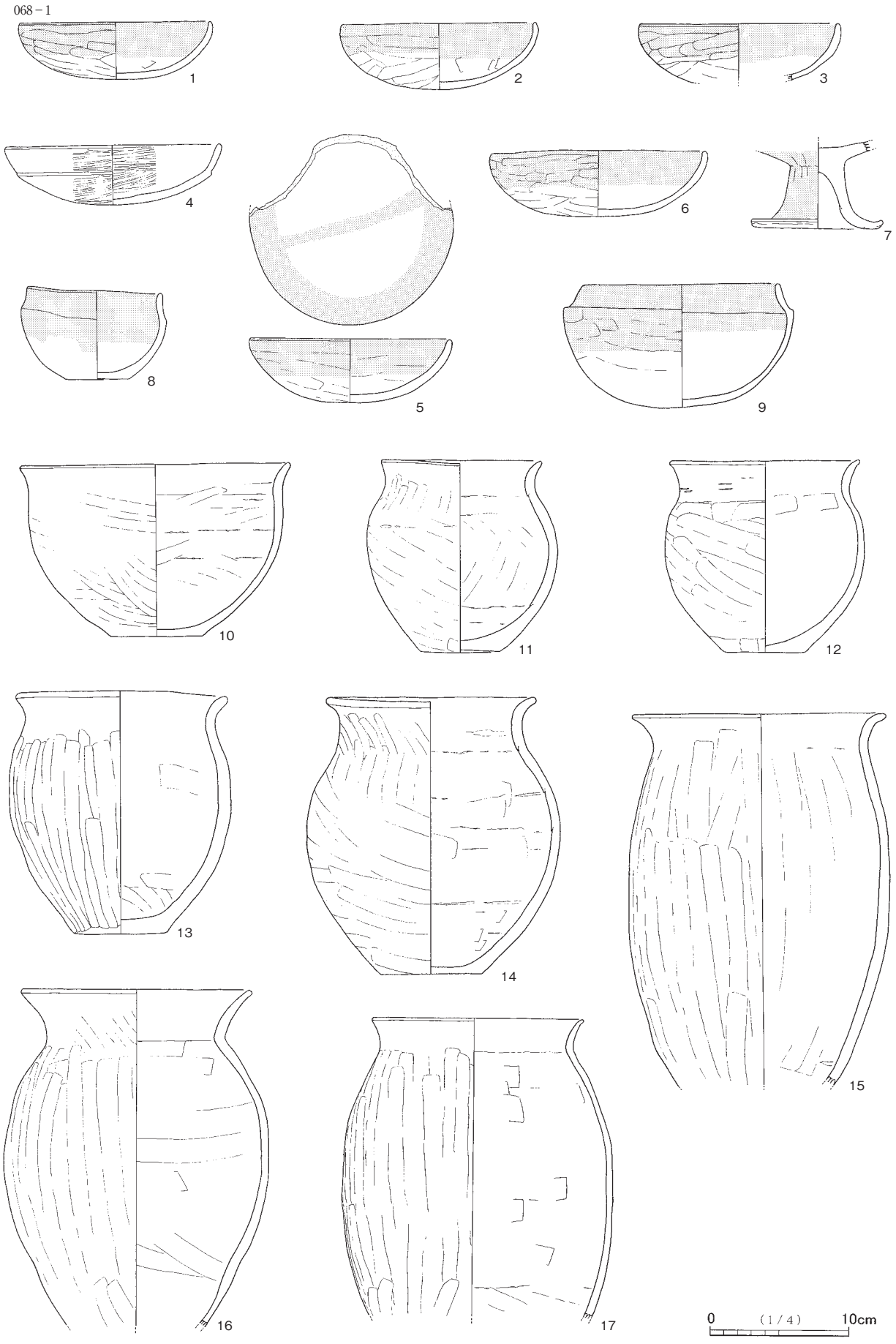
第199図　遺構出土土師器・須恵器（古墳中期18）



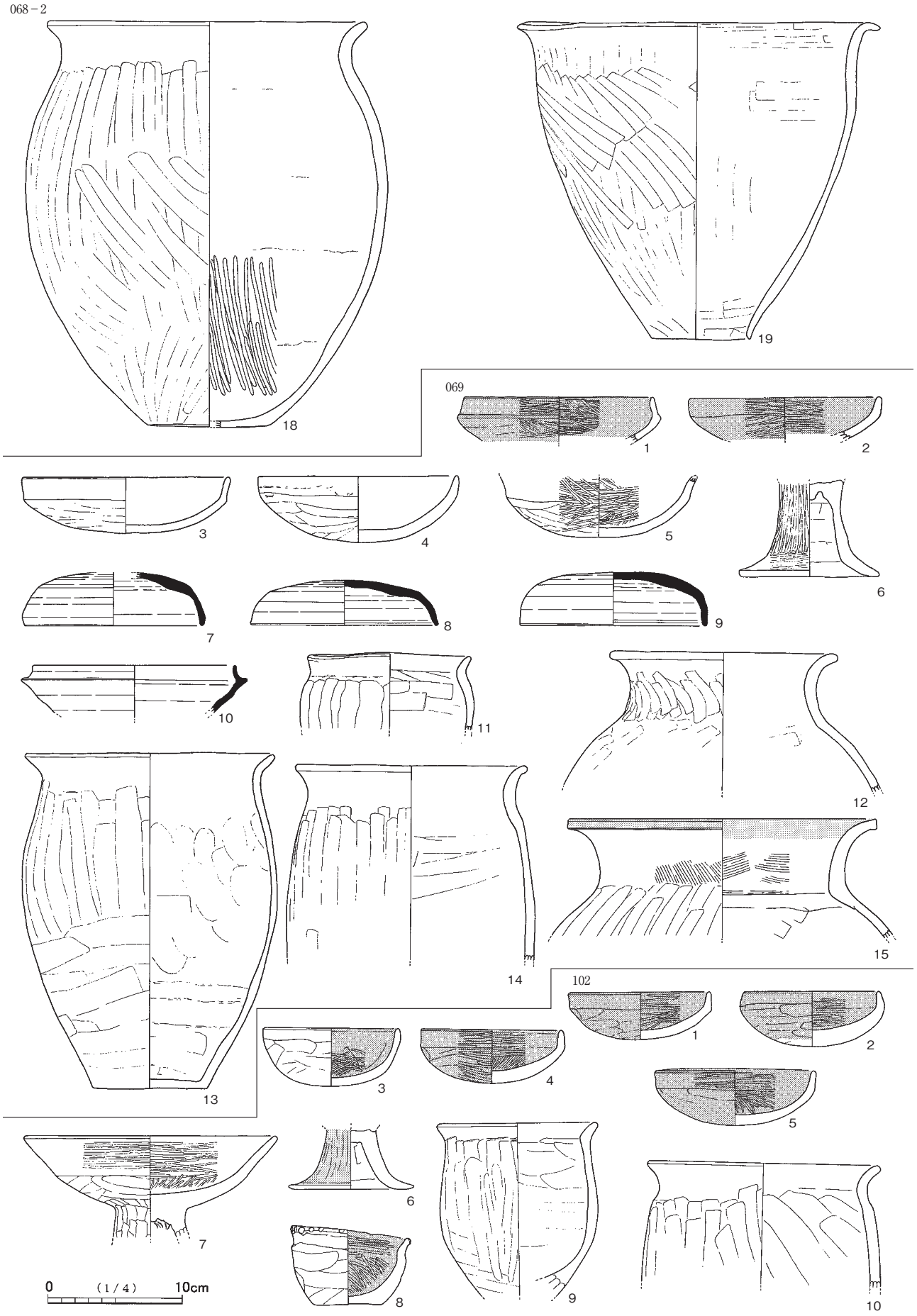
第200図　遺構およびグリッド出土土師器・須恵器（古墳中期19）



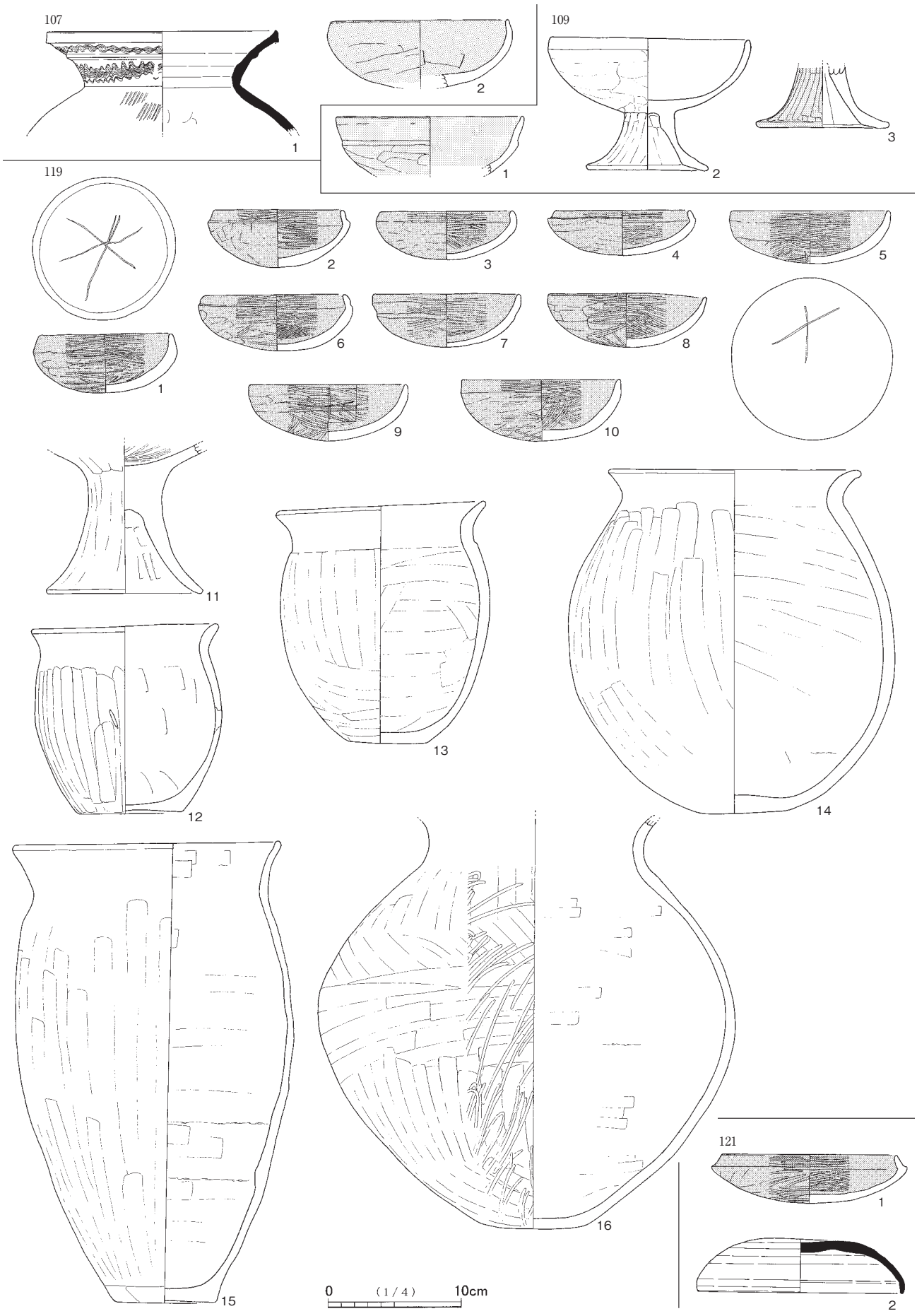
第201図　遺構出土土師器・須恵器（古墳後期１）



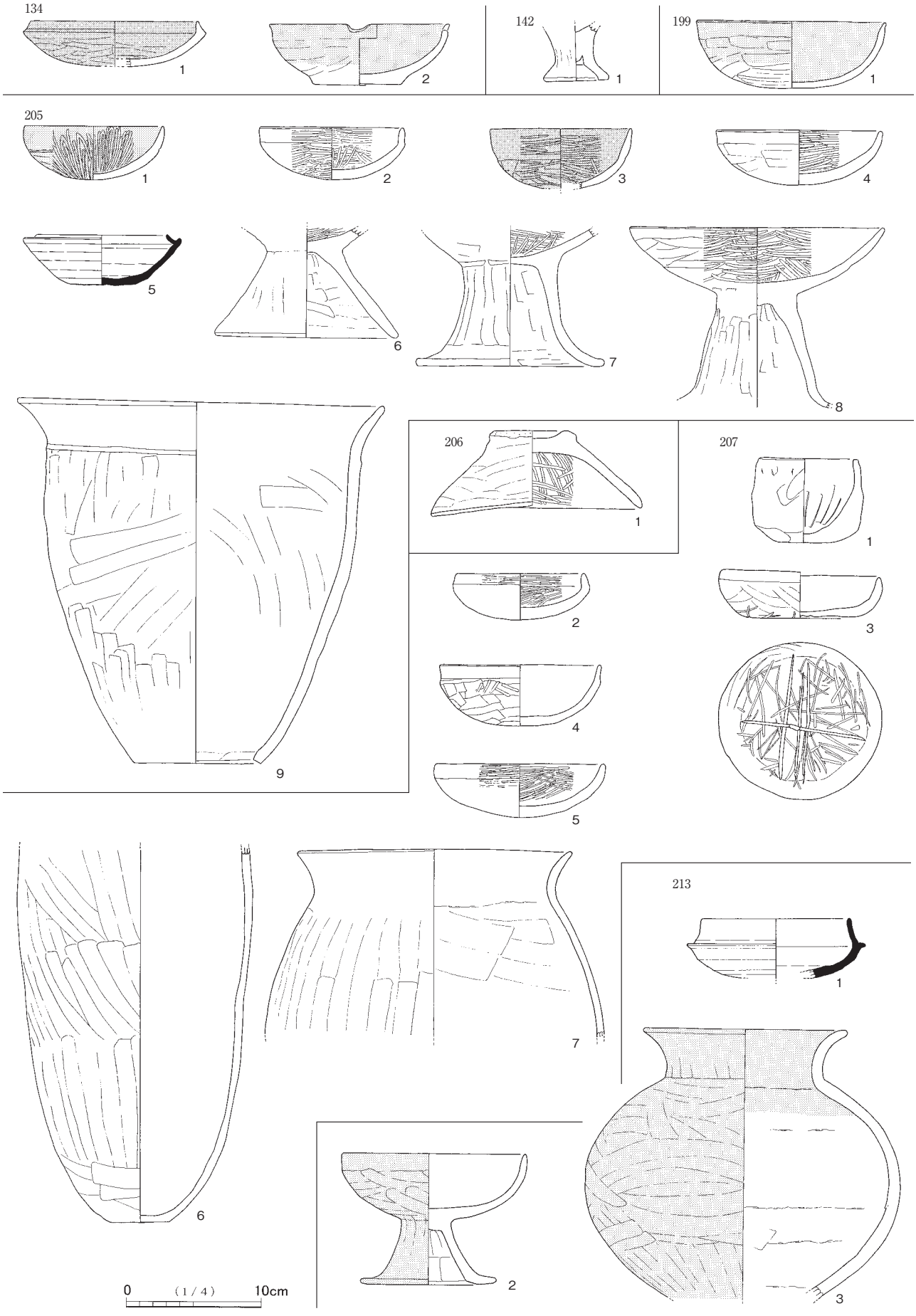
第202図　遺構出土土師器（古墳後期２）



第203図　遺構出土土師器・須恵器（古墳後期３）

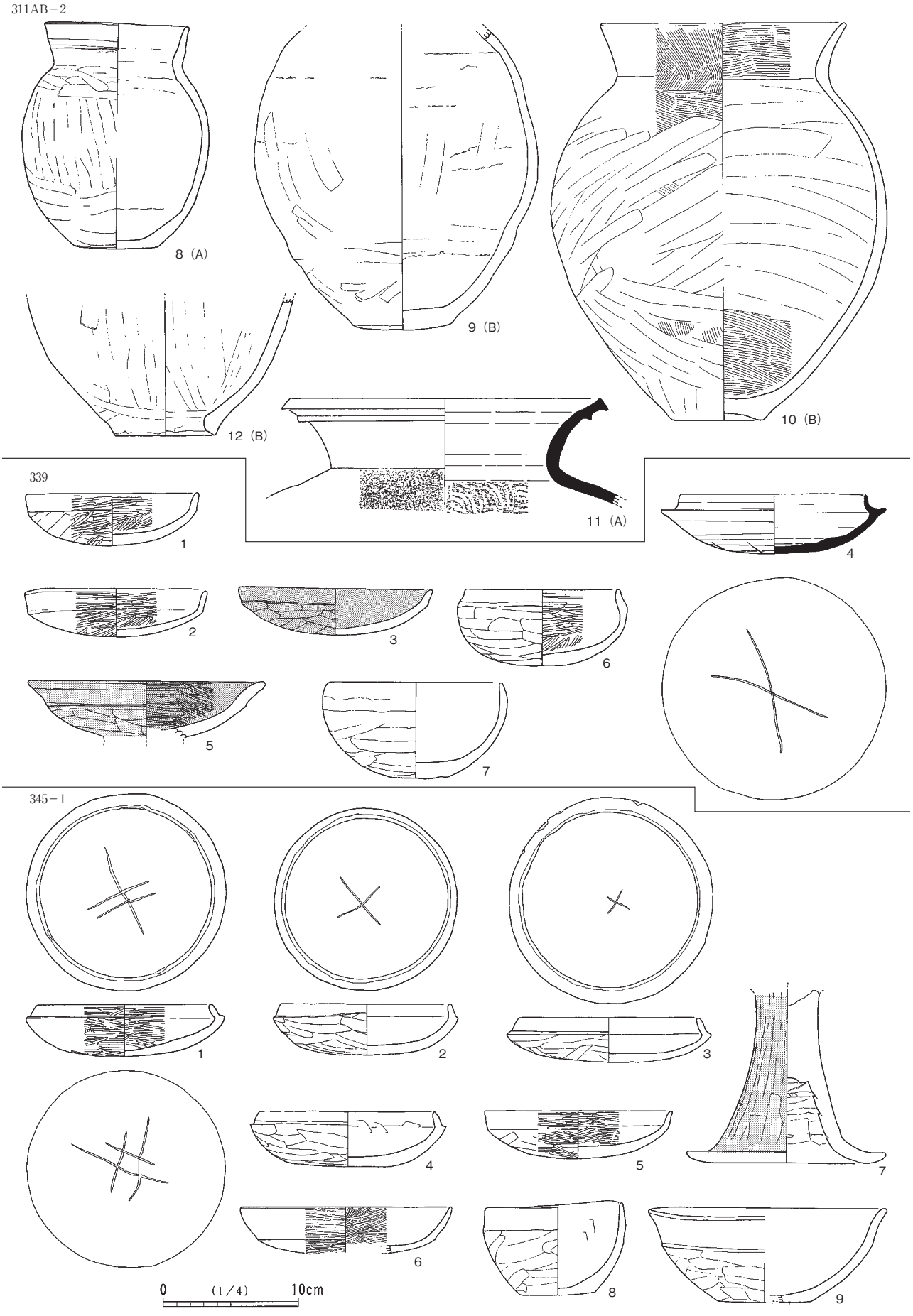


第204図　遺構出土土師器・須恵器（古墳後期４）

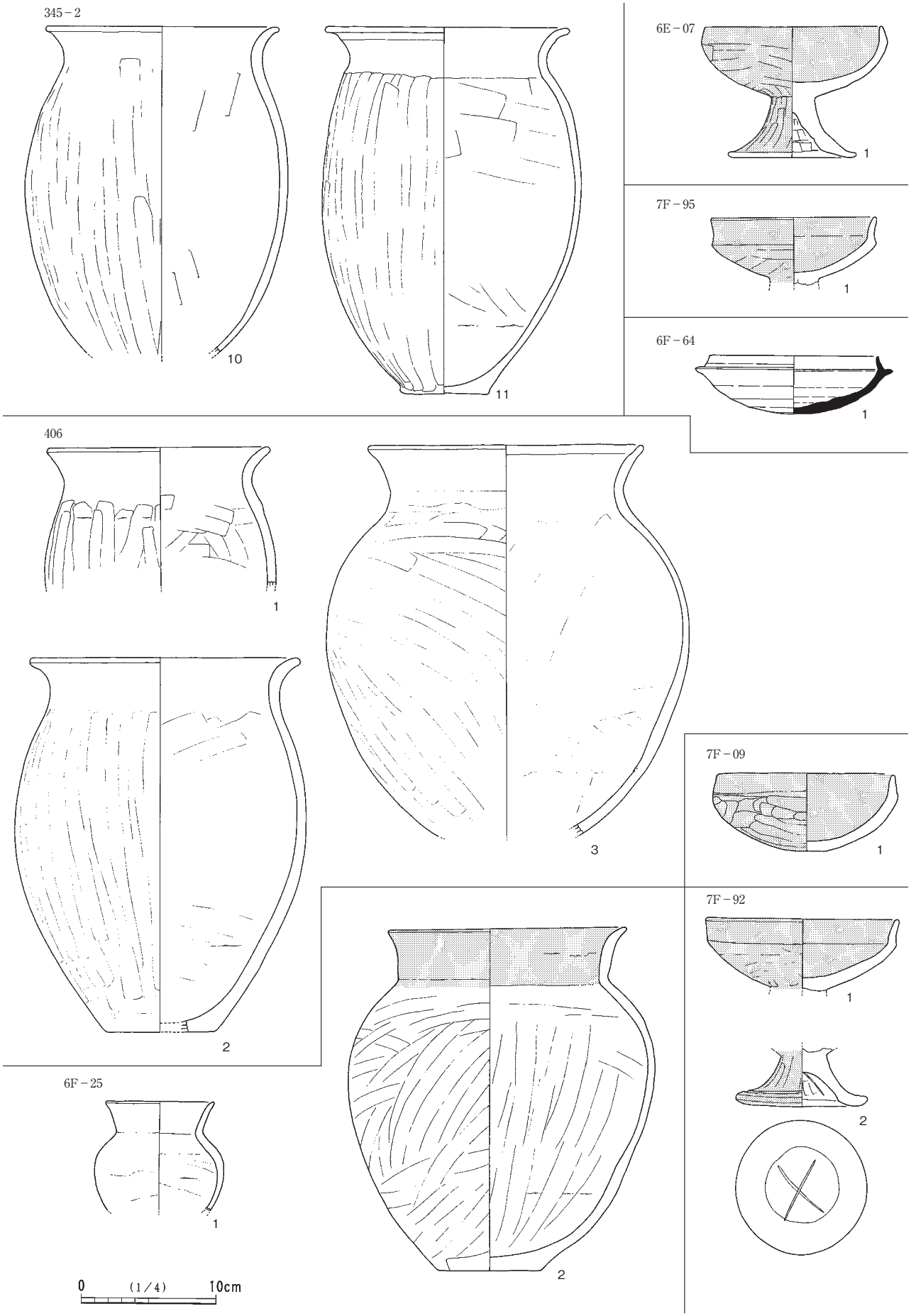


第205図　遺構出土土師器・須恵器（古墳後期５）

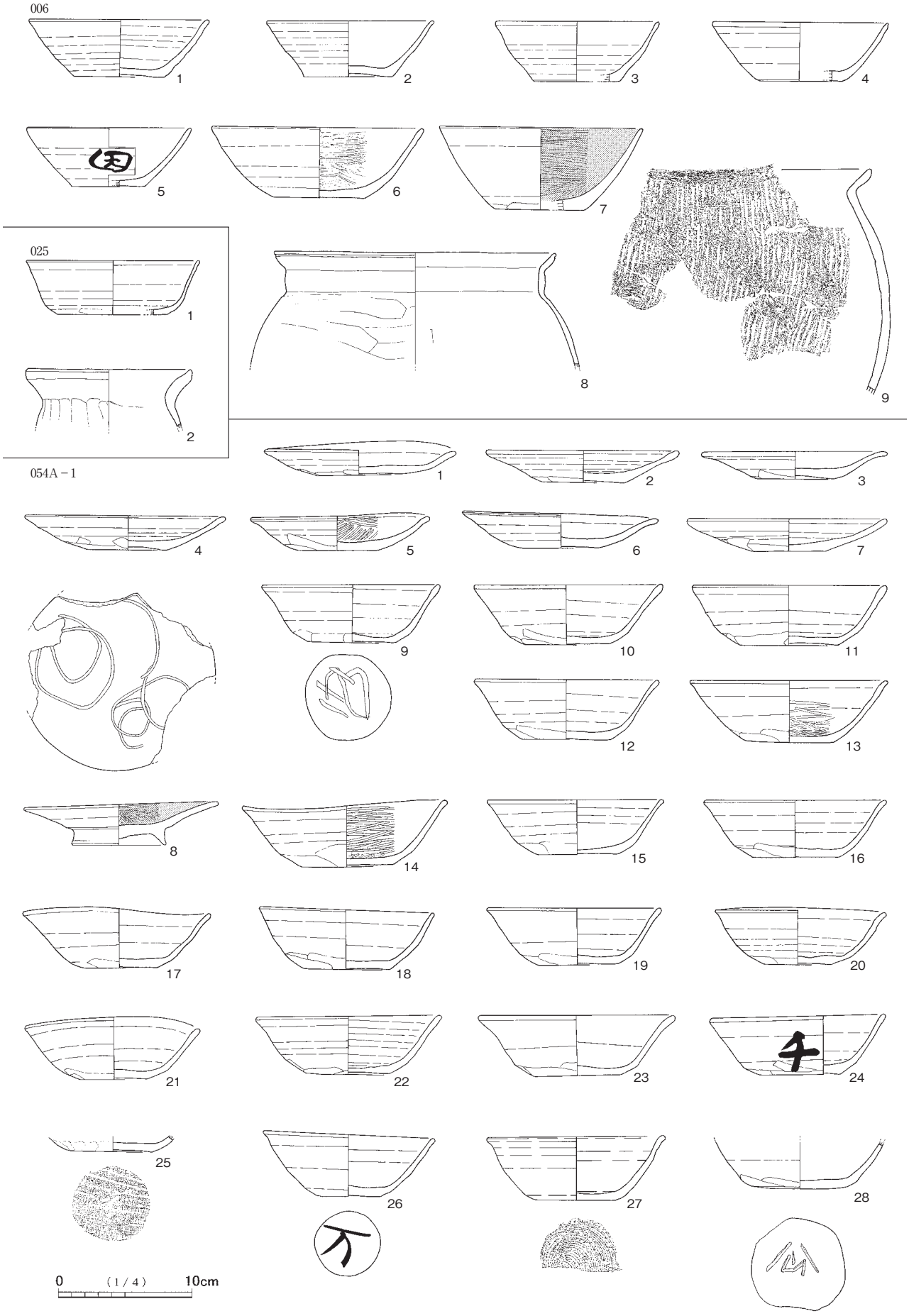
第206図　遺構出土土師器・須恵器（古墳後期６）



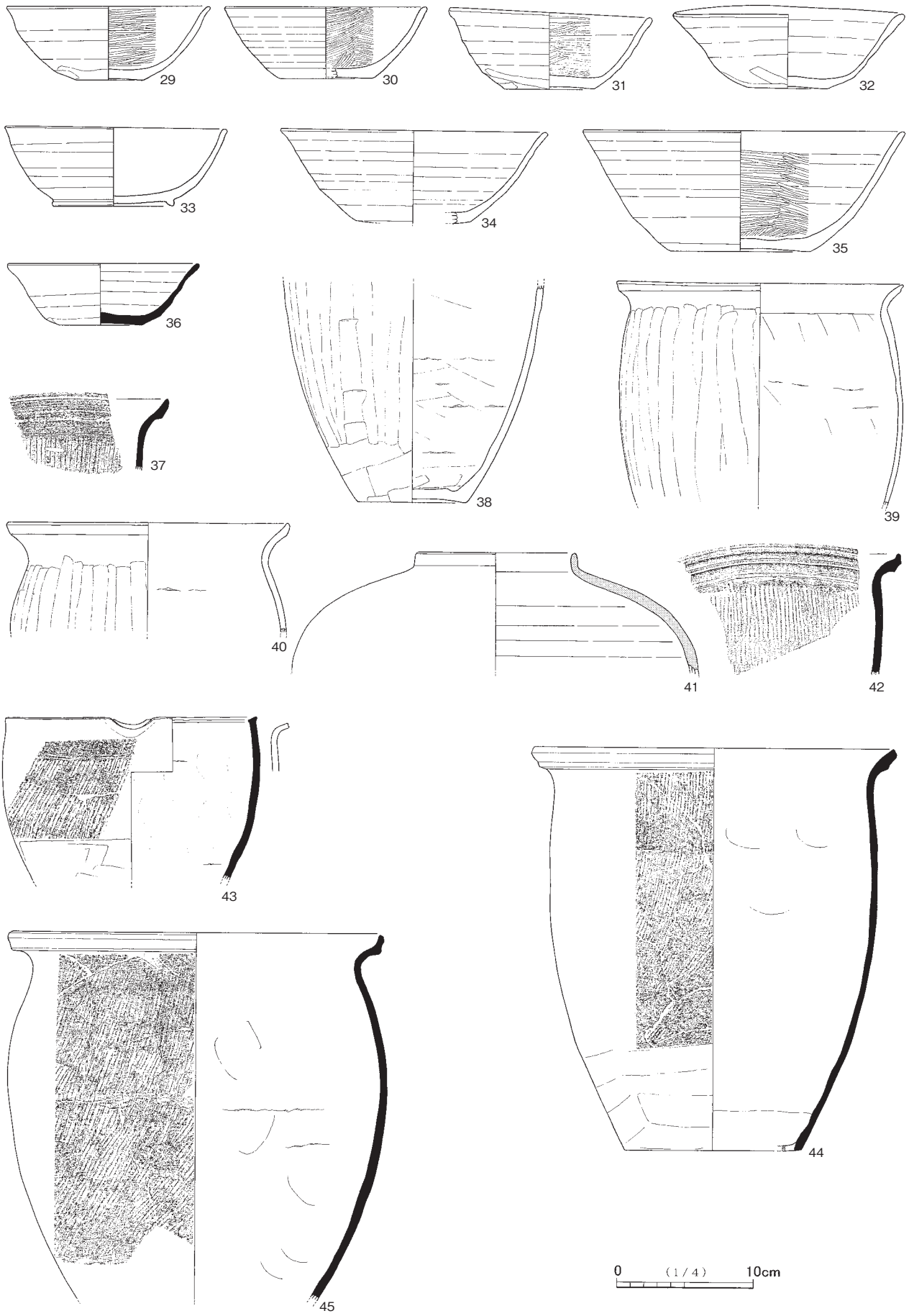
第207図　遺構出土土師器・須恵器（古墳後期７）



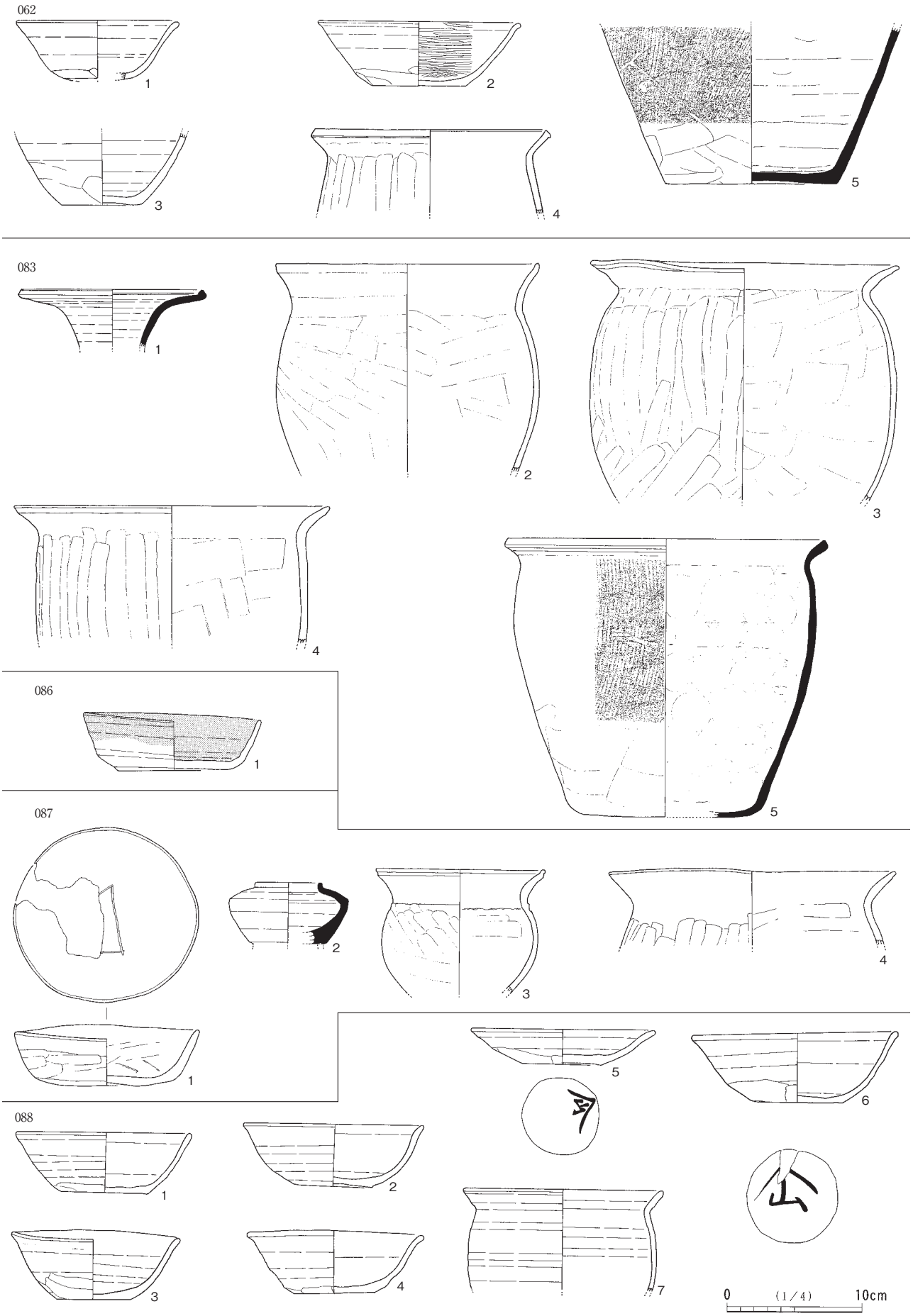
第208図　遺構およびグリッド出土土師器・須恵器（古墳後期８）



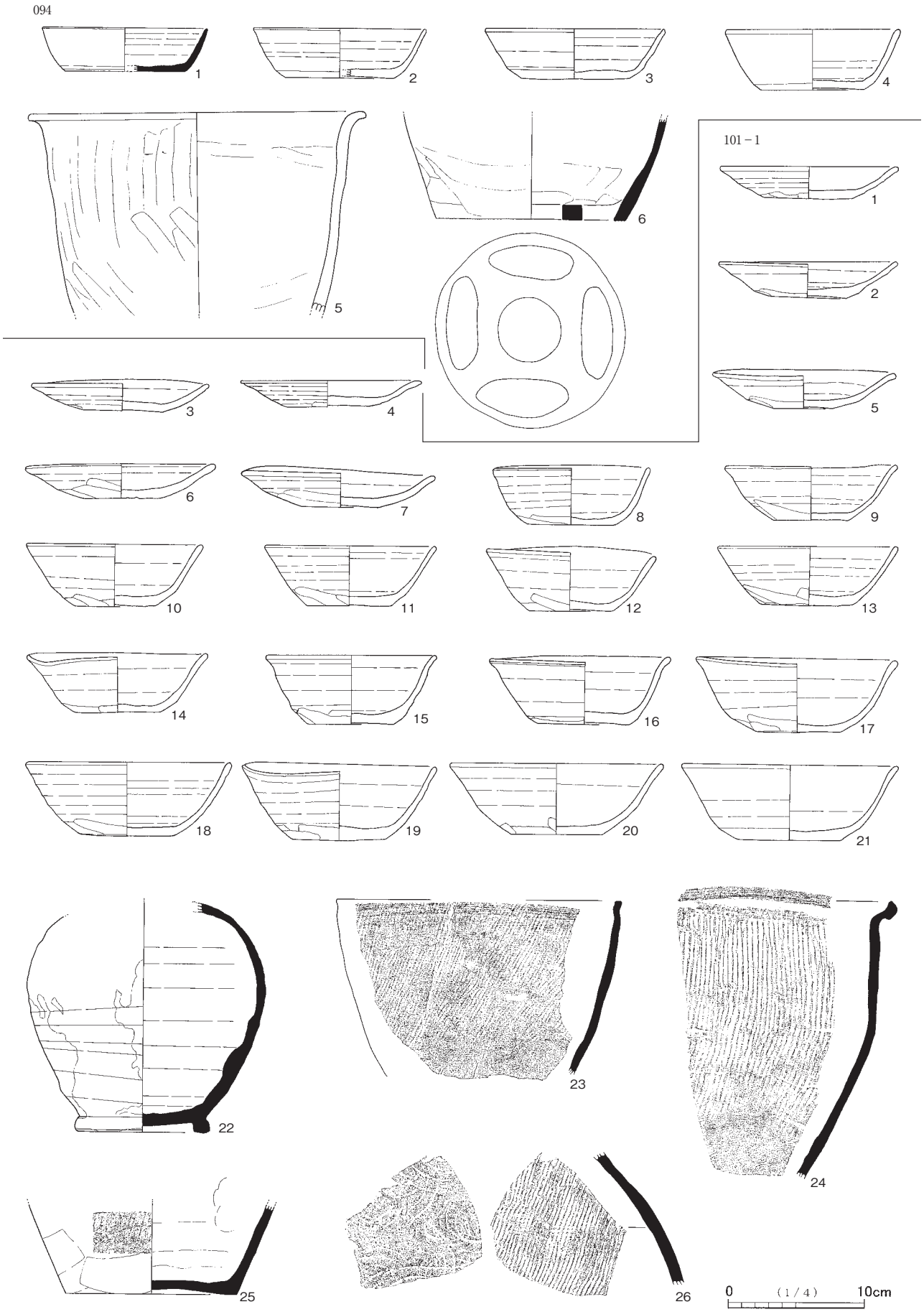
第209図　遺構出土土師器・須恵器（奈良・平安１）



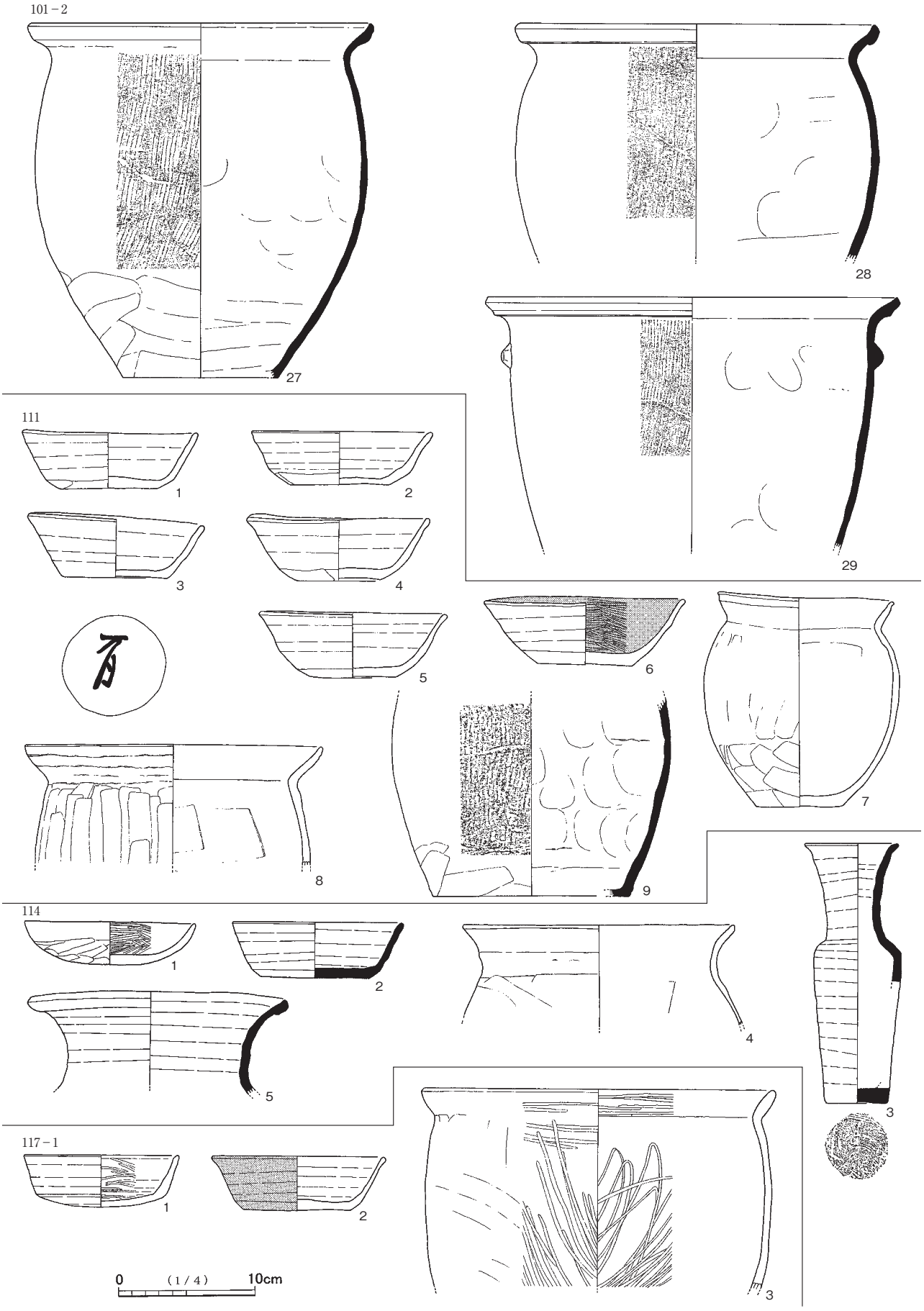
第210図　遺構出土土師器・須恵器（奈良・平安２）



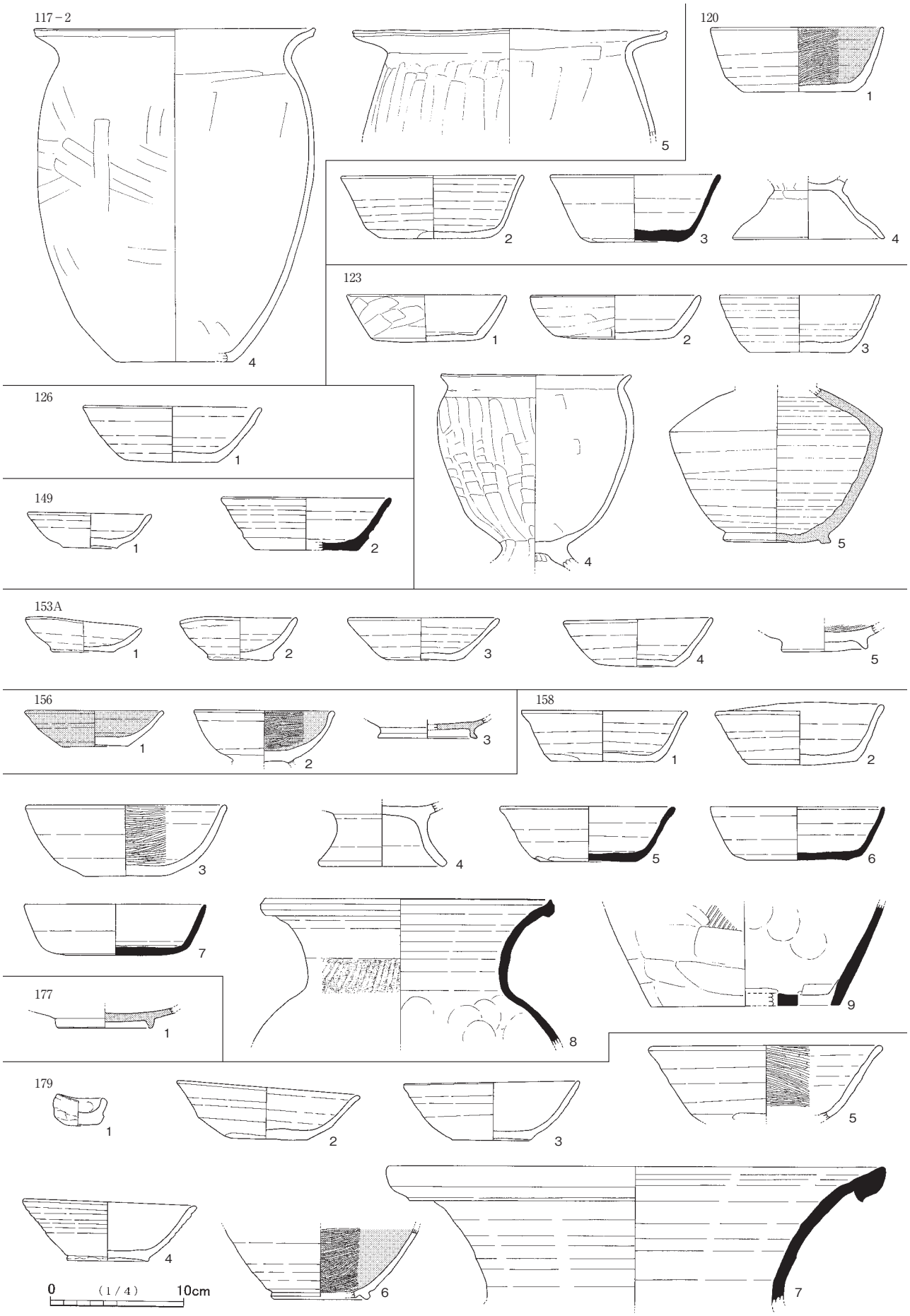
第211図　遺構出土土師器・須恵器（奈良・平安３）



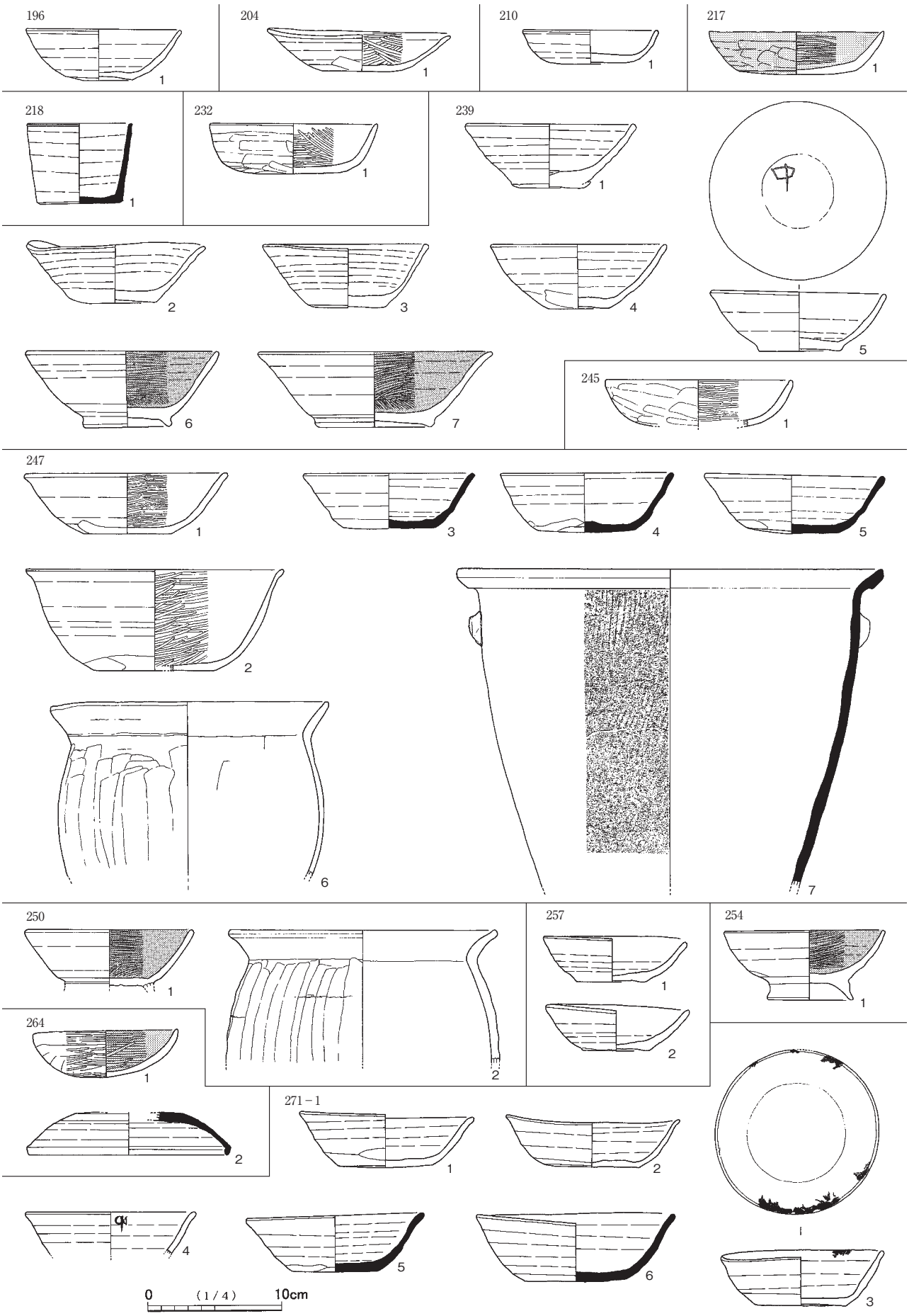
第212図　遺構出土土師器・須恵器（奈良・平安４）



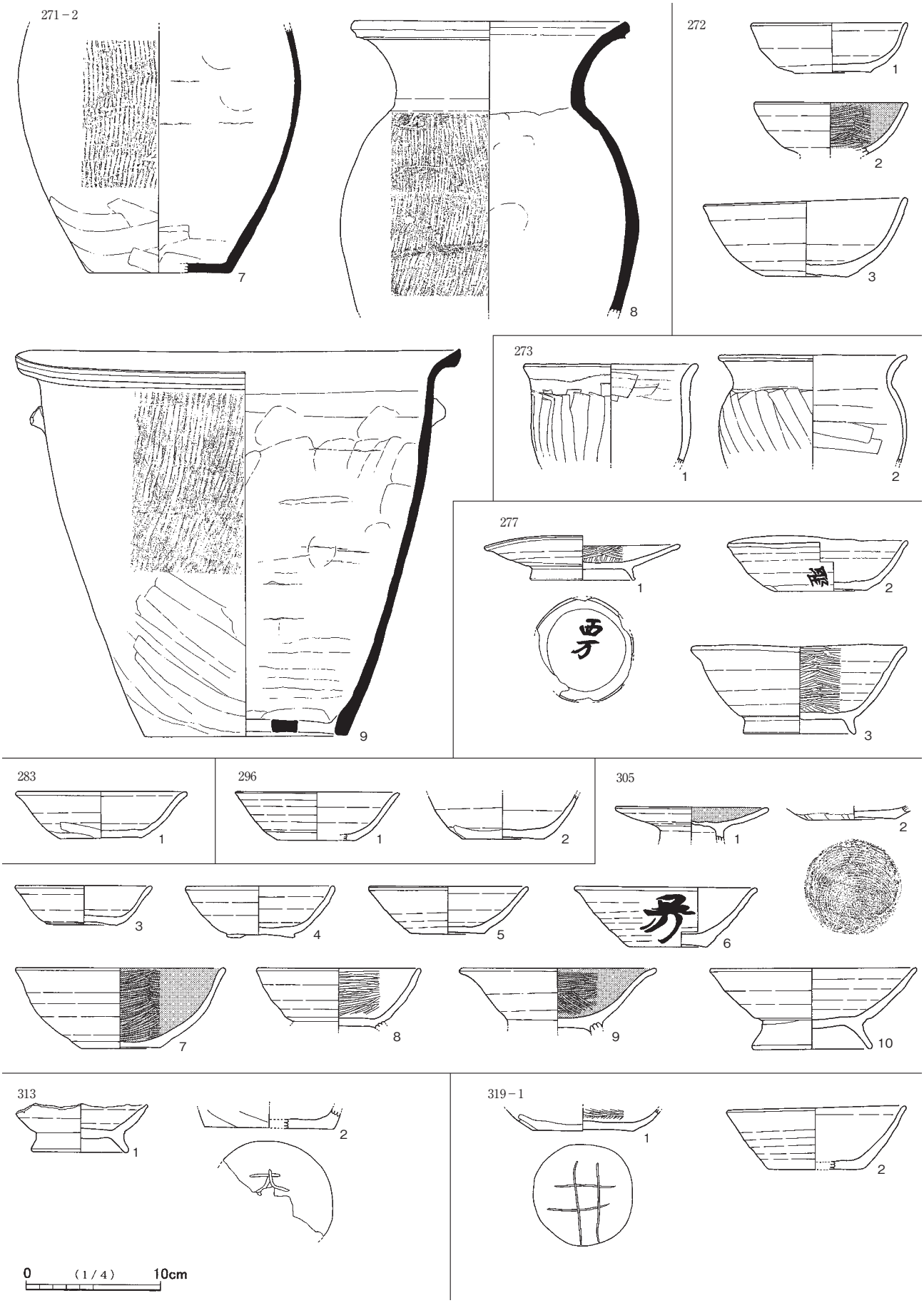
第213図　遺構出土土師器・須恵器（奈良・平安５）



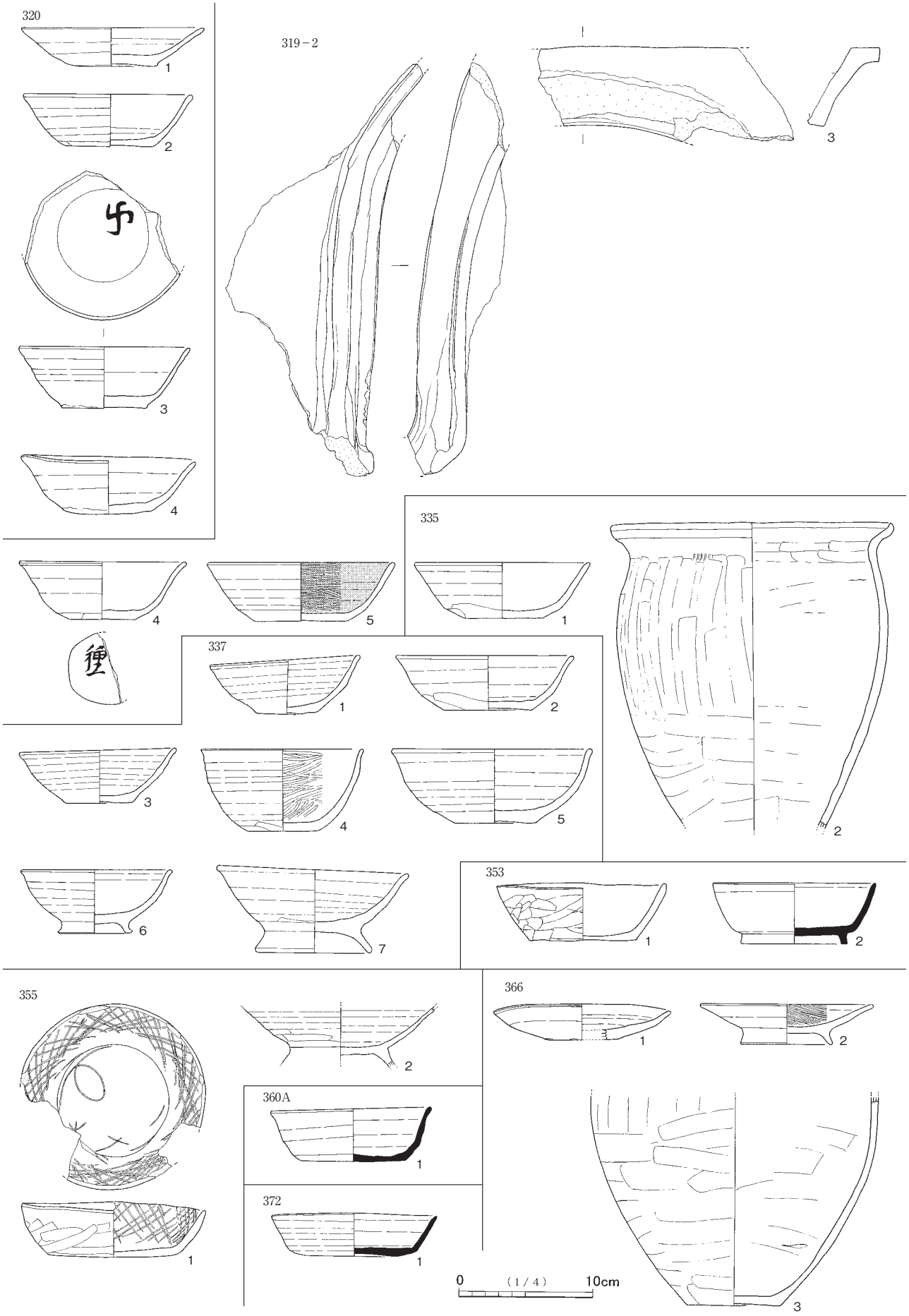
第214図　遺構出土土師器・須恵器（奈良・平安６）



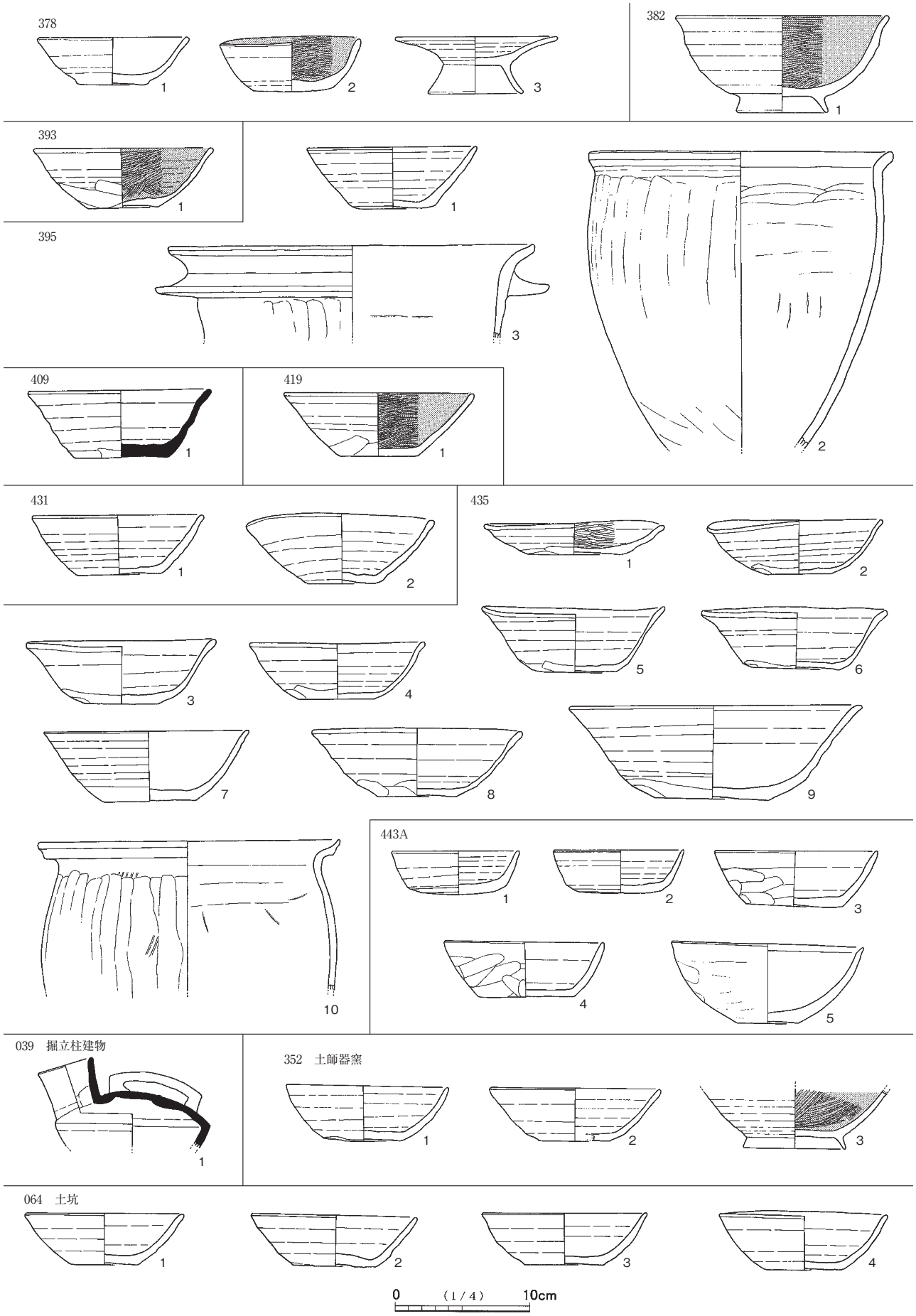
第215図　遺構出土土師器・須恵器（奈良・平安７）



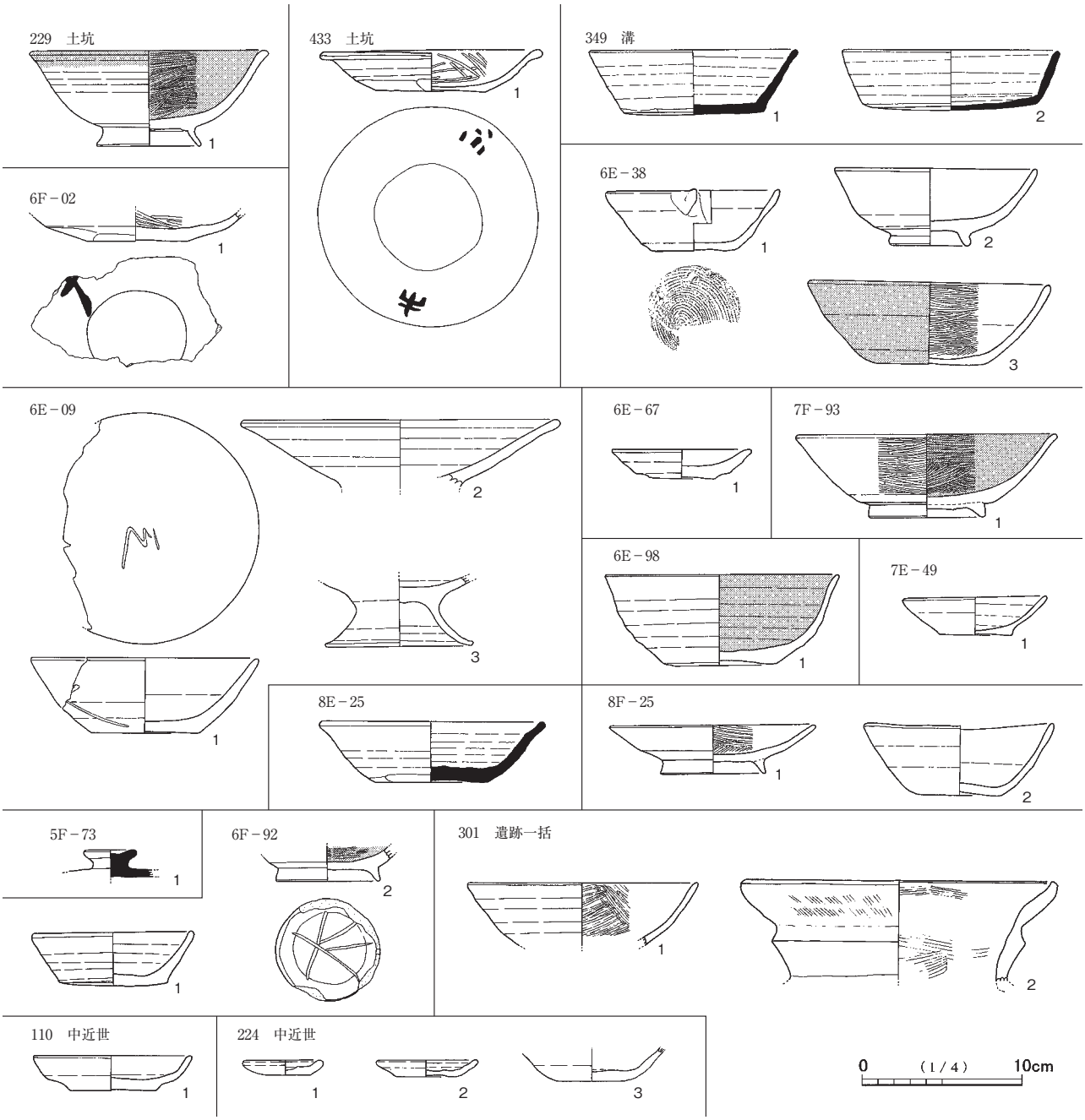
第216図　遺構出土土師器・須恵器（奈良・平安８）



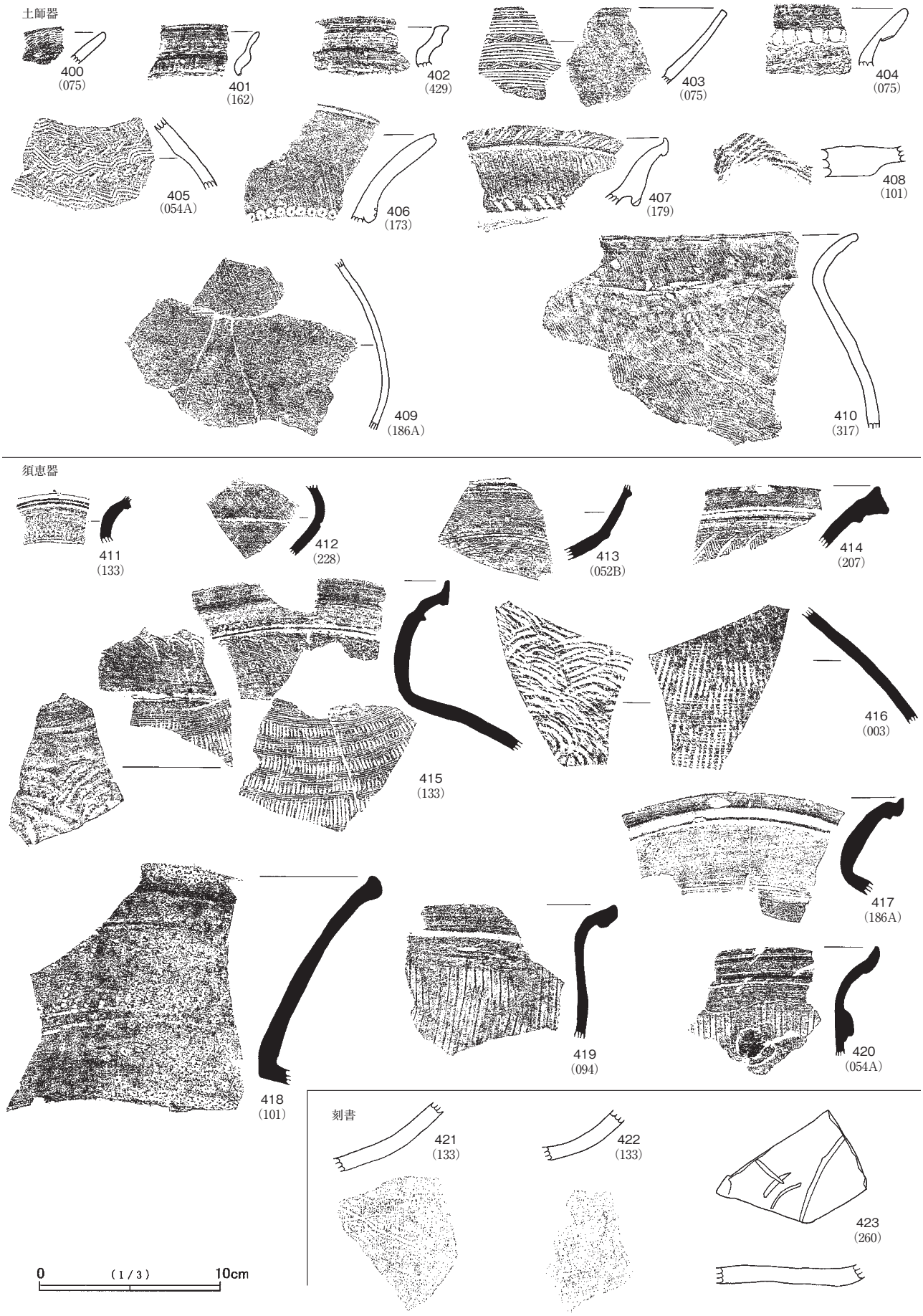
第217図　遺構出土土師器・須恵器（奈良・平安９）



第218図　遺構出土土師器・須恵器（奈良・平安10）

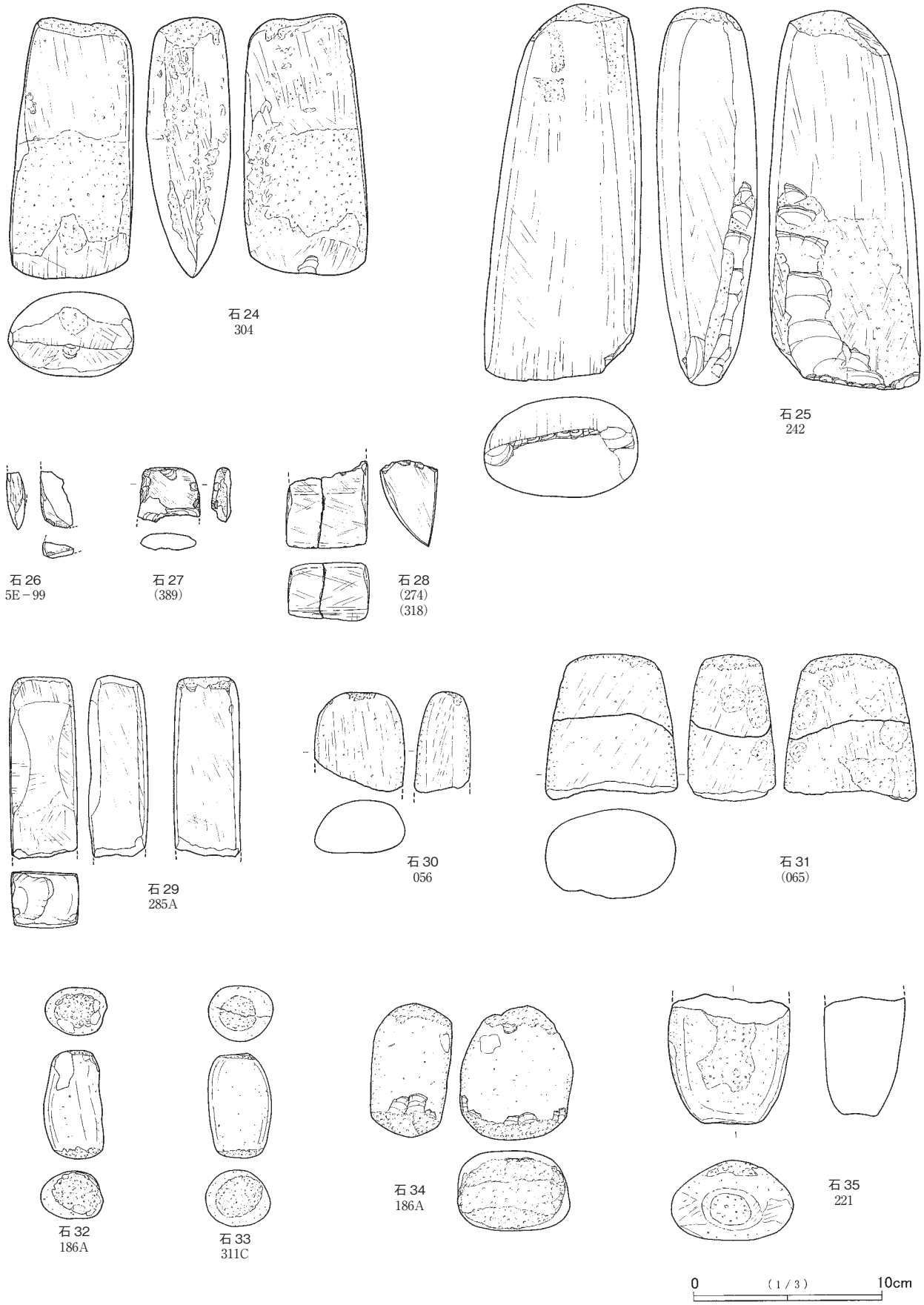


第219図　遺構およびグリッド出土土師器・須恵器（奈良・平安11）

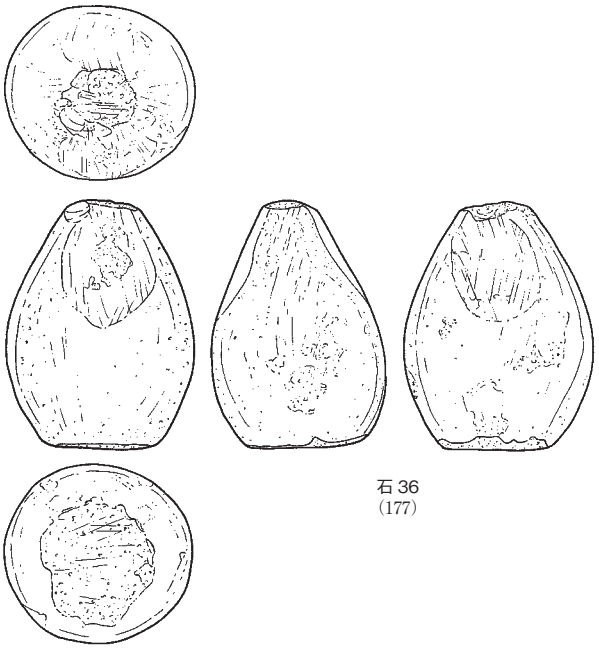


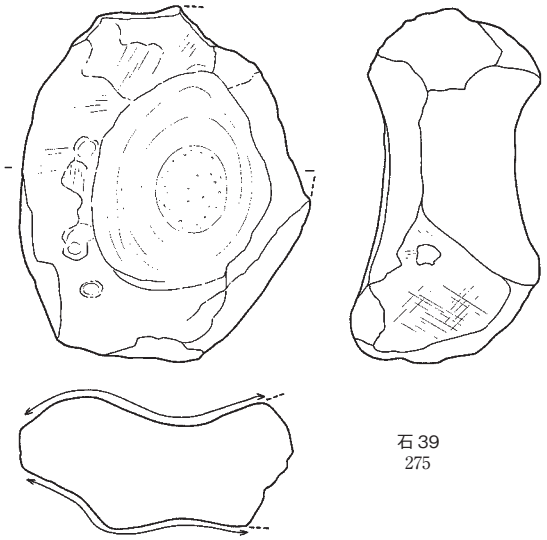
第220図　遺構出土土師器・須恵器拓影図

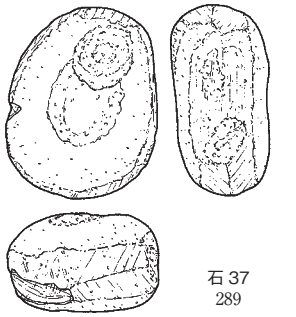
第221図　弥生時代磨製石剣・石斧（1）

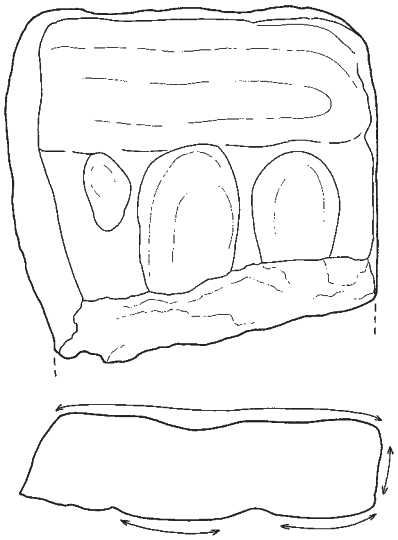


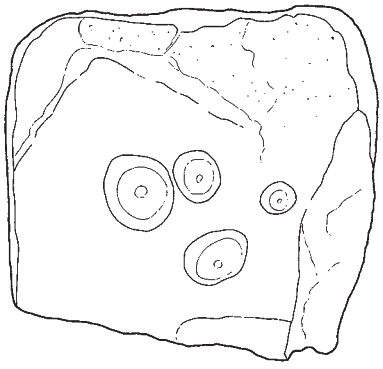
第222図　弥生時代磨製石斧（2）・弥生時代敲石・磨石（1）

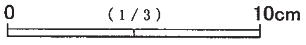


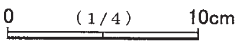




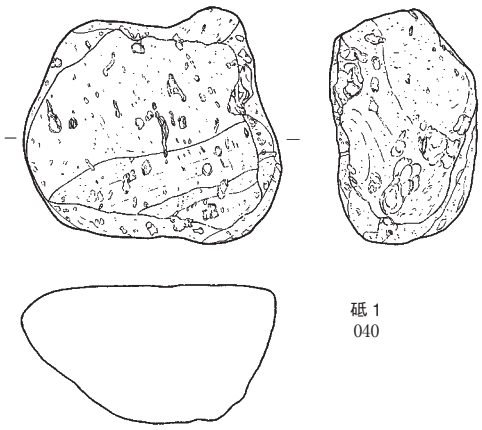


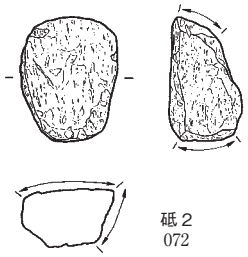


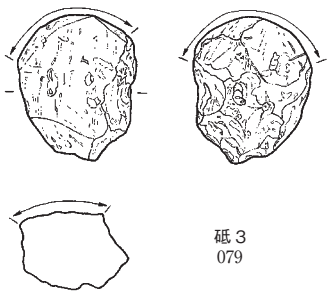


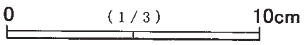


(軽石 A) 弥生

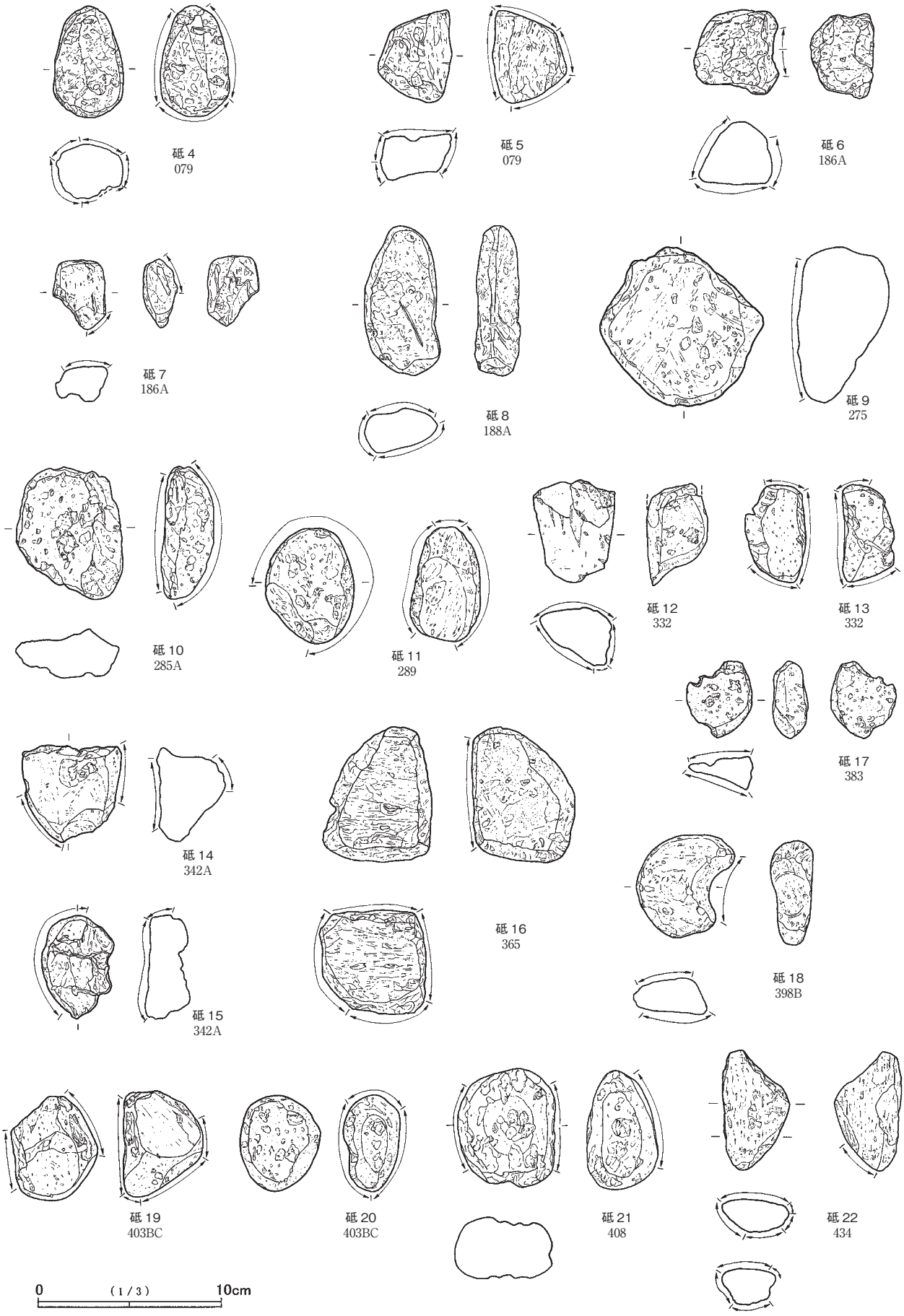






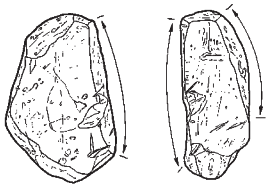


第223図　弥生時代敲石・磨石（2）・石皿・弥生時代軽石A（1）

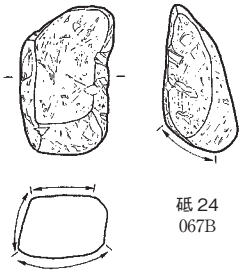


第224図　弥生時代軽石A（2）

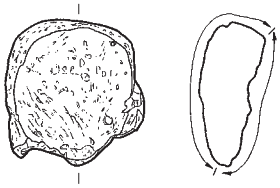
古墳前期



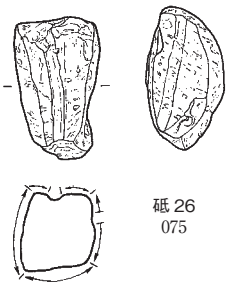
砥 23
044



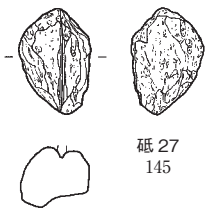
砥 24
067B



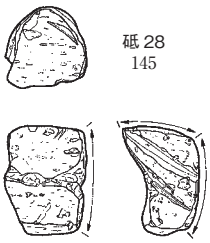
砥 25
067B



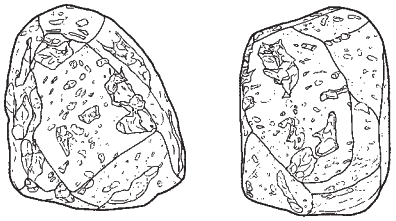
砥 26
075



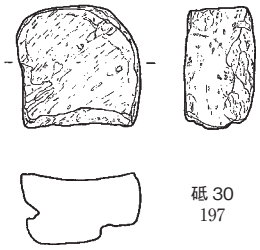
砥 27
145



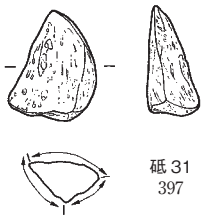
砥 28
145



砥 29
195

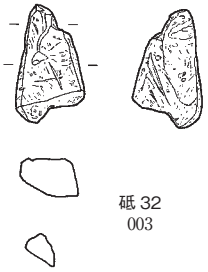


砥 30
197

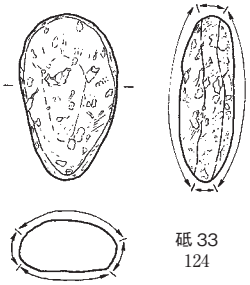


砥 31
397

古墳中期

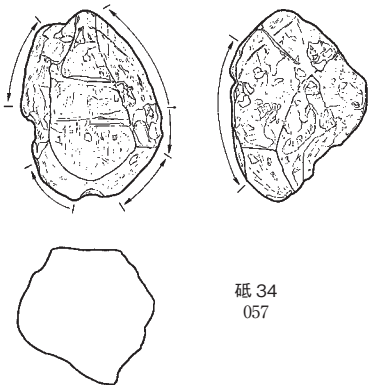


砥 32
003



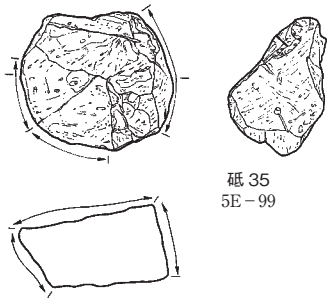
砥 33
124

古墳後期

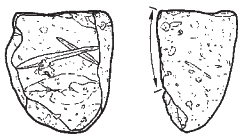


砥 34
057

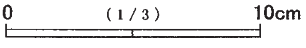
グリッド



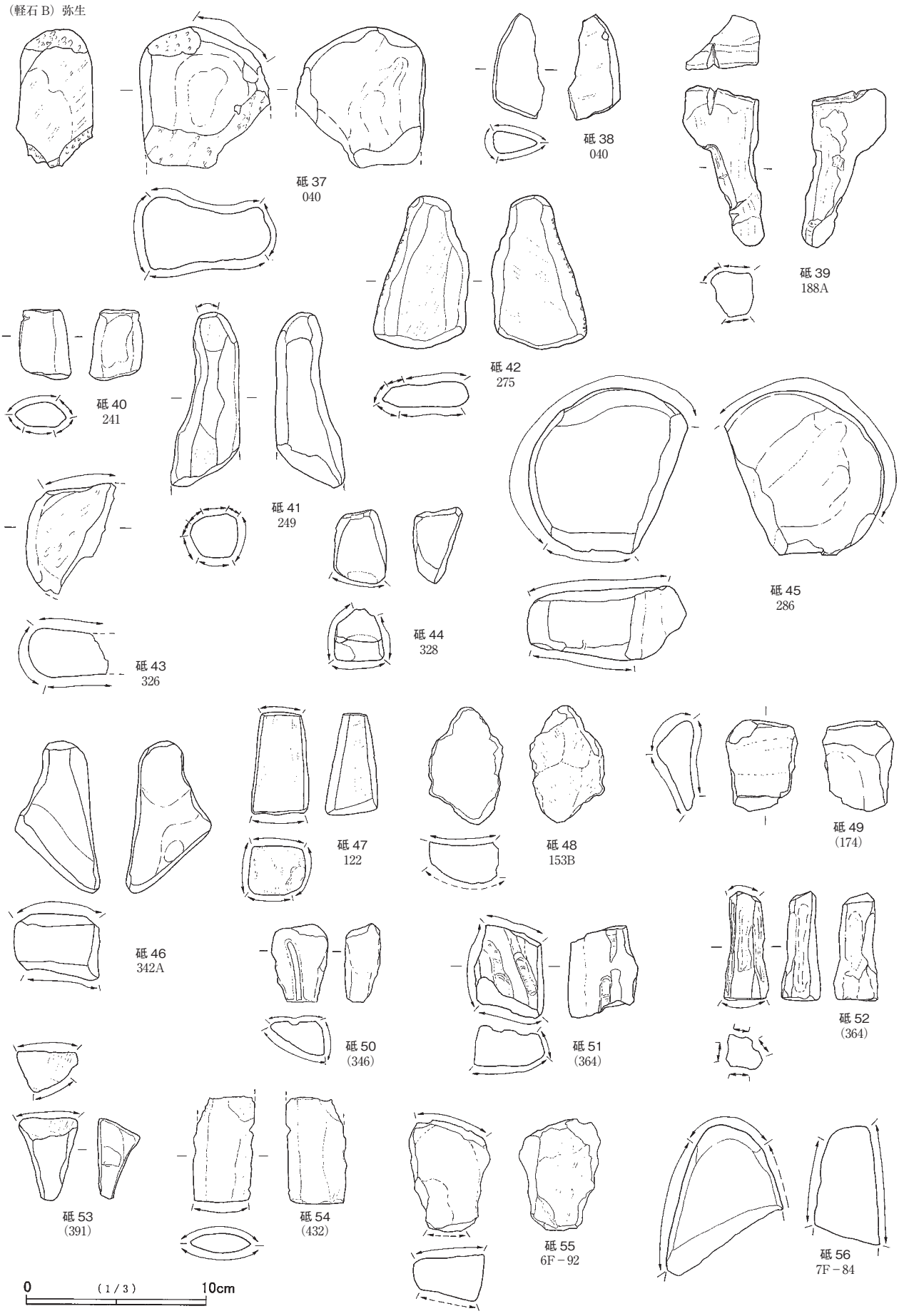
砥 35
5E－99



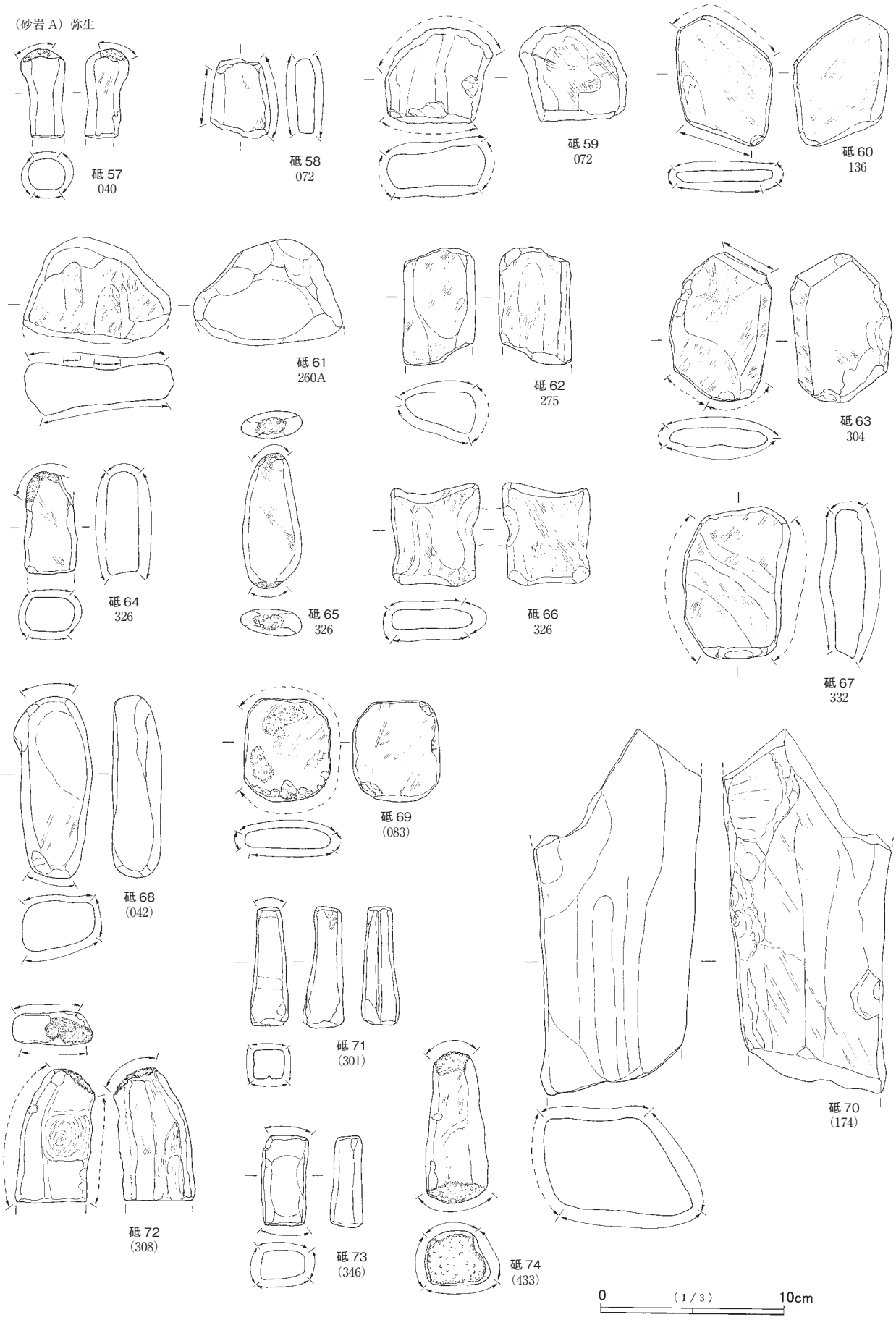
砥 36
T98－5



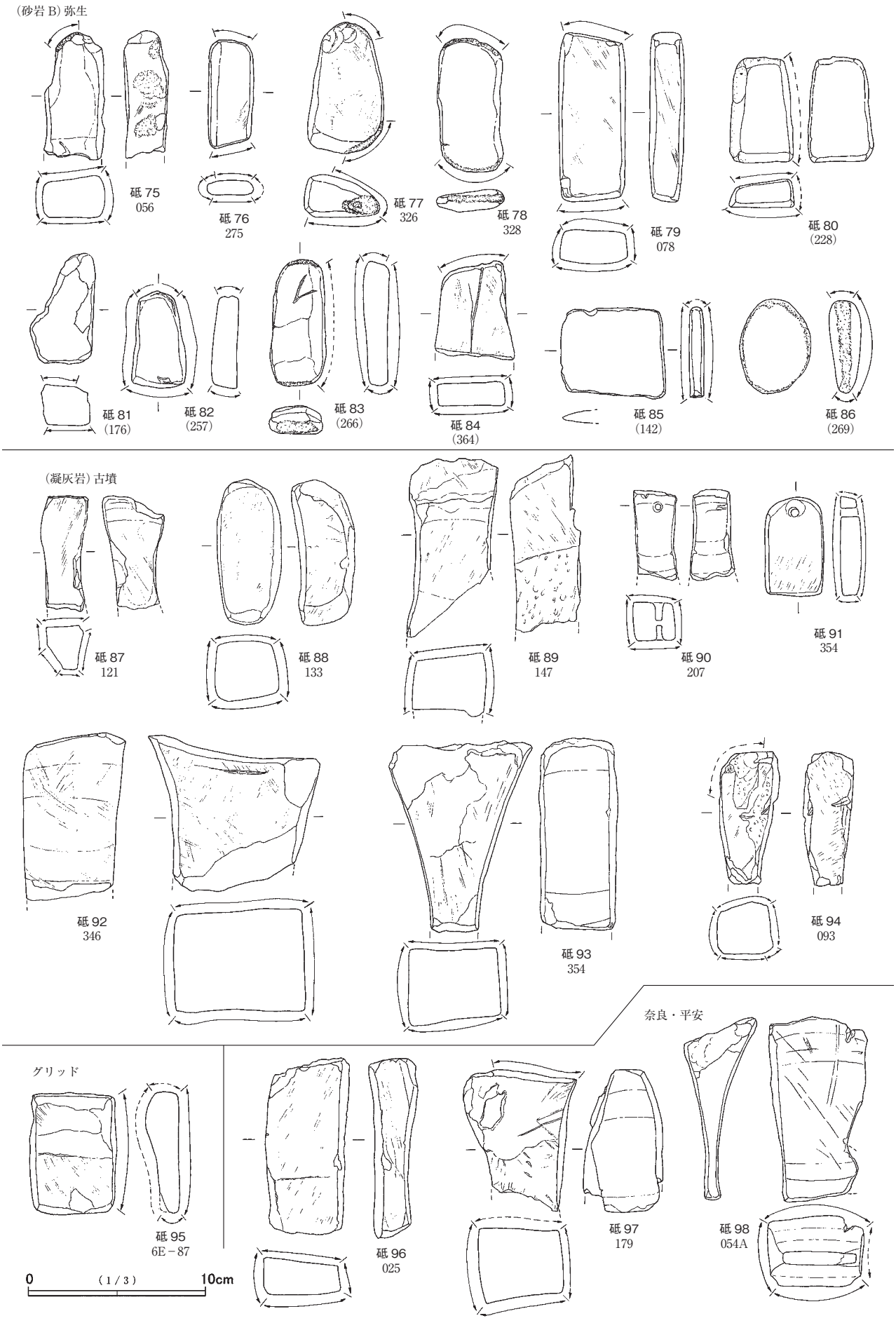
第225図　古墳時代前期以降軽石A



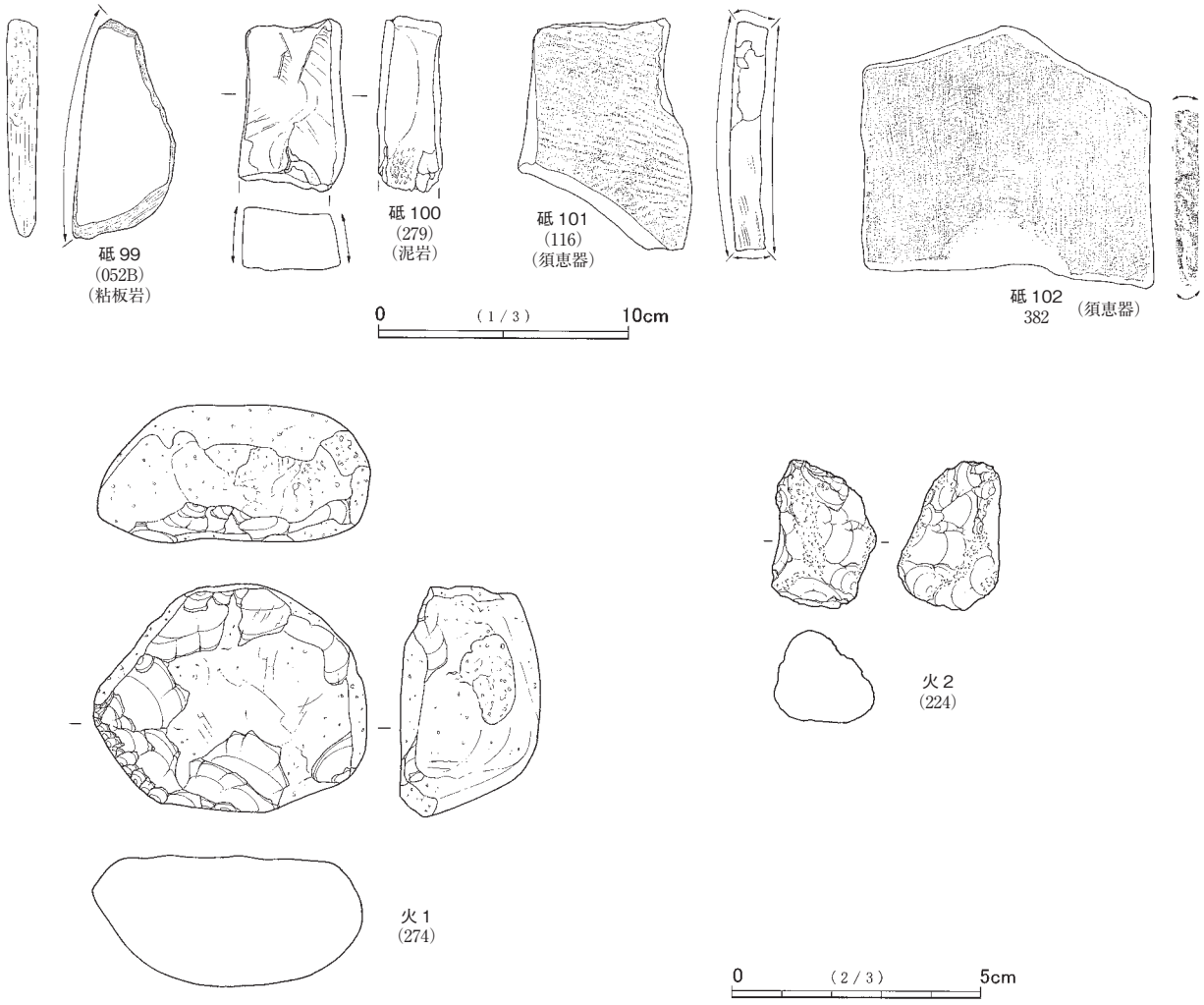
第226図　弥生時代軽石B



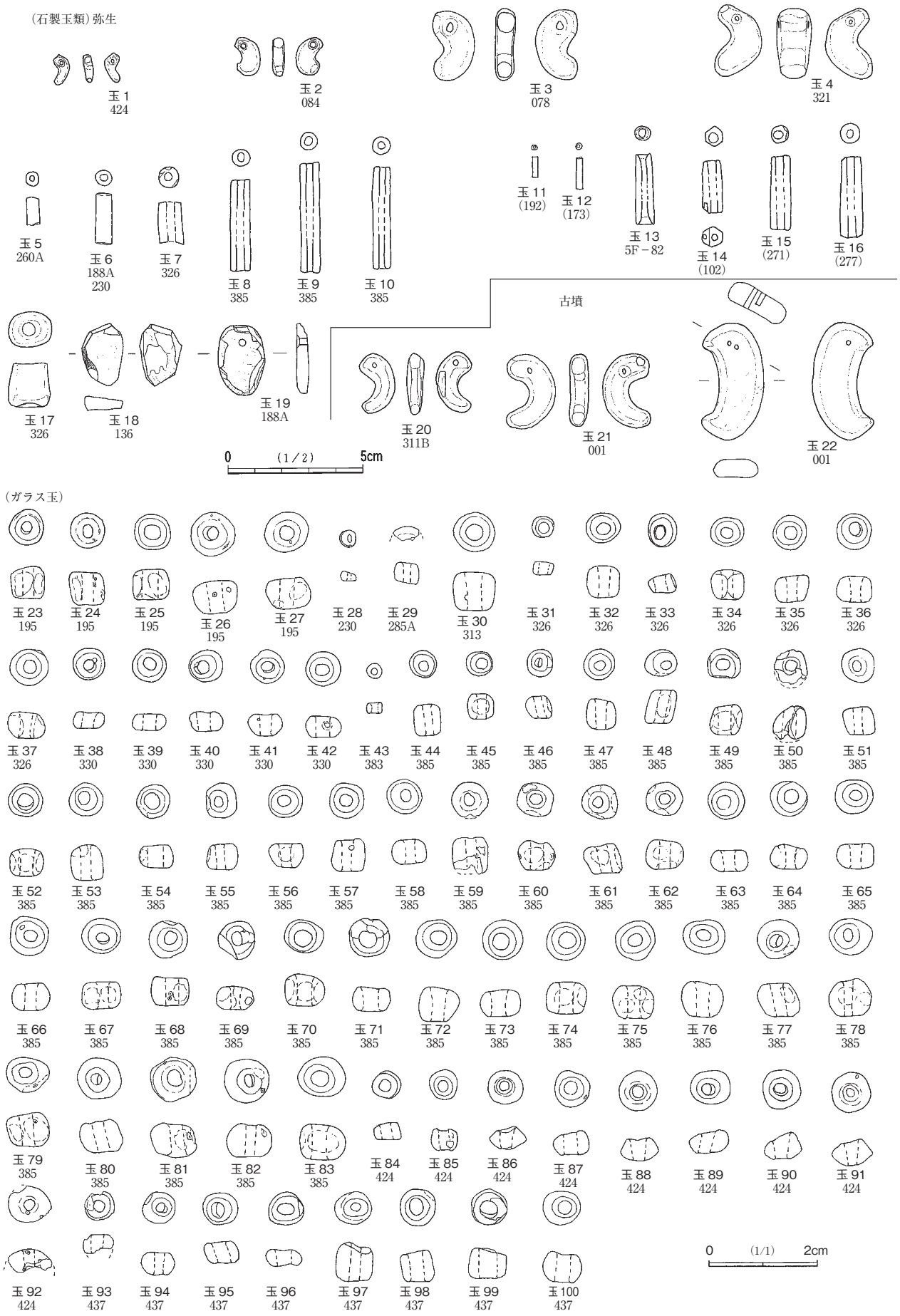
第227図　弥生時代砂岩A砥石



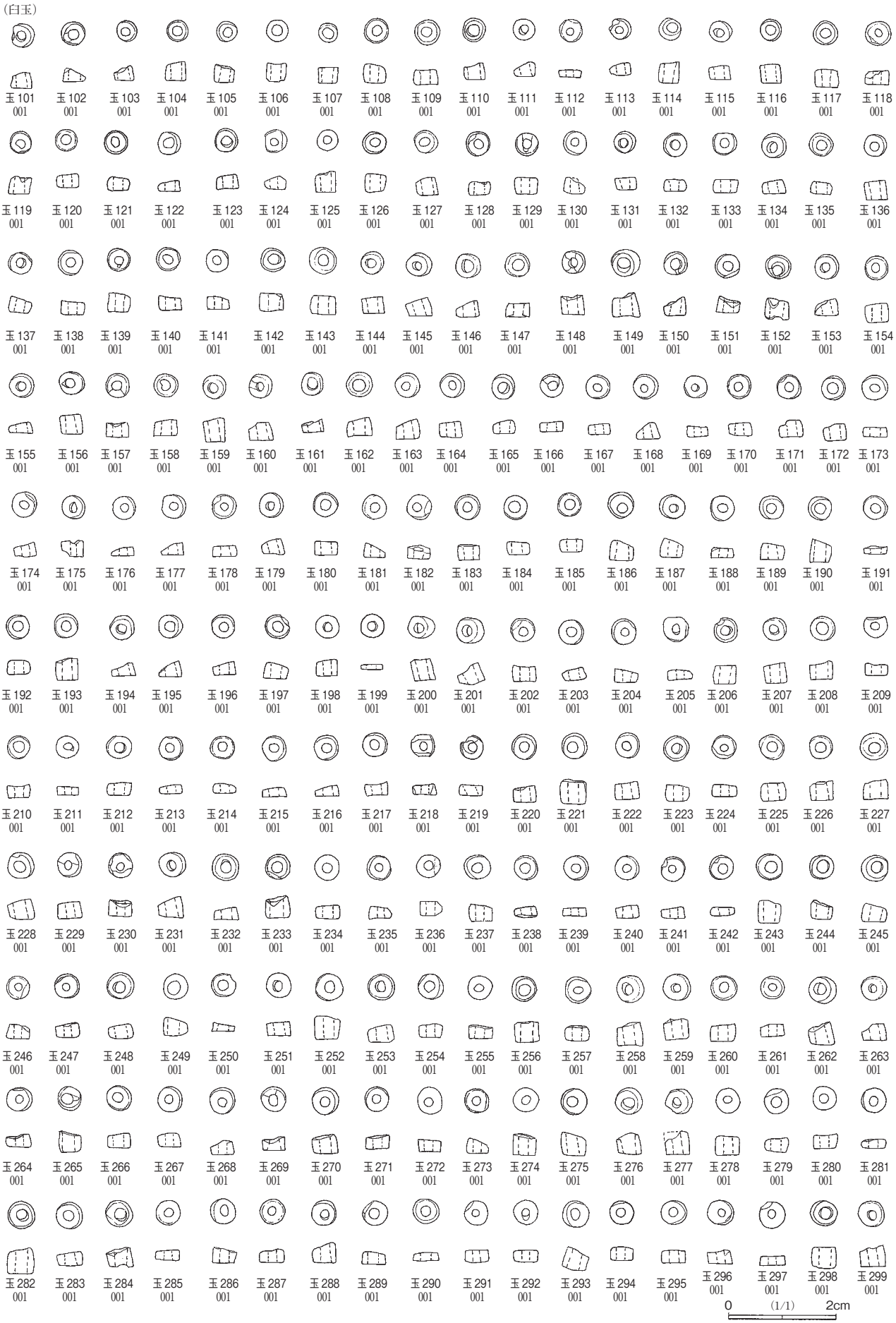
第228図　弥生時代砂岩Ｂ砥石・古墳時代以降凝灰岩砥石



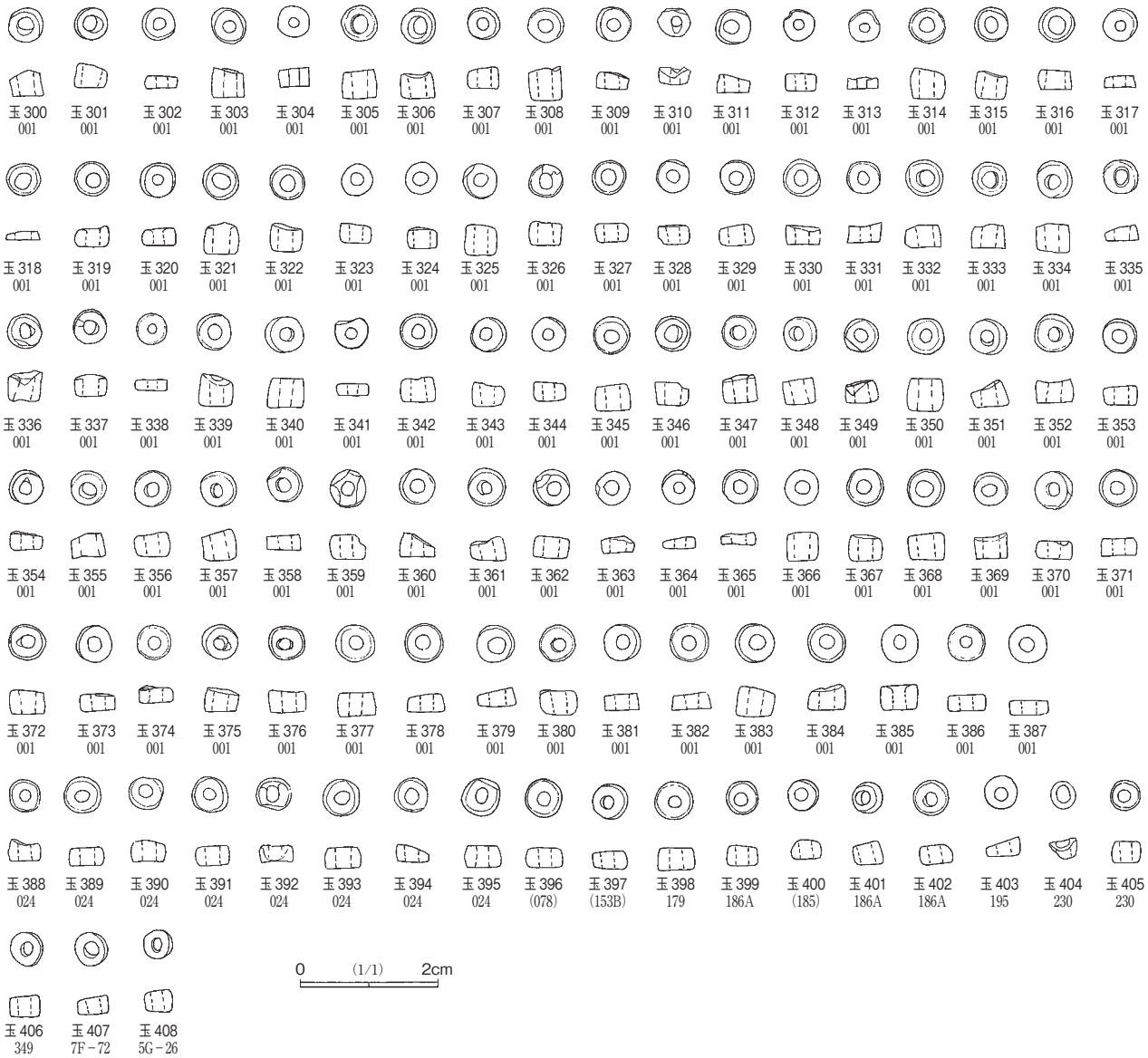
第229図　古墳時代以降その他砥石・火打石



第230図　弥生時代以降玉類（１）

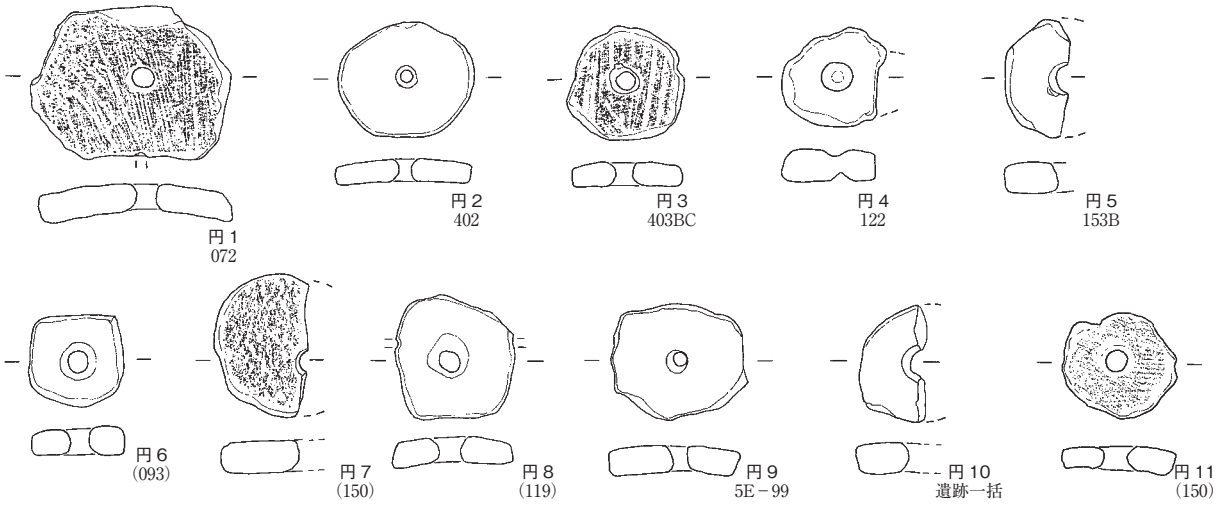


第231図　弥生時代以降玉類（２）

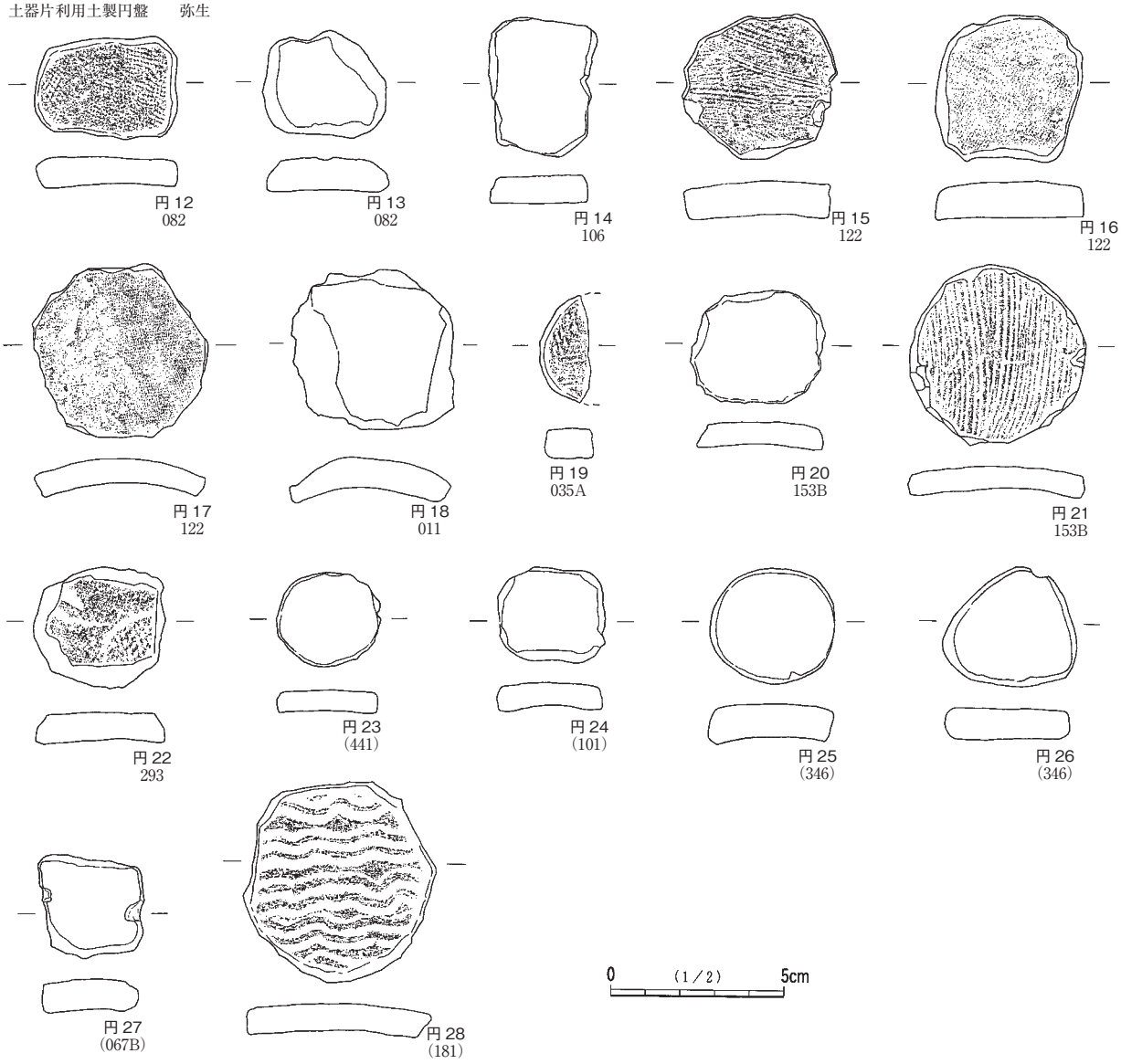


第232図　弥生時代以降玉類（３）

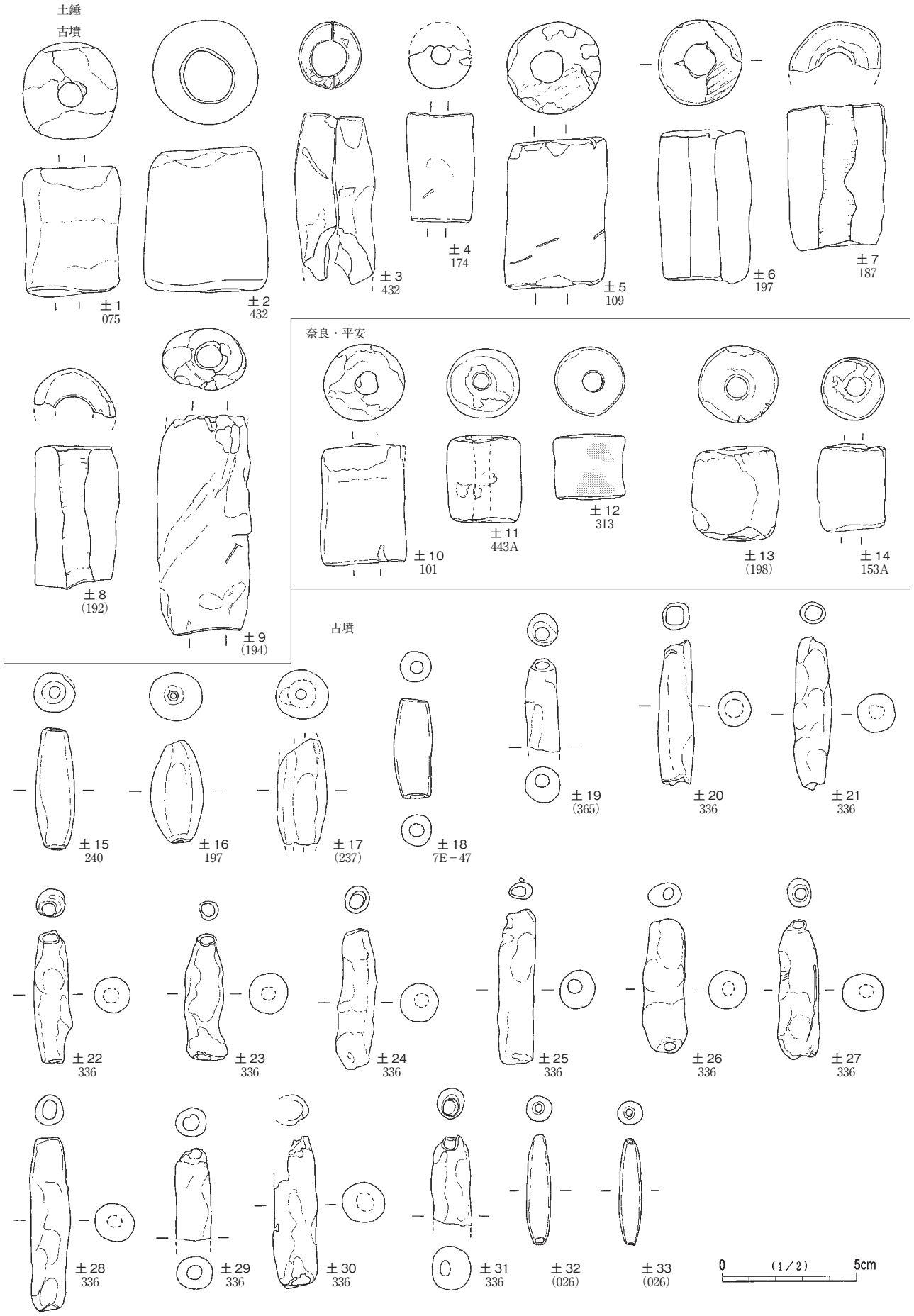
有孔土製円盤　弥生



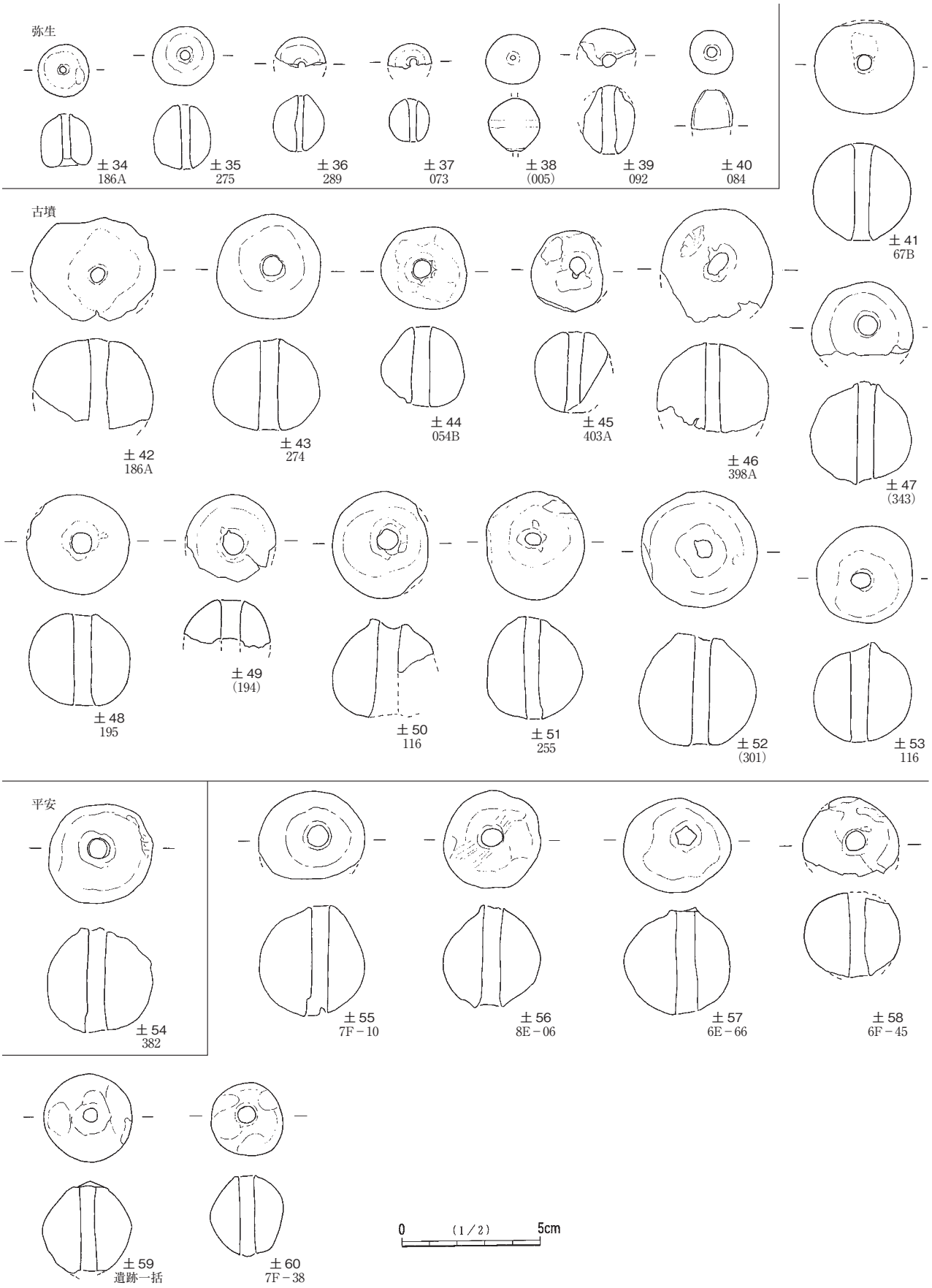
土器片利用土製円盤　弥生



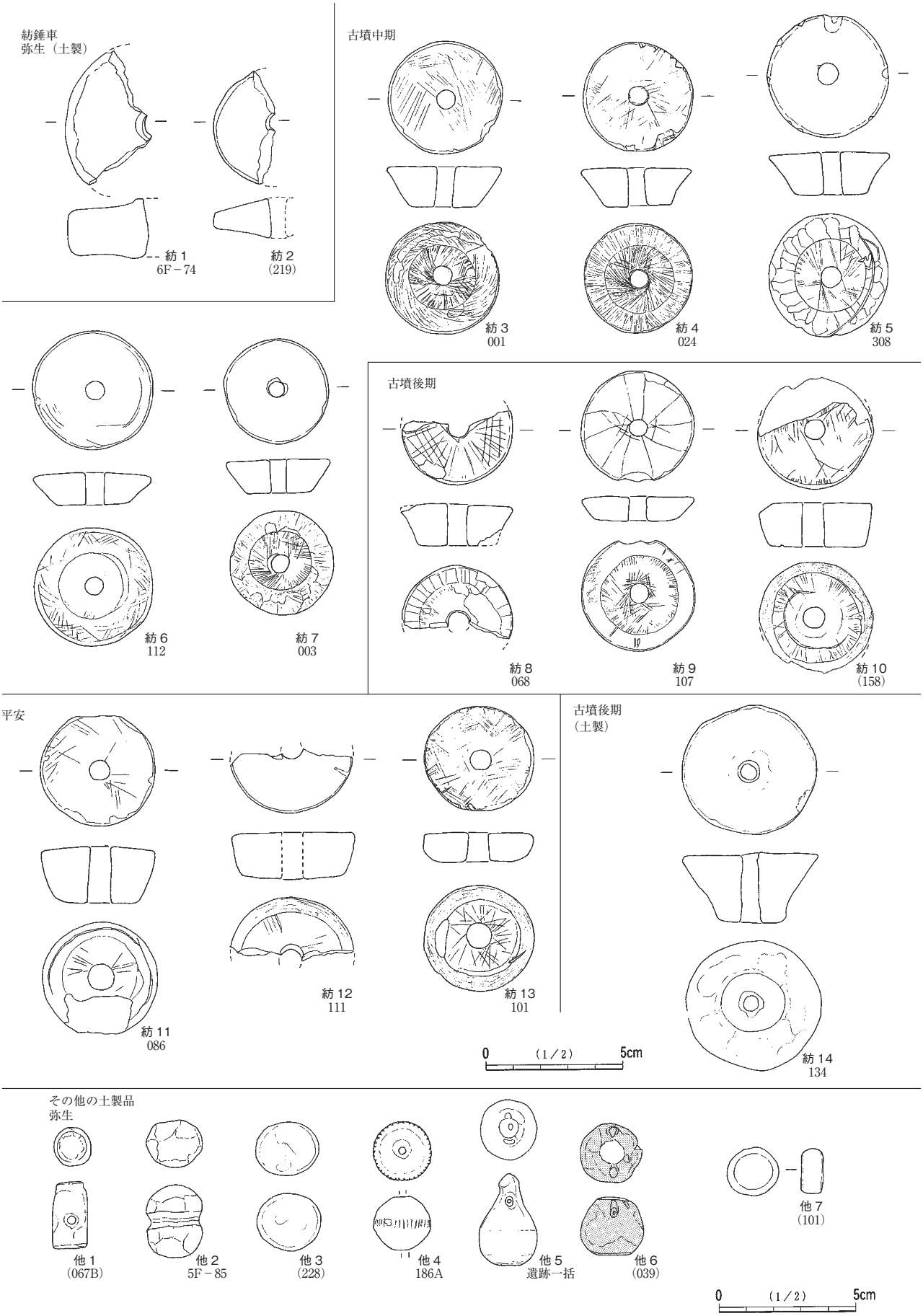
第233図　弥生時代土製円盤



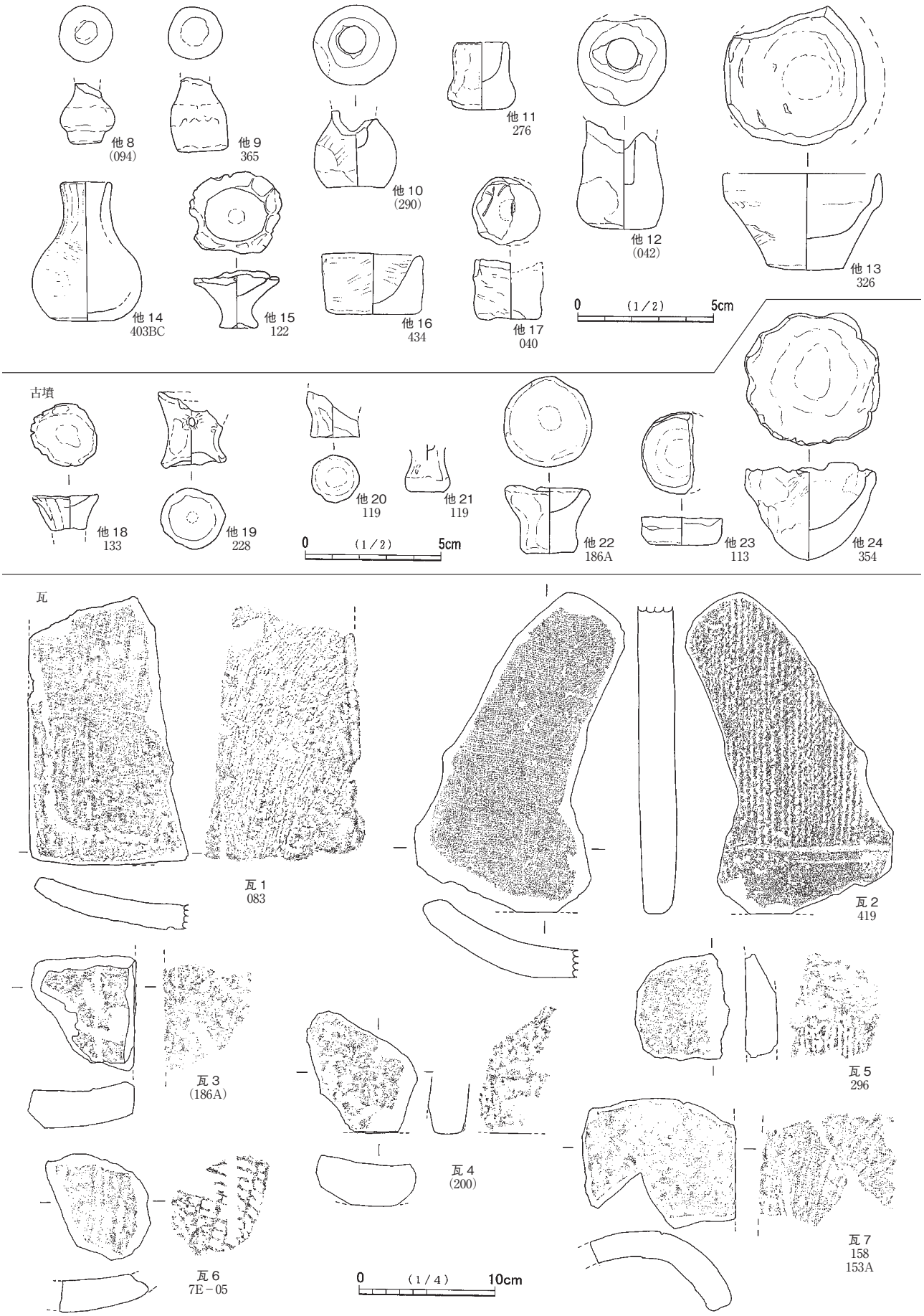
第234図　古墳時代以降土錘



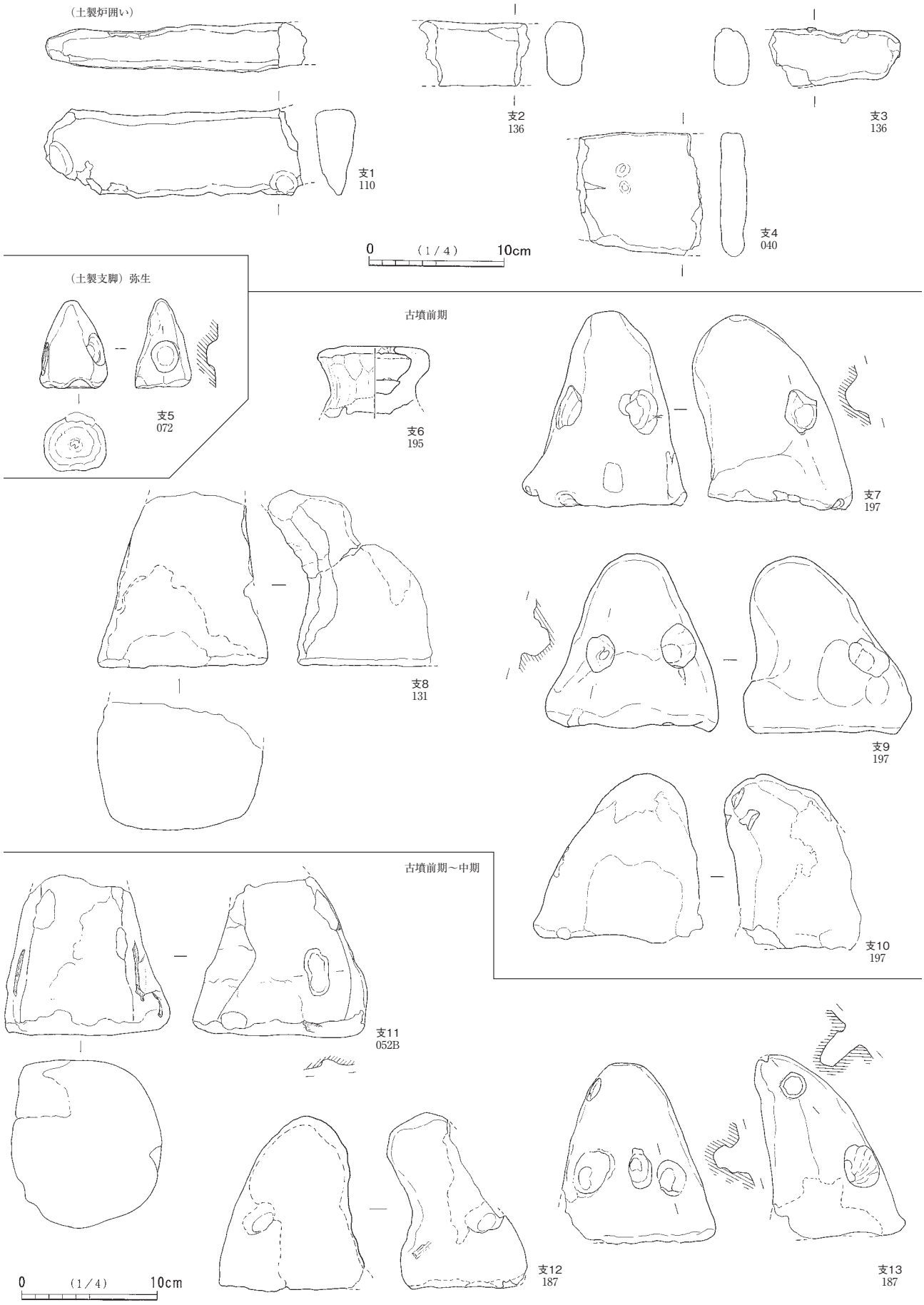
第235図　弥生時代以降土玉



第236図　弥生時代以降紡錘車・その他土製品（1）

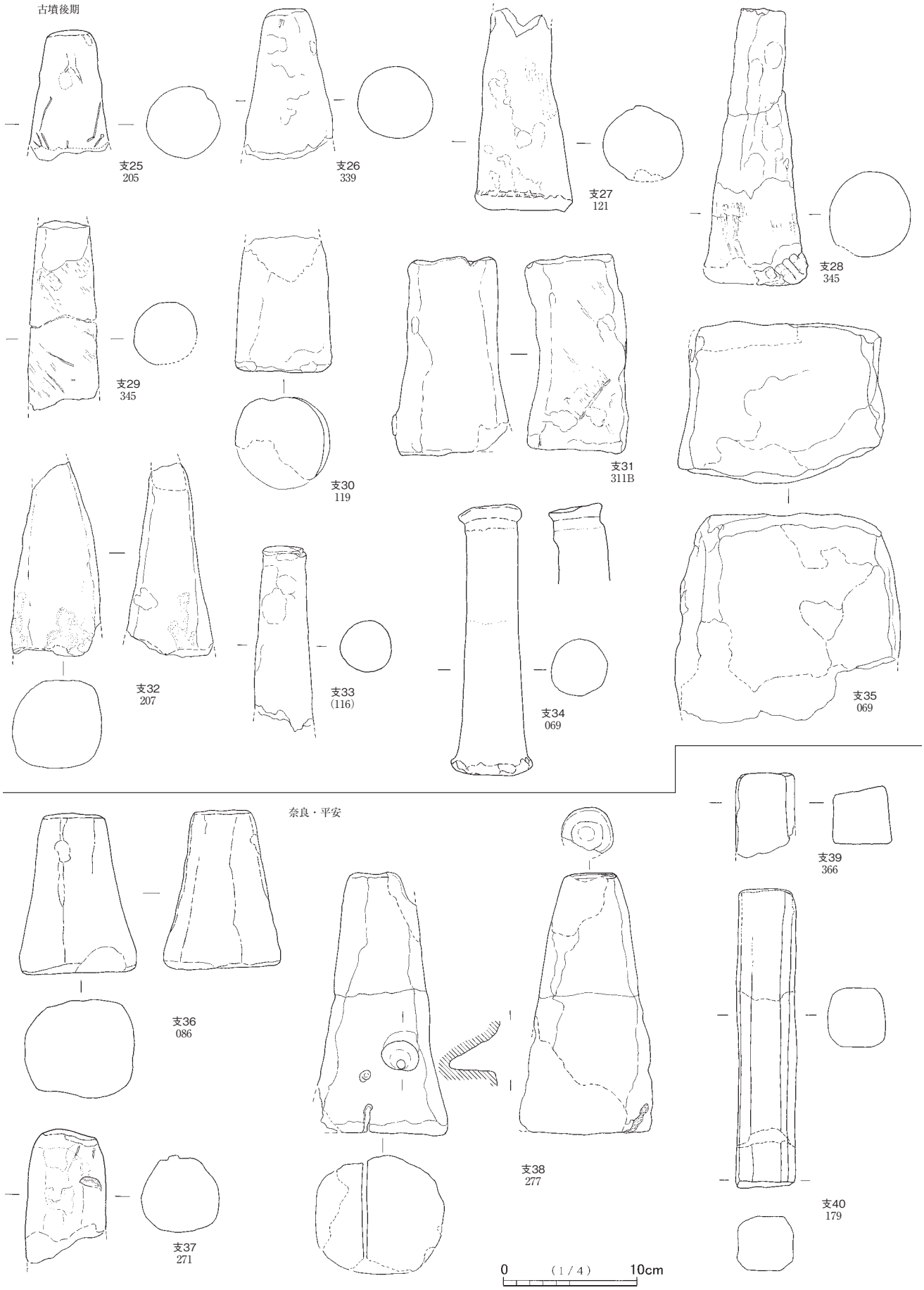


第237図　弥生時代以降その他土製品（２）、瓦

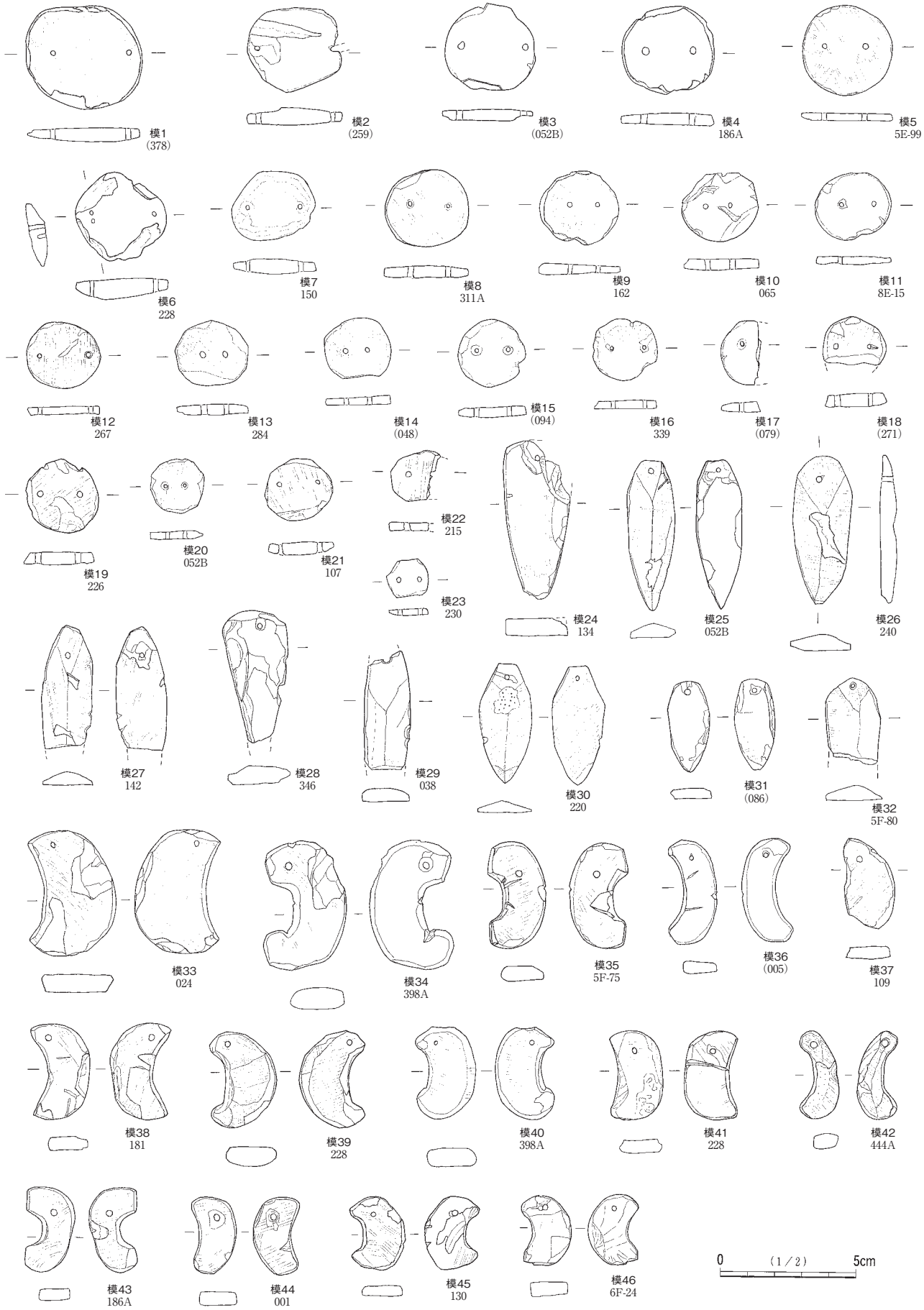


第238図　弥生時代土製炉囲い、弥生時代以降土製支脚

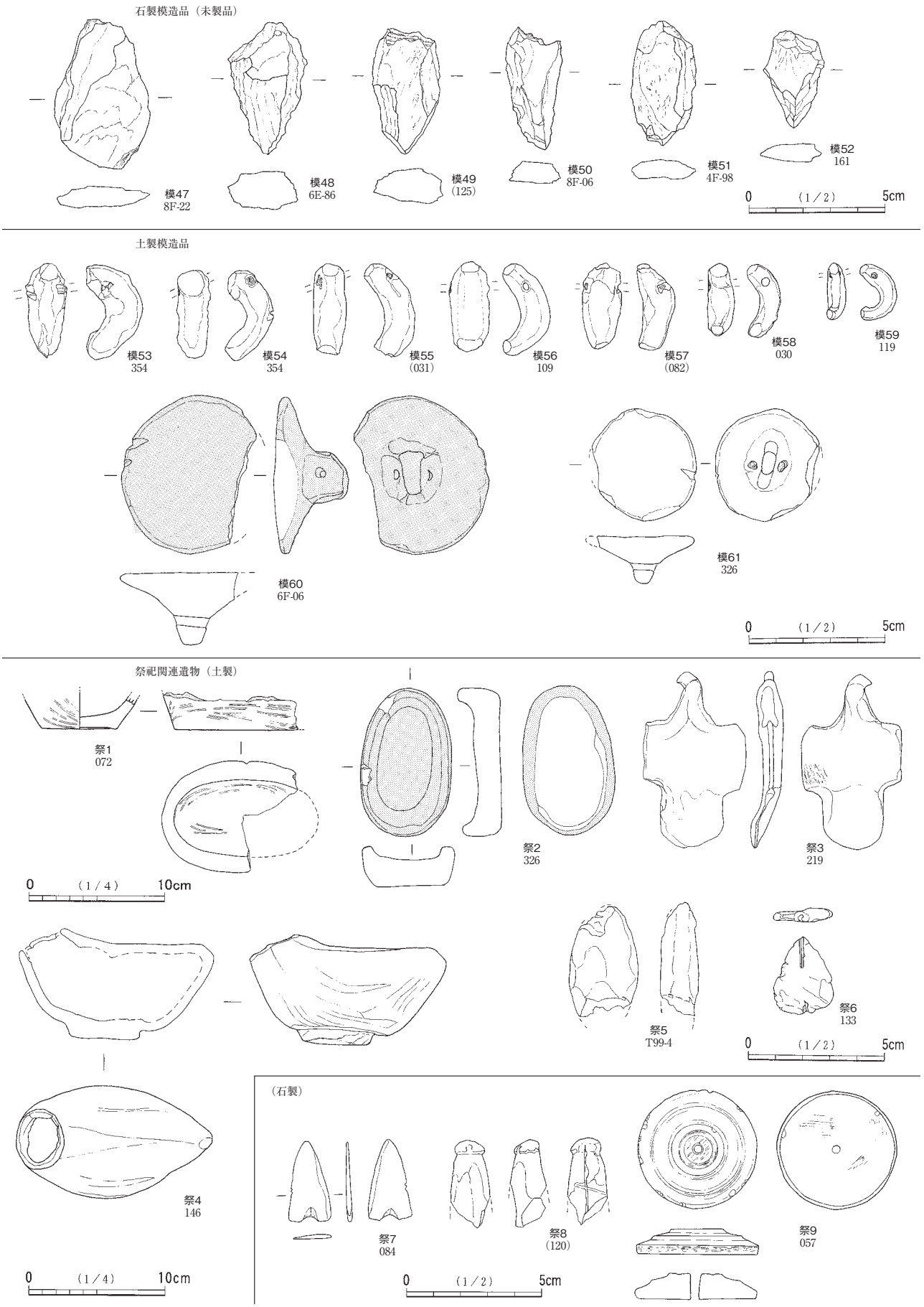
第239図　古墳時代以降土製支脚（1）



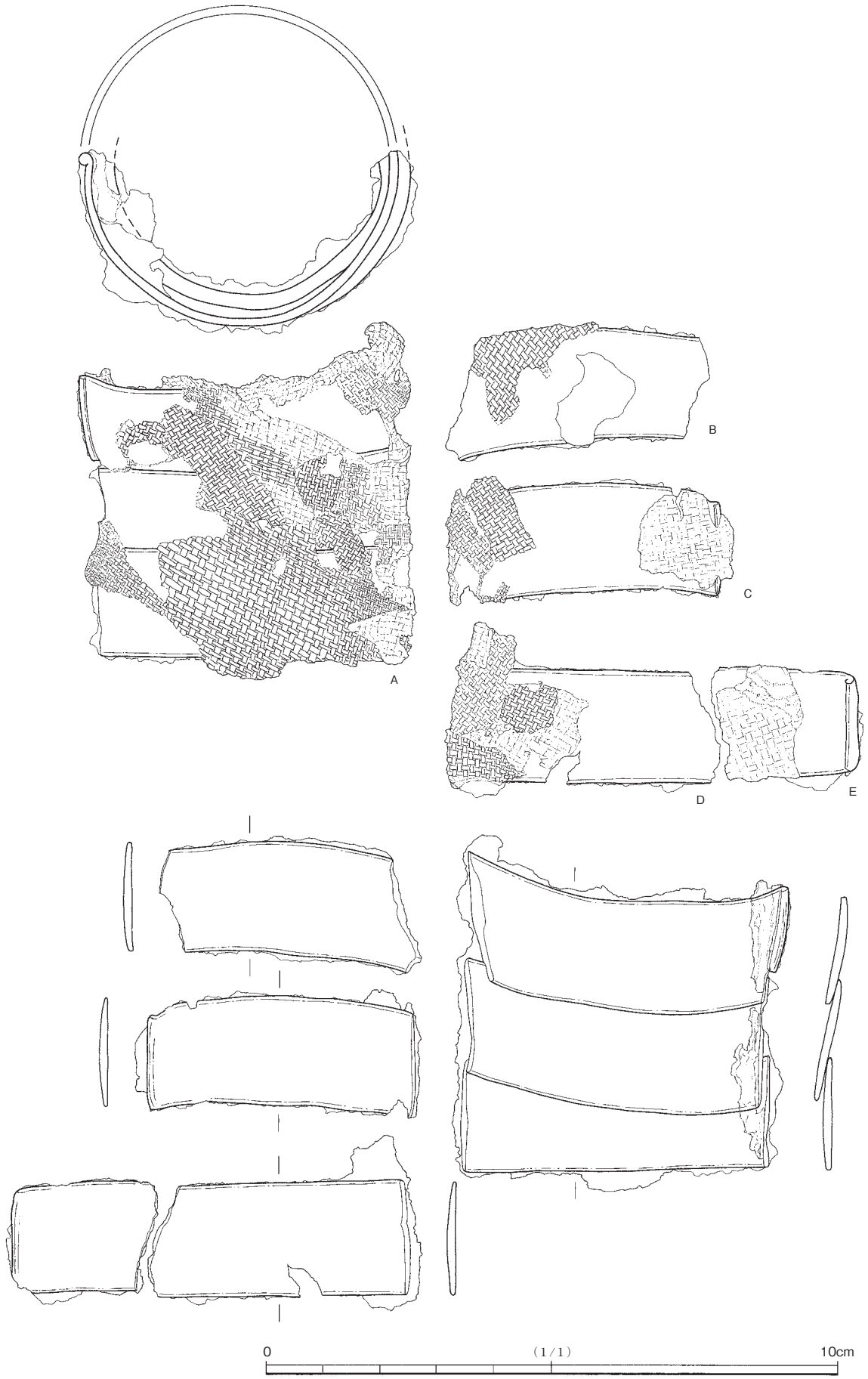
第240図　古墳時代以降土製支脚（２）



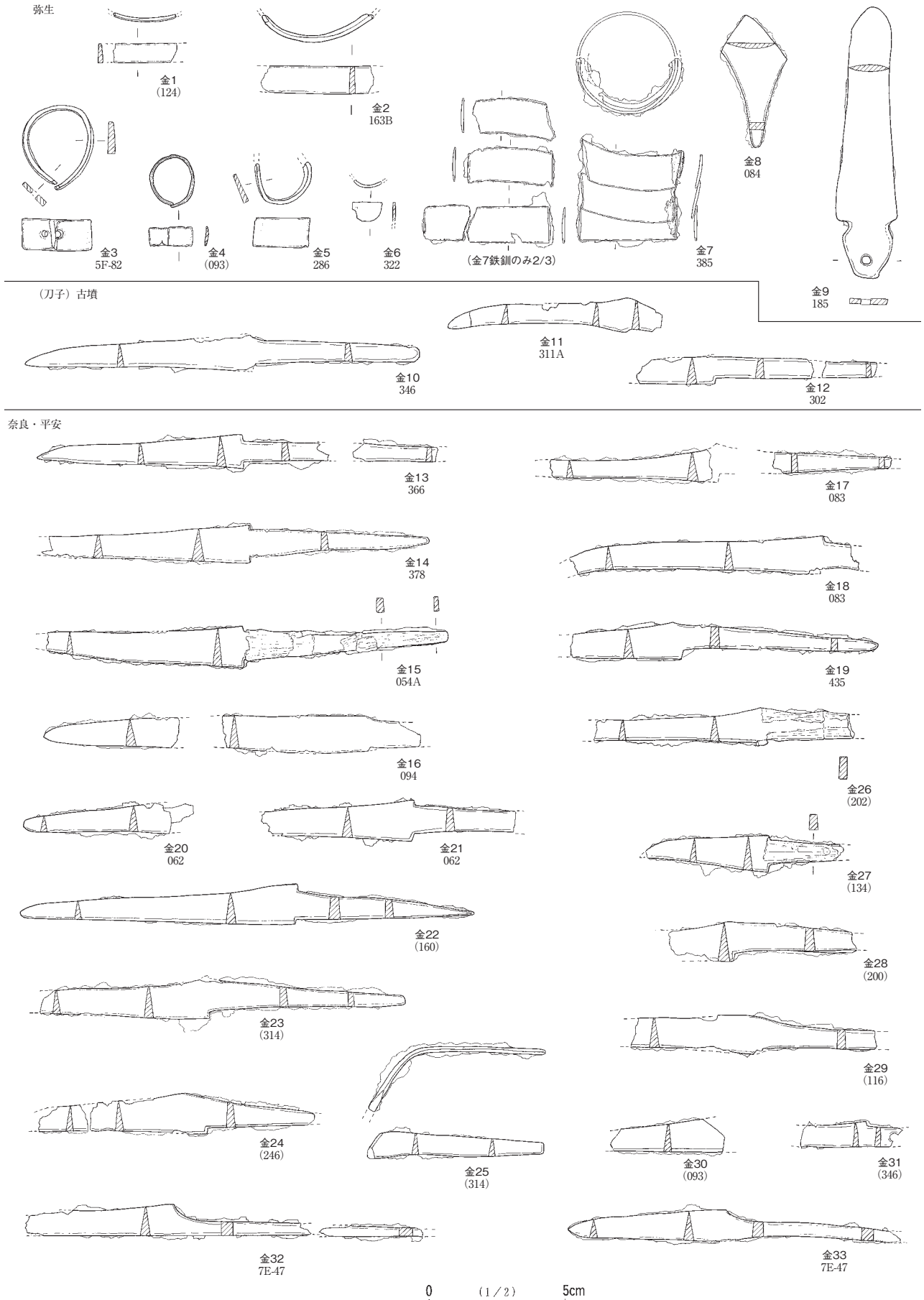
第241図　古墳時代石製模造品



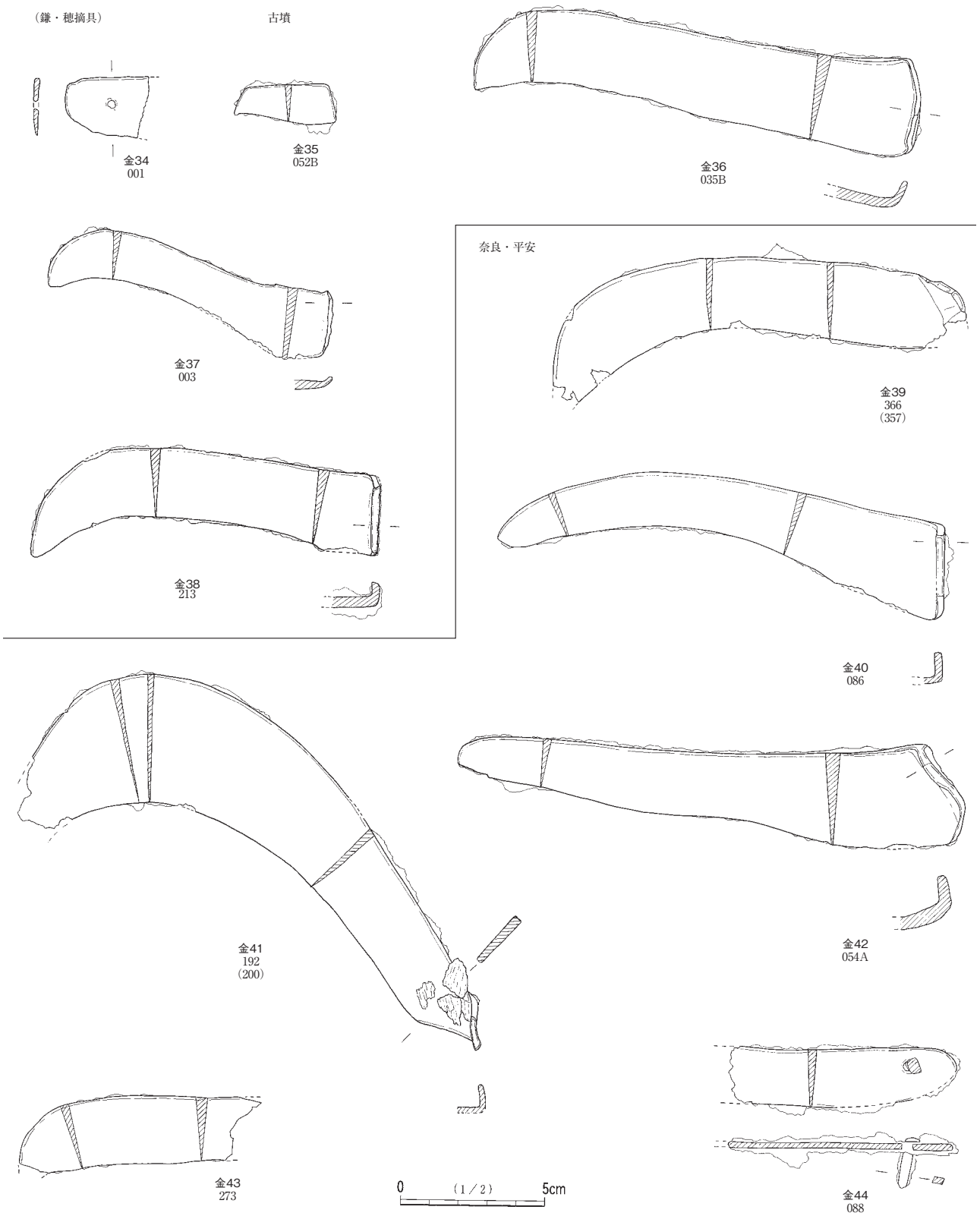
第242図　古墳時代石製模造品（未製品）・土製模造品、弥生時代以降祭祀関連遺物



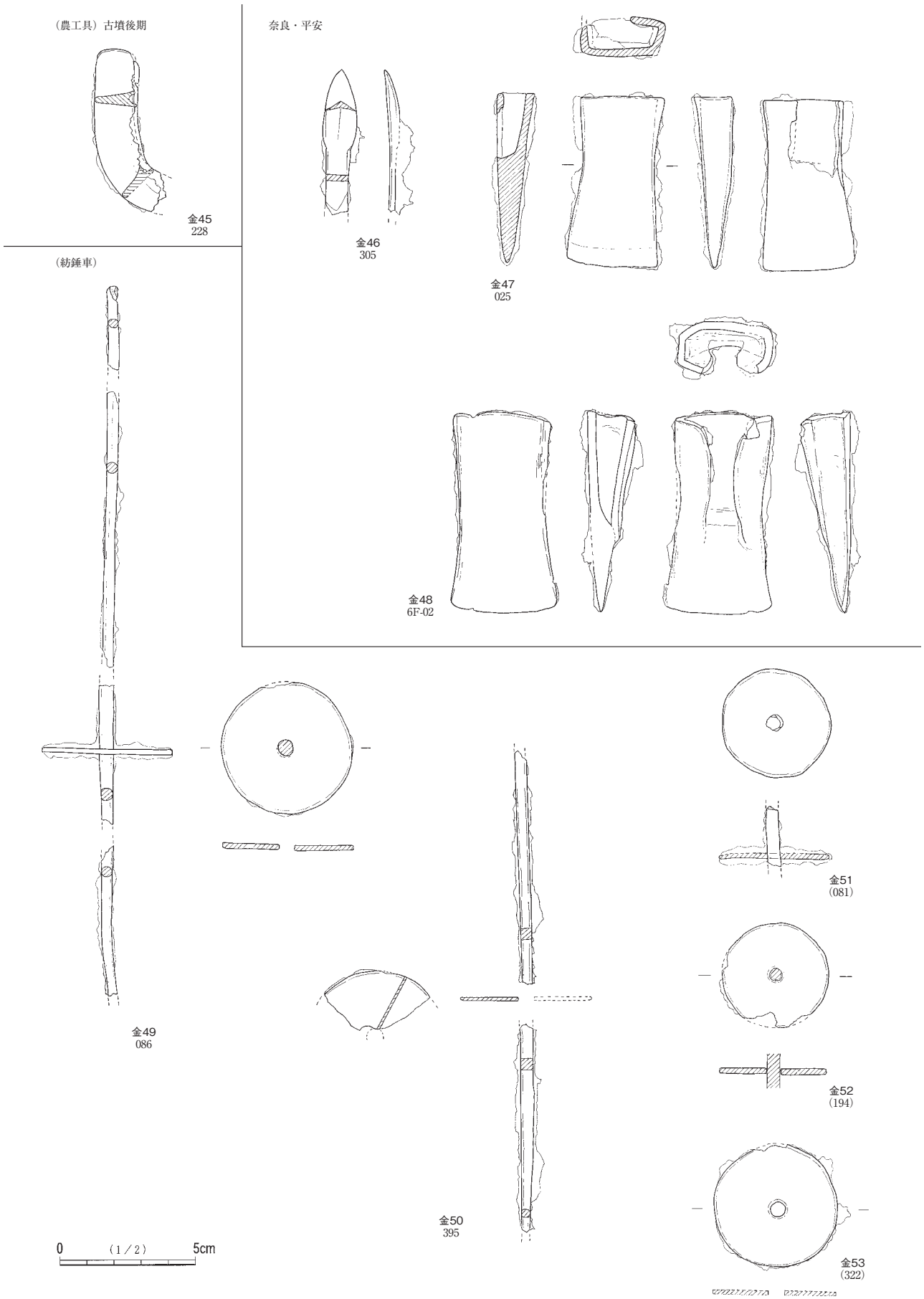
第243図　Ⅰ385出土鉄釧



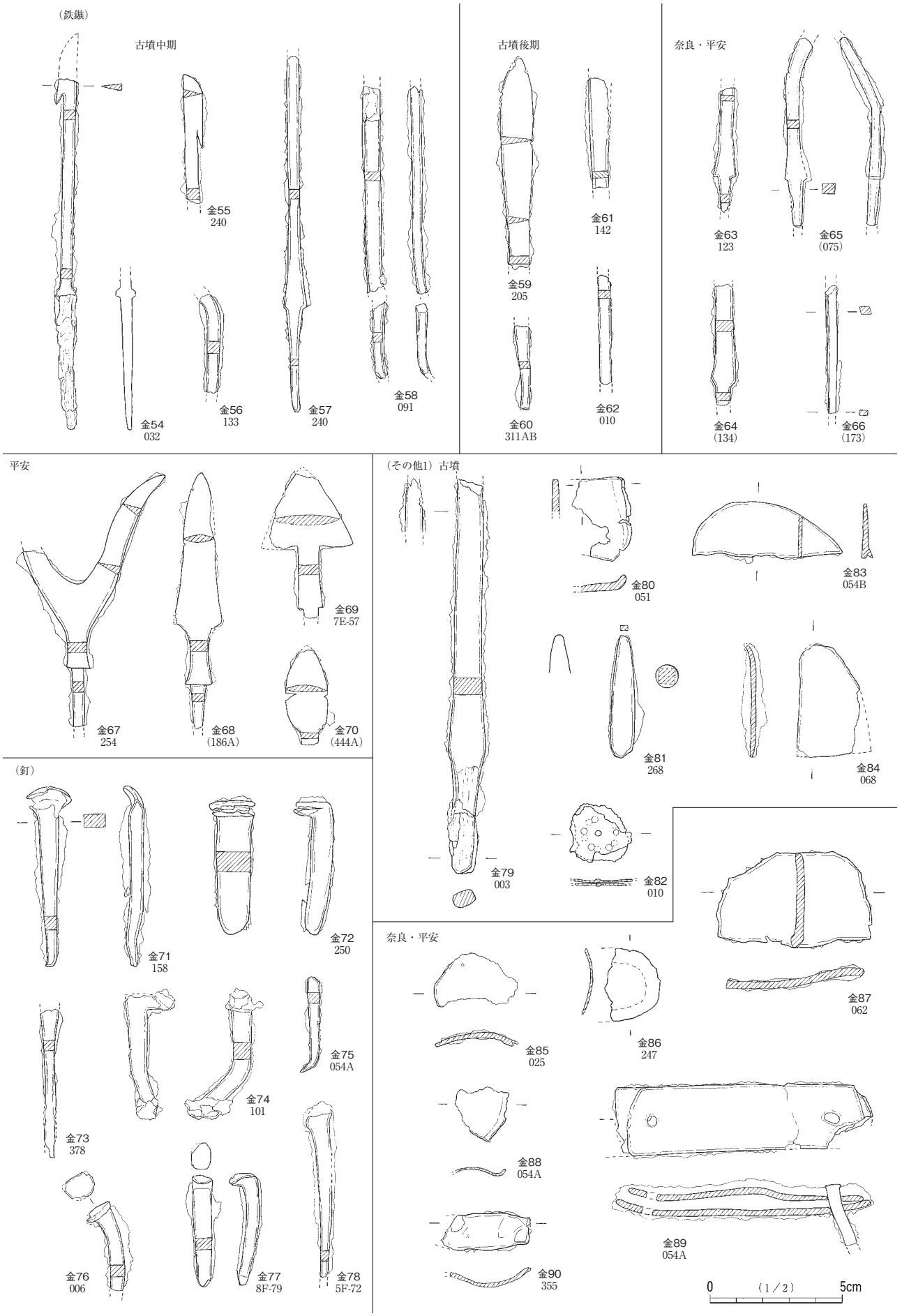
第244図　弥生時代以降金属製品



第245図　古墳時代以降金属製品（１）

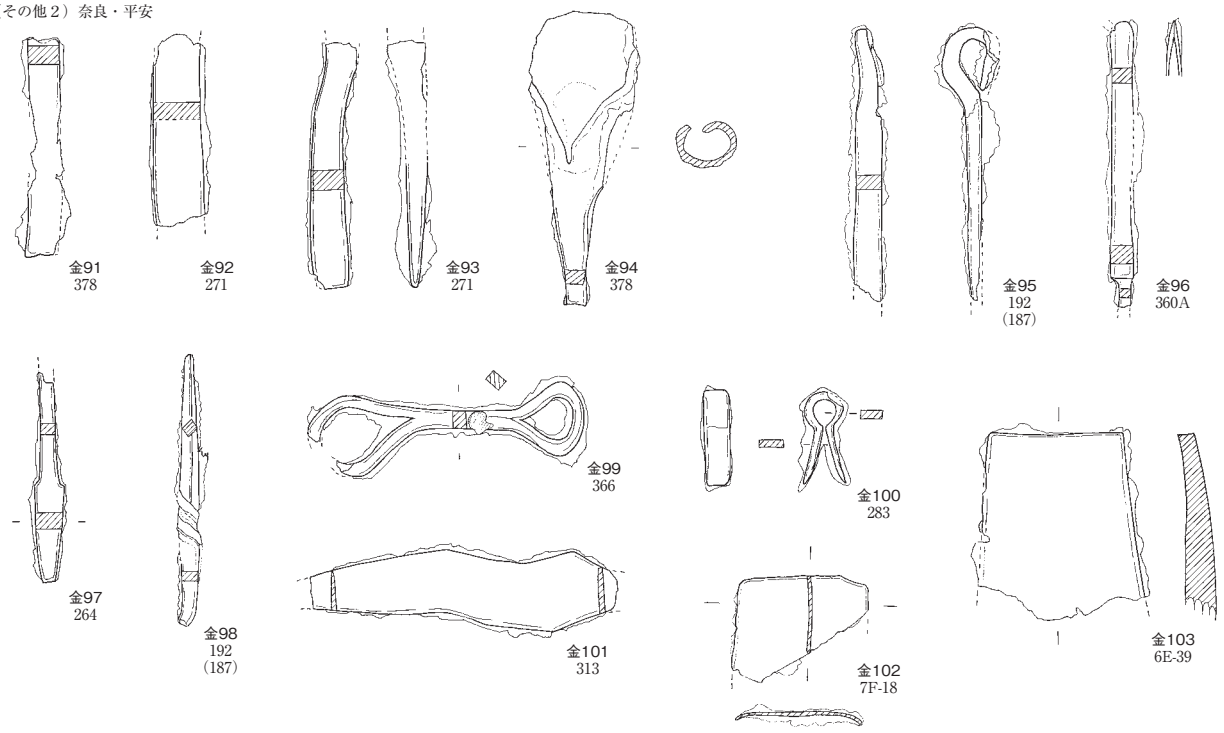


第246図　古墳時代以降金属製品（２）

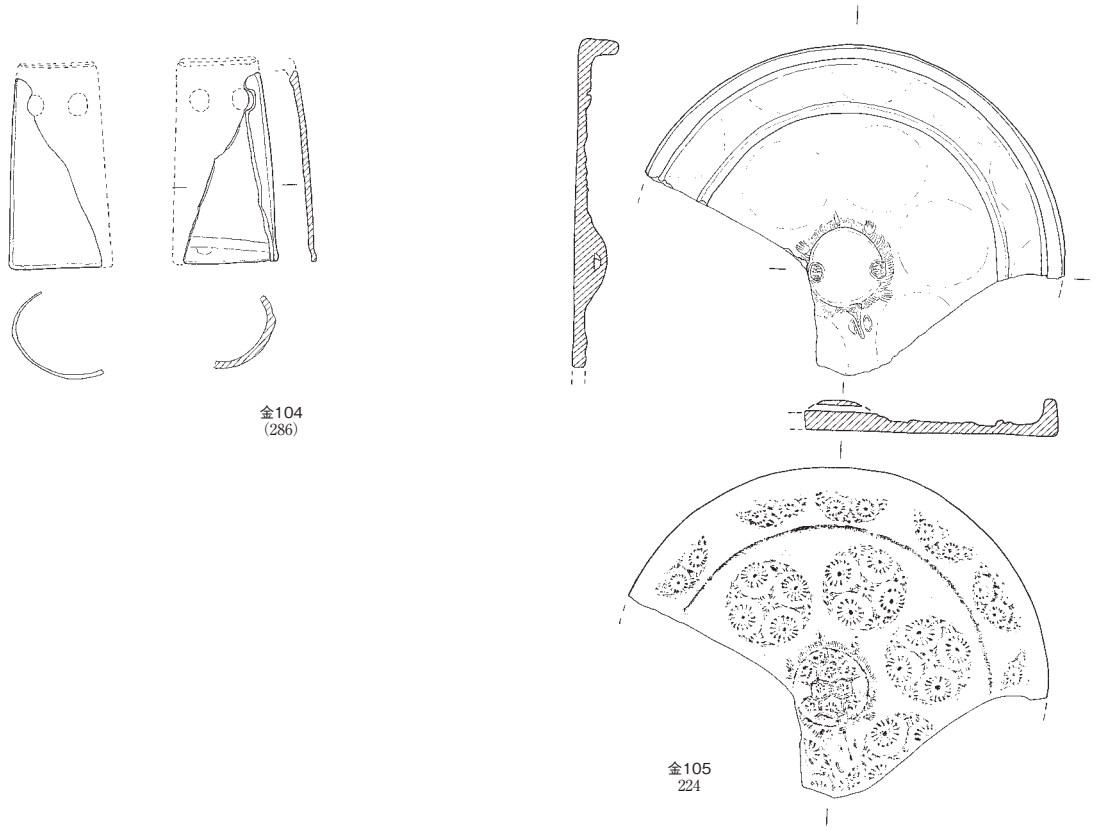


第247図　古墳時代以降金属製品（３）

（その他２）奈良・平安

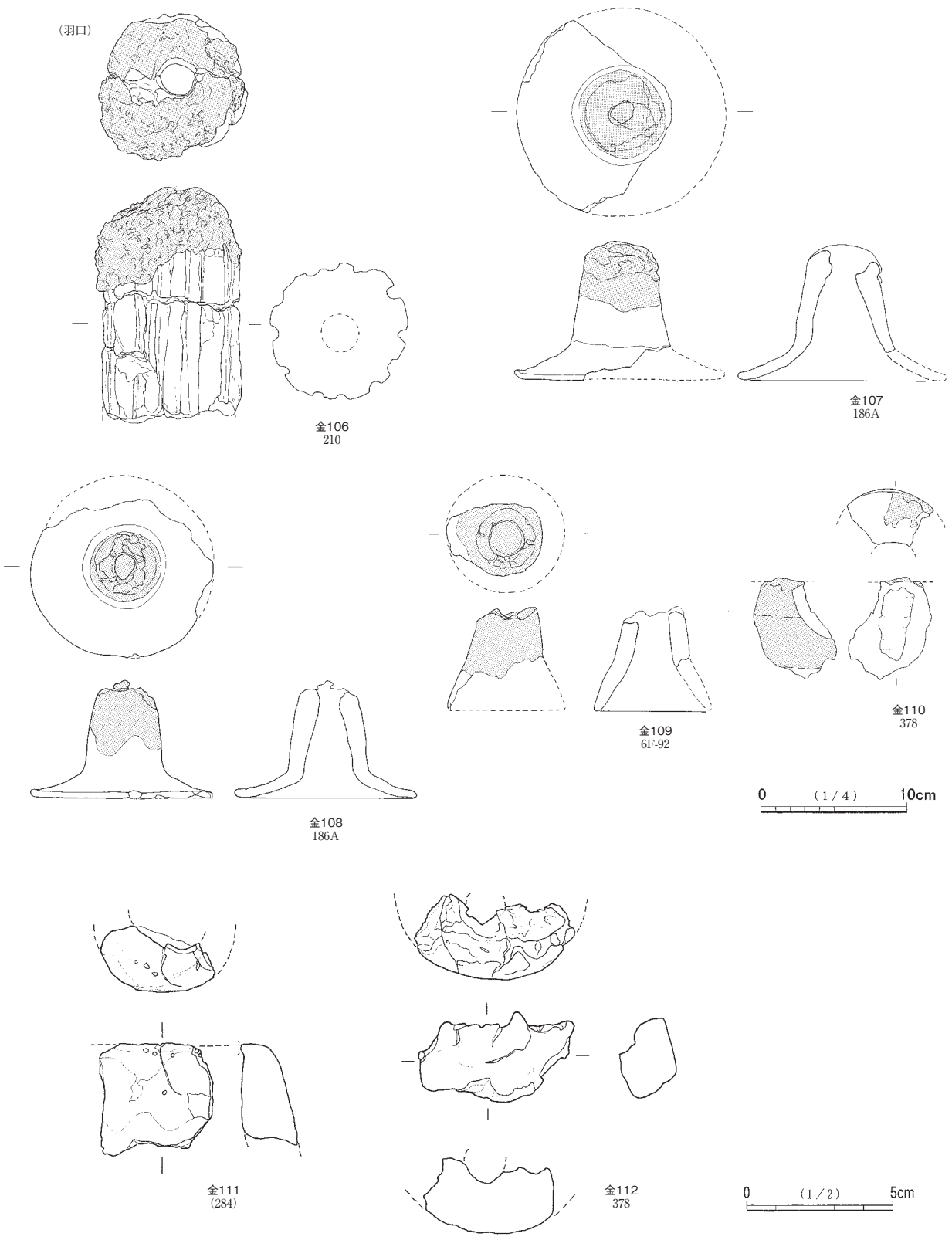


（銅製品）

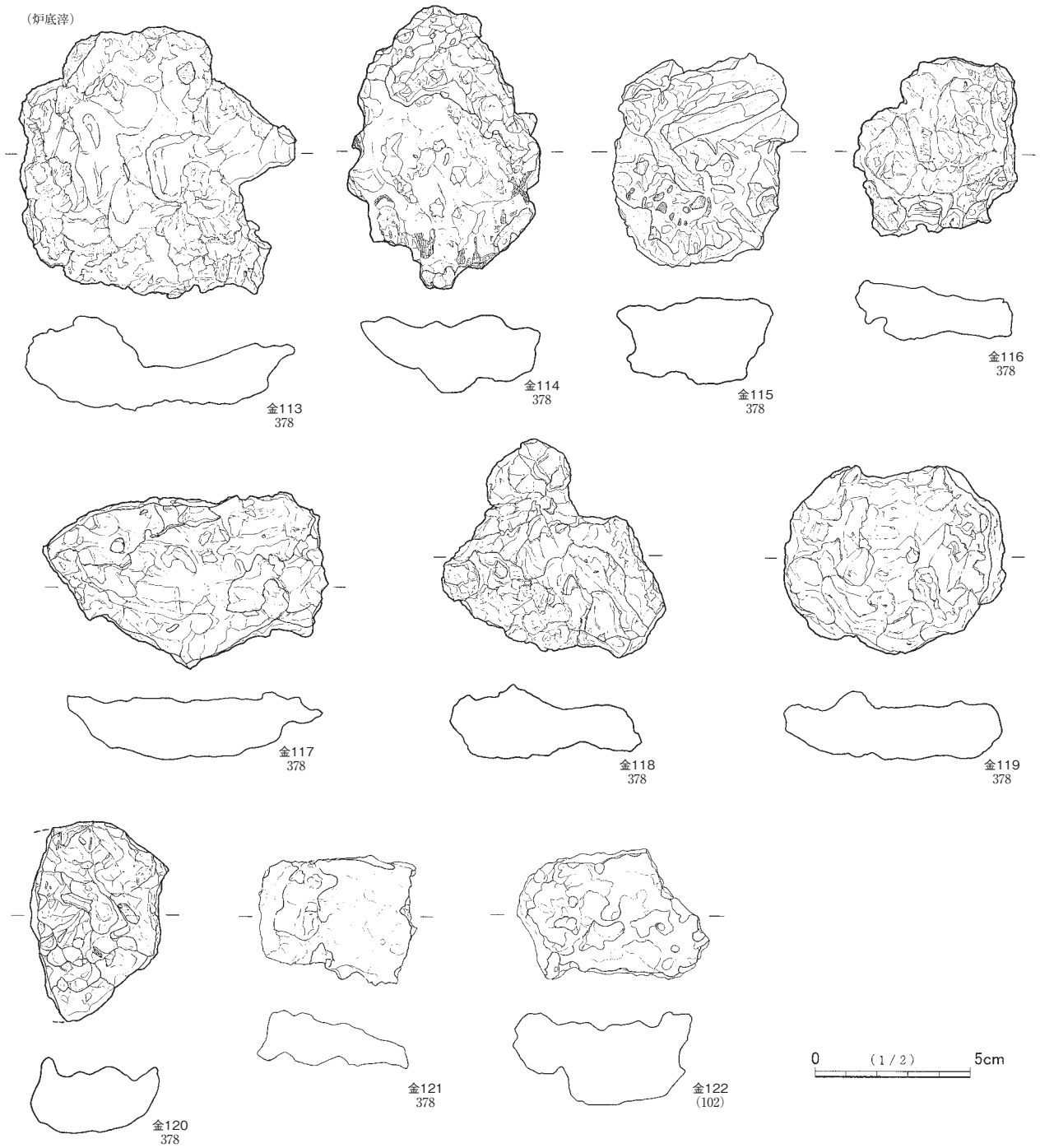


0 (1/2) 5cm

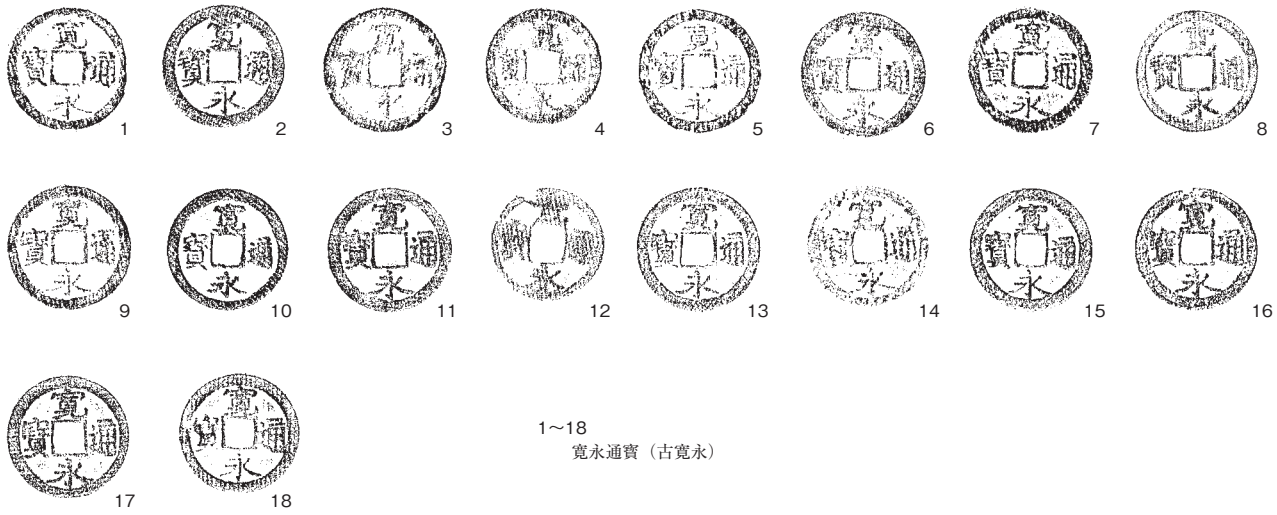
第248図　古墳時代以降金属製品（４）



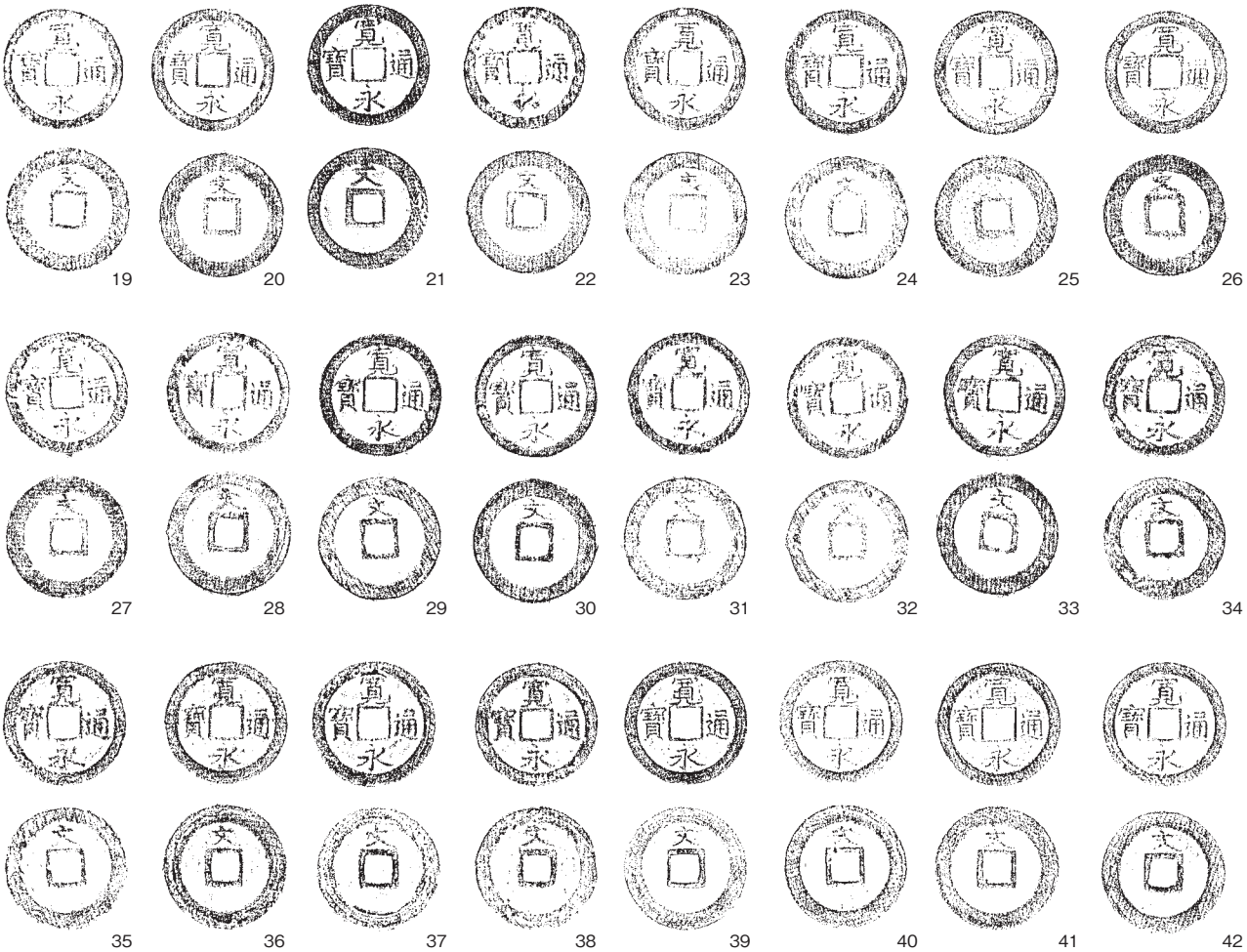
第249図　古墳時代以降鍛冶関連遺物（1）



第250図　古墳時代以降鍛冶関連遺物（２）



1～18
寛永通寶（古寛永）

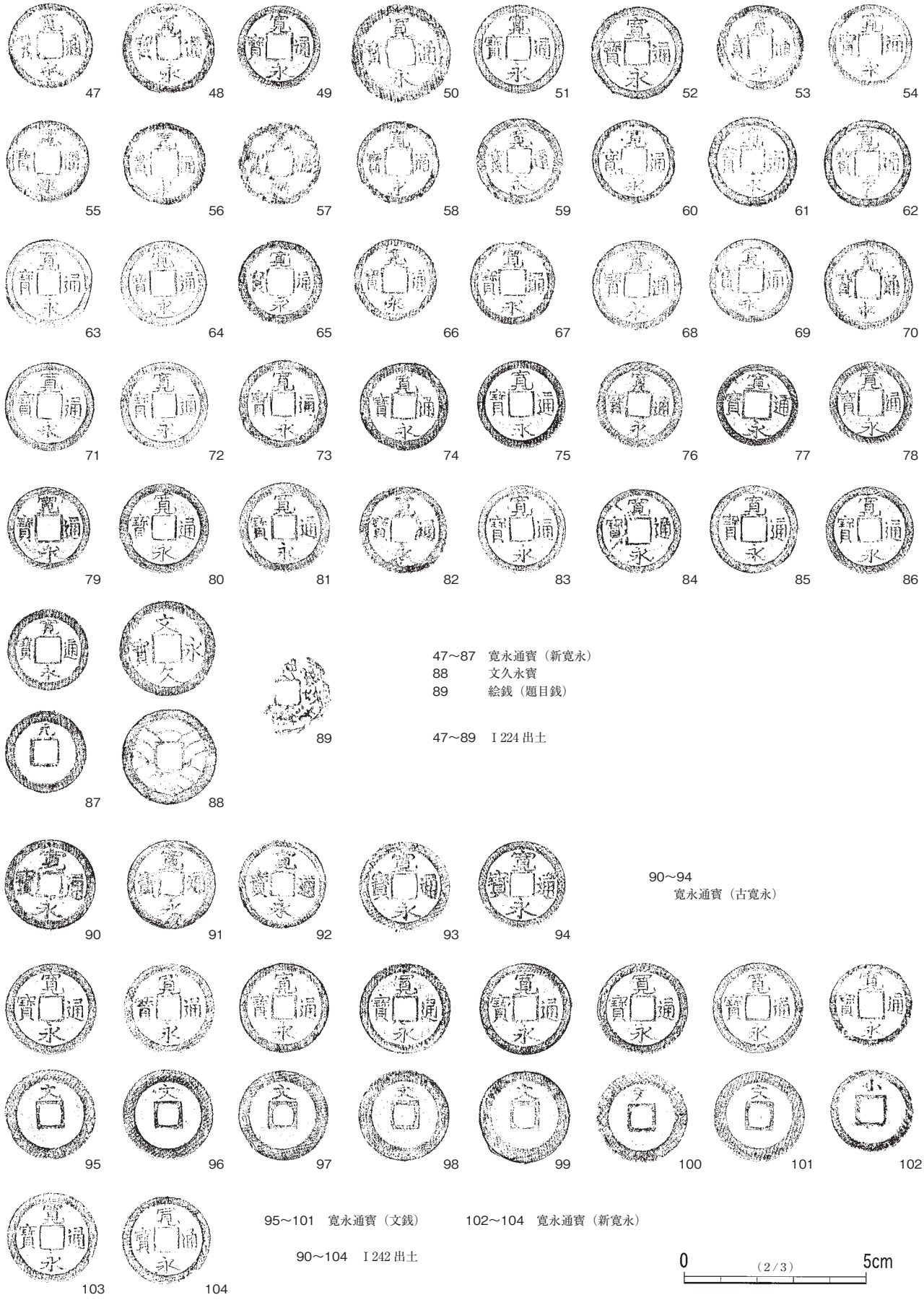


19～46
寛永通寶（文銭）

1～46　Ⅰ224出土

0　(2/3)　5cm

第251図　銭貨拓影図（1）



47～87　寛永通寶（新寛永）
88　文久永寶
89　絵銭（題目銭）

47～89　Ⅰ224出土

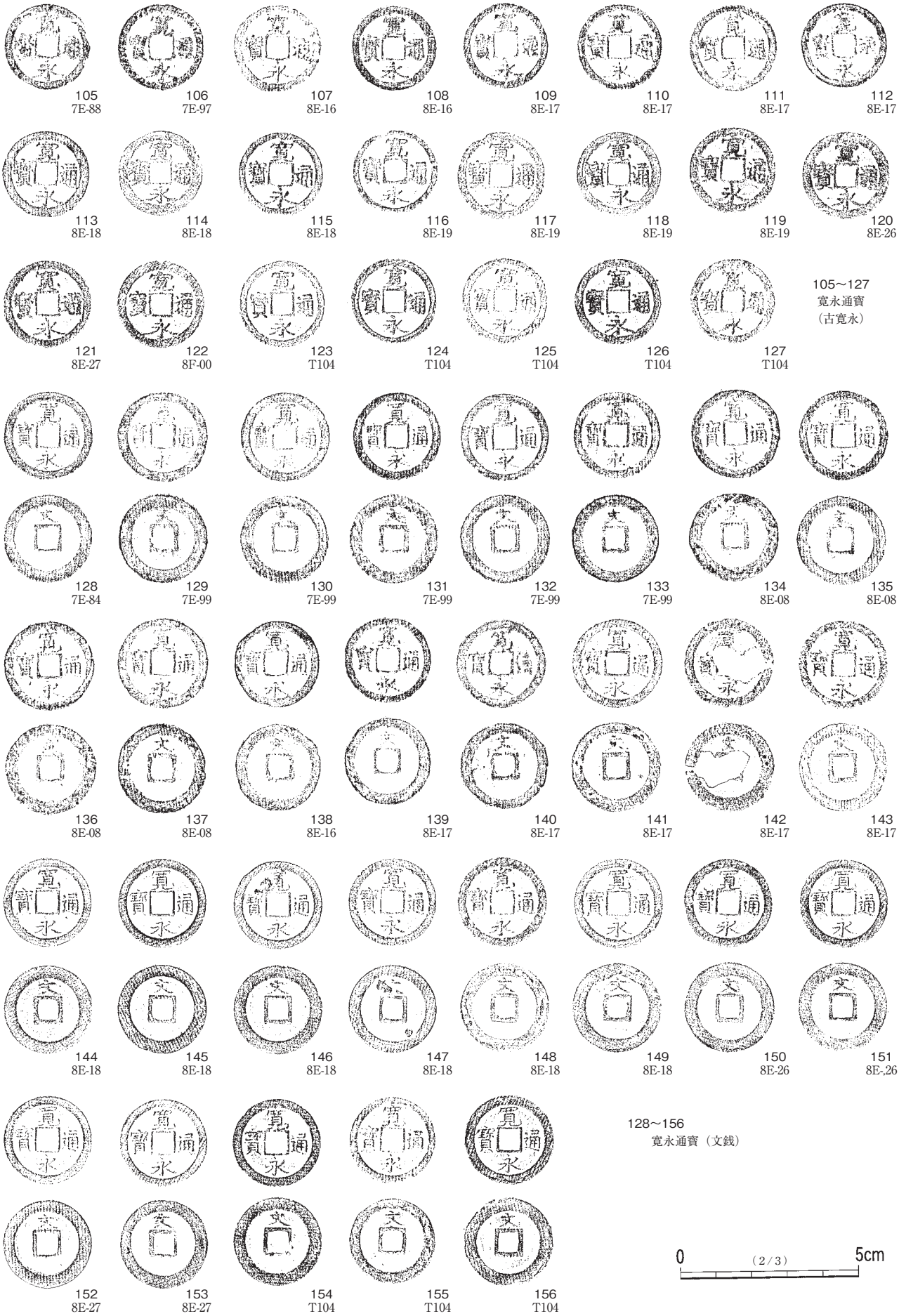
90～94
寛永通寶（古寛永）

95～101　寛永通寶（文銭）　　102～104　寛永通寶（新寛永）

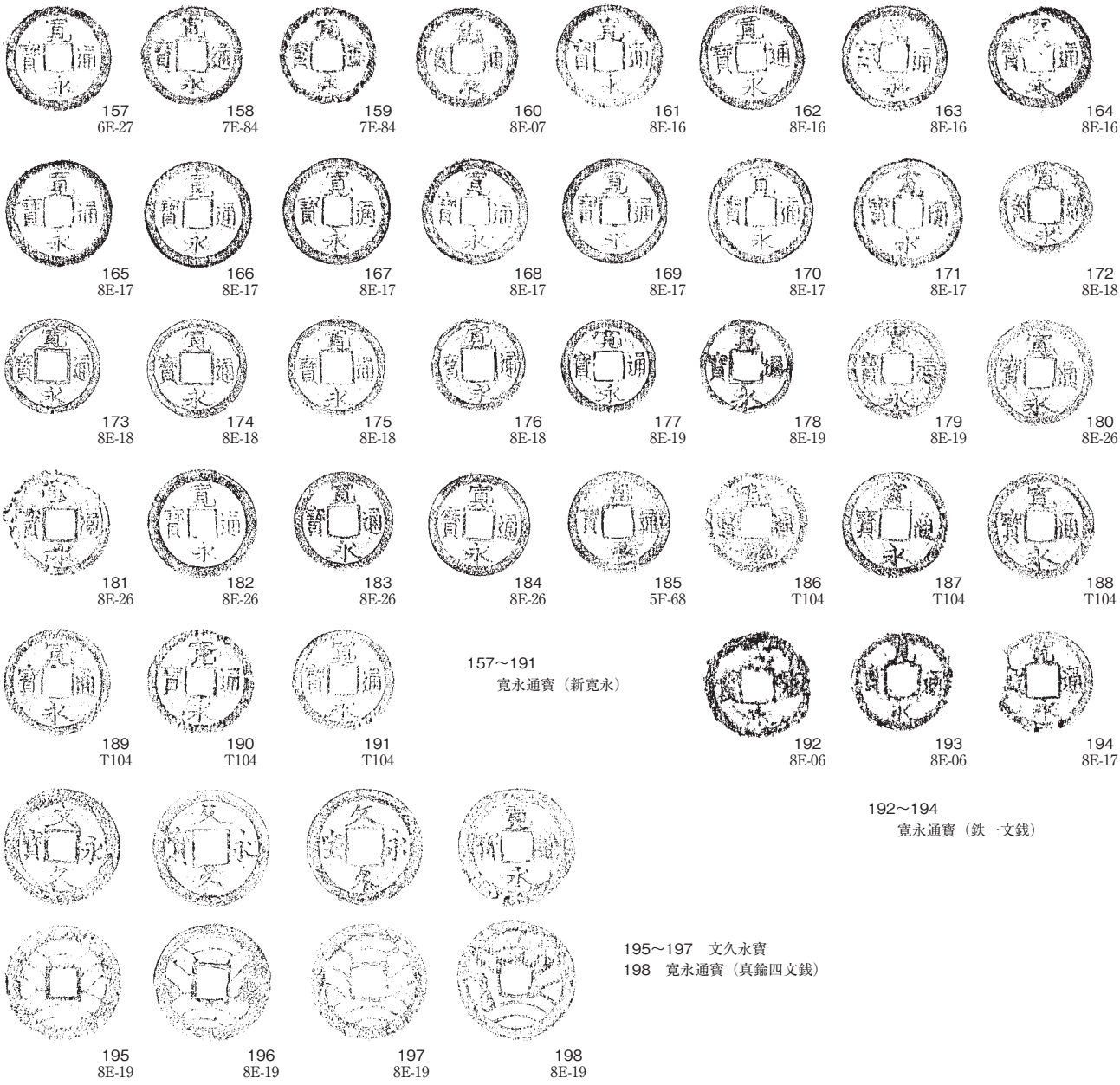
90～104　Ⅰ242出土

0　(2/3)　5cm

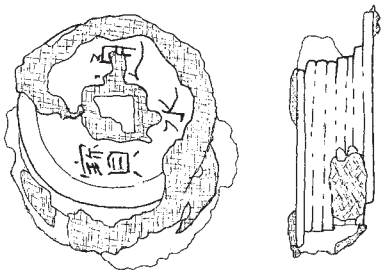
第252図　銭貨拓影図（2）



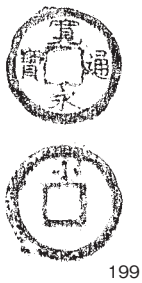
第253図　銭貨拓影図（3）



第254図　銭貨拓影図（４）



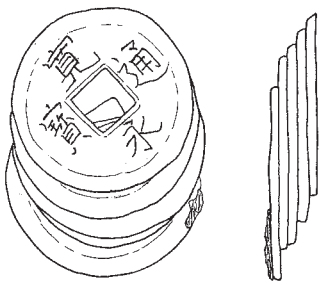
199～203
I 242 出土



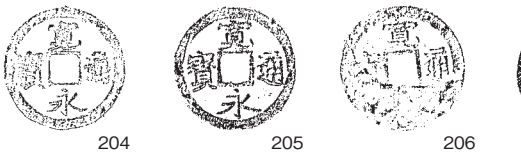
199

200　201　202　203

199～203
寛永通寶（新寛永）



204～208
8E-18 出土



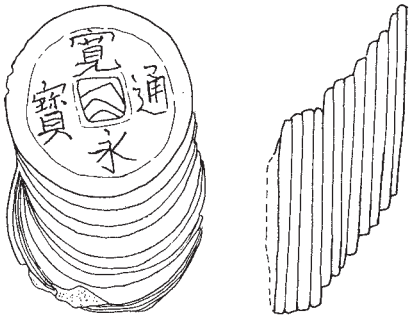
204　205　206　208

207

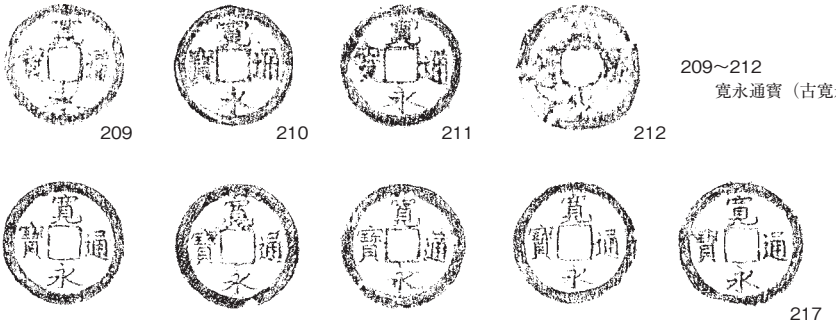
204～206
寛永通寶（古寛永）

207
寛永通寶（文銭）

208
寛永通寶（新寛永）



209～217
8E-27 出土



209　210　211　212

209～212
寛永通寶（古寛永）

217

213　214　215　216

217
寛永通寶（新寛永）

213～216
寛永通寶（文銭）

0　(2/3)　5cm

第255図　銭貨拓影図（５）・実測図

第１表　　竪穴住居跡一覧

遺構番号	位置	挿図番号	平面形	規模（m） 長軸×短軸	床面面積 （㎡）	主軸方向	壁高 （cm）	炉 カマド位置	主柱穴	柱穴の深さ（cm）								入口施設 （Ｐ５）	入口施設規模（cm）	貯蔵穴	貯蔵穴の規模（cm）	時期	備考
										Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ６	Ｐ７	Ｐ８	Ｐ９						
I001	4F-99	第81図	方形	3.7 × 3.7	13.65	N-23° -E	14	-	5	38	34	51	51	51				南	45 × 20 × 34	南東	63 × 55 × 56	古墳 中期	
I003	5F-73	第82図	隅丸長方形	(6.2 × 5.3)	-	N-52° -E	13	北東壁東寄り	(3)	43	67	-	64					カマド対面	58 × 49 × 25	カマド右	85 × 75 × 45	古墳 中期	
I004	5F-34	第83図	(方形)	(8.0) × 7.4	(56.68)	S-36° -W	28	南西壁南寄り	4	84	90	104	109					-		南隅	135 × 125 × 30	古墳 中期	
I006	5F-80		(方形)	(4.3 × 4.0)	-	S-70° -E	-	南東壁中央	4	33	43	39	42					-		-		平安	
I008	5F-90		(方形)	5.4 × -	-	N-51° -E	20	北東壁	-									-		-		古墳 中期	
I010	5F-77	第100図	方形	4.4 × 4.4	20.31	N-29° -W	10	北西壁中央	4	93	75	72	80					-		カマド右	75 × 70 × 80	古墳 後期	
I012	5F-54		-	-	-	-	6	北寄り	-									-		-		弥生 後期	
I020A	5F-52		(方形)	(7.0 × -)	-	(N-35° -E)	-	北東壁	-									-		-		古墳 後期以降	
I021	5F-64	第84図	(長方形)	(4.3) × 4.1	(27.45)	N-41° -E	29	北東壁中央	4	70	60	74	75					-		南隅	50 × 46 × 65	古墳 中期	
I022	5F-64	第84図	方形	3.2 × 3.0	9.45	N-26° -W	52	北西壁中央	-									-		-		古墳 後期	
I024	5F-58		(長方形)	(6.4 × 6.1)	(39.14)	N-39° -E	12	-	4	60	58	73	60					-		-		古墳 中期	
I025	5F-98	第113図	方形	3.2 × 3.1	(9.43)	N-18° -W	15	北壁中央	-									-		-		奈良	
I026	5F-79		-	6以上	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I027	5F-89		長方形	(2.7 × 2.4)	(6.46)	N-19° -W	5	北壁	-									-		-		平安	
I028A	5F-99		方形	4.1 × 4.1	(17.85)	N-30° -W	17	北西壁	4	68	65	73	69					南東	63 × 55 × 58	-		古墳 中期	
I030	5F-33		-	-	-	-	26	-	(2)	32	26							-		-		古墳 中期	
I032	5F-80		-	-	-	-	-	-	(2)	-	-							-		-		古墳 中期	
I034	5F-83		胴張隅丸方形	- × 3.7	-	N-68° -W	21	中央北西寄り	(3)	31	20	45						-		-		古墳 前期	
I035A	5F-72		胴張隅丸方形	(6.9) × 5.7	-	N-8° -E	18	中央北寄り	4	65	42	56	50					-		-		弥生 中期	
I035B	5F-72	第67図	(隅丸長方形)	(3.4) × 2.8	-	N-5° -E	4	中央北壁寄り	-									-		-		古墳 前期	
I037	5F-60		-	-	-	-	15	-	-									-		-		古墳 前期	
I038	5F-94		(隅丸方形)	(4.3 × 3.7)	-	N-37° -W	-	中央北西寄り	(3)	88	-	95	77	40				-		-		古墳 前期	
I040	6E-09	第31図	胴張隅丸長方形	6.3 × 4.7	25.72	N-13° -W	73	中央北寄り	4	70	54	57	58					-		南東	54 × 47 × 53	弥生 後期	
I041	5F-82	第31図	胴張隅丸長方形	5.3 × 4.3	20.36	N-6° -E	35	中央北寄り	4	64	70	70	68					南	32 × 23 × 22	南東	35 × 33 × 23	弥生 後期	
I042	5F-91		隅丸方形	5.8 × 5.5	28.65	N-17° -W	34	中央北寄り	4	48	44	46	58					-		-		古墳 前期	
I044	5G-00	第67図	方形	3.5 × 3.2	9.78	N-29° -W	22	中央北西寄り	-	61	31	-	-	70	32			南	32 × 27 × 37	南東隅	37 × 28 × 24	古墳 前期	
I049	5G-10		方形	5.1 × 5.0	(25.68)	N-34° -W	5	-	4	47	72	51	40					-		-		古墳 中期	
I051	5F-32	第85図	(長方形)	(4.2) × 3.6	(15.12)	N-42° -E	26	-	4	86	88	84	86					-		東隅	65 × 50 × 45	古墳 中期	
I052A	5F-85	第32図	隅丸方形	5.0 × (4.7)	(21.10)	N-33° -W	31	中央北西寄り	(3)	70	78	-	82	43				-		南東	45 × 42 × 27	弥生 中期	
I052B	5F-85	第85図	方形	6.5 × 6.3	(40.74)	(N-18° -E)	4	-	4	51	-	51	69					-		南東隅	112 × 65 × 46	古墳 中期	

遺構番号	位置	挿図番号	平面形	規模（m） 長軸×短軸	床面面積 （㎡）	主軸方向	壁高 （cm）	炉 カマド位置	主柱穴	柱穴の深さ（cm）								入口施設 （P５）	入口施設規模（cm）	貯蔵穴	貯蔵穴の規模（cm）	時期	備考
										P１	P２	P３	P４	P６	P７	P８	P９						
I052C	5F-84		-	-	-	-	-	カマドあり	-									-		-		時期 不明	
I053	5F-56	第86図	（方形）	（6.2）×（6.0）	（38.54）	N-10° -W	23	-	4	22	58	66	60					-		-		古墳 中期	
I054A	5F-96	第114図	長方形	4.0 × 3.0	12.54	N-20° -E	32	北壁東寄り	-									-		-		平安	
I054B	5F-97	第86図	長方形	6.3 × 6.1	（40.45）	N-58° -W	25	-	4	37	49	44	35	40	47	59		-		-		古墳 中期	
I055	5F-52	第32図	楕円形	4.6 × 4.5	16.27	N-40° -W	28	中央北西寄り	（2）	-	19	20						南東	27 × 23 × 36	南東	35 × 32 × 24	弥生 後期	
I056	5F-51	第32図	胴張隅丸長方形	5.0 × 4.3	17.34	N-15° -W	36	中央北寄り	0	13	11	10	-	12				南	37 × 35 × 42	南東	33 × 26 × 20	弥生 後期	
I057	6F-38	第100図	方形	6.2 × 5.8	35.41	S-80° -W	26	西壁中央	4	60	66	62	74					カマド対面	65 × 68 × 35	南西隅	80 × 70 × 60	古墳 後期	
I059	6G-40	第33図	（楕円形）	6.6 ×（6.0）	（32.19）	N-19° -W	25	中央北寄り	4	63	69	86	85					南	45 × 43 × 54	南東	50 × 45 × 39	弥生 後期	
I060	6F-09		-	-	-	-	-	-	-													時期 不明	
I062	6F-14		（方形）	3.0 × -	-	（N-99° -E）	15	東壁中央	-									-		-		平安	
I065	6F-21		方形	（5.5 × 5.2）	-	-	-	-	-									-		-		古墳 中期	
I067AB	6F-03	第67図	隅丸長方形	7.5 × 6.8	（51.52）	N-10° -W	23	中央北寄り	4	84	79	95	80					-		-		古墳 前期	
I068	6E-38	第101図	（方形）	（5.2 × 4.6）	-	-	-	北西壁	-									-		-		古墳 後期	
I069	6F-06		-	-	-	（N-60° -W）	33	北西壁	（2）	58	-	-	75					-		カマド右	95 × 80 × 89	古墳 後期	
I071	6F-38		（方形）	6 以上	-	（N-27° -W）	-	-	（2）	55	-	-	60					-		-		古墳 前期	
I072	5F-92	第33図	胴張隅丸方形	5.1 × 5.0	（21.80）	N-14° -W	28	中央北寄り	4	55	49	-	-					南	42 × 38 × -	南東	62 × 45 × 53	弥生 中期	
I073	6F-01		-	-	-	-	40	-	-									-		-		弥生 中期	
I075	6F-22	第68図	隅丸長方形	4.8 × 3.3	14.36	N-12° -E	40	-	-									-		-		古墳 前期	
I077	6F-32		（隅丸方形）	3.6 以上	-	-	-	-	-									-		-		弥生 中期	
I078	6F-42	第34図	胴張隅丸方形	6.8 × 6.1	36.07	N-3° -E	51	中央北寄り	4	67	68	56	56	69				南	52 × 42 × 27	南東	50 × 50 × 46	弥生 中期	
I079	6F-12	第34図	楕円形	6.1 × 5.9	30.10	N-13° -W	50	中央北寄り	-									-		-		弥生 中期	
I081	6E-38		-	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳 前期	
I082	6F-34	第35図	胴張隅丸長方形	6.8 × 6.0	34.10	N-22° -W	35	中央北寄り	4	52	45	51	61					-		南東	48 × 40 × 26	弥生 中期	
I083	6E-39	第113図	（長方形）	（5.0 × 3.8）	（16.96）	（N-2° -W）	-	北壁東寄り	-									南東	60 × 60 × 35	-		平安	
I084	6F-23	第35図	楕円形	3.3 × 3.1	8.38	N-30° -W	49	中央北寄り	-									-		南東	34 × 30 × 7	弥生 後期	
I085	6F-32		-	（9.4 × 5 以上）	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I086	7E-24	第113図	長方形	4.1 × 3.5	12.99	N-29° -E	25	北東壁西寄り	-									カマド対面	50 × 45 × 65	-		奈良	
I087	7E-55	第115図	長方形	3.4 × 3.2	10.58	N-31° -E	36	北東壁中央	-									カマド対面	55 × 43 × 22	-		奈良	
I088	6F-15		-	3.7 以上	-	-	-	-	-									-		-		平安	
I089	7E-24		（方形）	3.6 以上	-	-	16	-	-									-		-		古墳 中期	
I090	6F-15	第87図	隅丸方形	5.1 × 4.8	23.92	S-52° -W	44	中央南西寄り	4	50	53	50	55					-		-		古墳 中期	

遺構番号	位置	挿図番号	平面形	規模（m） 長軸×短軸	床面面積 （㎡）	主軸方向	壁高 （cm）	炉 カマド位置	主柱穴	柱穴の深さ（cm） P1	P2	P3	P4	P6	P7	P8	P9	入口施設 （P5）	入口施設規模（cm）	貯蔵穴	貯蔵穴の規模（cm）	時期	備考
I091	6F-00	第87図	（隅丸長方形）	（4.7 × 3.8）	（18.71）	S-38° -E	12	南東壁	-									-		-		古墳 中期	
I092	6F-14	第36図	隅丸方形	5.1 × 4.5	20.41	N-18° -W	30	中央北寄り	（3）	70	65	63	-					南	40 × 36 × -	-		弥生 中期	
I093	6F-32		-		-	-	-	-	-									-		-		古墳 中期	
I094	6E-28	第115図	（長方形）	（3.3 × 2.9）	9.06	N-25° -E	-	北壁東寄り	-									-		-		奈良	
I095	6F-12		隅丸方形	4.8 × 4.6	21.12	N-14° -W	4	中央東寄り	4	30	43	32	33					南	55 × 42 × 24	-		古墳 前期	
I097	6F-13		-	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳 前期	
I099	6F-10		-	-	-	-	28	-	（2）	-	37	57	-					-		-		弥生 後期	
I101	6F-43	第115図	（長方形）	（5.0 × 3.6）	（18.20）	（N-4° -E）	-	北壁中央	-									-		-		平安	
I102	6F-16	第101図	方形	5.1 × 5.0	25.86	N-31° -W	43	北西壁中央	4	49	51	70	36					カマド対面	55 × 55 × 25	-		古墳 後期	
I105	6E-55		-	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I106	6E-66	第36図	長方形	6.4 × 4.6	26.65	N-30° -W	33	中央北西寄り	4	89	95	85	99					カマド対面	57 × 35 × 27	-		弥生 後期	
I107	7E-12	第102図	（長方形）	（6.1） × 5.3	-	S-52° -E	12	南東壁	4	71	51	81	74					-		カマド右	75 × 68 × 60	古墳 後期	
I109	6E-47	第102図	-	5.9 × -	-	N-99° -E	49	東壁	4	51	55	96	60					カマド対面	45 × 36 × -	-		古墳 後期	
I110	6E-57		隅丸方形	8.9 × （6.9）	（54.04）	N-16° -E	46	炉1 やや北 炉2 北西	（2）	-	-	45	47					南	35 × 30 × 30	南	50 × 48 × 39	弥生 後期	
I111	7E-75	第116図	方形	2.8 × 2.6	7.81	N-29° -E	33	北東壁中央	-									-		-		平安	
I112	7E-75	第88図	正方形	（2.8） × 2.6	（7.13）	N-33° -W	25	北西壁北寄り	-									-		-		古墳 中期	
I113	6E-56		（方形）	（3.3 × -）	-	（N-90° -E）	-	南東壁	-									-		-		古墳 前期末	
I114	7E-14		方形	（5.3 × -）	-	（N-55° -E）	-	北東壁	-									-		-		奈良	
I115	7E-76		隅丸長方形	3.4 × 2.8	8.58	N-0° -W	7	北壁中央	-									-		-		平安	
I116	6E-58		方形	（6.6 × 6.1）	-	S-35° -W	-	南西壁	（3）	-	65	-	46					-		-		古墳 中期	
I117	7E-67		（方形）	（4.2 × 4.1）	-	（N-32° -E）	-	北東壁	4	57	49	39	41					-		-		奈良	
I118	7E-68	第88図	方形	6.4 × 6.2	（39.36）	N-53° -W	18	北西壁中央	（2）	-	-	-	-					-		東隅	75 × 72 × 63	古墳 中期	
I119	7E-88	第103図	方形	6.7 × 6.7	45.88	N-48° -W	21	北西壁中央	4	85	83	74	93					南東	50 × 40 × 59	-		古墳 後期	
I120	7E-56	第116図	（方形）	（3.8） × 3.2	（11.83）	N-48° -W	23	北西壁中央	1	69	-	-						-		-		奈良	
I121	7E-03	第104図	方形	7.6 × 7.6	56.74	N-43° -W	29	北西壁中央	4	80	-	51	49					南東	92 × 85 × 23	-		古墳 後期	
I123	6E-95		（方形）	（4.5 × 4.4）	-	N-80° -W	-	西壁中央	-									-		-		奈良	
I124	7E-66		方形	6.1 × 5.9	36.44	N-53° -W	26	北西壁中央	4	81	52	49	66					-		-		古墳 中期	
I126	7E-85	第116図	方形	3.3 × 3.1	10.01	N-35° -W	10	北西壁中央	-									-		-		奈良	
I128	6E-18		-	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I130	7E-58	第89図	方形	5.1 × 5.0	25.88	S-30° -E	28	-	（3）	-	46	45	45					-		南隅	50 × 45 × 65	古墳 中期	
I131	7E-45		方形	-	-	S-16° -W	13	南壁	-									-		-		古墳 前期	

遺構番号	位置	挿図番号	平面形	規模（m） 長軸×短軸	床面面積 （㎡）	主軸方向	壁高 （cm）	炉 カマド位置	主柱穴	柱穴の深さ（cm）								入口施設 （P５）	入口施設規模（cm）	貯蔵穴	貯蔵穴の規模（cm）	時期	備考
										P１	P２	P３	P４	P６	P７	P８	P９						
I132	7E-46		方形	6.3 × -	-	N-54° -W	34	中央北西寄り	（3）	59	63	63	-					-		-		古墳 前期	
I133	7E-38	第90図	方形	8.4 ×（8.4）	（67.76）	N-32° -E	18	北東壁東寄り	4	64	44	71	66					-		東隅	100 × 95 × 41	古墳 中期	
I134	7E-59	第105図	方形	5.2 × 5.2	36.50	N-50° -W	51	北西壁中央	4	87	73	61	85					カマド対面	35 × 25 × 24	-		古墳 後期	
I135	7E-38	第68図	（方形）	（4.9） × 4.8	（23.73）	N-40° -W	20	中央北西寄り	4	66	71	75	61	63				-		-		古墳 前期	
I136	6E-85	第37図	隅丸方形	8.6 ×（7.5）	（58.64）	N-1° -W	25	中央北寄り	（3）	-	60	69	58					-		南東隅	68 × 65 × 65	弥生 中期	
I142	7E-05	第105図	方形	5.5 × 5.2	（28.93）	N-48° -E	40	北東壁東寄り	4	69	88	59	57					-		カマド右	50 × 45 × 75	古墳 後期	
I143	8E-29		（方形）	4 以上	-	-	-	-	-									-		-		古墳 前期	
I144	7E-57		-	-	-	-	20	-	-									-		-		時期 不明	
I145	7E-37		方形	5.7 × -	-	N-29° -W	22	北寄り	4	-	-	-	-					-		-		古墳 前期末	
I146	7E-58		-	-	-	N-10° -E	25	北寄り	4	-	70	82	100					南西	90 × 76 × -	南	90 × 76 × -	弥生 中期	
I147	7E-16		方形	（7.3 × -）	-	S-55° -W	12	南西壁	4	59	83	72	54					-		カマド右	80 × 70 × 53	古墳 中期	
I148	7E-99		方形	-	-	N-56° -E	43	北寄り	4	84	97	-	69					-		-		古墳 前期末	
I149	6E-86		-	-	-	-	-	-	-									-		-		平安	
I150	7E-17		方形	（8.1 × -）	-	S-33° -W	-	南西壁	（2）	100	-	-	92					-		-		古墳 中期	
I151	5F-91		方形	4.0 × 3.9	-	N-22° -W	9	-	-									-		-		古墳 前期	
I152	6F-52		-	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳 中期	
I153A	6E-79		-	6.5 以上	-	-	-	-	-									-		-		平安	
I153B	6E-79		胴張隅丸長方形	（7.5 × 7.2）	-	-	-	中央西寄り	（2）	93	-	77	-					-		-		弥生 中期	
I154	5F-92		-	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I155	6E-68		-	-	-	-	-	北西壁	-									-		-		古墳 中期	
I156	6E-96		（方形）	（4.4 × 4.3）	-	（N-45° -E）	-	北東壁	-									-		-		平安	
I158	6F-20		（方形）	（4.1 × 3.6）	-	（N-2° -W）	35	北壁	-									-		北東隅	60 × 50 × 18	平安	
I160	6F-61		-	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I161	6E-48		-	5 以上	-	-	-	-	-									-		-		古墳 中期	
I162	6E-47		（方形）	（5.2 × -）	-	-	-	-	（2）	-	-	40	38					-		-		古墳 中期	
I163A	6E-39		-	-	-	-	-	北東壁	-									-		カマド右	70 × 67 × 48	古墳 中期	
I163B	6E-39	第38図	胴張隅丸長方形	5.6 × 4.7	21.85	N-9° -E	27	中央北寄り	4	-	-	54	50	19				南	28 × 27 × 22	南	62 × 40 × 22	弥生 後期	
I165	6E-68		-	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I166	6E-36		-	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳 中期	
I168	6E-47		-		-	-	-	-	-									-		-		弥生 後期	
I170	6E-18	第69図	（長方形）	（5.9） × 5.1	（28.32）	N-14° -E	43	-	4	67	75	81	71					南	64 × 64 × 68	-		古墳 前期	

遺構番号	位置	挿図番号	平面形	規模（m） 長軸×短軸	床面面積 （㎡）	主軸方向	壁高 （cm）	炉 カマド位置	主柱穴	柱穴の深さ（cm）								入口施設 （P５）	入口施設規模（cm）	貯蔵穴	貯蔵穴の規模（cm）	時期	備考
										P１	P２	P３	P４	P６	P７	P８	P９						
I172	6E-46		-	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I173	6F-41	第69図	隅丸方形	4.9 × 4.7	21.84	N-13° -W	23	中央北寄り	-									南	63 × 60 × 68	-		古墳 前期	
I174	6E-98		（長方形）	（5.3 × 4.6）	-	-	-	中央南西寄り	-									-		-		古墳 中期	
I176	6E-27		（隅丸方形）	5.5 × 5.3	（26.36）	N-45° -E	26	-	（2）	32	-	-	42					-		-		古墳 前期	
I177	6E-49		-	-	-	-	-	-	-									-		-		平安	
I178	6F-30		-	-	-	-	-	-	-											-		時期 不明	
I179	6F-50		（方形）	（5.0 × 4.7）	-	N-87° -E	45	東壁	-									-		-		平安	
I184	6E-66		-	3以上	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I185	6F-40	第38図	（胴張隅丸長方形）	4.9 ×（3.2）	-	N-26° -W	11	中央北西寄り	（4）	52	-	64	44					-		-		弥生 後期	
I186A	6F-70	第39図	隅丸長方形	8.3 × 7.1	52.11	N-9° -E	31	-	（3）	65	63	29	-	41	61	22		南	50 × 38 × 44	南東	48 × 48 × 25	弥生 中期	
I187	6E-67		-	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳 中期	
I188A	6E-97	第40図	楕円形	4.4 × 3.7	13.35	N-40° -W	34	中央北西寄り	-									南東	40 × 35 × 24	南	30 × 30 × 54	弥生 後期	
I188B	6E-87		-	-	-	-	-	-	-									-		-		弥生 後期	
I189	6E-27		-	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I190	6F-61		方形	（3.5 × 3.5）	-	N-77° -W	-	西壁	-									-		-		古墳 前期末	
I192	6E-77		（方形）	7以上	-	-	-	南西壁	-									-		-		平安	
I194	6F-80		-	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I195	7F-00		（方形）	4以上	-	-	-	-	-									-		-		古墳 前期	
I196	6E-37		-	-	-	-	-	-	-									-		-		平安	
I197	6E-88		方形	（5.3 × 5.3）	-	N-39° -W	-	中央北西寄り	（3）	-	18	12	24					南東	38 × 28 × 22	-		古墳 前期末	
I198A	6E-98	第40図	（隅丸長方形）	（3.8 × 2.9）	-	N-30° -W	2	-	（3）	17	-	27	-					-		-		弥生 後期	
I198B	6E-99	第40図	（隅丸長方形）	（5.0 × -）	-	-	2	中央北西寄り	-									南西	30 × 28 × 23	-		弥生 後期	
I199	6F-72		（胴張隅丸方形）	（6.7 × 6.0）	-	S-45° -W	-	中央南西寄り	（1）	-	-	-	33					-		-		古墳 後期	
I200	6E-77	第40図	隅丸方形	4.1 × 3.8	13.28	N-31° -W	12	中央北西寄り	4	56	70	75	59					-		-		弥生 後期	
I202	7E-74		-	- × 2.5	-	N-20° -E	7	-	-									-		-		古墳 前期末？	
I203	7E-64		-	-	-	N-26° -W	12	北西寄り	（2）	-	-	-	75					-		南東	85 × 62 × -	弥生 中期	
I204	7E-63		（方形）	3以上	-	-	-	北壁	-									-		-		平安	
I205	7E-62	第106図	方形	5.9 × 5.8	33.39	N-66° -W	28	北西壁中央	4	86	68	75	69	45	57	38		カマド対面	58 × 36 × 37	カマド右	55 × 45 × 44	古墳 後期	
I206	7E-64	第106図	方形	3.8 × 3.8	13.69	N-14° -W	23	北壁東寄り	4	26	19	17	-					-		-		古墳 後期	
I207	7E-55	第107図	方形	4.5 × 4.4	（22.17）	N-72° -W	26	北西壁中央	4	15	4	-	23					-		-		古墳 後期	
I208	7E-54		-	-	-	-	-	-	（3）	66	-	54	61					-		-		古墳 中期	

遺構番号	位置	挿図番号	平面形	規模（m） 長軸×短軸	床面面積（㎡）	主軸方向	壁高（cm）	炉 カマド位置	主柱穴	柱穴の深さ（cm） P1	P2	P3	P4	P6	P7	P8	P9	入口施設（P5）	入口施設規模（cm）	貯蔵穴	貯蔵穴の規模（cm）	時期	備考
I209	7E-41		（方形）	4.7 × 4以上	-	N-15° -W	11	北壁	-									-		-		時期 不明	
I211	7E-44		-	-	-	-	-	-	（1）	58	-	-	-					-		-		古墳 前期	
I212	7E-43		（方形）	（4.1 × -）	-	-	-	北壁	（1）	-	71	-	-					-		-		古墳 後期	
I213	7E-33	第107図	方形	6.2 × 6.0	（36.23）	N-49° -W	50	北西壁中央	4	-	-	-	-					-		南 隅	75 × 72 × -	古墳 後期	
I214	7E-32		方形	- × 3.2	-	N-40° -W	4	北西壁	4	42	43	29	35					-		-		古墳 中期	
I215	7E-22		方形	5.8 × 4.3	-	N-57° -W	10	中央北西寄り	（3）	-	43	65	56					-		東隅	56 × 54 × 90	古墳 中期	
I216	7E-12		（方形）	7以上	-	-	-	-	（2）	72	68							-		-		時期 不明	
I217	7E-13		（方形）	（2.8 × -）	-	N-73° -W	19	-	-									-		-		奈良	
I218	7E-13		方形	（3.5） × 3.3	11.48	N-55° -W	17	-	4	113	33	36	56					-		-		奈良	
I219	7E-34	第70図	方形	6.3 × 6.3	38.09	N-43° -W	10	中央北西寄り	4	-	-	-	-					-		-		古墳 前期	
I220	7E-24		（方形）	（5.2 × 4.6）	-	（N-63° -E）	-	北東壁	-									-		-		古墳 中期末	
I221	7E-15	第41図	隅丸方形	（9.0 × 7.5）	-	N-7° -W	11	中央北寄り	4	44	74	64	72					南	100 × 85 × 67	南	95 × 83 × 35	弥生 中期	
I222	7E-25		（方形）	2以上	-	-	-	-	-									-		-		古墳 前期	
I223	7E-04		-	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I225	7E-07		-	-	-	-	22	-	-									-		-		古墳 中期	
I226	7E-07		-	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳 前期	
I227	7E-27		-	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I228	7E-18	第108図	方形	6.2 × 6.0	40.53	N-41° -W	38	北西壁中央	4	63	63	78	67					カマド対面	100 × 90 × 31	南東	75 × 63 × 72	古墳 後期	
I230	7E-06	第89図	（長方形）	（5.5） × 4.6	（25.22）	N-14° -E	29	北壁東寄り	3	-	63	62	65					-		カマド右	52 × 45 × 78	古墳 中期	
I232	7E-36		（方形）	（3.2 × 3.0）	-	（N-61° -W）	-	北西壁	1	-								-		-		奈良	
I237	7F-30	第41図	小判形	7.3 × 6.2	38.49	N-3° -W	33	中央北寄り	4	71	77	50	52					-		南東	52 × 40 × 47	弥生 後期	
I238	7E-07		（方形）	-	-	-	22	-	-									-		-		古墳 前期	
I239	8E-27		（方形）	（3.0 × 2.5）	-	（N-16° -E）	18	北壁	-									-		-		平安	
I240	8E-26	第91図	方形	5.2 × 5.0	26.50	N-41° -E	2	北東壁東寄り	（2）	36	-	-	39					-		ｶﾏﾄﾞ右	75 × 75 × 57	古墳 中期	
I241	8E-27	第42図	小判形	6.4 × 5.2	28.38	N-10° -W	61	中央北寄り	4	35	19	64	38					-		南際	68 × 61 × 32	弥生 後期	
I242	8E-05		（胴張隅丸方形）	（7.8 × -）	-	（N-43° -W）	22	-	（1）	-	16							-		南東	80 × 75 × 88	弥生 中期	
I243	8E-25		（隅丸方形）	4.5以上	-	-	-	-	-									-		-		弥生 後期	
I244	7E-43		（方形）	4以上	-	-	-	-	（3）	-	50	61	63					-		-		時期 不明	
I245	7E-51		方形	（3.4） × 3.3	11.37	N-3° -E	21	北壁	-									-		-		奈良	
I246	6E-96		-	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳 前期	
I247	8F-10	第116図	（方形）	（4.1 × 3.8）	15.58	N-91° -W	40	西壁中央	-									-		-		平安	

遺構番号	位置	挿図番号	平面形	規模（m） 長軸×短軸	床面面積 （㎡）	主軸方向	壁高 （cm）	炉 カマド位置	主柱穴	柱穴の深さ（cm）								入口施設 （P５）	入口施設規模（cm）	貯蔵穴	貯蔵穴の規模（cm）	時期	備考
										P１	P２	P３	P４	P６	P７	P８	P９						
I248	8F-21		-	3.2 × 3.2	9.99	N-32° -E	17	北東壁中央	(3)	10	-	51	21					-		-		平安	
I249	8F-30	第42図	（隅丸方形）	(5.1 × 4.5)	-	N-38° -E	19	中央北東寄り	-									-		南	50 × 42 × 33	弥生 中期	
I250	8F-30		（方形）	3 以上	-	-	-	南東壁	-									-		-		平安	
I251	7E-49	第43図	小判形 （胴張隅丸長方形）	8.8 × (6.5)	(50.58)	N-39° -W	18	中央北西寄り	4	89	90	93	87					南東	75 × 60 × 50	南東	75 × 70 × 52	弥生 後期	
I253	8E-07	第91図	方形	4.6 × 4.4	19.18	N-40° -E	50	北東壁中央	4	80	63	68	79					南西	37 × 28 × 8	東隅	50 × 50 × 74	古墳 中期	
I254	7F-30		-	-	-	-	-	-	-									-		-		平安	
I255	7F-21		-	4 以上	-	-	-	-	-									-		-		古墳 中期	
I257	7F-41		（方形）	5.5 以上	-	-	-	北東壁	-									-		-		平安	
I259	7F-11		隅丸方形	4.6 × 4.0	16.27	N-13° -W	10	中央北寄り	-									-		-		弥生 後期	
I260A	7F-10	第44図	楕円形	(6.5 × 5.4)	(29.08)	N-30° -E	12	中央北東寄り	4	69	62	54	80					-		南	58 × 58 × 54	弥生 後期	
I260B	7F-10	第44図	胴張隅丸長方形	(5.7) × 4.9	23.54	N-3° -E	9	中央北寄り	(3)	59	-	62	-					-		南東	55 × 46 × 63	弥生 後期	
I262	7F-41		-	4.5 以上	-	-	-	-	-									-		-		古墳 後期	
I263	8F-17		胴張隅丸方形	(6.9 × 5.3)	-	N-39° -W	24	中央北西寄り	(2)	-	65	-	28					南東	32 × 30 × 40	南壁	40 × 30 × 34	弥生 後期	
I264	8F-06	第117図	方形	5.3 × 5.1	26.53	N-46° -W	10	北西壁中央	4	82	79	57	58	83	38	44	43	-		-		奈良	
I265	7F-57	第92図	正方形	6.3 × 6.2	37.18	N-40° -E	24	北東壁東寄り	4	32	22	34	30					-		南隅	88 × 75 × 70	古墳 中期	
I266	7F-48	第92図	方形	4.4 × 4.2	17.75	N-33° -E	10	北東壁東寄り	-									-		カマド右	62 × 55 × 59	古墳 中期	
I267	7F-95	第108図	方形	5.0 × 4.9	24.23	N-59° -E	14	北東壁東寄り	4	55	45	48	46					南東	40 × 28 × 33	カマド右	70 × 58 × 57	古墳 後期	
I268	7F-66	第93図	方形	5.2 × 5.0	-	N-45° -W	17	-	4	61	63	61	52					-		-		古墳 中期	
I269	7F-86	第93図	正方形	5.6 × 5.5	30.95	N-54° -E	27	北東壁東寄り	4	52	63	51	64					-		カマド右	95 × 80 × 66	古墳 中期	
I270	7F-85		方形	5.3 × -	-	N-13° -W	14	-	-									-		-		古墳 中期	
I271	7F-61	第117図	長方形	4.2 × 3.3	13.96	N-83° -W	43	西壁中央	-									-		-		平安	
I272	7F-60		（方形）	(4.5 × 4.4)	-	S-19° -E	-	南壁	-									-		-		平安	
I273	7F-71	第117図	方形	3.3 × 3.2	10.54	N-33° -E	42	北東壁中央	4	42	44	48	64					カマド対面	33 × 30 × 32	-		平安	
I274	7F-70	第94図	長方形	4.8 × 4.1	19.50	-	52	北西寄り	0	56	38							-		-		古墳 中期	
I275	7E-79	第45図	隅丸方形	(6.6) × 6.5	-	N-17° -E	23	中央北寄り	4	74	73	91	87					南	75 × 55 × 57	南	78 × 57 × 58	弥生 中期	
I276	7F-82	第45図	胴張隅丸方形	6.8 × 6.1	36.78	N-28° -E	32	中央北寄り	(3)	77	53	55	-					南	55 × 37 × 51	南	65 × 50 × 57	弥生 中期	
I277	7F-92	第118図	方形	3.8 × 3.7	14.29	N-37° -E	33	北東壁東寄り	4	58	53	54	56					-		-		平安	
I279	7F-09	第94図	方形	5.5 × 5.5	29.77	S-65° -W	29	南西壁南寄り	4	69	76	81	88					-		-		古墳 中期	
I281	8F-36		（隅丸方形）	(4 × 3.5 以上)	-	-	-	中央北西寄り	-									-		-		時期 不明	
I282	8F-29		-	-	-	-	-	-	(2)	30	31							-		-		時期 不明	
I283	7F-64	第118図	方形	2.6 × 2.4	6.81	N-87° -E	8	東壁中央	-									-		-		平安	

遺構番号	位置	挿図番号	平面形	規模（m）	床面面積	主軸方向	壁高	炉	主柱穴	柱穴の深さ（cm）								入口施設	入口施設規模（cm）	貯蔵穴	貯蔵穴の規模（cm）	時期	備考
				長軸×短軸	（㎡）		（cm）	カマド位置		P1	P2	P3	P4	P6	P7	P8	P9	（P5）					
I284	7F-77	第109図	方形	4.9 × 4.9	22.84	N-60° -E	12	北東壁東寄り	4	66	48	61	57					-		東隅	62 × 60 × 63	古墳 後期	
I285A	7F-77	第46図	隅丸方形	5.5 × 5.2	(25.48)	N-45° -W	39	中央北西寄り	(3)	46	-	46	65					-		南東	50 × 46 × 16	弥生 後期	
I285B	7F-88		胴張隅丸長方形	(6.9 × 6.0)	-	N-30° -W	2	-	4	27	64	62	33					-		南東	57 × 55 × 52	弥生 後期	
I286	7F-45	第46図	小判形	9.6 × 7.4	(59.22)	N-21° -E	19	中央北寄り	4	92	77	70	85					南	47 × 30 × 59	南	76 × 60 × 65	弥生 後期	
I287	7F-55	第48図	隅丸方形	4.6 × 4.3	17.40	N-45° -W	26	中央北西寄り	4	60	56	55	60					南東	35 × 33 × 27	-		弥生 後期	
I289	7F-42	第47図	楕円形	6.9 × 6.1	33.33	N-33° -E	44	中央北東寄り	4	91	90	86	90					-		-		弥生 後期	
I290	7F-51	第70図	隅丸方形	(4.7) × 4.3	(18.38)	N-37° -W	14	中央北西寄り	4	38	61	61	58					南東	25 × 25 × 25	-		古墳 前期	
I291	8F-51		(胴長隅丸方形)	(4.7 × 4.4)	-	(N-9° -W)	7	中央北寄り	(1)	-	40							-		-		弥生	
I292	7F-79		(方形)	(5.2 × 5.1)	-	N-44° -W	-	北西壁	4	46	72	63	44					-		-		古墳 中期末	
I293	8F-58	第48図	隅丸方形	(11.8 × 9.8)	-	N-8° -W	13	中央北寄り	4	69	94	108	120					南	60 × 32 × 42	南東	74 × 42 × 100	弥生 中期	
I296	7F-38	第118図	(方形)	(3.5 × 3.2)	9.78	N-12° -W	10	北壁	-									-		-		平安	
I297	8G-50		-	-	-	-	14	-	-									-		-		弥生	
I298	8F-79	第49図	隅丸方形	3.5 × 3.3	10.09	N-50° -W	13	-	-									-		-		弥生 後期	
I299	8F-77	第49図	(隅丸方形)	(3.6 × 3.5)	-	N-20° -W	19	中央北寄り	4	28	31	37	31					-		南東	36 × 33 × 19	弥生 後期	
I301	6F-61			-	-	-	-	-	-									-		-		平安	
I302	6E-76	第95図	方形	5.7 × (5.5)	(31.61)	N-20° -E	-	北壁中央	-									-		ｶﾏﾄﾞ右	75 × 75 × 60	古墳 中期	
I304	6E-58	第49図	隅丸方形	(6.1) × 5.1	(25.91)	N-66° -W	18	中央北西寄り	4	79	81	82	100					南東	45 × 40 × 52	東	61 × 46 × 79	弥生 中期	
I305	6F-60		-	-	-	-	-	-	-									-		-		平安	
I308	6F-62		-	-	-	-	-	北東壁	-									-		-		古墳 中期	
I309	6E-78	第50図	小判形	5.3 × 4.1	18.15	N-13° -W	21	中央北寄り	4	100	109	106	98					南	46 × 31 × 29	南東	35 × 33 × 28	弥生 後期	
I311A	6F-26	第109図	(方形)	(6.5 × 6.5)	-	N-3° -W	26	-	4	46	48	54	51					南	50 × 40 × 29	-		古墳 後期	
I311B	6F-25	第109図	(方形)	(5.3 × 4.8)	-	N-42° -W	26	北西壁西寄り	4	46	58	46	47					-		-		古墳 後期	
I311C	6F-26	第50図	隅丸方形	(9.4 × 8.0)	-	N-29° -W	-	中央北西寄り	4	87	92	110	90					南東	75 × 80 × 54	南東	115 × 90 × 99	弥生 中期	
I313	6F-90		-	5以上	-	-	-	-	-									-		-		平安	
I316	6E-99		-	-	-	-	21	-	-									-		-		古墳 中期	
I318	6F-81		方形	(5.4 × 4.8)	-	N-52° -E	-	中央北東寄り	(1)	-	-	-	57					-		-		古墳 前期	
I319	6F-37	第119図	長方形	3.1 × 2.5	7.90	N-65° -E	25	北東壁中央	1	10								-		-		平安	
I320	6F-53		-	-	-	-	-	炉あり	-									-		-		平安	
I324	6F-82		-	-	-	-	-	-	(2)	-	55	53	-					-		-		弥生	
I325	7E-09		-	4以上	-	-	9	-	(1)	58								-		-		縄文	
I326	6F-84	第51図	隅丸方形	7.2 × 6.1	40.16	N-12° -E	28	中央北寄り	4	103	75	85	17					南	51 × 45 × 46	南	65 × 55 × 113	弥生 中期	

遺構番号	位置	挿図番号	平面形	規模（m） 長軸×短軸	床面面積 （㎡）	主軸方向	壁高 （cm）	炉 カマド位置	主柱穴	柱穴の深さ（cm）								入口施設 （P５）	入口施設規模（cm）	貯蔵穴	貯蔵穴の規模（cm）	時期	備考
										P１	P２	P３	P４	P６	P７	P８	P９						
I328	6F-64	第52図	隅丸方形	5.7 × 5.0	25.04	N-4° -W	19	中央北寄り	4	83	82	61	72					南	53 × 40 × 31	南東	67 × 48 × 44	弥生 中期	
I329	6F-54		-	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳 中期	
I332	6F-92	第52図	楕円形（卵形）	4.2 × 3.5	12.18	N-64° -W	18	中央北西寄り	4	60	70	55	65	32				南東	18 × 15 × 25	-		弥生 後期	
I335	6F-47		方形	3.3 × 2.9	10.20	N-13° -W	16	北壁中央	1	18								-		-		平安	
I336	6F-88		方形	3.8 × 3.8	13.90	N-27° -W	9	-	-									-		-		古墳 中期	
I337	6F-54		（方形）	（4.0 × 3.8）	-	N-90° -E	-	東壁	（3）	-	-	44	30					-		-		平安	
I338	6F-59	第95図	方形	6.0 × 5.8	35.23	N-7° -W	27	北壁東寄り	4	59	68	61	53					南	65 × 60 × 48	南東隅	82 × 70 × 73	古墳 中期	
I339	6F-47	第110図	方形	5.9 × 5.9	34.52	N-20° -W	21	北壁中央	4	54	55	51	46					-		カマド右	60 × 55 × 56	古墳 後期	
I340	6F-67		隅丸方形	- × 3.0	-	N-22° -W	16	中央北西寄り	-									南	55 × 52 × 38	南東隅	62 × 48 × 40	古墳 前期	
I341	6F-63		-	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I342A	6F-85	第53図	小判形	8.5 ×（6.8）	（48.51）	N-5° -W	51	中央北寄り	4	58	75	69	78					南	70 × 44 × 29	南東	55 × 50 × 41	弥生 後期	
I342B	6F-95		-	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳 前期	
I345	6F-55	第110図	方形	5.5 × 5.3	29.41	N-26° -W	18	北西壁中央	4	57	48	48	63					カマド対面	33 × 38 × 24	カマド右	67 × 50 × 39	古墳 後期	
I346	6F-75	第96図	（長方形）	（7.1 × 5.8）	39.88	（N-50° -W）	37	-	4	81	83	81	83					-		-		古墳 中期	I422
I347	7F-05		-	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳 前期	
I350	6F-48		-	-	-	-	21	-	（1）	40								-		-		古墳 前期	
I351	8E-48		-	-	-	N-47° -E	25	北西寄り	（2）	74	-	-	61					-		-		弥生 中期	
I353	8F-22	第119図	方形	2.5 × 2.4	5.78	S-78° -W	15	西壁中央	-									-		-		奈良	
I354	8F-13	第96図	長方形	4.4 × 4.2	17.46	N-29° -E	35	北東壁東寄り	4	71	69	67	63					南東	30 × 30 × 31	カマド右	70 × 71 × 41	古墳 中期	
I355	8F-24	第119図	（方形）	3.7 × 3.4	（12.15）	N-45° -E	20	北東壁	4	66	70	49	47					-		-		奈良	
I356	8F-23		-	3以上	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I357	8F-14	第53図	小判形	5.9 × 4.7	23.16	N-2° -E	28	中央北寄り	4	73	75	79	51					南	50 × 28 × 18	南東	40 × 25 × 47	弥生 後期	
I358	8F-12	第71図	（隅丸方形）	5.0 × 4.9	23.98	N-8° -E	32	中央北寄り	（2）	52	73							南	52 × 42 × 22	南東	55 × 56 × 45	古墳 前期	
I360A	7F-73	第119図	（方形）	（4.2） × 3.9	-	N-58° -E	19	北東壁中央	4	53	65	38	41	43				-		西	75 × 70 × 43	奈良	
I360B	7F-73		方形	4.1 × 4.0	15.89	N-68° -E	18	北東壁寄り	（3）	46	46	-	45					-		東隅	60 × 56 × 80	古墳 中期	
I362	8E-37		-	-	-	-	29	-	-									-		-		弥生 後期	
I364	8F-00	第97図	正方形	5.7 × 5.5	31.58	N-33° -W	28	北西壁	4	51	77	90	41	55	61			-		-		古墳 中期	
I365	8F-01	第54図	小判形	8.2 × 6.9	45.96	N-38° -W	72	中央北西寄り	4	68	71	53	72					南	55 × 53 × 28	南東	100 × 68 × 45	弥生 後期	
I366	8F-15	第120図	方形	3.8 × 3.5	（12.33）	N-80° -E	15	東壁中央	-									-		南東	80 × 67 × 27	平安	
I367	8F-05	第54図	円形	3.6 × 3.5	10.46	N-2° -E	10	中央北寄り	-									南	37 × 33 × 3	-		弥生 後期	
I372	8E-11		方形	4.2 × -	-	N-38° -E	28	北東壁中央	（2）	25	-	-	55					-		-		奈良	

遺構番号	位置	挿図番号	平面形	規模（m）	床面面積（㎡）	主軸方向	壁高（cm）	炉 カマド位置	主柱穴	柱穴の深さ（cm）								入口施設（P５）	入口施設規模（cm）	貯蔵穴	貯蔵穴の規模（cm）	時期	備考
				長軸×短軸						P１	P２	P３	P４	P６	P７	P８	P９						
I374	8F-47		-	（7.4 × 7.1）	-	N-2° -W	-	中央北寄り	4	78	90	104	103	26				南	60 × 55 × 46	-		弥生 ？	
I375	7F-52		方形	（4.1 × 3.9）	-	N-23° -W	12	-	4	58	57	74	57					南	40 × 30 × 37	南東隅	110 × 60 × 70	古墳 前期	
I376	8F-07		-	（5 × 4以上）	-	-	13	-	-									-		-		時期 不明	
I377	7F-94		-	4以上	-	-	9	炉あり	-									-		-		時期 不明	
I378	7F-33	第119図	（長方形）	（5.5 × 4.9）	-	S-60° -E	-	南東壁	-									-		-		平安	
I379	8F-67	第55図	胴張隅丸長方形	4.3 × 3.6	13.80	N-19° -W	15	中央北寄り	4	15	27	74	48					南	35 × 35 × 39	南東	33 × 32 × 20	弥生 後期	
I380	8F-58		-	3以上	-	-	-	北東寄り	-									-		-		時期 不明	
I382	7F-21		-	-	-	-	-	-	-									-		-		平安	
I383	8F-38	第55図	隅丸長方形	8.7 × 7.6	59.40	N-45° -W	54	中央北西寄り	4	66	77	90	79					-		南東	70 × 45 × 16	弥生 後期	
I384	7F-97		方形	4.2 × 4.2	17.29	（N-34° -W）	19	南西壁	-									-		-		古墳 中期	
I386	7F-85	第56図	隅丸方形	4.9 × 4.8	21.35	N-45° -W	26	中央北西寄り	4	61	71	56	66					-		南東	45 × 40 × 16	弥生 中期	
I387	7F-86		-	-	-	-	-	炉あり	-									-		-		弥生 後期	
I389	7F-47	第97図	長方形	3.7 × 3.4	12.09	N-45° -W	30	-	4	21	-	32	37					南東	26 × 23 × 14	東隅	50 × 50 × 48	古墳 中期	
I390	7F-55		（方形）	7以上	-	-	37	-	-									-		-		古墳 前期	
I391	7F-44	第72図	方形	5.4 × 5.3	28.62	N-63° -W	23	中央西寄り	4	62	56	68	69					南東	30 × 23 × 32	南隅	70 × 56 × 61	古墳 前期	
I393	7F-45		-	-	-	-	-	西壁	-									-		-		平安	
I394	7F-20		-	4以上	-	-	15	炉あり	-									-		-		時期 不明	
I395	7F-37	第120図	方形	3.6 × 3.4	（11.63）	N-4° -E	21	北壁東寄り	-									-		-		平安	
I396	7F-37		隅丸方形	（4.4） × 3.5	（14.11）	N-42° -W	23	北西壁	-									-		-		古墳 中期	
I397	7F-34	第71図	（隅丸方形）	（7.2 × 6.8）	-	N-40° -W	22	中央北寄り	4	39	72	50	80					南東	65 × 50 × 31	南東隅	65 × 60 × 45	古墳 前期	
I398A	7F-23	第97図	正方形	4.5 × 4.4	（19.74）	S-31° -W	3	南西壁南寄り	（2）	26	-	-	39					カマド対面	66 × 42 × 28	-		古墳 中期	
I398B	7F-23	第56図	隅丸方形	6.0 × （5.5）	30.86	N-23° -E	20	中央北寄り	4	73	49	51	42					-		南	45 × 45 × 38	弥生 中期	
I401	6F-68		（方形）	（5.0 × 5.0）	-	N-0° -W	-	中央北寄り	（4）	72	48	95	49	80				-		-		古墳 中期	
I402	7F-14	第57図	胴張隅丸長方形	5.4 × 4.7	21.93	N-33° -E	17	中央北東寄り	4	42	59	65	70					南西	47 × 43 × 19	南	60 × 60 × 48	弥生 中期	
I403A	7F-26	第98図	（正方形）	（5.5 × 5.5）	（31.17）	N-47° -E	3	北東壁東寄り	（3）	54	56	-						-		カマド右	73 × 70 × 68	古墳 中期	
I403BC	7F-26	第57図	胴張隅丸長方形	6.8 × 6.3	35.99	N-57° -W	25	炉１北寄り 炉２西寄り	4	58	55	56	59					南東	60 × 60 × 28	東	64 × 53 × 37	弥生 中期	
I404	6F-76	第58図	楕円形 （胴張隅丸方形）	3.3 × 3.0	8.53	N-29° -W	28	中央北西寄り	-									-		-		弥生 後期	
I405	6G-60		胴張隅丸方形	（5.8 × 4.9）	-	N-20° -W	17	中央北寄り	4	68	68	99	86					-		-		弥生 後期	
I406	6G-70		方形	4.0 × （4.0）	-	N-13° -W	13	北壁	4	45	60	46	43					-		カマド右	45 × 40 × 68	古墳 後期	
I407	7F-15	第58図	楕円形	3.8 × 3.5	10.21	N-26° -W	28	中央北西寄り	4	17	26	63	33					南	31 × 18 × 16	南	50 × 50 × 54	弥生 後期	

遺構番号	位置	挿図番号	平面形	規模（m） 長軸×短軸	床面面積 （㎡）	主軸方向	壁高 （cm）	炉 カマド位置	主柱穴	柱穴の深さ（cm）								入口施設 （P５）	入口施設規模（cm）	貯蔵穴	貯蔵穴の規模（cm）	時期	備考
										P１	P２	P３	P４	P６	P７	P８	P９						
I408	6F-64		胴張隅丸方形	6.9 × （6.0）	-	N-38° -E	3	-	4	65	56	21	42					南西	70 × 65 × 33	南西	67 × 55 × 27	弥生 中期	
I409	6G-60		-	3.5 以上	-	-	-	東壁	-									-		-		平安	
I410	6F-65		-	-	-	-	9	-	（2）	24	26							-		-		古墳 中期	
I411	6F-56		-	（5.0 × -）	-	N-45° -W	-	-	（2）	-	-	54	35					-		南隅	60 × 50 × 59	古墳 中期	
I412	6F-54		-	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳 中期	
I413	7F-05		-	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I414	6F-56	第58図	楕円形	4.0 × 3.7	12.00	N-18° -W	21	中央北寄り	4	75	58	66	54					-		-		弥生 後期	
I416	6F-74		楕円形	4.1 × 3.9	（12.29）	-	-	中央西寄り	-	17	19	46	50	86	71	51		-		-		縄文 前期	
I419	7F-13		-	-	-	-	-	南東壁	-									-		-		平安	
I420	6F-57		-	-	-	-	20	-	-									-		-		時期 不明	
I421	7F-16		（方形）	4.3 以上	-	-	-	-	（2）	18	26							-		-		古墳 中期	
I425	6G-80	第59図	胴張隅丸方形	4.3 × 3.8	14.02	N-54° -W	26	中央北西寄り	4	45	57	62	59					南東	30 × 21 × 28	-		弥生 後期	
I427	7F-12		-	-	-	（N-51° -E）	-	北東寄り	（2）	49	-	-	59					-		-		時期 不明	
I429	7F-99		-	（4.2 × 3.8）	-	N-39° -W	5	北西寄り	4	65	77	77	96					-		-		古墳 前期か	
I431	7F-08		-	4 以上	-	-	-	北西壁	-									-		-		平安	
I432	7F-18	第73図	方形	9.3 × 9.1	83.09	N-23° -W	53	中央北寄り	4	133	113	119	114					南東	65 × 50 × 63	-		古墳 前期	
I433	6F-97		方形	4.6 × -	-	N-43° -W	18	-	（3）	51	51	46						-		-		古墳 前期	
I434	6F-97	第59図	胴張隅丸方形	（6.7） × 5.7	（33.98）	N-10° -E	36	中央北寄り	4	96	75	80	73	114	89	101	93	-		-		弥生 後期	
I435	7F-38	第120図	方形	2.8 × 2.8	（7.39）	N-68° -E	20	北壁中央	1	19								カマド対面	45 × 42 × 21	南隅	55 × 37 × 22	平安	
I436	7F-19		-		-		-		-									-		-		弥生 後期	
I441	7F-34		-	-	-	-	-	炉あり	-									-		-		時期 不明	
I442	7F-42		隅丸方形	（8.5 × 8.0）	-	N-27° -E	2	中央北東寄り	4	59	58	48	38					-		-		古墳 前期末	
I443A	7G-40		方形	（3.2 × 3.1）	-	-	-	-	-									-				奈良	
I443B	7G-50		（方形）	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳 中期	
I444A	6F-89		方形	（6.1 × 6.0）	-	N-58° -W	-	-	4	54	56	48	54	64	65	62		-		-		古墳 中期	
I444B	6F-99		-	-	-	-	7	炉あり	（2）	-	-	76	65					-		-		弥生	
I448	6F-92		-	-	-	-	-	-	（1）	34								-		-		古墳 前期	
I449	8F-99		方形	（5.6 × 5.2）	-	（N-60° -W）	16	北西寄り	（2）	40	-	-	48					-		-		古墳 前期	

第２表　　形状不明・ピット群遺構一覧

遺構番号	位置	挿図番号	平面形	規模（m） 長軸×短軸	床面面積 （㎡）	主軸方向	壁高 （cm）	炉 カマド位置	主柱穴	柱穴の深さ（cm） Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ６	Ｐ７	Ｐ８	Ｐ９	入口施設 （Ｐ５）	入口施設規模（cm）	貯蔵穴	貯蔵穴の規模（cm）	時期	備考
I096	6E-27		-	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I098	6F-12		-	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I127	-		-	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳中期末 ～後期初	
I178	6F-30		-	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳前 ～中期	
I181	6F-30		ピット群	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳 前期	
I183	6F-40		-	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I201	6E-19		-	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I210	7E-27		-	-	-	-	-	-	-									-		-		奈良	
I224	7E-70 ～		-	-	-	-	-	-	-									-		-		近世 墓域	
I231	-		-	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳 中期	
I233	-		-	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳 中期末	
I258	7F-30		-	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I306	-		-	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I314	-		-	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳 中期前半	
I315	-		-	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳 前期	
I317	6F-82		ピット群	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳 前期	
I388	-		-	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳 中期	
I426	6F-45		ピット群	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I430	-		-	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I454	-		-	-	-	-	-	-	-									-		-		弥生～ 古墳前期	
I457	7F-89		ピット群	-	-	-	-	-	-									-		-		古墳 中期	
I458	6F-86		ピット群	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I459	5F-95		-	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
I460	6F-06		-	-	-	-	-	-	-									-		-		時期 不明	
欠番　013 ～ 019,028B,029,031,043,046,047,058,103,129,167,169,171,234,252,278,280,295,368 ～ 370,423,438 ～ 440,450,453																							

第３表　方形周溝墓一覧表

遺構番号	挿図番号	平面形	位置	時期	規模（m：括弧内周溝含む）	周溝（長さ×幅×深さ：cm）				備考
					長軸×短軸	北溝	西溝	南溝	東溝	
I322	第62図	横長長方形	6F-73～7F-04	弥生後期	10(11)　×　8.1(9.9)	7.4×0.8×0.8	4.5×0.7×0.7	5.8×1.0×0.8	-	周溝内覆土上位から土師器多量出土（451・452・348・418含む）
I323	第62図	（正方形）	6F-80～7F-01	弥生後期	6.2(7.8)　×　-(-)	6.0×0.9×0.35	7.7×0.7×1.1	-	-	

第４表　掘立柱建物計測表

遺構番号	位置	挿図番号	時期	方位	規模（m）		備考
					柱間（桁行×梁間）	桁行×梁間	
I039	5F・6F	第122図	奈良	N-40°-W	3 × 1	10.2 × 6.4	調査時（039・066・080・100・159・310・（191））
I048	5F・5G		中・近世	N-25°-E	4 × 2	14.3 × 7.3	
I288	7F	第122図	（平安）	N-38°-E	2 × 2	4.3 × 3.3	

第５表　土坑・土坑墓等計測表

遺構番号	位置	挿図番号	遺構種類	時期	平面形	規模（ｃｍ） 長軸×短軸	深さ （ｃｍ）	備考
I020B	5F-42	第98図	土坑	古墳中期	隅丸方形	88×88	71	
I023	5F-63		土坑	時期不明	不整円形	75×75	78	（古中）21,（古後）22<土坑
I036	5F-93	第98図	土坑	古墳中期	楕円形	104×96	31	
I045	5F-08	第126図	土坑	時期不明	隅丸長方形	202×100	40	近世以降
I061	5F-33	第61図	土坑	弥生中期	楕円形	（147×120）	70	甕
I063	6F-26	第98図	土坑	古墳中期	長方形	143×102	19	
I064	6E-19	第121図	土坑	平安	楕円形	113×-	45	坏
I074	5F-91	第98図	土坑	古墳中期	隅丸長方形	150×84	36	
I104	6E-58	第98図	土坑	古墳中期	円形	92×93	73	
I108	6E-47	第98図	土坑	古墳中期	不整円形	123×114	51	
I137	6E-57	第61図	土坑	弥生	楕円形	120×89	39	高坏ミニチュア
I157	6E-19	第６図	陥穴	縄文早期	長方形	100×82	82	
I164	6E-58	第74図	土坑	古墳前期	楕円形	118×88	62	
I186B-1	6E-79	第75・76図	土坑墓	古墳前期	-	-	-	186A住居覆土内
I186B-2	6F-70	第75・76図	土坑墓	古墳前期	-	-	-	186A住居覆土内
I214P1	7E-21	第98図	土坑	古墳中期	楕円形	90×65	26	214住居内
I229	7E-18	第121図	土坑	平安	楕円形	130×130	25	高台付坏
I256	7F-50	第74図	土坑	古墳前期	不整円形	146×134	86	（古後）134>土坑
I260C	7F-10		（土坑墓）	（弥生後期～ 古墳前期）	-	-	-	人骨（歯のみ）
I300	7F-65	第121図	土坑	平安	長方形	100×48	25	
I303	6E-99	第60図	土坑墓	弥生後期	長方形	270×143	39	人骨
I312	6F-60	第61図	土坑墓	弥生後期	隅丸長方形	178×88	26	
I321	6F-80	第60図	土坑墓	弥生	長方形	242×140	21	人骨・石製勾玉
I327	6F-90	第60図	土坑墓	弥生後期	隅丸長方形	290×140 212×54	49	人骨
I330	6F-83	第60図	土坑墓	弥生後期	長方形	242×150 190×80	31	人骨・壺２・ガラス玉
I333	6F-36	第61図	土坑墓	弥生後期	長方形	（100） ×82	20	319・335>333
I334-1	6F-64	第124図	土坑	奈良	隅丸長方形	118×46	68	
I334-2	6F-74	第124図	土坑	奈良	楕円形	132×94	74	350溝内貝堆積
I334-3	6F-84	第124図	土坑	奈良	楕円形	146×108	68	
I343	6F-65	第61図	土坑墓	弥生後期	隅丸長方形	164×90	44	土玉
I344	6F-45	第61図	土坑墓	弥生後期	楕円形	193×118	28	
I352	8F-23	第121図	土師窯	平安	楕円形	184×160	18	坏
I363	8E-39	第111図	土坑	古墳後期	円形	128×130	48	
I385	7F-10	第60図	土坑墓	弥生後期	隅丸長方形	284×140	38	人骨・ガラス玉・管玉・鉄釧 385>260A>260B
I392	7F-56	第74図	土坑	古墳前期	楕円形	124×104	19	
I400	7F-10	第98図	土坑	古墳中期	円形	122×118	18	
I417	7F-03	第61図	土坑墓	弥生後期	隅丸長方形	290×122	31	
I424	6F-46	第61図	土坑墓	弥生後期	隅丸長方形	220×120	23	石製勾玉・ガラス玉
I433	6F-97	第121図	土坑	平安	方形	110×110	25	433住居内　皿
I437	6F-77	第60図	土坑墓	弥生	長方形	300×130	35	ガラス玉
I445	7F-21		土坑	時期不明	円形	200×100	24	
I446	7F-40		土坑	時期不明	円形	85×80	77	
I447	7F-24	第126図	土坑	時期不明	隅丸長方形	123×80	116	
I455	7F-14	第61図	土坑墓	弥生後期	隅丸長方形	183×92	116	
I456	7F-53	第126図	土坑	時期不明	楕円形	260×200	235	水溜？
I461	7F-24	第６図	陥穴	縄文早期	長方形	155×32	52	

第６表　溝計測表

遺構番号	位置	挿図番号	時期	長さ	幅	深さ	断面形態	備考
				（m）	（cm）	（cm）		
I002	4F-86～5G-00		近世以降？	22以上	80～100	14	椀形	
I005	5F-60～6F-28		近世	43以上	100～120	18～32	椀形	I261と直交、同一か
I033	5F-50～5F-71	第123図	奈良時代	12以上	100～160	50	逆台形	I261と直交、同一か　I349と同一
I050	4F-93～5F-04		近世以降？	８以上	75	25	椀形	
I125	7E-63～8E-19		近世	50以上	60～90	26	椀形	I359と同一　I261と直交、同一か
I140	8F-62		近世以降？	３以上	55	18	椀形	I122（F246）と直交
I261	7G-40～8F-16		近世	37以上	88～110	22	椀形	I005と直交、同一か
I294	7F-79～7G-60		近世以降？	７以上	100	15	箱形	
I349	6F-43～8F-59	第124図	奈良時代	95以上	50～160	22～60	逆台形・椀形	I033と同一
I359	8F-11～8F-22		近世	８以上	70	20	浅椀形	I125と同一
I361	8F-42～8F-50		近世以降？	10以上	50～80	12	箱形	
I373	8F-21～8F-43		近世	12以上	75	不明	不明	F242と同一
I399	8F-69～8F-96		近世	17以上	80～120	15	箱形	
I428	8F-79～8F-88		近世	10以上	85～105	32	椀形	M567と同一

第３章　分析成果

第１節　はじめに

報告に当たり、４件について分析を委託し、また、２件について分析・原稿を依頼した。以下、その趣旨を委託者・依頼者の立場から説明することで、その位置付けや意義を理解するための導入としたい。

竪穴住居（Ｉ146）から出土した鳥形土製品の内部から検出された赤色顔料（巻頭図版３）について分析を委託した。特殊な土器といってよい鳥形土製品に充填されていた顔料が何に由来するかは、その性格を考えるうえで重要であるという観点から行ったものである。

貝・獣骨・魚類については、既に草刈遺跡各地区で分析が行われている。今回はその比較という意味に加え、とりわけ弥生時代以降の漁撈・狩猟の実態を把握するという目的も加味して継続・実施したものである。分析者は過去数回にわたって各地区を担当しており、それによって時代毎の相違や共通性が明らかになるはずである。このうち、魚類については、Ｉ区のみではその時代性を概観するのに困難なことから、隣接する地区のデータも含めて考察した。これによって、当遺跡における漁撈の実態がある程度垣間見えるかと思われる。

弥生時代後期後半の土坑墓のうち、６基から人骨が出土した。何れも各部位はスポンジ化し、かろうじてその形状を留めるのみであったが、歯の一部は原形を保っていた。周知のように古代東国では弥生時代人骨の遺存例は極めてまれであり、その形質等を理解するうえで大きな障害となっている。この限られた機会を生かすべく遺存状態の良い３基の資料について、形質人類学的分析はもちろん、DNA分析と食性分析も併せて委託した。もちろん、弥生人骨の形質等はそれのみでは単なる分析成果を提供するにすぎず、それを前後する比較資料があってはじめて地域的な変化を追うことが可能となろう。その意味で、草刈B区（中期貝塚）の縄文中期人骨と前期古墳出土人骨についても併せて分析を依頼･実施した。結果として、DNA及び食性については、意図したような結果が得られなかったが、問題点を含め今後の分析に生かすことが出来るであろう。なお、比較資料については一応の成果があり、それは６･７節で報告されている。

弥生時代以降の食生活の中心は米であるとされる。草刈遺跡では、D区・E区で炭化種子の報告がなされているが、調査時の可視的な採集結果であり、成果も自ずから限定されたものであった（モモ種子）。しかし、とりわけ草刈西部地区ではＩ区を含めた広範囲に及ぶ多くの土壌サンプル資料から穀類をはじめとした多様な炭化種子が検出されており、それらは現在分析委託中である。今回の食性分析の結果とも併せ、それらの情報を読み解くことで、当時の採集経済や農耕の実態の一端が明らかになると考える。

以下各分析の内容と目次を示すが、炭化種子についてはF区の報告時に一括して行う予定である。

＜分析項目＞

第２節　Ｉ146号住居跡出土鳥形土製品内赤色顔料X線回析

第３節　草刈遺跡Ｉ区出土の動植物遺体及び人骨

第４節　草刈遺跡（F区・Ｉ区・M区）出土の魚類遺体

第５節　草刈遺跡Ｉ区土坑墓出土人骨

第６節　草刈遺跡出土人骨のDNA分析（予報）

第７節　草刈遺跡から出土した縄文時代・古墳時代人骨の同位体分析

第２節　Ｉ146号住居跡出土鳥形土製品内赤色顔料Ｘ線回析

パリノ・サーヴェイ株式会社

１　はじめに

草刈遺跡は、村田川右岸の台地（ちはら台）上に立地し、弥生時代の竪穴住居跡や方形周溝墓等の遺構が検出されている。

本報告では、Ｉ区の竪穴住居跡から出土した赤色顔料の種類・由来を明らかにするためのＸ線回折分析を実施する。

２　試料

試料は、草刈Ｉ区146号跡から出土した鳥形土製品内に認められた赤色顔料１点である。

３　分析方法

赤色顔料を105℃で乾燥し、メノウ乳鉢で微粉砕した後、無反射試料板に充填し、測定試料とする。作成したＸ線回折測定試料について以下の条件で測定を実施する。

また、検出された物質の同定解析は、Materials Data,Inc. のＸ線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

装置：理学電気製MultiFlex	Divergency Slit：１°
Target：Ｃｕ（Ｋα）	Scattering Slit：１°
Monochrometer：Graphite湾曲	Recieving Slit：0.3mm
Voltage：40KV	Scanning Speed：２°/min
Current：40Ma	Scanning Mode：連続法
Detector：ＳＣ	Sampling Range：0.02°
Calculation Mode：cps	Scanning Range：２～45°

４　結果

Ｘ線回折図を第256図に示す。赤色顔料から検出された鉱物は赤鉄鉱（hematite）、石英（quartz）、灰長石（anorthite）の３種類であった。

５　考察

赤色を呈する代表的な顔料鉱物にはベンガラ（赤鉄鉱；hematite[α-Fe_2O_3]）、水銀朱（辰砂；cinnabar[HgS]）、鉛丹（鉛丹；minium[Pb_3O_4]）などがある。146号住居跡から出土した赤色顔料は、赤鉄鉱（hematite）が認められるが、他に赤色を呈する鉱物が認められないことから、ベンガラであることは明らかである。Ｘ線回折分析結果では、赤鉄鉱の他に石英や灰長石が認められるが、試料を実体顕微鏡で観察した限りでは混和物がほとんど認められず、比較的純度が高いと考えられる。鳥形土製品内から出土した状況を考慮すれば、精製後のベンガラを土器内に入れていたことが推定される。

ベンガラには天然の赤鉄鉱を利用する場合と、含水水酸化鉄を焼成して得られる赤鉄鉱を利用する場合とがある。今回の赤色顔料を電子顕微鏡で観察すると、直径１μm以下で長さが10～20μm程度のパイプ

状の物質で構成されていることが確認された。こうしたパイプ状構造を有するベンガラは、沼沢地などにおいて鉄バクテリアが生成する含水水酸化鉄（いわゆる高師小僧）が出発物質であることが判明している（岡田,1997;織幡・沢田,1997）。このことから、ベンガラの材料は遺跡周辺の低地において入手可能であったと考えられる。

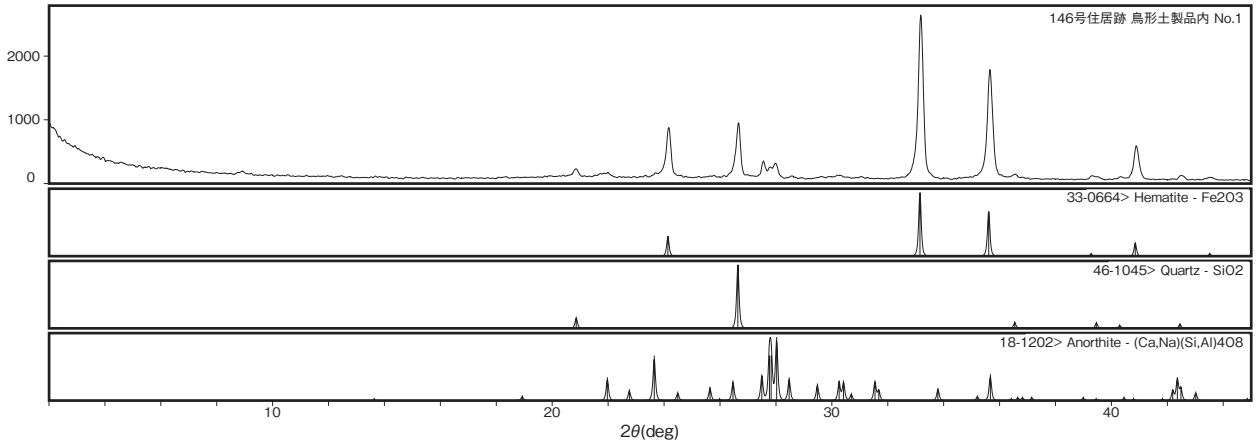
なお、本遺跡では、F区307号住居跡から出土した赤色顔料もパイプ状構造を有するベンガラであることが確認されている。こうした状況は、成瀬（1998）の一遺跡において同一時期に使用されるベンガラはパイプ状もしくは非パイプ状のどちらかが支配的な傾向にあるとの指摘とも調和的である。

引用文献

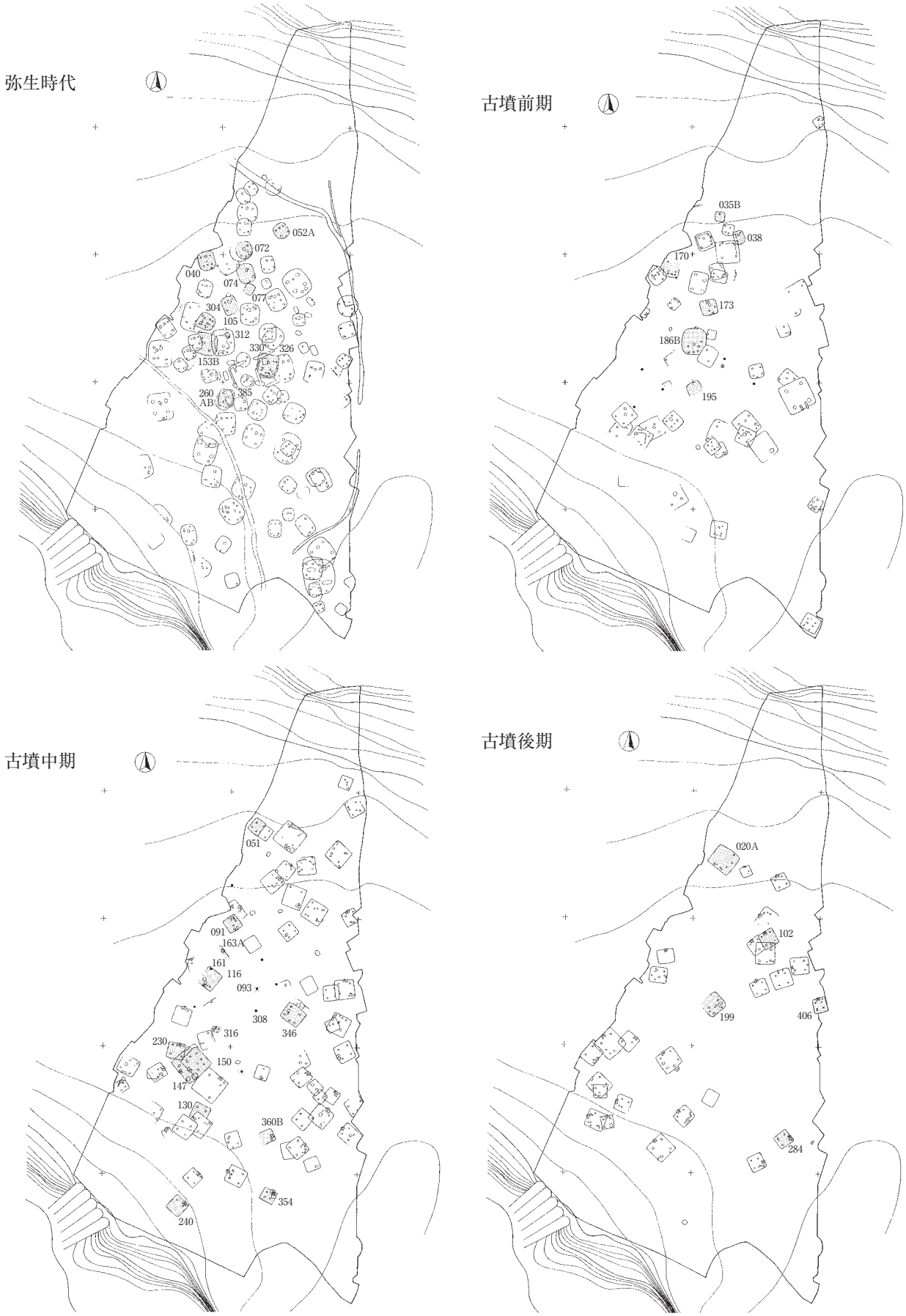
成瀬　正和,1998,縄文時代の赤色顔料Ⅰ.考古学ジャーナル,438,10-14.

岡田　文男,1997,パイプ状ベンガラ粒子の復元.日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集,38-39.

織幡　順子・沢田　正昭,1997,酸化鉄系赤色顔料の基礎的研究.日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集,76-77.



第256図　Ⅰ146号住居跡出土鳥形土製品内赤色顔料Ｘ線回析図



第257図　動植物遺体出土遺構分布

第３節　草刈遺跡Ⅰ区出土の動植物遺体及び人骨

１　はじめに

１－１　資料

本区では、弥生中期の竪穴から近世の墓域に至る52遺構及び15グリッド分の覆土中で、貝類・魚類・鳥類・哺乳類等の動物遺体の他、炭化材・炭化種子等の植物遺体の出土が確認されている（第257図）。本節では、人工遺物と同様に出土位置及び層位が記録され採り上げられた「任意（現地）採集資料」（43遺構・８グリッド分）と、貝層の採取後、整理作業時に水洗分離された「貝層サンプル資料」（６遺構・９か所・９サンプル分）を扱い、貝類と哺乳類遺体を中心に報告する。微小貝類と植物遺体については現在分析が進められている。貝層の内容やサンプルの採取法及び位置については、次項で詳述する。

人骨は16遺構及び14グリッドで確認されている。この内、弥生後期の土坑墓や古墳前期の土坑墓出土の資料については、第５節での報告を参照されたい。その他の、出土遺構と人骨との帰属が明確で無い時期不明の資料については、本節第４項にて遺存状況や重量を報告する。

１－２　方法

各資料の概要を第７表にまとめた。任意採集資料については、乾燥後に刷毛や筆を用いて汚れを落とし、種同定を行っている。貝層サンプル資料については、整理作業時に9.52㎜・４㎜・２㎜・１㎜メッシュの試験フルイを用いて水洗分離を行い、乾燥後に選別及び種同定を行っている。

本区で採られた貝層サンプルの採取方法は、以下の２つに分類される。貝層の検出状況やサンプルの採取位置については第２章第３～７節に、非掲載分については第258図に、各採取位置の微細図を示した。

柱状サンプル　20㎝×20㎝の規模で、１カット当り厚さ５㎝単位で上から番号を振り、貝層や間層を連続採取している（柱状－カット別）。

全量サンプル　竪穴や土坑等でみられるごく小規模な貝層では、全量を一括採取したものが多い。

２　貝類（貝サンプル）

２－１　資料と方法

弥生中期から奈良時代に至る８遺構分の竪穴や土坑では、遺構内貝層が18か所で確認されており、14本のサンプルが採取されている。本項では、６遺構中９か所の貝層から採取した９本分の貝層サンプル資料の、9.52㎜・４㎜メッシュ検出分を報告の対象とした。集計後にはイボキサゴの殻径、ウミニナの殻高、ハマグリ・シオフキガイ・アサリの殻長に対し計測を実施した。

その他、10遺構分の任意採集資料があり、各地点で１点ないし数点の貝類が得られているが、集計や計測は実施せずに加工痕についての観察のみ行った。種同定には当財団所蔵の現生標本および遺跡出土の比較標本を用いた。

２－２　同定結果

第８表に示される様に、14科14種が種同定に至った。各サンプルの内容を付表13に、集計結果を付表14・第259図に、４サンプル分（Ⅰ354、Ⅰ334-１、Ⅰ334-２、Ⅰ334-３）については、カット毎の内容を付表15・第260図に示した。

弥生中期と古墳中期の遺構出土分は、個体数比で、ハマグリ・シオフキガイを中心に二枚貝が８割を占

第７表　動植物遺体出土遺構一覧

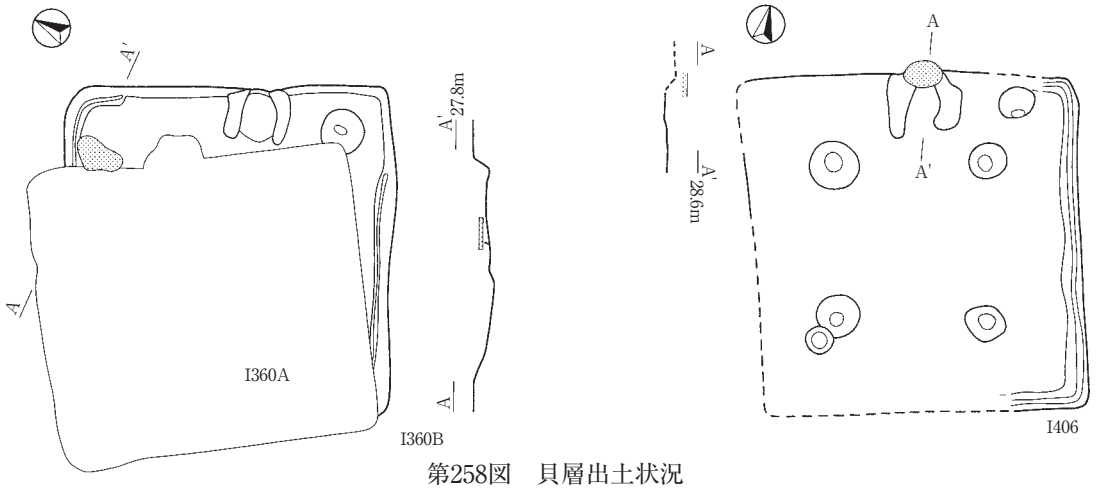
サンプル/遺構No.	遺構種	遺構の時期	採取法 発掘	採取法 集計	貝ブロック/骨 数	貝ブロック/骨 垂直	貝ブロック/骨 平面	貝ブロック/骨 規模	貝ブロック/骨 厚	貝サンプル 数	貝サンプル 体積	貝サンプル カット/層	遺物No. サンプル篩い出し分 貝	微小貝	魚骨	鳥骨	獣骨	カシパンウニ	炭化植物	遺物No. 任意採集 貝	魚骨	鳥骨	骨	人骨	炭化植物	備　考
			R：任意採集 W：全量 CC：コラム-カット別																						
I 020A	竪穴	古墳　後期	R	R	1															●					土器の中の貝？
I 025	竪穴	奈良	R	R																				●	
I 026	竪穴	不明	W	W	1	?		?	?		W?	1								●					土器の中の貝？
I 035B	竪穴	古墳　前期	R	R		覆土中～上層																	●		
I 038	竪穴	古墳　前期	R	R																			●		
I 040	竪穴	弥生　後期	R	R																			●		
I 051	竪穴	古墳　中期	R	R	1															●					土器の中の貝？
I 052A	竪穴	弥生　中期	?	W	5	覆土中		?	10-20	1	?	1	●	●	●				●				●			採取量と位置不明
I 054B	竪穴	古墳　中期																						●	
I 060	竪穴	時期不明	R	R																			●		
I 072	竪穴	弥生　中期	R	R																			●		
I 077	竪穴	弥生　中期	R	R		一括															●				
I 079	竪穴	弥生　中期	R	R		床20cm上																	●		
I 084	竪穴	弥生　後期	R	R		土器一括																		●	
I 091	竪穴	古墳　中期	R	R		床20cm上																	●		
I 093	竪穴	古墳　中期	R	R		床近？																	●		
I 101	竪穴	平安	R	R		覆土中～上層																	●	●	
I 102	竪穴	古墳　後期	R	R		一括																	●		
I 116	竪穴	古墳　中期	R	R		床近？																	●		
I 118	竪穴	古墳　中期	R	R		カマド内																		●	
I 122	環濠	弥生　後期	R	R																			●		
I 123	竪穴	奈良	R	R		?																		●	須恵器壺の中に多量の焼骨片
I 130	竪穴	古墳　中期	R	R		床近？														●			●		
I 135	竪穴	古墳　前期																						●	
I 147	竪穴	古墳　中期	R	R	1	?														●			●		土器の中の貝？
I 150	竪穴	古墳　中期	R	R		床直																	●		
I 153B	竪穴	弥生	R	R																			●		
I 158	竪穴	平安	R	R		土器一括																	●	●	
I 161	竪穴	古墳　中期	R	R		覆土一括																	●		
I 163A	竪穴	古墳　中期	R	R		一括																	●		
I 170	竪穴	古墳　前期	R	R		覆土，床直？																	●		
I 173	竪穴	古墳　前期	R	R		床近？																	●		
I 179	竪穴	平安	R	R		一括																	●		
I 185-I	竪穴	弥生　後期	W	W	1	炉内上層		30*15	?	1	W	1	●												
I 185-R	竪穴	弥生　後期	R	R	1	炉内上層,床近														●				●	
I 185-R2	竪穴	弥生　後期	R	R		床近																	●		
I 186	竪穴	弥生　～	R	R		覆土																	●	●	● I 180を含む
I 188A	竪穴	古墳　後期	R	R		覆土																			●
I 195	竪穴	古墳　前期	R	R		床近?一括																	●	●	●
I 199	竪穴	古墳　後期	R	R		一括																	●		
I 200	竪穴	弥生　後期	R	R		炉内一括																		●	
I 204	竪穴	平安	W?	W?	2	?		?	?	2	W?	1	●												採取位置，量不明
I 210	不明	奈良																	●					●	
I 224	墓域	近世	R	R		?																		●	原図なし，多量のヒト焼骨片
I 230	竪穴	古墳　中期	R	R		カマド付近																	●		
I 240-①	竪穴	古墳　中期	W	W	1	床20cm上		20*20	?	1	W?	1	●												
I 240-R	竪穴	古墳　中期	R	R	1	床20cm上														●				●	
I 240-②	竪穴	古墳　中期	W	W	1	床20cm上		40*30	?	1	W?	1	●												
I 240-③	竪穴	古墳　中期	W	W	1	床20cm上		20*20	?	1	W?	1	●												
I 255	竪穴	古墳　中期	R	R		床近?																	●		
I 260A	竪穴	弥生　後期	R	R		床近?																		●	
I 260A/B	竪穴	弥生　後期	R	R		床近?																	●		A/Bどちらか判別不可能
I 260C	土坑墓	弥生　後期~																						●	
I 275	竪穴	弥生　中期	R	R		?																		●	
I 284	竪穴	古墳　後期	R	R	1	覆土中														●					カメの中の貝
I 301	竪穴	平安	R	R		床近																	●		
I 303	土坑墓	弥生　後期	R	R		?																		●	
I 304	竪穴	弥生　中期	R	R	1	一括														●			●		土器の中の貝？
I 308	竪穴	古墳　中期	R	R		?																	●		
I 309	竪穴	弥生　後期	R	R		床直																		●	
I 312	土坑墓	弥生　後期　終末	R	R		一括																	●		
I 313	竪穴	平安	R	R		床近																	●		
I 316	竪穴	古墳　中期	R	R		一括																	●		
I 321	土坑墓	弥生　後期	R	R		一括																		●	
I 327	土坑墓	弥生　後期	R	R		一括																		●	
I 326A/B	竪穴	弥生　後期	R	R		一括																	●		
I 330	土坑墓	弥生　後期	R	R		一括																	●	●	
I 334-①	土坑群	奈良	CC	CC	1	覆土中		160*120	30	1	20*20*5	7	●	●	●		●		●						349(奈良溝)の中に並ぶ，一連の遺構
I 334-②	土坑群	奈良	CC	CC	1	覆土中		170*100	30	1	20*20*5	6	●	●	●				●						349(奈良溝)の中に並ぶ，一連の遺構
I 334-③	土坑群	奈良	CC	CC	1	覆土中		140*60	30	1	20*20*5	5	●	●					●						349(奈良溝)の中に並ぶ，一連の遺構
I 346	竪穴	古墳　中期	R	R	1	一括														●				●	土器の中の貝？ 24は骨じゃなくてフン石？
I 354-I	竪穴	古墳　中期	W	W	2	覆土上層?		?	?	2	W?	1	●						●						80貝採取位置と量不明
I 360B	竪穴	古墳　中期	W	W	1	覆土中		60*30	5	1	W?	1	●						●						
I 378	竪穴	平安	R	R		床近																	●	●	
I 385	土坑墓	弥生　後期	R	R		覆土中																	●	●	
I 403C	竪穴	弥生　中期	R	R		炉内一括																		●	
I 406	(竪穴)	古墳　後期	W	W	1	覆土上層?		50*30	?	1	W?	1	●												
7.00E-95			R	R																				●	
8E-95			R	R																				●	
8E-16			R	R																			●	●	
8E-17			R	R																				●	
8E-18			R	R																				●	
8E-26			R	R																				●	
8E-27			R	R																				●	
6F-57			R	R																			●		
8F-00			R	R																				●	
8F-10,11 ,12,17 ,33,42			R	R																			●	●	
地点不明			R	R																			●		
					27					14															

める例が目立ち、イボキサゴの出土が９割を超す縄文中・後期の遺構内貝層とは大きく異なった内容となる。奈良時代の土坑群（Ｉ334）では、イボキサゴが２割以上、ハマグリ・シオフキ・アサリを主体とする二枚貝が３割を占めている。カット別の内容によると、これらの貝種が漸位的に個体数比を増減させているのが認められる。

２－３　計測値分布

上記５種の計測値分布を第９表・第261図に示した。奈良時代の土坑３基（Ｉ334-１・２・３）分出土のイボキサゴについては、カット別の比較には至らなかったものの、各土坑で良好なサンプル数が得られた。３基共に、非常に似通った貝層の堆積及び内容であったことが反映してか、分布範囲についても15.1～23.0㎜に集中する点や、15.0㎜以下の個体が出現していない点で共通する。ただし、各土坑での分布パターンには若干の差も認められ、Ｉ334-１では19.1～20.0㎜にモードが見られるのに対し、Ｉ334-２では18.1～19.0㎜、Ｉ334-３では17.1～19.0㎜となっている。

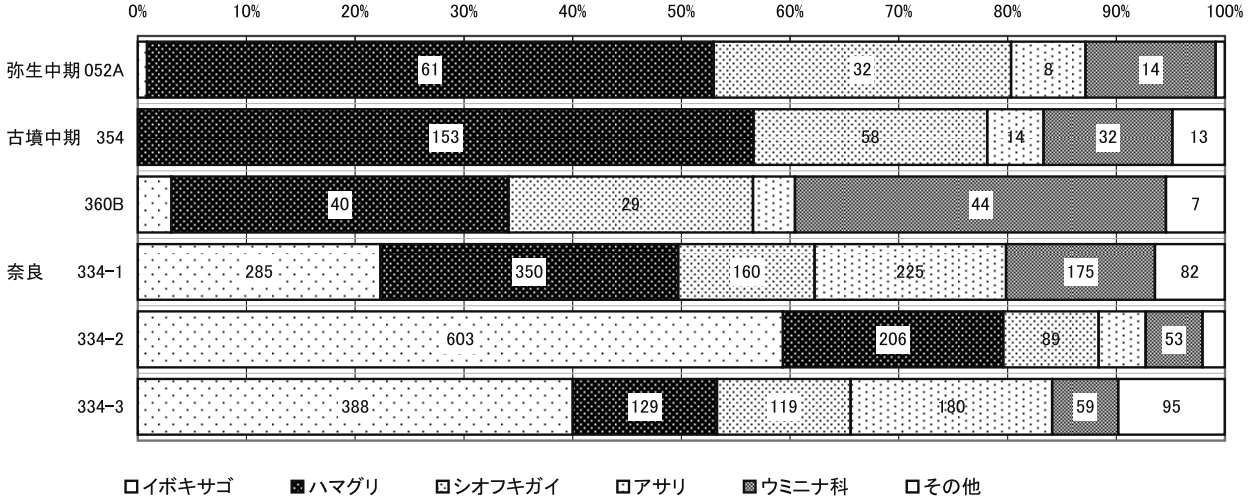
本遺跡縄文期貝層出土分のイボキサゴの平均値がおおよそ14㎜であるのと比べ、該期にはより大きめの個体が出土している。また、今回はサンプル数が揃わず図示に至らなかったが、その他４種に対しても同様の傾向が見られる。



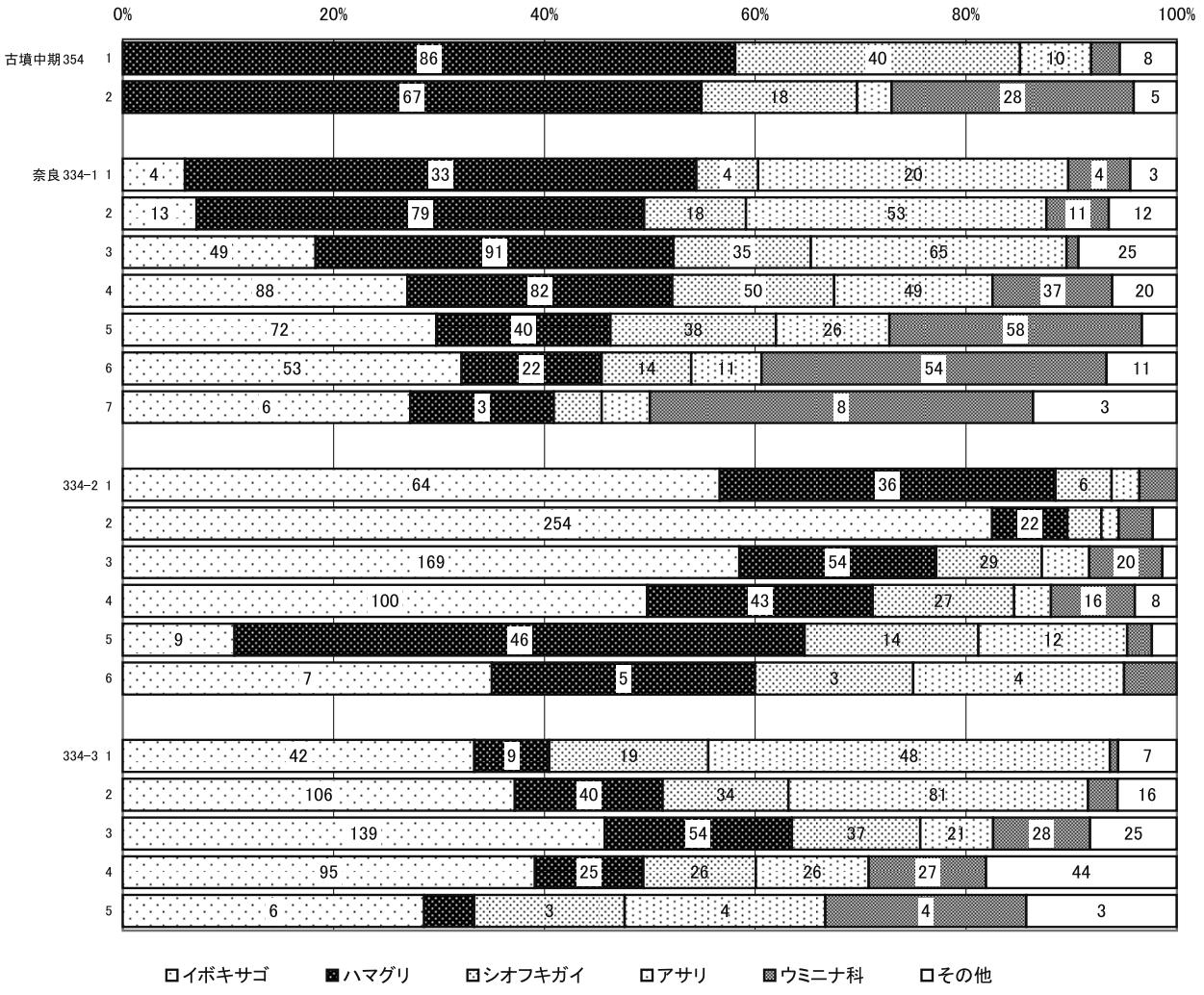
第258図　貝層出土状況

第８表　種名一覧

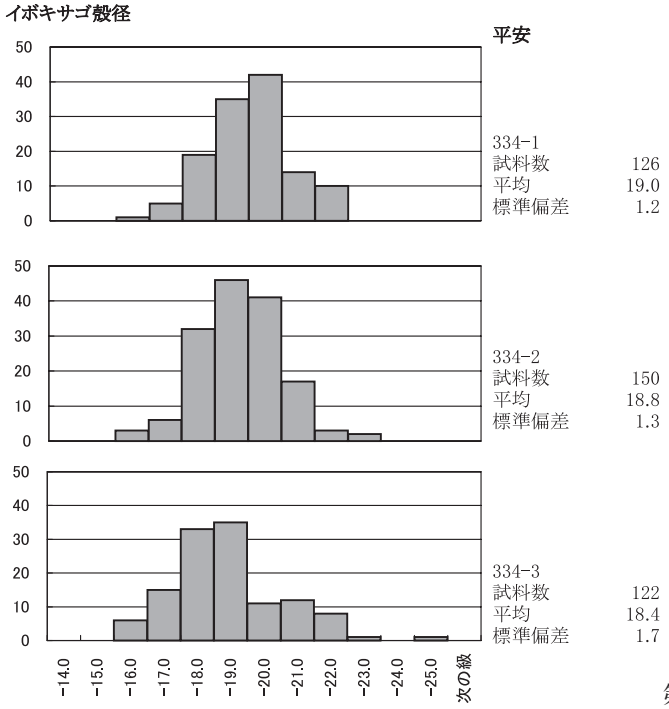
腹足綱	原始腹足目	ニシキウズガイ科	イボキサゴ	*Umbonium (Suchium) moniliferum*
			ダンベイキサゴ	*Umbonium (Suchium) giganteum*
	中腹足目	タニシ科		Viviparidae sp. Indet.
		ウミニナ科		Potamididae sp. Indet.
		タマガイ科	ツメタガイ	*Glossaulax didyma*
	新腹足目	アクキガイ科	アカニシ	*Rapana venosa*
		ムシロガイ科	アラムシロガイ	*Reticunassa festiva*
掘足綱	ツノガイ目	ツノガイ科		Dentaliidae sp. indet.
二枚貝綱	フネガイ目	フネガイ科	サルボウガイ	*Scapharca subcrenata*
	ウグイスガイ目	イタボガキ科	マガキ	*Crassostrea gigas*
	イシガイ目	イシガイ科		Unionidae sp. indet.
	マルスダレガイ目	バカガイ科	シオフキガイ	*Mactra quadrangularis*
		マテガイ科	マテガイ	*Solen strictus*
		マルスダレガイ科	ハマグリ	*Meretrix lusoria*
			アサリ	*Ruditapes philippinarum*
			カガミガイ	*Phacosoma japonicum*
			オキシジミ	*Cyclina sinensis*
	オオノガイ目	オオノガイ科	オオノガイ	*Mya arenaria oonogai*
	計	14科	14種	



第259図　貝種組成（1）



第260図　貝種組成（2）



イボキサゴ殻径

	平安		
	334-1	334-2	334-3
-14.0	0	0	0
-15.0	0	0	0
-16.0	1	3	6
-17.0	5	6	15
-18.0	19	32	33
-19.0	35	46	35
-20.0	42	41	11
-21.0	14	17	12
-22.0	10	3	8
-23.0	0	2	1
-24.0	0	0	0
-25.0	0	0	1
次の級	0	0	0

	平安		
	334-1	334-2	334-3
試料数	126	150	122
平均	19.0	18.8	18.4
標準偏差	1.2	1.3	1.7
最小	15.6	15.7	15.3
最大	21.8	22.8	24.1

第261図　貝類計測値分布

第９表　貝類計測値分布

ハマグリ殻長

	弥生中期	平安	
	052A	334-1	334-2
試料数	17	58	12
平均	61.6	35.9	37.9
標準偏差	12.3	14	12
最小	43.5	18.9	28.6
最大	92.7	89.8	68.2

シオフキガイ殻長

	弥生中期	古墳中期	平安
	052A	360B	334-1
試料数	13	15	56
平均	46.7	48.2	42.8
標準偏差	3.8	4.8	4.9
最小	41.7	39.9	30.1
最大	54.1	55.7	52.7

アサリ殻長

	平安
	334-1
試料数	23
平均	44.7
標準偏差	6.4
最小	33.9
最大	57.8

ウミニナ殻高

	平安
	334-1
試料数	10
平均	32.0
標準偏差	1.3
最小	30.2
最大	33.8

3　哺乳類・鳥類遺体

3-1 資料と方法

本節では任意採集資料（41遺構分）と、9.52㎜・４㎜・２㎜・１㎜メッシュにより水洗分離された貝層サンプル資料（１遺構分）を扱う。資料の多くは、弥生中期～古墳後期の竪穴覆土中で採り上げられている。遺構内貝層を伴った出土例は弥生中期の竪穴（Ｉ052A）と奈良時代の土坑（Ｉ334-１）に限られ、貝層を伴わない遺構からの出土が大半を占めている点で、縄文期の遺構出土の哺乳類遺体とは出土状況が大きく異なる。従って遺存状況も良好とは言えず、資料の大半は遊離歯であり、頭骨・四肢・胴部・肢端部等で確認できたものはわずか６点に留まる。

第262図に示した様に、時期別にみると弥生後期の遺構出土分が点数で全体の35％を占め、続いて古墳前期が19％、古墳中期が17％、弥生中期が14％、平安期が10％、古墳後期が２％、時期不明が１％となる。いずれの時期の遺構でもイノシシとニホンジカが主体を成す内容であった。また、貝層サンプル資料については、第２項で触れた通り、哺乳類遺体は６遺構・９か所・９サンプルの内、奈良時代の土坑から採取された貝層サンプルでのみ検出されている。

同定は当財団所蔵の現生標本を用いて行った。椎骨、肋骨、指趾以外の残存状態が良好であるにもかかわらず種同定に至らなかった資料については、分類群に「未同定」と表記した。また、破損が激しく同定に至らない資料については、分類群に「種不明脊椎動物」や「種不明陸獣（大型・中型・小型）」、部位に「同定不可能」と表記した。この「種不明陸獣」について、本節では大型にウマ、ウシ、シカ、イノシシ等、中型にノウサギ、イヌ、タヌキ、テン、アナグマ等、小型にネズミ、モグラ等が該当するものとして分類及び集計した。

3－2　同定結果及び出土内容

３目４科４種の哺乳類を確認した（第10表）。各哺乳類遺体の内容については付表16に、出土遺構ごとの集計結果については第11表に示す。

貝層サンプル資料は、奈良時代の土坑からの採取分（Ⅰ334-１）で小型陸獣の椎骨が１点見つかっているが、種同定には至らなかった。任意採集資料は、総点数466点中、種及び部位の同定に至ったものは416点（このうち破片資料を除いたものが39点（以下､NISPと記載））、未同定は１点である。種不明脊椎動物･種不明陸獣（大型・中型・小型）としたものは49点で、その内、同定不可能は46点であった。

内訳はイノシシが142点（NISP：23点）、ニホンジカが254点（NISP：８点）、ネコが２点（NISP：２点）、ウマが16点（NISP：６点）となる。この他に、鳥類の上腕骨が１点出土しているが、種同定には至っていない。以下では分類群ごとに出土内容を述べたい。

（1）イノシシ

出土点数ではニホンジカを下回るものの、NISPは本種が最も多い。出土部位の内訳をみると殆どを遊離歯が占めており、四肢及び肢端部はわずかに肩甲骨と距骨が各１点確認されたのみである。

縄文期の遺構出土状況と異なり本地区では貝層を伴った出土例が著しく少ないことが、資料の残存状況にも大きく影響したものと思われる。恐らく本来の出土内容からも大きく離れ、大半は消失してしまっている可能性が高い。そのため、最小個体数（MNI）を算定する際にも、縄文時代の斜面貝層などで通常採られる、各包含層で主体を占める土器群を基準とした層単位での算定では、本地区の遺存及び出土状況下において実際の値から更に離れてしまうことが考えられるため、最良の方法ではないがここでは遺構単位で算定することとした。その結果、合計で24個体、内訳は弥生後期の竪穴（Ⅰ185）で２個体分、古墳中期の竪穴（Ⅰ150）で２個体分、同時期竪穴（Ⅰ163）で３個体分出土し、その他の遺構では１個体分を超える出土点数ではなかった。

林・西田・望月・瀬田（1977）、小池・林（1984）、新美（1991）の区分に基づき、20個体分の上・下顎後臼歯の萌出・交換及び咬耗状況を観察したところ、第３後臼歯萌出完了直後と推定される個体が２体、第３後臼歯萌出後咬耗が若干始まった個体が３体、更に咬耗が進んだ個体が１体であり、他は判定不能であった（第12表）。これらの結果を受け、3.5才前後のものが２体、3.5～4.0才前後のものが３体、6.5～7.5才前後のものが１体含まれることが確認できた。なお、今回の資料に乳歯が永久歯と交換前ないし途中の段階の個体が全く観察されなかった点については、残存状況が影響した可能性を排除できない。

（2）ニホンジカ

出土点数は本種が最も多いものの、大半が遊離歯の破片であったためNISPはわずか８点となる。出土部位の内訳についてもイノシシと同様に殆どを遊離歯が占め、四肢及び肢端部は橈骨と踵骨が各１点、中手足骨片が２点確認されたのみである。

貝層を伴わない出土例が多く資料の残存状況が良好で無かったことに加え、イノシシと比べ本種は遊離歯が破損しやすいため、整理作業時の接合は捗らなかった。本種についても資料の大半は消失してしまっている可能性が高い。前例と同様に遺構単位でMNIを算定したところ、合計20個体でイノシシに次ぐ。いずれも各遺構で１個体分を超える出土点数ではなかった。

大泰司（1980）と新美（1997）の区分に基づき、４個体分の上・下顎後臼歯に対し萌出・交換及び咬耗状況を観察した。上顎第２後臼歯の萌出完了直前の個体が１体、直後の個体が１体、下顎第３後臼歯の萌出完了直

後の個体が１体、咬耗が若干進んだ個体が１体であった（第13表）。生後１年前後の可能性のもの、生後15ヶ月前後のもの、生後30ヶ月前後のもの、生後42ヶ月前後のものが、各１体ずつ含まれることを確認した。

（３）その他哺乳類

ネコ　８F-10,11,12,17,33,42グリッドから、同一個体とみられる右側上顎骨と左側下顎骨が各１点出土しているが、詳細な出土状況は不明である。

ウマ　古墳前期の竪穴（Ｉ035B）と平安期の竪穴（Ｉ101・Ｉ179）覆土から遊離歯が出土しているが、遺存状況が悪く歯種の特定が出来なかった。

古墳前期の竪穴（Ｉ035B）では、同一個体とみられる上下顎遊離歯が出土しているものの、覆土中層～上層で確認されており、帰属時期については疑わしい。本住居の時期より後世に埋められた可能性が高い。いずれの歯の咬耗もそれ程進んでいないため、10才未満の個体と推定される。

平安期の竪穴（Ｉ101）でも、同一個体とみられる右側上下顎遊離歯が出土しているが、覆土中層～上層で確認されており、前例と同様、後世のものである可能性が高い。咬耗はやや進んでおり、10才前後の個体と推定される。また、同平安期の竪穴（Ｉ179）からは、出土位置不明の遊離歯破片が採り上げられている。

３-３ 骨表面に対する観察

被熱による変色は、総点数466点中25点で確認できた。変色が骨表面に留まり黒色化したものは、シカの中手足骨の遠位端で１点観察できた。それ以外は、全面に渡り白・灰色に変化し破砕しているため、種同定に至らなかった資料である。次項で報告する人骨資料の殆どは、これらと同様に、被熱による白色化及び砕片化が著しく、これらの焼骨片は人骨資料であった可能性が高い。

この他に、弥生中期の竪穴（Ｉ304）内貝層から出土した、シカの右側踵骨の内側面に切痕が認められた。一定方向に往復させた擦切り痕と違い、鋭利な物で打ち付けた様な痕と見られる。また、弥生後期の竪穴（Ｉ185）から出土したイノシシの左側肩甲骨の近位部には、イヌなどによる咬痕が観察された。

４　人骨

本地区では、弥生後期ないし古墳前期の土坑墓で確認された人骨以外に、弥生中期～奈良・平安時代の竪穴覆土（10遺構分）や近世の墓域（１遺構及び14グリッド分）から焼骨片が多量に出土している。第14表には出土遺構ごとの一覧を示した。いずれの資料も被熱による灰白色化に加え砕片化も進んでいる。調査区南西部の台地突端に資料の集中が認められることから、本来、近世の墓域（Ｉ224）に由来するものが、各遺構の上層で採り上げられたものと推測される。

５　まとめ

弥生時代中期以降の遺構が主体となるＩ区から出土した動物遺体の特徴を、縄文時代中期主体の本遺跡B区（小宮　1986）（小野・山崎・伊藤 1986）・H区（西野　2010）（江田　2010）（上　2010）との大まかな比較を通じてまとめとしたい。周辺地域の報告例で既に知られる様に、貝類については、縄文中期はイボキサゴが個体数比で9割以上を占めるのに対し、弥生中期以降はイボキサゴの割合が小さくなりハマグリとシオフキガイ等が8割前後を占める例が目立つ。各貝種は縄文中期よりも大きな個体で構成される。鳥類は出土数が少なく明らかではない。哺乳類は、弥生中期以降もイノシシと二ホンジカが含まれてはいるものの、資料が少なく、稲作開始に伴う動物利用の時期的変化については追えなかった。

なお、本遺跡出土の縄文時代人骨10体と古墳時代人骨4体の炭素・窒素安定同位体分析の結果、古墳時代の水産物の摂取が縄文時代より多いことが指摘されている（本章第7節）。また、一見して両時代の貝層規模の違いは顕著であるにも拘わらず、今回の古墳時代人骨の測定値が周辺地域の縄文中期人骨の値（米田　2008）とほぼ重複することにも、大きな関心が寄せられる。個々の食物の測定値への影響度の違いが明らかになると更に議論が進むものと思われるが、現段階で考えられる要因としては、サンプルとなった人骨の階層差に基づく動植物の消費パターンの違い、漁撈の分業化の進展に関連し、水産資源の入手から廃棄に至るまでの遺跡利用の差を含む両時代の社会組織の違い等が挙げられる。これらについての更なる議論が必要と思われる。

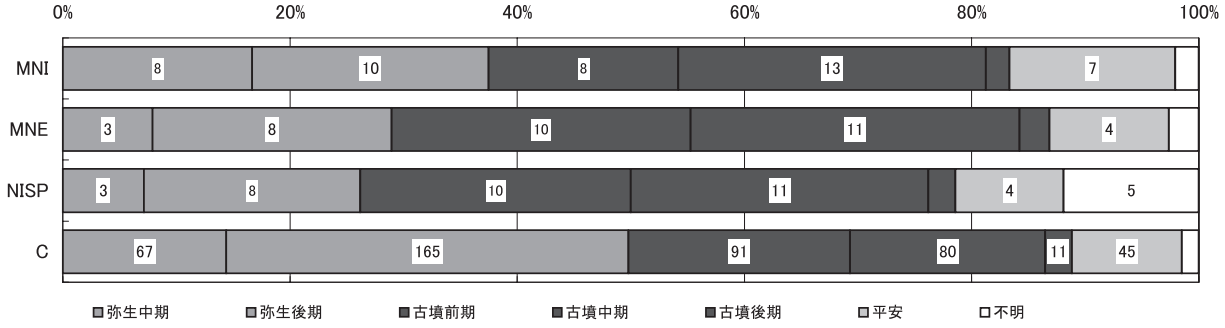
末筆となりましたが、国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生、総合研究大学院大学の金　憲奭氏、総合地球環境学研究所の石丸恵利子氏に、原稿の作成に際してご教示を賜りました。心より御礼申し上げます。

＜参考文献＞

・林良博・西田隆雄・望月公子・瀬田季茂　1977　「日本産イノシシの歯牙による年令と性の判定」
『日本獣医学雑誌』39-2, pp.165-174
・大泰司紀之　1980　「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法」『考古学と自然科学』13, pp.51-73
・小池裕子・林良博　1984　「Ⅳ-3.　遺跡出土ニホンイノシシの齢査定について」『古文化財の自然科学的研究』pp.519-524
・小宮孟　1986　「第3章第2節9項　コラムサンプル出土の動物遺存体」
『千原台ニュータウンⅢ　草刈遺跡（B区）』（高田博編）pp.549-598
・小野慶一・山崎京美・伊藤弘美　1986　「付編第1節　草刈貝塚の脊椎動物遺骸について」
『千原台ニュータウンⅢ　草刈遺跡（B区）』（高田博編）pp.763-794
・西野雅人　2010　「第4章第2節　貝類」『千原台ニュータウンXXⅢ　草刈遺跡（H区）』pp.326-331
・江田真毅　2010　「第4章第5節　鳥類」『千原台ニュータウンXXⅢ　草刈遺跡（H区）』pp.355-361
・上奈穂美　2010　「第4章第6節　哺乳類」『千原台ニュータウンXXⅢ　草刈遺跡（H区）』pp.362-380
・新美倫子　1991　「愛知県井川津遺跡出土ニホンイノシシの年齢及び死亡時期査定について」

第10表　種名一覧

哺乳綱	食肉目	ネコ科	ネコ	*Felis catus*
	奇蹄目	ウマ科	ウマ	*Equus caballus*
	偶蹄目	イノシシ科	イノシシ	*Sus scrofa*
		シカ科	ニホンジカ	*Cervus nippon*
	計	4科	4種	



第262図　出土遺構の時期内訳

第11表　哺乳類遺体集計結果

出土遺構の時期		遺構	遺構・グリッド	出土状況		分類群	部位	左右	残存/形状	点数	NISP
弥生	中期	竪穴	052A			イノシシ/シカ	上腕骨		近位部～遠位部片	1	
						ニホンジカ	中手足骨		近位部～遠位部片	1	
			072			イノシシ	遊離歯		歯冠部片	16	
						ニホンジカ	遊離歯		歯冠部片	5	
			077			種不明鳥類	上腕骨	左	近位部～遠位部	1	1
			079			ニホンジカ	遊離歯		歯冠部片	20	
			304		貝層周辺一括	イノシシ	下顎遊離歯	右	歯冠部	1	1
						ニホンジカ	踵骨	右	ほぼ完存	1	1
			326			イノシシ	遊離歯		歯冠部片	20	
						種不明脊椎動物	同定不可能		破片	1	
	後期	環濠	122			種不明脊椎動物	同定不可能		破片	1	
		竪穴	040	トレンチ	一括	イノシシ	遊離歯		歯冠部片	5	
				ピット⑤内		ニホンジカ	下顎骨	右	歯槽部	1	1
				覆土		イノシシ	下顎遊離歯	左	歯冠部	1	1
						ニホンジカ	遊離歯		歯冠部片	10	
						イノシシ	遊離歯		歯冠部片	8	
						ニホンジカ	遊離歯		歯冠部片	54	
			185	覆土		イノシシ	下顎遊離歯	左	歯冠部	2	2
							遊離歯		歯冠部片	1	
						ニホンジカ	下顎遊離歯	右	歯冠部	2	2
							遊離歯		歯冠部片	20	
				炉内		種不明脊椎動物	同定不可能		破片	1	
						イノシシ	肩甲骨	左	近位部～中間部	1	1
			260A/B			ニホンジカ	遊離歯		歯冠部片	15	
		土坑墓	312		一括	種不明脊椎動物	同定不可能		破片	1	
					骨一括	イノシシ	下顎遊離歯	右	歯冠部	1	1
							遊離歯		歯冠部片	3	
						ニホンジカ	遊離歯		歯冠部片	3	
			330			ニホンジカ	遊離歯		歯冠部片	20	
			385			ニホンジカ	遊離歯		歯冠部片	15	
	-	竪穴	153			イノシシ	上顎遊離歯	左	歯冠部	1	1
古墳	前期	竪穴	035B			ウマ	下顎遊離歯	右	歯冠部のみ	1	1
								左	歯冠部のみ	1	1
							上顎遊離歯	右	歯冠部のみ	1	1
								左	歯冠部のみ	1	1
							遊離歯		歯冠部片	5	
			038			種不明陸獣	同定不可能		破片	1	
			170	床直		イノシシ	上顎遊離歯	右	歯冠部	1	1
						イノシシ	下顎遊離歯	右	歯冠部片	1	
						種不明脊椎動物	同定不可能		破片	1	
			173			種不明脊椎動物	同定不可能		破片	1	
			186		土器片一括	イノシシ	下顎遊離歯	右	歯冠部のみ	1	1
			（弥生～）					左	歯冠部のみ	2	2
							遊離歯		歯冠部片	8	
						イノシシ/シカ	四肢骨		骨幹部破片	1	
						ニホンジカ	上顎遊離歯	右	歯冠部	1	1
							遊離歯		歯冠部片	20	
						イノシシ	下顎遊離歯	右	歯冠部	1	1
							遊離歯		歯冠部片	1	
						ニホンジカ	中手足骨		遠位端片	1	
							遊離歯		歯冠部片	28	
			195	2区	一括	ニホンジカ	遊離歯		歯冠部片	3	
						イノシシ	遊離歯		歯冠部片	10	
	中期	竪穴	091	遺構外北		イノシシ	遊離歯		歯冠部片	8	
			093		一括	ニホンジカ	遊離歯		歯冠部片	10	
						イノシシ	上顎遊離歯	左	歯冠部	1	1
							遊離歯		歯冠部片	15	
			116			種不明陸獣	同定不可能		破片	1	
			130			種不明脊椎動物	同定不可能		破片	3	
			147			種不明脊椎動物	同定不可能		破片	1	
			150	床直		イノシシ	上顎遊離歯	左	歯冠部	1	1
			161	2区NO.1	覆土一括	イノシシ	遊離歯		歯冠部片	3	
						ニホンジカ	遊離歯		歯冠部片	3	
			163A		一括	ニホンジカ	橈骨	右	近位端～近位部	1	1
						種不明脊椎動物	同定不可能		破片	2	
						種不明陸獣（大型）	同定不可能		破片	15	
					骨一括	イノシシ	上顎遊離歯	右	歯冠部のみ	3	3
								左	歯冠部のみ	1	1
							遊離歯		歯冠部片	2	
						ニホンジカ	上顎遊離歯	右	歯冠部	2	2
			230			種不明脊椎動物	同定不可能		破片	1	
			255			イノシシ	遊離歯		歯冠部片	2	
						ニホンジカ	遊離歯		歯冠部片	1	
			308		一括⑪	種不明脊椎動物	同定不可能		破片	1	
						未同定	部位不明		形状不明	1	1
			316			種不明脊椎動物	同定不可能		破片	1	
	後期	竪穴	102			種不明陸獣（大型）	椎骨		椎体	1	1
			199			ニホンジカ	遊離歯		歯冠部片	8	
奈良		土坑群	334-1	CUT7	4mmメッシュ	種不明陸獣（小型）	椎骨		完存	1	1
平安		竪穴	101			イノシシ	下顎遊離歯	右	歯冠部	1	1
						ウマ	下顎遊離歯	右	歯冠部	1	1
							上顎遊離歯	右	歯冠部	1	1
			158			イノシシ	遊離歯		歯冠部片	15	
						ニホンジカ	遊離歯		歯冠部片	7	
						種不明脊椎動物	同定不可能		破片	10	
			179		一括③	ウマ	遊離歯		歯冠部片	5	
			301			イノシシ	下顎遊離歯	右	歯冠部のみ	1	1
							遊離歯		歯冠部片	1	
			313			ニホンジカ	遊離歯		歯冠部片	2	
			378			種不明脊椎動物	同定不可能		破片	1	
時期不明		竪穴	60			イノシシ/シカ	肋骨		体部片	1	
		-	8F-10,11,12,17,33,42			ネコ	下顎骨	左	歯槽部，歯槽部～下顎枝	1	1
							頭蓋骨	右	上顎骨	1	1
						種不明陸獣（中型）	上腕骨	左	近位端～近位部	1	1
			8E-16			イノシシ	上顎遊離歯	左	歯冠部	1	1
			6F-57			イノシシ	距骨	右	ほぼ完存	1	1
			不明			種不明脊椎動物	同定不可能		破片	1	
総　計										465	43

第12表　萌出・咬耗状況（イノシシ）

NO.	遺物番号	写真図版	遺構/グリッド	遺構種	時期	層位	部位	同一個体	歯列	咬耗指数 Grant M1	Grant M2	Grant M3	小池・林 M1	小池・林 M2	萌出段階 林他	萌出段階 新美	死亡推定年齢	備考
2	127		101	竪穴	平安		下顎遊離歯 右		(M3)			NW			Ⅳ	Ⅳ	3.5才	遺存悪い
4	39		170	竪穴	古墳 前期		下顎遊離歯 右		(M1)	a			Ⅰ		Ⅱ～		1.5才～	
6	28		185	竪穴	弥生 後期	覆土	下顎遊離歯 左		(M3)			c			Ⅴ	Ⅴ-3	6.5～7.5才	
7	349	111-15	040	竪穴	弥生 後期	覆土	下顎遊離歯 左		(M3)			a			Ⅳ	Ⅳ～Ⅴ-1	3.5～4.0才	
8	168	111-12	185	竪穴	弥生 後期	覆土	下顎遊離歯 左		(M1)	c			Ⅱ		Ⅱ～	Ⅱ-1～Ⅳ	1.5才～	
9	19		186A	竪穴	弥生 中期		下顎遊離歯 右		(M3)			a?			Ⅳ	Ⅳ～Ⅴ-1	3.5～4.0才	
17	289	111-13	186(180)	竪穴	弥生 ～	土器片一括	下顎遊離歯 左	B	(M2)		b?			Ⅱ	Ⅲ～			
18	289	111-14	186(180)	竪穴	弥生 ～	土器片一括	下顎遊離歯 左	B	(M3)			NW			Ⅳ	Ⅳ	3.5才	
19	289	111-16	186(180)	竪穴	弥生 ～	土器片一括	下顎遊離歯 右		(M3)			a			Ⅳ	Ⅳ～Ⅴ-1	3.5～4.0才	
10	22		301	竪穴	平安		下顎遊離歯 右		(M3)			a			Ⅳ	Ⅳ～Ⅴ-1	3.5～4.0才	遺存悪い
23	2		312	土坑墓	弥生 後期	骨一括	下顎遊離歯 右		(I1)									
58	-		304	竪穴	弥生 中期	貝層周辺一括	下顎遊離歯 右		(M2)		a?			Ⅰ	Ⅲ～		2.5才～	
1	-		153	竪穴	弥生		上顎遊離歯 左		(M3)			b?			Ⅳ			
3-1	25		150	竪穴	古墳 中期	床直	上顎遊離歯 左		(M3)			a			Ⅳ			遺存悪い
3-2	25		150	竪穴	古墳 中期	床直	上顎遊離歯 左		(M3)			b?			Ⅳ			遺存悪い
5	1	111-9	8E-16				上顎遊離歯 左		(M3)			NW			Ⅳ			
12	311	111-8	163A	竪穴	古墳 中期	骨一括	上顎遊離歯 左	A	(M3)			b?			Ⅳ			
13	311	111-11	163A	竪穴	古墳 中期	骨一括	上顎遊離歯 右	A	(M3)			b			Ⅳ			
14	311		163A	竪穴	古墳 中期	骨一括	上顎遊離歯 右		(M3)			b?			Ⅳ			
15	311	111-10	163A	竪穴	古墳 中期	骨一括	上顎遊離歯 右		(M3)			a			Ⅳ			
21	8		093	竪穴	古墳 中期		上顎遊離歯 左		(M3)			a			Ⅳ			
31	3		170	竪穴	古墳 前期	床直	上顎遊離歯 右		(I1)									

第13表　萌出・咬耗状況（シカ）

NO.	遺物番号	写真図版	遺構No.	遺構種	時期	層位	部位	同一個体	歯列	咬耗指数 大泰司 M1	大泰司 M2	大泰司 M3	萌出段階 新美	死亡推定月齢
40	442	111-5,6	040	竪穴	弥生 後期	ピット⑤内	下顎骨 右		(P34M123)	4?	5	6	Ⅳ	42ヶ月?
45	64		185	竪穴	弥生 後期	覆土	下顎遊離歯 右	G	(M3)			7	Ⅳ直後	30ヶ月?
46	64		185	竪穴	弥生 後期	覆土	下顎遊離歯 右	G	(P4)					
41	289	111-4	186(180)	竪穴	弥生 ～	土器片一括	上顎遊離歯 右		(M2)				Ⅱ-3直後	15ヶ月?
43	311	111-3	163A	竪穴	古墳 中期		上顎遊離歯 右	C	(M1)					
44	311		163A	竪穴	古墳 中期		上顎遊離歯 右	C	(M2)				Ⅱ-3	10～14ヶ月

第14表　人骨（焼骨）出土量一覧

出土遺構の時期		遺構種	出土遺構・グリッド	遺物番号	重量(g)
弥生	中期	竪穴	275	-	0.5
			403C	139	0.4
	後期	竪穴	84	1	0.9
			185	69	0.3
			200	17	1.0
			309	2	0.3
古墳	中期	竪穴	118	79	1.5
			240	-	12.3
奈良		竪穴	25	3	1.5
			123	14	369.4
近世		墓域	224	8	350.0
				9	190.1
時期不明			7E-95	2	6.8
			8E-06	1	25.4
			8E-16	1	27.1
				15	11.0
			8E-17	21	16.5
				24	13.5
			8E-18	1	56.4
			8E-26	12	19.5
			8E-27	1	79.8
			8F-00	12	3.5
			8F-10,11,12,17,33,42	-	103.8
総計					467.0

第４節　草刈遺跡（Ｆ・Ｉ・Ｍ区）出土の魚類遺体

鶴岡　英一

資料と分析の方法

本稿では、草刈遺跡Ｆ・Ｉ・Ｍ区の貝層から抽出された魚類遺体を対象とする。魚類遺体が含まれていた貝層は、Ｆ区２か所・Ｉ区２か所・Ｍ区10か所の合計14か所で、内訳は竪穴住居跡内12、土坑内１、溝跡内１である。貝層の形成時期は弥生時代後期を中心とし、弥生時代中期から奈良・平安時代にわたる。なお、Ｆ区資料中に、縄文時代早期の炉穴から検出された甲殻類（カニ類）が含まれていたので、併せて報告する。

各貝層の位置や特徴、採取方法については貝類分析の項目を参照されたい。資料はすべて9.52㎜・４㎜・２㎜・１㎜の試験用フルイを用いた水洗選別によって得られたもので、魚類骨の抽出と図版作成を（財）千葉県教育振興財団が行い、同定から集計・分析に至る作業を筆者が担当した。なお、魚類骨の同定は市原市埋蔵文化財調査センター所蔵の現生骨格標本との比較により行った。

同定結果

不明確なものも含め、甲殻綱２種・硬骨魚綱７種が同定された（第15・16表）。

カニ類は縄文時代早期の炉穴から検出されたもので、モクズガニとワタリガニ科の２種が認められた。モクズガニは春から夏は川に生息するが、秋から冬にかけてはオス・メスとも産卵のために海へ下る。ワタリガニ科はガザミないしイシガニに由来するものと思われる。いずれも東京湾内で普通に見られる種で、食用とされた可能性が高い。

魚類骨は弥生時代の貝層から得られたものがほとんどで、ニシン科（イワシ類）・キス属・タイ類の３種が主要構成種である。古墳時代はタイ類の遊離歯２点、奈良・平安時代はニシン科の尾椎骨とフグ科の顎骨各１点、ヒラメ類に類似する歯がわずかに検出されたに過ぎない。同定された魚類はいずれも東京湾の沿岸や内湾域に生息する種が中心で、縄文時代の貝層から出土する魚種との違いはほとんど認められないものの、ドジョウ科と思われる尾椎骨が今回新たに発見された。

草刈遺跡における弥生時代以降の魚類利用

第17表は、これまでに草刈遺跡から出土した魚類遺体を時期別に集計したものである。縄文時代後期以降の東京湾東岸地域では貝類利用が著しく低調になるが、それにも増して魚類利用数の減少が際立つ結果となった。

弥生時代の魚類組成は、エイ・サメ類やサヨリ・アジを欠き、ドジョウ科やアユを含むなど細かな違いはあるが、表層魚・沿岸魚・底魚・淡水魚のすべてを含む点から、頻度は減少するものの、縄文時代以来の多種多様性に富む魚類利用を踏襲していたと考えられる。

古墳時代の魚類組成は、沿岸の中～下層魚であるタイ類とフグ科に限定される。しかし、弥生時代同様に古墳時代の遺構・包含層からも多数の土玉が出土しており、これを魚網用の錘と捉えるならば、網漁による漁撈活動の存在が想定される。草刈遺跡から同定された魚類のなかでは、表層を群れで回遊するニシン科（イワシ類）やアジが主な対象と考えられ、古墳時代にもこれらの魚種を捕獲していた可能性は高い。にもかかわらず、タイ類とフグ科魚類以外検出されなかった原因としては、この時期の貝層が極めて小規模なものであったために、固いタイ類の遊離歯やフグ科の顎骨以外残りにくかったためか、貝類とは異なる消費プロセスを経て別の場所に廃棄されたために魚類骨が全般的に残りにくかった等の理由があげられ

る。

いっぽう、タイ類とフグ科が出土したE093号住居跡貝層の報告では、これらの魚類種が入手しづらいことや、遺構内から多量の土器や焼土、岩礁生息種を含む貝類、哺乳類骨が含まれていたことから、饗食等を伴う何らかの儀礼や祭祀に利用された可能性が指摘されている（西野2006）。動物利用の要因については、個々の出土状況を吟味して慎重に評価する必要があるが、海産資源利用の痕跡が著しく減少するこの時期にあって、わざわざ魚介類を集落まで持ち込み、廃棄すること自体が非日常的な利用の結果と考えることもできる。市原市内の縄文時代以降の貝層から、貝類以外の動物遺体が検出されることは極めて稀で、数少ない事例をもってその時期の特徴と捉えることには危険があるが、タイ類とフグ科（特にフグ科）の集中出土は椎津茶ノ木遺跡の古墳時代貝層でも確認されている（樋泉1992）。今後さらに周辺地域の状況を検討する必要はあるが、これらの種が単に残りやすかっただけでなく、価値を持ち、特別な用途（目的）のために利用される機会が比較的多かったという可能性も考えておきたい。

〈参考文献〉

上奈穂美　2007　「第３章　草刈遺跡K区出土の動物遺体」『千原台ニュータウンXⅦ　市原市草刈遺跡（K区）』（財）千葉県教育振興財団

2010　「第４章　第６節　哺乳類」『千原台ニュータウンXXⅢ　市原市草刈遺跡（H区）』（財）千葉県教育振興財団

樋泉岳二　1992　「椎津茶ノ木遺跡の動物遺体について」『市原市椎津茶ノ木遺跡』（財）市原市文化財センター

西野雅人　2006　「第４章　第３節　貝サンプルの分析結果」『千原台ニュータウンXⅣ　市原市草刈遺跡（D区・E区）』（財）千葉県教育振興財団

第15表　出土甲殻類・魚類種名表

綱 Class		目 Order		科 Family		種 Species
甲殻綱	Crustacea	十脚目	Decapoda	ワタリガニ科	Portunidae	ワタリガニ科種不明	Portunidae　gen. et sp. Indet.
				イワガニ科	Grapsidae	モクズガニ	*Eriocheir japonicus*
硬骨魚綱	Osteichthyes	ニシン目	Clupeiformes	ニシン科	Clupeidae	ニシン科種不明	Clupeidae　gen. et sp. Indet.
				カタクチイワシ科	Engraulididae	カタクチイワシ	*Engraulis japonicus (Houttuyn)*
		コイ目	Cypriniformes	コイ科	Ciprinidae	ドジョウ科種不明	Cobitididae gen. et sp. Indet.
		サケ目	Salmoniformes	アユ科	Plecoglossidae	アユ	*Plecodlossus altivelis (Temminck et Schlegel)*
		スズキ目	Perciformes	キス科	Sillaginidae	キス属種不明	*Sillago* sp.
				タイ科	Sparidae	タイ科種不明	Sparidae gen. et sp. Indet.
		カサゴ目	Scorpaeniformes	コチ科	Platycephalidae	コチ属種不明	*Platycephalus* sp.
		フグ目	Tetraodontiformes	フグ科	Tetraodontidae	フグ科種不明	Tetraodontidae gen. et sp. Indet.

第16表　魚類骨同定結果

コード	遺跡名	地区名	遺構番号	サンプル番号	フルイ目(mm)	遺構種別	時代	時期	魚種	部位	L/R	点数	備考
219-047	草刈遺跡	Ⅰ区	052A	1	4	竪穴建物	弥生	中期	コチ属	主上顎骨	L	1	
219-047	草刈遺跡	Ⅰ区	052A	1	1	竪穴建物	弥生	中期	カタクチイワシ	尾椎骨	-	1	
219-047	草刈遺跡	Ⅰ区	052A	1	1	竪穴建物	弥生	中期	ニシン科	腹椎骨	-	1	
219-047	草刈遺跡	Ⅰ区	334-1	1	1	土坑群	奈良		ニシン科	腹椎骨	-	1	
219-047	草刈遺跡	Ⅰ区	334-1	6	2	土坑群	奈良		ヒラメ類？	遊離歯？	-	6	
219-047	草刈遺跡	Ⅰ区	334-1	6	1	土坑群	奈良		ヒラメ類？	遊離歯？	-	6	
219-028	草刈遺跡	F区	164	1	1	竪穴建物	奈良・平安		フグ科	前上顎骨？	R？	1	
219-028	草刈遺跡	F区	125	ST2-4	4	炉穴	縄文	早期	モクズガニ		-	3	
219-028	草刈遺跡	F区	125	ST2-4	4	炉穴	縄文	早期	ワタリガニ科		-	2	
219-028	草刈遺跡	F区	125	ST2-5	9.52	炉穴	縄文	早期	ワタリガニ科		-	1	
219-028	草刈遺跡	F区	125	ST2-5	4	炉穴	縄文	早期	モクズガニ		-	1	
219-028	草刈遺跡	F区	125	ST2-5	4	炉穴	縄文	早期	ワタリガニ科		-	2	
219-028	草刈遺跡	F区	206	2区-1	2	溝	不明		キス属	尾椎骨	-	1	
219-028	草刈遺跡	F区	206	2区-1	1	溝	不明		キス属	第2脊椎骨	-	2	
219-028	草刈遺跡	F区	206	2区-1	1	溝	不明		キス属	腹椎骨	-	1	
219-028	草刈遺跡	F区	206	2区-1	1	溝	不明		タイ類	臼歯	-	1	
219-028	草刈遺跡	F区	206	R3-10	1	溝	不明		タイ類	犬歯	-	1	
219-070	草刈遺跡	M区	9A	3	1	竪穴建物	弥生	後期	ニシン科	尾椎骨	-	1	
219-070	草刈遺跡	M区	204	3	2	竪穴建物	弥生	後期	キス属？	第１脊椎骨	-	1	
219-070	草刈遺跡	M区	204	3	1	竪穴建物	弥生	後期	ドジョウ科	尾椎骨	-	3	
219-070	草刈遺跡	M区	204	4	2	竪穴建物	弥生	後期	タイ類	臼歯	-	2	
219-070	草刈遺跡	M区	204	4	2	竪穴建物	弥生	後期	真骨類	尾椎骨	-	1	
219-070	草刈遺跡	M区	204	4	1	竪穴建物	弥生	後期	タイ類	臼歯	-	1	
219-070	草刈遺跡	M区	204	4	1	竪穴建物	弥生	後期	真骨類	椎骨	-	3	
219-070	草刈遺跡	M区	204	5	2	竪穴建物	弥生	後期	タイ類	臼歯	-	1	
219-070	草刈遺跡	M区	204	5	1	竪穴建物	弥生	後期	タイ類	臼歯	-	3	
219-070	草刈遺跡	M区	204	5	1	竪穴建物	弥生	後期	真骨類	腹椎骨	-	1	
219-070	草刈遺跡	M区	204	5	1	竪穴建物	弥生	後期	真骨類	椎骨	-	1	
219-070	草刈遺跡	M区	233	ST1-2	1	竪穴建物	古墳	前期	タイ類	臼歯	-	1	
219-070	草刈遺跡	M区	351	2	1	竪穴建物	古墳	中期	タイ類	犬歯	-	1	
219-070	草刈遺跡	M区	440	6	2	竪穴建物	弥生	後期	タイ類	臼歯	-	1	
219-070	草刈遺跡	M区	440	10	1	竪穴建物	弥生	後期	真骨類	尾椎骨	-	fr.	
219-070	草刈遺跡	M区	445	2	2	竪穴建物	弥生	中期	ニシン科	腹椎骨	-	2	
219-070	草刈遺跡	M区	445	2	2	竪穴建物	弥生	中期	真骨類	腹椎骨	-	1	
219-070	草刈遺跡	M区	445	4	2	竪穴建物	弥生	中期	ニシン科	腹椎骨	-	1	
219-070	草刈遺跡	M区	468	4	2	竪穴建物	弥生	後期	タイ類	臼歯	-	1	
219-070	草刈遺跡	M区	468	5	1	竪穴建物	弥生	後期	キス属	第１脊椎骨	-	1	
219-070	草刈遺跡	M区	468	6	2	竪穴建物	弥生	後期	キス属	尾椎骨	-	1	
219-070	草刈遺跡	M区	490	-	1	竪穴建物	弥生	後期	キス属？	肩甲骨？	L?	1	
219-070	草刈遺跡	M区	490	-	1	竪穴建物	弥生	後期	アユ	尾椎骨	-	1	
219-070	草刈遺跡	M区	490	-	1	竪穴建物	弥生	後期	真骨類	椎骨	-	fr.	
219-070	草刈遺跡	M区	650A	1	9.52	竪穴建物	弥生	後期	コチ属	角舌骨	R	1	
219-070	草刈遺跡	M区	717	1	1	竪穴建物	弥生	後期	タイ類	犬歯	-	1	
219-070	草刈遺跡	M区	717	1	1	竪穴建物	弥生	後期	タイ類	臼歯	-	1	

第17表　魚類骨時期別出土量集計

	縄文中期		弥生中期		弥生後期		古墳前期		古墳中期		古墳後期		奈良・平安	
	ＮＩＳＰ	ＭＮＩ	ＮＩＳＰ	ＭＮＩ	ＮＩＳＰ	ＭＮＩ	ＮＩＳＰ	ＭＮＩ	ＮＩＳＰ	ＭＮＩ	ＮＩＳＰ	ＭＮＩ	ＮＩＳＰ	ＭＮＩ
ミズワニ	1	1												
エイ類	20	4												
トビエイ科	12	5												
サメ・エイ類	49	11												
マイワシ	21	9												
コノシロ	11	6												
サッパ	1	1												
カタクチイワシ	10	3	1	1										
ニシン科	652	-	4	2	3	2							1	1
ウナギ	11	5												
アナゴ属	1	1												
コイ目	1	1												
ドジョウ科					1	1								
アユ					2	2								
ギバチ	18	6												
ダツ科	1	1												
サヨリ属	59	8												
ボラ科	2	2												
カマス科	1	1												
スズキ属	24	5												
キス属	38	6			2	1								
マアジ	145	8												
クロダイ	59	30			1	1								
ヘダイ	91	31												
タイ科	70	-			11	4	1	1	1	1	7	1		
サバ属	3	1												
ハゼ科	3	2			1	1								
アイナメ属	1	1												
コチ属	778	133	1	1	2	2								
ヒラメ科	3	1												
カレイ目	29	10			1	1								
フグ科											6	3	1	1
合計	2115	293	6	4	24	15	1	1	1	1	13	4	2	2

第５節　草刈遺跡Ⅰ区土坑墓出土人骨

国立科学博物館　梶ヶ山真里

１．緒言

市原市草刈に所在する遺跡で、昭和53年度に確認調査、平成２年度にⅠ区の発掘調査が行なわれた。遺構では、縄文時代前期、弥生時代中期・後期、古墳時代前期～後期、奈良・平安時代の住居跡等が検出され、遺物では石器や縄文式土器、弥生式土器、土師器、玉類や鉄製品等が多数検出された。

人骨は、７地点の弥生時代の土坑墓や古墳時代の遺構から検出されている。以下、その人骨についての所見を出土地点ごとに記載する。弥生時代の遺構から検出された人骨は、殆ど歯冠と歯である。検出された歯は歯式に示し、それぞれの歯種ごとに計測値（近遠心径・頬舌径）を示した。比較資料として九州地方の弥生時代人と江戸時代人の歯冠計測値を示した。

２．出土人骨

219－047－260Ｃ　：　成人初期・性別不明（弥生時代後期～古墳時代前期）

８　７　｜
７　６　５　｜　６　７

咬耗はブロカⅠ～Ⅱ

第18表　歯冠計測値（１）

MD	kusakari yayoi	kanto jomon(m)	kanto jomon(f)	kyusyu yayoi(m)	kyusyu yayoi(f)	Edo (m)	Edo (f)	BD	kusakari yayoi	kanto jomon(m)	kanto jomon(f)	kyusyu yayoi(m)	kyusyu yayoi(f)	Edo (m)	Edo (f)
UI1		8.46	8.25	8.81	8.49	8.78	8.38			7.41	7.08	7.56	7.25	7.52	7.06
UI2		7.18	6.70	7.44	7.14	7.16	6.97			6.83	6.41	6.87	6.6	6.47	6.33
UC		7.64	7.40	8.17	7.87	8.01	7.60			8.19	7.89	8.87	8.1	8.66	8.03
UP1		6.97	6.77	7.59	7.3	7.41	7.23			9.40	9.16	9.74	9.45	9.67	9.33
UP2		6.52	6.24	7.1	6.93	7.00	6.82			9.17	8.88	9.52	9.19	9.55	9.29
UM1		10.16	9.92	10.68	10.28	10.61	10.18			11.71	11.4	12.06	11.53	11.87	11.39
UM2	10.7	9.22	8.94	9.86	9.54	9.88	9.48		11.1	11.59	11.2	11.84	11.32	12.00	11.52
LI1		5.28	5.19	5.44	5.34	5.45	5.32			5.94	5.70	6.02	5.74	5.78	5.65
LI2		5.78	5.69	6.19	6.03	6.09	5.97			6.27	6.19	6.47	6.23	6.29	6.11
LC		6.85	6.58	7.24	6.74	7.06	6.69			7.66	7.33	8.13	7.44	8.04	7.39
LP1		6.98	6.71	7.38	7.17	7.32	7.05			7.95	7.74	8.35	8.07	8.34	7.89
LP2		6.98	6.76	7.49	7.22	7.45	7.12			8.40	8.24	8.76	8.38	8.68	8.30
LM1	11.0	11.59	11.26	11.82	11.36	11.72	11.14		11.7	11.19	11.01	11.33	10.96	11.15	10.62
LM2		10.9	10.65	11.35	10.74	11.39	10.78			10.51	10.24	10.73	10.23	10.75	10.21

219－047－186Ｂ-２　：　成人前期・性別不明（古墳時代前～中期）

　　７　６　｜
８　７　６　｜

咬耗はブロカⅠ　エナメル質がわずかに磨り減る程度

第19表　歯冠計測値（２）

MD	kusakari yayoi	kanto jomon(m)	kanto jomon(f)	kyusyu yayoi(m)	kyusyu yayoi(f)	Edo (m)	Edo (f)	BD	kusakari yayoi	kanto jomon(m)	kanto jomon(f)	kyusyu yayoi(m)	kyusyu yayoi(f)	Edo (m)	Edo (f)
UI1		8.46	8.25	8.81	8.49	8.78	8.38			7.41	7.08	7.56	7.25	7.52	7.06
UI2		7.18	6.70	7.44	7.14	7.16	6.97			6.83	6.41	6.87	6.6	6.47	6.33
UC		7.64	7.40	8.17	7.87	8.01	7.60			8.19	7.89	8.87	8.1	8.66	8.03
UP1		6.97	6.77	7.59	7.3	7.41	7.23			9.40	9.16	9.74	9.45	9.67	9.33
UP2		6.52	6.24	7.1	6.93	7.00	6.82			9.17	8.88	9.52	9.19	9.55	9.29
UM1	10.3	10.16	9.92	10.68	10.28	10.61	10.18		11.9	11.71	11.4	12.06	11.53	11.87	11.39
UM2	10.4	9.22	8.94	9.86	9.54	9.88	9.48		11.2	11.59	11.2	11.84	11.32	12.00	11.52
LI1		5.28	5.19	5.44	5.34	5.45	5.32			5.94	5.70	6.02	5.74	5.78	5.65
LI2		5.78	5.69	6.19	6.03	6.09	5.97			6.27	6.19	6.47	6.23	6.29	6.11
LC		6.85	6.58	7.24	6.74	7.06	6.69			7.66	7.33	8.13	7.44	8.04	7.39
LP1		6.98	6.71	7.38	7.17	7.32	7.05			7.95	7.74	8.35	8.07	8.34	7.89
LP2		6.98	6.76	7.49	7.22	7.45	7.12			8.40	8.24	8.76	8.38	8.68	8.30
LM1	11.4	11.59	11.26	11.82	11.36	11.72	11.14		10.4	11.19	11.01	11.33	10.96	11.15	10.62
LM2	11.4	10.9	10.65	11.35	10.74	11.39	10.78		10.0	10.51	10.24	10.73	10.23	10.75	10.21

219－047－303（３体）：　成人中期・性別不明 成人前期・性別不明 小児６才（弥生後期）

8	7	6	5	4	3	○	○	○	○	3	4	5	6	7
8	7	6	5	4				1		3		5	6	7

咬耗は、エナメル質が磨り減り、象牙質が露出している箇所あり

第20表　歯冠計測値（３）

MD	kusakari yayoi	kanto jomon(m)	kanto jomon(f)	kyusyu yayoi(m)	kyusyu yayoi(f)	Edo (m)	Edo (f)	BD	kusakari yayoi	kanto jomon(m)	kanto jomon(f)	kyusyu yayoi(m)	kyusyu yayoi(f)	Edo (m)	Edo (f)
UI1		8.46	8.25	8.81	8.49	8.78	8.38			7.41	7.08	7.56	7.25	7.52	7.06
UI2		7.18	6.70	7.44	7.14	7.16	6.97			6.83	6.41	6.87	6.6	6.47	6.33
UC		7.64	7.40	8.17	7.87	8.01	7.60			8.19	7.89	8.87	8.1	8.66	8.03
UP1	7.1	6.97	6.77	7.59	7.3	7.41	7.23		8.4	9.40	9.16	9.74	9.45	9.67	9.33
UP2	7.2	6.52	6.24	7.1	6.93	7.00	6.82		8.1	9.17	8.88	9.52	9.19	9.55	9.29
UM1	10.3	10.16	9.92	10.68	10.28	10.61	10.18		10.7	11.71	11.4	12.06	11.53	11.87	11.39
UM2	9.0	9.22	8.94	9.86	9.54	9.88	9.48		11.8	11.59	11.2	11.84	11.32	12.00	11.52
LI1	5.4	5.28	5.19	5.44	5.34	5.45	5.32		6.1	5.94	5.70	6.02	5.74	5.78	5.65
LI2		5.78	5.69	6.19	6.03	6.09	5.97			6.27	6.19	6.47	6.23	6.29	6.11
LC	7.2	6.85	6.58	7.24	6.74	7.06	6.69		7.4	7.66	7.33	8.13	7.44	8.04	7.39
LP1		6.98	6.71	7.38	7.17	7.32	7.05			7.95	7.74	8.35	8.07	8.34	7.89
LP2	7.8	6.98	6.76	7.49	7.22	7.45	7.12		7.9	8.40	8.24	8.76	8.38	8.68	8.30
LM1	10.7	11.59	11.26	11.82	11.36	11.72	11.14		11.7	11.19	11.01	11.33	10.96	11.15	10.62
LM2		10.9	10.65	11.35	10.74	11.39	10.78			10.51	10.24	10.73	10.23	10.75	10.21

8	7

7

それぞれ同一個体であるか不明
上顎右第３大臼歯は未萌出

小児のもの

v

219－047－327：　成人後半・性別不明（弥生後期）

7	6	5	4					4	5	6	7
7	6	5	4					4	5	6	7

咬耗はブロカⅡ以降　成人（壮年期）半ば以降である

第21表　歯冠計測値（４）

MD	kusakari yayoi	kanto jomon(m)	kanto jomon(f)	kyusyu yayoi(m)	kyusyu yayoi(f)	Edo (m)	Edo (f)	BD	kusakari yayoi	kanto jomon(m)	kanto jomon(f)	kyusyu yayoi(m)	kyusyu yayoi(f)	Edo (m)	Edo (f)
UI1		8.46	8.25	8.81	8.49	8.78	8.38			7.41	7.08	7.56	7.25	7.52	7.06
UI2		7.18	6.70	7.44	7.14	7.16	6.97			6.83	6.41	6.87	6.6	6.47	6.33
UC		7.64	7.40	8.17	7.87	8.01	7.60			8.19	7.89	8.87	8.1	8.66	8.03
UP1	7.3	6.97	6.77	7.59	7.3	7.41	7.23		9.3	9.40	9.16	9.74	9.45	9.67	9.33
UP2	7.2	6.52	6.24	7.1	6.93	7.00	6.82		9.7	9.17	8.88	9.52	9.19	9.55	9.29
UM1	10.5	10.16	9.92	10.68	10.28	10.61	10.18		12.0	11.71	11.4	12.06	11.53	11.87	11.39
UM2	9.9	9.22	8.94	9.86	9.54	9.88	9.48		11.1	11.59	11.2	11.84	11.32	12.00	11.52
LI1		5.28	5.19	5.44	5.34	5.45	5.32			5.94	5.70	6.02	5.74	5.78	5.65
LI2		5.78	5.69	6.19	6.03	6.09	5.97			6.27	6.19	6.47	6.23	6.29	6.11
LC		6.85	6.58	7.24	6.74	7.06	6.69			7.66	7.33	8.13	7.44	8.04	7.39
LP1		6.98	6.71	7.38	7.17	7.32	7.05			7.95	7.74	8.35	8.07	8.34	7.89
LP2		6.98	6.76	7.49	7.22	7.45	7.12			8.40	8.24	8.76	8.38	8.68	8.30
LM1	11.5	11.59	11.26	11.82	11.36	11.72	11.14		11.7	11.19	11.01	11.33	10.96	11.15	10.62
LM2	10.5	10.9	10.65	11.35	10.74	11.39	10.78		11.2	10.51	10.24	10.73	10.23	10.75	10.21

219－047－330：　成人前期・性別不明（弥生後期）

6

咬耗はブロカⅠ　壮年初め

第22表　歯冠計測値（５）

MD	kusakari yayoi	kanto jomon(m)	kanto jomon(f)	kyusyu yayoi(m)	kyusyu yayoi(f)	Edo (m)	Edo (f)	BD	kusakari yayoi	kanto jomon(m)	kanto jomon(f)	kyusyu yayoi(m)	kyusyu yayoi(f)	Edo (m)	Edo (f)
UI1		8.46	8.25	8.81	8.49	8.78	8.38			7.41	7.08	7.56	7.25	7.52	7.06
UI2		7.18	6.70	7.44	7.14	7.16	6.97			6.83	6.41	6.87	6.6	6.47	6.33
UC		7.64	7.40	8.17	7.87	8.01	7.60			8.19	7.89	8.87	8.1	8.66	8.03
UP1		6.97	6.77	7.59	7.3	7.41	7.23			9.40	9.16	9.74	9.45	9.67	9.33
UP2		6.52	6.24	7.1	6.93	7.00	6.82			9.17	8.88	9.52	9.19	9.55	9.29
UM1		10.16	9.92	10.68	10.28	10.61	10.18			11.71	11.4	12.06	11.53	11.87	11.39
UM2		9.22	8.94	9.86	9.54	9.88	9.48			11.59	11.2	11.84	11.32	12.00	11.52
LI1		5.28	5.19	5.44	5.34	5.45	5.32			5.94	5.70	6.02	5.74	5.78	5.65
LI2		5.78	5.69	6.19	6.03	6.09	5.97			6.27	6.19	6.47	6.23	6.29	6.11
LC		6.85	6.58	7.24	6.74	7.06	6.69			7.66	7.33	8.13	7.44	8.04	7.39
LP1		6.98	6.71	7.38	7.17	7.32	7.05			7.95	7.74	8.35	8.07	8.34	7.89
LP2		6.98	6.76	7.49	7.22	7.45	7.12			8.40	8.24	8.76	8.38	8.68	8.30
LM1	10.7	11.59	11.26	11.82	11.36	11.72	11.14		10.2	11.19	11.01	11.33	10.96	11.15	10.62
LM2		10.9	10.65	11.35	10.74	11.39	10.78			10.51	10.24	10.73	10.23	10.75	10.21

３．まとめ

特に縄文時代出土人骨を初めとして、草刈遺跡は長年にわたり発掘調査が行なわれている。今回、その中のⅠ区の土坑墓等から人骨や歯が検出された。関東において弥生時代の遺跡はもちろん人骨や歯が検出されることは非常に稀である。今回のような細かい人骨や歯しか検出されておらず、それでも観察が可能であることは非常にまれである。歯の保存点数は少ないが、それでも計測できた歯冠計測値と関東縄文時代人や九州弥生時代人と比較してみた（計測値表）。それによると当遺跡出土歯は全体的に、関東縄文時代人よりは大きく、九州弥生時代人よりは小さい数値である。

第６節　草刈遺跡出土人骨のＤＮＡ分析（予報）

国立科学博物館人類研究部　篠田　謙一
山梨大学大学院医学工学総合研究科　安達　　登

古人骨にわずかに残るＤＮＡを増幅してその塩基配列を解析する技術は、90年代の後半から多くの発掘人骨に対して応用されるようになり、遺跡内部の血縁関係や集団の系統関係に新たな知見を加えつつある。この方法は従来の形態学的な観察に頼った方法に比べて、格段に精度が高い情報を得ることができるので、近年、世界中の多くの遺跡から出土した人骨に応用されるようになっている。

古人骨のＤＮＡ分析では、通常解析部位としてミトコンドリアのＤＮＡが選ばれる。これは、ミトコンドリアＤＮＡでは核のＤＮＡに比べてコピー数が多く、経年的な変成によっても破壊されないで残っている確率が高いこと、また、Ｄ－ループと呼ばれる短い領域に多数の変異が蓄積しているので、この部分を解析の対象として選ぶと、個体の識別が容易で、個体に関する遺伝情報を得ることができるためである。

更に、今世紀になって現代人のミトコンドリアＤＮＡの全塩基配列を用いた解析が進められ、ヒトのミトコンドリアＤＮＡの遺伝子をコードしている部分には、ＳＮＰ（１塩基置換）と呼ばれる多型が大量に存在していることが明らかとなっている。同一の多型を持つ集合を専門用語でハプログループと呼ぶが、それらの間の系統を調べることによって、ヒトの拡散の様子や、地域に特有のハプログループの誕生の時期の推定、地域集団間の関係の解析などが行われている（Kivisild et al. 2002）。

このような研究の進展を反映して、現在では古人骨のＤＮＡ分析でも、Ｄ－ループの塩基配列を用いた遺跡内部の血縁関係の推定と、ハプログループ頻度を用いた集団比較が行われるようになっている。

今回、千葉県の大規模な貝塚遺跡である草刈遺跡出土人骨のＤＮＡ分析を行う機会を得た。現在では多くの研究者は、基層集団としての縄文人が住んでいた日本列島に、弥生時代になって大陸から水田稲作と金属器を持った渡来系弥生人が進入し、両者が混血して現代日本人が成立したと考えている（Hanihara 1991）。この説の検証のためには、同一地域における時代の異なる人骨を分析することが必要だが、そのような条件を満たす遺跡はそれほど多くない。その点で、弥生時代までの人骨を含む、草刈遺跡の人骨群を分析する意義は大きい。

（試料）

古人骨のＤＮＡ分析では、歯を用いた場合が最も成績が良いことが知られているので、今回は歯を１本まるごと実験に使用することにした。実験に用いたのは12体分の歯（第23表）で、後の形態学的な研究に支障の無いように、レプリカを作成した後に実験に用いた。なお、今回用いた人骨は１を除いて縄文時代に属する。草刈貝塚からは弥生相当期の人骨も出土しており、今回もそれらの歯をＤＮＡ分析を行うためにサンプリングを行った。しかし、弥生相当期のサンプルは、歯自体が非常に脆く、これまでの経験上、このような状態のサンプルからは解析に充分な量のＤＮＡが回収できないことが分かっているので、以後の実験には用いないことにした。

（研究方法）

まず、発掘後の人骨の取り扱いに起因するコンタミネーションを避けるためにＤＮＡ除去剤で洗浄し、

多量の蒸留水で水洗し乾燥させ、ＵＶ照射を行った。その後、マルチビーズショッカー（安井器機）を用いて粉砕し、サンプルを粉末状態にした。この粉末約0.5ｇから市販のＤＮＡ抽出キットを用いてＤＮＡを抽出した。最初にＤ－ループ領域の２カ所のＤＮＡ塩基配列を決定するために、抽出ＤＮＡをテンプレートとしてＰＣＲ法による38サイクルのＤＮＡ増幅を行った。なお、今回解析したＤ－ループ領域はHypervariable region Ⅰ（ＨＶ１、16209－16366　Anderson et al. 1981）およびⅡ（ＨＶ２、128－256）である。ＰＣＲ産物は1.5％のアガロースゲルによる電気泳動を行って増幅を確認した。増幅が確認されたサンプルに関しては、精製を行って塩基配列決定用のテンプレートとした。塩基配列の決定は、精製された各サンプル６μlを用い、ABI BigDye Terminator v.1.1を使ったサイクルシークエンスを行った。なお、シークエンサーは ABI Model 3130 を使用し、プロトコールに従って処理を行った。

次に各サンプルの持つハプログループを決定するために、マルチプレックスAPLP法（Umetsu et al. 2005）による型判定を行った。この方法によって、ミトコンドリアＤＮＡの26箇所のＳＮＰ（ｉ塩基置換部位）と９塩基欠損の判定が可能となり、東アジアに分布するハプログループのほとんどの型を決定できる。

（結果と考察）

古代試料に残るＤＮＡはごく僅かであり、分析効率は骨の保存状態に依存する。残念ながら今回解析した人骨からは、充分な量のＤＮＡが回収されず、ＰＣＲ反応ではごく少量のターゲットとしたＤＮＡの増幅が確認されたものの、その塩基配列を決定するには至らなかった。

ＡＰＬＰ分析によるハプログループの型判定では、４個体の解析に成功し、Ｎ９ｂとＭ７ａという２種類のハプログループを見いだした。個体番号B192、B228C、B516AはＮ９ｂ、B516DはＭ７ａに分類された。

今回、草刈貝塚人骨から見いだされたハプログループはいずれも、ほぼ日本国内に限定して出現し、非常に古い時代から日本列島に存在していると考えられているタイプである。現代日本人では南北で頻度が高く、中央地域で低いという特徴的な分布を持っていることも知られている（篠田 2007）これまで分析された縄文人にも見いだされており、草刈人骨に見いだされたことも不思議ではない。

Ｍ７ａの現代日本人における分布は琉球列島で最も高く、南方系のハプログループと考えられるが、Ｎ９ｂは沿海州の少数民族の中にも高い頻度で保持されていること、北海道の縄文人に高頻度で出現すること（Adachiet al. 2009）などから考えて、北方系のハプログループと判断される。列島中央の縄文遺跡で双方のグループが見いだされたことは，縄文人の起源を考える上でも興味深い。

今回はＤ－ループ領域の塩基配列が決定できなかったことで、遺跡内の血縁関係について考察することはできなかったが、今後実験を繰り返すことで、さらに詳細なデータを得ることを目的としたい。

（参考文献）

Adachi, N., Shinoda, K.,Umetsu, K.,Matsumra, H.（2009）Mitochondrial DNA Analysis of Jomon Skeletons From the Funadomari Site, Hokkaido, and Its Implication for the Origins of Native American. American Journal of Physical Anthropology. 138（３）, 255-265.

Anderson, S., A.T. Bankier, B.G. Barrell, M.H. de Bruijin, A.R. Coulson, J. Drouin, I.C. Eperon, D.P. Nierlich, B.A. Roe, F. Sanger, P.H. Schreier, A.J. Smith, R. Staden &　I.G. Young,（1981）Sequence and organization of the human mitochondrial genome.　Nature, 290: 457-65.

Hanihara K.（1991）Dual structure model for the population history of the Japanese. Japan Review 2：1-33.

Kivisild,T., Tolk, HV., Parik,J., Wang,Y., Papiha,SS., Bandelt,HJ. and Villems,R.（2002）The emerging limbs and twigs of the East Asian miDNA tree. Molecular Biology and evolution, 19:1737-1751.

篠田謙一.（2007）日本人になった祖先たち. 日本放送出版協会.

Umetsu K, Tanaka M, Yuasa I, Adachi N, Miyoshi A, Kashimura S, Park KS, Wei YH, Watanabe G, Osawa M.（2005）Multiplex amplified product-length polymorphism analysis of 36 mitochondrial single-nucleotide polymorphisms for haplogrouping of East Asian populations. Electrophoresis 26: 91-98.

第23表　サンプル一覧

No.	Sample	遺構種類	時期	年齢	性別	備　考
1	B192	方墳	古墳時代前期	成人	女性	伸展葬（北東周溝内）頭位北
2	B202A	竪穴住居	縄文時代中期	成人	男性	屈葬　頭位西
3	B202B	竪穴住居	縄文時代中期	5,6才	不明	屈葬　頭位西
4	B202C	竪穴住居	縄文時代中期	成人	男性	頭蓋のみ
5	B228C	竪穴住居	縄文時代中期	成人	女性	屈葬（鉢被）頭位北
6	B228D	竪穴住居	縄文時代中期	熟年	女性	屈葬　頭位北北東
7	B509A	竪穴住居	縄文時代中期	壮年	男性	仰臥屈葬（鉢被）頭位東
8	B511	竪穴住居	縄文時代中期	熟年	女性	屈葬（鉢被）頭位北
9	B516A	竪穴住居	縄文時代中期	成人	男性	屈葬　頭位南
10	B516C	竪穴住居	縄文時代中期	成人	男性	屈葬　頭位北
11	B516D	竪穴住居	縄文時代中期	８才	不明	不明　頭位東
12	B585	土壙	縄文時代中期	壮年	男性	仰臥屈葬　頭位南

（分析資料関連文献）

平本嘉助・溝口優司　1986　「付篇　第２節　草刈遺跡出土人骨について」『千原台ニュータウンⅢ　草刈遺跡（B区）』
㈶千葉県文化財センター

第７節　草刈遺跡から出土した縄文時代・古墳時代人骨の同位体分析

東京大学大学院新領域創成科学研究科先端生命科学専攻
米田　　穣

はじめに

千葉県草刈遺跡（貝塚）から出土した縄文人骨10点と、古墳人骨４点を分析したところ、古墳人骨１点を除いた13点から保存状態のよいコラーゲンを回収することに成功した。それらで炭素・窒素安定同位体比を測定し、草刈遺跡における縄文時代および古墳時代の食生態を検討した。

分析試料と分析方法

遺跡から出土した人骨から形態学的な研究に使用しない肋骨を中心に、約0.5gの骨片を採取した（第24表）。表面に付着する土壌を除去するために純水中で分析試料を超音波洗浄した後、0.2mol/Lの水酸化ナトリウム溶液に約12時間浸けて、フミン酸、フルボ酸といった土壌有機物を除去した。これを凍結乾燥して、１mm角程度に粉砕したものをセルロース膜に封入し、１mol/Lの塩酸と穏やかに反応させて、無機分画ハイドロキシアパタイトを溶解した。セルロース膜は、分子量14000ダルトン以下の分子を透過する半透膜であり、保存状態の良いコラーゲン分子は透過できないが、比較的小さな分子量を持つ土壌有機物やコラーゲンの分解産物は透過する。これによって、酸に溶解しない土壌有機物（ヒューミン）もある程度除去できる。さらに、残存した有機物を純水中で90℃に加熱することでコラーゲンを熱変性して可溶化し、不溶性の有機物とゼラチン（可溶化したコラーゲン）を遠心分離によって分離した。このように得られたゼラチン溶液を凍結乾燥して、分析に供した（Yoneda et al., 2002）。

上記の方法で抽出されたゼラチンから約0.25mgを分取して、炭素・窒素安定同位体比分析に供した。測定には、元素分析計（EA：Carlo Erba NA1500）で試料を燃焼し、生成された二酸化炭素と窒素を連続フロー型安定同位体比質量分析器（IRMS：Finnigan MAT 252）で測定するシステム（EA-IRMS）を使用した。試料とともに測定した２次標準物質の結果から、測定精度は炭素同位体比（δ13C値）で0.2‰程度、窒素同位体比（δ15N値）で0.3‰程度である。安定同位体比は、国際的な標準物質との偏差を千分率（‰）として表記する。炭素ではベレムナイトの化石（PDB）を基準とし、窒素では大気中の窒素（AIR）を基準としている。元素分析計では同時に炭素と窒素の含有量を測定しており、炭素と窒素の含有量、C/N比（モル比）を基準として、抽出されたコラーゲンの保存状態と汚染状況を検討した。

分析結果

元素分析および同位体分析の結果を第25表に示す。コラーゲンの保存状態を炭素と窒素のモル数比（C/N比）で評価すると、C区から出土した５号墳A人骨（4.0）を除いた13個体で、生体の示す範囲内（2.9～3.6）の値を示した（DeNiro et al., 1985）。したがって、これらの試料では保存状態の良いコラーゲンが保存されており、それらの同位体には生前に摂取されたタンパク質の同位体について、最晩年にあたる約10年間の平均値が反映していると考えられる。５号墓A人骨については、同位体分析の結果が食性を反映していない可能性があるので、食性の復元には用いない。

次に食料資源における同位体の特徴と比較するために、コラーゲンでは炭素同位体比が約4.5‰、窒素同位体比が約3.5‰上昇する分を補正して（Ambrose, 1993）、草刈遺跡出土人骨の分析結果と比較した（第263図）。まず、C/N比から汚染の可能性が考えられた５号墳A人骨は、他の個体よりも高い窒素同位体比を示しており、やはり汚染の影響が大きいと考えられた。

縄文時代人骨ではB区から出土した１個体（511人骨）を除く９個体は、かなり陸上の食資源に強く依存した傾向があるのに対し、古墳時代の３個体（B区：192号B人骨、六之台：３号墳A人骨と５号墳B人骨）は高い窒素同位体比を持つ点で共通しており、縄文時代人よりも古墳時代人が水産物を多く摂取したと考えられる。縄文時代人骨での多様性は、食生態の異なる集団からの混入者などを示している可能性があり、周辺の同時代の遺跡などとの比較検討が必要である。また、一般に水田稲作が主要な生業となったと考えられる古墳時代であるが、水産物利用が縄文時代よりも多かったことは興味深く、水田漁撈や漁撈専業集団などの可能性も視野に入れて、動物遺存体を含めた考古学的遺物との整合性を議論する必要がある。

結語

以上の結果から、草刈遺跡から出土した人骨群では、縄文時代は水産物の利用が比較的少ないのに対し、古墳時代は水産物利用が増加したことが示された。利用された水産物の内容については、出土した動物遺存体の分析結果を参照して検討する必要がある。古墳時代の食生態については、分析個体が３点しかないため、当時の食生態を代表しているとは限らず、分析データを追加することが望ましい。古墳時代の個人差の社会的背景と食生態の多様性について、埋葬様式や副葬品などの考古学的分析や、性別・年齢などの人類学的所見とあわせて議論することが必要である。

引用文献

Ambrose S.H.（1993）Isotopic analysis of paleodiet: Methodological and interpretive considerations. In: Sandford M.K.（ed.）"Investigation of Ancient Human Tissue: Chemical Analyses in Anthropology.," Gordon and Breach, Langhorne, pp. 59-130.

DeNiro MJ（1985）Postmortem Preservation and Alteration of Invivo Bone-Collagen Isotope Ratios in Relation to Paleodietary Reconstruction. Nature 317:806-809.

Yoneda M, Hirota M, Uchida M, Tanaka A, Shibata Y, Morita M, and Akazawa T（2002）Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter, Nagano, Japan. Radiocarbon 44:549-557.

第24表　分析試料

時代	地区	個体番号	部位	分析番号
古墳時代	草刈B区	192号B人骨	肋骨	UT1004-01
縄文時代	草刈B区	202B人骨	肋骨	UT1004-02
縄文時代	草刈B区	228C人骨	肋骨	UT1004-03
縄文時代	草刈B区	228D人骨	肋骨	UT1004-04
縄文時代	草刈B区	509A人骨	肋骨	UT1004-05
縄文時代	草刈B区	511人骨	肋骨	UT1004-06
縄文時代	草刈B区	516A人骨	肋骨	UT1004-07
縄文時代	草刈B区	516C人骨	肋骨	UT1004-08
縄文時代	草刈B区	516D人骨	肋骨	UT1004-09
古墳時代	草刈六之台	3号墳A人骨	不明	UT1004-10
古墳時代	草刈六之台	5号墳A人骨	歯	UT1005-01
古墳時代	草刈六之台	5号墳B人骨	肋骨	UT1005-02
縄文時代	草刈H区	489B人骨	肋骨	UT1005-03
縄文時代	草刈H区	689号人骨	肋骨	UT1005-04

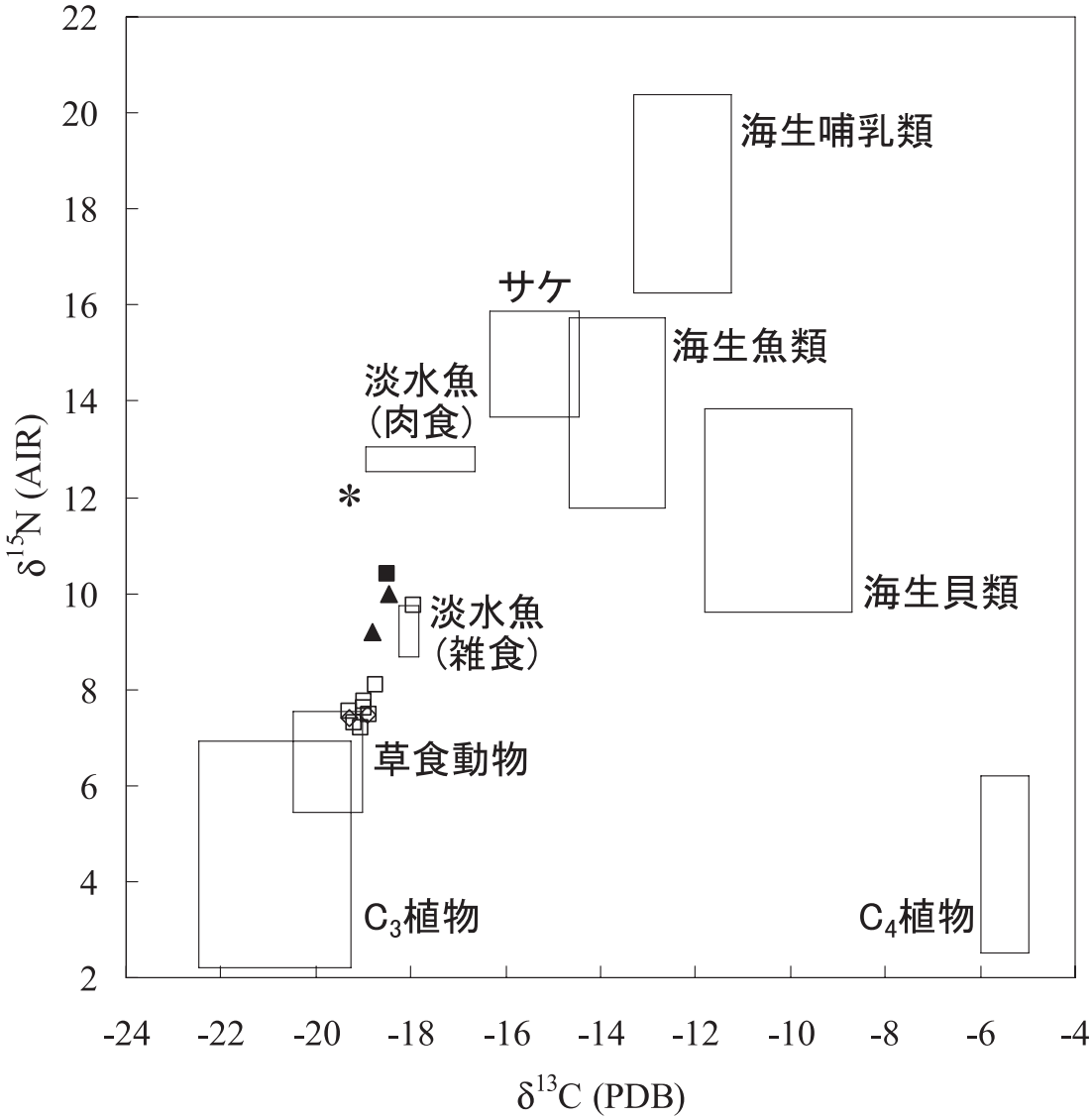
第25表　分析結果

分析番号	δ13C（‰）	δ15N（‰）	C含有量（%）	N含有量（%）	C/N比
UT1004-01	-18.5	10.4	42.1	14.4	3.4
UT1004-02	-19.0	7.6	42.3	14.3	3.5
UT1004-03	-19.1	7.2	42.6	14.7	3.4
UT1004-04	-18.9	7.5	42.4	14.5	3.4
UT1004-05	-18.7	8.1	42.5	13.9	3.6
UT1004-06	-17.9	9.8	43.9	14.8	3.5
UT1004-07	-19.3	7.5	43.3	15.0	3.4
UT1004-08	-19.2	7.3	43.5	15.0	3.4
UT1004-09	-19.0	7.7	43.7	15.3	3.3
UT1004-10	-18.5	10.0	42.5	14.4	3.4
UT1005-01	-19.3	12.0	20.1	5.81	4.0
UT1005-02	-18.8	9.2	43.8	14.8	3.5
UT1005-03	-18.9	7.5	43.9	15.0	3.4
UT1005-04	-19.3	7.4	44.4	15.2	3.4

（分析資料関連文献）

高田　博ほか　1986　『千原台ニュータウンⅢ　草刈遺跡（B地区）』　㈶千葉県文化財センター

蜂谷孝之ほか　2010　『千原台ニュータウンXXⅢ　草刈遺跡（H区）』　㈶千葉県教育振興財団



第263図　草刈遺跡出土人骨の炭素・窒素同位体比と、代表的な食料群から構成されるコラーゲンの期待値

食料の同位体比に、炭素4.5‰と窒素3.5‰を補正した。人骨のコラーゲンは、B区とH区から出土した縄文時代人骨を□と◇、B区と六之台から出土した古墳時代人骨を■と▲で示す。＊はコラーゲンの保存状態が悪かった５号墳A人骨。

第４章　まとめ

第１節　縄文時代

１　縄文前期の遺物について

Ⅰ区では縄文時代早期から中期にわたる遺物が出土しているが、そのほとんどは前期の土器片、とりわけ諸磯ｂ式と浮島式に相当するものであった。遺構自体は激しい重複状況から数棟の住居を検出したのみながら、恐らく本来はその数倍に上ることは確実と思われ、千原台・東南部地区内では最もまとまった資料といってよい。それ故、その位置付けについて簡単ながら考察する。

出土した前期の土器は約10,000点であり、黒浜式が約１割を占める他はその大部分が諸磯ｂ式と浮島Ⅰ～Ⅲ式に属し、僅かに諸磯ｃ式と興津式が認められた。黒浜期の遺構が存在しなかったとは速断出来ないが、多量の土器を遺した時期に集落が形成され、そして１ないし２型式にわたる程の年代幅の内に消滅したと考えられる。このような短期の定住性は前期の特徴でもあって、周辺では遺跡数そのものは多いとはいえ遺構数は限られ、遺物のみを遺す例が圧倒的である。隣接するM区・J区は当然としても、同じ台地上の北東部に当たるＤ・Ｅ・Ｐ・Ｇ区でもほぼ同時期の遺物が出土している。また、北東谷奥に位置する大六天遺跡[1)]では遺構こそないものの、諸磯ａ・ｂ、浮島期のまとまった遺物が、北側東南部地区では大膳野北遺跡[2)]、南二重堀遺跡[3)]、バクチ穴遺跡（2004報告分）[4)]、鎌取遺跡[5)]、有吉城跡第12地点[6)]で花積下層期～諸磯期に及ぶ１～数棟の住居が検出されているほかは、バクチ穴遺跡（1983報告分）[7)]、小金沢古墳群[8)]、太田法師遺跡[9)]等で同様にまとまった遺物が出土している。後者の遺跡群については、太田法師遺跡では諸磯ａ式が、小金沢古墳群では黒浜式～前期末まで見られるもののむしろ前期末のまとまった遺物群であり、細かくみるとその内容は必ずしも同一でない。この点、当遺跡もある年代幅の内にあるが、その土器片の出土点数からして既述した遺跡の何れよりも多いことは確かである。そういう意味では、草刈遺跡先端部に営まれたⅠ区からF区にかけての前期集落は、定住性や規模の点で抜きんでた存在といえるのではないだろうか。

なお、当遺跡ではこの前期に伴うような貝層の形成はみられない。それについては、単純に彼らが貝の採捕・搬入を行わなかったというのではなく、村田川河口右岸崖線下に立地する神門遺跡[10)]や都川河口の宝導寺台貝塚のように海岸平野での活発な活動からして貝塚の形成地は別にあったとみるほうが適切であろう。貝を集落に持ち込むのではなく、シーズンに応じて移動し、そこに貝殻を遺したのである。とすればそれは貝だけの問題ではなく、他の食料についても言えることで、この辺にこの当時の集落のあり方を規制する要因があったのであろう。そういう意味では中期に至り、草刈遺跡の中央部に貝塚が形成されたのは本格的な定住集落の開始を告げるものとみなすことが出来るかもしれない。

註１　黒沢　崇ほか　2003　『千原台ニュータウンⅫ－市原市押沼大六天遺跡（上層）－』（財）千葉県文化財センター

註２　大谷弘幸　2003　『千原台ニュータウンⅧ－市原市草刈遺跡（東部地区縄文時代－）』（財）千葉県文化財センター

註３　古内　茂ほか　1983　『千葉東南部ニュータウン－南二重堀遺跡－』（財）千葉県文化財センター

註４　第１節２　註４文献

註５　但し、住居かどうか疑わしいとする（上守秀明ほか　1993　『千葉東南部ニュータウン18－鎌取遺跡－』（財）千葉県文化財センター）。

註６　花積下層期の住居である（加藤修司ほか2002　『千葉東南部ニュータウン25－千葉市有吉城跡（縄文時代以降）－』（財）千葉県文化財センター）。

註７　古内　茂ほか　1983　『千葉東南部ニュータウン14－バクチ穴遺跡・有吉遺跡（第３次）・有吉南遺跡－』（財）千葉県文化財センター

註８　関口達彦ほか　2005　『千葉東南部ニュータウン32－小金沢古墳群２－』（財）千葉県文化財センター

註９　森本和男　2001　『千葉東南部ニュータウン23－千葉市太田法師遺跡２（縄文時代以降）－』（財）千葉県文化財センター

註10　次の報告がある。
金丸　誠ほか　1989　『千葉市浜野川神門遺跡（低湿地貝塚の発掘調査)』（財）千葉県文化財センター
寺門義範・村田六郎太　1991　『千葉市神門遺跡』（財）千葉市文化財調査協会

２　獣面把手について

いわゆる獣面把手が諸磯ｂ期に伴うことは既に周知の事実である。また、それが浮線文や平行沈線文の大形深鉢、とりわけ浮線文の波状口縁波頂部に多用されることもあえていうまでもない。草刈Ｉ区では掲載したもので、13点、非掲載５点、計18点の把手（単なる突起も他に５点）が出土しており、点数としてはまとまった資料といえるだろう。その内訳は、口縁部の地文の判る資料６点のうち、浮線文の土器５点、沈線文の土器１点で、当区は一般的な傾向に沿ったものといえる。形状としてはイノシシと思われるものが多くを占めるが、フクロウ（第21図404）やカエル（第21図401）としたほうが適当な例もある。縄文人の動物意匠を語る資料群といってよい。類例としては関東地方の出土例のなかにほぼ総てが見出せるもので[1)]、その意味では共通の文化圏のなかにあると言いうるだろう。なお、草刈内では前期集落の一角を占めるF区[2)]で出土点数が多いのは当然として、東に隣接するM区でも１点の類例がある。周辺では大膳野南貝塚で２点[4)]、太田法師遺跡[3)]やバクチ穴遺跡[5)]で各１例の出土が確認され、共に諸磯ａないしａ～ｂ期に及ぶ時期幅ないし該当する遺物を含んでおり、矛盾しない。

註１　松田光太郎　2007　「獣面把手の変遷とその地域性－縄文時代前期の関東地方西部の諸磯ｂ式土器を事例として－」『縄文時代18』縄文時代研究会

註２　約10点出土、現在整理途上。

註３　森本和男ほか　2001　『千葉東南部ニュータウン23－千葉市太田法師遺跡２－』（財）千葉県文化財センター

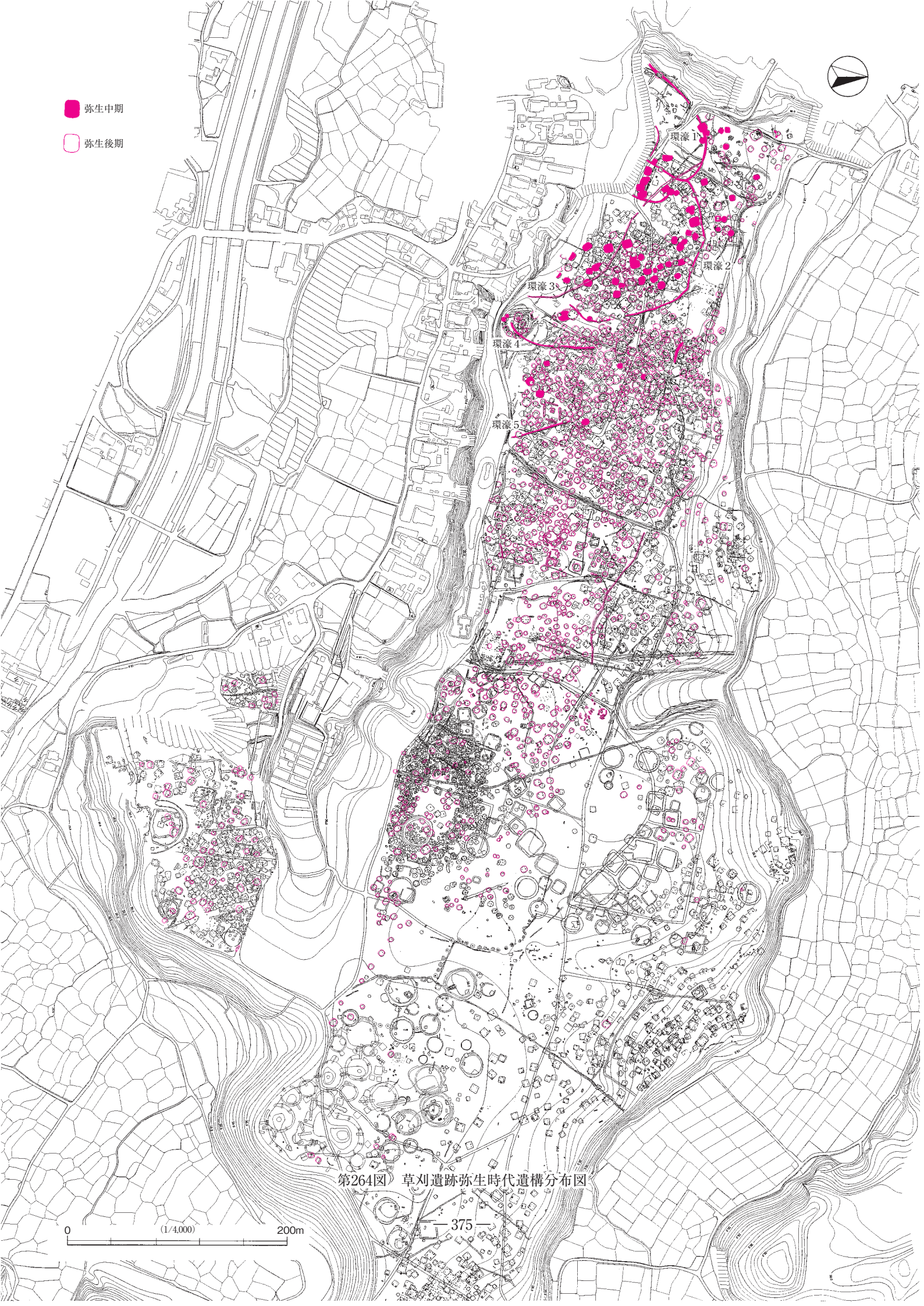
註４　島立　桂・黒沢　崇ほか　2004　『千葉東南部ニュータウン29－大膳野南貝塚－』（財）千葉県文化財センター

註５　島立　桂・黒沢　崇ほか　2004　『千葉東南部ニュータウン29－バクチ穴遺跡・大膳野南貝塚・有吉城跡２－』（財）千葉県文化財センター

第２節　弥生時代

１　Ｉ区の弥生集落

Ｉ区一帯は草刈弥生集落西端の一角を占め、中期に於いては環濠集落の一部を構成するものである。それ故、Ｉ区のみならず西端の様子を概観することで当区集落のまとめとしたい。なお、当遺跡の弥生時代については既にその概要が報告されているが[1)]、近年のK区・H区～Ｉ区に至る報告では中期の溝の認識や遺構の時期別棟数等相違もあるので比較されたい。



第264図　草刈遺跡弥生時代遺構分布図

中期の集落は環濠に規制されている。環濠１～３（F045・F110、Ⅰ011・Ⅰ371、Ⅰ122）については既に第２章第３節６で説明した。少し補足すると、東隣のM区内にも２条の溝が環濠２の外側南東部に約30ｍと100ｍの間隔を置いて並列しており、そこからは中期の遺物が出土しているのである。溝そのものは途中で途切れてはいるものの、地形が台地端の南東から北西に傾斜していることや、中期の住居が最も外側の溝の延長ラインの内に収まっていることを考えると、北西に巡る部分は浅く掘られたために検出出来なかった可能性があると思われる。ここでは便宜上東側に向かって内側の溝を環濠４（M568・F230）、外側を環濠５（M460）と呼称しておく。

環濠１と環濠２は切り合った箇所が限られているが、遺物の様相からしても環濠１のほうが古く、環濠２は新しくその東側につくられたもの、つまり集落の移動があったことになる。時期的には宮ノ台の後半の範疇である。その後、集落の発展に従い、環濠外に進出した住居に対応するように環濠４そして環濠５[2)]がつくられ、この環濠５をもって中期環濠集落は終焉を迎えたと思われる。

そうすると、Ⅰ区の中期集落は環濠集落が一定期間環濠の規制のもとに営まれた段階の所産とみてよい。房総では中期の集落が多く環濠集落の形態を採ることは良く知られている。また、それが宮ノ台期の後半に広範な広がりを見せていることも事実である。ここ村田川流域に於いても、菊間遺跡、菊間深道遺跡、菊間手永遺跡、大厩遺跡、大厩浅間様古墳下層、潤井戸西山遺跡というように台地端ないしは埋没段丘端に該期の環濠（部分的なV字溝含む）が検出されており、さらにここ20年来の調査によって養老川、小櫃川、小糸川各流域でも同様の様相が確認されるに至っている[3)]。地形条件もあり単純に比較は出来ないが、房総中期環濠集落のなかでは標準的なもの（東西約150m）と言ってよいだろう。

ただ、草刈遺跡の場合は単純に環濠が巡るというのではなく、外に拡張（環濠３・４）を繰り返し、しかもそれは後期前半まで形状さえ異なれ、一定の区画（南北に広く後期集落を囲む）のもとに集落を維持したのであり、このような例は房総では稀である。その要因は何に求められるのであろうか。

草刈遺跡とは村田川を隔てた南西に当たる菊間遺跡から国分寺台遺跡群の根田代遺跡まで海岸平野に面する台地上ではほぼ切れ目なく弥生時代中・後期の集落が連続するが[4)]、そこでも根田代遺跡に代表されるように環濠の検出例がある。ただ、市原の台地群と異なり、村田川右岸河口付近ではこの草刈台地が東西に幅広く展開するという条件の相違がある。即ち右岸域ではこの草刈台地のなかで移動ないし拡散するという過程を辿ったと思われ、それが上記のような相違へ至ったと推測する。

房総の環濠集落（というより東国一般）が防御性のみで説明出来ないことは最早疑いない。草刈では環濠１・２共に台地続きの東側に幅約15mの開口部を有しているが、そこには門等の閉塞施設は確認されなかった。また、東南の環濠端は台地縁に達する前で意図的に途切れており、完全な区画性は窺えない。環濠という集落スタイルを以て成立した中期集落ではあるが、中期末には埋没している例が圧倒的である。対岸の神奈川県では中期とは別個に後期環濠集落の検出例も多いが[5)]、房総では中期から断続する例があり[6)]、これも草刈の属性の一つであろう。

なお、集落に対応する墓址それもこの期に通有な四隅陸橋形の方形周溝墓であるが、その群在性からしてM区で検出されている数基で説明出来るとは思われない。谷を挟んだ北側の台地等に中期の墓域が形成されたと見るのが自然であろう。ある意味、それだからこそ墓域に制約されずに東側台地上に集落の展開が容易であったと言うこともできよう。Ⅰ区内の後期の集落はその遺物相からほぼ前半の内に終息したことは間違いない。単純に大規模な集落と見られがちな草刈の場合も実は後期を通して少しずつ台地中央部

へ移動した結果なのである[7)]。

註１　大谷弘幸・白井久美子　2003　「ちはら台遺跡群」『千葉県の歴史　資料編考古２（弥生・古墳時代)』千葉県

註２　環濠４・５の範囲内に相当するM区の中期弥生土器が中期末の様相を示しているという事実による。

註３　房総環濠集落は1988年の集成時（１）では19例であったものが、近年の集成（２）では41例に及んでおり、その分布や時期幅が広がりつつある。なお、その規模については既に指摘されているように比較する場合には立地条件を始め時期的・個別的な検討が前提となる。

（１）相京邦彦　1988　「関東　千葉県」『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題Ⅲ』埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会

（２）大村　直　2005　「第４章　市原市域の弥生時代中期環濠集落群と後期集落」『市原市根田代遺跡』（財）市原市文化財センター

註４　国分寺台に限らず市原市域の弥生時代以降の集落動向については既に大村　直氏がまとめており（１)、以後もその穴を埋めるべき調査例（２）が増えつつある。

（１）註３（１)、及び、次ぎの、３　遺物の様相、註２文献（１）参照のこと。

（２）近藤　敏　2003　『市原市菊間遺跡群　袖ヶ浦地区』（財）市原市文化財センター

註５　伊丹　徹ほか　1997　『かながわの弥生時代の社会－後期の環濠集落から考える－』神奈川県考古学会

註６　中期と後期それぞれの環濠（V字溝）が混在する例に市川市国府台遺跡や袖ヶ浦市滝ノ口向台遺跡等がある。

註７　後期前葉に位する住居は環濠内のⅠ区・M区、それから少し離れた北側谷に面したA区、また、台地続きの六之台等で見られる。前葉～中頃ではⅠ区～ A区、その南のB区まで、つまり台地中央部に広く且つ高密度で住居が展開する。環濠５が掘られたのはまさにこの頃であり、それは既に指摘されているように（註１大谷・白井 2003)、北側台地肩部を巡るK区・J区のV字溝と一体のものであったと捉えられる。そうすると、後期集落はある時期東西500ｍに及ぶ断続的な溝囲みの集落であったことになり、これも関東では希な事例といってよい。そして、後期後半には更に広く拡散し、その結果であろうか、密度は薄くなり、後期終末には一時的にこの台地は閑散とした状況となるようである。

２　墓域の様相

Ⅰ区中央に於いて、方形周溝墓２基と土坑墓群（14基）よりなる墓域が検出されている。方形周溝墓は１基（Ⅰ323）が全周形、１基（Ⅰ322）が四隅陸橋形であり、並列する。両者は同時ではなく、Ⅰ323、次いでⅠ322と築かれたものであろう。土坑墓はとりわけこの全周形の周囲に群集するが、少し離れた北東部にも群在する。なお、方形周溝墓自体にももちろん主体部は存在したであろうが、未検出に終わっている。墳丘が削平された結果であろうか。

この土坑墓群から人骨と副葬品が出土した。内訳は、人骨のみが出土した例が３、人骨に副葬品が伴う例が２（６連鉄釧・管玉・ガラス玉、壺２・ガラス玉)、副葬品のみが２（ガラス玉・勾玉、ガラス玉）である。この他、何も出土しなかった土坑が６基あるが、群の一部を構成することと形状から、やはり土坑墓として認識した。

時期的には、Ⅰ330出土土器とガラス玉、Ⅰ385出土釧や玉類（管玉・勾玉・ガラス玉)、Ⅰ424出土玉類（勾玉・ガラス玉）の年代観が指標となろう。２点の土器（第140図）は葬送に伴って頸部まで（１点は底部も）を欠いている恨みはあるが、羽状縄文や結節文を多用し、鋸歯文も見られる反面、中膨らみに欠

け、且つ胴部中位に最大径のある弥生後期後半から古墳出現期まで遺るいわば飾られた土器群である。一方、玉類のうち、管玉は細身のものながら古墳前期までは同様である。しかし、勾玉は未だ弥生の系統にある形状であり、ガラス玉も多くは径５㎜～７㎜の内にあり８㎜を越えるものはない[1)]。その点からすれば弥生時代の範疇で捉えられる可能性が高いと思われる。とすれば鉄釧も同様に考えてよいのではなかろうか。２点の土器はⅠ区内では最も後出の土器であって、後期後半の段階に比定されよう。Ⅰ322周溝上位から出土した古墳前期の大量の土器群に伴う「飾られた土器」との相違は明らかである。

さて、このⅠ区の墓域は草刈全体ではどういう位置付けとなるのだろうか。中期の墓跡はM区やL区で見出されているが、単独ないし数基の方形周溝墓のみである。これに対して、後期の墓跡は東端のK区やH区、西端側の当Ⅰ区でみられ、若干の方形周溝墓と土坑墓が緩く群在するというあり方である。草刈遺跡の弥生集落の変遷については前項で既述したが､要するに集落の変遷に応じて墓域は形成されたわけで、Ⅰ区の場合は、東側に移った集落の墓域として営まれたと推定される。もちろん集落の墓域といっても基数からしてそれはあくまでもそのなかの一部の人々の墓域であったことも確かで、それが副葬品にも反映されたと見るべきである。

なお、被葬者の内の７体については第３章において分析を実施しているので参照されたい。

註１　弥生時代後期として確実な市原市御林跡199号・206号方形周溝墓埋葬施設・袖ヶ浦市美生遺跡群１号・２号方形周溝墓埋葬施設・木更津市宮脇遺跡第３号方形周溝墓埋葬施設出土例等を参考としたが、厳密に言うと古墳時代前期初めまでの傾向ではある。

３　遺物の様相

Ⅰ区は環濠２内部の約60％を占め、中期全棟数の約65％に相当し、草刈中期集落の主要部に相当する。また、後期においてはその前半の集落の西側を占めており、要するに中期および中期～後期の遺物に富んだ地区といえ、これは既報告に無い内容といってよい。それ故、その様相について要点を述べておきたい。

まず遺物の大半といってよい土器であるが、中期の土器はほぼ小形の鉢と大小の壺・甕で構成される反面、後期は椀、鉢、高坏、大小の壺・甕というように器形が増え、形態もバラエテイに富むものとなる。文様は概して簡素で、小型の壺では無文のほかに頸部に羽状縄文や結節文を施すもの、また大型の壺では口縁部に縦位の粘土帯、頸部には突帯を巡らし、頸部から胴部上位に結紐文・波状文・多条の鋸歯状文等を施す土器が主流ながら、Ⅰ408のようにそれにとらわれない例もある。一方、甕では波状口縁・平底・ヘラナデ調整が一般的ながら、平底・ハケ目調整の甕も一定量認められ、台付甕も僅かながら存在する。編年的には宮ノ台期も後半に位置付けられ、一定の時期幅も窺えるが、後期への過渡的段階を示す一括遺物はみられない[1)]。

後期の土器は、幅の狭い複合口縁と頸部～胴部上位にかけて沈線区画の羽状縄文および鋸歯文帯の壺、同じく下位沈線区画の羽状縄文帯を口縁に巡らす椀、それに波状口縁で胴部上位に集約される輪積み痕跡や有段口縁とするもの、または胴部に一段を有するものを主要なセットとする一群（Ⅰ040･Ⅰ289等）と、沈線に代わって結節文を施す鉢や壺のみられる一群（それに対応するような明瞭な甕は提示できない）がある。後者は後期の環濠（Ⅰ122）覆土内や住居覆土上位（Ⅰ326-４）で認められ、恐らく後期前半～中頃のある段階に集落の再編がなされた結果であろう。

草刈Ⅰ区、というより草刈遺跡の弥生土器は中期の段階では関東南半部をエリアとする宮ノ台式土器と

いう斉一性の枠内にあった。だが細かくみるとその終末には壺の装飾性や台付甕ないしハケ目調整甕の比率など、地域差も認められる。一般的に後期は地域差が明瞭となったとされているが、それも直ぐに確立したわけではなく、器種のバリエーションが増したほかは、基本的に中期末の地域性の延長線上にあったと捉えられる。その地域性とは東京湾北東岸（大きく上総北部～下総南部と置きかえてもよいが）という枠内で括られるが、後期のⅠ区もその様相と総括出来よう[2)]。

石器については、この期に通有な磨製石器群は当然として、豊富な砥石の存在が注目される。石材からみると２種の軽石（A：通常の軽石、B：繊維束状の軽石）、２種の砂岩（A：多少軟質の砂岩、B：硬質砂岩）に分けられた。軽石Aは多面体の磨面を有したものがほとんどながら、これは素材そのものの形状にも由来するのであろう。この点、砂岩Bも概して細長く扁平で、河原石に由来する可能性が高い。一方、軽石Bと砂岩Aは形状が様々である。後者についてはその外観に加え、中粒砂であることと、特徴的な貝化石（トリゴニア）を含むものがあることから、銚子砂岩の可能性が高いと思われる。これら砥石群の主要な用途についてであるが、石器の未製品や調整剥片が出土しないことから、石器製作ではなく、磨製石器群の刃部の再生に用いられた可能性が高いと思われる。とはいえ、軽石Aの一部には明らかに金属器の刃の痕跡があり、鉄製利器に関わる用途もあったに違いない。なお、硬質石材の敲石・磨石・石皿（石29～石39）は既に指摘されているように[3)]、縄文時代からの植物加工技術の存在を示すものであろうが、量としては少ない。ただ、両端に敲打痕のみられる円柱状の敲石は砂岩Aの砥石のなかにも見られ（砥57・砥65・砥72・砥74）、類例も多い。その時代性とも併せ検討されるべきであろう。

土坑墓に伴う玉類についてはあえて繰り返さないが、金属製品について遺跡内の類例とも併せふれておきたい。小銅環（指輪）は完全なもので２点、半個体品が１点、破片が１点、計４点出土した。このうち、弥生時代の遺構に伴うものは金５・金６で、残りの２点はグリッド（金４：折り曲げた先端に綴じ穴を有するもの）ないしグリッド相当（金３）である。草刈遺跡では後期弥生集落の中心に相当するM区・L区で類例がまとまって出土している。釧は片側のみ遺存する６連の帯状円環形鉄釧１と同銅釧破片が２点出土した。前者は弥生後期の土坑墓、後者は１点が弥生後期の住居床面、１点が古墳中期の住居床面出土である。鉄剣は弥生後期の住居覆土中ながら同じレベルでまとまって後期前半の土器が出土しているので、その頃の所産として間違いない。草刈では最も古い所産であろう。

６連の鉄釧は草刈H区でも出土しているが、当例は人骨の遺存状況から右上腕骨に装着したと考えられる例である[4)]。H区の場合もガラス玉が頸飾りとすればその位置からして同様の装着となろう[5)]。布で覆われた出土例は群馬県石墨遺跡[6)]ほかでみられるが、当区の状況からすれば腕の装着時を示していると想定される。鉄剣はH区・K区でそれぞれ２つの目釘孔が関に並列するものと斜めに並ぶ長剣が出土しているが､それについてはK区の報告を参照していただくとして、Ⅰ185の例はそれらとは異なる短剣であり、関との境界に両抉りを有し、短い茎中央に目釘孔のみられるものである。長剣が弥生後期後半～終末期に付属する可能性が高いことを考えると、Ⅰ区出土の鉄剣はそれより遡る所産ということになる。

註１　国分寺台遺跡群の環濠集落である根田代遺跡や向原台遺跡では中期～後期への過渡的様相を示す土器群がみられるが、草刈遺跡を概観した限りでは丁度その段階を欠いていると言わざるを得ない。なお、類例は袖ヶ浦市美生遺跡群第４地点でも認められる。

註２　この点、結節文を軸とした大村　直氏の山田橋式の提唱がある。国分寺台遺跡群の調査結果からして、久ヶ原式の捉え方もあろうが、装飾壺における「帯縄文沈線区画」（「久ヶ原式」）から「結節区画」（「山田橋式」）という流

れは妥当である。ただ、氏も述べているように地域色は確かにあるものの、大きくみれば市原～千葉に至る地域は同様の変遷を辿っていると思われる。なお、関係文献は次ぎによる。

①大村　直　2004a　「第４章　弥生時代後期の山田橋遺跡群」『市原市山田橋大山台遺跡』(財)市原市文化財センター

②大村　直　2004b　「久ヶ原式･山田橋式の構成原理　東京湾岸地域後期弥生土器型式の特質と移住･物流」『史観』第33号

③大村　直　2007　「山田橋式補遺」『西相模考古』第16号

註３　浜田晋介　1992　「弥生時代の石皿と磨石－南関東地域の例から－」『考古論叢　神奈河』第１集　神奈川考古学会

註４　草刈L区では螺旋状鉄釧が方形周溝墓埋葬施設から出土しているが、位置的には土坑北側中央部というのみで、他の副葬品はない。

註５　これに対して、既述した市原市御林跡遺跡の方形周溝墓２基からそれぞれ出土した５連の銅釧は何れも右上腕骨に装着したものであった。

註６　６号土壙墓出土７連鉄釧の表裏に布目痕付着。なお報告者は螺旋状の可能性も指摘する。

水田 稔　石北直樹 1985『石墨遺跡』沼田市教育委員会

第３節　古墳時代

Ⅰ区の古墳時代は前期・中期・後期各時期にわたるが、古墳出現期～前期初めの一群をほぼ欠いている。これは当区内では弥生時代後期後半に至って集落が一旦途絶え、その中心がより東側へ移ったことと無関係ではないと思われる。約400m東のA区～B区・H区にわたって出現期から前期まで陸続と古墳が築かれたが、それに対応する集落もその周辺に展開したということであろう。ところが、前期から中期、とりわけ中期を通して隣接するM区同様広範かつかなりの密度で住居が営まれており、草刈集落の最も発展した段階といえる[1)]。中期の集落は東部のD区・Ⅰ区・C区でも存在する反面、既述した古墳群の墓域は空白となる。つまり、古墳群の形成を契機として中期には草刈集落は東西に分かれ、その西の群の一角がⅠ区に相当する。これは言い方を変えれば古墳時代以降、集落が今まで空白地であった台地北東部に進出したということになる。中期以降の古墳は南側台地縁ないしは台地東端に移っており、集落に対応した姿なのであろう。

古墳時代は住居の構造に大きな変化が生じている。前期は方形のプランに入口の梯子（穴)、その左右どちらかの隅に貯蔵穴、入口対面の柱穴間に炉というあり方が、中期になると、カマドの出現に合わせ、その脇に貯蔵穴が移り、さらに入口がカマドの対面から脇に移動する例もあるなど、その導入が住居の内部構造を大きく変えたことが窺える。当然、支脚の形状も変化するが（円柱形)、当区では中期～後期を通し高坏を逆さにしてその代用とする例も多い。一部にカマドが壁から離れた例もみられるが（Ⅰ003)、これも中期ならではである。一方、古墳時代後期には住居規模が大形と小形に二極分化する傾向があり、入口部に周堤を巡らしたり、外側に張り出しを設ける例がみられる。これら住居構造の変遷についてはE区の調査結果から得られた所見が報告されており[2)]、当区の結果も齟齬はない。なお、中期住居には一定数南西向きの方位を採るものがある。同様な事例は台地北東部のD区・E区でも認められ一つの傾向を示すものであろう。

後期後半には一時的に集落が消滅する反面、川焼台遺跡を始めとした尾根伝いの東側台地に丁度該期の集落が立地する。そのあり方は川焼台遺跡のように弥生時代以降から継続する場合と、中永谷遺跡のよう

に古墳時代後期以降新たに立地する場合の２者がある。恐らく、川焼台以東に集落そのものが移動・分散したのであろう。古墳時代中期には高坏脚部の羽口転用品がみられるように当地でも集落群単位での鍛冶工房が成立し、後期には確実に鉄製農工具は増加する。恐らくそのような条件がより上流域の開発を可能としたのではなかろうか。ある意味、草刈古墳時代集落は発展的にその役割を終えたと言えるかもしれない。

註１　但し、それはこの時期、広い草刈台地に拡散を繰り返した結果であったと思われ、それを過大評価すべきではないと思われる。この点、村田川流域では一貫して菊間古墳群が規模・内容共に優位にあった状況とも併せ判断されるべきであろう。

註２　渡辺修一　1985　「古墳時代竪穴住居の構造的変遷と居住空間」『研究連絡誌』第11号

第４節　奈良・平安時代

一旦途絶えた草刈台地に再び集落が展開したのは奈良時代も中頃以降である。この期の集落は草刈台地の東西に見られるが、西端ではF区・Ｉ区に展開しており、平安時代にはL区・K区まで緩慢に拡大する。この点は弥生時代と同様であり、再度の定着・拡散があったことになる。しかし、草刈の歴史時代集落とりわけ平安時代の集落は大規模とはいえ、周辺の遺跡群－例えば国分寺台はともかくとして東南部地区有吉遺跡、高沢遺跡等－と比較してかけ離れた内容とまでは言い得ない。一般的にこの期の集落は多分に分散的で、しかも低位段丘や海岸平野にも立地している。立地条件の優位性もあろうが、必ずしもそれのみで規制される時代ではなくなったということなのだろう。

集落のあり方は、比較的小形の住居によって構成され、掘立柱建物はその住居棟数からすると稀少である。カマドも概して貧弱で、柱穴もないものが多い。その一方､カマド内に置カマドが遺されている例や、集落内に土師器焼成土坑が営まれている点、鍛冶関連遺物（羽口・鉄滓等）と豊富な金属製品（鉄製農工具・金具・鉄釘等）の出土はいわば竪穴住居からの脱皮を示しているとも受け取れる。

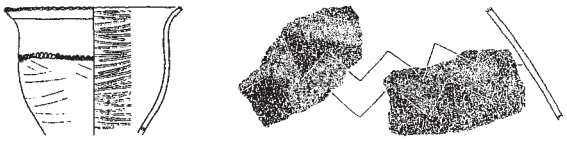
墨書土器はこの期の集落ではかなりの頻度で出土し､それゆえに貴重な資料としての側面を有している。当区では因・万・西万・千・仝・井・卍・大□（２字目破損）が確実ながら、他に聖・種・市（記号か）・万日？の他、ヘラ書きの不明の文字もみられる。この中では、３点見つかった仝、また、卍と聖が特筆されるが、前者は具体的にその示すものは不明で（読みはケンか)、後者はそのままとれば寺や僧となる。仝はK区２点、M区で１点、卍はF区で２点出土しており草刈集落全体において何らかの意味を有するものであろう。遺跡内ではD区の方形墳墓から「草苅於寺坏」、F区で「草□赤磨呂」といった地名ないし具体的な人名例が出土しており、注目される。後者は草の後が「苅」とは断言できないが、その可能性は高いと思われる。今で言う姓とはもちろん異なるが、草刈の大字名つまりかっての村名が平安時代に遡って確認し得た点は貴重な事例といってよい。

K区で１基検出された方形墳墓（報告では方形周溝遺構）の埋葬施設（木炭敷上に木棺）から、墓誌ないし買地券かと推定されている「鉄板」が出土した。近年ではとりわけ藏骨器中での該種の出土例が房総でもみられるようになったが、それでも特定の階層（地方行政の末端に連なった官位取得者）と見なすべきであろう。時期を示す遺物は伴出しなかったが、何れにせよ８世紀後半～９世紀前半の幅の内にあろうかと思われる。新たに誕生した歴史時代の集落もその前代からの遺産を継承したのである。

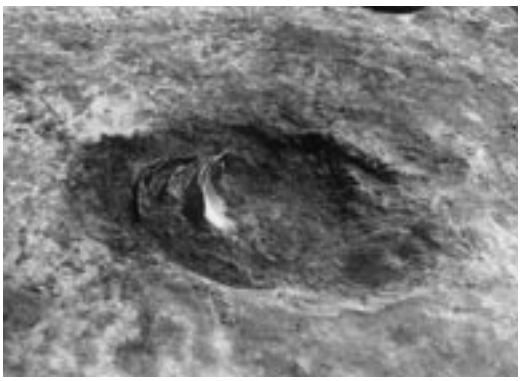
写　真　図　版

草刈遺跡Ⅰ区調査区全景空中写真　（約1/600）

▲ Ⅰ040住居



Ⅰ040炉出土土器



▲ Ⅰ040炉　遺物出土状況

▲ Ⅰ041炉　遺物出土状況

◀ Ⅰ078住居

◀ Ⅰ082炉
遺物出土
状況

◀ Ⅰ146貯蔵穴
遺物出土状況

◀ Ⅰ185炉
遺物出土
状況

▲ Ⅰ241炉　遺物出土状況

◀ Ⅰ203住居

▲ Ⅰ203貯蔵穴　石斧・石皿出土状況

▲ Ⅰ221炉　遺物出土状況

▲ Ⅰ221貯蔵穴　敲石・壺出土状況

◀ Ⅰ242貯蔵穴
石斧・甕
出土状況

▶
Ⅰ249炉
遺物出土状況

◀ Ⅰ251住居

▲ Ⅰ251炉　遺物出土状況

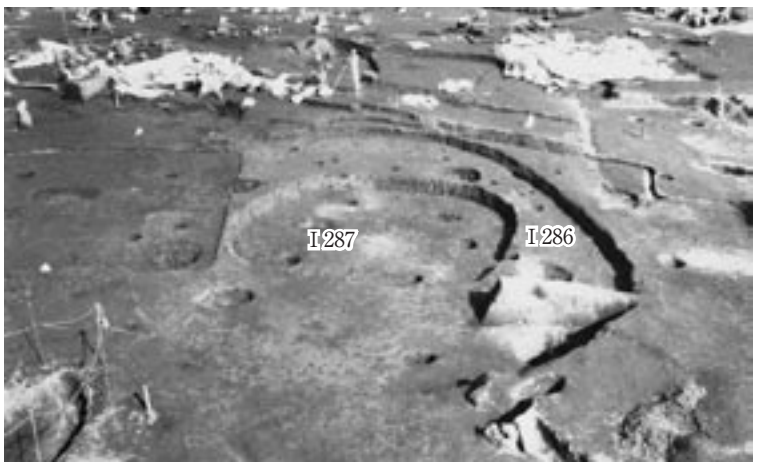
▼ Ⅰ275貯蔵穴　壺・甕・石皿出土状況 ▼

◀ Ⅰ275住居

Ⅰ275出土石皿

◀ Ⅰ276住居

◀ Ⅰ285Ａ住居



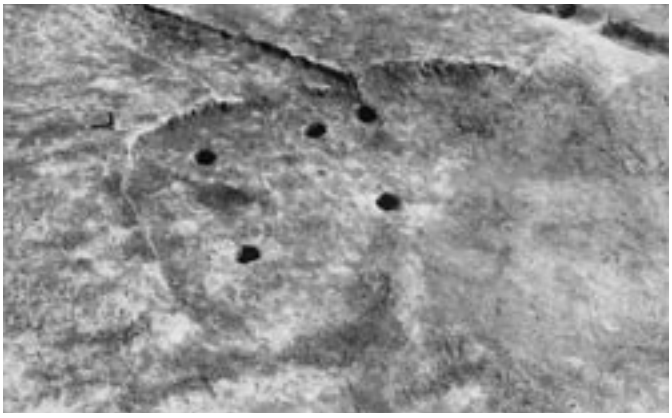
▲ Ⅰ286・Ⅰ287住居

▲ Ⅰ260Ａ　遺物出土状況

▶ Ⅰ289住居

▼ Ⅰ298住居

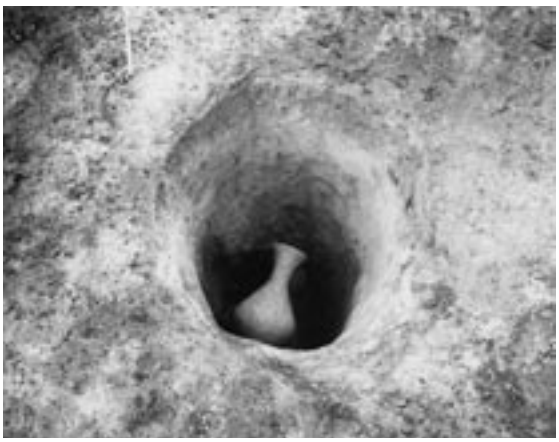
▼ Ⅰ299住居



▲ Ⅰ328炉　遺物出土状況

◀ Ⅰ328住居

▲ Ⅰ342Ａ住居



▲ Ⅰ304貯蔵穴　遺物出土状況

◀ Ⅰ357　住居

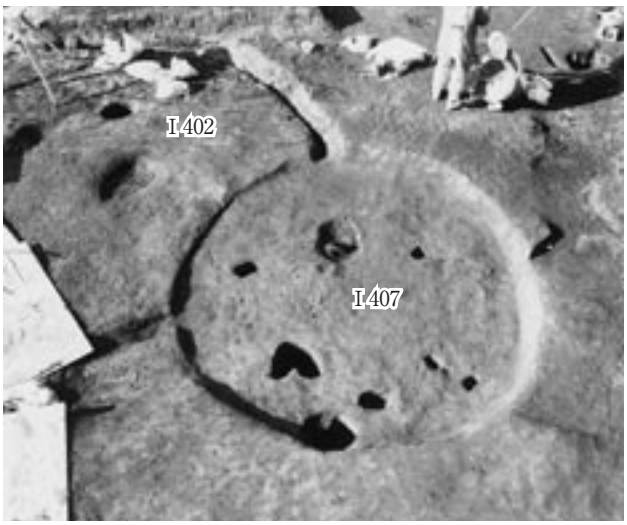
▲ Ⅰ326炉　遺物出土状況

◀ Ⅰ365　住居

◀ Ⅰ365　炉
遺物出土状況

▲ Ⅰ367住居

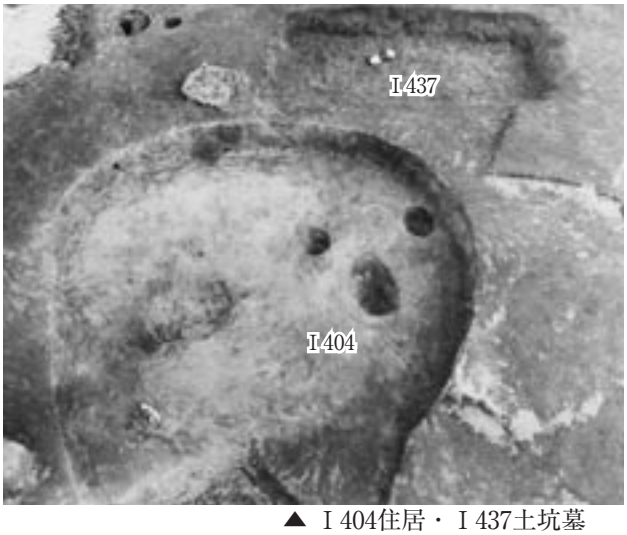
▲ Ⅰ383住居



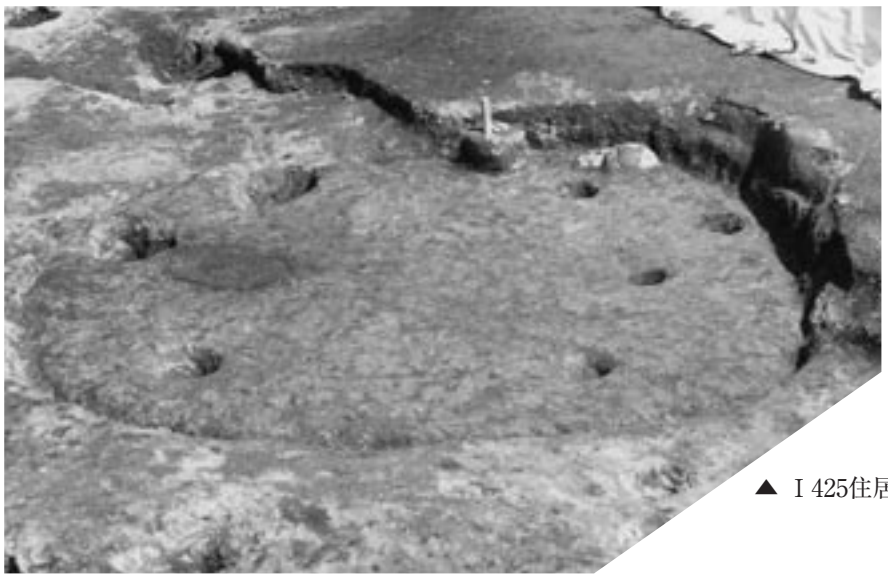
▲ Ⅰ402・Ⅰ407住居

▶ Ⅰ386住居

▲ Ⅰ398Ｂ住居



▲ Ⅰ404住居・Ⅰ437土坑墓



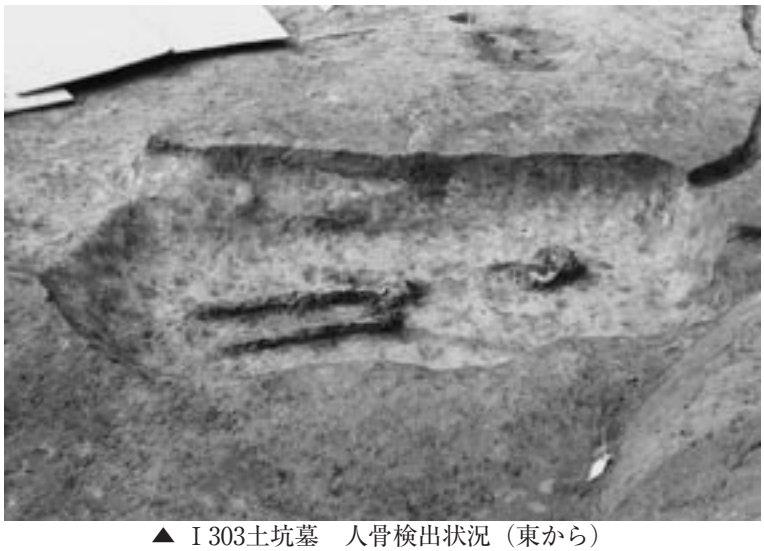
▲ Ⅰ425住居

▲ Ⅰ403Ｂ炉　遺物出土状況

◀ Ⅰ303土坑墓　人骨検出状況（南から）

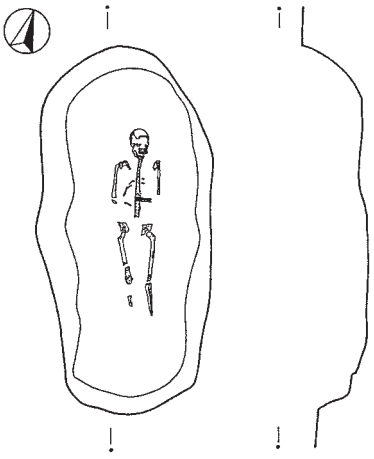
▼ Ⅰ303　人骨（頭部）検出状況

▲ Ⅰ303　人骨（腰以下）検出状況



▲ Ⅰ303土坑墓　人骨検出状況（東から）

▲ I 321土坑墓　人骨検出状況



▲
I 327土坑墓　人骨検出状況
（南から）

◀ I 327土坑墓　人骨検出状況
（西から）

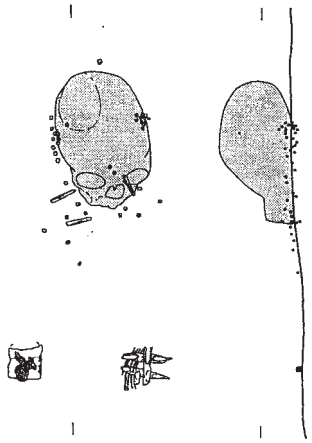
◀ Ⅰ385土坑墓
人骨検出状況
（南西から）

◀ Ⅰ385土坑墓
人骨検出状況
（北東から）

◀ Ⅰ385土坑墓
人骨検出状況
（南東から）

▲ Ⅰ385土坑墓

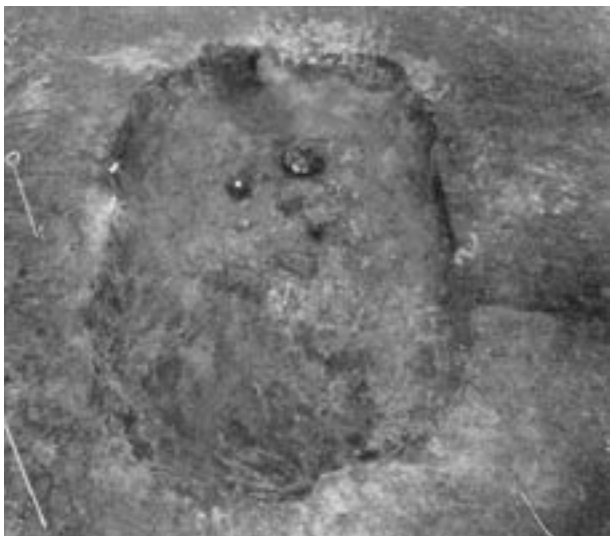
▶
Ⅰ385　人骨（頭部～胸部）
検出状況



▶
Ⅰ385　人骨（頭部～首飾り）
検出状況

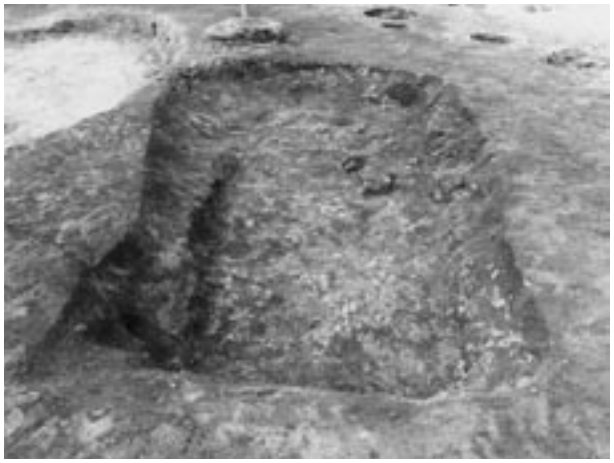
▲ Ⅰ385　管玉・ガラス玉出土状況

▲ Ⅰ385　ガラス玉出土状況

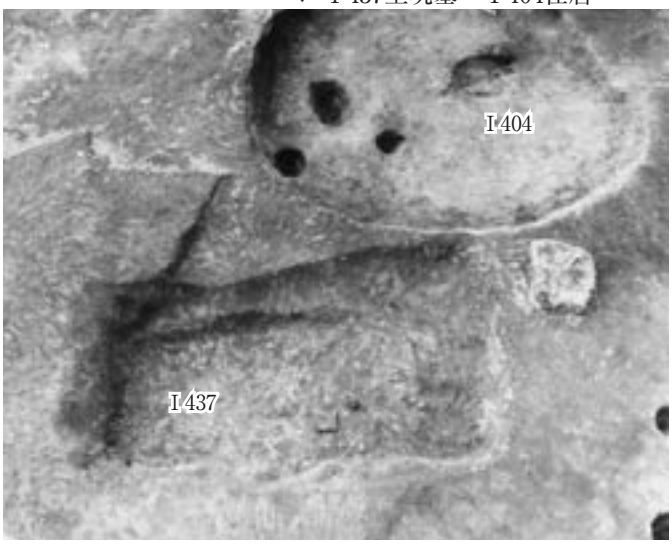


◀
Ⅰ330土坑墓
人骨・壺・ガラス玉検出状況

▼ Ⅰ437土坑墓　ガラス玉出土状況



▼ Ⅰ437土坑墓・Ⅰ404住居



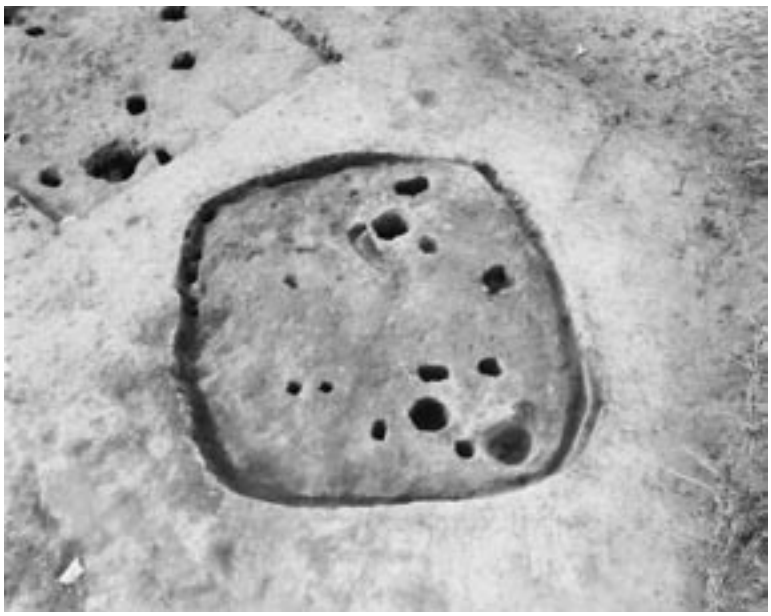
▲ Ⅰ011環濠

▲ I 011環濠

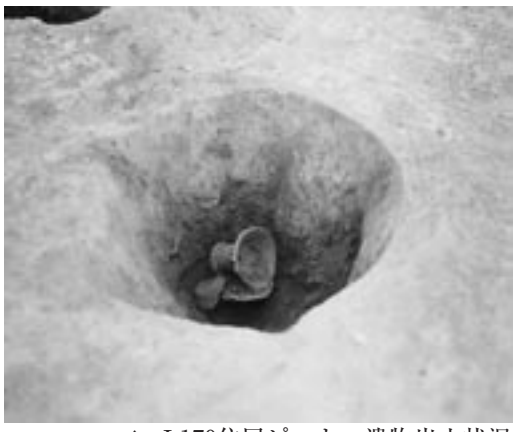
▶ I 011環濠（南東部）

▶ I 011環濠
セクション
（B－B′）

▶ I 011環濠
セクション
（A′－A）



◀ Ⅰ044住居



▲ Ⅰ170住居ピット　遺物出土状況

◀ Ⅰ135住居

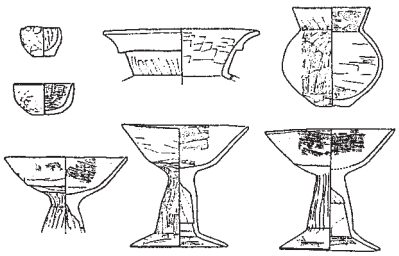
▲ Ⅰ173住居

▲ Ⅰ358住居

▲ Ⅰ186Ｂ　遺物出土状況

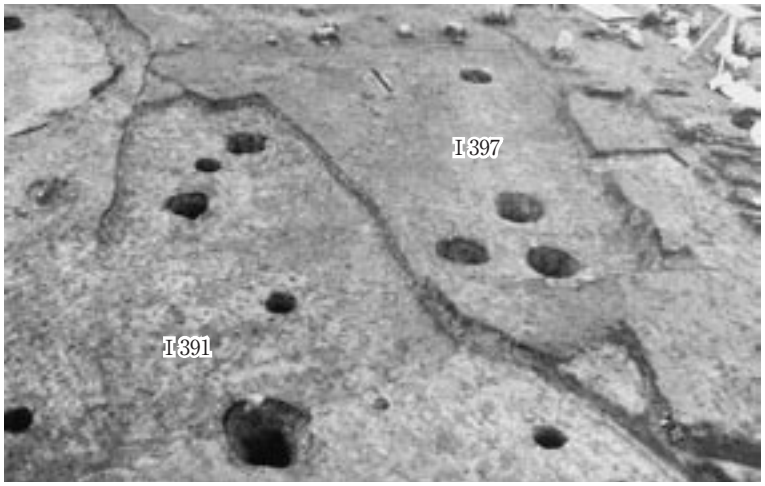
▲ Ⅰ186Ｂ　１号人骨検出状況

◀ Ⅰ390住居



Ⅰ391貯蔵穴出土土器

▼ Ⅰ391・Ⅰ397住居



▼ Ⅰ391貯蔵穴　遺物出土状況

◀ Ⅰ432・Ⅰ433
住居

▲ Ⅰ001住居

▲ Ⅰ004住居

▼ Ⅰ028住居

▲ Ⅰ021住居

▲ Ⅰ021カマド

▲ Ⅰ049住居

◀ Ⅰ112住居

▼ Ⅰ112カマド　遺物出土状況

▲ Ⅰ133住居　焼土・炭化材検出状況

▲ Ⅰ133　甕出土状況

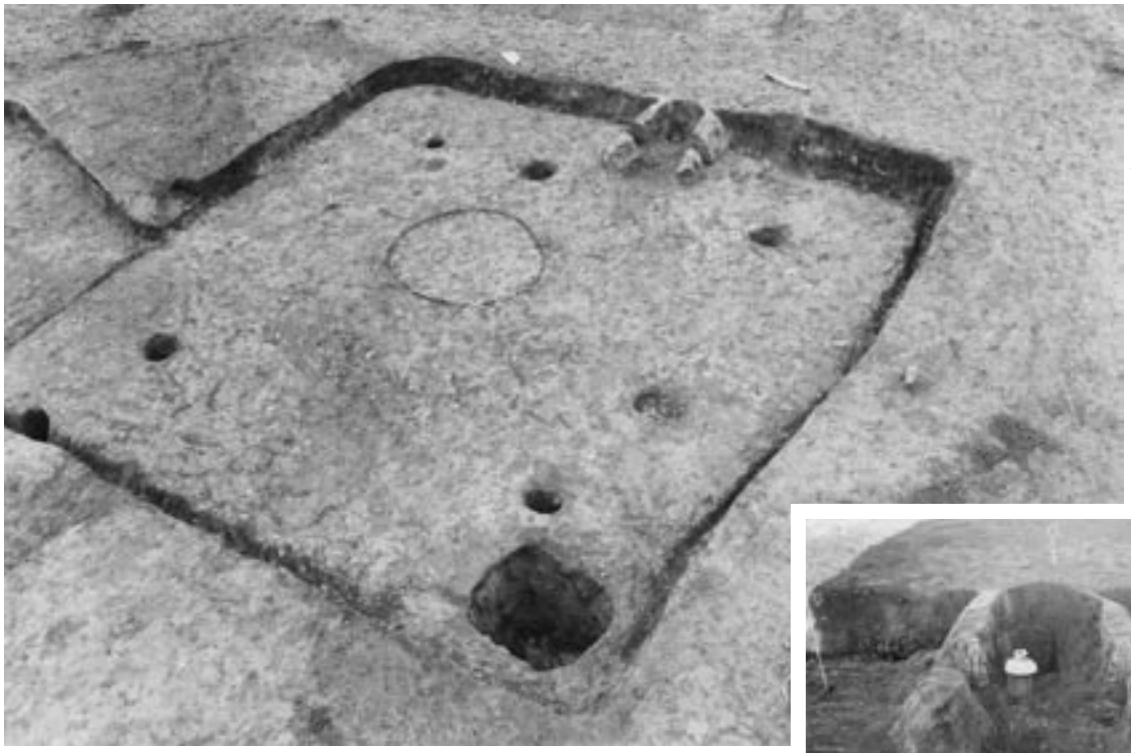
▲ Ⅰ147カマド

▲ Ⅰ214住居

◀ Ⅰ230住居

◀ I 253住居

▲ I 253カマド



◀ I 265住居

▲ I 265カマド

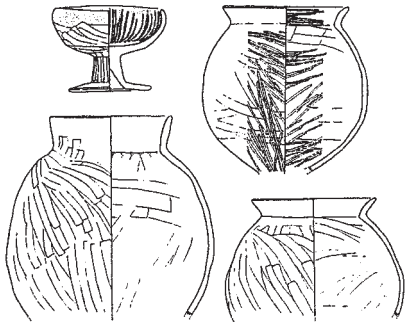
◀ I 265　遺物出土状況

◀ I 268住居

◀ I 269住居

▲ I 274住居

▲ I 266住居



▲ Ⅰ279出土土器

Ⅰ279住居 ▶

▼ Ⅰ338住居

▲ Ⅰ338カマド

▼ Ⅰ354住居

▲ Ⅰ354カマド

▲ Ⅰ360Ｂ住居

▲ Ⅰ360Ｂカマド

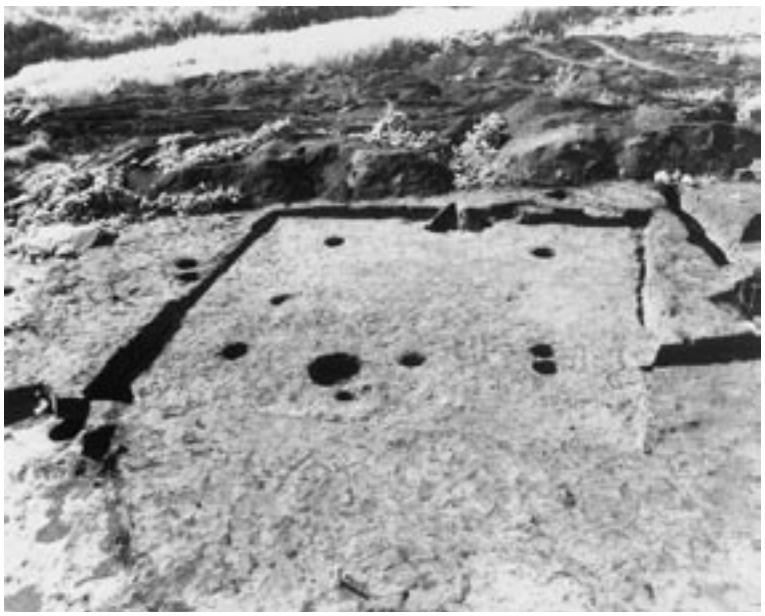
◀ I 010住居

▼ I 022カマド

▲ I 102住居

▲ I 057カマド

◀ I 119住居



◀ Ⅰ121住居

▼ Ⅰ121カマド

▶ Ⅰ134住居

◀ Ⅰ142住居

▼ Ⅰ205貯蔵穴　出土遺物

▲ Ⅰ228住居

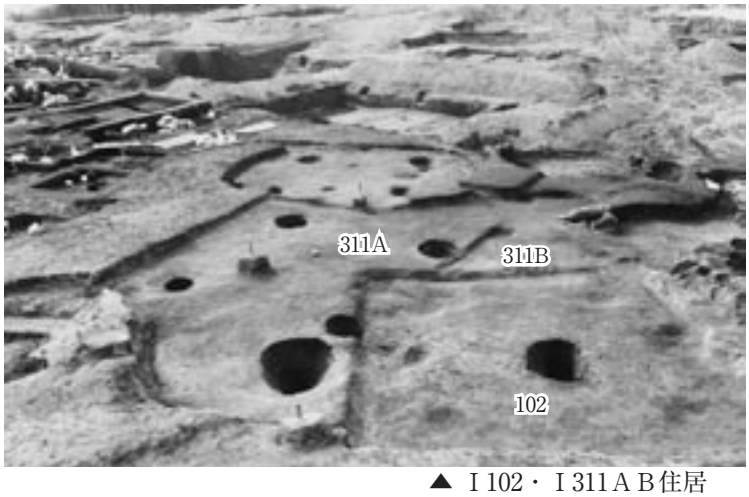
▲ Ⅰ228カマド

▲ Ⅰ267カマド

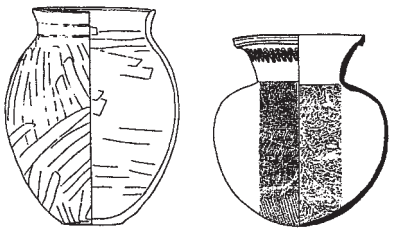
◀ Ⅰ267住居

▲ Ⅰ284住居

▲ Ⅰ284　遺物出土状況



▲ Ⅰ102・Ⅰ311ＡＢ住居

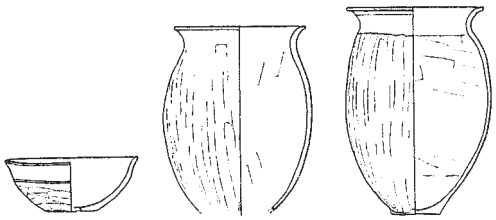


Ⅰ284貯蔵穴脇　出土土師器・須恵器

▲ I 311 B 住居

▲ I 311 B カマド

▼ I 345カマド　遺物出土状況



I 345カマド出土土器

◀ I 339住居

◀ I 111住居

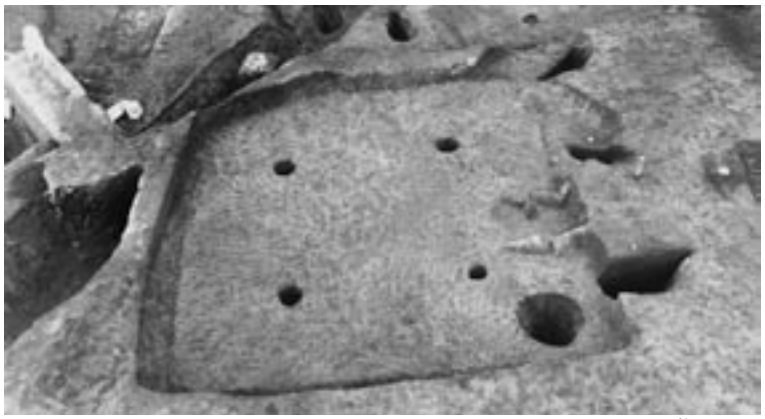
▲ I 111カマド

▲ I 247住居

▲ I 247カマド

▲ I 264住居

▲ I 271カマド



▲ I 277住居

▲ I 277カマド

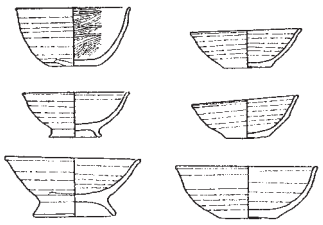
▲ Ⅰ296カマド

◀
Ⅰ283住居

▲ Ⅰ319カマド

◀
Ⅰ319住居

◀
Ⅰ337カマド　遺物出土状況



Ⅰ337カマド出土土器

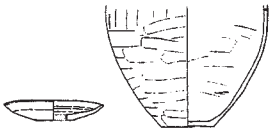
Ⅰ353住居

▲ Ⅰ353カマド

▲ Ⅰ366住居

▲ Ⅰ355住居

◀ Ⅰ366カマド出土遺物



Ⅰ366カマド出土土器

▼ Ⅰ372住居

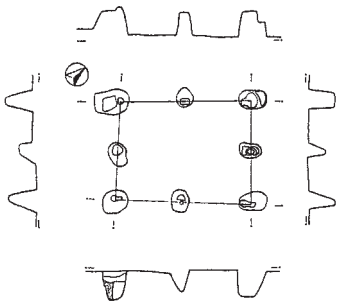
◀ Ⅰ372カマド

▲ Ⅰ378住居・鍛冶関連遺物出土状況

▲ Ⅰ395住居

▲ Ⅰ395カマド　遺物出土状況

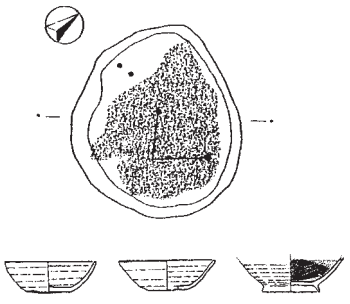
▲ Ⅰ435住居



Ⅰ288掘立柱建物

▲ Ⅰ288掘立柱建物

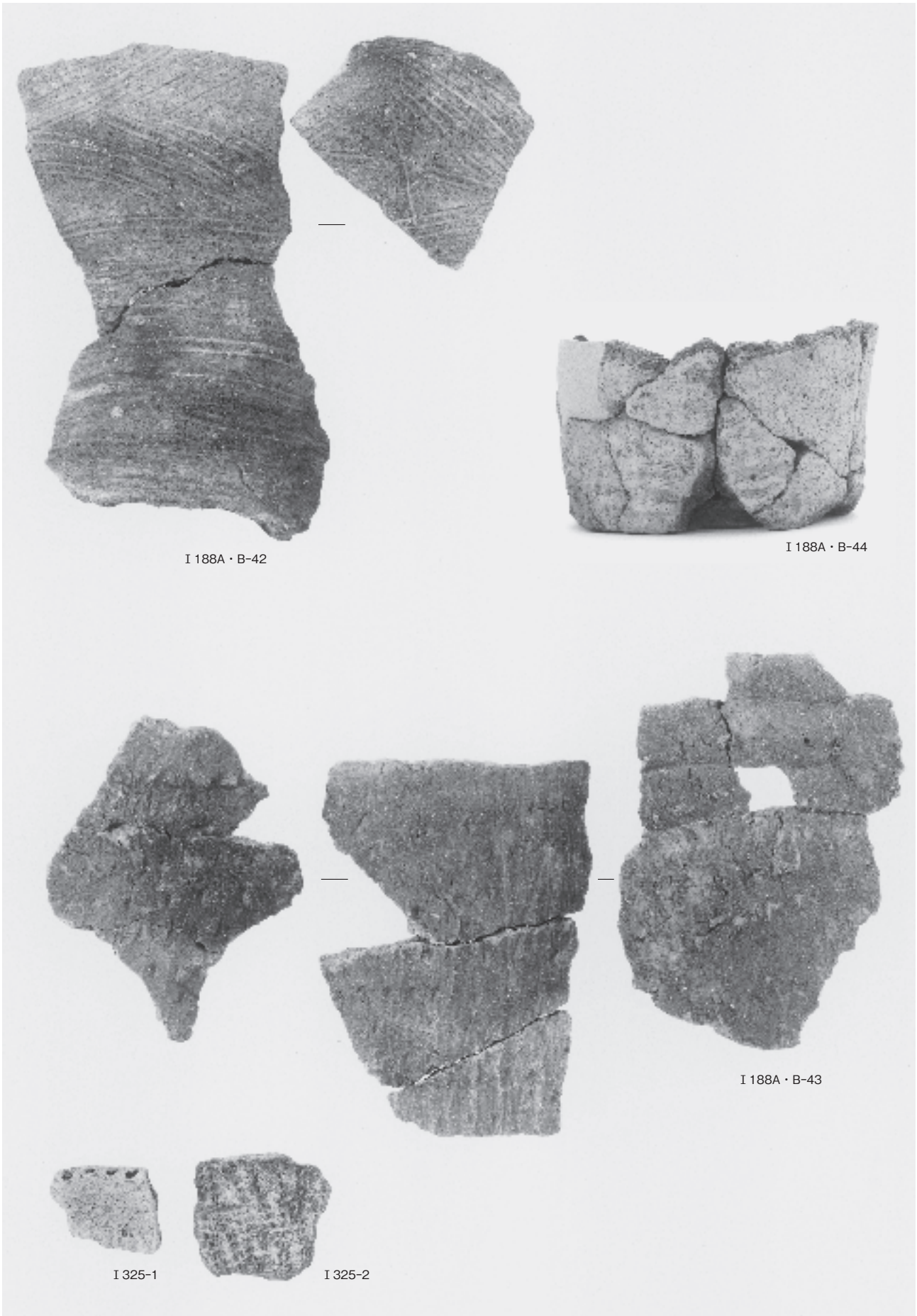
▲ Ⅰ352土師窯



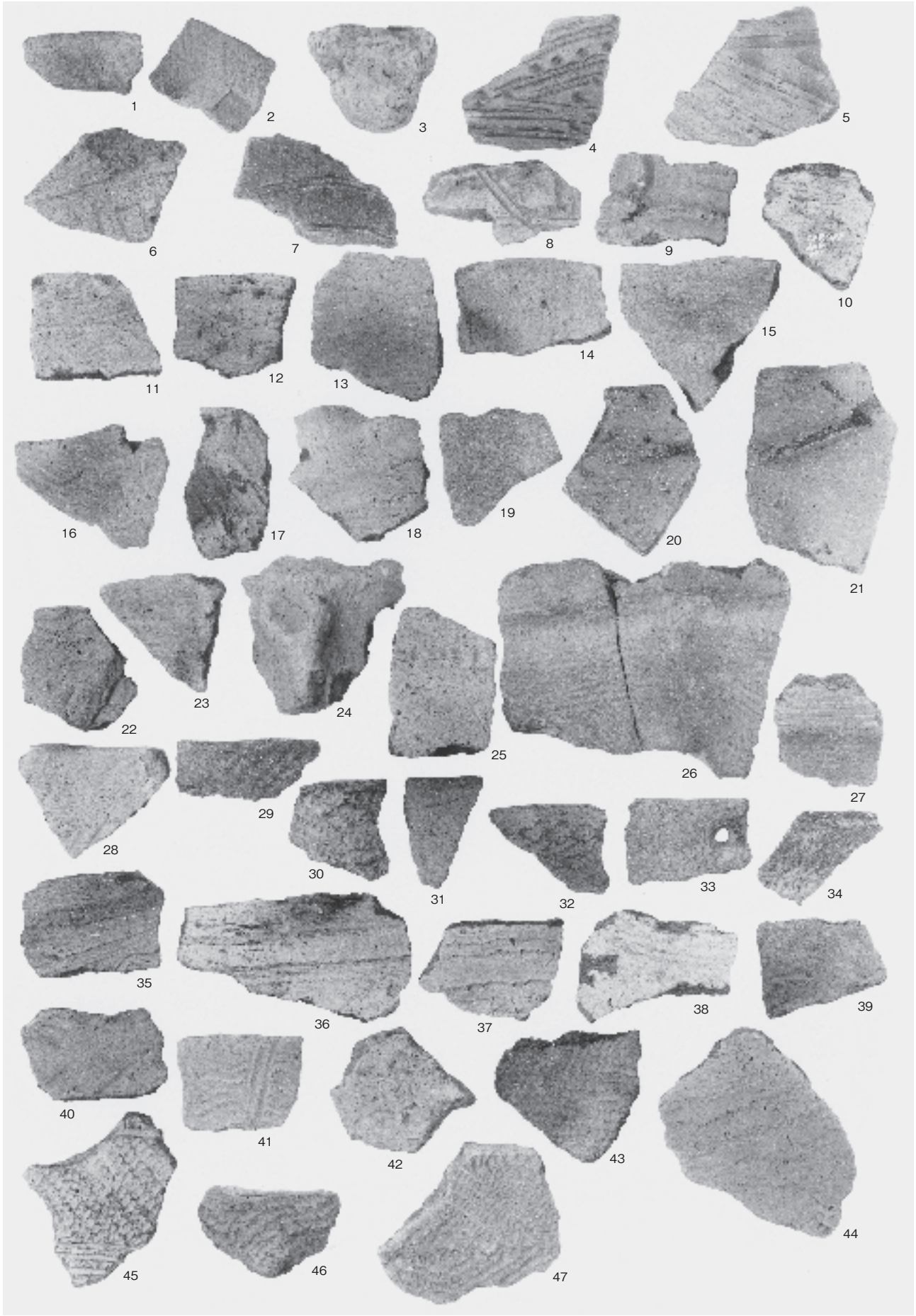
Ⅰ352土師器窯出土土器

I 416住居出土縄文土器

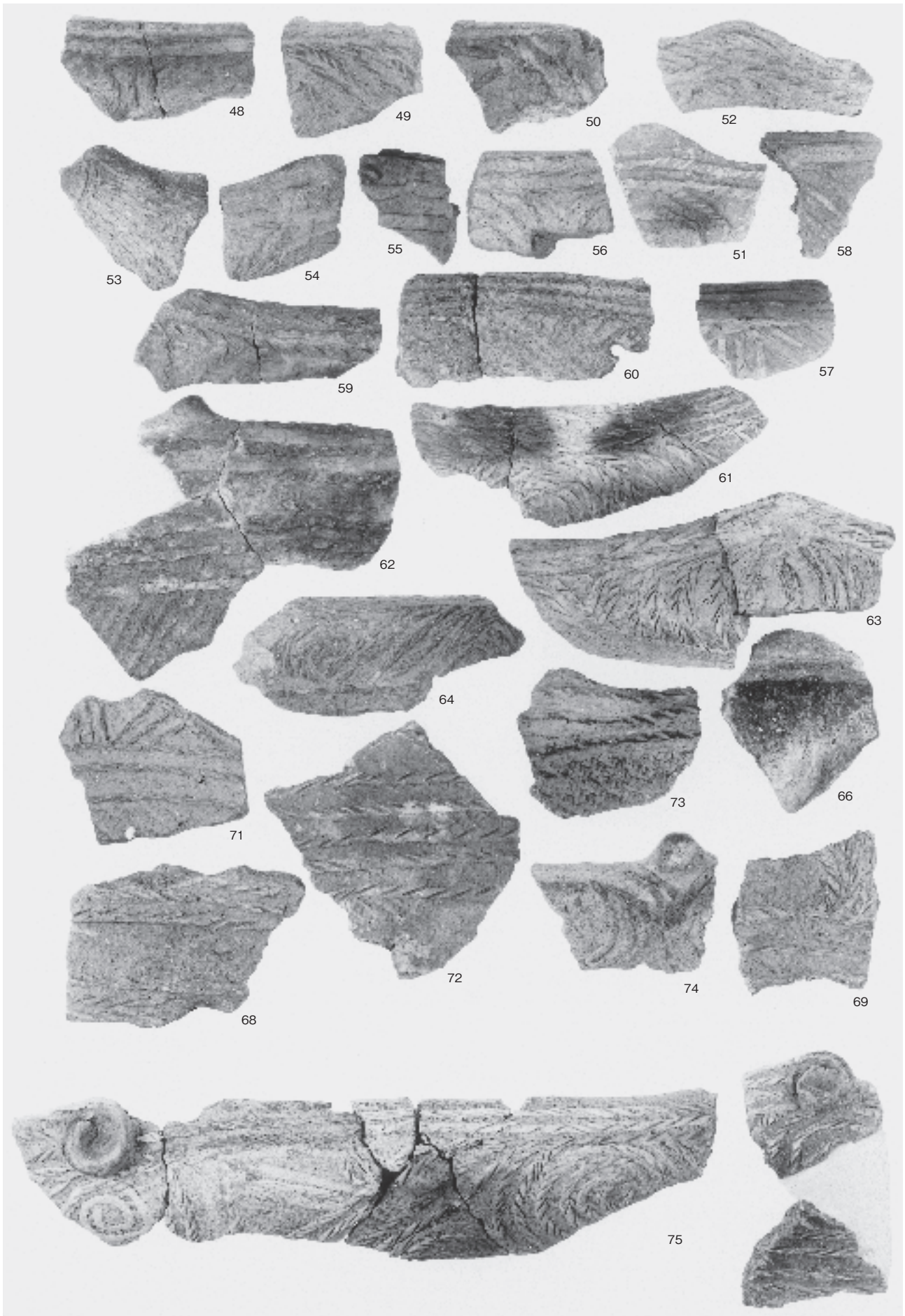
I 188A·B住居出土縄文土器（1）



Ⅰ188A･B（2）・Ⅰ325住居出土縄文土器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47

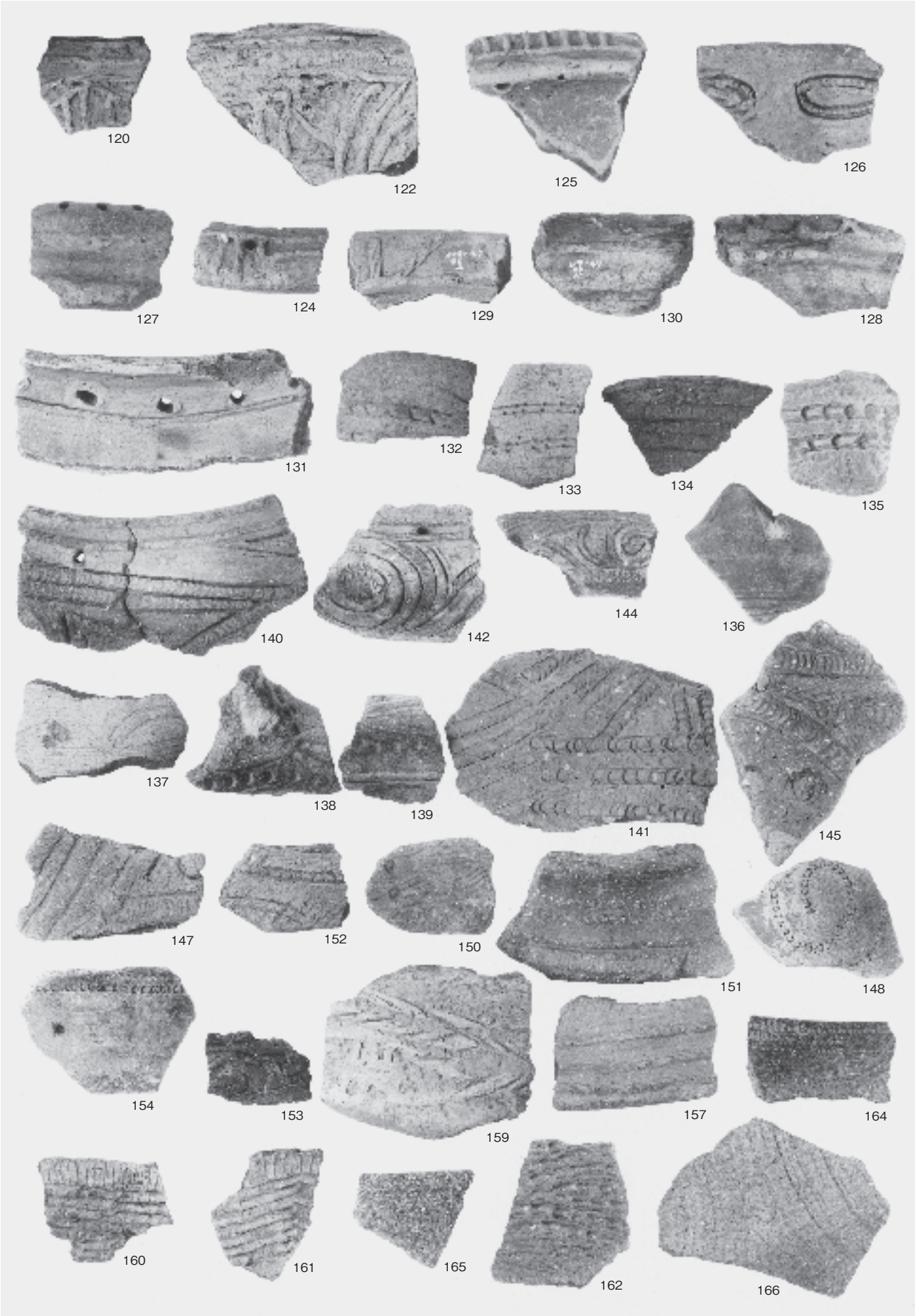
早期・前期縄文土器


48
49
50
52
53
54
55
56
51
58
59
60
57
61
62
63
64
73
66
71
72
74
69
68
75

前期縄文土器（1）

76
77
78
79
80
81
83
84
85
87
86
88
94
89
92
91
96
93
97
98
100
99
101
102
103
104
110
108
105
107
112
109
106
111
119
113
115
114
116
118

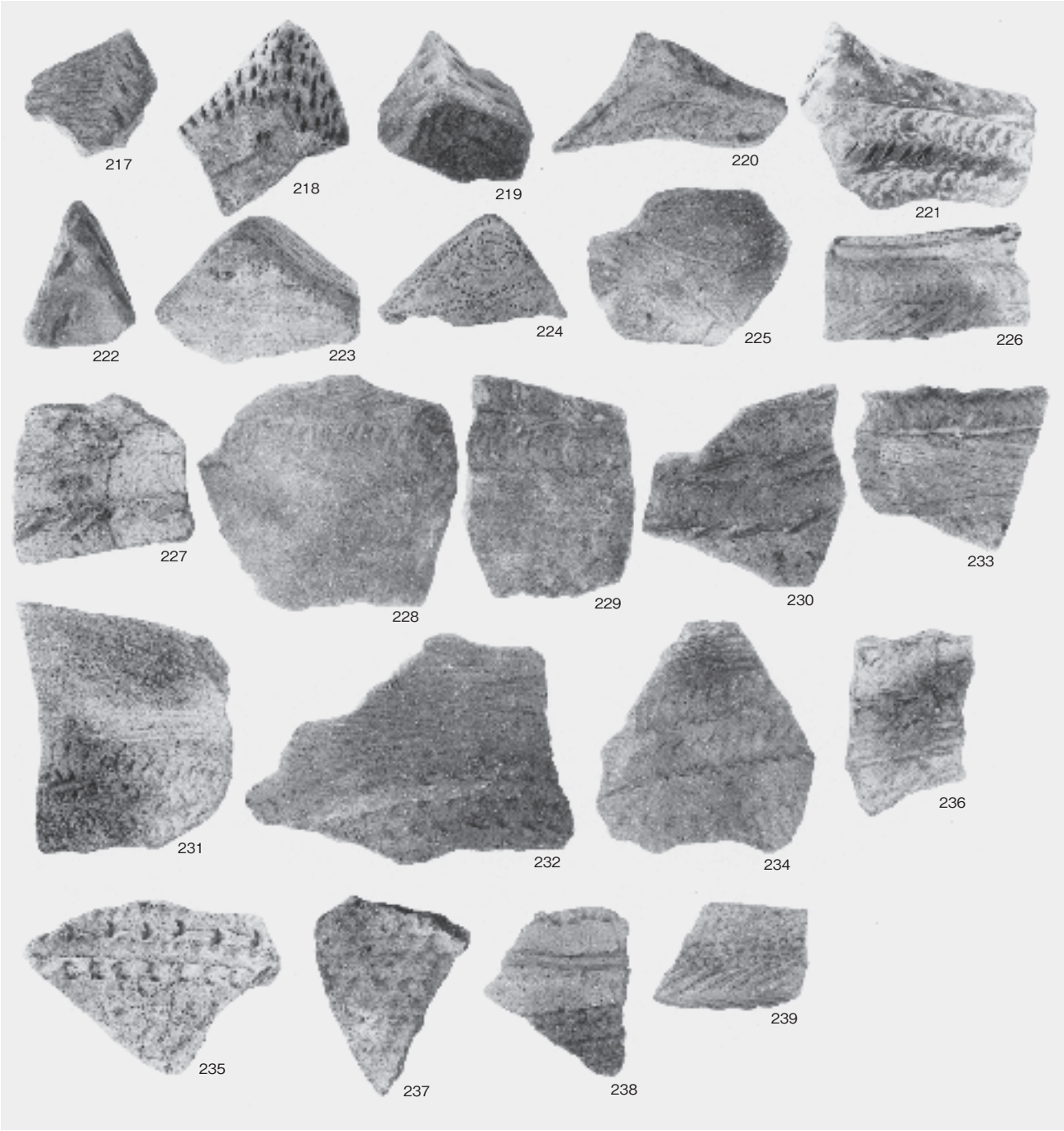
前期縄文土器（2）


120
122
125
126
127
124
129
130
128
131
132
133
134
135
140
142
144
136
137
138
139
141
145
147
152
150
151
148
154
153
159
157
164
160
161
165
162
166

前期縄文土器（3）

168
169
170
171
175
173
174
176
172
177
180
181
182
178
179
186
187
183
184
185
189
191
188
190
195
192
199
200
194
197
198
205
202
204
206
208
207
203
209
210
211
212
213
214
215
216

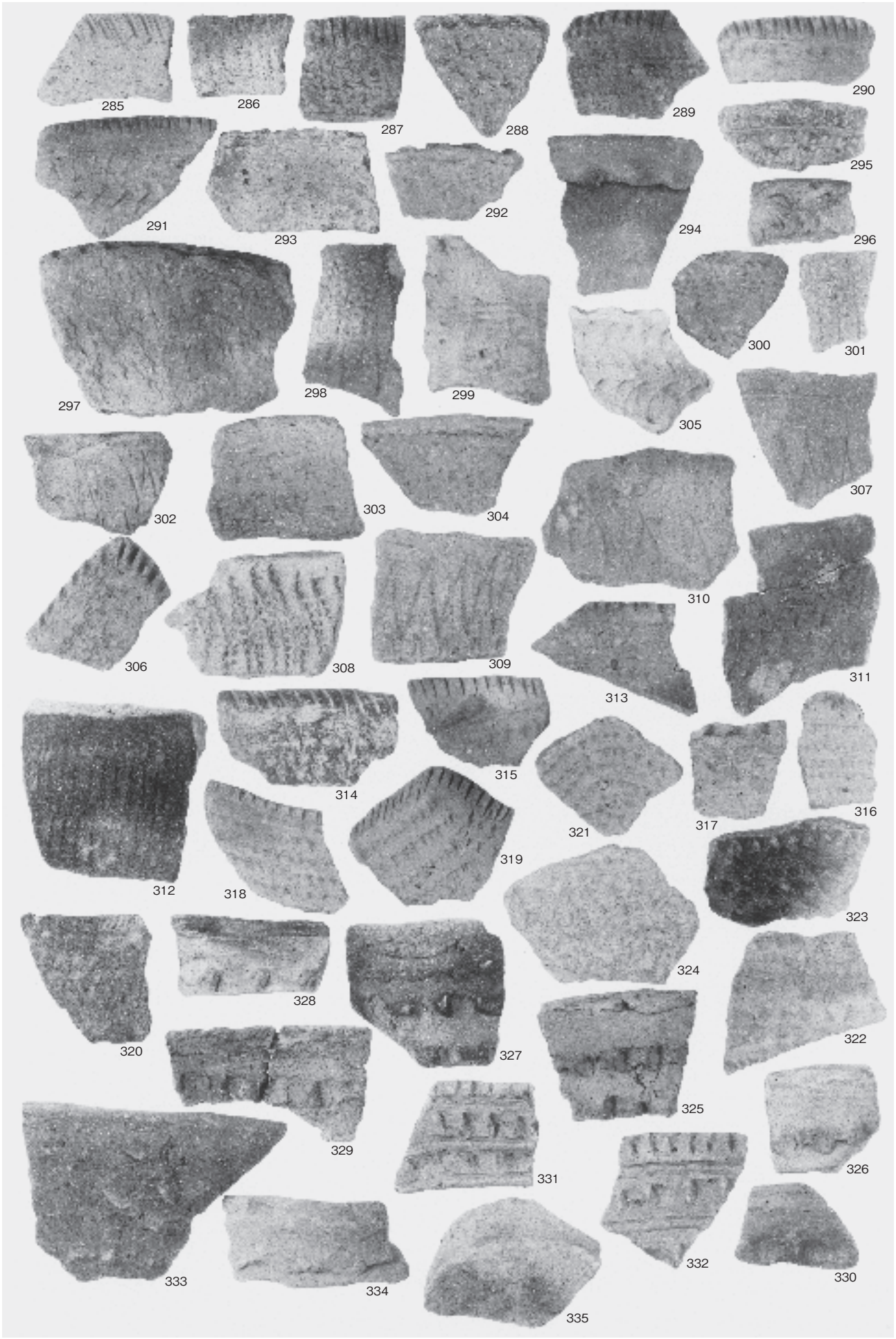
前期縄文土器（4）


217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
233
231
232
234
236
235
237
238
239

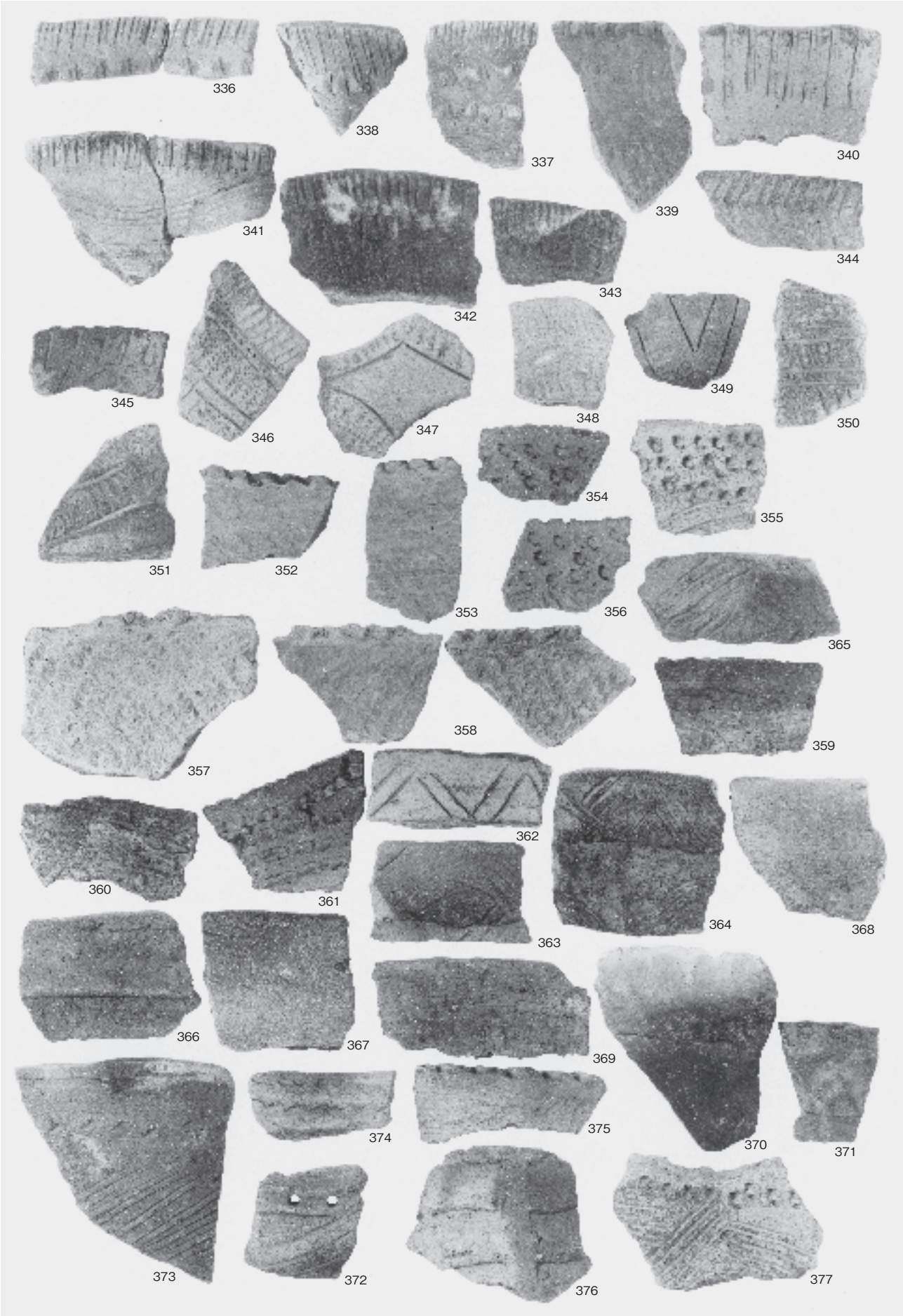
前期縄文土器（5）

240
241
242
243
244
249
246
247
248
245
250
252
253
255
251
254
256
257
258
259
260
261
262
263
265
266
264
268
270
271
267
269
274
275
276
272
273
278
282
277
280
283
284
279

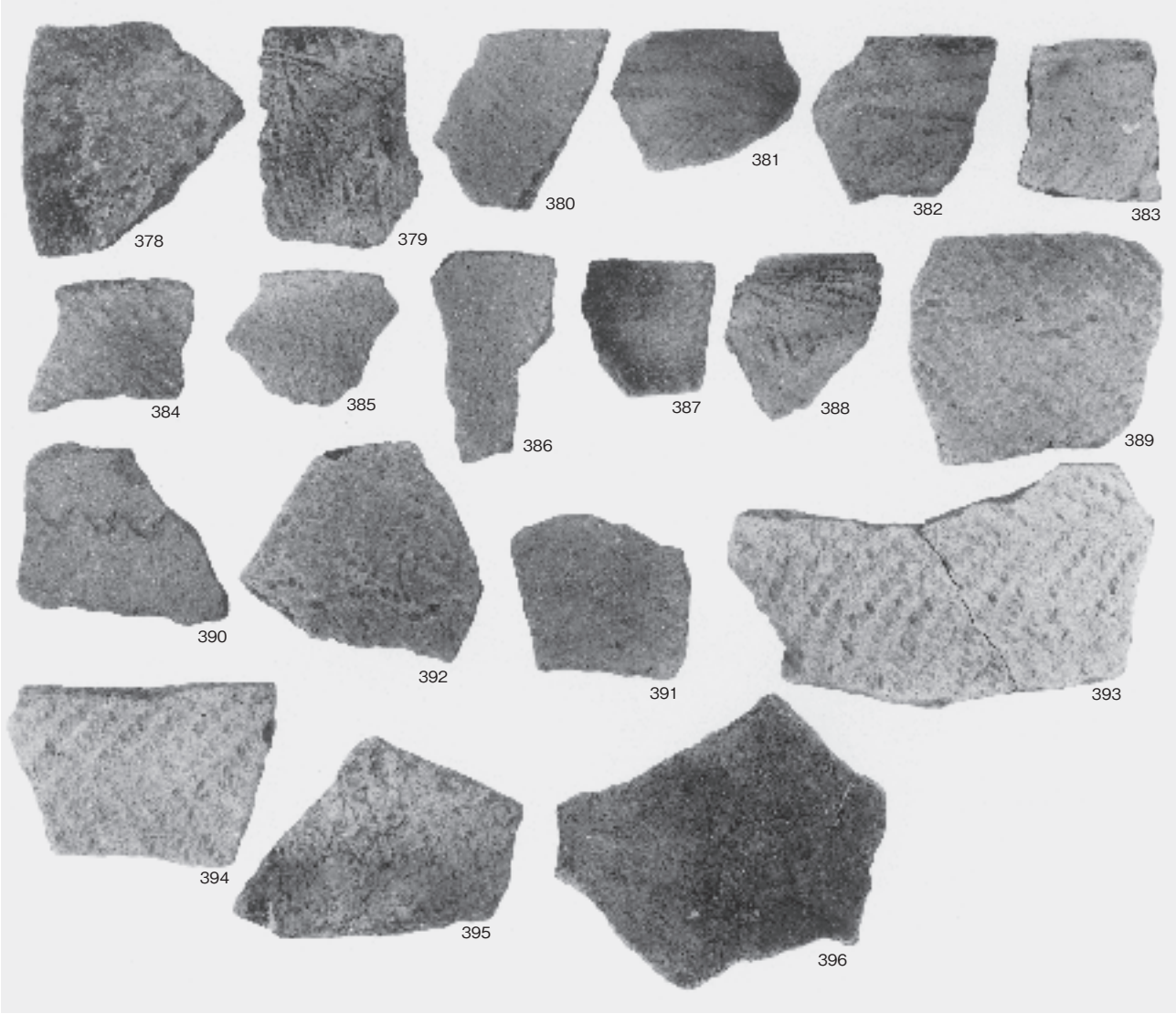
前期縄文土器（6）


285
286
287
288
289
290
291
293
292
294
295
296
297
298
299
300
301
305
302
303
304
307
306
308
309
310
311
313
312
314
315
316
317
321
318
319
323
324
328
320
327
322
325
329
331
326
333
334
332
330
335

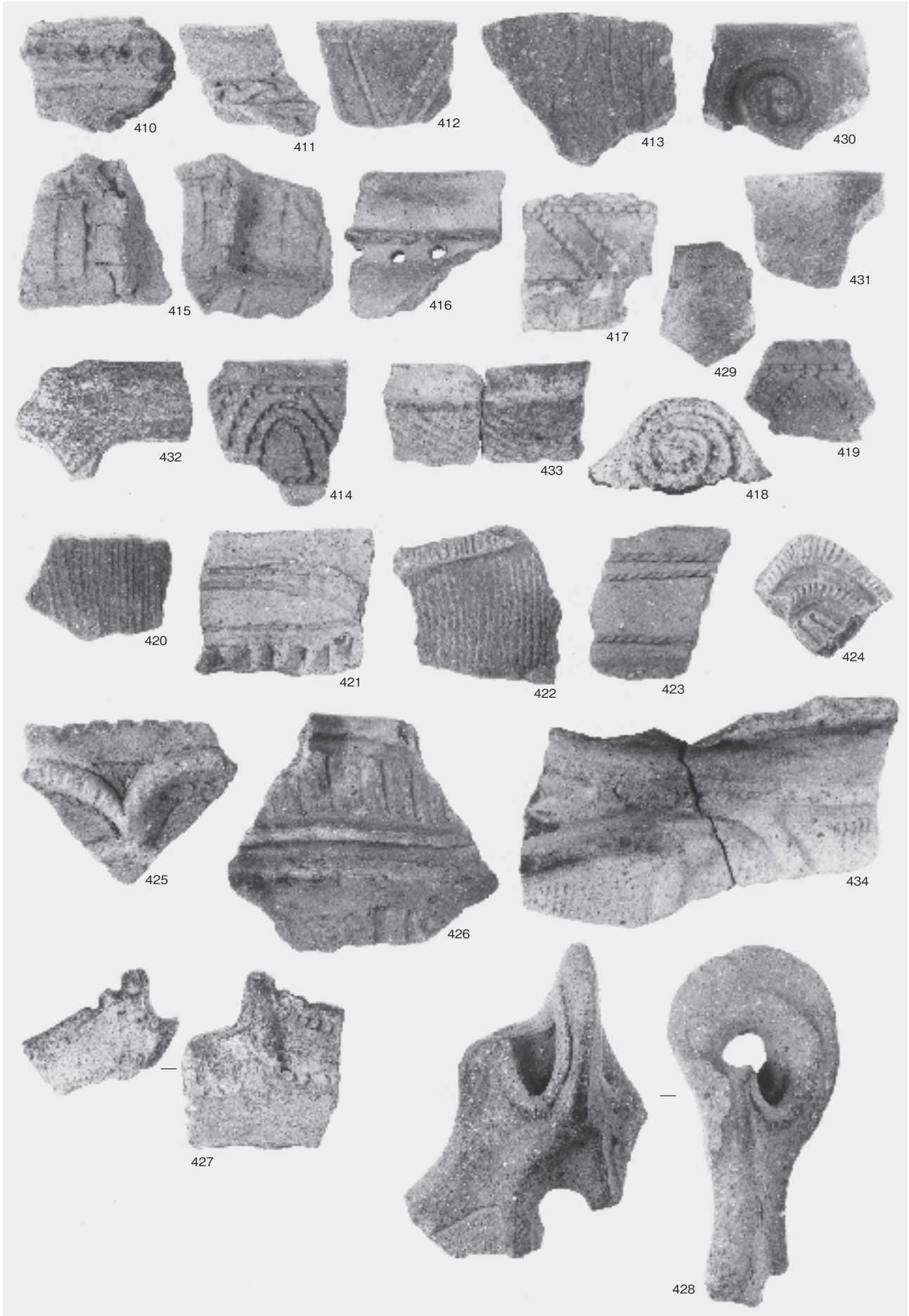
前期縄文土器（7）


336
338
337
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377

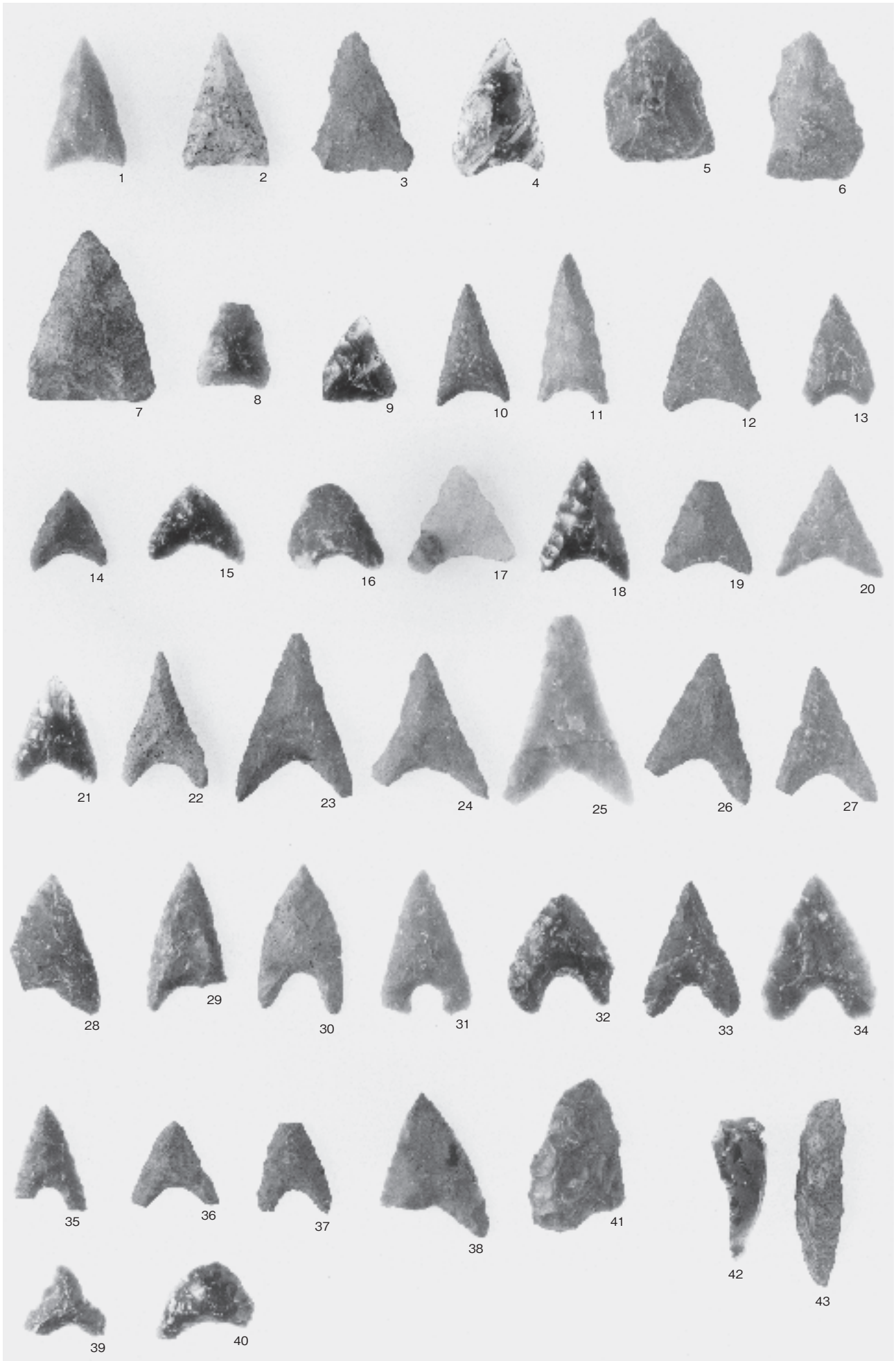
前期縄文土器（8）


378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
392
391
393
394
395
396

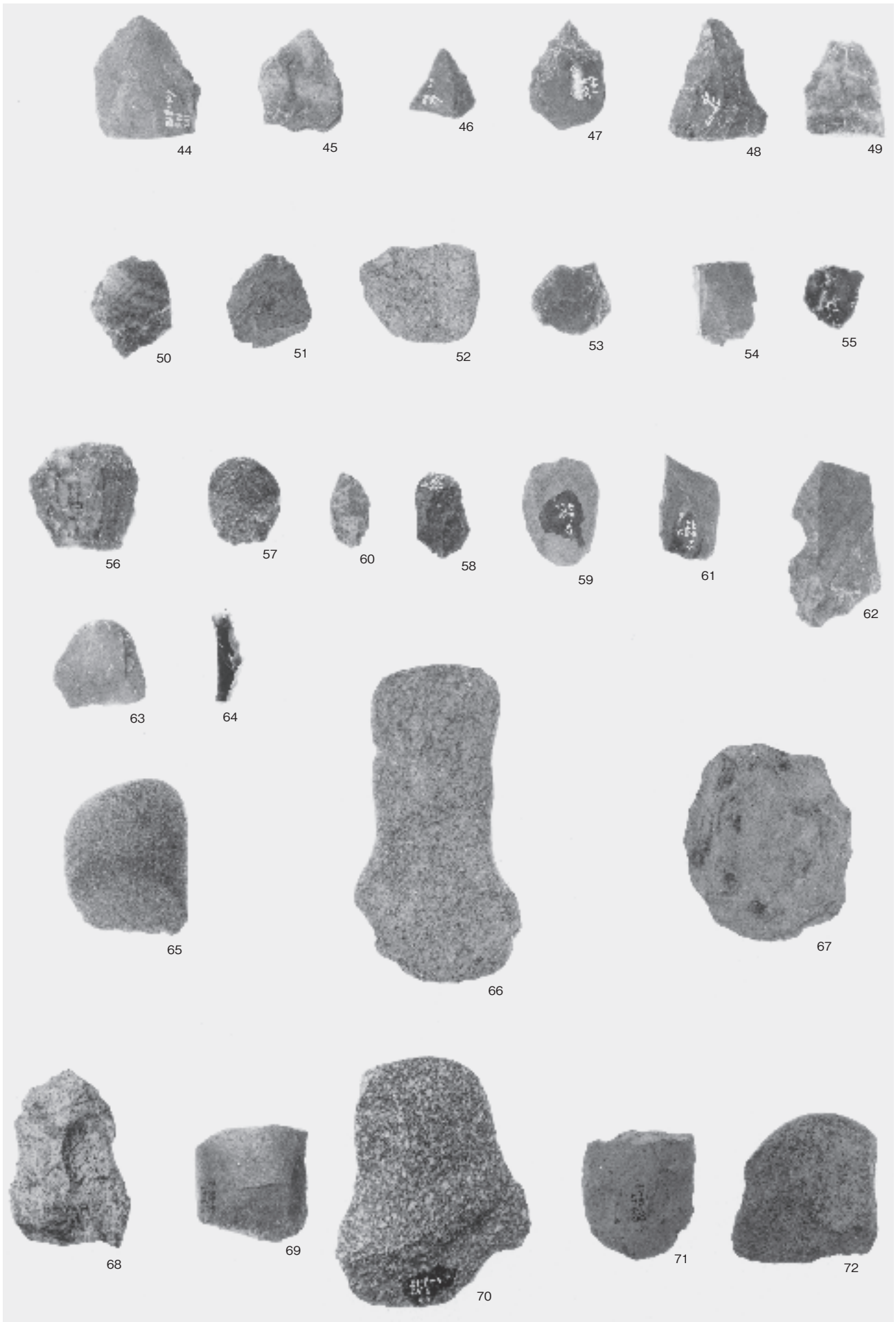
前期縄文土器（9）


410
411
412
413
430
415
416
417
429
431
432
414
433
418
419
420
421
422
423
424
425
426
434
427
428

中期縄文土器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
41
42
43
39
40

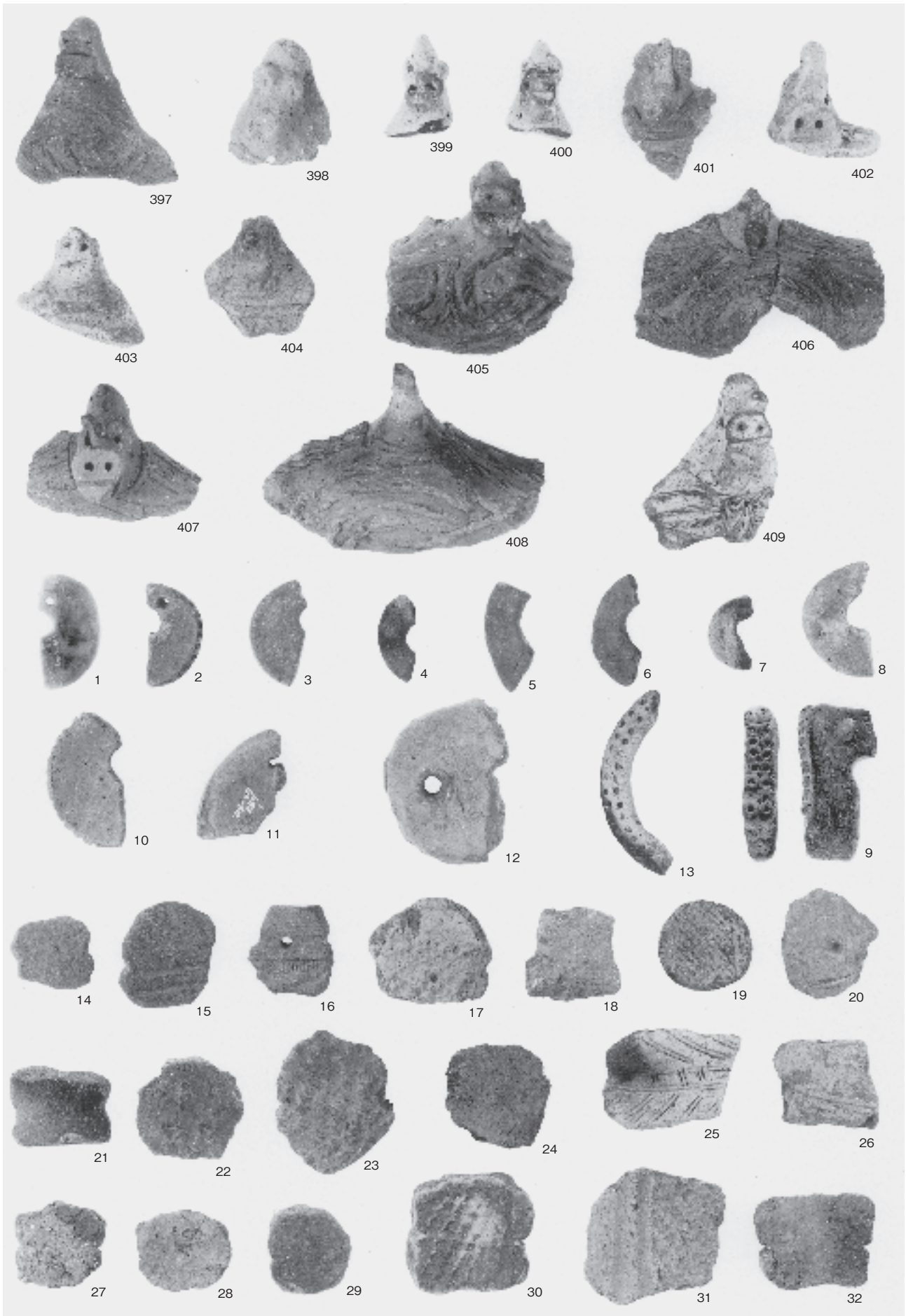
縄文時代石鏃・石錐



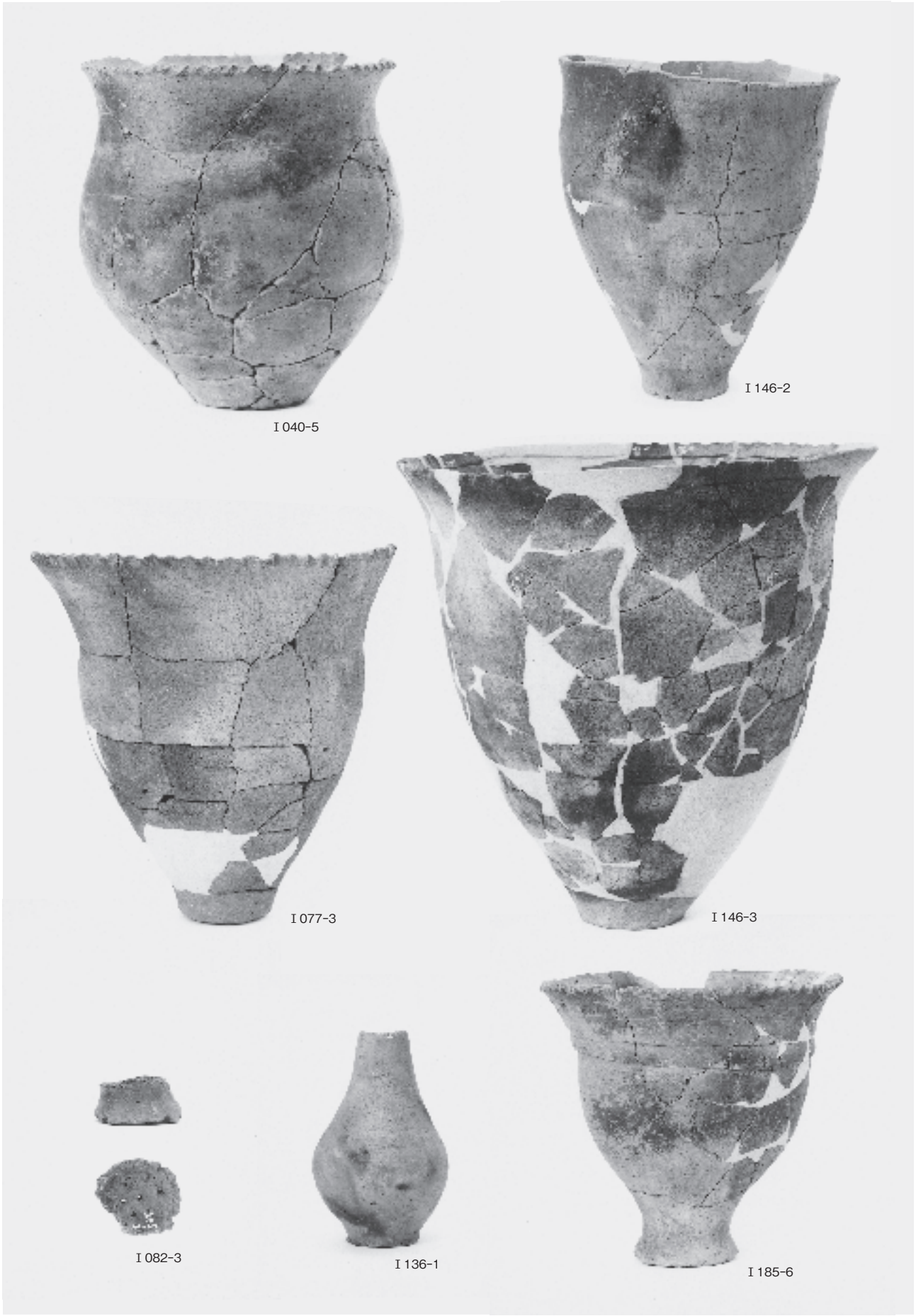
縄文時代石鏃未製品・石篦・楔形石器・二次加工剥片・石核等・打製石斧

縄文時代磨製石斧・礫石斧・磨石

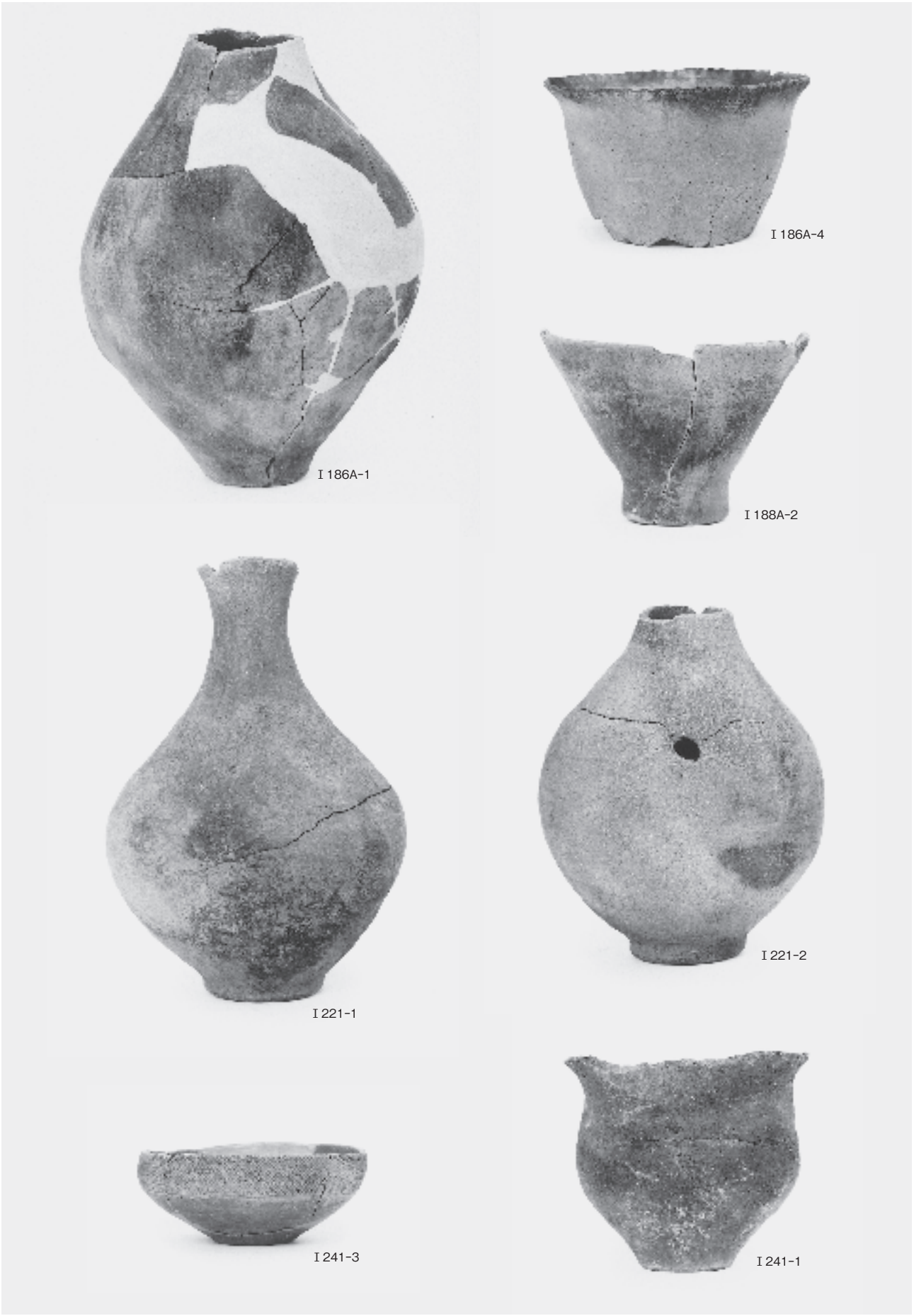
縄文時代磨石・敲石・凹石



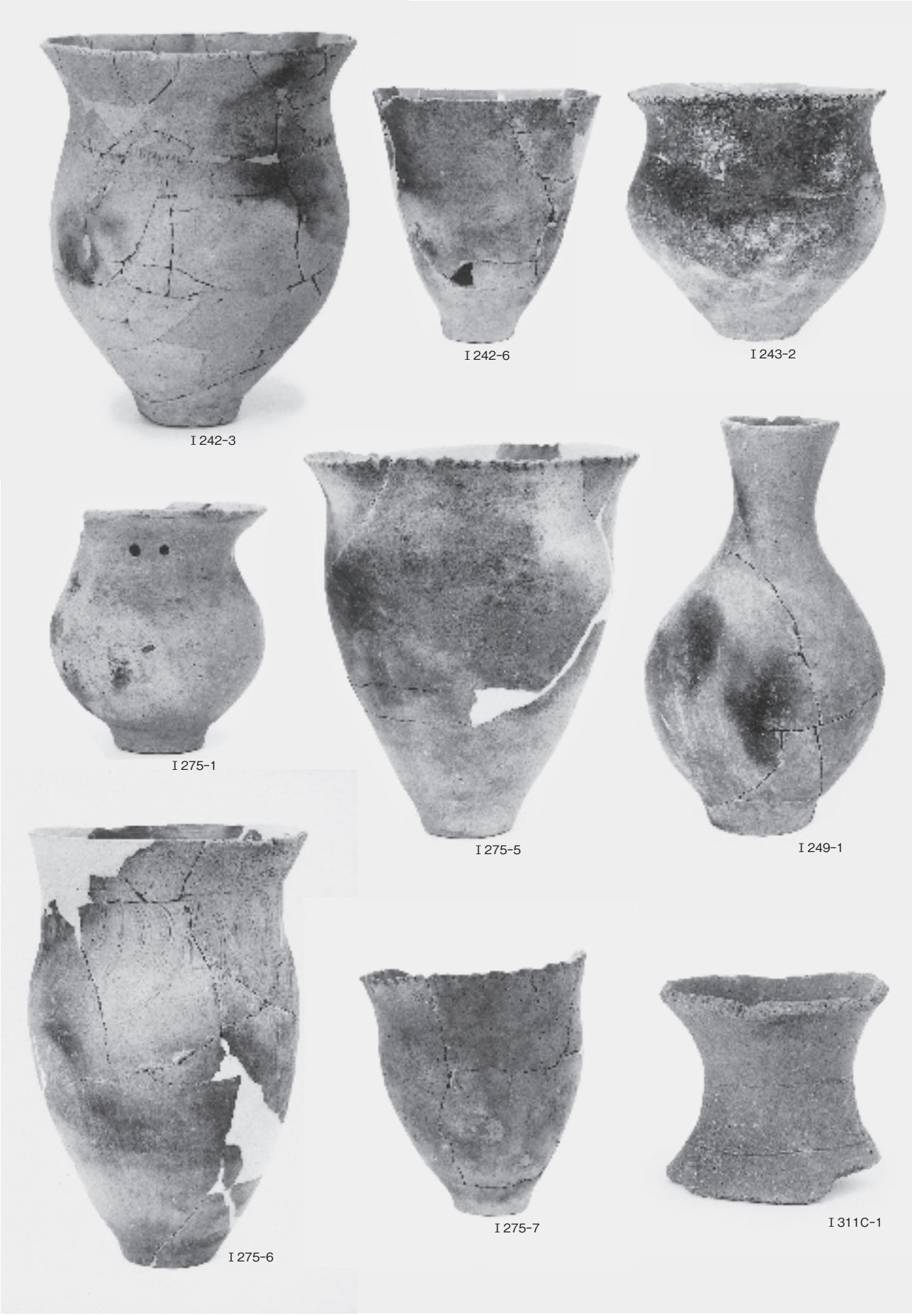
縄文時代獣面把手・耳飾・玦状耳飾・土器片錘



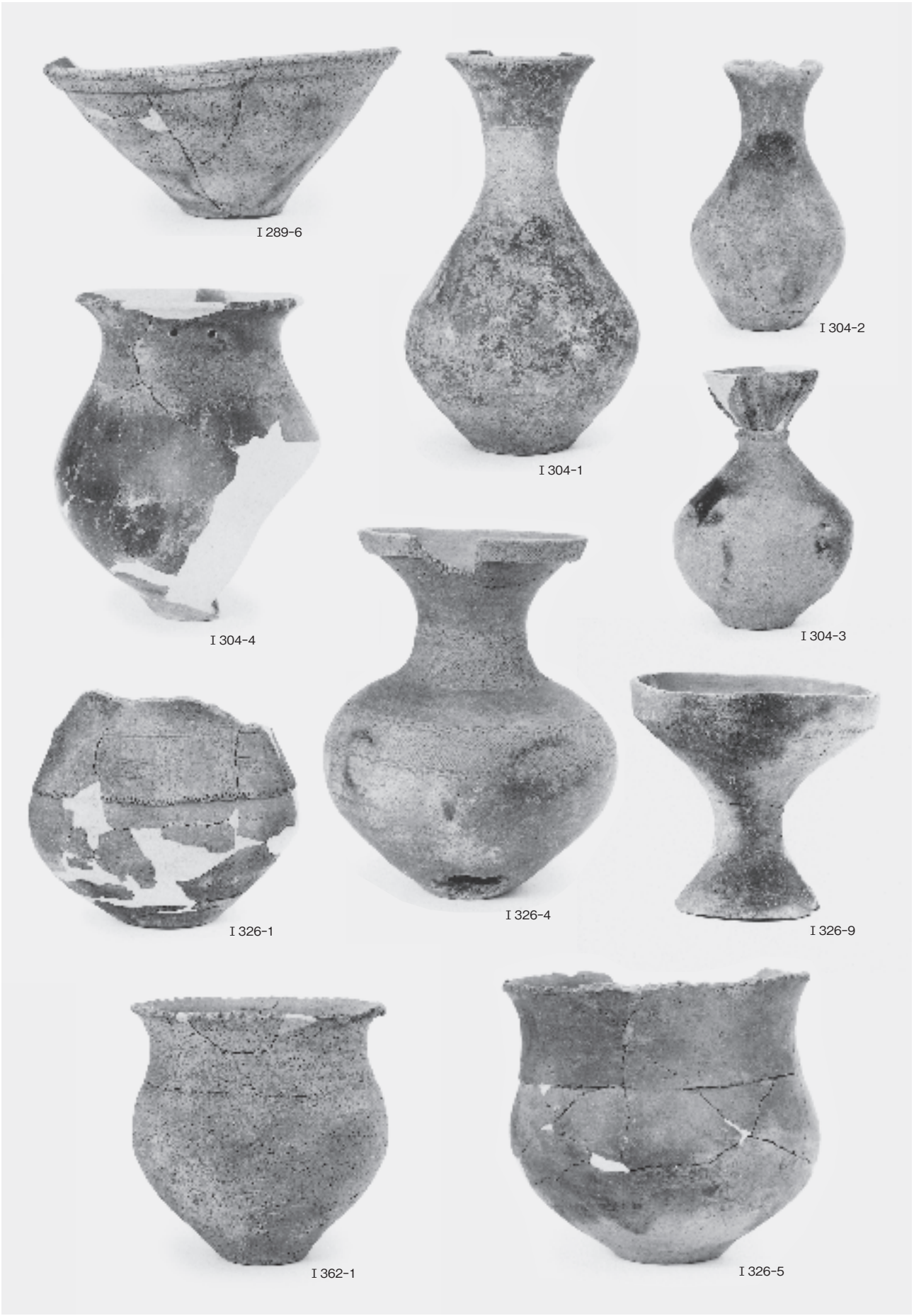
弥生土器（1）



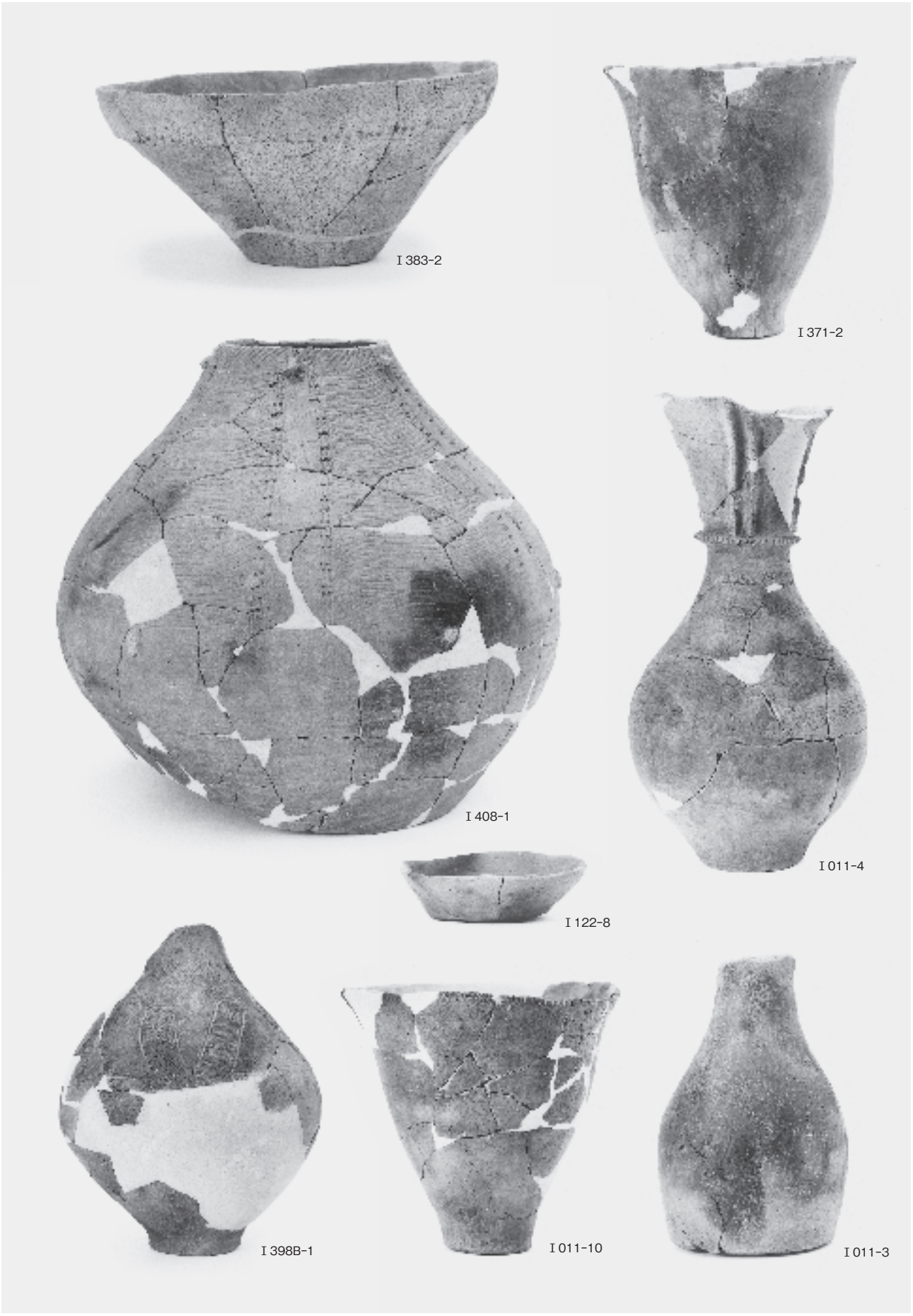
弥生土器（2）



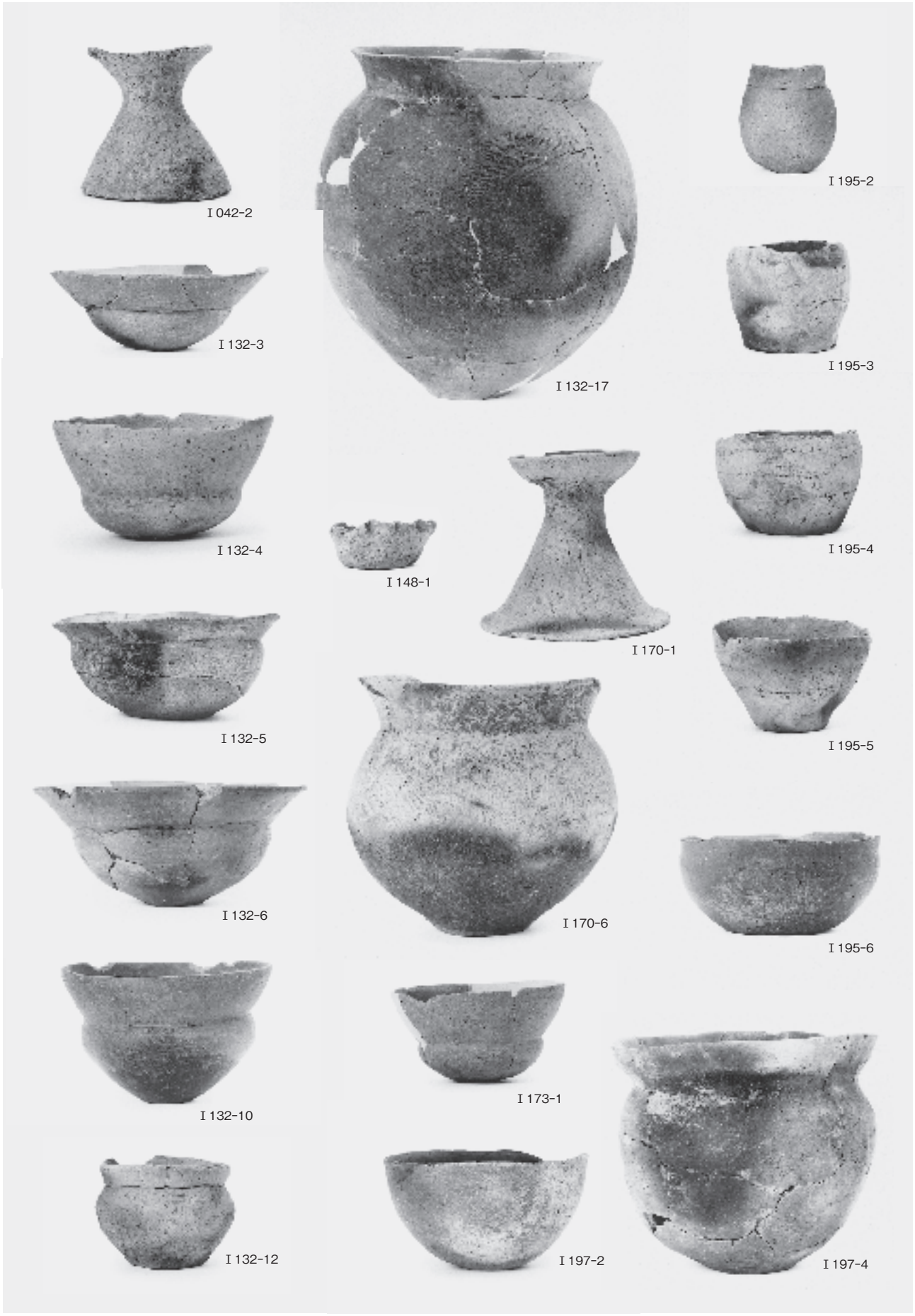
弥生土器（3）


I 289-6
I 304-1
I 304-2
I 304-4
I 304-3
I 326-4
I 326-1
I 326-9
I 362-1
I 326-5

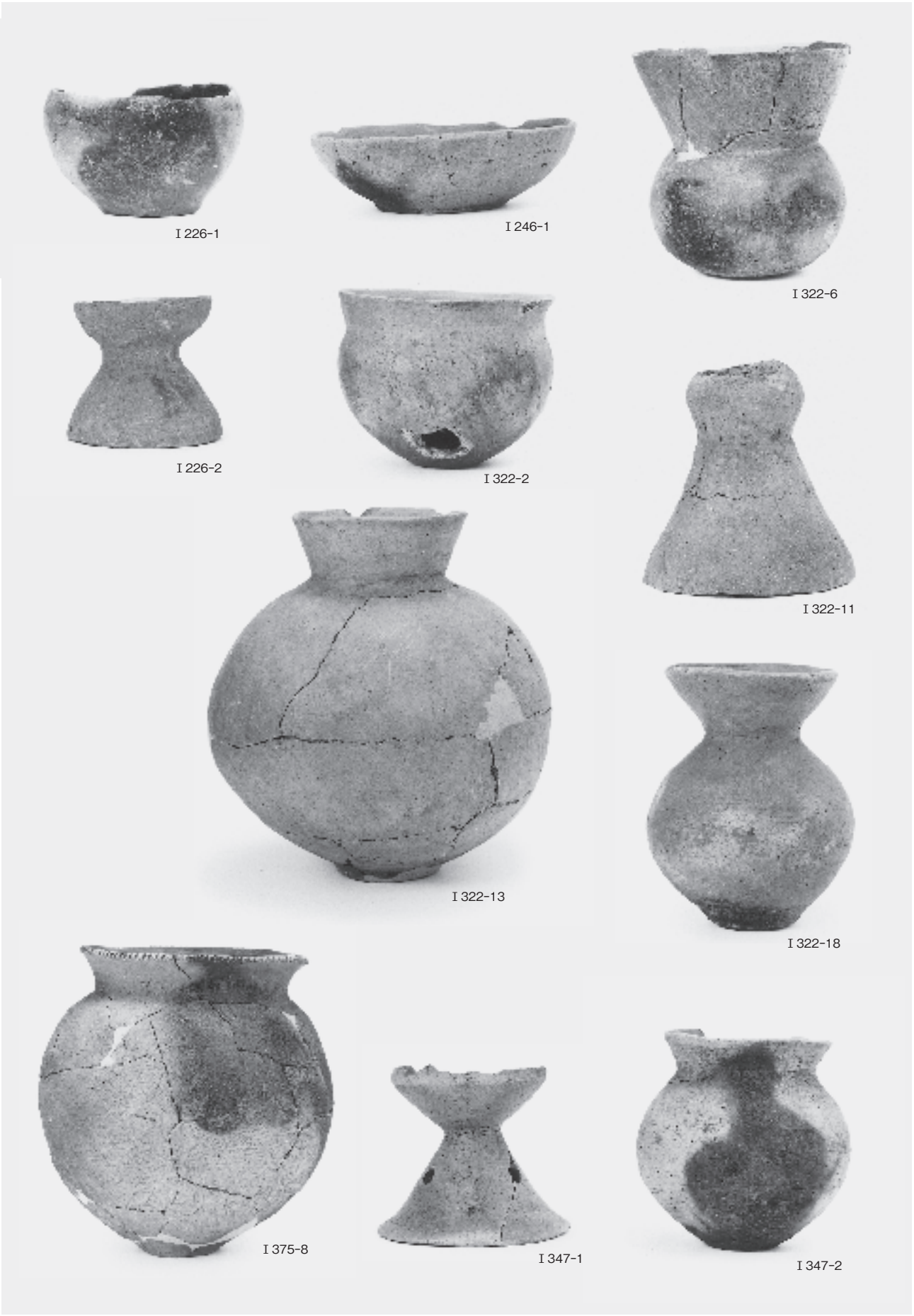
弥生土器（4）



弥生土器（5）


I 042-2
I 132-3
I 132-4
I 132-5
I 132-6
I 132-10
I 132-12
I 132-17
I 148-1
I 170-1
I 170-6
I 173-1
I 197-2
I 195-2
I 195-3
I 195-4
I 195-5
I 195-6
I 197-4

土師器（1）


I 226-1
I 246-1
I 322-6
I 226-2
I 322-2
I 322-11
I 322-13
I 322-18
I 375-8
I 347-1
I 347-2

土師器（2）

I 391-3

I 391-12

I 342B-5

I 397-2

I 342B-7

I 429-1

6E-99-3

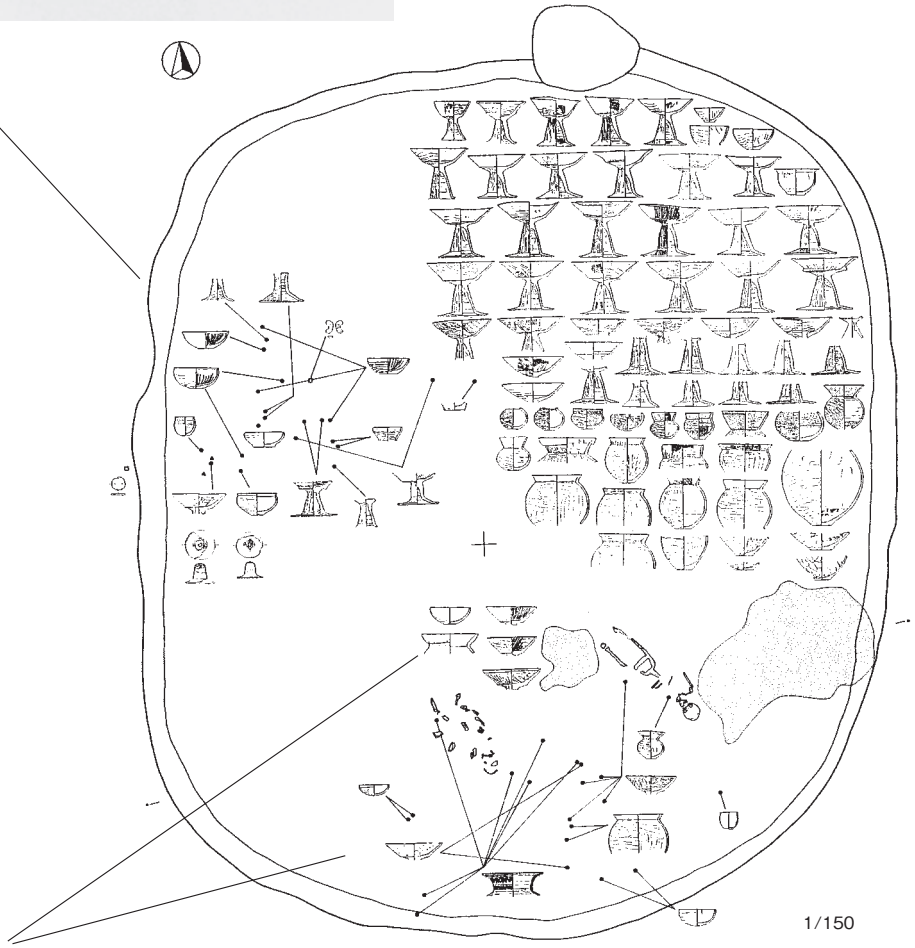
6E-49-1

7E-49-1

土師器（3）

図版58

Ⅰ186A　地点４　出土土器



1/150

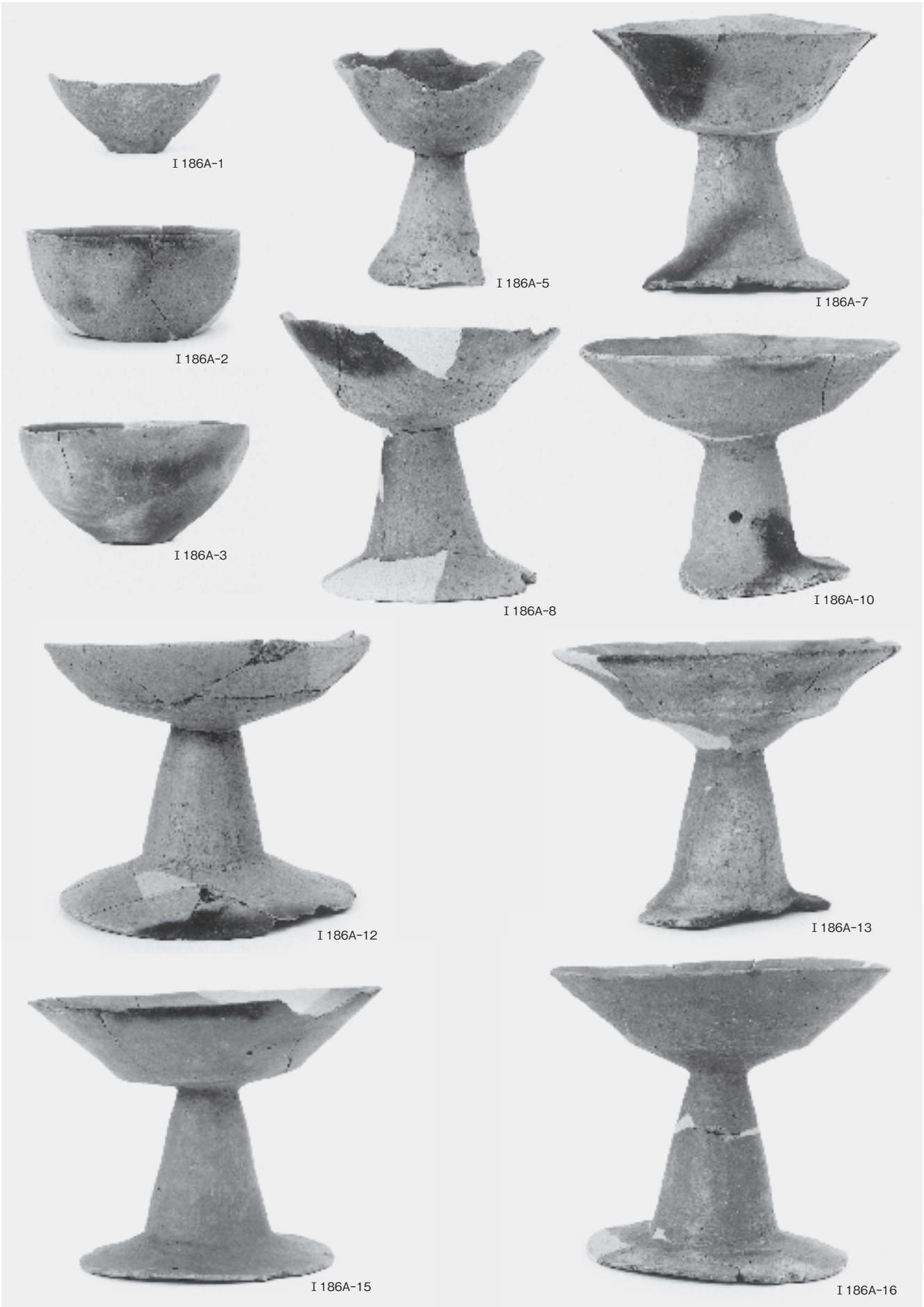
Ⅰ186A　地点２・地点３　出土土器

土師器（4）

Ⅰ186A　地点1出土土器（高坏）

Ⅰ186A　地点1出土土器（坩・壺・甕ほか）

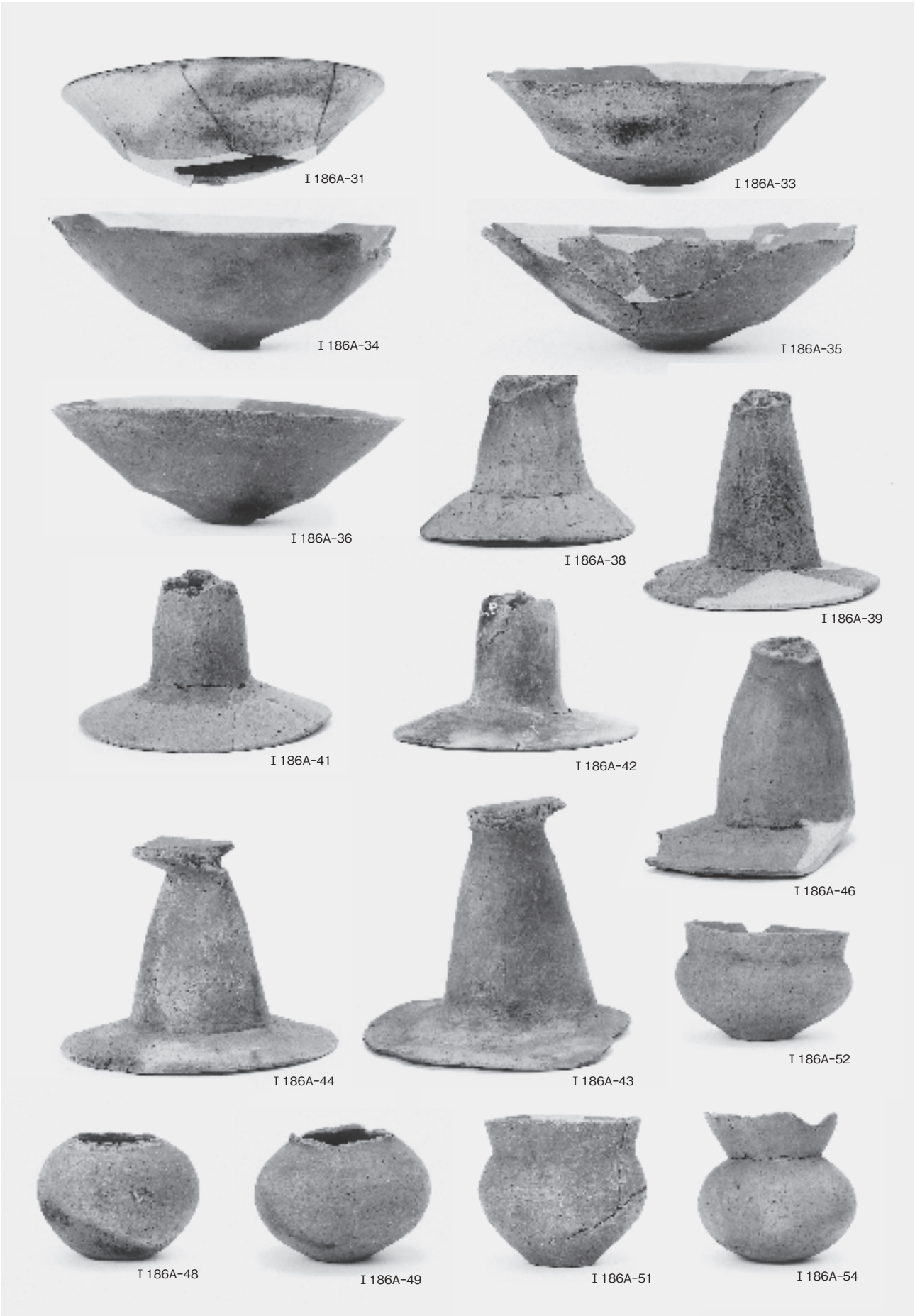
土師器（5）


I 186A-1
I 186A-5
I 186A-7
I 186A-2
I 186A-3
I 186A-8
I 186A-10
I 186A-12
I 186A-13
I 186A-15
I 186A-16

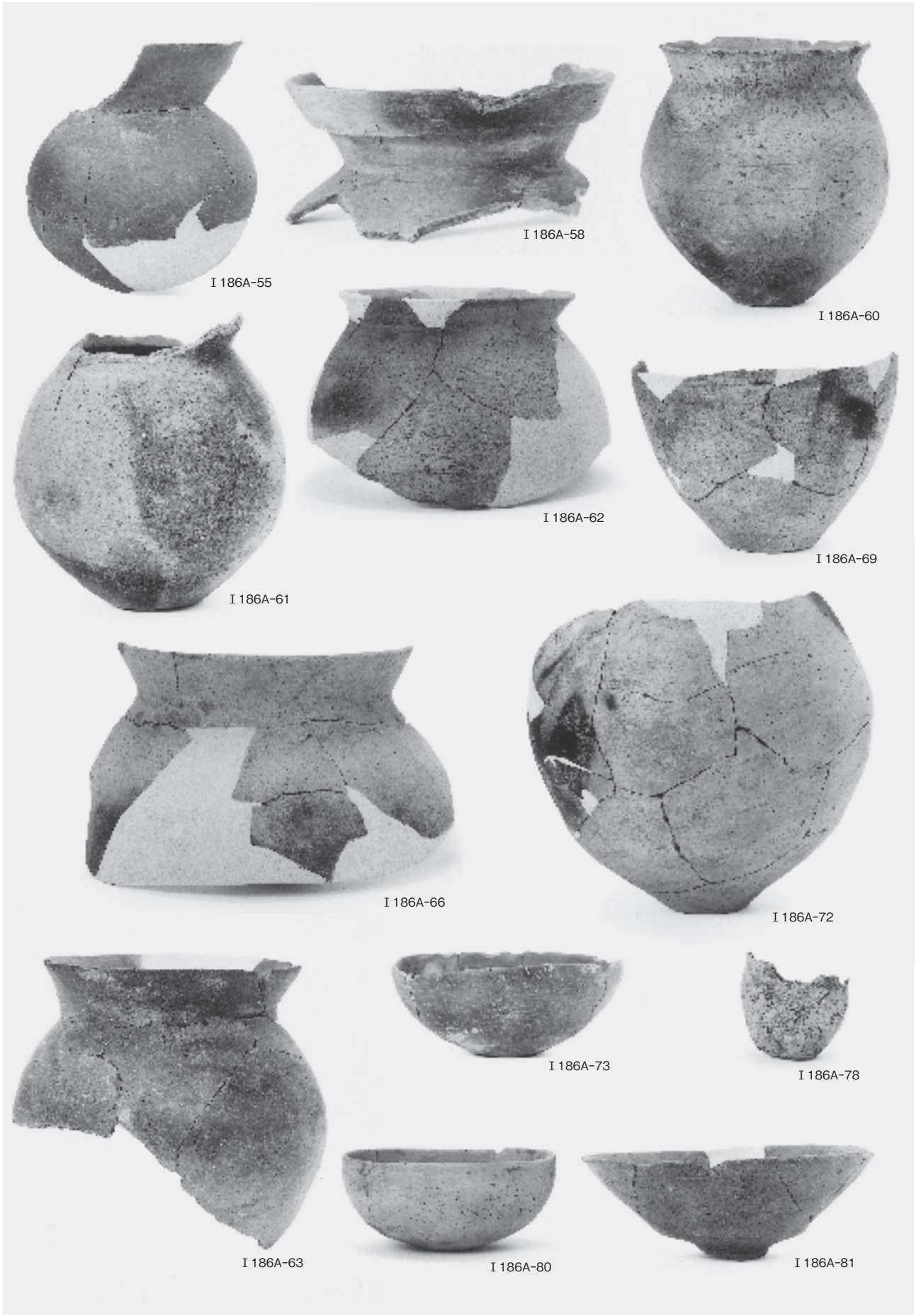
土師器（6）

土師器（7）

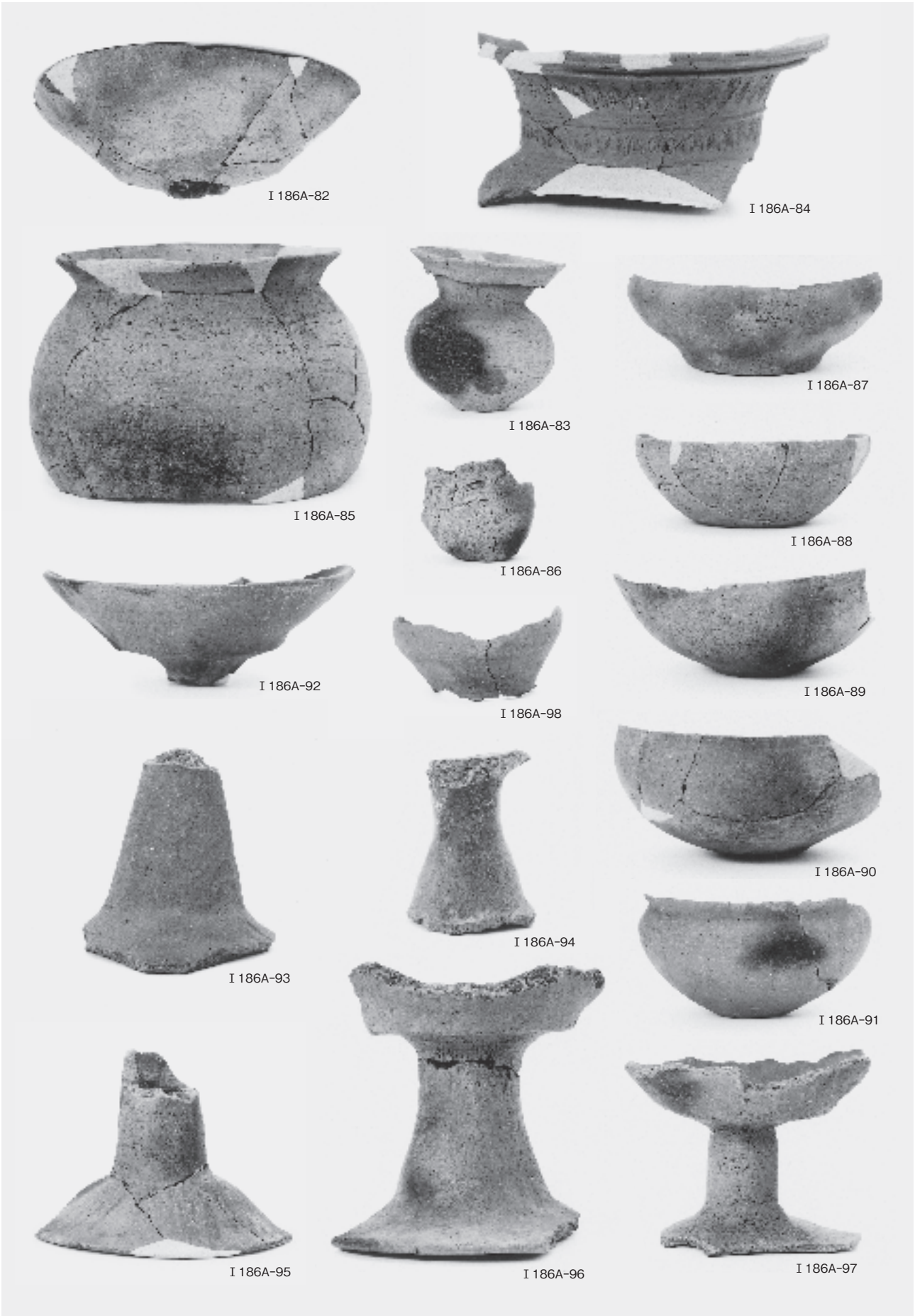
土師器（8）


I 186A-31
I 186A-33
I 186A-34
I 186A-35
I 186A-36
I 186A-38
I 186A-39
I 186A-41
I 186A-42
I 186A-46
I 186A-44
I 186A-43
I 186A-52
I 186A-48
I 186A-49
I 186A-51
I 186A-54

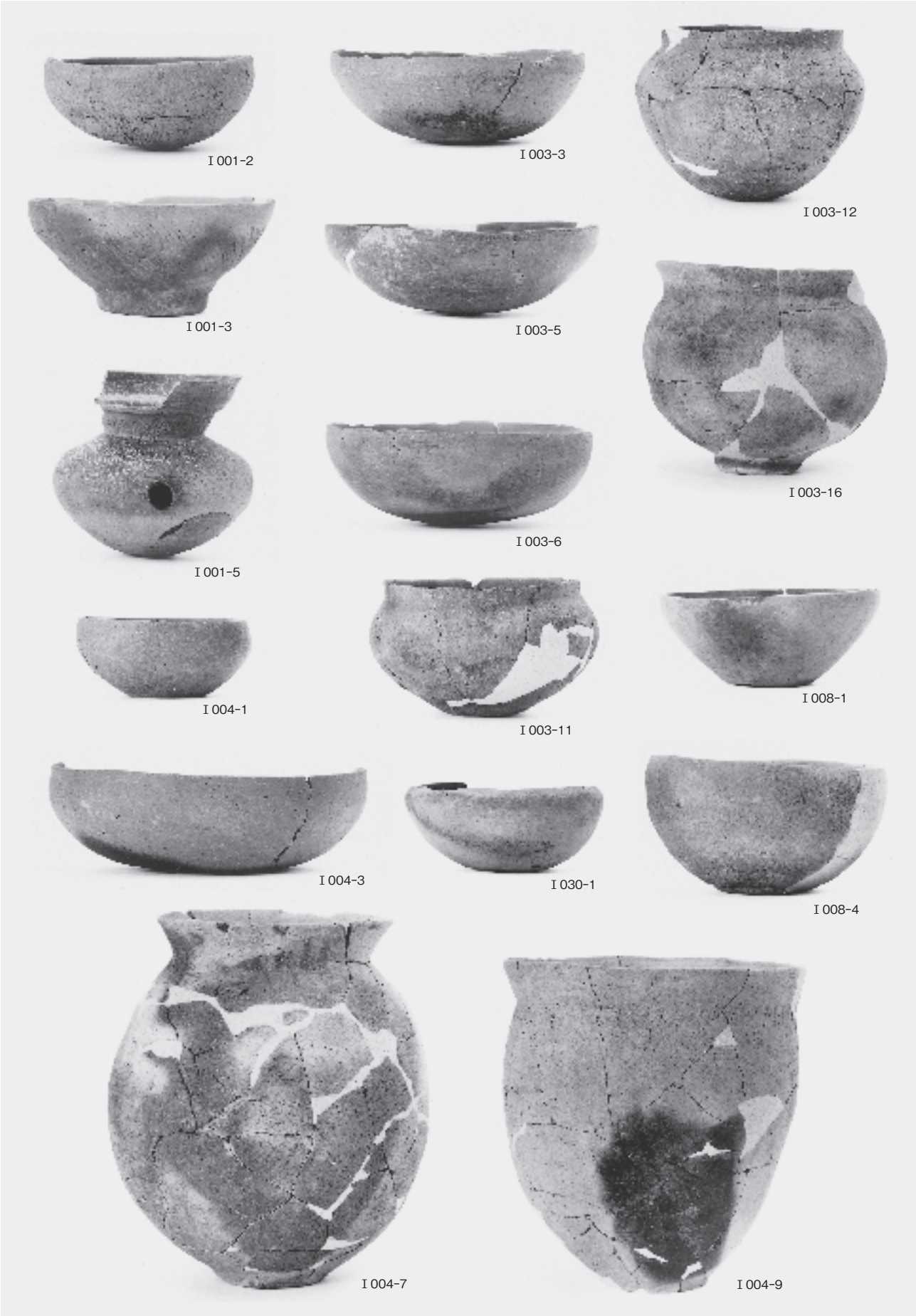
土師器（9）


I 186A-55
I 186A-58
I 186A-60
I 186A-61
I 186A-62
I 186A-69
I 186A-66
I 186A-72
I 186A-63
I 186A-73
I 186A-78
I 186A-80
I 186A-81

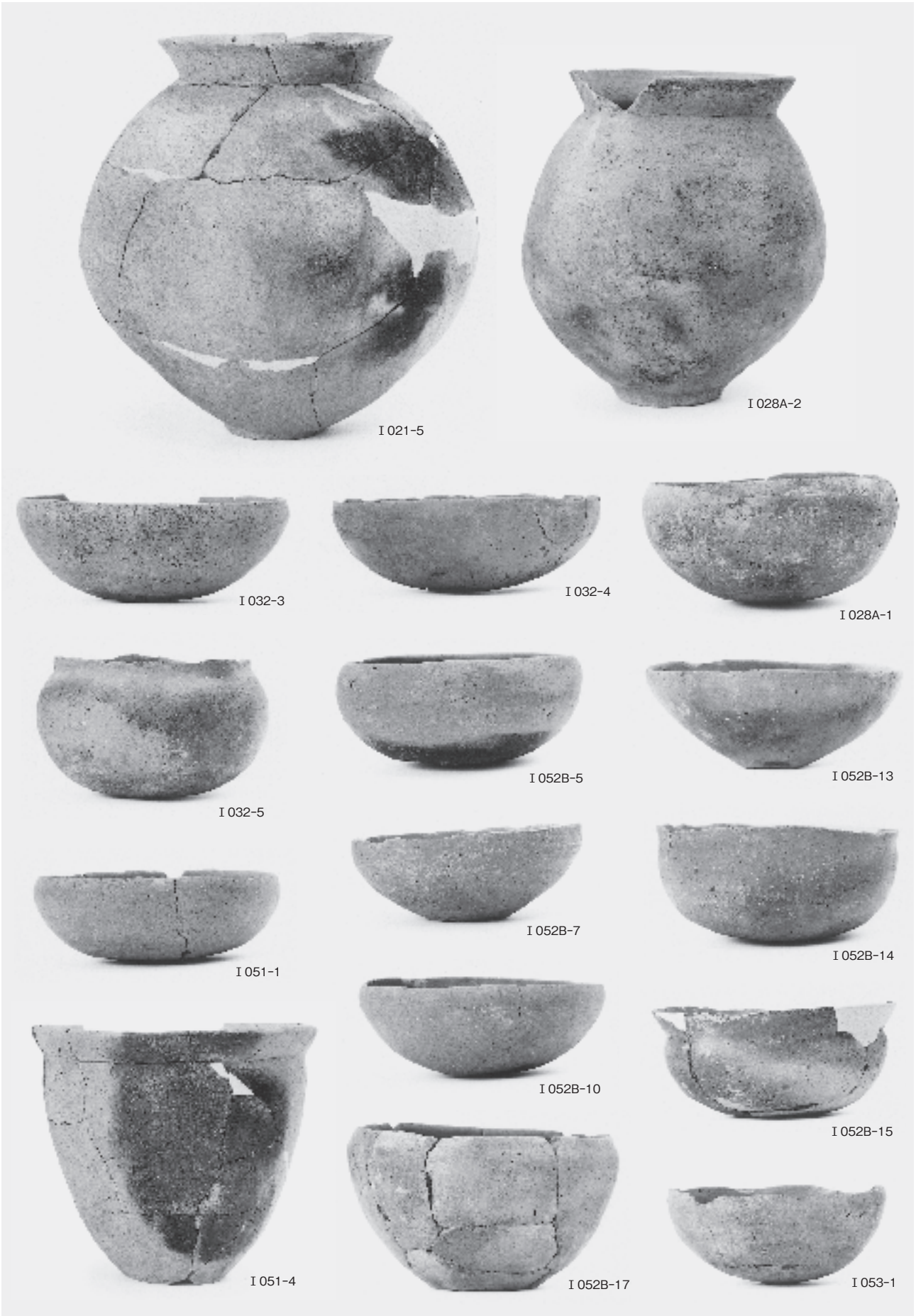
土師器（10）


I 186A-82
I 186A-84
I 186A-85
I 186A-83
I 186A-87
I 186A-86
I 186A-88
I 186A-92
I 186A-98
I 186A-89
I 186A-93
I 186A-94
I 186A-90
I 186A-91
I 186A-95
I 186A-96
I 186A-97

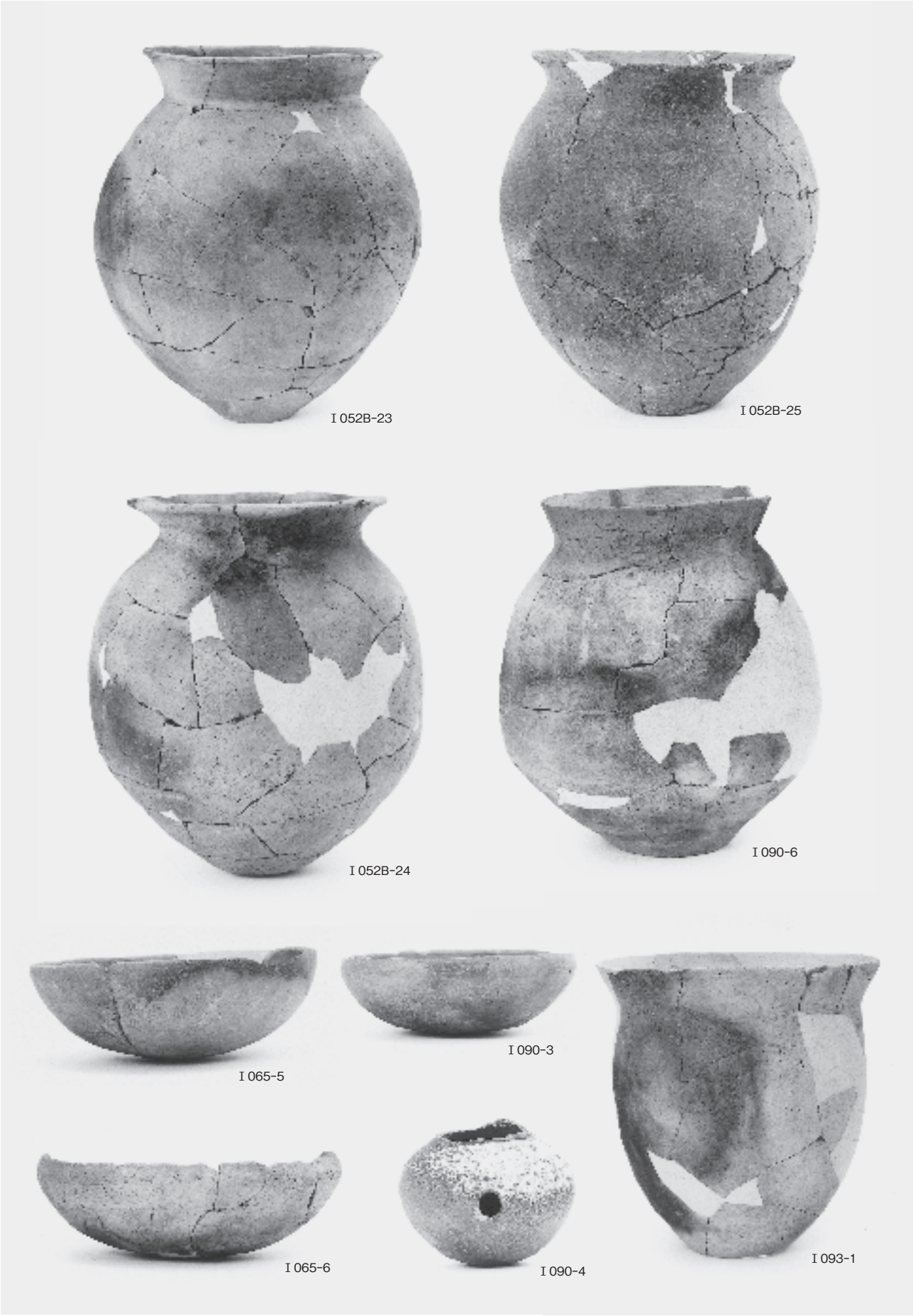
土師器（11）


I 001-2
I 003-3
I 003-12
I 001-3
I 003-5
I 003-16
I 001-5
I 003-6
I 004-1
I 003-11
I 008-1
I 004-3
I 030-1
I 008-4
I 004-7
I 004-9

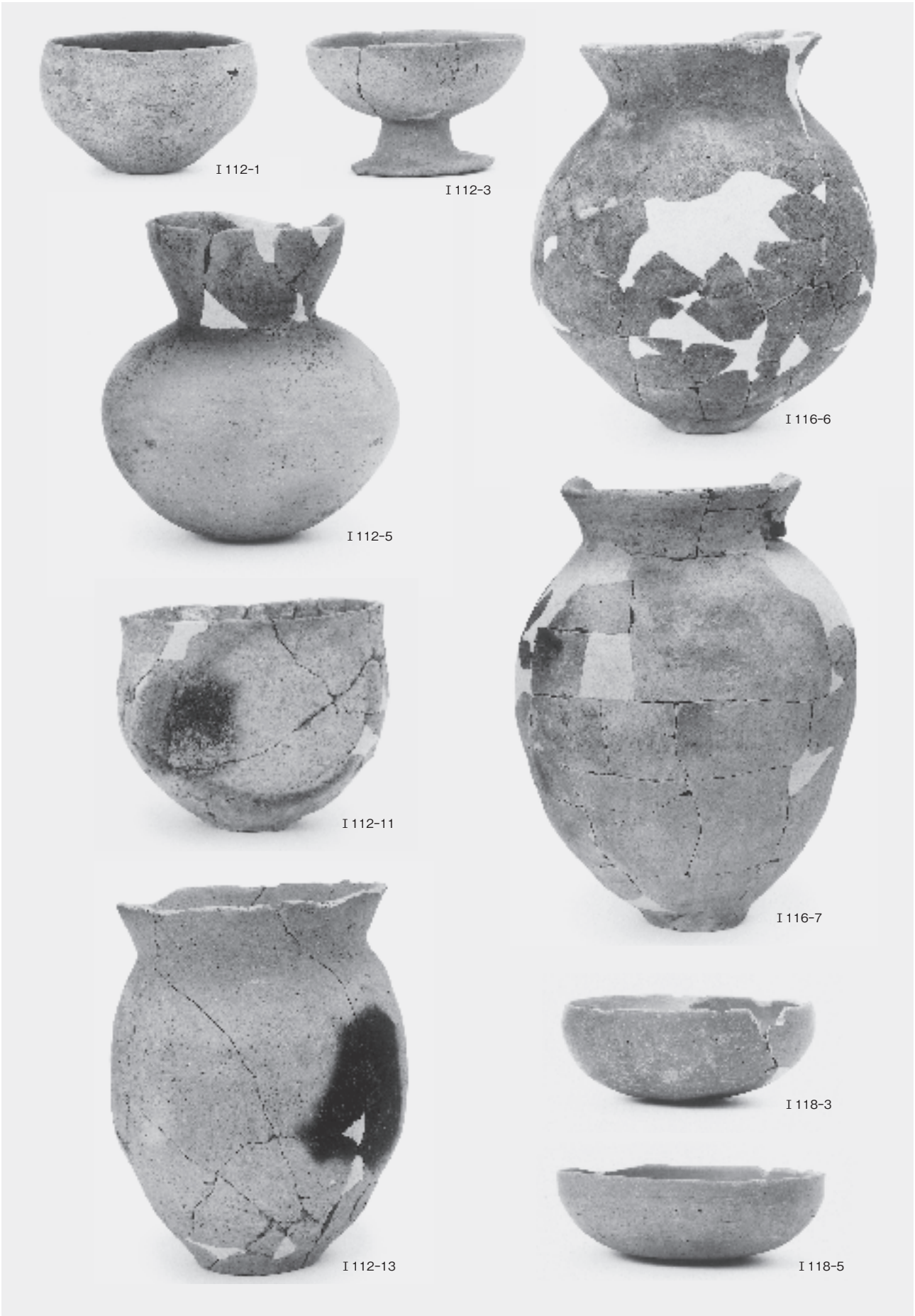
土師器・須恵器（12）


I 021-5
I 028A-2
I 032-3
I 032-4
I 028A-1
I 032-5
I 052B-5
I 052B-13
I 051-1
I 052B-7
I 052B-14
I 051-4
I 052B-10
I 052B-15
I 052B-17
I 053-1

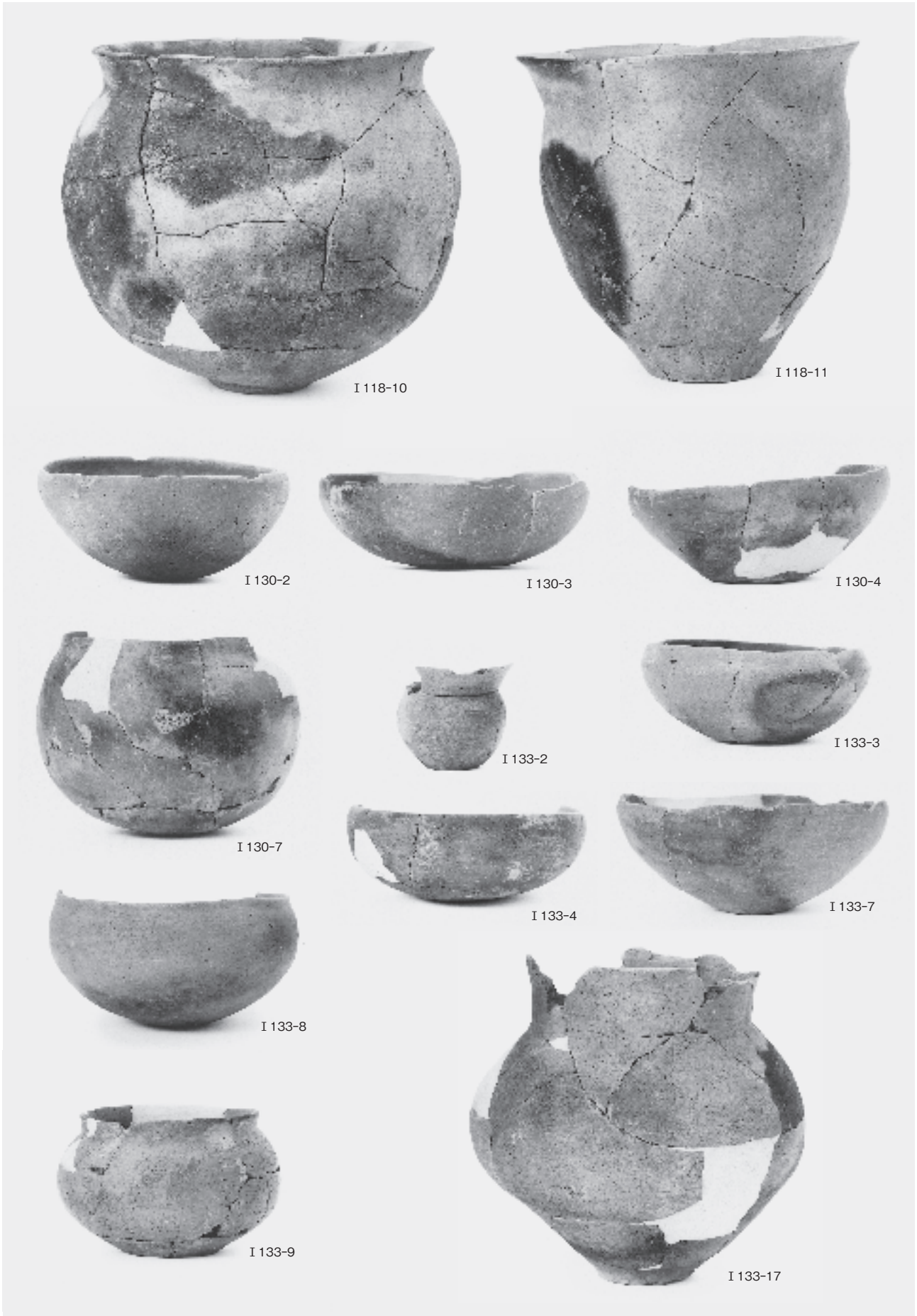
土師器（13）


I 052B-23
I 052B-25
I 052B-24
I 090-6
I 065-5
I 090-3
I 065-6
I 090-4
I 093-1

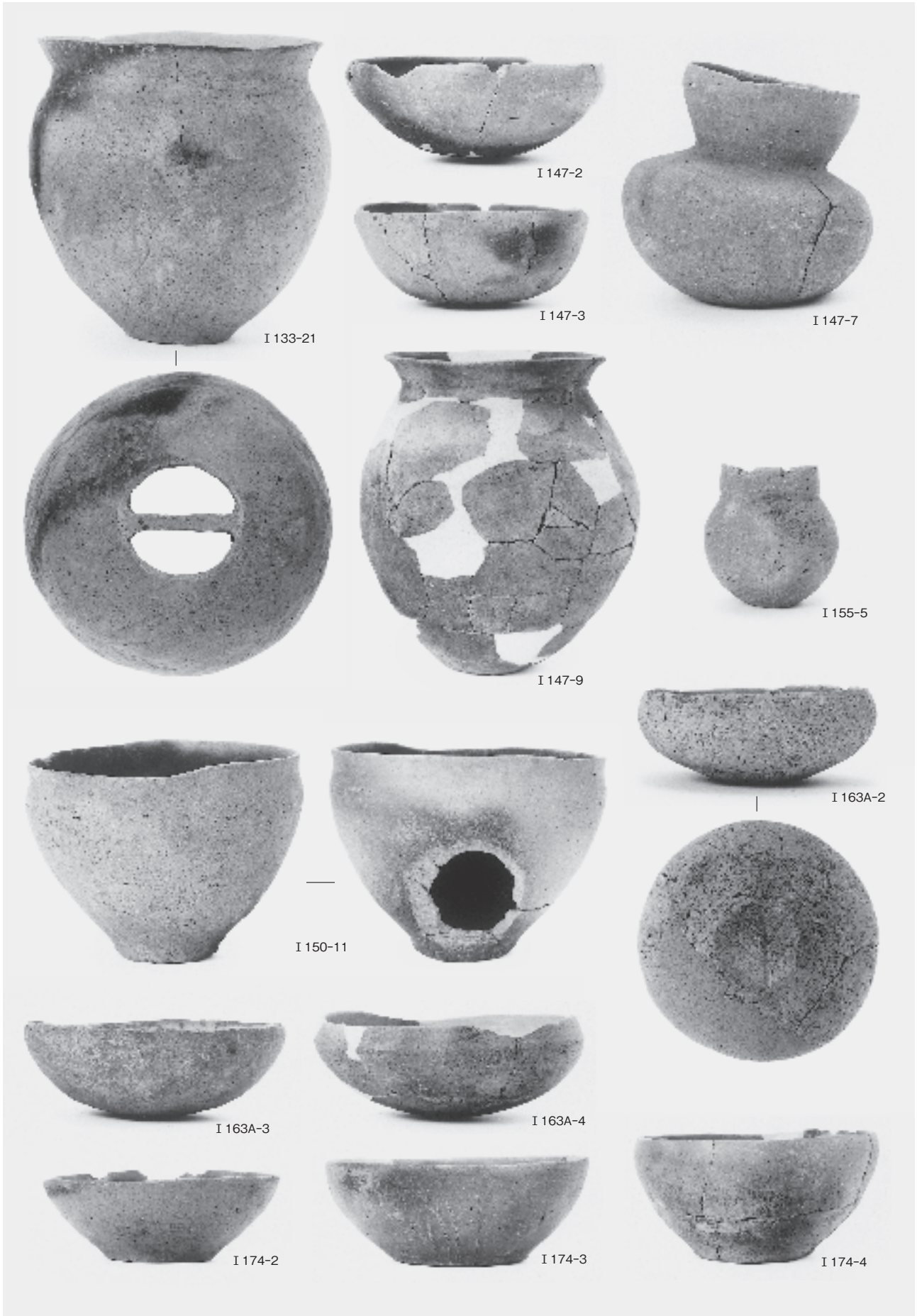
土師器・須恵器（14）



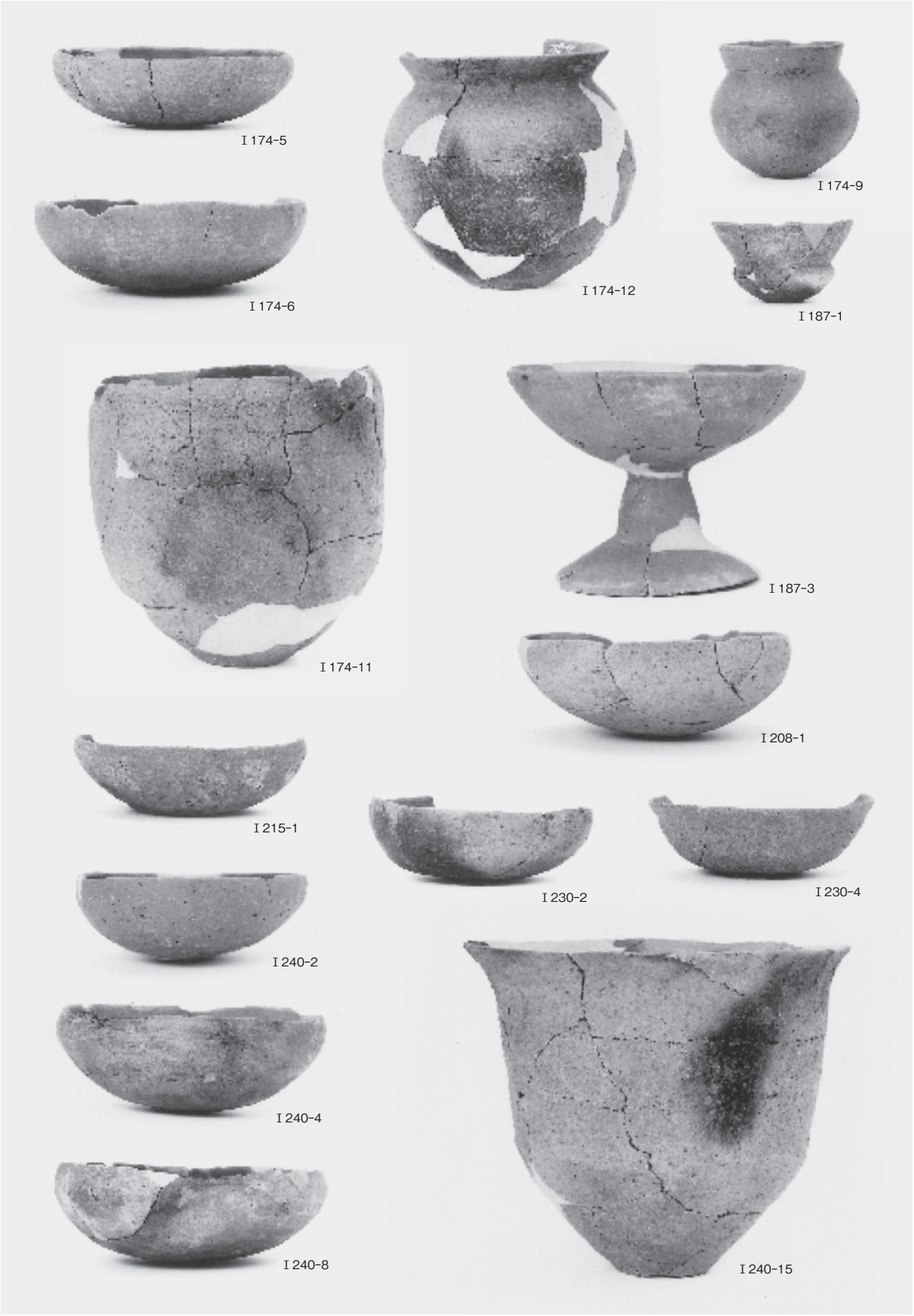
土師器（15）


I 118-10
I 118-11
I 130-2
I 130-3
I 130-4
I 130-7
I 133-2
I 133-3
I 133-4
I 133-7
I 133-8
I 133-9
I 133-17

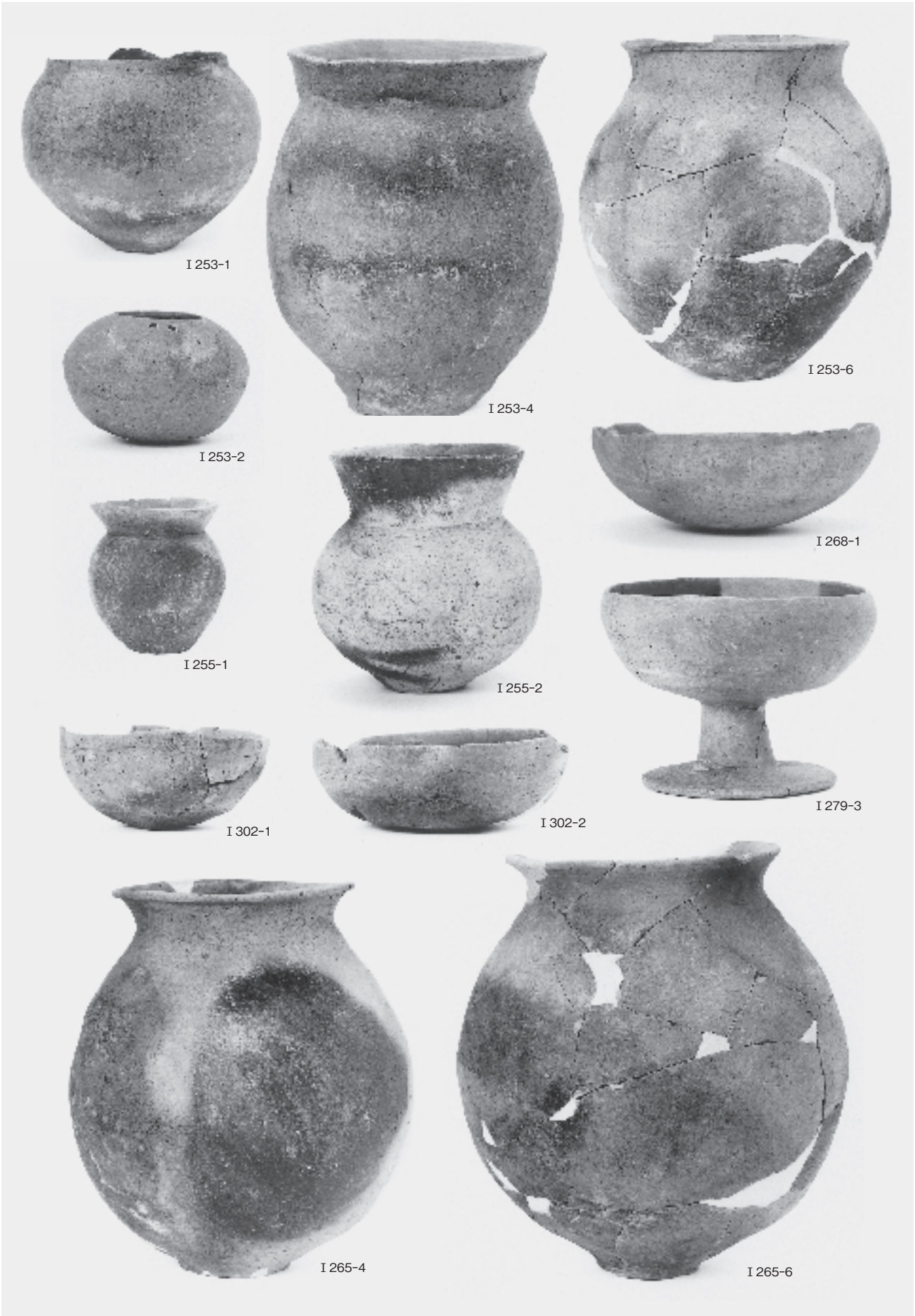
土師器（16）


I 133-21
I 147-2
I 147-3
I 147-7
I 147-9
I 155-5
I 150-11
I 163A-2
I 163A-3
I 163A-4
I 174-2
I 174-3
I 174-4

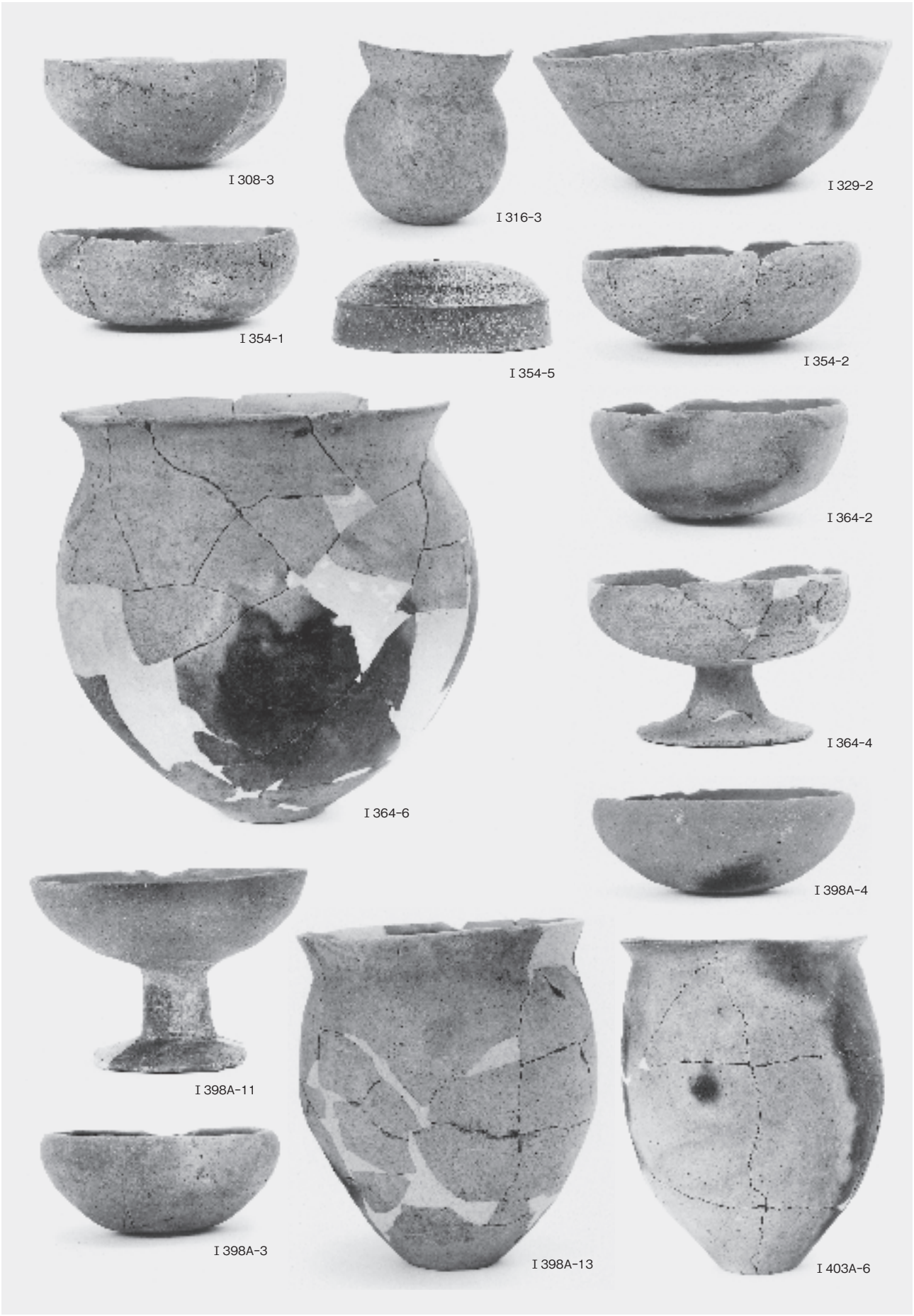
土師器（17）


I 174-5
I 174-6
I 174-12
I 174-9
I 187-1
I 174-11
I 187-3
I 208-1
I 215-1
I 230-2
I 230-4
I 240-2
I 240-4
I 240-8
I 240-15

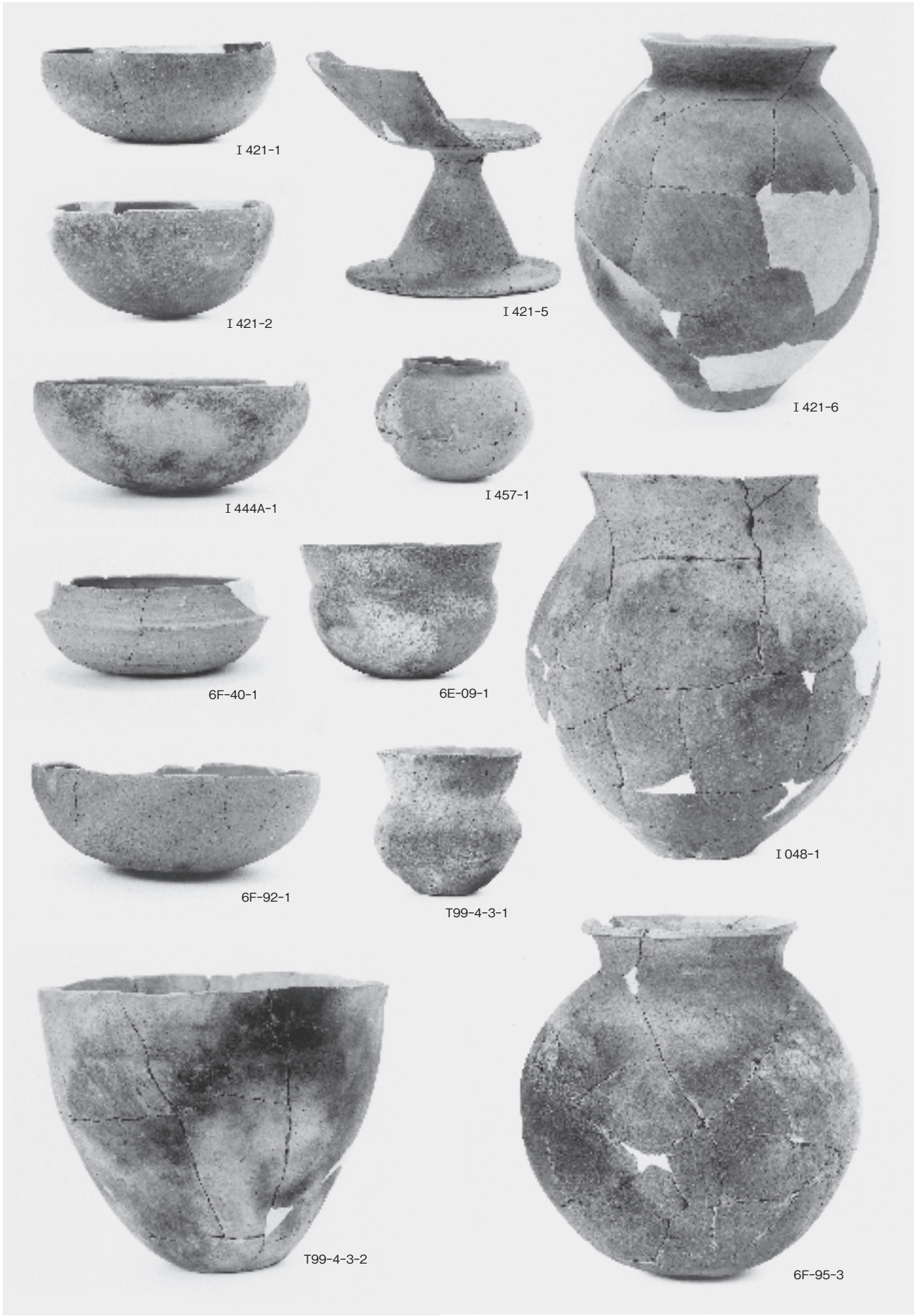
土師器（18）


I 253-1
I 253-4
I 253-6
I 253-2
I 268-1
I 255-1
I 255-2
I 279-3
I 302-1
I 302-2
I 265-4
I 265-6

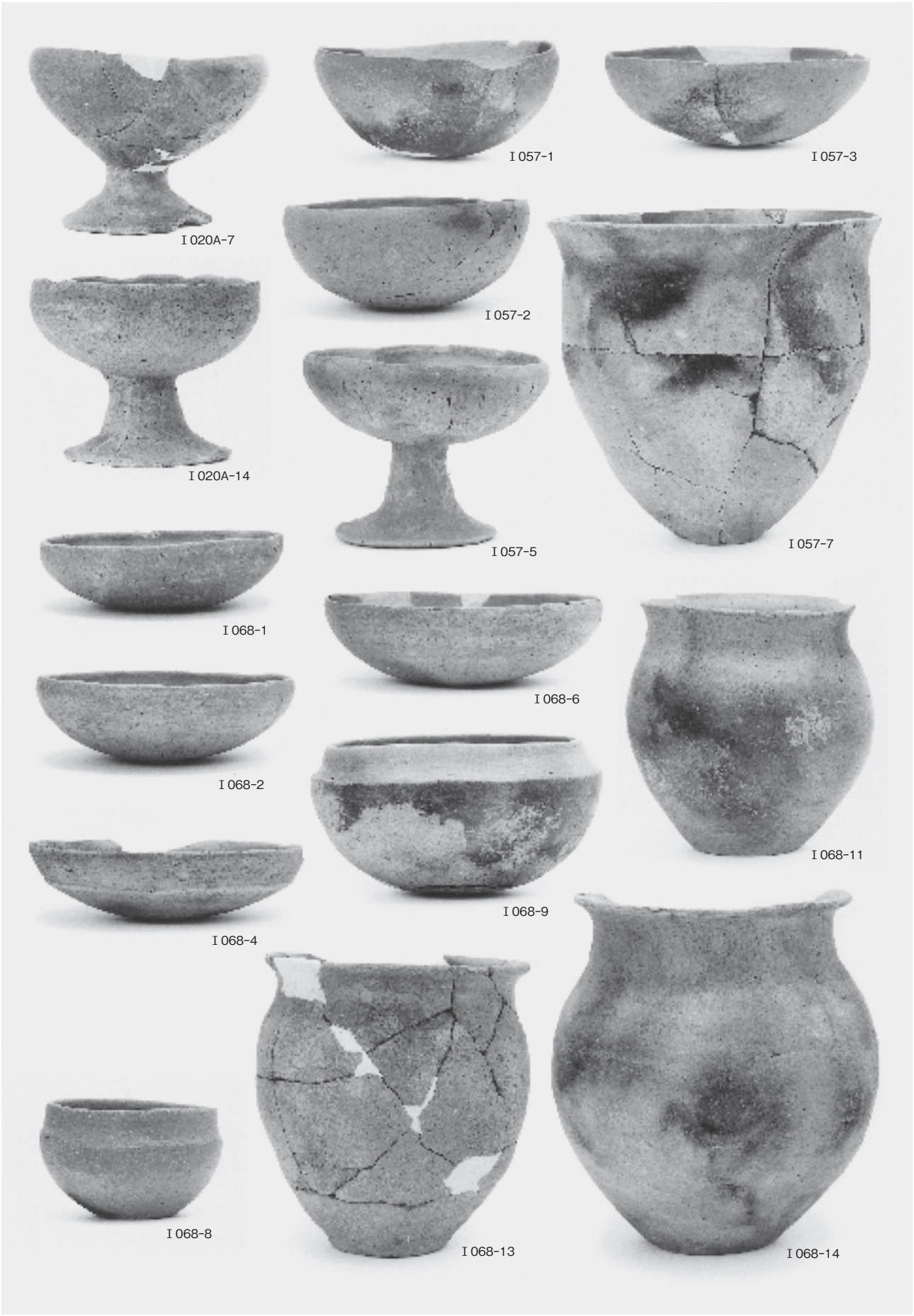
土師器（19）


I 308-3
I 316-3
I 329-2
I 354-1
I 354-5
I 354-2
I 364-2
I 364-6
I 364-4
I 398A-4
I 398A-11
I 398A-3
I 398A-13
I 403A-6

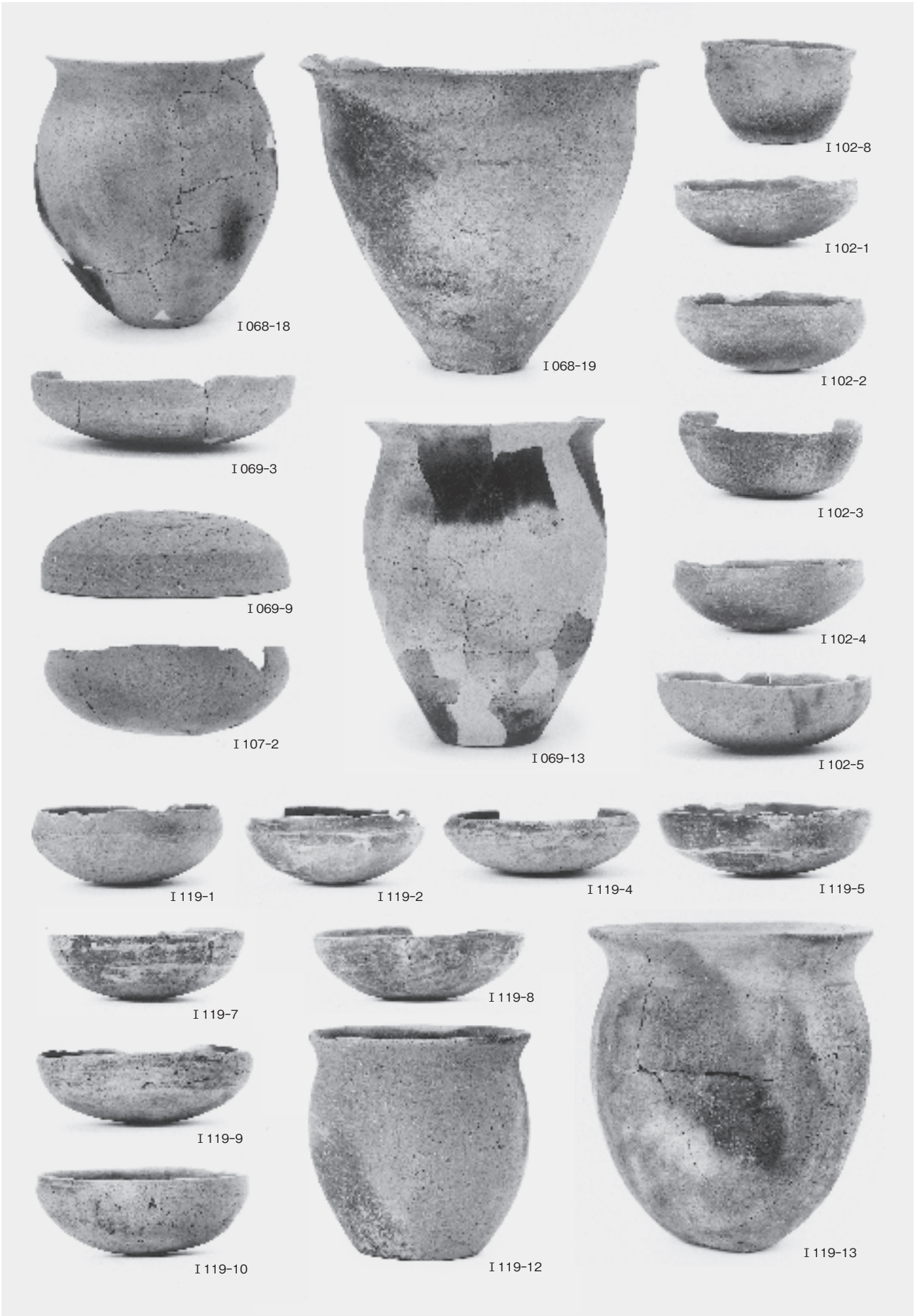
土師器・須恵器（20）


I 421-1
I 421-2
I 421-5
I 421-6
I 444A-1
I 457-1
6F-40-1
6E-09-1
I 048-1
6F-92-1
T99-4-3-1
T99-4-3-2
6F-95-3

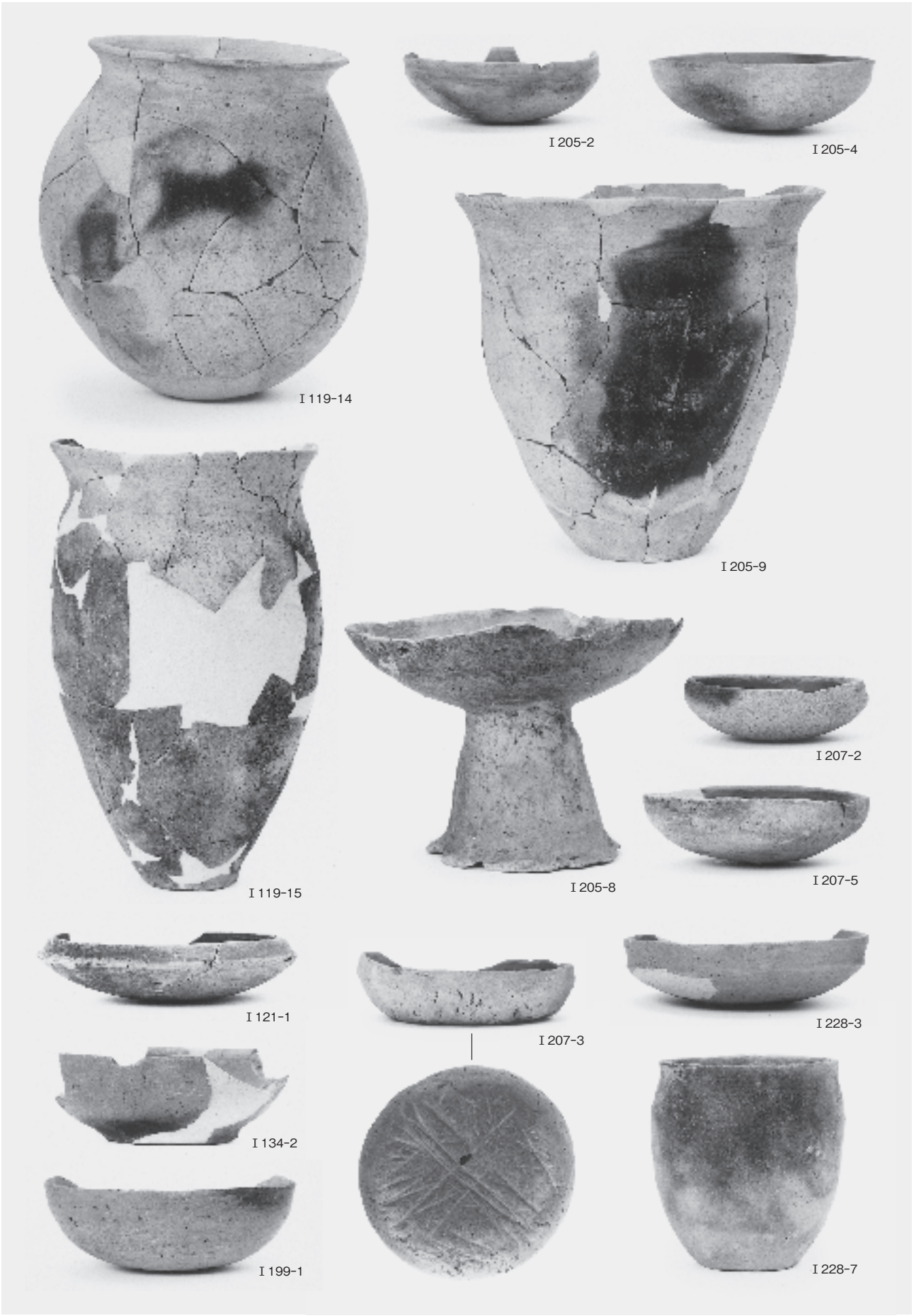
土師器・須恵器（21）


I 020A-7
I 057-1
I 057-3
I 057-2
I 020A-14
I 057-5
I 057-7
I 068-1
I 068-6
I 068-2
I 068-11
I 068-9
I 068-4
I 068-8
I 068-13
I 068-14

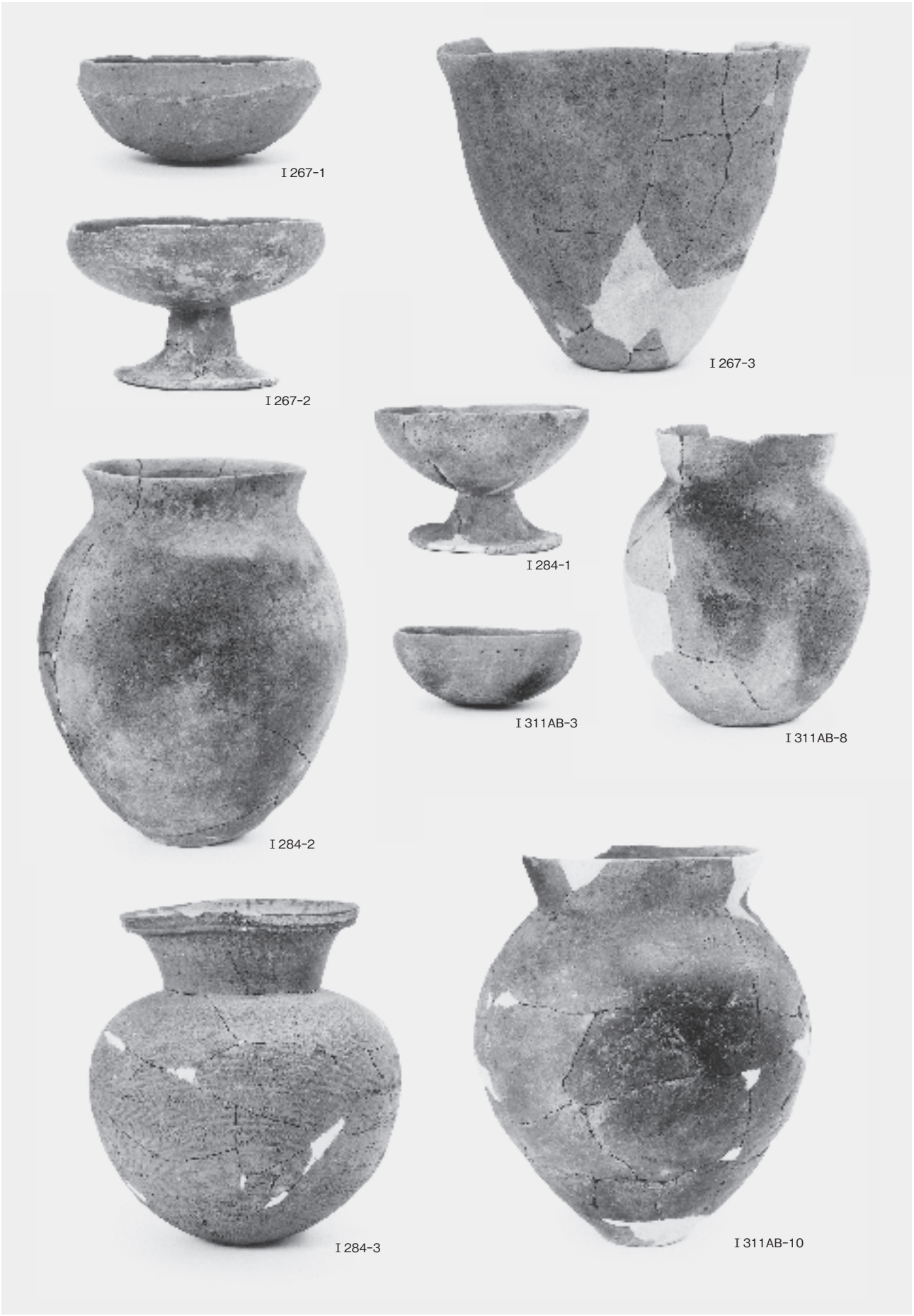
土師器（22）


I 068-18
I 068-19
I 102-8
I 102-1
I 102-2
I 069-3
I 102-3
I 069-9
I 102-4
I 107-2
I 069-13
I 102-5
I 119-1
I 119-2
I 119-4
I 119-5
I 119-7
I 119-8
I 119-9
I 119-10
I 119-12
I 119-13

土師器・須恵器（23）


I 205-2
I 205-4
I 119-14
I 205-9
I 119-15
I 205-8
I 207-2
I 207-5
I 121-1
I 207-3
I 228-3
I 134-2
I 199-1
I 228-7

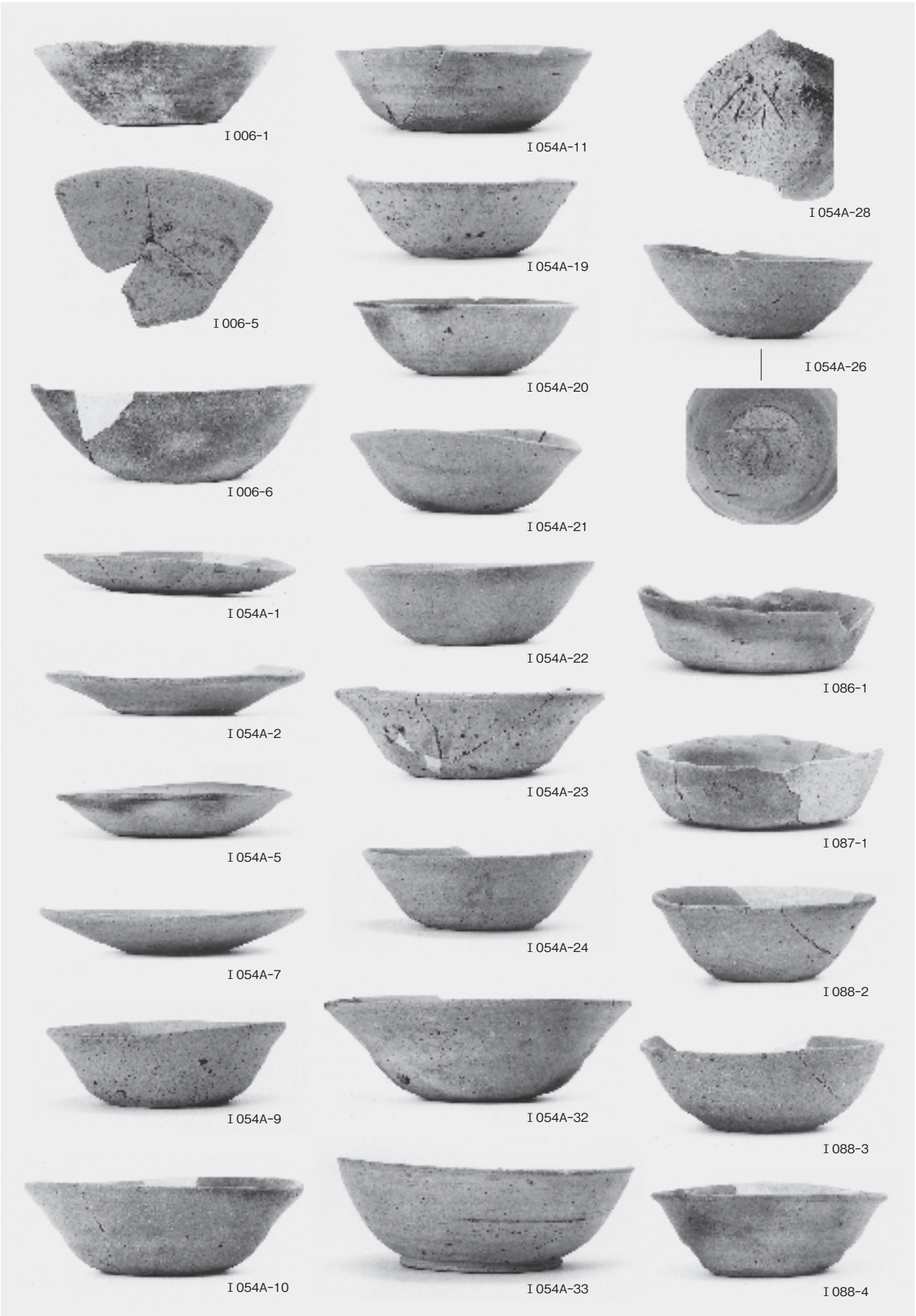
土師器（24）


I 267-1
I 267-2
I 267-3
I 284-1
I 311AB-3
I 311AB-8
I 284-2
I 284-3
I 311AB-10

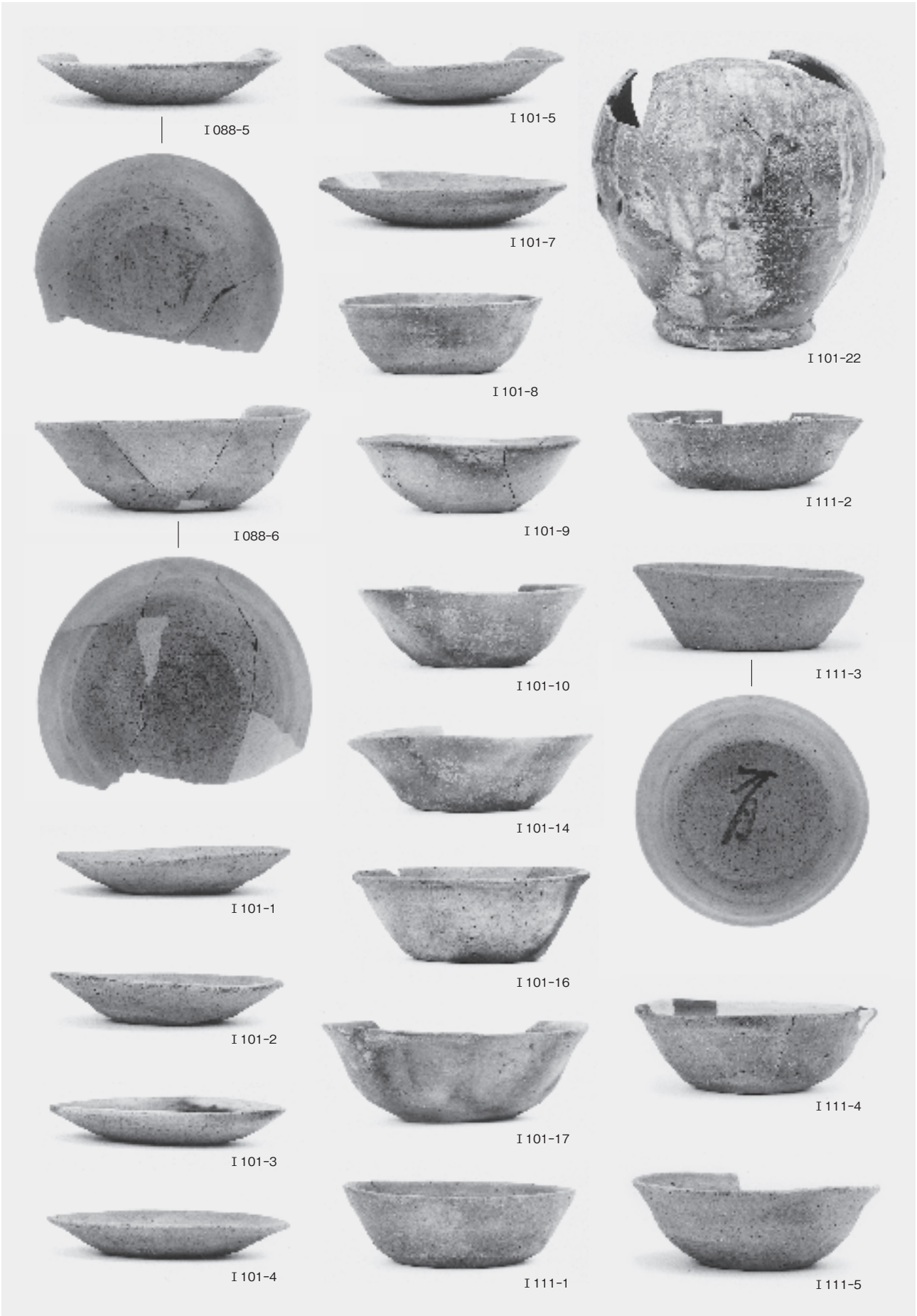
土師器・須恵器（25）

I 339-4
I 339-6
I 345-8
I 345-1
I 345-2
I 345-3
I 345-4
7F-09-1
6E-07-1
I 345-11
I 406-3

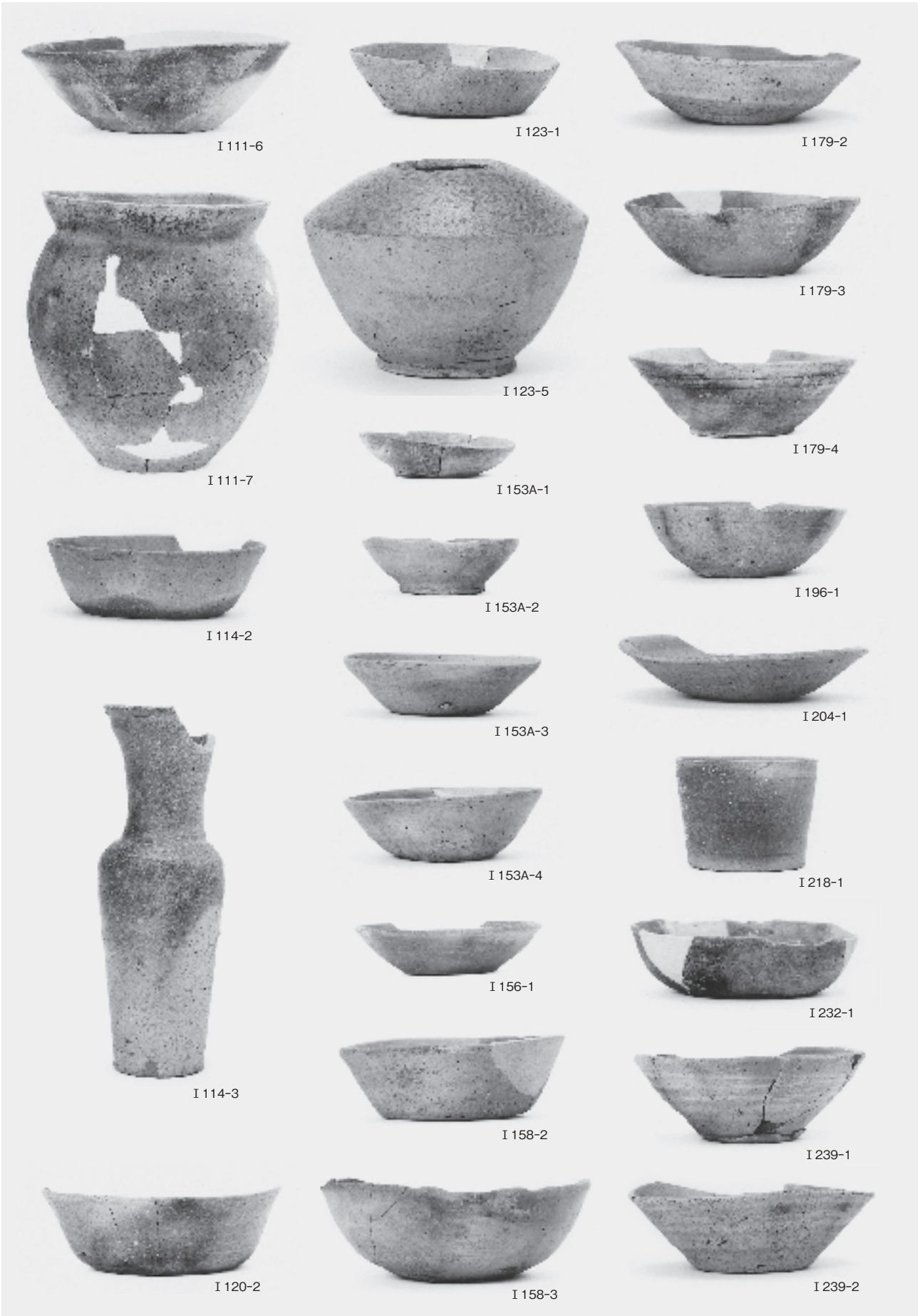
土師器・須恵器（26）


Ⅰ006-1
Ⅰ006-5
Ⅰ006-6
Ⅰ054A-1
Ⅰ054A-2
Ⅰ054A-5
Ⅰ054A-7
Ⅰ054A-9
Ⅰ054A-10
Ⅰ054A-11
Ⅰ054A-19
Ⅰ054A-20
Ⅰ054A-21
Ⅰ054A-22
Ⅰ054A-23
Ⅰ054A-24
Ⅰ054A-32
Ⅰ054A-33
Ⅰ054A-28
Ⅰ054A-26
Ⅰ086-1
Ⅰ087-1
Ⅰ088-2
Ⅰ088-3
Ⅰ088-4

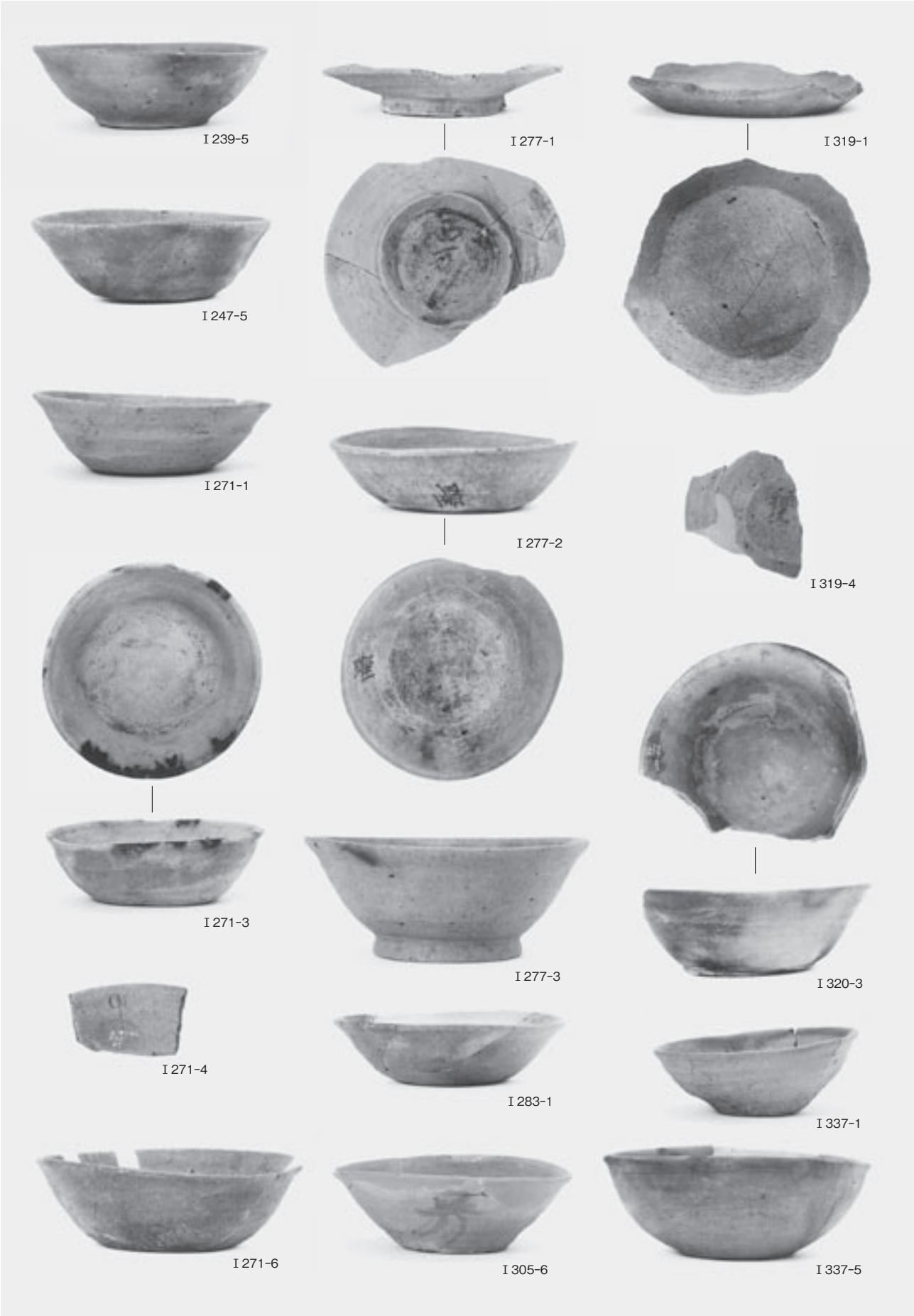
土師器・須恵器（27）


I 088-5
I 088-6
I 101-1
I 101-2
I 101-3
I 101-4
I 101-5
I 101-7
I 101-8
I 101-9
I 101-10
I 101-14
I 101-16
I 101-17
I 111-1
I 101-22
I 111-2
I 111-3
I 111-4
I 111-5

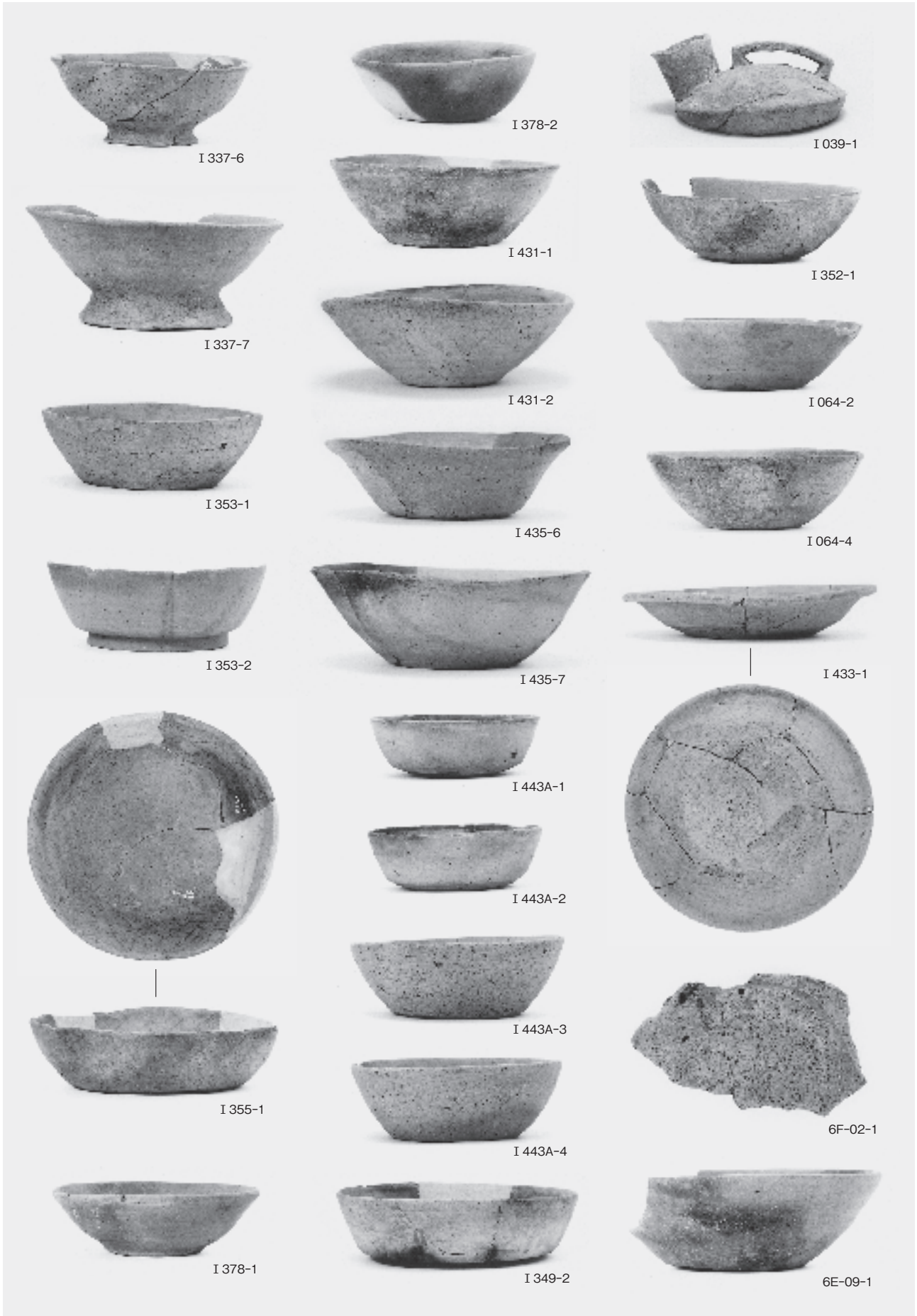
土師器・須恵器（28）


Ⅰ111-6
Ⅰ123-1
Ⅰ179-2
Ⅰ111-7
Ⅰ123-5
Ⅰ179-3
Ⅰ153A-1
Ⅰ179-4
Ⅰ114-2
Ⅰ153A-2
Ⅰ196-1
Ⅰ153A-3
Ⅰ204-1
Ⅰ153A-4
Ⅰ218-1
Ⅰ156-1
Ⅰ232-1
Ⅰ114-3
Ⅰ158-2
Ⅰ239-1
Ⅰ120-2
Ⅰ158-3
Ⅰ239-2

土師器・須恵器（29）


I 239-5
I 277-1
I 319-1
I 247-5
I 271-1
I 277-2
I 319-4
I 271-3
I 277-3
I 320-3
I 271-4
I 283-1
I 337-1
I 271-6
I 305-6
I 337-5

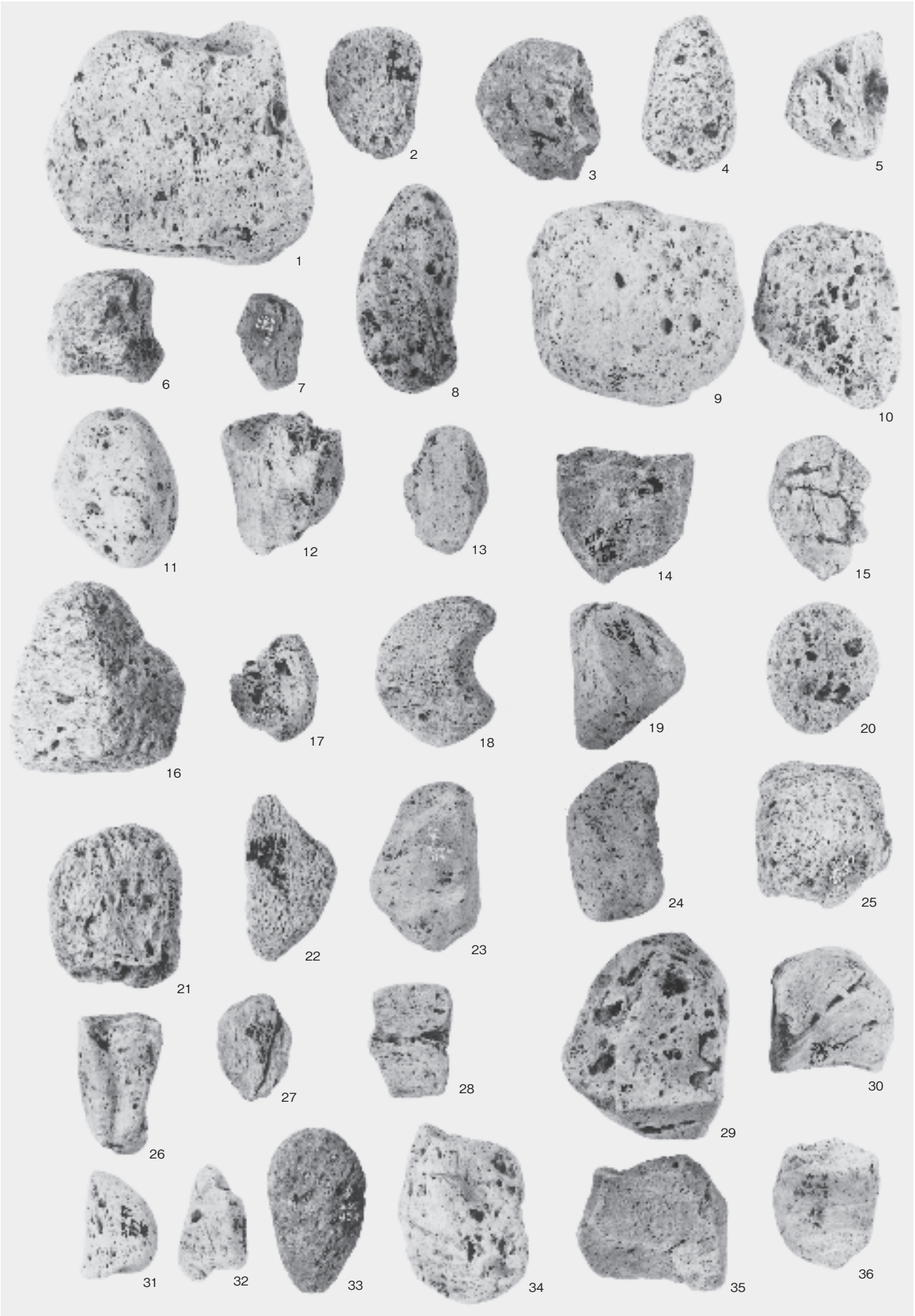
土師器・須恵器（30）


I 337-6
I 337-7
I 353-1
I 353-2
I 355-1
I 378-1
I 378-2
I 431-1
I 431-2
I 435-6
I 435-7
I 443A-1
I 443A-2
I 443A-3
I 443A-4
I 349-2
I 039-1
I 352-1
I 064-2
I 064-4
I 433-1
6F-02-1
6E-09-1

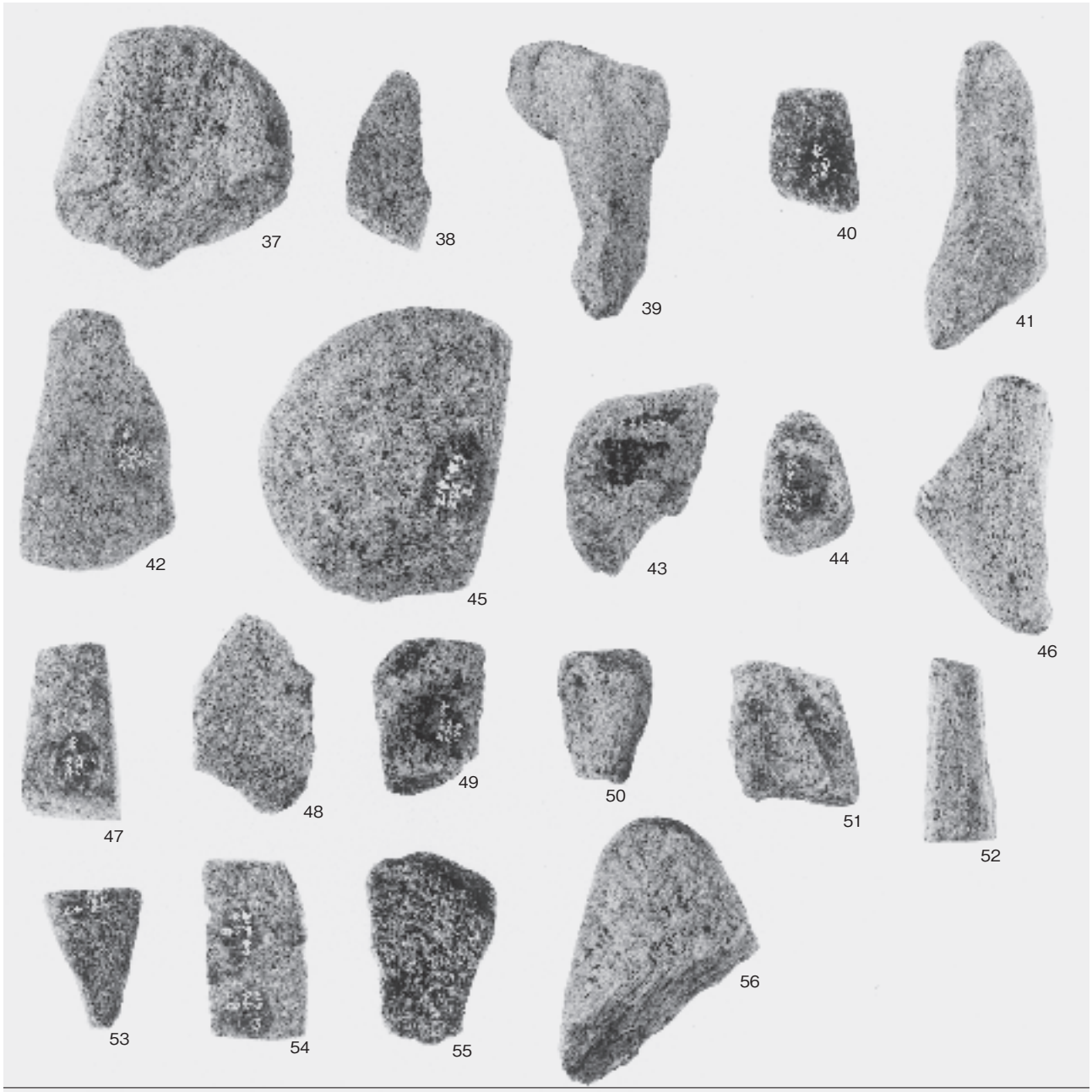
土師器・須恵器（31）

図版86

弥生時代磨製石剣・石斧、敲石・磨石


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

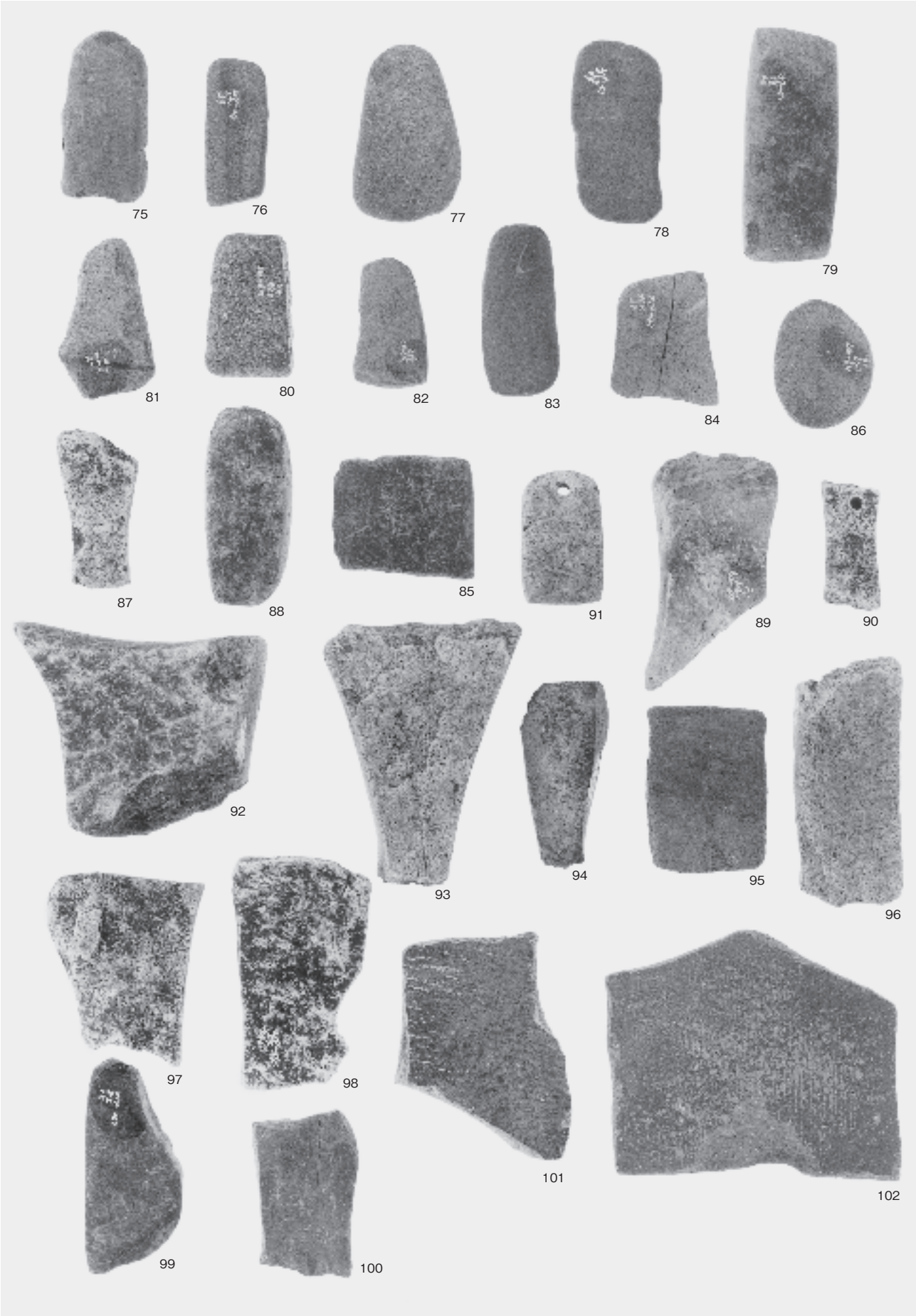
弥生時代以降軽石A


37
38
39
40
41
42
45
43
44
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
I 185
I 365
I 405
I 241
I 158
5F-95
6F-01
T101
I 052
I 158
I 308
I 185
写真のみ掲載

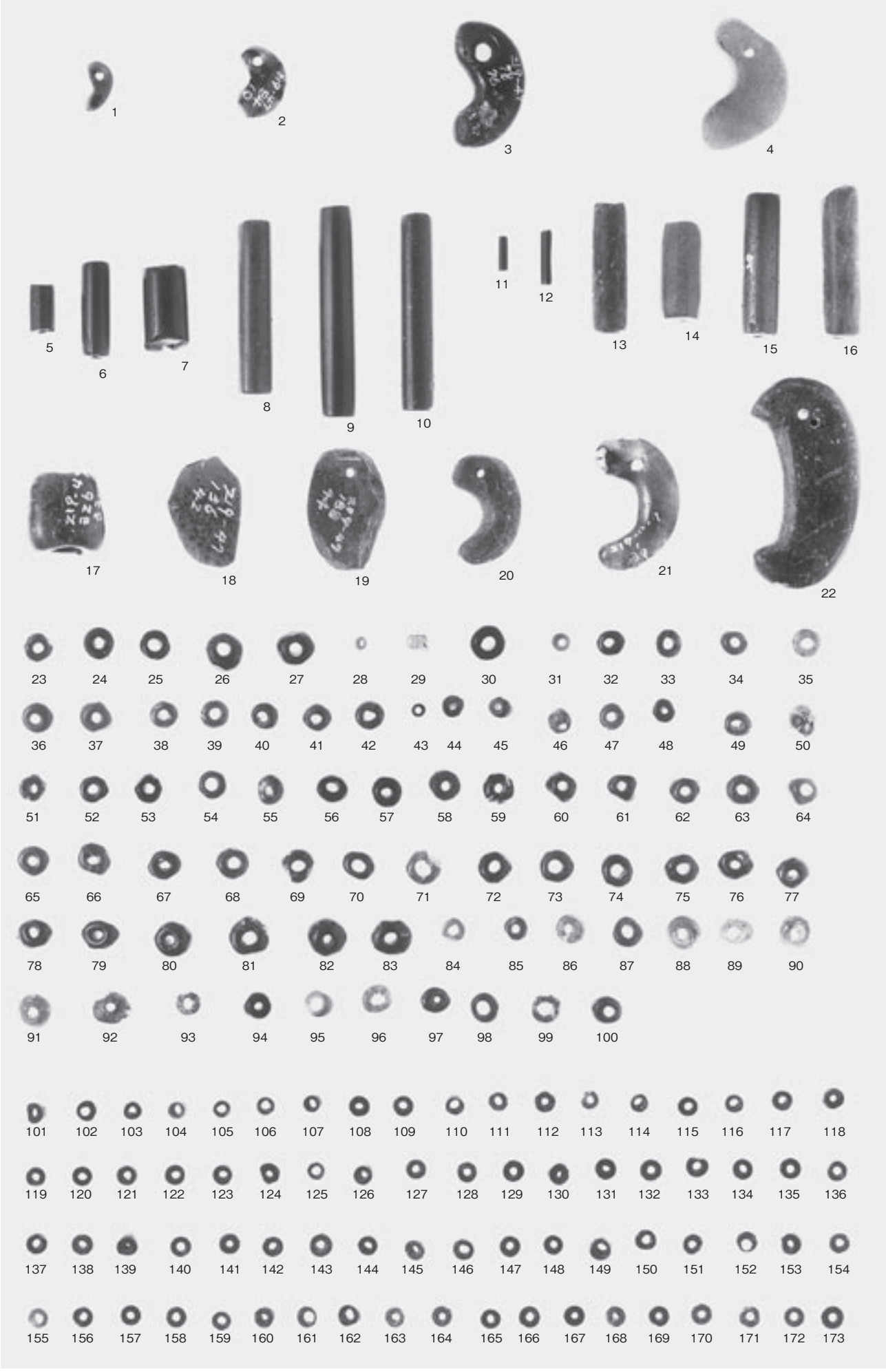
弥生時代軽石B

57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
71
72
74
73
70
I 240
I 188
I 251
I 119
I 186A
I 121
I 354
7F-25
I 072
I 398B
I 237
I 072
写真のみ掲載

弥生時代砂岩Ａ砥石



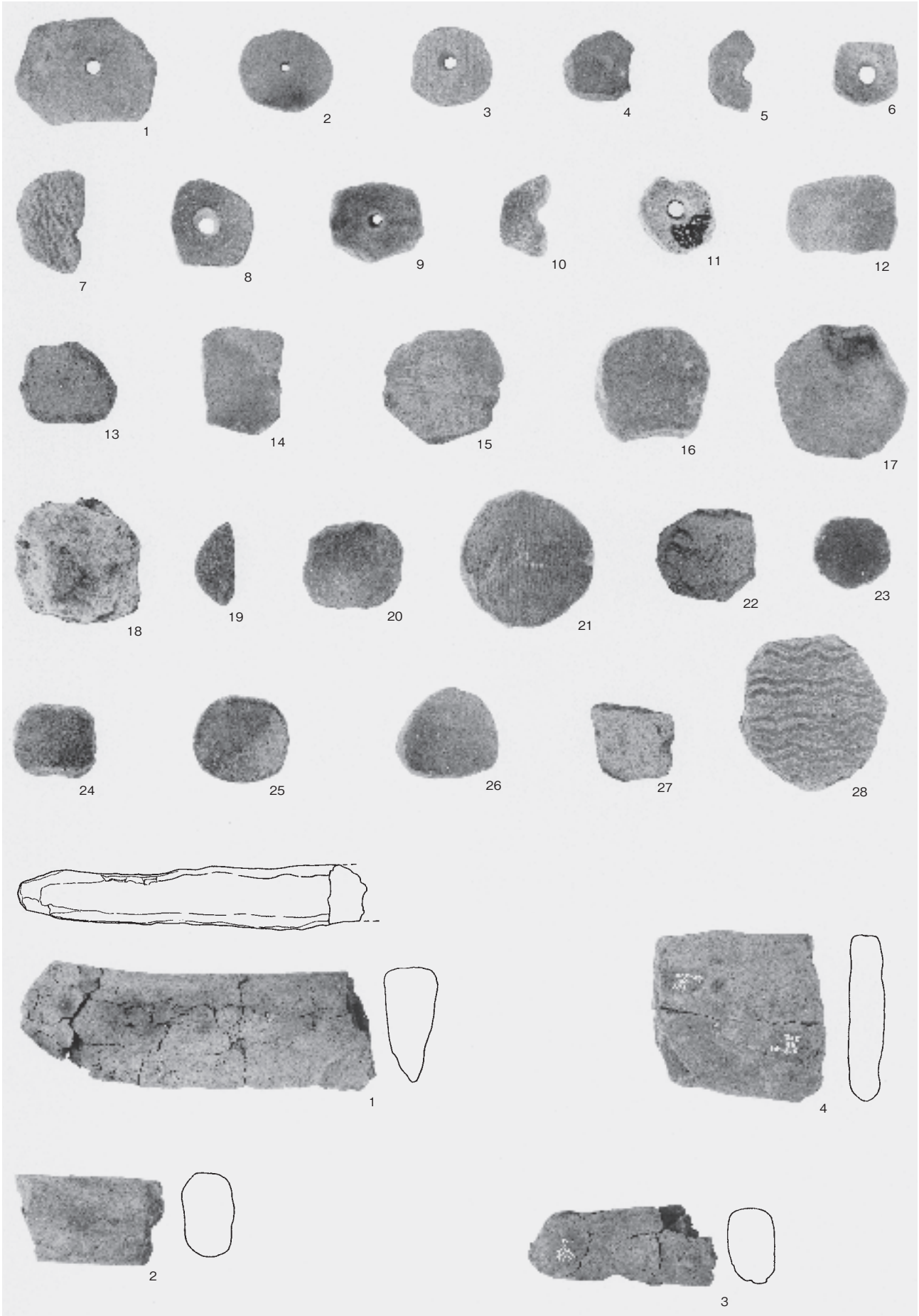
弥生時代砂岩Ｂ砥石・古墳時代以降凝灰岩砥石・その他砥石



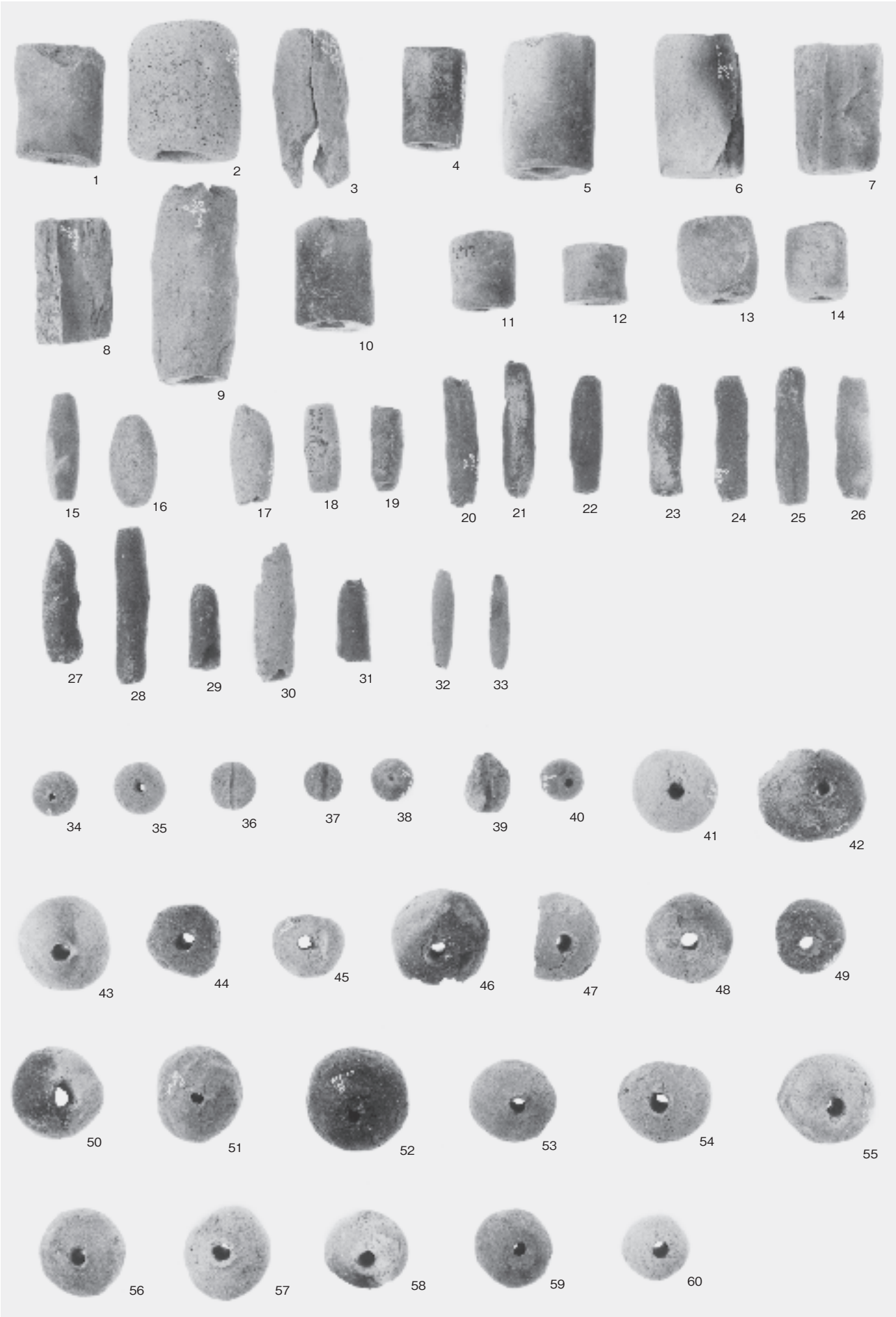
弥生時代以降玉類（1）

弥生時代土坑墓　330（38～42）　385（44～83）
　　424（84～92）　437（93～100）
弥生時代住居　285A（29）　383（43）
古墳時代前期住居　195（23～27・403）
古墳時代中期住居　230（28・404・405）　001（101～387）

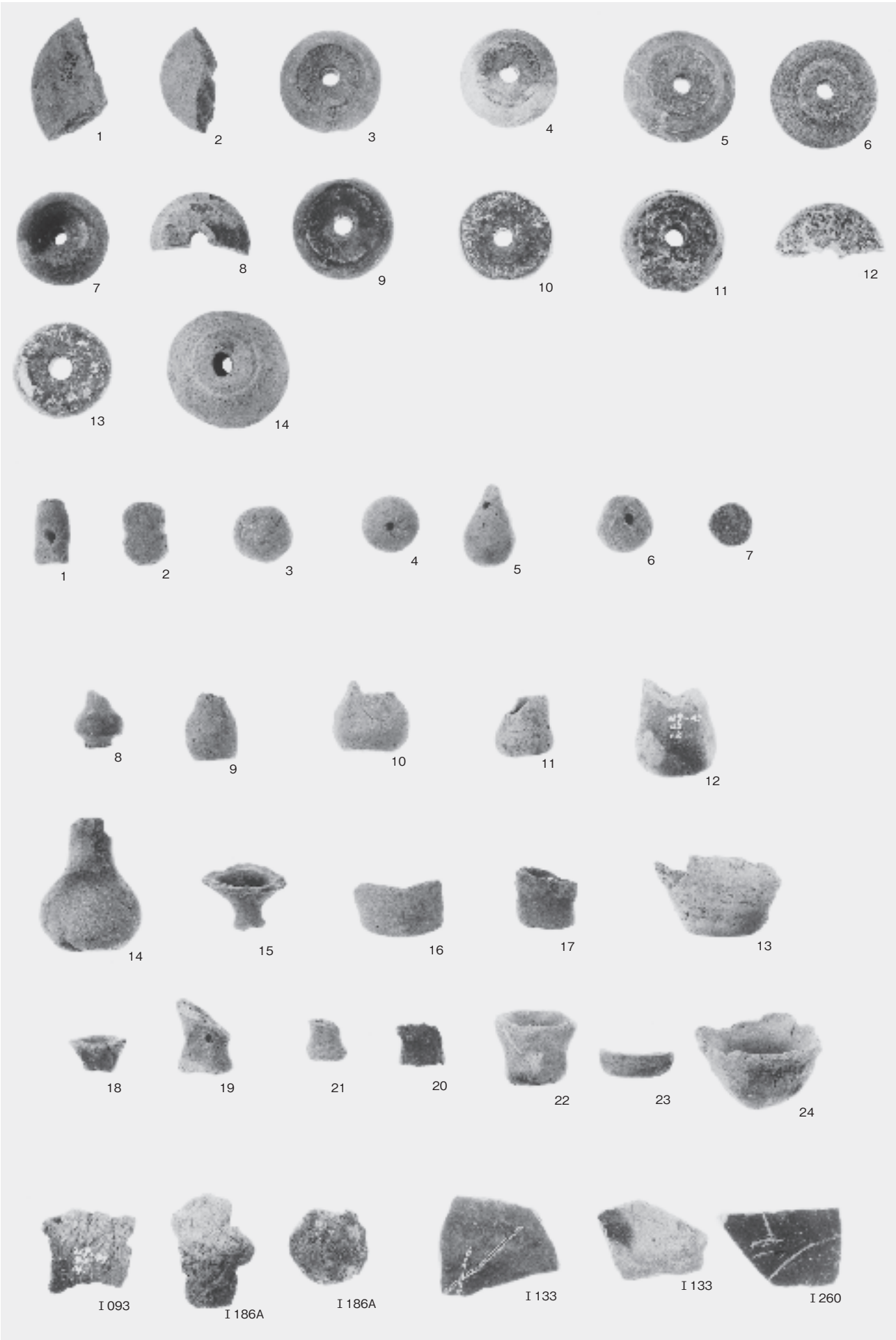
弥生時代以降玉類（2）



弥生時代土製円盤・土製炉囲い

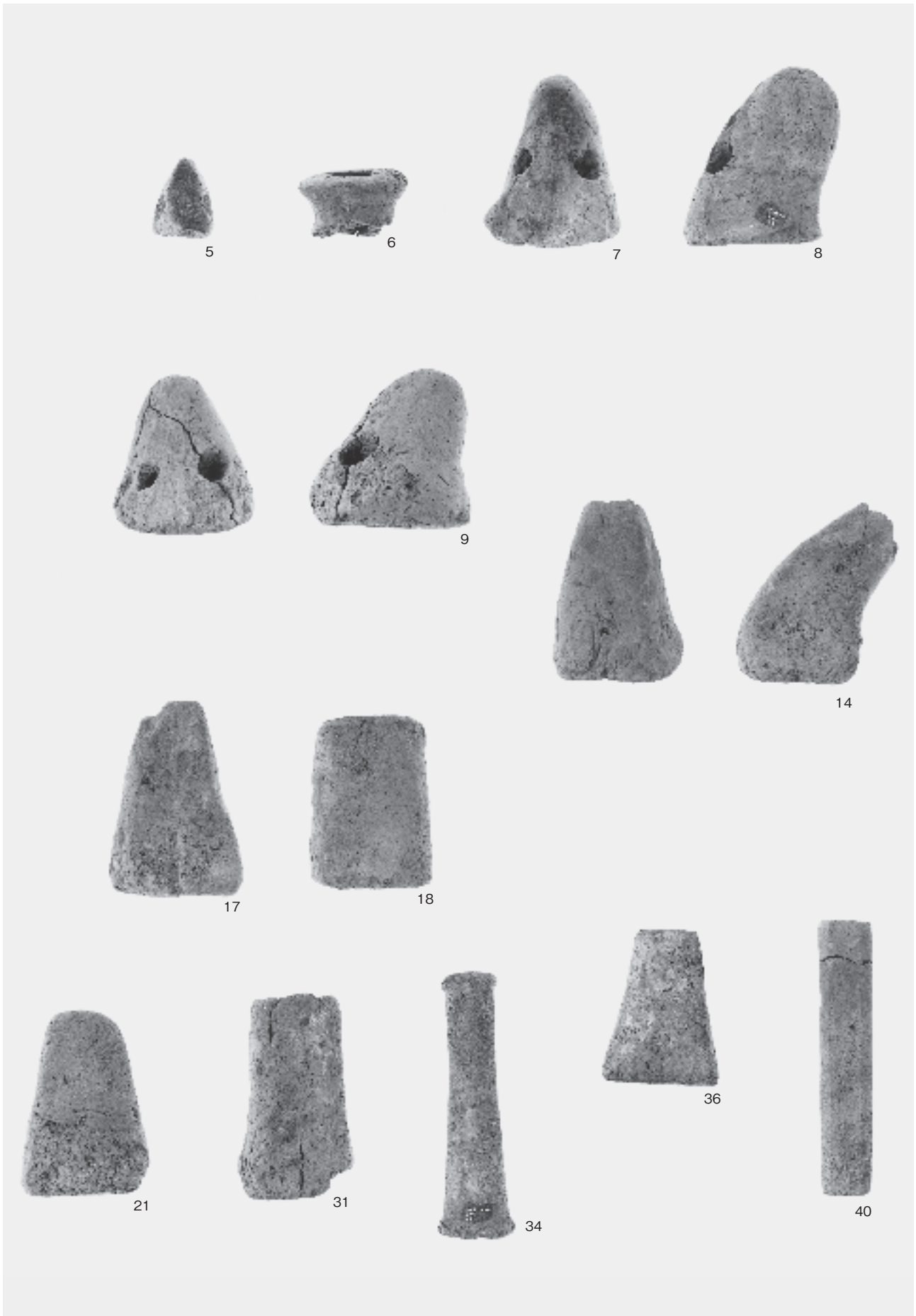

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60

弥生時代以降土錘・土玉

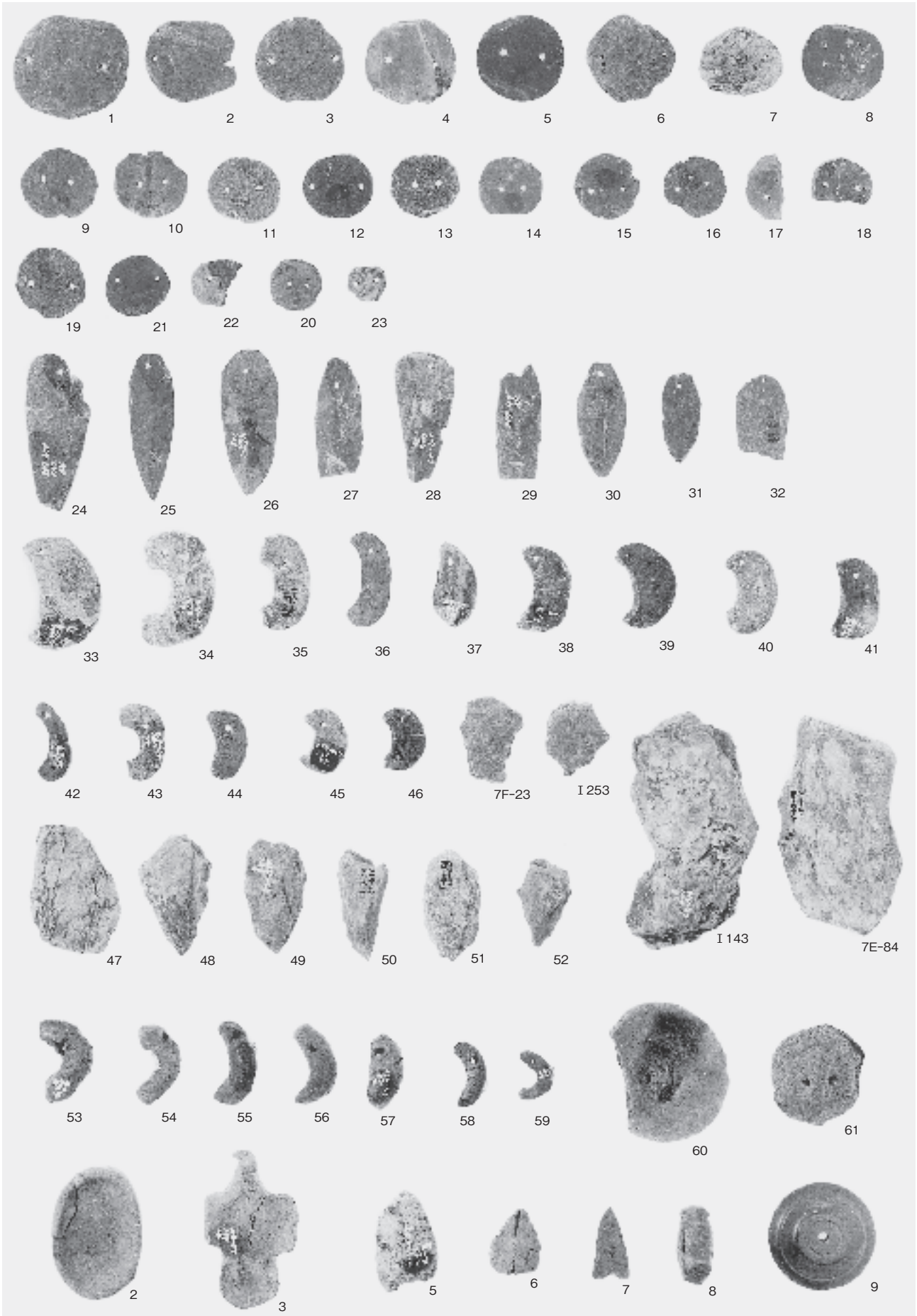


弥生時代以降紡錘車・その他土製品・刻書土器

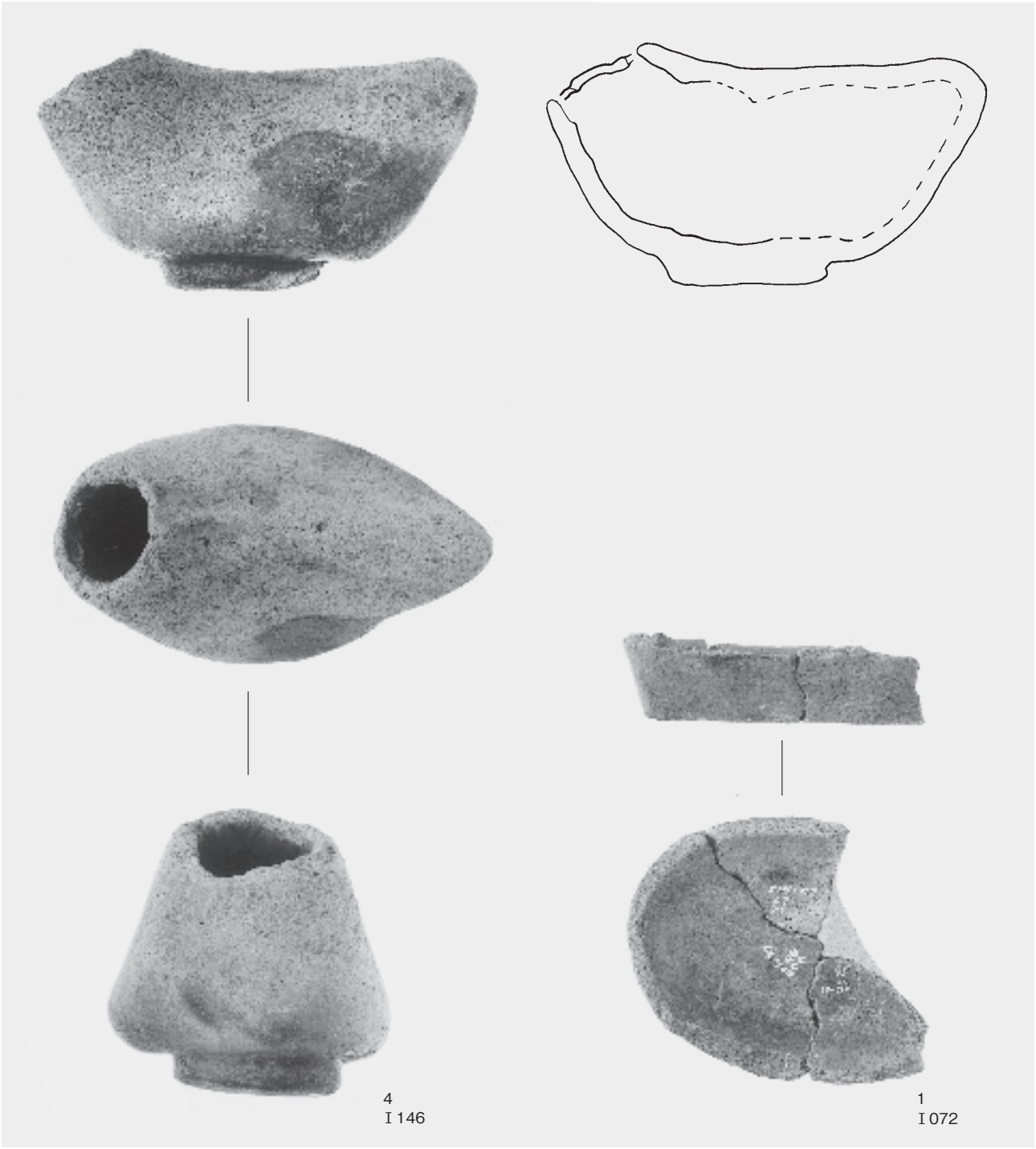
奈良・平安時代瓦



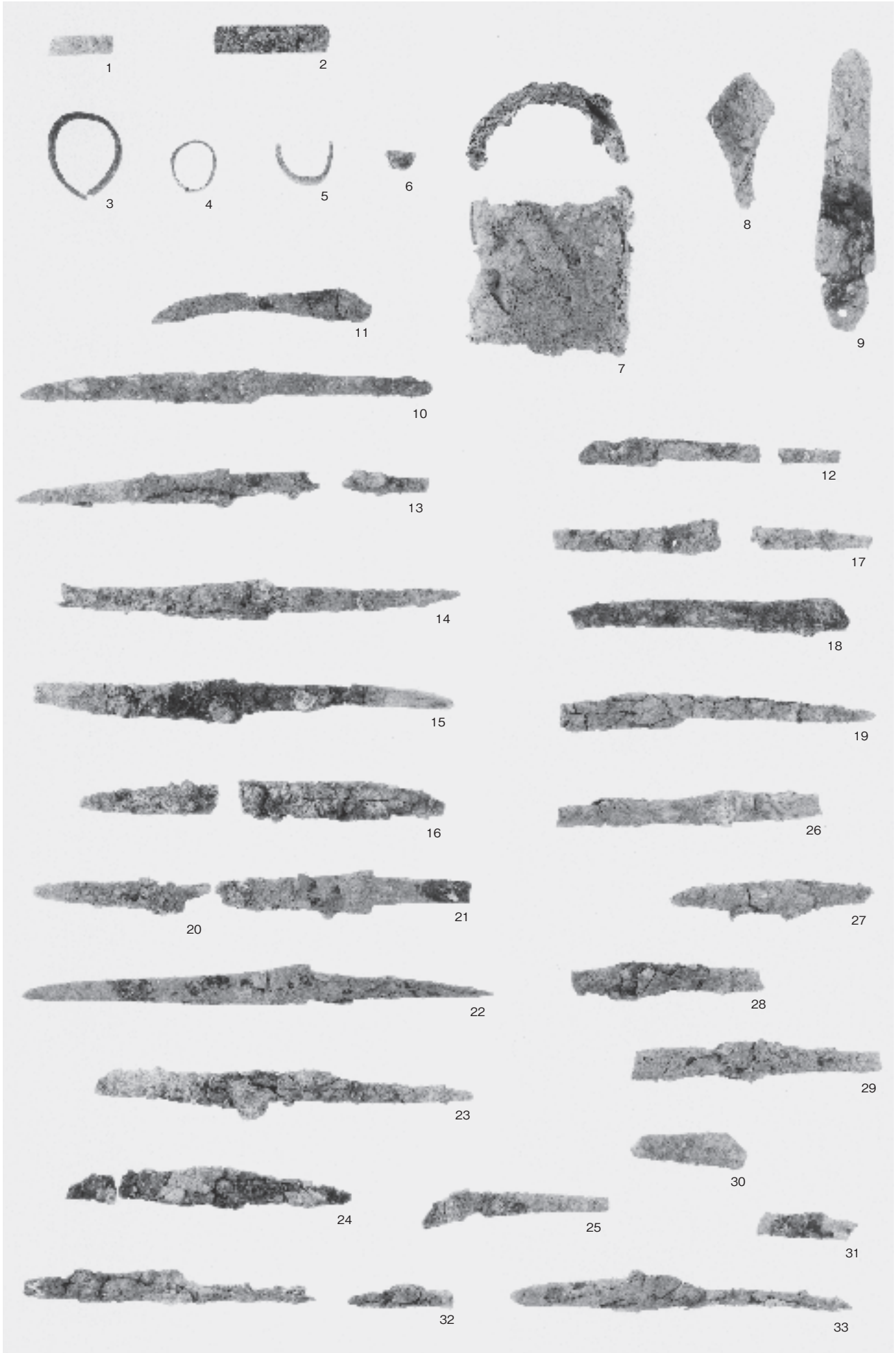
土製支脚



古墳時代石製模造品・未製品・土製模造品・弥生時代以降祭祀関連遺物等



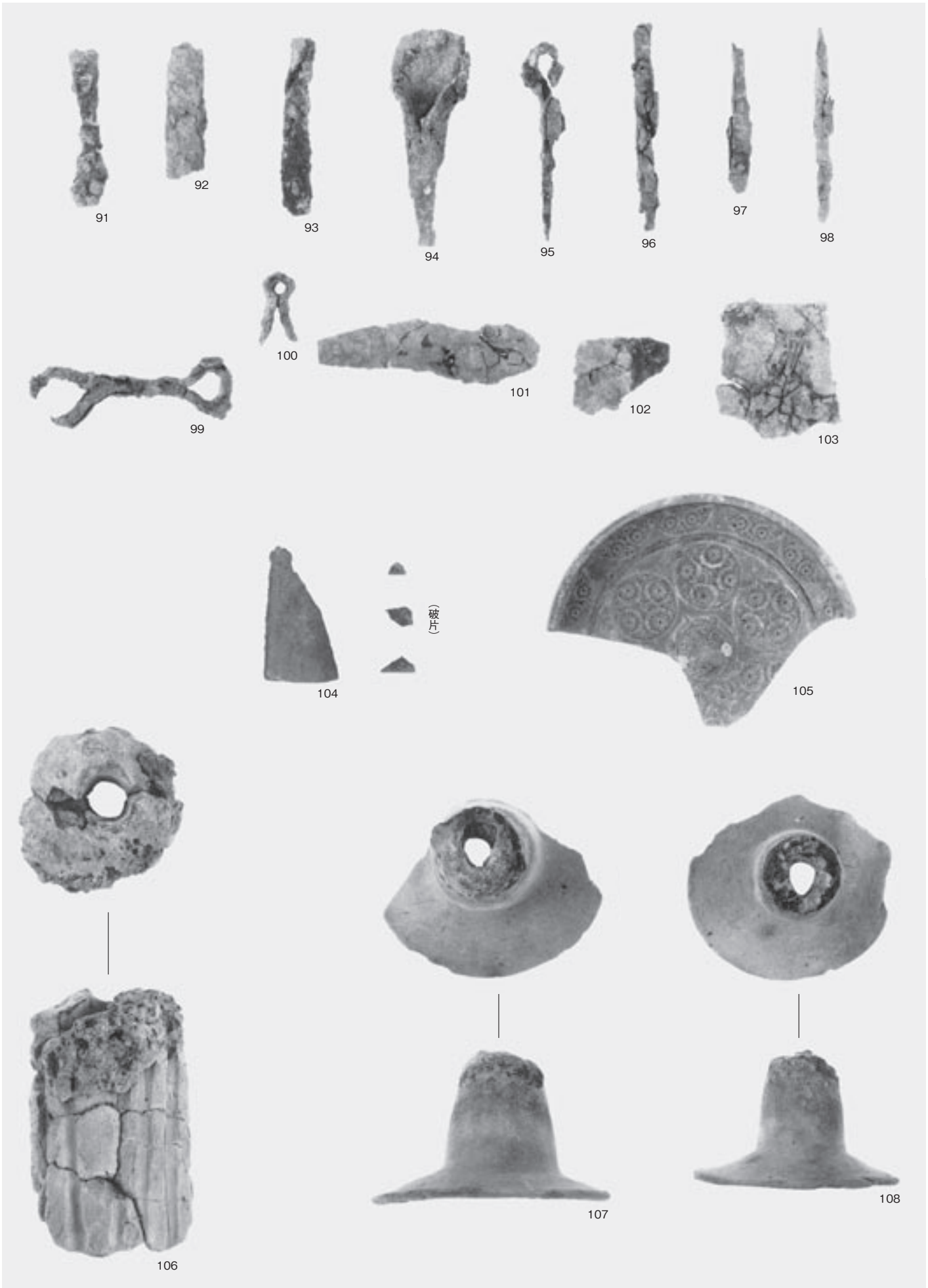
鳥形土製品・槽形土製品


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33

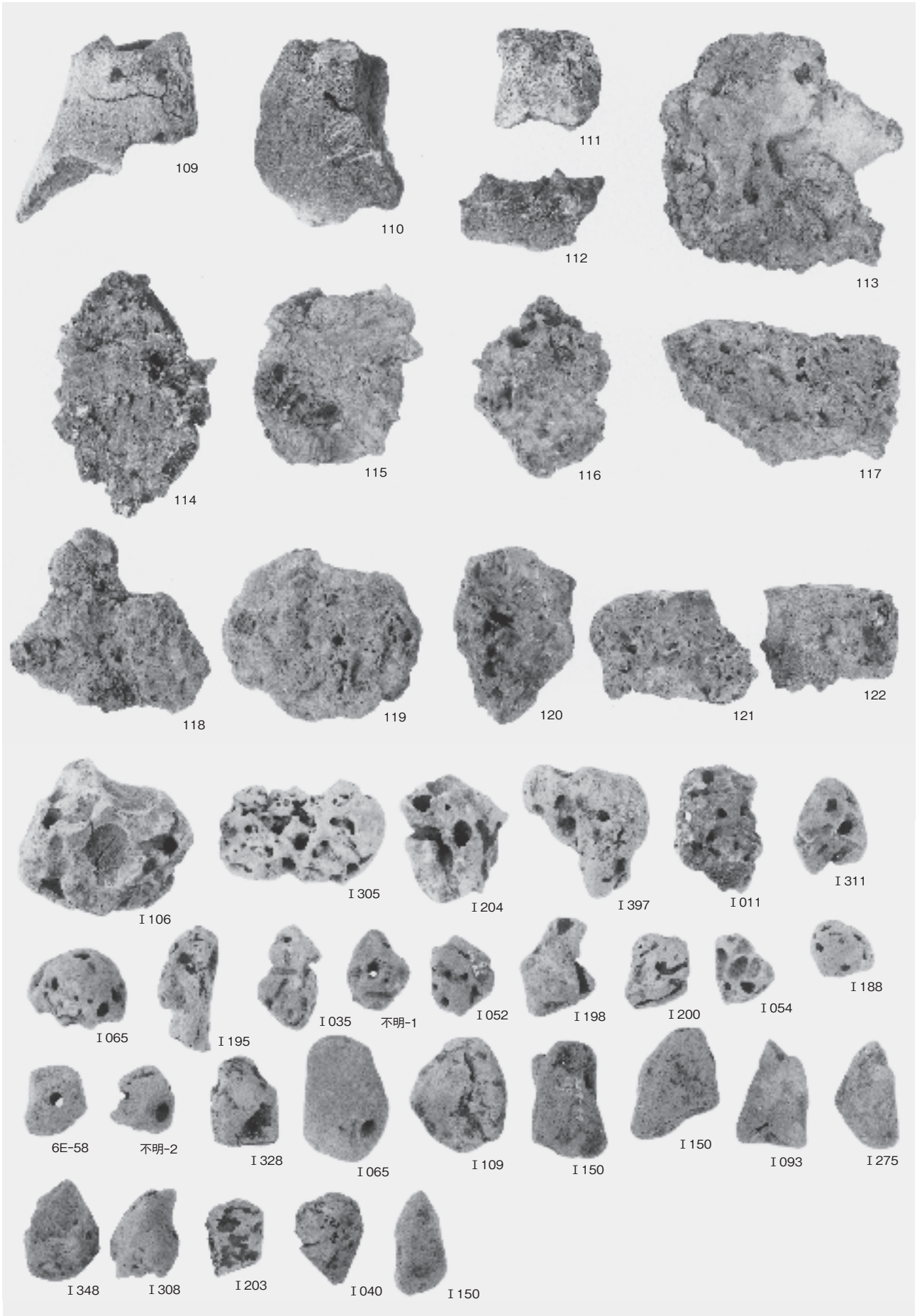
弥生時代以降金属製品

古墳時代以降金属製品（1）

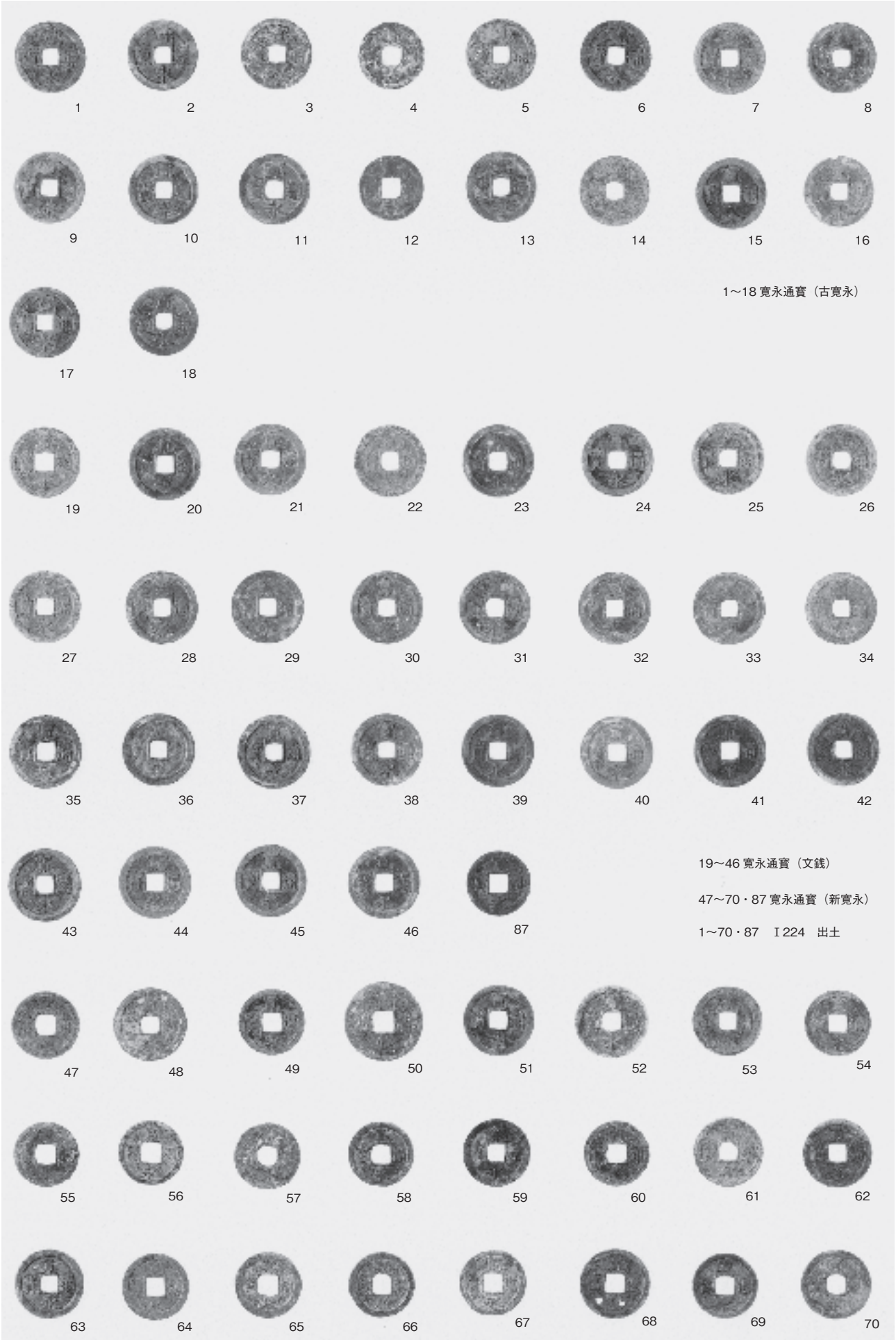
古墳時代以降金属製品（2）



古墳時代以降金属製品（3）・鍛冶関連遺物（1）



古墳時代以降鍛冶関連遺物（2）・貝巣穴状泥岩



1～18 寛永通寶（古寛永）

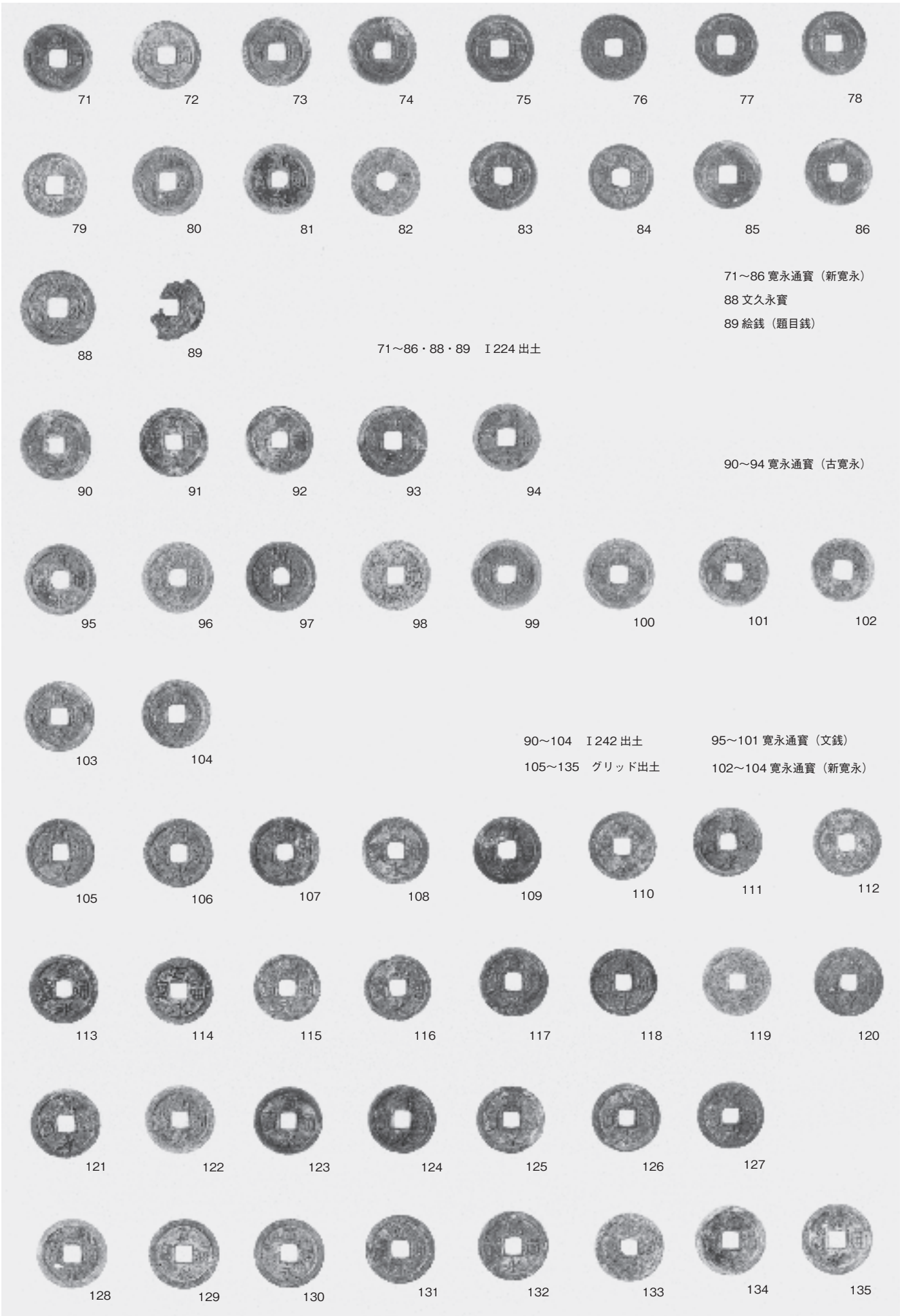
19～46 寛永通寶（文銭）

47～70・87 寛永通寶（新寛永）

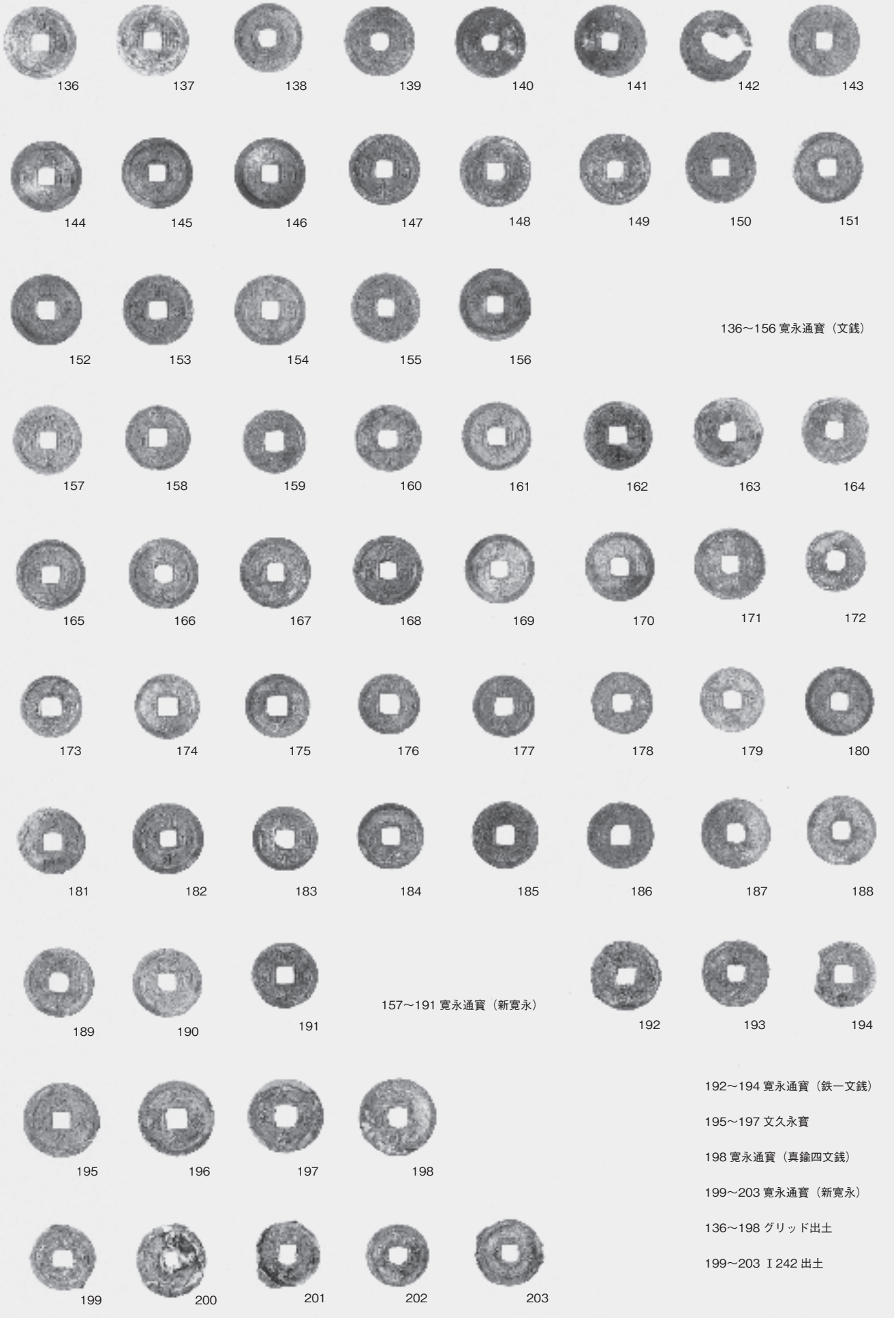
1～70・87　Ⅰ224　出土

近世墓域出土銭貨

図版106



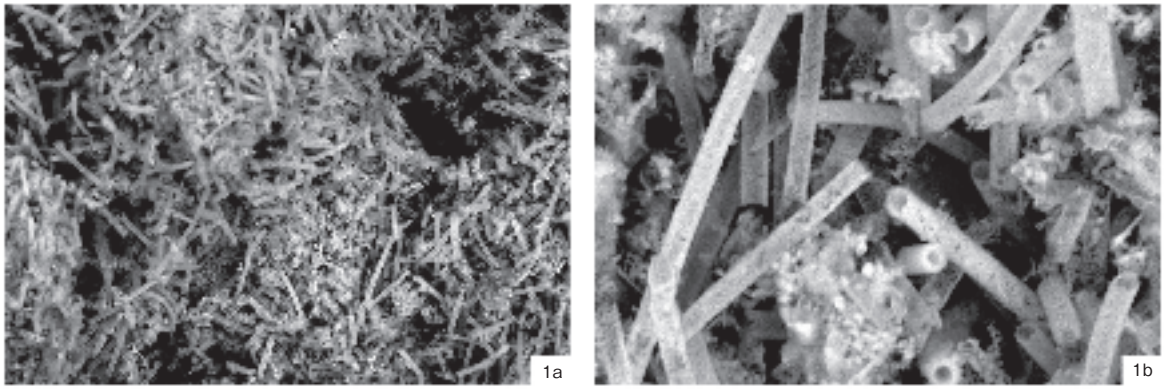
近世墓域およびグリッド出土銭貨



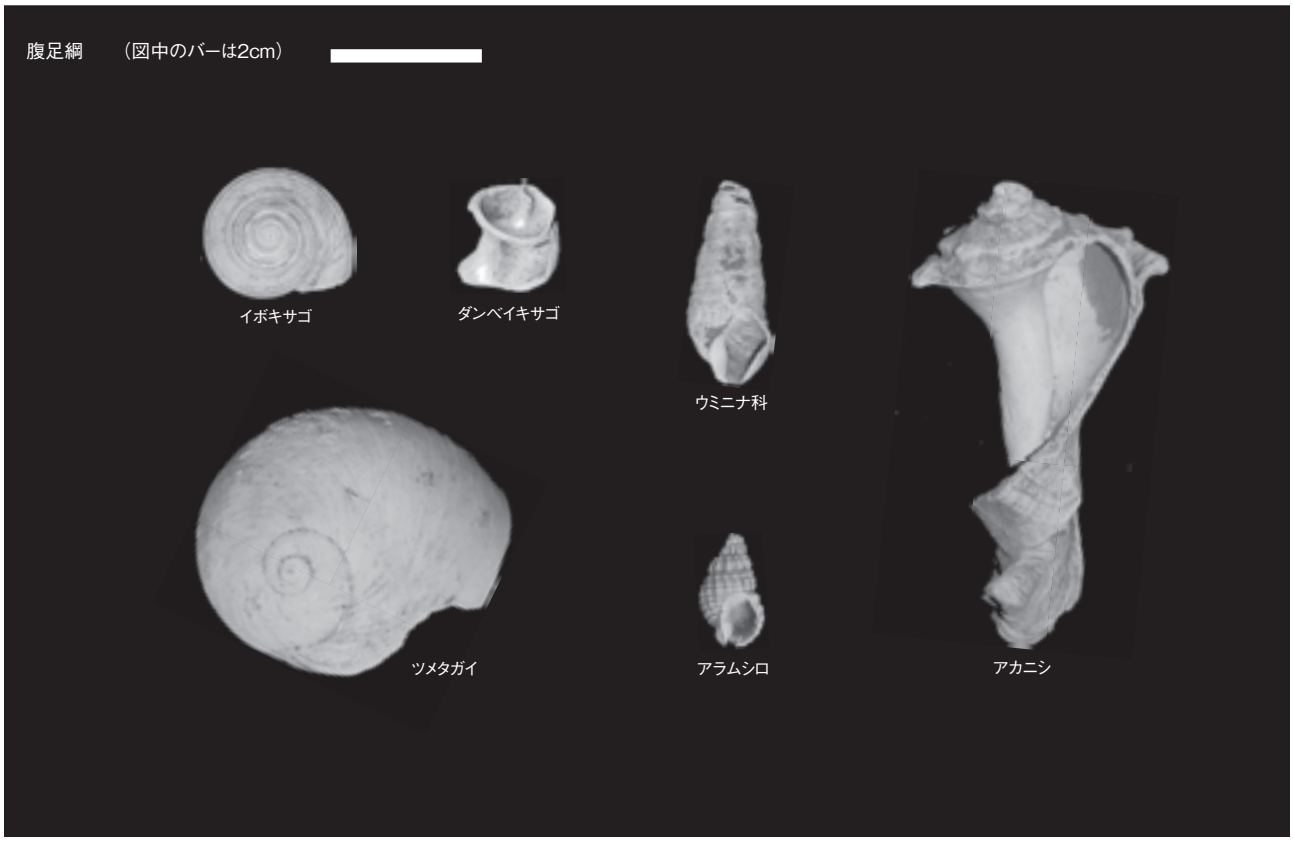
グリッド・トレンチ出土銭貨

グリッド出土銭貨・癒着銭貨・火打石

草刈遺跡Ⅰ区の赤色顔料 (巻頭図版３）

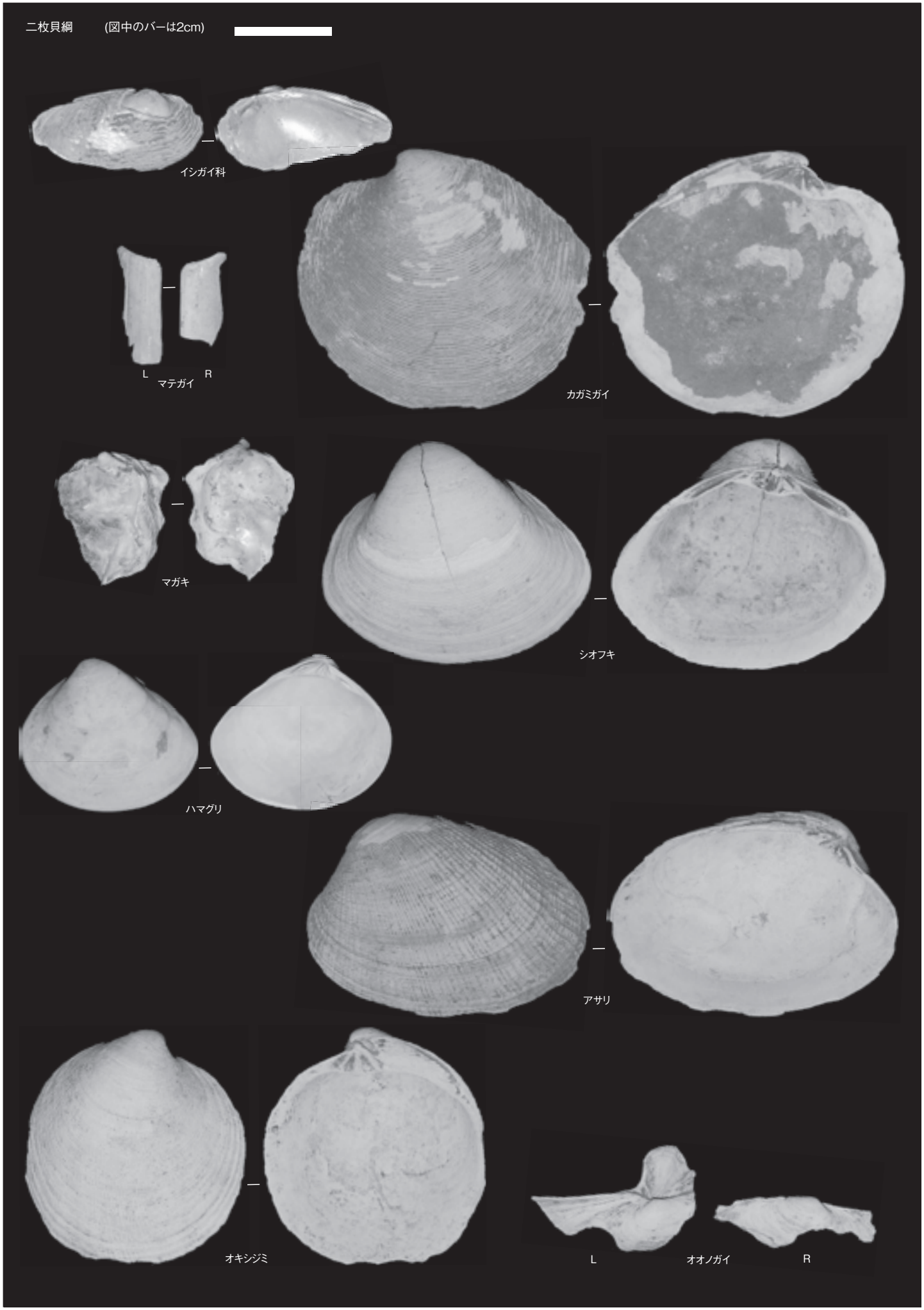


1．赤色顔料のパイプ状構造（Ⅰ146 号住居跡：No.1）

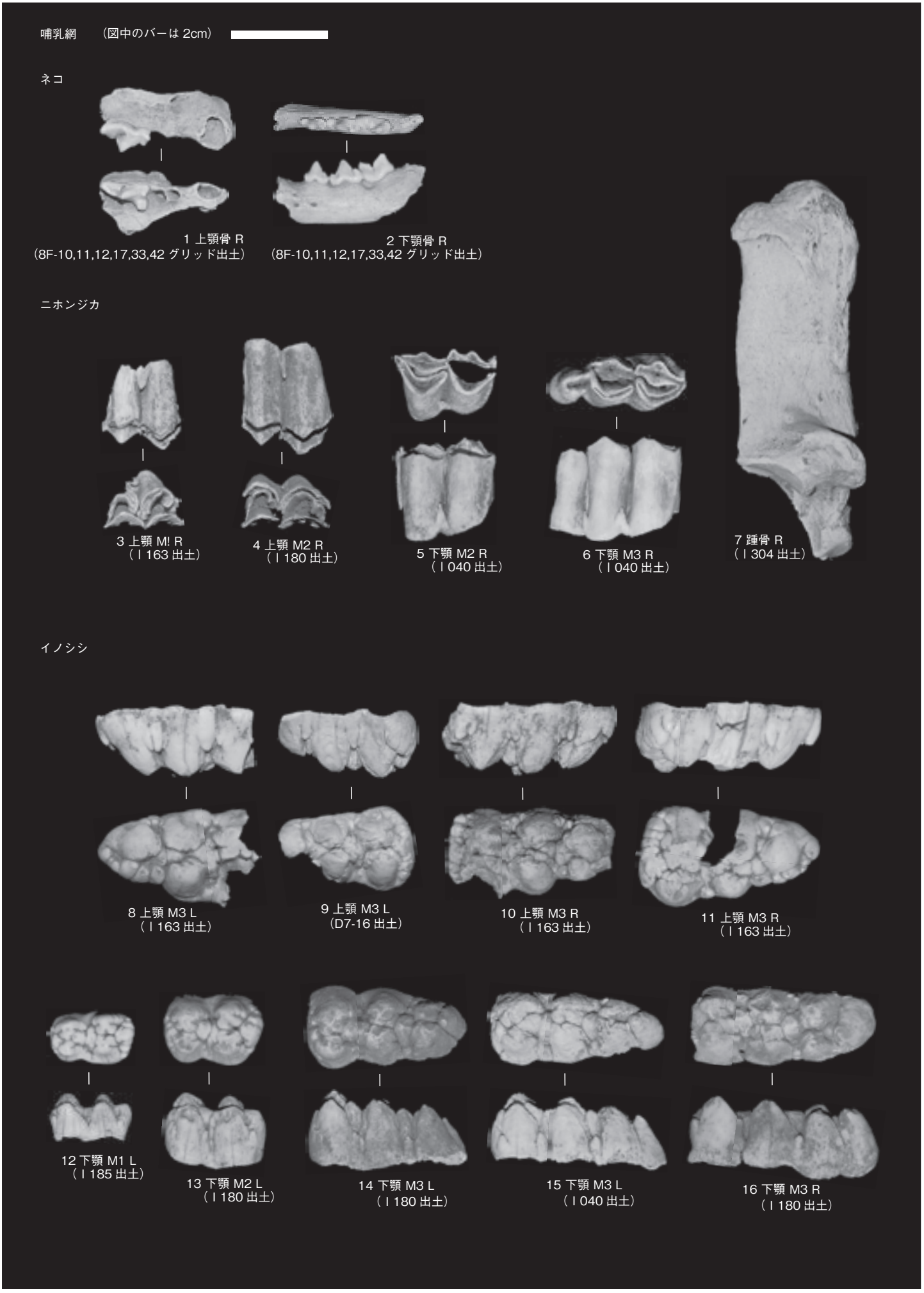


貝類（1）

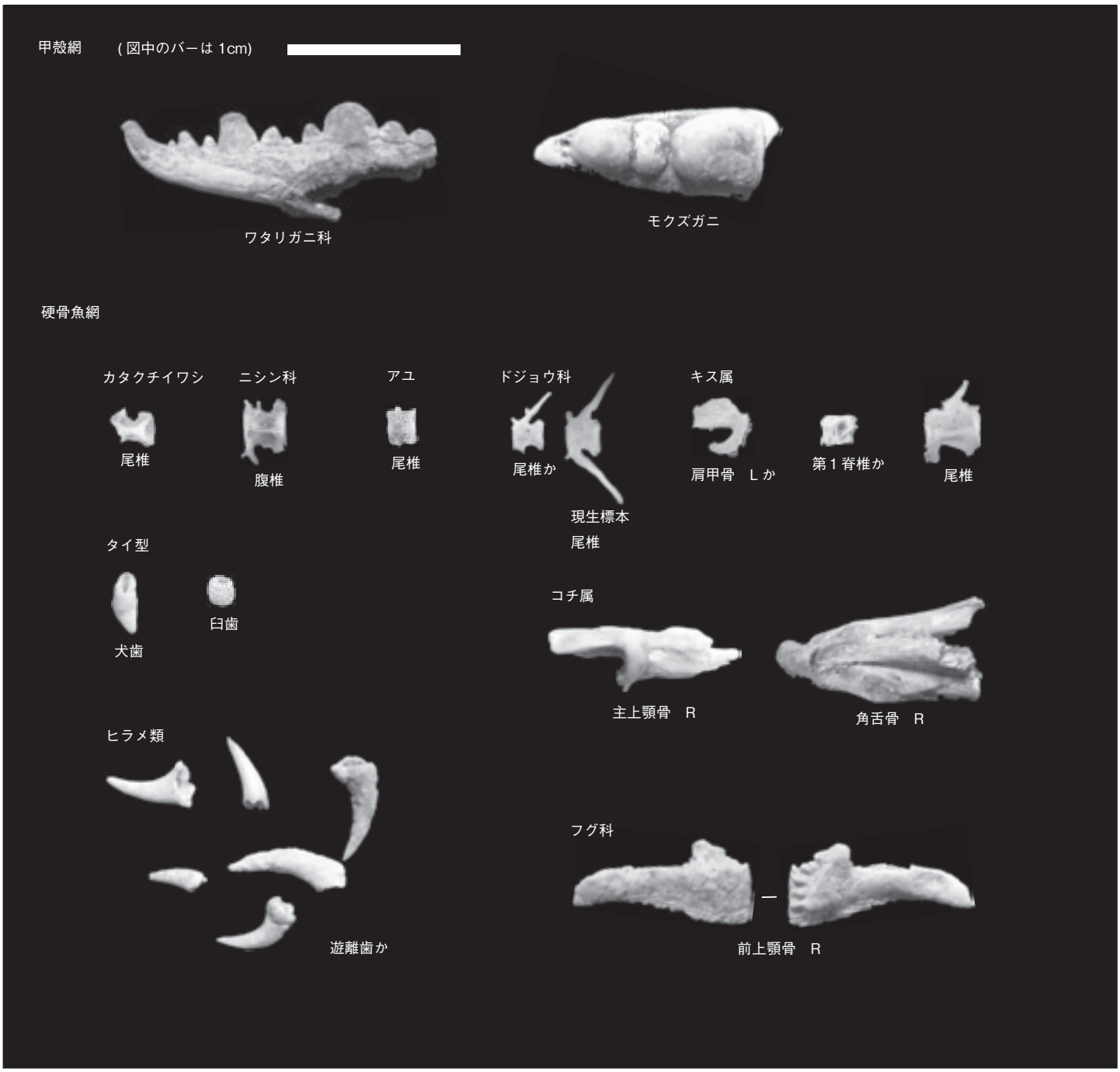
図版110


二枚貝綱　(図中のバーは2cm)
イシガイ科
L
マテガイ
R
カガミガイ
マガキ
シオフキ
ハマグリ
アサリ
オキシジミ
L
オオノガイ
R

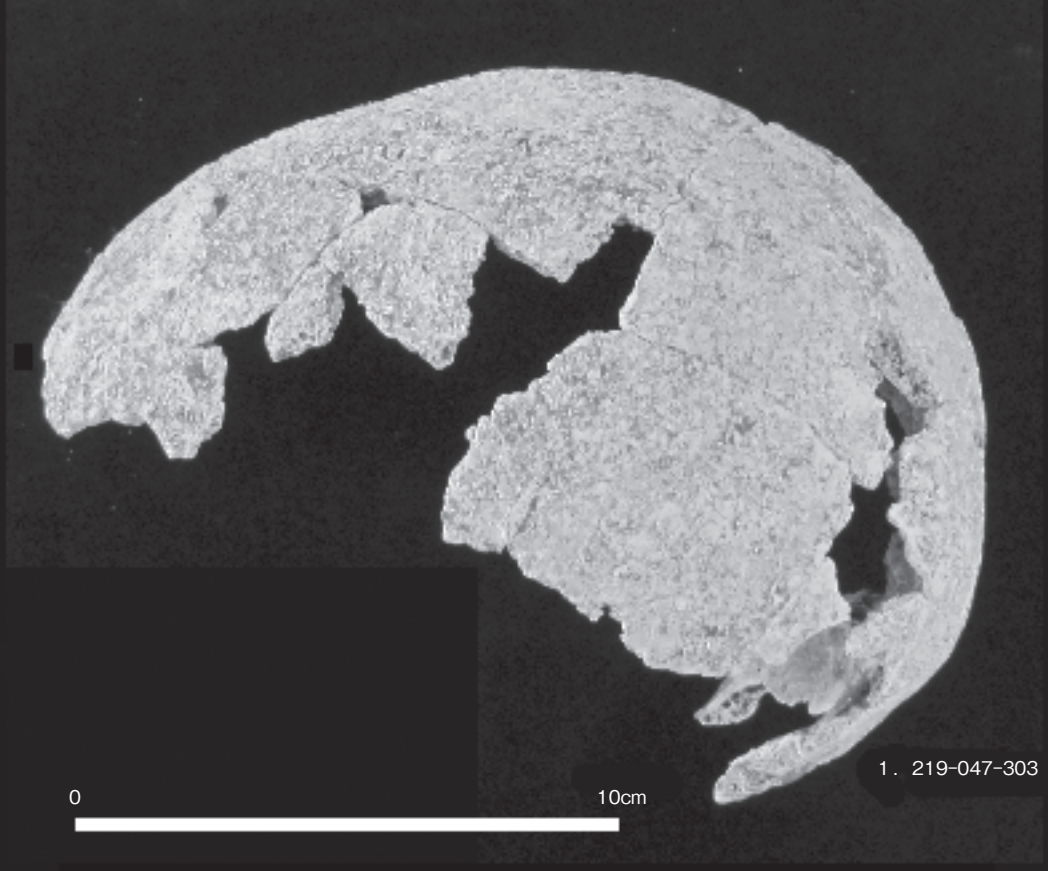
貝類（2）


哺乳網　（図中のバーは 2cm）
ネコ
1 上顎骨 R
（8F-10,11,12,17,33,42 グリッド出土）
2 下顎骨 R
（8F-10,11,12,17,33,42 グリッド出土）
ニホンジカ
3 上顎 M! R
（I 163 出土）
4 上顎 M2 R
（I 180 出土）
5 下顎 M2 R
（I 040 出土）
6 下顎 M3 R
（I 040 出土）
7 踵骨 R
（I 304 出土）
イノシシ
8 上顎 M3 L
（I 163 出土）
9 上顎 M3 L
（D7-16 出土）
10 上顎 M3 R
（I 163 出土）
11 上顎 M3 R
（I 163 出土）
12 下顎 M1 L
（I 185 出土）
13 下顎 M2 L
（I 180 出土）
14 下顎 M3 L
（I 180 出土）
15 下顎 M3 L
（I 040 出土）
16 下顎 M3 R
（I 180 出土）

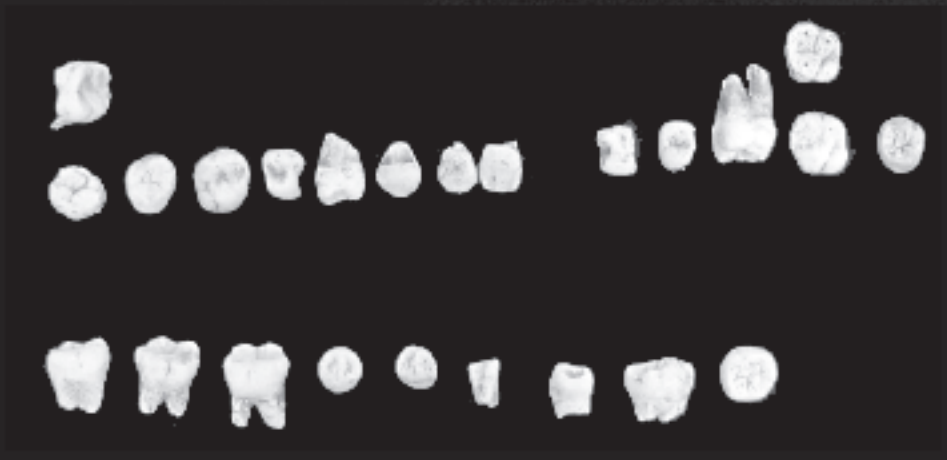
哺乳類遺体


甲殻網
(図中のバーは 1cm)
ワタリガニ科
モクズガニ
硬骨魚網
カタクチイワシ
尾椎
ニシン科
腹椎
アユ
尾椎
ドジョウ科
尾椎か
現生標本
尾椎
キス属
肩甲骨　L か
第 1 脊椎か
尾椎
タイ型
犬歯
臼歯
コチ属
主上顎骨　R
角舌骨　R
ヒラメ類
遊離歯か
フグ科
前上顎骨　R

甲殻類・魚類



1．219-047-303



2．219-047-303

3．219-047-260C

4．219-047-327

5．219-047-186B 2号

人骨

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちはらだいにゅーたうん
書名	千原台ニュータウン
副書名	市原市草刈遺跡（Ⅰ区）
巻次	26
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第647集
編著者名	小高春雄
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団　文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の２　　TEL 043－424－4848
発行年月日	西暦2011年２月25日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（しょざいち）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
草刈遺跡（くさかりいせき）（Ⅰ区）	千葉県市原市（ちばけんいちはらし）ちはら台西（だいにし）１丁目ほか	12219	047	35度32分04秒	140度09分54秒	1990.04.01～1991.03.31	10,200	千原台地区土地区画整理事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
草刈遺跡（Ⅰ区）	集落跡 包蔵地	縄文時代	竪穴住居２棟、陥穴２基	縄文土器、石器、玦状耳飾、土製品	諸磯ｂ式に伴う獣面把手が多数出土した。 環濠に規制された弥生時代中期集落の様相が明らかになった。また、ベンガラを内部に充填した鳥形土製品が出土した。同後期後半の土坑墓から鉄釧を装着した人骨が検出された。 弥生時代中期の竪穴覆土内に埋葬された人骨が検出され、その上から、古墳時代中期の大量の土器が出土した。
		弥生時代	竪穴住居85棟、土坑墓14墓、土坑２基、方形周溝墓２基、環濠２条	弥生土器、石器、鉄剣、鉄釧、銅環、玉類、土製品、ベンガラ塊	
		古墳時代	竪穴住居152棟、土坑12基、土坑墓２基	土師器、須恵器、鉄製品、石製品、土錘、支脚、石製模造品、銅鐸、鍛冶関連遺物	
		奈良・平安時代	竪穴住居66棟、掘立柱建物２棟、土坑５基、土師器窯１基、溝２条	土師器、須恵器、鉄製品、石製品、土錘、土製品、瓦、鍛冶関連遺物	
		中・近世	掘立柱建物１棟、溝12条、墓域１	銭貨、かわらけ、火打石	

要約

Ⅰ区は、広大な草刈遺跡の西端に位置し、東側にM区、西側にF区が隣接する。

縄文時代前期後半の遺物がその中央部からF区にかけて大量に出土しており、本来は集落を形成したと思われる。

弥生時代中期後半は環濠集落が形成され、Ⅰ区はその東半分に相当し、同後期前半の溝も区域内南側に延びている。後期後半にはその中央部に方形周溝墓が築かれ、周囲の土坑墓からは副葬品を伴う人骨が検出されている。

古墳時代は前期以降、後期前半に及ぶ長期間にわたって集落が形成されたが、とりわけ中期の集落は隣接するM区にまたがる大規模なものである。

一旦途絶えた集落は奈良時代に入って復活し、10世紀初め頃まで継続するが、間もなく終息し、近世に至ってその南端に墓地が営まれた。

千葉県教育振興財団調査報告第647集

千原台ニュータウンXXⅥ

―市原市草刈遺跡（Ⅰ区）―

平成23年２月25日発行

編　　集　　財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　　行　　独立行政法人都市再生機構千葉地域支社
千葉市美浜区中瀬１－３
財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の２

印　　刷　　株式会社　みつわ
千葉県千葉市美浜区新港213－５